

# 朝鮮研究集成

近代史料

第 3 号

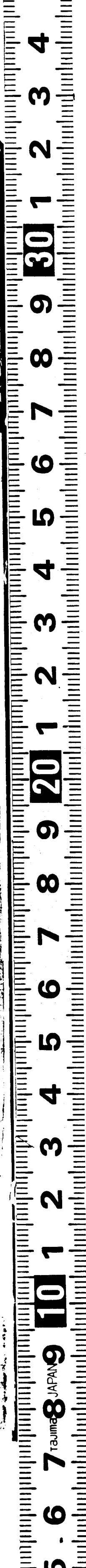
研究集會

第一〇〇回記念

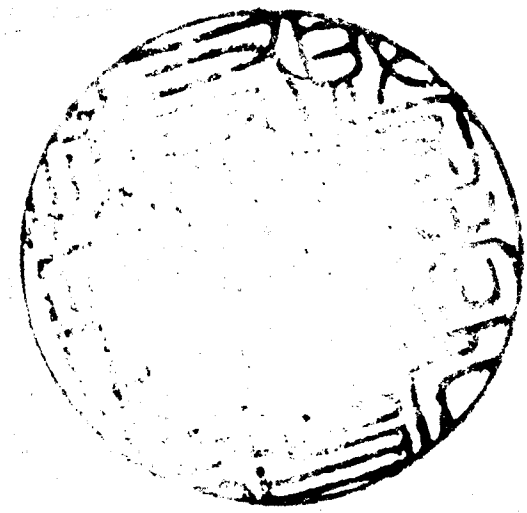
昭和35年5月18日

財団法人友邦協会  
朝鮮史料研究会

081-3-7(3)



001  
71



財團法人友邦協會



朝鮮  
近代史料

# 研究集成

第 3 号

研究集会

第一〇〇回記念

昭和35年5月18日

財団法人友邦協会  
朝鮮史料研究会

研究集会第百回に際して

穂 積 真 六 郎

瞬く間に二年の歳月は流れて、われ等の会も百回の研究を重ねるに至つた。この間に研究生の皆さんは、過去に於ける日韓関係の真相をある程度汲みとることが出来、又私共も新時代のものの考え方を稍理解し得る様になつたと思う。

然し我々が、過去に没頭して居る間に、第二次大戦によつて根本的な変革を来たした異民族統治に対する考え方が、近頃に至つて深刻な現実となつて現われつつある。一方には、ソ連や国際連合が世界国家という夢を追つて各自の頭から割出した方針に従つて一步一步之に近づこうと努力して居るのに、他方では、第一次大戦に芽生え、第二次大戦の解放によつて全世界に涉つて実を結ばんとしつつある多数の民族国家が、新興の意気と建国の初期にあり勝ちな排他的な思想に燃えて、前述の国境線を次第に稀薄にしていくという考えと、全く対シヤ的な行動に出て居る場合も少なくない。

然しこれは、世界進歩の途次に於ける一時的な現象でもあろうが、アルジェリヤや南阿の問題を考えると、これ等が問題の解決に至る迄に

## 編集に当つて

- 一、この編集は、研究集会百回の成果を纏めるといふよりも、むしろ、今日の世代の朝鮮近代史に対する史眼が、どこを指向しているか、を示すことに重点を置いた。
- 一、従つて、二カ年の研究を通じて、その核心をなしたと思われる論底の諸問題に焦点を絞り・・・
- 一、所載各自は、各個別々のものではあるが、大体、互いに関連して一つの体系を持たせるように配慮した。
- 一、巻末に付篇として収載した「文献・資料総目録」は、数カ年を費して内容の調査と分類に当つた貴重なものであるが、まだ完璧な分類とは言えない。逐次改編の上再刊の予定である。
- 一、企画が急であつたため、整稿、編集に追われ、学生諸君の所載論文は、満足に推コウするだけの余裕がなかつた。従つて、文責その他、不行届きな点は、私に責任があることを明らかにし、諸賢の御批判、御叱正を仰ぐ次第である。

... 近 藤 鋌 ...

無理解な圧迫や流血の惨のすこしでも少なからんことを祈る心は、朝鮮研究に専念して居る我等が最も深く感じて居るであらう。昔、若い時分、ポーランド問題やアイルランド問題に血を沸かしたことがあつたが、その時分の私は、表面の理念にのみ先走つて實際の研究を疎かにしたため、長年朝鮮統治に関係しても大した役に立たなかつた。今諸君が朝鮮研究をして居られることを、他人は或いは「そんな過去のことをほじくつて見ても」と軽視するかも知れないが、過去の事実を冷静綿密に掘下げて研究してこそ、時代の推移、民族意識の根底に存在する微妙な心理（日韓共に）を把握することが出来るのであつて、こういう研究から、日韓両国親交の基礎となるべき学問が確立するのみならず、この研究の応用は、現在の世界的傾向と民族自決的傾向とを最も少ない摩擦によつて調節する学理を生み出すことを確信する。

私が研究会は何百回も続かなくては真価は出てこないと主張する根源は、この期待から出て居るので、諸君方の様な秀才は、結論を出そうと思えば何時でも出るであらうが、今結論を出しては、まだ学究としての冷静と實際に対する探究に充分でない点が多く残ると思う。

第三年目には研究の方法を新たにしてい、今迄に倍して真剣に研鑽せられんことを祈つてやまない。

二年百回の記念号が出るに際して、研究生の方々の過去に於ける真剣な研究態度に深く敬意を表して、一言御祝い申上げる。

+++++

( 付 編 )

財 社  
団 団  
法 法

一

{ ~ }

{ 朝  
鮮  
統  
治  
関  
係 }

一

一

一

+++++

{ ~ }

{ 朝 }

一 { 鮮 } 一 一

{ 統 }

半 { 治 } 小 東

{ ~ }

{ 研 }

{ 究 }

{ 論 }

{ 文 }

第 研

一

※  
※  
※  
研 究 会 の 歩 み  
※ ※

思えば戦後十有余年、新たな問題意識と科学的研究を朝鮮史の分野に確立しようとする動きが、徐々にではあるが、真実の重みを持つて、誕生して来た。

戦後十有余年、日本と朝鮮との関係は氣の遠くなる程緩慢にはあるが、正しい道を歩む方向に向いつつある私達は兩國の正しい關係を切望するが故に、その正しい關係が何であるかを更に明瞭に知り、その正しさを保証するために、この研究会が意義あるものとの信念を抱いて、百回にもわたる歩みをつゞけて來たのである。

私達の切望する日本と朝鮮との正常な關係。それは必ずや兩國の近代史の研究成果を媒介として得られるものと確信している。

私達朝鮮（近代）史料研究会の推進力は、正しくここに存するのである。

文責・近藤

(集會日) (回数)

別 7

八月二七日	第一六回	朝鮮の貨幣について	高久敏男	一二名
九月三日	第一七回	朝鮮の教育について	宮田節子	一〇名
九月一〇日	第一八回	朝鮮の司法及び警察制度	梶村秀樹	一〇名
九月一七日	第一九回	暴徒討伐の真相	姜徳相	一名
九月二四日	第二〇回	朝鮮總督府殖産局の仕事 (録音)	穂積真六郎	一名
一〇月一日	第二一回	東拓について。宮三事件の問題提起	樺 幸 旭	一〇名
一〇月八日	第二二回	朝鮮研究の概括 (録音)	善生永助	二名
一〇月一五日	第二三回	朝鮮の市場経済について (録音)	"	二名
一〇月二二日	第二四回	朝鮮の鉱業について (録音)	穂積真六郎	二名
一〇月二九日	第二五回	宮三事件について (録音)	樺 幸 旭	九名
十一月五日	第二六回	朝鮮の水産について (録音)	穂積真六郎	一名
十一月二二日	第二七回	朝鮮の林業について (録音)	石田常英	二名
十一月九日	第二八回	朝鮮の山林について (録音)	樺 幸 旭	九名
十一月二六日	第二九回	朝鮮の聚落について (録音)	善生永助	一〇名
十二月三日	第三〇回	朝鮮の鉄道について (録音)	田中保太郎	一名
十二月一〇日	第三一回	新式貨幣発行章程の研究	姜 徳 相	一〇名
十二月一七日	第三二回	日本治下朝鮮民族運動の概観 (録音) 田中武雄外講師五名	"	二三名
十二月二三日	第三三回	納会 箱根親睦旅行	"	九名
昭和三四年 〃 〃 〃	"	"	"	"
一月四日	第三四回	新年集会 (穂積邸)	穂積真六郎	五名
一月二四日	第三五回	研究会の今後の方針 (新年初集会)	姜 徳 相	二名
一月二一日	第三六回	"	"	一〇名
一月二八日	第三七回	"	"	一名

二月四日	第三六回	間島問題	宮田節子	一〇名
二月一一日	第三七回	"	李 玉 乃子	一名
二月一五日	第三八回	朝鮮近代史料研究集成・第一号発行 (テープ録音)	穂積真六郎	二名
二月一八日	第三九回	日本治下の在満朝鮮人問題 (日本クラブで、テープ録音) 田中・神尾・原田・穂積	"	二三名
二月二五日	第四〇回	地方制度の問題点	横矢 脩	一〇名
三月四日	第四一回	農業経済の問題点	金 己 大	二名
三月一一日	第四二回	土地問題に関する学説史	樺 幸 旭	二名
三月一五日	第四三回	研究集成発刊記念集会 (久城邸) 二三名	"	"
三月一八日	第四四回	司法制度扶植の問題点	梶村秀樹	一名
三月二七日	第四五回	地方制度について (後樂園にて・テープ録音)	萩原 文 彦	一名
三月二九日	第四六回	天理図書館・参考館等の見学を主に関西の史蹟視察旅行を行う (一週間)	富永 文 彦	一五名
四月一日	第四七回	法令審議から見た地方自治と農業開闢朝鮮文化史の流れ (天理大学にて・テープ録音)	高岸 勇 一	一八名
四月八日	第四八回	関西見学旅行報告会	岸 勇 一	二七名
四月一五日	第四九回	伊藤博文について (テープ録音)	宮田節子	一名
四月二二日	第五〇回	安重根・間島問題等 ( "	相 場 清	二名
四月二九日	第五一回	伊藤博文について ( "	深谷博治	一名
五月六日	第五二回	旧 韓 末 の 排 日 運 動	樺 幸 旭	一名
五月一三日	第五三回	II記念集会 II 總督統治瞥見 (録音)	田中武雄	二八名
五月二〇日	第五四回	日韓併合について	外講師十名	二八名
五月二七日	第五五回	"	宮田節子	一名



五月二七日	第五二回	釜山貿易の事態	姜 徳 相	一六名
六月三日	第五三回	「家族主義」の形成に関する一試論	梶 村 秀 樹	一二名
六月一〇日	第五四回	總督統治を通観して (録音)	穂 積 真 六 郎	一名
六月一七日	第五五回	三・一運動について	宮 田 節 子	一四名
六月二四日	第五六回	朝鮮農民分解の研究 (録音)	金 己 大	一〇名
七月一日	第五七回	竹島問題の歴史的考察 (録音)	田 川 幸 三	二名
七月八日	第五八回	最近の日韓關係	金 圭 南	一名
七月二五日	第五九回	貨幣の發生学的研究	李 成 林	九名
七月二二日	第六〇回	施政二十五年史に対する研究方法討議 (打合せ会)	森 田 芳 夫	一七名
七月二九日	第六一回	出入国管理行政と在日朝鮮人の実態 (録音)	梶 村 秀 樹	九名
八月五日	第六二回	朝鮮總督府の法制機構	桜 井 義 之	二名
八月一二日	第六三回	大正期における文獻について (録音)	大 熊 良 一	二名
八月一九日	第六四回	金融組合について (録音)	(各自発表)	一名
八月二六日	第六五回	施政二十五年史研究の問題点	(打合せ会)	八名
九月二日	第六六回	小磯總督時代の問題提起	田 中 武 雄	一名
九月九日	第六七回	小磯總督時代の概観 (録音)	山 藤 柳 喜 男	一五名
九月一六日	第六八回	阿部總督時代の概観 (録音)	檀 寧 旭	一〇名
九月二三日	第六九回	南總督時代の問題点	穂 積 外 六 名	一名
九月二六日	第七〇回	大野緑一郎氏邸訪問 南統治の核心をきく	姜 徳 相	一三名
九月三〇日	第七一回	南總督時代の皇民化政策を中心に	宮 田 節 子	一三名
一〇月七日	第七一回	寺内總督就任の前後 朝鮮側資料から見た暴徒討伐		

一〇月二四日	第七二回	統監府時代を中心に (録音)	今 村 武 志	一七名
一〇月二二日	第七三回	Ship Wreck of a Dutch Vessel 翻訳報告	梶 村 秀 樹	九名
一〇月二八日	第七四回	朝鮮總督府時代の法令について (録音)	萩 原 彦 三	一八名
一一月四日	第七五回	南總督時代の概観 (録音)	大 野 緑 一 郎	一八名
一一月二一日	第七六回	東 拓 について	青 木 香 代 子	一名
一一月二八日	第七七回	円銀・白銅貨・第一銀行券問題	姜 徳 相	一〇名
一二月二五日	第七八回	貨幣整理について	姜 徳 相	一〇名
一二月二二日	第七九回	總督府時代の外人宣教師について	小 田 安 馬	一三名
一二月二〇日	第八〇回	朝鮮農地令について	塩 田 正 洪	一五名
一二月一六日	第八一回	本年に於ける研究の総観	穂 積 真 六 郎	一〇名
一二月二二日	(納会)	伊豆山潮音閣にて	穂 積 真 六 郎 外 八 名	
昭和三五年 一月四日	(新年集会)	故川崎繁太郎氏所蔵の文獻調査を行う (吉祥寺・川崎邸)	宮 田 節 子	
一月二三日	第八二回	穂 積 邸 近 藤 外 五 名	白 井 博 久	一六名
一月二〇日	第八三回	北 鮮 から 帰 っ て (録音)	姜 徳 相	一名
一月二七日	第八四回	併合以来三・一運動迄の経済的移行	金 己 大	二名
二月三日	第八五回	南北朝鮮経済の現状	青 木 香 代 子	九名
二月一〇日	第八六回	土地調査事業について	萩 原 彦 三	二名
二月一七日	第八七回	總督府官制について	檀 寧 旭	二名
二月二四日	第八八回	日本統治下の山林政策	金 本 修 三	一三名
二月二五日		土地調査事業の実態 中国・朝鮮・日本の水利事業について 河内圭司氏を訪ね「土地調査事業」の体験をきく 近藤・宮田・姜・金己大 (録音)		

三月二日	第八九回	土地調査事業について	藤本修三	一名
三月九日	第九〇回	三・一運動に対する日本人の考え方	宮田節子	一名
三月一六日	第九一回	釜山貿易の奥底(二)	姜徳相	一名
三月二三日	第九二回	税制について (録音)	藤本修三	一名
三月三〇日	第九三回	朝鮮民族運動について (録音)	坪江仙二	一名
四月六日	第九四回	"	"	一名
四月一三日	第九五回	小村 寿太郎	小村捷治	九名
四月二〇日	第九六回	火田民について (録音)	渡辺豊彦	二名
四月二七日	第九七回	久間博士の農政関係の著書紹介	樺 寧 旭	八名
五月四日	第九八回	朝鮮農業の概観 (録音)	久間健一	一名
五月十一日	第九九回	研究二カ年の成果批判	穂 積 外	一五名
五月一八日	第一〇〇回	記念総会 (青山にて)		

会 員 名 簿	
× 樺 寧 旭	豊島区池袋二の一〇六六 桜花荘
× 姜 徳 相	渋谷区代々木一の一三三
× 李 玉 進	文京区駒込坂下町九五
× 朴 圭 進	北區中十条四の九 飯塚方
× 金 圭 己	文京区大塚辻町一七 相原方
× 金 己 秀	文京区菊坂町八二 池田方
× 横 矢 秀	新宿区西落合三の九三三
× 横 矢 幸 男	大田区東六郷二の一五
× 武 田 幸 男	台東区浅草芝崎町三の六 白田方
× 奥 村 皓 一	世田ヶ谷区代田町一の三五八 西村方
× 青 木 香 代 子	仙台市川内住宅29号
× 北 村 秀 人	神奈川県中郡西秦野町堀山下七四六
× 宮 田 節 子	千葉県松戸市小山八二
× 大 西 喬	三鷹市下連雀一五一
× 村 山 靖 彦	中野区大和町二一六
× 李 成 林	世田ヶ谷区三軒茶屋五六
× 申 国 柱	文京区西片町一〇
× 鄭 宗 根	文京区東片町一五 塚本方
× 朴 鐘 國	中野区瑞穂町四二 旺山荘
× 金 鐘 國	大田区御園町一の三 平和荘
× 阿 部 光 藏	板橋区中丸町二二
× 柳 登 栄	立川市高松町一の三七一 金岡方
× 大 村 益 夫	文京区駒込千駄木町五〇
× 印は朝鮮語受講者	

( 論 文 )

三。一 運 動 に つ い て 宮 田 節 子



+++++

# はじめに ……なぜ朝鮮史を学びたいのか……

朝鮮は遠い国である。玄海灘は太平洋より広大な距離と、どうも黒い不気味さをもつて日本と朝鮮の間をへだてている。この奇妙な地図が正常なものとして、日本中を横行している。

私はこの事実をいらい立ち、この事実を挑戦したいのだ。

朝鮮人は臭い。事大思想に富み、付和雷同性がある。何といつても朝鮮人などと違つて日本人は……と暗然とうなずき合うあの優越者のおおらかな笑い。

私はこの伝説にいら立ち、この伝説に挑戦したいのだ。しかもこの事実とこの伝説を二つながら併せ持つてゐる日本人。それは他ならぬ私なのである。だから私はまず自分に対していら立ち、自分に対して挑戦しなければならぬ宿命を負つてゐる。

私は朝鮮について全く無智だった。無智より更に悪いことは、朝鮮のことなど私の意識にのぼつたことすらなかった。唯一つの思い出を除いては――。唯一つの思い出。それは敗戦の時のことだった。当時小学校四年生だった私は、敗戦という一切の価値観念の否定の中で、あわてふためき色を失つた大人達を、半ばあきれた白々しい目で眺めながら、どうにもやり切れない重苦しい日を送つてゐた。その沈滞した鬱陶気をつき破る強烈な怒りの思い出が、今も心に残つてゐる。それは残響きびしい、けだるい日だった。その日は私が生まれてはじめて異国というものを実感した日でもあつた。家の前を朝鮮人の一団が醜悪な境となつて、異国の匂いをまき散らし、かん高い金属の響を持つた異国語をどなりながら、通り過ぎて行つた。彼等異国人の先頭には、日の丸の上に不遜にも黒々とおたまじやくしの影を落した太極旗が誇らしげにひらめいてゐた。母は私の肩に手を置

+++++

## 目次

はじめに……なぜ朝鮮史を学びたいのか……	3
第一章 三・一運動の前提……	5
第一節 国際情勢……一九一九年について……	6
第二節 三・一運動への道……若干の問題提起……	10
第二章 三・一運動……	15
第一節 海外朝鮮人の動向……	16
第二節 運動の企画……	24
第三節 運動の経過及実体……	32
第三章 三・一運動の分析……	42
第一節 運動の性格……起訴被告人を通して……	43
第二節 運動を支えた思想……	50
第四章 三・一運動を経た朝鮮史の流れ……	58
第一節 三・一運動に対する態度……	58
……日本側と朝鮮側……	58
第二節 その後の流れ……	67
一、民族主義者の行方……	67
二、社会主義運動の抬頭……	71
三、国外に於ける運動……	74
結 論……	77

~~~~~

(筆者は早稲田大学文学部東洋史学科出身)

三・一運動の原因を究明するに当り、私はこの問題を縦横十文字に切り込みたいと思う。

横——それは一九一九年という年の世界史的展望だ。朝鮮というアジアの一半島に起こった民族運動を書くのに、どうしても世界史的観点から論を進めなければならぬ。その最初の前提の中に、すでにこの問題のもつ本質の一面が秘められている。原教は「今回の事件は内外に対し、極めて軽微なる問題となすを必要とする。然れ共、実際に於て嚴重なる処置を取りて再び発生せざる事を期せよ。但外国人は最も本件に注目し居れば、残酷苛察の批評を招かざる事、十分の注意ありたし」との訓電を発したと三月九日付の日記に書いている。日本政府の最高責任者としての彼の頭にひらめいたことは、鎮圧とその鎮圧さえも堂々と行う事を妨げる列国の顔だった。この一事だけを取り上げても、三・一運動を世界史的関連の中で追求する事の必要性を十分に説明してくれるだろう。

しかし一國に起こる歴史的事件は断じて、他國からの影響だけでは起こらない。それはあくまでもその国自体のもつ内的原因。これが何よりも決定的だ。特に三・一運動の様に、朝鮮全土をその渦中に巻き込んだ大事件は、一八七六年、朝鮮に於ける最初の不平等条約である江華島条約が、日本との間に結ばれて以来、直接的には、一九一〇年の日韓併合以来のすべての歴史に対する、朝鮮人民の唯一つの解答だった。――

## 第一章 三・一運動の前提

+++++

いたまま「まあ日の丸が半分ぬられちゃつて……」ともう涙ぐんでいた。どこかの人は「朝鮮は日本を半分占領するつもりなんだ。だから日の丸を半分も黒くぬりやがつて……畜生！」と歯ざしりした。そばにいた私には、大人の憎悪がそのまま私のものとなった。自分の祖国が侮辱された怒りと、侮辱した朝鮮人に対する怒りが、一種ケイレンとなつて全身をつきぬけた。それは、アメリカに敗れたよりずっと嫌なこととして、私の心に残つた。この効かつた日の純な感情は、はつとする程重大な問題を含んでいる事に、今の私は気づいたのだ。

太極旗を日本侵略の象徴としか理解出来なかつたその無智は、一体どこから来たのだ。アメリカ人にふみつけられるより、朝鮮人にふみつけられる方が痛いと感じる心は、朝鮮人侮視の感情なのだ。そう気づいた時から、私はこの感情を末梢神経の先まで洗い出してみようと思ひ立つた。こゝをつつづけ何かがある。今の日本人がやらねばならない何かがある。そう直感した。

したがつてこの研究会で「日本がどのように朝鮮を侵略し、朝鮮自体はいかに変質して行つたか」ということに、大方の議論が集中し、その議論に火花を散らす。しかし私はそんな時、たしか隣にいた友達に急に消失してしまつた様な、変にさびしい孤立を感じながら、まるで逆な事を考えている。「植民地を持つた事によつて、日本は、日本人は、いかに変質して行つたか」私にとつては――変質の残滓を浴びていると思われ日本人として――その事がより重要であり、おそらくは一生の課題なのです。

この様にあきれる程無智で、その故にこそ猛烈に勇敢な私が三・一運動を選んだ理由は、朝鮮史を学ぼうと思つた時、たつた一つ知つていた名称――それが三・一運動だつたからにすぎません。長い間朝鮮史を学び、朝鮮を体で知つていらつしやる方々は、余りに盲目の大胆に驚きあきれられるかも知れません。その時は是非私を呼びつけて、お教え下さい。

私は自分が未熟であることを、少しも恥じる者ではありません。なぜならそれは、私がこれから半ぶべき分野の多いことを、示してくれる事に他なりませんから。

+++++

それは大臣達の答弁ではない。牛の如くに黙々としているが力強い人民の全身の回答だつた。そう思う。そこから近代に入つてからの日韓関係をふり返つてみたいという、縦の観点が必要になつて来る。

## 第一節 国際的情勢

……一九一九年について……

一九一九年三月一日を期して民族の独立を要求する示威運動が、朝鮮全土に巻き起こつた。では一九一九年頃の世界の様子はどうかだつたのだろうか。  
一九一四年、バルカン半島から砲火を上げた第一次世界大戦が終わる頃、及びその後の時代に起こつた革命運動は、歴史上かつてなかつた程の躍進を示している。「<sup>註1</sup>一九一七年の三月には、ロシアでツァーリズムの打倒が成功した。一九一七年の五月以来、イギリスには暴風のようなストライキ運動が見られる。一九一七年の十一月には、ロシアのプロレタリアートが国家権力を争ひとつた。一九一八年の十一月にはドイツ及びオーストリア、ハンガリアの君主制がたおれた。ストライキ運動は、一連のヨーロッパ諸国をおそひ、それから数年間は、特に広大な範囲に及んだのである。一九一九年三月ハンガリアにソヴェート共和国が出来た。戦争に参加した国、その中でも戦敗国では運動が特にひろがり、また激しくなつた。それはまた中立国にも波及した。アジア・アフリカでは幾百万の植民地民族の革命的反抗が復活したり、強くなつたりした。」山辺氏はその論文の中で三・一運動の国際的背景を、この様に述べている。この分析に相応ずるかの様に、戦後出版された朝鮮史の本は「第一次大戦後、特にロシアに於ける十月革命の勝利は朝鮮の人民に、新しい覚醒をよび起した。」という点で一

致し、或いは、ウィルソンの民族自決宣言を無視ないし過少評価する点で、恰も神聖な同盟を結んでいるかの様な感さえする。それが所謂進歩的歴史家というなら、その進歩性は何と多様な歴史を単純化してしまふものだらう！しかし私の手許にある資料は、私にその様に単純化することを、断じて許さない。私が自分の資料にもとづいて、三・一運動の国際的背景を述べることは即ちこれら戦後の傾向に対する反論、或いは批判の形をとるといふ観点を明らかにして、筆を進めたい。

第一次世界大戦後、世界の六分の一の地域に社会主義国家が誕生した事は、その後の世界史を基本的に変えた。その変化は、時代の進行と共にますます明確かつ決定的になつて来ている。しかしそれだけが一九一九年当時の世界的影響をもつ事件のすべてだろうか？否、それは事実の一面でしかない。一面をもつていかに自分がそれを重大と考へても、他の歴史的事実を、消し去る事は許されはしないのだ。

第一次世界大戦後、未曾有の民主的風潮が、世界中に充満した。その中で一九一八年パリ講和会議がもたれ、ウィルソンの民族自決宣言がなされた。ウィルソンこそは、民主・自由・平等の旗手として仰がれた。一九一九年という時代のみを区切つて見れば、十月革命の影響はウィルソンの民族自決宣言の比ではなかつた。当時出た文獻の殆んどすべてが、三・一運動の外的原因として、真先にウィルソンの民族自決宣言を上げてゐる。そればかりではない。運動の中に更にくわしく立ち入つて見れば、如何にアメリカ、イギリスに対する期待が大きかつたかを知るだらう。

三・一運動初期の指導者達は「<sup>註4</sup>弱少民族の独立は、世界の大勢であつて、米國を初め、世界の列國が之を支持してゐることは、朝鮮の独立を宣言するには、今が最も好機である」とのはつきりした状況判断をもつて、事にのぞんでゐる。しかも彼等は、まず一・二月中旬頃國權返還ニ關スル請願書、米國大統領及巴里講和會議ニ列席スル英

・仏・独・伊四国委員ニ提出スル独立援助嘆願書ヲ起草シ、三月一日迄ニ是等ノ書類ヲ一發送している。

独立宣言書を書いた、その同じ人達の手によつて書かれた、米國大統領に提出した朝鮮独立嘆願書を読んで頂きたい。<sup>註6</sup>一歳前ナル信念ト崇高ナル意氣ヲ以テ正義、一般的幸福及恒久的平和ヲ基礎トスル新世界ノ建設ニ奔走勤勞セラルル時代ノ大導率者<sup>註7</sup>「ウイルソン」閣下ヨ。我ラヲシテ最真摯ナル敬意ト深厚ナル祝福トヲ閣下ニ奉呈スルヲ得セシメヨ。閣下ノ義氣ニ感激シ、閣下ノ功業ヲ頌福スル世界大衆中最精誠ナル者トシテ、我等朝鮮人有ルヲ記憶セラレシコトヲ。二千万ノ純全タル心ト、四千万ノ願望スル眼トハ、一齊ニ閣下ノ身辺ヨリ離レサルコトヲ念ヘレンコトヲ」にはじまる滔々たる大文章は、単に外交的贅辭ではない。今後世界大戦を除く第一の根本は、ウイルソンの唱える民族自決である事に共感を示し、筆をついで、朝鮮がいかに圧迫されたかを歴史的に説明し、東洋平和のために、何よりもアジアのペルカンたる朝鮮民族が独立することであると力説し、援助してくれぬ様嘆願している。武力も外交も、もぎ取られてしまつた朝鮮人には、請願書は考えられ得る最大の策であつたのだらう。更に外国に對する、特にアメリカに對する期待が、いかに大きかつたかは、その後の事件の経過が如実に物語つてゐる。<sup>註7</sup>一九一九年十月巴里に於て開催したる國際聯盟會議に於ては、必ずや朝鮮獨立の問題が提議せらるべしとの宣伝或いは、英米兩國の勸告により、朝鮮獨立は容易に達せらるべし等の流説行はれて、愚昧なる民衆を煽動し、或いは秘密結社を組織して、不逞陰謀を企つる者<sup>註8</sup>等、一旦平穩になりかかつた運動が、この時再燃してゐる。更に翌年の一九二〇年七月一<sup>註8</sup>米國議員團が、東洋各地を視察するため、觀光團を組織して、來鮮すべしとの報一度伝わるや、内外獨立運動者は、議員團一行に對して、直接朝鮮が日本の統治を喜ばず、獨立熱の旺盛なる実

情を目撃せしめて、一行の認識を深からしめるべく、絶好の機会なりとして、議員團の來鮮を機会に獨立請願書を提出し、一面各地に暴動を起さんと計画したのである<sup>註9</sup>これも失敗に終つたが、これらの事實は何を意味するのだろうか。それはアメリカへの期待がいかに根強かつたかを示す以外の何ものでもない。警視庁保安課が「由來朝鮮人は事大思想に富み、依頼心強く、獨立運動を企圖するに至つた動機の如きも獨力をもつて、目的を達せんとするに非ず」と述べてゐる。しかしこれは事實の半面でしかない。否。歴史の中で最も重大なものを見落してゐるのではないか。たしかに保安課の指摘通り事大思想に富んだ、他力に頼ろうとする獨立運動は亡んだ。しかし民族獨立運動は決して亡びはしなかつたのだ。ウイルソンの幻影に踊らされた民族主義者が、華々しく歴史の表面から消え去つて行く、その一方自力による獨立への歩みは、たしかに足取りで進められていたのだ。

朝鮮人民は、三・一運動を斗い抜くことによつて、ウイルソンの民族自決宣言の歡騰を見破り、マルクス・レーニン主義を受け入れる基盤を、自己の歴史の中に作り上げて行つた。

註1 歴史学研究 一八四号 一二二頁  
註2 「朝鮮の歴史」 三・一新書 朴慶植・姜在彦著 二二三頁  
「朝鮮民族解放斗争史」朝鮮歴史編纂委員會編、朝鮮歴史研究會訳、三・一書房 二〇二―二三頁 などがこの見解に立っている。

註3 「朝鮮騒擾經過概要」(秘) 大正八年九月、陸軍省印刷 一頁  
「朝鮮獨立騒擾史論」 青柳南冥著 大正十年三月一日印刷 三頁  
「朝鮮獨立運動秘話」 千葉了著 大正十四年九月五日印刷 三頁



- 「朝鮮思想運動略史」 朝鮮總督府警務局保安課 敍秘 配布一八五号 八頁  
註4 「朝鮮思想運動略史」 四頁  
註5 「朝鮮騷擾經過概要」 陸軍省 大正八年九月印刷 三頁  
註6 總督府保安課から発表になつた「米國大統領ニ提出シタル朝鮮獨立援助嘆願書」より引用。  
註7・8 「朝鮮思想運動略史」

## 第二節 三。一運動への道

……若干の問題提起……

三。一運動の原因は何か？ この間に答えるもつとも正確な答えは「日本の支配があつたからだ」という一言につきる。いかなる原因を裏証し得ても、この一言に勝る真理はないように思える。

一八七六年、日本は朝鮮最初の不平等条約である江華島条約を強要した。この条約は日本が欧米諸国によつて強要された不平等条約を、そのまま隣国朝鮮に強いたものである。ここに日本は「欧米に対する日本の不平等条約撤廃の課題は、中国、朝鮮に対する不平等条約実現の課題と結びついて来る」日本近代史のあり方そのものを規定する第一歩を踏み出すのである。しかし日本の侵略する第一歩は、侵略される朝鮮が自己を変革しようとする長い舌斗の歴史の第一歩をも意味する。民族獨立運動を必然ならしめた条件はすでにここにあつたと思う。したがつて三。一運動の原因を分析する事は、三。一前の歴史のあらゆる成果を吸収、集大成する事によつて行わなければならない。紙数の関係もあり、更にそうする事は私の実力の及ぶ所でない。若干の間

## 三。一運動

題点を指摘して先学の叱正を乞うことにしたい。

三。一運動の原因分析の視点を次の三点に置きたいと思う。即ち、経済史的、政治史的、民族獨立運動史的観点である。

経済的要因として、まず第一に上げねばならないのは土地調査事業である。土地調査事業は明治四十三年三月、韓国土地調査局の開設にはじまり、同年八月日韓併合と共に朝鮮總督府の所屬となり、同年十月朝鮮總督府臨時土地調査局が設置され、土地調査事業を継承し、朝鮮土地調査令に基づいて、事業を完成したものである。この完成を見た日は、三。一運動勃発の前年であり、更に正確に云うなら、五カ月前である事は、十分注目に値する。

しかし、時期的に近いし、当然三。一運動の原因であらねばならないという一種の強迫観念から、土地調査事業を取り上げるのは、何ら意味がないばかりでなく、有害ですらある。そうする事は日本が朝鮮に行った植民地支配の中核をなす土地調査事業を、三。一の原因のみにしぼつてしまふ恐れがあるし、更に一見その意義を重大視している様でありながら、本質的には過少評価していることになりはしないか。

三。一運動全体を通して土地調査事業の影響はそれ程顕在化していなかつた。土地問題に関するスローガンは、少なくとも三。一が斗かわれていては提起されなかつた。ここにむしろ深い意味がある。スローガンがなかつたこととは要求がなかつたという事ではない。それは単に顕在化しなかつたというに過ぎないのである。三。一の翌年から小作争議は激増している。私はこの事を重大に思う。三。一の五カ月前に土地調査事業が完了して三。一の翌年から小作争議が激増しているこの厳然たる歴史的事実の中に、三。一運動に於いて見えにくく困難ではあるが、三。一運動を内側から支えた農民の要求が何であつたかを追究する、たしかな手がかりがある。

次に一九〇五年財政顧問目賀田種太郎による財政整理がある。日本は江華島条約の時、すでに日本国内貨幣の朝鮮国内の流通の許可、朝鮮国貨幣の持出しの自由を定めた。ここで、朝鮮市場に対する日本の優位は決定するのであるが、財政整理はその最初の輝かしい(?)成果の上に立つたものである。目賀田の貨幣整理は従来の通貨である白銅貨・葉銭を根こそぎ回収して、日本の貨幣制度を強行することにより、日本の商品流通と資本輸出のために決定的な意味を持った。しかしこの問題を三・一運動との関連に於いて捉えるためには、どうしても葉銭・白銅貨が朝鮮経済に於いてはたしていた役割を具体的に把握し、その葉銭・白銅貨の回収が、どの階級にどの様な打撃を与えたのかを、具体的に究明する必要があると思う。そうすることによっておそらくは三・一運動に於いて意外な程、根強かつた商人達の抵抗の質と限界とを見極める事が出来るだろう。

#### 政治史的観点

「今回の騒擾事件に依りて能く能く朝鮮貴族や両班の無力なるに驚いた。斯ふ云ふ場合一人の起つて時局拾収に助力すると云ふものの出でないとは、朝鮮人位頼みにならないものはない」と総督府の官吏がつくづく嘆いているこの一言は、近代に入つてから無能々々と呼ばれつづけた朝鮮支配階級にとつては、正に名譽回復を証言する一言でもある。三・一運動に於いては貴族、両班までが日本から「無力」だ「頼みにならない」ときめつけられる程勇敢にならざるを得なかつた。日本が併合の時殊更に愛嬌をふりまいた朝鮮の支配階級までも、排日に追い込んだものは何だつたのか。この事は彼等がいかにして権力の座からもぎ取られたかの考察なしには理解出来ないだろう。——その行動も、その限界も——

統監府時代の政治史の本質は、一言でいえば日本が朝鮮の国家権力を掌握して行く過程にあるという事が出来る。日本の主権的意図と朝鮮の主権的意図との衝突の可能性があるを切り開いて行つた時代である。その後を受けた総督府統治が、統監府時代に掌握した権力をどの様に再編成したかを考察しなければならぬ。しかしこれらの期間に対する従来の研究の基本的欠陥は、日本がどの様に朝鮮を扱つたか。即ち日本の対朝鮮処理方式という観点にしろられた事である。それは資料的制約から見ても理由のある事だが、いつまでもその事のみを云いわけにする事は出来ない。日本による国家権力の掌握が、朝鮮支配階級をいかに権力の座から叩き落とし、更に国家権力直接の発動者として日本人が、朝鮮人民の前に立ち表われた事が、抵抗運動をどの様に拡大させ、変質させたかを究明しなければならぬ。

#### 民族独立運動史の観点

従来の民族独立運動史は余りに与えられた客観条件によりかゝり過ぎはしなかつたか? 例えば一九〇五年第二次日韓議定書の時「この条約は秘密裡に調印されたが、その内容がもれるや暴民は暴動を起し、商人は店を閉じた。そして京城の市民達は条約に調印した大臣の家に火を放つた」、「一九〇七年ヘーグ密使事件の結果、高宗皇帝はその子光武帝に皇位をゆづらざるを得なかつた。この事件は朝鮮人を刺戟し、反日斗争を激発させた」という具合にある。この様に民族運動を日本の侵略に反応して起こつたものとして捉えては、その上にいかに「輝かしい」とか「絶えざる嵐にきたえられて」とか形容詞をつけてみようと、その本質に於いては、單に回数の問題に解消してしまつてに過ぎないだろう。これらの民族運動が真に三・一運動につながる歴史的エネルギーとして、有機的に捉えられるためには、たつた一つの契機が

あれば、たち上らざるを得ない程に慢性化していた、民族の危機を、運動の主体の側から把握しなければならぬ。

以上私は未熟な問題提起を試みた。しかし私の上げた問題がすべて究明されても、それでいいと満足する自信は少しもないのである。私の問題提起が至らぬばかりでなく、それらの問題は更にもう一つ上の次元に立つて有機的に再構成されねばならない。私の冗舌な問題提起より、次のたつた一つの民謡の方が、三・一運動の原因と総督統治の本質をはるかにみぬいているかも知れない。

口の利ける野郎は監獄に  
野良に出る奴ア 共同墓地に  
餓鬼の一匹も生める女<sup>ア</sup>つちよは 色街に  
もつこ担げる若けえのは 日本に  
こんで何にもかにも素つからんよ  
八間新道のアカシヤ並木  
自動車の風に浮かれてる。

註1 「服部之総著作集」 7 七九頁  
註2 「朝鮮及満州」 大正八年四月号 松永京義道長官談。

## 第二章 三・一運動

三・一運動の全期間を一応次の三期に分ち追究する事にする。

第一期 三月一日（三・一）に先行する海外朝鮮人の運動も含めて）から「四月中旬末以後、殆んど騒擾ハ跡ヲ断ツ」期間。

この期は血で血を洗う熾烈な斗いが、日本官憲と朝鮮人民との間にくりひろげられ、最も勇敢に抵抗運動を展開する期間である。  
この期の日本の為政者は事の意外にボウ然とし、からつぽの頭で唯彈圧のみを考える。その様子は原敬日記にくわしい「今回の事件鎮圧に付、総督の意見をたずねると申送りたるに総督の返事に格別の意見なく、単に歩兵及憲兵の増派をのぞむと云ふに過ぎず、如何にも無策の様なるが、本件に付政府の処置としては、断乎たる処置を要す」即ち、三・一に対するたつた一つの政策——「断乎たる鎮圧」が行われる時期である。

第二期 「四月中旬末以後」から斎藤実総督就任まで。  
無論四月中旬以後ばかりと熾烈な斗いが終結したわけではない。しかしこの期を境として運動の質が變つて来た事は見逃せない事実である。その変化を一言でいうなら「独立をから改革を」へである。

朝鮮人民は赤手空拳で日本官憲の銃口の前にたちはだかる無意味を体で実感した。  
三・一の原因を分析し、様々な改革案を持つて日本政府に迫つて来る。同様の變

第二章で、三・一運動の第一期を重点的に

第 節 海 朝 人 動 向

国内、国外を問わず朝鮮人のいる所に不穩の空氣がたゞよつていた。その中で最も組織的、進歩的であり、三・一運動の直接的原因をなしたものに、東京留學生の獨立運動があつた。まず、スポーツを東京留學生にあててみよう。

一九一八年（大正七年）頃の、朝鮮人留學生は、日本全体で約八百名、そのうち六百名が東京にいた。この頃、朝鮮人留學生は、日本全体で約八百名、そのうち六丁度その頃、主務官後の切り札、寺内内閣が、米騒動の包囲の中で倒れた時である。寺内は初代朝鮮總督、武斷政治の中心人物で、朝鮮人からは深い恨み



化は日本にも起こる。

たつた一つの政策が鎮圧であつた「無策」な日本政府も朝鮮統治策を考える。しかしこの期の終わり頃には、日本側の改革案と朝鮮側の望む改革案とは、両者の歴史的立場そのまゝの異質性を明瞭にして来る。

### 第三期 斎藤実総督就任

当然のことだが、斎藤実の政策は総督統治に対する部分修正は行いながらも、植民地統治を貫徹することにあつた。このことによつて、改革案をひつさげて、歴史の表面に踊り出た改良派は決定的に挫折する。そして第二期の終わりからこの期にかけて社会主義運動が力強く抬頭して来るのである。

第二章で、私は三・一運動の第一期を重点的に扱うことにする。

## 第一節 海外朝鮮人の動向

国内、国外を問わず朝鮮人のいる所に不穏の空氣がたゞよつていた。その中で最も組織的、進歩的であり、三・一運動の直接的原因をなしたものに、東京留学生の独立運動があつた。まず、スポーツを東京留学生にあててみよう。

一九一八年（大正七年）頃の、朝鮮人留学生は、日本全体で約八百名、そのうち六百名が東京にいた。この東京にいた留学生の間から、独立運動がはじまつた。

丁度その頃、日本では絶対主義最後の切り札、寺内内閣が、米騒動の包囲の中で倒れた時である。寺内は初代朝鮮総督、武断政治の中心人物で、朝鮮人からは深い恨み

を買つていた。その寺内内閣が日本人民の力によつて倒れたことは、朝鮮人全体に深い印象を与えたことだろう。更に米騒動の後を受けて、日本全国に起こつた大衆的ストライキの影響で、日本の労働運動が左翼化し、急進化しはじめたのもこの頃だ。社会主義者の活動もようやく活発になつて来た。

一九一五年から堺利彦らの出していた『新社会』も、このころはマルクス主義の解説と並んで、ロシア革命をはじめ各国の革命運動の紹介を盛んにやつていた。河上肇の『社会問題研究』は、一九一九年の一月に創刊され、特に学生達に愛読された。当時の新聞をみると、一九一六年から朝日新聞に連載された河上肇の『貧乏物語』、一九一七年、朝日新聞に同じ河上の『社会問題管見』が連載され、当時のインテリに大きな影響を与えた。更に国内に於ける労働組合の組織、例えば『女工演壇に立つ』という見出しで、友愛会の日本橋支部の結成大会に、日本モスリンの山内みな子が、労働者団結の必要を訴えたとか、各地のストライキの模様を伝えていた。国際問題では、当時一番多く報道されたのは、ロシア革命、アイルランド独立運動、ポーランドの独立問題で、パテレフスキは、ポーランド民族の英雄として、もてはやされた。

この様な社会情勢の中にあつて、時事問題に最も鋭敏な感覚を示す学生が、影響を受けたいわけがなかつた。事実、学生の社会主義運動も、この頃から起こっている。一九一八年十二月上旬には、

一、吾徒は文化的大勢たる人類解放の新気運に協調し、之が促進に努む。  
一、吾徒は、現代日本の改造運動に従う。

を綱領とする、東大新人会が生まれた。早稲田大学にも、民人同盟会が出来た。これらの団体は後、社会主義運動の中で大きな役割をはたすが、この頃はまだデモクラシ

とか、日本の改造とかを唱えただけで、<sup>註1</sup>植民地問題、就中朝鮮問題には、はつきりした考えはもつていなかった。しかし当時の学生運動は朝鮮人留学生に大きな影響を与え、彼らの民族的自覚をうながした。その事実は大きく評価されねばならないだろう。

この様な労働運動、学生運動の高まりの中で、<sup>註2</sup>早稲田大学文学部哲学科の学生であった李光洙は、北京に渡った。李光洙は北京滞在中に、第一次大戦の休戦や、民族自決の原則を含むウィルソンの宣言のことを聞いた。彼は中国の五・四運動前夜の熱狂的な空気を吸って、朝鮮の独立運動の決行を決心したのである。李光洙は足を京城に向けて、かねてから親しくしていた桂洞中央学校の教師、玄相允をたずねた。玄相允はその頃普通成高等普通学校の校長をしていた崔麟の弟子で、崔麟とはその後も親しくしていたので、玄相允を通して崔麟をうごかすため、まず玄相允に独立運動の相談をした。玄相允には、北京の様子を伝え、かつ崔麟を通して当時民族宗教として勢力のあつた天道教の教主、孫秉熙をうごかし、天道教を中心に独立運動をする計画をたてた。これが朝鮮に於ける三・一運動のきっかけである。

京城で相談がすむと、李光洙は十一月の末に東京に帰って来て、第二学期の試験をすませ、冬休みに入ると、すぐに同志を集めにかゝった。こうしてまず早稲田大学政経学部<sup>註3</sup>にいた崔八鏞を得、崔八鏞は白寛洙、金度演、徐韓、金詰寿、崔龍愚、金尚徳の同志を得た。彼らが東京に於ける独立宣言書<sup>註4</sup>の署名者になつたわけである。この宣言文は、李光洙が原文を書き、海外に送るために英訳し、印刷した。すべての準備がととのえられ、後は二月八日の発表を待つばかりになつた。三・一運動に先立つこと約一カ月であつた。

その頃崔八鏞が李光洙の下宿にやつて来て、同志一同の意見として李光洙の上海行

を進めた。その理由は、宣言文発表後、同志一同がつかまつてしまえば、この朝鮮独立の大業が、ひろく世界に伝わらない恐れがあるから、上海に渡つて、上海から日本の朝鮮統治は、二千万民族の意志ではない。朝鮮人は独立を熱望しているのだ、と広く世界に宣言してくれという事にあつた。李光洙はこの要求に応じて直ちに上海に向つた。

かくして、東京に於ける指導は崔八鏞の手にゆだねられ、運動は進められた。

いよいよ二月八日が来た。早大政経科三年崔八鏞・東京高師三年徐緒・青山学院二年尹昌錫・慶大政治科一年金度演・慶大理財科三年金詰寿・明大商科二年白寛洙・東洋大哲学科二年李琮根・明大商科二年金尚徳等八名の学生が中心になつて、東京市神田小川町の朝鮮基督教青年会館で、独立大会を開いた。二月八日午後三時頃、約二百名の学生は、青年会館に集合して壇上に宣言書を掲げ、実行方法を論議し、不穩の形勢を示すに至つたので、所轄署に於いて解散を命じ、かつ主謀者たる委員十名を檢舉、出版法違反として処罰したと保安課の調書にあるが、宣言文と決議文は熱狂のうち可決してしまつた。朝鮮人学生は決して屈服しなかつた。つゞいて二月十二日の午前中には、またも五十名余りの朝鮮人学生が、前記の青年会館で独立運動の協議中檢舉された。警察側の調書も、朝鮮留學生の不屈の斗いについて、次の様に述べている。「処罰したが時既に遅く、一般學生の間に朝鮮独立を企図せんとする、氣運濃厚に漲り、殆んど學業を放擲して、各所に秘密集會を催して朝鮮独立を鼓吹し、或いは鮮内知己等に対し煽動的通信を送り、不安激発に努めつつあつた」と報じている。が、彼らは単に手紙を送るなどという間接手段を取つただけでなく、祖国独立の熱情にかられて帰鮮したものも相當の數に上つたと見られる。それは三月一日から四月八日までの騒擾事件起訴被告人の統計を見ると、内地留學生が二十六名もつかまつている事

奥からしても、十分に推論出来る。三・一運動のまつただ中の五月二十五日、高等法院長渡辺暢氏が「朝鮮騒擾ニ関スル責任ハ、主トシテ吾等在留内地人ノ負フベキモノナレドモ、又東京人士ノ責任モ大ナリ。日本人ニシテ一度米國ニ趣キ、或ハ英國、独逸、其他ノ諸外國ニ留学セバ、各々其ノ美点ヲ捕ヘ、帰國後或ハ米國カブレトナリ、独逸カブレトナルハ通弊ナリ。然ルニ朝鮮人学生ニシテ一度帰國センカ激烈ナル排日ト化スルニ於テ東京人士ノ責任重大ナリト言ハサル可ラス」といつているのは、この間の事情を十分に伝えているのではあるまいか。

彼等東京留学生は、単に直接行動に於いて先んじ、先駆的役割をはたしたのみでなく、何よりもその思想的な高さに於いて、ぬきんでていた。三・一運動が勃発した當時、有名な民族代表と自称する三十三人の独立宣言書その他に、種々な類似の宣言書が乱れとんだ。その中であつて、東京留学生の宣言書は、一ざわ目立つていた。私の手許にある五、六種の宣言書と読み比べて、次の三点で私はその思想的な高さを評価したい。

一 彼等は自國の歴史を人民の目をもつて、見ようとしている。初歩的ながら支配と被支配との階級的観点からとらえようとしている。「わが民族は、四千三百年の長い歴史をもち、世界最高民族の一つとなつてゐる。ときに中國に正朔を奉じたとはいえ、これは兩國皇室の形式的な外交關係にすぎなかつたのである。朝鮮は常にわれらの朝鮮である」と高らかに宣言している中には、日本で社会主義の洗礼を受けた若々しい知性の息吹と、新しい歴史の暁を告げる力がある。

二 歴史を人民の立場でとらえようとした、その目はロシア革命を見逃しはしなかつた。「東洋平和の見地に立つて云う。かの最大の脅威者ロシアは、すでにその軍事的野心を放棄し、正義と自由にもとずき、新國家の建設にしたがつてゐる。中

華民国またしかり」と他のどの宣言書も、ふれていなかったロシア革命を評価し、したがって朝鮮を軍事的に侵略する国（ロシア・清国）がすっかりなくなつたのだから、日本が朝鮮を併合する大義名分がすっかりなくなつたと鋭く日本に迫つてゐる。

三 更にまづすぐに真理を見通すその目は、ウイルソンの宣言の欺瞞をも見破つた。他の宣言書が欧米諸国に朝鮮の独立を援助してくれる様「お願い」し、或いは「嘆願」してゐるのに対し、彼等の宣言書は今、民主主義、民族自決の旗手として仰がれてゐるアメリカ・イギリスがかつて日韓併合を真先に承認してしまつたことの矛盾を激しく追求し、その旧罪をつぐなうために、今こそ朝鮮の独立を支持すべきであると論じてゐる。

以上の点に、植民地に於ける学生の一定の指導的役割を認めるものである。この節の冒頭で述べた如く、この様な民族独立への熱情は、ひとり東京にいる留学生にとらえたのみではなかつた。凡そ朝鮮人の集る所、独立への熱望がわき起こつたのだ。しかもそれらは、個々ばらばらではなく何らかの個人的或いは組織的なつながりをもつてゐた。朝鮮総督府警務局保安課の調べの中に、次の様な一節がある。

一 駐在二月下旬仁川に潜伏中の張徳秀を逮捕取調べた所、同人は上海より密命を受け、各地との連絡のため入鮮してゐたものであることが判明した。即ち張徳秀は早稲田大学卒業後上海に渡航し、不逞分子と交遊中、大正八年一月十六、七日頃上海居住中の申堅より「既に各地に於ける独立運動の連絡は完成し、一斉に運動を開始する予定なるも、日本官憲は運動勃発せば、必ず海外に報道することは禁止するであらう。君は日本人を装ひ、東京及京城に赴き、状況を時々上海中華新報記者たる同志趙東祐に通信せられたい。又東京には既に趙雲を派遣したるをもつて、東京



着の上は同人と連絡打合せを為すこと。尚東京に於ける運動は二月初旬、京城に於ける運動は三月初旬実行の予定である。」との命令を受け、一月二十七日頃上海出發長崎經由二月三日、東京着、趙鳳雲と密会して東京に於ける状況を詳細に上海に通信し、二月二十七日東京出發入鮮、潜伏して状況を窺つて居たものであつた」以上の調査を分析して、次の様に考えることが出来る。一番注目すべき事は、「各地に於ける連絡が完成した」とはつきり云い切つてゐる事。しかもそれが単なるはつたりではなく、彼等が予定した通り、二月初旬には東京で、三月初旬には朝鮮で、運動が勃発している事。更に運動がはじまつてから、自分達朝鮮人にとつて、有利に世界の世論を捲き起こすという、はつきりした目的のために張徳秀を、日本に派遣している事。三・一の初期、いかに外国の援助に期待してゐたかを考え合わせれば、この様な周到な用意がある事は想像に難くない。

以上の諸点から、相当に強い組織的な連絡があつた事は、十分に推論出来る。調査のしめくりに「これに依つて見るに、東京及京城に於ける独立運動は既に上海不逞団体と充分なる連絡の下に、計画せられてゐたことを、察する事が出来る」という結論は、正コクを得てゐるといえるだろう。しかしその方面に於ける日本の最高權威である保安課をもつてしても、その組織がいかなるものであるか？長い間ナゾとして残されてゐた。

しかし昭和七年、警察が上海フランス租界で入手した書類の中に、その組織をさぐる重要な資料が見つかった。それによると「一九一九年二月一日、大韓青年党、呂運亨・金徹・金奎植・鮮干藤・韓鎮教・趙東祐等上海ニ会合シテ、朝鮮独立ヲ謀リ、金奎植ヲ巴里ヘ、張徳秀ヲ日本ヘ、金徹・鮮干藤・徐丙浩ヲ鮮内ヘ、呂運亨ヲ露領ヘ、各々派遣シ、宗教界各社会ノ巨頭等ト会見セシメ、独立運動ヲ計画ス」とある。この

資料は、前の保安課の調査とも一致し、大韓青年党という組織が各地と連絡を取つていたことを証明している。

この大韓青年党をはじめ、海外朝鮮人の独立運動は、一つのテーマとして取り組んでも尚余りある程、重大かつ複雑なので、この論文では割愛する。

註1 三・一運動が起つてからのち、四月十九日、京大の新人会が出来た。三・一運動の感想をその機関誌「デモクラシー」の中で次の様に述べてゐる。

「失われたる祖国の爲には、老幼を問わず悉く立つた。特に運動の先駆は実に京城の女学生であつたそうだ。我々は彼地の青年の真剣さに触れて覺えず涙が出た。」

註2 本文で述べた東京留學生の動きについては、「思想」岩波書店発行、一九五五年、六月号「三・一運動とその現代的意義」(上) 山辺健太郎氏の論文と、「朝鮮思想運動略史」朝鮮總督府警務局保安課の調査とを参考にし、補いた。

註3 山辺氏の論文(前掲思想に掲載のもの)によると「大会には在京の朝鮮人学生はほとんど全部である約六百名が集つた」と書かれてゐるが、警務局保安課の調査には「約二百名」とある。山辺氏は出典を明示してゐないので、保安課の調査に拠つた。

註4 「朝鮮騒擾地巡廻日誌」傍点は引用者。

註5 東京留學生の宣言書は、朴殷植著「朝鮮独立運動之血史」に掲載してあるものを、朝鮮歴史家、朴慶植氏が訳したものによつた。傍点は引用者。

註6・7 「朝鮮思想運動略史」

註8 「朝鮮民族運動年鑑」 在上海日本總領事、警察部第二課 (秘)

本年鑑へ昭和七年四月二十九日、天長節当日上海虹口公園ニ於テ潘承大韓民国臨時政府及韓國獨立党ノ指揮ニ依リ、惹起セラレタル、不詳事件ノ翌日之カ捜査ノ爲上海租界當局ト協力シ、同租界内容疑場所數ヶ所ニ手

入シタル際、同租界馬浪路普慶里第四号大韓僑民団事務所ニ於テ押取シタル、潜称大韓民国臨時政府及同僑民  
団保管ニ係ル、夥大ナル文書ノ個々ニ対シ、編集者ノ主観ヲ一切加味セズ要點ヲ摘出シテ、編集シタモノナリ。

## 第二節 運動の企画

民族独立運動の要素は、第一章で略説した様に、すでに抽出つていた。その上に世界情勢が、朝鮮民族のケツ起に拍車をかけた。もはや運動は唯何らかの契機があれば暴発するだけに成熟しきつていた。この契機は韓国最後の皇帝高宗の死であつた。一九一九年一月二十二日、高宗が突然死んだ。高宗皇帝は、一九〇七年ヘーグ平和會議に三人の密使を送り、朝鮮独立を各国に訴えた。そのために責任を問われて、日本に帝位を奪われ、次帝隆熙に帝位を譲らざるを得なかつた。しかも尚去り難い李朝五百年の夢に悶々として、その後も日本に對して、かなりの叛骨を示していた。その高宗が夕食後、寝につき、約一時間の後脳溢血で死んだといわれている。この突然の死は、高宗の逆境と当時の朝鮮の状況とからまつて、毒殺されたという風説を生むに十分だつた。彼の死は、日本のスパイである侍従長の尹徳榮が女官に命じて、一服もつたという風説が乱れとんだ。今の私は、高宗の死因の真相を究明する何の資料も持たない。それは単なる風説に過ぎなかつただろう。しかし例えそれが、単なる風説だつたとしても、その風説が亡国の民の心を、どんなにゆすぶつたかは、察するに余りある。朝鮮人の失われた祖国への思いは、高宗皇帝に通じていたであろう。「朝鮮民族解放斗争史」の中で「一九一九年一月二十二日徳壽宮に幽囚されていた高宗が死

ぬや、その死因が日本のスパイ毒殺によるとの風説が、ひろがりはじめた。これを契機として、国内各処で大衆的集會がさかんに行われる様になつた」とこの間の事情を述べている。この高宗皇帝毒殺という風説は、たちまちにして人民をとらえ、日本に對する朝鮮人の怒りは、これを導火線として爆発した。この様な情勢の中で、最も勢力を持ち、運動を最初に指導したのは、有名な独立宣言書を書いた民族代表と自称する三十三人のグループであつた。ではこれらの人々は、どの様に運動の企画をたてていつたのだろうか？以下事実の概要を朝鮮總督府警務局保安課が「<sup>註2</sup>取調べに依つて判明したるもの」として發表している文書に基づいて、企画の経過を述べよう。天道教中央總部の重鎮であつた樞東鎮・吳世昌等は、大正七年十二月頃から、密かに往來して、「弱少民族の独立は世界の大勢であつて、米國をはじめ世界列國が、之を支持してゐることは、朝鮮の独立を宣言するには、今が最も好機である。」という情勢判断に一致した。そこで彼等は、天道教經營の普成高等普通学校校長、崔麟に意見を求めた所、崔麟は直ちにこれに賛成して、どの様に着手するかを相談した。その結果「まず帝國政府・貴衆兩院・政黨首領・朝鮮總督に對しては、『恒久平和を基礎として、新世界を提出し、米國大統領及巴里講和會議に對しては、『恒久平和を基礎として、新世界の建設せられんとする今日、独り朝鮮は其の恩恵に漏れ、日本の圧迫治下にある』という理由でもつて國權恢復に援助されたいという長文の嘆願書を提出し、朝鮮全人民の世論を世界一般に反映すると共に、朝鮮人民の意識を喚起する手段として、キリスト教關係者及一部の貴族古老の賛成を得て、一大反抗運動を惹起せば、朝鮮の独立は必ずしも不可能ではない。又例へ朝鮮獨立が早急に實現しなくとも、獨立の氣運を促進する意味に於て、重大なる効果をもたらすだろう」という見通しに達した。



そこで大正八年一月二十五、六日頃、崔麟・崔東鎮・吳世昌等が共に天道教主、孫乗熙を訪ね、自分等の意見を述べ、賛成を求めた。孫乗熙は「身命を賭して祖國に報ずべし」と述べ、一同を激励し、ここで天道教側の意見は完全に一致した。この様に天道教主脳部間では一致したものの、更に自分達の運動を、国内的にも、国外的にも強固にするために、キリスト教との提携が最も必要とされた。

当時キリスト教は、天道教と共に、最も強力な民衆に対する指導力を持ち、全鮮的に運動を捲き起こすためには、どうしてもキリスト教と提携する必要があつた。しかし「輸入宗教ではなく、現実主義の朝鮮民衆の生活そのものの中から生まれ、西洋人の侵略への恐怖」の中で育つた天道教とキリスト教とが提携するのは、非常に困難なことを思われた。この難に當つたのが、崔麟その人であつた。崔麟は一月十八日、かねて親交のあつた崔南善を説いた。崔南善は即座に快諾して、キリスト教方面との連絡に當ることを約束し、しだいにその陣容を整えて行つた。

キリスト教との提携は、ひとり国内に於いて有利なばかりではなかつた。保安課はその調書の中で「勿論崔麟の胸底には、キリスト教と合作する事に依つて、更に欧米の諒解を促進し、その援助を容易ならしめんとする第二段の計画が企てられていたことは、容易に想像せられる」と述べているが、事実そうだつただろう。宣教師の中には、多数の米・英人がいるし、西欧の強國が全部キリスト教を奉じている事。そして外國に対する期待が強かつた運動の初期に於いては、保安課の見解は正しく然りである。

キリスト教徒が天道教の計画に参加した。この事は三・一運動を成功に導く一つの鍵だつた。キリスト教徒との提携が出来た事は、仏教徒そして宗教に何の縁もない人と手を結ぶ道が開けた事を意味すると思う。なぜか？答は簡単だ。己の宗教的立場に

固執する余裕がない程に、民族独立の熱求が高まつていたからだ。キリスト教徒と提携したという事実は、彼等が天道教徒としてではなく、一朝鮮人として行動したことを示すのではないか。一般的に三・一運動に於ける天道教徒の役割は大きく評価されている。しかし私には、その教徒としての役割を過大評価する事は納得出来ない。天道教が己の宗教的立場を固執したならば、大猿の仲のキリスト教、仏教徒と提携出来るわけがない。一國の大事の前に天道教徒としてよりも、一朝鮮人としてたちはだかつたからこそ、より広範な人々との共通の場をもつことが出来たのだ。一朝鮮人として、祖國を思う情熱をぶちまけたからこそ、その声は全鮮にこだまする事が出来たのだ。大邱覆審法院検事長は、大正八年五月二十三日、運動を目前に見ながら、「キリスト教徒・仏教徒・天道教徒・或ハ学生等が當該問題ニ煽動ノ地位ニアリタル如キモ、彼等ハ各教徒トシテ此ノ運動ニ加盟シタルニ非ズシテ、只單ニ鮮人トシテ此ノ騒擾ニ加盟セシニ過ギズ」と語っている。

かくしてその陣容をととのえた彼等は、自分達の見通しにしたがつて、運動に着手した。まず何よりも「全世界に日本帝國に対する不服従の國民的總意を表明すると共に、朝鮮問題を世界的問題」に発展させるために、請願書を全國に送り、その起草には崔南善が當ることになつた。

日本帝國政府、貴衆兩院、政党首領に対する國權返還請願書は、大正八年二月二十六日平壤居住の牧師、安世桓・京城居住の林圭の二人が東京に持つて行き、朝鮮總督府に提出する請願書は、三月一日の運動勃発と同時に、京城医学專門学校生徒、餘永煥が提出することに決定した。一番慎重に行つたのは、アメリカ大統領及講和會議に提出する嘆願書であつた。嘆願書を京城居住の牧師玄楯が上海に持つて行き、上海で英文に翻訳し、發送するために玄楯は、二月二十六日に京城を出発する予定だつた。

しかしキリスト教側から、嘆願書の文意が余りに穏健で、外国の同情をひくのに十分ではないから、もつと悲壯激越の文章に変更しようとの物いいがついて、もう一度草案を練ることになった。したがって二月二十六日玄奘は、手ぶらで上海に行き、草案は後から送ることになった。その後、草案はいく度か協議された結果、崔南善の起草のまま採用することになった。日本の警察にこの間の事情をかぎつけられたが、草案は無事上海にとどいた。

この様に嘆願書の準備をすると同時に、一方民衆の運動を全鮮的に捲き起す計画が首都の間で協議され、次の様に決定した。

京城に於ける独立宣言の発表を機会に全鮮一斉に火蓋を切る。この時期については、はじめ三月三日に決めたが、その日は、高宗皇帝の国葬の日であり、皇室に対し不敬になるといふので、一日繰り上げて三月二日にしようとした。しかし三月二日は日曜日で、会議出席のキリスト教徒の間から反対が起こり、三月一日と決定した。この決定をした日は、二月二十五日で、事に当るまでには後三日を残すのみだった。彼等はまず、三月一日に独立宣言書を発表、示威運動する旨を、全鮮主要都市に密使を急派し、連絡した。一方崔南善起草の独立宣言書を、二月二十七日午後六時から天道教経管普成社で、二万一千枚を印刷し、京城市内及各地に密送した。宣言書には、はじめ加盟者全部が署名する予定だったが、そうすると日本警察の前に、自分達の姿をすっかりさらけだし、内部の陣営を悉く壊滅せられる結果になるので、代表者三十三名が全責任を負つて、署名することに決定した。署名者は全員検挙されることを覚悟し、その後も残りの人々によつて、運動が進展する様に準備した。そのために加盟者全員の名簿、その他重要書類は焼却した。しかし検挙者を調べた情報によると、独立宣言書の発送は次の様に行われた。

一 二月二十七日天道教側では、忠清南道、全羅北道地方に印宗益なる人を使者として四千枚を。江原、咸鏡南、北道地方に対しては、安商徳を使者として三千枚。黄海道地方には、李鼎燮をして五百枚。平安南、北道に対しては、全洪烈をして五千枚。携行せしめた。

二 キリスト教に於いては、二月二十七日勝洞礼拝堂に三千枚を渡し、京城その他付近に配布した。

三 仏教側は二月二十八日、韓龍雲の手に依り、約三千枚を仏教中央学林生徒鄭秉憲外八名に京府内及地方寺院に配布、或いは密送した。

四 残部の約二千五百枚位は、京府内に配布せられたものと想像される。この様に独立宣言書は、殆んど全部宗教関係者の組織を通して、宗教関係者にまかれた。しかし三・一運動でつかまつた全検挙者中、宗教関係者がわずかに七％という数字は、一体何を暗示しているのだろうか？指導者によつて加えられた最初の一撃は、指導者の手をはるかにのり越えて前進していったことを示すのではないだろうか？この指導者の一撃を民衆に伝え、最初の指導者が検挙された後、有力な指導者となつた者に学生がある。彼等はこの民族代表と自称する人々とは別に、彼等自身京城で独立運動を準備していた。

京城中央キリスト教青年会幹事、朴熙道は青年学生間にど漫しつゝある独立の気運を統合して、運動の計画をたて、大正八年一月二十三、四日頃、同会委員の延禧専門学校生徒金元壁と逢い、青年会員募集に名を借りて、専門学校卒業生又は在校生の中から、意志鞏固なる青年を募集したいとの諒解を求め、朴熙道の名をもつて、一月二十六日頃普成専門学校卒業生、朱翼以下八名を京府内觀水洞支那料理店大觀園に招待、朴熙道から「基督教青年会員として専門学校卒業生又は在校生中より祖国精神の

旺盛なる青年募集の計画なれば、人選方依頼し度し」と暗に独立運動の計画をほのめかして挨拶。酒宴に移り、宴終了後、朱翼は「世界大戦の結果、国際情勢は新たな趣向を辿りつつありて、新聞紙の報道等を綜合するに、欧州各地に於ては従来の異國が独立し、或は国内に於てすら民族的に分離し、新国家を形成するもの増加しつつあり、我朝鮮の如きも当然講和会議に於て、問題となるべく此の際学生、青年がケツ起して世論を喚起し、一面各国に対して朝鮮民族は、断じて日本治下に甘んじてゐるものではないことの意志を表示するためには、絶好の機会なりと信ず」と提議して運動に着手する意志を明白にした。朴熙道以下いずれも賛成し、独立宣言書を発表して世論を喚起する事に意見が一致しそうになつたが、金元璧は「時期尚早にして、仮に独立し得るとするも完全なる独立国としての体面を保持することは、困難なるべし。相当考慮を要すべし」と発言、決定するに至らなかつた。その後金元璧は單身平安北道宣川に赴き、熾烈な排日思想を抱いている米國宣教師マツキーン氏を訪ね、意見を求めた所、氏は「朝鮮はまだ独立の能力なきも斯の如き運動は一回にして成功することは、殆んど至難にして実行に依り体面を得ると共に、世論の喚起を図ることは、多大の収獲ならん」と述べ、ここに至り金元璧は「実行こそは最後の解決者なり」と決意。帰京して、運動参加の決意を同志に伝えた。朴熙道以下同志は、大いに力を得て、独立宣言書を印刷し、学生運動を指導することに決定。各同志（この頃四十名位になつてゐたと推定される）は、京城内の中等学校以上の生徒を集めて、学生側の結束を固め、独立宣言書の草案を作成しようとした頃、前述の様に、キリスト教、天道教の提携が成功し、天道教からの誘いもあり、彼等は天道教の計画に合流する事になつた。三月一日、三、四千名の学生が集まつたのは全く彼等自身の力によるものだし、三・一運動が電光石火の如く全鮮に広がつたのも、この学生達の様に、独立の氣運を背

景に事を起こさんとする集りが、全鮮にうつぽつとしていたからではないだろうか。

註1

鄭漢慶の「Gae of Korea」の中に高宗の叛骨を示すものとして、次の様な一説がある。

「第一次大戦が終つてのち、一九一八年（大正七年）の十二月に朝鮮總督府は、なかば強制的に朝鮮人から署名をとつて、朝鮮人は日本の統治に満足し仁慈にとんだ天皇をいだいて、忠誠な日本人になることが、朝鮮人の唯一ののぞみであり他の諸民族の様な、民族自決の原則は朝鮮にはあてはまらない。という主旨のことを講和会議に上申させようとした。各部落の有力者はみな強制的に署名させられた。ところが李太王はこの署名をことわつた。なぜかという一九〇五年（明治三十八年）に、日本が朝鮮を保護国とした時、彼が生命をかけて反対しなかつたことを後悔してゐたので、こんどは頑張つたといふのである。」

註2

現在我々の手に入る資料の中では、朝鮮總督府保安課の調査が一番資料的価値が高いと思う。なぜなら朝鮮側の重要書類は全部彼等自身の手によつて焼かれるか、日本に押収されてしまつただろう。又たまたま当時の関係者の中で生き残つた人々が、終戦後當時を回顧して書いたものがある。私も、日本警察が終戦直後上海で入手した、崔南善が書いたと推定される本を読んだが、そこには長かつた圧制から、やつと解放された、あふれる喜びと、日本に対する憎しみと、かつて自分と共につつた同志達への讃歌にみちてゐる。したがつてこの本は三・一運動に参加した一人の人間が、運動の中で何を感じ、その後どの様に生き、かつ思想的変遷をたどつたかを知るには、真に尊い資料ではあるが、その本で当時の情勢のすべてを判断するのは危険だと思ふ。

その他の本も読んだが、大体總督府保安課の調査に依拠してゐる。以上の諸点から、この節を書くのに、保安課の調査を選んだ。

註3

歴史学研究 十一巻 一号 「教祖崔濟愚に於ける東洋思想の歴史的展開」 石井寿夫著

註4

「朝鮮騒擾地巡回日誌」傍点は引用者。



### 第三節 三。一運動の経過及び実体

三。一運動に対する、すべての準備は、二月二十七日に完了した。独立宣言書に署名した三十三名の中、京城に在る二十四、五名は、二月二十八日、教主孫秉熙宅に集合し、三月一日午後二時を期して、鍾路バコダ公園に於て、独立宣言書を発表する。事を打合せ、学生側に対しては、二十八日中に普通成専門学校生徒、康基徳を通して、専門学校に対しては各別に、中等学校は各校代表者を貞洞キリスト教礼拝堂に集めて、宣言書を書く。三月一日午後二時バコダ公園に於て、独立宣言を行う事を宣伝すると共に、各生徒に参加するよう呼びかける事を命じた。しかし三月一日の市内示威運動は、朝鮮人の総意を示す事に止め、勢に乗じて、粗暴の行動に出て日本官憲と衝突する事のない様に注意する事を忘れなかつた。

いよいよ三月一日の朝が来た。前日米の宣伝が意外な程、徹底し、青年学生の間は活気に溢れて、勢の赴くままにどの様な事態が発生するか予断を許さぬものがあつた。もともと日本官憲と衝突する事を避けようとしていた首脳部は、不安を感じ急に予定を変更し、朝鮮料理店明月館支店で独立宣言の祝杯を挙げる事に決定。宣言署名者中二十九名が集合、独立宣言書を発表し、一網打尽に逮捕されてしまつた。

しかし運動は民衆の中に燃え広がつて行つた。三月一日バコダ公園に於いて、独立宣言を発表するといふ宣伝は、すでに学生の間で徹底していたため、定刻の午後二時頃、約三、四千名の学生はバコダ公園にぞくぞくと集り、宣言文を朗読し、一斉に万

才を高唱し、隊伍を組んで鍾路を行進し、群衆はたちまちこれに加わり、その数はみるうちに数万に達し、徳壽宮・大漢門前・各国領事館などでは、盛んに万才を高唱し、氣勢を煽り、ある者は街頭に於いて独立の演説をぶつ等、熱狂の度を高めた。折しも三月三日の高宗皇帝の葬儀に参加するため京城に來ていた者は、数十万に達していた。それらの人々を呑み込んで京城は、忽ち混乱のるつぽと化した。その中を国民新聞・労働新聞・その他アジビラが乱れとび、人々は全く憑かれた様に熱狂し、全商店は悉く閉店してしまつた。その危機を孕み、緊迫した熱狂は刻一刻とつた。もはや警察の手には負えなくなり、一日にはすでに軍隊が出動した。その結果民衆は午後七時頃になり一応解散した。が、もはや運動は全国に広まつていつた。その経過を陸軍省は次の様に発表している。

「三月一日京城に於て勃発スルト共ニ地方ニ於テハ平安道平壤・鎮南浦・安州・平安北道義州・宣川・咸鏡南道元山ノ六箇所ニ勃発シ、次テ第二日ニ至リテ黄海道海州・遂安ノ兩地ニ起リ斯クテ以上ノ各道ノ各地ニ騷擾ヲ惹起シ日ヲ逐フテ、各道ニ蔓リ斯クテ三月下旬ニ至リ遂ニ十三道ニビ漫シ、同時期ヨリ四月上旬ニ亘リ各所ニ統發スルノミナラズ、一般ノ人心著シク險惡ニ化シ、警備機關ノ欠乏ニ乗シ、交通便否ニ依リ逐次僻陋ノ地ニ波及シ、其手段ニ於テモ、コン棒・鎌・鋏或ハ竹ヤリ又ハ稀ニ拳銃等ノ兇器ヲ使用シテ、軍隊警務官憲ニ抵抗スルノミナラス官公署又ハ学校ヲ襲ヒ、放火又ハ破壊ヲナシ、内地人家尾ニ対シテモ同様ノ迫害ヲ加ヘ、或ハ巡査補・憲兵補助員ノ居宅ヲ侵シ、其甚タシキニ至リテハ、警察官ヲ慘殺スル等極メ、暴徒至ラサル所ナカリシカ四月中旬ニ至リ、之ニ対スル官憲ノ処置ハ漸ク峻厲ヲ加フルト共ニ、概シテ四月中旬末以後ニ至リ、各道共ニ殆ント騷擾ノ跡ヲ断テリ、而シテ是等各地ニ於ケル騷擾者ハ当初多クハ耶穌教徒・天道教徒又ハ是等ニ

關係アル学生ヲ主トセシモ、逐日機敏且巧妙ナル煽動ハ、心ナキ一般人民ヲモ驅リテ騒擾ノ渦中ニ投セシムニ至レリ」と事件の概況を述べている。

しかしこの報告を書いた陸軍省——軍を送り直接弾圧に當っている——の立場を考えねばならない。それがいかにより一方的であり、自分達に有利に書かれたものであるかは、遠い歴史を顧るまでもなく、第二次大戦中に我々がどの様な状態に置かれたかを思い起こすだけで十分だ。三・一運動について、日本人民は全くのツンボ状態に置かれていた。<sup>註3</sup>外字新聞の猛烈な攻撃によつてはじめて我々に知られた水原に於ける驚くべき虐殺事件は、過般憲政会有志の首相訪問の際の会談に於ても政府自ら認むる所の事実なる事が明かになつた」という吉野作造の一文は、当時の日本人民の置かれた位置を的確に象徴している。

三・一運動の経過を看くのに、運動の、もう一つの側面である弾圧を見ることなしに、運動の全体を把握する事は出来ない。暴動と弾圧とは、因となり果となり絡まり合つて、三・一運動に死の様相を呈するのである。

三・一運動は、はじめから武装斗争を目的としたものではなかつた。独立宣言書の三十三人のグループは事前に<sup>註4</sup>組暴の行動に出て官憲と抗争するが如き事のない様十分注意を与えていた。三月一日に宣言書発表の予定の場所、パコダ公園から朝鮮料理店に急変したのも、民衆と官憲との衝突を避けるためだつた。しかし彼等の意図をはるかに乗り越え、運動はもはや民衆のものとなり、民衆の手によつて進められた。官憲の弾圧は正に火に注ぐ油となつた。事実弾圧の激しさに比例して運動は燃えさかり、三月下旬から四月上旬にかけてその最高頂に達する。しかし不思議な事に運動は絶頂に達したかと思つと、急激な終末をつげるのである。一体この不可思議にして急

激な結末は何を物語つてゐるのか。

「四月中旬ニ至リ之（三・一運動）ニ対スル官憲ノ処置、漸ク峻厲ヲ加」えて「四月中旬末以後各道共ニ殆ソド騒擾ノ跡ヲ断テリ」という簡単な叙述の裏には、どんな歴史がひそんでいるのか。

原敬日記をさぐると、三月よりはむしろ四月に朝鮮問題が頻繁に表れ、特に四月上旬は原敬の頭をたゞけぱ「朝鮮」と音がする位である。四月四日<sup>註5</sup>午後閣議を官邸に開き「朝鮮問題を論じ、軍隊を増派する事に決める。しかもその軍隊は<sup>註6</sup>掃蕩兵を留せしむるなど緩慢なる手段によらず、内地より別に送附するを要」し、その数は<sup>註7</sup>歩兵大隊、六大隊、補助憲兵（騎兵を流用）四百名」を派遣する事に決定した。その一大隊も<sup>註8</sup>通常の編成より多く「し又<sup>註9</sup>兵を出発せしむるも青森・教賀などと云ふが如く如々より派遣すべく又各地より上陸せしむべし」とまで心を配つて、日本人民をあざむき、世界の目をくらまして、軍隊を送り込んでゐる。

この軍隊の増派こそが「四月中旬ニ至リ之ニ対スル官憲ノ処置、漸ク峻厲ヲ加」える、書かれなかつた歴史の内容ではないだろうか。

<sup>註10</sup>では日本軍隊は一体どの様に素手の民衆に立ち向つたのか。「二十名ヲ殺傷シ、村落ノ大部分ヲ焼棄セリ」、「鎮撫ニ際シテ、特別ノ手段ヲ採ルノ已ムナキニ至リ」というのは一体どの様な事を指すのだろうか。

三・一運動では、朝鮮史の中にどうしても消す事の出来ない血の文字を刻み込んでしまつた。「京畿道提岩里の虐殺」、「京畿道杆川及花樹里の焼打」、「京城の十字架虐殺」などはその代表的なものである。しかしいかなる形容詞も事実以上の戦慄を伝える事は出来まい。もつともすざましかつた京畿道水原安城地方の状況を述べてみよう。

「三月中旬ヨリ下旬ニ亘リ、警察力ノ充実軍隊ノ出動ニ依リ、京城府内騒擾漸ク鎮定スルヤ、檢挙ニ洩レタル不逞ノ徒ハ警備ノ薄弱ナル郡部ノ擾乱ヲ企図シ、各地ニ擾乱ヲ起サシメ、其性質著シク險惡ナルニ至レリ。其概要左ノ如シ。

京畿道水原安城地方騒擾ノ状況

三月二十八日午後一時烏山金融組合ノ裏手ヨリ発火シ、内地人家屋二戸外九戸類焼シ、損害二万二千余円。憲兵歩兵ハ協力、首謀者十名ヲ逮捕シ一時解散セシメタルモ、再ヒ同地警察官駐在所（内地人巡查二、鮮人巡查補七）ニ迫リ、被逮捕者ノ解放ヲ迫リ、形勢益々不穩ナルヲ以テ強圧ヲ加フルノ事不利ナルヲ慮リ、鎮撫ノ方便上、一時解放シタリ、然ルニ暴民等ハ三度勢ニ乗ジ、凱歌ヲ奏シツツ駐在所、面事務所、郵便所及内地人家屋十一戸ニ投石シ、窓、障子、器具等ノ大破壊ヲ行ヒ、転シテ烏山駅ヲ襲ヘントシタルヲ以テ歩兵、警察官協力発砲シ、漸ク解散セシメタリ。同地居住内地人ハ上ノ如キ状況ニ遭遇シテ大ニ憤慨シ、終ニ武装的自衛団ヲ造リ、自衛ヲ講スルニ至レリ。

三月三十一日夜、陽城ニ於テハ暴民約二千名同地警察官駐在所（内地人巡查一、鮮人巡查補二）ヲ襲ヒ、放火全焼セシメ郵便所及面事務所ノ書類、器具及内地人二戸ノ器物全部ヲ焼却（此ノ如ク家具ヲ取出シ焼却セルハ、家ニ放火セルト隣家ナル鮮人家屋ニ類焼スルヲ顧慮シタルカ如シ）電柱三本ヲ倒シテ、横暴ヲ恣ニシ、駐在巡查ハ彈丸終ニ尽キ居住民ヲ保護シツツ、一時山上ニ退却スルノ止ムナキニ至レリ。尚群集ノ一隊ハ、新築ニ係ル元谷面事務所ニ放火シ全焼セシメタリ。

四月三日暴民約一千名長安・西汀両面事務所ヲ破壊シ、書類ヲ焼キ、暴民増加シ約二千名トナリ、花樹警察官駐在所（内地人巡查一、鮮人巡查補三）ヲ襲ヒ、川畑巡查発砲抗拒シタルモ彈尽キ、終ニ惨殺セラレタリ。同巡查ノ死体ニハ五十一箇所ノ創痕ヲ殘シ、耳鼻ヲ殺キ、陰具ヲ切断スル等惨酷ヲ極メ、更ニ駐在所ニ放火シ、兵器ヲ奪取シ引上ゲタリ。以上引用した報告書の一部だけでも、暴動の血なまぐさを十分に実証してくれるだろう。

三・一運動

しかし、ここで注目しなければならないのは、破壊された駐在所、焼かれた日本人家屋、殺された日本人警察官は大きく取り扱われている。しかし、「彈丸終ニ尽キ」て殺された日本人警察官が發砲したその彈の行方。即ち銃口の前にさらされた朝鮮人の事は書かれていない。朝鮮人の声は聞こえて来ない。唯一つ、わずかに「朝鮮騒擾地巡回日誌」によつて、その実情を知る事が出来る。しかしこれとても十分でないことは、その序に「鮮人との直接談話は言語不通のため實際不可能なるは、勿論にして、よし直接語を交る便宜あるとするも到底彼等の心底を窺ふ事は、頗る困難なるのみならず、鮮人にとりては冒險的の事にして、其のため後日一身上に如何なる面倒を惹起するか測らざるものあり」と書かれているが、朝鮮人にとつて日本人調査団と話をする事ですら、日本官憲の前には身を挺する事だつた。ある教会の朝鮮人小使の話が、その事を証言している。「病床ニ入レバ全身繃帶ヲ以テ被ハレ舌痛甚シキガ如シ、医師ノ言フ処ニヨレバ本人（小使）ハ肋骨ノ一部脱臼セリト言ヘリ、未ダ十分檢診ヲ施サザレバ判明セズ、本人並ニ本人ヲ病院ニ運レ来タリタル同人ノ娘ヨリ聞ク処ニヨレバ、我等一行ガ郭山停車場ヲ去ルト同時ニ、憲兵補助

員ガ彼等汝ニ何ヲ語リタルカト詰問シ、遂ニ靴ニテ蹴ラレタリ。当時朝鮮服ヲ纏ヘル一日本人憲兵ハ現場ニ来リ、補助員ヲ制止シナガラ同時ニ靴ヲ以テ、此ノ鮮人ヲ數回蹴飛シ、遂ニ憲兵隊ニ拘引シタリ。翌日ハフ様ニシテ漸ク停車場ニ来リ、当院ニ入院セリ」軍靴が人肉を蹴り上げる音が鈍く響いて来る様なこの事実が、又、三・一運動に於けるこの資料の貴重さを証明している。朝鮮人の真の声など日本人にはとどきようもなかった。朝鮮人が流した無念の涙や、ざくろの様にはびつくり裂けた傷口から吹き出た血汐は、時間の経過と共に深く歴史のよどみに沈潜してしまつてゐる。だからこの「巡回日誌」が日本人の手によつて書かれ、しかも言語不通で、その上日本官憲の妨害に逢つたという事実を差引いても、依然として三・一運動に表われた真の朝鮮人の表情と、その叫びをうつし得たものとして、もつとも貴重な資料たるの資格を失わない。

この「巡回日誌」を読み通す事は、日本人として痛いことだつた。しかしその痛みの奥底には未来に通ずる何かがある。――日本統治下に於いて日本人には決して通じなかつた、朝鮮人の積る思いが何であつたかを知る事は、單に過去の問題として重要なだけではあるまい。そう思つて二、三の例を引用する。

一 六月二日、乳児ヲ抱ケル鮮人婦人談。

「憲兵来リ此ノ婦人ヲ裸体ニナシ」貴様ノ夫へ、何処ニ行キシヤリト尋ネタルガ、一ヶ月前ヨリ何処ニ行キタルカ未ダ帰ラズト答タルニ、甚ダシク蹴ラレ、數週間立居ニ差支ユル程、負傷ヲナセリ」

六月八日、耶蘇高等女学校教授夫人談。同婦人ハ宣川耶蘇女学校卒業生ニシテ才凡ソ三十、二子アリ慰勉ナル婦人。

「同女ハ万才運動ニ加盟シ、既ニ朝鮮ハ独立シタルモノト思ヒ、歡喜ノ余リ万才ヲ称

エタ、其后同女ハ警察ニ拘引セラレ、警察署ニ於テハ種々ノ尋問ヲナシタルモ、固ク口ヲ閉ヂテ一語ヲモ発セザリシカバ、同女ノ襟ヲ両腕ヲモツテ抑へ、妊娠八ヶ月ナル同女ノ腹部ヲ靴ニテ強圧セリトイフ、此所ニ至リテ、同女ハ遂ニ語ル能ハズシテ号泣セリ」

大邱地方ニ於ケル鮮人名望家ノ談。

「鮮人ニ対スル慘酷ナル行為へ、到底筆紙ニ尽ス能ハズ、水原事件ノ如キハ、世人ノ既ニ悉知セル処ナレドモ、大邱ヨリ約十里ヲ隔リタル一部落ニ於テハ、一婦人が憲兵ノタメニ、銃先ヲ陰部ニ突キ刺サレテ惨殺セラレタリト言フガ如キハ、悲痛ニシテ悔辱ノ極ト言フベシ」

六月一日 平壤前市長未亡人会見。同女ハ平壤ニ於テハ有数ナル資産家ニシテ又高等ノ教養アル婦人ナルガ、本年十九才ノ一子アリ。嫌疑アリテ病中拘引セラレ、又自ラモ警察署ニ同行セラレ、只下着ヲ残スノミニテ、全部裸体トナリ、鞭ニテ甚シク打擲セラレ、他人男子等ト同室ニ監禁セラレタリト言フ。(如斯コトハ彼女ノ生涯中未ダ曾テアラザリシコトナリト)更ニ男女同室ナルヲ具申シタルニ、寒氣激シキニカカワラズ、露台ニ引出サレ、タメニ睡眠スル能ハザリシト言フ。同女ノ拘引セラレタルハ独立運動ニ其運動費トシテ金ヲ提出シタルトノコトナレドモ、彼女ハ遂ニ是等ヲ是認セザリキ。一子ハ獄中病ヲ得、命且タニ迫リシガ、乞テ保釈ヲ免ザレ、目下自宅ニテ療養中ナリト。

六月八日 婦人宣教会々長ト会见

「鉄山地方ニ於テ、日本兵ガ剣ヲモツテ婦人少年ノ頭骸骨ヲ打碎キタルヲ目撃セリ。又妊娠ノ腹部ニ剣ヲ突キ刺セルヲ目撃セリ。又騒擾後自宅ニテ祈禱会ヲ開キ、予メ官憲側ニ許可ヲ得居タルニ、一巡查室中ニ突入シ来リ、彼女ノ腹部ヲ激打シ」貴様ハ



何ヲナセルヤ、止メヨ」ト一言ノモトニ集会ヲ停止セリト言フ。」  
日本の銃剣の前には男と女、階級の下上、年令の老幼などはなかつた。朝鮮人ならばだれもが、その朝鮮人だという迷れがたい事実のために、死の恐怖にさらされた。ここにあるものは、もう独立のため、その鎮圧のためという目的が消失してしまつて向い合つた人間と人間との憎しみがむき出しになつて発散している様だ。  
弾圧の手は、単に人血を吸いつくしただけでなく、その家を焼き払い、祈りの中心である教会堂も焼き払つてしまつた。  
―六月三日 定州ニテ

我ラ一行ハ定州教会堂焼失ノ光景ヲ目撃シタリ。焼跡ヲ見レバ只黒変セル柱石ノ屹シタ残レルアルノミ。一宣教師ニ聞ク所ニ拠レバ、教会堂ノ火災ノ三日前ニ、憲兵隊ヨリ各戸ニ通告シテ、夜ハ七時ニ門戸ヲ閉ジ、往来ニハ必ズ水ヲ充滿セル桶ヲ備ヘ置ク可シトノ命ナリタリ。其后教会堂附近ニ兵士巡邏シ、一夜石油ヲ注ギテ教会堂ヲ焼却セントセシモ、失敗ニ終レリ。翌夜同ジク兵士ノ靴音烈シク、教会堂附近ニ響キ居タルヲ耳ニシ、翌朝ニ至リテ見レバ、教会堂ハ既ニ全ク烏有ニ帰シ居タリ」といふ。そしてついに村そのものを破壊に導いてしまつた。平壤を七里離れた磐石という小村は一社村端ニ教会堂アリ、内部窓硝子其他甚ダシク破壊セラレ、残ルハ残骸ノミ。本村ノ男子等ハ万才ヲ称ヘタリト言フ。其后兵士来リ、教会内部ヲ破壊シタルモノナリト言フ。同村ニ殆ト男子ノ影ヲ見ズ。農作ソノ他ノコトハ、全部婦人自ラ牛馬ヲ使用シテ耕作ニ従事スル」といふ。この村のがらんとした空しい様相は、恰も三・一運動の象徴でもあるかの様だ。

おそらくこの様な弾圧は総督府中枢の命令ではなかつたろう。しかし一度活動を開始した全権力機構は、中央の意図をはるかに越えて、怒り狂つてしまつた。この間の事情を一朝鮮人宣教師は、  
―現在ノ惨憺タル蛮行ハ多ク巡查、憲兵等ニ依リ行ハルモノニシテ、警察署ニ於ケル拷問等ハ到ル中央政府ノ中枢ニハ知ル機会ヲ与ヘサル可ク、其他警察署ニテ行ハル拷問ノ殘忍ナル到底鮮人ノ忍ブ能ハサル所ナルベシ」と述べている。この証言を裏書きするように、政務総監山県伊三郎自身「今回ノ騒擾ニ對シ官憲ノ取レル過度ノ鎮圧方法ヲ憂ヒ、而モ自ラ之ヲ軍人諸官ニ命令スルノ權ヲ有セルコトヲ嘆ゼリ」と述べているこの言葉こそ、日本官憲の弾圧ぶりを十分に語りつくして尚余りある。

しかし、歴史に無駄な死はない。  
多くの人間は一片の記録も、爪跡さえ残さずに死んでしまつただらう。憎悪と苦痛の余りに思わず発した一言は、空しく天空に吸いとられ、血は大地の深みににじみ入りみじめな一生を閉ぢたろう。  
しかし歴史に無駄な死はない。  
すべての人間は――我々が生存している事実と同じ確実さと厳肅なるきびしさをもつて――後から来る者のために死んで行かねばならないのである。

註1 「朝鮮思想運動略史」 朝鮮總督府警務局保安課 敎秘 配布一八五号。

註2 「朝鮮騒擾經過概要」 大正八年九月 陸軍省印刷。

註3 中央公論 大正八年 七月号。

註4 「朝鮮思想運動略史」

註5 6789 「原敬日記」第八卷 首相時代。

註10 「朝鮮騒擾經過概要」

註12 阪谷文書 ガリ版ずりのもの



註13

阪谷文書、「朝鮮騒擾地巡回日誌」この資料には誰が、どの様な使命を帯びて調査したのか、何も書いていないが、会見している人を見ると、米人宣教師、一般朝鮮人、日本人、更には山県政務総監、警察署長、憲兵大隊にまで及んでいる事、更に内容から判断して、四、五人以上の人間が、組織的に調査を行っている事等から見ても日本政府が弾圧する一方何等かの施政の改革を暗黙のうちに考慮し、特殊の使命をもつて、調査に行つたのではないかと推論する。又その様に推論する事は、時期的にも一致する。五月二日付原教日記には、朝鮮総督府長谷川好道から進退何が差出され、一応は保留にした由だが、この時から何らかの制度改革の必要は、具体的なプログラムにのぼつて来たと見られる。

巡回日誌の踏査日程は、五月二十日より六月十一日まで。歴訪各地は釜山・大邱・京城・開城・平壤・磐石・砂川・宣川・定州・郭山の地に渡つてゐる。

註14 15 16 17 18 19 「朝鮮騒擾地巡回日誌」

### 第三章 三・一運動の分析

三・一運動の全参加人員を推定する事は、不可能に近い困難さを持つ。石母田正はその著「歴史と民族の発見」の中でおよそ二百万人位だろうという。山辺健太郎はその論文の中で、運動は波状的に約一年にわたり続いているので、延参加人員は二十万人に達したろうという。そして総督府は四月末迄に五十八万七千六百四十一人が参加したと発表している。お互いに確なる根拠も示していないし、又示し得ないのが実情だろう。あの猛り狂つた混乱の中で、一体どの程度までの行動を参加者と見るか、その

一事によつてすら、数字は和解しようもなく隔絶してしまう。

被告に於いてさえ、その有罪、無罪をきめるのに一既ニ独立セルモノトシテ万才ヲ称ヘタルモノハ之ヲ無罪トシテ釈放シ、独立ヲ企テントシテ万才ヲ叫ビシ者ハ之ヲ有罪トシテ処刑したといふあいまいさだ。

この歴史的事実の広大さの前にはたたされると、私はまるでぼーつとしてしまう。そして自分の非力に恥じ入りながら、にぶる分析の筆を進めねばなるまい。

#### 第一節 運動の性格

……起訴被告人を通して……

「海外に対し、如何にも重大視するの感を与ふべきに因り、可成秘密になすべし」という原教の配慮からか、三月十一日にすでに新聞紙等に対する報道制限を行つてゐる。が報道がなくなつた事が、運動の終結を意味するのでない事は、先にくり返し述べた通りである。現に檢舉者はひきつづき十二月まで上つてゐる。

以上の事情を考え合わせれば、全参加者の階級構成を分析する事は、事実上不可能とさえ思える。現在の私に出来る事は、今残されているものもつとも確実な資料——騒擾事件起訴被告人の統計——をもつて、その全貌を推定し、ある程度までの階級構成を分析してみよう。

4544

起訴された人々は、大体に於いて運動の中で、指導的ないしは積極的役割をはたした人々と見て良いと思う。その事を頭に置いて、前掲の統計表を分析してみよう。

第一に上げねばならないのは農民だ。しかしこの統計表から三・一運動に於ける農民の役割を単に量の問題から捕えるのは、軽卒にすぎるだろう。

土地調査事業はその本質に於いて、封建的土地所有の上からの再編成であり、地主制の確立にあつたといわれる。その事が農民にどの様な変化を与えたのかを、経済的な

| 道 | 天  | 公  | 自  | 無  | 不  | 總   |
|---|----|----|----|----|----|-----|
| 伝 | ノ  | 計  | 計  | 職  | 詳  | 計   |
| 教 | 講  | 務  | 業  | 業  |    |     |
| 師 | 堂  |    |    |    |    |     |
|   | 役  |    |    |    |    |     |
|   | 員  |    |    |    |    |     |
|   | ソ  |    |    |    |    |     |
| 五 | 一〇 | 一五 | 六四 | 六六 | 二七 | 二〇五 |
| 四 | 四  | 二  | 九  | 八  | 八  | 三三  |
| 一 | 五  | 六  | 三  | 一  | 六  | 七〇  |
| 二 | 六  | 一  | 九  | 二  | 一  | 四一  |
| 七 | 三〇 | 一六 | 三九 | 二五 | 二  | 八四  |
| 七 | 七  | 一三 | 四六 | 五八 | 五  | 八三  |
|   | 二  | 一  | 一  | 一  | 二  | 八   |
|   | 一  | 六  | 七  | 三  | 一  | 二   |
|   | 一  | 五  | 六  | 五  | 五  | 四七  |
| 五 | 四  | 七  | 三  | 二  | 九  | 六四  |
|   | 一  | 五  | 六  | 一  | 五  | 四七  |
| 五 | 五  | 二  | 三  | 二  | 九  | 六一  |
|   | 七  | 四  | 二  | 一  | 四  | 一〇  |

| 教 | キ | ス | 教 | 僧 | 計 | 在 | 在 | 在 | 計 | 交 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 区 | リ | ト | 牧 | 侶 |   | 普 | 中 | 高 |   | 通 |
| 長 | 其 | 伝 | 師 |   |   | 通 | 等 | 等 |   | 業 |
|   | 他 | 教 |   |   |   | 学 | 学 | 学 |   |   |
|   | 老 | 師 |   |   |   | 生 | 生 | 生 |   |   |
|   | 役 |   |   |   |   | 校 | 校 | 校 |   |   |
|   | 助 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   | 員 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   | 事 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 三 | 二 | 一 | 一 | 二 | 二 | 五 | 一 | 三 | 九 | 七 |
|   |   |   |   |   |   | 三 | 二 | 九 | 二 | 二 |
| 二 | 四 | 一 | 二 |   |   | 三 | 一 | 一 | 九 |   |
| 七 | 一 | 一 | 二 |   |   | 一 | 四 | 三 | 一 | 一 |
| 四 | 三 | 八 | 四 |   |   | 九 | 六 | 二 | 一 | 二 |
|   | 八 | 七 | 四 |   |   | 三 | 一 | 一 | 五 | 一 |
|   |   |   |   |   |   | 五 | 二 | 六 | 七 | 一 |
| 一 | 二 | 四 |   |   |   | 一 | 一 | 二 | 四 | 三 |
| 一 | 一 | 五 | 五 |   |   | 二 | 二 | 二 | 六 | 一 |
| 七 | 一 | 三 | 四 |   |   | 三 | 五 | 一 | 九 | 一 |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

点はもとより、小作慣習までも含めて具体的に検討されねばならない。そして三・一の翌年、翌々年にピークに達する農民運動それ自体を縦に通して追究し、その上ではじめて、三・一に於けるその要求も役割も浮び上つて来るだろう。

しかし単にこの統計表のみによつても、次の事は確実に云えると思う。農民が起訴被告人の五四%を占めている。だが朝鮮の全人口中農民が八五%近く占めている事実から見ると、むしろ当然の様に思えるかも知れない。ここで考えられねばならないのは農民の性格だ。多くの農民が指導層としてでなく大衆層としてこの運動に参加したであろう事に留意するなら、被告人の中に農民が五四%も入っている事は驚異すべきだろう。この事から察すると全参加者中農民の占める割合は、非常に大きなものだったと思われる。三・一運動の主体は農民だったと断言出来る。

第二に商人のねばり強い抵抗だ。当時警務総長であつた児島氏は「大正八年三月独立騒擾の勃発するや、京城鮮人は總督政治に対する不信任を表する意味をもつて其の九日を期して全戸閉店の舉に出た。此の報が時の官憲に伝はると「閉店すれば商売が出来ないので、自分等が損をするだけではないか」などと云ふて最初の内はその儘打捨て置いたが、閉店は五日たつても、十日たつても容易に開店をしない。そして不穩の情報がいしきりに来る。銀行では取付騒ぎが持ち上ると云ふので、実業家側からは苦情を持込んで来る。私もそれではと云ふので自転車を買つて、京城市中を巡視して見ると、成る程到る処の路上にも軒先きにも白衣の鮮人が三々五々佇立ソソクとして喋々囁々し、地方から出て来た鮮人は車も荷も路上に抛出した儘議論し合つてると云ふ有様で、噂以上に陰鬱の空気が街頭を圧し、革命的気分が此の間から、オン顔されつつあるのを見取して、最早や一時も捨て置けないと云ふので、直ちに之が対策を講じた。併し事は元来消極的の行動であるから訓諭も威圧も役立たない。はては軍兵が

出動して開店させるが、その姿が見えなくなると又店を閉ずると云ふ有様で、何とも手のつけ様がなく、全く平常の通り開店されたのは、四月の中旬であつた。」といふこの言葉の中には、起訴の対象にはなり得ないが、全く手をやくばかりにねばり強い斗いの模様が十分にうかがえる。そして彼等をこんな斗いの中に追い込んだ原因——日本の商品流入と資本輸出がどの様に彼等を追いつめたか——を究明せねばならぬ事を改めて反省させられる。

第三は学生だ。当時の朝鮮の全人口の中で、学生は大海の一滴にも等しかつただろう。その学生が全被告人中一〇%も占めているという事実は、起訴されなかつた学生を併せて考えると、学生という学生が、殆んどこの運動に参加したのではないかと思われる。日本の様に曲りなりにも資本主義社会をもち、近代化をなしとげ、その中で学生が自我の問題を追求して行く様なことは、朝鮮の学生には許されなかつた。中国のインテリもそうであつた様に、朝鮮でも又自己を意識しはじめた事は同時に自国の置かれた歴史的位を認識しはじめる事であつた。自国の運命と切り離して自己を考へる事が出来ない状況に、彼等学生は置かれていた。若い世代の抵抗力は、単に若き情熱や正義感のみにあつたのではない。自分が昂然と胸をはつて、未来を見つめて生きようとする事は、祖国独立への思いにつながらざるを得なかつた歴史的状況を理解すべきだろう。

第四にあれ程騒がれながら、宗教関係者が意外に少なかつた事も、注目し得る。先にくり返し述べた如く、三・一運動が決して単なる宗教運動でなかつたことを、ここでも証明している。だが運動の最初のきっかけを作つたこと、更に運動が電光石火の如く全国にひろまつた事には宗教の組織があずかつて力あつた事は、高く評価されねばならないだろう。



以上の諸点から、三・一運動は学生、インテリを指導者とし、農民を運動の主体とし、そのまわりに労働者、商人などあらゆる層を結集した、民族独立運動であつたと思ふ。

註1  
註2

「朝鮮騒擾地巡回日誌」五月三十一日 憲法法院検事長談。  
騒擾事件報告、臨時報第二二で、朝鮮總督府から出たものである。備考には「本表ハ騒擾発生以來十年四月三十日迄ニ各裁判所検事ニ於テ、受理処分シタル人國ヲ掲載シタルモノニシテ、五月八日迄ニ本府に到達シタル報告書ニ基キ、調製シタルモノトス」とあり、その配布先は、次の如く明記されている。  
總督・政務總監・各部長・秘書課長・首席参事官・外事課長・阿武官・臨時新聞係・臨時報告係・警務總監・通信局長官・道長官・道警務部長・高等覆審ノ地方各法院ノ長及其ノ検事局長・朝鮮軍司令官・朝鮮軍参謀長・内閣總理大臣・内閣書記官長・拓殖局長官・外務大臣・陸軍大臣・海軍大臣・内務大臣・参謀總長・警視總監・憲兵司令官・警保局長。

## 第二節 運動を支えた思想

朝鮮全人民は、一体何を求めてこの運動に参加したのか？ それは独立だ。しかし彼等の云う独立とはいかなるものであり、その独立を求める事が、彼等の生活にどの様に根ざしていたのかを、この節でみてみよう。

独立宣言書

われらはここにわが朝鮮の独立と、朝鮮人民の自由たることを宣言する。これをもつて世界万国に告げ、人類平等の大義を明らかにし、且つこれを子孫におしえ、民族

独立を天賦の権利として、永遠に保持させるものである。われらの背後にある五千年の歴史の権威によつて、これを宣言し、二千万民衆の忠誠を合してこれを宣明し、恒久に変わることなき民族の自由な発展のためにこれを主張し、人類良心の発露にもとずく世界改造の一大機運に順応し、これとともにすすまんがために、これをなすものである。これ即ち、天の明命、時代の大勢、全人類の共同共存、同生の権利が、正当に発動したものであつて、天下なにもと云えども、これを阻止することは出来ない。旧時代の遺物たる侵略主義・強權主義の犠牲となつて、有史以來幾千年、はじめて異民族による抑圧の苦痛をなめて以來、ここに十年の才月がすぎた。わが生存權の剝奪・思想の自由な発展にたいする障礙・民族の尊榮を毀損したること、新鋭と独創をもつて世界文化の大潮流に寄与すべき機縁を失つたことなど、およそ幾莫か知れない。

あゝ旧來の抑圧より脱し、現下の舌痛よりのがれ、將來の脅威をのぞき、民族の良心と國家的廉義の圧縮銷滅せるを回復伸張し、各人人格の正當なる発達をとげしめ、可憐なる子弟にたいし、屈辱の遺産を残すことを欲せず、子々孫々、永久完全なる幸福をむかえとらんとするならば、その最大急務は、民族の独立を確実ならしむることである。二千万の各個各人が方寸の刃を懐にし、人間性と時代の良心とが、正義の軍と人海の千才とをもつて援護する今日、吾人が進んで取るに何の障礙もない。退いて事をなすに、吾人の志は必ず達成出来る。丙子修好条規以來、時に応じ、種々なる金石盟約を踏みにじりたることをもつて、日本の不信を罰せんとするものではない。日本の学者は講壇において、日本の政治家は實際において、わが祖宗の世業を植民地視し、わが文化民族を蛮民視し、もつぱら征服者の快を貪るのであつた。わが久遠の社会と卓越せる民族心理とを無視するものとして、日本の不義を責めんとするものでは

ない。自己を策励するに急なる吾人は、他を怨むいとまはない。現在の問題に多忙なる吾人は過去をとがめる暇がない。今日われわれの専念するところは、ただ自己の建  
設のみである。他を破壊することではけつしてない。敵意なる良心の命令によつて、  
自家の新運命を開拓せんとするものである。旧怨及び一時の感情によつて、他をシッ  
遂排斥するものではない。旧思想、旧勢力による日本政府の功名的犠牲である。不自  
然にしてまた不合理なる、あやまれる状態を改善匡正し、自然にして、合理的なる正  
経の大原に復帰せんとするものである。当初から民族的要求に由来しなかつた両国併  
合の結果が、畢竟、姑息なる威圧、差別的な平等、および統計数字の虚飾のもとに、  
利害相反する両民族間に永遠に和合することの出来ない怨みの溝を、ますます深から  
しむる今日までの実績を見よ。勇氣、明断、果敢、もつて旧来のあやまりを正し、真  
正なる理解と同情とにもとづく友好の新局面を開闢することが、彼我の間に禍を遠ざけ、  
祝福をもたらす捷徑であることを明察すべきである。また、含憤蓄怨の二千万人民を  
威力をもつて拘束することは、東洋永遠の平和を保証する所以でない。のみならず、  
これによつて、東洋安危の主軸たる四億万中国人民の、日本に対する危懼と猜疑とを、  
ますます濃厚ならしめ、その結果として、東洋全局の共倒と同一の非運とをまねくこ  
とは明白である。今日吾人の朝鮮独立は、朝鮮人をして正当なる生活の繁栄を追求せ  
しむると同時に、日本をしてその邪道から脱出せしめ、東洋の支持者たる重責を全う  
させ、中国が夢寢にも忘れ得ない不安・恐怖からこれを脱出せしめ、東洋平和の、ま  
たその重要な一部をなす世界の平和・人類の幸福に必要な段階たらしめんとする  
ものである。区々たる感情の問題ではない。  
あゝ新しい天地は眼前に展開せられた。威力の時代は去つて道義の時代は来た。過  
去全世紀にわたり鏖磨長養されきたつた人道の精神は、まさに新しい文明の曙光を人

類の歴史に投じはじめた。新しい春は世界にめぐり来り、万物の蘇生を催進しつつあ  
る。凍氷・寒雪に呼吸をとざされたのが、かの一時の勢なりとすれば、和風暖陽に氣  
脈をふるう、これも一時の勢である。天地の復運に際会し、世界の變汐に乗じたる吾  
人は、何等の躊躇なく、何等の忌憚もない。わが固有の自由權を護全し、生旺の樂を  
享受すべく、わが自足の独創力を發揮して、春満てる大界に民族の精華を結集すべき  
である。  
われらはここに奮起した。良心はわれらとともにあり、真理はわれらとともにす  
む。男女老若、陰鬱なる古巢よりおどりで、万民群衆とともに、欣快なる復活をと  
げんとするものである。千百の世祖は、かげながらわれらをたすけ、全世界の氣運は  
われらをまもつてゐる。着手は即ち成功である。唯前方の光明にむかつてバク進する  
のみ。

## 公約三章

一 今日われわれの行うこの事情は、正義・人道・生命尊嚴のための民族的要求、即  
ち自由の精神を發揮するものであつて、決して排他的感情に逸走してはならない。  
二 最後の一人まで、最後の一刻まで、民族の正当なる意志を欣然として發表せよ。  
三 いつさいの行動は、もつとも秩序を尊重し、吾人の主張と態度とを、あくまで公  
明正大にせよ。

朝鮮建国四二五二年三月一日

## 朝鮮民族代表

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 孫秉熙 | 吉善宙 | 李弼桂 | 白竜城 | 全完圭 | 金秉祚 | 金昌俊 | 權東鎮 | 權東惠 |
| 羅竜煥 | 羅仁協 | 梁旬伯 | 梁漢默 | 劉如大 | 李甲成 | 李明竜 | 李昇燕 | 李鍾燕 |
| 李鍾一 | 林礼煥 | 朴準承 | 朴熙道 | 朴東完 | 申洪植 | 申錫九 | 吳世昌 | 吳華英 |



鄭春洙 崔聖模 崔 麟 韓龍雲 洪秉箕 洪基兆  
この宣言書を評価するには、二つの側面から分析することが必要だろう。――それはこの宣言書が与えた運動全体への影響。そして一つは、この宣言書自身のもつ内容の分析だ。

まずこの宣言書が運動そのものに与えた影響を見よう。

總督府の調書には「騒擾を弥が上にも拡大せしめたものは、不穩文書が預つて力あり。」と述べている如く、冒頭の「ここにわが朝鮮の独立と朝鮮人民の自由たることを宣言する」という格調高いこの一言の中には、全朝鮮人民の心をゆり動かす響がある。新しい時代を画する旗手としての力強い宣言がある。朝鮮の革命家、金山はその当時のことを回想してこういつている。「先生はぼろぼろになつた一枚の宣言書をポケットから取り出してそれを見ながら話した。しかしそれまでもいつも語られていた美しい言葉をすべて先生は暗記していたのだ。――あの多くの希望がもてた頃の朝鮮の智識人の中で、これを暗記しなかつた人がいたろうか？ われわれ学生もまた暗記していたのだ」この言葉の中には宣言書をうえた様にむさぼり読んだ、当時の智識人の姿を、ほうふつと浮かべているではないか。いたる処の大集会、大示威運動で、この宣言文が読み上げられた。運動の初期に於いて宣言書は決定的な影響を与えた。この宣言書をきつかけに数知れぬ宣言文が朝鮮全土に乱れとんだ。そのきつかけをなした点も大きく評価されてよいだろう。

更に宣言書の内容をくわしく検討するならば次の諸点を評価する事が出来よう。

まず注目すべきは、その中にももられている平和への熱烈な願いという事だ。彼等は朝鮮の民族独立を世界平和の重要な要素だと考えている。資本主義国家間の戦争が、いづも植民地、従属国をめぐつて起こる事を思い合わせるなら、その分析の鋭さをはつ

きり理解する事が出来よう。更に同じ民族代表者三十三人の名に於いて總督府に提出された国権返還請願書は、一層綿密な世界状況の分析をしている。「日本ノ将来ハ大陸ヨリモ寧ろ太平洋方面ニ在ルニモ拘ラズ、眼前ニ怒ヲ懷ク二千万ノ異族ヲ有シ。背後ニ憎ヲ懷ミタル四億万ノ危隣ヲ控フルハ日本ノ自衛上、此レヨリ大ナル不安ナシ」と遠く第二次大戦の結果をまで予見している様な確かな分析を下している。この指摘にあつて私ははつと虚をつかれた。たつたこれだけの事実を忘れてしまつたために、或いは気づきながらもそれと真剣に取り組まなかつたために、どんなに大きな犠牲を払わなければならなかつたことか？ 朝鮮人がずばりとこの事実を指摘し得たことは、単に個々の人間の分析の鋭さではなく、彼等の置かれた歴史的立場から、真に歴史を動かすものが何であるかを突感しつゝある所から生まれた分析ではないだろうか。

次に總督府政治に対する冷静な批判と、それに支えられた高い道義性だ。この宣言書の中には、報復的な言辭は一言もない。「日本の不信を罰せんとするものではない」「日本の不義を責めんとするものではない」「現在の問題に多忙なる吾人は過去を」とがめる暇がない。唯ひたすらに独立を求めている。彼等は運動の方法に於いてまでもその理想を貫ぬこうとした。公約三章の中にはつきりそれが表われている。彼等は平和と秩序の中で独立が得られると思つたし、又実際にそう行動した。しかし皮肉な事に、その事が運動を敗退に導く内的原因ともなつた。

この宣言書が異例なまでに理想主義的であつたことは、他の宣言書と比べてみると一層明確になるだろう。大韓独立宣言書は、まづこうから日本の不義を責めている。「日本ノ合邦動機ハ彼ノ所謂汎日主義ヲ亞州ニ施行スルモノニシテ、東洋平和ノ敵ナリ」、「彼ガ合邦ノ手段ハ詐欺強迫、不法無道、武力暴行ノ極ニシテ、此國際法規ノ惡魔ナリ」、「宗教ヲ強迫シ、教育ヲ制限シテ世界文化ヲ阻障シタリシヲ以テ、此人

類ノ賊ナリ」ときめつけている。独立を達成する方法も、単に平和的な手段ではなく「逆天ノ魔盗国ノ賊ヲ一手屠決セヨ」、「肉弾血戦ヲ以テ独立ヲ完成スベキナリ」とその決死の意気を示している。

自称民族代表者の宣言書は、その理論的な高さ、その道義性に於いて、朝鮮独立思想の最高峰を示しているだろう。が大韓独立宣言書は運動に参加した人民の卒直な感情と、運動そのものの形相とを生々しく伝えてくれる。この二つの大きな相異は、宣言書が書かれた時期にも原因がある。前者は運動を起こすために書いたものであり、後者は日付がはつきりしていないが、運動が勃発してから、或いは運動の真つただ中で、同胞が血に染んで倒れるを見ながら書いたのだろう。とすればこの相異は当然のことと云えるかも知れない。

がしかしそれを単に時期の問題だけで、かたづけしてしまふことは出来ない。この二つの宣言書に表われた独立内容の相異、独立を獲得する手段の相異が、そのまま運動を崩壊に導いた内的原因であるのだ。

運動に着手した三十三人の人達は、独立の獲得を比較的容易に考えていた様だ。宣言書の冒頭に「ここにわれらの独立民たることを宣言する」ともはや独立が達成されてしまつた様に書き出している。これは単なる表現上の問題ではない。この一言こそ彼等の運動そのものを表徴しているのだ。もし彼等の望む独立が達成したとしたら、一体誰が権力を握り、どの様な政府を作るといふのだろうか。その様な基本的問題は、一顧だにかえりみられていない。「独立」という一点の感情にのみ集中して、結果した人々の、その独立への期待も、その独立を達成する方法もばらばらであつた事が、三・一運動を敗退へ導いたものであつた。

美濃部朝鮮銀行頭取から阪谷男爵へあてた手紙に、「不逞鮮人等ノ中、自ラ左ノ各

団体アリ。

一、天道教一派、孫秉熙ヲ首領トス。

二、在米留學生等ヲ中心トシ、米國ノ後援ヲ頼マントスル一派、李承晩ヲ首領トス。

三、西比利亞方面ニアリテ過激思想ニ感化セラレタル者、李東輝ヲ首領トス。

四、單純ニ李朝ノ復ヘキヲ希図スルモノ、金允植、李容植ヲ首領トス。

五、自治ヲ希図スルモノ、高義駿ヲ首領トス。

六、内地在留ノ學生團。」

があつたと分析している。たしかにこれだけの、或いはこれ以上の流れがあつたにちがいない。これらの人々が統一綱領を持つていなかったのだ。どうして運動が内部から崩れないでいられよう。

要するに、思想、信条を異にしたあらゆる人々が独立という一点に結ばれて立ち上つたのが、三・一運動だつた。そして彼等全朝鮮人民は、この苛烈な歴史的試練の中で、いかに抵抗し、何を感じ取つたかによつて、次の時代を作り上げて行つた。

註ノ この宣言書の訳は様々ある。私の手許にも、朝鮮総督府保安課の訳、陸軍省の訳があるが、私は朴慶植氏の訳を使った。

註2 「朝鮮思想運動略史」厳秘、朝鮮総督府警務局保安課 配布一八五号 「朝鮮総督府ニ出シタル国権返還請願書」

註3 大正八年五月八日 新聞係訳 「秘密出版」大韓独立宣言書（在間島末松警視ヨリ送付セルモノ）

#### 第四章 運動を経た朝鮮史の流れ

三・一運動の終結は、新たな朝鮮史の出発でもあった。一度目醒めてしまった心をもはや元にもどす事は出来ない。一度流されてしまった血の文字を墨で消す事は出来ない。

朝鮮人民は自ら斗った三・一運動の原因を何であると考えたのか？そしてどの様な統治を日本に望んだのか。それに対し日本側は何を三・一の原因と考え、どの様な改革を朝鮮に試みようとしたのか？これらの動向を経て斎藤寅次郎が朝鮮総督に就任するのである。この統治の変化を一般には武断政治から文治政治への変化という。では一体文治政治の本質とはいかなるものだったのか？以上の事を、即ち私の云う所の三・一運動の二期、を第一節で追究したい。

そして三・一運動を斗いぬいて、斎藤寅次郎の就任を迎えた朝鮮人民はその政策にどの様な反応を示したのか？このきびしい歴史の試練の中で、朝鮮史から何が消え、何が新しく生まれつつあるかを第二節でみてみたい。

#### 第一節 三・一運動に対する態度

……日本側と朝鮮側……

三・一運動が一段落ついた頃から、日本政府当局者間でも「今回の騒擾は総督側の

失敗なり」との声がささやかれはじめ、長谷川好道総督に対する非難の声が漸く顕著になって来た。五月二日付、原敬日記には「午後閣議を官邸に開らく、朝鮮総督長谷川好道より、今回の事件に付進退伺を差出したるに因（四月二十六日付同二十九日到着）余より關係に其事を披露し、相談の結果進退伺を差出したる事は奏上し置き、一兩日後平定せば、上京すると云ふに付、其折に本人に書面は還附し、而して朝鮮制度の改正は總督の進退と切りはなして処置する事となせり。」と書かれていた。四月二十三日頃から暴動化した運動が影をひそめると、長谷川好道は速に、自分の責任を日本政府に問うたのだ。それに対し日本政府は「制度の改正と總督の進退とを切りはなす」処置をとろうとしたのはなぜか？その事について原敬日記は更に筆をついで、「対議会の關係もあれば、如何に今日は朝鮮の制度の動搖をなす時機にあらずとするも、直ちに其機に及ばずとて却下する訳には行かず、又總督に其責任ある事は無論の事なれば、右様に処置をとる事となせり。」と述べている。この事件に攻撃のホコ先を向けて、政府を窮地に落とし入れようとする野党と世論の前に、かくも微妙な態度を取らざるを得なかつた。しかしいかに原敬がその抜群の頭腦を駆使して巧妙な態度を取ろうと、長谷川好道総督の進退は、もはや時間の問題になつていた。そして總督の進退と共に、朝鮮統治に対する何らかの改革の必要は何人の目にも明らかになつて来ていた。

#### 三・一運動

丁度その頃期を一にして、運動そのものの性格が變つて来た。陸軍省は「四月二十三日以後騒擾ハ殆んどソノ跡ヲ絶テリ」と発表している。無論これは運動の終結を意味するものでは断じてないが、軍隊を必要とする様な内乱の様相を呈した暴動はなくなつて来た。

朝鮮人は赤手で銃口の前にたちはだかる無力な体をもつて感じ取つた。そして彼等

歴史ノ觀念トシテ朝鮮民族自ラ治メントスル思想極メテ鞏固ナリ。故ニ日本人ヲシテ朝鮮ノ政治ヲ行ハシムルニ於テハ、朝鮮人ハ是ニ悦服スル見込<sup>ハ</sup>ないのだ。したがつて日本の同化政策は、「朝鮮民族ハ自ラ特殊ナル歴史、文化、言語、風俗及習慣ヲ有スルヲ以テ、此等ヲ全然無視シテ此ヲ異ニスル日本民族ニ同化セシムルコトハ、到底不可能ニシテ、徒ニ朝鮮民族ノ発達ヲ妨ゲラルル」結果を生ずるばかりだ。だから日本が真に「日本及朝鮮両民族ガ相融和結合シテ世界的経営ニ當リ、朝鮮民族ヲ最善ノ方法ヲモツテ速ニ向上発達」せしめよとするなら、その大方針を具体化するために、次の様に總督政治を改革して欲しい。

第一、朝鮮ハ朝鮮人ヲシテ治メシムル方針ヲ取ルコトヲ中外ニ宣布シ、以テ民心ノ趨向スル所ヲ一定ナラシムルコト。

第二、最短期限内ニ朝鮮議會ヲ設置スルコトトシ、直ニ其準備ニ着手スルコト。現在ノ事情ニ於テ止ムヲ得ズンバ、議員選出ノ方式ニ就テハ、多少不完全ナル点アルニシテモ、其設置ノ期ハ最モ迅速ナラザルベカラズ。

第三、日本人朝鮮總督ノ監督ノ下ニ朝鮮政府ヲ設置スルコトトシ、直ニ其準備ニ着手スルコト。

第四、言論・出版・集会・結社ノ自由ヲ認め、之ニ抵触スル朝鮮ニ於テ施行セラルル特別法令ハ直ニ廃止スルコト。

第五、教育ノ制度ヲ擴張スルコト、普通教育ヲ普及スルタメ義務教育制度ヲ施行スルヲ、第一ノ急務トシ、且高等教育ノ機關ヲ完備スルコトヲ要ス。

以上五項目を要求している。これは運動の初期總督府に提出した國權返還請願書に盛られている。むしろ觀念的な要求に較べ、ずつと具体化し、現実化して来ている。と同時にそれは、「独立」から一步後退をも含んでいる。彼等は日本人總督を認め、

の中に、「独立を」よりは「改革を」を進めようとする動きがめばえて来た。二千万の朝鮮人民の血で書かれた請願書を日本政府につきつけて来た。

朝鮮有志七氏の日本に対する請願書は、その頃の朝鮮人の動きをもつともよく表わしているもので、それを基に分析してみよう。

彼等朝鮮人は日本統治をこう考えていた。

日本は口では「一視同仁」を叫びながら、「日本内地人ヲ朝鮮ニ移植シ、朝鮮ヲシテ朝鮮人ノ朝鮮タラシメズ、日本ノ朝鮮タラシメンコト」それが日本統治の根本なのではないか？ 土地も、工業も、商業もそして役所の端役すらも日本人に奪われて、日本人のみが生き栄えるのではないか！ その亡国の危機感が彼等を運動に起ち上らせ

たのだ！ 亡国の憂に沈む朝鮮人の前に總督政治は、次の様に映じたのだ。

第一、朝鮮人ヲシテ一切朝鮮統治ニ参与セシメザルコト。朝鮮人ト雖モ等シク日本国民タル以上ハ、少クとも自身直接利害關係ヲ有スル朝鮮ノ統治ニハ参与セシメザルベカラズ。然ルニ朝鮮ニ於テハ朝鮮人ヲシテ政治参与セシメザルハ、勿論政務執行ノ衝ニ当ル官吏ニ至ルマデモ、其ノ重要ナル地位ハ殆ンド全部日本人ガ之ヲ占メテ居ル。

第二、朝鮮人ニ對シ其ノ生存ヲ維持スルニ必要ナル教育ヲナサザリシコト。

第三、朝鮮ニ移植セラルル日本人ハ逐年増加シ朝鮮人ハ漸次他ニ驅逐セラレザルヲ得ザルニ至リタルコト。

等の事実を列挙し「現在朝鮮ニ移植セラレタル日本人ハ、其ノ數朝鮮人ノ百分ノ二ニ過ギザルモ、政治上絶対ノ勢力ヲ有スルノミナラズ、其ノ富力、智力ニ於テモ朝鮮人ニ比シ一般ニ優越」していた。この様な現情は、氣力ある朝鮮人の怒りの的だつた。朝鮮人はこの様な現実に服従する事は、絶対に出来なかつた。なぜなら「朝鮮民族ハ四千年間ノ歴史上他ノ民族ヲシテ政治ヲ行ハシメタル事例無カリシニ依リ、



その下で朝鮮人の、朝鮮人による、朝鮮人のための政府の出現を願っている。例えそれが、完全独立から一歩後退したとは云え、この改革要求は總督政治の基礎をえぐるものだった。「日本人総督ノ監督ノ下ニ」という名をたてて、政治の実権を自己の手に入れ、いかにもウィルソン旋風に洗われたインテリらしいブルジョア民主主義的色彩の濃い政治の実現を熱望している。しかしこの事は彼等インテリ指導者の弱点をそのまま暴露している。植民地解放の決定的条件である土地問題については、考えてみようとさえしなかった。この中にすでに彼等の敗北のワナは秘められていた。

これに対し日本側が運動の原因として分析したもののは、まるで異質のものだった。日本当局者は一体何を原因として考えていたのか？朝鮮<sup>註5</sup>騒擾地踏査梗概報告の中で、その原因を次の様に分析している。

一、併合の利益が相互的な事を充分に了解し、若しくは鮮人をして、其の意を徹底せしむること能わず、徒に功を急ぎたるため歴史・言語・習慣等を疎略するが如き感を与へ、十数年間に其の成果を期待せし結果、武断的政治の援助をはからざるを得ざるが如き感を一般に与へたる事。

二、日常鮮人を直接交渉する下級官の人選、其当を得ざる事。

三、鮮人留学生に対する内地人の不注意。

四、朝鮮人に対する差別的待遇。

五、朝鮮民族性に対する深き研究なき所より生ずる誤解。

六、言論、集会の拘束、不平不満を訴ふべき機關の欠如たる事。

七、併合のため一時鎮圧されんとせし、対日歴史的反感が近代思想に依りて、新たに意識されたる事。

八、国家思想の発生、主として不平不満より出立して歴史の探究に入り、近代思想に

接触する所よりして誘起されたるもの。

以上を三・一運動の原因として上げている。それらの分析は總督政治の根本に肉迫するようなものではない。朝鮮人の分析とは明らかに質の違う部分的、末梢的なものだ。当然の事ながら日本は朝鮮に於ける總督統治を貫徹し、その上に立つて革改しようとした。この線にそつて朝鮮史の舞台に登場するのが斎藤寅次郎。その人であつた。

三・一運動がやつと表面的に平穩になつたばかりの複雑な情勢の中で、日本朝野の論議の的、世界列国の注視の脚光を浴びて「大正八年八月十九日、今上陛下優詔を降して、日韓併合の本旨に基き、一視同仁各其の所得、其の生に勝んじ、休明の沢を享けしめんとせらるるの聖旨を宣布し給ひ、翌二十日朝鮮總督府官制改正せられた。この改正中の最主要なる項は、朝鮮總督は従来現役武官に限られてあつたのが、今回は文武官の何れよりも任用し得る途の啓かれた点で、是非の群議を突破し、幸ひに決定を見るに至つたのである。此に於て武官にして文質に富めること当代第一流、温容春風を生み、慈腸仏心に即せる、我が斎藤男爵は新に大命を拜して朝鮮總督の印綬を帯びたのである。」

しかしこの斎藤總督を真つ先に迎えたのは、轟然たる大爆音だった。斎藤<sup>註7</sup>總督は水野政務總監と共に南大門駅頭に第一歩を踏んだ。時は大正八年九月二日午後五時。總督を乗せた馬車が動き出した時、一朝鮮人の手によつて、爆弾が投下されたのだ。幸い斎藤總督の体は何事もなかった。しかしこの一事件は、これからの總督政治の困難さと、当時の朝鮮の輿情を端的に象徴していたものではあるまいか！その時警備に當つた千葉了氏は「<sup>註8</sup>独立騒擾も約半歳に渉る当局の必死の鎮撫に依り、殆んど靜平に帰したけれども、靜平に帰し難きは民心である」と嘆じているが、正しくどんなに激烈な斗争よりも、更に日本に取つて恐るべきは、その斗いが朝鮮人の心に、思想に残し



ていつたものであつた。そしてそれこそが次の新たな朝鮮の歴史を作り上げて行くものだ。

爆弾の歡迎に出会つた斎藤總督は、真先に何をしようとしたのか？ 彼が着任後、谷男爵に於てた手紙には「此ノ際極力治安ノ維持ヲ計リ、民心ノ鎮靜ニ努メ、然ル後漸次内政ノ充實改善ニ歩武ヲ進メントス」と述べている。つまり彼は何よりも先に警察力を充實して朝鮮の治安をはかり、一面に於て内政を改善して行こうというのだ。真先に爆弾に見舞われた斎藤總督が、真先に警察力の充實をはかろうとする皮肉さは笑う事の出来ない現実のきびしさを物語っている。

この現実の中で斎藤總督は一体どの様な政策を打ち出して行つたのか？ 阪谷男爵への手紙の中から更にその方針をさぐつてみよう。

一、警察力ノ充實。官制改正ノ結果警察ハ憲兵ト交替ノ過渡期ニアリ。從來ノ憲兵ニ對シテ取締リ上多キヲ望ム能ハサル事情アルノミナラズ、新制度ニ依ル警察官ノ補充及訓練亦實ニ予想外ニ在リ。故ニ此ノ際極力警察力ノ充實ヲ期図シ、從來ノ一萬五千人ニ對シ、臨時ニ巡査約五千人ヲ増員セントスルノ計画ヲ立テタリ。其ノ計画ノ基本ハ各面一駐在所ヲ設置シ、之ニ日人巡査三名ヲ勤務セシメムトスルニ在リ。蓋シ憲兵制度ノ實施ニ徴スルモノ駐在所憲兵一人ナルトキハ、四面皆敵ノ間ニアリ、不安危険ノ念ニ驅ラレ機敏ノ行動ヲ為シ難カリシモ三名ニ増加スルニ及ビ、勇氣頓ニ増加シア

ルヲ以テナリ。  
一、海外ニ在ル鮮人ヲ取締ルハ、騒擾及不安ノ根源ヲ絶ツ所以ニシテ朝鮮統治上最モ緊要ナルヲ感ズ。就中上海ニ在ル者ハ仮政府ヲ組織シ、其ノ運動甚危険ナルヲ以テ、先ツ之カ根拠ヲ掃蕩スルノ必要ナルヲ認メ、目下種々計画中ニ在リ。  
一、親日鮮人ノ優遇。

現在ノ如ク獨立思想盛ニ流言ヒ語ノ横行スル際ニ於テ親日ヲ主張スルハ、危險ノ身ニ及ブモノアルヲ以テ余程ノ勇氣ヲ有スルカ如シ。サレバ此ノ際親日者ヲ優遇スルハ、實ニ本人ヲシテ悦服セシムルノミナラズ其他ノ鮮人ノ態度ヲ決定セシムル上ニ於テ頗ル利便アリト信ス。故ニ從來日本ニ好感ヲ有シテ來タ好過ノ恩典ニ浴セザル者及騒擾以來特ニ我國ノタメニ努力セル者ニ對シテハ官位利禄ヲ以テ大ニ優遇ノ實ヲ示スノ必要アリ。

一、官吏ヲシテ朝鮮語ニ練達セシムルコト。

朝鮮ニ在ル日本官吏ハ朝鮮語ニ通ゼズ故ニ我カ意志ヲ彼ニ通スル能ヘズ。又彼ノ語ル所ヲ解スル能ハズ。平時ニ於テ頗ル不便ヲ感ズルノミナラズ、一朝有事ノ際ニ及ベバ全ク事情ヲ明ニスル能ハズ。從テ官吏殊ニ警察官ニ對シ朝鮮語ノ練習ヲ奨励シ、之ニ對シテ相當ノ手当ヲ支給シテ急速ニ之カ普及ヲ計ルノ要アリ。

一、施政方針ノ具体化

從來ノ施設ニシテ民怨ノ中心トナリタルモノヲ改善スルノ要アリ。即チ内鮮人ノ待遇給与ヲ可成同一ニスルコトハ一視同仁ノ趣旨ヲ實現スル上ニ於テ最モ必要ナリト思惟スルカ故ニ俸給制度改善ヲ施シ、官吏ノ昇叙等ニモ考慮ヲ加フルト共ニ從來ノ旧慣ト背馳セル墓地取締規則、屠場規則、民籍制度ノ如キモ此ノ際速ニ改正センコトヲ期シ目下起草審議中ニ在リ。(略)

一、地方宣傳ノ方法ヲ講ズルコト

各道ノ鮮人中有為ノ人物ヲ總督府ニ召集シテ新施政ノ方針ノ大綱及世界ニ於ケル日本ノ地位等ヲ指示シ、各地方人民ニ其ノ趣旨ヲ傳達セシムルコト。

2 今上陛下ノ大詔、總督ノ訓示及告諭ヲ朝鮮ノ時文ニ翻訳シ、數百万枚ヲ印刷シ之ヲ配布スルコト。

3 總督府ニ地方巡察官ヲ置キ地方巡視セシメ、上意ノ下達、下情ノ上達並ニ民情ノ視察ヲナサシメ新政ノ徹底ヲ謀ルコト。

斎藤總督は以上の政策をすぐに実行に移して行つた。九月十日彼は諭告をもつて、全朝鮮民衆に呼びかけている。まず何よりも統治方針が一視同仁の大義にある事を強調し、「民衆ノ福利ヲ増進シ、東洋ノ平和ヲ確保スルタメ」に努力することを誓い、不幸にして今回の事件の原因となつた「官制ノ改革」、「警察制度ノ改革」をはかり「朝鮮ノ文化及旧慣ニシテ苟モ採ルベキモノアレバ之ヲ採リ」自分に降された大命を全うする意志を「朝鮮總督・男爵斎藤實」の名において發表した。ここに世にいう文治統治最初の宣言がなされたのだ。だがしかし「不逞ノ言動ヲ爲シ、人心ヲ惑乱シ、公安ヲ阻害スルカ如キ者アランカ、將ニ法ニ照シテ寸毫モ仮借スル所ナカラムトス、一般民衆其レ之ヲ諒セヨ」と一本釘を打つことは忘れなかつた。いかに文治とは云え、いやしくも總督が不逞と考える言動は、<sup>註10</sup>一切行つてはならない。とはつきり一線を画した。しかしこの様な美しいお題目は「總督以下顯官ヲ斃サントシ、或ハ總督府ヲ焼カントシ、或ハ外人ト氣脈ヲ通ジ、鮮人殺傷凌辱等ノ事実ヲ誇張シ、言論写真ヲ以テ歐米ニ宣伝シ彼ラノ排日感情ヲ喚起セントシ、或ハ騒擾罪ニ依リテ刑罰ニ触レタルモノヲ志士トシテ尊榮シ、其ノ獄中ニ死亡スル者ノ葬儀ニ参列スルモノヲ以テ數フル」様な現実の中で一体どれほどの説得力を持つことが出来るだろうか？總督自身もこの諭告は單に「抽象的方針ヲ掲記シタルニ止マル」ことを承認し何よりもその方針を具体化する事に全力を注いだ。この様に日本側の必死の統治は運動に決定的なくさびを打ち込んだ。全朝鮮人民は日本の政策に反応する事によつてしか、自己の歴史を形成する事が出来なかつた。—— 例え日本の政策に同化されようと、或は決然と抵抗しようとする。

註1 大正八年八月一日、朝鮮有志七氏持参。高元勲外六名が日本政府に提出した意見書。

註2 3 4 前掲朝鮮有志の意見書。

註5 「朝鮮騒擾地踏査概報」大正八年六月。「……略……騒擾に対する意見の相違の甚しきこと各人各様なり。在留内地人の多くは鮮人の短所・弱点を指摘し、宣教師は鮮人の美点・長所を賞揚して弱点を看過するの傾あり。鮮人の云ふ所を察するに我等従来の措置に於て大いに覺醒すべきものあると同時に、彼等は其の實際に受け居る損害よりも以上の悪感を抱くに至れるものなしとせず、今此等の意見を比較綜合して騒擾の原因を探究した結果」本文の引用した八項目をその原因として上げている。

註6 「朝鮮独立運動秘話」千葉了著 四頁。

註7 斎藤總督の不詳事の現場を目撃した、秘書課長守屋栄夫氏が、後日「朝鮮公論」に「思ひ出づるまゝを」にその様子をくわしく描いている。

註8 「朝鮮独立運動秘話」 十三頁。

註9 阪谷男爵はこの手紙を、大正八年九月十九日に受け取つた。

註10 斎藤總督から阪谷男爵への手紙。

## 第二節 その後の流れ

### 一 民族主義者の行方

三・一運動 二千万朝鮮人の心をゆすぶつた三・一運動は、一朝に消えることはなかつた。五月頃から運動そのものの質がはつきり變つて来た。朝鮮人民はもはや赤手で銃口の前に立ち向うのではなく、排日を目的とする同盟休校。又日本人商人に対する不買同盟を

結んで取引を停止する様な運動を行った。この様に一般民衆が地味な抵抗運動の中に入つて行つたのに対し、一部の民族主義指導者は、事ある毎に再び運動を起こそうと身構えていた。そのピークとなつたのが、大正八年十月、巴里に於いて開かれた国際連盟會議であつた。この會議で必ず朝鮮問題が提議されるだろうという予想の下に運動が燃え上つた。

一部民族主義者は民衆を煽動し、秘密結社を組織し、<sup>註</sup>軍資金を集めて、来るべき運動のために用意した。彼等はこの国際連盟會議に際し、<sup>註</sup>日本帝国の統治下にある事を欲せず独立を希望し居れることを海外に表示し、各種国際會議の注意を喚起し、米国の援助を得て「独立を達しよう」と、最後の望みをかけた。しかし国際會議に於いては、朝鮮問題については提議すらなかつた。

かくして、國際的にも朝鮮独立が見放なされた事が明らかになつて来た。その頃「独立を」から「改革を」願ひはじめたその必死の改革も、朝鮮人の期待したものとはまるで質が違つていたものである事が明らかになつた。前節で述べた様に、はじめからこの改革に対する日本側と朝鮮側の意見は決定的にく<sup>註</sup>ちがつていた。その違ひがこの頃から明白に朝鮮人の前にさらけ出された。それは新朝鮮<sup>註</sup>の新聞記者と原首相の会見の中に如実に示されている。

問 「日本政府は朝鮮民衆の独立運動に就て終局どうする積りですか？」

答 「朝鮮人の独立運動をしてゐる事は知つてゐるが、強いて独立しないでも宜しいではないか……日本と一所になつて……日本も五大強国に入つてゐるしするから、朝鮮人も矢張り日本国民として世界に闊歩する事が出来るではないか？」

問 「朝鮮民衆の独立運動はけつして彼の内閣弾劾のやうな一部の運動ではなく

朝鮮全民衆のそれでありす。それでも日本政府は朝鮮独立を承認する事は出来ないのですか？」

答 「独立、独立といふが独立といふものは、そんなに宜しいものではない。独立国の政治といふものは非常に困難なものである。朝鮮が独立するよりも、日本の政治下に於て日本人と同じ権利や、義務をもつて平和に幸福に生活した方が宜しいではないか？」

問 「日韓併合はその理由に於て、朝鮮民衆の幸福のためだ。東洋平和のためだと力説してあつたと記憶します。然し少くとも今日に於ては日韓併合は決して朝鮮民衆の幸福ではない。又東洋全体の平和でもない。何を幸福といひ、何を平和といふのかは知らないが、兎角日韓併合の理由はもはや既に消滅して了つたのではありませんか。私は切に日本政府の熟考を望みます。」

答 「ナニ今に宜くなります。もう警察の設備も充分であるしするから決して永く騒げるものぢやありませんヨ」

問 「伝える所に依れば朝鮮はまだ独立国たる實力がないからもう少し實力が充実せねば、朝鮮独立を承認する訳にはいかぬと云われますが……朝鮮がもし完全に独立を維持し得る状態になつた時には、日本政府は直ちに朝鮮独立を承認しますか？」

答 「なし」

原首相はたくみに逃れて民衆大会の要求も、各道から代表を選出して、そこで今後の日本の態度をきめたらどうかと云う提案も軽くけつてしまつた。原首相のこのたかをくくつた、不得要領の答えを朝鮮人記者は「不得要領な答弁が出来なければ、政治界たる資格がないと云ふ。果して然らばこの原首相は正に及第ではないか。否既に定

## 二 社会主義運動の抬頭

歴史の表面で民族主義者が断末魔の叫びを上げている頃、もつと地味な、しかし人心をとらえてはなさない運動が、しずかに誕生していた。――それは社会主義運動の抬

昇ある大政治家であるとか」と皮肉つてゐるが、その中には、日本側と朝鮮側との望む改革の決定的な次元の相異が示されているのではないか？ その「不得要領」こそ次元の違つた両者が、わずかにふれあう唯一の接点であつた。

外国の援助も期待出来なくなり、朝鮮の独立も日本が自ら承認する意志が完全にな

い事が明らかにになり、そして改革の限界もはつきり見極められた。

この度重なる失敗に直面して、民心は民族主義者から離れつつあつた。人民の支持を失いつつあつた民族主義者は、絶望的なテロ運動に走つて狂暴な姿を呈して来た。  
 註3 大正九年七月米國議員団が東洋各地を視察するため、觀光団を組織して米鮮すべし、との報一度伝はるや、内外独立運動者は議員団一行に對して直接朝鮮が日本の統治を喜ばず、独立熱の旺盛なる実情を目撃せしめて一行の認識を深からしむべく絶好の機会なりとして、議員団の米鮮を機会に独立請願書を提出し、一面各地に反日暴動を起さんと計画した。<sup>註4</sup>「その時秘密裡に流されたアジビラには「冒險隊ニテハ爆弾ヲ持テ總督府ヲ破壊スルコトニ決定セリ、準備中ナルニヨリ此ノ機ヲ失スルナカレ、奮斗前進シテ敵ヲ掃滅セムコトヲ」同志達にゲキをとばしている。この様なテロは民衆の支持を失つたが故に、ますますあせり狂暴化して行く民族主義者の末路をはつきり示しているのではあるまいか？ しかしこれらの計画は事前に粉碎されて、事なく過ぎてしまつた。この頃から斎藤總督が力こぶを入れた警察力が、その偉力を存分に發揮しはじめた。「警務行政の施措が著しくさえた腕で行はれて居る処は誰れ人も認むる所であるやうだ。探偵政治で有名な寺内伯よりも、文化政治を標榜している斎藤男の方が、朝鮮の治安を維持する上に於て最も鮮やかな腕を有している」と評されたその腕を發揮しはじめた。しかしこの運動が事なく終つたのは、単に警察の偉力のみではなかつた。その当時の日本の世界的地位がこの一事件の上にも、はつきりと表わ

れてゐる事を見落してはならない。当時の日本はまぎれもなく世界列強の一員だつた。その情勢が微妙に反映して、米國議員団は日本の誤解を極端に恐れ、一切朝鮮人側との接触を自ら断つた。

この様に民族主義者と、この運動に多少の期待をもつていた一般民衆の希望は、修めに粉碎されてしまつた。その後も散発的にこの種の運動はあつたが、それは単に最後のあがきに過ぎなかつた。民族主義者は自己を燃焼しつつして、歴史の主流から消え去つていつたのである。

註1 「朝鮮思想運動略史」 二十八頁。

註2 新朝鮮、朝鮮独立と日本政府――首相会見の顛末報告――に載掲されたもの。

日本政府は何故に朝鮮独立を承認しないか、私はその充分なる説明を聴くべく去る十一月十五日午後三時（大正八年）、首相官邸に於て原首相と会見し、概要左の如き問答をなした。として本文に引用した問答がのつていた。

註3 「朝鮮思想運動略史」

註4 阪谷文書。



頭であつた。

社会主義運動には二つの流れがあつた。その一つは「三・一運動においては一般的に革命運動の基本的手段となる大衆武装がなかつた。十万近い正規の陸海軍と二十余万の憲警をもつ日本帝国主義に對して、赤手空拳の示威と万才呼唱だけでは敵対出来なかつた。」と三・一運動の教訓をつかみ出し、国外に本拠を置いて武力運動を継続しようとするものだ。他の一つは、<sup>註2</sup>朝鮮人の實力を認識して先づ實力養成の急を自覚し、教育産業の普及發達と政治的訓練に力を注ぎ、以て朝鮮の獨立を永遠の將來に期せん」とする国内に於ける運動である。指導者は三・一運動の失敗から、何よりも統一組織の必要と団体訓練の必要をつかみとつた。大正九年頃から急激に勃興して来た教育或いは産業団体の組織とその内容が当時の傾向を裏書きしている。

主なものを拾つてみると、朝鮮教育協會（大正九年六月）朝鮮女子教育協會（大正九年三月）朝鮮物産奨励會、土產愛用婦人會を中心として異名同種の教育団体・産業団体が続出し、私設学校・夜學講習所は兩後のタケノコの如くに新設された。これらの団体はいづれも「朝鮮人のために」という標語の下で活潑な運動を展開した。教育方面に於ては、常に總督府の教育方針に對抗して民族を基調とする教育政策を叫び、産業方面に於ては、まず自國の産業を養うという目的の下に、鮮産品の使用を強調して日本製品の排斥、日本商人との取引の回避という手段に出た。

この様に「往年ノ如キ露骨急進ナル獨立運動」は影をひそめた。しかし第一次大戦後の經濟恐慌が新たな社会問題をひき起こし、社会主義思想に影響されずにはいゝなかつた。<sup>註3</sup>有識者ノ失業、就職難逐年増加シ、此等ノ徒ハ現代ノ政治ヲ呪ヒ經濟組織ヲ批難シ、加フルニ露國革命ノ後ヲ承ケタル赤化宣傳計圖ノ乘ズルアリテ、所謂左傾者、左傾団体ノ増加トナリ此等ノ徒ハ社会主義又ハ共產主義的思想ノ宣伝ニ或ハ自由労働

者ノ結束ニ或ハ小作人ノ團結ニ又ハ青少年團ノ連絡ニ暗中画策蠢動シ、常ニ無産階級ノ一致團結ヲ圖リテ、階級斗争ヲ強調シツツ、現在ノ団体又ハ私有財産制度ノ变革ノを目指す汐流が、民族運動失敗後の思想的空白の分野に滲透してくる。一例を労働団

体にとつて考察してみよう。  
朝鮮最初の労働団体は、朴重華の主唱により、労働者相互の救済と地位の向上を圖ることを目的として朝鮮労働研究會が結成された。これは後に労働共濟會と改称される。この労働研究會とはほぼ同じ頃金光濟が労働大会の名の下に別の労働団体を組織した。これらの団体はいずれも労働者の智識啓發・地位の向上・相互救済を目的として組織された。この中には顯著な階級的色彩はないが、労働者の地位を確保しようとする事から、進んで有利な労働条件を獲得しようとする主張に交つて来る。これらの団体は労働者の心をつかみ、各々數百名の會員を擁していた。以上簡単な紹介でもわかる様に、これら労働団体には、社会主義思想を受け入れる基礎が築かれていた。總督府保安課が適切にも指摘した様に「共產主義運動の進展に伴つて最も重要な役割をなした点に於て、これら団体の存立が意義づけられた」。

この労働団体にみられる様な傾向は、他の団体——青年団体・学生団体等——に於いても共通の傾向をたどつて社会主義に急速に傾いて行つた。即ち何よりもまず団体が作られ、その個々の団体を統合し、その中で漸次社会主義思想が指導權をにぎつて行つたのである。この傾向に一層拍車をかけたのが、東京留學生からの働きかけである。東京留學生は堺利彦・高津正道の影響の下に「苦學生同友會」を作り、被圧迫民族の團結を高唱し、更に「現在の資本主義制度を否認して平等なる社会を実現しよう」とする共通点で結ばれていた。その留學生達が中心になつて大正十二年八月日本人共產主義者布施辰治・北原竜雄等を招いて朝鮮各地を巡回講演して、大いに青年・學生を



啓蒙した。更に「大正十二年九月以後十二月ノ間ニ於テ露領ヨリ共產黨員屢々京城ニ潜入シ、主義宣伝ニ努メタル結果新奇ヲ好ム青年、学生間ノ思想界ニ一転機ヲ画シテ民族運動ハ、マタタク間ニ地ヲ弘ヒ、共產主義運動ハ澎湃トシテ全朝鮮ノ思想界ヲ風靡スルノ概アリ」と共產主義滲透の模様を警察の秘密文書は伝えている。この様な情勢が一九二五年の朝鮮共產党の誕生を促したのである。

註ノ 「朝鮮民族解放斗争史」

註2 朝鮮總督府保安課の調査。

註3 大正十五年六月、高等警察ニ聞スル状況。

註4 (秘) 知事閣下ヘノ報告 「治安概況」 京畿道警察部。

### 三 国外に於ける運動

国内に於ける運動が下火になつて来ると、国外に於ける運動が急速に日本為政者の頭に大きくクローズアップされて来る。斎藤總督は就任と同時に、国外に於ける独立運動について「上海ニ於テハ仮政府ナルモノヲ組織シ、閣員以下ノ行政府ヲ樹テ資金ヲ募集シ、満州・西伯利亚地方ノ鮮人ト互ニ連絡ヲ取り兵器ヲ携ヘテ、相策応シテ国境ヨリ侵入セントスルノ情報頻々タリ」と述べている。

しかし国外に於ける運動は決して国内の運動が失敗してから起こつたという様な根の浅いものではなかつた。その運動は長い抵抗の歴史を持つてゐる。三・一運動の企画すらが、国外と関連をもつて行なわれた事は、既に述べた通りである。

国外の独立運動は国内に於ける三・一運動を契機として統一の方向に向つた。

三月の下旬に日本から李光洙、朝鮮から崔謹愚・玄福・李鳳洙等が上海に集り、これらの人々と呂運亨を中心にした大韓青年党とが一緒になつて臨時政府組織の運動をはじめたのである。期を一にして各地から続々と指導者達が上海に集つて来て、その数は千名にも達したという。大正八年四月十日に第一回臨時議政院會議を開いて、国号を大韓民国と称する事をきめ、大統領李承晩・國務總理李東輝・を中心とする仮政府の陣容をとのえると同時に、次の様な大韓民国臨時憲法を作つた。

一 大韓民国ハ北米合衆国ニ倣ヒ、民主政治ヲ採用ス。

二 大韓民国ノ人民ハ男女ノ別、社会上ノ地位或ハ財産ニヨリ區別ヲ設クルコトナク、平等タルベシ。

三 大韓民国ノ人民ハ信教・言論・集会・結社ノ自由ヲ享有スベシ。

四 大韓民国ノ人民ハ公民タル以上凡テ選舉權及官吏タルノ權ヲ有ス。

五 大韓民国ハ世界ノ平和ト文明ヲ期スル國際連盟ニ加盟スベシ。

六 大韓民国ハ之ニ依テ民國ノ建設サレタル國民的理想ノ神意ニ一致スルコトヲ表明ス。

七 議政院會議及臨時政府ハ版圖ガ完全ニ回復サレタル迄ハ議會ヲ代行スベシ。

大韓民国元年四月一日

### 三・一運動

この憲法は端的に運動初期のアメリカへの期待とブルジョア民主主義的要求を示していると同時に、朝鮮のインテリの要求を表わしている。即ち一鮮人ハ由來國家ニ貢獻セントスルニハ先ツ官吏タルニ如ズト信ゼリ。外国ヨリ帰來セル青年等ハ先ツ官吏タラント欲スルト雖、現政府ノ政策ハ鮮人一般ニ対シテ官吏タル能ハズトノ印象ヲ深カラシメタリ」というインテリ青年の充たされざる欲求を「官吏タルノ權ヲ有ス

る」の一言の中に表現した彼らの面目躍如たるものがある。

がしかしこの仮政府の中で見落してならないのは、シベリア方面からやつて来た李東輝一派の動きである。一九一九年三月コミンテルンの創設に伴つて各地にその支部が組織された。イルタックにはコミンテルンの一支部として東洋秘書部と称する機関を設け、極東方面に於ける共産主義運動の中核とした。李東輝は早くから東洋社会党を作つてその方向に沿つた活動をしていた。しかし彼を共産主義者と断ずるにはまだ余りに雑多な思想をもつていた。保安課の調査にも「彼は当時西伯利亚各地を転々として共産主義運動に奔走すると同時に民族運動にも関係をもつていた」と述べている。その彼に代表されるシベリア方面から来た人々をも含めて、大韓民国は成立した。大韓民国は誕生の中に分裂の萌芽を含んでいた。

臨時政府が組織されるとついで、李東輝・金立・李漢永等は別個に共産主義グループを組織し、民族・共産併立の陣容をたてようとした。大正八年コミンテルン委員ウキジンスキーはオルグとして使命を帯びて上海に来、呂運亨と面接して同人の入党を勧説、呂は承諾し李東輝等のグループに入り、これを機会に高麗共産党と改称、大韓民国仮政府の關係者を多数入党させた。中央委員兼責任者李東輝・委員金立・呂運亨を中心とする組織を固め、正式に国際共産主義運動の一環として承認された。この様な内部に於ける共産主義の成長は、単にコミンテルンの指導の下とのみ断ずるのは余りに早計だ。なぜならこの仮政府の動きは国内に於ける三・一運動と微妙な関連をもつていたからである。仮政府はアメリカの援助に対する期待が統一の一つの基礎になつていた。したがつて国内の運動に於てアメリカへの期待が一つ一つ破れて行く度に仮政府は分裂の傾向を強めていつた事を見逃してはならない。更に国内に於ける運動が挫折した後、アメリカに対する幻想が完全に打ち破られ、日本の統治に甘んずる事

の出来ない人々が続々と亡命して来た。そしてついに仮政府は分裂し、国外に於ける民族、共産両運動ははつきり対立するに至つた。

註ノ 斎藤総督から阪谷男爵への手紙、阪谷男爵は大正八年九月十九日に受け取つた。

註23 「朝鮮民族運動年鑑」在上海日本総領事、警察部第二課

註4 「朝鮮騷擾地巡回日誌」 大正八年五月二十八日、尹致昊の見解。

## 結 論

三・一運動は中国の五・四運動と並びアジアに於て最も輝かしい民族独立運動であつた。と同時にそれは朝鮮史に於いても一時代を画するものであつた。即ち一八七六年近代に於いて日本との最初の交渉をもつてからの度重なる、そしてあらゆる型態の侵略に対する全人民の唯一つの解答であつた。しかもこの運動はそれ以前の抵抗運動のすべてを網羅する形で斗われた朝鮮史上最大のものであつた。朝鮮人民は三・一運動を斗うことによつて、直接現代につながる歴史を作り出していつた。――現在の南北の分裂さえ遠因をここに求めねばなるまい。

当時の朝鮮民族は近代民族としての完全な性格をもたず、外来帝国主義の力によつて頭だけは近代社会の陰影の下にありながら、頭から下は半封建的な首かせにはめられて暗闇の中におかれていた。こういう民族に近代民族ブルジョアジーの成長があるうはずがなく、半封建的地主階級が雇農と数百万の貧民の上にすわり、教育その他によつて国際情勢の投影を浴びながら、自己の民族的自覚を感じはじめていたにすぎなか

った。

労働者も階級としての力は全く微弱であり、時代の新知識としてもつとも尖鋭的と目された学生達さえも、その量質に於いて世界全体の水準からみれば、はるかにたちおくれていた。即ち当時の朝鮮に於ける歴史的現実の中には、ブルジョア民主主義革命の歴史的使命を担当して、これを遂行するだけの能力をもつ階級が成長していなかったのである。

それは三・一運動が勃発してからあれだけ勇敢に斗った朝鮮全人民のスローガンは「日本人は手をひけ」、「朝鮮独立政府を樹立せよ」そして唯「独立万才」の絶叫という、きわめて抽象的・激情的なもので、植民地解放の決定的条件である土地解放に関するスローガンが顕在化していない条件の中にあつた。また「自由と平等」の様なブルジョア民主主義運動に不可決のスローガンもあるにはあつたが、それは国際思潮の影響を頭で受けただけのものであつて「自由」、「平等」を支える具体的政策は皆無であつた事実。これらはやはり朝鮮社会の後進性に原因があつたのである。この様に三・一運動はこれの指導を担当する階級と組織をもたなかつた事の中に、すでに運動が敗退する内的原因をはらんでいた。

三・一運動は極めて未熟な条件の下で斗われたにもかかわらず、全民族を挙げて、しかも赤手空拳で日本の強大な武力の前で、三カ月以上も斗い得たという事実は、単に日本の政權を武断政治から文治政治に変えさせたという表面的成果をはるかにしのいで、その後の歴史を決定する諸契機を作り上げて行つた。

朝鮮人民は国内の変革と結びつかない独立のための独立運動が、いかにみじめな敗北を喫するか、又指導する組織をもたない革命運動がいかに無意味であるかを体で学び取つた。その教訓の中から、運動後は様々な組織が続出し、それが国内を変革しよ

うとする目的と結びついて、朝鮮共産党を生む力へと発展して行つた。更に日本の支配を欲しない人々は国外に逃れ、そのねばり強い抵抗運動を斗いつづけたのである。この論文の中には追究さるべくして追究されていない問題が余りにも多く残されている。

私はこの論文を出発点として、更に将来追究すべき問題点として次の諸点を上げた

- (1) 三・一運動の底流として内側から運動を支えていた経済的要求、とり分け土地調査事業との関連が有機的に把握されていない。この問題の把握は多くの先学、学友の成果に支えられて、はじめてなし得るものであろう。
- (2) 三・一運動の階級構成の把握がなされていない。それは多くは史料の制約に原因がある。しかしこれも又(1)、と同様当時の朝鮮社会の階級構成が明確にされて後、即ち朝鮮近代史全般の研究を更に深めながら、解明されてゆかねばならないと思う。
- (3) ほゞ時を同じくして勃発した日本の米騒動、中国の五・四運動との関連、或いは比較研究などもなされねばならない。

その他海外朝鮮人の運動、天道教の思想的系譜なども追究されねばならないだろう。しかし私にとつて―考えながら歩こうと思う一日本人として、私がこれから追究したいものとも興味あるテーマは、日本人がこの三・一運動をどう受け取つたか？という事だ。大正期のインテリに、三・一運動はどのような影をなげかけ、彼らはそれの中の様に受け取つたか？大正期のインテリの残した知的所産―小説・評論・論文―現象の中から朝鮮という植民地をもつた日本が、そして日本人が植民地をもつたとい

う、その事実から受けた変質と限界とを、直接現代につながる問題として追究したい。

(完)

..... 飛 ・ 石 ・ 論 ・ 法 .....

私の感じたこと (一)

研究二カ年百回に亘る研究討論を通じて私が最も痛感したことは、若い世代が、古い權威に立ち向つて、新しい史觀をうち立てようと、真剣に考えていることである。

敗戦を画期として日本人の歴史觀は全く一変した。それが当初は、敗戦の衝撃による卑屈な転落意識そのものに支配されていたが、それが歳月を経るに従つて、強烈なる自己反省、自己批判を生み、かつての転落意識は、自己を見つめる真摯な時代のモラルと変わり、それが大きな一つの思潮となつて、今日の日本を規制しようとしている。

私は前掲の宮田嬢の三・一運動の論文を読んでそういうものを感じた。古い思考から新しい思考へ。そして新しいモラルを！。かりにこの論文が何かを見落しているとしても、その論底にあるものは、今日の日本の真実そのものであり、三・一運動の今後の研究に一つの道標をうち立てたものと思う。

..... 近 藤 鋳 一 .....

( 論 文 )

日本統治下の朝鮮における  
所謂「駅屯土」問題の実体

権

寧

旭

////////////////////////////////////

はじめに

日本統治下から解放された後、南北朝鮮においてそれぞれ行われ、農業発展の契機をなした「土地改革」は、本質的には全くその性格を異にするものであつた。しかし、いずれにせよ、その正確な理解は、日本統治下における朝鮮の農業構造を如何に規定し、説明するかという問題をふまえ、発展的に前記両者の「土地改革」が理解され、従つてまたその農業構造、経済構造が検討されなければならない筈である。

筆者は、右の観点から、「明治四十三年より大正七年に亘り八年有余の歳月を閲し二千四十余万円の経費を以て之を施行したるものにして土地に関する本体的事業として一般施政の根幹を為すもの<sup>(註1)</sup>たるかの土地調査事業を契機とする植民地朝鮮の農業構造について全面的分析の必要性を痛感したのである。そこで、その第一歩として日本統治者による植民地農政確立の横杆たる役割を果たした所謂「駅屯土」問題を取り上げ、特殊な角度から課題解決に一石を投ぜんと以下の分析を試みたのである。しかし、その試みも、現在における朝鮮近代経済史研究上の致命的な障害ともいふべき実体調査の欠如と、その殆んどを日本統治者側の史料

////////////////////////////////////

目次

|                  |     |
|------------------|-----|
| はじめに             | 83  |
| 一、帝室財産整理         | 85  |
| 二、駅屯土調査          | 92  |
| 三、駅屯土分筆調査        | 95  |
| 四、東洋拓殖株式会社と「駅屯土」 | 99  |
| おわりに             | 104 |

(筆者は早稲田大学文学部東洋史学科を経て  
同大学院 商学研究科博士コースに在学中。)



「朝鮮ニ於テハ古来宮中府中ノ區別ナラス。官府ノ財政相混淆シ、官僚ノ腐敗ト相俟ツテ常ニ秕政ノ因ヲ為セリ」<sup>(註1)</sup>といわれているように、李朝末期に至るまでの朝鮮においては宮中と府中との明確な區別がなかつたので、帝室財産と国有財産の區別は甚しく不明瞭なものとなつていた。<sup>(註2)</sup>

そこで、一八九四年の所謂甲午改革によつて親日政権が出来上ると、特にその独立宣言誓文中に、王室の事務と国政の事務とを分離することを記した。また宮内府官制を發布して、新たに内蔵司を置いて帝室の財産を掌管させ、次いでその管掌範圍の増大にともなつて内蔵司を内蔵院と改称した。しかし、それは「部分的の整理」<sup>(註3)</sup>にすぎず、また複雑な政治的抗争のために中断されてしまつたのである。

ところで、ここで特に注目しなければならないのは、宮中と府中との區別を明確化するといふ、隨かに近代國家にとつて必須なる要求が、日本統治者にとつては、当時不徹底極まるものではあつたにせよ一大勢力をなしていたところの宮中を中心とする抗日民族運動を抑圧するといふ、日本の支配権確立に重大な意味を有する目的で出され、日本統治者がそのためにこそ極めて急激に帝室財産整理を強行したという事実である。

即ち、初代統監伊藤博文は皇帝を脅迫して、「本官は宮中と暴徒との關係を承知し、現に暴徒に対して宮中より資金を供給せられたるの証拠を有す。同時に宮中と上海浦塩地方に在る韓人間に密使密電の往来すること、亦能く承知し居れり、而して今日

によらなければならなかつたという史料上の制約から極めて不十分なものにならざるを得ず、しかも、時期的にも一九一八年に実施された土地調査事業の付帯事業としての駅屯土分筆調査までで止めてあり、それ以後における「駅屯土」払下げ問題を中心とする変質過程は取り扱つていない。それでも、以下の分析によつて一応は前記の課題に接近し得る糸口がつかめたものと思つてゐる。筆者の意図はそれ以上に出るものではない。

なお、ここに取り上げる所謂「駅屯土」とは、単に駅土と屯土のみを指しているのではなく、「駅屯土」―「国有小作地」を意味していることをことわつておきたい。そこに筆者が特に「駅屯土」を分析の対象とした所以がある。しかし、後述のように、一九〇八年における帝室財産整理以前にあつては、当然のことながら「駅屯土」―「国有小作地」とはなつていない。また、一部の史料には、「駅屯土」を駅土と屯土だけに限つた用法が見られるがその史料を引用する場合にはそのままにしておいた。

註(1) 朝鮮總督府臨時土地調査局 「朝鮮土地調査事業報告書」 一頁 以下「報告書」と略称。

## 一 帝室財産整理

迄之を放任したるは全く寛大に失せるものにして……(註4)とつめよつており、また朝鮮總督府編「朝鮮の保護及び併合」(一九五六年、友邦協会改編復刊)に、「宮中の裏面では、挾雑の整がみだりに君側に近ずいて国政を左右し、陰謀を弄し(註5)といわれ、「宮中は排日禍乱の伏魔殿(註6)」と記されているのはその間の事情を物語っている。かくして、一九〇七年七月のヘーグ密使派遣事件によつて皇帝の讓位が行われると、ここに宮禁肅清と相まつて帝室財産整理が本格的に遂行されることになるのである。さて、一九〇四年八月の第一次「日韓協約」によつて財政顧問が置かれると、内蔵院は改革されて経理院と改称された。そして、帝室財政會議の組織を経、一九〇七年六月の宮庄土の導掌(註7)廃止とそれに伴う各官事務整理所の設置を見た後、同年七月内閣内に臨時帝室有及び国有財産調査局が特設され、次いで同年十一月に帝室財産整理局の設置を見るに至つた。

以上のような複雑な経過をたどつて、遂に一九〇八年六月に勅令第三十九号を以つて、「宮内府所管及慶善宮所管の不動産は之を国有に移属し宮内府に於て從來徴収したる漁税、欲税其の他の諸税も亦国有に移属し帝室財産整理局の廃止と為り帝室財産に關する事務は臨時財産整理局に繼承せられた(註10)のであつた。かくして、帝室財産の整理が行われ、それによつて莫大な度支部所管の国有財産の確立となつたのである。そのうちの最も主要なものが、「駅屯土」――「国有田舎の總稱(註11)」――「国有小作地」であつた。そこで、度支部は駅屯土管理規程並びに小作料徴収規程を制定してその管理方法を明らかにした。

さて、「駅屯土」は一応国有化されたものではあつたが、例えば宮庄土についてみると「帝室財産整理局及帝室有及び国有財産調査局へ未ダ事業ノ進行ヲ見ズンテ廢止セラレタルヲ以テ、更ニ臨時財産整理局ヲ設置シ、庄土中投托ニ係ル土地(註12)又ハ混奪入地(註13)ハ

註案若ハ文記等ニ依リ照査シ、其ノ權利ノ明瞭ナルモノハ之ヲ還付シ、廢止セラレタル導掌ニ對シテハ土地ノ還給又ハ報償金ヲ支給シ而シテ是等導掌及投托ニ付テハ前者ハ國署、文蹟、導掌賣買文記又ハ之ニ相當スル文書ニ就キ、後者ハ其ノ投托ナルコトヲ明記シタル文書ヲ所持スル者ニ就キ之ヲ調査スルコトヲ要領トシ、同時ニ元帝室有ニ屬セシ内需司及七宮ノ庄土ハ總テ国有地ニ編入セリ。然ルニ是等ノ調査ハ尠メテ短期ニ行ハレ、單ニ請願者ノ提出セル書類ヲ整理シタルニ止マリ、何等根本的ノ調査ヲ為シタルモノニ非ザリシヲ以テ毫モ徹底的効果ヲ現出スルコト能ハズ、所謂宮庄土ニ關スル所有權ノ紛争ハ依然トシテ存続スルヲ見タリ。斯ノ如クシテ最近ニ於テ屢其ノ必要ヲ認メラレ漸次其ノ準備ヲ講セラレツツアリシ庄土ノ整理モ、遂ニ之ガ結末ヲ見ルニ至ラズシテ日韓併合ト為リ、朝鮮土地調査事業ニ依ル一般的地地整理ノ完成ヲ以テ始メテ數百年以來ノ宿題ヲ解決セラレタルモノナリ(この土地調査事業そのものが、如何に欺瞞的なものであつたかは李在茂氏の「朝鮮における土地調査事業」の奥底「――(社会科学研究・第七卷第五号)と題する著作において分析されているところである――引用者(註16)」といわれる以上、一九〇七年の導掌廢止の後、土地調査事業以前に「導掌の性質に依り相當の処分を行ふこととし証憑及実地の調査を重ねる導掌の処分を完結(註17)」然る後に宮庄土の国有化が為されたなどということを簡単に信じるわけにはいかない(註12を再び参照せよ)。屯土(註18)についても「此種の土地は果して国有地の取扱を為して適當なるやは聊か研究を要する(註19)」もので、「国有ニ編入セラレ、引統キ日韓併合ニ涉リ長ク國民間ノ紛争ヲ存スルニ至ラシメ、朝鮮土地調査ノ進行ト共ニ漸次其ノ査定ヲ見所有權ノ帰屬ヲ明ニセラルルニ至リ(註20)」といわれるような不徹底極まる国有化にすぎなかつたのである。

従つて、「国有土地の性質は斯くして依然其の旧態を存し遂に土地調査局の審査査

定を俟たざるへからざることと為れり<sup>(註20)</sup>というような国有化にすぎなかつたのであり、「一旦宮内府のものとなり度支部に引継いだ土地にも人民から取戻の請求あるべきものが余程ある。……其他羅州郡に於ける南三面を国有に編入し地主は唯取られては困ると請願して居る。又全南の海島には各宮の折受田といふて民田を只取りせしものが多い<sup>(註21)</sup>」などといわれるのも当然の帰結であつた。

してみると、帝室財産整理による「駅屯土」の国有化は、如何に性急に於て強引なものであつたかは明らかである。つまり、国有民有の紛争に關して根本的な解決をなし、民有地でないことが明確になつた土地（少数にすぎない筈である）だけ国有化するという方法によるのではなくて、一応ともかくにも国有化を行い、然る後に紛争問題を解決しようとする欺瞞的な方法がとられたのであり、正にその欺瞞性そのものがこの土地調査事業における夥しい紛争地のうち大部分が国有地に係るものであつたという事実に至らしめたものであつた。

もちろん、かかる「駅屯土」の国有化は朝鮮農民からの日本国家権力による土地収奪<sup>(註22)</sup>は、一八七六年の所謂「江華条約」以後における日本人による暴力的土地収奪<sup>(註23)</sup>の事実的進行をその背景とし、その上にたつて遂行されたものであることを忘れてはならない。

註(1) 和田一郎「朝鮮ノ土地制度及地稅制度調査報告書」一一三頁 以下「和田報告書」と略称

註(2) この点は、特殊性はあるにせよ朝鮮独自の弊害とみなしてはならない。一般に近代以前にはこの傾向は不可避免的である。例えば、日本においても帝室制度調査は大きな課題であつて、明治四十四年に皇室典範増補の發布となつて初めて完了している。

註(3) 「報告書」七頁

註(4) 「伊藤博文伝」下巻 七二一—三頁

註(5) 朝鮮總督府「朝鮮の保護及び併合」(一九五六年、友邦協会改編復刊) 一五九頁

註(6) 同上書 一六〇頁

註(7) 「司宮庄土トハ所謂宮房田ナリ。宮房トハ王室ノ一部タル宮室ト王室ヨリ独立シ又ハ王室ニ關係深キ宮家トヲ謂ヒ、前者ハ…… 壽進、明礼、於義、竜洞ノ四宮ニシテ後者ハ大君、公主、王子、翁主、郡主等ノ宮家ナリ。宮房田ハ是等ノ宮室宮家ニ給スル田土ヲ謂ヒ、広義ニ於テハ宮中會計機關タル内需司ノ田土ヲモ併セテ之ヲ包含シ、李朝国初ニ於ル職田制度ノ廃止ニ伴ヒテ盛ニ設定セラレタルモノトス。詳言スレバ司宮トハ、需司、壽進宮、明礼宮、於義宮、竜洞宮、統祥宮、宜禧宮、景祐宮、咸善宮及英親王宮ヲ謂フ。此ノ中近時ノ創設ニ係ル咸善宮、英親王宮ヲ除キ其ノ他ヲ一司七宮ト称ス。」(「和田報告書」一二三頁)。

この宮庄土の所有關係は、李朝末期にあつては極めて不明瞭なものとなつていた。

註(8) 導掌とは、「宮庄ノ収租及管理ヲ掌ル者」(「和田報告書」一一四頁)をいひ、「宮房に對して一定の税米を納めて宮庄土を管理し其の地の収益權を有する者」(「報告書」一三四頁)である。また、導掌はその下に監官或いは舍音(これは宮庄土以外にも一般に地主が小作管理人として置いており、朝鮮總督府調査資料第二十二輯「朝鮮人の思想と性格」には、「舍音の地位を占むると云ふことは大なる榮達と見做されて居る或る地方では「三日なりと舍音」と云ふが如き俗諺さへあり如何に一般農民の羨望するところであるかを証することが出来る」とある)を置いて小作人の監督、秋収に従わせていた。

註(9) 「慶善宮及英親王宮」(英親王宮は一九〇七年に自然に廃止された引用者)ノ庄土ハ淳嬪及英親王所用ノ私用財産トシテ設置セシモノナリ。其ノ庄土ハ從來經理院管ノ旧各宮門、衙門ノ屯土ヲ移属シタルモノ」(「和田報告書」一八三頁)

註(10) 「報告書」一一三頁

註(11) 「朝鮮總督府殖産局「小作農民に關する調査」一九二八年 六九頁

また、内務省「小作調査書」一九一二年には「国有小作地即時駅屯土ト総称スル土地ハ即旧時ニ於ケル駅土、屯土、各宮庄土及陵園墓附屬地等國庫ノ收入タリシ土地ヲ包括スルモノ」とある。



ところで、本来「駅土は駅附屬地の総称」(「報告書」一四二頁)であつたが、李朝末期の駅敷は全く錯綜し、その所有關係はすこぶる曖昧なものとなつていた。屯土も「辺塞要衝ノ地ニ防戍ノ兵ヲ配置シテ國防ヲ鞏ニシ併セテ軍餉ニ資センカ爲、軍事練習ノ間荒地ヲ開拓シテ軍糧ヲ積儲シ運輸ノ冗費ヲ省クノ趣旨ニ出デタルモノ」(「和田報告書」二九二頁)であつたが、李朝以降その内容が大きく変化し、末期にあつては「其の所有權の帰属を決定するは極めて困難なる事項に属し」(「報告書」一四七頁)でいた。また陵園墓附屬地即ち「陵園墓ノ位土ハ陵園墓ノ祭祀費其ノ他ノ經費ニ充ツル爲之ヲ設定セシモノ」(「和田報告書」四四四頁)であるが、これまた李朝末期にあつては「彼此ノ權衡ヲ失スルコト甚ダシカリシ」(同上書 四四六頁)状態になつていた。なほ、「韓國施政年報」(明治三十九年・同四十年度 一八四頁)によれば、駅土について、「明治二十八年駅馬、駅卒ヲ罷メ農商工部ヨリ吏員ヲ派シ賭料ヲ徵收シ後之ヲ軍部ニ次テ度支部ニ移付シ明治三十三年更ニ之ヲ宮内府ニ移セリ」とあり、また屯土について、「明治二十八年屯土ノ制ヲ廢シテ之ヲ度支部ニ屬セシメ同年更ニ宮内府ニ移セリ」とある。

註(12) 投托地とは、「自己ノ土地ヲ宮房ニ投托シ、仮リニ宮房庄土ノ如ク装ヘタル土地ヲ謂フ」(「和田報告書」一三一頁)のである。従つて、導掌には投托導掌と一般(普通)導掌との二種があるが、投托地の所有權が民有に帰属されるべきものである以上、導掌の種類を区分することは國民有決定の基礎となるべき極めて重要なものであつた。しかし、「投托宮庄土は……事實の仮装に過ぎざるも、年月の経過と共に宮家と投托者との間に複雑なる事情を生じ、他方に普通導掌にして自ら投托導掌と冒稱し、其の管理する宮庄土を横領せんとするものある等、宮家と導掌との間に往々種々の奸策不正の行爲行はれ、後世宮庄土所有權の帰属をして錯雜紛亂し又收拾すべからざるものあるに至らしめたり」(朝鮮農會「朝鮮の小作慣行」(時代と慣行)「一六八頁)という状態になり、導掌の性格を決定することは極めて困難であつた。

註(13) 混奪入地とは、本来民有地たるべきものが、「司宮ノ職員中勳モスレバ不ていノ號アリテ司宮ノ威權ヲ藉リ隣接スル民田ヲ司宮庄土ニ丈量編入シ、又陳荒地ノ折受、賜牌等ノ名ノ下ニ既墾ノ民田ヲ掠奪シタルモノヲ謂フ」(「和田報告書」一三〇頁)のであつて、土地掠奪の弊害の甚たるものであつた。

註(14) 従来の土地台帳で田案ともいつた。

註(15) 文記には一種の地契に相當する「旧文記」と、売渡証書に當る「新文記」とがあり、新旧二文記の授受によつて、所有權の移転が完成された。李在茂「いわゆる「日韓併合」」「強占」前における日本帝國主義による朝鮮殖民地化の基礎的諸指標」(社会科学硏究・第九卷第六号) 九頁参照

註(16) 「和田報告書」一四九頁

註(17) 「報告書」一三五頁

註(18) 雜誌「朝鮮」第二卷第二号 四五頁

註(19) 「和田報告書」三〇一頁

註(20) 「報告書」一三一頁

註(21) 雜誌「朝鮮」第三卷第六号 二四頁

註(22) 帝室財産整理及び次に考察される駅屯土調査は形式上では韓國政府によつて実施されたものではあるが、その実質は日本の政策に係るものである事はいうまでもない。李在茂氏は「その「駅屯土」の管理は事實上隆熙元年(一九〇七年)より地方財務機關に属」し財務機關の「事實上の責任者」は日本人であることになつてゐる(侵略者は「事實上」が好きである。)(社会科学硏究・第九卷第六号所収前掲論文 一五頁)と指摘してゐる。

註(23) それを具体的に示すものとして次の史料をあげておきたい。即ち、大蔵省鑑定官坂口武之助氏の談によれば、「……甚しいのは日本人で韓國人に金を貸した者は抵当に取る物が無いからいつでも家を抵当に取つて居る。さうして韓國では宅地といふものは家に附屬して居るので、家を取れば宅地も附いて居る、いつでも家を抵当で高利金を貸して置いて期日が切れたといへば少しも猶予しない、其家を打ち毀して鉄条網を張つて宅地を占領して仕舞ふ、大概京城の日本人の居留地と稱へて居る所の大部分は其鉄条網主義で占領したといふことである。それで金を貸す時でも其抵当に取る所の家は土地の広いやうな所に対して貸す、さうしてそれを取れば其明地だけはスツカリ占領して仕舞ふ、疊二枚敷即ち一坪の価が二十錢か三十錢で得られて

居る、それが今日では京城の太通りは一坪が百円位の地価である。それで一攫千金で僅かな資本を持つて行つた人が二三年の間に非常なる金満家になつて居る……」(「東洋時報」一〇七号、一九〇七年八月 七三頁)

## 二 駅 屯 土 調 査

このようにして国有化された「駅屯土」に対して、「從來小作人は舍音等の任意に之を變する弊習あり、爲に耕作者の土地に対する愛好心を薄ふし、延いて地力の減耗を來すの虞ありしが、管理規程並徴収規程の發布と共に小作權の安固を確保し、以て其の弊を防止せむことを期し、陳荒地墾奨励の方法として小作料免除年を附与することとなし、又駅屯土台帳を調製して其の所在面積及現実小作者を明にしたりと雖、台帳に掲げたる面積は從來の斗落数又は日耕数に依りたるものなるを以て確実なる坪数を知るに由なく、且つ地圖の備へなかりしを以て容易に土地の欺隱冒認を發見し得ざるのみならず、從來の賭料(小作料引用者)は其の當を得たりやに付て疑なき能はざりしを以て、是等の各項を調査し確実なる管理の下に公平なる収租を爲す爲め毎筆の實地調査を行ふの必要を生じ、隆熙三年(明治四十二年)六月以降一箇年間に駅屯土全部査了の見込を以て調査に着手することとし、同年五月度支部訓令第五十九号を以て度支部所管国有地調査節次を發布し、同年六月より之を開始し越て翌年九月事業全部を終了せり」といわれる駅屯土調査が、土地調査事業開始直前に實施された。

この調査の基本的な目的は、「駅屯土等の小作料は歲月の推移、交通の變遷及諸種

## 「駅屯土」問題の實體

の流弊等に因り料額の衡平を失せるもの尠からず。本調査は即之を矯正して小作者の負担に厚薄なからしむると共に、之が徴収の確実を企図する(註2)もので、何よりも「駅屯土」からの小作料徴収を確実化するにあり、前述のような紛争問題を解決するにあつたのではないことは注目しなければならない。従つて、その調査方法も、「各洞里毎ニ駅屯土ヲ大約三級ニ分チ其ノ各級ト品等ヲ均フル民有地ヲ選定シ其ノ地ノ収租高小作料額及其ノ地方ノ小作慣例ヲ調査シ以テ之ニ比準スヘキ駅屯土ノ小作料額ヲ類推ス(註3)」という極めて便宜的なものでしかなかつた。

このようにして改定された「駅屯土」小作料は、「總額百十五万五千二百二十三円にして、之を地目別に分てば田六割七分七厘、畑二割八分四厘、宅地三分四厘、其の他六厘の割を占む、即左の如し。

|     |              |
|-----|--------------|
| 田   | 七十三万二十二円     |
| 畑   | 三十二万七千七百二十九円 |
| 宅地  | 四万一千円        |
| 其の他 | 七千三百六十九円     |

註(4)

であり、これを「元宮内府所管當時タル明治三十九年度ニ對比セハ度支部ニ於テ管理セル明治四十一年度ハ十八割五分、四十二年度ハ二十四割四分、明治四十三年度ハ突ニ二十七割六分ノ成績ヲ示セリ(註5)」といわれるように、正に驚異的な増加を示し駅屯土調査の所期の目的は成功をおさめたのであつた。

次に、この調査による総面積は從來の「推算総面積十萬三千百七十九町歩ナルニ実地調査ノ結果ハ二割二分即チ二萬三千二百五十三町歩ヲ増加シテ十二萬六千四百三十二町歩ニ上(註6)」つたのであるが、それは、「駅屯土」面積がこの調査を契機として、極めて急激に増加したという事實を示すものであつた。



前述のように土地調査事業開始直前に実施された駅屯土調査以後、「駅屯土」に対しては、一九一二年に駅屯土特別処分令及び駅屯土特別処分施行細則を發布し、一九一三年に小作面積の制限、また一九一四年に貸付料の四割増額を行つたほかには、一九一八年に至るまで何等の積極的対策を為さず、「府郡島に於ける駅屯土（駅屯土の取扱を為す土地を含む以下同じ）の管理は韓国政府治政当時於て実地調査（駅屯土調査を指す引用者）及測量を行ひたる実測図及之に基き調製したる駅屯土台帳の二者を主要図簿とし之に異動の加除整理を為し以て今日（一九一八年引用者）に至るもの<sup>註(1)</sup>であつた。

従つて、「其の新規増加の土地に付ては之か実測図を闕如せしもの亦少からず而かも当初の調査及測量は土地調査施行以前に属するを以て其の地番地積及境界は土地台帳及地籍図に連絡なく従て別に作成せる是等帳図との対照簿により僅に之を推定する

総面積……は之を全国耕作面積二百三十萬二千二百七十四町歩に比較するときは其の六分弱に過ぎずと雖宮庄土屯土の如きは概して平坦膏腴の地に於て広闊なる区域を占拠するを以て土地分配上重大の關係を有す宜なり其の小作人は全国農業者数二百二十一萬千三百三十七戸に對する一割四分に當り其の小作料収入（駅屯土収入）は本年度（一九一一年引用者）の予算に依れば百二十六萬一千八百二十一円にして之を地稅収入高六百二十四萬五千四百五十五円に比すれば其の二割強に達す又以て古來宮庄土及屯土が半島の農業上關係の甚且大なるものあるを想見すべきなり。……」

### 三 駅 屯 土 分 筆 調 査

ところで、「駅屯土」は先に一九〇八年の帝室財産整理によつて国有化されているのであるから、小作料の増収は國家收入の増加となり、また面積の増加は當然国有地の増大を意味するわけであり、ここに駅屯土調査の本質的な役割があつたといえる。そもそもこの駅屯土調査なるものが、「新規開墾地目ノ変更、分合筆及測量方法ノ精粗等ノ為駅屯土台帳面ト実地トノふん合ヲ欠クモノ多ク又土地調査（事業）ノ結果ニ基キ土地台帳所載ノモノト一致セサルモノ尠カラズ為ニ駅屯土管理上ノ支障ヲ感スルコト甚シカリシ<sup>註(7)</sup>」もので、また後述のように、朝鮮總督府臨時土地調査局「朝鮮土地調査事業報告書追録」（以下「報告書追録」と略称）自からがその不徹底さを指摘しているようなものであつて、だからこそ、土地調査事業においてその附帯事業として駅屯土分筆調査を実施せざるを得なかつたという事情からすると、駅屯土調査による小作料増収と「駅屯土」面積の激増はそのまゝ正当なものとして受け取るわけにはいかないのである。まして先に国有化された「駅屯土」には本来民有地となるべきものが多かつた筈ではないか。

今やここに至つて、次には駅屯土分筆調査の考察が要請されて来るのである。

- 註(1) 朝鮮農會「朝鮮の小作慣行（時代と慣行）」一九九二〇〇頁
- 註(2) 同上書 二〇〇頁
- 註(3) 内務省「小作調査書」一九一二年による
- 註(4) 朝鮮農會前掲書 二〇二頁
- 註(5) 朝鮮總督府「駅屯土の管理方法」による
- 註(6) 同上書による
- 註(7) 同上書による
- 〔補註〕 朝鮮總督府「小作農民に關する調査」（一九二八年再刊 七〇頁）の次の記載に注目したい。「駅屯土の

に過ぎず之が取扱上甚大なる不利不便を存し<sup>(2)</sup>ていたのであつて、かかる不健全状態のままにあつては、「土地に関する統治の基礎を建設した<sup>(3)</sup>」ところの土地調査事業において、「朝鮮に於ける土地所有権に関する紛争事件は其の數極めて多く特に其の大部分が国有地又は官司権豪の所有せる土地に対するもの<sup>(4)</sup>」とされ、「特に国有地に対するものは一事件にして一洞里の大部分を包括し相手方人民は數百名の多數に上る集團地に属し何れも數十年來の懸案に係り常に紛議の裡に推移し來りたるもの<sup>(5)</sup>」それなのに何故一九〇八年に「駅屯土」の国有化を強行してしまつたのか引用者<sup>(5)</sup>でありしかも「測地作業の進展に伴ひ逐次紛争事件も著しく増加し<sup>(6)</sup>」たところの国有地紛争（「駅屯土」紛争）事件はその根本的な解決を期待することは出来なかつた。

だからこそ、駅屯土分筆調査は、從來の駅屯土調査による実測図及び駅屯土台帳を基礎とするのではなく、土地調査事業による「土地台帳及地籍圖に登錄せられたる疆界及地籍を基礎とし<sup>(7)</sup>」、「地籍圖ヲ基本トシテ<sup>(8)</sup>」実施せざるを得なかつたのである。

さて、「大正六年六月總督府訓令第二十四号を以て示達せらるる所あり乃ち之が調査を駅屯土分筆調査と稱し本局事業（土地調査事業一引用者）の附帶事業として實地の調査及測量を行ひ且駅屯土全部に付之が地圖台帳及台帳集計簿を調製することとし同年七月先づ之が準備に着手し其の實地作業及内業事務の整理は大正七年一月より同年八月迄に全部を完了せしむる予定を以て調査予定筆數六十一万七千八百八十四筆經費予算二十三万六千八百九円として計圖を立て<sup>(9)</sup>」て駅屯土分筆調査は一九一八年一月に實地作業を開始し、「外業（實地作業一引用者）は同年十月内業（事務整理一引用者）は同年十二月即ち予定に先（立）つこと外業は一箇月内業は二箇月にして全部の作業を完了した<sup>(10)</sup>」のであつた。

しかし、一、二箇月の「予定に先（立）つ」完了を喜ぶ前に、駅屯土分筆調査が紛

争地解決を目的として行われるのではなく、土地調査事業の附帶事業として実施され、しかも、土地調査事業の最終年たる一九一八年に開始され、その完了後（土地調査事業は同年十一月に完了）まで持ちこされたという事實は、驚くべき非合理性を示すものといわなければならない。

この駅屯土分筆調査の任務は、「元來駅屯土調査（ここでは駅屯土分筆調査を指している一引用者）の目的は主として小作人別の疆界を知るを在るを以て彼の土地調査の所有權及疆界の査定を為すが爲にせる測量とは全く其の趣を異にし固より比較すべきものに非ず<sup>(11)</sup>」とあるように、紛争事件解決に必須なる所有權の査定（疆界ではなく所有權の紛争解決こそ根本問題であつた筈である）にあるのではなかつた。しかも、「駅屯土」の所有權は前述のように一九〇八年の国有化によつて國家に帰属すること（前提され、土地調査事業による欺瞞的な査定にまかされ、ここでは単に「小作人別の疆界を知る」ために行われ、「小作人別地目別に分割するの必要を生じ<sup>(12)</sup>」たが故に実施されたものに過ぎなかつた。

しかも、これまた親切にも「小作人の調査に付ては申告主義を採り<sup>(13)</sup>、そのために、「申告書は現在の小作人中間小作人（小作の認許を受け更に他人をして小作を為さしむる者）又は將來小作せむと欲する者等より申告したる例少からず甚しきに至りては面の吏員にして此の際小作人を変更せしめむとの考を以て故意に他人をして申告せしめたるものあり<sup>(14)</sup>」という状態を引き起し、「現小作人又は小作人總代等の申告に依り其の事實自ら判明するを以て調査の趣旨を説示し申告を取消さしめ<sup>(15)</sup>」るという手間をとりながら、なおかつ「往々抗争を試み恰も小作權紛争の状態となり外業員に於て之を解決すること能はざりしものあり之に對しては他日府郡島に於て決定するの外なきを以て先づ小作人未定として調査を遂げたり然れども小作名義は由來所有權名義の如

く一般に之を重視せざる傾向あるか爲小作人の交代せる場合に於ても尚前小作人の名義を以て申告し実地の立会も亦其の名義を以てせる者あり<sup>註(16)</sup>という有様であつた。  
とすれば、従前に土地調査事業が行われていたといえ、「短期間に之か完成を期する<sup>註(17)</sup>」とされ、<sup>註(18)</sup>測量の精度は殆ど之を半減するも敢て失当と爲さず只寛赦其の宜しきを得るに在る<sup>註(19)</sup>ものであり、また、「本測量の略界線は之を移して地籍図上の略界と爲すことを得ざるものとす故に将来地籍図に對し異動整理を行はむとする場合に於ては其の異動地域の略界と本測量の略とを縦ひ地上に於て一致することあるも<sup>註(20)</sup>直に駅屯土地図の略界を採用することなく必ず別に地籍測量を行ふの要あるものとす<sup>註(21)</sup>」というように加減な測量方法をもつてしては、充分な調査活動を望み得ないことはいふまでもない。

以上述べたように、駅屯土分筆調査事業の附帯事業として実施され、しかも、「京畿道高陽郡中興島漢芝及崇仁の三面には国民有係争中のもの多数ありて小作人別の通知不可能なりし事情あり従て之か台帳及地図の調製を爲さざることとせり<sup>註(22)</sup>」とあるように、所有権の査定は目標とされず、地租負担者たる小作農民を確定化せんとするものであり、それも極めて粗雑な調査方法をもつて実施されたことが明らかとなつた。そこで、最後にかの有名なる東洋拓殖株式会社との関連において、「駅屯土」の役割を集中的に考察したいと思ふ。

- 註(1) (2) 「報告書追録」 二頁  
註(3) 「報告書」 一頁  
註(4) (5) 同上書 一二三頁  
註(6) 同上書 一九二頁  
註(7) 「報告書追録」 二頁

- 註(8) 朝鮮總督府「駅屯土の管理方法」による  
註(9) 「報告書追録」 二頁  
註(10) 同上書 三頁  
註(11) 同上書 一七八頁  
註(12) (13) 同上書 二頁  
註(14) 15 16 同上書 九頁  
註(17) (18) 同上書 一八頁  
註(19) 同上書 一九頁  
註(20) 同上書 三頁

#### 四 東洋拓殖株式会社と「駅屯土」

周知のように、日本の「国策会社<sup>註(1)</sup>」として設立された東洋拓殖株式会社（以下東拓と略称）は、当然のこととして日本政府の多大な保護を受けるものであつたが、同時にまた韓国政府に對しても、「現物出資の形式を取つて、田畑（「駅屯土」）引用者）各五千七百町歩、その評価額三百万円・六万株（駅屯土の純収入の十七倍半を以て算定）を引受け<sup>註(2)</sup>」させるといふ特権を有するものであつた。

一九〇九年五月の第一回東拓總會において、宇佐川總裁が行つた次の演説は、韓国政府（とはいつてもその実質は日本政府のカイライ）からの「駅屯土」出資の事情を具體的に示している。

「本社創業の第一着歩」は韓国政府出資の土地を受領するにあるを以て同国政府との協議に基き其の所有に係る駅屯土及宮庄土約十萬町歩に就き一々之を選挙して受領することとせり然るに此等の土地は元來宮内府に所管なりしも昨年固有財産整理（帝室財産整理）引用者）の結果度支部に引継がれたるものにして爾來日尚淺く未だ充分整理せられざるものあり加之其の種類数多に分れ管理の方法一ならず殊に各道各郡に跨り地質土性及水利關係の相異なるは勿論其の面積の単位たる斗落日耕は地方により広狭ありて容易に其の正確なる地積を知り難く其の收穫高並小作料の如きも千差万別に於て之れが利害を究むるには非常の苦心を要す故に先づ駅屯土及宮庄土全部の各郡別反別及小作料等調査材料に資すべきものは勿論其の他各地の地勢を稽へ其集團地にして管理に便なるもの及会社將來の事業經營上有利なる方面を予選したり。調査の結果に基き彼此利害を比較し第一回払込に對する分として京城釜山附近の特に有利便宜と認むる地を始め慶尚南道黃海道及平安道の中適當なる場所を指定し度支部に對して實地引渡の準備を求めたり尤も今回調査せしところに依れば畑は管理收入其の他の點に於て有利なるもの少なきを以て實地引継の場合に於ては利廻りの良好なるもの外は之を田に換算交換するの見込を以て目下交渉中に置せり……

韓国政府出資の土地は概して其の地方に於ける良田に属し殊に宮庄土を出資土地選引の範圍に包含せしめたるは本社の爲めに利益頗る大なりとす（註3）

引用文にも記されているように、第一回の払込みを行つた一九〇九年といへば、帝室財産整理がその前年に當るのであつて、あたかも、東拓への出資を予測して「駅屯土」の強引な国有化が行われたかの如き観さへある。

従つて、まだ駅屯土調査すら実施されていず、「駅屯土」出資の方法も、「實測面積ニアラスンテ引継ヲ受クヘキ土地所在ノ面内各洞里ニ就キ（韓国）政府ト協議ノ上

四筆ノ標準地ヲ選定シ其ノ實測坪數ヲ固有地台帳（「駅屯土台帳」、その不正確さは前述した「引用者」記載ノ斗落又ハ日耕數ヲ以テ除シ該洞里ニ於ケル一斗落又ハ一日耕當ノ標準面積ヲ定メ之ヲ該洞里ニ於ケル固有地台帳記載ノ總日耕數ニ乘シ更ニ其ノ六割五分ヲ以テ面積ヲ算出スルコトニ協定（註4）するといふ甚だ便宜的なものであつた以上「引継後本社ニ於テ毎筆ノ實測ヲ遂ケタル結果ハ……引受面積ニ比シ七割八分三厘ノ増加ヲ示セリ（註5）」といふことになつたのも當然といわなければならない。しかも、「價格を見積り帳簿上の授受を爲すこと易々と雖も、實物の受渡に就ては幾多の交渉紛議も起るべく、或は武装を要するに至るなきを保す可からず（註6）」と宇佐川總裁が述べているような暴力的な引継であつたといふ事實は、韓国政府からの「駅屯土」の出資「払下げ」東拓の土地収奪であることを示している。

さればこそ、かの土地調査事業において、「韓国政府と東洋拓殖株式会社との間に土地の授受を了れりと雖其の引渡地は總て駅屯土より分割したるものなるを以て別に其の所有權を主張する人民は……幾多の紛争事件を惹起し本局（朝鮮總督府臨時土地調査局）引用者）に於て審査決定せしもの百七十八件七百四十筆を算せり（註7）」といふ事態にたち至つたのも、また當然の帰結であつた。（土地調査事業の欺瞞性についてはここでもう一度想起しなければならない。これによつて東拓の「駅屯土」引継地はさらに四分二厘強増加している。）

引継地に對する東拓の經營方法は、「小作契約は從來の習慣を重んじ弊害無き限りは变革せざる方針なり（註8）」といわれるように旧態依然たるもので、何ら生産關係における質的变化をよび起さず、むしろ朝鮮旧來の農村諸關係に依存するものであつた。もちろん、かゝる東拓の土地經營の性格（註9）は引継地にとどまらない。東拓からの貸付地についても、「賃借料を払いたる上尚多少の利益を見込むが爲めに勞ひ鮮人小作をイジ



めざるべからず是れ鮮人小作の会社の冷酷に泣く所以なり」と記されているのはその一端を示している。

なお、韓国政府からの出資土地収奪にもたらず、後には、残り十余万町歩に及ぶ「駅屯土」に対しても、「厚顔なる東拓会社は頻りに右十万町歩の払下げを総督府に運動し更に大地主たらんと欲する（しかし、これは失敗した一引用者）」という動きを見せたのは、「苟くも金の儲かる仕事は何んでも角でも大手を拡げて行くと云う会社なる」東拓の飽くなきドン慾を物語るものといえよう。

以上考察して来たように「駅屯土」は、日本「国家ノ別体」たる東拓の朝鮮侵入にとつて極めて重大な役割をになうものであつた。しかも前述の駅屯土分筆調査が、土地調査事業による引継地の東拓所有権確定後に、「駅屯土」における小作農民の確定化という目的でのみ施行されたという事実は、東拓所有地を安定化するに甚大な意味を有するものであつた。

かくして、日本帝国主義による朝鮮植民地化の中心的任務にあつた東拓との関連において、「駅屯土」の果たした植民地農政確立の楨杆たる役割は集中的に把握されたのである。

註(1) 北崎房太郎「東拓三十年の足跡」五頁

註(2) 小早川九郎編著「補訂朝鮮農業発達史・政策編」(一九六〇年、友邦協会発行) 一三二頁

註(3) 「東京朝日新聞」一九〇九年五月二十三日

註(4) 「東拓十年史」三五―六頁

註(5) 同上書 三六頁

註(6) 「朝鮮」第三卷第一号 一一頁

註(7) 「報告書」一八〇頁

註(8) 「朝鮮」第三卷第二号 一〇三頁

註(9) 印貞植「朝鮮の農業機構」(一九四〇年、三一六―七頁)には、朝鮮における日本人の農場型経営の性格について次のように規定されている。

「(土地に投資される)資本は生産関係に於ては、旧来の半封建的な高率小作料や高利貸制等一切の旧き小作慣行を一身に体化し、更に商業資本的な機能をも兼ねたものとして現われている。朝鮮農村に於ける旧来の封建的な諸関係は、若し利潤追求の爲めに有利でありさへすれば如何なる制度であつても、これを組織的に取入れている。しかし、小作人に対する地主の人格的保護とか物質的温情等の如き不利な慣習に対しては、これを「野蛮的なもの」として排除している。斯くして結果半封建的な生産及び分配関係の中の最も本質的なものだけが、ここでは強化され、存続され、踏襲されているのが明白である。そして更に従来は多く地主とは別個な人格がなしていた高利貸的または商業資本的な「神聖」な機能が、ここでは同じ地主土地会社に依つて兼ねられているのである。謂はばアジア的な小宇宙が展開されている。」

註(10) 「東京朝日新聞」一九一一年二月五日

註(11) 同上

註(12) 同上 一九一一年二月六日

註(13) 「東拓経営ノ基本観念」による

〔補註〕東拓の有名な「宮三面事件」は、「駅屯土」問題に起因するものと思われるのであるが、今は十分にその詳細を知ることが出来ない所以他日の研究に期したい。

なお、三一運動に関連して島田三郎氏の「駅屯土私下問題 特に半政半商の現象に乗せんことを恐る」(一九一九年一月一日阪谷芳郎受)と題する注目すべき論証があるので、一応の参考に供しておく。

「……改革によりて俄然非常の増税を蒙りたれば、祖先以来幾百年間駅屯土に居住し来れる鮮人は、忽ち安処を失ひて人心爲めに動揺せり。此時に乗じて内には暴殄なる鮮人の誘惑あり。外には東洋拓殖会社を筆頭とし營利に鋭く資力に富める者の活動あり窮余の駅屯土住民は其の懸命の地を売却して放浪の氓となりたり。」

此時に當りて若し鮮人に遠慮あり当局に達識ありたらんには、此の如き処置は他日に患を貽すべきを予知して之を緩和するの方策を講ぜしなるべし。然るに事此に出でず總督府は寧ろ之を便として拓殖会社に便宜を与へ、狡猾なる鮮人は土地所有の觀念幼稚なる駅屯土住民を誘ひて其地の売買を紹介し、此間に奇利を占めて安価に土地を売却せしめたり。(半島人中に此時一反三百円に売買ありしと言ふ者あるも事實は大抵水田五十円島三十円なりしといふ)此の如くにして安処を失へる鮮人は、家族を率いて間島若くは滿洲に走れり。今日して豆満江東百五十万の鮮人ありといふ(実数百万乃至百五十万)是等の移住は種々殊なる事情あるべしと雖も、要するに駅屯土の移住最も多きは事實なり。・・・」

・・・ おわりに ・・・

以上、帝室財産整理「駅屯土調査」「駅屯土分筆調査」と系統的に所謂「駅屯土」問題の實體を考察し、次に東拓との関連において、「駅屯土」の役割を集中的に把握せんと試みたのであるが、それは極めて不十分なものであり、多くの欠陥を免れない。ただ、冒頭の「はじめに」で述べた筆者の意図が汲み取れればと思つてゐる。

もちろん、明治以降の日本におけると同様に、植民地朝鮮においても、「国有地」問題の核心は「国有林野」<sup>註(1)</sup>にあるのであるが、朝鮮においては「駅屯土」「国有小作地」もまたその中心的な内容をなしていることは理解し得た筈である。

最後に、「大正八年十二月に、大正九年度以降十箇年間に、駅屯土を払下げて自作農を創成すると共に、その払下代金を以て教育機關の増設、水利及農業の調査及奨励、輕便鐵道の補助等、直接民智の啓發、經濟の發達に關係ある事業に充当するの案を樹て、九年度予算に四百二十万円の払下代金を計上し、翌九年八月府令を以て駅屯土売払処分規則を發布して、愈々これが實施に着手した」<sup>註(2)</sup>といわれている複雑な「駅屯土」払下げの實體については、目下分析中にあることを附記しておく。

註(1) この問題の検討は筆者の別稿「日本統治下の朝鮮における山林政策の特質」において行つてゐる。

註(2) 小早川九郎編著前掲書 五一七頁。

(終わり)

(論文)

東洋拓殖株式会社の設立 青木香代子

x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x  
x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x

|                     |                     |     |
|---------------------|---------------------|-----|
| 目                   | 次                   |     |
| 序                   | 第一節 設立の経過とその性格      | 108 |
| 第一節 設立の経過           | 第二節 会社の性格           | 112 |
| 第二節 設立をめぐる動向        | 第三節 経営と世論           | 115 |
| 第三節 土地経営            | 第一節 移民及びその他の事業      | 127 |
| 第一節 事業内容に対する世論の沸騰   | 第二節 会社法の改正と会社の性格の変化 | 127 |
| 第二節 会社法の改正と会社の性格の変化 | 第三節 会社法の改正と会社の性格の変化 | 154 |
| 第三節 会社法の改正と会社の性格の変化 | 結                   | 107 |

306

## 第一章 会社設立の経過とその性格

### 第一節 設立の経過

明治四十年十二月、東洋拓殖株式会社（以下「東拓」と省略する）設立案が、桂太郎を会頭とする東洋協会（註一）から「日韓ノ政治的關係ヲ鞏固ナラシメ經濟的關係ヲ發達セシムル方策トシテハ拓地殖民を措キ他ニ良策ナキヲ信」（註二）じて、閣議に提出された。閣議ではこれに種々検討を加えた結果、翌明治四十一年三月に至り、一韓国農業ノ改良進歩ヲ促シ韓国ノ土地ヲ開拓シ以テ其富源ヲ開發スルハ日韓兩國ノ和親ヲ厚クシ兩國民間ニ於ケル經濟的關係ヲ發達セシムル所以ニシテ刻下必要ノ措置ナルヲ認ム是レ本案ヲ提出スル所以ナリ」（註三）という理由書と共に、東洋拓殖株式会社法案を第二十四回帝國議會に提出したところ、貴衆兩院において若干修正が加えられたのみで通過し明治四十一年十二月二十八日、その設立をみたのである。

ここで少し詳しく設立経過をたどつてみよう。

発起者である東洋協会では早くから、韓国經營は政治面のみではなく、その經濟的關係を密接なものにすることによつて、日韓の關係をより緊密化しようという考えがあつた。たまたま明治四十一年五月中旬、協会拡張のため満韓に出張した東洋協会幹事長小松原英太郎は、同年六月二十六日帰京するや、韓国の經營は殖民的經營を行つて

産業の進歩改良を図ることにより、日韓の經濟的關係を發達せしめる他はない旨を桂会頭に報告したが、これは固より東洋協会の目指す方向でもあり、したがつて桂会頭はただちに協会内に特別委員會を設け調査にあたらせた。同年九月に至り創立趣意書、設立要綱及び業務細則等を起草し、これを審議する一方、元老井上馨、たまたま帰国中であつた韓国統監伊藤博文とも協議をかさね、大体の賛同を得たので、十月に入るといよいよ前の設立要綱を修正したものをもつて大蔵省との交渉をはじめた。

国内において、松崎茂之助、横八郎両東洋協会々員が大蔵省と予算案、特に資金面での政府よりの補助に關して交渉をすすめるかたわら、桂会頭は皇太子（大正天皇）渡韓の隨員として韓国に赴くことがあつたので、韓国首相李完用、内相宋秉世と会見し設立要綱を交附の上、向う四日間に関議において熟議し隨答あるべしと要求したところ、韓国側は大いにこれを歓迎する旨解答を寄せた。

そこで、同年十二月十五日、桂会頭は元老及び閣臣の會議に出席して東拓に關する説明を行つた後、その賛否を問うたところ全員異議なくただちに公式の手續を経て政府に建議することに決したので、東洋協会では創立趣意書より更に明確な「東洋拓殖株式會社設立ニ關スル報告書」及び、事業設計予算書等をもつて十二月二十二日、政府に建議した。そこで同十二月二十六日、韓国拓殖の事業の必要性を認めた大蔵省では、自ら調整した東洋拓殖株式會社法案を大蔵大臣阪谷芳郎の名で西園寺首相にあて提出したのである。

ここにおいて東拓設立案はいよいよ東洋協会の手をはなれ、政府に委ねられたのであるが、明けて明治四十一年一月、伊藤統監より法案に対する意見書が届いた。それは主として、役員に朝鮮人を入れること、朝鮮国内における事業の監督はこれを統監指導の下にある韓国政府にあたらせること、等を提案したものであつた。これらの意



見と、同じく統監府からの希望である、日本に於けると同様の法律則ち会社法を朝鮮にも公布する件につき、政府内に特別調査委員会を作りこれを審議した結果、同年三月に至つて、これらの意見をとり入れ新たに調整した会社法案を第二十四回帝國議會に提出することになった。

そこで、明治四十一年三月十八日、議事日程を変更して審議に入つた衆議院では、原案に若干修正を加えた後これを通過させ、貴族院においても同様に衆議院における修正案をそのまま可決したので、三月二十六日、東洋拓殖株式会社法案は大多數をもつて両院を通過したのである。

その後政府及び東洋協会の両者から創立準備委員が選出され定款案ならびに設立事務案を議定した。さらに統監府および韓國政府側と、日韓兩政府の認可權、韓國における出資土地に関する規定等について種々討議を重ねた上、同年八月二十六日に至り法律第六十三号として「東洋拓殖株式会社法」が公布され、翌二十七日朝鮮においても法律第二十二号として同法が公布された。

ここに至つて、韓國政府より任命された東拓設立委員三十三名及び日本政府任命の日本側委員八十二名は、同年九月二十一日、東京において設立委員總會を開き定款に関する審議を行つてこれを可決した。そこで、翌十月株式募集の公告をなしたところ全株数二十万株より、韓國政府出資土地四五千七百町歩、畑五千七百町歩に相当する六万株、及び重役優先株一千株を控除した募集株十三万九千株に対して、十一月の締切には全応募数は実に四百六十六万五千六百二十一株にのぼり、募集数の約三十五倍に達した。

株式の按分率が決定し四十一年十二月十四日に第一回払込みを結了したので、十二月二十八日、創立總會を開き、總裁に宇佐川一正、副總裁に吉原三郎、同じく岡泳崎

以下理事は岩佐理蔵、林市蔵、井上孝哉、韓相竜、監事には松平直平、野田卯太郎、趙鎮泰をそれぞれ任命し、ここに東洋拓殖株式会社として設立を見たのである。

その資本金は一千万円とし、日本政府より向う八年間、毎年三十万円づつの補助金を受け、さらに社債二千万円を限り政府の元利保証が与えられるという特權を有しており、その目的及び營業科目は次のようなものである。

目的 韓國ニ於ケル拓殖事業ノ經營

營業科目

- 一、農業
- 二、拓殖ノ為必要ナル土地ノ売買及賃借
- 三、拓殖ノ為必要ナル土地ノ經營及管理
- 四、拓殖ノ為必要ナル建築物ノ売買及賃借
- 五、拓殖ノ為必要ナル日韓移住民ノ募集及分配
- 六、移住民及韓國農業者ニ對シ拓殖上必要ナル物品ノ供給並其ノ生産又ハ獲得シタル物品ノ分配
- 七、拓殖上必要ナル資金ノ供給
- 八、附帶事業トシテ水産業其ノ他拓殖ノ為必要ナル事業ノ經營

補註

以上の設立の経緯は全て、東拓発起の「東洋拓殖株式会社創立願末書」によつたもので、本節では單に事項として設立経過の概略に触れるにとどめた。

## 第二節 会社の性格

以上、会社設立の経過にも見られるように東拓は決して単なる一私会社ではなく、早くから政府の手に委ねられ国家の援助の下にあつた、半官半民の特殊会社である。会社設立の表向きの趣旨はあくまで「我國ハ独リ政治的方面ニ止ラス経済的方面ニ於テモ之ヲ扶掖啓発シテ文明ノ恩沢ニ浴セシムルノ責任一層重キヲ加フルアリ殖産興業ノ途ヲ振興シテ富源ヲ開拓シ民力ノ涵養ヲ図ル」(註四)ためであつたとされている。それを裏付けるように、さらに東拓業務要覧(昭和十五年十月、四頁)は東拓の由来をこう述べている。「内鮮人交流の歴史は由来する所極めて遠遠なるものもある。明治三十七、八年戦捷の結果及同三十九年日韓新協約の締結を契機として日本は政治的のみならず経済的にも韓国を指導誘掖すべき重責を帯ぶるに至つた。斯くてまず韓国の富強を計り一般民生文化の恩沢に浴せしむる故も有効適切なる方法として同国の農業を開発せんとする目的の爲に云々」

しかしながら、このように韓国民の、ために、韓国を開発するとうたいながら、その実日本の真の魂胆は東拓をして、大陸への足場として或いは城壁として、朝鮮半島をさ

らにしつかりと日本に結びつけるためのものとするにあつた。日露戦争後、明治三十九年には統監府がおかれ、翌四十年七月には日韓新協約が結ばれた。かくして朝鮮半島は事実上日本の保護下におかれたわけである。しかしそう

は云つても韓国はいまだ形式的には独立国であり、「政治上並に軍事上に於ける対韓政策の要綱定まれりと雖も如何にして朝鮮の富源を開発助長すべきやの殖産興業上の対韓政策は未だ定まらざ」(註五)る現状であり、しかも新興日本が大陸に進出するにあたつて朝鮮半島は必要欠くべからざる重要性を有していた。(註六)。そこで一我國の大陸経営遂行の拠点として其地位を育成強化すべく、先づ農業経営が目論まれた(註七)たのであるが、こうした状況の中にあつたまま東洋協会より提出された拓殖会社案は、まさに国策に一致するものであつた。この間の事情に関しては水町政府委員の議会における次のような発言で一層明らかとなる。即ち、「日韓の關係は現状のまま放任する能はず。国庫會計の上より見れば多少無理の感あるも特別の施設經營を断行するの要あり。此の計画に就ては日露戦争の当時より多少の考察を立て東印度会社の如き趣旨に基く会社を設立して日韓兩國を密着せしむる必要を認められり」(註八)。

こうした政治的にも経済的にも韓国を日本の掌中に収めておこうという考えは当時多くの人が抱いていたものであり、したがつて議会における審議の際も、問題となつたのは、会期切迫の時にあたつて斯くも重要な案件を提出することは議院に盲従を強いるものである、という点であつた。そこでこうした事業は一個人または一私設会社にまかせるべきではないという意見が強く、ために東拓が国家の厚い補助を受けるという点については論議されなかつたのである。ただ、島田三郎議員が明治四十一年三月二十四日衆議院において、「一個人、私会社の全ての膨脹を八九まで絶滅して、政府自らやれば政府萬能主義の人の考を尙足せしむるか知らぬが、私は決して健全なる

政策と見ることはできない」(註九)として国策会社のあり方を批判している点は注目される。またこのような国策会社の設立によつて、在韓邦人の個人営業が圧迫されるのではないかという不安を抱く人々もあつたが、しかしこれらは全くの少数意見であり、結局葬り去られたのである。

以上みてきたように、東拓はまさしく東洋協会が国家とタイ・アップして朝鮮に作つた一常設に国家の諸政策に順応協力することを信条としてをる」(註一〇)「国策会社」に他ならなかつた。秘蔵プリントになる「東拓経営ノ基本観念」(昭和十二年十二月二十四日)には、「明治三十七、八年ノ日露戦役ヲ契機トシテ我國防第一線トシテ韓國ヲ真ニ力強イモノニセネバナラヌ即チ我が勢力範圍トシテ露支ニ対スル堅固ナル城壁ヲラシメネバナラヌソレニハ當時ノ韓國ハ我が保護國デハアルガ獨立國デアルカラ何モカモ思フ通りニヤルコトハ出来ヌ先ツ以テサシサワリノナイソレテ有効ナル方法即チ同國ノ最モ貧弱ナル農業カラ開発シテ行カウ。……勝レタル技術ト豊富ナル資金トニ依テ同國ノ富源ヲ開発シ経済的ニガツチリト結び付カウ。……ソノ目的ノタメニ政府ノ代行機關トシテ生レタノガ東拓ナノデアル」とあり、さらに、東拓自身明言している如く「国策代行機關」(註一一)であるという点に、東拓の性格が明確に表われている。

ここにおいて、東拓の營業科目中第一にあげられている「農業」は、会社の真の目的ではなく一つの手段にすぎないことを知るのである。したがつて貴族院の特別委員会において政府委員がなした「若し本期の議会に此の法案が通過致さぬことになればその結果は一年遅れることになつてさうなると云うと現今及將來の事情に照して到底許すことの出来ない訳であるからしてそれで此際是非とも本案が通過するやうにならなければ國家のために非常に不利である」(註一二)という説明も、その真の意図を示すものとしてうなずけるのである。

### 第三節 設立をめぐる動向

このように、東拓は強い国家的色彩を帯びて誕生したので、日本国内においても又朝鮮においても様々な反響をまき起し、且つその裏にはたぶん政治的な動きがみられたのである。

当時内相であつた原敬は明治四十一年三月二十一日の日記で、「桂等は別に之(東拓)をさす。引用者)を利用せんとの野心もあらんが大体の趣旨には左まで反対する理由もなし」(註一三)と述べ、故に翌二十二日政友会政務調査会において、「幹部派には兩三日來の慰撫若くは圧迫にて充分内部の纏り就き政務調査会にては何等の異議もなく原案に盲従し直に代議士会に於て決定することと多寡を括り居たりし模様なるが政務調査会に於いては案外にも非常なる論争(註一四)を惹き起し幹部は大狼狽を極め」た結果、原内相は「辯解及び慰撫の任に當り」本案は決して他党の提案にあらず現政府の提案なり本案決定の如何に依つては政府は將來の施設に於て多大の便宜を失ふべし」(註一五)という大胆な発言さへ行つてゐる。

また、大同派にあつては、「韓國拓殖案は基本前内閣派が韓國に於ける利權掌握の爲めに企劃せられたるものなれば大同俱樂部が之に異議なきは勿論にして」(註一六)といわれる。こうした政党の利害關係は、はつきりとその筋道をたどることはできないにしても、多少とも各派それぞれに政治的思惑があつたであろうことは、これらの

記事によつても充分うかがい知れるのである。

東拓設立の発起者である東洋協会の当時会頭であつた桂太郎について、先述の如く原敬が「野心もあらんが」と述べており、また政府が明治四十一年三月十八日会社法案提出理由書として衆議院に提出した一文中にも、「東洋拓殖会社ノ経営ヲ以テ桂会頭等ノ勢力ヲ扶植スル一方策トシテ實現シタルモノノ如ク論議スルモノ之レアルニ至レリ」(註一七)とあるのは、桂会頭自身はともかく、当時の世論の中に桂会頭と会頭をめぐる一派の人々の野心を疑う者があつたことを示すものであらう。そしてまた、こうした疑問は当時の桂会頭のおかれた立場を考えれば当然のことともいえる。何故ならば当時桂は、明治三十九年一月第一次桂内閣を解散し、明治四十一年七月西園寺内閣の跡を襲つて第二次桂内閣を組織するまで丁度一年七ヶ月間閑散の狀態にあり、東拓案はその間に出されたものだからである。しかもその後彼は首相になるや、大蔵大臣を兼ね、したがつて国策を背負つてたつ東拓に対し多大の便宜を与えることもできたのである。しかし、桂会頭の野心については、伊藤統監の朝鮮に於ける勢力に對抗するため、といわれるがその真疑のほどは判然としないし、又事実であつたとしても、東拓が果して桂会頭等の野心策といわれるものにどれほど役に立つたかは疑問である。しかし、いづれにせよ、桂が早くから朝鮮の經營に關心を寄せていたのは事實であり、したがつてまた、東拓をして朝鮮啓蒙に英國の東印度会社の役割をなさしむべし、という考えであつたことはいふまでもないのである。(註一八)

こうした桂の積極的な動きに対して、「少なくとも朝鮮のことは乃公に一任して可なり」と云ふ強い信念を持つていた(註一九)伊藤統監は東拓の設立に反対であつたと伝えられるが、實際は全く反対というよりも、こうした会社を作ることによつて徒ら

に朝鮮人を刺戟することを恐れたと云つた方がよい。

当時、何といつても朝鮮及び朝鮮人の實際に關しては伊藤統監がもつともよく知つており、したがつて統監の朝鮮に關する意見は當然傾聴さるべき点があつた。特に次の一文は伊藤統監の東拓に對する意見のみならず、朝鮮の様子もわかるので少し長いが引用してみよう。明治四十一年一月十四日、日本政府が作成した東洋拓殖株式会社併其ノ實行方法ニ關シテハ日韓現在ノ政治的、經濟的關係ニ關シテ大ニ熟慮ヲ要スルモノアリ大蔵大臣ヨリ閣議ニ提出相成候東洋拓殖会社法案ヲ見ルニ該会社ノ株式ハ日本兩皇室、政府及ヒ臣民之レヲ所有スルコトヲ得レトモ会社其ノ者ハ即チ純然タル日本兩会社ニシテ帝國法ニ依リテ之レヲ組織シ帝國法ニ從テ韓國ニ於ケル事業ヲ經營セシメ重ナル役員ハ皆帝國政府自ラ之レヲ任命セントスル者ノ如シ然レトモ此ノ如キ方法ヲ以テ韓國ニ臨マバ當ニ会社カ其ノ目的ヲ達シ能ハサル而已ナラス帝國政府ノ對韓政策上ニモ由々敷影響ヲ及ホスノ虞アリト存候由來韓國人ハ猜疑心深ク殊ニ日本ニ對シテハ歴史上ノ關係ヨリ厭惡ノ念甚タシク執レノ日カ日本ノ為メニ社稷ヲ滅セラレ併呑ノ悲運ニ遭遇スヘシトハ上下一般ノ内心ニ介抱スル危慮ニ有之候尤モ去ル明治三十九年統監府開設以來我カ真意ノ韓國ヲ扶植スルニ在リテ合併ノ意ナキヲ明ニシ銳意其ノ疑惑ヲ解クニ努メタル結果今ヤ少数ノ具眼者ハ昔日ノ疑念ヲ放チ我カ誠意ノ在所ハ一日ヨリ韓國上下ニ貫徹シ日韓ノ交誼漸ク円滑親密ヲ見ントシツツアレトモ多數ノ韓人ハ尚ホ日本ノ野心ヲ疑フノ狀態タルヲ免レス候然ルニ突然大規模ノ拓殖会社ヲ組織シ純然タル日本ノ会社トシテ要部ハ悉ク日本人ヲ以テ之レニ充テ大資本ヲ運用シテ多數ノ日本人ヲ韓國ニ移住セシメ其ノ土地ヲ開墾シ場合ニ依リテハ林業、畜産業、水産業、鉱業ニ從事シ甚タシキハ農産物ヲ原料トスル各種ノ製造業ヲモ經營セントスルト聞



カハ其ノ風評ノミニテハ一般韓人ハ勿チ疑惑ヲ抱キ此ノ計ニタル畢竟拓殖ナル美名ノ下ニ韓国ノ土地ヲ奪ハントスル日本政府ノ策略ナリトシ義ニ長森藤吉郎ノ荒ぶ地開墾計画ノ際ノ如ク各方面ヨリ激烈ナル反抗運動ヲ開始スルハ讀者ヲ待タスシテ明白ト存候。後略。」(註二〇)。また更に伊藤統監は、「其成敗は独り会社一個の利害、株主の得喪のみならず日韓兩國の休戚に關して重大なる影響を与ふるものある」を恐れ、ために「拓殖会社は自然統監府の施政と相待つて其經營を進めざるべからず」(註二一)と釘をさすことを忘れてはなかつた。その心配は渡日した朝鮮側東拓設立委員に与えた訓辭の中にもあらわれてゐる。即ち、「今度韓国内に拓殖会社が出来ることが、韓国の諸君は決して日本の真意を誤解することのない様にしてもらひたい。これは突に日韓兩國の共存共榮のために生れ出たものである。」(註二二)。

このように東拓の根本趣旨には伊藤統監も賛成しており、ただそのやり方において、日本国内で考へてゐるよりも、もつとやわらかい摩擦の少いものにすることを望んだのである。したがつて「東洋拓殖」という名称に關しても伊藤統監の「韓国拓殖といふ呼名は韓国官民に好感を与へないだらうから東洋拓殖にした方がよからうといふ助言に基いて」(註二三)「東洋拓殖」となつたといわれる。(註二四)

しかし、この「東洋拓殖」という四字は更に微妙で、伊藤統監の氣持としてはこうであつたかも知れないが、政府側の抱負は「東洋拓殖」の四字に示さるる如く韓国の農業開發を通して日本の大陸政策遂行の前衛たるの使命を含蓋せしめたもの」(註二五)とみることにあり、事實、「東洋拓殖会社は其の設立当初に於ける意味に於ても即ち其の名が東洋とある如くに決して朝鮮だけに局限すべき意味ではなかつたのである。併かし差し当り必要なのは朝鮮であるからと云ふやうなことで主に朝鮮の仕事をして居つた」(註二六)のである。ここにも「拓殖ナル美名ノ下ニ」大陸進出の第一歩

たる重責を荷つた東拓の姿が非常に明確に表われてゐるといえよう。

東拓のこうしたかくされた使命に關しては、創立当初あくまでかくされたものであつたが、國の保護を受け大資本を擁したこのやうな会社が設立されることにより、個人的な事業が圧迫されはしまいかという懸念、また、以後八年間毎年三十万円ずつの補助金を与えるというのは多きにすぎはしまいかという疑問は、議會における審議中にも散見されるが(註二七)民間における一般世論がこの拓殖会社案を如何に受取つたかについては、はつきりした資料がない。ただ前出の「東洋拓殖会社法案ノ理由書」中に「右法案ノ提出前後ニ於テ物議ノ起リシモノ甚タ多ク」とあるのは、その間において何等かの反対意見があつたことを示すものと思われる。しかし、また一方では「韓人が何とひがみて、韓半島は政治に於て日本人の手を假らざるを得ざる如く、殖産興業に就ても到底日本人の手を假らざるべからず。いわんや此韓半島の爲めに支那と戦ひ露國と戦ひ且つ韓國保護の爲め年々數千万円の血税を負担せる我日本國民は如何に無欲とは言へ、多少の要求を此韓半島に提出せずして可ならんや」(註二八)という勇ましい意見の下に、「韓國の保護權韓國統監政治の内容を充實せしむるものは一に此の拓殖会社の活動にある」(註二九)として大いに東拓設立を歓迎してゐる向きもあつた。

しかしながら、問題はこのような会社の設立を當の朝鮮側が如何に受取つたか、というものである。

韓國政府の首腦がはじめて東拓案を受取つたのは、明治四十年十月二十二日、當時皇太子(大正天皇)に隨行して渡韓中であつた桂会頭よりであつた。その後二、三日の協議の結果宋秉世農相は、「東洋拓殖ノ事業タルや東ニ韓國ノ貧弱ヲ救済シ韓國民ノ幸福ヲ増進スル方策トシテ最モ適切ナル經營ナリト思料セラルルヲ以テ一日モ早く

着手セラレ度韓國ノ官民ハ熱心ニ其經營ヲ歡迎ス」(註三〇)と述べ、何等の異議もさしはさまなかつたのである。勿論はつきりしたことは知らされていなかったであろうし、たとえ東拓設立の真意がわかつたとしても、事実上完全に日本の保護下におかれた韓国政府としては拒否することは不可能であつたろう。

こうして東拓案は韓国政府に歓迎されたが、のみならず、東拓設立委員として各道より有力者を募つたところ、各道とも競争が激しく、特に京城においては定員七名に對して二十余名の希望者が互に選任を争つたため、当局も人選に非常な困難を感じるほどであつたという(註三一)。しかし、この設立委員の渡日も結局は名目上のものにすぎなかつた。たとえば、勝田理財局長は朝鮮側設立委員に對して「委員會に於ての議事は形式にすぎず」(註三二)と述べ、それより先、京城を立ち、日本へ向う委員に行つた訓辭の中で曾副統監は、「渡日後は充分能く文明の事物を視察し帰來各日地方民に對して充分説明せらるべし」(註三三)と云つて恰かも視察旅行であるかの如く取扱つてゐる。

更に副總裁、理事の選出にあたつては、目選他選共に競争が激しく、特に京城新聞(明治四十一年十月七日付)によれば、「総埋大臣李完用は自家の親戚李鎮成を挙げて理事となさんと目下大に尽力中なりと云ふ而して李が何の爲に自家の手より理事を出さんことを欲するかと云ふに其魂胆は外ならず結局彼は自家の所有なる扶安、金邊其他に於ける荒ぶ地同様の田地を拓殖会社に押付け利得を恣にせんが爲なりと云ふ尤も拓殖会社に就ては内相宋秉世も李完用に劣らざる荒ぶ地押付け策を目下講究中なりと云へば」とあり、韓国政府部内にこのような売國奴的態度をとるものがあつたことが想像されるのである。

しかし、こうした政府側の動きに對して、設立委員として選出され渡日した者の中

にも反対意見を唱えるものがあつた。設立委員の一人であり、後に初代理事となつた韓相竜氏は當時をふり返つて次の様に述べてゐる。「同会社設立委員の中にも相当反対意見を持つてゐる人も多く、下関に上陸して一泊した夜、宿の一室に集まり會談しました。席上、会社設立反対の空氣が益々濃厚となり、東京へ着いたならば反対意見述べやうではないかなどと云ふ意見も出る有様でありました。」(註三四)。しかるに、その後如何なる話合いがなされたのか、實際の審議においては何等反対意見は出ず、ただ会社定款中第五章第五十二条の「拓殖上必要ナル土地ノ売買及ヒ貸借、拓殖上必要ナル土地ノ經營及ヒ管理、拓殖ノ為必要ナル日韓移住民ノ募集及ヒ分配」とある点に關し、「韓國民ノ意思ニ反シテ或ハ土地ヲ買収セラレ若クハ甲所ヨリ乙所ニ移住ヲ強ヒラルル等頗ル不安ニ堪ヘサルヲ以テ本人ノ承諾ヲ經サレハ土地ヲ買入ルルコトナク又ハ移住ヲ強ユルコトナキ旨但書」(註三五)を加えられるよう希望した。しかしこれも大蔵省の名で説明書が手交されたのみで、何等の但書も加えられなかつた。やがて、東拓が業務を開始して後、設立委員が恐れた事態が生じたのであるが、それについては後に触れよう。

政府が選出した委員においてさえもかかる状態であつたから、朝鮮の一般民衆にあつては相當の反対が行われたのは當然である。「韓民中東洋拓殖は韓國の土地をりやく奪せん爲め設立するものと称し反対する徒あり」(註三六)といわれ、京城新聞においても、定款に對する設立委員の反対の記事を掲げたあとにつづけて、「之を一見すれば韓國委員等の沒常態として一笑に付すべきのみ、然れども一方より觀察すれば之れ韓國上下の恩惑を代表せるの綱なきにあらず」(註三七)と認めざるを得ず、また、伊藤統監も明治四十一年九月二十四日の設立委員會において、「韓國ノ人心ハ如何カト云フニ拓殖会社ハ韓國ヲ利スルモノデアルカト解スルモノハ極メテ鮮ク(中略)拓

殖会社ハ韓国ノ土地ヲ日本人ガ奪フノデアルト間違フタコトヲ思フ者ガ多」(註三八)いと述べていることから察するに、やはり相当の反対があつたとみていい。(註三九)更に次の様な発言は朝鮮人の反対の事実を裏付けるものである。即ち、朝鮮側設立委員に対し勝田理財局長は「東洋拓殖会社を創立するに至りたるは日本の為にあらずして、韓国の産業を開発するが為なり」(註四〇)といい、又宇佐川東拓総裁は、「韓国拓殖に關する日韓兩國人の注意事項」と題して、韓々兩國共存共榮のためである点を強調した後、「是は法律にもある如く日韓兩國政府の監督の下に立つて居るのであるから、韓国側から云へば即ち韓国の会社であるといふことを頭に入れて置いて貰はなくてはならぬ」(註四一)といつてゐるが、韓国の会社なりといつてまで、朝鮮人の懐柔に懸命にならなければならなかつたのは何をさすか、そこには当然一般民衆の反対があつたと見るべきである。

彼等の反対し、恐れるところは土地に關してであつた。明治四十一年九月十二日、大韓協會が東拓設立に關し政府当局に提出した質問書に曰く、「東洋拓殖会社設立の説の国内に伝播せられて後京郷の与論は沸騰し各自疑懼の念を抱く或は曰く我國の遺利を没収し該会社の占有に歸せしむ或は曰く吾人は將來住居するに場所なからんと」とあり、更に、この記事を報導した松宮春一郎氏はこれに關し、「質問事項は固より云ふに足らざるも韓国一部人士の東洋拓殖会社に対する感觸を察すべきものあり」(註四二)として、これらの意見も決して捨て去るべきものではないことを認めてゐる。こうした反対こそ、まさに伊藤統監が恐れたところのものであつた。したがつて、再三再四、この会社は専ら韓国繁榮と韓國民の福利増進のため、「日韓共同」で行うものであると説得にとめなければならなかつたのである。しかし、それでも尚、「東洋拓殖会社の設立に就て韓民一部の間に兎角面白からざる感觸を抱く者あり」、遂

に明治四十一年十一月六日、趙農商工部大臣は各道の觀察使に訓令を發し、拓殖会社設立の趣旨、目的、業務等に關して、「韓日合同の資本を以て此の大經營に當り本邦富源の開発に全力を傾注せしめんことを期す」(註四三)ものであつて決して所有者の承諾なしに土地を買収することもなく、意志に反して奪住せられることもない旨、明示せざるを得なかつた。しかも、この背景に統監府の指示があつたであろうことは容易に察し得られるのである。

かくして、東拓は内外の賛否両論のうちに成立したのであるが、その初代の重役の陣容を見ると、総裁に現役陸軍中将宇佐川一正男爵、副総裁に内務次官吉原三郎、朝鮮側から閔泳綺、理事に三重県知事林市蔵、佐賀県知事井上孝哉、日本銀行の岩佐理蔵、朝鮮側韓相竜、監事に野田卯太郎、貴族院議員松平直平子爵、朝鮮側趙鎮泰という「大物揃ひでいわる軍部、官僚、政界、財界総動員の顔触れ」(註四四)であつてそれだけでも、如何に東拓の使命が重要視されていたかがわかるのである。

しかも、明治四十二年一月二十九日、いよいよ本店が京城に居を構えるや、二月一日全員下関に集合して釜山に向い、「社員は皆制服を着てビストルを腰に佩用して上陸した」(註四五)。その様子はまさに、「苟くも東拓の朝鮮經營に反対しやうものなら直ちに兵馬の劍がモノを云ふぞと云ふ感じを与えた。時恰も日韓新協約の締結などで物情騒然たる時期であつたので幼稚な朝鮮人が仰天したのも無理はなかつたのである。」(註四六)といわれるほどであつた。(當時はまだ「義兵」と呼ばれる反日運動も激しく、「東拓の經營活動には幾多の血を見る位の決心なかるべからず」(註四七)といわれた時代でもあつた。)

以上、東拓設立に關する事項と、東拓に托された特殊使命についてみてきたわけであるが、その事業内容の中心をなす土地經營に關しては特に問題があるので、次章で

二、三考察を試み、又移民事業及びその他の事業について簡単に触れ、更に以上の事業に対する世論の沸騰について述べることにしたい。

註

- 註一 桂太郎を会頭とし、「東洋ニ於ケル平和文明ノ事業ヲ裨益シ台湾ハ勿論韓国及滿洲ニ於ケル諸般ノ事項ヲ研究シ以テ彼我ノ事情ヲ疎通シ相互ノ利福ヲ増進スルヲ目的」（「東拓創立願末書」による）とする団体。以前は台湾協会と称していたが、明治四十年二月、東洋協会と改称した。
- 註二 東洋協会々員嶺八郎氏起草の拓殖案、東拓創立願末書、大正一年、（以下願末書と省略）四頁
- 註三 明治四十一年三月十八日政府より衆議院に提出した「東拓法案ノ理由書」願末書、一六三頁
- 註四 東拓十年史 一頁
- 註五 雑誌「朝鮮」三卷一號 明治四十二年三月、一〇頁
- 註六 朝鮮半島をして大陸への敷石とする考えは、勿論日露戦争以前からあつたものである。たとえば次の一文「韓半島は膨張的新日本の発展地なり我が同胞民族にして大陸的の經營を為さんと欲せば必ずや韓半島を以て其立脚地と為さざるべからず」（「韓半島の新日本」佐藤政次郎、明治三十七年七月、一頁）は当時の日本の朝鮮に対する考え方を物語つていゝといえよう。
- 註七 東拓会社要覽 昭和十八年 一頁
- 註八 外交時報 一二六号 明治四十一年五月 一五頁
- 註九 大日本帝國議會誌第七卷 第二十四帝國議會衆議院
- 註一〇 東拓会社要覽 昭和十八年 一三頁
- 註一一 同 右 三頁
- 註一二 大日本帝國議會誌第七卷 第二十四議會貴族院
- 註一三 原敬日記 ㊦ 内相時代篇 一八二頁

東洋拓殖株式会社の設立

- 註一四 反対意見は会期が切迫すぎている、或いは国庫に負担がかかりすぎるといふもの。（多田、渡辺、立川議員等）修正の上可決せんとするもの。（吉松議員その他少数）。東京朝日新聞 明治四十一年三月二十三日
- 註一五 東京朝日 明治四十一年三月二十三日
- 註一六 同 右
- 註一七 願末書 一六三頁
- 註一八 東拓三十年の足跡 北崎房太郎 昭和十三年 二頁（以下、三十年の足跡と省略）「韓国の啓蒙に英國の東印度会社の役割をなさしむべしと云ふのが桂公の考へであつたことも想像し得られる」とある。
- 註一九 同 右 三頁
- 註二〇 願末書 一二八一—一三〇頁
- 註二一 東洋時報 一二五号 明治四十二年二月 七一頁
- 註二二 韓相竜君を語る 韓相竜氏遺歴記念会 一一一頁
- 註二三 同 右 一〇九頁
- 註二四 岡野政府委員の説明に「他の国名をとりて我國の法律に定むるは穩當を欠くに付此二字（東洋。引用者）を冠せたる次第」とある。東京朝日 明治四十一年三月二十一日
- 註二五 東拓業務要覽 昭和十五年 四頁
- 註二六 三十年の足跡 三九頁 勝田主計「菊の根分」による。
- 註二七 大日本帝國議會誌第七卷参照
- 註二八 朝鮮 二卷二号 明治四十一年十月 九七頁
- 註二九 同 右 二卷六号 明治四十二年二月 二二頁
- 註三〇 願末書 四五頁
- 註三一 京城新聞 明治四十一年九月三日
- 註三二 東洋事報 一二〇号 明治四十一年九月 七八頁



- 註三三 京城新聞 明治四十一年九月八日
- 註三四 韓相竜君を語る 一一〇頁
- 註三五 顯末書 二八六―二八七頁
- 註三六 東京朝日新聞 明治四十一年四月二十五日
- 註三七 京城新聞 明治四十一年九月二十七日
- 註三八 顯末書 二八七頁
- 註三九 京城新聞 明治四十一年八月十八日の記事「中義兵の妨害について触れている」。
- 註四〇 東洋事報 一二〇号、明治四十一年九月 七八頁
- 註四一 同 右 一二三頁 明治四十一年十二月 三頁
- 註四二 外交時報 一三一号 明治四十一年十月 三九頁
- 註四三 同 右 一三三号 明治四十一年十二月 三三―三四頁
- 註四四 三十年の足跡 二頁
- 註四五 東拓回顧三十年 「開拓半世紀」より本倉文雄 昭和十五年 二五一頁
- 註四六 三十年の足跡 三頁
- 註四七 朝鮮 三卷一号 明治四十二年 三月 六七頁

## 第二章 経営と世論

### 第一節 土地経営

東拓の社有地と称する土地は韓国政府よりの出資地と買取地とに分けられるので、まず政府出資地に関して、その性格が如何なるものであつたかをみてみよう。

(一) 韓国政府出資地

元来、東拓はすでに前にも触れたように、「日韓兩國ノ共同経営ヲ以テ」という大義名分の下に設立された会社であり、しかも、日本政府が毎年三十万円ずつの補助金を与えるというのであるから、当然韓国政府も何等かの形で東拓に出資しなければならなかつた。しかるに、「韓国ニ於テハ現金ヲ以テ払込ムコト極メテ困難ナル」状態であり、したがつて「会社ノ経営ニ対シ便利ナル土地ヲ以テ出資セシムルコトニ取計」(註四八)つたのである。

しかし、「取計つた」とはいうものの、東拓の目的とするところは「農業」でありしたがつて土地の経営による収入に重きがおかれたから、土地による出資ということにはむしろ望ましかつたのである。明治四十年十二月、閣議案として大蔵大臣の名をもつて出された設立要目中に早くも「韓国政府ヨリ払下ヲ受クル土地ノ代価ハ拓殖債券ヲ以テ支払フコトニ韓国政府ト協定スルコト」(註四九)という一項がみられ、翌四十年二月、政府特別委員の出した設立要目においてはさらに、「韓国政府ヨリ払下ヲ受ケタル土地ノ代価ハ東洋拓殖債券ヲ以テ支払フコトヲ得ルモノトス」(註五〇)と具

体化されている。

しかし、出資土地の種類、面積等に関してはまだ何等規定がなく、「東洋拓殖株式會社定款案」(明治四十一年七月)中、第二章第十条に「出資者氏名 韓国政府、財産種類 田、畑、山林等何町歩、財産価格 円、以上ノ出資財産ニ対シ与フル株式ノ数株」とあるのみであつたが、その後、統監府及び韓国政府(主に度支部)と協議の結果、韓国政府は駅屯土中田畑各五千七百町歩を出資し、東拓はこれを三百万円と見つもり、六万株をもつてこれにあてることが決定された。この価格が後に種々問題を起こすのであるが、そもそも「駅屯土」という土地の性格自体に問題があるので、ここでこれについて簡単に触れておきたい。

ここでいう「駅屯土」とは駅土、屯土、宮庄土及び陵園墓附屬地等を総称するもので、駅土とは即ち「李朝以前より公文書の通伝と公務に因り旅行する官吏とのために各道に駅站を設け之に駅卒馬匹を配置し其の給与に充つる為給付せられたる田畠(朝鮮においては田を畚と称し、畑を田又は旱田と称していた。引用者)なり」また屯土とは「往昔警備の爲戊卒を置き其の耕食に充てたる土地」(註五一)であつて、宮庄土とは一司七宮の所有する土地で、「経国大典及統大典ニ依レハ内需司及七宮ハ宮庄土ヲ所有シ其ノ収入ヲ以テ王室ノ内需、祭享ノ資ニ供シタルハ古来ノ慣例ニシテ」(註五二)といわれるところから、御料地及び皇族所有地のようなものともてよい。しかしこうした制度は明治二十七年の申午改革の後廃止され、これらの土地は宮内府の管理するところとなつたが、明治四十一年、韓国帝室財産整理の結果、「駅屯土」は全て国有化され韓国政府度支部においてこれを管理することとなつた。

かくして、所謂「駅屯土」は「国有地」として宮中よりこれを切離し、政府自ら管理することとなつたのであるが、「其田地(駅土をさす。引用者)の好悪は直接駅吏

の収入に影響を及ぼすを以て彼等は勉めて美田を択びて之を駅土に編し子孫世襲して其收穫に浴せる次第なりしを以て現下の国有地中に在りては最も肥沃のものに属せり」(註五三)とされ、したがつてこのように良好な駅土を含む土地を一万一千四百町歩も引継ぐということは、「本社の爲めに利益頗る大」であつたのはいうまでもない。しかもその引継ぎにあたつて、「駅土及宮庄土約十萬町歩に就き一々之を選擇して受領する」特權さえ与えられているのである。(所謂「駅屯土」とは宮庄土をも含むものであるが、中にはこの引用文のように區別して使用されている場合もある。)

しかし、實際に於いては、「其種類數多に分れ管理の方法一ならず殊に各道各郡に跨り地質土性及水利關係相異」(註五四)り、「宮内府所管時代ニ在リテハ前述(「宮内府所管時代ニ於テハ駅屯土ハ宮中收入ノ一財源ト爲スト共ニ收入ノ擧揚ノミヲ唯一ノ目的ト爲シタルヲ以テ土地其ノモノノ管理ニ關シテハ何等顧ミル所ナク」とある。ノ如ク土地ノ管理ハ度外セラレタルヲ以テ收租關係者及小作人ハ之等管理ノ地摩ノ虚ニ乗シ公土ヲ冒認私売シ又ハ肥沃ノ公土ト稱シ私土トヲ交換セル等不正行為ハ隨所ニ行ハレ」(註五五)と、さらに、「元人民の所有地なりしを地方官吏のチウ求を免るる爲に仮りに駅屯土と爲し置きたるも少なからず」(註五六)という状態であり、政府と小作人との間に立つて利益を取得する名義上の小作人がいるなど、とかく紛擾の絶えない土地であつたことも事實である。

韓国政府出資地である「駅屯土」はこのように複雑な性格をもつたものであつたがしかしながら当時この出資駅屯土に關して最も大きく問題とされたのは、田畑各五千七百町歩の価格を三百万円と見積ることの妥当性にあつた。

何故ならば、当時朝鮮における度支部制度は極めて不完全且つ不統一な状態であつたから当然土地面積の標示にも正確を期することはできず、「土地ハ斗落又ハ日耕數

ノ不正確ナル稱呼ヲ用キタル為其ノ實際面積ヲ知ルニ由ナク」(註五セ)と云われる有様であり、しかもそれが殆んど全国に散在しているのである。(斗落も日耕も共に面積を表示する呼称で、一斗落は概一斗一内地マス五升内外一を播種するに要する面積をいい、一日耕は牛一頭農夫一人で一日に耕し得る面積を云うが、「土地ノ肥瘠、播種ノ厚薄ニ依リ面積ニ差等アルヲ免レス概シテ田一斗ハ内地ノ四畝歩乃至六畝二十町歩ニシテ畑一斗落ハ二畝歩乃至三畝十歩ナルモ往々田一斗落ニシテ二畝歩以下ノモノアリ或ハ一反歩以上ナルアリ畑モ亦之ニ類シ其面積極メテ不同ナルヲ免レス」と云われ、又日耕数に關しても、「土地ノ硬軟、犁ノ利鈍、耕牛農夫ノ強弱等ニ依リ功程ニ差異アルヲ以テ其ノ面積ノ不同ナル猶ホ斗落ト扱フトコロナク一日耕ノ面積或ハ三反五畝歩ナルアリ或ハ八反五畝歩以上一町歩ニ及フモノアリ」(註五ハ)といわれるように、不正確極まりないものであつた。

このような状態であつたから、設立委員会における定款審議の際も、「特ニ土地ノ評価ハ甚タ高ク今我農商務省技師ノ調査ニ依ルモ水田一反歩金參拾円以上ノ場所ハ唯黃海道アルノミニシテ其他ハ一反歩僅カニ貳拾円内外ニ過キス然ルニ何ヲ苦ンデ一反歩ニ付約參拾五円余ノ平均価格を以テ土地ノ出賃ヲ承諾スルニ及ハンヤ」(註五九)という意見の下に、第十條削除説が盛んであつた。しかるに、「統監府並ニ韓國度支部トノ交渉ニ於テ又如何トモス可カラサル内情アリシヲ以テ已ムヲ得ス原案ニ決スル事」(註六〇)とされたのである。

韓國政府出資地は以上のような経過を経て、納得のいかないままに決定されたものであつたため、この条文を含む定款が公布されるや、各新聞、雑誌は一斉に駅屯土価格の不当なることを攻撃した。しかし明治四十二年三月から四月にかけて、ごうごうたる非難を浴びながらも、「会社は最もよき土地を選択して引継ぎたる上之れに改良

を施す時は或る論者の云ふが如き杞憂を要せず」(東拓理事井上孝哉氏の発言。(註六一)と云い、一方では着々と駅屯土調査にとりかかつていつたのである。度支部との取極めに際し如何なる内情があつたのか知る由もないが、「韓国」政府度支部とはいながら定款案に対する「統監府及韓國政府ハ意見ヲ定ムル為(傍点引用者)」一參会したの、參與官である「総務長官代理石塚英蔵、倉富勇三郎、小宮三保松、荒井賢太郎、岡喜七郎、俵孫一、木内参与官代理中村彦、外務総長代理小松緑並ニ書記官中山成太郎、萩田悦蔵」(註六二)といった人々であつて、韓國政府でないことは勿論である。したがつて、日本にとつて不利になるような取極めが行われたとも思われず、その点においては、「内情を知らざる世人が東拓の大欠損などと嘆ぐは無理もなきことながら實際に於ては東拓が韓政府より受取るべき駅屯土は田畑を合せて約三万町歩に達すべきが故に会社は決して欠損などを受くるものにあらずと東拓某重役は新聞紙の非難に対して氣焔を吐きたる由」(傍線。(註六三)という記事は、三万町歩という数字はハツタリであるとしても、内部に何か事情があつたことの一端を示す材料とはなろう。また、そのような事情があつたればこそ、非常な非難の中で駅屯土引継ぎのための調査を行うこともできたのである。

ここに出資駅屯土一万一千四百町歩を三百万円と見積つた根拠について、当事者である度支部次官荒井賢太郎氏の発言があるので、少し長いが引用してみよう。「前略。土地を出賃として拓殖会社に提供する時には官有地は純収入の十七倍半、民有地は二十倍を以て出賃価格とすることに創立委員總會に於て取極められたので、之に由て駅屯賭(賭は租税をさすものであるのに、ここでは駅屯土と同一の意味に用いて引用者)の出賃価格を評定したのである。そこで駅屯賭の純収入を如何にして調査したかと云ふに、駅屯賭は昨年始めて宮内府から度支部に引継いだばかりであるから

全国の土地は、概して、依つて其当時已むを得ず全国に於て、賦税の集積したる箇所九箇所に就て、其中等地の純収入を、其九箇所の内一箇所に、海外に賣き、故に之を除き、其残八箇所の分を平均して純収入を出した。さうすると、出が日本の一反歩に換算して純収入が二円で、畑が九十九銭幾らといふものになる。それを十七倍半したのが、即ち評價額になつて居る。(中略)純収入の十七倍半は、丁度年五分七厘の利息に当るのである(註六四)。これによつて計算すると、二百九十七万四千五百六十三円となつて、田畑一万一千四百町歩は、大体三百萬円となるのである。しかし、引用文からもわかるように、こうした純収入の調査が、そもそも正確なものとはいへなかつたが、さらにつづけて、「尚時価に就ても、今日以後に於て、韓国の土地は、賦税の改良増進、其他経済界の発達に伴ひ、漸次其の価格を増すに相違なきにより」と、時価の増加を見越し、決して損にはならないよう計算されていたのである。

かくして、明治四十二年五月七日、東大門外における、賦税土三百四十町歩引渡しを皮切りに、第一回払込金七十五萬圓に相当する田畑各一千四百二十五町歩の引渡しが行われた。實際は、一畑は管理収入其の他の点に於て有利なるもの少なきを以て、実地引継の場合に於ては、利廻りの良好なるものの外は、之を田に換算交換(註六五)、「一定ノ換算価額ヲ以テ」と「東拓十年史」は伝えてゐるのみで、如何なる価額で換算されたのか明らかではないが、東拓にとつて有利な率であつたことは、恐かである。した結果、田一千八百三十町歩、畑六百五町歩となり、残りの四分の三についても、「其ノ払込期日ニ至ル迄ハ明治四十一年度(隆熙二年)ニ於テ旧韓国政府カ該土地ヨリ収入セル小作料額ノ八割ヲ以テ貸借スルコトニ協定」(註六六)し、「国有地中最も良好ナル部分ニ就キ田五千五百五町歩、畑一千七百七十八町歩ヲ選定シ本年度内(明治四十三年度。引用者)ニ全部之カ借入ヲ了シ」(註六七)たのである。

しかし先に述べた如く、面積の算定は非常に困難であつた。それは、勿論、測量面積ではなく、一定の標準地の面積より算出したもので、引継後、これを實地測量したところ、引受面積に比して、実に七割八分三厘の増加をみたといわれるのである。

そもそも、支那による、賦税土の實地測量が行われたのは、明治四十二年六月であり、翌四十三年九月に至つてはじめて、賦税土台帳、実測図等が出来たのであつて、東拓が引継ぎを開始した(註六八)は、ただ国有地として、宮内府より韓国政府に移管されたというだけの状態であつた。引継ぎにおける事情が如何に国家を背景とした横暴的なものであつたかは、以上見て来た通りである。しかも、東拓社員自ら、土地引受けに際し、「一々護衛付きで、ピストルを佩びて出張した」(註六八)と語つてゐるのは、当時まだ義兵運動が朝鮮全国に行われていたという事実を考えに入れても、なおその間に何等かの強圧的な力が働いたであらうことを、容易に窺知せしめるものといえよう。

ここに至つて、韓国政府、出資、といひながら、その実、日本が「政府の代行機関」である東拓をして、朝鮮における土地収奪をなさしめた實體が一層明確となる。そしてこの土地収奪こそ、朝鮮を大陸への城壁たらしめんとするために、東拓に托された使命であつたことはいふまでもない。

## (二) 買収地

土地の買収は、賦税土引継ぎと平行して、大正二年に至るまで行われた。土地買収の対照となつたのは、「内地農業者ヲ移住セシメ各地僻處ヲ指導シテ農業ノ改良ヲ図ラシムルニ適當ナリト認メタル地方又ハ政府出資地トシテ引継ヲ受ケタル土地ニ接近シ其管理経営上便益ナル地方」(註六九)であり、賦税土を中心とした有利な土地を買収したことが知られる。

東拓はこれらの土地を「買収班の組織」をもつて買ひまくつた。「全南梁山浦附近



の有名な宮三郎を一挙に買収し、同地の料亭で、之れが買収成功披露宴を饗つて大いに気焔を挙げた」(註七〇)といわれ、しかも、この宮三郎が後に小作人との間に所有権をめぐる非難な紛争事件を再三ひき起していることから、土地買収には相当の無理が行われたのであるまいかと思われる。

「同社の事業目的は尚韓国人に解せられざる者あるを憂ひ」て、宇佐川総裁の名で配布された説明書の中に、土地買収は「予め其所有主と相当なる価格を協定したる後契約を為すものにして所有主の承諾なく決して其権利を侵害する等の事なきは論を俟たざるなり」(註七一)とあるのは、朝鮮人の東拓による土地買収に対する不安がどこにあつたかを示すものといえよう。

ここで「所有主」といわれているが、「土地所有権」は、実は明治四十三年八月よりはじめられ、大正七年十月に至つて完了した土地調査事業によつて、はじめて確立されたものであつて、當時は未だ「土地制度不備ニシテ權利ノ確否鑑別ニ困難ヲ感スル」(註七二)状態であつた。しかも、この土地調査事業による土地所有権確立は、政府の定めた期間内に所有主に申告せしめ、届け出のない土地は全てこれを官有地とする、というものであつたから、当時未だそういった法律的手続きに慣れない朝鮮農民達は多くその所有地を失う結果となつた。

土地調査事業の評価については種々問題もあり、稿を別にして論じられなければならないし、「土地所有権所在の決定そのことの結果については、必ずしも考察の余地がないとはいえない」(註七三)とされるにもせよ、一応所有権確立にその任を果した土地調査事業の結了をも待たずに、買収した土地に關しては問題が生ぜざるを得なかつたであらう。「土地を買入れ又は借入れんとする時は之を所有せる地主と交渉し其承諾を求め相當の代価又は借地料を支払ふべきは毫も一個私人と異なる所なし」(註七四)

と云い、または、「韓国民とも合意の上土地の買収を為すべしされば固より韓国農夫をその土地より駆逐する如きことは全然なく」(註七五)といつてはいるが、實際の買収過程において、如何にこれが行われたかを示す資料に欠けるのは、非常に残念なことである。

尚、最後に小作契約に關し極く簡単に触れておこう。

以上の社有地は「小作契約は從來の習慣を重んじ弊害なき限りは変革せざる方針」(註七六)をもつて、「移民貸付地ヲ除クノ外總テ朝鮮人ヲシテ之ヲ小作セシム」(註七七)たのであるがこの「弊害なき限り」というのは、あくまで会社側にとつてのことであつて、小作人側のそれではなかつた。

元來、朝鮮の小作契約には打作法(打租)、賭地法執税(執租)、定賭法永租(定租)の三種があり、打租は實際の收穫物を刈分け地主と小作人の間で折半するもの、執租は立毛のまま検見をなし、收穫高の三分の一乃至二分の一を地主に納めるもの、定租は年の豊凶に拘らず一定額の小作料を地主に納めるものであつたが、これらの基準は地方によりまちまちであり、私有地と駅屯土ではさらに異つていた。しかし、いづれにしてもこうした小作慣行は地主に利すること非常に大であつて、小作人は常に食うや食わずの状態におかれていたことに変わりはなかつた。そして東拓はこの三種の税法のうち打作法のみを「煩雜ナル」(註七八)のものとして廃しただけで、あとはそのまま行つたのである。

また、朝鮮においては殆んど地主が自ら土地を經營管理することなく、舎音と称するものを置き、小作地の管理、小作料の取立て等にあたらせる習慣があつた。これら舎音は全てといつてよいほど大多数のものが、「悉ニ小作人ヲ變更シ私利ヲ營ミ取賂ヲ為ス」(註七九)状態で、舎音による中間搾取は非常に大なるものであつた。これ

は地主である東拓にとって当然不利なものであつたから、「此際全然舎音を廢し小作人をして会社へ直接収納せしむること」(註八〇)とした。  
しかし、この他の多くの小作慣行については、「小作慣行の現状斯くの如くなるを以て農業の堅実なる発達を阻害し農家の経営向上を妨ぐこと少なからざるのみならず、旧態依然としたものを残存せしめたのである。ここに我々は東拓の持つ「地主的」性格をもみることが出来る。

## 第二節 移民及びその他の事業

移民、即ち殖民事業は、「我國ヨリ善良ナル農民ヲ移植シテ進歩セル農業ノ模範ヲ示ス」(註八二)ことを目的とする東拓の主要業務の一であつた。

移民計画は概く初期においては、營業第二年度には一万人、第三年度には二万人、第四年度以後は毎年三万人を移住せしめるといふ大々的なものであつたが(明治四十年十二月、東洋協成案に依る。(註八三)、たとえ開闢の余地が多々あらうとも、自ら一國をなしている朝鮮に何故かくも多数の日本人を移住せしめようとしたのか、それには、一今や我移民は南洋に於て北米に於て歓迎せられないのである。南米に於ては一縷の望あるが如くなるも已にブラジルに於ては全然失敗に了つて居るのである。斯る次第なれば今後我移民の放出地は満韓の外はないのである」(註八四)とされる。当時の時代的要請によるところのものが非常に多い。明治四十一年前後の新聞を読む

ならば、毎日のようにアメリカにおける日本移民輸出の記事を見ることができよう。このように日本の移民に対して門戸を閉じた国の代りとして、朝鮮への、或いは滿洲への移民が大きく取り上げられたわけであるが、さらに、「朝鮮に於て日本の移民が移住して、日本の集約的の農法と云ふものを朝鮮人に普及し又日本人自ら之を行ひ、而して朝鮮に於ける所の米穀の産額といふものを増すことは、取りも直さず日本内地に於て不足する所の米穀といふものを朝鮮に於て産出して、以て此食料問題といふものに對して解決を与ふる所以である、即ち人口増加の問題を解決するばかりでなくして、軍國の基礎及び經濟の基本を為して居る所の食料問題の基礎に對しても農民の移住といふことは今日に於て頗る差迫つた必要な事」(註八五)であるとされ、朝鮮移民は恰かも國是であるかのようになつていた。(註八六)

では實際に移民はどのように行われていたかと云うと、明治四十三年九月、「東洋拓殖株式会社移住民規則」が公布されたが、それによると、移民を甲乙の二種に分ち、甲種、移民には田畑を貸付け、その価格に對して年六分の利子を附し、二十五年以内の年賦償還によりその代価を支払つた後はこれに土地所有權を譲渡し、乙種移民には貸付地を小作せしめることとした。また貸付面積は甲乙共に、田畑を通じて二町歩以内とし、十戸以上の移民で団体移住民を組織せしめ、これが連帶責任を負う場合には、住居、納屋、耕牛、農具費として一戸に付金二百円以内を年七分の利子、二十五年以内の年賦償還でもつて貸付ける、というものであつた。  
この移住規則の制定をまつて、明治四十三年第一回の移住民の募集がなされた。その数をみると、

| 回 期 | 募集年次   | 募集戸数   | 応募戸数  | 承認戸数 |
|-----|--------|--------|-------|------|
| 第一回 | 明治四三年度 | 戸数ヲ定メズ | 一、二三五 | 一六〇  |

| 第二回 | 同  | 四年度 | 一、〇〇〇 | 一、七一四 | 七二〇   |
|-----|----|-----|-------|-------|-------|
| 第三回 | 大正 | 元年度 | 一、〇四五 | 二、〇八六 | 一、一六七 |
| 第四回 | 同  | 二年度 | 一、三〇〇 | 四、四七二 | 一、三三〇 |
| 第五回 | 同  | 三年度 | 一、五〇〇 | 一、九六二 | 一、一〇六 |

(註八七) となつており、いずれも初期の計画、或いは東拓の移民事業に寄せられた期待をはるかに下まわるものであつた。

何故このような大きな喰い違いが生じたかといへば、一つには世間の考へている増加人口のはけ口としての朝鮮移民と、東拓の考へている朝鮮移民とが異つている点にあつた。即ち一般世論は、「出稼ぎに行く種類の連中で、米国への移民禁止が問題となつた当時、満韓移民集注といふ説が故小村外相によつて発言された如きも、その移民といふ意味は、布哇や米国へ労働者として渡航してゐたものが、外交上の問題から渡航ができなくなつたので、その連中を満韓地方に移住させるといふ事であつた」(註八八)、といわれるような考へであつたのに、東拓の考へは、「朝鮮に於ては従来朝鮮小作人に集約的農法を施さしめ因て生じたる余地に内地農業者を移殖して農事改良の模範を示し地方経済の発達を謀らんとするに在るが故に常に朝鮮人との調和に意を用い成るべく農事上有利にして且つ社会設備の稍々整備せる地方を選出し之に堅実なる農家を移して其秩序的発達を期せんとす」というものであつたから、「一時に多数の移民を移殖することを難し」(註八九)とするのは当然であり、且つ移民の選定もきびしくならざるを得なかつた。

にも拘らず、議会における答弁では再三、年々一萬人づつの移民をなす旨答へてゐるのは、「当初の趣旨計画は政治的外交的の卓上計画であつて」(註九〇)と、後に東拓関係者自ら語つてゐる通りに政治的要素の濃い数字であつたとすれば、ここにも初

期の計画通りにいかなかつた原因がみられるであらう。また、たとえそうした政治的な数字ではなかつたにせよ、「第一年目から数萬人の内地の農民を朝鮮に収容する」という風になつておるのは多少荒ぶ地といふものを良く見過ちて居つたといふことがありはせぬかと想像される」(註九一)点もあり、いずれにしても、実際に行う場合に非常な困難にぶつたのである。

実行面での困難について、東拓の社員が次のように語つてゐる。彼はまづ、「移住地割当」の困難をあげ、「割当てやうとする社有地は鮮内でも最優良田であるだけに、世襲的に善良なる小作人の生存問題が起る虞れがあるので、主に不良小作人を洗つて、耕地に余裕を作り、其処に移民を分散して割込ませ、其進んでいる内地農法により、部落鮮民の農事改良増進の模範たらしめるといふことでなければ、調和がとれない事とし、第二には「優良移民を内地農村に募集しても、当時の内地農村では、其過剰人口の多くは附近の都市に吸収され、(中略)多くは村でも質のよくない者が、応募する傾向が著しかつたので其の内から優良移民を選定収容するのであるから、募集が中々困難であつた。又折角収容しても、(中略)居付かないものが非常に出来」(註九二)、又第三には、学校、医療、警察等の施設が分散移住のため思うようにいかない、という点をあげてゐる。事実、この点に関しては東拓側も非常に頭を悩ましたのである(註九三)。

こうした条件の中では、従つて「移住民の不平は絶えない、勿論隣接の鮮民は歓迎して居らぬと云う有様であつた」(註九四)とされるのは当然である。

朝鮮農民との軋レキを避けるために、「現在不経済なる耕作法を取つて居るものは七経済的方法を採らしめて、一例を採てみると、一町歩の地所を耕して居るものは七反の地所をやつて、而してそれで一町歩を耕して居ると同等の効果を収めしめて、其

その他の事業に關してはまず金融事業を第一にあげなければならぬ。資金の供給は明治四十二年五月、貸付規則の認可を得て開始された。それは初期には「韓国ニ於ケル不動産ヲ担保トスル」ものであつたが、その担保物件である不動産、即ち土地の性質がそもそも第一節でその一部であるが考察した如く、非常にあいまいなものであつたから、「一般ニ資金ノ供給ヲ希望スル者甚多カリシト雖モ担保物件ニ關スル權利鞏固ヲ欠キ」(註一〇二)貸付高はわずかであつた。その後明治四十三年に至り、公共団体に對する無担保の貸付を行い得る項がつけ加えられ、貸付高も五十万円余りにのぼつたが、さらに大正六年の大巾な会社法改正により金融部は一躍前面に押出され、ついでには「東拓と鮮銀が朝鮮經濟界の二大王国」(註一〇三)であるとなされいわれるに至るのであるが、それはこの稿の主題ではないので、ここではただ事項として触れるのみにとどめておく。

(註一〇〇)という数を示しており、隨考に「承認戸数少キハ敵選ノ結果ニ依ルモノナリ」とされているが、どうしても朝鮮小作人と衝突せざるを得ない乙種移民を廃し、しかも新たに設けた、地主たり得る移民の資格に關しては、非常にきびしい制限を設けているのである。

このようにして、一応、朝鮮小作人との直接の衝突は避け得たかに見えたが、(實際にはこれ等移民のうち何人が地主たり得たかという問題を分析してみなければならぬ。)ついに昭和元年に至り、「既墾地ニ對スル移民ノ収容ハ小作關係ノ複雑ヲ來スニ依リ」(註一〇一)中止するのやむなきに至つたのである。

以上示された如く、東拓による朝鮮移民政策は予期されたような成績をあらわさず、のみならず東拓の營業科目中でも、移民は次第にその重要性を失つていつた。

| 回期  | 募集年次  | 募集戸数  | 応募戸数  | 承認戸数 |
|-----|-------|-------|-------|------|
| 第六回 | 大正四年度 | 一、五〇〇 | 一、二八〇 | 七〇〇  |
| 第七回 | 同 五年度 | 一、五〇〇 | 一、一〇一 | 五四〇  |
| 第八回 | 同 六年度 | 一、〇五〇 | 一、五五二 | 六五〇  |

剩つて居る所の土地に内地人を移すと云ふ方法」(註九五)をとり朝鮮人をその土地より追い出すということはない旨を再三言明しながらも、「朝鮮人側にては邦人移民のために耕作地を失ひて不幸を唱へ居る」(註九六)という事實を如何ともすることができなかつた。その上、このようにして移住せしめた移民に對しても、東拓は決して充分なる措置を取つたとはいえず、約束通りの生活補助も与えられず、「指定地に依りては想像以上に不良の土地を給与せられ又副業を得んとするも場所によりては其余地なきもの」(註九七)すらある有様で、中には非常に悲惨な状態に陥る者もあつた。また、「甲種移民に對しては荒地を割当て乙種移民及丙種農作者の小作料を取る方に良田を与えて居る」(註九八)。(甲、乙兩種移民については本文一三七頁参照。)ということがもし事實であるなら、これこそ東拓の土地經營における地主的性格を示してあまりあるものであらう。

その後大正三年に至り移住規則を改正して、乙種移民を全廃し、従来の甲種移民を第一種移民と改称、新たに五町歩以内の土地を与え、これを經營せしめる第二種移民の制度を設け、「将来悉ク地主たり得ルノ途ヲ啓ク」(註九九)こととした。しかし、東拓は日本よりの移民でもつて小地主を養成しようとはかつたのではなく、前述の如く小作人との紛争が如何にしても避けがたかつたからに他ならないと思われる。試みに大正四年以降の移民の承認戸数をみると



その他、農園の経営、水利及び土木事業、さらに明治四十三年、黄海道方面の固有山野約一万町歩の貸付を受けたのはじめとして、民有山野をも買収し、広く林業を行方竹林事業にも手を出す等、更に闊口の広い営業ぶりであった。したがって「拓殖ノ為メナラ何デモ出来ル会社デアルト思ヒ思ハルル」(註一〇四)ようになったのも当然であり、その結果、次節で触れるように世論が大きく沸騰したのである。

### 第三節 事業内容に対する世論の沸騰

以上の事業は、払込資本額の十倍まで社債を発行することを得、さらに社債二千萬元を限り政府がその元利支払の保証をなすという特別の保護を与えられている一大会社によつて行われるのであるから、「其の営業を経営するに於て、殆んど意の如くならざるものなかるべし、然れども東拓会社にして、大に其の繩張を広めて、其許可せられたる各般の營業に従事する時は、他の個人及び会社の経営は勢いじゆうりんを蒙むらざるべからず」(註一〇五)ということが非常に心配された。

その心配がやがて事実となつてあらわれたのであるが、たとえば、竜山に農園を持つという高橋章之助氏は次のように述べている。個人的農園事業に於て一向に利益がないのは、「政府から補助金三十萬圓を得て居る東洋拓殖会社の農園其他に有する農場に於て産出せる蔬菜、果樹を費用を願慮するところなくして作りながら之を又需要供給以外に市場に出すこと其原因なることを知つたのである。為に小資本で家族の妻

つた。(中略)というのは、一度東拓の野菜が出る様になると市場の相場が狂つて仕舞ふ殆んど半値になるのである、然し青物であるから安いからと云つて市場に出さずには居れぬ即ち損失を免れないことになるのだ」(註一〇六)。また明治四十四年二月六日付の東京朝日新聞には、「日本農民が最も着目して資本を投ぜんとする錦江流域又は馬山附近まで土地買入の手を延ばして動もすれば個人經營者と朝鮮人との土地売買契約を横取りし又は買収価格を競り上ぐるの舉に出で而して会社は大資本を擁するの強味を以て個人經營者を圧倒するが故に彼等の恨みをかうこと少からず」という記述もみられる。さらに、明治四十一年三月の拓殖案委員会の席上で、岡野政府委員は「此会社の設立が個人若くは私会社の発達を阻害し韓国に対する私人の經營を妨ぐるものなりと断言するも他の会社は政府の補助なきを以て或は競争する能はざるべきも決してモノポリーにはあらず」(註一〇七)と聲明しているが、たとえモノポリーではないにもせよ、これだけの政府の補助が与えられてあれば、結果的には他の私的小經營はおさえられてしまうのが当然であつた。

このようにして、一時は「韓国の保護權韓國統監政治の内容を充塞せしむるものは一に此の拓殖会社の活動にあること天下異議なし」(註一〇八)とされた東拓も設立後数ヶ月たたないうちに、攻撃の矢面に立たされる結果となつた。早くから論争の中心となつたのは、先述の駅屯士の評價の問題であり、さらにそれと前後して、東拓が四方八方様々な營業料目に手をあげたにも拘らず、その業績に見るべきものなく不振であるという批判の火の手があがつた。当時の新聞雑誌における東拓非難の論調をみると、拓殖会社が設立されれば、すぐにも十万町歩もの土地を払下げ或いは買収し、年に一万人づつの移民をなし、と考へていたが一向に進捗しない、これではどこに年々三十萬圓の補助を与えて会社を設立した意義があるのか、という点に集中されている。

こうした批判に対して、宇佐川総裁はじめ東拓側の答弁はきまつたように、「今は  
 現在時代なり、東拓の成績如何は三十年の後を待たずんば、是非の評を下し難し、日  
 本人の事功を急ぐには実に困る」(註一〇九)というもので、「拓殖会社の経営活動に  
 は幾多の血を見る位の決心なかるべからず」(註一一〇)という一文をもつて、拓殖会  
 社設立に希望を托していた当時の一般世論に、とうてい応じきれなかつたのである。  
 特に「自由移民は増加せずとも東拓の手で移住するものは沢山あると思つてゐた」(註  
 一一一)世論が、一年間に五百戸から精々千二、三百戸にすぎないという数に對して  
 大きな不満を抱いたのは当然で、「年々一萬戸以上の移民を入れないと必要があらうか」  
 唱へたから東拓は出来上つたのだから今日の大補助を五戸や千戸位の移住計画な  
 らば何の必要あつて彼の様な大会社を起して多大の補助を与ふる必要があらうか」(註  
 一二二)という意見さえ見られた。  
 註一二二)として遂には「東拓は全く在韓邦人の同情より孤立し、又韓人側よりはその存在を  
 認められず、僅に駅屯土の小作米問題より韓人の怨府となるが関の山なり」(註一二三)  
 とすら云われるに至つた。  
 そこで、東拓自ら、こうした東拓不振の原因について「拓殖ノ為メナラ何デモ出来  
 ル会社デアルト思ヒ恩ハル結果ドレモコレモ中途半端ニナリヤスイ傾向」があり、  
 「何ンデモ出来ルモノトシテ計算書ダケノ有利醜実サデ計画着手セラレタモノガ實際  
 ニ則シテ多大ノ相違ヲ来シタ」(註一二四)ためであると述べずにはいられなかつたの  
 である。しかし、一向に事態は東拓にとって好転しないままに、会社法の改正が行わ  
 れたのである。

註

東拓株式会社の設立

- 註 四八 顯末書
- 註 四九 同 右 一〇八頁
- 註 五〇 同 右 一四九頁
- 註 五一 朝鮮の農業事情 總督府殖産局 昭和二年 一九一二〇頁
- 註 五二 總督府臨時財産整理局事務要綱 四四頁 (「朝鮮農業發達史」小早川九郎 一一八頁より)
- 註 五三 朝鮮 二卷三號 明治四十一年十一月 三七頁
- 註 五四 同 右 三卷四號 明治四十二年六月 八七頁 (第一回東拓總會における宇佐川總裁の演説より)
- 註 五五 駅屯土ノ管理方法 總督府稅務課(プリント) (日付不明)
- 註 五六 朝鮮 三卷二號 明治四十二年四月 一〇四頁
- 註 五七 前 掲 駅屯土ノ管理方法
- 註 五八 東拓十年史 三七頁
- 註 五九 顯末書 二八四頁
- 註 六〇 同 右 二八五頁
- 註 六一 京城新聞 明治四十二年三月二十八日
- 註 六二 顯末書 二三八頁
- 註 六三 京城新聞 明治四十二年四月八日
- 註 六四 東洋時報 一二九號 明治四十二年六月 五十六頁
- 註 六五 朝鮮 三卷四號 明治四十二年六月 八七頁
- 註 六六 東拓十年史 三四頁
- 註 六七 統監府第三次施設年報 明治四十三年度 一八六頁
- 註 六八 開拓半世紀 二五五頁
- 註 六九 東拓十年史 三七頁

- 註 八八 朝鮮及満州 四八号 明治四十五年二月 五二頁
- 註 八九 東洋時報 一五三号 明治四十四年六月 七四頁
- 註 九〇 開拓半世紀 二五六頁
- 註 九一 東洋時報 一五一号 明治四十四年四月 二三頁
- 註 九二 開拓半世紀 二五六頁
- 註 九三 朝鮮及満州 四八号 明治四十五年二月 五一―五三頁
- 註 九四 同 右 九九頁
- 註 九五 東洋時報 一五二号 明治四十四年五月 七頁
- 註 九六 東洋経済新報 五六〇号 明治四十四年五月 三九頁
- 註 九七 同 右 同頁
- 註 九八 朝鮮及満州 五三号 明治四十五年六月 一三頁
- 註 九九 東拓十年史 八九頁
- 註 一〇〇 議会説明資料 昭和十四年 一二六頁
- 註 一〇一 同 右 一二五頁
- 註 一〇二 東拓十年史 一八頁
- 註 一〇三 三十年の足跡 二八頁
- 註 一〇四 東拓経営の基本觀念 機秘プリント
- 註 一〇五 東京経済雑誌 一五三八号 明治四十三年四月 三一―四頁
- 註 一〇六 朝鮮及満州 五〇号 明治四十五年四月 四四頁
- 註 一〇七 東京朝日新聞 明治四十一年三月二十一日
- 註 一〇八 朝鮮 二卷六号 明治四十二年二月 一二頁
- 註 一〇九 朝鮮 四卷一号 明治四十二年九月 七頁

- 註 七〇 三十年の足跡 四頁
- 註 七一 外交時報 一三九号 明治四十二年六月 二四頁
- 註 七二 東拓十年史 三七頁
- 註 七三 朝鮮農業発達史 三五七頁
- 註 七四 外交時報 一三三号 明治四十一年十二月 三五頁 農商工部大臣の訓令
- 註 七五 東洋時報 一一五号 明治四十一年四月 二三頁
- 註 七六 朝鮮 三卷二号 明治四十二年四月 一〇三頁
- 註 七七 總督府施政年報 明治四十三年度 二八八頁
- 註 七八 東拓十年史 四四頁
- 註 七九 同 右 四三頁
- 註 八〇 朝鮮及満州（「朝鮮」の後身）四一号 明治四十四年九月 八九頁
- 註 八一 朝鮮の農業事情 昭和二年
- 註 八二 東拓十年史 一頁
- 註 八三 願末書 五九頁
- 註 八四 東京経済雑誌 一五二二号 明治四十二年十月 一〇頁
- 註 八五 東洋時報 一五二二号 明治四十四年五月 八頁
- 註 八六 後には「年々五十萬から溢れつつある母国民の移殖地として二回の大戦役に十数億の国幣と数万の生靈とを犠牲に供して漸く領有し得た此朝鮮」（朝鮮及満州 五〇号 明治四十五年四月 四九頁）という意見さえみられる。これはたとえ朝鮮の現状を知らないものの意見としても、当時一般の朝鮮に対する考え方の一端を示すものといえよう。
- 註 八七 帝國議會説明資料東拓業務概要 昭和十四年 ①プリント 一二五―一二六頁（以下「議會説明資料」と略）

- 註一〇 同 右 三〇一 明治四十二年三月 六七頁
- 註一一 朝鮮及滿州 五〇号 明治四十五年四月 四七頁
- 註一二 同 右 五三三 明治四十五年六月 八一頁
- 註一三 朝鮮 四卷六号 明治四十三年二月 六頁
- 註一四 東拓經營の基本觀念

### 第三章 会社法の改正と会社の性格の変化

以上、東拓設立の経過とその土地經營を中心とする事業内容について主として触れてきたわけであるが、最後に、明治四十三年及び大正六年に行われた会社法の改正による会社の性格の変化について二、三述べてこの稿を終りにしたい。(尚、会社法の改正はこの二回の他、昭和十四年までに三回行われている。)

第一回目の会社法の改正が行われたのは、「日韓併合」に先立つこと五ヶ月、明治四十三年三月であつた。その時の改正事項は前章に既出の資金供給に関する追加項目三項の他は株主總會等に関する新たな規定等の三点で、それは何等大勢に影響を及ぼすものではなく、中心はあくまで前者にあつた。しかし、それも団体への無担保金融

投資の項が設けられ融資の巾が広がつたというだけで、決して本格的な改正といふものではなかつたのである。然るに、大正六年に行われた改正は充分に会社の性格自体を変え得るものであつた。参考までに、改正項目中その根本をなした会社の事業目的の変更点について、新旧両法の対称を示すならば次の通りである。

| 旧 法                                                                                                                                                                       | 改 正 法                                                                                                                                                                                                                            |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>第一条 東洋拓殖株式会社ハ韓国ニ於テ<br/>拓殖事業ヲ営ムコトヲ目的トスル株式<br/>会社トシ其本店ヲ韓国ニ置ク</p>                                                                                                         | <p>第一条 東洋拓殖株式会社ハ朝鮮及外國<br/>ニ於ケル拓殖資金ノ供給其ノ他拓殖事<br/>業ノ經營ヲ目的トスル株式会社トシ其<br/>本店ヲ東京ニ置ク</p>                                                                                                                                               |
| <p>第十一条 東洋拓殖株式会社ハ左ノ業務ヲ<br/>営ムモノトス</p> <p>一、農業</p> <p>二、拓殖ノ為必要ナル土地ノ売買及賃借</p> <p>三、拓殖ノ為必要ナル土地ノ經營及管理</p> <p>四、拓殖ノ為必要ナル建築物ノ築造売買<br/>及賃貸</p> <p>五、拓殖ノ為必要ナル日韓移住民ノ募集<br/>及分配</p> | <p>第十一条 東洋拓殖株式会社ハ左ノ業務ヲ<br/>営ムモノトス</p> <p>一、拓殖ノ為必要ナル資金ノ供給</p> <p>二、拓殖ノ為必要ナル農業水利事業及土<br/>地ノ取得、經營、処分</p> <p>三、拓殖ノ為必要ナル移住民ノ募集及分<br/>配</p> <p>四、移住民ノ為必要ナル建築物ノ築造売<br/>買及賃貸</p> <p>五、移住民又ハ農業者ニ對シ拓殖ノ為必<br/>要ナル物品ノ供給及其生産シタル物<br/>品ノ分配</p> |



「朝鮮だけに局限すべき意味ではなかつた」(註一六)のであるから、外国への進出は予定のコースであつたとみてよい。そこで会社法が改正になるや、大連及び奉天に支店を設けて満蒙進出の第一歩をふみ出し、後年中国東北部、フイリピン、南洋諸島マレイ半島等に広くその営業地域を拡大するきつかけを作つたのである。

第二の拓殖資金供給を第一目的とするという点に關しては、早くから、東拓のような国策的会社は自ら諸種の營業を行ふよりも、むしろ拓殖銀行のような形で、他の経営団体ないしは個人營業を資金面においてバック・アップするという体制にした方がいいという意見があつた。また政府側においても明治四十三年の改正の際、蔵原議員らの東拓をして一大拓殖銀行に変更せしむる必要はないかという質問に対して、「此会社の将来に向つては多大の望を囑して居るのであります、單に金融機關たるのみに止まらしないという考でありますから、いろいろ御言葉もありましたけれども、金融機關のみに此会社を為すと云ふことは政府では御同意が出来かねるのであります」(註一七)と答弁してはいるが、「此の東洋拓殖会社は唯今の法律に於ても既に幾分の金融を付くことを許してあるものであります、(中略)此の会社をして長期の貸出をなすこと恰も我が内地の勸業銀行の如きことに至らしめましたならば、丁度唯今の韓国に於て十分でないと思われ方面の金融を之に依つて調達することが出来ようと思ひますので」(註一八)と改正の理由を述べている点から考えても、追々そうした形にしていくという考えが政府内部にあつたといえよう。そして、それがこの改正により具体化されたのである。

ところで大正六年に行われた会社法の改正は、会社の目的に關して以上の大きな変化をもたらしたのであるが、この改正のもつとも根本的な原因となつたのが、「日韓併合」であつたのは云うまでもない。そもそも東拓は一章で考察した如く、當時未だ

六 移住民及韓国農業者ニ対シ拓殖上必要ナル物品ノ供給並ニ其生産又ハ獲得シタル物品ノ分配  
七 拓殖上必要ナル資金ノ供給

六 委託ニ因ル土地ノ經營及管理

七 其ノ他拓殖ノ為必要ナル事業ノ經營  
前項第七号ノ事業ヲ經營シ又ハ外国ニ於テ前項第一号乃至第六号ノ事業ヲ営ムトスル時ハ其事業及地域ニ付予メ政府ノ許可ヲ受クベシ

(傍線引用者。改正点を示す。)

このほか、「日韓兩國」とされていたものが「日本」となつた点はあるが、すでに朝鮮は完全に日本に合併されたのであるから、これについては論ずるまでもない。今問題となるのは、「韓国」にのみ限定されていた營業範圍が、東洋拓殖会社の名の如く「朝鮮及外国」にまで拡大されたこと、及び事業の第一目的が農業から金融へと大きく変更されたことの二点である。

第一の營業地域拡大の点に關しては、併合により朝鮮が完全に日本のものになつたのであれば、單に農業改良のみを目的とする会社ではない東拓が、さらに一歩前進しようとしたのは当然であつた。「既に大正四年夏東拓副總裁野田大塊翁が満州視察の結果鮮満經濟統一論を直言して居る。寺内伯(當時朝鮮總督。引用者)の満蒙を含む支那への進出は別項の如く日本軍部の一貫せる大方針である。その軍部の巨頭寺内伯が朝鮮に在つて満洲との交渉に直接してゐることとて、伯の意中は満洲開發に燃えて居るところであつた」(註一五)し、前にも触れたように、元來、東洋拓殖の意味が

形式的には少くとも独立国であつた朝鮮を、彼等にはない経済力を投下することによつて実際に獲得していくための「国策代行機関」(註一九)としてつくられたのであつた。したがつてこの四十三年の併合により、朝鮮が名実共に日本のものとなり、天皇に直屬する権力を有する總督の支配の下に、政治、外交、経済は勿論、あらゆる方面において、日本政府自ら、大陸への突破口としての朝鮮を経営することができるようになつたのであれば、もはや「代行機関」は不要となり、東拓がその存在理由を失うに至つたのは当然であつた。

このように「日韓併合」という事実によつて、東拓のような特殊会社の使命もまた再検討されるべき時期に立ち至つたのであるが、これに加えて、「厚顔なる東拓会社は頻りに右十町歩の払下げ(駅屯土払下げ)をさす。引用者」を總督府に運動し更に大地主たらんと欲」(註二〇)し、のみならず土地買収に關しても、「スツカリ氣を能くした(第一期第二期の土地買収成功をさす。引用者)東拓では此の際とばかりで大いに氣負ひ立つて更に引きつづき第三期三千万円の買収計画を樹て全朝鮮耕地の二割以上獲得しよう」と(註二一)して、次第に朝鮮における一大地主会社に終ろうとする傾向があつたことが、東拓の使命再検討に一層拍車をかけた。しかし、何といつても改正の最大の原因は「日韓併合」にあつたのは勿論である。

こうして「併合」を要因とする会社法改正によつて、東拓は新しく營業地域を拡大し、その表看板も金融にぬりかえた。即ちこの改正を境にして、今までの土地經營を主目的としたものから、金融を第一義におき資金融通の面で国策を遂行するという方向に、その性格が変化していつたのである。したがつて明治四十一年末に設立され、今次大戦の終りまで存続した東拓の長い歴史の中で、このような性格の変化をもたらしたところの改正が行われた大正六年をもつて、第一期とすることができよう。そし

て、國家を背景とした大きな特權と同時に使命を有する特殊会社であるという本質は依然として変わることもなく、つづく第二期に入つていつたのである。しかし、この點に關してはもはや本稿の課題をこえる事になるのでここまでの考察に止めておきたい。

註

- 註一一五 三十年の足跡 一五一—一六頁
- 註一一六 同 右 四九頁
- 註一一七 大日本帝國議會誌第七卷 第二十六議會衆議院
- 註一一八 同 右 貴族院
- 註一一九 東拓会社要覽 昭和十八年八月 三頁
- 註一二〇 東京朝日新聞 明治四十四年二月七日
- 註一二一 三十年の足跡 一五頁

結

以上、東拓設立の経過を概観し、会社設立をめぐる各方面の動向、或いは土地經營を中心とする事業の進行過程などから、会社の性格についての分析を試みた。該会社が、大陸進出という日本帝國主義の國是を遂行するための、一人の代表選手であつたこと、そしてそのために与えられた様々な特權により、各方面から非難を受けるような性格がある程度規制されたこと、は我々が見來つたところである。ここで私は東拓への批判は同時に、日本の朝鮮統治への批判とならなければならないと考える。したがつて、次に問題となるのは、當然、東拓が日本の朝鮮統治史上に占める位置及びその意義、さらに、東拓のような会社が生まれたことを、広く日本の植民地政策をも含めてその母体となつた日本近代發達史の中で分析していく、という点でなければならない。この點に關しては、別の機会にさらに研究していきたいと思う。

(完)

私の感じたこと (二)

明治維新以来、皇室中心主義を核心とする日本人のいわゆる国体観念は、牢固たる「意義の城」として、日本に於ける歴史学の発生的な発展を阻んで来た。そして説話主義を基調として神聖化された国家観念「国体意識」は、日本独自の帝國主義的な独善意識を隣邦に押しつけて来たのである。

勿論それは歴史の流れであり、いうならばそれは、抬頭した日本の封建的大中華主義への歴史的な反逆であつたと私は考える。そしてそれは東亞近代文明への革命的な出来事であり、そのシワ寄せが、最も弱点である朝鮮に集中されたのである。

日韓併合をその革命の所産と考えるならば、その混乱の中で行われた日本の行動は、必ずしも常態のものではあり得なかつた。そしてその非常の手段、行動が、今、大きな禍根となつて強烈に批判されている。

資本主義の東漸とか、近代文明の道程とか、時の権力は、すべての犠牲を抽象化して、歴史の罪業を合理化して行く。

権君の「駅屯土問題」、青木嬢の「東拓の設立」、この二つの論文は、その権力の鎧の袖に匿された歴史の罪業であらうか。

『前掲の三論文は、何れも各自の大学に卒業論文として提出したものを、その後の研究で補正したものである。』

( 翻 訳 )

小説 「小作村」

(朝鮮語研究会 A 級同人試訳)

ぼつぼつと汽車が部落の傍を元氣一ぱいつきぬけて行く。  
朝鮮に見物に來た鼻の高い友人たちが、肥料小屋だと思つて  
「ほんとうに農業国は違ふ。」と何べんも睡をのみこんだとい  
う。又、日本人の教科書では、豚小屋のようだと書いた。その  
ような倒れかかった草ぶきの二間、三間しかない家。こうした  
住宅は、わけも知らずに小おどりする。  
この怪物のような汽車が、この部落の前を通るようになった  
前までは、それでもちよんまげを結つた者が両班(ヤンベン)  
ぐらしが出来た世の中であつた。その時としても、両班だ、常  
民だという何百年も伝わつて來た高低の階級があつたけれども  
それでも常民の金持ちもあつたし、貧乏な両班もあつた。たと  
え貧乏者だといつても今日のように、皆が他人の土地でなけれ  
ば口に糊することの出来ない、そんなあわれな貧乏人だけでは  
なかつた。三、四〇戸の部落には、崔とか金とかいう金持、小  
作米の何百石も入る者が二、三いたし、そのほかに田の一町  
(二十斗落)ほども持つてゐる者も少なくはなかつた。  
そのように多少でも余裕のあつた者も、いつの間にかやう汽車  
と一しよにどこへやう行つてしまつた。

## 小作村

この部落のぬしだと呼ばれる何代も住んで來た者たちも  
鼻をたらししてゐる子供を背負つて、垢だらけのふとんと、わ  
れたバチチを負つて、北に南に流浪の旅に立つていつた。そ  
の後にいつて汽車に乗つて來た豪勢な人たちが、この部落  
に大きなとん家を作り、その中からは、よくわからない日  
本語の聲が、やかましくがながん響いて出た。  
くらすことが出来ず流浪の旅にたつた部落の人々の倒れい  
く小さい粗末な空家には、何処から來たのか、黄色くはれあ  
がつた男女が、そのとん家を見あげながら、あちこちから  
寄り集まり始めた。しかしこれらは皆追はられてしまつた。  
この部落には、静かな鳩のふところのような「平和」が訪  
れて來た。破れ家の中でどのような悲劇がくりひろげられて  
いたとしても、部落だけは平和そうに見えた。  
日本人(ワイノム)はこのような「平和」が日々かたまつて  
行きつつあるこの部落に、模範村という称号を送り、いろい  
ろの賞金を与えた。  
今この部落には、振興会があり、勸業共済組合があり、保  
安組合があり、納税組合があり、日本語を教える労働夜学が  
あつた。  
こんな機関の一ひろもある長い看板が、山の角つこにある  
大きな夜学堂の門にぎつしり並べて貼りつけてあつた。  
この多くの御用団体は、勿論「内鮮融和」をさせるために

朝鮮語研究会はA・B・Cの三級に分かれ、い  
ずれも毎週水曜日講習を行なつてゐる。A級は既  
に滿二カ年、講習日数は百回を越え、目下、朝鮮  
總督府時代を題材にした小説を読んでいる。次の  
小説「小作村」は朝鮮作家同盟版・現代朝鮮文  
学選集巻六・ちよおじゆん こん著・一九五〇  
年九月の作であつてA級の同人が試訳したもの  
で、ここにはその前半を掲載した。尚B級は第二  
年目に入り、C級はこの四月に開講、初歩の人達  
の参加を歓迎してゐる。

(テキスト供与・学費一切不要)

…講師 多久安貞…



組織されたことはいうまでもないが、うわべでは部落内の淳風良俗を守り、農民達を幸福に、くらしよくするという好餌を題目にかかげた。こんな団体は、部落に封建的な昔の古びた習慣を出来るなら続けて行こうとするともに、日本人と近い開化した金のある「常民」の新しい「両班」風をつくり出した。

この機関の「長の椅子」は、かたづけしからそんな人が占めていた。そして昔は巾きかせてた貧乏な両班が、この氣勢に勝てずして、今はちよつとは田畑でもあり、日本語でも使う者に、正月に年始廻りに行くまでになつたほどこの部落は変つた。

官庁では、春の端境期にこの部落の共済組合に農事改良低利貸付金六百円という多額の金を年「一割二分」という「低利」で出したり、百五十円の補助金が改良井戸新設費に補われた。苗代もよくやつたと一金十円也の賞金があつたし、堆肥も多いといつて洋種の豚の仔二匹が賞として出た。

そしてそして……

以前には一斗落に一石しかとれなかつた田が、今は二石、三石ととれるようになり、そうでありながらもその白い米は売つて黄色い粟を買つて食べる、それさえなくて一日に一食も食べられず、一年の半は草だけを摘んで食べて生きている！そうした者が、どのくらい殖えたことか。

見よ！そんなに困難な人のためには、金を低利で与え（その金を手に入れることがどのくらいむづかしかつたか、保証人を二人三人たてよとか、しかしとにかく、ありがたいことでないか）又救済金があり……

これらはみんな朝鮮の者たちを日本官吏の言葉を、よくおとなしく聞くようにするためにするしわざであるのだ。

「朝鮮農村の内地化！」

「朝鮮の内地化！」

スピード時代だからそうなのか、その急激なテンポは応接にいとまなく、新聞紙にはどの日として、共産党の話が出ない日はないけれども、彼等の枕を高くして、いびきをかきながら、よくねるのもこのためである。

「ほんとうに世の中が変つた……」

いいながら舌をそつと出し、うすらわらいをする老人のいうように、何百里の道を一日に走る汽車があらわれ、空をとぶ飛行機があらわれ……

この部落も変つた。表面は平和そうに幸福そうにくらいついた。しかし小作人に没落した両班だけは、どこより多く住んでいた。

これはどういうわけあいだろうか。官庁の大きな「配膳」があるのにも拘らず、何故にこんなに貧乏だというのか。国民を考へる「官庁」の心が、ちやうど鼠を思ふ老猫の心のよ

うであるからでないか。

こんな部落のこんな「平和」は、又何処へ流れて行くのか。歴史の変遷は一日として休みなく、どのような片田舎でもこのこして行くわけが無い。

この部落も汽車と一しよに変つて来たし、又変つて行く。私は今からこの部落の「平和」を掘り下げて、この部落のほんとの生活を見せ、彼等が歩んで行つたあとを觀察して見よう

## 二

春だとうたい、花が咲いたと蝶がとぶ、そうした時もすぎた。勿論、どのように来て、いつどのように行つたやしもバルリオンには知るよしもなかつた。

バルリオンは悲慘であつた去る日の煩わしさが胸の中をひつかきまわして、何一つ楽しい事とはなかつた。

苗代を作るためにさわいだことも、もうはるかな歲月の一区である。

バルリオンは、よかれあしかれ、それでも百姓をしないわけにはいかない、今も元氣のない足どりを自分のつくつて五斗落の苗代へ移した。彼はぼんやり苗代をのぞきこむ。そろつて青ち、青々とのびてくる苗が、風に吹かれるたびにゆれるさまは、どんなに美しく、かわいらしいかわらなかつた。

「水が多くはないか？」

バルリオンは、こうした心配もした。

この苗が成長して黄色い米粒がつくようになれば、それを刈つて、たたけば、何石くらい出るであらうかということも胸算用して見た。しかし何ぼ多くのモミが出たとしても、結局自分の手に落ちるものが、どのくらいになるだろうかということを考へる時、彼は胸がつかえて来た。

自分の命を農業にかけているバルリオンは、さも美しく青つてゐるやわらかい幼苗を見る時、それでもあるうれしい幻想にひたるのであつた。しかし血みどろで作つた農事が、秋になつて自分の手の中には、ただの一石のモミ粒さえ残らないであらうということを考へる時、彼のほのかな喜びに対する幻想は、急に失望と憎悪と呪ひに――進んでは、自暴自棄の感情へ落ちてしまつた。からだ中の力がすつかりぬけるようであつた。

「無い奴はいつでも有るもののために、こんな氣狂いじみたさまをせねばならないのかー」

彼はつぶやいた。

「朝鮮の奴は、日本の奴のみのために、汗を流さねばならない……」

こうもさけんで見た。自分の声が自分の耳にひびき返つて来るときに、彼は異様な興奮を感じた。そしてその興奮は直ちに「おれは狂つてゐるかしら」という、うつろなうらがな

しい思いをもたらした。

「ふん！」

彼はぐるりと廻った。肩にしよべるをふりかきいで暮れかかる田のあぜを歩いた。

宵の口になれば、汽車が今日もまちがいなく部落のそばを過ぎていく。

一日に五度づつ上り下りする汽車の騒がしい爆音は、この部落の若者の胸を何度となくゆりうごかした。

まず日本に行つて勉強したというチムスンのところの兄は、かわいそうな朝鮮人を救わねばならないと、大志を抱いて家と母と妻子を捨ててヒョウ然と出ていった。残りの人々も金を少しもうけて見ようかと考え、或いは遊んで食べられる穴でもつかまえて見ようかと考え、又、そうでもなければ女にまよつてこの部落をたつた。ある若い娘は、賑かな都にあこがれ、人絹のチマを着たくて、おどる胸をおさえて、人の寝しずまつた頃、夜逃げの荷物を包んだ。しかし、この人達も実際は暮らすに暮らされず、この部落を出ていったということがわからぬ者は誰あるうか。

これは皆、日本人がつけた汽車がもたらしたこの部落の悲劇であつた。

果して汽車の誘惑は大きかつた。人々の慾望は汽車に乗つていただきへ、いただきへと登つていくのに、彼等の暮らした汽

車につて下へ下へとくだるのみであつた。

バルリオンは、一日に何べんか汽車を見る時ごとに胸も裂けるように心が痛んだ。そのわけは二つあつた。一つは自分の妻の出奔であり、その二つは日本へ行こうと思つてた自分の希望が中間で折られてしまつたことである。

バルリオンは、今も忘れようとしても忘れられない切々たるその思い出が、蛇のしつぽのように彼の胸にまきつくのを、どうにもしようがなかつた。しつかりと巻かれた糸の玉のように、一すじ一すじの切々なその思い出が解け始める。

「何故こんなに遅くなつたの？」

妻は疲れたからだで帰つて来る自分を、何時でもこのようになつかしく迎えてくれた。

バルリオンの妻は、田舎者としては過ぎるほど美しかつた。バルリオンのような貧乏者の土百姓にそんな人物がまわつて来たことは、この世ではちよつとない奇蹟である。(そのために逃げもしたけれども)しかし、その奇蹟にはその奇蹟が生じるに充分な理由があつた。

それはバルリオンの妻がまだ十二才の時に、その父と母が伝染病で死んだが、その父の遺言に、バルリオンが自分らに大へん親切にしてくれたのに報いるというので、バルリオンの母に向つて将来嫁にするために、連れて行つてくれと頼んだためであつた。勿論、自分の幼い娘をよるべくなくさまよ

い歩かせることも出来ないために、そうしたのであらうけれども、とにかく、バルリオンをたよりに思つたからであることは事実である。その時バルリオンはもう十九才であつたが、まだ嫁をもらわなかつたし、又暮らしむきから見ても、このまま行くとして何時嫁をもらえるやらわからない有様であつたので、

そうしようといつたのであつた。

「遅くなつてひもじくないの？何かごちそうでもあればね」

妻は夕げの膳を持つて来ながら、いつもこういつた。

「今日ちよつと遅れた……」

バルリオンは満足した。骨のずいまでさすような疲労が妻のこしたやさしい言葉に、一時にさつと解けるのを感じる。バルリオンは、にっこりと笑いながら、こうあいづちを打つのであつた。

夜！

バルリオンは仕事をしながらも、この夜を待つた。

暮らしむきが行きづまつて、喘ぐ自分の煩わしさを、心暖く包んでくれる妻のやわらかい心がけがうれしかつた。

自分の汗のしみこんだしよっぱい臭いが、妻の頭から出る油の匂いに消える。妻とただ二人だけ居ることになるその瞬間がうれしかつた。

バルリオンはすべての疲れと煩わしさも、妻のふところの中だけでは、忘れることが出来、妻の恥かしがりながらも笑う時

は、まつ白い歯が見える赤い彼女の唇から人生の喜びを味わつた。

妻が十五才になつた年に、バルリオンはこらえきれずして、結婚式を挙げた。しかし妻はバルリオンには、あまりにも幼かつた。

そしてキ形的に発達したバルリオンの妻は、十七才になつて始めてバルリオンにやつと妻として現われるようになったし、その時からバルリオンは熱い妻のなさけを感じ始めたのであつた。

しかしそれも夢の間であつた。

今まで一べんも他人の家に行つて泊つて見たことがなく、いつも自分のそばに臥ていた妻が去年の春、ある日の夜明ににわかに居なくなつた。

夜明けであつた。バルリオンはぞくぞく寒さを感じた。そして、目をそつと見ひらいた。そして、いつもするくせで、傍に居るであらうと思う妻を撫でて見た。しかし、彼の手には彼女がかけて寝ていた垢ずんだ小さいせんべいぶとんが一つつめたく握られただけであつた。

「便所にいったのか？」

彼は傍に居ない妻を決して疑わなかつた。

十分——二十分——

バルリオンの目はだんだんぼつととして行つた。

「いや、どこへ行ったのだろう？」  
彼はおいおい気がいらするのを感じた。いらだちは更にいらだちを生んだ。

羽はたきして長く声をあげて鳴く鶏の声が夜明けの空をゆさぶった。パルリヨンの胸の中もおだやかではなかった。何故やら、今まで一べんもそうして見なかった妻に対する疑いが堪えきれないほど、しきりに大きくなつて行つた。

「おい、朝こしらえの時になつたよ」

上の部屋で寝ていた母が寝あきたような声で妻をたずねた。飯ごしらえの時間がすぎるといつも出す声であつた。

「おい、お起き、早く……」

パルリヨンは居らない妻のかわりに返事する元気がなかった。何か、自分の妻を一べんでも疑つて見たことがあつて――そうなんではないが今日は何故か疑心のみがわいた。

「人絹のチマー一つ作つてくれない？」

いつやら妻が顔を赤らめながら、あまえるように、自分にねだつたことがちつとつかひあがつた。

又、いつやら農監のところへ書記をしている「きんさん」とつき当つた時、そつとお互いに笑つて見せたことも思い出された。自分の家で幼い身に耐えられないほど苦しい仕事をさせながら、油一つ、おしろい一箱買つてやれなかつた、かあいそ的な氣持が、何だか不吉なきざしのように、しきりに甦えつて

来た。

「うちらは、いつ『きんさん』ところのように、一べん、くつたなく生活して見るといふのかね」

妻は夕飯のたねが無くて、冴中の者がみんな食えずに、天井だけぼんやり見上げて心配そうに坐つていたある日、うらむようにこんなこともいつたことがある。その時パルリヨンは、かわいい自分の妻まで餓えさせることは、いかに胸が痛かつたことか。妻もきつと苦しい生活に堪えおせずして、何処かもう少しよいところを探して出ていったのではないか。

「おい、何でそんなに寝るんだ」

母は少し怒り声で腹立たしく妻をたずねた。

「どこへ行つたやら、居りませんよ」

パルリヨンは、のどからひつぱり出すようにやつと答えた。

「居ない？何処へ行つたというのだ？」

母は驚いた氣配で下の部屋へ飛んでやつて来た。パルリヨンは驚く母を見ると今さらに自分も驚いた。

妻はそのまま帰らなかつた。

一日、二日、一月、二月、たつても遂に帰つて来なかつた。

パルリヨンの氣持はあわれであつた。あだかも砂をかむように飯の味もないし、仕事も手につかなかつた。

耳に入っている噂は、パルリヨンの妻が誰かの妾になつて暮しているとか、停車場で汽車に乗る時に見たとか、大田の青楼

で見たとか、いろいろと話がまちまちであつた。とにかく妖怪のような汽車に乗つて暗い夜道を走つたことだけは、間違ないようだ。

「あの汽車さえなかつても……」

パルリヨンは罪もない汽車をのろつた。ちようどあの汽車が自分の幸福な生活をみんな奪つて行つてしまつたやうであつた。彼は農監のところの「きんさん」も、汽車をつけた日本人もうらめしく、言うに言われんほど憎らしかつた。しかし何故彼等を憎むのやらは、びつたりとつかめなかつた。

妻が出てしまつた後のパルリヨンの家には、婚礼をするために背負つた農監のところの負債と、妻が使つていた破れた鏡一つが残つていただけであつた。

負債は利子を生んだ。元金は十円であつたが、一昨年の秋、やつと利子として五円を返したのみで、昨年の秋には、利子さえ返されなかつたために、利子五円と元金を合わせた十五円に對する利子七円五十銭を又、合わせればこの秋には、皆で二十二元五十銭なければ負債を清算されなくなつた。

農事でも豊年であればやつとのこと負債でも返せるが、日照りつづきで実入りがないので、借地料さえ支払えるかがうたがわしい破目であつた。

小作村

いつの間にか秋は迫つて来た。  
五斗落の稻をこなししたもの、やつと九石にしかならなかつ

た。

借地料六石、肥料代一石（これはパルリヨンが妻と一しよに一生懸命に、根つめて草を刈つて田に入れたためにこうなつたので、金肥だけつかつてやつたなら、もう二石も上まわりそうであつた）このように七石もこなし場で農監の方で直ぐに受取つて行つてしまつた。金貨は二石では元金にも足りないと思つて怒声をあげた。

「パルリヨイン、おい、今年は借金みんな返さねばならぬ。二石なら十二円にしかならないから残り十円五十銭はどうするのだ」

金貨といつても、やはり同じ農監である日本人であるから、その場で残りのモミ二石をまさか持つて行くだろうか。

そうしようと、こなしはいつも農監の庭先でするきまりになつていなければならないことを言いながら作男をして残りのモミ二石をみんな自分の庫に入れてしまつた。

「農監さん、借金は命があればどんなにでも返してあげますから、一石だけ返して下さい。そうすれば年とつた母と、さしあたり一月の食糧にでもしますよ」

パルリヨンは哀願した。

「こいつ、何をいうか。今年はいかないと。残りの不足分は抵当に入れた家を売つてでも皆返さねばならん、わかつたか！」



日本人(ワイノム)はちよびつと儲けた。

「いや、それは何時の借銭だと、うん、もう何年目か、人間が恥を知るなら考えて見」

「きんさん」という人がとび出た目玉をまわしながら、自分の主人である農監の方に向いてつけ加えた。

「いや、大体十円の借銭に、もう受取った利子だけでも十五円をこえるのに、又いくらか余計に受取るうと？」

バルリヨンはこんな言葉が口の外に今にも飛び出そうとしたのをそつとこらえた。

「農監さん、かわいそうな事をちよつと考えてくださいようぞ一石だけでもください」

バルリヨンは無用だとは明らかに知りながらも今一度哀願してみた。

「いかん、家でも売つたら、はやく家移りでもせよ。たつていかねば警察署に行くぞ、わかつたか！」

農監はこう不平そうにつぶやいた。

バルリヨンは、あきれてものが言えなかつた。毎年々々、来年は少しはよからうと思ひながら信じていたことが、結果は元の黙阿弥で、この有様、このざまとなつたのである。

彼は無駄骨折つただけで、空手を握つたまま家へ帰つて来た。彼の憂うつな足どりは心から家に帰りたくなかつた。俵を待つ母には何と言つたものか、よめが逃げて行つた後、バルリヨンは

「さあ、これをもつて他のあばら家を一ツ買つても家を早くあけねば……」

「きんさん」はこういつて帰つて行つた。

今となつては、どうしてもここでは暮らす途は無いとバルリヨンは考えた。

「ただの三年だけ、我慢してください。何とか方法があるだろうから……」

バルリヨンは、母にこういいながら涙を流した。出ていつたとしても何も別段なことがありそうになかつたけれども、とにかく、このぞつとするような郷里はたつていこうと固く決心した。

母は里へ行くように手をまわして、バルリヨンは農監が持つて来た家の売却代金の残り十円に菓を売つた五円を補つてやつと旅費として十五円を用意した。そして言葉一つわからず、知る人一人も無い日本へ金儲けに出かけることとしたのであつた。或る者は、行かないで、何はともあれ農業を着実にやれ、と、止めもしたけれども、彼は聞こうとしなかつた。母もついには止めることを断念せざるを得なかつた。彼の考えはあまりにも頑強であつた。母は息子が出るという日、どこから出たのか十銭白銅貨一枚を息子の手握らせながら涙を流した。

友人たちもいくらかの補助をしてくれた。バルリヨンは、まず下関までの乗車券を買うことにした。

に劣らぬ程に傷心している老いた母に、本当にどう事情を話してよいものか。

「おい、なんでそんなに元気が一つもないのか？」

母はバルリヨンの元気の無い、やつれた姿を見てこう問うた。その声が如何にあわれにバルリヨンの胸にこたえたやら。バルリヨンはその場で涙がこぼれようとするのを無理にこらえた。彼は唇をかみしめた。

「おかあさん、わたしは少し出ていつて歩きまわつて見ようと思ひますよ」

バルリヨンは、この腹立たしい土地を捨てて、どこかへたつて行つてしまいたかつた。

「行くとはどこへ行くというのか？」

母は仕事に追われて、熊手のように大きくふしくれた息子の手をしつかりと握つてうろろろ声で言つた。

しかし、食べるものもない上に、家まで無くなりそうなのに、ここでどう暮らすことが出来るというのか。

「ええつ、わからない」

彼はこの住みたくない郷里を一日も早くたたねば、さもなくばきつと気が狂いそうだつた。

数日あとに農監からは家を売つた金の中から借銭をみんな引去つたら十円残つたと「きんさん」が、それを持つてバルリヨンを訪ねて来た。

こうして彼は、のろつていた汽車の上に自分のからだを乗せた。

かたん、ごとんと汽車は河を渡り、山を越えてなじみのない土地を走つた。

汽車は釜山についた。

海と船！

ここでは朝鮮で暮らすことが出来ずに逐われて行くあわれな群がたまりとなつていた。

彼等は「労働者渡航阻止係」の係員の手を経なければ船に乗ることが出来ない。

役人たちは「日本は金儲けがよいだろう」と莫然たる考えて泣きわめく可哀そうな群のために、予め仕事場が定つていない者は、行かせないのである。

「もし、切符あるか？」

「はい、旦那さん、何の切符ですか？」

「渡航許可票あるかというのだ」

「何ですか、このことですか」

労働者たちは、自分にあるというのは何一つ残されず、とことん売り払つて屋敷代も残さず買つてしまつた切符を出す。

「このことでない、おまえは用がない」

「旦那さん、ただ、こんだけ許してください」



彼等は何か罪でも犯したように水上警察署の門口がすりへるほど追いつがつた。

「何いうか、身分証明書を買つて来たか？」

旦那はさけぶ。彼等は身分証明書が何やらもわからない。

一日が暮れ、二日が暮れても、彼等が船に乗る途は開かれな

い。  
「そうしないで切符を払戻してやるから家に帰つて百姓でもやれ」

旦那さんは「親切に」お話しなさる。

彼等はお息を消えているようにつきながら、自分がどうしてもたねばならなかつた自分の生活を顧みた。しかし、格別な方法はないではないか。

彼等はどうしようもなく、切符を金に換える。旦那はよいことでもしたように、にこつと笑う。彼等は、その笑いが何であるかわからない。そして言葉につまつて、ついでにうしろ笑いして、ありがとう、と何べんもおじぎをした。

バルリオンも、このようにした多くの人の中の一人であつた。彼の遠大な抱負は、旦那の手で余すところなく折られた。彼は再び故郷へ、何も無い故郷へ、何もなく帰らねばならなくなつた。あの立派な、生まれて乗つて見たこともなかつた汽車に乗つて、又予想外大きな船を目のあたり見て……

痔せこけた尻は、ふわふわとした汽車のクッションを考え、

きよろりと生気なく落ちこんだ目は敵とした船を思い出す。

バルリオンは、すぐに家に帰ることが恥ずかしく、一ヶ月もあちこち歩き廻つたが、何ともしようがなく、再びあのいやな故郷へ舞い戻つた。

母は何はともあれ喜んだ。しかし、農監は鼻で笑つた。

「お前が行くつて、どこへ行く」

農監は、再び作らせてくれ、と願ひに来たバルリオンの卑屈な顔を思いながら一人につこりと笑うのであつた。

(下略)

× × ×

朝鮮語研究会が開講以来使用した教材は次の各書である。

- 一、大韓民國憲法
- 二、朝鮮民主主義人民共和國憲法
- 三、朝鮮通史 下巻
- 四、朝鮮民族解放闘争史
- 五、朝鮮現代文学選集(一部)
- 六、この間文法一巻を終わり、その他、日朝会話練習帳、新聞等を読んでいる。

## 文献・資料

# 半世紀前の朝鮮

— 日韓併合前後の思い出 —

今 村 武 志  
( 講 述 )

..... 講 述 者 略 歴 .....

明治四十一年 東京帝大卒業、同年十月統監府属。  
明治四十二年 理事庁副理事官兼統監府書記官。  
明治四十三年 總督府事務官（人事局内務部勤務）。  
大正二、五年 財務部長（慶尚南道京畿道）。  
大正六、十二年 専売局・専売課長。  
大正十三、昭和二年 黄海道知事。  
昭和二、四年 總督府殖産局長。  
昭和四、七年 内務局長兼中枢院書記局長。  
帰国後樺太庁長官になる。

私が初めて朝鮮に行つたのは明治四十一年の十月頃だつたと思う。資格は判任官で、京城の理事庁に配属された。むろん、併合前の統監府時代の事で、当時はその下に、京城はじめ釜山、木浦、群山、元山、鎮南浦、平壤、新義州、鏡城と全鮮九カ所に理事庁というのが置かれていたのである。

理事庁には理事官があり、京城には、その下に二人の副理事官がいた。そして、私と入江海平君の二人がその副理事官として採用され、同時に兼書記官の名前で、入江君は統監府審査課に、私は同地方課に勤務したのである。

統監府の仕事は、私共にはまだよく判らなかつたが、その当時は、韓国を保護政治中であつたので、主体はやはり韓国政府であつたのである。

韓国政府には、朝鮮人の大臣の下に、日本人の次官がいた。この次官には非常に優秀な人材が多く、伊藤博文公が、特に選んでつれて行かれたもので、その中には倉富勇三郎、荒井賢太郎、石塚英蔵、木内重四郎の諸氏が居り、鉄道には大屋、通信には池田という人が居つた様に思う。

# 半世紀前の朝鮮

……日韓併合前後の思い出……

今村武志

## 目次

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 一、あの頃の統監府         | 169 |
| 二、国分人事と朝鮮人官吏の党派争い | 171 |
| 三、官吏の誅求と農民の惨状     | 173 |
| 四、現実を基盤に。政治の苦心    | 175 |
| 五、私の日韓関係史観        | 177 |
| 六、民族構成とその性格       | 180 |
| 七、融和の苦心と当時の民度     | 182 |
| 八、民心の把握を第一義に      | 184 |
| 九、質問              | 186 |

昭和34年10月14日 第72回研究集会 東京・丸の内  
中央日韓協会★議室

(出席者)

|                  |           |         |          |         |          |          |         |       |         |        |         |          |           |       |
|------------------|-----------|---------|----------|---------|----------|----------|---------|-------|---------|--------|---------|----------|-----------|-------|
| 奥村<br>コウ一<br>名三名 | 青木<br>香代子 | 金<br>己大 | 宮<br>田節子 | 金<br>圭南 | 梶<br>村秀樹 | 樺<br>事旭相 | 姜<br>徳相 | (学生側) | 林<br>省三 | 岸<br>謙 | 近<br>藤一 | 渋谷<br>礼治 | 穂<br>積真六郎 | (協会側) |
|                  |           |         |          |         |          |          |         |       |         |        |         |          |           |       |

録音テープ整稿

又、伊藤公は特に農業の開発に力を入れられ、本田幸介という名高い学者を伴れて行かれた。そして伊藤公はあくまでも急激なる改善を避け、水原に農事センターを設け置かれたときもその名称を叙上の趣旨に依り試験場とせず模範場とせられたときいている。

さてこれらの人達は、韓国政府の朝鮮人大臣の下に、各部次官として仕事を行う一方、統監府参与官の肩書を持っていた。つまり、韓国政府の次官兼統監府参与官というわけで、則ち、韓国政府を主体とする統監府の政治的性格が、この人的構造の上に見られるのである。

統監府では、毎週一、二回、参与官会議が行なわれた。そして統監府には総務長官が居り、その総務長官が議長となつて、丁度、今の日本の内閣でいう閣議のようなことを、この参与官会議が行つていたのである。即ち、韓国のいろいろな国事を決定し、その決定に基づいて、韓国政府がその実務を行つていたものと思う。私の赴任した時は石塚英蔵氏が長官事務取扱をして居られた。

統監府の機構について言えば、総務長官の下に、地方、監査、会計の三課と、外事部という一部があつた。そして私は、その一属僚として、前記のような職責に任じていたわけである。尤も外局として司法、鉄道、通信があつたようである。

地方課の仕事というのは、居留民団や警察事務の一部、日本人の教育等であつた。元来日本人子弟の教育は、朝鮮人とは別に学校組合というものを作り、その組合で経営する学校で行い、子供が五、六人しか居ない所でも学校組合を作り、学校を建て、日本人の教員を置いて、その教育に當つていたのである。

監査課では法務關係の仕事をやリ、又、外事部は、最初は鍋島という人が部長になり、私の行つた時には小松緑さんがやつていた。広田元首相も一時外事部の一事務官

として勤務して居られたようだ。統監府の行政の規模は非常に小さなもので、その下部機構である各地の理事庁にしても、各地に散在する在韓日本人の世話をする、いわば領事館の名をかえたものに過ぎなかつた。そしてその役人は、純然たる日本官吏として、統監府に所屬していた。

これと共に、韓国政府に傭聘されている日本人官吏がいた。いわゆる傭・聘・官・吏と称せられるもので、これらの人達は、日本の資格をもつたまま出向の形がとられていた。つまり、大蔵省の官吏なら、大蔵書記官のままで、韓国出向ということになつて、韓国政府に傭聘されていたのである。そのため、この両者の間には、いろいろと溝があつたように思うが、何分にも皆進んで朝鮮に赴任した連中なので、なかなか元氣旺盛で種々話題を播いたものである。又、内地から新聞通信員として派遣せられて居つた連中にも戸叶とか山道とか或いは檜崎とか皆ソウソウたる人々が居られた。

・国分人事と朝鮮人官吏の党派争い・

丁度併合のときは私は荻田悦蔵氏の下に居つたが、併合のとき人事局事務官として国分象太郎という人の下に勤めた。この国分という人は、なかなかの傑物であつた。明治十年前後に朝鮮に来られ、朝鮮の事には、実に詳しく、朝鮮の貴族も同氏の前は頭が上らなかつたようである。従つてこの国分という方は、朝鮮人に対するニラミが非常にきく人で、朝鮮に於いて最も複雑を極めている派閥の如きも殆んど一切合切、鏡に映して見るように知つていた。だから、併合の時の貴族の選定や各道の地方長官、郡守、事務官の組合せなど、すべてこの人の考えが伊藤統監に採用されたときいてい



の力に負うところが非常に多かったと思う。勿論、軍隊の力もあつたであらう。けれども、あのようにびつたりと人心をおさえ、また、あのように極く平穩裡に併合が出来たことは、やはり、伊藤公に対する国分さんの日頃の進言が適切であり、特に朝鮮人の性情をしつかりと呑み込んでいたことによるものと思われる。そのためであらう。僅かに通訳官の地位だつた国分さんは、併合の論功行賞のときには、勲一等旭日大授章が授けられたのである。

これは話がちよつと飛ぶが、朝鮮の政党の相互関係というものは、非常に深刻なものである。従つて、長官と郡守とが、その党派が違つてと到底円満に事が運ばない。そんな訳で人事行政は余程うまくしないと、政治をうまく運営することが出来ない。そのため国分さんは、道長官と郡守などの党派をよく調べて、これをうまく組合わせ、これは誰の系統、それは誰の系統ということを書き込んで大きな表を作つておられた。そして、その表に従つて、うまく人物を配置して行つたので、地方のことは、すべてきちんと治まつていた。それは実に、国分さんの用意周到な計画力によるものであつた。

今ちよつと政党の關係に触れたが、朝鮮の国力が、あのよう非常に衰微したこと、は、むろん、外にも原因はあつたであらうけれども、一番その直接の原因は、やはり党派争いであつたと思う。御承知の通り李成桂が高麗朝に代わるとき論功行賞に依り、その参謀役を勤めた僧侶を優遇したことの余波は、僧族の跋扈となり、遂にその弊に堪えず、これが抑制のため朱子学を入れて儒教を非常に鼓吹、各地に郷校を設け儒者を養成したのである。

ところが、今度は又、その儒教の勢力が強くなるにつれ、同じ朱子学の中に学派を生じ、いわゆる朋党の禍として知られる血みどろな政争で、爾後の歴史を塗り潰すこ

とになつた。即ち、京城の周囲に東・西・南・北という四つの塾が出来、お互いに門戸を張つて勢力争いをした。そしてこの争いは、只に学問だけの争いに止まらず、いつの間にか政治上の争いと化し、自然、王室の中にまで深く食い込んで行つた。この東、西、南、北、いわゆる四色の学派は、やがて、東と西とが名前を変えて老論、少論となり、一方の南北は、南人、北人という風に変つた。

この四色の学派、つまり四つの党派は、互いに政權を争い、老論の方が政治をとると、他の党派が權謀術数を弄してこれを倒し、又かりに南人が政治をとると、老論派の高官を皆殺しにしてしまふという有様であつた。国分さんの話によると、旧韓末の頃でもクーデターがあると、その後、光化門の前に必ず、誰かが必ず死体となり倒れていたという事である。何しろ、その争いが非常に熾烈であつた。そして、所有財産は一晩の中に没収されてしまふ。御承知と思うが、日本に亡命していた事もある金玉均も暗殺されたが、あのようにな最後には、反対党の刺客のために暗殺されてしまふのである。そしてこういう事がしつちゆう絶えないから、遂にはこれらの党人間は互いに不倶戴天の敵となり、冠婚喪祭は勿論、平常の交際もしないという事になる。又、王さまの力というものも弱い。だから抑えがきかず、従つて政權は何時変わるか分らない。官吏にしてみれば、どうせ政權が変われば、自分の首は明日をも保証出来ない。しかも役人になるには買官と言つて金を出して官を買つてなる。だから、在職中に、官を買つた金の倍も三倍も懐を肥やさなければならぬ。そのため地方の農民は、実に悲惨な生活をしていた。

・官吏の誅求と農民の惨状・

農民達は、こうして役人に搾られるばかりでなく、その地主關係というものが、また大変なものである。

例えば、金持が土地をかうときでも、土地などはない。ただ、小作米をいくら呉れるかと、ということ、それでは、いくらいくらで買おうということになる。その土地は、一体何処にあるのかも分らない。そんな調子で土地をかうと、まず、舎音というものを置いてそれを管理させる。一石の小作米ということ、買ったものを、舎音が中間搾取のため二石にせり上げ、更に、金を貸したとか、何をどうしたとかいうことで殆んど取り上げられ、せつかく作った米も百姓の手には残らなくなつしまう。こんな風で、百姓達は、春になればもう食物に困り、みな栄養失調で働く氣力さえ失つてゐる。だから国内の疲弊というものは、もう極度と言つてよい状態で、従つて地方にはいざこざが絶えなかつたのである。

政党と政党とのツバぜり合いばかりでなく、官吏と人民、地主と百姓、そういうお互いの関係が、私には全く仇同志という風に感じられた。それは日本の政党のようなものではない。全く仇同志なのである。例えば、その歩き振り一つで何党に属するかということを見分ける程深刻なものであつたのである。

私が黄海道の記事をしてゐた時、私の下の内務部長は老練の朝鮮人で、参与官は南人の朝鮮人だつた。ところである日、参与官の子供が元服したというので私の所へ挨拶に来たが、内務部長の所へは子供でも挨拶に行かない。

そういう事を繰り返してゐたから李朝末期には、朝鮮は東洋のバルカンというような状況になつてしまひ、支那か、ロシアか、日本か、何れかにつかなければ、保つて行けない状況であつた。

そこで日本としては、あの國を、支那やロシアにつけさせるわけにはゆかない。そこで、結局、日本で、ということ、日韓併合ということになつたものだと思はれる。要するに、あの当時の、朝鮮の暗さというものは、一寸、想像が出来ない。当時、

地方を廻つて見ると、その暗さというものが、ありありと見られた。

私は、地方監察の任務を与えられたので、三、四度、朝鮮全土を歩いた。あの当時三百七十何郡があつたが、その中、私は、三百郡位廻つた。自動車はないので馬で行くのだが、全く人間らしい生活をしてゐるものは極く一部で、馬にでも乗ろうという両班などは別として、大多数の百姓は、全く食うや食わずという言葉がびつたりする生活だつたと思う。だから、日本には春になると「春風タイ蕩」とか、「陽春の候」とかいう言葉があるけれども、向こうでいう言う言葉は一部の特権階級である兩班のものであつて、百姓には、これに代わる「春窮」という言葉がある。「春窮す」つまり日本の端境期を指して春窮期というのだが、この頃になると全く食べ物になつてしまふのである。まだ草も生えないので、芽も出ない中から土を掘つて草の根を食べるし、又、松の木を折つて表皮だけを捨て、韃靼皮を食べてゐるのを時々見受け、実に暗澹たる氣持にさせられたものである。だから年々行路病死をする者の数も非常に多かつたことと思う。

以上、あまり悪い面ばかり挙げると朝鮮の人達に怒られるかも知れないし、殊に李承晩などに聞かせたら「久保田発言」以上にお叱りを受けるであらう。けれども、事実はいくまで事実であり、それ程、その頃の朝鮮というところは、ひどかつたのである。

・現実を基盤に、政治の苦心・  
朝鮮の李朝末期というものは、実際そういう風のもので、こういうことは、その時代、その時々、折に触れ、事に触れての實感が伴わなければ、なかなか、その真相というものを把握し認識できるものではない。従つて、今日的な社会概念乃至は歴史観というものを認識の基調としてこのような話を聞くと、まさかと思つたり、誇張と

感じる人もあるかも知れない。しかしながら、そう感じる人達は、この間に於ける時代の流れ、文明の進歩、思潮の変遷というようなことを、よく考え合わせて見る必要がある。だから、私と同じ時代を生きて来た李承晩になら、私の言うことはよく判るだろうと思う。

そんな訳で、当時の日本の政治を暗黒政治だとか何とかいろいろに言う人があるけれども、寺内統監が来られてから総督になられ、非常に力を入れて産業開発とか、一般の朝鮮人を雇用するとかして、朝鮮人の働く途を開くことに心を配られた。

ところが、今日では、民主主義だとか、話し合いだとか、いろいろというけれども、当時は何しろ、話したつて、何を言つたつて分らないのだから、やはり啓蒙と同時にソ運式に押しつけてさせる、ということになる。そこで、伊藤公や寺内さんなども、ヤレ武断政治とか何とか言われるけれども、統監はその当時の私達から皆、齒がゆい程朝鮮人本位に事を処理し、出来るだけ現実には改善を加え、急激な変革に依り朝鮮人の精神的負担を少なくする様に努められたのは事実だ。例えば、水原の勸業模範場について前にも一言したように、本田幸介博士が主としてやられたが、あれなども改革でなくて改良で行け、という指示をされ、「農事試験場」ではないけない、「模範場」にしろ、ということ、あゝいう名前に決つたという事である。

又、朝鮮の牛は労役にも食用にも極めて優秀であることが判つたので、朝鮮の牛を保護せよ、ということ強く言われた。そして、外国から入れる必要はない、朝鮮の牛一本で、只その改良に努力せよ、ということだつた。これについてこういう挿話がある。

ある時総督が地方に出張して沿道で白班の牛が居るのを見られた。そして、帰ると直ぐ係りの課長に調査を命じて見にやられた。ところがそれは、朝鮮種の変種で、外

国種でなかつたということである。

そのように、総督は始終朝鮮というものを念頭に置き、深き理解と注意の下に民衆に接し、又事物を見、一日も早く民生を安定させようと努力されていたことが、私共下の者にはよく感じられた。

又、私共が地方に出張してよく感じたことは、日に日に、目に見えて道路、交通などが、良くなることであつた。これなども、昔の朝鮮の道路というものを知らない人には分らないが、例えば、川には殆んど橋らしきものさえなかつたのである。

従つて今日、その当時の実情を見ずして、只、やり方が行き過ぎだつたとか、乱暴だつたとか、言うのは果して當を得ているか、という感じがする。それは、日本にせよ、朝鮮にせよ、何も今日以上に発展しない、というものではなく、又、何れの国、何れの場合でも現状というものが絶体的なものではなくして、やはり變つて来るのである。従つて、その当時の実情を見ずして、今日的な認識を基礎に、殊に文明の幼稚な時代に対する施政をかれこれ非難するということは、非常な間違ひではなからうか。そして、大体、この種の批評、論調などを見てみると、軍閥とか、圧制とかいう言葉がよく使われているが、何か、なさんがために朝鮮の人達が言うのならばこれは別であるが、お互いとしては、余程、その当時の実情を見て、果して、これ以上によい方法があつたか、という点を、凡ゆる面から再検討して見るべきである。只、表面だけを見て、非難せんがための非難をどう言うことは、その当時、我々は部下として仕え、上に立つ人達が、どれ程苦心をし、又どれだけ熱意をもつてやられたかを知つて、いるだけに、余り軽率な批評はして貰いたくないという感じである。

・私の日韓關係史観・

以上は私の憶い当るままをお話したいのですが、元來日本と朝鮮は一帯水の

国であり、且つ同種同文の間柄であるので、徳川鎖国時代に於いても西部日本、殊に對馬地方と朝鮮とは相当交通が頻繁に行われたものと思われる。然るに、我國維新の大改革による国幣の窮乏且つは治安の維持等、容易ならざるに乘じ、在留日本人に対する圧迫其の極に達し、加うるに、我國を輕視する傾向のあつたことは、明治六年十月十五日いわゆる征韓の論議の際に於ける西郷隆盛が三条公に提出した書翰に依るも窺知することが出来る。同書翰に依れば「御一新之涯より及數度使節被差立百万手を被尽候得共悉水泡と相成候のみならず數々無礼を働候儀有之近來は人民互之商道も相塞倭館結居之者も甚困難之場合に立至候」云々とあり更に「西郷は居留民保護の爲、陸海軍を派遣する事は未だ策の尽さざるものあれば、先づ使節を遣はし正理公道を以て彼政府を論し、若し聴かずして我に暴行を敢てするならば、正々堂々と罪を鳴して彼を討つべく、先づ其の使節に自分を派遣せられたい」と書いてある。これによつて見るも、その當時に於ける朝鮮の態度は、大体想像する事が出来る。其の後竹添公使の事件等頻々として、好ましからざる事態が出来て居るが、これらはその当時宗主権を有する清国の使職と朝鮮内部に於ける一部権力者の策動に基く事が明らかなので、遂に日清戦争となり、清国の完敗で始めて朝鮮は獨立を得、曾つて京城北門に在る迎恩門は、その名を獨立門と呼ぶに至つたのである。然るに前門の虎去つたのは東の閭、ロシヤは満州に鉄道を敷設しあわよくば、朝鮮を経、多年の懸案である日本海の不凍港を獲得せんとする野望を露骨に示すに至り、遂に日露の大戦を捲き起こすに至つたのである。而してこの間、朝鮮政府は、これらに對し自力を以つてこれを阻止し得ざるのみならず、却つて内部に於ける各権力者達は、各々徒党を組み、己が勢力の扶植に狂奔し、或いは右につき、或いは左に組みする等、殆んど收拾すべからざる状態にあつたことは事実のようである。日露戦争が終結し、欧州各国の了解を得、我國が保

護政治を布いた後に於いても、尚これらの策動が絶えず、遂に日韓併合を招来したのである。以上のように我國が国力を賭して日清、日露の一大戦争をなしたのも云わば我國防衛のため、その當時に於ける国際情勢に照し、真に已むに已まれぬ手段といわねばならないことは自明の理と思われる。幸い、寺内、齋藤等の賢明にして偉大な總督を迎え、朝鮮の教育、文化、産業等真に劃期的な躍進を遂げたので、自然朝鮮統治のやり方にも相当変化を来たように思われる。殊に朝鮮人であるいは衆議院議員に當選、あるいは朝鮮貴族として貴族院に議席を有する等、生活の安定に伴い、政治意識も漸時高まり、單に從來の一視同仁のお念仏だけでは間に合わぬ事が明らかとなり、大正十年頃には私達事務官どもも屢々長官室に呼ばれ、今後のやり方などにつき諮問せられたのである。そして其の何時も問題となるのは、内鮮一体という觀念、これに伴う衆議院議員の選挙並びに財政負担等の事であつた。然るに私が内務局長として就任したときは、大体朝鮮にある程度の自治を許し、一面朝鮮人の政治慾を満たしつつ朝鮮の興隆を計るという事に大体方針が固まり、命をうけてこれが実現を期し、政務の区分やこれに見合う歳入の案分等、時の財務局長林氏等と種々協議し、富永、岸岡君等がその立案に当り、漸く成案を得たので、印刷物はすべて番号を付して厳秘を保ち、齋藤總督はこれを携えて上京せられたのである。当時の内閣は多分若槻内閣であつたように記憶する。しかしこれは併合にも優る大問題なので、多分内閣や秘密院の一部に手渡し検討を要望せられた程度であつたろうと思われるが、その後遂に日の目を見ずに終わつたのは、今から考えても何となく残り惜しいような感じがする。これを要するに、我が国は外は清国、ロシヤ等の野望を挫き、内は多年に亘る朝鮮内部の弊風を打破し、健全なる基礎の上に立ちて朝鮮に於ける産業、文化の興隆を計り、真に東洋平和の確立を企図した事は寸毫も疑い容れざる処である。勿論その過程



に於いて、朝鮮のその当時の現状に照し、多少行過ぎや錯誤のあつた事は、これを否む事は出来ないが、これを以つて朝鮮統治の根本方針をかれこれ非議するなどという事は決して当を得たものという事は出来ないと思う。

・民族構成とその性格・

一口に朝鮮人というけれども、この民族は決して純血な一民族という訳にはいかないうだ。慶尚南道から全羅南・北道の一部にかけては、倭寇以来、日本人の血が、又、平安南・北道や黄海道の大部分には支那人の血が、そして咸鏡道方面には韓人、血がこれまた相当多く混つていると言われ、そして京畿道と忠清道には比較的純粋な朝鮮人の血が保持されているように言われている。

そこで、地方を廻つて見ても、例えば全羅南・北道辺りを見ると家の作り方が、丁度日本と同じようで、屋根のカーブなどにその特徴がよく出ている。それが北の方に行くに従つて豚の尻ッぽのような屋根になる。又、慶尚道のように南の方に行くと、日本の家のようにエン側がある。木の板を使わない竹で作つた濡れエンのようなものであるが、北の方にはそんなものはない。

従つて性格も西北鮮とよばれる平安道、黄海地方の人は、表面は温和に見えるが何か内心に一物を有するという風で、一寸親しみ惜い感がある。それから咸鏡道地方へ行くと、非常に勇敢な風がある。それが慶尚南道など朝鮮地方に来ると、日本などのように、ムシロ旗を立てて騒ぐというような気短かな点がある様である。

朝鮮は以前は、南北道に分れていず、京畿、忠清、江原、慶尚、全羅、黄海、平安、咸鏡の八道となつていた。それで朝鮮人はうまいこと各地方人の性格を言い現している。

京畿道の人は非常にお世辭がうまくて実意がない。だからあれは「鏡中の美人」で

実がない。黄海道の人間は「春波投石」即ち平常は非常に静かに見えるが、水に石を投げると波紋が起るように、何か刺激を与えると、直ぐ反動作用を起こす。又、咸鏡道人は「石田耕牛」即ち黙々として堅忍不拔、謂わば愚直である。その外のは忘れたが南鮮地方にも同様の標語があり、その特長を現わしている。

そういう風に、朝鮮人と言つても必ずしも一様ではなく、それも、日本人が地方々々によつて特長をもっているのとは、又違つた性質のものである。

次に、民族的統一がない。高麗朝の遺臣は容易に李朝に心服せず、李朝もこれには相当手擦ずつた事は、開城に於ける鄭夢周の彰徳碑にもありありと察知することが出来る。殊に開城に於ける旧臣は、任官の途を絶たれた許りでなく、その身の危険さを感じ、遂に姓を改め各地に散在し、貨殖の途に走つたのは事実の様だ。

このように、歴史的にも、性格的にも朝鮮人が渾然一民族として団結するという事は、なかなか容易でない。曾つて私が慶尚南道に部長をして居つたとき、日本内地觀光団に加わつた或る郡守の一人は帰つて来ると、こういう感想を述べた。「朝鮮の弱いことがよく判りました。日本には各地に神社がある。そしてその神社の本社が一つある。各地の神社は地方の人が祀つて、それに一つの本社があるのだから、日本人は纏まり易い。朝鮮には、そんなものは何もない。そして日本へ行つて驚くことには、忠臣義士の色々な伝説や物語の多いことです。要するに、日本の皇室を中心としているよい伝説が沢山あるが、これも朝鮮には何もない。だから朝鮮には、中央に帰一するようない、そういう思想的なものが何もないから、朝鮮人は纏まらないのです」と。これは非常に頭のよい郡守だつたが、私はよく言い当てていると思つた。勿論、今日の時代にあてはめて見れば、相当議論もあるだろうが、今日とは余程時代が違つていることを念頭に置いて考えて貰いたい。

ともかく、日本には二千六百年という長い間の中心がある。そうして民族的に結合して来ている。しかし朝鮮にはそういうものが何もないのである。

こう見て来ると、朝鮮の歴史の上で、その民族が、一応統一的に安定し、一番皆が安心して生活し得たのは、朝鮮總督府の政治の時代だけではなかったかと、私は思う。今の李承晩のやつていることにしても、それが彼の政策にもよるであらうし、或いは国際情勢というものかも知れないが、ともかく、南北朝鮮に分かれ互にシノギを削る現状を見ると誠に感無量である。

・融和の苦心と当時の民度・

次ぎに補足的に二、三申し上げると御承知の通り、統監府の保護政治から明治四十三年には日韓合邦ということになった。そして、日韓併合とはいうけれども、表面上は併合ではなく、韓国皇帝の合意で、日本の天皇と対等の立場で合併するという形がとられた。そして決して朝鮮人に劣等感を抱かせないようにと、ずい分、總督は苦心されたようである。

けれども、一般の日本人は、――なかに、朝鮮人が――と言った調子で、なかなか徹底しなかつた。そのため、『朝鮮人を差別待遇する』とか『朝鮮人を卑下する』とか、いろいろ問題があつて、朝鮮人の不満を買つたようである。殊に朝鮮人の生活が安定してくると、この傾向が一層はげしくなつたような感がある。勿論政府は出来るだけ朝鮮人を同等に扱うよう苦心した。従つて、知事なども、日本人と朝鮮人とを半々に任命することとし、總督府の局長にも朝鮮人を任用するような建前をとつた。また、大ぶ後になつてからではあるが、朴泳孝侯爵が貴族院議員になるなど、上の方ではかなりその点に意を用いていた。

しかし、心ない一般の日本人の優越感というものは、依然としてこの上の方の苦心

を無駄にさせるし、一方また、朝鮮人にしても、従来、搾取されて来たあとが心の傷となつていて、とかく猜疑心が強く、容易に總督統治の真意というものを受け入れようとしなかつたのは事実のようだ。

尚ここでその当時の教育の一端をのぞいて見ることにしよう。私が最初朝鮮に行つた頃は、前にも話したように、日本人だけは学校組合でやり、朝鮮側には極く少数の普通学校（日本の小学校）というものがあつた。そして、この普通学校の生徒というのが、大半は妻帯者であつて、未婚者は極く少なかつた。それというのが、朝鮮の社会では、早く結婚しないと人間扱いをして呉れない。だから両班と言つて貴族階級となると、男の場合、大抵、五、六才で結婚する。それに対して女は十才位、それ以上の者もある。何しろ、結婚している者が死ねば人間として一人前の葬式が出してもらえないが、独身者は、昔は一人前の葬式が出来なかつたのである。何でも、李王（その当時は王世子）さんの最初の王子さまが極く幼少で亡くなつたときだつたが、本式の葬式を出すか、出さぬかなど、大分、巷間の話題になつたというのを聞いていた。しかし結局は、当り前の葬式を出すことにはなつたのだが……。そんな風で、要するに、朝鮮では結婚して一人前に扱つて貰えないので、妻帯者の小学生というのは當時は普通のことだつたのである。それが漸次改善せられ三面一校が更に進んで一面一校になり、我国が三、四十年もかかつた学校施設が僅か二十年間で面目を一新するに至つたのは誠に驚異的という可きである。

次に煙草専売について一つの笑話を付け加えたいと思う。私が専売制度実施後の状況を調査していたとき、煙草の製造を一般に見せてやろうと思つて、地方の見学団を作り、皆に見せてやつた。ところがその結果はこうだ。以前は手巻でやつていたので能率が上がらない。それが、ボンサツクなどという機械になると一秒間に何千本とい

う煙草が出来る。そこで彼等の中には「あんなに簡単に出来るものを、金をとつて売るといふのは間違いだ。あれは日本人が朝鮮人から金を吸い上げるためにやつてゐるのだ」と悪宣伝している者があるといふのである。しかもそれを皆が真に受けて聞いているといふのだ。

勿論、以上のような程度が、当時の朝鮮の一般的なものではない。けれども、当時の民度というものが、大体、そんな程度のものでつたといふことは言い得る。そして要するに、当時の日本の為政者は、この民度を対象として、いろいろな施策をやつた訳である。

それに対し、今日の人々は、そうした当時の朝鮮に於ける民度や、また歴史的、地理的乃至は政治的な社会構造の要素にはお構いなく、自分の頭だけで昔も今と同じと考へていろいろと批評しているが、これは非常な間違いである。もつとも、私は今、私に与えられた課題の範囲で当時の朝鮮についての言つてゐるのだが、このようなことは、日本の歴史について見ても同じようなことが言えるのではなからうか。ともかく、過去、現在と、それぞれの客観的認識をしつかり掴んでものを見ないと、とてもない錯覚に陥るものである。

・・民心の把握を第一義に・・

終りに、前にも屢々、代々総督が朝鮮統治に細心の注意を払われたことを話したが、私が直接御指示を受け、今尚脳裏に刻んである二、三の事を付け加えてお話を終わらせて貰いたいと思う。

元来、総督は陸軍や海軍の大將で、ああいう人達は、私達の感じから言えば、いわゆる武弁で、余り細かいところには気が付かないものだ位に思つてゐるが、実際には相当細かいことまで気を配つてやつておられた。それをむしろ、我々若い高等官連中

がこわしたり、ブレーキをかけたりした形になつて、今でも、相済まぬことだと思ふことがいろいろある。

私が専売課長だつた時、煙草をいくらにするか、という問題があつた。あの当時は、英米トラストと東亜煙草会社及朝鮮煙草会社の製品が主であつた。英米トラストの煙草は相当輸入せられておつたので、日韓併合の際、英國の要望で差当り十年間は専売制度を施行せぬ事になつて居つた。ところが丁度その期間も到来したので、朝鮮の財政に照しこれを断行する事になつたのである。

そこでこちらはソロバンをとつて五、六、七、八銭というような値段の段階を作つて、私が斎藤総督のところへ持つて行つた。すると、「大体今、幾らの値段で売られてゐるのか」ときかれたので「最低五銭です」と答えると、総督は即座に「それなら今度は四銭位のも出せ」と言われた。そして、「四銭に下げて売れば、安いし、皆買ひに来る。そうすれば、取締りの費用も少なくて済むのだ。又、今、専売のために、高くてまずい煙草を出すと、民心にも悪い影響を与えるし、そのために取締りもせねばならぬ。また、取締りをすれば、朝鮮人に苦痛を与えることになる。だから、なるべく安くせよ。そうすれば誰も危険を冒してまでも密造するものも少なくなる。」収入などは一年や二年は多少赤字でもよい」といふことで、その卓見には頭の下る思いをした。元来、我々も相当の年輩になり、それ相当の仕事をさせられて居つても、つい、うつかり、そこまでは考へないで、事を運んでしまふ。そして、軍人の総督などが、まさかそんな事まで考へていないだらう位にタカを括つてゐると豈図らんや、そういうことを伺つて、なる程と恐縮したものである。とかくの批評のあつた山梨総督についても同様の事があつたが、これは与えられた問題に關係がないので除くが、やはり多年軍政に参与し、総督の印綬を帯びられた方だけに皆相当の識見を有し、そ



れぞれ、やはり総督とか政務総監とかいう上に立つ人達は、民心の動向という点には非常に注意して朝鮮統治というものに当つておられたのではないかと私は考えているのである。今、顧みて思うと、我々は、そういうお考えに、なかなか副うて行けなかつた。それだけに今、朝鮮統治に対して、とかくの批判を聴くが、深く当時の真相を探究し真摯な態度で論評してほしいものと思う。

(講述終り)

## 質 問

梶村 貴重な御体験から出たなかなか面白いお話を有り難うございました。それではこれからいろいろと御伺い致します。

今村 どうも、何しろ、久保田発言以上で……。

宮田 李承晩に聞かせたつて大丈夫ですよ。

穂積 大丈夫ですよ。それから、例の、マツカリの「自家用酒」の話は面白いですね。

今村 ああ、これは寺内総督なのですが、朝鮮の酒には薬酒と濁酒(マツカリ)の二種類があるのです。マツカリは日本のどぶろくで、薬酒というのは餅米で作る。私が財務部長の時

これは税務監督とか税務署長の役目をやるのですが、当時酒税令が出来ましてね。許可のあるもの以外は作れないことになってた。ところが、なかなか密醸が絶えない。私も一度取締りに行つて見ようと、税務主任と話して出かけることにしたのです。それじやお盆になる前がよろうということ、その主任と田舎のある家に入つて見ると、土間に沢山の小かめがずらりと並べてあつて、どのかめにも濁酒が作られている。そこで税務主任が「何故こんなに沢山に分けて造るのか?」ときくと、「これはみんな材料が違ふ」という返事です。「それにしてもこんなに沢山分けて造る法はない」と追求して、大きな一つのかめを持つて来させて、それに移すことにした。私がそれを見ていると

壁の蔭で「アイゴウ」という声がするので、その声の方に廻つて見ると、そこに五、六人の朝鮮人が集つて困っている様子なのです。そこで判つたことは、醸造の鑑札を受けたこの家へ、無鑑札の連中が、皆持ち込んで来ていたところなのです。それで自分々の酒が、みな一つの大きなかめに入れられてしまふので、これは大変なことで、思わず「アツ」という声を出してしまつたような次第で……。それから税務主任から厳重な警告を与え、そのときはそのまま見逃すことにし、更に郡守を道庁へ呼び出して「あれ程、やかましく言つてあるのに……。」と詰ると、郡守は「甚だ相すまないことで……。」と謝まりながら、到底、密醸の取締りは出来ない、と訴えるのです。その理由は、朝鮮の慣習としては祖先を非常に大事にする。祖先の意に満たないことをすると必ず一家が全滅するか、大きな禍いが来る。だからまず第一に墓相を占つて埋葬するのは勿論、祭祀も決して等閑にしない。そして祭祀に当つては、直系卑族の手で作つたものを供えなければいけない、という習慣になつてゐる。だから、自分の手で酒を作つてそれを祖先に供えなければ、その家には非常な災難が来る。それを恐れるのだから、朝鮮人の酒の密醸ということは言わば命がけなのだ。従つてこれを取締ることとは全く不可能なことだ。と、ざつとこんな訳なのです。そこで、丁度その頃財務部長会議があつて、私もその会議に出

ていたので、その時の例を話したところ、列席してきいておられた寺内総督が、その場で、鈴木穆という庶支部長官に「長官、そういう取締りはよくない、朝鮮統治に害があるから何とかしなくては行けない。そういうものは罰しないようにせよ」と指示された。ところが長官が「しかし法律ですから」というと、総督は「そんなら法律を改正すればよい、早速取り計らえ」と厳しく言われた。それで結局――祭祀用の酒だけは当分一定の量を限つて自由に作つてもよろしい――という例外規定を作つて貰つたことがあるのです。そういうことなどは、実際現場に當つて見ないと判らないですね。

又あの万才騒動にも、これに多少似た習慣や民度の相異、或いは迷信等のため、総督統治というものを誤解していたような事実がいろいろあるのです。それは私は咸鏡南北道へ跡始末にやられたのですが、そこで「君達はこれ程保護されていながら、こんな騒ぎを起こしてなぜ反抗するのか?」ときいてみた。すると或る古老がいうには「まず第一に悪いのは高利貸です。期限が来るとすぐその期日に来て差押えをして根こそぎ持つて行つてしまふ。ところが百姓は、ようやく食つてゐるに過ぎない。病氣をしたり何かで二十円か三十円借りると、これを期限までに返ささ



せる。これは最初から不可能なことで、そんなことは貸す方でも判っているのです。それに期限が来たからと言って、すぐ差押えたりするのは実に不合理です。日本人はこんなことをやるから朝鮮人は不平を持つのです」というのです。それで「昔はどうだった？」ときくと「昔は郡守が貸した者と借りた者を呼び出して裁判をして呉れた。そして病氣とか、何とかで返せぬ、と言えば事情を調べた上、筋さえ通れば、それじゃ待つてやれ、と金貸しの方を説得してくれたものです。そして結局、金貸しは商売なのだから利子さえとれば、何時までも待つて呉れたものでした。ところが、今の日本は法律が何か知らぬが、根こそぎ取り上げてしまいうので、みな金を借りれば路頭に迷うことになる」というのです。実際、高利貸というものは、日本人ばかりでなく、朝鮮人の金貸しも交つて、愚民の無智に乘じて法律を悪用、随分、ひどいことをしたらしい。

これなどは、民度に伴わない近代的な法律が、高利貸等に逆用されて朝鮮の人達を苦しめた一つの例だが、これに對し相当研究もしたが、遂に結論を得ることが出来なかつた。

又、産業改良のため總督府では、改良豚だといつて大きな豚を飼わせることを奨励した。ところが、朝鮮で従来飼われていた豚は非常に小さくて、お祭りの時などに殺して、一家

族が皆で食べる程のものでした。ところが日本が来てからは豚を殺すことが出来なくなり、みな屠牛場まで持つて行かなければならない。しかも大きな豚だからなかなか持つて行けない。叩き殺すにしても、肉が余り多いので皆でかつても食べきれぬものではない。結局、腐らせてしまふのがオチである。こういうものを無理矢理に奨励するなどは怪しからぬ、というのです。そこで屠牛場の衛生設備とか、食品衛生というようなことをいろいろ説明してやるのですが、そんなことはなかなか納得出来るものでない。逆に、それはウソだ。この豚は私が自分で飼つてゐるのだから病氣があるか、ないかは私が一番よく知つてゐる。だから何もそんな余計な心配をして貰う必要はない。それならば、日本人はどうだ。猟銃を担いで山へ行つて、病氣があるかないか判らない猪や鳥などを獲つて来て、屠牛場などへは持つて行かないで食べてゐるではないか。大体、豚がおかしいじゃないか」と逆捻じを食わされる始末。全くこちらの方でも困つて答へに詰まるような始末でした。これはその後、主として需要の多い集團地に限り奨励することにしたと覚えてゐる。

又、こういう不平も多かつたようだ。即ち、朝鮮人は老人を敬う美德を持つてゐる。ところが朝鮮人が夏になつて

暑いとよく木陰等に行つて如何にも心地よげに長いキセルを持つて悠々と涼んでゐるのです。朝鮮の子供達は、このような老人には決して悪戯などはしない。昔から長幼序ありの國柄ですからね。ところが日本人の子供達は、そんなところへ来ると、とかく老人達にいたずらをする。朝鮮の老人達はこれには非常に憤慨し、「自分は老人で何時死ぬか判らない。しかし、自分の子供までが、朝鮮人なるが故に、こういう風に侮辱されるかと思うと、居ても立つてもおられません」といふのです。

これも万才騒ぎの時にあつた一つの事実ですが、それは迷信の力が如何に強いかという事である。

これはやはり威鏡道の跡始末に行つたときのことでした。「万才」と叫んでやつて来るので、こちらでとめると、「自分たちは信仰を持つてゐるから水をかけられても濡れない」といふのです。そういう信念でやつて来るのですね。それで、本当に水をかけてやると、これは濡れるに決つてゐる。すると煽動者達は「濡れるのはまだ信仰が足りないからだ」といつては、けしかける始末です。又、——自分達には決して鉄砲の弾は当たらない——と言つて進んで来るので、捨てて置けばこちらが危ないことだから、——殺してはいけない。足を射て——ということにして足を射つたという事である。私は、こ

れが捕われて役所の隅で寝てゐるのを見たことがある。要するに、群衆にはこういう迷信から動かされた者も少なくなかつたと私は思つてゐます。この無智と迷信とを煽動者達がうまく利用し、組織立てたのが、万才騒動であつて、殆んど民衆には、政治的な意義とか、ウィルソンの民族自決主義がどうのこうのというリクツは判らなかつたと思う。それは、そういうものを理解するには、当時の朝鮮の民度というものは、余りにも低かつた。そして現実は、今言つたようなものだつたのです。しかし、未だに日本にもいかかわしい新興宗教に立つて、社会的地位を獲得してゐる者を見ると、誠に思い半ばに過ぎるものがあるのであります。

姜徳相 先生が地方課に居られました時、朝鮮人暴徒の死刑執行第一号をやられたというのを聞きましたが、それは大体どういふことをされたのでしょうか。

今村 明治三十八年軍隊の解散をやつたのですが、その軍人達が地方の山中に入つて、地方民のリヤク奪をしたり、日本に反抗したりしたのですが、それが、死刑執行は司法大臣の職務を統監がやるので、統監の許可を受けに来るのです。私は地方課の書記官として下調査をするのですが、私の記憶に残つてゐるのは、たしか全海山という暴徒の首

魁であつたと思います。

姜徳相 その罪状は――

今村 暴徒ですから、殺人もしたでしょうが、私の赴任したときは、大部分鎮定せられ北鮮の外は所々に賊となつて散在して居つたのです。例えば、山の断崖などに梯子をかけて、そこに穴を作つて住んでいた。そして平常は梯子を取り除いてある。夜になると出て来て、うまくやるのです。近所はやらない。遠くへ出かけて行つてやる。であるから襲撃されそうな所では、ブリキ鑊を下げて置いて、来たらこれを叩けということにした。つまり防犯ですね。一度こんな事があつた。全羅北道に南原という町がある。その近くに警樹という部落があり、ここは市場なんです。私は全州から三里か四里の道を馬に乗つて行つて、その部落の駐在所で昼飯を食つていた。そこから南原に入るには峠を越して行かないと入れないので。南原は朝鮮の有名な芝居、「春香伝」の故地で昔の都です。そこに駐屯軍が居つたのですが、その途中に僅かばかりだつたが暴徒が居つた。私が行つたのはその討伐のあつた後で何もなかつた。ところで面白い話をここで聞かされた。この危険な道を日本人の女が一人、夕方にかけて全州から南原へ行くのです。そこで警樹の巡査がその女を呼び止めて「男ですらも日本人は行かないのに、まして女が暗路をかけて行くのを、警察としては見ている訳には行かない、身辺の保護

をしよう」と言つた。何しろ、私共には巡査が二人護衛に付いていた時代ですからね。ところが女は巡査に「それは有難いが、あなた方が来られると却つて危険です。女だけなら危なくないから結構です」と断つて行き過ぎてしまつた。そこで――おかしいな――と思つた巡査が後を付けて見た。すると峠へかかると上らないで、背後を警戒しながら谷間に入つて行くではないか。それで注意をして見ていると、いつの間にか姿が消えて見えなくなつてしまつた。そこで巡査は早速帰つて皆で搜索することになり、直ぐそこへ引返して搜索にかかつた。そして、何人かの巡査が持つている剣の先で地面を突つきながら進んでゆくと、一場所で板に当る音がした。おかしい、というので、その辺の土を取り除いて見ると、下が板張りになつていてその板を引剥がして見たところ、その中に何人かの暴徒がたむろしていた。女はその首領様の参謀であり愛人で、南原へ行くのは調髪のためだつた。そして毎日、夜が明けると素知らぬ顔で南原に出かけ、調髪しては又この暴徒の巣クツに帰つて泊つていたものだつた。――これも暴徒の一面を知る上の参考として……。

又、この種の暴徒即ち賊等の兇器というのを見ると、中には唯普通の棒に、煙草の銀紙などを巻きつけたもので、これを持つて「さあ、行けつ」――「わあつ」――と言つた調

子で荒し廻つた上、雲を霞とどこかへ消え失せてしまふ。そして、今も言つたように、巣クツの近所には手をつけないで却つて物をやつたりなどして仲良くし、二里か三里離れた所へ行つて悪いことをして来る。そういうやり方でした。

姜徳相 襲撃の対象は普通の日本人か、それとも日本人に協力した朝鮮人……。

今村 否、朝鮮人暴徒というのは、要するに強盗化している訳で、義兵などとは言えるものではありません。その辺の無頼不良の徒を集めて来たものです。しかし、中には、なかなか勇敢なものもいました。

宮田 明石元二郎さんの伝記など見ると種々雑多な匪賊的なものも混つていますけれども、中には、軍隊解散のとき、日本に反抗した人達が流れ込んで行つて、その人達が主に指導したというふうに書いてありますが……。

今村 ええ、そういう連中、つまり軍隊の流れというようなのが多い。

姜徳相 襲撃の対象は例えば日本人というようない……。

今村 そういつた決まつたものがないのです。日本人はあまり地方には居りませんし、日本人の比較的少ない江原道の暴徒などは、地方に蟠居して部落々々を荒していたのですが、結局、軍隊解散の時は抗日暴徒というものもあつたが、結局は

討伐のため降服したり、匪賊化したりして、今日、義兵と言われているようなものはほんの僅かな期間、僅かな人数に過ぎなかつた。総督府初期に入ると、もうそういう組織立つた抗日暴徒というようなのは、北鮮の一部を除いてはいなかつた。しかしあのような過渡期のことで、日本に対する不平分子が反日とか抗日とかを大義名分と言つた表看板にして暴れていたものも多かつたので、味噌も糞も一所くたに暴徒、匪賊の悉くが、民族の英雄だつたように思われ、又、抗日の義兵だつたとも思われるのも無理もないけれども、今いうように、襲撃されていたのは部落々々の善良な民衆が大部分で、日本人でやられたのは、彼らの邪魔立てをする警察官、或いは高利貸といったようなものの極く少数で、それから見ても、この暴徒がどんなものであつたかが判るでしょう。だから危なそうな朝鮮人の部落では、その防犯策として石油鑊かなんかをぶら下げて置き、暴徒が来たら、丁度たんぼの鳴子のように皆でそれを鳴らして防いだものです。ところが情ないことには、部落に十人、二十人の人間がいても、一人の暴徒が行つて、例の銀紙を張つた棒かなんかで――やあつ――とおどすと皆四散してしまつて、手も足も出ない有様でしてね。

姜徳相 あの頃の記録を読んでもみると、主として日本人が襲われた。そのために商売も出来なくなつて大分困つた――

とありますが――。

今村 否、それは悪いことをした商人なんだね。随分、ひどいのがあつたのです。例えば、清州に日本人の憲兵上りの高利貸がいて、大分、財産を作つていた。これのやり方を調べて見ると、期限通りに金を持つて行くと姿をくらまして受取らない。そしてその翌日、もう直ぐ差押えをしてしまふ、というような悪辣なことをしていたものもあるのです。殊に、憲兵上り、巡查上りというのに、そういうのが多く、随分、良民を苦しめたものがあるのです。そういうのが一番先にヤリ玉に上つてゐる訳です。だから、朝鮮人が日本人をすべて敵対視したのではなかつたと私は思う。結局、狙われた日本人というのは、概して、文化の開けぬ地方に入り込んで朝鮮人の無智に付け入つて一財産作ろうといつた、いわゆる一旗組といわれる連中で、主に「市場貸」というのをやつていた。それは、朝鮮の地方には5の日とか3の日とかに市を開く。その市場に出かけていつて朝鮮人の商人や農民達に、どの位かは忘れましたが、一市、一割とか二割とかの利子を取つて資金を貸す。つまり今で言う十日に一割のいわゆる十一<sup>トイチ</sup>というようなものだから一カ月に三割も四割もの利子がかかることになる。それで何万円に相当するような財産を作つた悪辣な奴が、随分田舎にはいたようです。このような連中には、総督も政務総監も非常に憂慮されて、「朝鮮統治を汚毒するも

のは高利貸だ」と言つて嚴重に取締るよう、やかましく言われたものです。

近藤 朝鮮人の高利貸というのはどうですか――。

今村 悪辣なものもいたでしょうが、大体、朝鮮には独特の金貸の方法があつたようです。殊に開城には昔から金融組織が発達してゐて、丁度、日本の近江商人のように商売がうまく、盛んなところだつた。ここは高麗朝の首都で、その遺民が多いから、任官の出来ない旧臣たちが、そういう風に発達して行つたものと思われる。ともかく、あそこには金貸しの市があつた。そして、そこへ行けば、極く簡単に金を貸して呉れるのです。その里の名は忘れましたが、何でも――金を貸す所――という意味の里名だという事です。そんなわけだから、こちらでやつてゐる金融組合で、安い利子で金を貸していただけれども、これは抵当とか何とか、とてもやかましい。ところが開城の金貸しは、前以つて借りに来る人達の信用を裏によく調査してゐるので、その人々が来ると、直ぐ適当な金を貸して呉れる。それだから個人貸借というものが、非常に多いのです。こういう風のところへ、今言つたように市場で日本人から極く僅かな金を借りても高利なので、すぐに高い元金になつてしまふ。だから、日本人の高利貸しは、非常に憎まれていた。清州で最初にやられたのも、この種の高利貸しだつたときいていま

す。尤も、日本人の高利貸しがどれもこれもという訳ではなく、むろん例外なものもいたと思いますが、まあ概してよくない。そういうように何か、彼か、とにかく、恨まれる種子をまいていた者がやられたのではないかと私は思う。

姜徳相 高利貸しのような悪い者が相当やられたということはよく判りますが、暴徒が軍隊の流れをもつていたとなると、ある程度組織的な抵抗運動がなされたのではないか、という気がするのですが――。

今村 最初の中はそうであつたらしい。あの軍隊解散は明治三十八年でしたか？……。

姜徳相 四十年です。

今村 あのととき崇礼門の楼上に上つて相当抵抗したらしい。しかし、私共が行つた明治四十一年頃は、もう微々たるもので、それも地方にいただけです。私が見に行つた黄海道の山中にあつた暴徒の跡には、元韓国軍の少佐か何かだつた首領がいたということだつた。断崖の穴に梯子をかけていたが、いつもは中腹の洞クツにいた。そこから出るときには、梯子を下して出るが、中に居るときにはその梯子をとつて匿して置く。黄海道のこの匪賊が、最後まで頑強にやつていたのではなかつたかな――。だから勿論、軍隊解散のときには組織的に活動して抵抗したらしいですが、私共が見に行つた頃は、もう

討伐もひと渡り済んで、一種の匪賊化してしまつていたようです。

宮田 最初の頃は、一般の朝鮮の人達に支持されていたという気がするのですけど……それに討伐に当つても、朝鮮側で、日本人に密告する者が少ないというので、伊藤さんなども、ひどく手を焼かれたらしいのですが、それで朝鮮人を憲兵補助員として日本憲兵の下に使い、その人達を暴徒に擬装させて内部をさぐらせるといふようなことを――

今村 さあ、そこまでやりましたかな――憲兵補助員、巡查補というものもあつたんですか――。

宮田 その補助員は、あとで巡查補になつたのでしよう。その成績が良好なので巡查補にした、という……。

今村 そうでしたかな、ところがですね。今の日本側に密告しないとか、伊藤さんが手を焼かれたということなんです。が、それには当時の民族感情とか、朝鮮人の対日観というようなものからよく見てみる必要がある。つまり、日本に対する反感の原因というものです。それはいろいろあるけれども、やはり風俗、習慣というものから来る行き違いが一番大きかつたようです。

私が慶尚北道の礼山郡に行つたときのことだが――そこには、日本の漢学者は非常に尊敬してゐる李朝の大儒李退



溪の桐山書院というのがある。時の王室から勅額を貰つて非常に門戸を張つた名門ですが、その系譜、記録を見ると、元は慶尚兩道の人で、昔僞<sup>レ</sup>にやられてここに引つ込んだものらしい。そして、その後裔が今でも非常に皆から尊敬されて此処にいる。私がここへ出張したのは丁度、明治天皇が崩御された諒闇中だった。郡庁を通じて、その李家の当主李仲錦氏に会いたい、と申し入れたが、なかなかやつて来ない。そこで巡査などが行つて、漸く来て貰つた。ところで、来たときの有様に私はまず驚いた。巡査補達はバアツと叩頭平身してお迎えするのです。当時、こういう極門の大阿班はいわゆる排日家で、一応、警察のブラックリストに載っている人なのです。そういう人に対して、しかも総督府から行つた私の目の前で、巡査補達はひれ伏しているのです。私はいろいろな意味で考えさせられましたねー

そこで、李氏にいろいろと話をきいて見ると、——あなたは京城から来た人だから会うことにしました——というのです。そして、この地方の日本人とは、でんで口もきかない、とのことだ。どういふ訳かと聞くと、日本人の女なんかも来ているのだが、日本の女というものは奥に礼儀作法を知らない。例えば、路傍で立小便をしながら話をする、こういうことは朝鮮ではどんな下等の女でもやらない。これは野蠻の一つ——それから日本人は言葉を知らない。朝鮮人は人を呼ぶとき、

大ていの場合、それぞれの階級に応じた敬語を付けて呼ぶ。例えば、偉い人を呼ぶときには、「令監」とか言つたように——朝鮮では一度官途に就くと、それが一生の身分、身上になるのである——。ところが日本人は、車夫であろうが、目上の人であろうが、そんな事にはお構いなしに、朝鮮人と見れば皆同じように、ヨボ、ヨボと呼び捨てにする。こういう言葉の乱雑な、そしてぞんざいな国民は野蠻である。それから又、朝鮮には小豆の入つたカマボコのような菓子があるが、これは下層なものしか食わない。阿班などは、そんな小豆の入つたようなものは口にしないが、日本人はそれを我々に食べさせようとする。こういう野蠻な者とは到底口をきく気がしないのである。

ところでこの李家の当主が只一人感心したという人がある。それはお名前は忘れたが、明石さんの次ぎに僅かな間、憲兵司令官をされていた、長州出身の某中將である。

この中將がここへ来られた時、一度是非李退溪先生の墓にお詣りしたいと申し出られた。ところが、どうしても日本人に墓を汚されるのは厭だといつて応じない。何しろ、憲兵司令官の申し出とあつて憲兵連中は困つてしまつた。そして、——もしも失礼なことがあつたら、うしろから鉄砲で射つても構わないから——とまで言つて、ようやくくだめるようにして承諾させたものである。

さて、司令官は墓参に行つた。ところで、その一挙一動、奥に堂に入つたもので、李仲錦氏はすつかり感激してしまつた。そして、やはり京城の人は偉いと思つた。それもその筈——。この司令官は城主の家から出た將軍で、しかも漢学者である。これこそ真正正銘の御家芸で、なる程、堂に入つた筈である——。さすがの李氏もこれにはびつくりして敬服、キク射如として將軍に対し、「やはり日本人でも、必ずしも地方にいるような下等な者ばかりではない」と感嘆したという。ともかく、そんなことがあつたので、私は京城から来た、というので、特別に会つて呉れたものらしい。

そんな訳で、私には気持よく会つてくれたのでよく話して見ると、今言つたように、ここにいる日本人の女はまことに無作法極まるということだ。それは李氏ならずとも、ひんしゆくを貰うのは当り前である。こんな山奥に來ている女共というのは、殆んどが淫売か、さもないければ下等な連中ばかりなのだから——。どうせ、ろくなものは來ていないのです。礼儀作法どころじやあない。日本人でさえ恥ずかしいようなことをしていたものでしょう。だから、このような朝鮮の大阿班から見れば、奥に下等な者に見えたのでしょう。ましてや、自分達の先祖は、倭寇のために追われて來たのだ、という潜在的な憎惡心も手伝つて、日本人に対しては、非常に頑固ならざるを得なかつた、と思われまふ。

京城に帰つてから、この話を、当時、学務局長をしておられた関屋貞三郎さんに話すと、関屋さんは、ああいう立派な方だから——それは一つ、その子供さんを京城に呼んでお世話して上げようじやないか——ということになり、その後京城に呼び寄せて、大分面倒を見られたそうだが、詳しいことは私は知らない。只、その子供さんが、チョンまげをきれと言つても、どうしても切らなかつたということを書いてある。

尤も、李仲錦氏が日本人に異常なまでの反感を持つていたのは、以上のようなことからばかりではない。その以前陸軍の少尉とか中尉とかの無法者が、その由緒ある桐山書院に火をつけて焼いたという事件があつた。火をつけた経緯は知らないが、当時の軍部の鼻息を窺うに足る不祥事であり、併合前後のどさくさに行われたこのような野蠻、破廉恥な行いが、必要以上に朝鮮人の反日感情を高ぶせたことはたしかで、又こういう心ない馬鹿者の仕業が、その後の統治に如何なる悪影響を与えたか。李仲錦氏の憤怒も、当然過ぎる程當然なことである。寺内總督は非常に心を痛められ、金を出してそれを再建すると共に、いろいろな手を尽して慰撫に当られたが、私の行つた時も、なお、今言つたような有様で、明治天皇崩御の諒闇中であつたが、むろん、喪章も何もつけていなかった。



そんな風に、親の心子知らずで、上の方では随分氣を使っていたのですが、下の方では又随分、朝鮮人の反感を買うような事をしていたのでしうね。何しろ、朝鮮を併合したという頭があるし、朝鮮人を抑えていこうという考えがあるものですから――。

そこでもう一つ付け加えておきたいことは、朝鮮人は非常に家柄を誇りとし、又それを、朝鮮人社会では、お互いには認し合っているのです。ある時私は、金という非常に系譜の正しい両班の家へ招かれて行つたことがあります。その時、その主人が言うには、私の家は李王より家柄が上だ、というのです。そのわけは、李王の先祖である李成桂は高麗朝の軍部大臣だつたが、鄭夢周は文部大臣だつた。昔から、「文」の方が「武」の上にあるもので、竜班、虎班を両班と呼ぶならわしからも、即ち文官である竜班は虎班の上に位する。そして私の家は、その鄭夢周の系統をひく家柄である。従つて高麗朝時代には私の家は李氏の上位にいたわけである。と言つて威張つていました。

ところで、その頃でも朝鮮人の日本人を見る目というのは、昔ながらの島夷、倭奴なのだ。況んや、こういう系譜や家柄を身上としている両班においでである。彼等にして見ればそういう異端、夷狄の日本人が朝鮮人を抑えようなん

て以つての外だし、ましてや、たんばの中で鞭でひつばたかれるような仕草に会つては憤慨するのも無理はないのです。

姜徳相 先程のお話の中にあつた死刑の決裁文を読まれていて、どういふところが面白かつたのですか。

今村 面白いという語弊があるかも知れませんが、あの當時は私も若かつたし、日本にして見れば、何とかして朝鮮を治めようとしているときですからね。あまり記憶はありませんが、何しろ戦争ごつこという感じでした。むろん死刑を決裁することが面白いというような馬鹿げたことではない。こんな仕事は厭にきまつているが、しかし私の役目は置刑するのではない。既に述べたように統監の決裁を得るために提出して来る書類の下調べというよりは下見をするだけなのです。

宮田 やはり、一応、裁判はしましたか。

今村 勿論、それは司法当局に於いて充分審理し、死刑と決定すれば、統監の決裁を経てこれを執行するのです。

宮田 司法権を握つていたからですね。

今村 そうです。死刑の執行は統監の決裁を要するのです。人命に関する事を、そう簡単には出来ない。後進社会というものは、人權に関する觀念が非常に薄い。日本が司法権

の委託を受けたのは、日本の都合のいいような裁判をするためではなく、そういうことを改善すること、つまり、司法の近代化ということに大きな意義をもつていたのです。

宮田 許薦なんかのような暴徒の首魁みたいな人のお説みになりましたか。

今村 否、憶えていません。何しろ、毎日のように書類が廻つて来て……。

樺軍旭 日本の今の高等裁判所のようなことを統監府がやつたのですか。

今村 否、決めて来た死刑の判決を統監が決裁するだけで――。

姜徳相 その決裁について李王さんから苦情が出たような事は……。

今村 それは全然ありませんでした。今も言つたように、もともと向うで決めて来たものですから――。

姜徳相 例えば暴徒にしても、李王朝のために義憤で起こつた者などに対する死刑のような場合は……。

今村 そういうことは全然記憶がありませんが、恐らく無かつたと思われまふ。

姜徳相 二、三の暴徒の首領を死刑にしたときは、李大王がその処刑後、贈り名を上げて徳を讃えたという記録がありますか――。

今村 さあ、私はそれはよく聞いていませんが、恐らくそれは

暴徒というのではなく、日本でいうなら吉田松陰だの、西郷隆盛というような立場に立たされた人だつたでしょうね。あのような大改革で、しかも異民族の手を加えた大改革のときですから、そういう立派な人は非常に多くいた筈だし、私も知っています。日本人というものは案外そういう点では、義に厚く人情もろいですから、そういう人に対しては、恐らく、統監の方から李王さんの方へ除刑を進言した事でしよう。そういう事は政治的な意味からも、人間的にも当然あつたことと思いますが、いま適当な人の名が浮んで来ません……。

宮田 軍隊解散のあとなら、ヘーグ密使事件などがあつて、王が交替になつた後でしょう。

樺軍旭 暴徒討伐のあつたときは、まだ交替になつていないと思う。

宮田 だつて……。

樺軍旭 明治四十二年の暴徒討伐は、大したことはなかつた。

姜徳相 四十年から四十一年が一番ひどかつた。

樺軍旭 四十一年と言えば、そんなにまだ死刑にはなつてはいない筈じゃあないかな……。

今村 否、四十一年十月に私は朝鮮に行つたのですけど、多分、私が地方へ暴徒の跡を見に行つたのは四十二年頃だつたと思う。そして私が地方課に居つたのは四十三年の併合

迄ですから、その間に死刑の一件書類を手にしたのだから、四十二年頃でなかつたかと思う。

姜徳相 ですけど……。

梶村 中には勇敢な暴徒がいた、というような例は……。

今村 具体的な例はあまりよく知りません。

梶村 先程、一寸お話に出ましたが……。

今村 うん。それは、今いう調書を見ますとね。なかなか神出鬼没で、丁度、水滸伝でも読んでいるような気がするのです。先程、私が面白いといったのは多分、全海山という暴徒のものであつたかと思う。

それからこれは時がちよつとずれて、私が黄海道知事の時の話で、はつきり名を記憶していませんが、朴某といったように思う。伊藤公を暗殺した安重根も黄海道の出身ですが、大体、此処は、平安道なんかと共に、こういうような人を出す土地柄です。まあ、上海には仮政府などがあつたように、総督統治に対する不平分子は、よく支那へ渡つて民族運動に投じたり、又連絡したりしていましたが、黄海道に長山串というところがあつて、ここは舟で支那へ行くのに一番近いところですが、今言つた朴という男が、私の知事の時に上海から入つて来たのです。そして山へ入つたというので、「それつ」とばかり、警察が遠巻きにしながら山狩りして平野部に

追い出したのです。大体こういうときには、色の違う着物を何枚も着ていて次々に脱いで変装するのですが、これは直ぐ判つた。しかし、それを狩り出した、という情報を得て、駆けつけたときには既に自殺していましたが、これなどは非常に勇敢な死に方をしていました。畑の真ん中であぐらをかいていて、近寄ると拳銃で狙い撃ちするので、遠

巻きの巡査達は近寄ることが出来ない。その中、いよいよ最後の一発になつたのでしよう。左手でしつかり自分の首を押えて、額を射抜いて死んでいました。後で調べて見ますと、やはり最後の一発で自殺してしまいました。最後まで抵抗したのでしようが、日本でも自殺するときは、首や襟をしつかり押さえてやる。手が遊んでいて、うまく腹が切れないからです。これもやはりそうして、只一発で見事な死に方をしていました。私が行つたときには勿論死体になつていましたが、皆が、惜しいことをした、と言つていました。あそこは延安郡というところでした。そういうものもあるのですよ。

姜徳相 死刑になつた者は特に罪の重い者でしょうが、いわゆる付和雷同した程度の者はどんな扱いをされたのでしよう？

今村 さあ、それはどうしましたか、私のところへは死刑の

決裁しか廻つて来なかつたので――。

姜徳相 大体、どの位の数があつたのでしょうか？

今村 どの位ありましたか判りませんね。

宮田 決裁書類には証拠物件もついているのですか。

今村 そうです。中には血染めの旗などもありました。

宮田 先生のお話をきいていると暴徒のやり方は相当、用意周到みたいですね。山を掘つて板など敷いたり――。

今村 朝鮮にはね。景色のよい所に寺なんかがありましたね、建物なんか、よく南画の中にあるようなのが方々にあります。

す。多くはあのようなところへ行つて、洞クツなどを探してその山に隠れていました。金剛山のような、岩だらけの山がありましたね。

金圭南 バルチザンのようなやり方ですね。

今村 そうです。地方へ出張して、ふと向うを見ると岩の山が見えると、その辺に必らず部落や都会があるのです。これは樹木を乱伐したため山の土が流れてしまつて、山骨ばかりが残つた証拠なのです。例えば、京城は勿論そうだし、新羅の都の慶州とか、高麗の都開城とか、そういう古い都の付近の山は、みな木がない岩山で、こういう所に屈強の隠れ箇所があるのです。

宮田 それで、木がないところには人が住んでいる、というわけですね。

今村 まあね。木のこんもりしている所などには、古い都はない。それは殆んど間違いない。旅行して見るとよく判ります。

梶村 暴徒のため、日本の憲兵や警察などには相当犠牲者が出ましたでしょうか。

今村 相当出ましたらうね。

宮田 日本側の犠牲は、日本人警察官百二十七人、一般の日本人百二十人ということになっています。

今村 ああ、そうですね。

宮田 韓国人の警察官は五十人位しか死んでいません。それから暴徒で死んだのは一万四千五百人位です。

今村 あれ位の大事件としては、その位の犠牲者は少ない方でしょうね。

宮田 実際にはもつと死んでいるでしょうね。

今村 そりや、少し少ないと思うね。

宮田 日本側の数は、自分達の方だから判ると思ひますけど……。

権寧旭 それも判らないよ。兵隊や憲兵などは判るかも知れないが……。

宮田 それから、焼かれた家の数が六千八百余戸というのですが、これは全部、朝鮮人の家でしょうね。

善徳相 そうじゃなくて、いろいろ見てみると、日本人の焼かれた家が随分ある。駐在所などで襲われているものがあった。

今村 私は地方に出張して、まだ門の柱に鉄砲の弾が入っているのを見たことがある。だけど、直接襲われているのを見たことはない。地方へ出張すると、大がい巡査二、三人と郡守、通訳、それに私共を入れて六、七人位で歩くのですが、地方の人達は、私達を見ると遠くからさつとよけてしまう。強盗じやあないかと思つてね。向うでは、暴徒なのか、善良な人間なのか判らぬから皆逃げるのです。つまり、私達も暴徒じやあないかと怪しまれているわけで……。

梶村 そういうとき、暴徒に会われたことはありませんか。  
今村 全然ありません。

宮田 万才事件の頃になると、日本人の家から家具を持ち出して火を付けて焼くというような、はつきりとした民族的な反日の性格が出て来るのですが、その頃はまだ、そこまでは、はつきりしていなかったのですか。

今村 万才事件のときは、余り家などは焼かなかつたでしょう。

宮田 でも日本人の家を襲撃する場合など家に火をつけないで日本人が山へ避難して逃げた留守に、家具を引きずり出して皆焼いてしまうというようなことを――。

今村 そういうこともあつたかも知れない。その原因という

のが、先にも言つた通り、地方へ万才騒ぎの跡始末に行つて見ると、老人を軽蔑したとか、学校の子供を何うした、ということが、朝鮮の人の頭には深刻に入つてゐるのですよ。だから、日本人は憎らしいというので、そういうこともやつたのでしょうか。だけど、一般の者はね。まあ喧嘩と言いますか、その仕返しとしても、まあね。只、そういうことなどをあの首領株がうまく利用して煽動したのですよ。何しろ一般民衆の無智につけ込んでね――。それにしても、あの民衆の興奮というものは凄いのでしたよ。京城市中なんかでも、窓から見てみると、万才、万才と言つて旗を振つて行く。一番困つたのは女ですが――、髪をふり乱して、全く、何時もこんなだつたかな、と思われる程実に凄いい格好でしたね。

宮田 でも、今日本でも炭坑の女の人など、ストライキに繰り出して……。

今村 何しろひどい。李圭完という朝鮮人の知事がいましたかね。女どもに袋叩きにされて――実に女つて奴は――と言つて憤慨してましたよ。当時は、女つてものを相当割引きして考えていた時代だけにね。今なら女の方が強いかも知れないが……。

梶村 もう少し三・一運動のことについて伺いたいのですが。

宮田 併合当時、京城にいらつしやつたのでしよう。

今村 もちろん。併合の晩、入江と二人で料理屋へ行つていました。どうもお客さんがいないなあ――と言いながら二人で飲んでいたら、その晩が併合だつたのです。外に憲兵が立つてゐるので誰も来ないということなんか、ちつとも知らずに――ところがその晩料理屋で飲んでなんかいたものは、ちゃんと調べて、総督の許へ報告されていた。これには弱つたね。

宮田 でも先生、寺内さんは、そういう料理屋などへ出入りすることは厳禁されていたというのですが……。

今村 否、そういうことはありません。そりや、もう――。

宮田 御自分がいらつしやらなかつただけですか。

今村 それは勿論――。

梶村 官邸にそういうところの女を入れないという事と、御自分では決して行かない、と言うことです。

今村 そうして、非常に部下思いの人でね。私が最初、高等官で慶尚南道の財務部長に赴任させられるとき、総督から、夫婦で飯を食いに来い、着流しでよいから――と言つてお招きを受けた。まさか着流しではいけないから、ちゃんと羽織、袴をつけて行くと、総督は小倉の袴をはいて出て来られて、「何だ君、そんな紋付など着て来て」と言われた。だけど、まさかねえ。それはそれで、さて御馳走になつたが、どうものどを通らない。寺内さんも御夫妻、と秘書官の児玉御

夫妻でしたが――。冗談をいいながら御馳走して下さつた。

そして帰りには役人として、心得ておかねばならない詩を御自分で書かれたものを頂戴し、妻には友禅一反を土産に下さつた。そういう風に私的関係に於いては非常に温かい人なのです。それが役所などではもう、慄え上るところの騒ぎではない。厳格なものでした。農商工部の局長に菊池という人がいました。寺内総督は、地方から来る復讐書などには必ず目を通されるのですが、ある時菊池局長から総督の手許に、誰かの復讐書が提出された。ところが、その中に一枚の白紙が付いていた。それはめくるとき間違つて付いたものらしい。それが寺内さんに見付かつたのだから堪らない。ひどく怒つて菊池局長を呼びつけられた。そして、「一体、この白い紙は何だ、この白い紙を何と思つてゐるか。皆国費で買つたものではないか君はこの復讐書は見えないのだらう。見ておれば判らぬ筈はない」と、この勅任官殿は一時間以上も説教されて、真つ青になつて帰つて来たものでした。

宮田 今さつきのお話ですと併合の晩に料理屋で飲んでいらつしやつたということですが、あれは実際に李圭完と条約を結んでから一週間遅れて発表になつたのでしよう――。

今村 ふれはですね。寺内さんは東京におられて、石塚さん



が主として李完用、趙秉世などを官邸に呼んで、そこで折衝されたと思うのがね。

宮田 最初に交渉されたのは、小松緑さんでしょう。

今村 それだと外務部長でしたから、寺内さんの命を承けてやったのかも知れません。

宮田 それで、実際に李完用と条約を締結してから一週間は一般に発表しなかつたのでしょうか。

今村 そうですか。

宮田 ですから先生が飲んでいらつしやつたのは、多分、この発表の日のことでしょうね。

今村 発表の日だつたのでしょうか。何か、そわそわ、そわそわしていました……

宮田 先生、全然御存じなかつたのでしょうか。

今村 ええ、知りませんでしたね。

穂積 何しろ、極秘の裡にやつたのだから――

今村 全く、極秘にやられ、しかも役所でなく総務長官の官邸でいろいろやつていたらいいのです。だから、巡查や憲兵は立っているし、これは何かあるのかな、位のこと、併合の相談などとは思ひもよらなかつた。

梶村 併合直後の町の様子など、どんなでしたか。

今村 何しろ、クモの子一つ通さない程に憲兵などで警戒していたのですから――。それに私は、今もいう通り料理屋へ行

つてまして――何でこんなに警戒するのかな――と思つていた始末で……。

穂積 その頃、戸を締めるなんてことは、特にしなかつたですね。

今村 そういう事は全然なかつたようです。

穂積 寺内さんが料理屋が嫌いだといつても、結局、官吏の取締りのため、料理屋に行くことそのものをやかましく言つた訳ではなかつたですね。

今村 昔はみんなよく飲んだもので、料理屋から役所へ通うものがいましたね。私はそういう不心得な事はしなかつたが、役所を退出して来ると門のところに料理屋の仲居がおりましてね――、さあ靴をお持ちしましょう――、というような具合で――。まあ、そういう状態のときもありましたからね。

宮田 料理屋から役所へ通う……。

今村 寺内さんになつてからは、そんなことはしない。只、若い者が飲むことについては、そうやかましい訳ではありませんでした。私などは随分飲んで暴れ廻つた方ですが、さつきお話しした総督に招かれたとき、「君がこちらに居なくなると、さぞ料理屋が静かになることだろう」とひやかされて驚いた。総督がまさかそんなことまでは知らないだろうと思つていたら、われわれの日常の事までちゃんと知

つてござる――。

宮田 当時の新聞によると、併合のことを発表した文書を掲示した場所には憲兵が「付け剣」で警戒していたとか……

今村 否、そんなことはありません。あの布告は、工藤壮平という大変、書の上手な人がいましてね。私共の同期でしたが、この工藤さんが書いたものです。

梶村 統監府時代に韓国に招聘された日本人官吏と、統監府の官吏との間に反目したいなものがあつたと申されましたが、それは具体的にどういふようなことがありましたか、具体的な政治活動を繞る何かがあつたのでしょうか。

今村 そんなことはありません。今言つた通り、韓国側の方の次官は統監府の参与官です。そこで、参与官会議があつていろいろ決めた上、それを実行に移す。言わば韓国政府はその実行機関なのです。一方、統監府で直接やつている事は、主に在留日本人に関する仕事です。只、向こうは傭官吏だ、こちらは純粹の日本の官吏だ、という考えが、分け隔てしている。しかも傭官吏の方が人数はずつと多いのです。だから、併合になつて総督府になると、反対に今迄の傭官吏の方が巾を利かせて、統監府時代の官吏は逆に押えられた形となつたものです。そして万才騒ぎの時、長谷川さんが辞めて斎藤総督になり、水野鎮太郎さんが政務総監として来られ、

その時分に日本内地の地方官吏を派山連れてこられた。そこで、元から居たものと、多少、何か対立的なものがあつたようだが、別にこれという程でもなかつた。

梶村 要するに感情的な――。

今村 そうです。世間が、そういう風に見るんですね。当人同志では、左程のことはないのですが。

梶村 実際、政策に於いては、やはり、日本帝国のために、ということですか。

今村 そうですね。あの当時は、どちらかと言うと、一種の誇りというものを持っていましたね。

梶村 傭官された以上は韓国の官吏ですね。それで韓国の立場を代表しなければならぬということ、両方の立場が分れるという様な事はなかつたのですか。

今村 そんなことはありません。韓国のためではあるが、もとは、統監の手許で決められたものなのですから――。穂積 徳川時代の外様と譜代の大名の違いのことなのだろう。

今村 そして仕事も全部違つていました。統監府の仕事は今言つた死刑の宣告などには判を押しますが、大体の仕事は、朝鮮に居住する日本居留民のことなのです。朝鮮自体の殖産政策とか、文教政策とかいうものはすべて朝鮮側でやることになつていて、その仕事をする各部の大臣は朝鮮人で



したが、次官以下、課長などの要職には主に日本人官吏が、いわゆる傭購されていたもので、仕事は全く別なものです。それは、仕事の関係上、多少の連絡はありましたけれども、そんなにどう、こうと言うことはなかった。只、傭購官吏と統監府との制服の襟章が違ふ位のもので、統監府の方は「五三の桐」の紋が入っていたのです。傭購官吏は桐を台として、これに韓国政府の各部の印が入っていたので何処へ行つても「ああヨボ官吏だ」というようなわけで。むしろ、次官や課長などの上の方になると、統監府にしろ、韓国政府にせよ、朝鮮をどうにかしてよくしてゆこうという一つの目的がはつきりしているので、お互い同志がうまく行つていた。何れにしても、統監府と朝鮮官吏との間に争いがあつたというような事は絶対になかったのです。

宮田 傭購と言つても、実質的には傭購されたというのではなく、やはり日本の政策を行なうという事でしたので、それから、統監府との関係は勿論緊密だつたでしょうね。

今村 それは御承知の通り、保護国になると同時に、殆んど、日本人が行つて指導的な立場で政務を行つていただけです。勿論、大臣と日本人の次官との間には時々意見の違ふようなことがあつたかも知れないが、それを統監のところへまで持ち込むというようなことは、そうなかったのではないでしようか。むしろお互いの仕事をよくするために、内部だの、度

支部だの、各部の間で対立するというようなことはあつたでしょう。丁度、今の各省の予算分捕りの様に――それも余りきかないが、只一度、内部次官と農商部次官が議論の末喧嘩をして納まらないので列席の一人が、これを統監に伝えた。ところが、――やられて置け、やらして置け――とか言われたとか、もつぱらの評判でした。ともかく、あの頃のことには、みな元氣はありましたね……。

そして、今の役所と違つて、忙がしければ夜の十時でも十一時までもやつていました。人手も少なかつたし――。小松緑さんなんか、デスクの上にウイスキーなんかを置いて、仕事のことで行くと「まあ一杯」などと進められたものです。退庁時間になつたからもう帰る、という様な事はなかつた。清一杯働けということでした。今のように「公僕」などと言う言葉は使わなかつたが、寺内さんの訓辭が、各部室にかけてあつた。その真つ先の言葉が「官吏は民衆の儀表なり」というのである。即ち、官吏は民衆の模範となるべきものであつて、今のように公僕ではない。だからその心構えからして、天と地との差があつた。ともかく、そういう頭で、総督自身が叱咤激励しておられたのですからね――。

姜徳相 この頃の雑誌などに朝鮮最後の皇太子（李垺）のこ

とが出ていますが、あの皇太子を日本に連れて来た意味とか、又、李太王は食えない親爺で、しやうがないので代えたのだ、というように言われていますが、この様なことは、当時の日本の対韓政策上どう考えるべきですか。抽象的にはいろいろ言われますが、具体的な真相というものがどうもはつきりしない……。

今村 あの方は御承知の通り、伊藤公が非常に可愛がつて、小さい時に日本へ連れて来られたもので、李太王のことは、ヘーグ密使事件をはじめ、種々歴史上の事実をよく御覧になれば……。

宮田 あの皇太子（王世子）は人質にされたのだ、というように、よく言われていますが――。

今村 誰が考えても、あの当時の韓国は、あのままでは持たなかつたですからね。それを何とかして盛り立てて行こうというのが保護政治なのですから――それに、あの王世子をお伴れした時にしても、李太王の交替の時にしても、日本ははつきり併合を意図していたわけでもなし、従つて、何れも韓国という国を盛り立てようとする日本の政策の現われだと思ふべきでしょう。あなたが今言われたような観点に立つことはどうかと思う。伊藤公は勿論、明治天皇や照憲皇太后などの御愛撫も一入だつたことで、そんな人質などというような考えではなかつたと思う。

宮田 でも先生、あの皇太子を連れて来る前に、大正天皇がまだ皇太子で、京城に来られましたね。先にこちらから行つておいて、その答礼だと言つて朝鮮の皇太子を東京に留学させるということとは――。たしかに伊藤公自身は、よく教育し得たと思われたのでしやうが、連れて行かれた朝鮮側にして見れば、何か自分の国の大事な皇太子が、よその国で教育されることは、どうも、面白くなかつたでしやうね。

今村 自国で教育すると言つても、当時の朝鮮の事情をいろいろな面から検討して見なければね。それは、朝鮮側だけの考えはそうでしやうが、何しろ、初めに言つたように、支那につくか、ロシアにつくか、日本につくか、ともかくどこかにつかなければおさまりのつかない国だつたのです。それに日本が先手を打つて、ああいうことになつたのですから、勿論、政策的と言えれば極めて重大な政策なんではしやう。しかしこれは、当時の国際情勢から言つて当然のことじやありませんか。あれを日本がやらなかつたら、ロシアが入つて来るか、支那が入つて来るかしてに相違ない。

何しろ、明治十五年、十七年と、甲午の乱だの、京城の変だのと、そんなことをしよつちゆう繰り返していた。独立するにしても、立直らせるにしても、何か、余程強い力でしつかりと支えてやらない限り、疲れ切つた自国の力ではどうにもならなかつたのです。そしてこの国は、もとも

と本當の独立ということをしていたわけではない。殊に支那は、朝鮮がどう言おうと、はつきり、自分が宗主権を持つていてと考えていた。そして朝鮮も又、支那のこの伝統的な考えに自ら追従していたのです。

京城西北の入口に迎恩門という大きな門が立つていた。そしてその近くに「慕華館」という迎賓館がある。「慕華館」とは読んで字の通り、中華を慕うの義であり、いわゆる事大の象徴であります。即ち、二年か三年に一度、親邦を以て自任する支那の使節が、沢山の人を伴れて陸路入鮮するのですが、その入京に際し、国王は態々この迎恩門に出て使節を迎えたもので、その使節の泊所に当てられたのがこの慕華館なのです。又、この使節入来毎の京城での接待その他大変なものだつたが、沿道の宿や、御馳走など、その費用は莫大なもので、帰りのお土産が、これ又大変であつたらしい。つまりそれが、上国として敬つていた支那への藩屏国としての礼であつたのです。そして又、国王は支那に遠慮して、陛下の呼称を用いず、自ら殿下と称していたものです。それが、日清戦争の結果、支那の勢力は退き、それと共にこの迎恩門は取り除かれて、新しく名も独立門と改められた大きな石門が建てられたのである。

宮田 曾親荒助統監の時いらしたのですか。

林 どこかの外国が、自分の方でもどこかを併合しようとして、日本の朝鮮併合を利用、自分の方に対する外国の反対を抑えようとして――。

宮田 外 それはフィリッピン問題でしょう。

相場 たしか、そうでしたな。

今村 まあ、うまくやつたと言うことでしょうか。

金圭南 日露戦争の内閣決定のときのことですが、そのときの決定事項は、満州の権限の問題だつたのです。ところで、それと関連して日韓併合の問題が論議されたか、どうか――という点について何か御存じのことではないでしょうか。

今村 さあ、私共はその頃はまだ若くて、そんな大きな問題には関係がなかつたので……。

金圭南 それではヘーグの密使事件の時ですね――、その後併合されたのですが、あの時の日本国内の事情とか、あの事件が統監府の官吏の方々にどのようなショックを与えたのでしょうか。

今村 ショックなどというものは、我々小者には何等感じなかつた。上の方では、外交関係とか――それは聞いたことはあります。けれども一般役人は、何もショックは受けなかつたものです。

金奎南 併合条約の前の保護条約の時には、京城市民が相当嘆いたということですが、その情景は見られましたか。

今村 私の行つた時はまだ副統監でした。

宮田 あの方は伊藤さんと寺内さんの間に狹まつていて、今ではあまりばつとしないように見えますが、併合には反対の御考えだつたようですね。

今村 そんなことはないでしょう。極く短期間でしたからね。

宮田 半年位でした。

今村 副統監の前は大蔵大臣でしたかね。

穂積 日露戦争のときの大蔵大臣です。

宮田 しよつちゆう病氣だつたらしいですね。

今村 私が行つたときも病氣で、病室でお目にかかつたことがあつた。

宮田 あの当時、日本でも併合については積極派や、そうでない派もあり、かりに併合するにしても、時期尚早とか、いろいろな派があつたらしいですね。そして曾親さんは少なくとも、積極的ではなかつたということが言われていますが……。

今村 今の安保条約の論議みたいなものです。すべての人が一致するということは、なかなか出来ないことでした。林 併合のとき、アメリカからだつたか、イギリスからだつたか、何かの交換問題が起こつていたように憶えていますか――。

今村 そうですか。

今村 そんな情景は見ません。それは何しろ、九割九分までの農民がいままで虐政に苦しんでいたのですからね。殊に地方では、日本に併合されたことすら知らなかつた程です。だから私共がその頃地方に行つてみても、朝鮮人達は、まだ日本に併合されたことを知らない者もいたのです。

宮田 併合のビラなんて、貼つたつて読めないわけですね。

今村 漢字は勿論読める者は少なく、諺文で書いたものもあつたけれども……。

宮田 ほんとうに併合された、ということはだんだんに判つて来たのですね。

今村 儒者とか貴族とか、一部の人間にとっては併合されるとなれば生活や地位の上に非常に大きな影響があるので、関心を持たないわけに行かないし、又、それは大変なことだつたのですから――。しかし、殆んど九〇%以上の民衆は、これ程の国家の大事と言っても、それに関心を持つだけの余裕もなかつた――というのが真相ではなかつたでしょうか。勿論、全部が全部、関心を示さなかつたというわけではありませんが、真底自分の頭で国の帰趨を考え、それに結果する自分の生活などを考え合わせていた人などは、非常に少なかつたと思います。当時の朝鮮の貧しい人達には、それよりも、もつと身近かに、今日の生活をどうする、現在をどうして生きて行くかというのが問題だつたのです。前にも言つた通り国民の大

部分である農民の当時の生活というものは本当にひどかつたのですよ。この客観状況を余程よく知つてからしないと、私がかんなことを何べん話しても、理解することは出来ないでしょう。何しろ、土地の小作関係は、例の舎音というものが立合つて、刈り分けした上折半して、半分は地主の分として取り、残る半分の中から又、これは利子だ、これは税金の歩だ、とか言つて、殆んど取り上げてしまふ。利子は倍ですね。春に米がなくて借りると、秋に、これを倍にして返すのですから――。

金圭南 そうです。今でも、そういうことをしていますから――今村 甚だしいのになると、薙を敷いて、その上で叩いて脱穀するのだが、その薙の上からはみ出したものだけが小作人の収穫になるというのです。そりや、本当に虐げられていたのです。だから一般民衆は、殆んど政治がどうなるかということには無関心だったのですね。

宮田 先生のお話を伺つていますと、当時の状況とか、雰囲気とかいうものが非常によく判るのですが――。

権軍旭 大変面白いですね。

金圭南 結論として一つ伺いたいのですが、先刻のお話の党派問題ですが、その四色の派閥というようなのは今日の朝鮮にもやはり残つていると思います。例えばそれは、今日の在

日朝鮮人の北遼問題一つを考えて見ても、全く仇同志のようなのを感じられるのですが……その原因とか、これを直すにはどうすればよいか、ということについて一つ……。

今村 昔の政争の原因というものは、要するに学派であつて、それが政治に介入してしまつた。そして政権が変る毎に大官運は亡命してしまふ。そして、次の政権を取つたものが南人だつたとすれば、前が老練の政府だつたならその時の人間は、みんないびり出されてしまふのです。しかも昔は、妓生（キイサン）にまで正三品とか従三品とかいう官位がついていて、その官位がなければ宮中の宴席には出られない。そしてその妓生が党派争いの連絡の役目をする。ひどいになると、石油鑛に油を入れて、火をつけて持ち込んだというのもある。だから何もかも取りかえられて脱み合うということになるのですが、現在はどうですか。むしろこんな昔通りのことはありますまいが、しかし、永年積み重ねられて来ているこういうものを一朝一夕に直すということは、難かしいことでしょうね。

梶村 それでは時間も大分過ぎましたのでこの辺で終わりたいと思います。長い時間、有り難うございました。

（整稿・文責 近藤 鈿一）

## 小磯総督時代の統治概観

田 中 武 雄  
（ 講 述 ）

### 講 述 者 略 歴

明治四十五年明治大学卒。  
大正八年長野県警視、同年朝鮮總督府事務官となり、保安課長、外事課長、警務局長、等を歴任その間大正十五年欧米各国視察。  
昭和十四年拓務次官、同十七年朝鮮總督府政務總監、同十九年小磯内閣の内閣書記官長となり、後、貴族院議員に勅選された。  
現在、中央日韓協会々長。

%%%%%%%%%

小磯総督時代の統治概観

田中 武雄

(司会・序言・宮田節子)

皆さんも御経験のことと思いますが、小磯総督時代のことを調べようと思つて、最初に気が付くことは、総督府三十年史、つまり南総督の時代までの資料はどうやら手に入らないのですが、小磯・阿部両総督時代に入りますと、全然、資料が手に入らないことです。日本に於ける朝鮮研究が無風状態であるとするれば、小磯・阿部両総督時代は、まさに、真空状態と言える位、全然資料がないわけです。それで今日は、小磯総督時代の生きた歴史でいらつしやる田中先生を迎えて、この研究会を開くことにしました。そして私達が、こういう研究会に意義を感じますことは、今も申しました通り殆んど資料のない、施政三十年史の後をうけて、私達が、その以後の歴史を書いて行くことだと思ひます。で、田中先生にも、その点をよくお含み願つて、詳しい事実を御話し願ひたいと思ひます。それから、皆さんの御手許に差上げてある質問要領について一寸一言申

%%%%%%%%%

目次

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 一、小磯総督治下の戦時体制       | 215 |
| 二、民心と民生を基調として       | 217 |
| 三、統治三大懸案の解決・義務教育の実施 | 219 |
| 四、徴兵制度の実施・参政権の問題点   | 222 |
| 五、日本内地の反対を押し切つて     | 224 |
| 六、戦時経済統制・渡航(労務)問題   | 226 |
| 七、異民族統治の苦心Ⅱ物価統制     | 229 |
| 八、三・一運動以後の統治態度      | 230 |
| 九、民族問題の根本義          | 231 |
| 一〇、質問               | 235 |

昭和34年9月9日 第67回研究集会 東京・丸の内 中央日報協会々議室

| ( 学 生 側 ) |           |         |       | ( 出 席 者 ) |       |         |         | ( 協 会 側 ) |       |        |           |
|-----------|-----------|---------|-------|-----------|-------|---------|---------|-----------|-------|--------|-----------|
| 奥村 コウ一    | 金 己 大     | 申 国 柱   | 金 圭 南 | 楊 村 秀 樹   | 姜 德 相 | 權 寧 旭   |         | 岸 多 久 安   | 近 藤 劔 | 渋谷 礼 治 | 穂 積 真 六 郎 |
|           | 矢 沢 (都立大) | 武 田 幸 男 | 朴 昌 熙 | 青 木 香 代 子 | 李 玉 乃 | 宮 田 節 子 |         | 謙 貞 一     | 一 治   |        |           |
|           |           |         |       |           |       |         | ~~~~~   |           |       |        |           |
|           |           |         |       |           |       |         | 録音テープ整稿 |           |       |        |           |



%%%%%%%%%

(講述・序説：田中武雄)

ここで特に田中先生に御願ひ申上げたいのですが、今日は資料がないながらも、議会説明資料その他を読まれている方もありまして相当の質問が出るかと存じますから、最初の御講演はなるべく縮めて頂き、質問の中で、先生の御意見を充分にきかせて頂きたく存じます。それから皆さんもう御承知のことと思いますが、田中先生はなかなか元気がよくていらつしやいますし、どんどん突っ込んで遠慮なくやること好きな方です。皆さん相当がんばって色々質問して頂きたいと思ひます。

穂積さんから、今日は大野、遠藤両氏を交えて三政務総監で話をするように言われていたのですが、御両所とも都合がつかず、結局、私だけで御話することにした。そんなわけで最初の予定が狂つて甚だ相すまぬが、私は諸君の御都合で何時間でも付合うから、何なりと遠慮なく……。それから、数日前に質問要領を貰つてゐるが、これに精細なお答えをするとなることが出来なかつたので、実は、筋の立つたお話は短かく概略だけを話すことにして、諸君の方からの質問を主にするよう、私の方からお願ひしようと思つていたところ、今、宮田さんからも、そういう御注文があり、私としては願つたり叶つたりでは是非、そうさせてもらひます。又、問題は大きいので、なかなか今日だけで話せるわけのものでもない、私はこの研究会で時々話させて貰つてゐるが、今後も、必要な時には、こ

%%%%%%%%%

%%%%%%%%%

上げて置きたいのですが、これはずつと併列的に書いてありますけれども私達の研究会では、この質問書を、もつと立体的に出してあるのです。と申しますのは、宇垣総督から南総督の時に私達の研究会では、世界情勢または、日本の情勢の変化と呼応して、朝鮮総督府内部にも質的変化があつたという風に把握してゐるわけなのです。そして、その質的変化の内容は何かと申しますと、結局、南総督の頃から、世界情勢の変化に伴つて、朝鮮における戦争体制の確立ということが基本的な問題になつて来ると思ふのです。それで、日本とは、民情も民度も違ふといわれる朝鮮でどのように戦争体制を確立して行つたかという問題は、南総督以後、小磯・阿部両総督を通じての、朝鮮の基本的な問題になるだらうと思ふのです。それから更に目をひろげて、もつと大きな観点から見ますと、丁度ここに書いてあります満州事変・日中戦争・太平洋戦争と、戦線がだんだん拡大して行くわけですから、けれども、その戦線の拡大に伴う朝鮮の戦略上の位置というものは、又、変化して来ると思ふのです。それが、どのように変つて行くかというものは、むしろ小磯総督だけではなく、南総督時代を通じての、私達の研究の基本的課題となると思ふのです。しかし、このよう基本的な疑問をふんまえていながらも、こういうことを抽象的に論議するのではなくて、むしろ、経済関係、政治関係、教育関係という風に、部門的に分けて、具体的に田中先生から、いろいろなことをお聞きして、そしてこれらの課題を、結果的に、具体的に説明して行く中、自然、先程申しましたような基本課題も、徐々に分つて来ると思ふのです。で、そういう角度から、今日は討議して頂きたいと思ふのです。

%%%%%%%%%

ととも、食糧とか、地下資源とかの極めて重要な戦略物資を豊富に蔵しているか  
う言葉も、この朝鮮のもつ地理的、地政学的な拠点的性格から見て、自然、そのよう  
な言葉が使われるようになったものと思う。その上又、朝鮮は、この位置的な拠点性  
ととも、食糧とか、地下資源とかの極めて重要な戦略物資を豊富に蔵しているか  
るん、朝鮮は日本の版図として、大陸交通の重要な位置を占めていた関係上、ここが  
軍略上の重要拠点であつたことは確かだ、今言つた、兵站基地とか、前進基地とかい  
う言葉も、この朝鮮のもつ地理的、地政学的な拠点的性格から見て、自然、そのよう  
な言葉が使われるようになったものと思う。その上又、朝鮮は、この位置的な拠点性  
ととも、食糧とか、地下資源とかの極めて重要な戦略物資を豊富に蔵しているか

( 本 題 )

%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%

の研究会を通じて遠慮なく言つて来て貰いたい。  
それから、前以つて諸君に御了解を得て置きたいことがある。それは、  
諸君の方では三人の政務總監に質問される予定のようだがその答えは必ず  
しも一致しないことがあると思う。それは異民族統治の根本問題について  
私は私なりの考えなり、持味をもつていて思うのです。それで私の態度  
は、何時も言つてゐる通り、日本の統治について諸君の質問に会つて、日  
本側に都合のいいように弁解がましく言おうなどは毛頭考えていない。  
今日は、既に、日本と朝鮮との既往の關係は離れてしまつてゐるのです。  
従つて、どの様な話をするにしても、それが民心にどのような影響を与え  
るか、というようなことは、もう考える必要がない。でありますから、私  
の在鮮時代の立場というようなことは一切拘泥しないで、公正な資料を諸  
君に提供する、という立場でお話ししたい。従つて、諸君がどんなに露骨  
に過去を批判されようと、また攻撃されようと、それが正しい意味での、  
真理、真相を究明しようとする限り、非常に結構なことで、私も充分、  
それに協力するつもりであるし、また諸君の方に誤解があれば正解しても  
質問して貰つてそれに対する私の答えに更に質問が出ることを望んでいま  
す。私の根本的な態度は以上の様に考へていますので、まだこの研究会に  
出た回数には少ないのですが、そのやり方には非常に共鳴し諸君の熱心な研  
究ぶりを認めるにつけても、誠に有意義な事であると喜んでゐる次第です。  
そんな訳ですから、諸君と共に討論をするにしても決してお座なりやごま  
かしをする気は毛頭ありませんから、そのお積りでお願い致します。

%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%%

ら、戦力高揚という戦時下の国家的命題から、その生産増強のため、全く政治的な意味の用語として、これを兵站基地と言い現わしたものと私は考えている。しかし小磯総督の時代にはそういう用語は努めて使わないようにした。

それはともあれ、何れにしても、今言つたように総督府が、朝鮮を特に戦争に利用するとか、或いは、その民族を直接、戦争に捲き込もうとするような政策をとつたことは無い。但し、朝鮮と雖も当時は日本の版図であつた以上、日本の戦時体制の一環であつたことは当然のことであつて、従つて、日本の戦時体制に順応して行つたことも又確かである。否、順応というよりは、むしろ、準じて行つたという方が適切かも知れない。それは、朝鮮総督府は、あくまで、その異民族地域という特殊性を最終考慮においてその立場から、急激なる戦時的変革を避け、それがたとえ、軍略上の強い軍部の要請であつても、総督統治の主体性は堅持されていたのである。そしてこのことは、平和産業の軍需的転換に際して殖産当局の中央との折衝過程や、臨時軍事費繰入金に関する財務当局と大蔵省当局との交渉態度、或いは、米穀自治管理法の施行に際しての農林当局の主張等々、その何れの場合を見ても、総督府は、その独自の立場から、朝鮮統治の自主性を守り抜いて来たと言つてよからうと思う。

然るに如何んせん。戦勢愈々不利で敗色が濃くなつてきたため、国家の総力を結集して本土決戦まで覚悟して闘い抜くことになつた。この時期は、昭和十七年末以後と見るべきであらう。しかるに、この時に際してもなお、小磯総督は、軍の強烈な軍需米の要求に対しても、朝鮮の食糧事情に鑑みて、この軍の要請による日本内地輸送米の送出を、強引に禁じたのである。あのような際、そんなことは普通ならば到底考えられないことであつた。これは、当面の責任者であつた私が断言し得られるばかりでなく、当時食糧行政に當つていた関係者は皆よく承知していることである。

そしてこの一事は、小磯総督時代に於ける戦時体制下の治政を如実に知る好個の例であると思うし、又、朝鮮総督府があのような激しい戦争のさ中にも、常に特殊の異民族地域ということを念頭に置いて、戦争のための犠牲を最少限度に食い止めようと苦心していたことが察知されることと思う。要するに私共は、それがはつきりとした形をとつたものではないまでも、何かしら心の奥底に朝鮮という異民族に対しては、特別の考慮を払いつつ戦争に対する協力体制を考えていたということを書いて、特別のものであると同時にこの感情は、平時に於ける統治の根本的心構えを間接に証明し得るものであると思う。

以上は私自身が総督府の首脳として体験して来た日本の戦時体制下における朝鮮総督府の基本的な態度であるが、私は、ここにおいてはつきりと諸君の質問に御答えする。即ち、

日本内地の戦時体制に対する朝鮮総督府の基本的態度は、総力結集の名の下に強い朝鮮を戦争そのものに即応させて行こうとする特別の措置は、とつていなかった。常に朝鮮の現実と見合いながら、独自の立場をとつて日本内地の戦時体制に応処したということである。

・民心と民生を基調として・

私が政務総監として朝鮮に再度赴任したのは、昭和十七年五月であつた。けれども私は、南総督の時代には拓務次官として、外地関係の仕事に携つていたので、その頃のことにも大体知つてゐる。そこで、これは大野氏の領分であるが、話の関連上、一寸それに触れておく。

南総督時代の朝鮮統治の方針は、従来日本が朝鮮統治の基本理念としていたところの内地延長主義を徹底的に具現しようとするものであつたかのように思う。即ち、朝



鮮を内地化するための非常に強い色彩の政策が打ち出されていたものと私は考えているのである。そして、この政策に対して、私共は私共なりに、一つの批判をもつていた。のみならず、ある事項については——具体的に言えば、創氏制度——の如き、その趣旨は判らぬでもないが、この際、このようなことに、血道をあげるといふことは拙劣である、という感じをもつていた。当時、私は拓務省にいたが、私のそういう考えが総督府の方にも判つていたものか、その主管である法務局長は、私のいる拓務省には余り連絡せず、それぞれの要所に非常に熱心な運動をしていたようである。そこで、その後拓務省に來て私に会ったとき、私は「君等は何かごそごそやっているようだ、僕はそれに対しては一つの意見がある」という話をしたことがある。私はそのとき、「朝鮮の比較的多くの人が厭がるようなことを、今、強いてやる必要はないではないか」ということを言つたように憶えている。今日これを誇つたり、他意があつていふのは毛頭ない。又、その必要もないことだが、あのようなり方に対し、私自身としては賛成ではなかつた、という程度の話としてこれは聞いて置いてもらいたい。

この創氏改名というものはその一例であるが、南総督時代というものは、内地延長主義というよりも、いわゆる皇国臣民化政策がその基調であつて、それが相当強烈に行われて來た時代であつた。そして昭和十七年、私共は、その後を承けてやつて來たのである。

さて、小磯総督になつてから、朝鮮をどのような戦時体制に持つて行つたか、ということがあるが、私は一応その責任の地位にいたが、特別な事をやつた覚えはなく、特に、日本内地よりも特別に統制を強化したというようないふこともない。勿論、食糧の統制にしても、内地の方から朝鮮の米を相当大量に要請して來た。しかしそれを、要請通りに応じたならば、朝鮮自体が立つていかなない。従つて、いくら軍の要請である

にしても、余り手きびしい要請に応ずることは出来ない。私達はまず、当時の朝鮮の狀態から見て、民生ということを第一に考えた。むろん、日本内地はあのような狀態であり、精一杯協力はしなければならぬ状況ではあつたが、それには自ら限度があつた。朝鮮の民心というものを基盤にして、常に物事を考え、終始、強硬に中央当局との折衝に當つて來た事は事實である。

然しながら、何分にも、あれだけの戦争であり、日本全体の大勢の赴くところ、その一翼である朝鮮のみが、例外ではあり得なかつた。そして私共が、朝鮮に特別の戦時的措置をとると否とに拘わらず、戦局は益々苛烈になつて行つたため、朝鮮も又、日本の戦時体制に追隨して行かざるを得なかつたのである。むろん、それより先、朝鮮にも国家總動員法が及び、物動計画等の措置も、当然、朝鮮をその範圍として行われていたのである。けれども、私共としては、そのような緊迫した中でも、朝鮮独自の立場から、まず民生ということを考え、民心の安定という事に心を配らなければならなかつた。これを言い変えるならば、朝鮮という異民族地域を、あの苛烈な戦局の中で、如何にして動揺させずに、しかも戦局に協力させて行くかということに非常に腐心したものである。即ち、日本内地の場合には、ただ戦争遂行ということの一本に体制を固めて行けばよかつたのであるが、朝鮮の場合には、それに即応しながらも、常に異民族という複雑な民心、民情というものの対処する必要がある、従つて日本内地に比較すれば、そこには自ら寛赦宜しきを制して行く政治的配慮が払われていたのである。

・統治三大懸案の解決・義務教育の実施・

一 義務教育の実施。  
二 徴兵制度の実施。



## 三 参政権の実施。

即ち、この三つの併合以来の三大懸案が解決されたことは注目値することである。その中でも、参政権の実施は、貴族院の方は不十分ながら実行せられたが、衆議院の方は選挙法は成立したが施行に至らないまま終戦となつたが、これは朝鮮民衆が最も待望していた画期的な施策であつたと言えるだろう。

この参政権の実施と共に、義務教育の実施も又、朝鮮民衆の久しい願望に応えたものである。そしてこの義務教育を推進した理由は、徴兵制の実施とも大きな関連があつた。即ち、この義務教育の実施は、前期の南総督の時代、大体、これを実施すべき準備の発表を見ていたものであるが、それが小磯総督時代に至つて強力に推進された理由は、それより先、朝鮮の青年層の間にも、徴兵制実施の強い要望があり、もしこれを早急に実施するようになれば、互いに徴兵された日本人と朝鮮人との壮丁の間に、相当の学力差がつくことになる。そしてそのことは内鮮人の間に好ましくない状態を醸成する虞れもあるので、なるべくその不平等を避け、内鮮人一樣にするということが狙いであつた。又、これと同時に、台湾から中央に対し、朝鮮よりも一足先に義務教育を実施したい旨の強力な要請があつたので、これとの均衡上、朝鮮、台湾双方同時実施を強力に推進したものである。

しかしこの義務教育は結局、台湾の方が一足先に実施されたが、その問題が中央と折衝された初期には私は拓務次官として在任していたので、台湾総督府の主宰者に、次のように応対したことを記憶している。

「台湾に義務教育を実施することは結構なことだが、只、何でも朝鮮よりも一歩先んじてやるんだ、という考えならば、それはいけない。けれども、問題は台湾の住民の富力の点であつて、もしも台湾の住民の方が経済的にも朝鮮より一歩進んでい

て、義務教育を行い得る状態が熟している、というのならば、それもよい。問題は財政上の均衡と民衆の負担力から言つて実施する時期に到達していると言ふのならば話は判る。」

という見解を述べたように憶えている。しかし、結局は、台湾の方が一歩先に実施したように思う。

さてそこで、朝鮮と台湾と同時に徴兵制度を布くということになれば、どうしてもこれは、義務教育を普及させて、朝鮮の壮丁達が軍隊に入つた場合、日本人の兵との間に、知能差を少なくしなければならぬ。そしてこれは何よりも、朝鮮人自身のためであり、同時に、久しく要望して来た朝鮮の民心に副うゆえんでもあると考えられたのである。

大体、朝鮮の人達は民族の實力を培養して行くことが根本であるとの考えを強く持つていたから、教育の普及に対しては、極めて強い要望が続けられた。これに対し齋藤総督時代より三面一校から、一面一校へ、更には義務教育の実施へと、発展して行つたのであるが、そのスピードは朝鮮の人達から見れば必ずしも早いものではないと言ふかも知れない。がそれは結局のところ、朝鮮民衆の財政的負担能力が前提になるものであり、当時の実情からみれば、行政当局の行き方としてはやむを得なかつたものと思う。それでも他の施策に較べれば、随分重点を置いたものと言ひ得るであらう。ここで注意を喚起したいことがある。それは總督府の文教政策というよりも、統治の根本問題として教育の普及によつて、やがては朝鮮人の民度が高まり、政治的、経済的に、将又、文化的にも、社会的にもその能力が充実に段々内地人と大差ない程度に到達した場合の考え方である。

朝鮮人が實力を涵養して他日の発展に備えたいという気持は、あらゆる階層の者が

それぞれの立場と観点において、皆胸に抱いていたところであるから、見方によつては、独立運動の基本条件であるとも考えられる。しかし総督府としては民生を幸福にし、民度を向上せしめることは、治鮮の根本であるとの方針を採つていたから、民力の培養については大いに意を用いたものである。教育の普及に力を入れたのも結局はこの方針の一環に他ならない。京城帝国大学を創つたのもその顕著な事例である。しかしながら、このような総督府の文教政策というか統治の方針に対しては、国民の一部では相当強い反対があつた。

即ち、総督府は、朝鮮に於ける教育を旺んにし京城帝国大学まで創つたが、そういうことは独立思想の培養に役立つのみで、排日の手伝いをしてゐるようなものである。というような厳しい批判が相当強かつた。それにも拘らず総督府では、既定方針の通り行つてきたのである。それというの外でもない。内外の状況を深く洞察し朝鮮の独立は許さない方針であつたけれども、さればといつて朝鮮の民力の充実、独立思想を醸成する恐れがあるからといつて、いつまでも朝鮮民衆を無力の状態にしておくというようなことは許さるべきことでない。如何に抑さえんとしても抑え切れるものではない。大学の如きも官立大学を作らないならば、民立大学を作るといふ気運は非常に進んでいたのである。だからどうせ出来るものならば、内容の整つた官立大学を起こした方がよい、というごとで出来たものである。このような状況であるから意見はいろいろあるが総督府としては、終始民力の充実に努力し教育の普及にも努めたのである。義務教育の如きも、一方では徴兵制度の施行に見合い、一方では、朝鮮の人達の教育普及の要望に応えるという建前から、その実施を推進したのである。

・ 徴兵制度の実施 ・  
・ 参政権の問題点 ・

次に徴兵制度の問題であるが、これはまさに、日本の戦局と重大な関係をもつていた。

南総督のときに志願兵制度が布かれて、私共の行つたときには「志願兵訓練所」が設けられていて、そこで志願兵の養成が行われていた。

ここで徴兵制度について述べる前に、一応、関連的に参政権問題に触れて置こう。この参政権問題、つまり、朝鮮人に参政権を与えよ、という運動は随分古くから行われていたのである。大正九年東京ステーションホテルで、朝鮮人のために殺された閔鉉植事件も彼がこの運動のため上京してゐた時であつた。

ところで、これに対して、日本人（在鮮日本人も含めて）の中には、非常に反対する者が多かつた。その理由は、――朝鮮人に国民的な権利を与えるにしても限度というものがある。朝鮮人は納税はやつてゐるが、兵役の義務は果してゐない。だから、血税を払つてゐる内地人同様に参政権を与えよと言つても、それは無理である――という意見が非常に多かつたのである。

これは私共が公平に考えて見ても、日本内地の人達と同じように参政権を要求するには、納税と兵役の二つの義務を果すことが一応の前提でなければならぬ。従つてわれわれも、この反対意見は理由のあるものと思つてゐた。

そこで私共は、少くとも参政権を与えるといふことは、どうしても徴兵制度と関連して考えなければならぬと思つてゐた。

ところがこれを実現する時期が来た。それは太平洋戦争であつたのである。即ち、戦線の拡大と、兵力の増強は必然的に、壮丁の徴募範囲の拡大を要求するに至つたのである。

ここに於いて、従来の志願兵制度をやめて、徴兵制度を布き、朝鮮の人達も、本来

の日本人同様、兵役が課せられることになったのである。

・日本内地の反対を押し切つて。

このようにして徴兵制度に踏みきつた以上は、今度はどうしても、参政権問題に踏みきらざるを得ない段階になった。しかし当時の内地の状況はかつて兵役の義務を負担してはいない朝鮮人には、と反対していたことなどは忘れたかのように、徴兵制度を布いたからと言つて直ちに参政権を与えるなどということは早計である。本気で言つていのか、といった具合で、到底受け入れられない有様であつた。しかし小磯総督を中心とする吾々は内地のこのような反対に対して次のような論旨で、ねばり強く説得工作に努めたのである。即ち—今迄、朝鮮に参政権を与えなかつたのは、血税の義務を負担していなかつたからである。それが、今度は徴兵制を施行してその義務を果すこととなる。この様な状態の中でお、参政権を付与について消極的であつたり否かであつたりすることは、甚だしく、日韓併合の本旨に悖るものと言わなければならぬ。いわゆる一視同仁の建前から、両民族の相互繁栄を統治の根本精神としているのであるから、もしこの時期に至つてなお、参政権を付与しないということになると、さなきだに朝鮮の人達が言つてゐるところの—朝鮮は日本の大陸発展のための基地として、又、日本の膨脹発展の手段として併合したもので、我々朝鮮民族の爲などは何も考へていない—という様な不平が、益々強くなることは必然である。だから徴兵制に踏み切つた以上、参政権も絶対に付与すべきだ。—という見解をもつて体当りをしたのであるが、なかなか容易に受け入れられなかつた。しかし小磯総督はあくまでもこの方針の貫徹に努力し、遂に総理大臣になつてからこの宿願を達成したのである。

しかしながらこれは、必ずしも小磯総督の強い政治力のみが、この一大懸案を解決させたものとは言われない。それには、総督府の伝統的な統治方針とか、時局の影響と

か言つたような多分の要素が織りなされてゐるからである。が何はともあれこのように、併合以来の三大懸案であつた朝鮮に於ける義務教育、兵役法、参政権付与という重大政策が、一連の見合いの下に進められたのは小磯さんが総督のときから総理大臣時代を通じて実現したのであつた。

ここで徴兵制と参政権の関係について一言しておきたい。それはもし戦争がなかつたならば、この徴兵制と参政権の実施は、今少し延びていたのではないかと思われることである。そしてこれは、誰にも容易に想像され得ることである。但し、この問題は、かりに戦争がなかつたとしても、吾等に参政権を与えよ—という要望は、朝鮮人として非常に強いものであつたが故に、兵役の義務を果せ、という問題が起れば、必ず開運的に起つたものと思われる。従つて、この参政権の問題と道伴れになつて、必ず徴兵制の問題が浮び上つて来ることも又、重々想像がつくことである。故に、参政権問題のみが進んで徴兵制がその後になるということは、まずあり得なかつたことである。しかしこれを時期的に促進させたものは、やはり戦争であつたということ

は否定出来ないと思ふ。

この参政権と徴兵制の項を終わるに當つて小磯総督の統治に対する態度を一言したいと思ふ。総督のやり方についてもいろいろ批判があるが固より人間である以上、長所も短所もあつたであらう。が、しかし朝鮮の人に対する誠実な態度と統治に対する真面目さは終始一貫してゐた。むしろ生真面目に過ぎたとさえ思われるような点もあつた。一例を挙げれば、統治のやり方について反日分子と目されるような青年等と議論を闘わし、—自分の信念に対して、異論があるならば、いくらでも応酬するから、今日は遠慮なく言つてみよう—といった具合で、真剣に討論したようなことがあつた。このようなやり方は総督としてはどうか、という批判も随分あつたが、それは別問題

の日本人同様、兵役が課せられることになったのである。

・日本内地の反対を押し切つて。

このようにして徴兵制度に踏みきつた以上は、今度はどうしても、参政権問題に踏みきらざるを得ない段階になった。しかし当時の内地の状況はかつて兵役の義務を負担してはいない朝鮮人には、と反対していたことなどは忘れたかのように、徴兵制度を布いたからと言つて直ちに参政権を与えるなどということは早計である。本気で言つていのか、といった具合で、到底受け入れられない有様であつた。しかし小磯総督を中心とする吾々は内地のこのような反対に対して次のような論旨で、ねばり強く説得工作に努めたのである。即ち—今迄、朝鮮に参政権を与えなかつたのは、血税の義務を負担していなかつたからである。それが、今度は徴兵制を施行してその義務を果すこととなる。この様な状態の中でお、参政権を付与について消極的であつたり否かであつたりすることは、甚だしく、日韓併合の本旨に悖るものと言わなければならぬ。いわゆる一視同仁の建前から、両民族の相互繁栄を統治の根本精神としているのであるから、もしこの時期に至つてなお、参政権を付与しないということになると、さなきだに朝鮮の人達が言つてゐるところの—朝鮮は日本の大陸発展のための基地として、又、日本の膨脹発展の手段として併合したもので、我々朝鮮民族の爲などは何も考へていない—という様な不平が、益々強くなることは必然である。だから徴兵制に踏み切つた以上、参政権も絶対に付与すべきだ。—という見解をもつて体当りをしたのであるが、なかなか容易に受け入れられなかつた。しかし小磯総督はあくまでもこの方針の貫徹に努力し、遂に総理大臣になつてからこの宿願を達成したのである。

しかしながらこれは、必ずしも小磯総督の強い政治力のみが、この一大懸案を解決させたものとは言われない。それには、総督府の伝統的な統治方針とか、時局の影響と

か言つたような多分の要素が織りなされてゐるからである。が何はともあれこのように、併合以来の三大懸案であつた朝鮮に於ける義務教育、兵役法、参政権付与という重大政策が、一連の見合いの下に進められたのは小磯さんが総督のときから総理大臣時代を通じて実現したのであつた。

ここで徴兵制と参政権の関係について一言しておきたい。それはもし戦争がなかつたならば、この徴兵制と参政権の実施は、今少し延びていたのではないかと思われることである。そしてこれは、誰にも容易に想像され得ることである。但し、この問題は、かりに戦争がなかつたとしても、吾等に参政権を与えよ—という要望は、朝鮮人として非常に強いものであつたが故に、兵役の義務を果せ、という問題が起れば、必ず開運的に起つたものと思われる。従つて、この参政権の問題と道伴れになつて、必ず徴兵制の問題が浮び上つて来ることも又、重々想像がつくことである。故に、参政権問題のみが進んで徴兵制がその後になるということは、まずあり得なかつたことである。しかしこれを時期的に促進させたものは、やはり戦争であつたということ

は否定出来ないと思ふ。

この参政権と徴兵制の項を終わるに當つて小磯総督の統治に対する態度を一言したいと思ふ。総督のやり方についてもいろいろ批判があるが固より人間である以上、長所も短所もあつたであらう。が、しかし朝鮮の人に対する誠実な態度と統治に対する真面目さは終始一貫してゐた。むしろ生真面目に過ぎたとさえ思われるような点もあつた。一例を挙げれば、統治のやり方について反日分子と目されるような青年等と議論を闘わし、—自分の信念に対して、異論があるならば、いくらでも応酬するから、今日は遠慮なく言つてみよう—といった具合で、真剣に討論したようなことがあつた。このようなやり方は総督としてはどうか、という批判も随分あつたが、それは別問題



として、生真面目さを現わしている一面であると思う。

・戦時経済統制・渡航（労務）問題・  
次に経済関係のことが質問されているが、私は経済関係のことは至つて不得手で、諸君の質問に満足にお答え出来ないかも知れない。だから質問のときに個々の問題について具体的な点を言つて頂けば何でもお答えするつもりである。が只、経済関係の統制はこの質問書の通り、確かに、食糧統制、物価統制、賃銀統制、産業統制、産金政策の転換などについて行なわれた。そしてその中で、私の貧困な知識からみて、産業統制と産金転換ということとは、正に戦争に即応するための著しい政策であつたと言えるであらう。

戦争に即応するために、戦力物資の増強を計るということから、産業統制が行なわれ、又あれだけ奨励していた産金政策も戦力増強のため、当面必要とする金屬増産に転換したということは、これは当然、戦争に協力するための著しい例であらう。只、物価や、労銀や、食糧等の統制は、勿論、あの苛烈な戦争下、協力はしなければならなかつたのであるが、この点だけははつきり言つて置きたい。

それは、戦争遂行のため、確かに食糧を以つて日本内地に協力をしたが、しかし、それは常に朝鮮の民心にどのような影響を与えるか、ということを中心として考え、それを念頭に置いて行なつたことは前に軍需米のことについて話した通りである。他の諸政策も同様である。尚いま一つ挟んで述べて置きたいことは、労務の問題である。今、朝鮮側では、現在日本に来てゐる朝鮮人は全部、日本政府が強制的に徴発して運れて来たものだ、というように言い方をしているが、元来日本の中央政府は、朝鮮人が多数日本内地に入つて来ることは彼我双方のために必ずしも良くないので、出来るだけ入国を防ぎたいというのが一貫した政策であつたのである。殊に内地の治安当局は、

尚更そうであつた。

これに対して朝鮮統治の立場から、それは困るというので抗争し続けて来たのは、朝鮮総督府であつたのである。これは、今日、朝鮮側で考えていることと全く逆なのだ。当時の総督府の考えは、内鮮一家と言いつつながら、本国へ行くことを阻止するなどということ自体が間違つてゐる。――という考え方があつた。そしてこのことが如何に朝鮮の人々に反感を持たせたか測り知るべからざるものがあつた。従つて総督府では、日本内地の渡航制限に対しては終始反抗して来たのである。

尤も、例の関東大震災のときとか、その他その時々々の現象により、総督府としても、日本内地の方針に協力することが時期的に必要であると認めた時は、それはその時の情勢によつて、渡航をコントロールしたことがある。しかしながら、総督府の一般的な基本方針としては、終始一貫、内地の渡航制限に反対して来たというのが厳然たる事実である。

米の内地送出問題も、やはり終始朝鮮統治の立場から、日本内地と論争して来た問題の一つであり、それは又、朝鮮経済の運営と、産業開発上の重要政策でもあつた。戦前の日本内地には米が有り余つて、その上朝鮮から米を持つて来られてはやり切れないと、総督府の産米増殖計画に強硬に反対し、むしろ、米作の減反を要望していた。

私が拓務省にいた時にもこの問題が起こつた。

それは、朝鮮ばかりでなく、台湾に対しても同様であつたが、台湾の方は、米と甘蔗とが丁度見合つた作付反別になつていたので、そのときの中央政府の方針は、台湾には甘蔗の方を出来るだけ多く作らせて、米作の方を減らさせようという態度だつた。



のである。

殊に一般に知られているのは、下岡政務総監のときに行なわれた産米増殖計画であるが、この計画の如きも、その途中で、幾度か日本内地の圧迫を受けたものである。これに対し総督府は毅然として中央政府に当り、当初の計画通り実行を進め、今一步のところでは終戦になつたものである。

今日、朝鮮の人達は、口を開けば、日本は朝鮮から長い間米を取り上げて来た、というけれども、朝鮮経済というものは米を出来るだけ多く作り、その米を日本内地に少しでも多く出すようにしなければ、決して農民の生活は改善されず、又、国民経済も成り立たなかつた。従つて朝鮮は、いつ迄経つても、経済的自立は出来ず、開発も出来なければ、繁栄を齎らすことも出来ない。それは恐らく、今日の韓国の経済事情に於いても同じことが言えると考えられるのである。

又、併合当時に於ける朝鮮農村の疲弊窮乏は、到底、想像の出来ない程甚だしいもので、これを立て直すことが朝鮮統治の大きな課題であり、これが民力培養の土台になるのであつた。従つて、この政策がうまく行かなければ、朝鮮の民心を収めるといふことは決して出来なかつたであらうと私は思つてゐる。

それが後になつて戦争に入ると、この總督府の産米増殖政策は、非常な威力を発揮して、戦時日本の食糧問題に大きく貢献するようになった。だから、このことに関する限りでは、確かに、日本は朝鮮から米を取り上げた、という表現も出来得るかも知れない。けれどもその一面では、あの戦時下で、しかも非常な不作のときでも、朝鮮は、日本内地の食糧統制に比べると、比較的緩やかな統制で済んだのである。これは米が出来たからこそである。それでも戦局が段々不利になるにつれて、朝鮮でも漸次統制を強化して行つたことは事実であるが、それでも、小磯総督以下われわれは、出

来るだけ軍用米の供出をも制限して農民に無理のかからぬように努力して来たことは前に言つた通りである。

#### ・異民族統治の苦心・物価統制・

物価の統制も、戦争の激化に伴う物資の不足につれ、需要供給上の必然の結果として行われた。これは闇取引をなくし、物価を調整して民生を保護するための喫緊の政策であり、全く民衆のための政策であつた。勿論、日本内地と相関的な影響関係にある朝鮮としてはあの戦時下に於いて、これを避けられるわけのものでもないから、これも又、戦争がもたらした必然の成行きであつた。即ち、その時局に応じた当然の対策であつて、その政策如何が、民衆の生活に非常に大きな影響を及ぼすことは論をまたない。けれども、私は、あの苛烈な戦時下で、よくも、あの程度の統制で、あれだけに民衆生活を守り、かつは、維持することが出来たものだ、今でもそう考えておる。

勿論これは、中央から遠く隔つてゐるため戦争の緊迫感が内地程ではなかつたといふことと、内地に比して経済圏域、乃至は生活圏域というものが狭く、纏まりがよかつた、という風にも言えるが、むしろそれよりも、總督府の戦時対策が、内地の戦時体制に準じながらも、常に民心の安定と、民衆生活の確保に向けられていたからである。私共の考えからすれば、戦争協力といつても、所詮、民衆の戦意が土台になるのであつて、そのためには、諸般の統制方針の如きも、常に民心の帰趨を考えて行つたのである。従つて、生活必需物資の多くは日本内地よりも豊富であつたのではあるまいか。それで日本内地から物資の豊富な朝鮮へ疎開しようとする人もあつた位である。あの苛烈な内地の戦時生活を経験した人から見ると、すべての面で朝鮮の戦時生活は

案であつた。

以上は諸君から提示された、小磯・阿部両総督時代の基本的な問題として「朝鮮にどのような戦時体制を確立したか」、又「その日本内地との比較はどうであつたか」という二つの根本問題に一応答えたつもりである。あとは質問によつて又説明することとしたい。

### ・三・一運動以後の統治態度・

ところで、ここで一寸補足して置きたいことがある。それは諸君の提示された項目の事柄について説明していても、少し掘り下げて行けば、結局統治のやり方の根本の問題に触れてくるのである。又その核心がつかめなければ、所詮は枝葉末節の論議に墮してしまふ。だから、諸君の理解を整理して貰うためにも、各時代に於ける統治のやり方と、各時代を通じて一貫していた統治の根本方針とを明らかにしておくことが必要であると思う。

そこでまず第一に統治のやり方であるが、これは本来ならば、併合初期からのことを述べなければならぬのであるが、私はその実際に携わつていなかったもので、その時期のことは他の方々によつて補足して頂くことにして、私は万才騒擾事件直後の斎藤総督時代以後のことについて説明することにする。

まず斎藤時代であるが、斎藤総督はそのもち前の人柄で内鮮人及び外国人から、個人的には非常に親しみを持たれ、敬慕されていたことは何人も認めるところである。しかしその統治時代は騒擾の直後で、人心安定を欠き、物情騒然たる時であつた。それがため、この時期には産業、教育、民生等に亘つて如何なる仕事をするにしても、まず治安が安定しなければ何事もすることが出来ない時であつたから、自然、治安第一主義でやらざるを得なかつた。従つて、取締り方面に重点が注がれたため、動とも

すると政治、行政が苛酷であるとの印象を与えたことも少なかつたと思う。特に警察のやり方に対して、不満や非難が多かつたのであるが、しかし総督の施政の方針はあくまでも民生の安定にあり、民意の向うところをよく洞察して、過当な束縛や圧迫を除去することに心を砕いた。言論の自由を成るべく尊重して民意の暢達に努め、これがためには随分中央からの反対があつて、独立思想を助成するものであるとか、排日的言論に甘過ぎるとか、随分厳しい非難攻撃があつたにも拘わらず、当初の方針を実行したことは前にも言つた通りである。

次に宇垣総督時代には、治安も漸次平穩に向い、思い切り民生の充実に努力を傾注することが出来る時であつたから、宇垣総督は、いわゆる心田の開発と、産業の発展に重点を指向して、あらゆる施策を実施した結果、産業黄金時代を現出し、農山漁村の復興による民力の充実は、実に著しいものがあつた。

次に南総督時代であるが、この時期は宇垣時代を享けて、その政策を踏襲し、内鮮一家の理想を実現しようとして努力した。その中には、批判を受けたものもあつたが、真意は朝鮮民衆の発展と幸福を祈つて、やつたことは疑いのないところである。

次に小磯・阿部両総督時代というのは、戦局の推移に伴い、最も苦難な時局を背負わされたものである。即ち、南総督時代からの祖国日本は、いわゆる大東亜戦争に突入した時代であり、そして小磯総督が朝鮮総督のバトンを受けたのは、敗色の萌しが漸く現われていた時であつた。それで内地では戦時体制が益々強化せられて、最後まで頑張つて国土を護る決心であつたから、朝鮮も又、それに呼応して戦時体制の強化に移行したが、しかしその戦時体制の採り方は常に朝鮮の特殊性を考慮におきつつ、措置して行つたことは前に詳しく述べた通りである。

・民族問題の根本義・

次に諸君の質問以外のことであるが、私の民族問題についての考え方を一言述べさせて貰いたい。私は二度に亘つて朝鮮の施政に参画したのであるが、事務官の頃から警務局の保安課にいて、民族運動を仕事の対象としていたため、若い頃から民族問題には、非常に考えさせられ、また煩悶もした。

というのは、民族問題とか、人種問題というのを書物で読んで、その難かしさを知つたのではない。身自ら、朝鮮の民族運動、独立運動と取り組んで、これを取締り、弾圧を加えながら被支配者の立場や、心境について深い考察を加えざるを得ないことになつた。殊に外国に行つてアメリカ人の吾々有色人種に対する態度に接し、又列強の植民地統治の状況を見聞するにつけ益々煩悶は加わつて行つた。だから、若い学生達がこういう問題に引つかかつて来た時などは、全くやり切れなかつた。こういうものをどんどん檢舉して、結局これがどのようになるだろうということに非常に悩まされたものである。

しかし私は、民族運動や人種問題については、一つの考えというよりも寧ろ信念を持つていた。

それは、民族と言ひ、人種と言うものは人間の集合体であり、そして人間が生物である以上、生物が生存して行く理法によつて支配されることは免れないところである。而して、生物というものは、自己の保存、拡充ということが、生きて行くための本能であるから、民族又は国家というものも、自己の保存と拡充、発展に努めることは、これは自然である。そして、これを詮じつめれば、適者生存、優勝劣敗ということになる。だから結局、他よりも優れるということが、自己の保存と発展の基調であり、国家、民族というような場合も、当然それが当てはまるわけである。

従つて優者が栄え、劣者が衰えることは、これは致し方のないことで、良いとか悪

いとかの問題ではないのである。だからこの現象に対して文句を言つてもどうにもなるものでない。只文明の発達につれて、このような現象を少なくするような努力が払われつつあることは事実である。けれども、今以つて根本的解決策はないのである。このような考えを基調とする場合、支配者と被支配者の出来てくることは已むを得ないことであるが、支配者が如何なる態度を以つて被支配者に臨むか、ということが大切な問題なのである。

被支配者の立場にある者は、たとえ、その原因は何であれ、これに対して反撥することは、これも当然のことである。

こう考えてくると、朝鮮における独立運動その他の民族運動は、どんなに防ごうとしても、防ぎきれものではない。これを如何に処理すべきかが問題なのである。

即ち、まず、世界の各強国の多くが当時その植民地民族に対して行つて行つて行つていふようないわゆる暗愚政策ともいふものを何時まで続けて行けるか。民族の反撥心を絶滅することが出来るか。もし出来ないならばどうすべきかが問題であつて、これに対する考え方によつて、統治のやり方が變つて来るのである。先に教育と参政権のところを言つたように、教育を盛んにすることは、結局、朝鮮人の実力を養成することになる。そして、文化的にも経済的にも、彼等の実力が養成される結果は、当然、独立の要求が盛んになる。そうになると、朝鮮の民度の発展と共に、この統治形態というものが、何時まで継続出来るかということになるが、これは自然に成長する結果であるから致し方のないことである。その時はその時の状況によつて対処して行くべきである、私は考えていたので、同僚達ともこのことを話し合つたものである。そして結局、私の結論は、――朝鮮は、ゆくゆく自治ではないか――ということに落ちついてゐた。しかし、このような考え方については、軍部その他の保守主義の人々からは猛烈に



批判された。けれどもこれは民族問題に対する根本の考え方との相違であるから仕方がないのである。そして、私のこの思想は警務局の先輩の丸山鶴吉氏等の影響が相当大きかったと思う。

世間では、万才事件後の朝鮮総督府という役所は保守固牢な役所で思想運動等に対しても最も頑迷であるように思われていたかも知れないが、局に当る者の考えは以上の通りであるから相当進歩的のものであつたと言ひ得るのである。

けれども、私共としても、総督府の官吏として統治方針の根本である独立は許さぬとの建前は堅持したので、独立運動に対しては、相当厳しく取締りをやつたことは勿論のことである。

だから、当時新聞の論説や記事に対しても、独立運動の鼓吹宣伝は厳重に取締つたものである。その頃の諺文新聞は差押えの線スレスレの記事を毎日のように書いていたので、自然差押えの件数も多く、その都度、宋鎮禹、金性洙、張徳秀といった連中と議論を闘わし、激論をやつたことも屢々であつた。このように新聞に対しては、差押え処分を随分やつたけれども、新聞の発行は継続させた。これに対しては相当厳しい批判もあつたけれども、大局的見地から考えてそうしたのであつた。

以上で、私の民族問題に対する信念を大体お話したつもりである。

それで、諸君との討議も必然、日本が朝鮮を併合してから後の統治のやり方についてであつて、併合そのものについての論議は、自ら別の問題である。即ち、それは、世界の動きについての史的硏究課題になると思う。

統治のやり方に関する問題については如何なる問題でも、質問に応じ、且つ真剣に討議したいと考えている。

(講述終り)

## 質 問

宮田 どうも有り難うございました。大きな問題が沢山出されましたし、特に、私達の質問の中に書いていなかった渡航制限の問題などに触れられましたが、思想統制とか、経済統制とかには余り深く触れられていないので、いろいろ問題があると思いますが、先生が政務総監として在任された期間の一番顕著な問題は、義務教育、徴兵制、参政権等の施行問題です。

で、まず最初に、この三大課題の質問に入り、その後で、いろいろな部門に亘つて討論を展開したいと思ひます。

田中 今、宮田さんのお話がありました。経済統制のことは一寸お話しした通りですが、詳細のことは穂積さん、塩田さんあたりにお聞きを願う方が良くないかと思ひます。思想統制のことは先刻も申した通り、独立思想や共産主義思想は取締つたけれども、其の他は別に思想統制と言つたようなことはしたことはありません。

梶村 何に書かれていたか、一寸思ひ出せませんが、徴兵は国民の当然の義務であり、それに対する反対給付として参政権を要求するというようなことは、以つての外だ、というよう

な書き方のしてあるものが二、三あるのですが……。

田中 なる程――。

梶村 今、先生の言われたような事だと、そういう言い分は何か欺瞞的だと思ひますが……。

田中 私が間違つてゐるという訳ですか？

梶村 否、総督府の正規の刊行物の中に、そういったものがあるのです。

田中 総督府で出した書物の中で、徴兵制の実施に対し、これに見合つて参政権を呉れというのは間違つてゐる、ということが書かれてゐるとすれば、僕はその書いたものの方がどうかと思ふ。しかし、――徴兵制を布く代わりに反対給付として早速参政権をよこせ――というような言い方はよくない、と注意してゐるのなら、その意図は判るけれども、何れにしても、言葉の詮索は別として事実はある。参政権を与えるのが当り前であると思ふ。

梶村 よく判りました。

田中 探り返すようだが、反対給付などという言葉、態度はよくないけれども、やはり人間だから、本當の腹はこれを裏



行するからあれを呉れるのは当り前だ、という事ですよ。

梶村 明らかに徴兵制との関連においてですか。

田中 そうです。

宮田 参政権問題の緒口がつかまりましたから、もう少し質問を集中的に……

梶村 選挙法改正の条文を見ると、あれは昭和二十年四月頃に出されたと思いますが。

田中 そう、昭和二十年四月一日じゃあなかつたかな。

梶村 その最後のところに付則がついています。それによると「この改正を実施するに当つては、その時に別に勅令を出してその時から施行する」という条文があるのです。ところが、実際問題としては、戦争が終つてしまつて、空手形を出した形になつてゐるのですが、その条項について疑問があるのです。つまり普通だつたら「この法律は何月何日から施行する」というように法令に書いておくわけでしょう。ところが、これは期日を限つて指定していません。これはどういう意味ですか。つまり、一応、今は戦争中で必要であるから選挙法のようなものを出しておいて、まあ、イギリスがインド人を欺した様に、済んだ後で、この選挙法をこれから実施するという勅令を出さずに、何時迄も宙ぶらりんにしておくということも可能なのです。そういう条文になつたのはどういうわけ

なのですか。

田中 そういう例、つまり「本法実施の時期は勅令で定める」という例は幾らもあるのです。そういう言い方をしておくところに何かトリックがあるのではないかと言われて見れば、なる程そういう誤解もあるかなという気がしないでもないが、それはこの大問題に対する方針が決つて、愈々最後に法律となつて施行されたのが二十年四月であるために、そんな邪推も生まれてくると思われるが、この問題はそんな不真面目な考えでやつたものでない。これを発議したのは小磯さんの総督在任の時代で昭和十九年からである。その時分は戦局必ずしも良いとは言えないが、敗色濃いと言う時ではなかつた。その頃から真剣に取り組んだ問題であつて二十年四月に考えたのではない。その頃から内地の反対に抵抗しながら押し進めて来た、本当に心魂のこもつた方針であつたのである。だが廟議が決まるまでに時間がかかつて遂に二十年四月になつたのである。これは公布の日時が何れであつても、施行に対する細目の研究は当然続くのであつて、その時期を延ばすためのものではない。つまり内地の普通選挙法をそのまま朝鮮に施行してよいのか、制限選挙から始めた方がよいのではないか、という意見が非常に多かつた。制限選挙とすると、どうするか色々研究の結果、納税の多寡による制限選挙になつたのです。

納税を基準にすることが良いかどうかは別問題として、制限選挙になることは已むを得ないところだと思ふ。日本に於いてもその段階を経て来たのだから、もし普通ということになると、議会でキヤスチングボートを握られる恐れがあるということも、心配されたようだが、何れにしても最初からの普通選は無理であつた。このような次第で施行時期は別に定めるとしたのであつて、この例は他の法律にも沢山あることで、特異のことではない。

梶村 よく判りました。

田中 尚、キヤスチングボートの問題は実は永遠の問題なのです。一時暫定的な制限選挙の過程を通るとしても、永久に制限選挙というわけにはいかないでしょう。何時かは普通の時期が来る。だから、そんなことを心配していたら、参政権の問題は何時まで経つても解決しない。何時かは、与えなければならぬ運命に達着するのだから、それならば、この際踏み切るべきである。ということになつたのだが、それにしても、一足飛びに普通選にしてもよいかというと、それはやはり制限選挙が妥当である。先程も一寸言つたように、日本も始めは制限選挙からやつたのですから。朝鮮の民度から言つても、それは当然であると思う。但し、その数の定め方が、妥当かどうかというについては、異論があるでしょう。しかし、それは宋鎮禹などをはじめソウソウたる民族主義者の

連中殆んど全部が署名した「衆議院議員選挙法を朝鮮に施行する件」という請願書が出ていましたが、それにも、もし、これを直ちに実施することが不可能ならば、比較的文化の高い地域を限つてでも実施して貰いたい。そこまでは是非踏み切つて貰わなければならぬ。という請願書なのです。この請願書は現物があるから何れお目にかけてもよろしいのですが、そういうことで朝鮮人側でも、直ちに無条件に実施することは無理だと、一応考えていたことなのです。そんな訳で、この制限選挙は、納税の多寡によつて定めた。そして人数は、たしか三十人未満でしたでしょう。

宮田 二十三人になつています。

田中 そうでした。しかし、只の二十三人と言つても、キヤスチングボートを握るといふ機会もあり得るのですよ。そういう例は幾らもあるから……。しかしまあ、現実に即応する方法をとつた。

宮田 総督府自身の考え方と、中央の考え方との相違、そしてそれが条文の上で、総督府の用意した原案と、中央で最終的に決めた成案とにどういふ違いがありましたか。それから、日本人側が朝鮮人を議会に入らせまいとした意見が当然あつたと想像されますが、それならば、一体日本ではどうして自治論というような形で朝鮮に対する問題が起きなかつたのでしょうか。例えば総督府の下に、朝鮮人だけの議

会を作つて帝国議会には入れない、とかいうようなこと。そんな議論があつたかどうか。

田中 それはこの選挙法施行が決まる過程で、否そのずつと以前から、朝鮮自体に独立議會を設けた方がよい、という議論も随分あつたのです。しかし、参政権付与ということに踏み切つた以上は、やはり選挙法を施行して本国の政治に参加すべきだ、という正しい行き方の方を通つたわけです。それからもう一度時期の問題だが、ごまかそうというのならあんなに真剣な討議を行はしなかつた。又日本内地においてもあれ程の反対はなかつたでしょう。

梶村 始めの原案では期日を決めていたのを、何処かで直したというようなことは――。

田中 それはありません。

梶村 それでは、実施するということで、総督府では準備が進められていたと思いますが……。

田中 それは無論、始めていたでしょう。というのは制限選挙です。有権者とか、その有権者に対して議員を何名配当するとか、精細にやつていたでしょう。

梶村 それは法令にも出ていましたよ。

田中 法令に出るまでに、そういうことをやつたのです。

姜徳相 総督府で原案を作つたものを、枢密院あたりで、制限選挙に直したり、人数を減らしたりはしなかつたですか。

た以上は――。

権章旭 帝国臣民である者が帝国のキヤスティングポートを握つたところで、どういふ問題が起きるのでしょうか。

田中 それはね。

總領 その点はね。日本の議會政治が発達する初めに、皆さんも御承知のように、イギリスでアイルランド党というものがある、各般に活躍して、自由党や保守党が散々に引きずり廻されたことがある。このことが丁度、日本では議會政治を始めたときのことでしょう。それで、日本人の政治家の頭には、イギリスのアイルランド問題というのが、深く入つていゝのですよ。そして、その結果は、まあ自治にしてみたけれども、その北アイルランドと南アイルランドの状況の相異もつて、結局、シンフェン党などが出来て、大騒ぎになつてあゝいふことになつたでしょう。そのことを、日本の政治家といふものは、誰でも、非常によく覚えていゝのです。そして、まだ総督府などの出来ない頃から、日本の拓殖局あたりでも、そのアイルランド問題や、ポーランド問題などを随分よく研究して、いろんなものを出版していたのです。で、日本人の頭では、イギリスのアイルランド問題というのが、深く入つてゐるから、それで、どこまでも、このキヤスティングポーターといふことについて、神経がとんががつてゐる。まあ、これが一つの原因ですね。

田中 そうではない。始めから制限選挙の原案です。

姜徳相 そうすると総督府の原案がそのまま認められたのですか。

田中 そうです。

宮田 全然直されていませんか。

田中 全然直されていゝと思う。それは、この前まで自衛隊で陸軍の幕僚長をしていた簡井君にはつきりした事をきいて置くといふと思う。簡井君が原案を作つて中央と交渉した人だから――。

梶村 中央政府と議論されたといふのは、どういふ点ですか。

田中 それは、そういう具体的な案についての問題でなしに前に詳細述べたように、朝鮮にそういう選挙法を施行することは危険だといふ、政治的な反対が圧倒的でした。

姜徳相 先程、先生のお話で、民度が低いから朝鮮には施行出来ないといふ本國政府から言われたといふ風に言われましたが……。

田中 そうではない。日本でも制限選挙からやつたのですから、朝鮮においてもまず制限選挙が適当である。と考へたので、これは内地から言われたからではない。

権章旭 キヤスティングポートを握られるといふ点では先生も心配しましたか。

田中 懸念はあると思ひました。けれども参政権に踏み切つ

姜徳相 当時の帝国議会といふものは例の大政翼賛会で、単なる独裁政権の諮問機関のようなもので、本来の議會政治の機能といふものを失つた状態だつたと思ひますが、そういう場合のキヤスティングポーターといふものは、どういふ具合に握られるのですか。

田中 それは東条のときです。小磯内閣からは一変して、議会の言論を自由にさせることになり、それ迄圧迫されていただけに言論は澎湃として旺盛になつたのです。これは當時の議会の速記録を見ればよく判ります。また、そのキヤスティングポーターの心配ですが、日本は敗けるとは思つてゐませんからね。戦争が済んだからと言つて、あれは実は見せ金だつたと言つて引つ込める訳にいかず、永久に続くものなのです。だから、やはり心配なのです。

それから権君の質問ですが、これは理論的には一言もない質問ですけれども、現実に帝国臣民と言つても、朝鮮の人の中には、帝国の規範から逸脱しようとして、常に動いてゐる勢力があります。だから、朝鮮の独立は許さぬ、といふ方針になつてゐる以上、その國是を脅やかされはしないかといふ懸念は、一応、致し方ないでしょう。又、實際その懸念もあつたのです。

権章旭 そうすると余り民度も低くないといふことになりそうですね……。

田中 民度が高い、低い問題は、これはおしなべての問題です。

宮田 その民度は、徴兵制にも大いに関連して来るものではありませんか。

姜徳相 民度の問題で、徴兵令を布くに当って南総督の演説があるのです。それによると、内鮮一体の実践と民度が、物的にも精神的にも非常に上つたので、徴兵令を布く、ということです。その徴兵令実施の条件として、これは小磯総督のもですが、――朝鮮は非常に国民としての基本的教養において充分ならざるものが多い。特に精神的方面に於いて甚だ遺憾である。だから、これを教育するために義務教育をやらなければならぬ、というのです。

金圭南 先生の今おっしゃったお考えと、総督統治の根本思想である一視同仁とか、同祖同根、内鮮一体というような考え方はどういうふうに結びつくのですか。又、朝鮮にいやいやながら参政権を与えるという日本の国策の本質的なものは……。

田中 国是は国是、私共の考えは考え、その点は、今さきお話しした通りです。参政権を与えたのは、いやいやではない。

金圭南 それでは警戒しながら……。

田中 それは前にも言ったように、日本自体の根底を危うくす

るようなことは考えざるを得ない。朝鮮の人がすべて素直に日本の統治に賛成して一心同体になつていたというのなら別だが、一部には何とかして、日本の編緯を脱しようとする気持が強かつたから……「独立を許さぬ」という国是の下に統治している以上、その方針に背反する思想や、運動は取締るのが当然だし、警戒もしなければならぬ。そういう国是に対して、我々がどう考えていたかは自らの別の問題で、国策というものが、一個人の考えで、簡単に更改出来るものでもなし、又、客観的な状況というものもある。

申国柱 歴代の総督は民度の向上とか、義務教育とかいうことに本当に關心を持っておられたでしょうか。

田中 それは勿論……。

申国柱 それでは伺いますが、朝鮮人の人口は大体三千万人というのに、大学は一つだけ、その京城帝国大学に入れるのも、日本人の三分の二に対して三分の一、――それから、日本では義務教育を四年制は明治十九年から、それが六年制になつたのは明治四十年です。それが朝鮮には義務教育実施というのは、準備が出来ただけで、実際には一面一校しか出来ていなかった。しかも昭和十九年には、在来朝鮮人の学校であつた恵化専門や明倫専門は廃止、延禧普成の両専門学校は、戦争経済に寄与させるため前者は経済専

門、後者は工業専門に名前を変えさせてしまつた。それが本当にやる気なら、先生が政務総監をなさつていた小磯時代に、大学の三つや四つは出来てもよい筈です。義務教育といつてもその準備の程度は、その形さえ全然出来ていない有様です。しかも昭和十八年頃、奨学会というものを作つて、日本に遊学することを統制しはじめた。それまでは渡航制限と言つても内鮮一体だと言つて強引に釜山を出て日本の私立大学などで、勉強することが出来たが、奨学会が出来てからは、これを通じないと行けなくなつてしまつた。又これを通じるには警察の証明が必要だが、この警察官というものは、田舎では総督よりも威張つていたもので、朝鮮の田舎の人達は警察官のことを総督と呼んでいたのです。それだから、我々が証明を貰おうと思つても大変なことで、結局、校長先生に頼むのだが、それでもなかなか呉れないのです。だから名前は奨学会でしたが、実際には朝鮮の生徒を日本に進学させないための施設でした。これは私の体験からの話ですが……。

姜徳相 それに関連して、南総督の――奨学会実施について――という大略次のような談話がある。「従来朝鮮人の日本就学々生を放任していたが、その成績はよくない。或いは不穩思想に感染し、或いは渡航後の生活が不健全で、その身を毒する傾向も少なくなかつた」というようなものです。それで、そういう制限をしようということになつたのではないですか。

田中 この問題は、余程冷静に客観して貰いたい。というのは、日本の義務教育をやつた時とは、その基盤が全く違つてゐる。学校を作つても、日本人が作つたからと言つて忌避して来ない。万才事件の余程後まで、校長先生が入学するように頼みに歩いたという状態です。それに、子供を学校に入ると生活に差障るという程の国民経済の有様では、まず第一に経済的向上が先だということです。子供を学校に出すと一家の生活が出来ない、況してや、学校経営の資金の如き、税金にしろ、何にしろ、捻出出来る筈がない。それだからと言つて、生徒の来ない学校に、それだけの国家資金を廻す訳にもいかない。そういう客観状況をよく検討してみると、あれだけにするとすることは、それは大変な努力である。

だから、朝鮮の教育制度の進む過程というのを見るにはやはり、朝鮮自体の経済力なり、生活力なり、というものを冷静に比較検討して、冷静に議論すべきです。大学がもつと多くてもよかつたというあなたの意見は私も同感である。只、延禧や普成を戦争経済に寄与させたという非難は、これは尤もだが、何しろ本土決戦とか騒いでいたときのこと、これは平常の策ではない。奨学会の問題は、日本内地の学校へ進学する学生の思想善導ということは、恐らくやつたものと考えられる。しかしその当事者が私共と



民族運動に対する認識が全く一致していたかどうかは、私は知らない。私は、奨学会というものがあつて、大いに日本進学の世話をすべきだと考えていた。けれども、そういうことで思想を善導すると言つても、当時の朝鮮人学生というのは、そんな生やさしいものではなかつたのですよ。奨学会の日本人連中など、馬鹿にされて、散々にやられていたことを私は知つてゐる。だから奨学会にしてもあなたのいうような方策に出たかも知れないが、何もその奨学会の受けが悪いと言つて日本の早稲田や明治というような学校が差別をした訳ではない筈です。

中国柱 差別するもしないも、行くことを制限され、奨学会に行くと、ちゃんと学校まで指定されたものなのです。そのため、今迄自由に日本へ進学出来たのが、奨学会が出来たために行きたくても行けなくなつてしまつたのです。私がなぜこういう事を言うかという、こういうことがすべて民度問題や民族問題に関連して来るからです。私は先生とは反対の立場にあるので言うのですが、そういう機関があつて、いわゆる日本のいう不逞鮮人でない忠実なる皇国臣民しか来られないような結果になると、結論的には、何時まで経つても民度は上らない、ということですよ。

田中 奨学会のやつたことがあなたの言う通りであつたら、それは間違つていたと思う。然し私が奨学会に行つて学生諸君

に何でも不満を言つて見るように話したが、今あなたの言つたようなことは言わなかつたです。しかしそれだからと言つて左様なことが全然なかつたと私は断言するのではありません。

宮田 そのことと関連して、出かかつていながらまだ解決していない思想統制の問題が残つています。そこで先生は總督時代とても思想統制ということを重視されていたのです。というのは、着任されて釜山に上陸されると同時に、――今度の戦争は思想の戦争である――という風な最初の言葉を発しておられます。それと、徴兵制の方がまだ余り出ていません。これなど皆、もつと聞きたい筈なのですが――。

姜徳相 徴兵制のことですが、今迄、先生のお話をきいてみると、朝鮮人が征服、被征服関係の異民族であるということとを非常に意識されていたという風にとれますが、それでは、朝鮮人を徴兵で戦場に狩り出した場合、朝鮮人の兵隊が、武器をどちらに向けるか、というようなことを配慮されたというようなことはなかつたのですか。例えば、朝鮮兵を各部隊にバラバラに配属するとか、朝鮮人部隊を作るとか、それから、もう一つそれに付随して、実際に脱走したものが何人いたか、そういうような点をお話し願ひたいのですが……。

田中 それは制度施行後は軍の所管だから、軍司令官が軍参謀長に聞くべきだが、朝鮮人だけの部隊を作つたというようなことは聞いていない。やはり、各部隊に配属していたと思う。然し、今の君の根本的な質問は、参政権ですらびくびくしていたのだから、鉄砲を持たせたらどうなるか、それをなぜ踏み切つたか、矛盾してゐるではないか、ということと思う。しかし、これは私は別の観点から見ている。即ち、参政権の方は、血税を納めさせる以上与えなければならぬと主張した。けれども徴兵制の問題は、やはり、日本の戦力増強の一つとしてやつたものです。

姜徳相 それでは、徴兵制度は日本中央政府の要請に基くものですか、それとも総督府の……。

田中 むろん、中央政府の要請です。だから強引に参政権の主張が出来たわけです。

姜徳相 徴兵制施行の場合、例えば総督が、――大東亜戦争に勝てば、朝鮮人の前途に非常な希望がある――というような論法でやつたのですか。

田中 それは一つの政治ですから、そういう具合に協力すれば――と君の言うような考えを言つたでしょうが、本体は、やはり、戦力が足りなかつたのでしよう……。

宮田 「今度の戦争は思想戦だ」と明言されている先生の論法

と関連して、民度とか、民族思想とか、或いは徴兵制施行というような点を考え合わせて見ますと、朝鮮の思想統制というものは、日本内地よりも厳しくするのが当り前ではないでしょうか。例えば、私は日本人だから皇国臣民という宿命を逃れる訳にはいかないのですけれども朝鮮人は逃れ得るという可能性はある訳です。特に主体的にはそういう条件をもつてゐるし、客観的にはソ連、中国などに近いというような条件を備へてゐる訳です。そういうところからいろいろな思想統制をやる場合、日本よりもむしろ何等かの形で強くするというのが、そういう発想法から行けば当然と思うのです。それがむしろ弱めたというようなことをさつと、食糧統制のときの言葉でおつしやいましたけれども、もし弱めたとしたら、そう言つた何かの反抗が恐いから、という風にもとれるのですけれど……。

田中 それは前に私の言つたことをよく了解されていないからです。私は独立思想や、共産思想の取締りは嚴重にしたが、その他は内地と較べて特に思想統制というようなことをしなかつた、と言つたのです。統制を内地よりゆるやかにしたと言つたのは食糧その他の産業統制のことで、思想のことではありません。

姜徳相 先生が先程申されたように、義務教育と徴兵制とが



表裏の関係だということはその点でよく判りますけれども、民度問題というものを、少なくとも南総督までの間は、朝鮮は民度が低いからという理由で義務教育をしなかったし、同時に常に民度が低いということで、非常な差別を受けた。それが、昭和十七年になると、急に民度が上ったというのは、どういう訳ですか。

田中 それは、特に急激に上ったから徴兵制を布くというのではない。民度が漸進的に上つて来ていたとは言えるでしょう。しかし、私は民度とか何とかではなく、やつぱり時局の関係から、徴兵制を実施するという必要に迫られたという方が本当だと思う。そして徴兵制を布けば義務教育を実施するのが適当であるということである。

姜徳相 そうすると、一視同仁ということが徴兵制に於いて実施されたわけですね。

田中 一視同仁の精神に副わなかったり、又、一視同仁のところまで行かなかつた事実、随分多いですよ。しかし、一視同仁ということは、天皇が朝鮮統治に対して、こういう心がけでやらなければならないということを示されたもので、この大方針自体は非常によいことです。そこで、政治の面に当るものが、その大方針に副うだけのことをしたかというところ、やろうとしても、まだ無理だつたという面もあるし、やれば

のことと思つていろいろと措置を考えたが、何分併合以来のこと、なかなかそういう改革は一朝一夕には出来なかつたのです。

姜徳相 やはり一視同仁に関連してですが、歴代総督がして来たことは経済的な向上と、民度の向上ということに要約出来るのです。そしてこれが明治天皇の詔勅の趣旨であり、又併合の大義名分だつたと思います。そこで、先生は今、太平洋戦争に突入する迄は特別の措置はとつていないと言われましたが、一寸施政摘録を見ただけでも、昭和十三年九月には時局対策委員会が行われ、十六年二月にも経済的な面での大きな対策が立てられている。これは何れも経済対策で、この外にもいろいろとあるが、十七年の二月、治安維持法の第三十四条適用外というのと、国家保安法が内地より先に朝鮮に施行され、又、予防拘禁法なども、やはり朝鮮に先に行われています。そして、この治安維持法や国家保安法は、先生自身がいりいろおつしやつているのです。そこで私の受ける印象は、民度の向上によつて朝鮮を一視同仁にするというよりも、戦争によつて外ではどうにも仕様がなくなつたので朝鮮を大陸兵站基地にして、その物的、人的資源をこき使わなければならない、というようなことで、義務の強要だけが先にきてその不満を抑さえるために、そういつた思想検査、或いは、

やれたことを熱心が足りずにやらなかつた点でもある。それから、心配しなくてもよいことを心配し過ぎたこともある。だから一視同仁というものを政治の道具にされては困るというような考えを朝鮮の人に抱かせないよう、出来るだけ差別しないという立て前が、我々の根本的な考え方であつたのです。大体、内鮮の差別ということは、民度とか能力とかに応じて起きるものですが、一番問題になつていたのは官吏の加俸で、これなどはいろいろ日本人側の言い分はありましたが、小磯総督は着任早々、――内鮮一体などと言いつつ、朝鮮人官吏の能力素質が向上し、又朝鮮の生活環境が内地と殆んど同様になつた今日朝鮮人の官吏の給与を内地人より低くして置くことはよくない。内地人官吏の加俸を撤廃せよ――と言われた。けれども、私はこの総督の意見には反対した。しかし本質は同じもので、私の考えは、――加俸の撤廃はいけない、それよりも朝鮮人の給与を上げたらい。――ということで、官庁ばかりでなく、銀行、会社などにも話合つたが、殖産銀行では、もう既にそれを実行していた。実はこれをするにも、随分日本人側の抵抗があつたのですよ。だから、一視同仁と言いつつながら差別待遇のあつたことは事実です。けれども、上に立つ者としては、これをなくするためには非常に氣も使い又努力もした。従つて、朝鮮の人達の不平不満は当然

国民精神昂揚とか、いろいろの名目において、朝鮮の統治というものを、がんじがらめにした政策をとつたのではな

いか、という風な印象を受けるのですが……。

田中 それは眺め方というものでしょうね。今あなたが経済面だけに力を入れて、精神面のことには閑却していたように言われたが、それは違ふ。宇垣総督も心田の開拓ということを力説せられ、小磯総督は道義昂揚ということを大きく打出して努力しました。それから治安維持法第三十四条と保安法のことを言われましたが、治安維持法は国体の変革と私有財産制度の否認に対して作られた立法で、内地朝鮮の区別はない。保安法は韓国時代からあつたものをそのまま効力を認めていたので、併合後の立法ではありません。国防保安法のことならば、これは国家機密に対する立法で、これも内鮮の区別はありません。

それから思想的に、がんじがらめにしたという点ですが、私は内地との比較において思想的に特別の抑圧措置は採らなかつた、と言つたことは、独立思想に対しては厳しく取締つたが、その他は内地と変りはない、共產主義思想に対しては、内地も厳重な取締りをやつたことは諸君も御承知の通りと思う。又、朝鮮の戦時体制と言つても、特に、日本内地の戦時体制に対比して、朝鮮だけ内地と違つた特別の意図による措置をとらなかつたと言つたわけだ。日本内

地では相当以前、大正末期乃至昭和の初め頃から、総動員計画をしていたのであるが、朝鮮はその計画体制の中に入つたのはずつと後からである。中央の総動員計画が進むにつれて順次朝鮮も体制を整えて行つたが、特に朝鮮を兵站基地としての立て前から、戦時体制をとつたというものでは全くない。その後満州事変などが起きたため朝鮮が大陸兵站基地と言われたが、それは一つの見方に過ぎない。私はやはり、事実の通り、日本の戦時体制の一環として、朝鮮は朝鮮の立地に適した政策を行つた、というのが正しいと思う。

姜徳相 予防拘禁令――

宮田 それと治安維持法第三十四条の適用外というのがありません。

姜・宮田 これは、上告の判決をまたずに、三審制で刑が決定されるものです。

宮田 ですから、内地よりも一層、思想統制は強かつたように思われるのですが……。

田中 法律問題についてはもう少しそれだけ専門的に研究してみたいと思いますが、治安維持法の三十四条というものは、思想統制とは別に関係はない。これは上告審における原審破棄に関するもので、被告保護の規定である。又予防拘禁の制度は治安維持法そのものにあるのでこれも朝鮮だけのものではない。しかし、法律問題は私も全部覚えていないし、又私の

朝鮮に居なかつた時代のこともあるから別途に討議することにしましょう。

金圭南 それに関連がある問題で「朝鮮刑事例戦時特別施行令」というのがあつたと思いますが……この名前は、つきりしないが、大いに関係があると思う。

田中 内容は？ 内地と違う具体的な点……。

金圭南 記憶だから判りません。

田中 これは治安維持法自体とは別で、すべての刑事法令に対する特別令ではないかと思うが、調べて見ないとはつきり言えない。

宮田 それについて纏つた質問が朴さんからあるそうですね……。

朴昌熙 今迄のいろいろなお話を一般的にきいて見て思うのですが、総督府が戦争中どんな政策をしたかということについて、そういう風に人権蹂躪したとか、民族的差別をしたとかいう論議、つまり、見解とか、限界とかで論議されるのは普通のやり方で、今の問題にしても、日本と朝鮮とか、そのように法施行が違つているという面からしても見られるわけですね。しかし、もう一つの見方は、朝鮮人が持つてある反日的な思想、それに対するその勢力への弾圧、この二つの関係は、単なる人権問題とか、差別問題とは違つて、その

ように朝鮮人が長い間の日本の抑圧から、抜け出そうとする動き。それをもう一つの問題の目として見るべきです。そして、そういうものが、さつきの話の参政権の問題にもからみ合つて、いろいろと日本の為政者がそれに対して心配している。ということ、それが解決されなければ、参政権が確立されても、将来は別として、その当時は、恐らく親日者が選出されるであろう。そして、一寸でも、その人物が日本にとつて危ないと思えば出さないとされる。しかも、そういう親日者が出たとしても、何かを心配しなくてはならない。ということ、共産主義をはじめ、いろいろなことがあると思うのだが、一体、そのような心配の種は何か、ということ

です。それが今ここである、民族視野での可能性とか、限界性とかとからみ合つてくるわけですが、先生が政務総監としてこの問題に當つておられたときには、こういう意味での朝鮮民族の各層での反撥を、どの程度、どういう層において、実感として感じておられたか、お話し願いたい――。

権寧旭 具体的な問題とあと、さきになつてしまつて思うところが、――。

宮田 だれど朴さんの問題の場合は、つまり制限選挙で、相当日本にとつて危なくない人を選んでも、しかも心配しなければならなかつたということは……。

田中 それは判つた。後で一諸に答えてもよいが、非常に深刻

な質問だから、ここで答えましょう。

宮田 思想統制の問題と併せてですね。

田中 朴君の質問はそれが統治の根本に関するもので、それこそ重大な問題である。それであるから私は事務官時代から、それに対してどんな考えを持つていたか、また如何に悩んだかを冒頭において詳しく述べた通りである。政務総監として朝鮮各層における統治に対する反撥を、どのように感じたかということであつたが、私は総監時代も、事務官時代も民族問題に対する考えは少しも變つていない。この問題に対する私の冒頭の話は篤と理解して貰いたいと思う。異民族統治の根本問題であるから。

茲で総監時代における思想取締りの態度について一言しておきたいが、それはその頃は戦争が段々苛烈になつて来た時代であるから、内地も朝鮮も戦力増強を中心にして政府も軍部も動いたため、寧ろ民族運動も共産運動も一時停頓の状況であつた。これは満州その他国外においても概して同じ状況であつた。それから、今一つ朴君の質問の中で制限選挙であっても、親日の人ばかりが出て行くとは限らない。朝鮮統治に反抗している人は出られないだろう、という想像は君の仮定であるが、私はそうは思わない。既に行われておつた国会議員にしても、選挙によつて出て来た人は、親日の人ばかりではなかつた。やはり、相当反日的な姿勢をとつていた人が

かなり出て来ていた。官選の人でさえ必ずしも親日家ではなかった。

そこで君の考えは、法規の上ではそうなつていても、現実においては、日本は、そういう排日の人が出て来るのを心配しているのだから、選挙干渉などをやつて出さないようにするのではないか、という心配は少々取越苦勞に過ぎると思う。勿論、動もすればそういうことになりはしないかという懸念は私にもわかる。

朴昌熙 私のいうのは、そういう現象面ではないのです。それは、選出された中には排日者も居たかも知れません。しかしそういうことではなしに、とにかく、朝鮮人を政治に参加させることに對して日本が心配していたということは、日本が民族というものを大分意識していたということです。例えば政治をする場合に、異民族を支配するということが絶対に意識されている場合、その被支配者が、どのように、どういう性質のエネルギーを持つているかということが問題なのです。だから朝鮮民族を裏感としてどのように考えておられるかということなのです。

田中 何度となく同じ根本問題にぶつかる訳だが、それは私が既に繰り返し繰り返し言つている通り、その朝鮮人の反響を如何に扱うかということが異民族統治の眼目であると考へていた。だから経済力が充実に教育が盛んになれば、独立思想

のです。ですから、私自身は結局、学校教育が中心になつて生活して来たわけです。ですから、自分の国がどういう風であつたか、ということは考えられなかつたのです。それで、八・一五解放になつて本能的に喜こんだものでしたが……それ迄は教育の力によつて、戦時中、屑鉄を集めたり、松根油をとつたりしたのですが、とにかく、それはよいことだと思つてやつて居たのでした。そのように、八・一五というものがなくてそのままで行つたとすれば、私自身、どういうようになつて行つたでしょうか。全く判りません。父が天長節に旗を立てない時に私からやかましく言つたり、式に出る時でも遅刻すると恥ずかしく思つたりしたものでした。そういう風な小さい時の教育を受けたことなどを考えると、これが独立につながるものであるという風にはどうしても考えられないのです。

田中 あなたの場合にはね。

宮田 民族的に無教育だつたということ……。

田中 わかる、わかる。

朴昌熙 だからその場合に為政者が、学生をどういう風に教育するならば、そういう風になるに違いないという、一つの確信をもつて教育を進めたのではないか、と思うのです。それが過渡期であつて、いろいろ自信を持たない場合もあつたと

も旺盛になることは当然であるが、それは仕方のないことである。だから結局はどうするかという問題になるのである。この問題についての見解は人々によつて違ふ。進歩的の人と保守的人、又その中でも色々分れると思うが、私は民族運動や社会主義、共産主義運動と若い頃から取り組んでいたために、朝鮮人の反響を最も身近かに感じ、これに對して支配的立場に立つてゐる者としての考えは如何あるべきかということに付いては最初に述べたところをよく頭味して貰いたいと思います。

尚ここでもう一言質問に答えておきたいことは、将来の独立運動に對してどういう階層がその火ぶたを切ることになるだろうということを想像して見ると、やはり、学生青年が真つ先にあげられる。それから、キリスト教、天道教などの教徒で三・一運動に参加したような人達は、それ以来もずっとこの思想を持ち続けていたから、やはり、こういう人達が中心になるだろうと私は考へていた。

朴昌熙 為政者の意識（政策意識）とか、私の民族意識とかいうものについて私の経験を申し上げると、私自身は一九四五年には中学一年でしたがその間、小学校三年頃から朝鮮語が廃止になり、日本語を国語として学ばされました。それから朝鮮の歴史などは勿論学ばないのですが、家へ帰つて家族達と話し合つても、歴史の話は遠慮して話さない

思うのですが――。同時に朝鮮ではそういうような教育を受けたものが当時若い二十代前後の者で、三十代から五十代の人々は、民族の歴史をそのまま背負つていたわけですから。そして為政者は、その階層の人々のいろいろなエネルギーというか、そういうものを感じていたのでないでしょうか。

田中 いや、よく判る。それはね、日本の為政者は、一つの民族が他の民族を支配するというような場合――例えば日本の場合に義務教育をして皇民化教育をするということは、それによつて朝鮮の人が日本臣民化するのだということについては、大きな公算を持つていたのです。それで、その中にあなたと同じように八・一五というものがなければ、そのまま皇民化されて行つた人が、非常に沢山つただろうと思います。ところが、民族の趨勢というものを考へて、そういう人ばかりになつて行くものか、或いは又遂に、民族としての自分自身の自主的な生活を欲するという氣持を持つようになる人が多く出るものか、それは判りません。然し、民度が上り、経済力が出来、その上政治に参与するということになれば、そういう氣持なり、機会なりが非常に多くなることは確かです。私は、それを生物の自己保存乃至自己発展的な本能だと、前に言つたのです。だから、そういうことも、当然計算に入れ、私は考へ



## 朝鮮農地令について

… 小作立法としての意義と制定のいきさつ …

塩田正洪  
(講述)

講述者略歷

大正十三年東京帝國大學  
 法學部卒。直ちに渡鮮、總  
 督府の役人となり、爾來同  
 府、林政、文書、農産、米  
 穀、鉱山各課長。企画部長  
 兼林、農商、鉱工各局長を  
 歴任、終戦に至る。終戦后  
 朝鮮總督府殘務整理事務所  
 長となり、昭和二十三年六  
 月退官。現在、關東築炉工  
 業株式會社々長。

ていたので、只義務教育をして皇民化教育をすれば朝鮮の人達が日本臣民化するというような單純な考えばかりでありません。従つて私は、義務教育を実施することによつて、朝鮮の人達が皇民化するとすれば、それは国是として眞に結構なことだ。又實際朝鮮民族が日本民族と渾然一体に融合して行けるものなら、それも、たしかに一つの行き方に違ひない。然しながら、あれだけの地域と、あれだけの人口をもち、しかも教育が充実に民力が培養されて行く場合に、自分自身の国を持ちたいと言う氣持が旺盛になつて行くのではあるまいか、と思つていた。これは私の生物理論から言つて當然そうなるのである。だから私は、民族問題研究者という立場においてそう考へていたのである。けれども、今も一寸話したように、日本と朝鮮の過去の歴史を考え、地政学的な両国の位置、立場というようなことを考へてみると、一体、朝鮮民族というものは、獨立した方が幸福なのか、それとも、日本と一緒になつてお互いが強化し合つて行つた方が幸福なのか、それも充分考へるべき問題である。そして日本側の考へ方は大体そうであつた。従つて私は官吏として中央當局と種々の政策面で反抗しながらも、朝鮮の民度、經濟の向上を計つて一日も早く、日本人と朝鮮人との政治的、社会的な無差別平等の社會を作することに努力はして來た。

近藤　そうすると、それらの政策が結実したら民族同化は可能

なんでしょうか。

田中 それは難しい。だから私は悩んだのだ。一面から考えれば、ハワイの日本人二世を見てみ給え。太平洋戦争が起これと、彼等は母国である日本にホコを向けて、全くアメリカ市民になり切つて、アメリカ合衆国のために忠誠を尽している。むろん、立場も、状況も日本と朝鮮との関係とは違つてはいるが……。しかしそういう氣持になることも不可能とは言えない。朴君のように天長節に心から旗を立てて呉れるような人が相当出来たかも知れない——しかし私は、民族の治乱興亡の歴史の上から、又生物の本能から考えて見ると何千年という歴史を持つ民族は、やはりその民族の独立の国が持ちたいという思念は消磨出来ないといふのが本当だと考える。

最後に一言する。要するに異民族統治というものは、支配される者の反撥と支配する者の抑圧の連続であるが、その間に在つて支配者が被支配者に対してどのような政治、行政のやり方をしたか、即ち民族を愚にし搾取をこととしたか、又民族の成長発展を計つたか、という問題になると思ふ。而してこれは世界各国のやり方を公平に検討して、比較判断することが肝要であると思ふ。

(完)

(完)

(整稿・文責 近藤 鋤一)





### 講師紹介

塩田先生は総督府に在任中、農務関係が一番長く、農林局の課長を三つ位、その外には、秘書官や、私共と一所に鉱山関係の仕事、それから企画部長、農林局長をされ、最後に、以前殖産局とよんでいた鉱工局の局長をされて終戦まで勤めて来られた総督府の産業行政については非常に経験範囲の広い方です。この前、天理大学で岸学長さんから農地令のお話を伺ったとき、そのことは、是非塩田さんにきいておかれるとよい——というお話がありましたので、御多忙中、御迷惑と存じましたが、お願いしたような次第です。

穂 積 真 六 郎

### 朝鮮農地令について

。。小作立法としての意義と制定のいきさつ。。

塩 田 正 洪 (講述)

すること。3、含音を徹底的に取締ること(東拓の管理人の場合も同様)等。

宇垣総督が立案者に指示された事項。

1、小作期間は五年を下らないこと。2、桑樹、果樹の栽培は長期とすること。3、中間小作に対し措置すること。4、含音を取締ること。5、反対運動に屈しないこと。

五、全鮮地主の反対運動

個々の地主・朝鮮農会。

六、農地令(審議終了後、小作令を農地令と改む)の骨子

1、法令適用の範囲、他の契約形式を用いて脱法せんとするものの排除。(委託耕作の弊) 2、含音その他、小作地の管理者の取締。3、小作期間の法定と更新。普通小作、三年。永年作物、七年。4、小作地転貸の禁止(中間小作の弊と例外の場合)。5、小作権の相続。6、小作料の一部支払及減免。7、府・郡・島小作委員会の任務。

七、小作調停令の改正

A、単独判事による取扱。B、勸解認可。C、職権調停。

八、農地令審議中の内外事情

A、中央政府説得工作。B、宇垣総督の強硬決意。

九、実施後の情勢

1、争議件数の激増

| 昭和七年 | 三〇〇  | 昭和一〇年 | 二五八三四 |
|------|------|-------|-------|
| 昭和八年 | 一九七五 | 昭和十一年 | 二九七五  |
| 昭和九年 | 七五四四 |       |       |

備考

1、昭和八年 小作調停令の施行・小作人側よりの保護要請。2、昭和九年 旱、水害 実施前の地主の対応措置。3、事後、小作人の権利主張。4、争議手段の変化。集団より個々へ・非合法より合法へ。5、結末の変化。妥協より要求貫徹へ。6、地主、小作人間の感情的阻隔。

一〇、農村振興運動

昭和七年準備工作、昭和十年第一期十年計画。

農地令に基づく地主、小作人関係の法律的整頓による両者間の感情的混乱の防止及び生産の一次的減退の防止、等の消極面、両者の融合、生産の向上等の積極面。

一一、結 言

農地令の施行と農村振興運動の農政上の二大政策の背骨を形成する宇垣総督の農民愛。

以 上

## 一、朝鮮の小作立法と私

私は大正十三年に東大を出て朝鮮に渡りました。農林行政に携わったのは、大正十四年から約一年と、昭和二年から九年迄、それから更に、昭和十三年から約二年、その間、農林局長、農商局長をやリ、前後を通じて、在任中一番長い期間は、朝鮮の農業と取り組んで来た訳である。

その間、昭和二年から、昭和九年の「朝鮮農地令」の公布、実施迄の間、主として、農政上最も重要な問題とされてきた小作立法の事に当つてきた。これは、実は私は、学生時代、若干、日本内地の小作制度というものに興味をもつていたので、たまたま總督府に奉職してこの仕事を与えられたことは、私としては、非常に処を得た仕事をさせて貰えるという気持ちで、事に当つてきた。そして朝鮮の小作慣行調査、ひいては小作立法というものに見て、全く、悔いるところのない仕事をして来たと、満足に思つてゐる。

ところで、昭和九年この小作令が、農地令として公布されてから、既に二十六、七年も経つてゐる。しかも、私が小作慣行調査の一翼を担わせて貰つて、小作立法をするように上司の命令を受けたのは丁度昭和三年のことだから、既に三十五年も経過してゐる。そんな訳で、穂積先生から当時の話をするようにとのお話があつたが、何分にも古いことで記憶が薄れ、又、資料も少なく、随分研究しておられる皆様に御満足が行くか、どうかを懸念してゐる次第であるが、話し合つてゐる中に記憶が蘇つて来ることもあると思うので、この目次（別項要旨）の順序で御話ししたいと思つてゐる。殊に数字の点は、資料、文献が少ないので十分に説明が出来ない。それに私は、数字を覚えるという点に甚だ不得手な

ので、皆さんの方で数字が必要ならば、むしろ、皆さんの御研究にまつところが多い。是非一つ、皆さんの手で数字を纏めて頂きたいと思う。

## 二、実質は「朝鮮小作令」

さて本題に入るが、朝鮮の農地令というのは、名は農地令でも、実は、これは、小作令と言つた方が法律の内容とびつたりするものであつて、これは、当時、朝鮮内と、当時の内閣との間に、なかなかの問題を捲き起した立法である。そこで、もともと実質的には小作令であるが、その表面を糊塗するため、「農地令」と呼ぶことにしたものである。糊塗するというと語弊があるかも知れないが、当時は小作令などというとなかなか喧しかつたので、中味はともかく、表面だけでも糊塗しようということ、法制局の審議が終つてから、これを農地令と改めたような訳である。

元来これは、小作関係だけを規定した立法であるから、農地令という名前をつける以上、自作農のことも法律に書かなければ、これは完全ではない。それを殊更に農地令といつたのは、国内や、当時の内閣の気分を緩和するといふか、カモフラージュするつもりであつたのである。だから、実体的には、あく迄、小作令なのである。この法律の内容については当時、昭和九年に約五ヵ月間位に亘り、「法律時報」に約五―六回、その解説を連載した。これは、現在、私の手許にはないが、むろん図書館などにはあると思う。もし皆さんが、この法律の内容について詳しく知りたいということならば、これには詳細に解説されてい

## 三、小作慣行調査と小作立法

私は昭和二年、事務官になつたが、そのとき丁度、小作調査をやることになり、私が、その主任事務官に任用された。そして、それから昭和七年までの約六年間に亘つて、全鮮を足に任せて歩いた。そして又、いろいろな質問事項を印刷して、各面（村）の隅々に至るまで配布し、その回答をとつてこれを集積した。それが朝鮮総督府の「小作慣行調査書」である。それを要約したものには「朝鮮の小作慣行摘要」があるが、大きいものは、「朝鮮の小作慣行」の書名で編纂された上・下二巻の大冊がある。

この調査に基いて小作立法を行つた。しかしながら、朝鮮の小作慣行乃至争議の当時の実情は、ペンペンとして調査を待つ、というような状態ではなく、争議がなかなか多かつた。

昭和二年、渡辺豊彦さんが農務課長で、私はその下で事務官をしていて小作慣行の調査に従事し、次いで中村寅之助殖産局長、小河正儀農務課長のときに「小作立法に着手せよ」という命令を受けたのである。当時私は、まだ、小作慣行に余り精通もしていなかつたが、只その間、大正十四年から、翌十五年に亘つて、小作慣行のことを扱い、その後昭和二年から三年にかけて小作争議の処理にも当つてきていた。そんな関係上、朝鮮の小作慣行中、弊害のあるところが、どこかという、およその見当はついて来た。その頃、日本内地には既に小作法案が出来ていた。それで、それを御手本として立案した。後で述べるが、総督府で、この立法に関する委員会をやつたとき、当時、農林省の田中長茂農務課長に態々来てもらい、私も、直接、その方の指導を受けたりしたものである。田中氏はその後、宮崎県知事をおやりになつた人だが、この人は日本の小作慣行に非常に精通していて、それに基いた小作法案というものが作られていたのである。しかし、これをそのまま焼き直して朝鮮に持つて来るには、適用出来ない点が非常に多いので、朝鮮では、それを主な骨組みにはしたけれども、多分に実情に合うように改めることにし、大体、私自身の手許で「小

作令の試案」を作り上げたのである。その経過をいうと昭和五年頃には、まずまず、これならば上司の要望されている点にも合い、又内地の法制局でも通して呉れるであろうといふところまで漕ぎつけた。そして、そうこうしている間に、丁度、「小作慣行調査」が完成し、ほぼ、われわれが見当をつけていたような諸点が系統的、統計的に出て来た。そこで、それに力を得て、試案の骨子を宇垣總督、今井田政務總監、渡辺（忍）農林局長等、上司に報告する用意をした。当時私は、一事務官に過ぎなかつたが、私は今井田政務總監に呼ばれて「お前の作つたものがあつたら見せてみる。尚その前提として、朝鮮の小作慣行を大綱みに見て、どこに欠陥があるのか、又、今日起つてゐる小作争議というものは、どういふことを基にして起つてゐるのか、そして又、どう改善すればよいのか、それを説明せよ。」といふことであつた。そこで私は、二、三日がかりで詳細に説明したことを憶えている。

そんなこんなで、まあ、これならば大体よからう、といふことになつて、だんだんと機が熟し、昭和九年に法制局の審議を経て遂に同年、朝鮮農地令として実施を見たのである。

#### 四、朝鮮の小作慣行

朝鮮農地令は概略、前述のようないきさつを辿つて出来たのである。

そこで朝鮮の小作慣行であるが、別記要旨に書いてあるように、(1)定租法、(2)執租法、(3)打租法、の三通りがある訳である。

元来、こういう慣行が人為的に出来ることは非常に稀であつて、自然發生的に出来たものである。もともと、朝鮮の歴史を調べれば判るように、いろいろな王朝の興亡があつた。そして、新しい王朝が出来ると、何時でも、一番はじめに手をつけたのが、田制の改革で



ある。そして、それが行き詰つて、又、次の王朝の時にやり変えるといったように、そんなことを繰り返している間に、自然に、このような慣行が生まれて来たものと思われる。

そこで、私共が小作慣行の調査を行ったとき、大体、前述のように、定租、執租、打租の三通りに分けて調べたわけである。

#### ・ 定 租 法 ・

これは日本でも大別して、定額小作料制と不定額小作料制という二通りがある。朝鮮の場合、この要旨（別記）にも書いた通り、定額小作料制に属する定租法というのは、別称、賭只法、定賭法など、地方によつて呼び名は異つてゐるが、等しくこれである。

この定租法というのは、年の豊凶に拘らず、一定の小作料を納めさせる制度で、大体、平年作の四、五割程度というのが普通である。朝鮮では、日本の水田を畜、日本の畑に当るものを田とよんでいるが、この定租法は、畜よりも田に多く行われている。どうして畜よりも田に多く行われているかという点、畜は御承知のように、年の豊凶によつて、非常に収穫量に異動がある。従つて、一定の収穫でもつて小作料が収納される。従つて、非常に一石獲れるから小作料を五斗持つて来い、ということを決めたとしても、朝鮮は豊凶の差が年によつて非常に甚だしいので、凶作の場合には、全部小作料として地主に持つて行かれてしまふ、ということも起り得るのである。田の方は、それに比べて、割合に豊凶差が少ない。旱魃とか何か特別の場合には別であるが畑作物の場合は、概してそんなに異動のあるものではない。従つて、一定の小作料を決めて置いても、敢えて苛酷ではないということになる。

#### ・ 執 租 法 ・ 打 租 法 ・

次に、執租法、打租法の二つは、不定額小作料である。

執租法というのは別称、検見法とか看坪法とかいうようににも呼ばれている。これは作物が実る前に、地主又は看坪人が現場に行つて小作人を立合わせ、大体、今年はこの位の収穫がある、という風に下見をした上、その予想収穫を決め、それに従つて一定率の小作料を決めるやり方である。つまり、立毛のまま収穫量を決めて、小作料の額を決める制度で、その率は、大体五割程度であるが、一概に何割々々というけれども、農地に付随する諸負担が地主と小作人間の、それぞれの地方的慣行とか、又は情誼の濃淡等によつていろいろの差があるのである。例えば、五割の小作料を小作人で負担すれば、肥料代は地主の方で持つとか、公租、公課は地主が負担する代りに、地主の所得にするとか言つたように、その地方、その水田、その畑によつて一率には言えない。が大体、小作料だけの率から言えば、五割程度というのが普通の水準なのである。

で、このようなやり方は、日本にも相当にあるのであつて、これが正當に行われるならば、決して悪い制度とも言い切れない。しかし、これから生まれて来る弊害は非常に著しいもので、過去における朝鮮農村の疲弊は、この弊害に尽きると言つても決して過言ではなく、これは統治上最大の困り物であつた。これについては後で述べよう。

打租法というのは、収穫時、稲束を作り上げるとき、或いは稲束を作つた後とか、又は乾燥調製するとき、収穫量を測定し、予め定められた率によつて、その量を互いに分配する。つまり、今年は一石獲れたから、半分の五斗宛を分け合おう、といった制度である。従つて、この打租法は、大体の率は決つてゐるけれども、その額は、その年々収穫によつて相違すること、言うまでもない。

そんなわけで、朝鮮の小作制度は、これが正當に実施せられれば、そんなに不都合

なものではないように思われる。しかしながら、ここに問題があるのである。次に、その慣行中の欠点の主なものを述べてみよう。

## 五、小作慣行上の主な欠点

### ・土地愛護心の欠除・

欠点の第一に挙げ得ることは、小作料額の定めのあるものが非常に少ないということである。執租法、打租法の場合は小作料の額を決めておる定租法の如く、一定の小作料額が決つていないため、小作人に、土地愛護の念が至つて薄い。これは、執租法の説明で述べたように、地主か、或いは地主の代表者格の看評人が、地主の有利な立場に立てこもつて、小作人の言い分を圧えつけてしまい、自分の都合のいいようにその額を決めてしまう。例えば、小作人が、この分では今年は一石しか穫れていませんと主張しても、地主の方では、いや、そうじゃあない、一石三斗ある、一石四斗は欠けない、と言いつつ、一方的に押しつけて、小作人を泣き寝入りさせてしまうのである。だから結局、五割という率で分けたにしても、一石の場合の五割と、一石四、五斗に査定された場合の五割とでは、差引き非常な差が出て来る。そういう風で、小作人達は、いくら働いても、地主に持つて行かれてしまうのだ、という考えになり、結局、肥料などをやるのも怠るということになり、増産への意欲は愚か、生活の希望さえ失つてゐる惨めな状態であつた。

勿論、こういうことは、何も朝鮮だけのことでなく、日本の場合でも過去にはあり得たことであるが、ともかく、こういう慣行があり、その悪慣行のために、小作人達の土地愛護の念が非常に薄くなつてしまふということも言い得るわけで、当時にお

ける朝鮮農村の実情は正に、その通りであつた。

### ・勤勞意欲の喪失・

小作料はふんだんに持つて行かれるし、自分の方の僅かな取り前から肥料を買つて入れるということとは、とても出来ない。元来、肥料を奨励するということが出来な豚を飼つたり、牛を飼つたりするようにしていたが、その豚や牛を買うことが出来ないとすれば、堆肥を作ることすら出来なくなる。結局、定租法であれば、一石の出来高なら五斗持つて行けばよい。それで、今年は肥料をやつたから一石五斗穫れたということになれば、五斗分だけ丸もうけということになる。ところが、そういう定租法といわれるものが非常に少なく、打租法が非常に多いのだから、土地愛護の念は薄くなり、同時に肥料をやつてもつまらぬ、という訳で、結局、働く意欲さえ失くしてしまふ。従つて、優秀から言えば、無論、定租法の方がよいというわけである。打租とか、検見などというところ、このような弊害が必ず起る。しかし、水利、灌漑の便が十分でないため、収穫量が天候に左右されて一定せず、従つて、水田には定租と異なるものが非常に少ないのである。それ故、水利灌漑の便が非常に行き亘れば、自然定租法が普及して来ると同時に、小作人も労働意欲を持つようになる。朝鮮の農業が非常に遅れてゐたと言ふのも結局、こういう慣行の存在が因ともなり、果ともなつていたためである。

### ・地主の専横・

又、地主が非常な権力を持つてゐるので、小作人が地主の気に入らなければ、取りかえられてしまふ。小作料を取つてしまえば、翌年小作人を取りかえることも地主の勝手なのだから、続けてやらなければ生活の出来ない状況にある小作人の立場にしてみれば、出来るだけ、地主の歡心を買おうとする。結局、地主のいう儘になるのが自

然の人情というもので、従つて、地主の一方的な査定のままに、実際には一石しかなくとも、一石三斗あると言つてその半分の六斗五升というものは、地主が無理矢理に持つて行つてしまふ。つまり、地主の小作料としての取り分が六斗五升というのに対して、小作人の取り分は三斗五升にしかならないという訳で、一応五割と決めて置いても、実納小作料は七割にも八割にもなるというわけである。小作人としては、このような地主の横暴に到底堪えられるものではない。

・ 舍音の弊害 ・

朝鮮には舍音という特殊のものが存在している。これは、一種の中間小作人といった存在で、地主に代つて農地、小作地を監督、管理するものである。これには大舍音、中舍音、小舍音といわれる位、いろいろなのがある。大きく私腹を肥して太つていゝるものあれば、やせ細つていゝる貧しいものの中にもはいる。無論、中には真面目な舍音もないわけではないが、概して、地主の虎の威を被て、小作人を圧迫搾取する者が非常に多い。これについて、この前、岸さん（天理大学々長）からも話があつたようであるが、黄海道に載寧という非常に広い平野があるが、ここに行くと——載寧郡守たらんよりは、載寧平野の舍音となつた方がよい——というような諺がある位である。郡守というものは、もともと非常に横暴で、郡民に対し生殺与奪の権を振つていて、ずい分悪どい着服をしたものとされてゐる。勿論、日本統治下には、そんな郡守がいたとは思えないが、昔の郡守というものは非常に大変なもので、——郡守を三年やれば一生涯食える——と言われている程、農民達を搾取したものらしい。その郡守よりも、舍音の方が、まだ一層よいと言われる位だから、舍音というものがどの位搾取していたかは、およそ想像がつく。先程、この舍音のことを中間小作人と言つたが、そういう形をとつてゐる者もあるが、大体は地主の管理人ということなのである。

・ 公課の小作人転嫁 ・

土地の所有者が地租などの公課を納めるのは当然のことだが、やゝもすると、地主は、小作人に税金を納めさせることがある。であるから、小作料を五割と決めれば、地主には丸々五割というものが入るが、小作人の方は、自分の取り前の五割の中から肥料も買わなければならぬし、税金も納めなければならぬ、ということになる。そうなると、実際、自分達家族の食ひ扶持に当てるものは、実に細々としたものになる。しかもその上、その食ひ扶持さえも売つて、着物も買わねばならぬ。あれもこれも買わねばならぬということになると、容易に手が廻りかねる。そんな訳で、いつまで経つても、食ひや、食ひや、食ひやの貧乏が付き纏つて離れないという、悲惨な境涯に終つてしまふのが、朝鮮における小作農民の現実の姿であり、又小作慣行の著しい弊害であつたのである。

六、小作争議

・ 争議の原因 ・

このような小作慣行の中にあつた朝鮮の農村も、だんだん教育が普及すると共に地主が目覚めて来、同時に、日本の小作争議の刺激を受けて小作人達も、——これじやとてもやつてゆけない——と氣付くようになって、朝鮮にもボツボツ小作争議が起つて来た。それが、大正十二、三年頃のことである。そしてこれは、必然的なことではあるが、朝鮮としては比較的文化の程度の高い全羅南、北道に起つて来た。しかもそれが非常に発展してきて、だんだん集団的な争議が起るようになって来たのである。そして遂に、これは以前、田中会長（中央日韓協会）からお話があつたように思うが、「宮三



面事件」というような大争議まで起つて来る状態に及んだ。即ち、載寧平野における東拓の争議、全羅南道務安郡の島嶼地帯の争議、と言つたように、非常に集团的な、また過激な争議が起つてゐる。しかもこの傾向は、一波万波を生んで、だんだん朝鮮の小作地に浸透して行き、あそこも争議、ここも争議という有様であつた。同時に又、これを指導する専門家が日本内地から来る一方、朝鮮内からもそういう煽動者が、あちらにも、こちらにも現われて来るようになった。

殊に、東拓の社有農地が全鮮に亘つていて、舎音に当る管理人というものがいた。もつとも東拓の場合、支店長はじめ管理人に当るわけであるが、これについて面白い話がある。

小作令を作るとき委員会が出来て、それに東拓の総裁だつたか、理事だつたかの方も来ておられた。私は主として、法令についての質問があればそれに答える、ということにしてゐたところ、——一体、東拓の支店長は舎音に入るか——という質問が出て来た。そこで私はこれに対し、明瞭に「舎音に入る」と答えた。そういう訳で、小作令では、東拓の支店長以下、土地の管理人というものは、すべて舎音と同じ扱いを受けていたわけである。

それというのも、東拓は、到るところに農地を持つていて、あちらでも、こちらでも争議を起こしてゐた。これは、私は格別、東拓の農地の管理方法に誤りがあつたとか、行き過ぎがあつたとかいうようには考えないが、ここには一つの民族運動が浸み込んで来ていたのである。載寧平野に大争議が起つたときに、小作人が最初に言つたことは「黒いカラスが白いサギを追つておる」という言葉であつた。これは、「今にして我々は結束しなければ、黒いカラスに、農地を全部取られてしまふぞ」という意味のことを煽動者が農民達に言つたもので、この言葉にアジられて、小作人達はワッ

と立ち上り、あのような大争議となつたのである。

#### ・争議の傾向乃至方法・

この農地令の出る前の、朝鮮における初期の小作争議というものは、非常に、思想的なものが多かつた。そしてそれを分類すると、

(1)、対日本人地主関係のもの。(2)、階級的な色彩をもつもの。

の二つに分けられた。その(1)は、日本人に対する民族的な感情の反撥によるものである。又、(2)の思想的根源は、——地主が我々農民を使役している。この地主を倒せ、農地の耕作は地主と小作人の共同でやるものではない。自分の土地は自分で耕す、という自作農が、自然かつ当然の姿というものだ——といったものである。そして純然たる小作関係の利害に起因する以外の対朝鮮人地主関係の争議は、こうした思想傾向が強く、又、こういう階級闘争的な思想傾向は、朝鮮人地主の農地には相当食い込んでいた。

小作争議の事の起こりを總体的に見れば、やはり、小作料の多寡の問題が一番多いが、特殊なものとしては小作権の移動に関するものである。

小作権が確立してゐなかつた朝鮮では、地主は氣に入らなければ、一年で小作人を他の小作人に取り変えてしまふ。舎音にうまく取り入つた者は翌年も小作権が貰える——と言つたような不安定なもので、農民が封建的な地主に対する追従関係にあつた過去はともかく、農民達が時代や周囲の動向などに刺激されてだんだん目覚めて来ると、そうした不合理、不安定な生活に盲目的ではあり得ないようになり、争議もだんだん思想的な色彩を帯びるようになって来た。即ち階級闘争的な、又民族的な反感も手伝つてその傾向、方法は非常に過激なものとなつてきたのである。

以上のような訳で、総督府としては、この小作問題の現状に対して、何らかの農政



的措施をとらなければならない時機に到達していたのである。

## 七、農政的措施

以上が総督府が小作立法の制定を必要とした客観的情勢であるが、そこで、総督府がこれに対して、どのような措置をとつて来たか、について述べて見よう。

(1)、小作慣行調査。昭和二・七年に亘り小作慣行調査を立案、実施、完了した。

(2)、慣行改善の行政指導。小作争議の激化は昭和三年頃には、小作慣行調査の完了を、悠長に待つて居られぬ状況になり、応急措置として慣行改善の行政指導を行つた。そしてその指導要綱は十五項目位あつた。

(3)、道・小作官制度の施行。昭和七年頃この制度を実施した。日本内地では既に二、三年前から実施していた。その仕事は主として、小作関係の調整と争議の処置に専念させた。

当時、前述の通り、小作争議が頻発して、農事の改善も十分に出来ない有様であつた。そこで内地にならつて各道に小作専任の役人を置くことになり、総督府の本府では、私はじめ係官がこれに當つていた。

(4)、小作調停令の制定・実施。これは、昭和七・八年の間に制定、実施した。本来ならば、基本法となる小作令がなければ、実は、調停するにもその根拠がなくて困る訳だが、小作立法は、なかなか、そう意のうちに簡単に運ばないので、この調停令というものを先に作つて、局面に対応した次第である。

(5)、府・郡・島小作委員会の設置。これは昭和八年に実施されたもので、これを活動の主体として前記の小作調停令が制定、実施されたのである。

(6)、小作令制定打合会議開催。当時、宇垣総督は「小作令を実施しなければ、到底、農民を小作地に安定させることは出来ない、又ひいては、農事の改良をさせることも出来ない」という考えから強硬な決意の下に、その制定、実施を図つた。そして、取りあえず私が作つていた試案を出して論議を闘わそうということになり、昭和八年、この打合会議が開かれたのである。この会議には朝鮮人の大地主は勿論、主として朝鮮出身の知事、大農場の地主、これは日・鮮人を問わず、等を招集、又、日本内地からも、法制局から入江俊郎（現・最高裁判事）、拓務省からは、現在興羽紡績社長をしている当時の植場事務課長、それに先刻話した日本の小作立法案者田中長茂の三氏に来て貰つた。何分、試案の域を出ないもので、逐条審議というわけにもゆかなかつたが、別記要旨四の6（打合事項要綱）に列挙したような諸点について意見を交換した。

・打合会議の主なる意見・

この打合会議は、たしか三日間位に及んだ。その結果、大体、総督府の原案通りでよからう、ということになったが、但し、出来ることならば、定額小作制を全面的に実施してはどうか、という意見であつた。しかしそれは、灌漑・排水が完全でなければ、甚だ無理な注文で、実施は困難であり、結局、総督府の原案通りということに落着いたわけである。

それから、これはその時の会議に、主として朝鮮の知事から出された意見であるが「小作料額を決めて呉れ」ということであつた。これは今の定額小作料制と同じ性質のものだが、その意見というのは、

「全鮮の各水田の収量を、大体大分けに分けて、甲地は大体何斗、乙地は大体何斗というように決めてはどうか」

というものであつた。しかしこれは、非常な広い水田面積（或いは畑も含む訳だが）に等級をつけなければ出来ないことで、それは殆んど実行困難なことであり、そういうことは挙げて法律の運用に任そうということにして、意見だけに終つた。

又、舎音を徹底的に取締つて呉れ、という意見も非常に強かつた。これは殆んど異口同音で、東拓の総裁が何と言おうと、悪い舎音が農民を毒し、農村を萎靡させる弊害は甚だしいものがあるから、これは徹底的に取締ること、同時に、これと類似の職責をもつ東拓農地の管理人は勿論、東拓の支店長も、舎音同様に取扱うということに異議はなかつた。

以上が大体、小作令制定打合会議の議題とその意見の主なるものであつたと記憶している。

・宇垣総督の指示と熱意・

この小作令制定に關して付け加えて置きたいことは、宇垣総督が非常にこの制定に熱意をもつておられたことである。

前記の打合会議が終わる直前だつたと思うが、私は直接、宇垣総督に招かれた。その時総督は「自分が各地を廻つて見て、何処へ行つても非常に小作慣行が悪いということを聞かされるのだが、自分としては、それに対してこういう意見を持つてゐる」と言つて、その意見を項目書きにしたものを私に渡された。今、それが何項目になつてゐたか、どういふ事が書かれていたかは、はつきりしないが、大体、次のような事が書かれていたように思う。

その(1)は、小作期間は、五年を下つてはいけない、ということ。私は、三年がよいが、五年がよいか、と思案してゐたが、丁度今の安保条約の十年か、七年かと言つてゐるのと同じで………しかし、小作権の場合は、長い方がよいに違ひな

い。しかし、大体三年位が適當ではないかと考えてゐた。

項目の(2)は、桑樹、果樹の栽培は長期とすること。これは尤もな意見で、こういうものを植えた場合、長期に亘つて保護するようにするのが当然で、原案でもそのようになつてゐた。

(3)項は、中間搾取に対して措置する。これは後で述べるように非常に弊害が伴うもので、こういうものは出来るだけ排除することにした。前述の、舎音の徹底的取締りも、その重要なものの一つであり、総督は特にこれを一項目として書かれてゐたと思う。

又、宇垣総督が強く言われたことは、この小作立法に対する反対運動に屈してはならない、ということであつた。そして、これあればこそ、私達は存分な働きが出来たのである。この反対運動は非常に猛烈で、私共のようなチンピラの所へも、随分地主達がやつて来たものである。特にしつこく来たのは熊本利平氏であつた。熊本農場の持主だが、ああいう人に捻じ込まれて、私もだいたいぶん賢くなつた。大地主達の反対が余りしつこいので総督も心配して「ややもするとああいう人間のいうことに無理往生させられるものだが、そういうことは断じていけない」と、よく励まされたことを記憶してゐる。

宇垣総督の項目書きには、外にもまだ書かれていたと思うが、大体憶えているのは以上のような諸点である。

## 八、全鮮地主の反対運動

・日本人地主の反対意見・

前項で述べたように、この小作立法に対しては非常に猛烈な勢いで反対ののろしが上げられたのである。

最も激しかったのは、米産地の全羅南・北道の地主達であつた。ここは、日本人地主が非常に多く、この地帯は、小作関係もなかなかよくやつてはいた。従つて、日本人地主達は「朝鮮人地主と我々とを同様に扱われることは非常に迷惑千万だ」というのである。そしてその言い分というのは、朝鮮人の地主は何をやつてゐるのか。我々は、このように農事施設を立派にやつてゐるではないか。それを朝鮮人地主と同一視されては困る。けれども、もう今日の事態になつてみれば朝鮮人も日本人もない。小作人对地主の問題として、内鮮人を問わず全地主が総反対だ。とざつとこんなものだつた。そして反対の内容は、

主として権利ばかり小作人に与えて、義務のみを地主に課するようなことでは、農事の改良など出来るものではない。あくまで融和感情を両者の間に持つて行つて地主と小作人が共に提携して農事の発達に当るということが立前でなければならぬ。ややもすると、法律を作るといふと権利義務の觀念のみが非常につきり出て来る。そんなことになつては困る。

という意味のものであつた。

それから又、朝鮮農会が全鮮の農業者大会を開き、そこで決議して、農地令制定絶対反対といふことを総督のもとへ出してゐたように思う。

地主達のそんな反対氣勢の中で仕事を進めてゆくのに私共は、随分、苦勞をさせられた。

私共がこの原案を携えて法制局の審議に行くのも大変であつた。京城駅から出発しては身辺が危いから、こつそり竜山駅から発つてといふことで、私と岸（現天理大学）

長さんとが法案を携えて逃げるようにして東京へ出て来たことを覚えてゐる。

そんな風で、私共に別に危害を加えるといふことなどあるう筈がないけれども、それ程に妨害運動は非常に盛んであつた。のみならず、内地の方へも非常に多数の人士が出かけて行つて、反対運動を政府に陳情してゐた。

こんな情況だから、これがもし、普通の弱腰の総督であつたならば、恐らく出来なかつた仕事と思う。これはあとに述べるが、これについて、——やつぱり宇垣総督であつたから出来たのだなあ——と感じた一こまの挿話がある。

## 九、農地令審議中の内外情勢

ここで一寸、説明の順序を変えて、この法令を審議してゐた当時の、これに対する鮮内の状況、及び、中央の態度等について述べて置こう。

・中央の反対氣運と關係官の説得工作・

大体、私共が總督府で制令を作ると、まず、これを法制局に持つて行つて、そこで審議し、それが終ると上奏・裁可を仰ぐ、そこではじめて總督がこれを公布し、朝鮮では法律の形をした制令といふことになるのである。

さて、私共がそれぞれの法案を作つて持つて行くと法制局では、これを突つき廻して、随分細かいことまで微に入り細を穿つて審議する。ところが、この農地令では、そういう審議をするいとまが殆んどなかつた。それというのは、外部の反対運動を鎮めることにかゝり切つてしまつて、私共が逐条審議を行つた時間というものは、本当に僅かなものであつた。そして私達は、反対運動を説得のために總督府から来られる上司の偉い人達に、立法の趣旨だの、法令の内容などを説明するのに忙しかつた。つ



まり、説得にかゝつて貰う前に、――朝鮮の小作慣行はこうこうであります。こういう弊害があつて、斯様な農家の実情であります――と言つた調子に、まず内側の味方から説明してかゝらなければならぬ有様であつた。その時の主席審議室事務官は前、東京都知事の安井さんで、池田清さんが警務局長だつた。この人達は大官だから、朝鮮の小作慣行がどんな風になつてゐるか、そんなことは余り御存知ない。説明工作で忙がしい或る日、私は「一月四日に上京するから、お前は駿河台下の竜名館で待つていろ」という京城からの電報を受け取つた。私は早朝から出かけて待つて待つてゐた。するとそこへ池田警務局長がやつて来られて、「私は今から総督の命令を受けて、政府の要路へ説得に廻るのだが、その法令には、一体どういふことが書いてあるのだ」といふ次第である。そこで私は、朝鮮小作慣行の初歩から、定租がどうの、執租、打租がどうの、農民はこういう風に苦しんでおります、などとやらされるわけである。そのたび毎に私は――政治というものは、こんなものかなあ――と思わされたものである。それでもまず、皆、一応の説得は出来たかの模様であつた。

ところが、その当時の文部大臣は鳩山一郎氏、拓務大臣は永井柳太郎氏だつたが、永井さんの方はさ程でもなかつたが、鳩山さんが当時、反対運動の先頭に立つてゐた。それを今の安井さんや、池田さんが説得に行つたわけである。私は鳩山さんにはお目にかゝらなかつたが、拓務大臣は主管大臣であつたので、会いに行つて説明した。こういうところの説明というものは、大まかにやつておけば、あとは、安井さんや、池田さん達が、適当に政治工作をやられる。だから私は、専ら専門家を納得させることに力を注ぎ、当時、法制局長官だつた黒崎さんにはよく説明した。主査は名を忘れたが後に長官になられた方で、入江参事官が補佐役であつた。この人は前記のように、打合会議のとき朝鮮にも来て頂いていたので、よく了解されてゐた。

・宇垣総督の強硬決意・

大体法令の審議というものは、多少の字句の修正はあつたが、殆んど原案通りで法制局を通るのが普通であつた。

ところが政府の方では、朝鮮の治安に非常に影響があつてはいけなしいし、殊に朝鮮の農業というものは、これから発展の途上にあるのだから、今ここへ、このような過激な法令を出すということは、宇垣総督の政治に非常な汚点を残すようなことになる。と、いふようなことが恐らく鳩山さんあたりの頭にあつたらしい。そこで私は、安井さんの使者になつて宇垣総督に中間報告のため総督府へ歸つた。

私は、その時の宇垣総督の態度が実に立派で、氣に入つたといつては失礼だが、全く氣に入つたことを今でも忘れない。私の報告を聞き終わると宇垣さんは「よろしい鳩山が何と言おうと、永井が何と言おうと、オレはやるんだ。――今すぐ東京へ歸つてそう伝えろ」――そう言い切つてから更に言葉を吐いて、「総督の決意は、こういう如にある、と言え」と前置きしてから――「朝鮮の農民の惨状というものは、鳩山や、永井に判るわけがない。一番判つてゐるのは総督のオレだ。オレが責任を持つと言え、何も文句はないだらう。それから、反対運動が盛んであることのために、中央政府が怖氣ついているのは、何も知らぬからさういふことになるのだ。朝鮮の実情を知つてゐる者ならば、断乎としてこれをやるべきだ、という固い決意を持つてゐる」といふことを、よく安井に伝えろ――と言われた。私は早速東京へ歸つて安井さんに伝えた。そして、「それでは」といふわけで総督の意を汲んで安井さん始め我々も大いにやつたものだが、もつとも、宇垣さんのこの決意は、もう皆には判つてゐた。

ともかく、宇垣総督の、この法令制定に関する決意、それに促される我々の意氣込みというものは、そんな風であつたが、さて愈々、その審議が終つてしまふと、中央



との間に、何か、奥歯に物の挟まったような感じが残った感じだった。というのはこの「小作令」というのが、どうも内地では気に入らない。何だか小作令というところ、小作人にばかり肩をもつようで、地主を刺戟するというわけで、—そんなことから、施行の準備に忙しい或る日、これを「農地令」とする—という電報が入った。その時私は、もう京城に帰つていた。当時は、私もまだ若かつたので、農地令なんて、中味を知らないからそんなことを言うのではないか。目作農地のことも併せて制定されているならともかく、小作人と地主との関係を規制しようという法律なんだから小作令でいいのではないか。それを農地令などと、わけの判らぬものにしてしまふとはけしからん。あくまで、我々には承服出来ぬ。—と意気込んだものだつたが、その時は、もう中央で決めてしまつた後のことで、どうにもならなかつた。ともかく、そんなわけ、この小作令として立案された法律は、朝鮮農地令という名で公布されることになつたのである。

何れにしても、この法令は、宇垣総督のあの決意があつてこそ出来た画期的なものであつた。一切が、革新的機運に向つてゐる今日ならいざ知らず、しかもあの封建的な保守性の強い朝鮮で、あのような法令が実施されたということは、立派なことだつたと思う。それに反して、日本内地では、小作法というものが起草されていながら、遂に陽の目を見ずに終つてしまつた。そして結局、終戦後「農地法」として発布されたのである。もつともこれは名実共に本當の農地法であるが、朝鮮のは、言わば擬装の農地令で、実際にその内容は小作令といふべきものである。

ともあれ、そのようないきさつがあつて、政治的にこれが扱われたということは、見方の相違もあるけれども、非常な反対があつた立法としては、朝鮮総督府の政治中、この位、物議をかもした法律は無かつたと思うのである。

## 一〇、朝鮮農地令の骨子

### ・法令適用の範囲・

それでは、一体この法令には、どういふことが規定されたか、ということになるがまず、この法令の適用の範囲である。

その(1)は、他の契約形式を用いて脱法せんとするものの排除、つまり、委託耕作の弊害を除去することである。

この委託耕作というものは、実はこれは請負なのである。小作人は農業労働を地主に提供する。従つて、収穫は、一応すべて地主に帰属する。即ち、労働力の提供のみが小作人の義務である。所得は何かと言えば、収穫をした後、請負契約によつて報酬が若干与えられる。つまり反対給付をいくら貰う。法律的な形式では一応そういうことになるのであるが、実質的には、これは農奴である。朝鮮の全羅北道方面には、この委託耕作というものが多かつたが、由来、全北には、農奴というものが非常に多い。私は朝鮮語の名は忘れたが、「農軍」というか、佃家と言つたかと思うが、そういう名のついている一種の農業労働者がある。権利も義務も、何もない。只、地主のいう通りに、労働だけを提供すればよい。そういう小作人が非常に多いが、これはあくまで、法律の形式を仮用するものだからいけない、ということにしたのである。つまりそれは、法令の第二条に、「土地ノ耕作ヲ目的トスル請負ソノ他ノ契約ハ、コレヲ賃貸借ト看做ス」と規定してしまつて、どんなことを言おうと賃貸借と看做すのだから—ということにしたのである。但し、これには例外規定を置いた。即ち、この条項には「但シ本令ノ適用ヲ免ルル目的ニ出デザルモノハ

コノ限リニ非ズ」という但書がつけてある。

こういう但書を入れたのは、当時、産業組合というものが朝鮮にあつて、日本内地の青年が、全羅北道の不二農村に入つて来ていて、不二農村産業組合というものを組織し、又、鉄原には、日本農民学校を出た非常に元氣な青年達が相当多く入つて来ていて、これが平康産業組合というものを作り、これらが、一種の協同的に農業をやつていた。そこで、これは一つ保護してやろう、我々としても、これはむしろ、奨励すべきである、ということになつた。そこで、こゝでは、収穫があればすべて組合に帰属するのだが、それは後から分けるのだから、こういうものがうまうゆけば、朝鮮の農業経営にもいい影響と刺激とを与えるだろうという考えから、総督府としては奨励の立場に立つたわけである。

けれども、その後、産業組合自体が余り振わず、組合に対する補助金も相当出ていたと思うが、ともかく、こういう形式のものもあつたので、それは助長するといふことで前記但書きが出来たわけである。

・・舎音の取締り・・

(2)は、舎音の取締りである。これを第三条で、「賃貸人へ舎音ソノ他小作地ノ管理者ヲ置キタルトキハ、朝鮮總督ノ定ムルトコロニヨリ、コレヲ府尹、郡守、島司ニ届出ズベシ」と規定し、これは届出の形式をとりこの規定により、府尹、郡守、島司が、この舎音は適当でないと認める時は、府・郡・島委員会の意見をきいた上、変えさせてしまふ、ということにしたのである。

・・小作期間の法定と更新・・

(3)は、小作期間の法定と更新の規定で、普通小作は三年、永年作物は七年ということにした。

ところで、永小作についてはこれを、民法の規定に一任して差支えないので本令には何等の規定を設けなかつた。しかし、元来、朝鮮にも永小作というものが、決してない訳ではない。鴨緑江の中に威化面という村があつて、これはデルタであるが、そこには永小作がある。又、全羅北道には禾利(カリ)という制度がある。これは全北のみでなく、他にもあつたと思うが、明かに永小作である。こういう制度は、非常に小作人の地位が物権的に保護されているから、民法の規定で充分である、という立て前にした。

永年作物というのは桑樹、果樹、三極、椿麻などを指しているが、これは作物の性質上、短期では困るというので、七年ということにし、何れの場合でも期間の更新は何度でも出来ることにした。

それから賃貸借の規定であるが、これは小作人にとって非常な保護になる訳で、その条文を見れば判るように「小作地ノ賃貸借ハ、ソノ登記ナキモ、小作地ノ引渡シアリタルトキハ、爾後ソノ小作地ニツキ、物權ヲ取得シタルモノニ対シ、ソノ効力ヲ生ズ」とし、これを物権的な取扱いにして、非常に強い権利にしたものである。

・・小作地転賃の禁止・・

(4)は、小作地の転賃禁止で、これは中間小作の弊害を排除するための規定である。朝鮮には中間小作という古い習慣があつて、地主の承諾がなくても、自分が小作人をこしらえて、それに転賃をするという制度がある。そしてこれを「中賂支」と呼んでいる。これが中間小作地として残つて来たのであるが、こういうものは、決して保護すべきものではない。「小作人は、あくまでその小作地を自分で耕作すべきである」という立て前をとると、中間におつて搾取するものは除外しなければならぬ。但しこれには例外規定を設けた。即ち「但シ、傷寒、疾病、ソノ他已ム

ヲ得ザル事由ニヨリ賃貸人又ハソノ同居ノ親族ニシテ、主トシテ耕作ニ従事スル者が耕作ヲナスコト能ハザル場合ニ、一時他人ニ貸スコトハ妨ゲナイ—こういうことは起こり得ることなので、当然これは認めることにした。

・小作権の相続・

(5)は、小作権の相続である。前にも話したように、一年でもつて取り代えられてしまふというようなことが普通ということになると、ましてや、小作権の相続などということは思いもよらない。しかし、土地に対する愛護の精神が旺盛になり、生産意欲が湧き立つてくるということになれば、やはり、相続させた方がよいという見方から、小作地の相続を認めたものである。

・小作料の一部支払・

(6)は、小作料の一部支払い、及び減免の規定である。

小作争議が起こる原因は、大てい、小作料の多寡にある。小作人の方では、「今年はこれだけしか獲れないのだから、いくら言われてもこれ以上は納められない」と言つて地主の希望するような額を持つて行かない。そうすると地主はそれを拒絶して小作権を取り上げてしまふ。小作権を取り上げられてはおしまいだから、小作人の方では、あくまで、持つて来たものはとにかく、受け取つて呉れということにしなければ、後がうるさい。こういう小作人の弱い立場を救うため、小作料の一部の弁済でも、これは認めることにして、地主に、そんな場合、拒絶は許さぬということにした。

・小作委員会の任務・

最後に(7)は、府・郡・島小作委員会の任務の規定である。

これは大体、それぞれ地方の警察署長、郡守、金融組合理事と言つたような第三

者的な人物を委員に入れて、委員会の人的構成の公平を期した。そしてこれが裁判所と一体になつて小作争議の解決に當るわけである。又、小作料問題でいざこざが起れば、これを調停するというようにして、小作委員会というものをフルに動かすようにした。

以上は、朝鮮農地令制定の経緯、精神、運用というようなものの概略で、細かい事を言えばまだいろいろとあるが、大体、こゝに述べたようなことが基になつてこの法律は出来上つたのである。

## 一、実施後の情勢

・争議件数の激増・

さて、実施した結果はどうかというと、端的に言えば、俄然、小作争議が増加したのである。争議件数の激増状況は別記講案に掲記した。

農地令が実施されたために小作争議が激増して来たという現象は、言いかえれば、この法令によつて、小作人の権利というものが、非常に、そして急に強くなつたことを示すものである。

それで、—これではどうにも堪まらぬ—というので、地主の方が、何とか言いがかりをつけて、争議を激発させた。そのため殆んど争議の内容が個人的な地主对小作人の1対1の争議であるし、又、件数が非常に多いのもそういう理由のものである。これを要するに、権利義務というものがはつきりして来たために、地主に対して小作人が、その権利を主張するようになって来た。このことは、大きな意味から、朝鮮

の人権史上、画期的な現象と言つても決して過言ではない。

・ 争議手段の変化 ・

ここで特に注目して置きたいことは、この法令実施直前までの争議は、殆んど思想的、民族的な色彩をもつ集団的な争議であつたのであるが、実施後は、小作人が自分一個の権利というものをタテにして、自らの生活、自らの権利を、自らが護ろうという風に変つて来たのである。

実施前の争議は、相手の地主は一人の場合もあつたであろうが、それに対して、小作人は何百人と結束して、その一人の地主をやつとけるという集団的な争議だから件数は少ない。しかしこれは、解決は非常に面倒である。ところが実施後は殆んど個別的な争議だから、件数は多いが、取扱いは至極簡単なるものである。

そしてこれらのものは、小作調停の申立てをして裁判所で処理して貰うか、或いは小作委員会に持ち込む。そして委員会に持ち込まれる大抵のものは、それは地主さんの言うことが間違つてゐるゝとか、或いは、その小作人の主張は強過ぎるゝと言つたようなことで解決してしまふ性質のものである。しかもこれは、農地令が実施されて、いろいろと農地関係が調整されて来る過程の摩擦なので、爾後は、ずつと漸減して来ているのである。

小作争議激増の傾向は、以上の理由に基づくもので、一時非常に多かつたが、その実状は、いま述べた通りで、これを分析して見れば、一人の地主で何件も扱われているものがあると思う。

・ 地主・小作人間の感情の阻隔 ・

最後に、この法令実施によつて起こる地主・小作人間の感情の阻隔という問題がある。

これは必然的に拭い切れぬ現象として残らざるを得なかつたもので、私が後年、農林局長になつて農産物の増産をせねばならなかつたときに、地方に行つて一番責められたのは、実はこのことであつたのである。地主と小作人の間がしつくり行つていないからと言つても、それは君の作つた法律が原因じゃないか。君がこういう法律を作つておいて、今、自分で困るのは当然なのだと言つて随分、私は地主連から苛められたものだ。けれども、行き過ぎも確かにあつたであらう。が、私自身としては小作人の保護という施政上の大きな仕事を果し、これによつて、小作人が、それぞれ土地に定着することになれば、至難な農事の改良ということも必ず仕遂げることが出来る――という固い信念を持つていた。

しかしながら地主達は、よくこう言つて私に訴えた。『本来ならば、小作人が肥料代がないと言つて来れば貸してもやりたいし、昔は又、貸してやつたものだ。けれども今日のうちに、小作人が横着になり、権利に立て籠るようになっては、なかなか貸す気にはなれない。結局、肥料はお前達が勝手にやれ、ということにならざるを得ない。』と。そして、『もしも、あなたがこういう私達のような地主の立場に立つたらどうする』と借問するのである。結局、こういう地主達の訴えをきいてみると、その殆んどが『小作人の権利が強過ぎる』ということに帰着する。

これに対し私は『どうせ、あなた方が農地を持つていて、小作人はそこで働くのだ。だからその収量が増すことは、結局、地主のあなた方がよくなることだから、肥料代は貸してあげなさい。それはあなた方自身のためなのだから』と説得したものである。そんな訳で、一時的には、確かに感情の阻隔もあつたが、そこで問題は、農村振興運動ということになるのである。



## 一二、農村振興運動

もとより宇垣總督としては、小作立法を実施する農家の問題として、この農村振興運動を起こされたものではないと思う。けれども、大体、農地というものを、農業増産の方へ持つて行くためには、小作人も幸福であり、地主も又、幸福であるという仕組みにするより方法がない。その場合、小作人の定着性に乏しい当時の朝鮮としては、まず、先決問題として、小作人を農地に定着させる方策に出る必要があつた。そして、もしも小作立法でそれが出来たとしたならば、その後は、農業融資の問題である。つまり、小作人が農地に定着しても借金が沢山残つていてどうにもならぬということになれば、次の段階では、これをどうにかしてやらねばならない。という風に總督は考えておられたのではないかと私は思つてゐる。

で、結局、農地令の制定実施と、ほど期を同じうして昭和七年に農村振興運動を全国的に起こそうということになり、昭和十年にはその第一期の十年計画が実施されることになつた。

この農村振興運動については、本題とも外れるので、詳しくは、又別の方に、別の機会に御説明願うことにするが、私は、總督府時代に於ける朝鮮の行政を通して見て、これ位、親切的な行政はなかつたと思う。個々の農家に対して、「お前の家の借金はいくらあるのか」、「この借金はこうして返せ」、「鶏は何羽飼え」と。こういう親切的な行政というものは、私は他にないと思つてゐる。そこまで、とにかくやろうとし、又實際、やることによつて、小作人が幸福になり、地主もそれによつて収益が増加して来るということになれば、これ位、いい事はないではなからうか。宇垣總督はそういう考えから、この農村振興運動には非常な熱を入れられ、朝鮮の官民は挙つて、

この運動に全力を傾注した。

そして、この運動が、実践運動であると同時に精神運動でもあつたことが、一面、農地令の実施によつて、地主と小作人との感情が、とかく阻隔し勝ちなところを防いだものと私には思える。そして、そう考へて来ると、小作立法と、この農村振興運動の間には、何か一連の考へが總督の頭の中にはあつたように思われる。

それにもう一つ、總督は、精神面では、「心田開発」ということを強調して、施政のスローガンに取り入れ、「いくら経済だけがうまく行つても、心の持ち方が駄目であれば仕様がな」と言うので、「心田開発運動」というものを農村振興運動と併行させ、物心両面に亘つて、農民の幸福増進のための運動を展開せられた。

これなども、当時の朝鮮農村の客観情勢から見て、一つの重要な政策だつたと思う。

## 一三、結言

・・・總督府農政の二大政策と宇垣總督の農民愛・・・

このように考へて来ると、私は、宇垣總督という人は、非常に、朝鮮の農民に対して愛情を持つておられたと思う。それは、地方へ出張された時などは、農家の籠をのぞいて見るといふこともされたようであるが、何もそう言つた片々たる事を捉えるのではなくて、上述のような政策を凡ゆる障礙を排除して思い切つてやられたということに、非常に、この農民に対する愛情の只ならぬものがあつたことを感じるのである。そして、この宇垣總督であつたればこそ、この小作立法の制定というような画期的なことが断行出来たものと思ふ。

この法令が、今日そのまま生きてゐるか、どうかは知らない。けれども朝鮮の農民

姜徳相 鳩山さんが強硬に反対したのは、朝鮮に農場を持つ

というものが許さぬと思う。場には立つことは当然だとは思いますが、それは時勢の流れ

塩田 甚だ要を尽さないが、時間の関係でなるべく簡略にし

# 質問

た。お話ししたことで御質問があればどうぞ……。

宮田 法令制定には日本人地主と朝鮮人地主とどちらが強

反対しましたか。

塩田 朝鮮人地主の方が強硬だったかも知りません。しかし

日本人の方はリクツで来るからリクツで返せば訳ない。が、

朝鮮人地主の場合は、一から十までと言うわけではないが、

その小作観が、前述のように制度そのものが自然発生的に

出来ているものであるだけに、リクツでは駄目だ。小作人

というものは、あく迄、地主の所有物であつて、「お前達

はオレの思う通りにやつておればそれでよいではないか」

という考えが非常に強かつたように思う。これはやはり制

度そのものが、長い間の歴史的所産であり、しかも、地主

は社会的にも経済的にも強かつたからこそ尚更その地位が

劣勢になることは堪えられなかつたことだから、反対の立

としては、今の政治が悪い、悪いは別として、かりに、この農地令が生きているとす  
るならば、私は、小作民の権利というものが、相当確保されていると思う。  
又これに加うるに、例の、自作農地制定十年計画というものも、何とかして農民達  
を自立させようとする字垣総督の発案だった。尤もこれは、創定面積が小さく、一戸  
当り五反歩を標準としていたに過ぎないために、必ずしも、自作農として一戸の独立  
を可能にするという形態になつてはいなかつたけれども、それが一つの礎になつて、  
やがては農民達自身の手で、豊かに自立して行くことを総督は信じておられ  
たことと思う。

こうして、一方においては自作農に仕立て上げて行く方策を推進しながら、他方、  
力が足りなくて自作農になれない小作人には、あく迄保護の手を差し伸べる。そして  
そういうことに反感を持つ地主があれば、「お前も一所になつて農村振興運動をやれ、  
そうすればお前も必ず幸福になれるのだ」という風に説得して官民一つになつて励  
み合おうというような行き届いた、そして親身な考え方というものは、やつぱり字垣  
総督の農民愛の結果であらうと私は思うのである。私は、この字垣総督の農民愛を、  
農地令施行と農村振興運動という総督府時代に於ける朝鮮農政上の二大政策の背骨と  
して今でも最も高く評価してよいと思う。

(講述終わり)

ていたからではありませんか。

塩田 それは関係ないでしょう。当時は田中内閣で、鳩山さん

は、やはり一種の実力者だったから……。政治的に見て

行き過ぎではないか、ということだつたと思うが、私は直接

会つていません。まあ、そう深い根拠があつた訳ではなく、

政治家というものは、外部の煽動に非常に踊らされるです

らね。

権軍旭 自作農制定と農地改革との関係は？。

塩田 自作農制定と言つても、金が沢山あつてやつた訳ではな

い。あれは大体、十カ年に二万戸位、面積にして一百万町

歩位で、五反百姓を作るのですから。このための予算をふ

んだんにとつてドンドン作るというのならともかく。そ

れとも、こちらの終戦後の農地改革のようにでも徹底的にや

す。それが十年間に二万戸だから、一年間には二千戸。全  
鮮にばらまけば、一道に何人という位の少ないものです。  
だから、金があつてやる施設ならねえ。むしろ、あんなこ  
とはしないで、農地改革をうんとやつて、その後で、自作  
農を作ればよいのだが、そこまでの荒療治は出来るもので  
はない。何か、大きな改革のときでもなければ……。

権寧旭 自作農創設運動は、ごまかしだった、という説もき  
きましたか。

塩田 あなたの言われるごまかしと言う真意は知りませんよ。  
しかし、真意はともかく農業者をやるのに一戸の面積が五反  
歩位では、その生活が出来るものではない。少くとも自作  
農という以上一町歩はなければ駄目です。それを、五反歩  
作らせてこれが自作農だというのは、ごまかしではないか、  
という意味でしょう。しかしそれは、我々には我々のリク  
ツがあつた訳です。五反歩は一応お前のものだ。大いに  
働いて、あと買い足して行け。一方では、小作権が確立す  
るのだから、後々は働けば買つて行けるではないか。そし  
て、自らの力で、自作農になるように努めなさいと、そ  
ういう説明をしていた訳です。五反歩位のものが自作農か、  
と言つてしまえば、それまでだが……。

姜徳相 農地令が、当時のいろんな法律に比べて非常に進歩

的な法律だったということは、天理の岸先生からも話があ  
つたが、確かに、今、先生のお話で、非常に大胆な立法だつ  
つたと思うのですが、その裏付け、例えば、朝鮮米増殖計画  
とか、土地改良事業とか、この時期に相前後して起つた農村  
振興運動など……そういう一連の政策は、斎藤さんや、  
宇垣さんの時代に、日本が全体的に推し進めて行つた国家的  
な情勢、そういうものの中から、こういう進歩的な立法が  
生まれて来たと言えるべきでしょうか。

塩田 そういう分析をして考えて見たことがない。が、それは  
小作争議というものは大変なものだったのです。実際、いつ  
も勝つのは地主であつた。しかも小作運動に参加した者は、  
もう駄目です。小作権から排除されてしまつて、ますます、  
貧乏になつてしまふのです。そういうことでは農地に安住出  
来ぬ。いくら総督府で奨励して、農事改良だ、肥料資金を貸  
すから、と言つても、そういうような横暴な地主の下にいる  
小作人が、氣持よく働く筈がない。しかも実際に田を耕すの  
は小作人ですよ。その小作人が、もうやる氣がないというの  
では、とても駄目です。だから、為政者としては、この辺で  
思い切つた処置をやらなければならぬ、というのがこの法令  
制定の直接の動機だつたと、私は思っている。それにもう一  
つ、当時、南の方から北の方へ農民を移す方策をとつた――  
これは北の方が耕作反別が広いのですから――。そして一時

は、北鮮開拓地域とかいうようなところを作つて、そこへ  
農民を入れてだんだん開発させようとした。こういう地域  
に、朝鮮の小作五反百姓を移住させてやらせれば幸福にな  
るだろうという構想だつたのですが……。しかしそういう  
ようなことを思い切つてやるにしても、定着していた農地  
を離れるということは容易なことではない。そうすると、  
その土地に置いて、そのまま保護してやるということを考え  
えることが、一番、近道になる。それは、五反百姓の自作  
農で、お前よくなれ、と言つてもなかなか難しいけれども、  
昨日よりもよくなる、ということだけは言えるわけです。  
だから、とにかく、せめて一町歩位の完全自作農を目標に  
してやらなければならぬけれども、それには慣習とか、資  
金とか、いろいろな難関がある。だから何はさておいても、  
小作権だけは保護してやろう、それには、思い切つた処置  
をとらなければならぬ。幸いにして、地主でも、小作人でも  
ない有識者、第三者の人達は、この小作立法に対して大  
いにやれやれと進めて呉れた訳です。

姜徳相 結局、農村振興運動を宇垣さんが決意されて、それ  
を發展させるためには、どうしてもこの小作立法をやらな  
ければならないという情況で……。

穂積 それは産米増殖計画にも関連はありますがね。とにか  
く、百姓というものを、しつかりさしていかなければ、国

というものは駄目なのだ、という宇垣さんの徹底した考えで  
す。それが産米増殖計画やなんかに、いつている点はある  
けれども、これは宇垣さんの独創的な考えなのだ。当時、  
知事会議で平南の知事からこんな質問が出たことがある。――  
総督は農村振興運動ばかりに一生懸命になつていて、同じ朝  
鮮人の要求である教育の方が、そのために少し遅れるのでは  
ないか――というのである。そうすると宇垣さんは立ち上つて  
「食わずして何の教育ぞ」と怒つて言つたものです。教育は  
勿論必要であるが、朝鮮というところは、まず、食わさなけ  
ればいけない。食足つてはじめて教育ということが身にしみ  
るのだ。だから、今第一に生活の安定に着手したばかりであ  
るのに、知事がそういうことをいうのは怪しからぬ。と感丈  
高になつて怒つた。

姜徳相 日本の小作法と比較してどうですか。

宮田 岸(勇一)先生は、日本の小作法と比べて比較にならぬ  
程進歩的だと申されていましたが――。

塩田 否、それはね――。そう進歩的にやろうと言つても、  
事情が許さぬのですからね。恐らくそれは、日本内地に先が  
けて、あのような革新的な法令を施行したという意味でしょ  
う。大体、大きい骨組みというものは、共通しているのです。  
何よりも小作権に強い法律上の保護を与えるには、どうすれ  
ばよいか、ということに終始している。それから小作料とい



うものを、出来るだけ土地の事情に合うようにするとすれば、これは先程申したように、法律でその額を決めると言つても、そういう訳にはいかない。事情に精通した人達でその土地、土地に適した小作料を決めるのが最もよろしいということにしましてね。大体、日本は、定額小作料が多いのですから、それはいいのですが、朝鮮では千遍一律にやるというわけにはいかない。だから、小作委員会というものを重視したので。従つて、肝じん、要のところは言わば、そういう方法で体をかわしているのです。又かわす方法を考えればそれしなかつたのですから――。

榎卓旭 小作委員会は、どういう風に運営したのですか。  
塩田 例えば、地主と小作人との間にいざこざが起こるでしよう。始めのときは、地方法院の中にある合議裁判所に持つて行つたのです。ところが朝鮮の地方法院というのは都会にしかないのです、何里も歩いてやつて来て、すぐやつて呉れ、ということになる。だが、そう簡単に出来るものではない。そこで単独制のところ出来るようにしたので。そして、そこへ行くまでにあらごなしは小作委員会です。それで、どうしても解決出来ない場合には、判事が行つてやるということにして、殆んど、小作委員会で処理出来たと思います。

んどタッチしなかつたのです。

榎卓旭 小作委員会で解決出来ないものは、小作官へ持つて行くというのですが、小作官は任命ですか？

塩田 小作官は官吏です。

榎卓旭 小作委員会で裁定されたもので小作側が有利だつた件数の割合は？

塩田 私は実際はタッチしなかつたので、余り結果ははつきりしない。

榎卓旭 講案要旨には、――妥協から要求貫徹へ――とありますが、と言うことは――。

塩田 それは言える。大体、小作人の悪いときの主張は、殆んど小作人の負け、よくても、一部貫徹という程度であつた。

榎卓旭 宮三事件などは一部貫徹という部類でしょう。

塩田 そうです。あれは官庁のあれが強かつたですからね。法令施行後は、パーセンテージとか、件数とかは知らないけれど、全面的な主張貫徹という解決の件数が、一番多かつたと思います。

宮田 勿論、小作人がですね――。

塩田 そうです。それは、そうなるのが普通です。今迄は、もう抑えられるだけ抑えられていたのが、法律で保護され

榎卓旭 委員会の構成は――。

塩田 それは先程申した通り、郡守、金融組合理事、警察署長など第三者的な人達でやつたのです。

榎卓旭 考えようによつは、その人達は、どうも第三者的ではないと言われるかも知れませんね。

塩田 それはあなた方は、今の日本のことを頭において考えられるからですが、朝鮮では、そういう人達の意見というもので、ある程度、まず、まあまあというように納まつて行くのですよ。それ位の程度です。確か、地主側からも一名小作人側からも一名で、全部で五人位のメンバーだつたと思ふ。

榎卓旭 小作官というのは、どういう風にしていたのですか。

塩田 小作官は、道に一名、別に小作官補が二名位居たのですが、これが、まあ重大な争議のときは地方に出かけて行くのです。又、小作官自身が調停することもあるのです。

榎卓旭 小作官補になるのに何か試験のようなことでもあつたのですか。――

塩田 小作官補というのは、農業の技手とか、農家のですが――試験はどうですか。講習会は、何度もやつたことがある。私は実は、途中から林政課長にやつたので、この法令は、公布になつたとたんに手が切れましたので、そういうことには殆

るようになったのですからね。地主の言い分というものは、多くの場合通らない。それは従前と同じように、「小作料をいくら持つて来い」というような時代錯誤なことを言つてゐるのだから――。五割というのは、実際には七割位になるのですよ。それはもう、一反歩当りの収量が一石になるか、ならぬかのところで、七割も持つて行かれて御覧なさい。一体何を食つて生きて行くのか。それだから草根本皮は、いつ迄も農民達について廻るということになるのです。

李玉乃 舍音取締りというのは大体、どういうことですか。

塩田 府、郡、島の小作委員会にその氏名を届出ると大ていそれが誰であるか判りますから、悪いとなれば、取りかえてしまふのです。

李玉乃 大体朝鮮の地主というものは不在地主が多いとききました。そうすると、舍音の力というものは、相当大きいものとなりますが、そういうことを地主が居ないのに勝手に郡守などが小作委員会に……。

塩田 それは、施行規則があつて、舍音を全部、一応、届出させ、名簿を作させたのです。

榎卓旭 変える場合、地主の承諾を得なくてですか。

塩田 否、地主に取りかえるよう勧告するのです。変更を命令する訳です。命令ですな。だから地主は変えなければなりま



せん。

榎卓旭 そのような取りかえは、どの位の数に上つたでしょうか。

塩田 それは、私は憶えていませんが、相当あつたようです。

榎君の後任はどなたでしたか。

塩田 古庄さんです。農政課長でした。しかし、こういうことを一番よく知つてゐるのは、現在、鹿児島にいる吉田正広という人です。朝鮮の小作慣行の調査要項を作つたのもこの人です。上京された時に来て頂いて話してもらつたといひ。

榎 今、何をされていますか。

塩田 島津藩の農政史を編纂している。もう大部の年で僕よりも上だが、元気です。この人は最後迄総督府の小作官だつたから数字なども見当がつくと思う。

榎卓旭 法令で小作料の率を決めるところが迄行かなかつたとすると、地主達は従来の高率を確保する努力をしたと思いますが、その場合、五割以上ですか？。以下に下つたとは思われますが……。

塩田 大体、五割どまりでしょう。

榎卓旭 確保していたわけですね。

宮田 府、郡、島の小作委員会が、この法令の実施面では、相当大きな働きをするのですね。

塩田 そうです。朝鮮としては、それ以外にやりようがなかつたのです。

宮田 この法令が施される迄は……。

塩田 そんな専任官を、何人も郡の末まで置くという訳にはいきませんからね。それから又、そういうことをやるのが郡守の行政でもあり、同時に、警察署長の治安の維持も出来る訳だし、金融組合も、農民達が安住して呉れば、預金もふえるという訳です。

榎・宮田 なる程……。

榎卓旭 一応まあ、警察署長の場合だと、地主側に立つている場合が多いわけで、小作委員会の構成なども問題になるでしょうね。

塩田 問題になると言つても、どういふことが？

榎卓旭 小作人は一人だけですから――あとは地主と、警察署長と、金融組合理事と、郡守と……そういう構成になりますと、メンバーから言つたら、小作人は言いくいという立場に立つのではありませんか。

塩田 そういふことはありません。大体、この法令の制定、委員会の任務、使命というものは、はじめから、小作人の保護ということで出発している。だからこの立法の精神を

塩田 地主側はね。

榎卓旭 そうすると、小作側は、小作料の安定とか、小作料の支払い、減免というような点での権利とかいうものは法令で保護されたわけですね。けれども、小作料の額はそれ程変わらないままだつたように思える。ところで、昭和十二―三年頃から全面的に小作争議が實際の数、実情から言えば少なくともつた訳ですが、それは殆んど、小作人が安定したからだと言ひ得るでしょうか。

塩田 私は言ひ得ると思う。

榎卓旭 生活が一応、安定したために――。

塩田 小作地に一応、安住出来るようになった。

榎卓旭 一応、三年間では一寸不安があるんじゃないかと思ひんですが……。

塩田 否、それは、正当な理由がなければ、三年間でもつて打切つてはいけない、ということになつてゐるのです。更新させることになつてゐるのです。

榎卓旭 地主が勝手に理由を作る可能性はないか？。

塩田 それはまた、小作委員会というものの働きです。だからこの立法の特色は、すべて小作委員会に持つて行つてやることにあるのです。そうしなければ、実情に合わない。

実際に生かす機関として、こういう構想のものよりも、もつとよい別の構想があれば別だが、当時の朝鮮の実情に最も即したものととして、こういう組織、メンバーを決めたのです。朝鮮の府、郡、島というところから、これ以上の適任者が求め得られるかという、まず、他にない。

榎村 小作人代表はどうして選んだのですか。

塩田 それは恐らく郡守なり、島司がですよ。彼等にはみんな判るんですから。大体、小作人でよい者は、誰と誰だなどということは、彼等が面長にきけば直ぐ判るんです。あれなら人柄もよいし、頭もよし、人望もあると言つたように――。

それから、地主のことは尚更よく判る。都会地は別として地方では第三者的な公平な判断をする人を民間から求めるということはなかなか難しいのです。そのため、常に、何をやるにしても、郡守だ、警察署長だ、というようなところへ行つてしまふのです。大体、朝鮮総督府の行政が、やゝもすれば独善に陥るということは、公平な世論というものが無いわけですね。そういうと又、異論があるかも知れないが、大体、何をやるにしても、一応、メンバーというものは決つてしまふのです。だから、そんな会は、幾つあつたつてつまらないんじゃないか、という議論も出て来る訳です。それでは、代わる者が誰かいるか、と言えば、京城のようなところでもなかなかいないのです。況んや、郡とか島などに至つては、他

にありはしません。他に求める者がいないから、やつぱりそれに帰着せざるを得ないということになる。

穂積 もう少し金融組合というものをあれて見るとね。割合に金融組合の理事というものが、そういうことには適していたと言える。

宮田 この前の大熊先生（元金融組合理事）のお話の時のようにですか。（註）金融組合の理事や職員は、梶村の最も信頼された指導者の立場にあり、又、凡ゆる面の面倒をよく見ていたという話）

塩田 金融組合の人達は、農家の個々に対して非常によく行き届いた世話も出来るのですね。従つて信頼もあつた。そりや、警察署長を加えたということに多少の異論はあるかも知れぬ。何か、きかなければ、こう（筆を振り上げる）やればいい、ということでは困るじやないか、ということも言い得る。けれども一面において、小作争議が郡内に起きたら、一番困るのは警察署長なのだから治安の維持ということから見れば、出来るだけ無難に行くことが一番いいわけです。威圧するだけではおさまらず、性質の問題ではない、もし左様な場合があれば、そこは郡守なり、金融組合の理事なりが、制肘を加えて行けばやれぬことではないし、又地方の小作官が出て行つて指導することも出来る。

穂積 昭和七年から十一年・十二年のかけり位までは、梶村

振興の網で、非常に、そういう点を、間接的に監視していたが、戦争になつて来ると、またそれが、ガタガタになつて来ましてね。

塩田 ええ、そうです。

姜徳相 小作委員会が判定を下した、何か実例のようなものを。塩田 それは……ねえ。

宮田 それを見ると、この法令が、どういう風に行なわれたか、という実情がよく判るわけですね。

塩田 残念ながら資料はないようですね。だから結局、小作争議の件数なり、性格なりによつて判断するより現在のところ方法はないと思う。だが、後で、何か氣をつけて置きましよう。

権寧旭 東拓の支店長などが、変えさせられたことはないでしょうか。

塩田 それはいいでしょう。そういうような取締りをやるというによつて、東拓側でも反省すべき点は、反省したでしょうからね。

穂積 それは、あの、宇垣さんに舎音にされちやつたからね。ちよいと君、自戒するよ。

権寧旭 宮三面について何か具体的なことを。

塩田 大正十四年二度目のときで、その時は私はまだ小僧で、

只使い走りをしただけです。だから何も知りません。田中（武雄・中央日報協会）会長はよく知つておられる筈です。それから渡辺豊彦、神尾武春、この人達は現地に乗り込んで行つたのですから。

梶村 熊本利平という人が反対で、大変やかましかつたという話を、もう少し具体的に。

塩田 私も、まあ、あまり覚えていませんが、大変頭のよい人でした。あの人の言つたことは——そういうものを出す時期ではない——ということを力説していた。改造（雑誌）を一冊位持つて来てね。

姜徳相 「改造」のようなものを読む種類の人ですか。

塩田 うん、そうでしたよ。地主の中ではまあ、頭の進んでいる方でした。その代わり、あの人の言う通り、実際にうまくやつていたか、どうか。まあ概して、いい方でしたでしょう。

姜徳相 岸（天理大学長）先生の話だと、地主代表が釜山まで追つて来て、それを船に乗せるとか、乗せないとか、いうようなことがあつたとか。

塩田 それは我々とは関係なく、我々が上京した後からムシ口旗を立てて来るということだね。それはあつたようです。宮田 この講案に出ている争議件数は、もう少し詳しく調べ

ないと、これだけでは、法令実施のことが誤解され易いと思ひますが。

塩田 それは、私も大分方々当つて見たが詳しい資料は見つからなかつた。

近藤 今度出した小早川さんの「朝鮮農業発達史」にも出ていたと思ひますが。

塩田 私もそれで見た。これがその件数です。昭和十二・三年のときは、それを見るより外にない。

姜徳相 争議の地理的な差というものは、どういう風に分かれていますか。例えば、全南、全北など、小作人の多い所ですね。やつぱり、あの辺が一番多かつたでしょうか。

塩田 これは、やつぱり文化の程度によります。まあ、文化の差ですね。しかし、しまいに江原道にも、黄海道にも起こりました。黄海道はひどいです。あそこには地主も相当いますしね。朝鮮人地主でも、非常に大きいのが載寧平野に蟠居していましたから。金コウリヨウとか言う人の如く。

権寧旭 一応、農政的に言えば、これが実施される迄は旧法によつていた訳ですか。旧韓国時代の。

塩田 ああ、それは韓国時代の慣習だけです。権寧旭 そうしますと、考えようによつては、昭和九年実施という、その前に土地調査事業は出来ていたし、いろいろと

準備をした上でこの法令は出されたものでしょうか。

塩田 それはそうですよ。だから、昭和二年頃には準備に着手したというだけで、その時から実施出来るかという、必ずしも、そういう情勢ではなかった。やつぱり、こういうものは、自然に、周囲の事情でもつてだんだんにその機が熟するのです。それから、幾ら総督がやろうと言ったところで、そのやろうと決意をする迄の間には、いろいろと政治的な考慮もいりましょうね。

穂積 決意しても、それだけのあれが起きましたからね。それは、時間はかかりましたよ。

権寧旭 この小作立法に対して、小作人からの要求は、具体的に何もなかったのですか。

塩田 それはね。只総督が私共にいると、こういう点はどうしたら—というように指示や示唆を与えられた。何しろ、宇垣さんという方は、朝鮮十三道の中で、廻られなかったのは一郡だけですか。それ位、限なく歩かれた。そうして色々の人の意見をきかれた。その中には、小作人から意見をきかれた事もあるでしょう。

権寧旭 要望書という具体的なものが小作人から出されたようなことは—。

塩田 そういうものはなかったですね。

取りや一般の慣行の状況調査など、両方をやった。又、特殊な地域の小作制度というようなものは、別の調査報告書を作った。それは、あの、「小作慣行調査書」には載っていない。例の、威化面の慣行とか、禾利とかいうものは、別に行つて調べたが、そういう資料は、どこへどうなつたか判つていません。

権寧旭 久間さんの調査に、禾利のことがあつたと思います。塩田 あの人は、道の小作官をやつていたから、案外、一道についてのものは詳しいかも知れません。

近藤 小作慣行調査書は渡辺忍先生から頂いた明治四十五年の謄写版刷りのここににあります。小作争議の件数調べなども、総督府で作ったタイプ刷りの原本があります。どの程度に詳しいものだったかは後で調べて見ましょう。

塩田 我々の作つた例の「小作慣行調査」は文章がまずくて非常に冗漫なところが多いのです。だけど、あれで大体の様子はわかります。要点を収録した小さい本も出来ていましたか—。

近藤 それもあります。

宮田 見たことはある。

権寧旭 朝鮮人地主と日本人地主との差別扱いについて、何か具体的なものがありますか。

権寧旭 運動は主として地主の反対運動の方が—。

塩田 小作人はもう、総督府がやつて呉れるなら有り難い。殊に、宇垣さんなら—という信頼感がありましたでしょうし。それよりも、小作人の中でも、秀いでた者が居れば別ですが、元来、まあ一般の人達は、なるようにしかならぬ—という諦観が強いし、それに、知識の程度から見ても、地主の方が上ですから—。

権寧旭 争議としては相当はつきりしたものがあつた訳ですね。この年代に—。

塩田 やはり小作人もだんだん目覚めて来た訳です。丁度その頃は、日本内地はもう大変で—。その運動がすぐ朝鮮に波及して来る。その頃日本で水平運動が起きると、朝鮮では水平運動が起きるというように—。そんな風ですから、随分専門の煽動屋も日本内地からやつて来たのですよ。東拓の争議などにはね—。

宮田 布施辰治など何度も行つてるでしょうね。

権寧旭 具体的な農民の家計や、借金の在高等を調査した資料があるでしょうか。

塩田 それは農村振興を専門に担任した人でないとよくは判らないが、立法関係の基礎調査としては、私共も割合によく廻り歩いた方だ。調査は各農家を訪ねて質問形式にした聞き

塩田 それはありませんね。稀な場合にはあつたかも知れないが、表立つてはありません。

宮田 朝鮮人地主と同様に日本人地主が扱われるのは承服出来ないという日本人地主の反対運動のときの話がありました。その以前は、やはり総督府としては、幾分態度を違わしていたところもあつたのですか。

塩田 全くそういうことはありません。やはり、同じようにやつてゆきましたけれど、しかし、実力の面で、どうしても日本人地主の方が優位に立つことはあつたと思います。それは日本人地主の方は、しっかりと経済的基盤を持つていて、随分、肥料代金なども低利資金を借りて、本当に堅実にやつている者が比較的多いわけです。勿論、日本人地主に限らず、朝鮮人地主にもそういう堅実なものはいましたが、然らざるものも又多かつたわけです。そうなると行政面において差別はつけられないにしても、同じ低利資金を貸すにしても、やつぱり相手が信用できるから、それによつて自然、差がつく—というところは、これは已むを得ないですね。だから、そういう差はあつたでしょうが、これは日本人であるが故にとか、朝鮮人だからとかの差ではなかつたのです。現実によつて双方のやり方の差なのです。それは、中には日本人の地主だつてひどいものもいたのですから—。田舎に行きますとね。

権寧旭 小作料の率を決めないという、一応それぞれによつ



て、七割の場合もあり、八割の場合もあるというような事になりませんでしたか。

塩田 いや、それは認めない。七割、八割をそのままの現状においては認めない。大体五割というのを標準にした。それは五割ということが大体慣習になっておりますから以前は、ただ、それにいろんな付属負担が小作人に付け加えられたり、それから収量の査定に開きがあったりするものだから、実質的の小作料は、うんと高くなつていたわけで、そういうことは認めなかつた。

権率旭 しかし、實際上、そういうひどいものが後にもあつたでしょうね。

塩田 法令施行後には殆んどそんなのはなかつたでしょう。姜徳相 そういう取締りは公文などに現われているというのではなくて、小作委員会が権限によつて、そういう風にするといいのですか。

塩田 そういう風に調停するのです。

姜徳相 公課は……。

塩田 公課というものは大体地税ですからね。土地についている税金というものは、これは地主が払う。それから肥料代金の支払いが小作人が持つとかね。その代わり、糞の分け方をどうするかというように、又、付随的に起こるわけです。だからそれを一律に法律を以つてどうするな

どということとは、出来るものではないのです。その具体的な事例によつて小作委員会が適当に判断して行くより外に仕方がない。こういうことは以前が以前ですから、とても二年や三年で立派な成果を上げたところまではなかなか行き得なかつたと思います。

権率旭 そうすると小作料を取締つても地主がその外の付随費用を小作人に負担させれば……。

塩田 転嫁させたのじやあいけない。

権率旭 結局、同じことになりますね。

塩田 それで転嫁は絶対にさせないことにしていた。

宮田 地税などの公課金は絶対に地主負担という原則でもあつたのですか。

塩田 それは当然の原則です。地税というものは、土地の所有に對する税金なので、地主が払うのに決つてゐる。元來それを転嫁していた事がいけないのです。これは誰が聞いたつてリクツの筋が立つのだから、小作人は黙つていない。従来は、そういう筋の立つことでも騒ぎ立てれば農地を取り上げられるので泣き寝入りしていたわけですが、それが、この法令で小作権が保護されるとなれば、こういう筋の立つことなら小作人の方が強い。しかし、そういう地税、地租というものを小作人に転嫁している局部的な慣習というものは、稀にはあつたのですよ。しかし、それはそれで公平に判断して、それ

じや、地税は小作人が出しましょう。その代わり、あなたも文句を言わないで、小作料の率を低くしなさい、ということにすればよいわけです。ところで、そういうように小作人の言い分が通つて行けば立派なことですがね。しかし農地に運送した色々の負担というものがまだあるんですから、小作料だけの分け方は一応、五割にしても、その付随したものの方如何によつては、或いは五割五分になり、或いは四割になつたなどということはあつたかも知れません。しかし、そういう判例みたいなものは、何もない訳です。だから恐らく、その具体的な問題、事案を取り上げて決めて行くより仕様がなかつたでしょうね。そしてそれが小作委員会の役目だつたわけです。

宮田 そうすると小作委員会の役目というものは、すごく大切なものですね。

近藤 水利組合費なんかは、地主の負担なのでしょうね。あれなんか随分高い率になる場合がありました。例え、早速でその組合費も出せないような場合、こんな時にはどうしたのでしょうか。

塩田 さあ、水利組合と言つたつて、あれは、秋がそのまま水利組合になつてゐるものもありましようからね。ところがね、これは一対一の地主対小作関係というものは稀です。小作人を五人、十人と使つてゐる地主が多いですから。

一対一の場合だけを考えると水利組合費というものは高いじやないかと言うこともいわれましようが、一人でもつて、そんな一町歩位の小地主というのはあまり居りません。大抵持つてゐる地主は五町歩、十町歩といった大地主です。だから、そういう点から考えれば、一反歩当りの組合費がいくらになると言つてみたところで、全体の経済から見れば、そんなに過重な負担にはならない。又、水利組合の設立によつて反収が増加するから、その増収の割合と組合負担とが比較されて組合費は決定されたでしょうし、又、万一そんなに過重な負担になるような水利組合は総督府が認可しませんから。

近藤 先程、自作農地設定の話が出ましたが、五反百姓では、水利組合費を負担することなど相当苦しかつたのではないでしょう。

塩田 苦しいかも知りません。しかし、前にも話したように、やつて行けるというふうな見込みのある者しかさせませんからね。それは、自作農地設定と言つても、先程権さんがおつしやつたように、インチキだと言えはさうでしょうが、實際五反歩では、総督府も確信はなかつたのです。だから、少なくとも、一町歩位持たせれば、自作農だと言ふことは言えますが、五反歩では、自作農というのも面映ゆいので、自作農の下に「地」の字が入つてゐるでしょう。これは今ちよつ



と思出したのですが、あのとき問題になったのは、自作農家を作るのではなくて、自作農地を作るのだ、というのでこの「地」の字を入れたのです。

宮田 そうだったらリクツには合つてゐるではないですか。

樺澤旭 自作農創設というものはどんなに振がつたといわれていますが、実際には大したことではありませんね。

塩田 それは金に制約されていたからです。確か一戸当り六百円位のものでしよう。それで、地主から土地を買収してやるのですからね。自然、五反歩位になつてしまふ。それで自作農を作つたのだと言われては困るから、自作農地だということにした訳です。

宮田 実際どの位出来たのですか。

塩田 私の見たものでは相当の成績以上に上つてゐると書いてありました。

宮田 そうすると十年間に二万戸という計画を上廻つた訳ですか。

塩田 計画通り十数年やりましたかな。

宮田 途中で計画が變つて来たりしていますからね。南総管の時から――。

樺澤旭 結局問題はね。五反歩と言へば、外に小作を兼ねてゐる者もあるわけだが――。問題は小作農が自作地を買収することが出来たのか、それとも、自作地を失つて再び小

作農になる者の方が多かつたか、ということですね。僅かに持つてゐる自作地を売らなければならなかつた者もいたという可能性も強いから――。

宮田 自作というわけですね、五反歩は自作地で、あとの位が小作なのか――。

塩田 そうそう、後、大体五反歩位は小作するわけです。まあ二反歩とか、三反歩小作というのもあるでしょう。だから今迄七反歩小作してゐた者が、五反歩だけ奨励金を貰つて買上げたとすれば、二反歩が小作地というわけです。それと、こんなのもあつたかも知れませんが。統計には出ていないから判りませんが、今迄自作小作だつたものが、残りの二反歩だけ買上げて、完全な自作農になつたというものもあるかも知れない。

宮田 でも、もともと朝鮮には自作は少ないのではないですか。

塩田 少ないです。だんだん自作農から小作農へ転落するのが多かつたのですから……。

宮田 で、その中に問題になるのは、自作小作になつた人が、後ほとんど自作農地をふやして完全地主になる傾向にあつたか、それ共、没落して元の小作人になつて行く傾向だつたのか――。

塩田 大体買収して自作農になり、更に転落して行く数字は非常に少なかつたと思います。

宮田 だんだん自作農として定着して行くのですか。

近藤 金己大君がこの前、沢山のグラフを作つて来て説明してくれたのですが、それによると小作農が段々殖えてゐるのですね。この傾向はどう見るべきでしょう。

塩田 僕も表を沢山持つてゐたのですがね。その統計を見ると、ずつと自作農が落ちて来るのです。だから自作農地創定というのは、ある意味では、それを食い止めるための政策でもあつたのです。

近藤 穂積先生のその時の御説明では、従来は朝鮮の産業が農業だけだつたのが、宇垣総督の頃になると、産金だのその他の地下資源だの、鉱業関係が非常に盛んになつて、農村の勞力が、その方に相当振り向けられて行つた、というように伺いましたが、事実あの頃は、農村の景氣も非常によかつたと思ひますが……。

塩田 それはそうです。小作農の増加ということは人口が倍近くにふえてゐるということも脱み合せて考えるべきでしょうし、一般経済の客觀状況というものとも関連させて見なければならぬ。

樺澤旭 自作農地というものは、勸業資金を持つて来て、土地を安く買わせるというのですか、それとも小作人の実力あるものに援助して貸付金で買寄せたのですか。

宮田 ある程度、模範自作農家を作ることなのでしよう――。

塩田 それは、あなた(宮田)のいう通り「通達藤」が出た答です。そして低利資金を貸して自作農家を創るための援助をしようというわけです。

穂積 何分、金がないんだから……。

塩田 金がなく、あれもこれもやろうというのですから結局自作農家がなくて、自作農地を創るというようなことになつた訳で、ごまかしたと言われればそれ迄だがウソ偽りのないところ、その局に當つた者としては、大変な苦勞をしたものです。

近藤 大分時間も超過したようですから、それではこの辺で終わらせて頂きたいと思ひますが、実は、この研究会の傾向を見ていますと、学生諸君が最も熱心に取り組んでゐるのは、土地調査事業関係と農政関係のようです。事実この二つは、朝鮮統治の功罪を見きわめるための大きなポイントとも考えられますので、今後いろいろと御指導願ひたいと思ひます。

(整稿・文責 近藤 銀一)

私の感じたこと (三)

朝鮮民族の独立運動の華やかだった大正中期の諺文新聞を見てみると、よく、「悪意の善政」という言葉が使われている。そしてこれは、日本の為政者達がよくいう、「善意の悪政」という言葉の対語である。異民族統治に於ける治者、被治者の背反する主観、つまり二律背反性というものを、これ程はつきりと表現している言葉を私は他に知らない。

日本治下における朝鮮人インテリは、日本の朝鮮統治を、「日本人の強烈なる国権意識が、朝鮮民族のすべてを圧倒し、日本自体の発展のためにする権力支配の政治である」というふうな見方をしていたと私は思っている。従つて、現象面における政治の善し悪しというものよりも、その国権をカサにきた日本人の独善意識そのものが迷惑であり、それは彼等にとつて屈辱と憎悪の根源ですらあつた。要するに、日本の行なう政治が善かろうと、悪かろうと、それは日本自体のためのもので、圧倒し去られた彼等は、これを傍觀者の位置で、白眼視させられていたのに過ぎない。そして、この対日感情は、解放とともに、朝鮮全民衆の対日観として固定化し、政治も学問も、この対日観を基調として行なわれているのである。即ち、朝鮮人学究の研究傾向は、この基本觀念を裏証的に裏付けること、言いかえるならば、日本権力によつて書かれた歴史の歪曲を、純粹なる民族のものに正そうとしているのである。そして勿論、この傾向は、日本に於ける歴史学の発生の向上に同調するものであつて、日本人学究と雖も、同様の傾向にあることは今更いうまでもない。

(朝鮮統治關係重要文獻)

總督統治終末期の実態 (三)

原本Ⅰ 第八十五回帝國議會説明資料・財務局長用  
・ 第四、鉄鋼石。石炭、木材其の他生産力増強の状況：Ⅰ複製

目次

|                    |     |                                 |     |
|--------------------|-----|---------------------------------|-----|
| 一、鉄鋼石生産力増強の状況      | 305 | 一三、塩の需給状況                       | 323 |
| 二、小型熔鉱炉鉄生産状況       | 308 | 一四、果汁生産状況                       | 323 |
| 三、最近の石炭生産状況        | 309 | 一五、電源開発現況及将来につき                 | 323 |
| 四、朝鮮の石炭の需給状況       | 311 | 一六、電力需給の現況及将来につき                | 324 |
| 五、最近に於ける石油の需給状況    | 313 | 一七、軽金属工業と電力との関係                 | 325 |
| 六、木材生産力増強の状況       | 313 | 一八、電気料金につき                      | 326 |
| 七、本年度木材生産の見透       | 317 | 一九、朝鮮電業及鴨緑江水電の現況                | 326 |
| 八、化学肥料の生産状況及之が需給関係 | 318 | 二〇、非常時電力対策                      | 329 |
| 九、セメント製造業の現況及将来の方針 | 320 | 二一、国有送電施設                       | 330 |
| 一〇、磷状黒鉛生産状況        | 320 | 二二、朝鮮電業、鴨緑江水力に対する<br>軍需生産責任制の実施 | 330 |
| 一一、螢石生産状況          | 321 | 二三、配電事業の統制                      | 332 |
| 一二、塩の生産状況          | 322 |                                 |     |

總督統治終末期の実態 (三)

第四 鉄鉱石、石炭、木材其の他生産力増強の状況

一、鉄鉱石生産力増強の状況

戦局の進展に伴ひ鮮産鉄鉱石に対する期待は、時時急激に増大するに至り昭和十九年度に於ける我國鉄鉱需給は従来の南方鉄石に代り鮮産鉄鉱石約一八〇萬屯を内地より期待せらるることとなり更に満洲国より五七萬屯の輸出要望もありて此等の急速に増大せる需要に  
305

應ずる為本年度は昭和十八年度に於ける生産実績二、三六萬余屯に対し二倍を超ゆる五五〇萬屯の生産目標（五〇〇萬屯生産確保）を樹立し右目標に向ひ凡ゆる手段を講じ全力を挙げ増産を進行中なり。

尚本年度第一、四半期に於ける鉄鉱生産実績は生産責任数量を確保し得たのであるが、第二、四半期以降に付ては目下の処七、八の両月は意外の豪雨に阻まれ露天堀に依る生産は、何れも相当の減産を来し居るも軍官民一致協力目標の達成に鋭意努力中なり。

鉦山別昭和十八年度生産実績及昭和十九年度生産責任数量並に生産目標数量

単位 屯

| 鉦山別 | 昭和十八年度<br>生産実績 | 昭和十九年度<br>生産責任数量 | 同上前年度<br>実績ニ対スル比 | 昭和十九年度<br>生産目標数量 | 同上前年度<br>実績ニ対スル比 | 備考 |
|-----|----------------|------------------|------------------|------------------|------------------|----|
| 鉦山  | 八六八四〇三         | 一五〇〇〇〇〇          | 一七三%             | 一六〇〇〇〇〇          | 二〇七%             |    |
| 茂山  | 二五〇三三八         | 三三〇〇〇〇           | 一五〇              | 三六〇〇〇〇           | 一五二              |    |
| 利原  | 二五〇三三八         | 三三〇〇〇〇           | 一五〇              | 三六〇〇〇〇           | 一五二              |    |
| 端川  | 二五〇三三八         | 三三〇〇〇〇           | 一五〇              | 三六〇〇〇〇           | 一五二              |    |
| 三和  | 二五〇三三八         | 三三〇〇〇〇           | 一五〇              | 三六〇〇〇〇           | 一五二              |    |
| 下聖  | 二五〇三三八         | 三三〇〇〇〇           | 一五〇              | 三六〇〇〇〇           | 一五二              |    |
| 北青  | 二五〇三三八         | 三三〇〇〇〇           | 一五〇              | 三六〇〇〇〇           | 一五二              |    |
| 兼二浦 | 二五〇三三八         | 三三〇〇〇〇           | 一五〇              | 三六〇〇〇〇           | 一五二              |    |
| 股栗  | 二五〇三三八         | 三三〇〇〇〇           | 一五〇              | 三六〇〇〇〇           | 一五二              |    |
| 其ノ他 | 二五〇三三八         | 三三〇〇〇〇           | 一五〇              | 三六〇〇〇〇           | 一五二              |    |
| 計   | 二五〇三三八         | 三三〇〇〇〇           | 一五〇              | 三六〇〇〇〇           | 一五二              |    |

昭和十九年度第一、四半期に於ける鉦山別生産責任数量、生産目標数量及生産実績

単位 屯

| 鉦山別 | 昭和十八年度<br>第一、四半期実績 | 生産責任数量 | 生産目標数量 | 生産実績   | 同上前年度<br>対責任対目標<br>対前年度 | 備考 |
|-----|--------------------|--------|--------|--------|-------------------------|----|
| 鉦山  | 二五〇三三八             | 二五〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 | 二五〇三三八 | 一〇〇%                    |    |
| 茂山  | 二五〇三三八             | 二五〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 | 二五〇三三八 | 一〇〇%                    |    |
| 利原  | 二五〇三三八             | 二五〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 | 二五〇三三八 | 一〇〇%                    |    |
| 端川  | 二五〇三三八             | 二五〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 | 二五〇三三八 | 一〇〇%                    |    |
| 三和  | 二五〇三三八             | 二五〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 | 二五〇三三八 | 一〇〇%                    |    |
| 下聖  | 二五〇三三八             | 二五〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 | 二五〇三三八 | 一〇〇%                    |    |
| 北青  | 二五〇三三八             | 二五〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 | 二五〇三三八 | 一〇〇%                    |    |
| 兼二浦 | 二五〇三三八             | 二五〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 | 二五〇三三八 | 一〇〇%                    |    |
| 股栗  | 二五〇三三八             | 二五〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 | 二五〇三三八 | 一〇〇%                    |    |
| 其ノ他 | 二五〇三三八             | 二五〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 | 二五〇三三八 | 一〇〇%                    |    |
| 計   | 二五〇三三八             | 二五〇〇〇〇 | 二五〇〇〇〇 | 二五〇三三八 | 一〇〇%                    |    |



二、小型熔鋳炉鉄鉄生産状況

戦局の深刻下に伴ひ小型熔鋳炉に依る現地製鉄に対する期待益々倍加せらるるに至り之が期待に応ずるが為め十九年度に於ては二四萬屯の生産目標を樹立全力を集中之が達成に努力中なるが第一、四半期鉄鉄生産実績は対内地期待コークスの供給不円滑並に過半数に達する未選粉の供給等により物動計画量は之を突破することを得たるも責任出鉄量は遺憾ながら之を達成するを得ざりしなり

されば第二、四半期以降に於ては特に対内地期待コークスの既定計画量の確保を絶対条件とする処なるが七月以降に於ける入荷実績は第一、四半期に比し通減を示し操業休止の止むなきに至れるものあり目下の処相当の減産を豫想せらるる状況にあるが全力を挙げて之が生産目標達成に努力中なり

昭和十九年度第一、四半期生産拡充実施計畫及実績額調

| 項目    | 責任数量   | 物動数量   | 実績     | 責任数量ニ対スル比率 | 物動計画ニ対スル比率 |
|-------|--------|--------|--------|------------|------------|
| 日鉄兼二浦 | 一〇、四〇〇 | 一二、二〇〇 | 一五、八三〇 | 一四六        | 一二九        |
| 日鉄清津  | 八、一〇〇  | 三、四〇〇  | 六、五二九  | 八〇         | 一九二        |
| 朝鮮製鉄  | 七、七〇〇  | 三、一〇〇  | 二、三二〇  | 三〇         | 七五         |
| 是川製鉄  | 二、四〇〇  | 一、七〇〇  | 一、五二二  | 六三         | 八九         |
| 日無海州  | 一、八〇〇  | 一、三〇〇  | 九二一    | 五一         | 七一         |
| 日無鎮南浦 | 三、〇〇〇  | 三、〇〇〇  | 三二七    | 一九         | 一〇九        |
| 日本鋼管  | 四、〇〇〇  | 六、〇〇〇  | 一、四九二  | 三七         | 二四九        |
| 鐘工平壤  | 四、五〇〇  | 二、〇〇〇  | 一、五二七  | 三三         | 七六         |
| 利原製鉄  | 二、七〇〇  | 四、〇〇〇  | 八二〇    | 二九         | 二〇二        |
| 計     | 四四、六〇〇 | 二五、〇〇〇 | 三二、二八八 | 七〇         | 一二五        |

小型熔鋳炉用コークス入荷状況

| 期別  | 銘柄     | 割当     | 入荷     | 入荷率 | 備考           |
|-----|--------|--------|--------|-----|--------------|
| 四一六 | 内地コークス | 二五、〇〇〇 | 一六、四三〇 | 六四% |              |
| 七一九 |        | 二五、〇〇〇 | 九、二〇〇  |     | 入荷量ハ八月二十三日現在 |

三、最近の石炭生産状況如何

答 昭和十八年度の生産実績は六五八萬餘屯で計画に対しては九三%でありました。不振の原因は同年八月から九月に至る水害による一部炭坑に於きまする坑道の浸水等の事故に由るものでありましたが下期に於きましては漸次好転し上期に比較致しますと約一〇%の増産を遂げたのであります。昭和十九年度に於きましては七三〇萬屯を目標として生産責任制を実施して増産に努めました結果第一、四半期（自十九年四月）に於きましては成績甚だ良好でありまして計画に対して一〇四%の実績を納め、前年同期に比較致しますと一二七%に達した次第であります。

七月に入りまして豪雨水害等に因り前月に比し相当の減産を来し計画に対し九三%の成績に過ぎませんが前年の同期に比較致しますれば尚一六%の増産を示しておるのであります。今後更に増産に拍車を掛くる所存です。

(参考) 附表

一、昭和十八年度石炭生産実績

(単位 屯)

| 炭種  | 計         | 実         | 対計画率 |
|-----|-----------|-----------|------|
| 有煙炭 | 二、九〇〇、〇〇〇 | 二、四三〇、四九二 | 八四%  |
| 無煙炭 | 四二〇、〇〇〇   | 四一五、八〇一   | 九九%  |
| 計   | 七、一〇〇、〇〇〇 | 六、五八九、〇九三 | 九三%  |

二、昭和十九年度第一、四半期生産実績

(単位 屯)

| 炭種  | 計         | 実         | 対計画率 | 前年同期実績    | 対前年同期率 |
|-----|-----------|-----------|------|-----------|--------|
| 有煙炭 | 六四九、〇〇〇   | 六七三、八五三   | 一〇四% | 五六二、二六八   | 一二〇%   |
| 無煙炭 | 一、一三七、二〇〇 | 一、一八四、〇一一 | 一〇四% | 九一八、七〇一   | 一二九%   |
| 計   | 一、七八六、二〇〇 | 一、八五七、八六四 | 一〇四% | 一、四八〇、九六九 | 一二七%   |

四、朝鮮の石炭の需給状況如何

答 御承知のように朝鮮に産するものは有煙炭としては褐炭のみであり他面無煙炭を豊富に産するのであります。が他地域の様に優良瀝青炭は少しも産出しませぬので製鉄用原料炭、鉄道機関車用優良炭或は耐火煉瓦、セメント焼成用等に要する特殊瀝青炭は朝鮮以外即ち内地、満洲、北支等に依存せねばなりません。故に總督府と致しましては極力無煙炭を使用することを奨励致しまして従来使用不便の為使用されませぬ方面に対しましては研究の結果可成り使用することが出来る様になり外来炭に依存するものは現在の技術及資材を以ては真に已むを得ざるもののみであります。

斯くては十九年度に於きます之等石炭の使用割合は一応鮮産有煙炭二二%鮮産無煙炭四七%外来炭三一%となつて居ります。

而して之が実績を見ますに、第一、四半期に於きましては幸ひ朝鮮産の石炭は有、無煙炭共一〇四%の好成績を示し又外来炭も内地満洲炭等は大体豫期に近く入荷を見ましたが北支炭の入荷が豫期に反し相当減少せる為、兼二浦製鉄所鉄道等屢々操業危殆に類したることもありまして辛じて今日迄運転を継続致して参りましたが今後に於きましては内地炭、樺太炭の移入は内地炭況及輸送の關係にて殆んど杜絶に近く大削減を受け又北支炭の輸入も好転の兆がありませんので今後は鮮内石炭の需給は甚しく窮屈となり外来炭不足の為延いては朝鮮産有煙炭使用工場にも其の影響を及ぼすべく需給真に容易ならぬものと豫想せらるるのであります。が、總督府としては戦力増強に支障を来さざる様關係方面と密接に連絡しつつ適當の措置を講じつつあるのであります。

一、昭和十九年度第一、四半期石炭輸入計画対実績

(単位千屯)

| 区分  | 計   |    | 実   | 計   | 差  | 引   | 増    | 減    | 計画ニ対スル実績比 |
|-----|-----|----|-----|-----|----|-----|------|------|-----------|
|     | 有煙  | 無煙 |     |     |    |     |      |      |           |
| 移入額 | 三三二 | 一  | 三三二 | 三四四 | 一二 | 一   | 一二   | 一〇三% |           |
| 輸入額 | 五八〇 | 一  | 五八〇 | 四六九 | 一  | 四六九 | ×一一一 | 一一一% |           |

二、昭和十九年度第二、四半期石炭輸入計画対実績予想

(単位千屯)

| 区分  | 計   |    | 実   | 計   | 差   | 引    | 増   | 減    | 計画ニ対スル実績比 |
|-----|-----|----|-----|-----|-----|------|-----|------|-----------|
|     | 有煙  | 無煙 |     |     |     |      |     |      |           |
| 移入額 | 四五七 | 一  | 四五七 | 一一六 | 一一六 | ×三四一 | 一   | ×三四一 | 二五%       |
| 輸入額 | 五六六 | 一  | 五六六 | 四七二 | 一   | 四七二  | ×九四 | 一    | ×九四       |

五、最近に於ける石油の需給状況如何

答 朝鮮に於ける石油の物動数量は昭和十四年度より漸次圧縮を加えられて参りましたが昭和十九年度の物動見込数量(五九、〇〇〇キロリットル)は十四年度に比し一六%に激減せられたのであります。戦局の推移に伴ひ南方還送原油の影響により八月分より内地同様更に圧縮を加えられる事となり大削減を断行せざるを得ない状況になつたのであります。之が重要産業、交通上に及ぼす影響を最少限度に止むるため次の様に措置せんとして居ります。即ち

- 一、揮発油に付きましては従来通り極力「カーバイド」、木炭等の代用燃料装置に切換を行ふと共に従来燃料以外の用途に多量使用せられて居りました「ペンゾール」の一部を削減し揮発油を補填せんとしています。
- 二、重油に付きましては鮮内に於て昨年以来生産せられて居ります松炭油を精製使用すると共に「クレオソート」油の混入又は単体使用により量的確保を図らんと致して居ります。

- 三、燈、軽油、機械油に付きましては従来より顧みられなかつた農産、林産種子を蒐集採油利用すると共に消費者に対し一層合理的の使用法の研究、指導を徹底せしめんとして居ります。

尚朝鮮石油工場の蔚山第二工場は南方還送原油の船足短縮と危険分散の意味合より本年三月着工以来鋭意工事中でありましたが豫定通り八月末原油受入設備を完成引続き精製設備建設中であります。

六、木材生産力増強の状況如何

答 決戦下戦力増強上の基礎資材たる木材の需要は戦局の推移に伴ひ急激に増加を来し、

| 用途別    | 民有林     |         | 国有林     |           | 合計                                                                | 備考 |
|--------|---------|---------|---------|-----------|-------------------------------------------------------------------|----|
|        | 立木      | 伐採      | 立木      | 伐採        |                                                                   |    |
| ○航空機用材 | 一〇〇〇〇   | 八、一〇〇〇  | 五〇〇〇    | 一四、二〇〇    | ○印ハ生産責任品目ニシテ其ノ数量民有林六、九四八、四〇〇石<br>立木処分三、四六〇、〇三三石<br>計一〇、四〇八、四三三石トス |    |
| ○電柱    | 三五六〇〇   | 一七、八八九  | 一四、四八四  | 一九、八三三    |                                                                   |    |
| ○坑木    | 三、一七二〇〇 | 三、三七八九六 | 二、二八六二五 | 二、六五五〇九   |                                                                   |    |
| ○船舶用材  | 二九四九〇〇  | 一四、〇七二〇 | 二九四四八〇  | 六、六四二四五   |                                                                   |    |
| ○枕木    | 二一〇九〇〇  | 九、一六三〇八 | 七〇〇〇〇   | 一、四二一、六八八 |                                                                   |    |
| ○土建原木  | 八六四八〇〇  | 一、三三〇八  |         | 九四八、一〇八   |                                                                   |    |

(第一号表)

昭和十九年度木材生産計畫表

(単位 石)

於て順調に進捗中なり即ち第一、四半期(六月末日現在)の生産実績(別紙第二、三、号表)を見るに総生産量四、三一四、四七〇石にして之を年計画に對比すれば二割四分の実績なり而して第二、四半期以後に於ける見通は民有林に於ては既に生産に対する諸準備も完了し且つ第二、四半期に於ける農閑期を最高度に利用し生産に没頭し得る状況にあり生産は漸次好調を迎るものと推測せらるるが国有林にありては其の四割内外を豆満江、鴨緑江等の流筏に依存せる關係上其の実績も亦天候に左右せられ昨年度の豪雨に依る被害に徴するも豫断を許さざるものあり本年度も亦八月中旬より同様災害の兆あるが相当の打撃を受くるに非ずやと懸念せらるる状態なり之を要するに鮮内に於ける本年度の木材総生産量は一千萬乃至一千二百萬石程度に止まるに非ざるかと推測せらるる次第なるが斯くては戦力増強上支障を生ずべきを以て之が対策として配給に一般需要を極度に圧縮し製鉄、軽金屬、船舶、航空機用材等に対する重点的配給を更に一層強化し以て軍需生産確保上支障なからしむる方針なり

七、本年度木材生産の見透如何

答 以上の如く諸対策を講じ之が確保に遺漏なきを期しつつあるを以て全般的には大体に

本年度の総需要量は二千九百六十五萬石の龐大なる量に達するも一方之が生産部面を見るに林力、搬出關係其の他諸般の事情に由り其の四割程度を供給し得るに過ぎざる状態なり斯くては刻下の最緊要事たる軍需生産の確保上支障を及ぼすべきを以て本年度は十八年度に比し更に六割増の一七、六四〇、五八〇石を目標に之が生産計画(別紙第一号表)を樹立決定し実施中なり今其の概要を示せば左の如し

民有林 九、五〇〇、〇〇〇石  
国有林 八、一四〇、五八〇石  
計 一七、六四〇、五八〇石

(立木処分 四、三三七、六〇二石)  
(官行新伐 三、八〇二、九七八石)

而して民有林に於ては伐採地の選定、立木の買付等の為事業実施迄に相当の準備期間を必要とするを以て早期に用途別の生産力を調査し十八年十一月之を基礎としたる生産目標を定め其の準備に着手し又国有林にありては十八年度に於ける伐採量其の他運材状況等より生産見込量の調査を行い之等の結果に基き以上の如く十九年度木材生産計画の決定を見たる次第なるが木材に対する一般の認識未だ充分ならざるものある実情に鑑み之が実行上木材の重要性を更に認識せしむると共に生産關係者をして旺盛なる責任感を以て業務の遂行に当らしむるの要切なるを認め誠に重要用途材に付木材生産責任制度を實施し各生産業者に対し責任量の割当を為したるが今回更に本制度の完遂を期する為八、九、十、月の三ヶ月を期し森林所有者、木材生産業者、輸送並配給機關の総力を結集し一大生産確保運動を展開する等各種の方途を講じ以て生産の確保に萬遺漏なきを期しつつある次第なり。



| 用途別   | 年計画        | 生産実績      | 割合  | 摘要 |
|-------|------------|-----------|-----|----|
| 航空機用材 | 一四二、〇〇〇    | 一八四、一二    | 一三% |    |
| 電柱    | 一九八、三三五    | 一六五、五七    | 八   |    |
| 坑木    | 二六五、五〇九    | 五九四、六五〇   | 二二  |    |
| 船舶用材  | 六六四、二四五    | 八五七、六五    | 一三  |    |
| 枕木    | 一四二、六八八    | 四四九、〇三三   | 三二  |    |
| 土建原木  | 九四八、一〇八    | 五六二、九二二   | 六〇  |    |
| 土建製材  | 七五六一、三一    | 二、二〇三、〇二〇 | 三〇  |    |
| 車輛用材  | 一九四、八九〇    | 一九〇、四     | 一   |    |
| パルプ資材 | 六八九、〇三九    | 三九六、一三    | 六   |    |
| ベニヤ資材 | 二〇、〇〇〇     |           |     |    |
| 仕組板   | 一、三九七、四八   | 一、三、六九五   | 一二  |    |
| 一般用材  | 一、三六八、二四六  | 二、〇四二、五九  | 一五  |    |
| 地元消費  | 六三七、〇六六    | 六六四、〇     | 一   |    |
| 合計    | 一七、六四〇、五八〇 | 四、三一四、四七〇 | 二四  |    |

(第三号表)

第一、四半期原木生産実績

(単位 石)

| 区分   | 年計画        | 本期計画      | 伐採量        | 生産実績     | 計         | 計画ニ対スル割合 |
|------|------------|-----------|------------|----------|-----------|----------|
| 民有林  | 五、〇〇〇、〇〇〇  | 三、〇二一、一五四 | 六、二〇五、八九〇  | 九〇八、一四〇  | 一、三九八、四九  | 二四%      |
| 立木処分 | 四、三三七、六〇二  | 一、二九九、〇四一 | 二、三〇四、九八五  | 四三九、二二   | 六、〇一七、八〇  | 二四%      |
| 官行所伐 | 三、八〇二、九七〇  | 九六二、〇九八   | 三、〇九六、六一八  | 五五三、八一   | 四、一六六、八   | 二五%      |
| 合計   | 一七、六四〇、五八〇 | 五、二八二、二九四 | 一〇、二二九、七三三 | 一、九〇一、七五 | 二、四一三、二九七 | 二四%      |

|       |           |           |           |            |
|-------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 土木建築材 | 三、二一五、〇〇〇 | 一、九五八、九一二 | 二、三九四、四〇七 | 七五六一、三一    |
| 車輛用材  | 二、三八〇〇    | 一、七、〇九〇   | 一九四、八九〇   | 一、九四八、九〇   |
| パルプ用材 | 一、三〇五、〇〇〇 | 三、四一、三三九  | 二、一八、〇〇〇  | 六八八、八三九    |
| ベニヤ資材 |           | 一、〇〇〇〇    | 一、〇〇〇〇    | 二、〇〇〇〇     |
| 仕組板   | 一、〇七〇、七〇〇 | 六九〇、四八    | 二、二、五三〇   | 一、一三九、七四八  |
| 一般用材  | 七七八、一〇〇   | 三六八、六一六   | 二、二、五三〇   | 一、三六八、二四六  |
| 地元消費  | 五四八、五〇〇   | 八八、五五六    |           | 六三七、〇六六    |
| 合計    | 九、五〇〇、〇〇〇 | 四、三三七、六〇二 | 三、八〇二、九七八 | 一七、六四〇、五八〇 |

| 会社名        | 工場名   | 生産能力<br>吨/年 | 十九年度<br>生産計画 | 操業率 | 操<br>短<br>理<br>由     |
|------------|-------|-------------|--------------|-----|----------------------|
| 会 社 工 場 名  |       |             |              |     |                      |
| 日本窒素肥料株式会社 | 興南肥料  | 五六三〇〇〇      | 四六〇〇〇〇       | 八二% | 設備腐敗硫酸減産             |
| 日産製鉄株式会社   | 兼二浦   | 六〇〇〇        | 五〇〇〇         | 八三  |                      |
| 計          | 清 津   | 六〇〇〇        | 三、四〇〇        | 五七  | 原料硫酸設備未完成            |
| 日本窒素肥料株式会社 | 本 宮   | 四六〇〇〇       | 二、一〇〇        | 四六  |                      |
| 三菱化成工業株式会社 | 順 川   | 二六〇〇〇       | 四七五〇         | 一八  | 原料カーバイド不足            |
| 三 陟 開 発    | 北 三   | 二五〇〇〇       | 一            | 一   |                      |
| 計          |       | 九七〇〇〇       | 二五七五〇        | 二七  |                      |
| 朝鮮日産化学株式会社 | 鎮 南 浦 | 六六〇〇〇       | 三六〇〇〇        | 五五  | 原料燐鉱石不足              |
| 日本窒素肥料株式会社 | 興南肥料  | 一五〇〇〇〇      | 二〇〇〇〇        | 不明  |                      |
| 計          |       | 三六〇〇〇       | 一            | 一   |                      |
| 朝鮮化学肥料株式会社 | 本 宮   | 一三〇〇〇       | 七二〇〇         | 六〇  | ソーダ灰ノ副産ニシテソーダ灰ノ減産ニヨル |
| 朝鮮日産化学株式会社 | 鎮 南 浦 | 六〇〇〇〇       | 一五〇〇〇        | 不明  | 原料硫酸設備改修工事中          |
| 同          | 同     | 同           | 同            | 同上  |                      |

化学肥料生産能力と生産計画表

大減産に比し、鮮産燐灰石に依り低品位の生産を維持し居れり。  
需給關係に付ては、内外地を通ずる肥料需給協議会の決定に依り、配分中にして硫安の一部を台湾に移出し、地理的關係により、北鮮地区の一部に満洲硫安を移入中の外、従来内地に期待し居りたる燐酸肥料をも自給態勢を採り居れり。

八、朝鮮に於ける化学肥料の生産状況及之が需給關係如何  
化学肥料全国生産設備の三分の一を有する、日本窒素肥料株式会社興南肥料工場の硫安を首め、日本製鉄株式会社兼二浦及び清津兩製鉄所に於ける副成硫安、日本窒素肥料株式会社本宮工場、三菱化成工業株式会社順川工場、三陟開發株式会社北三工業所に於ける石灰窒素、朝鮮日産化学株式会社鎮南浦工場、朝鮮化学肥料株式会社仁川工場及び日本窒素肥料株式会社興南肥料工場に於ける過燐酸石灰、特殊化成肥料及び硫燐安、燐二安等の燐酸肥料生産設備あり。  
右の内其の大宗たる日窒硫安設備は、建設後相当の日數を経過せる為、毎年相当量の補修資材を必要とするも、其の手当困難なると硫磺化鉱石の品位低下（内地硫磺化鉱石の手当困難）に依る原料硫磺生産減等に依り、之が生産維持に腐心し居り、内地遊休設備の移駐資材に依る補強、高品位硫磺化鉱石の開発等に努めつつあり。  
又昭和十五年度に於いて、従来の硫安五〇、〇〇〇吨、設備に硫安一四、四〇〇吨、燐安三六、〇〇〇吨、計一八、〇〇〇吨生産設備を拡充すべく計画し、右の内硫安一四、四〇〇吨分に付いては大体資材の見透しも就き本年度中に完成の予定なり。  
石灰窒素の生産は、其の設備の一部に欠陥あると、原料カーバイトの減産及び生産原価の割高とに依り、設備能力に対する操業率は三〇%程度に止まり居れり。  
又過燐酸石灰以下の燐酸質肥料は原料たる南方燐鉱石の輸入杜絶に依り、減産の已むなき事情に在り。  
然れ共硫安、石灰窒素の主原料たる電力に付いては、内地と事情を異にするを以つて朝鮮の生産増加は大いに期待さるべく、又燐酸質肥料の原料としては、低品位ながら燐灰石の生産あり。大いに之を開発して利用すべく計画実施中なり。  
之を要するに硫安、石灰窒素の生産は、大体従来と異なる処なり。燐酸質肥料は内地の

九、朝鮮に於ける「セメント」製造業の現況及将来の方針如何

朝鮮に於けるセメントの生産能力は數年前に於ては朝鮮小野田セメント平壤工場及同社川内工場のみにして、其の年産能力僅に五十餘萬屯に過ぎざりしも一方鮮内に於けるセメントの需要は各種事業の進展、特に滿洲事變後に於ける鉱工業其の他各種重要企業の勃興に伴ひ著しき増加を示せるのみならず各種企業的重要資材たるセメント需給対策上よりして之が供給を内地に依存するの不可なるを認め、昭和十二年重要産業統制法及同法に基くセメント製造設備の新設拡充に対する許可制実施後に於ても内地と異り必要に応じ、同工業の新増設許容する等鋭意之が拡充に努めたる結果現在小野田セメント平壤、同内里朝鮮小野田セメント古茂山、各工場朝鮮淺野鳳山工場、朝鮮セメント海州工場及鴨綠江水電セメント工場の外、昭和十七年度に於て朝鮮小野田セメント三陟工場新設及朝鮮淺野セメント鳳山工場増設完了し朝鮮に於ける年産能力は百八十萬屯に達するに至れるも仍果年漸増せる需要に対応し難きのみならず輕金屬並に鉄鋼等の生産拡充を前提とする電力の開発及大陸輸送転換に伴う輸送力の強化等、著しきセメントの需要増大を豫想せらるるを以て、之に対処する為目下之が拡充に付鋭意計画を進めつつあり。

一〇、鱗状黒鉛生産状況

鉍工局 鉍山課

一、鱗状黒鉛現下自十九年七月の生産実績は前年同期の生産に対しルツボ用鱗状黒鉛は三倍電極用鱗状黒鉛は二倍の実績を挙げ本年度同期の生産目標に対しましてはルツボ用黒鉛一二四%電極用鱗状黒鉛一二〇%の生産を示し生産状況は好転しつつありまして爾後拡充計画進捗中であります、諸選鉱場の完成と相俟ちて年度目標たるルツボ用鱗状黒鉛六、〇

〇〇キロ電極用鱗状黒鉛一九、五五〇キロを確保し得る見込であります。

参 考

十九年度鱗状黒鉛見込

一 鱗 状 黒 鉛

| 種 別  | 十八年度<br>生産実績 | 自四月<br>至七月<br>生産実績 | 自八月<br>至三月<br>生産豫想 | 十九年度<br>生産豫想 | 摘 要   |
|------|--------------|--------------------|--------------------|--------------|-------|
| ルツボ用 | 三八九一 屯       | 二、三三八 屯            | 三、六五二 屯            | 六、〇〇〇 屯      | 規格合格品 |
| 電極用  | 九三〇四 屯       | 六、一六七 屯            | 一、三三八三 屯           | 一九、五五〇 屯     | "     |

一一、螢石生産状況

鉍工局 鉍山課

一、螢石の生産状況は極めて順調でありまして本年第二期生産実績は、自十九年七月高品位、低品位何れも前年同期の約二、五倍の実績を上げつつあります、本年度は物動數量を突破し得る見込でありますが対内地供給量は一に懸つて配船に影響を受けて居る現状であります。

参 考

十九年度螢石生産見込

二 螢 石

| 種別  | 十八年度     | 自四月至七月  | 自八月至三月   | 十九年度    | 摘        |
|-----|----------|---------|----------|---------|----------|
| 高品位 | 生産実績     | 生産実績    | 生産豫想     | 生産豫想    | 要        |
| 低品位 | 三六、一三五五屯 | 一、二二〇九屯 | 一九七九一屯   | 三、二〇〇〇屯 | 九三%以上ノモノ |
|     | 三八、一三九〇  | 二、一五八二〇 | 二、三、四一八〇 | 四、五〇〇〇〇 | 九三%以下ノモノ |

一二、塩の生産状況

本年度朝鮮に於ける塩の生産状況は年度当初以来気象不順にして、塩田地帯に降雨多く別表（天日塩生産状況）に示す如く現在の処生産豫定数に達せざるも、之が減収対策としては厳正なる生産責任制の活用と採塩期間の延長等に依り極力目標額の達成を期しつつあり。

天日塩生産状況

（供給可能量）

単位 屯

| 区分   | 本年度    | 八月二十日  | 八月二十日  | 本年度     | 八月二十日   | 備考     |
|------|--------|--------|--------|---------|---------|--------|
|      | 目標額    | 迄ノ豫定額  | 迄ノ実績   | 対比      | 対比      |        |
| 官営塩田 | 二九、〇〇三 | 二五、一二三 | 一八、三三三 | × 一、一六六 | × 一、一六六 | 左傍ハ割合ト |
| 民営塩田 | 六、七五〇  | 五、六五〇  | 四、一八三  | × 一、一六六 | × 一、一六六 |        |
| 計    | 三六、五五三 | 三〇、七七三 | 二二、五一六 | × 一、一六六 | × 一、一六六 |        |

一三、塩の需給状況

本年度に於ける塩の需給状況は食糧用工業用を混じ鮮内生産に係るものに付ては気象不順の為稀有の減産を示し之が恢復は容易ならざるものあり、而して鮮外よりの購入塩及鮮内配給用塩の輸送機関亦諸般の事情に制約を受け幾多の隘路を生じつつあるも輸入塩にありては陸送に依るの外山東我克船に依る輸入を併用し物動計画上の輸入量の確保に努めつつあるが、若し氣象上の条件にて鮮内生産塩の減収決定となるときは備荒塩の強行搬出等の措置を講じ之を補填することとし差当り本年度の需給調整には大なる支障なき見込とす。

一四、苦汁生産状況

朝鮮に於ける固形苦汁需要量は約七〇、〇〇〇屯なる処之に要する鮮内供給量は僅かに五、〇〇〇屯に過ぎず内地、北支及關東洲に依存せざるを得ざる現状なるを以て官営全塩田及大日本塩業の清川塩田に苦汁処理工場を建設し之が増産を図るべく計画したるも資材の關係等に依り全鮮的には実現に至らず、已むを得ず生苦汁の増産及一部苦汁処理工場の建設に極力邁進しつつあるも本年度は、年度当初より天候に恵まれず、生苦汁の生産、意の如くならず又工場の建設も資材の入手難に阻まれ未だ完成に至らざる現状とす。

尚現在建設中に係る官営苦汁処理工場の生産能力は五、七〇〇屯、民営朝鮮製塩工業株式会社は約一〇、〇〇〇屯なり。

一五、朝鮮に於ける電源開発状況及将来につき承りたし

（電気課）



答 朝鮮に於ける電源の開発は支那事変以来急速な足取りを以て進捗し資材も物資動員計画に依り、相当量（鉄鋼約十萬屯）の配当を為されていきましたが大東亞戦争の進展に伴ひ逐次圧縮せられ、昭和十八年度には二萬数千屯、昭和十九年度には更に一萬一千四百屯に圧縮せらるるに至り、年内に発電開始せらるるものに重点を置かざるを得なかつたのであります。然るに本年内に可能な増加発電電力のみを以てしては朝鮮に負荷せられたる軽金属事業、カーバイト工業、製鉄事業等、電力を多量に必要とする産業の新設、拡張に対して電力不足は必至の状況に在り、目下開発中の他の地点に就きましては、朝鮮満洲内にて賄ひ得る資材を以て基礎工事を續けていたのであります。現下の窮迫せる物資動員計画に於ては尚之等地点中一、二地点を選定し、他は逆行防止程度の工事に止める必要あり、目下計画中であります。

参照別表

- (1) 発電力一覽表
- (2) 発電水力一覽表
- イ 既許可発電開始地点
- ロ 既許可工事施行中地点
- ハ 既許可工事未着手地点
- ニ 未許可調査済地点
- ホ 未許可未調査地点

# 一六、朝鮮に於ける電力需給の現況及将来につき承りたし

（電気課）

答 朝鮮に於ける電力需給の現況は大体安定して居りまして寧ろ多少餘裕を有していると言つてよい状態であり、然し朝鮮に負荷された軽金属事業等の拡張を見込みまして

たてました。昭和十九年度生産力拡充計画に於きまして、昭和十九年度より昭和二十一年度迄の電力需要予想（別表(3)）発電計画（別表(4)）及電力需給対照表（別表(5)）の通り需要が順調に進行するとせば昭和十九年度以降昭和二十一年に至る間、年七億乃至二四億「キロワット」時の供給不足を来す見込にして、即ち需要に付ては今後三ヶ年間電力に於て九三六、三〇〇KW電力に於ては六九二、五〇〇万KWHの需要増加予想せられ、発電計画が順調に進捗するとしても、電力八九一、五〇〇KW電力を四四五、〇〇〇万KWHを増加するに過ぎず。

昭和十八年度に一三五、〇〇〇KWの供給余力を有しておるとするも相当の供給不足を告ぐることとなるのであります。

参照別表

- (3) 電力需要予想表
- (4) 発電計画
- (5) 電力需給対照表

# 一七、朝鮮に於ける軽金属工業と電力との関係につき承りたし

（電気課）

答 朝鮮に於ける電力資源は、其の規模が極めて大で良質の電力資源を有し、現状に於ては電力供給に多少の余裕を有して居りますので、軽金属の緊急増産には朝鮮が最適の状態にあると思はれます。

然し乍ら今後二、三期後に於て現在建設中の之等工場の全能力運転を可能ならしむる為には、現在開発中の電源も之と併行して促進する要がある事は、論を俟たざる処であります。尚軽金属工業への電気料金は「一キロワット」時につき変電所一次級渡で一銭一厘五毛乃至一銭二厘五毛見当になると思はれます。

一八、朝鮮の電気料金に付き承りたし

(電気課)

答 電気料金は本年四月一日を以て改正せられました。朝鮮に於ける電力資源が優れていることと総合的に運営せられているといふ有利なる条件の爲、電燈、小口一般動力並に特約供給等、共に内地に比し、需要密度規模等何れも小にして、原価的には悪条件を有するにも拘らず料率は比較的低廉であります。

朝鮮電業株式会社より直接供給する特定供給に付きましては、地域別、業種別に料金を標準を定めたのでありますが、既契約需要者に対する料金値上による急激な変動を避くる爲の暫定措置として現行据置と致し、其の料率は内地に比して低廉であります。

電気事業者より一般需要者に対する電気料金は、従量制基本料金制度に改め、約二割見当の値上による増収は配電会社に歸断せしめず、重要産業への料金の調整に充てしめているのであります。

参照別表 (6) 改正料金と内地料金との比較

(7) 朝鮮電業卸売及特定供給料金

一九、朝鮮電業株式会社及鴨緑江水力発電株式会社の現況に付承りたし

(電気課)

答 (一) 朝鮮電業株式会社

同社は昭和十八年八月朝鮮電力国家管理の実施により特殊会社として設立せられ新発足を致しましたが設立に当りまして資産の水脹れを阻止して資産内容を堅実ならしめ、企業者の創意工夫及び经营理念の一貫性を維持する為主要役員を旧朝鮮水力株式を以て担当せしめましたが、其の後業績は順調に進展致しまして、既に第二回の決算を行

ひましたが豫定通り政府持株を除き七分配当を継続して居りますが、其の概要は次の通りであります。

| 費目      | 第一自<br>至一八、九、三〇 | 第二自<br>至一九、一、三〇 | 備考              |
|---------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 総収入     | 一八、九、三〇         | 二八、二、九四         | 第一期ハ            |
| 支出入     | 八、〇、二四          | 一四、五、九六         | 旧朝鮮水力及朝鮮送電      |
| 当期純益    | 一〇、八、八九         | 一三、六、九八         | 旧富津水力           |
| 前期繰越金   | 七、三、六           | 七、八、九           | 旧朝鮮電力           |
| 計       | 一、六、二五          | 一四、四、八七         | 以降トス            |
| 法定積立金   | 五、四、九           | 七、二、一           | 第二期ニ於テ第一期ノ後期繰越金 |
| 配当平均積立金 | 五、五、〇           | 七、〇、〇           | ト五千円相違セルハ南朝鮮水力ノ |
| 配当金     | 九、七、四二          | 一、七、二五          | 二月二十五日合併シ、ソノ前期  |
| 繰越金     | 一               | 五、五、〇           | 繰越金ヲ引継グルニ依ル年七分ノ |
| 後期繰越金   | 七、八、四           | 七、九、一           | 割               |

(二) 朝鮮鴨緑江水力発電株式会社

国境河川たる鴨緑江、図門江本流を日満両国で協同開発する為に昭和十二年九月設立せられた同社は満洲国の特殊法人である満洲鴨緑江水力発電株式会社と実質的には、一社として経営せられて居り、昭和十八年八月朝鮮の電力国家管理実施に伴ひ性格を特殊会社に変更し、朝鮮電業株式会社と密接な關係を保持しまして発電事業の一元化を期しつつありますが、昭和十六年九月、一部発電を開始した水豊発電所は現在大部分の建設を終了(発電機七台の中六台完成)六十萬「キロワット」(折半シテ三〇萬「キロワ

ット」の発電をして居りますが引続き雲峰（最大五〇萬「キロワット」）義州（最大二〇萬「キロワット」）の開発工事を施工中であります。尚同社の事業計画及業績の概要は左の通りでありまして、発生電力は総て朝鮮に於ては朝鮮電業、満洲国に於ては満洲電業に買電せられるのであります。

事業計画概要

| 発電所名 | 河川名 | 平均有効落差 | 最大使用水量 | 発電機出力      | 台数 | 総出力        |
|------|-----|--------|--------|------------|----|------------|
| 水豊   | 鴨緑江 | 八二、五〇  | 九九〇    | 一〇〇、〇〇〇 KW | 七  | 七〇〇、〇〇〇 KW |
| 義州   | 〃   | 二〇、五〇  | 一、二〇〇  | 三三、三三三     | 六  | 二〇〇、〇〇〇    |
| 雲峰   | 〃   | 九、〇〇   | 六〇〇    | 一〇〇、〇〇〇    | 五  | 五〇〇、〇〇〇    |
| 厚昌   | 〃   | 七、〇〇   | 二三四    | 三一、〇〇〇     | 五  | 一五五、〇〇〇    |
| 臨江   | 〃   | 四、五〇   | 二五四    | 二三、七五〇     | 四  | 九五〇、〇〇〇    |
| 満浦   | 〃   | 三一、〇〇  | 五七五    | 三〇、〇〇〇     | 五  | 一五〇、〇〇〇    |
| 湖原   | 〃   | 四、三〇   | 五一〇    | 三六、八〇〇     | 五  | 一八四、〇〇〇    |

十九年三月末決算状況

| イ 資産及負債 |         |             |      |
|---------|---------|-------------|------|
| (1)     | 固定資産    | 一五〇、九九四、一五四 | 円一七〇 |
| (2)     | 投資      | 一四二、一〇九、五〇九 | 〇〇   |
| (3)     | 流動資産其ノ他 | 一二〇、五二四、五四一 | 七五   |
| (4)     | 積立金及引当金 | 六八八、二〇二、一五五 |      |

| ロ 収支及利益金           |         |          |        |
|--------------------|---------|----------|--------|
| (5)                | 社債      | 四五〇〇、〇〇〇 | 〇〇     |
| (6)                | 長期借入金   | 二四九三、七五〇 | 〇〇     |
| (7)                | 短期負債其ノ他 | 五四〇七、五六〇 | 七〇九〇   |
| (自昭和十八年三月至昭和十九年三月) |         |          |        |
| (1)                | 供給電力料   | 五〇二、九九二  | 四三八五   |
| (2)                | 投資利益    | 二四三、七五〇  | 〇〇     |
| (3)                | 経費      | 二六八、〇二二  | 二〇八五   |
| (4)                | 利益金     | 二五、九三三   | 四五二三〇〇 |
| 内配当（年六分）           |         |          |        |
| 二一、二五〇、〇〇〇         |         |          |        |

二〇、朝鮮に於ける非常時電力対策に付き承りたし (電気課)

答 朝鮮に於ける電気事業の特長は大規模水力発電であり、長大な送電施設を以て需要地と連絡して全鮮を総合的に運営して居ることであり、之は一旦空襲等の非常時に於きましては大きな欠点となりまして、一ヶ所の爆撃も、その被害は局部に限定せられず、広範な地域に波及する恐れが多いためであり、従ひまして防衛対策としては警戒警報発令と同時に全鮮を夫々別個の電源に連絡せる数地区の系統に分離しまして被害を出来得る限り局限すると共に尚緊急警報発令ありましたときは第二次的被害を防止する為電力供給を一時遮断することと致して居ります。従つて軍關係及通信施設等一時の停電にても、その活動に支障を来すものに対しては夫々豫備発電施設を準備致します様、要望致して居り更に他の電源とも連絡致して置く様処置致しまして、其の活動に支障を来さざる様計画を進めて居ります。

参照別表 (8)、戦時電力運用要綱

二二、国有送電施設の概要に付承りたし

(電気課)

答 国有送電施設は昭和十三年金増産計画の一翼として金山用電力供給の目的の下に、一般配電業者の採算を以てしては採算困難な地域に対して国庫豫算を以て金山送電施設を建設して参りましたが、其の後金政策の変換に伴ひ、昭和十六年以降は金以外の重要礦物の増強を図る為め之を対象として国有線を施設しております。尚金鉱業整理に伴ひ遊休施設となりました国有線は撤廃し其の資材は主として重要礦物増強の為にする国有線に転活用し、一部は軍及民の重要産業部門に払下げて居るのであります。

国有送電線施設表

| 区別      | 現有施設                | 撤去施設                | 備考 |
|---------|---------------------|---------------------|----|
| 六萬六千ボルト | 約二四五〇キロ             | 約三〇〇キロ              |    |
| 二萬二千ボルト | 約一六五〇               | 約五三〇                |    |
| 変電所容量   | 一七四三〇〇<br>キロボルトアンペア | 約三八三〇〇<br>キロボルトアンペア |    |

参照別表 (9) 国有線事業需要状況  
(10) 国有送電線資材転用調書

二二、朝鮮電業、鴨緑江水電に対する軍需生産責任制の実施に付て承りたし  
(電気課)

答 電力が軍需生産の基礎として重要なこと、又朝鮮に於ても電力供給力に不足を来す虞れが多分にあるのに鑑みまして、電力の生産増強に更に一段の努力を致し電力をして朝鮮に於ける、生産増強の隘路となる様な事のない様推進する為、発電部門を受持つ朝鮮電業株式会社及朝鮮鴨緑江水力発電株式会社両社に軍需生産責任制を実施致しまして、第一、四半期(四、五、六月)に於ては指定量及実績は左の如く

| 区別  | 電力量<br>(百萬KWH) | 最大電力<br>(千KW) | 備考                               |
|-----|----------------|---------------|----------------------------------|
| 責任量 | 一一〇〇、〇         | 六四二、〇         | 生産量ノ責任量ニ達セザリシハ需要ガ計画通り進展セズ        |
| 生産量 | 一〇九四、二         | 五九六、二         | 本生産量ニ止リシ為ニシテ需要電力ニ対シ支障ナク供給シタルモノナリ |

2、鴨緑江水電

| 区別  | 電力量<br>(百萬KWH) | 最大電力<br>(千KW) | 備考 |
|-----|----------------|---------------|----|
| 責任量 | 三一〇、〇          | 一四六、〇         |    |
| 生産量 | 三一〇、五          | 一五七、〇         |    |

第二、四半期(七、八、九月)ハ六月三十日左ノ如ク指定セラレタ

総督統治終末期の事態

| 区別  | 電力量<br>(百萬KWH) | 最大電力<br>(千KW) | 備考 |
|-----|----------------|---------------|----|
| 責任量 | 一〇五〇、〇         | 六二〇、〇         |    |
| 生産量 | 四三〇、〇          | 二八〇、〇         |    |



即ち第一、四半期朝鮮電業に於ては指定責任量に対し下廻っているが、電力の生産は他部門と異り需要に左右せられ、生産に支障なく電力を供給することに使命を有するものであつて、其の意味では充分其の使命を達成し得たるものと考えられるのであります。

参照別表 (11) 電力生産責任目標に関する説明

二三、朝鮮に於ける配電事業の統制に付承りたし (電気課)

答 配電事業は嘗ては全鮮に六十数社の乱立せる状態でありましたが、業者間に官の幹旋により自治的統制が行はれ、昭和十七年一月、京城電氣と金剛山電鉄の合併を最後としまして今日全鮮を四地区に分ち、即ち南鮮、中鮮、北鮮、西鮮の四配電会社に統制せられ形態に於ては内地配電統制令に依る強制統制と同一であります。電力の管理を配電及消費の末端迄浸透せしむる必要上特に電力料金政策を徹底せしむる為には、更に統制を強化する必要があるためであります。決戦下の今日であるので当分見合せ、實質的に新しい性格の下に進む様努力致して居ります。

第四号に掲載予定の項目 第五号に掲載予定の項目

- |    |                  |    |         |
|----|------------------|----|---------|
| 第五 | 朝鮮人に対する徴兵検査施行の状況 | 第六 | 防衛準備の状況 |
| 第六 | 労働事情             | 第七 | 貯蓄奨励其の他 |
| 第七 | 学徒動員の状況          |    |         |
| 第八 | 輸送力の現状           |    |         |

(朝鮮統治関係重要文献)

阪谷文書

一、朝鮮騒擾地踏査梗概報告

二、朝鮮騒擾地巡回日誌

x x x x x x x x x x x x x x x x x x x x

阪谷の叔父は極めて真面目な人で、資料は悉く問題別に分類し、自分で製つた目録を添えて保存して居た。叔父が八十で長逝してからこれ等の資料は私と同年で終生私が指導を受けた長男の希一氏に引継がれた。一昨年の春、希一氏を訪ねて友邦協会で朝鮮に関する資料を蒐集して居ることを話したら「父の残した資料は大抵大学等に寄贈してしまつたが朝鮮の分だけはきつと君が採りにくるところだと思つて残してある。大学にも少

✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱ ✱

しはやつたが重要なのは総て君の為に保存して置いた」と言つて即座に厚い書類を下さつた。これが研究生諸君の云う阪谷文書である。其後一昨年五月研究会が始つてから近藤氏を初め学生諸君もこの文書を大変重視し、研究の資料として利用されるのみならず、研究集成第百回記念号を発行するに際して特にこの文書の中、重要な部分を添えて公開されることになつた。阪谷翁も希一さんもさぞ地下で喜んでくれることと思う。研究生諸君がこの文書をこんなに大切にしておつて下さるにつけても今更ながら叔父さんの朝鮮に対する関心の厚かつたことを想い、又希一氏が一生を海外に捧げただけに理解も深く、病床に臥しながら我々の為に、この文書を残して下さつた友情をしのんで出来上つた報告書を御二方に御覧願えないのが誠に残念な気がする。

### 鮮人騷擾地踏査梗概報告

(文中の傍点(・)は原文のママを示す。)

踏査日程 五月二十日より六月十一日迄前後往復三週間

歴訪各地 釜山・大邱・京城・開城・平壤・磐石・砂川・宣川・定州・郭山

会見して意見を徴せし人々

一内地人。二内地人基督教者。三諸官吏(総督府、裁判所、道庁、憲兵隊、警察署等を含む)。四宣教師。五鮮人

以上は各地歴訪毎に採りし大体の方針にして或は同一種類の人々と数回面会を重ねたこととあり。鮮人との直接談話は言語不通の為實際不可能なるは勿論にしてよし直接、語を交る便宜あるとするも到底彼等の心底を窺う事は頗る困難なるのみならず鮮人にとりては冒險の事にして其為後日一身上に如何なる面倒を惹起するか測られざるものあり。我等一行が各地に於て数十の鮮人男女と胸襟を開きて語る事を得たるは全く宣教師の保証斡旋に由るもの也。騷擾に対する管見の相違の甚しき事各人各様なり。在留内地人の多くは鮮人の知所、弱点を指摘し宣教師は鮮人の長所を賞揚して弱点を看過すの傾あり、鮮人の言う所を察するに我等従来の措置に於て大いに覚醒すべきものあると同時に彼等は其の實際に受け居る損害よりもより以上の悪感を抱くに至れるものなしとせず。

今此等の意見を比較綜合して騷擾の原因を探究するに

一 併合の利益が相互的なる事を充分に了解し若くば鮮人をして其の意を徹底せしむること能はず徒に功を急ぎたる為歴史、言語、習慣等を蹂躪するが如き感を与へ十数年間に其の成果を期待せし結果武断的政治の援助をからざるを得ざるが如き感を一般に与へたる事。

二 日常鮮人と直接交渉する下級官の人選其当を得ざる事。

三 鮮人留学生に対する内地人の不注意。

四 鮮人に対する差別的待遇。

五 朝鮮民族性に対する深き研究なき所より生ずる誤解。

六 言論集会の拘束不平不満を訴ふべき機関の欠如たる事。

七 併合の為一時鎮圧されんとせし対日歴史的反感が近代思想に依りて新に意識される事。

八 国家思想の発生主として不平不満より出立して歴史の探究に入り近代思想に接触する所よりして誘起されたるもの。

#### 鮮人悪感醸成の例

一 知識階級の失望、差別的教育の結果は鮮人をして将来に対する希望を断絶せしめ

殊に青年は官吏たるを以つて無上の榮と考へ来りしに内地人の為に其の地位が蚕食されて前途望みなくなりたるが如き感を抱くに至りし事。

二 農民の不安、一般農民は近來米価暴騰と之に伴ふ土地価格の向上の為に生活濶沢になり来れるがこれも此処数年の事にして後には内地人の為に蚕食さるべき素地を作るものなりとの感を抱くに至らしめし事。然も毎日(或時期)に於て幾百人の鮮人が一団となりて満洲地方に移転し去る光景を目撃しては更に此感を深くするものがあるが如し。

ひるがえつて鮮人をして斯る悪感を抱くに至らしめたる原因を見るに教育制度並に官吏任用制度の欠陥、東洋拓殖会社の不自然的政策に因る所大なりと雖も又武断政治の弊、諸規則、登記法等の繁雜並に官憲干涉の甚しき事、鮮人在來の風俗、習慣を度外視するが如き行為或は墓地制度改良の為に鮮人の良心に堪ゆべからざる一種の苦痛を感じしめたるが如き、下級官吏が日常鮮人と直接交渉して種々不快、不便、苦痛、無理の思を重ねしめたるが如き、皆此の感を深くせるものならん。憲兵、警察制度の弊に至りては其の及す害実に甚しく鮮人をして警察官が良民の保護たるにあらざして却て憲兵、兵隊の力を借りて、人民を圧倒強迫せんとする者にあらざるやの感を与へ為に鮮人は不安の内に其の日を過さざるなし。之に伴ふ密偵制度は鮮人をして恐怖の念を起さしむるものあり。殊に騷擾後犯人搜索の峻厳なる方法は憲兵並に憲兵補助員巡查補助員等の横暴と相待ちて鮮人の不平、



不満を益々助長せしめ、やがて恐怖と憤怒に転化し行く傾向あるが如し。  
要之今回騒擾の原因は鮮人の一般的不満、不満（事実の正確なるや否やは別として）が素地を作りて之に知識階級の受けたる世界思想が転火したるもの、如く觀察せらる。  
然も今日は先に列挙せる恐怖と憤怒は陽性より陰性に転ぜんとするが如き憂あるは頗る重大なる事なりと云はざるべからず。特に基督教に關係あるが如く見ゆるは皮相の見解にして之を結果より見れば、煽動の有力なる地位を占むるが如しと雖も基督教徒として之に参加せしにあらざして鮮人として参加したるものと見るを以つて肯核を得たるものと云わんと欲す。

#### 騒擾後に於ける基督教徒集会の状況

- 一、大都會に於ては騒擾前と異なることなく集会し居れり。只四割乃至五割減になり居る処あり。巡查、密偵等が教会の内外に監視する様は以前と異なる所なし。
- 二、地方の諸教会に至りては騒擾後殆ど集会の自由を得ざるが如き觀あり。此の一つには教会堂破壊又は燃焼されて集会し得ざるに依るも宣教師の語る処に依れば、一旦官憲の許可を得て集会するも宣教師が其の地を退去すると同時に集会したる鮮人は憲兵、巡查等の為に半殺の命に逢ふに由ると云ふ。我等一行の実見したる所に依れば郭山教会の小使が我等と談話したりと云う為に憲兵補助員の為に肋骨を折らるゝ程甚しくけられ翌日宣川の病院に入院したる事を記憶す。

#### 朝鮮騒擾地巡回日誌

別葉朝鮮騒擾地踏査報告中ニ記セル騒擾ノ原因ニ関スル意見ハ多ク其材料ヲ以下記載セントスル会见談中ヨリ比較綜合シタルモノナレハ特ニ記ンテ出処ヲ明瞭ニセン

騒擾ニ対スル管見ハ各人各様ナレトモ重複スルカ故ニ特ニ此処ニハ便宜上各人ノ管見ノ特徴ノミヲ記セン

五月二十二日朝

釜山 着

- 一、釜山ニ於テ初メテ会见セシハ同地ニ二十年以上滞在シ而モ朝鮮人ヲ最モヨク理解セリト云フ内地人（写真業）ニシテ氏ノ言ニ依レハ日本ノ官憲カ道路ヲ開キ学校ヲ設置シタル等ノ恩恵ニ対シテハ鮮人ハ聊カモ感謝ノ意ヲ表セサルノミナラス却テ日本ニ対シテ敵意ヲ有シ居ルモノノ如シ、道路ノ改善学校ノ設置其他總督府ノアラユル設置ハ我等鮮人ノ為ニアラスシテ日本人ニノミ利益ヲ与ヘンカ為ニナセルモノノ如シト。
- 写真師ハ結論シテ曰ク如斯レハ鮮人ヲ遇スル唯一ノ道ハ武力ニ在リト。
- 三、某新聞通信員ノ意見ニ依レハ東洋拓殖会社カ地主及百姓等ノ土地ヲ強買スル代リニ荒蕪地ヲ開キテ之ヲ開拓センカ朝

鮮ニ貢獻セシ事真ニ絶大ナリシトスルヘシ、然ルニ会社カ之ヲ少モ為シ得サリシハ主トシテ資本ノ不足ニ依ルモノナル可シト雖モ今日会社ノ政策ハ鮮人ヲシテ不安懷疑ニ陥ラシムルノミナリ。

午後吾等一行ハ外国宣教師並ニ鮮人ト会见シテ其ノ意見ヲ徴シタリ。

- 一、宣教師ハ今回騒擾中殺戮セラレタル鮮人数ハ官憲ノ報告ニヨレハ約四百名ナリト雖是レ主トシテ死亡証明書ノミニヨリテ作成セラレタルモノニシテ宣教師等ノ報告ヲ綜合スルニ死亡証明書又ハ何等ノ手続ナク葬ラレタルモノ多數ニシテ氏名ノ分明ナルモノノミニテ其数二千ヲ超ユヘント云フ。
- 更ニ氏ハ宣教師カ官憲並ニ誤解セララルル実例ヲ挙げテ云フニ釜山鎮女学校ニ於ケル「オーストラリヤ」婦人伝道者ハ自己ノ監督セル女生徒ヲ騒擾渦巻キニ卷キ込マレサヲカ。為ニ彼等ノ行カントスルヲ予メ知ツテ大ニ防止セシカ遂ニ大勢ニ抗スル能ハサルニ至レリ彼等カ列ヲ作りテ行ク後ヲ逐ヒカケテ大声ニ止メタルニ巡查憲兵其他ノ人々ハ是ヲ見テ甚タ不届ナリト云ヒ彼ノ宣教師ハ万才運動ニ彼等女生徒ヲ引率セリト言ト言ヘリ宣教師ニ対スル誤解大概如斯シト。
- 三、日本語ニ巧ミナル一鮮人彼ハ予メ万才運動ニ加盟シタルカ加盟密約方法ノ如何ニ嚴重ニシテ如何ニ秘密裡ニ行ハレタルカラ説キ現ニ自己ノ妻モ如斯運動ノ進行シツツアリシ事

- ハ内地ノ人々カ各自覚醒シテ此ニ必要ナル改革ヲ施スニ至ル可キヲ以テナリ今十年後レテ此ノ事件ノ暴発ヲ見シカ其ノ危険性ノ如何ニ大ナルカハ今ヨリ予測スルニ難カラサル可シ。
- 二、宣教師ハ当騷擾ニ何等關係ナキモノノ如シ而モ彼等ノ犠牲献身ノ精神ニ關スル説教ノ如キハ確カニ一般民衆ニ對シ影響ノ少カラサルモノアル可シ。
- 検 事 長 談
- 一、基督教徒、仏教徒、天道教徒、或ハ学生等カ當騷擾問題ニ煽動ノ地位ニアリタル如キモ彼等ハ各教徒トシテ此ノ運動ニ加盟シタルニ非スシテ只軍ニ鮮人トシテ此ノ騷擾ニ加盟セシニ過キズト。
- 二、基督教徒、天道教徒ノ智識ノ差ハ甚ダシク是ヲ以テ見ルモ天道教徒丈ニテ今回騷擾ノ煽動者タルコト能ハサリシナル可シ。
- 大邱ニ於テ鮮人トノ會見米穀商(仏教徒)其ノ他八名
- 一、從來日本ノ諸名士カ朝鮮研究ヲ怠リシハ甚タ遺憾ナルコトニシテ偶々朝鮮ニ來訪セラルル人アリト雖モ釜山ヨリ官憲ノ出迎ヲ受ケ再ヒ釜山ヲ去ル迄彼等ニ付キ纏ハルル關係上到底実情ヲ究ムルコト能ハズ況シテ鮮人カ如何ニ思ヒ如何

- ニ感セルカラ知ルコト不可能ナルヘン。
- 朝鮮ハ由來五千年ノ歴史ヲ有シ美術、文化共ニ發達シ日本ニ貢獻セル如大ナリ日本ノ官憲ハ鮮人ヲ劣等者トシテ遇スルト雖モ過去ノ歴史ヲ滅却スル能ハス況ヤ鮮人カ人間ナル事ヲ抹殺スル能ハサル可シ。
- 思フニ日本今日ノ文明ハ東西文明ヨリ成立スルモノニシテ過去五十年間ニ西洋文明ヲ吸収シ而シテ日本人ハ覺醒セリ要之鮮人ト雖モ若シ西洋文明ニ接觸スル余裕アリシナランニハ決シテ鮮人ハ日本人ニ勝ルトモ劣ルコトアラサル可シ然ルニ今日官憲ノ態度ヲ見ルニ全国探偵政治ヲ施シ鮮人ヲシテ恰モ奴隸ノ如ク取扱ヘリ、是ニ依テ見ルモ今回ノ獨立運動ハ二三煽動者ノ力ニヨルモノニ非スシテ全民族ノ要求ヲ表現シタルモノト言フ可シ。
- 彼ハ日本ノ新聞雜誌等ヲ熟読シ吉野博士其ノ他ノ朝鮮同情者ノ記事ヲ讀ミ非常ニ感謝シテ鮮人ノ多クハ神ノ助ケヲ得ントシテ宣教師ノ館ヲ訪レ然ラサルモノハ其ノ不平不満ヲ心中ニ圧抑シテ恐怖ト不安トヲ無言ノ中ニ埋リ去リシ結果遂ニ今日ノ騷擾ヲ醸スニ至リシナリト(此ノ鮮人ハ我等一行カ去ラントスル時特ニ川上氏ヲ木蘭ニ呼ヒ是非論等一行ノ幹旋同情ニヨリ内地ノ方々カ我々ノ不安ト苦痛ニ對シテ充分ニ了解シ得ル様願ハレタシト二千万ノ鮮民ノ涙、心情ニ日常接スル自分ハ御一行ニ對シテ非常ニ期待スル所アリ

大

(一)

- ヲ知ラサリシ程ナリキト
- 此鮮人ハ万才運動暴発ノ當時如何ナル都合アリテカ此ノ運動ニ加盟スルコト能ハサリキ
- 今日迄幾多日本人基督教徒ト親交ヲ結ヒタリト雖モ一度日本政府カ鮮人ヲ如何ニ遇スルカラ目撃スルニ及ンテ到底此ノ状態ヲ支持スル能ハスト (鮮人ノ日本政府トハ主トシテ巡査憲兵ヲ意味ス)
- 文才アル一鮮人基督教徒ノ言ニヨレハ如何ニ鮮人等カ今日苦痛ニ生キ不安ノ中ニ生息シツツアルカラ見 地方官憲カ鮮人基督教徒ノ動靜ヲ窺ヒ居ル為ニ彼等ハ一日トシテ安閑ノ日ヲ送ル能ハスト。
- 廿三日午後二時
- 邱 着
- 日本長老教会牧師ノ談
- 官民カ宣教師ニ對シテ誤解ヲ抱キ甚タシキニ至テハ宣教師カ獨立運動ニ關係アルカ如ク思ヒ居レリト。
- 氏ハ其理由トシテ
- 一、宣教師カ家宅搜索ヲ受ケタル際ニ宣教師ハ非常ニ憤慨シ実狀ヲ写真ニ取リタリト 元來家宅搜索ニ行ケル檢事モ憲兵モ皆自ラ好シテ此ノ如キ事ヲ為スニ非ス上官ノ命ニヨリテ赴ケルモノニシテ彼等ノ感情ハ興奮シ居ル際ナレハ写真ヲ

- 取ル如キハ一般ノ誤解ヲ受クル當然ノ事ニシテ宣教師ハ寧ロ謹慎ヲ要スト、
- 二、家宅搜索ヲ為セル檢事ハ鮮人ノ通訳ニヨリテ質問ヲ為セルニ宣教師等ハ日曜毎ニ數百人ノ人々ヲ集合セシメ堂々ト説教ヲナセルニモ係ラス鮮語ヲ話ス能ハサルノ故ヲ以テ之カ質問ニ答フル事ヲ得サリキ
- 三、宣教師等ハ同地復審法院長夫人ノ招待ニヨリテ離察ノ見物ニ出掛ケタルカ計ラスモ途上万才運動騷擾ニ出會シタリ
- 官民側ニテハ宣教師ニ對シテ彼等ハ如斯騷擾中其姿ヲ表ハス如キハ事件ヲ拡大スル恐れアルヲ以テ見物ノ如キハ遠慮ス可キナリト。
- 四、一女学校ノ婦人教師ハ警察ニ赴キ同校ノ学生カ幾名拘引セラレタルカラ尋ネタルニ官憲ニテハ之ヲ以テ直ニ万才運動ニ關係アルモノノ如ク誤解セルニ至レリ 小林氏ハ最后ニ宣教師ニ對スル私見ヲ述ヘテ今日宣教師ハ謹慎ノ態度ヲ取レリ而モ彼等ハ政治問題ニ關シテハ中立ノ態度ヲ取ラサル可カラズト言ヘド諸外國トノ通信報道ニヨリテ見レハ決シテ中立ノ態度ヲ取レルモノニ非ズ
- 大邱復審法院長談
- 一、今回ノ騷擾ハ甚タ迷惑ナル出来事ナリト雖モ或ハ日本ノ將來ニ取テハ却テ幸福ノ結果ヲ生スルニ至ル可シ、何トナレ

ト遂ニ涙溢レテ一語モ発スル能ハサルニ至リ堅ク握手シテ別レタリ（其後彼ハ騒擾事件ノ嫌疑ニヨリ収監セラレタリト云フ）

大邱地方ニ於ケル鮮人名望家ノ談（基督教長老）

氏ハ同地方ニ於テ勢力アル実業家ナレハ先ツ意見ヲ述フルニ当テ次ノ如キニツノ質問ヲナセリ、

- 一、諸君ト此処ニ於テ会談スルコトカ果シテ効果アリヤ、
- 二、諸君ハ朝鮮ノ改革ヲ為シ得ル力アリヤ、

朝鮮ハ先ツ支那ノ勢力下ニ置カレ次テ日本ノ併合スル所トナリタリ、朝鮮ハ元来独立ヲ以テ無上ノ光榮トナス所ナレトモ今此ノ点ニ就テ深ク論及論スレハ政治上ノ問題ニ触レサルヲ得サルヲ以テ今暫ク譲リテ先ツ朝鮮一般ニ付テ私見ヲ述ヘンニ人生ハ二方面ヨリ成立スルモノニシテ一ハ物質ノ満足ニシテ、精神的希望向上而モ進歩ト発達ノ機会益レタル精神上ノ希望之レニツナリ、然ルニ日本官憲ガ今日迄取レル方針ハ朝鮮人ハ一ニ衣、食、住ニル、者ナリトノ印象ヲ我等ニ与フルノミニシテ而モ鮮人カ崇高幽遠ナル対ニル、精神アルヲ閑却セルモノノ如シ。

朝鮮ニ於ケル教育制度ヲ見ヨ鮮人青年ヲシテ将来向上ノ道ヲ与ヘス、更ニ鮮人青年カ内地ニ渡航スル処ノ困難費用ノ莫大更ニ幸ニシテ内地ニ渡航スルヲ得タリトスルモ青年カ高等諸学校ニ入ルノ困難等ヲ思ヘハ教育制度ノ欠陥ノ如何ニ大ナルカヲ察知スルニ

ハ鮮人ヲ捕ヘテ汝ハ基督教信者ナリヤト尋ネ若シ然リト答フレハ直ニ拘引サレ否ト答フレハ釈放サル、

- 三、官憲ハ人民ニ自衛団ナルモノノ組織ヲ強要シ其ノ規則方針等ニ関シ説明ヲ為サン為ニ各所ニ集合シ、今後万才運動ニ加盟セシメサル様勧告スルコト、以上ハ自衛団ノ中心点ナルカ如ク此ニ人民ハ無理ニ捺印署名ヲ強ラレ若シ否マンカ彼等ハ劇シク打撃セラレタリトイフ、

- 四、万才運動ハ若シ官憲カ武力ノ干渉ヲ為サマリシナラハ無事ナルヲ得シナラン

五、旧教徒中万才運動ニ参加セシモノ僅少ナリシト言フ、之レ同教会ノ制度カ僧侶ニ絶対権ヲ与ヘ其ノ命令ハ必ズ遵奉セラルルモノナリト雖モ又同教徒カ参加勧誘ヲ受ケタル時ニ勧誘者ニ金錢ヲ与ヘテ其難ヲ逃レタルニモ依ルナルヘシ、（其後大邱監獄署ニ於テ一旧徒ノ答刑ニ処セラレタルモノアリト言フ又終夜両手ヲ縛シ高ク天井ニツラレ拷問セラレタル者アリシト言フ）

五月廿四日午後八時（土曜日）  
京城 着

不知火旅館ニ於テ同地日本人基督教徒ノ一部ト会シ特ニ宣教師間題ニ付懇談スル所アリタリ。

- 一、日本人基督教青年会幹事丹羽清二郎氏談

足ラン。

朝鮮ニ鮮人ノ為ニ一ノ中学校ナク高等普通学校ハ中学校二年終了者ト同等程度ナルヲ以テ如何ニシテ鮮人ハ内地ノ諸学校ニ入ルヲ得ンヤ、

併合ハ要スルニ両者平等ノ結合ナリ然ルニ日本ハ鮮人ヲ劣等者トシテ遇スル事ハ諸官庁、郵便局、劇場等其他在留内地人ニ依テ至ル処ニ操リ返サレ居レリ、

更ニ鮮人ニ対スル惨酷ナル行為ハ到底筆紙ニ尽ス能ハス水原事件ノ如キハ世人ノ既ニ悉知セル処ナレトモ大邱ヨリ約十里ヲ隔リタル一部落ニ於テハ一婦人カ憲兵ノ為ニ銃先ヲ陰部ニ突キ刺サレテ惨殺セラレタリト言フカ如キハ悲痛ニシテ侮辱ノ極ト言フ可シ。

五月二十四日午前（土曜日）

大邱米田宣教師トノ会見

- 一、当会議ニ於テ力説セラレタル諸点ヲ挙レハ当地方裁判所檢察正ハ公判廷ニ於テ被告人並ニ其ノ父兄ヲ前ニ置キ訓話ヲナシテ曰ク、子弟ヲ如斯学校ニ送レハ甚タ不都合ニシテ諸君ハ他ニヨキ学校ノアルコトモ知ラサル可カラスト。

当日引キ出サレタル被告ノ多クハ「ミツシヨンスクール」ノ学生ナリシヲ以テ如斯学校トハ勿論「ミツシヨンスクール」指セルナル可シ。

- 二、基督教信者ハ實際上差別ヲ受クルモノナルカ如ク騒擾以後警官

氏ハ特ニ宣教師ノ態度ニ付キ憤慨ノ意ヲ洩シ宣教師ハ日々誤レル考ヘノ為ニ鮮人カ収監セラレ或ハ生命ヲ失ヘルニ何カ故ニ彼等ヲ静隠ナラシメサルカ朝鮮ト日本トハ到底避ク可ラサルモノナル事恰モ米田南北戦争ニ於ケル「リンコルン」ノ意見ノ如シ日本ハ帝國ノ一部分トシテ朝鮮ヲ保留セシカ為ニハ何事ヲモ犠牲ニ供セサル可ラス、宣教師ハ此ノ關係ヲ充分ニ了解スル必要アルト同時に徹頭徹尾朝鮮政府ヲ援助セサル可ラス。

- 三、メソヂスト、ミツシヨンスクール、教師曾田氏

氏ハ朝鮮ニアルコト十数年ヨリ朝鮮ノ事情ヲ解セリ、宣教師問題ハ重大ナルモ宣教師ノ態度其ノ他ニ対シ現在ヨリ以上ニ要求スル事ハ正ニ其ノ当ヲ失セザルヤハ恰モ丹羽氏ノ論議ヲ駁セルカ如シ。

廿五日、日曜午前

頭本元貞氏、宇都宮大將、関谷貞三郎諸氏トノ会見

- 一、頭本氏、宣教師中ノ或ル者ハ今日朝鮮獨立ノ可能ナルヲ信ズル者アリト尚丹羽清三郎氏ノ宣教師ノ態度ニ対スル意見ニ賛成スルト同時ニ武断政治主義ヲ排斥シ朝鮮ニ於テ最モ民意ニ叶ヘル政治ニ変更セザル可ラスト。

- 二、宇都宮大將ハ慰撫ニ我等ヲ招シ我等一行カ各地視察後同大將ニ報告セラレタシト希望セラレタリ。



1 午前 十時  
京城日本人組合教会 出席  
「信徒カ熱誠アル祈禱ヲ為セル一節ニ  
「今ヤ朝鮮半島ハ暗雲全土ヲ蔽フテ平和ナシ此レ實ニ我等  
相互ノ双肩ニ負ハサル可ラサル大責任ナルコトヲ一般ニ了  
解セシメ而シテ吾等ニ受難ノ精神ヲ与ヘヨ」ト、此ノ祈リ  
ハ吾等ヲシテ大ニ感憤セシムル処アリタリ。

1 午後 四時三十分  
宣教師合同教会ニテ多数ノ宣教師ト会見ス  
午後七時ゲール博士ヲ自宅ニ訪ヒ其ノ意見ヲ徵ス。  
日鮮兩人ノ間ハ非常ニ間隔アリ如何ニシテ兩者ヲ結合セシ  
ム可キカハ到底吾人ノ想像ダモ及バサル処ナリ、而モ朝鮮  
人ノ信用厚キ五六ノ日本人ガ「例ヘハ吉野作造博士、川上  
昌保氏」等カ朝鮮人ノ代表者等ト会見シタル効果ハ決シテ  
僅少ニ非サル可シ、之レ正義人道或ハ同胞相融和ノ建設的  
道程ノ第一段トモナル可キモノナラン。

五月二十六日(月曜日)午前九時  
總督府ヲ訪問シ教育局長岡谷貞三郎氏ト会見シタリ。  
一 憲兵制度ノ廢止ハ朝鮮問題ヲ永遠ニ解決セン為ニハ正ニ実  
行セサル可ラズ。  
二 朝鮮政府ハ朝鮮語ノ廢滅ヲ企ツルニ非ズ主トシテ日本語ノ  
研究ヲ奨励スルカ故ニ一方遂ニ如斯誤解ヲ招キシモノナリ  
三 新法令中特殊学校(ミツシヨ、スクール)教師ハ日本語  
ニ堪能ナラサル可ラストノ意ハ会話ノ知識ヲ要求スルノミ  
ニシテ教授ハ凡テ日本語ニテ為スコシトノ意ニ非ス。  
四 旧教並ニ監督派諸教会ハ他ノ新教諸團體ニ比シテ監督其ノ  
宜シキヲ得旧教徒中今回ノ騒擾ニ加ハリシモノ殆トナク監  
督教会派婦人宣教師ハ己ノ意志ニ反キテ騒擾ニ加ハリシ女  
生徒等ヲ皆各家庭ニ追ヒ返セリ而シテ自己ノ事業カ全然失  
敗ニ終レリト嘆シタリキト。

一 綜合基督教大学教授山根貞二郎氏ハ主トシテ宣教師問題ヲ  
論シ日本ハ自ラ省テ改善ス可キモノアルニ非スヤ、今日宣  
教師カ斯克ノ態度ヲ取り斯々ノ考アリテ事ハ大ニ研究ヲ  
要スルコトニシテ寧ロ其ノ責任ハ日本ニ在ルト言ハサル可  
ラス。  
二 丹羽清二郎氏ハ再ヒ宣教師ニ關スル意見ヲ述ヘテ宣教師ハ  
政府ヲ援助シ鮮人ノ騒擾ヲ救フヘキ義務ヲ有セリト。  
三 曾田氏ハ日本ハ宣教師ノ使命ヲ更ニ了解スル必要アラサル  
カ。  
四 秋月氏ハ鮮人ノ為ニ真ノ愛ヲ注ギ犧牲ノ精神ヲ發揮スル者  
ノ少キヲ嘆シ自己ノ心状ヲ猛省シテ転タ其ノ感ヲ深クセリ  
ト。  
朝鮮問題ノ解決ハ主トシテ日本人カ真ニ朝鮮人ヲ愛シ彼等  
ノ為ニ生命ヲ獻グルテフ精神ノ發揮ニ待タルヘカラス。  
前總督府技師佐藤氏ハ新義州ニ於ケル總督府工場ノ実験談

五月二十五日(日曜日)午後二時  
高等法院長渡辺暢氏ヲ官邸ニ訪問ス  
一 朝鮮騒擾ニ關スル責任ハ主トシテ吾等在留内地人ノ負フヘ

キモノナレドモ又東京人士ノ責任モ大ナリ。  
日本人ニシテ一度米國ニ趣キ或ハ英國、独逸其他ノ諸外國  
ニ留学セバ各々其ノ美点ヲ捕ヘ帰國後或ハ米國カブレ、ト  
ナリ独逸カブレ、トナルハ通弊ナリ然ルニ朝鮮學生ニシテ  
一度帰國センカ激烈ナル排日ト化スルニ於テハ東京人士ノ  
責任重大ナリト言ハサル可ラス。  
二 朝鮮ノ獨立會計制度ハ聊カ早計ニ失シタルカ如シ今日朝鮮  
ノ教育制度ノ發達ノミヲ計ルモ尚内地ノ補助ヲ受クルコト  
大ナル可シ況ンヤ其他ノ改善ノ責任ヲ鮮人ニ課センカ到底  
堪ユルトコロニ非ズ。  
三 此際特ニ必要ナルハ内地ヨリ更ニ視察者ノ來訪セラレ鮮人  
ニ對スル吾人ノ義務カ何辺ニアルカラ知悉シ之ヲ内地人ニ  
般ニ普及セシムル事ナリ。



- 1 午前十一時半、  
長谷川總督閣下訪問
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。

- 一 政務總監山根貞三郎閣下訪問、  
氏ハ今回ノ騷擾ニ対シ官憲ノ取レル過度ノ鎮圧方法ヲ憂ヒ  
而モ自ラ之ヲ軍人諸官ニ命令スルノ權ヲ有セサルコトヲ嘆  
ゼリ。

- 1 午前十時  
政務總監山根貞三郎閣下訪問、  
氏ハ今回ノ騷擾ニ対シ官憲ノ取レル過度ノ鎮圧方法ヲ憂ヒ  
而モ自ラ之ヲ軍人諸官ニ命令スルノ權ヲ有セサルコトヲ嘆  
ゼリ。
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

- 1 五月廿八日(水曜日)午前  
總督府内務部長官宇佐見氏ヲ自宅ニ訪問セリ。  
氏ハ併合ノ意ヲ説明シ兩民族ノ平等ヲ説キ政府ハ今日迄此  
ノ精神ニ依テ施政シ来リシ事ヲ力説セリ。
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

- 1 火曜五月廿六日 正午  
セバランス病院ヲ訪問シ鮮人医員汪氏並ニ内地人医員岡氏ト  
會談ス。
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

- 1 午前十一時半、  
長谷川總督閣下訪問
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

- 1 午前十一時半、  
長谷川總督閣下訪問
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

- 1 午後四時スミス氏ヲ自宅ニ訪問ス。
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

- 1 午後四時スミス氏ヲ自宅ニ訪問ス。
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

- 1 午後四時スミス氏ヲ自宅ニ訪問ス。
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

- 1 午後四時スミス氏ヲ自宅ニ訪問ス。
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

- 1 午後四時スミス氏ヲ自宅ニ訪問ス。
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

- 1 午後四時スミス氏ヲ自宅ニ訪問ス。
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

- 1 午後四時スミス氏ヲ自宅ニ訪問ス。
- 二 宣教師ハ現状ニ於テハ鮮人ニ同情スルハ当然ニシテ自然ノ  
事ト云フ可シ。
- 三 同氏ハ朝鮮問題ニ關スル意見ヲ發表シ改セサル可ラザル諸  
点ヲ挙ゲラル(別紙参照)
- 四 水原事件起ルヤ、スミス氏並ニ、ノール氏ハ直ニ總督ヲ  
訪問シ三ヶ条ヲ提出シ退出セリト云フ。
  - 1 教会ヲ燒棄シ其ノ他慘殺等ヲ停止スルコト、
  - 2 責任アル軍人ヲ所罰スルコト、
  - 3 放火セラレタル鮮人ニ対シテハ救助ノ途ヲ擇ズルコト、

五 如斯人民一般ニ不安ト悲哀トヲ心底ニ充滿シ来リシモ何人ニ向テ之ヲ訴フル術ナク何処ニ同情ノ耳ヲ貸スモノナク人民ハ斯クシテ指導者ノ表レンコトヲ希望シ居タル際今回ノ如キ全般ニ渉ル騷擾ノ惹起ヲ見タルハ實ニ故アリト云フ可シ。

1 咸興監理派耶穌學校鮮人教授トノ会見。

一 朝鮮ハ由來過去ニ永キ歴史ヲ有シ國民的精神ハ俄然覺醒スルニ至レリ。

二 政府ハ鮮人ニ何等將來望ミヲ与ヘサリシハ甚タ遺憾ニシテ斯クアリシナランニハ今日ノ騷擾ヲ見ルニ至ラサリシナラン。

1 午前八時：：十二時

警視總監陸軍中將兒島惣太郎氏トノ会見。

一 憲兵並ニ巡査補員ノ總數ハ八千人ニシテ日本人憲兵ハ五千人ナリ其人選ハ極メテ嚴正ニ行フト雖尚如斯多數ノ人員ヲ募集スルコトナレハ中ニハ或ハ如何ハシキ人ノ混合セルハ止ムヲ得サルコトナル可シ。

二 今回ノ騷擾以後補助員其他ノ増員ヲナセリ。

三 朝鮮ニ於ケル警察官(憲兵巡査)ハ日本ノ警察官ト甚タ其趣キヲ異ニシ種々要務アリ只單ニ治安其他ノ件ノミナラス進テ行政ノ一部教育ニ迄關係シ随テ人民ト接觸スル機會多シ。

ルヘカラズ。

三、本鐵道ハ今回ノ騷擾ニテ何等損害ヲ受ケス又鮮人從業者中罷業セルモノナカリキ。

四 鮮人今回ノ要求ニ何時満足ヲ与フルカハ甚タ困難ナル問題ニシテ今彼等ニ満足ヲ与ヘンカ再ヒヨリ以上ノ満足ヲ得ンガ為ニ騷擾ノ勃發ヲ見ルコト明ナリ、而モ政府ハ絶ス人民トノ接觸ヲ保チ人民ガ何ヲ要求セントスルカラ深ク研究スルヲ要ス騷擾勃發以前ニ鮮人ノ要求スル処ノモノヲ与フルハ正ニ然ルヘキコトナリシナラン。

1 午後二時

京城在留宣教師団トノ会見。

一 日本人ハ先鮮人カ日本人ヲ憎惡シツツアル事ヲ知テサル可ラズ 朝鮮問題ニ付キ内鮮ノ有力者等ハ此ノ消息ヲ充分ニ極メサル可ラズ

(右ハ一宣教師ノ說ナレトモ大體ニ於テ宣教師団ノ認ムル論義ナルカ如ク今日鮮人ハ一帯不安ノ恐怖ト苦痛ノ中ニ呻吟シツツアリ而モ如斯境遇ノ中ニ鮮人基督教信者ハ尚ヨク寛容ト愛ノ精神ニ生キ彼等ニ惱ミヲ与ヘントスル者ノ為ニ祈禱シツツアリト。)

二 宣教師ハ到底朝鮮問題ヲ解決スル地位ニ非ズ且又力ヲモ有セス 或ハ鮮人ヲシテ日本ニ信賴セシムル様強制スル實力ヲ有セズ。

收税ノ成績良好ナルハ憲兵及巡査等カ予メ之レニ對スル用意ヲ為シ置ク結果ニシテ為ニ恨ハ如斯方面ヨリモ憲兵巡査ニカカルコト多シ。

四 朝鮮全道四百ノ外國宣教師中嫌疑者トシテ今日認メラルルモ約十名アリ然ルニ何等証拠ナキヲ以テ捕縛スル能ハス(次回ノ会見ニ於テハ此件ニ關シ少シク取消サレタルカ如キ口吻アリタリ)

五 基督教或ハ宣教師ヲ騷擾ニ關係アル如クニ見ナスハ何等ノ理由ナキ事ナリ。

六 水原事件ニツキ總監ハ詳細ニ渉リ我等一行ニ説明アリタリ別紙京畿道水原安城地方騷擾ノ狀況(警務總監部公報参照)

1 五月二十九日 木曜日 午前

セベランス病院ヲ再ヒ訪問シ醫師ウードロー氏トノ会見。

過去數年間本病院ニ於テ答刑セラレタル者ヲ取扱ヒタルニ其タシキハ臂肉ノ大部分ヲ切取スル如キ大手術ヲ施スノ止ムナキ狀態ニテアリキ。

1 午前十一時

朝鮮鐵道局長久保要蔵氏訪問

一 朝鮮鐵道ニ於テハ多數ノ鮮人ヲ使役シ得ルモ日本人使役人ノ俸給ノ七割ケヲ支払ヒ居レリ即チ日本人駅夫ノ日給ハ一円ナルニ鮮人ニハ七十錢ヲ与ヘ居レリ。

二 今後日給ハ人種的關係ニ依ラス能率ヲ根定トシテ支払ハサ

三 是ヲ為シ得ルハ只日本人ニシテ鮮人ハ今日彼等ノ為ニ働カントスル日本人ヲ求メ又如斯日本人ニ對シテ非常ナル期待ヲナシツツアリ。

四 サレバ日本人中万事ヲ放棄シ万難ヲ排シ只鮮人ノ為ニ其生命ヲ惜マサル人士出テ正義人道ニ訴ヘ鮮人ヲ悩ミノ渦中ヨリ救済セサル可ラズ、

如斯日本人出テンカ鮮人ノ心ハ直ニ転回シ真ニ日本ノ治下ニ服スルニ至ルヘシ。

五 朝鮮全道ヨリ鮮人ニ對スル慘憺タル殺戮行為ニ關スル報道ハ宣教師ノ手中ニ頻々トシテ至ル(現在ノ慘憺タル蠻行ハ多ク巡査憲兵ニ依テ行ハルルモノニシテ警察署ニ於ケル拷問等ハ到底中央政府ノ中枢ニハ知ル機會ヲ与ヘサル可ク其他警察署監獄署ニテ行ハルル管刑ノ殘忍ナル到底鮮人ノ忍ブ能ハザル所ナル可シ)

六 基督教徒ハ今回特ニ嫌疑ヲ受ケタリシ結果其ノ苦痛ノ大ナル言語ニ尽ス能ハス從テ基督教ノ事業モ又甚タシク阻碍セラルルニ至レリ。

1 一行側ヨリ宣教師団ニ回答セシ件

一 内地ニ於テハ朝鮮問題ノ重大ナルヲ認メ居レリ正義人道ニ共鳴シ得ル人々ハ決シテ皆無ニ非ズ只其運動方法ノ欧米等ノ与論ニ訴フル方法トハ聊カ相違シテ更ニ適切ナル方法ニ依テ改善ヲ速カナラシメントシツツアリ從テ其改善ハ靜謐中ニ行ハ

三、我等ハ一行ハ同氏ノ意見ニ就テ更ニ質問ヲナシタルニ氏ノ

鮮人ハ由來不可解ナル性格ノ所有者ニシテ武力ヲ以テ威圧セサル可ラスト。

二、政府ハ今日迄鮮人ニ余リニ温和ナル手段ヲ取り過タルカ如ク騷擾ノ原因モ此処ニアル可シ、

一、岡本氏(同氏夫人ハ鮮人ニシテ永ク朝鮮ニ住シ商業ニ従事セリ)

開城内地人基督教徒トノ会見。

1 午後七時

称ヘテ四散セリトイフ。

郭山等ニ於テハ鮮人中一名モ傷キタルモノナク唯万才ヲ

テ忌々シキ結果ヲ見ルニ至ラサリシ地方五六アリ現ニ宣川

取ラレタル如キ印象ヲ受ケタリ、如斯穩当ナル処置ニヨリ

余等一行ハ開城署長ハ騷擾ニ対シテ極メテ賢明ナル処置ヲ

ニアラサリシナラン

「兎島総監ノ説明ニ依レハ右ハ警察署長ノ適當ナル所置ニ依テ斯ク無事ニ終リタルニ非ズシテ頑固ナル煽動者ノ開城

アリシニ過キス。

ハ唯隠忍セヨト回答セリ。其中群集ハ四散シ唯數名負傷者

ニ出テントスル種々ノ傾向ヲ認メタリシカハ各駐在所ノ巡

査等ハ本署ニ電話ヲ以テ抜劍ノ許可ヲ願ヒ来リタルモ本官

人ヲシテ暴行等ニ出テサル様慎重ノ注意ヲ為スヘキヲ以ッ

テセリ、偶々暴民中唯一ノ武器タル投石ヲ始め或ハ暴行

ニ出テントスル種々ノ傾向ヲ認メタリシカハ各駐在所ノ巡

査等ハ本署ニ電話ヲ以テ抜劍ノ許可ヲ願ヒ来リタルモ本官

人ヲシテ暴行等ニ出テサル様慎重ノ注意ヲ為スヘキヲ以ッ

テセリ、偶々暴民中唯一ノ武器タル投石ヲ始め或ハ暴行

ニ出テントスル種々ノ傾向ヲ認メタリシカハ各駐在所ノ巡

査等ハ本署ニ電話ヲ以テ抜劍ノ許可ヲ願ヒ来リタルモ本官

人ヲシテ暴行等ニ出テサル様慎重ノ注意ヲ為スヘキヲ以ッ

テセリ、偶々暴民中唯一ノ武器タル投石ヲ始め或ハ暴行

ニ出テントスル種々ノ傾向ヲ認メタリシカハ各駐在所ノ巡

査等ハ本署ニ電話ヲ以テ抜劍ノ許可ヲ願ヒ来リタルモ本官

人ヲシテ暴行等ニ出テサル様慎重ノ注意ヲ為スヘキヲ以ッ

テセリ、偶々暴民中唯一ノ武器タル投石ヲ始め或ハ暴行

ニ出テントスル種々ノ傾向ヲ認メタリシカハ各駐在所ノ巡

査等ハ本署ニ電話ヲ以テ抜劍ノ許可ヲ願ヒ来リタルモ本官

人ヲシテ暴行等ニ出テサル様慎重ノ注意ヲ為スヘキヲ以ッ

テセリ、偶々暴民中唯一ノ武器タル投石ヲ始め或ハ暴行

ニ出テントスル種々ノ傾向ヲ認メタリシカハ各駐在所ノ巡

査等ハ本署ニ電話ヲ以テ抜劍ノ許可ヲ願ヒ来リタルモ本官

人ヲシテ暴行等ニ出テサル様慎重ノ注意ヲ為スヘキヲ以ッ

テセリ、偶々暴民中唯一ノ武器タル投石ヲ始め或ハ暴行

ニ出テントスル種々ノ傾向ヲ認メタリシカハ各駐在所ノ巡

査等ハ本署ニ電話ヲ以テ抜劍ノ許可ヲ願ヒ来リタルモ本官

人ヲシテ暴行等ニ出テサル様慎重ノ注意ヲ為スヘキヲ以ッ

テセリ、偶々暴民中唯一ノ武器タル投石ヲ始め或ハ暴行

ニ出テントスル種々ノ傾向ヲ認メタリシカハ各駐在所ノ巡

査等ハ本署ニ電話ヲ以テ抜劍ノ許可ヲ願ヒ来リタルモ本官

人ヲシテ暴行等ニ出テサル様慎重ノ注意ヲ為スヘキヲ以ッ

テセリ、偶々暴民中唯一ノ武器タル投石ヲ始め或ハ暴行

ニ出テントスル種々ノ傾向ヲ認メタリシカハ各駐在所ノ巡

査等ハ本署ニ電話ヲ以テ抜劍ノ許可ヲ願ヒ来リタルモ本官

人ヲシテ暴行等ニ出テサル様慎重ノ注意ヲ為スヘキヲ以ッ

テセリ、偶々暴民中唯一ノ武器タル投石ヲ始め或ハ暴行

ニ出テントスル種々ノ傾向ヲ認メタリシカハ各駐在所ノ巡

査等ハ本署ニ電話ヲ以テ抜劍ノ許可ヲ願ヒ来リタルモ本官

日本人組合教会役員トノ会見  
(崇徳高等普通女学校)  
本会合ニ於ル主要点ハ京城ニ於ル基督教徒ガ此際卒先シテ宣教師ニ対スル誤解疑惑ヲ去リ既ニ警務總監部ニ於テ宣教師ハ本事件ト關係シ居ラスト發表セル際ナレハ公開状ニ依リテ一般ノ誤解ヲ去リ宣教師カ今回ノ騷擾ノ煽動者ニアラサルコト基督教カ何等ノ關係ナキ事ヲ發表セラレテハ奈何、斯クスルハ在鮮内地人信徒ノ義務ニシテ今後宣教師ト提携シ日鮮融合ノ道ヲ講ズル第一歩ナラスヤ、右ハ何等ノ決定ニ至ラズ再議

1 午後七時

日本人組合教会役員トノ会見

(崇徳高等普通女学校)

深ク研究スルコト必要ナリ。

三、宣教師諸君ハ予メ忍耐ヲ要ス。

a 即座ニ大改善ヲ実行シ得ラルルモノニ非ス要ハ内地ノ正義人道ノ士ヲ信用スルニアリ此等ノ人々ハ過去數十年間自由思想ノ發露ニヨリ種々ノ改善ヲナセル事實ヲ

徒ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

キ行為ニハ慎重ノ注意ヲ要ス。

從ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

徒ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

徒ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

徒ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

徒ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

徒ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

徒ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

徒ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

徒ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

徒ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

徒ラニ外国ニ通信スルヨリ寧ロ内地ニ於ケル正義人道ノ士ト相提携スル方安全ニシテ且又確實ナル方法ト言フ可ク真ニ鮮人ヲ愛スルモノハ斯クアリタキモノナリ。

ニ附セラレタルガ如斯公開状ヲ發表スルコト、在鮮内地人基督教徒ニ取テハ恰モ國民ノ面ヲ犯ス如ク或ハ政府ニ反抗スルカ如キ感アリ甚ダシク困難ナルカ如ク受ケラレタリ。

1 五月三十日 金曜日午前七時 京城發

開城監理派耶穌病院訪問

宣教師ハ全部地方ニ旅行中ニシテ意見ヲ徵スルコト能ハサリシハ遺憾ナリキ、

リード氏ノ紹介ニヨリ一鮮人牧師ト会見シタルカ氏ハ永ク米國ニ遊學シ我等ニ対スル友情真ニ溢ルルカ如シ。

一、鮮人ヲ根絶スル能ハサルハ勿論ニシテ又其歴史の祖先等ヲ忘却セシムル事ハ不可能ノ事ナリ。

三、鮮人子弟ニ歴史若クハ倫理ヲ教フル目的ハ若シ子弟ヲ日本人タラシメントスルニアラハ徒勞ニ終ル可シ、然ルニ今日學校ニ採用セラルル教科書ハ此ノ目的ヲ以テ選定サルルカ如シ。

三、從來日本語教授ノ方法ハ鮮人ヲシテ徒ラニ日本語ヲ嫌惡セシムルガ如キモノニシテ只子弟ニ強制的ニ教ヘ込マントスルモノナリ、而モ日本語ノ研究ハ鮮人子弟ニ取テハ一日モ忘ル能ハサルモノナルカ故ニ鮮人子弟ヲシテ嫌惡セシメサル様ナル方法ニテ懇切丁寧ニ教授スル必要アリ。

1 午後四時

開城警察署長訪問

一、当地ニ於テハ萬才運動頻々トシテ起リタルカ部下ニ命シテ鮮

武力トハ愛ノ精神ヨリ發露シタルモノナリトノ感ナルガ如ケレトモ氏ノ議論ノ根拠何処ニアルヤハ遂ニ不可能ニ終レリ特ニ鮮人ト直接交通ヲ為セル在留内地人中如斯同氏ノ意見ヲ同フスル人々甚ダ多キハ聊カ奇異ニ感ゼラレタリ。

小田代氏(開城耶穌學校教師)

一、同氏ノ學校ニ於テハ宣教師ハ學生等カ万才運動ニ加入スルヲ

極力防止シタルカ遂ニ何等ノ功ヲ見サリキ、サレハ鮮人ニ情

ハ無用ニシテ武力ヲ以テ之ニ當ラサル可ラス。

1 五月三十一日 朝

平壤署 午前十時

覆審法院訪問、

當日ハ特ニ判決日ナリシカハ被告人父兄廿名ヲ限リテ傍聽ヲ許可シ我等一行並ニ平壤宣教師モ特ニ傍聽ヲ許可サレタリ。

一、騷擾被告人等ノ答弁余リニ大胆ニシテ傍若無人ナリシカハ傍

聽人ニ及ボス効果ヲ憂ヒ當日迄公開セサリシト。

二、門前ニハ數百ノ被告人關係者相集ヒテ我先ニト傍聽席ニ侵入

スル有様實ニ凄慘ヲ極ム老母アリ幼児ヲ負ヘル妻女アリ顔面

慘白ニシテ父ヤ夫ヤ孫ノ安危ヲ氣遣ヒ合ヘル等憂慮ノ氣一體

ニ満チタリ。

三、被告人ハ予メ公判廷ニ數十各一団トナリテ留置セラレ傍聽人

ノ席定マルニ及ヒテ直ニ判決セラルル刑期ハ最短ヲ六ヶ月トシ

最長ヲ二年數ヶ月ナリ、群集ニ向ツテ煽動演說ヲ為シタル者

獨立宣言書ヲ謄写シタルモノ等ハ刑期永ク只万才運動ニ加入シタルモノノ刑期 短カキハ自然ノ數ト言フ可シ。  
本判決終了後被告人ハ一斉ニ控訴セリト言フ、其控訴及上告理由極メテ薄弱ニシテ多クハ却下セラルルト云フ。  
(別紙高等法院判決三葉参照)

1 午前十一時

覆審法院檢察長訪問。

一、管刑ニ關スル種々ノ談話アリ諸規則ヲ朗誦セルカ管刑用鞭ヲ吾等ニ示サレタリ、鞭ハ其芯青竹ニシテ麻米ヲ以テ外部ヲ被ヒタルモノナリ、管刑規則ハ極メテ緻密ニシテ刑ノ執行者ハ先ツ直立ノ姿勢ヲ以テ左手ヲ腰部ニ当テ右手ヲ以テ鞭ヲ持チ其中央部ハ執行者ノ帽子ニ接觸セサルベカラズ、而シテ同一ノ速力ト同一ノ力ヲ以テ被告人ノ臀部ヲ直角ニ打擲セサル可ラズ、斯クスレハ皮膚ノ破ルル事ナク打擲后直ニ歩行シテ帰宅スルヲ得ルトイフ、管刑ハ年齡十六才ヨリ六十才迄ノ男子ニ加ヘラル可キモノニシテ今日マテ曾テ之ガ爲ニ生命ヲ失ヘルモノアルヲ聞カス。

二、管刑ハ韓國政府時代ヨリノ遺物ニシテ罪人ノ模倣ニ委セタリ、即チ三十打ツハ罰金三十円若ハ禁錮三十日ニ相当シ、九十打ハ禁錮三ヶ月ニ相当ス、鮮人ハ喫煙、飲酒ノ癖甚ダシク加フルニ彼等日常生活ハ不規則ナルヲ以テ監獄内ニ數ヶ月座居スル事ハ甚ダ苦痛ナレハ多クハ管刑ヲ選取スト

言フ。

知識階級ノ鮮人ノ言ニヨレハ管刑ハ韓國時代ノ遺物ナレトモ文明ナル日本ト併合セラレタル以上如斯野蠻ナル刑罰ハ全部廃棄セラルルナラント期待シタリシト云フ。

三、万才運動ニ加入シタル被告人二階級ニ分チ

a 既ニ獨立セルモノトシテ万才ヲ稱ヘタルモノハ之ヲ無罪トシテ釈放シ、

b 獨立ヲ企テントシテ万才ヲ叫ビシ者ハ之ヲ有罪トシテ処刑セリ、

四、武力ニ依テ威圧シ処刑スル現在ノ方法ハ甚ダ疑問ニシテ鮮人ノ將來ニ結果ヲ持チ來スニ過ギサルヤモ知レス政治犯ノ大赦統治方針ノ根本的改革等ハ更ニ大ナル好果アルヤモ知レス  
五、鮮人ハ墓地ニ對シ甚ダシキ迷信ヲ有シ方角ヲ重シ占者等ノ言処ニモ死體ヲ埋葬スト言フ。墓地取締規則ノ發布ハ鮮人ノ心理ニハ由々敷大事ニシテ或ハ今回ノ騷擾ノ重大ナル原因ノ一トシテ教ヲ得可キカ。

1 午後二時

平壤宣教師團トノ會見

一、宣教師管下ノ信者等ハ信念厚ク教徒トシテ稱讃ス可キ人々多シ騷擾中警官ハ短銃ヲ以テ一信者ノ甥ヲ射殺シタルガ群衆ハ甚シク激昂シ警官ヲ殺サントシテ團集シ來リシガ上記ノ信徒ハ突進シ來リ巡查ヲ數ヒ群衆ニ向ヒ我ハ此子ノ叔父ナリ我ハ

此ノ巡查ヲ神ノ御名ニ依テ許スガ故ニ諸君モ亦靜謐タレト此ニ於テ群衆ハ四散シ無事ナルヲ得タリ、信徒ノ寛容ナル大概斯ノ如シト。

二、鮮人牧師ノ多クハ今日迄官憲ノ爲ニ絶エズ圧迫セラレ、嫌疑ヲ受ケ密偵ニ付ラレ殆ント心肉ノ静マルトキナク遂ニ彼等ハ甚シク失望シ今回獨立運動ニ加盟スルノ止ムナキニ至リシモノナラン。

獨立宣言書署名者三十三名中平壤中央教会牧師ガ加ヘリ居レル等モ此間ノ消息ヲ語ルモノニシテ畢竟彼ガ過去數年間苦悶苦闘竟ニ日本人ニ對シテ全ク希望ヲ放棄セシモノナラン。

三、(極 秘)

平壤崇徳大学前總長某宣教師ハ騷擾數ヶ月前朝鮮ニ於ル伝道事業ノ全ク望ナキニ失望シ故郷ニ帰ラント計企シツツアリシカ騷擾爆發スルニ及ンテ暫ク之ヲ中止シテ改善ノ曙光ヲ見ルコトヲ得ンカト待チ居レリ。

四、組合教会ノ伝道方法ノ爲ニ宣教師等ハ甚ダ迷惑ヲ感ズル者多ク教会ヲ無断ニテ使用シ、信徒ハ信念ヲ破壞シ其他面白カラサルコト頻々トシテ起ルト云フ。

1 午後四時管刑ニ処セラレタル鮮人ヲ問フ。

鮮人(医業)

a 彼ハ万才運動ニ加盟シ、數日前管刑ヲ受ケ釈放セラレタ

二、二十年來在留セル一信徒ノ話、

ルモノナルガ臀部黒青色ヲ呈スレトモ皮膚破レズ座隅直立ニ何等差支ナク極メテ輕微ナリキ、

三、メソジスト教会執事(宣教師病院入院年齡五十八)

彼ハ同シク万才運動ニ加盟セシ爲管刑九十打ヲ受ケ數日前釈放セラレタリ、左側臀部ハ皮膚全部剝離シ約直径三インチ、ニ亘テ脂肪及贅肉露出シ周囲ハ全部腫起甚ダシク苦痛狀態ニアルガ如シ、右側臀部ハ僅カニ直径一インチノ皮膚ノ剝離ヲ見タリ。

三、同病院ニ騷擾中銃傷、刃傷ヲ受タル者四名アルヲ見タリ、彼等ハ受傷後腕部若ハ足部ヲ切断スルノ止ムナキニ至レリ。

1 午前八時

平壤内地人基督教徒トノ會見

組合教会牧師渡辺氏、

一、同氏ハ政府ハ最近政府ノ用具トシテ組合教会伝道者等ヲ利用スル傾向アリト。

二、森岡氏(弁護士)

氏ハ基督教徒迫害ノ實際ニ行ハレ居ルヲ認メ少クトモ鮮人基督教徒ハ他ノ鮮人ヨリモ多クノ苦痛ヲ受ケタリト、拷問ハ内鮮ヲ問ハズ未タ履行セラレツツアルガ如キハ甚ダ痛恨ニ堪エサル所ニシテ元來日本ノ法律制度ハ歐米諸國ニ比較スレハ遙ニ下位ニアルガ如シ。



氏ノ朝鮮「ヤンパン」ノ多クガ統治ニ信服セル例証ヲ挙ゲ  
ラレタリ。

註 貴族中、特殊ノ恩惠特典ヲ与ヘラレタルモノハ總督  
府政事ニ心服セリト言フモ多クハ統治ニ満足スルモ  
ノナク只自己ノ地位ヲ省ミテ不平不満ヲ發表セザル  
ナリト。

一、渡辺牧師

政府ハ宣教師ヲ一層子解シ内地基督教徒ハ政府ヲシテ之ヲ  
了解セシムル様尽力セサル可ラス。

二、梅橋氏(崇徳大学教授)

- (一) 併合当時總督府側ニ二説アリ、  
1. 鮮人ニ対スル施設其他ニ関シ宣教師ヲ相談トシテ善用  
スルコト、  
2. ハ斯克ノ如ク宣教師ノ経験等ヲ利用スルハ政府ノ威威  
ニ關スト、

遂ニ後者ノ勝ヲ占ムル処トナレリ。

- (二) 總督府教育方針ハ大概人格ニ重キヲ置クニ非ズシテ却テ  
之ヲ疎外セントスル傾向アリ。

- (三) 日本人教師ガ鮮人子弟ニ対シ忠義ノ講義ヲ為サンカ、其  
結果ハ鮮人ノ心ヲ旧韓國皇帝祖先偉人ニ対スル忠義ト誤  
解セシム。

1 六月一日 日曜 午前

教種鮮人教会堂訪問、

1 中央長老教会

此ノ教会ハ平壤ニ於ル最古ノ教会ニシテ此処ヲ中心トシテ他ノ教  
会生ズルニ至レリト言フ、婦人聖書研究会開催中ナリシガ殆ト四  
百八十名ハ出席アリキ。

1 南大門教会

1 監理派教会

1 其他教種教会

出席數ハ騷擾以前ニ比較シテ約二割減ナリト言フ、巡查、探偵等  
ガ処々ニ配置セラレ居ルコト騷擾以前ト何等相違アルコトナシ。

1 午後二時

内地人トノ会见(一行滞在旅館)

- 一、主トシテ鮮人基督教徒ノ弱点欠点等ヲ論及セラレタリ、之ニ  
反シ宣教師等ハ鮮人基督教徒ノ美点長所ヲ掲グルニ敏ナルハ  
不可思議ノ現象ト言フ可シ。

1 午後八時

朝鮮婦人トノ会见

- 一、朝鮮婦人等ハ吾等一行ノ来訪ト目的ヲ知り、特ニ宣教師ノ幹  
旋ニ依リテ吾等ニ会见ヲ求メタリ、集ル者ノ中看護婦アリ、  
女学生アリ、前京城市長未亡人アリ、老母アリ殆ト鮮人ノ  
各階級ヲ代表セルガ如キ觀アリタリ。

一、看護婦(年齡十九才耶蘇病院)

此ノ婦人ハ万才運動ニ加盟セリトノ嫌疑ヲ以テ警察署ニ拘  
引セラレタルガ騷擾以前ヨリ絶ヘズ附キ纏ヘル探偵中村某  
ノ為ニ甚シク打擲セラレ、腰巻ヲ殘シテ他ハ全部裸體トセ  
ラレ、殆ト侮辱的拷問ヲ受ケタリ。

一、前市長未亡人、

同女ハ平壤ニ於テハ有數ナル資産家ニシテ、又高等ノ教養  
アル婦人ナルガ本年十九才ノ一子アリ、嫌疑アリ病中拘引  
セラレ又自ラモ警察署ニ同行セラレ只下衣ヲ殘スノミニテ  
全部裸體トナリ、鞭ニテ甚シク打擲セラレ他人男子等ト同  
室ニ監禁セラレタリト云フ。(如斯コトハ彼女ノ生涯中未  
ダ曾テアラサリシコトナリト)

更ニ男女同室ナルヲ具申シタルニ寒氣激シキニ不係露台ニ  
引出サレ、熟ニ睡眠スル能ハサリシト云フ。

同女ノ拘引セラレタルハ獨立運動ニ其運動費トシテ金員ヲ  
提出シタリトノコトナレトモ彼女ハ遂ニ是等ヲ是認セザリ  
キ、一子ハ獄中病ヲ得命且タニ迫リシカバ之ヲ保釈ヲ免サレ  
目下自宅ニテ療養中ナリト。

一、老母 年齡六十才。

騷擾中夫ト共ニ戸外ニ出テ騷擾ノ模様ヲ見守居タルニ兵士、  
不意ニ来リテ銃ノ台尻ニテ兩人ヲ叩キ附ケ彼女ハ二ヶ月后  
漸クニシテ歩行スルヲ得ルニ至レリ、以后數回兵士ハ彼女  
ノ寢室ニ無斷ニテ突入シ来ルコトアリト。

在留内地人ヨリ聞ク処ニ拠レバ鮮人ノ多クハ涙ニ脆ク哀号

シテ他人ノ同情ヲ巧ミニ利用シテ正真是非ヲ曲グルニ巧妙

ナリトイウコトナリ我等一行モ婦人ハ涙脆キモノナレバ或

ハ斯克モアラント期待セシニ集マル鮮婦人中流涕スルモノ

アレドモ号叫スルモノナク、真情溢レ語ラントシテ言葉支

フレトモ理路正直ナリシニハ聊カ奇異ノ觀アリタリ。

1 午後十時

鮮人男子トノ会见(約十五分)

一、鮮人牧師ノ談

a 鮮人ヲ日本人タラシムル事ハ不可能ナリ。

b 基督教ハ爾來迫害セラレタルカ今回騷擾以後鮮人信徒ノ

不安思フニ又余リアリ。

c 教育制度ハ鮮人ニ対シテ將來向上發展ノ希望ヲナサズ。

d 鮮人憲兵、巡查等ハ鮮人中最惡ナルモノヲ選拔シタルモ

ノナリ。

e 日本人ハ鮮人ヲ動物ノ如ク虐待ス。

f 鮮人婦人ニ対スル侮辱的行為即チ警察署ニ於テ衣ヲ剥キ

之ヲ拷問シ或ハ婦人ノ寢室ニ無斷侵入スル等ハ鮮人一般

到底堪ユル能ハザル処ナリ。

一、鮮人巡回伝道師ノ話

騷擾后諸地方ヲ巡回伝道中信徒カ到ル処ニ於テ迫害セラル  
ルヲ目撃シ集會カ殆ト不可能ニシテ何等急ス能ハサルヲ

説キ組合協会伝道者等が憲兵巡查等ノ威力ヲ用ヒ各教会ヲ無断ニテ使用シ居レルコトヲ語レリ。

一、鮮人耶穌学校教師

現行教育制度ハ朝鮮青年登竜ノ道ヲ塞グカ如ク一ノ中学校ナク専門学校ヲ除キタル以外ノ高等教育機関ナシ。

而モ此ノ専門学校タルヤ鮮人青年ヲシテ将来向上發展セシメ社会ノ指導者タラシムル如キ智的教育ヲ授クル処ニ非ズ

1 六月二日 月曜 午前八時

自働車ニテ磐石、砂川地方ノ被害地ヲ訪フ、

磐石ハ平壤ヲ距ル約七哩ノ地ニアリテ戸數僅カニ六十戸ノ一小村落ニシテ村端ニ教会堂アリ内部、窓硝子其ノ他甚ダシク破壊セラレ、残ルハ只形骸ノミ、本村ノ男子等ハ万才運動當時多ク隣村ニ赴キ万才ヲ稱ヘタリト言フ、其后兵士来リ教会堂内部ヲ破壊シタルモノナリト言フ。全村ニ殆ト男子ノ影ヲ見ズ、農作其他ノコトハ全部婦人自ラ牛馬ヲ使用シテ耕作ニ従事スルト言フ。一老母ノ談

一、憲兵来リ老母ヲ後庭ニ引連レ作男ハ未ダ帰ラサルヤト尋ネタルカ老母ハ其何処ニ行キシカラ知ラズト答ヘタルニ憲兵ハ老母ヲ裸體ニシ此レヲ打擲シ烈シク脛ヲ蹴リタリ、斑痕尚歴然タリ。

二、乳児ヲ抱ケル鮮婦人ノ談

憲兵来リ此ノ婦人ヲ裸體ニ為シ「貴様ノ夫ハ何処ニ行キシ

ヤ」ト尋ネタルガ一ヶ月前ヨリ何処ニ行キタルカ未ダ帰ラズト答ヘタルニ甚タシク蹴ラレ數週間立居ニ差支ユル程ノ負傷ヲナセリ。

三、吾等一行ガ自働車ニテ此村落ヲ去ラントシタルトキ一鮮婦人一行ヲ止メテ激シク憲兵ニ打擲セラレタル様ヲ語レリ。

1 砂川

一、同村ノ万才運動ハ激烈ナリシモノニシテ憲兵並ニ鮮人補助員ハ不幸ニシテ騒擾中殺戮セラルルニ至リシトイフ。

教会ヲ訪ネタルニ窓硝子ハ全部破壊セラレ説教壇ハ何処ニカ持チ運ハレタルガ如ク其影ダニ見ル能ハス聞ク処ニヨレハ憲兵兵士等ハ教会内ノ床板ヲ此等憲兵ノ死骸ヲ焼棄スル燃料ニ用ヒタルガ如ク教会ヲ距ル約十間ノ地ニ其痕跡アリ。

二、憲兵分隊ヲ訪問。同分隊ノ前庭ハ騒擾中最モ激烈ナリシガ如ク憲兵等ハ万才ヲ叫ビナガラ前面ノ山麓ヨリ突進シ来ル群集ニ発砲シ遂ニ數名ヲ射殺スルニ至リシカバ血ヲ見タル鮮人等ハ急ニ態度ヲ変シ憲兵隊ニ突進シ憲兵等ノ逃ルヲ追ヒテ之ヲ殺戮スルニ至レリト言フ。

三、鮮人群集ガ山麓ヨリ万才ヲ叫ビツツ下ル途中射殺セラレタル個所ヲ視察セリ。

1 午前七時 宜川着

宣教師団トノ会见

一、鮮人基督教徒ノ被レル損害ハ甚シクシテ万才運動ニ全然加盟

セサル信徒等ト雖憲兵巡查等ハ基督教徒タル故ヲ以テ直ニ嫌疑ヲカケタリト。

二、北韓ノ信徒等ハ南韓地方ニ比シテ万才運動ニ加盟セルセルモノ多シ、之レ主トシテ北韓ノ基督教徒ガ南韓鮮人ニ比シ今日迄嫌疑ノ結果圧迫苦痛ヲ受ケタルニ由ルナル可シ。

三、宣教師ハ鮮人信徒ノ信念性格其他ニ付激賞シ決シテ世間ニ喧伝セラルル如キモノニ非ザルヲ以テシ一々例証ヲ挙テ説明アリタリ、更ニ鮮人一般特ニ基督教徒ノ特ニ憲兵巡查等ヨリ受ケタル苦痛ヲ指示シ更ニ信徒等ガ寛容ノ精神ニ充溢スルヲ説キ己等ニ苦痛ヲ持チ来スモノノ為ニ絶ヘス折ル事ヲ物語レリ。

1 六月三日 月曜 午前

警察署長ヲ訪フ、

一、万才運動初日ハ殆ント負傷者出デス警察側ハ極メテ慎重ノ態度ニ出タリ二日目ニハ署長自ラ出動シ群集中ニ分ケ入りテ静カニ散会方ヲ勸告シタリ當時四面ノ山々ハ白衣ヲ着タル鮮人ヲ以テ充滿セリトイフ。而モ署長ノ賢明ナル方法ハ遂ニ群集ヲ何等為スナク四散セシメタリト云フ。二、宣教師ガ今回ノ騒擾ニ特種ノ關係アリト思ハレサルモ宣教師ノ管下ニアル鮮人牧師其信徒等ガ騒擾中活躍セルハ事更ナリ鮮人信徒等ハ此ノ運動コソ真ニ神ノ御旨ナレ

ハ我等ハ活躍セザル可ラズト固ク信シ居タリ。

三、宣教師ガ騒擾ノ前後ヲ問ハス今日迄或ハ不遜ノ態度ニ出テ傲慢我儘ナルガ如ク吾等ニ印象ヲ与ヘタルハ甚ダ遺憾ニシテ一ニハ吾等ガ英米ノ習慣其他ヲ了解セサリシニ依ル可シト雖又宣教師ハ今後充分慎重セラレンコトヲ乞フ。

1 午前十時 定州、

定州ハ曾テ日露戰爭ノ火蓋、始メテ開カレタル処ニシテ街ノ入口ニアル小丘ニハ紀念碑アリ宜川ヲ去ルコト鉄路約一時間ノ里程ナリ。

定州ハ当地方ニ於ル中心ニシテ人口密ニ商業繁盛ヲ極ム、万才運動モ亦順テ激シカリシト云フ。官憲ノ態度モ甚シク威圧的ニ出テタルニ因ルナル可シト言フモ當時殺戮セラレタル者百三十ヲ數フルヲ以テモ如何ニ當時ノ実況ヲ忍ブヲ得ン。

一、教会ノ焼跡

我等一行ハ定州教会堂焼失ノ光景ヲ目撃シタリ。焼跡ヲ見レハ只黒変セル柱石ノ屹シク残レルアルノミ。

宣教師ニ聞ク処ニ拠レハ(鮮人側ヨリ聴取)教会堂ノ火災三日前三憲兵隊ヨリ各戸ニ通告シテ、夜ハ七時ニ門戸ヲ閉シ往来ニハ必ズ水ヲ充滿セル桶ヲ備ヘ置ク可シトノ命アリタリ、其后教会堂附近ニ兵士巡邏シ、一夜石油ヲ注ギテ教会堂ヲ焼却セントセシモ失敗ニ終レリ。翌夜同シク兵士ノ靴音烈シク教会堂附近ニ響キ居タルヲ耳

ニシ、翌朝ニ至リテ見レハ教会堂ハ既ニ、全ク烏有ニ帰  
シ居タリ。

1 憲兵隊長ノ談 (定州)

一、耶蘇教会堂ノ火災ハ思フニ鮮人ノ放火セルモノナル可ク、  
元来クリスト教徒ナラサル鮮人ハ信徒ニ対シテ甚タシキ  
反感ヲ抱キ、特ニ基督教徒ガ惹起セル這般ノ独立運動ノ  
為ニ一般鮮人等ガ種々ノ苦痛ヲ受ケタル結果信徒ニ対ス  
ル反感憎惡ノ念ハ一層膨大セルモノナラン。

(上記鮮人ノ反感ニ対テ鮮人並ニ宣教師ノ言処ヲ綜合ス  
レハ鮮人一般ハ今日迄信徒ニ惡意ヲ挾シタル事ナク騷擾  
以後ト雖何等ノ變所ナク、却テ独立運動テフ同一目的ノ  
為ニ接近セル觀アリト、

二、目下教会ノ放火犯人嚴探中ナリ。

三、憲法ニ於テ既ニ認ムル如ク信徒ハ自由ニシテ吾等ハ基督  
教徒ノ集ヲ一切妨ケズ。

四、吾等カ基督教徒ニ対シテ何等干涉ノ出テサルノミナラ  
ズ、寧ロ便宜ヲ与ヘツツアル事ハ著シク現ニ組合教会ノ  
伝道師等ニハ特ニ本部ヨリ命令アリタルニ依レルガ部下  
憲兵ヲシテ信徒ノ各戸ヲ訪問シ集會方ヲ勧誘シ居ル程ナ  
リ。

五、宣教師等ハ騷擾前、即チ教会焼失前約一年間ニ於テ当地  
ニ一回モ来ラズ焼失後頻々トシテ来リ甚ダ不適ナル態度

ニ出デ何等証拠モナク兵士等ニ放火ノ罪ヲ課セントスルガ  
如キハ甚タ遺憾トスル所ナリ。云々

(別紙基督教徒ニ対スル迫害ニ関スル件、定州憲兵分隊長報  
告参照)

1 宣教師側ノ言フ処ニ拠レバ、

一、宣教師ガ騷擾後定州ニ来リ偶々鮮人等ト談合スレハ宣教師  
カ一旦同地ヲ去リタル後鮮人ハ直ニ憲兵ニ捕ヘラレ外国人  
ハ汝ニ何ヲ云イタルカト詰問セラレ殆ント半殺ニナル程打  
擲セラレサレバ何人モ集會スルヲ恐レザルモノナシ。

二、サレハ官憲側カ信徒等ノ集會ヲ許スモ實際ニハ鮮人等ハ何  
事モ為ス能ハス。

三、宣教師等カ教会焼失後頻々トシテ来ルハ同教会ヲ管理セル  
牧師ガ捕縛セララルヲ恐レテ何処カニ逃走シタレハ教会ヲ  
守ルモノ何人モナキ有様ニテ教会政治ノ組織上勿論定州ノ  
独立教会ナレトモ責任ハ当然宣教師ニ掛レルガ故ニ日曜毎  
ニ当地ニ来ルナリト。

四、鮮人信徒等ハ日本ノ消防手兵士若クハ憲兵ガ教会ニ放火シ  
タルモノナルコトヲ固ク信シ居レリ。

1 午後四時 郭山

吾等一行ハ定州ヲ去リテ鐵路郭山ニ来レリ、定州ニ於ケル鮮人  
等ハ恐レテ吾等一行ニ近クコトヲ為サザリシモ郭山信徒等ハ喜  
色満面ニ溢レ宣教師ヲ囲集シ吾等一行トモ又快談スルヲ得タリ

此処ニモ又教会堂ノ火災ニ会ヘルアリ、小使室ノミ漸ク其ノ災  
害ヲ免レ目下小使室ニ於テ説教其他ノコトヲ司セリト言フ。

郭山憲兵隊長ノ言処ニヨレバ騷擾当地ニモ勃発シタルガ当隊ニ  
テハ極メテ穏ナル態度ニ出デシカハ負傷者一人ヲモ出サズ事ヲ  
得タリ。尚基督教徒ハ自由ニ集會スルヲ許可シ居レリ、然ルニ  
宣教師ノ言ニヨレハ殆ント集會ハ不可能ニ帰シ若シ集マルモノ  
アルトキハ宣教師ノ退出後憲兵補助員等宣教師等ハ何ヲ述タル  
カト激シキ質問ヲ受ケ拷問ヲ受ケタルモノアリ。当地教会ノ牧  
師ハ恐怖ニ堪ヘズ何処ヘカ逃走セリト言フ。

我等一行ガ目撃シタル処ニヨレハ小使ガ吾等一行ト談話ヲナシ  
曾停車場迄見送リタル結果故シク憲兵ニ打擲セラレ翌日宣川美  
東病院ノ床上ニ呻吟シツツアルヲ見タリ(別紙郭山事件参照)

1 午後八時 宣川

鮮人基督教徒トノ会见(六名)

教会牧師ノ談

一、日清戦争ニ依テ日本ハ朝鮮ノ独立ヲ確保シ清人ヲ国外ニ追  
放セリ。

又日露戦争当時同地ニ於テハ日本兵ノ通過スルヲ見テ大ニ  
感激シ卵子其他馬車等ヲ運ヒテ日本ノ好意ニ感謝セリ、牧  
師モ又其一人ナリキ當時人民ハ日本ハ再朝鮮独立ノ為ニ露  
人ヲ討テリト固ク信シタリキ

降テ日韓併合當時ハ勿論不平不満ヲ抱キシモ皆無ナリシニ

ハ非ラザルモ多クハ併合ハ朝鮮ノ幸福トナリ得可シト確ク  
信ジ却テ歡喜セリ、然ルニ其後鮮人等ハ統治ニ満足シ得サ  
ルノミナラズ却テ不平不満ニ助長スル種々ノ印象ヲ受ケタ  
ルヲ以テ今日鮮人ハ失望落胆ノ境ニアリ。

二、前韓国政府時代ニハ基督教ノ宣伝今日程ニハ拘束セラレザ  
リキ。

三、現行教育制度ハ鮮人青年ニ殆ント向上發展ノ機会ヲ与ヘザ  
ルガ如ク将来官吏タル可キ道ヲ切斷サレタルガ如シ。

四、万才運動ニ加リタル鮮人ノ多数ハ日本ハ巴里講和會議ニ於  
テ五大國ノ一トシテ活躍シ民族自決主義ニ賛成セシモノト  
確信シタリ、而シテ鮮人ノ独立ニ対シテハ日本ノ大ニ歡迎  
スル所ナル可シト信シタリシカ豈計ランヤ銃剣、銃丸ヲ以  
テ見舞ハレタルハ鮮人ガ深ク慨嘆ニ堪ヘザル所ナリ。

1 鮮人教育家ノ談

彼ハ熱狂のニシテ談偶々日本ノ威圧的政策ニ及ベバ語、詰リテ

一声モ発スル能ハサリキ

一、併合當時巡查憲兵等ガ各戸ヲ搜索シ朝鮮ノ古典全部ヲ押収  
シ之ヲ京城ニ運ビ全部焼却シタル如キハ甚ダ無道ノ行為ト  
シテ其ノ誹リヲ免レズ。

二、現今教育制度ハ鮮人ヲシテ地平線下ニ保留シタルヲ目的トシ  
タルモノニシテ到底吾人ノ忍ブ能ハサル処ナリ。

1 六月八日 水曜 午前九時



朝鮮人數名トノ會合

婦人宣教會會長（年齢約四十才）

滿洲地方ニ數名ノ伝道師ヲ派遣シ朝鮮婦人中稀ニ見ル活動家ナリト言フ。

一、十數年間未タ曾テ日本ノ信徒或ハ吾等一行ノ如キ目的ヲ有スル人々ト快談スル機會ヲ得ザリシハ甚タ遺憾ナリ今其機ヲ得胸襟ヲ開キテ万事ヲ忌憚ナク打明クルコトヲ得ルハ誠ニ感謝ニ堪ヘズ。

二、鉄山地方ニ於ケル騷擾ノ状況

日本兵士ガ劍ヲ以テ鮮人少年ノ頭骸骨ヲ打碎スルヲ目撃セリ又妊婦ノ腹部ニ劍ヲ突キ刺セルヲ目撃セリ。

三、騷擾後自宅ニテ祈禱會ヲ開キ予メ官憲側ノ許可ヲ得居タルルニ一巡查室中ニ突入シ來リ彼女ノ頭部ヲ激打シ「貴様ハ何ヲナセルカ止メヨ」ト一言ノモトニ集會ヲ停止セリト言フ。（此婦人ハ談中偶々鮮人ノ殺戮セラレタル光景ヲ物語ルニ當ツテ語極ツテ遂ニ号泣セリ）

1 耶蘇高等普通女學校教授夫人ノ談

同女ハ宣川耶蘇女學校卒業生ニシテ齡凡ソ三十、二子アリ慰懃ナル婦人ナリキ。

一、同女ハ万才運動ニ加盟シ現ニ朝鮮ハ獨立シタルモノト思ヒ歎喜ノ余リ万才ヲ稱ヘタルモノナリト言フ。

二、其後同女ノ一友警察ニ拘引セララルルヲ見其後ヨリ打見守リ

居シニ直チニ捕ヘラレテ警察署ニ引卒セラレタリ。

三、警察署ニ於テハ警官ハ種々ノ尋問ヲナシタルモ堅ク口ヲ閉ジテ一語ヲモ発セザリシカハ同女ノ襟ヲ兩腕ヲ以テ抑ヘ妊婦ハヶ月ナル同女ノ腹部ヲ靴ニテ強圧セリト言、此処ニ至テ同女ハ遂ニ語ル能ハズシテ号泣セリ）

1 老母ノ談

老母ハ吾等一行ノ來訪ヲ甚ダシク歡迎シ極度ニ歡喜ノ様ヲ示セリ、彼女ノ言ハ聞ケバ我等老人等ガ今日受タル苦痛ハ止ムヲ得ザルトスルモ願クバ一行ノ尽力ニヨリテ我等ノ子ニ孫ニハ如斯苦痛ヨリ逃レシメヨ、願クバ彼等ニ幸福ナル將來ヲ与ヘラレシコトヲト。

1 本年四月迄横浜英和女學校ニ學ベル一女學生ノ談

一、曾テ横浜ニ學ベル時、内地人ガ甚ダ親切ニテ故郷ヨリ來ル音信中ニ騷擾後鮮人等ガ苦痛迫害ヲ受ケタル事ヲ記載シアリシモ到底之ヲ信ズルコト能ハズシテ如斯親切ナル日本人ガ如何ニシテ其様ナルコトヲ為スヲ得可キト確信シタリシニ今回家事上ノ都合ニヨリテ宣川ニ帰ルヤ鮮人ノ日本警官ノ為メニ「十五字欠字」目撃シテ衷ニ遺憾ニ堪ヘズト。

1 宣川美東病院訪問

管刑ニ処セラレタル四名ノ鮮人ヲ見舞ス。

医員ノ話

一、數日前新義州監獄ニテ管刑ニ処セラレタル六名当院ニ入院

シタルモ脱疽ノ兆ヲ呈セリ

二、直ニ手術ヲ施シ腐敗部分ヲ切取シタリ、不幸ニシテ内二名ハ手術後死亡セリ、

（注）我等一行ノ見タル四名ノ患者ハ皆直徑四インチニ亘リテ皮膚剝離シ右側臀肉突出セリ、上端ニ手頭全部ヲ挿入シ得ル穴アリ蓋カ背部ニ挿入シアル、ガーゼヲ引キ出セバ肉ヨリ血液中ニ濃汁ノ混入シタルモノ濁々トシテ出ズ一行中二名ハ遂ニ定規スル能ハズシテ頭痛ヲ覺ヘ出テ冷水ヲ求メ漸ク其苦痛ヲ免レタリ。

医員ノ言ハニヨレハ上記四名ハ結果良好ニシテ回復ノ見込十分アリト言フ前日本院長ハ上記死亡セル二名ノ検案書ヲ作成スルニ當リ其原因ヲ同地ノ警察医ト相談ノ結果管刑ノ結果遂ニ脱疽ヲ誘致シテ死ニ至リタルモノトナセリ。

然ルニ新義州検事局ハ同院長ニ出頭ヲ命ジ

一、検事ハ院長ニ前記二名ノ死亡者ノ原因ハ管刑ノ結果脱疽ヲ起シタリトノ検案ナルガ上記死亡者ガ管刑後直ニ鮮人医師ノ診察ヲ受ケタル処ニヨレバ流行性感冒ニカカリ居レリト言フ院長ノ意見如何、

一、院長答 上記兩名ガ当院ニ入院シタル時ニハ勿論感冒ノ兆ナカリシモ上記兩名ガ其以前ニ感冒ニ冒サレ居シヤ否ニ付テハ聞知セズ、

一、検事 鮮人医師既ニ証明スル処モアリ貴下ハ上記兩名

ノ死亡診斷書ヲ變更セララルル諒ナキヤ、

一、院長答 死亡診斷書ハ當院ノ判定ニシテ診斷書ハ變更スルコトヲ得ズ、

1 午後四時

宣川宣教師團ト再會見

當日ハ主トシテ吾人一行ガ宣教師團ニ日本ノ現状其他ニ付テ充分宣教師ノ了解ヲ求メン為ニ話シタルモノニテ日鮮融和ノ實ガ必ズ近キ將來ニ望ミラル可キヲ力説シタリ。

此処ニ吾等ガ奇異ニ感シタルハ宣教師ノ慰懃ナル態度ニシテ我等一行ノ來訪ヲ深ク感謝シ且又内地有力者深ク信賴シタルコトナリキ。元來当地方宣教師ハ併合以來官憲側ヨリ懷疑ノ眼ヲ以テ見ラレ又朝鮮全道ノ宣教師ノ日本人ニ対スル反感ハ多ク此ノ地ノ宣教



師ニ依テ助長セラレタリト言フ、然ルニ彼等ノ態度ハ恰モ一変セル如ク日本ノ事情ヲ深ク知ラントスル希望、日本人へ融合セントスル願ハ著シキガ如ク現ニ我等一行ガ別ルルニ望ミ目ニ涙ヲ漂ヘテ一言ヲモ発スル能ハザル宣教師二名アリタリ。

1 宜川郡庁訪問、

鮮人郡守、 当郡守ヘ永ク日本ニ遊学シ日語ニ巧ナリキ

一、 一般鮮人等へ自分ガ總督府ノ官吏ナルガ故ニ嫌悪スルガ故ニ鮮人等ガ今日何ヲ考ヘ何ヲ企テ居ルヤニ付テハ正確ニ知ル能ハズ、

二、 今回ノ騷擾ハ特種煽動者ニ依テノミ起リタルモノニ非ズシテ全国民中ニ漲レル不平不満、不安恐怖等此レ實ニ最大原因ト言フ可シ、

三、 本部ヨリノ命ニヨリ組合教会伝道者来リタル際ハ学校其他ヲ開放シ集会ヲ便シ加ヘテ集会者ヲ勧誘セシメ居レリ、

(後日聞知スル処ニヨレバ当郡守一子ハ京城ニ於テ万才運動ニ加リ活躍セル為メ拘引セラレタリト言フ、郡守ヘ之ヲ聞テ愚子ニ対スル監督不行届ナリシヲ遺憾ナリト言ヘリ)

1 午後七時

同地ニ於ケル耶穌學校教師日本人ト会見、  
氏ハ騷擾後暫々警察署ニ出頭ヲ命ゼラレタルガ署長ハ彼ニ何ガ故ニ外国人ノ操狗トナルヤ汝ハ國賊ニ非ズヤト侮辱ヲ受ケタリ。

関ノ設立ノ急務ヲ説レタリ、勿論何人モ反対スルモノナク内地人宣教師団ノ聯合ニテ開始センコトヲ議決セリ  
詳細ハ翌日開催セラル可キ日本人信徒大会ノ議ニ付セラルルコトトナシタリ。

1 六月六日 金曜 午前八時

ノープル博士ヲ訪問シ水原事件ニ付テ同氏ヨリ詳細ニ当時ノ情況ヲ知ルコトヲ得タリ。

一、 発安城教会ニ於テ殺戮セラレタルハ廿三名ニシテ内基督教徒九名アリタリ。

二、 発安城附近ニ於テ焼却セラレタル家屋三百二十七戸、

三、 同地附近ノ十七ヶ村ハ(六十六ヶ部落)ハ全部烏有ニ帰セリ、

四、 長谷川總督ハ千五百円ノ私財ヲ投シテ焼却セラレタル教会ノ再建ヲ望メリ、

五、 道長官ハ恩賜金ノ利子一萬円ヲ慈善ノ意ニテ分与スル口約ヲナセリ、

六、 外国宣教師等ハ三千六百円ヲ贈出シテ当座ノ急ヲ救ヘリ、  
教会ニ於テ鮮人二十三名ガ慘殺セラレタル地ハ憲兵並ニ巡查等ガ鮮人ノ為ニセラレタル地方ヨリ約十哩ヲ隔ツ、  
ノープル博士ハ昨年中鮮人信者ヲ失フコト約一万人ナリキ多クハ求道者ナリシガ憲兵巡查等ノ干渉ヲ受クルヲ以テ遂ニ恐怖シテ以来何人モ来ラズ。

時ニ一鮮人來リ一行ニ会見ヲ求メタルガ同鮮人ハ当地ニ於ル有力者ニシテ今回ノ騷擾ニ必ズ煽動的地位ニアル可キ筈ノ人ナリキト

言フ、川上ハ同人ヲ一室ニ招シ其ノ言フ処ヲ聞ントスレバ鮮人ハ固ク川上ノ双手ヲ握リテ一言ヲモ発スル能ハズ、熱淚頰ヘ伝テ流ル、最後ニ至リ彼ハ「鮮人ノ為ニ御願シマス」ト一言ヲ殘シテ暗中ニ去レリ。

我等一行ガ同夜京城ニ向ハントシテ停車場ニ赴キタルニ遠ク離レテ一行ヲ見送ルハ將ニ此ノ一鮮人ナリキ。

1 同夜京城ニ帰ル

六月五日 朝鮮ホテルニ於ル午餐會

總督府官吏佐見、関谷岡氏ノ招待ニヨリ我等一行並ニ丹羽清二郎氏午餐會ニゾメリ、

話題ハ主トシテ朝鮮一般ノ情況ニシテ吾等一行ノ各地ニ於ケル見聞ヲ熱心ニ聴取セリ。

1 午後八時

宣教師団並ニ在留内地人基督教団ノ代表者ト会見

一、 当夜ハ主トシテ宣教師並ニ内地人信徒ノ融和ヲ計ラントシテ吾等一行ガ特ニ所望シタル會合ナリキ、集マルモノ各派ヲ代表シテ日本側ヨリ八名、外国人側ヨリ五名ナリキ、

当夜、ノープル博士ハ、併合當時以来未ダ一人ノ宣教師ガ公私ヲ問ハズ鮮人ニ獨立思想ヲ奨励セルゴトキヲ聞カズ、

ノープル博士ハ更ニ朝鮮ノ現状ヲ省ミテ此ニ朝鮮事情通信機

1 午前十時

スミス氏ト会見

同氏ハ宣教師並ニ日本人耶穌教徒ガ融和結合ニ関シ極力尽力セント申出ラレタリ、

1 午後二時

西大門監獄署ヲ訪フ、

典獄ト會談シタリシガ同氏ハ罪人取扱ニ関シテハ極メテ寛容ニシテ獄中又清潔ナリキ

一、 罪人中宣告ヲ待テルモノハ未ダ工作ニ従事セシメラレズ、座隅シテ終日ヲ待テル如シ、

二、 既ニ宣告ヲ受ケタル罪人ハ一帯ニ健康ノ氣溢シ喜々トシテ業務ニ従事スルガ如シ、獄中技術ヲ修得シ出獄後ハ非常ニ生計ヲ助クルコト多シト言フ。

三、 天道教主 孫秉恩氏ハ独房ニ在リ威儀堂々タリキ

四、 金マリヤ 金女ハ全ク独房ニアリ元女子学院ノ生徒ニシテ、二月ニ朝鮮ニ帰國シ今回獨立運動中婦人側ノ牛耳ヲ取リシト言フ(同女ハ曾テ親日的ニシテ日本人ノ親切ナルコトヲ口ヲ極メテ賞揚シタル一人ナリシガ一度警察庁ニ引致セラレテ以來甚數日トナリシト言フ)

1 午後五時

組合教会本部員諸氏トノ晚餐會

一、 組合教会ノ朝鮮ニ於ル伝道ノ發端並ニ伝道ノ方法ニ付テ説明

コ聞ケリ、

二、組合教会伝道本部参事柳一宣氏ト会見

氏ハ朝鮮ニ於ル有数ノ数学者ニシテ永ク日本ニ學ヒ鮮人間ニ於ル勢力ハ騷、以前偉大ナリキト言フ、

1 午後八時

兎島警察總監訪問、

一、吾等一行ガ地方ニ於テ視察セル逐一ヲ報告シ特ニ郭山ニ於テ

打撃セラレタル鮮人ノ件ニ付キ取調方ヲ乞フ、

二、總監ハ定州地方ニ於ル耶蘇教徒ノ実情ヲ一行ヨリ聞キ何等

カ救済ノ道ヲ講ス可キヲ約セリ、

三、宣教師等ガ火災其ノ他破壊セラレタル教会或ハ鮮人慘殺セ

ラレタル諸地方ニ赴クコトハ諸地方ノ役人ヲシテ神經衰弱

ニ陥ラシムルニ充分ナリ、宣教師等ハ歸來後直ニ何事カラ

領事ニ報告シ領事ハ總監ニ訴フルカ故ニ總監ハ直ニ電報ニ

テ当地地方ノ役人ヲ譴責スルニ依テ地方ノ役人ハ宣教師其他

ノ姿ヲ見レバ又何事カ起ラント言ヒ絶ヘズ注意ヲ払ヒ鮮人

中彼等ト談合スルモノアラバ後刻彼ヲ捕ヘテ何事カ聞出サ

ントスルハ自衛自守ニシテ止ヲ得サルコトナル可シ、

四、憲兵其他一般ノ更迭ヲ行フハ現場救済ノ方法タル可シ、

1 六月七日 午前

絲督府訪問、

山縣政務總監、宇佐見内務部長官、其他ニ告別ノ辭ヲ述ブ、

師ト合同シテ実情調査ノコトニ当ラシムルコトニ議決セ  
リ。

1 午後八時

京城内地人実業家トノ会見、

弁護士松本正賢氏主催セラル、

二、朝鮮殖産銀行理事ノ談

同銀行ニ於テハ鮮人日本人ノ區別ナク給料ハ同額ナリ鮮人

中内地ノ大学ヲ卒業セルモノニハ内地人中大学ヲ卒業セル

モノト同額ノ給料ヲ与フ、今回ノ騷擾ノ為鮮人雇員中一名

モ欠席シタルモノナキハ不思議ナリ、

三、朝鮮銀行副總裁ノ談

同銀行ニ於テハ内鮮兩人トモ同額ノ給料ナレドモ内地人ニ

ハ特ニ滞在手当ヲ給ス、

鮮人中内地其他滿洲方面ノ支店ニ在勤ヲ命ゼラレタルモノ

ニハ同ジク滞在手当ヲ与フコト朝鮮ニアル内地人雇員ト同

額ナリ、

三、内地一般ニ商業其他社会上ノ方面ニ於テ鮮人ニ差別的待遇

ヲ与ヘタルコトヲ遺憾トス、

四、騷擾以後鮮人ノ態度一変シ待遇法ノ變更ヲ要求スルモノ多

シ、松本氏ハ自宅ニ書生トシテ預ル一鮮人青年ノ忠実ナル

執務振リヲ賞揚シ現在殖産銀行ニ勤務シ居レリ、民間ニ於

テハ鮮人ニ如斯待遇ヲ与マルニ、ハ鮮人ニシテ遂ニ心服セ

一、ボールス氏ガ宣教師中鮮人迫害ノ報告ヲ搜集スルニ活躍セル

一宣教師ト会合シタルガ同宣教師ノ言ハニヨレバ鮮人等ハ最

近同氏ノ宅ヲ訪フモノ多ク同氏ハ常ニ極力獨立運動ノ絶望ナ

ルコトヲ訓戒シ居レリト言フ、

他ノ一宣教師ハ、ボールス氏ニ問フニ内地ノ有力ナル弁護士

ガ朝鮮總督府ヲ被告トシテ今回ノ慘虐ナル行為ニ付告訴スル

モノ非ラザルカスレバ本問題ハ国民ノ一般知ル処トナリ

又国民一般ヲシテ朝鮮ノ現状並ニ官憲ノ取レル手段方法等ニ

関シテ知、悉セシムル方法トナル可シト言ヘリ、

1 午後二時

一、青年会俱樂部ニ於ル日本人耶蘇教徒トノ会見

渡辺高等法院長主催セリ、

渡辺氏ハ地方ニ於ル耶蘇教徒ニ対スル差別的態度並ニ迫害等

ニ関シ眞偽ヲ我等ニ問ヘリ、

二、郭山ニ於ル一件及実見シタル事件等ヲ物語リタルニ一同基督

教徒ハ公然ニハ自由ナルモ實際ニハ迫害セラレ居ルコトニ同

意セリ其理由トシテ、

一、官憲ハ基督教徒ヲ理解セズ、

二、基督教徒中今回騷擾ニ煽動者タルモノ多キコト(尤モ信徒

ガ煽動者タリシハ基督信者ナリシガ為ニ非スシテ鮮人ナリ

シガ為ナリ)

三、京城基督教會同盟ヲ組織シ、委員ヲ置キ朝鮮ニ於ケル宣教

シムルモノニシテ併合ノ利益ヲ初メテ味フコトヲ得ヘシ、

五、言論ノ自由ハ絶対的必要ニシテ吾ニ鮮人ノミナラス延イテ

在留内地人ニ迄及ボスヘキモノナリ、

1 六月八日 午前七時、

関谷貞三郎氏訪問、

1 十二時、

朝鮮青年會主事、

プロクマン氏訪問、

1 午後三時、

宇佐見内務部長官訪問、

1 午後六時、

兎島警察總監訪問、

1 午後七時半、

夜行ニテ釜山ニ向フ、

x x x

x x x x

昭和35年5月15日 印刷  
昭和35年5月18日 発行

朝鮮近代史料 研究集成・第3号  
研究集会第100回記念

財団法人友邦協会・社団法人中央日韓協会・保管  
朝鮮関係文献・資料総目録  
(第1版)

(二百部限定版・会員配布)

|       |                                                   |
|-------|---------------------------------------------------|
| 編集幹事  | 近藤 鋌一                                             |
| 編集委員  | 権 寧 旭 宮 田 節 子<br>姜 徳 相 青 木 香 代 子<br>金 己 大 梶 村 秀 樹 |
| 印刷・発行 | 澁 谷 礼 次                                           |
| 顧問    | 穂 積 真 六 郎                                         |

東京都千代田区丸の内仲12号館6号館  
(中央日韓協会内) 電話(281)1684

財団法人 友 邦 協 会  
朝 鮮 史 料 研 究 会

## 編 集 後 記

朝鮮近代史の講座をもたない日本の大学で、朝鮮人の学生達が、朝鮮近代史の勉強と取り組んでいる。しかも、資料はろくすつばなく、教授も日本人の学生も殆んどソツポを向いている。漫画の説明ではなく、それが今日における朝鮮近代史料研究の現実の姿である。

私達は、この学究達に、出来るだけ多くの資料を提供して協力しようと、この研究会の助成にかかったのである。

だから、この研究会は理クツをこねたり、指導するというようなものではない。皆がお互いにお互いの考えを交換し合い、私達の保管している資料を充分に利用して貰えればよい訳である。

この「研究集成」に載せた学生諸君の論文は、その大部分が、ここに保管されている資料に基いて書かれたもので、勿論、学生諸君の努力に負うものではあるが、私達の考えが非常に有意義であつたことを例証して呉れた一つの成果として非常に喜ばしく思っている。

むしろ、この論文の史眼、発想の中には、各自の生きてきた世代や、主観、思考の相違などから、相当の批判はあるものと思う。しかしながらそれは、お互いが前進するための試練であり、その批判も含めて、このような主観、思考の堆積の中から、中正の歴史が生まれて来るものと私は考えている。その意味において、私達は、決して結論を急ごうとしない。

稿を終わるに当り、この二年間、御出講下さった諸先生はじめ、御協力を賜つた多くの方々から感謝の意を捧げ、同人一同とともに、厚く御礼申し上げ、併せて今後の御声援と御叱正とを御願ひする次第である。

近藤 鋌一

0~9 財団法人友邦協会保管。原稿目録

| 分類記号 | 函架 | 編著者名  | 書名                            | 冊 | 刊行年月   | 型  | 頁    |
|------|----|-------|-------------------------------|---|--------|----|------|
| 338  | K2 | 水田直昌  | 朝鮮金融史(1~9)                    | 9 | 昭28・10 | 原稿 | 777枚 |
| 337  | "  | 高久敏男  | 朝鮮の貨幣                         | 1 | 昭32・3  | "  | 150" |
| 338  | "  | 相川尚武  | 近代朝鮮の財政と金融 1<br>普通銀行篇         | 1 | 昭32・2  | "  | 48"  |
| "    | "  | 日浅不加之 | " 2<br>地場銀行篇                  | 1 | 昭32・5  | "  | 52'  |
| "    | "  | 上原理夫  | " 3<br>特殊銀行篇その1<br>(朝鮮殖産銀行)   | 1 | 昭33・1  | "  | 114  |
| "    | "  | 伏見寛次  | " 4<br>特殊銀行篇その2<br>(朝鮮信託株式会社) | 1 | 昭33・1  | "  | 37   |
| "    | "  | 権藤四郎介 | 権藤資料                          | - | 昭32・10 |    |      |

~~~~ 編集後記 ~~~~

1. この「総目録」は単独書として出版する計画を、急に「研究集成第100回記念」の付篇として出すことに変更したため、完全な編成をすることが出来ませんでした。他日を期して完璧なものとしていきたい考えです。
2. 最初、全資料に寄贈者の芳名を付すつもりでしたが、検索の便とスペースの都合で、今回は、大口寄贈分のみ、別個編成にさせていただきました。伊藤博文翁の「秘書類纂」等、貴重かつ多数の故丸山鶴吉氏蔵書を頂いた丸山家はじめ、御寄贈下さった各位に対し、御了承を願うと共に、厚く御礼申し上げます。
3. この「総目録」の編集に当っては、保管資料の外、所在調査についても、非常に力を注いでいます。収載につき御協力願えれば幸甚に存じます。

~ 近 藤 ~

~~~~~



財団法人友邦協会蔵録音テープ目録

分類記号	講述者氏名	講 述 題 目
070	山 県 五 十 雄	ソウルプレス創刊の頃を語る
027	桜 井 義 之	大正期の文献と朝鮮研究機関について
124	高 橋 亨	朝鮮文化史の流れ
190	小 田 安 馬	総督府時代の外人宣教師について
289	宮 田 節 子	伊 藤 博 文 について
289・334	相 場 清	安重根・間島問題など
289	深 谷 博 治	伊 藤 博 文 について
"	渋谷 礼 治	頭 山 満 翁 について
292	白 井 博 久	北朝鮮から帰つて
312	田 中 武 雄 外12講師	総督統治を顧みて(研究会創立一週年記念会)
"	穂 積 真 六 郎	総 督 統 治 を 通 観 し て
"	田 中 武 雄	小 磯 総 督 時 代 の 概 観
"	大 野 緑 一 郎	南 総 督 時 代 の 概 観
"	遠藤柳作・山名酒喜男	阿 部 総 督 時 代 の 概 観
312	今 村 武 志	統 監 府 時 代 を 中 心 に
314	田中・筒井・山名・ 本田・秋山	朝 鮮 参 政 権 実 施 問 題
316	田 中 武 雄 外5講師	日本治下、朝鮮民族運動の概要
"	坪 江 仙 二	朝 鮮 の 民 族 運 動 について
"	"	"
317	萩 原 彦 三	朝鮮総督府の官制について
318	萩原彦三・富永文一	朝 鮮 の 地 方 制 度 について
"	岸 勇 一	法令審議から見た地方自治と農業開発
319・329	田 川 孝 三	竹島問題の歴史的考察
322	萩 原 彦 三	朝鮮総督府時代の法令について
323	河 内 圭 司	朝鮮土地調査事業の体験を聞く
"	藤 本 修 三	土 地 調 査 事 業 について
"	"	朝 鮮 の 税 制 について

分類記号	講述者氏名	講 述 題 目
327	国分三亥・穂積真六郎 (対談)	日本司法制度の韓国扶植について
328	塩 田 正 洪	朝 鮮 農 地 令 について
329	森 田 芳 夫	出入国管理行政と在日朝鮮人の実態
334	穂 積 真 六 郎	間 島 問 題 について
"	田中・神尾・原田・ 穂積	日本治下の在満朝鮮人問題
337	高 久 敏 男	朝 鮮 の 貨 幣 について
338	大 熊 良 一	朝 鮮 の 金 融 組 合 について
340	水 田 直 昌	朝鮮総督府の財政について
361	善 生 永 助	私 の 朝 鮮 研 究 の 概 括
"	"	朝 鮮 の 聚 落
369	田 中 武 雄	引 揚 問 題 について
490	和 田 八 千 穂	朝鮮における西洋医学の先駆として (1)
"	"	" (2)
561	穂 積 真 六 郎	特 許 鉱 山 について
569	"	朝 鮮 の 鉱 業
600	"	朝鮮総督府殖産局の仕事
611	金 己 大	朝 鮮 農 民 分 解 の 研 究
611・651	渡 辺 豊 彦	火 田 民 について
611	久 間 健 一	朝 鮮 農 業 の 概 観
650	石 田 常 英	朝 鮮 の 林 業
660	穂 積 真 六 郎	朝 鮮 の 水 産
686・540	武者 敏 三 小 倉 武 之 助 (対談)	京釜線創始の頃および朝鮮電気事業の回顧
675	善 生 永 助	朝 鮮 の 市 場 経 済
686	田 中 保 太 郎	朝 鮮 の 鉄 道

東京教育大学図書館。穂積文庫

故穂積重遠先生寄贈書中、朝鮮関係書目(昭34-9-9調)

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
001・312		朝鮮総督府 編	施政二十五年史	/	昭10・10	B5	986
001・316,8		副島道正	朝鮮統治に就て	/	大13	A5	44
001・317		朝鮮総督府 編	朝鮮に於ける新施政	/	大9・8		
001,05・292		統監府 "	韓国事情要覧	/	明39・9	B5	50
210,67 329,4		篠田治策	日露戦役。国際公法	/	—		
210,65 329,4		高橋作衛	日清事件中、国際法上の攻究	/	—		
210,65 319,3		立作太郎	明治27・8年戦役とヨーロッパ強国の外交	/	—		
312		統監府 編	韓国併合顚末書	/	明43・9	B5	79
316		千葉了	朝鮮独立運動秘話	/	—		
"		朝鮮総督府警務課	不逞運動の真相	/	—		
319,22		佐藤安之助	満蒙問題を中心とする日支関係	/	—		
320		史官編纂	明治八年法例彙纂(民法1・2)	/	—		
"・380		朝鮮総督府法務局	慣習調査報告書	/	—		
320,8		京城帝大法文学部	京城法学会論集 第1冊	/	—		
"		"	法学論集	/	—		
320,921		野村調太郎	新案 朝鮮六法	/	—		
322,21		浅見倫太郎	朝鮮法制史稿	/	—		
"		朝鮮総督府中樞院	李朝法典考	/	昭11・2	A5	422
"		" "	経国大典	/	昭9・10	"	600
"		" "	統大典	/	昭11・3	"	482
"		" "	大典統録	/	昭10・7	"	288
"		朝鮮総督府 編	訳解。大典会通	/	—		
322,22		" 中樞院	校訂 大明律直解	/	—		
324,6,7		吉武繁	朝鮮親族法、相続法要論	/	—		

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
324,6,7		切山篤太郎	朝鮮親族相続慣習類纂	/	—		
"		馬場社	朝鮮親族相続慣習法綜覧	/	—		
"		藤田東三	朝鮮親族法、相続法	/	—		
324,87		朝鮮総督府法務局	朝鮮戸籍例規	/	—		
324,7		" "	朝鮮祭祀相続法論序説	/	—		
"		中樞院	李朝の財産相続法	/	—		
"		広池千九郎	韓国親族法、親等制度の概要	/	—		
324,921		不動産法調査会	韓国不動産ニ関スル調査記録	/	—		
332		京城帝国大学	朝鮮経済の研究	/	—		
334,4		拓殖局	近世殖民史	/	—		
338		朝鮮殖産銀行	朝鮮殖産銀行十年史	/	—		
338・333		岡崎遠光	朝鮮金融及産業政策	/	明44・3	A5	275
342		統監府	韓国財政整理報告	6	明38~40	"	各500
361,6		村田覺磨	朝鮮の生活と文化	/	—		
361,4		大阪府学務部社会課	在阪朝鮮人の生活状態	/	—		
361,6,7		朝鮮憲兵隊司令部	朝鮮社会考	/	明45・3	A5	144
"		朝鮮総督府	朝鮮の集落 後篇	/	—		
"		"	朝鮮部落調査予察報告 /	/	—		
382		今村 勲	朝鮮風俗集	/	—		
382,221		李能和	朝鮮女俗考 全	/	—		
"		"	" 和訳原稿	/	—		
386,4 324,62		藤田東三	李朝実録、朝鮮婚姻考	/	—		
388		高橋亨	朝鮮の俚諺集 付、物語	/	—		
389		池貝 猛	民族科学の本義	/	—		
"		鳥居龍蔵	極東民族 第一巻	/	—		
389,2		帝国学士院	東亜民族名彙	/	—		
611,9		重松 漸修	朝鮮農村物語	/	—		

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
318,25	EA	富村六郎	編 忠南論山発展史	1	大 2・12	A5	186
318,21	"	咸鏡南道	" 咸鏡南道々勢一斑	1	大 15 -	-	-
"	"	"	" 鏡城の沿革	1	大 2 -	-	20
318,22	"	平北寧辺郡	" 寧辺郡勢一斑	1	昭 4・11	B6	28
318,23	"	黄 海 道	" 黄海道要覧 大正 15 年	1	昭 2・1	-	177
318,27	"	全羅南道	" 全羅南道教育及宗教一斑	1	昭 2 -	-	49
318,71	"	全南済州島庁	" 未開の宝庫・済州島	1	大 13・12	-	113
319,2	"	内外評論社	" 満 蒙 の 改 造	1	大 11・9	-	320
332	"	朝鮮銀行	" 鮮満経済十年史	1	大 8・12	B5	461
317,21 323,98	"	朝鮮総督府 臨時土地調査局	" 朝鮮土地調査概要	1	大 7・11	A5	20
350,1	"	朝鮮総督府	" 統計学大意	1	大 13・4	"	86
366,2	"	朝鮮副業共進会	" 記念写真帖	1	大 13・6	B5	97
"	"	"	" 朝鮮之副業	1	大 12・10	A5	219
373,2	"	全羅南道	" 全羅南道 学校分布図	1	昭 2・10	-	110
382,221	"	朝鮮総督府	" 朝鮮の風習	1	大 14・6	A6	70
"	"	"	"	1	大 14・6	"	54
377,221	"	咸鏡南道教育会	" 咸鏡南道教育一斑	1	大 15・7	"	39
377,7	"	桜井 錠 二	学術研究の振興に関する意見書	1	-	A5	49
383,8	"	清水 兵 三	朝鮮料理を前にして (京城旅行案内社刊)	1	昭 3・10	B6	50
388	"	河 村 清	編 満州の伝説と民謡 (満州事情案内書)	1	昭和 5・11	B6	138
460	"	小川 運 平	満州博物篇	1	昭 9・12	B5	178
522,1	"	谷 井 済 一 栗 山 俊 一	韓 紅 葉 (度支部建築所刊)	1	明 43 -	B6	72
540,9	"	京城電気株式会社	京城電気株式会社二十年沿革史	1	昭 4・4	A5	163
543,3	"	朝鮮水電株式会社	赴職江水力発電工事概要	1	昭 4・10	"	7
606,7	"	京城協賛会	編 始政 5 年記念朝鮮物産共進会京城協賛会報告	1	大 5 -	"	154

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
610,7	EA	水原高等農林学校	水原高等農林学校	1	昭 8・6	A5	43
611,1	"	東洋拓殖株式会社	東 拓 十 年 史	1	大 7,12	B5	148
611,3	"	脇 谷 洋 次 郎	帝国糧食給源の一提案 (釜山日報社刊)	1	大 15・9	A5	38
611,9	"	大 河 内 正 敏	農村振興に関する一考察 (工政会刊)	1	大 13・7	"	34
614,2	"	朝鮮総督府	編 朝鮮の土地改良事業	1	昭 3・11	"	146
614,2	"	黄海社工務部	" 上野博士・朝鮮開墾従事談	1	大 8,9	"	30
614,3	"	八 田 吉 平	天水畚問題研究の急務に就て	1	昭 4・2	"	13
"	"	朝鮮総督府	編 朝鮮の水利組合	1	-	"	12
"	"	藤 井 寛 太 郎	益沃水利組合の事業	1	大 12・6	"	33
"	"	"	不二興業株式会社土地改良事業 成績	1	昭 4・10	"	110
614,5	"	朝鮮総督府	朝鮮の干拓事業	1	昭 -	"	40
625	"	勸業模範場 森 田 為 吉	果 樹 栽 培	1	大 5・9	A5	125
630,2	"	朝鮮総督府 蚕業試験所	編 蚕業試験場一覧	1	大 13・7	"	10
646,1	"	黄海道畜産協会	" 誰にも出来る初生雛の育て方	1	大 14・4	"	14
650,2	"	朝鮮総督府	" 朝鮮の林業	1	-	"	93
650,2	"	渡 辺 武 夫	朝鮮咸北の山々	1	-	"	210
651,18	"	朝鮮総督府営林廠	営林廠案内	1	大 4・9	"	44
686,225	"	町 田 長 作 民衆時論社	満蒙の鉄道線	1	大 15・1	"	106
696,8	"	京城中央電話局	編 電話番号簿 昭和 5 年版	1	昭 5・6	"	39
"	"	元山郵便局	編 " 昭和 15 年版	1	昭 15・10	"	86
708,21	"	朝鮮総督府	編 朝鮮古蹟図譜解説 (1~7)	7	大 6・3	A5 各 P	43 位
829,1	"	小 倉 進 平	" 南部朝鮮の方言	1	大 13・3	A5	212
829,1	"	朝鮮語研究会	" 鮮和新辞典	1	昭 5・3	"	833
908	"	成 田 礪 内	金 剛 小 詩	1	大 14・12	B6	302
929,21・	"	自由討究社	編 屋永編・雲英伝	1	大 13・8	"	78
"	"	"	" 沈香伝	1	大 12・3	"	94

0~9 川崎文庫目録

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
001,05	KA	朝鮮総督府 編	最近 朝鮮事情要覧 (大正2年版)	1	大 2・3	B6	490
"	"	"	" (大正3年版)	1	大 3・2	"	513
"	"	"	" (大正4年版)	1	大 4・1	"	482
"	"	"	" (大正5年版)	1	大 5・1	"	508
"	"	"	朝鮮要覧 (昭和5年版)	1	昭 5・2	A6	308
"	"	" 観測所	日用便覧 (大正9年版)	1	大 8・12	"	140
"	"	"	" (昭和3年版)	1	昭 2・12	"	195
"	"	" 康津郡	統計年報 (大正5年版)	1	大 5・3	A5	247
"	"	朝鮮ガイダンス	朝鮮年鑑 (大正15年版)	1	大 14・11	B6	414
001	"	民衆時論社	白衣同胞に告ぐ (韓文)	1	昭 3・8	A5	31
"	"	朴春琴	我等の国家 新日本	1	昭 5・11	"	56
"	"	松村松盛	明け行く朝鮮	1	大 14・2	B6	334
"・123	"	自由討究社	東経正義・朝鮮問題講演集	1	大 11・11	"	123
123・169 929,21	"	"	"・侍天教の教育・鳳凰琴	1	大 11・9	"	78
123,42	"	李王職	故李太王葬儀当日参列諸員心得	1	大 8・3	-	-
180,221	"	朝鮮仏教社 編	朝鮮仏教 (昭2・11号)	1	昭 2・11	A5	50
190,4	"	朝鮮耶蘇教会	朝鮮 Transactions of The Korean Branch of The Royal Asiatic Society	1	大 12・7	B5	87
204,21	"	菊池謙讓	朝鮮雑記	1	昭 6・2	B6	197
221,031	"	小池奥吉	北鮮太古石器 (会寧史蹟研究会)	1	大 12・11	"	61
221,021	"	広瀬憲三	古朝鮮と平壤 (平安南道教育会)	1	大 13・5	"	34
"	"	"	歴史の平壤 ( " )	1	大 13・5	"	156
221	"	森潤三郎	朝鮮年表	1	明 37・1	B6	316
221,05	"	篠田治策	南漢山城の開城史	1	昭 5・9	A5	90
"	"	長尾景弼	文禄慶長 朝鮮役	1	明 27・7	"	208
"	"	今村 綱	居留民の昔物語 (朝鮮二昔会刊)	1	昭 2・1	B6	338
281,036	"	朝鮮総督府 編	朝鮮総督府職員録	1	昭 3・6	A5	434

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
228,4	KA	朝鮮総督府 編	御親耕及御親刈記念	1	-	-	6
289,1	"	吉田正一	朝鮮に若朽して	1	大 14・5	B6	285
289,2	"	自由討究社 編	洪吉童伝	1	大 10・10	"	99
291・292	"	青柳網太郎	日韓史蹟	1	明 43・6	A5	324
"	"	児玉章一	米国新聞記者の見た日本と満州	1	昭 10・8	B6	209
292	"	野口保興	韓国・南満州	1	明 43・2	A5	218
292,09	"	黄海道 編	黄海道	1	大 15・8	B6	87
"	"	渡辺豪・二宮謙太郎	朝鮮名勝記	1	明 43・12	B6	302
"	"	朝鮮総督府鉄道局	京元線々路案内	1	明 45・7	B6	17
"・453,9	"	黄海道 編	黄海道の温泉	1	大 14・6	"	33
292,038	"	朝鮮銀行	Pictorial Chosen and Manchuria	1	大 8・11	A5	316
292,1	"	元山毎日新聞社	東朝鮮 一名・元山案内	1	明 43・9	"	210
"	"	崔南善	白頭山観参記	1	昭 2・7	B6	354
292,104	"	岡本嘉一	開城案内記 (開城新聞社刊)	1	明 44・4	"	86
"	"	岡田 貢	郷土資料・京城五百年 (京城府公立普通学校教員会刊)	1	大 15・6	A5	134
292,1	"	和田一郎	朝鮮の匂ひ	1	大 10・1	B6	426
"	"	加納萬里	朝鮮情緒	1	昭 4・9	"	116
292,104	"	開城保勝会 編	高麗日都 開城案内	1	大 13・11	"	52
292,15	"	菊池謙讓	金剛山記	1	昭 6・9	"	192
292,18	"	平井武夫	馬山と鎮海湾	1	明 44・11	A5	186
292,18	"	慶尚南道協賛会	慶尚南道案内	1	大 4・9	"	137
292,2	"	篠田治策	文禄役と平壤	1	大 8・8	"	104
292,5	"	川村芳男	撫順要覧 (撫順案内社刊)	1	大 12・10	B6	211
"	"	満蒙文化協会	満州の話	1	大 12・12	"	46
292,6	"	忠清南道	忠清南道案内 (湖南日報社刊)	1	大 4・8	"	58
312,21	"	青柳網太郎	総督政治史論	1	昭 3・3	A5	428
317,731	"	加藤好晴	盤石県城の築	1	昭 8・9	"	304



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
330	26	韓国銀行調査部編	韓国銀行調査月報	65	1954・4	B5	177
"	"	"	"	66	" 5	"	216
"	"	"	"	67	" 6	"	224
"	"	"	"	68	" 7	"	195
"	"	"	"	69	" 8	"	194
"	"	"	"	70	" 9	"	204
"	"	"	"	71	" 10	"	170
"	"	"	"	72	" 11	"	157
"	"	"	"	73	" 12	"	163
"	"	"	"	74	1955・1	"	174
"	"	"	"	75	" 2	"	195
"	"	"	"	76	" 3	"	175
"	"	"	"	77	" 4	"	181
"	"	"	"	78	" 5	"	220
"	"	"	"	79	" 6	"	178
"	"	"	"	80	" 7	"	194
"	"	"	"	81	" 8	"	195
"	"	"	"	82	" 9	"	225
"	"	"	"	83	" 10	"	243
"	"	"	"	84	" 11	"	215
"	"	"	"	85	" 12	"	226
"	"	"	"	86	1956・1	"	217
"	"	"	"	87	" 2	"	336
"	"	"	"	88	" 3	"	220
"	"	"	"	89	" 4	"	212
"	"	"	"	90	" 5	"	232
"	"	"	"	91	" 6	"	231
"	"	"	"	92	" 9	"	265
"	"	"	"	93	" 10	"	244
"	"	"	"	94	" 10	"	196
"	"	"	"	95	" 11	"	209
"	"	"	"	96	" 12	"	232
"	"	"	"	97	1957・1	"	266
"	"	"	"	第12巻 1号	" 2	"	236
"	"	"	"	" 2"	" 3	"	300
"	"	"	"	" 3"	" 4	"	248
"	"	"	"	" 4"	" 5	"	266

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
330	26	韓国銀行調査部編	韓国銀行調査月報	第11巻 第5号	1957・5	B5	228
"	"	"	"	" 6"	" 6	"	255
"	"	"	"	" 7"	" 7	"	247
"	"	"	"	" 8"	" 8	"	255
"	"	"	"	" 9"	" 9	"	267
"	"	"	"	" 10"	" 10	"	268
"	"	"	"	" 11"	" 11	"	247
"	"	"	"	" 12"	" 12	"	231
"	27	"	"	第12巻 第1号	1958・1	"	220
"	"	"	"	" 2"	" 2	"	223
"	"	"	"	" 3"	" 3	"	208
"	"	"	"	" 4"	" 4	"	202
"	"	"	"	" 5"	" 5	"	197
"	"	"	"	" 6"	" 6	"	206
"	"	"	"	" 7"	" 7	"	216
"	"	"	"	" 8"	" 8	"	203
"	"	"	"	" 9"	" 9	"	-
"	"	"	"	" 10"	" 10	"	209
"	"	"	"	" 11"	" 11	"	252
"	"	"	"	" 12"	" 12	"	218
"	"	"	"	第13巻 第1号	1959・1	"	207
"	"	"	"	" 2"	" 2	"	239
"	"	"	"	" 3"	" 3	"	207
"	"	"	"	" 4"	" 4	"	199
"	"	"	"	" 5"	" 5	"	226
"	"	"	"	" 6"	" 6	"	199
"	"	"	"	" 7"	" 7	"	215
"	"	"	"	" 8"	" 8	"	262
"	"	"	"	" 9"	" 9	"	220
"	"	"	"	" 10"	" 10	"	241
"	"	"	"	" 11"	" 11	"	
"	"	"	"	" 12"	" 12	"	
"	"	"	"	第14巻 第1号	1960・1	"	
"	"	"	"	" 2"	" 2	"	
"	"	"	"	" 3"	" 3	"	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
10-134		日本鉱業会誌	日本鉱業会誌・朝鮮版・昭和9年	1			
"135		朝鮮総督府燃料選鉱研究所	金銀鉱の選鉱・製錬調査報告・昭和9年	1			
"136		朝鮮総督府鉱山課	朝鮮鉱業状況	1			
"137		"	産金奨励補助の実績・昭和8年	1			
"138		"	朝鮮の産金に就て・昭和9年	1			
"139		"	朝鮮に於ける乾式製錬所概要・昭和9年	1			
"140		司計課	鉱区一覧	1			
"141		財務局司計課	朝鮮稼行鉱山分布図・昭和9年	1			
"142		"	昭和15年度生産環境図	1			
"143		東京事務所	造船関係書類	1			
"144		"	昭和19年度重要物資営団損失補償費	1			
"145		司計課長	請負制度に関する書類・昭和7年	1			
"146		殖産局	昭和16年度議会説明資料(殖産局)	1			
001 朝鮮総記・中央日韓協会資料							
001	74	大蔵省管理局 編	日本人の海外活動に関する歴史的調査・総目録	1	昭25・7	A5	326
"	51	"	" 通巻第1冊 総論の1	1	"	"	308
"	"	"	" 通巻第2冊 朝鮮篇 第1分冊	1	"	"	162
"	"	"	" 第2冊 " 第3分冊	1	"	"	138
"	"	"	" 第3冊 " 第4分冊	1	"	"	119
"	"	"	" 第4冊 " 第5分冊	1	"	"	224
註1、台湾篇・樺太篇・南洋群島篇・満州篇・北支篇・中南支篇・海南島篇・南方篇・欧米篇・省略							
註2、通巻第1冊の2・通巻第3・4・5・7・9・10・11の各分冊欠							

330・338・500  
560・610 中央日韓協会特別保管資料

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	冊	頁
338	26	韓国銀行 編	韓国銀行五年史	1	1955・6	A5	355
330	"	" 調査部 "	経済年鑑 428年版	1	"	B5	170
560・500	"	"	鉱業及製造業・事業体名簿(428)	1	1955・11	A5	391
"	"	"	事業体調査総合報告書	1	1955・12	B5	163
330	"	"	経済年鑑 429年版	1	1956・6	"	642
610	"	"	適正米価算定試論	1	1956・12	A5	211
330	"	"	経済年鑑 430年版	1	1956	B5	812
610	"	"	米穀生産の週期分析(調査205号)	1	1959・9	"	32
330	"	"	韓国経済図表 1955年版	1	1955・9	"	85
"	26	"	韓国銀行調査月報 43	1	1952・2	"	200
"	"	"	" 44	1	" 3	"	224
"	"	"	" 45	1	" 4	"	164
"	"	"	" 46	1	" 5	"	197
"	"	"	" 47	1	" 6	"	167
"	"	"	" 48	1	" 8	"	241
"	"	"	" 49	1	" 9	"	178
"	"	"	" 50	1	" 10	"	219
"	"	"	" 51	1	" 11	"	206
"	"	"	" 52	1	" 12	"	234
"	"	"	" 53	1	1953・1	"	206
"	"	"	" 54	1	" 3	"	220
"	"	"	" 55	1	" 5	"	267
"	"	"	" 56	1	" 6	"	220
"	"	"	" 57	1	" 7	"	152
"	"	"	" 58	1	" 8	"	152
"	"	"	" 59	1	" 9	"	144
"	"	"	" 60	1	" 10	"	146
"	"	"	" 61	1	" 12	"	228
"	"	"	" 62	1	1954・1	"	216
"	"	"	" 63	1	" 2	"	218
"	"	"	" 64	1	" 3	"	255

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
344	10-81	朝鮮総督府財務局	昭和20年度追加予算増減内訳	/			
"	"82	"	"基準並に追加概計新規要求書	/			
"	"83	"	"第2予備金関係綴	/			
"	"84	"(経済班)	"予算関係書類	/			
"	"85	"	昭和21年度予算関係書類 付、外務関係予算参考	/			
"	"86	"	昭和22年度予算関係書類 付、歳入出科目表・外務所管一般会計外	/			
369,37	"87	朝鮮関係業務整理事務所	昭和24年度未帰還戦員給与金支給要綱	/			
"	"88	"庶務部	殉難者追悼会関係	/			
317,8	"89	内務省	昭和19年度朝鮮及台湾の現況	/			
343,8	"90	朝鮮総督府財務局	会計検査院協定事項	/			
317	"91	"	会計事務手続実例	/			
"	"92	"財務局長	学士採用に関する書類	/			
"	"93	"	東京事務所庶務課 朝鮮総督府東京事務所、人事機密書類	/			
344	"94	朝鮮総督府財務局	昭和12年度歳出概計書	/	(1部分散)		
"	"95	"	昭和19年度法務関係第2予備金要求書	/			
"	"96	"	"総予算前年度比較表	/			
345	"97	"法務局	昭和12年度間接国税犯則件数	/			
347	"98	"財務局	昭和17年度公債金沿革調(その3) 付、朝鮮事業公債法中改正法律案	/			
344	"99	"	昭和14年度国有財産増減報告書	/			
317	"100	"警務局	昭和12年度国境討匪状況	/			
344・391	"101	"財務局	昭和14年度朝鮮軍関係書類	/			
"・391,4	"102	"	昭和12年度国家総動員法関係	/			
390,1	"103	"	昭和19年度朝鮮の国民総力運動	/			
391	"104	京城府防護課	京城府防護計画書	/			
390,1	"105	朝鮮総督府官房文書課	昭和12年度時局宣伝事務報告	/			
344・316 317,34	"106	"財務局	加俸問題関係書類	/			

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
366	10-101	京城土木建築業協会	労働者斡旋に関する綱領	/	昭12-		
"	"102	朝鮮総督府財務局	昭和19年度労働対策緊急要費	/			
"	"109	"	昭和20年度緊急物資労働管理指導監督経費	/			
"	"110	"法務局	昭和19年度上半期、国民徴用等労務 事犯取締状況表	/			
344・498,6	"111	"財務局	昭和12年度預防協会予算	/			
"・498	"112	"司計課長	大正12年度朝鮮医院及済生院 特別会計予算概計書	/			
366,3	"113	"学務局	昭和12年度内地渡航労働者収 容所計画書	/			
451	"114	"財務局	企画院気象協議会報告	/			
344・451	"115	"	高層気象観測設備費、維持費	/			
"・"	"116	"	昭和19年度測候所等新設要費	/			
"・"	"117	"	"観測所改築設計図	/			
450	"118	財団法人地籍協会	朝鮮地籍協会関係	/			
338,32	"119	朝鮮総督府財務局	金融組合令関係	/			
611,31	"120	"	大正15年度産米増殖計画関係書類	/			
"	"121	"	朝鮮食糧管理特別会計法案、参考書	/			
"	"122	"	米穀生産の財源として公債発行 の法律案	/			
"	"123	"財務局	昭和19年度緊急食糧増産経費	/			
"	"124	"	津南水利組合関係書類	/			
"	"125	"	朝鮮の小作慣行 上巻	/			
"	"126	"	朝鮮魚類誌(第1冊)終巻	/			
"	"127	"	農山村振興功績者名鑑・昭和12年	/			
"	"128	"林政課	火田の耕作(写真)	/			
"	"129	"司計課	アンゴラ兎増殖要費・昭和19年度	/	昭19年		
"	"130	"	農業統計表 昭和15年	/			
"	"131	"鉱山課	朝鮮鉱業の趨勢 昭和7年	/			
"	"132	"	朝鮮の鉱業に就て 昭和9年	/			
"	"133	"	朝鮮鉱物資源に就て昭和9年	/			

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
344	10-24	朝鮮總督府財務局	昭和15年度 参考書類集	/			
"	"123	"	" 重要書類	/			
"	"126	"	" 予算増減内訳 (概計書・当然増減・歳入)	/			
"	"127	"	" 予算増減内訳 (臨時・追加)	/			
"	"128	"	昭和16年度 予算増減内訳	/			
"	"129	"	" "	/			
"	"130	"	" "	/			
"	"131	"	" 補助費内訳	/			
"	"132	"	昭和17年度 予算概計	/			
"	"133	"	" 議会参考書	/			
"	"134	"	" 予算増減内訳	/			
"	"135	"	" (2-1)	/			
"	"136	"	" 追加予算増減内訳	/			
"	"137	"	" "	/			
"	"138	"	" 予算増減内訳 (分散・集約分)	/			
"	"139	拓務省	" 拓務省所管予算	/			
"	"140	朝鮮總督府財務局	昭和18年度 議会説明資料	/			
"	"141	"	" 予算節約調書	/			
"	"142	"	" 節約額、復活、科目振替関係書類	/			
"	"143	"	" 予算増減内訳	/			
"	"144	"	" (2)	/			
"	"145	"	" (3)	/			
"	"146	"	" "	/			
"	"147	"	" 追加予算増減内訳	/			
"	"148	"	" "	/			
"	"149	"	昭和19年度 議会説明資料	/			
"	"150	"	" 食糧管理予算要求書	/			
"	"151	"	" 予算外契約要求書	/			

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
344	10-52	朝鮮總督府財務局長	昭和19年度 法律案関係綴	/			
"	"53	" 官房人事課	" 議会説明資料	/			
"	"54	" 財務局	" "	/			
"	"55	" "	" 第2予備金支出要求書	/			
"	"56	" "	" 第2予備金支出関係書類	/			
"	"57	" "	" 追加予算概計要求書	/			
"	"58	" "	" 予算概説説明書	/			
"	"59	内務省	" 予算概要、第2予備金支出要求書	/			
"	"60	" (所管)	" 新規要求事項別調査	/			
"	"61	朝鮮總督府財務局	" 節約額復活関係綴	/			
"	"62	" 農林局	" 農林関係予算	/			
"	"63	" 財務局	" 閣議決定、第2予備金支出要求書	/			
"	"64	" "	" 歳入算出内訳	/			
"	"65	" "	" 当然増減内訳	/			
"	"66	" "	" 事項別増減内訳	/			
"	"67	" "	" 予算増減内訳 (経常部)	/			
"	"68	" "	" (3冊の内1)	/			
"	"69	" "	" ( " 2)	/			
"	"70	" "	" ( " 3)	/			
"	"71	" "	" 予算増減内訳 (文教、重要生産、厚生、保健)	/			
"	"72	" "	" (通信、土木)	/			
"	"73	" "	" (行政整備に伴う内訳)	/			
"	"74	" "	" (臨軍、雑件、繰延)	/			
"	"75	" "	" 追加予算増減内訳	/			
"	"76	" "	" "	/			
"	"77	" (各課提出)	昭和19年度予備金支出 } 中、重要事項 / 昭和20年度予算	/			
"	"78	" 財務局	昭和20年度 予算当然増減内訳	/			
"	"79	" "	" 歳入出科目別増減内訳(1)	/			
"	"80	" "	" (2)	/			



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
829.1	7A/	北鮮・科学院 朝鮮語及朝鮮文學 研究所	조선어조사전 (朝鮮語小辭典) /	1	昭34.6	A5	709
"	"	韓国 國語國文學會	국어새사전 (國語新辭典) /	1	昭33.8	B5	1001

~~~~~  
 { 900 文 学 }  
 ~~~~~

908	28	嵯 然	詩集・憂鬱の世界	1	昭 6.7	B6	148
"	"	飯田 彬	半島の子等 (記録小説)	1	昭17.6	"	334
" 369.37	72	藤原 てい	流れる星は生きている	-	-	-	-
"	24	神尾 式春	歌集 さきもり	1	昭 -	B6	104
904	72	金 史 良	朝鮮文化通信、現地報告、特輯、 新体制実践	1	昭15.9	A5	208
908.1	"	方 義 錫 編	楊 鴻 (方斗烈) 先生詩稿 全	1	昭16.11	"	76
908	24	国分 三 亥	漸庵病間詩抄	1	-	-	-
929.1	74	Kotschergin, N	Das Schwalbchen Ein Koreanis- hes Volksmärchen	1	1955	A4	16
920	43	自由討究社 編	謝氏南征記 (通俗朝鮮文庫 2)-	大10.4	-	-	-
"	"	"	" 九 雲 夢 ( " 3) -	大10.5	-	-	-
"	"	"	" 南燕太平歌 ( " 5) -	大10.7	-	-	-
"	"	"	" 洪吉童伝 ( " 7) -	大10.10	-	-	-
"	"	"	" 沈 清 伝 ( " 9) -	大11.2	-	-	-
"	"	"	" 鳳 凰 琴 (鮮満叢書 2~3)-	大11.8.9	-	-	-
"	"	"	" 龍 睡 録 ( " 10) -	大12.6	-	-	-
"	"	"	" 屋永編・五百年奇談・雲英伝 (" 11)-	大12.8	-	-	-
924	42	朴 栄 喆	燕 巖 集 (1~6)	-	昭 7.5	-	-
914.6	K/	安 部 能 成	檣 城 抄	1	昭22.3	B6	3/5

~~~~~  
 { 追 録 }  
 ~~~~~

344 朝鮮総督府予算関係資料

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
344	10-	朝鮮総督府財務局	62-74 議会、議事経過概要	1	-	-	-
	1	"	83 議会、 "	1	-	-	-
	2	"	75-84 議会、 "	1	-	-	-
	3	"	昭和9年度 予算増減内訳	1	-	-	-
	4	"	昭和10年度 "	1	-	-	-
	5	"	臨時部 予算沿革等調	1	-	-	-
	6	"	昭和11年度予算、予定計算書各 目明細書 (不成立)	1	-	-	-
	7	"	" 予算増減内訳 ( " )	1	-	-	-
	8	"	" " (上)	1	-	-	-
	9	"	" " (下)	1	-	-	-
	10	"	" 鉄道予算関係	1	-	-	-
	11	"	昭和12年度 予算概計書	1	-	-	-
	12	"	" 予算増減内訳	1	-	-	-
	13	"	昭和13年度 予算概計書	1	-	-	-
	14	"	" 經常部増減内訳	1	-	-	-
	15	"	" 追加概計並に要求書	1	-	-	-
	16	"	" 追加予定計算書各目明細書	1	-	-	-
	17	"	第74議会、議会参考書	1	-	-	-
	18	"	昭和14年度、追加予算計算書 各目明細書	1	-	-	-
	19	"	" 臨時部、追加予算増減内訳	1	-	-	-
	20	"	昭和15年度 予算概計書 (1)	1	-	-	-
	21	"	" " (2)	1	-	-	-
	22	"	" " "	1	-	-	-
	23	"	" " "	1	-	-	-

700 芸術 美術史・彫刻・絵画・  
工芸美術・音楽・演劇

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
701.9	73	黒板博士記念会	古文化の保存と研究	1	昭28・2	A5	508
			内容の一部				
		藤田亮策	朝鮮古蹟調査				
		中村栄幸	朝鮮史の編修と朝鮮史料の蒐集				
702	23	柳宗悦	朝鮮とその芸術	1	大11・9	B6	357
"・221	"	関野貞	朝鮮美術史(朝鮮史講座・特別講義)	—	—		
"	16	李王職 編	李王家美術館	1	昭13・5	B6	18
672	45	李王職雅楽部	朝鮮雅楽大要	1	昭12・8	A6	10
767.5	"	孫晋泰	朝鮮古歌謡集	1	昭4・6	B6	537

800 語学・朝鮮語学

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
801.2							
829.10・001	17	小倉進平	諺文の起原及び朝鮮語の特質	1	昭10・2	—	—
829.1・221	23	"	朝鮮語学史(朝鮮史講座・特別講義)	—	—	—	—
828・829.1	46	"	朝鮮語方言の研究 上巻	1	昭19・6	A5	545
"	"	"	" 下巻	1	昭19・9	"	665
829.1・221	23	鮎見房之進	国文・吏吐・俗証・俗字・造字 借調字(朝鮮史講座・特別講義)	—	—	—	—
"	72	朝鮮語研究会	朝鮮文・朝鮮語講義録 上、中、下3			A5	合計 177
		(内容)					
		T.T.生	朝鮮語会話 上巻	R	144		
		李完応	朝鮮語発音及文法	"	R 220		
		同研究会編集部	普通学校、朝鮮語読本訳解 中巻	R	102		
		伊藤韓堂	朝鮮文章講話	"	R 44		
		姜信文	動詞の用例	"	R 48		
		同研究会編集部	朝鮮語の漢字の読み方	"	R 33		
		洪承考	朝鮮書翰文例	"	R 50		
		同研究会編集部	日用朝鮮語六千語集	"	R 80		
		李允熙	漢字成句集	"	R 26		
		小倉進平	朝鮮語学習上の注意 下巻	R	52		
		魚允通	朝鮮文字母講話	"	R 18		
		李鼎燮	朝鮮風俗「挨拶」集	"	R 40		
		同研究会編集部	雑纂	"	R 280		
829.1	46	李奎米	現今朝鮮文典	1	昭3・10	A5	84
"	"	永昌書館編集部	内鮮新玉篇 付、音考	1	昭17・11	B6	309
"	"	小倉進平	国語及朝鮮語のために	1	大9・12	A5	302
"	"	"	部外秘、言語と文字から見た内 鮮関係	1	昭18・10	A5	45
"	7A	大山治永 編	実用、内鮮大辞典	1	昭18・5	B6	685
"	"	李完植	新修、日漢鮮大辞典(付、外来語辞典)	1	昭12・11	"	881
"	"	朝鮮語研究会 刊	朝鮮語辞典	1	昭28・8	"	983
"	71	"	"	1	"	"	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
654	85	京畿道 編	林野保護第一主義(訓示草案)	/	昭 -	美	ペン
"・654,4	"	朝鮮総督府 "	朝鮮開拓地域内森林保護員増員効果表 昭7・8年春季森林火災対照表	/	昭9・	美	複
656,21	"	" 農林局 林業課	時局匡救林道工事の地方民に及ぼした影響	/	昭8・1	美	謄
656,55 611,24	"	" 山林部	最近に於ける施設概要	/	昭6 -	"	
657	"	" 農林局	林産物処分種類別表(昭8)	/	昭9 -	"	
"	"	" "	農用林地施設に関する考察・草案	/	昭9・2	"	
"	"	" " 林業課	用材、燃料等林業関係参考表	/	昭7 -	-	
"・658	"	" " "	林産改良奨励、農用林地施設、関係等	/	昭10 -	美	謄
657,8	"	朝鮮総督府農林局	林業副業奨励方針 草案	/	昭9・1	"	
"	"	" "	" 大綱、林産副業統計	/	昭7 -	"	
"・611,15	"	京畿道 編	農村振興と農家付帯林業の創設	/	昭8・12	A5	20
658	"	満鉄兵京城管理局	朝鮮狩猟案内	/	大 ?	新書判	28
658,2	"	朝鮮総督府 農林局林業課	木炭関係参考書	/	昭7 -	美	謄
659	"	朝鮮総督府農林局	昭6〜9年、禁猟関係資料	/	昭9 -	"	
660,4 310・253	"	宮治民三郎	秘、海洋政策私見	/	大14・3	A5	28
660,76	"	朝鮮総督府 水産試験場 編	水産試験場東海岸支場設置予算説明書	/	昭7 -	美	謄タ
661・365	"	朝鮮総督府水産課	漁村救済対策案	/	昭 -		
661,1	"	" "	水産界の窮状	/	昭6 -	美	複
"	"	" "	水産関係諸件(予算説明書)	/	昭6 -	美	謄
661,5	"	" 農林局水産課	水産金融概況一覧表	/			
661,5・661,6	"	" " "	漁業の種類及び名称	/	昭8 -	美	謄
"・664	"	" " "	水産団体一覧表	/			
661,6	"	" " "	漁業関係陳情項目	/			
"・664,6	"	" " "	いわし漁業の概勢	/	昭8 -	美	謄 複
"・664,6	"	" " "	魚油、硬化油関係資料	/			

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
661,8	85	朝鮮総督府農林局	農漁村救済補助所要額 外	/	昭7 -	美	謄 複 14
"	"	" " 水産課	漁村救済対策諸件	/	昭6 -	"	
661,9	"	有賀 植雄頭取 田淵東拓理事	農村救済に関する件	/	昭 ?	-	
670,3	"	京畿道 編	京畿道商工要電	/	昭4・8	新書	34
671・344	"	朝鮮総督府農林局 商工課	産業組合に対する補助	/	昭 -	美	タ 12
671,5	"	" "	中小商工業者の窮状調査資料	/	昭6 -	美	謄
675・611,31	"	朝鮮総督府 編	京城穀物商組合市場に就て	/	昭7 -	-	
676・333,1	"	荒井初太郎 天日常治郎	京城・仁川取引所合併、関係書類	/	昭4・12	美	複
676,1	"	朝鮮総督府殖産局	取引所関係 1. 定款 2. 受託契約準則	/	昭4・12	美	謄
"	"	" "	朝鮮取引所令	/	昭6・5	"	
"	"	" "	取引所関係 業務規程	/	昭6・5	"	
"	"	大平喜重郎	取引所施行令に対する考察、陳情書類	/	昭6・1	美	複
676,41	"	朝鮮総督府殖産局	取引所運営に関する総督府の諮問に対し取引所の答申書	/	昭6・10	美	謄
677,9	"	" " 商工課	私設保税倉庫設置不可の件	/	昭7・5	"	
678,1・222,5	"	" " "	対滿輸出貿易関係資料 綴	/	昭7 -	"	
678,12 678,9・222,5	"	" " "	対滿輸出貿易関係書類・施設・統計	/	昭8 -	"	
678,9	"	" " "	対滿輸出貿易促進施設	/	昭7 -	-	
"	"	全羅北道 編	移輸入調・市場取引額調・市場織物取引額	/	大15 -	-	
686,5	"	帝国在郷軍人会	滿蒙鉄道既見図	/	昭 -	-	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
651,13	85	朝鮮総督府 塩田林政課長	極秘、国有林経営ニ関スル私見	/	昭 8 -	美 複	タ
651,14	"	朝鮮総督府農林局	農家の林野所有状況調	/	昭 8・10	美 謄	
"・613,34	"	" "	農家用燃料肥料等、供給対策調査 (第1案)	/	昭 9・1	"	
"・344	"	" "	昭 9、民有林関係予算要求額調	/	昭 9・1	"	
"	"	掛 場 定 吉	民有林改善ノ「植樹偏重」ヨリ 「伐り惜み」ノ矯正へ	/	昭 6・11	"	
"	"	朝鮮総督府農林局	農用林地施設計画	/	昭 9・11	美 謄	
"	"	" "	林野非所有農家ニ必要ナル林野 想定面積表	/	昭 9・4	"	
"	"	" "	民有林野指導方針ニ関係アル従来 ノ指示、注意、通牒等	/	昭 -	"	
651,15 613,43	"	" "	農家ノ必要ナル山草採取ヲナスヘ キ草場造成(腹案)	/	昭 -	"	
651,15 657	"	" "	林野ヲ所有セサル農家ノ燃料等取 得状況及ビソノ対策ニ対スル各道 答申書写	/	昭 8・11	"	
651,15 613,43	"	" "	農用林地施設計画	/	昭 9・6	"	
651,16	"	朝鮮山林会 編	民有林業 事蹟案	/	昭 9 -	A5	-
"	"	朝鮮総督府	民有林指導方針大綱(第2集)	/	昭 7 -	-	
"	"	" "	民有林指導方針大綱	/	昭 8 -	A5	
"	"	" "	"	/	昭 8 -	B5	
"	"	" 渡辺農林局長	民有林指導方針大綱の制定に就て	/	昭 8 -	A5	
"	"	" 農林局	民有林統計 第1輯	/	昭 8 -	-	
"	"	" "	民有林指導方針の制定、局長談話	/	昭 8 -	-	
651,18	"	" 林野調査委員会	朝鮮総督府林野調査委員会 例規	/	大12・9	B6	23/
"	"	朝鮮総督府	林野調査委員会、昭5、会務状況 報告書	/	昭 6・7	B5	18
"	"	" 農林局長	宮林署長会議訓示ニ関スル件	/	昭 8・1	美タイプ	
"	"	" "	林野調査委員会 職員表	/	昭 6・10	美 謄	
"・317,3	"	" 山林部	山林部職員(判任5級以上)	/	昭 6・10	美ペン	
"・317,25	"	" "	宮林署組織改廃ニ対スル要求、外	/	昭 6 -	美々複	
"・317,3	"	" "	宮林署職員(署長、係主任及4級以上)	/	昭 6 -	美ペン	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
651,18 317,34	85	朝鮮総督府 編	宮林署山地勤務員の待遇 (国境警察官との比較)	/	昭 -	美 謄	
651,658 575,1	"	" "	林産燃料消費に関する諸資料	/	昭 ?	-	
651,6	"	" 政務総監	林政 63 号、産業団体ノ統一整理ニ 関スル件	/	昭 7・11	美 謄	
"・650,6	"	" "	林政 65 号、道林務主任官協議会ノ 協議事項	/	昭 7・11	"	
"	"	朝鮮山林会長 有賀光豊	朝鮮山林会補助金存続 陳情書	/	昭 6・11	美タイプ	
"・349,4	"	朝鮮総督府 編	森林組合費の地方費移属、関係 参考資料	/	昭 7・7	美 複	
651,7	"	" 農林局	林野所有区分別、宮林署区分別 面積	/	昭 6 -	-	
"	"	" " "	林政関係諸資料綴(山林関係昭10収支)/昭9・7	/	昭 9・7	美 謄	
"・344	"	" " 林業課	昭10、歳入概算調書、同説明書	/	昭 9・7	"	
"	"	" "	大15、以降、各年、森林収入に對 林野関係費、外	/	昭 9 -	-	
"・344	"	" "	昭元-5年度、林業関係収支予算 決算等対照表	/	昭 6 -	美 謄	
"	"	" "	各年度、森林事業収益対照表	/	昭10 -	-	
"・221,3	"	黄海道	林野調査に関する心得	/	大11・3	B5	
" "	"	" "	大11年度、林野調査事業計画	/	大11 -	美 複	
"	"	" "	林野調査要項	/	大11・3	B5	17
"・344	"	朝鮮総督府 農林局、林政課	昭10年度、山林関係予算事項	/	昭 9・7	美 謄	
651,8	"	全羅北道 編	林野貸付料滞納者調 貸付国有林 返還例	/	大13 -	-	
"・340	"	" "	"	/	大13 -	美ペン	
652	"	朝鮮総督府	林業関係 写真	/	昭 ?	写真7 絵ハガキ1	
653・651,13	"	" "	国有林造林事業の促進、同施事調書	/	昭 -	美 謄	
"・654	"	京畿道	林野の風致増進の施設方針	/	昭 ?	"	
653,3	"	朝鮮総督府	殖林の秘訣	/	昭 8 -	A5	-
653,4・650,6	"	後藤収蔵	朝鮮、特に京城付近、赤松天然 林更新に就て	/	昭 4・10	B5	24
653,7	"	朝鮮総督府農林局	漆樹増殖奨励要綱	/	昭 8・2	美 謄	



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
640	85	朝鮮総督府殖産局	朝鮮の畜産	/	昭 2・3	A5	95
640,2	"	" 農林局	畜産の状況及将来の計画, 外	/	昭 8 -	美 膳	
"・221,5	"	内外事情社	江原道の畜産	/	昭 2 -	折々ミ式	
640,5	"	京畿道 編	畜産統計 昭和3年	/	昭 4 -	B6	50
"	"	朝鮮獣医畜産学会	朝鮮畜産統計 昭和7年	/	昭 8 -	A5	79
"	"	朝鮮畜産協会 編	朝鮮の畜産 統計号	/	昭 7・11	A5	200
"	"	全羅北道	全鮮・全北・層畜総数調 明43及大15	/	昭 2 -	美ペン	
640,7 221,4	"	京畿道	畜産指導里洞品評会出品台帳	/	昭 -	-	
641・611,6 344	"	朝鮮農会	昭9, 朝鮮農会畜産関係歳入出 予算書	/	昭 9 -	-	
641・344	"	酸交血清製造所	昭和8年度予算概算書	/	昭 7 -	美 膳	
648,3	"	京畿道	鶏卵共同販売要項	/	昭 -	半 膳	

650・221,1	85	朝鮮総督府 編	北鮮拓植事業計画書	/	昭 7 -	B5	
650,3	"	" 殖産局	林業参考表	/	昭 -	-	
650・345,1	"	" 農林局林政課	忠北評議会, 林野税等評議経過 概要	/	昭 8・2	美 膳	
"・221,4	"	京畿道 編	京畿道の林業	/	昭 3・3	新	69
650,5	"	"	林業統計要覧 昭和4年	/	昭 4 -	折々ミ式	
650,4	"	朝鮮総督府	植林の秘訣, 小を育てて大を伐れ	/	昭 8・5	A5	10
"	"	"	"小을 키우는 법"	/	昭 8・5	"	10
"	"	社団法人 朝鮮山林会	森林保護, 講演集 第1輯	/	昭 8・6	"	210

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
650,5	85	朝鮮総督府 農林局林政課 編	山 潮 第24号	/	昭 8・7	A5	80
"	"	朝鮮総督府	林野統計(昭6・12末, 昭7・3末)	/	昭 8・3	B5	93
"	"	" 農林局	統計表 (林務課)	/	昭 7 -	美 膳	49枚
"	"	黄海道	林務関係統計表 大正11	/	大 12 -	"	
"・221,5	"	江原道	林務統計便覧 昭和3年度末現	/	昭 4 -	新書判	45
"	"	京畿道山林課	" 昭和4年	/	昭 4 -	美 膳	
"	"	朝鮮総督府	各道林務主任官協議会(総書)	/	-	-	
650,6	"	全羅北道	郡林業技術会議知事訓示要旨	/	昭 2・3	美ペン	
"	"	朝鮮山林会	第5回, 朝鮮山林会々務報告	/	昭 6 -	表	
651・344	"	朝鮮総督府	山林関係予算総括表, 昭8予算	/	昭 7 -	-	
651,1	"	"	朝鮮林政計画書・昭2・3 昭6予算朱書入	/	昭 6・3	B5	77
"・221,4	"	"	山林課関係事項(窮民救済砂防 事業)	/	昭 6 ?	美 複地	
"・310,6	"	" 山林部	道知事会議指示事項説明資料 第3冊(昭7・4)	/	昭 7・6	美 膳	8枚
"	"	" 農林局	道林務主任会議, 参考印刷物	/	昭 7 -	-	
"	"	" " "	道林務主任官会同書類 昭9・5	/	昭 9・5	美 膳	
"	"	黄海道知事 朴 重 陽	林政ニ関スル意見	/	昭 ?	美ペン	
"	"	朝鮮総督府 編	朝鮮林政計画改訂ノ理由	/	昭 10・1	美 膳	タ
"	"	"	朝鮮林政計画書 昭4・4	/	昭 4・4	B5	77
"	"	" 農林局	企業的林業の助成策に対する答 申拔萃	/	昭 9 -	-	
651,12 656,6	"	" " "	朝鮮砂防事業令 (草案)	/	昭 -	美 膳	
651,12	"	朝鮮総督府	朝鮮砂防事業案	/	昭 -	美 膳	
651,13・658	"	" 農林局	昭7, 国有林産収獲予定, 過去3 年間誤伐賠償調	/	昭 7 -	"	
"	"	"	国有林 施業調査	/	昭 6 -	"	
"	"	"	国有林経営計画, 昭8・6第7回	/	昭 8・6	"	
651,13,7 344	"	" 山林部	秘, 昭7, 北鮮国有林野整理 歳入 歳出予算	/	昭 7・1	"	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
614,2・221,7	85	東津水利組合 編	職員名簿	/	昭 3・7	美 複	
" "	"	益沃水利組合 "	益沃水利組合の事業	/	大 12・6	-	
614,3,4 611,1	"	朝鮮総督府 土地改良部	農村救済対策、甲、根本案	/	昭 -	美 謄 4	
614,4	"	朝鮮総督府農林局	秘、土地改良事業ノ実績ト将来ノ方針	/	昭 8 -	" 6"	
"・221,7	"	竜進水利組合	陳情書	/	昭 6・8	B5 -	
"	"	朝鮮総督府農林局 土地改良課	不良水利組合救済計画	/	昭 -	-	
614,5	"	朝鮮総督府農林局	畑作開墾実績(本府)同(各道)	/	昭 8・6	美 謄	
"	"	" "	畑作開墾助成計画、外	/	昭 8 -	"	
"	"	" "	" (農林局長用)	/	昭 8 -	"	
"・616	"	" "	"	/	昭 8 -	"	
"	"	東津水利組合	東津干拓記念碑 設計図	/	昭 -	/ 枚	
615	"	京畿道農会	稲作講義	/	昭 2・7	新書判 26	
"	"	"	浮塵子の駆除	/	昭 2・7	" 10	
"	"	"	病害の予防と殺菌剤	/	昭 2・7	" 23	
615,3	"	"	昭和2年度の事業・産米改良増殖組合の実績	/	昭 3 -	A5 34	
"・221,4	"	"	水稻改良増収品評会の成績	/	昭 3・4	" 22	
"・611,33	"	"	昭和3年度の事業・産米改良増殖組合の実績	/	昭 4 -	" 21	
615,8	"	京畿道 編	大正14年7・8・9月風水害集計表 (1)	/	大 14 -	美 ペン	
"・221,7	"	全羅北道 "	昭和3年及大正13年旱害救済経費対照表	/	昭 4	"	
"	"	" "	旱害状況・対策、旱害図、砂防造林図	/	昭 3・7	美 謄	
"	"	" 農務課	旱害状況	/	昭 3・7	"	
616	"	朝鮮総督府農林局	畑作改良増殖計画要綱 昭和6年度以降	/	昭 8 -	"	
"・611,15	"	" "	畑作改良指導團増収成績	/	昭 7 -	" 4"	
"	"	" "	朝鮮畑作改良増殖計画 昭和6年度樹立	2	昭 6 -	A5 69	
"・618	"	" "	畑作物関係資料	/	昭 7 -	美 謄	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
616・618 611,24	85	朝鮮総督府農林局	秘、畑作開墾助成計画	/	昭 7 -	美 謄	
616,1	"	" "	穀物検査手数料、刈検査手数料	/	昭 7 -	" 7枚	
616,5・333,6	"	第20師団経理部	ラッセル・スミス著、世界食糧資源論	/	昭 7・11	A5 -	
"	"	"	世界食糧資源より見たるライ麦について	/	昭 7・11	A5 -	
616,8	"	朝鮮総督府農林局	補食作物増殖奨励補助ニ要スル経費	/	昭 8年度	美 謄 13	
617・618	"	" "	特用作物の作付反別及収穫高	/	昭 8 -	" 1"	
618,1	"	" "	(棉花関係費)本年度実行の分	/	昭 -	半 謄 1	
"	"	全羅南道 慶尚南道	棉花協会朝鮮支部施設	/	昭 5 -	"	
"	"	" "	棉花生産費調査	2	昭 5 -	美 謄	
"	"	朝鮮総督府 編	棉花奨励第3期計画要綱	/	昭 8 -	美 複	
"	"	石 塚 峻	朝鮮に於ける棉花に就て (同民叢書4)	/	昭 8・6	B6 66	
"	"	" "	朝鮮に於ける棉花栽培の現在及将来	/	昭 8 -	A5 26	
619,2	"	塩田正洪 吉田正広	打租法及執租法の法律的性質に 関する調査	/	昭 7・3	美 大判	
620	"	京畿道	農村の美化に関する件	/	昭 6・3	美 謄	
625	"	朝鮮総督府	特用作物・果樹園芸指導員設置 経費等	/	昭 8 -	" 15	
626	"	京畿道農会	春蒔蔬菜の作り方	/	昭 3・4	新書判 74	
630	"	朝鮮総督府殖産局	蚕糸業重要事項・要項	/	昭 7・6	美 複	
"	"	朝鮮総督府 編	内地の蚕糸対策、昭和9年度、 朝鮮内機械製糸工場購置見込調	/	-	-	
630,1(221,5)	"	江原道	蚕糸の変遷及奨励施設の概要	/	昭 3・1	折々式	
630,7	"	京畿道農会	養蠶講義	/	昭 4・1	A5 51	
"	"	"	女子養蠶教師必携	/	昭 3・5	新 47	
631	"	朝鮮総督府殖産局	家蚕繭販売状況 昭和6年度	/	昭 7 -	美 謄	
634	"	" "	蚕種管理所経費	/	昭 10 -	"	
638	"	" 農林局	乾繭場設置補助増額に要スル経費外	/	昭 8 -	" 7	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
613.4	84	朝鮮総督府農林局	肥料改良増施奨励補助ノ増額ニ要スル経費	/	昭 8 -	美 謄	3枚
"	"	"	昭和 8 年度営繕工事計画書	/	昭 8 -	美 謄	3"
"	"	"	山農ノ肥料増製方針案	/	昭 -	美 複	2"
"	"	"	肥料改良増施奨励補助経費	/	昭 -	-	-
613.43	"	"	堆肥の案	/	昭 -	美 謄	-
613.41	"	朝鮮総督府 編	秘, 自給肥料ノ成分価格算定ニ用イタル各種肥料ノ価格	/	昭 10. 5	"	2"
613.43 221.7	"	全羅北道	紫雲英栽培, 同稻荷法, 堆肥製造講習録	/	昭 2 -	A5	89
613.43	"	朝鮮総督府	緑肥原料採取地ノ設定ニ関スル件	/	昭 -	美 謄	-
"	"	京畿道	肥料改良増施奨励更改案 (昭 6 - 10 年 5 カ年計画)	/	昭 5 -	"	-
" . 210	"	農林省林業試験場	樹葉堆肥試験成績	/	昭 -	"	-
" . 575.14	"	朝鮮総督府農林局	農業用・燃料肥料等、供給対策調査	/	昭 -	-	-
613.44	"	京畿道農会	金肥の購入と使用法	/	昭 4. 2	新書刊	28
614.05	"	京畿道 編	畜産統計	/	昭 3 -	A5	-
614.2	85	朝鮮総督府 渡辺農林局長	土地改良事業促進案	/	大 14. 1	美 謄	-
"	"	朝鮮総督府農林局	昭和 8 年度土地改良事業助成費外	/	昭 8. 3	"	-
"	"	"	道土地改良主任技術官に対する注意事項	/	昭 8. 6	"	-
"	"	"	同打合会, 打合事項	/	昭 8. 6	"	-
"	"	"	厳秘, 土地改良事業の今後の方針 (草案)	/	昭 9. 1	美 複	-
"	"	"	秘, 土地改良事業の今後の方針	/	昭 9. 2	美 謄	12枚
"	"	" 古庄逸夫	土地改良事業の概況	/	昭 7. 7	A5	97
"	"	" 農林局	" 現況	/	昭 8. 5	美タイプ	-
"	"	" 農林局長	土地改良事業低利資金融資の件	/	昭 8. 6	美 謄	-
"	"	" 農林局	土地改良事業の実績 昭 6 年度末現	/	昭 7 -	A5	24
"	"	"	" 昭 7 年度末現	/	昭 8 -	"	25
"	"	"	秘, 全国耕作地拡張事業の概況	/	昭 8. 7	美 謄	-
"	"	" 農林局長 財務局長	産米増産計画に属する土地改良事業助成金交付の件	/	昭 8. 3	"	-

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
614.2	85	古庄逸夫・渡辺忍	土地改良事業部による所管事務引継書	/	昭 7. 7	美 謄	-
"	"	朝鮮総督府 土地改良課 編	秘, 昭和 8 年度土地改良新規事業計画	/	昭 7 -	"	14枚
" . 338	"	"	土地改良資金利率変遷状況表	/	昭 7 -	美 複	2"
"	"	"	緊急施行を要する土地改良事業調	/	昭 8 -	美 複	-
"	"	朝鮮総督府農林局	秘, 土地改良新規事業計画	/	昭 8 -	美 謄	-
" . 335.49	"	" 土地改良課	秘, 土地改良事業代行機関廃止に伴ふ経費増減内訳	/	昭 8 -	"	11"
614.23 611.5	"	"	昭和 7 年度土地改良資金貸出計画書	/	昭 6 -	"	141
614.2 . 221.7	"	全羅北道 編	全羅北道土地改良事業	/	大 15 ?	"	13"
614.2,3 650 . 221.3	"	黄 海 道	黄海道の有利確実な事業	/	昭 7 -	美 -	-
614.2,3 611.4 . 310.6	"	朝鮮総督府農林局	既設水利組合ノ現況ト将来対策意見	/	昭 6 ?	美 複	15"
614.3	"	"	秘, 不良水利組合救済方針 綱要	/	昭 6. 9	美 謄	8"
"	"	"	秘, 同上	/	昭 ?	"	3"
"	"	"	昭 8, 水利組合費賦課徴収上の善後措置, 外	/	昭 8. 1	"	-
"	"	"	昭 7, 水利組合費徴収状況調	/	昭 8. 3	美 複	17"
"	"	"	昭 7, " 及中央水利組合ノ件	/	昭 -	"	3"
"	"	"	昭 7, " 収入歩合別組合数調	/	昭 8. 5	"	-
"	"	"	既往年度所屬滞納水利組合費、徴収状況調	/	昭 8. 5	"	-
" . 221.4	"	"	金浦水利組合補助金償還命令ニ関スル経過	/	昭 6 -	美タイプ	4
614.3	"	"	水利組合償還年限延長要望理由	/	昭 7. 7	美 謄	-
"	"	"	水利組合償利率引下前後の比較	/	昭 -	美複表	-
" . 221.2	"	"	昭和水利組合、経過概要、計画概要	/	昭 7 -	美 謄	-
" . 221.4	"	京 畿 道 編	将来水利組合に対する意見 (現状と対策)	/	昭 6. 7	"	-
"	"	"	水利組合関係調書、付、京城相模場表	/	昭 6 -	"	-
"	"	"	水利組合関係参考調書	/	昭 -	美 複	-
614.2 . 221.7	"	東津水利組合	東津水利組合事業状況一覽表	/	昭 3. 5	折込式	-



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
611,78	84	朝鮮総督府農林局	収ノ現在及将来,取引セラルベキ見込数	/	昭10-	美	1
"	"	朝鮮総督府	編 山村副業統計	/	昭 6-	"	"
"	"	" 農林局 林政課	農山村の副業奨励	/	昭 9-	美	復
"	"	" " "	林産副業奨励方針	/	昭 9-	-	-
"	"	" " "	" (第2草案)	/	昭 9・1	美	1
"	"	朝鮮総督府	編 朝鮮ニ於ケル有望ナル工業的副業	/	昭 7-	"	"
366,2	"	" 農林局	" 農家現況調査書	/	昭 8-	"	18枚
611,951 610,7	"	" " "	火田民指導計画調査報告	/	昭 8-	"	471
611,951 611,24・654	"	" " 林政課	火田民指導及森林保護施設の概要	/	昭 7・11	A5	191
611,951	"	" " "	火田及火田民 現状調	/	昭 7・6	美	1
611,82	"	忠清南道	編 忠清南道に於ける更生指導部落の実績	/	昭 9・1	"	31
"	"	朝鮮総督府農林局	経済更生計画基本調査書(用紙)	/	昭 8-	B5	13
"	"	朴 喆 熙	各郡振興会ニ対スル感想及意見	/	昭 8・2	半	141
"	"	朝鮮総督府農林局	農家現況調査書 (用紙)	/	昭 8-	B5	14
"	"	" " "	農家経済の打診	/	昭 -	美	126
"	"	鄭 泰 肝 外ノ名	農家更生計画の1年の打診	/	昭 9-	美	21
"・221,1	"	朝鮮総督府	編 更生指導農家実績調	/	昭 8-9	表	"
"	"	京 畿 道	" 理財課関係事項(農家経済関係)	/	昭 5-	美	復
"	"	朝鮮総督府	" 昭和8年度,更生指導農家実績(第1号表)	/	昭 9-	表	"
"	"	" " "	更生の目標に対する実績調(第2号表)	/	昭 9	"	"
"	"	" " "	更生指導農家実績調(第3号表1・2・3)	/	昭 9	"	3枚
"・221,2 "・221,7	"	朝鮮農会	" 農家経済調査(平安南道分・昭4)	/	昭8・3	A5	270
"	"	" " "	" (全羅南道分・昭5)	/	昭7・9	"	282
611,82	"	東野	" 農林調査 (項目)	/	大15・7	-	-
"	"	全羅北道全州郡	" 農民の生活調査(全州,参礼面,上関面)	/	大15-	-	-
"	"	朝鮮農会	" 経済調査から見た朝鮮農家	/	-	A5	-

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
611,84	84	朝鮮総督府	編 農家負債額調	/	昭 7-	美	126
"	"	" " "	村落組合員,負債調	/	昭 7-	表	"
611,85	"	東洋拓植株式会社	農家収支採算表 (参考)	/	昭 ?	表	"
611,91 221,4	"	朝鮮総督府	" 北鮮開拓試験移民計画書	/	昭 ?	美	1
611,94 221,4	"	京畿道内務部 社会課	" 京畿道農村社会事情 大正13年	/	昭 2・3	B6	174
611,96	"	京畿道農会	" 京畿道農会主催,第1回地主懇談会,会長挨拶	/	昭 3・2	A5	-
"	"	朝鮮総督府殖産局 農務課	編 自作農地設定計画書	/	昭 ?	美	126枚
"	"	" " "	自作農地設定協議事項ニ関スル本府案	/	昭 ?	美	1263
"	"	第3期指導員 金 沢 栄	自作農創定5ヶ年計画	/	昭 3-	-	-
"	"	衆議院議員 松山 常次郎	自作農創定意見書	/	大12・1	A5	-
"・210	"	朝鮮総督府農林局 農務課	編 昭和7年自作農地設定事業実績	/	昭 8-	美	1
611,951	"	" " 林政課	火田整理調査 昭7・9-11月	/	昭 8・3	"	651
611,96・366	"	朝鮮総督府農林局	借地・借家・小作・商業等,争議調停諸法令	/	昭 ?	"	121
"	"	久間健一	合徳農民騒動の研究	/	昭 -	B6	-
"	"	朝鮮総督府農林局	小作令,小作調停令実施要費 外ノ	/	昭 7-	-	-
611,98	"	萩 原 彦 三	農村巡訪記	/	昭 9・12	B5	82
"	"	朝鮮総督府農林局	農村窮民の実情と農村救済対策参考資料	/	昭 7-	美	17枚
(内 容 )							
× 春窮状態ニアル農民戸数							
× 朝鮮ニ於ケル乞食数							
× 家屋ト宅地,宅地ノミノ借入小作農家戸数							
× 小作人ノ小作地立毛差押状態							
× 生活困難ニシテ賃銀労働ヲナス小作民数							
× 小作争議ニ現ハレタル農村ノ窮状							
613,4	"	京 畿 道	編 肥料改良増産奨励更改革案	/	昭 6-	-	-
"	"	江 原 道	" 肥料奨励計画書	2	大15-	A5	-



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
611,31	84	朝鮮総督府農林局	内地・朝鮮・台湾ニ於ケル過剰米穀割合調	1	昭 9・10	美タ17	1
"	"	"	秘, 米穀対策案(綜合案)及農林省提案	1	昭 9・10	美 膳	
"	"	"	米穀対策案	1	昭 9・10	B5	-
611,3 365,2	"	有賀光豊	朝鮮に於ける米穀調節実行方法	1	昭 9・10	美 膳	
"	"	朝鮮総督府農林局	米穀対策関係書類 (袋入)	1	部昭10・1	"	
		(内 容)					
			× 米穀対策案(1月11日小委員会決定)				
			× 内地・朝鮮・台湾米穀統制数量割合調				
			× 馬場委員案				
			× 拓務大司ト協議セル妥協案				
			× 同別案(1)				
			× 割当数量ヲ管外移出米増加趨勢値ニヨルコトノ可否				
			× 特別委員会, 第7回小委員会要領				
			× 米穀対策ニ関スル拓務ト外地打合要領				
			× 道外搬出数量調				
			× 朝鮮ニ於ケル昭和10年, 米穀年度, 米穀貯蔵予定数量				
			× 第二, 米穀統制組合(昭9・12・22)				
			× 第三, 粃の共同貯蔵を行うこと				
			× 12月29日改定案 農林省				
			× 米穀対策案昭10・1・15小委員会決定案				
			× 穀物検査国営案				
			× 黄海道延白郡, 延白水利組合地域				
			× 台湾米生産費(昭9・第2期作)				
			× " 調査概要				
			× " 調				
611,31	84	朝鮮総督府農林局	朝鮮及台湾, 米穀統制量の割合に関する了解事項	1	昭10 -	-	
"	"	"	米穀自治管理法案(未定稿)	1	昭10 -	-	
611,33	"	"	内地と朝鮮, 米収獲高調査方法の比較対照	1	昭 ?	-	
"	"	"	産米増殖計画による朝鮮米, 生産・実績・消費・移出高予想	1	昭 8 -	-	
"	"	"	産米増殖計画関係資料	1	昭 8 -	-	
"	"	"	朝鮮の米	1	昭 8 -	-	
"	"	"	朝鮮産米増殖計画の実績	1	昭 8・8	A5	72

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
611,39	84	朝鮮総督府穀物検査所	朝鮮ニ於ケル社還米制度	1	昭 8 -	美 復	8枚
" 47	"	"	甲, 道費ニ依ル米穀ノ貸付ニ関スル打合 乙, 野積, 粃, 貯蔵組合ニ関スル打合	1	昭 -	" 膳	
611,43	"	高橋竜司	米価調節の唯一政策	1	昭 9・10	A5	28
611,47	"	朝鮮総督府農林局	米穀倉庫計画	1	昭 8・1	美 膳 複	
611,48	"	"	粃・粟, 輸移出入高累年比較表	1	昭 9・12	美タ17	10枚
"	"	"	秘, 朝鮮米移出統制施設計画書	1	昭 8・2	美 膳	30"
"	"	"	秘, 米穀, 道外搬出高調	1	昭 9・12	美タ17	12"
"	"	"	朝鮮米移出統制施設計画書	1	昭 8 -	-	
"	"	"	鮮米の内地移入防止に対する根本対策	1	昭 8 -	-	
611,6 221,4	"	京畿道農会	昭和3年度事業報告書, 付決算書	1	昭 4・4	A5	33
611,6	"	朝鮮総督府農林局	農会関係資料	1	昭 -	美 -	
"	"	朝鮮総督府	水利組合理事官選ニ関スル道知事会議提出意見	1	昭 8 -	美タ17	
" 221,4	"	渡辺忍	京畿道農会事務引継書	1	昭 6 -	美 復	15枚
" 334 221,4	"	京畿道農会	郡農会事業費予算	1	昭 2 -	A5	43
" "	"	"	昭和3年度京畿道農会歳入歳出予算書	1	昭 3・3	"	35
611,6 221,4	"	"	道農会事業の状況	1	昭 3・4	"	10
"	"	"	昭和2年度事業報告書	1	昭 3・4	"	26
611,6	"	朝鮮総督府農林局	不二農村産業組合に関する件	1	昭 9 -	-	
" 640,7	"	朝鮮農会	有畜産業経営調査書(案)	1	昭 ?	美 膳	
611,7 335,49	"	全羅北道	不二農村に関する調査	1	昭元年8	美 復	
" 335,4	"	"	不二農村の概況	1	昭 3 -	美	4枚
611,7	"	嶋谷農場	嶋谷農場概要	1	昭 5・5	美 膳	3"
"	"	朝鮮総督府農林局	各道林業副産品の種類及年産額	1	昭 -	-	
611,75	"	渡辺忍	ドレ丈, 鋤ク力ガ剃ツテイルカ	1	昭 8	美 復	6"

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
611.15.4	84	京畿道 編	朝鮮に於ける農山村振興運動	1	昭10 -	-	
611.15 650	"	慶尚南道 "	農山村経済更生指導部落に於ける 林業施設	1	昭 -	美 謄	
"・611.16 221.4	"	湫洞農事改良実行 組合	組合進展概況	1	昭 6・7	-	
611.15	"	朝鮮総督府農林局	自作農創定資金関係	1	昭 9・9	美 謄	
"	"	"	農山漁村振興に関する指示 (内務・産業部長打合せ)	1	昭 8 -	-	
"	"	"	自作農設定・小作関係等、指導 監督員増員経費	1	昭 -	-	
611.18 344	"	"	農務関係予算概算説明	1	昭 9 -	-	
611.2	"	"	朝鮮ニ於ケル小作ニ関スル参考 事項摘要	1	昭 8 -	B6	136
"・317.3	"	"	小作関係調査(小作争議件数表外)	1	昭 -	-	
"	"	"	小作ニ関スル事務ニ従事スル者ノ 増員	1	昭 7 -	美 謄	3枚
611.22	"	朝鮮総督府 編	駅屯土売払後の実情調査(各道集計)	1	昭 3 -	"	
611.24 221.1.2	"	" 農林局	北鮮開拓地域内の、農耕適地その 其開放予定地	1	昭 7・11	美タプ	
"	"	"	北鮮開拓予備計画	1	昭 8・2	美 謄	
611.24 650.12	"	"	北鮮拓殖事業の実績と昭和9年度の 事業	1	昭10 -	-	
611.24	"	" 山林部	秘、北鮮森林開拓事業計画書	1	昭 7・7	美 謄	
"・221.2	"	大日本製糖朝鮮支店	夢金浦開拓事業概要	1	昭 6・10	-	
"・210 222.5	"	石 塚 峻	北海道及樺太の拓殖及植民状況 (満州との比較)	1	昭 8 -	-	
611.24 221.2	"	朝鮮総督府 編	国有未墾地位置図 20万地図	1	大12・8	地	2
611.24	"	朝鮮総督府 編	北鮮開拓 第3号(雑誌)	1	昭 -	-	
611.24.06	"	" 農林局	北鮮開拓事業実行打合せ、聴取 事項・答申書	1	昭 8 -	-	
611.24 657	"	" 伊藤林業課長	北鮮開拓中、森林利用開発事業	1	昭 6 -	美 復	
"	"	朝鮮総督府 編	火田対策 報告要旨	1	昭 -	"	22枚
"	"	"	道・郡・島・邑面・農村振興委員 会要綱	1	昭 -	-	
"	"	"	北鮮開拓事業計画書及実行計画	1	昭 7 -	-	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
611.24 211.1-2	84	朝鮮総督府農林局	北鮮開拓事業・鉄道及森林施設 ノ収益	1	昭 9・8	美 謄	4枚
" 221.4	"	京 畿 道 編	小作慣行調査概要	1	大11 -	A5	19
611.26 210	"	朝鮮総督府農林局	内地ニ於ケル小作法草案トソノ解説	1	昭 -	"	81
"・611.29 614.3	"	朝鮮殖産助成財団	水利組合ト小作慣行	1	昭 6・3	B6	34
611.26	"	朝鮮総督府 編	小作令参考・ウキルド、フエルド 氏意見	1	昭 ?	美 謄	書
611.26	"	" 殖産局	小作令制定関係書類・予定・要 綱等	1	昭 6 -	美 謄	
"	"	" 農林局	小作令ニ対スル参考、小作事情 その1	1	昭 -	"	28枚
"	"	"	小作地ノ管理状況	1	昭 -	"	101
"・311.21	"	"	小作慣行ノ改善ニ関スル政務総監 通牒	1	昭 3・7	"	41
"・235	"	"	分益小作ニ関スル 1889年7月18日 フランス法	1	昭 -	"	51
"・230	"	九大、沢村教授	諸外国ノ小作法	1	昭 -	"	51
"	"	朝鮮総督府殖産局	朝鮮ニ於ケル小作ニ関スル法令	1	昭 6・7	B6	111
611.28 311.42	"	朝鮮総督府 編	市街地・準市街地・地価改正準備 調査(実績)	1	昭 3 -	-	
611.28	"	朝鮮殖産銀行	脊・売買価格収益表	1	昭 8 -	-	
611.3	"	朝鮮総督府	米穀自治的管理案 修正の趣旨	1	昭 -	-	
611.31.42	"	上山満之進	米穀政策の匡正、米穀生産費と は何ぞや	1	昭 9・8	A5	39
611.3.31 338.1	"	朝鮮銀行	秘、米穀法の運用と金融市場と の関係	1	昭 7・8	美 謄	
611.31 678	"	朝鮮総督府農林局	米粟輸移出入高	1	昭 8・11 ~ 9・8	"	
611.31	"	"	秘、米穀統制調査書類	1	昭 9・4	"	
"	"	"	" 米穀統制参考資料	1	昭 9・9	"	
"	"	"	極秘、米穀対策関係書類	1	昭 9・9	"	
611.3 335.2	"	" 湯村農産課長	朝鮮ニ於ケル米穀統制ノ経過	1	昭 9・9	A5	115
611.31	"	朝鮮総督府農林局	秘、米穀自治統制案ニ対スル質 疑応答	1	昭 9・10	美 謄	
"	"	"	極秘、米穀自治統制案要綱	1	昭 9・10	"	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
610.76	84	朝鮮総督府農事試験場 編	宮繕工事計画書	/	昭 8 -		
610.7	"	" 農林局 "	農山漁村振興ニ関スル諸資料、綴	/	昭 7~8	美 譜	
611.1	"	朝鮮総督府 "	農山漁村振興ニ関スル指示 (内務・産業部長打合せ)	/	昭 8.12	" 7枚	
"	"	" "	朝鮮に於ける農村振興運動に就て	/	昭 9.4	B5 8	
"	"	" "	農山漁村振興に関する総督指示	/	昭 8.11	美 4枚	
"	"	" "	農村経済更生に関し、調査研究を要すべき項目	/	昭 9 -		
"	"	" "	農家更生計画ノ実行上留意ヲ要スト認ムル一般的事項	/	昭 9 ?	美 譜 9"	
611.1・651.1	"	" 農林局 "	昭和10年度施設を要すと認むる重要事項	/	昭 9 -	" 45"	
611.1	"	" " "	農林局所管、昭和9年度、各種事業計画	/	昭 8 -	" 43"	
"	"	" " "	昭和8年度、農林省農産課関係補助金交付状況	/	昭 8 -	" 8"	
"・344	"	" " "	昭和8年度、予算要求事項概要	/	昭 7.10	"	
600	"	" " "	昭和8年度、予算要求事項概要	/	昭 7.10	"	
611.1・221.7	"	全羅北道 "	参考資料 (知事用)	/	大 14 -	"	
611.1	"	朝鮮総督府 "	農山漁村ノ振興計画実施ノ状況外	/	-	" 59"	
"	"	" 農林局 "	農務関係、諸般参考事項 綴	/	昭 8.6	B5 -	
"・651.1	"	" 山林部 "	秘、農村救済対策案	/	昭 ?	美 譜 22"	
"・344	"	朝鮮総督府 "	昭和10年度農村振興施設費、増額要求概要	/	昭 10 -	" 10"	
"	"	" "	道農務課長、合同協定事項	/	大 13 -	A5 7P	
"・221.4	"	京畿道 "	農務関係事項 綴	/	昭 7 -	美 譜	
"	"	朝鮮総督府 "	農村救済対策 (産業組合)	/	昭 ?	" 4"	
"・600	"	" 農務課 "	秘、農村救済対策案 (農務課)	/	昭 ?	" 38"	
"・600	"	" 農政課 "	秘、 " (農政課)	/	昭 ?	美 717 30"	
611.1	"	" 農林局 "	秘、農村救済施設要綱 (蚕業係)	/	昭 ?	美 譜 16"	
"	"	朝鮮総督府 "	道農務課長合同協定事項	/	大 13 -	B6 -	
611.12	"	農林省農林局 "	秘、米穀対策関係諸法令 (未定稿)	/	昭 10.1	美 譜	
611.31	"	"					
611.12	"	朝鮮総督府殖産局	諸外国に於ける小作に関する法令	/	昭 7 -	A5 569 P	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
611.12 611.96	84	朝鮮総督府農林局	議會ニ於ケル小作調停法案ノ説明ト質疑応答	/	昭 -	美 譜 32枚	
611.12	"	" 殖産局	諸外国の小作法	/	昭 7 -	-	
"・324.2	"	" 農林局	朝鮮小作令試案 (農務課案)	/	昭 8.7	美 譜 48"	
"	"	" "	朝鮮小作令案	/	昭 -	" 8"	
"	"	" "	小作令案	/	昭 4.6	" 18"	
"	"	" "	小作法及之に伴ふ各種機関設置の理由	/	昭 6 -	"	
611.12	"	" "	内外ニ於ケル小作ニ関スル裁判組織	/	昭 -	"	
"	"	" 殖産局	朝鮮ニ於ケル小作ニ関スル法令	/	昭 6.7	B4 173	
611.15	"	" 農林局	朝鮮に於ける農村振興運動に就て	/	昭 8 -	美 譜 9枚	
"	"	" "	"	/	昭 9.4	B5 8	
"・317.21 318	"	朝鮮総督府 編	農山漁村振興計画実施ニ関スル件 (政務総監通牒)	/	昭 8.3	A4 -	
611.15	"	厚昌山農指導区 監督事務所	山農指導予定計画書 (平安北道)	/	昭 8	美 複 24枚	
"	"	朝鮮総督府農務課	自作農設定計画案	/	昭 -	" 13"	
"・221.1	"	咸鏡南道 編	咸鏡南道地方振興要綱	/	昭 7 -	A5 8	
611.15	"	朝鮮総督府 "	道参与官合同協議事項	/	昭 8.11	美 譜 2枚	
"	"	京畿道 "	朝鮮に於ける山村振興運動に就て	/	昭 10 -	"	
"	"	朝鮮総督府農林局	農山漁村振興運動に関する参考資料	/	昭 8.3	" 32"	
"	"	八尋生男	農家更生計画樹立方法 解説	/	昭 8.12	B6 102	
"	"	朝鮮総督府農林局	農村振興運動ニ対スル昭和9年度ノ指導計画	/	昭 9 -	美 譜 3枚	
"	"	" "	各道農家更生計画進捗状況調	/	昭 9.4	" 2"	
"	"	" "	更生指導部落共励施設改組要項	/	昭 9 -	" 13"	
"	"	" "	農山漁村振興ニ関スル諸資料 綴	/	昭 7 -	-	
"	"	江原道高城郡 自力更生実績品評会	振興成績の概要	/	昭 8.5	美 譜 -	
"	"	農林省 編	農山漁村経済更生計画樹立方針	/	昭 7.12	A5 78	
611.15 610.6	"	朝鮮総督府農林局	農山漁村振興に関する総督指示	/	昭 8.11	美 譜	



600 産 業 (渡辺忍資料)

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
601・607	84	朝鮮総督府殖産局	産業に関する諸施設	3	昭7-		
602	"	"	朝鮮の産業	1	昭4-	A5	86
"・222,5	"	満鉄地方部事務課	日本の需要より見たる満蒙の農畜林産資源		昭7・1	B5	59
"・221,5	"	江原道	編 江原道の産業	1	昭?	折込式	
"・221,7	"	全羅北道	" 全羅北道特産品調	1	昭3-	美復	25枚
"	"	全羅南道	" 全南産業概表	1	昭?		1
603・221,7	"	"	" 全羅南道産業要覧	1	大15・1	A4	304
606	"	朝鮮総督府農林局	道・内務・産業部長打合会、協議事項	1	昭7・8	美譜	
610	"	朝鮮総督府殖産局	朝鮮の農業	1	昭7・3	A5	2/2
610,3	"	朝鮮総督府	編 参考図書目録(農山漁村振興関係)	1	昭8・12	美譜	2
"	"	全羅北道農会	" 全羅北道の農業事情	1	昭2・6	B6	100
610,4	"	渡辺農林局長	農村振興運動に対する局長講演	1	昭10-	美	59枚
"	"	帝国地方行政学会 朝鮮本部	編 農山漁村指導大講演録	1	昭8・1	B6	150
"	"	朝鮮総督府	" 農山漁村振興講演集	1	昭10-	"	3/5
"	"	朴 喆 熙	講演草 (農村振興ニ関スル)	1	昭8・2	A5	30
"	"	朝鮮総督府	編 農村振興を語る(訂正の分)	1	昭8-	美譜	24枚
"	"	"	" 農山漁村振興打合会総督訓示案	1	昭10・1	"	27"
"	"	"	" 農林局長口演要旨	1	昭9・1	B5	20
"	"	"	"	1	昭8・11	美譜	14枚
610,5	"	" 農林局	農村振興ニ関スル参考資料	1	昭9・4	"	10"
"	84	全羅北道農務課編	農事統計 大正10年	1	大11-		
"	"	京畿道	" 昭和2年	1	昭3-	B4	-
"	"	朝鮮総督府	" 農業統計表 昭和6年	1	昭8・3	"	104
"	"	中央報徳会	" 農村対策号(新民第27篇7号)	1	昭7・7	A5	106
"・611,15	"	朝鮮総督府農林局	自力更生覚書 昭8創刊号、2・3・5・7・8・9・10・13・14・15・36・41各号	13	昭8~12		

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
610,5 611,15	84	朝鮮総督府	編 農山漁村振興運動ニ関スル農林局長演述要旨	1	昭10・1	美譜	34枚
610,6	"	" 農林局	" 内務部長・産業部長会議、協議事項原案	1	昭?	"	5"
"	"	朝鮮総督府	" 宇垣総督口演要旨	2	昭9・1	B5	18
"	"	"	" 農山漁村振興ニ関スル総督指示	1	昭8・11	美譜	8枚
"	"	渡辺農林局長	農村振興問題に就ての渡辺局長講演草稿	1	昭9・1	美	148枚
"	"	朝鮮総督府	編 " 農林局長演述要旨	1	昭8・11	美譜	15
"	"	"	" 農村振興指導主任打合会ニ於ケル農林局長口演要旨	1	昭9・1	美	44枚
"	"	"	" 打合会、指示及び希望	1	昭9・1	美譜	23"
"	"	" 農林局	" 打合会日程及出席者名簿	1	昭9・1	"	8"
"	"	朝鮮総督府	編 各道参与官会同ニ於ケル宇垣総督訓示抜萃	1	昭8・11	"	4"
"	"	"	" 農山漁村振興ニ関スル指示(内務・産業部長打合会)	1	昭8・12	"	5"
"	"	"	" 政務総監訓示 抜萃	1	昭8・12	"	2"
"	"	"	" 第7回農村振興委員会議題	1	昭8・5	"	6"
"	"	" 農林局	" 農山漁村振興打合会ニ於ケル説明要旨	1	昭10・1	"	10"
"	"	朝鮮総督府	編 道知事会議、農林関係、訓示指示	1	昭8-	-	-
610,7	"	" 農林局	" 農家更生5年計画(一覧表)	1	昭8・1	"	1"
"・611,15	"	"	" 農家更生年中行事(表)	1	昭8-	"	1"
610,7	"	京畿道	" 農村指導施設の状況	1	昭7-	美復	9"
"	"	朝鮮総督府	" 農村振興を語る	1	昭8・2	B4	38
"	"	" 農務課	" 農村指導精神 振作ニ関スル件	1	昭7-	美譜	1枚
610,7,75	"	" 農事試験場	" 調査及試験費	1	昭8-	"	15"
610,76	"	農林省	" 昭和8年度、北海道及府県農事試験場支出額	1	昭8-	"	8"
"	"	"	" 農事試験場ニ関スル参考資料	1	昭8-	"	9"
"	"	朝鮮総督府農事試験場	" 昭和8年度、新規予算要求書	1	昭7-	"	49"



分類記号	函架	編 著 者 名	書 名	冊	刊行年月	型	頁
686,2	15	朝鮮鉄道協会 編	朝鮮の鉄道 昭和 2年版	1	昭 2・5	A5	305
"	"	"	" 昭和 3年版	1	昭 3・7	"	384
"	"	"	" 昭和 12年版	1	昭 12・12	"	45
686,2	15	朝鮮総督府鉄道局	朝鮮鉄道状況 第11回	1	大 9・12	B5	85
"	"	"	" 第16回	1	大 14・12	"	126
"	"	"	" 第28回	1	昭 12・12	"	194
"	"	"	" 第29回	1	昭 13・12	"	184
"	"	朝鮮総督府交通局	極秘, 朝鮮交通状況 第1回	1	昭 19・12	"	247
"	"	" 鉄道局	鉄道局 昭和 8 年度年報 / ~ 5 綴 /	1	—		
( 内 容 )							
			第1編 一般概況	B5	94P		
			第2編 庶務, 経理	"	85		
			第3編 " "	"			
			第4編 運 輸	"	185		
			第5編 私設鉄道	"	33		
686,2	15	朝鮮鉄道協会 編	朝鮮鉄道一斑 昭和 2年度	1	昭 2・2	B5	132
"	"	"	" 昭和 4年度	1	昭 4・1	"	148
"	"	"	" 昭和 5年度	1	昭 5・1	"	159
"	"	"	" 昭和 6年度	1	昭 6・1	"	165
"	"	"	" 昭和 7年度	1	昭 7・1	"	181
"	"	"	" 昭和 8年度	1	昭 8・1	"	176
"	"	"	" 昭和 9年度	1	昭 9・1	"	164
"	"	"	" 昭和 10年度	1	昭 10・1	"	182
"	"	"	" 昭和 11年度	1	昭 11・1	"	174
"	"	"	" 昭和 12年度	1	昭 12・1	"	171
686,8	"	朝鮮総督府鉄道局	朝鮮鉄道駅勢一斑 上巻	1	大 3・12	"	820
"	"	"	" 下巻	1	大 3・12	"	470
686,9	"	東 条 正 平	朝鮮私設鉄道の特異性と其の将来	1	昭 7・11	A5	12
"	"	"	第 44 回 帝国議会と朝鮮私設鉄道	1	昭 8・1	"	38

分類記号	函架	編 著 者 名	書 名	冊	刊行年月	型	頁
690,4・001	12	朝鮮総督府通信局	通 信 (朝鮮総攬 P 827)	—	—		
( 内 容 )							
		山 本 犀 藏	通信事業二十年史	P 827			
		佐々木 仁	朝鮮に於ける電信電話の発達	P 839			
		池 清	朝鮮の郵便制度一斑	P 844			
690,5	15	朝鮮総督府通信局	通信事務概況 大正 12 年度	1	大 13・12	B5	74
"	"	"	朝鮮総督府通信統計要覧 昭 4 年度	1	昭 5・11	"	90
"	"	"	" 通信年報 大正 12 年度	1	大 13・12	"	175
"	"	"	" " 昭和 4 年度	1	昭 5・11	"	161
699,2	16	土 師 盛 貞	ラジオと朝鮮	1	昭 13・8	A5	28
699,3	"	朝鮮放送協会 編	秘, 事業計画及収支予算書 昭 15 年度	1	昭 15・3	B5	51

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
678.9	48	朝鮮総督府 編	朝鮮貿易年表	昭和 5 年	1 昭 6・10	A4	688
"	"	"	"	昭和 6 年	1 昭 7・10	"	686
"	"	"	"	昭和 7 年	1 昭 8・9	"	676
"	"	"	"	昭和 8 年	1 昭 9・9	"	633
"	"	"	"	昭和 9 年	1 昭 10・8	"	647
"	"	"	"	昭和 10 年	1 昭 11・10	"	801
"	"	"	"	昭和 11 年	1 昭 12・8	"	849
"	"	"	"	昭和 12 年	1 昭 13・8	"	812
678.9	47	朝鮮総督府 編	朝鮮貿易要覧	大正 4 年	1 大 5・12	A5	442
"	"	"	"	大正 9 年	1 大 10・9	"	370
"	"	"	"	大正 10 年	1 大 11・12	"	377
"	"	"	"	大正 11 年	1 大 12・9	"	316
"	"	"	"	大正 12 年	1 大 13・9	"	374
"	"	"	"	大正 13 年	1 大 14・8	"	440
"	"	"	"	大正 14 年	1 大 15・8	"	415
"	"	"	"	昭和 3 年	1 昭 4・10	"	472
"	"	"	"	昭和 4 年	1 昭 6・1	"	361
"	"	"	"	昭和 5 年	1 昭 7・3	"	419
"	"	"	"	昭和 6 年	1 昭 8・3	"	428
680 交 通 。 海 運 ・ 道 路 ・ 鉄 道 ・ 航 空 ・ 観 光 ・							
680・001	12	朝鮮総督府 編	交 通 ( 内 容 )	-	-	-	-
		大 村 卓 一	朝鮮国有鉄道の経営に就て	P 787			
		榛 葉 孝 平	拡大せる朝鮮の道路網	P 804			
		沢 崎 修	朝鮮に於ける鉄道の普及と私設鉄道	P 806			
		真 鍋 半 八	運搬具の統計的考察	P 815			
		大 村 卓 一	北鮮開発に伴う鉄道計画	P 825			
683.1	15	東洋協会調査部編	北鮮三港と日滿通商關係	1 昭 10・8	A5	32	
"	"	朝鮮殖産銀行調査部	敦図線及其終端港	1 昭 8・2	"	103	
"	"	峰 旗 良 充 述	吉林省開發と豆満自由港	1 大 14・9	"	36	
"	"	松 尾 小 三 郎	所謂・北鮮ルートに就て	1 昭 13・3	"	32	
683.1	15	鈴木武雄	続・起点港灣の詮衡	1 昭 7・6	"	13	
683.2	"	大阪商船株式会社	大阪商船株式会社五十年史	1 昭 9・2	B5	962	
685.1	"	石 森 久 弥	朝鮮運送問題と厳正批判	1 昭 5・4	A5	136	
685.2	"	朝鮮総督府土木部	朝鮮の道路 大正 12 年版	1 大 12・3	"	40	
"	"	"	" 昭和 3 年版	1 昭 3・5	"	33	
685.05	16	朝鮮鉄道協会 編	朝鮮鉄道協会々報 22 卷 8 号〜27 卷 5 号	10 昭 18・8〜19・5	A5		
686.1	15	大 村 卓 一	朝鮮の産業と鉄道	1 大 14・11	A5	54	
686.1	11	賀 田 直 治	朝鮮の鉄道に関する研究 (朝鮮産業叢書)	-	-		
"	15	吉 原 重 成 述	鉄道電化の経済的考察	1 昭 3・5	A5	13	
686.11	15	朝鮮総督府鉄道局	朝鮮鉄道論纂	1 昭 5・6	"	470	
"	"	帝國鉄道協会 編	朝鮮に於ける鉄道普及及び促進に付建議	1 大 15・2	"	116	
"	"	清津商業會議所 四 元 嘉 平 次	吉会鉄道と終端港に対する所見	1 大 15・1	"	7	
686.11 611.24	"	-	吉敦鉄道沿線水田計画書	1 大 15・6	-		
686.2	15	朝鮮総督府鉄道局	朝鮮鉄道史 全	1 大 4・10	"	418	
"	72	"	朝鮮鉄道史 創始時代 第 1 卷	1 昭 12・6	"	403	
"	15	朝鮮鉄道協会 編	朝鮮の鉄道 大正 10 年版	1 大 10・8	"	86	
"	"	"	" 大正 11 年版	1 大 11・12	"	28	
"	"	"	" 大正 12 年版	1 大 12 -	"	87	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
680・001	12	朝鮮総督府 編	交 通 ( 内 容 )	-	-	-	-
		大 村 卓 一	朝鮮国有鉄道の経営に就て	P 801			
		榛 葉 孝 平	拡大せる朝鮮の道路網	P 804			
		沢 崎 修	朝鮮に於ける鉄道の普及と私設鉄道	P 806			
		真 鍋 半 八	運搬具の統計的考察	P 815			
		大 村 卓 一	北鮮開発に伴う鉄道計画	P 825			
683.1	15	東洋協会調査部編	北鮮三港と日滿通商關係	1 昭 10・8	A5	32	
"	"	朝鮮殖産銀行調査部	敦図線及其終端港	1 昭 8・2	"	103	
"	"	峰 旗 良 充 述	吉林省開發と豆満自由港	1 大 14・9	"	36	
"	"	松 尾 小 三 郎	所謂・北鮮ルートに就て	1 昭 13・3	"	32	
683.1	15	鈴木武雄	続・起点港灣の詮衡	1 昭 7・6	"	13	
683.2	"	大阪商船株式会社	大阪商船株式会社五十年史	1 昭 9・2	B5	962	
685.1	"	石 森 久 弥	朝鮮運送問題と厳正批判	1 昭 5・4	A5	136	
685.2	"	朝鮮総督府土木部	朝鮮の道路 大正 12 年版	1 大 12・3	"	40	
"	"	"	" 昭和 3 年版	1 昭 3・5	"	33	
685.05	16	朝鮮鉄道協会 編	朝鮮鉄道協会々報 22 卷 8 号〜27 卷 5 号	10 昭 18・8〜19・5	A5		
686.1	15	大 村 卓 一	朝鮮の産業と鉄道	1 大 14・11	A5	54	
686.1	11	賀 田 直 治	朝鮮の鉄道に関する研究 (朝鮮産業叢書)	-	-		
"	15	吉 原 重 成 述	鉄道電化の経済的考察	1 昭 3・5	A5	13	
686.11	15	朝鮮総督府鉄道局	朝鮮鉄道論纂	1 昭 5・6	"	470	
"	"	帝國鉄道協会 編	朝鮮に於ける鉄道普及及び促進に付建議	1 大 15・2	"	116	
"	"	清津商業會議所 四 元 嘉 平 次	吉会鉄道と終端港に対する所見	1 大 15・1	"	7	
686.11 611.24	"	-	吉敦鉄道沿線水田計画書	1 大 15・6	-		
686.2	15	朝鮮総督府鉄道局	朝鮮鉄道史 全	1 大 4・10	"	418	
"	72	"	朝鮮鉄道史 創始時代 第 1 卷	1 昭 12・6	"	403	
"	15	朝鮮鉄道協会 編	朝鮮の鉄道 大正 10 年版	1 大 10・8	"	86	
"	"	"	" 大正 11 年版	1 大 11・12	"	28	
"	"	"	" 大正 12 年版	1 大 12 -	"	87	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
660.2・001	12	朝鮮総督府 編	水産業 (朝鮮総攬 P 405)	—			
			( 内 容 )				
		西岡芳次郎	朝鮮水産行政の一斑 P 405				
		秋田 實	朝鮮漁業界の近勢 P 421				
		松野二平	半島水産業の概勢 P 427				
		西田敬三	朝鮮近海の海潮流と漁業 P 432				
660.1,5	16	朝鮮総督府 編	朝鮮の水産業 大正13年	1	大13・12	A5	71
"	"	"	" 大正15年	1	大15・3	"	73
"	"	"	" 昭和5年	1	昭5・9	"	98
"	"	"	" 昭和6年	1	昭6・9	"	100
"	"	"	" 昭和7年	1	昭8・4	"	116
661	"	朝鮮総督府殖産局	朝鮮の重要漁業 大正12年版	1	大12・3	"	81
663.1	"	"	朝鮮水産養殖業の将来	1	大12・3	"	28
660.76	"	朝鮮総督府 編	朝鮮総督府水産試験場報告第3号 朝鮮産淡水魚カムルチーの生活史 及養殖法	1	昭8・3	B5	91
660.1,5	"	朝鮮総督府 編	朝鮮の水産業 昭和11年	1	昭12・3	A5	105
"	"	"	" 昭和12年	1	昭13・3	"	114
"	"	"	" 昭和13年	1	昭14・3	"	116
"	"	"	" 昭和14年	1	昭15・4	"	119
"	"	"	" 昭和17年	1	昭17・4	"	90
661・319.2	K/	榎本重治	朝鮮半島沿海における取締措置 について	1	昭27・10	B5	8

## 670 商 業・商工会議所・商工業

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
670	13	朝鮮総督府 編	朝鮮人の商業 (調査資料11輯)	1	昭—		
671.6	16	本位田祥男	朝鮮の協同組合に関する意見	1	昭8・5	B6	44
"	13	車田篤	朝鮮協同組合論	1	昭7・12	A5	588
671.7	12	田中麗水	全鮮商工会議所発達史	1	昭11・1	"	759
672	16	朝鮮総督府 編	朝鮮の商工業 大正13年	1	大13・12	"	93
"	"	"	" 大正15年	1	大15・5	"	97
"	"	" 殖産局 "	" 昭和5年	1	昭5・3	"	104
"	"	" " "	" 昭和10年	1	昭10・8	"	152
672.9	11	朝鮮総督府 "	京城仁川商工業調査 大正2年	1	大2・3	B5	415
"	72	" "	市街地の商圈 (調査資料14輯)	1	昭14・12	A5	574
673.2・221	23	稲葉岩吉	湾商(義州商人) (朝鮮史講座特別講義)—	—			
674・753.3 586.7	73	宮林泰司	朝鮮の織物に就て	1	昭10・3	B6	107
675.3	12	文定昌	朝鮮の市場	1	昭16・7	A5	322
675.3	72	朝鮮総督府 編	朝鮮の市場経済(調査資料27輯)	2	昭4・6	"	528
"	12	" "	朝鮮の市場 ( " 8輯)	1	大13・11	"	664
676.1	16	加来次夫	仁取・京取・合併反対論	1	昭6・6	"	20
678.2	12	朝鮮貿易協会 編	朝鮮貿易史	1	昭18・12	"	387
678.9	48	朝鮮総督府 "	朝鮮貿易年表 大正11年	1	大12・9	A4	847
"	"	" "	" 大正12年	1	大13・9	"	1015
"	"	" "	" 大正13年	1	大14・8	"	1085
"	"	" "	" 大正14年	1	大15・9	"	1127
"	"	" "	" 昭和元年	1	昭2・9	"	714
"	"	" "	" 昭和2年	1	昭3・9	"	744
"	"	" "	" 昭和3年	1	昭4・10	"	707
"	"	" "	" 昭和4年	1	昭5・9	"	711

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
630・001	12	朝鮮総督府 編	蚕業 (朝鮮総攬 P 287)	1			
		—	先蚕壇と蚕室里 P 347				
630,2	16	朝鮮総督府殖産局	朝鮮の蚕糸業 大正12年	1	大12・3	A5	47
"	"	"	" 昭和4年	1	昭4・9	"	58
"	"	"	" 昭和5年	1	昭5・6	"	248
630,4	16	朝鮮工業協会 編	懸賞論文、朝鮮蚕糸業の現在及将来を論ず	1	昭—?	"	298
630,3	71	朝鮮蚕糸会 "	模範養蚕家名簿	1	大15?	"	16
634	"	朝鮮蚕種製造業組合中央会 編	朝鮮蚕種図絵 昭和4年版	1	昭4・10?	—	

640 畜産業

640・001	12	朝鮮総督府 編	畜産業 (朝鮮総攬 P 355)	—			
			(内 容)				
		鈴木竹磨	朝鮮の畜産一斑 P 355				
		吉田雄次郎	朝鮮馬政の交遷 P 363				
		鈴木竹磨	朝鮮に於ける綿羊事業 P 368				
640,2	16	朝鮮総督府	朝鮮の畜産 大正12年	1	大12・3	A5	83
"	"	"	" 昭和2年	1	昭2・3	"	95
"	"	"	" 昭和5年	1	昭5・3	"	97
640,3	71	全羅北道金堤郡編	金堤郡畜産要覧	1	大15	新書判	69
640,5	16	朝鮮総督府農林局	朝鮮畜産統計 昭和7年	1	昭8—	A5	79
"	"	"	" 昭和9年	1	昭10?	"	79
"	"	"	" 昭和11年	1	昭11・12	"	112
"	"	"	秘 " 昭和16年	2	昭17・12	"	85
"	"	"	秘 " 昭和17年	1	昭19・4	"	79
645,4	16	鎌田沢一郎	羊 (人生と羊・綿羊の飼い方、外)	1	昭9・10	"	434

650 林業

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
650・001	12	朝鮮総督府 編	林業 (朝鮮総攬 P 499)	—			
			(内 容)				
		渡辺豊日子	半島20年の林政 P 499				
		木谷重栄	造林の合理化 P 504				
		斎藤音作	朝鮮の緑化運動に就て P 507				
		松岡修三	国境地帯の森林 P 511				
		沢慶治郎	北朝鮮拓計画による山林事業に就て P 513				
650	16	朝鮮山林会 編	半島の翠緑 写真帖	1	大15・9	B5	44
"	"	朝鮮総督府殖産局	朝鮮の林業 大正12年版	1	大12・9	A5	106
"	"	"	" 大正14年版	1	大14・9	"	100
"	"	" 山林部	" 昭和4年版	1	昭4・9	"	118
"	"	" 農林局	" 昭和9年版	1	昭9・9	"	128
"	"	黄海社林業部	朝鮮殖林事業の有望	1	大10・8	"	44
"	"	斎藤音作 編	朝鮮林業投資の有望	1	昭5—	"	33
"	71	咸鏡北道	咸北の林業 昭和10年	1	昭10・3	"	16
656,5	"	朝鮮総督府	朝鮮の砂防事業	1	昭9—	"	42

660 水産業

660,2	13	吉田敬市	朝鮮水産開発史	1	昭29・5	A5	510
"	13	韓国農商工部水産局	韓国水産誌 第1輯	1	明44・12	"	712
"	"	"	" 第2輯	1	"	"	1010
"	"	"	" 第3輯	1	"	"	980
"	"	"	" 第4輯	1	"	"	416



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
611.43	/3	八木芳之助	米価及米価統制問題	/	昭 -	A5	728
611.82	/6	朝鮮農会 編	農家経済調査(昭5)京畿道ノ分	/	昭 7・1	"	266
"	"	"	" " 全羅南道ノ分	/	昭 7・9	"	282
611.35	"	新義州商工会議所	満州粟に関する調査	/	昭14・9	B5	28
611.9・001	/7	守尾栄夫 述	農村問題に就て	-	昭10・10	-	
611.91	72	神戸正雄	朝鮮農業移民論 (完)	/	明43・12	A5	182
611.96	73	文定昌	朝鮮農村団体史	2	昭17・12	"	539
611.92	74	藤林省 編	朝鮮農村事情(写真帖)	/	昭 6・6	B5	47
612	/3	朝鮮総督府殖産局	朝鮮の農業 昭和4年版	/	昭 4・3	A5	250
"	"	"	" 昭和7年版	/	昭 7・3	-	
"	"	"	" 昭和8年版	/	昭 8・12	A5	211
"	"	"	" 昭和9年版	/	昭11・1	"	194
615	"	朝鮮総督府勸業模範場 編	農作物に関する特別調査報告集 第1	/	大 3・7	"	231
"・612.9	"	"	朝鮮に於ける主要作物の分布の状況	/	大12・2	"	60
614.2・001	/2	朝鮮総督府	土地改良事業 (朝鮮総攬 P.375)	-	-	-	
			(内 容)				
			松村松盛 土地改良事業の一斑 P.375				
			藤井寛太郎 水利組合に対する世評とその真相 P.382				
			池田泰治郎 朝鮮に於ける水利事業の発展 P.388				
			中村寅之助 土地改良事業問答 P.395				
614.2	/6	朝鮮総督府 編	土地改良事業の実績 (昭7年度末現在)	/	昭 8 -	A5	25
"	"	" 土地改良部	朝鮮土地改良令の要旨・付水利組合令改正の要旨	/	昭 3・6	A5	44
"	/3	朝鮮土地改良株式会社 編	朝鮮土地改良株式会社誌	/	昭11・9	B5	126
"	"	朝鮮総督府土地改良部 編	朝鮮土地改良事業要覧 昭4年度	/	昭 5・12	"	164
614.3	/6	"	朝鮮の水利組合	/	昭 5・3	A5	12
"	71	東津水利組合	東津水利組合事業地平面図 10方	/	昭 -	折式	
614.8	73	朝鮮総督府勸業模範場	朝鮮の在来農具	/	大15・3	B5	114
616	/6	朝鮮総督府殖産局	朝鮮に於ける米以外の食用作物	/	大12・3	A5	55

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
616.2	/6	黄海道農会 編	釜山平野玄武岩嶺に関する田作試験成績	/	昭10・5	A5	37
"	/3	朝鮮総督府勸業模範場	朝鮮に於ける稲の優良品種分布普及状況	/	大13・8	B5	83
"	/7	全羅北道	全羅北道種苗場一覽	/	大 5 ?	折式	
617.7・348.4	/4	今村 範	人 藝 史 1~7 6欠	-	-	-	
617.7	/4	朝鮮総督府専売局	人 藝 神 草	/	昭 8・4	A5	30
"・348.4	"	朝鮮養蚕組合 編	朝鮮養蚕組合創立20周年記念誌	/	昭 6・2	"	116
611.91・292.5	K/	中野清助	鮮人農村視察概況 第1回報告	/	昭 5・5	B5	114
"	"	朝鮮総督府内務局社会課	満州西比利亞地方に於ける朝鮮人事情	/	昭 2・11	A5	322
610	K/	式田清三	朝鮮農業要覧	/	明44・11	A5	525
611.1	K/	東洋拓殖株式会社	業務要覧 昭12・12	/	昭14・12	A5	52
611.8	K/	朝鮮総督府	農村振興を語る	/	昭 8・2	B6	38
611.24 221.12	/5	岩本善文 久保田卓治	北 鮮 の 開 拓	/	昭 5・9	B5	903
615.8 369.32	71	京城府 編	大正乙丑の水害(大14・7・18)	/	大15 -	A5	168
615.8 218・654.5	/6	慶尚南道 編	慶尚南道水害誌	/	昭10・5	"	115
			630 蚕 糸 業				
630.2・001	/2	朝鮮総督府 編	蚕 業 (朝鮮総攬 P.287)	-	-	-	
			(内 容)				
			湯村辰二郎 朝鮮の蚕糸業 P.287				
			田中 明 農事試験場蚕糸の事業 P.303				
			松室重正 朝鮮に於ける養蚕小作の研究 P.344				
			今村 範 朝鮮養蚕雑記 P.339				

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
611.1	13	東洋拓殖株式会社	東洋拓殖株式会社業務要覧 大正15年度	1	昭2・9	B6	55
"	"	"	" 昭和2年度	1	昭3・11	"	54
"	"	"	" 昭和3年度	1	昭4・9	"	54
"	"	"	" 昭和4年度	1	昭5・9	"	55
"	"	"	" 昭和6年度	1	昭7・9	"	55
"	"	"	" 昭和8年度	1	昭9・11	"	54
"	"	"	東洋拓殖株式会社要覧(昭11年度)	1	昭12・12	A5	54
"	"	"	東洋拓殖株式会社三十年誌	1	昭14・3	B5	289
"	"	北崎房太郎	東拓三十年の足跡	1	昭13・12	B6	226
611.12 314.45	46	中央情報社 編	第73議会・拓務議事詳録・東拓 法中改正法案	1	昭13・5	B5	256
611.2	16	李 覚 鍾	朝鮮における小作制度	2	大11・9	A5	34
" . 324.2	"	朝鮮総督府殖産局	小作農民に関する調査	1	昭3・2	"	219
611.26 324.26	74	京 畿 道 編	小作慣行調査概要	2	大11 -	A5	19
611.26	16	朝鮮総督府内務局	小作慣行及駅屯賭に関する調査書	1	昭3・3	"	120
611.28 611.26	"	日本勸業銀行調査課	昭和9年度・田畑売買価格及 小作料調	1	昭9・9	"	13
"	"	"	昭和11年度 "	1	昭11・8	"	15
611.28	16 74	朝鮮殖産銀行調査部	第7回全鮮香田売買価格及収益 調 (昭10・3)	2	昭10・3	"	15
"	"	"	第8回 " (昭10,11)	2	昭10・11	"	25
"	16	"	第9回 " (昭11・)	1	昭11・10	"	26
"	"	"	第10回 " (昭12・)	1	昭12・9	"	26
"	"	"	第11回 " (昭13・)	1	昭13・10	"	25
611.3	13	東畑精一・大川一司	朝鮮米穀経済論(米穀経済の研究)	1	昭14・11	"	446
"	"	"	"	1	昭12・4	"	147
"	16	朝鮮総督府農林局	米 穀 統 計	1	昭8・8	"	28
611.31	16	朝鮮総督府 編	朝鮮産米増殖計画要綱	1	大15・1	B5	22
" . 001	"	中央朝鮮協会 "	朝鮮産米の増殖計画	1	大15・7	B6	53
"	"	"	"	1	昭10・10	"	-
611.31	"	嶋 元 勸	食糧政策と朝鮮	1	昭14・11	"	53

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
611.31	13	大日本米穀会 編	米穀法運用調査会議事録	1	昭15・1	A5	-
"	16	朝鮮銀行調査課 "	米穀統制に関する諸問題	1	昭12・12	"	16
"	13	朝鮮総督府農林局	米穀関係法規	1	昭10・2	"	3/5
"	"	"	" (朝鮮米穀要覧付録)	1	昭11・4	"	3/9
"	"	農林省米穀局 編	"	1	昭11・11	"	121
" . 683・4	"	須 藤 重 一 "	西鮮航路 米穀輸送問題について	1	昭10・12	B6	177
611.31	"	鮮米協会 "	鮮米協会十年誌	2	昭10・3	B5	405
"	16	朝鮮総督府農林局	朝鮮産米増殖計画の実績	1	昭8・8	A5	72
611.33	13	鮮米協会 編	朝鮮米の進展	1	昭 -	B5	397
"	"	"	朝鮮米の研究	1	昭13・9	A5	8/9
"	71	井 上 則 之	朝鮮米と共に三十年 (湯村辰二郎半生の記録)	1	昭3・2	B6	143
"	13	朝鮮総督府農林局	朝鮮の米 大正12年版	1	大12・3	A5	74
"	"	"	" 大正15年版	1	大15・6	"	89
"	"	"	" 昭和2年版	1	昭2・3	"	118
"	"	"	" 昭和5年版	1	昭5・3	"	900
"	"	"	" ( ? )	1	昭11・?	"	12
"	"	朝鮮殖産銀行調査部	朝鮮の米(大13)(朝鮮商品誌)	1	大13・7	"	110
611.38	"	岡 田 重 吉	朝鮮輸出米事情	1	明44・3	"	124
611.43	"	日本学術振興会刊	朝鮮米生産費に関する調査	1	昭11 -	"	51
"	16	柳 生 悦 三 述	米格付制度ノ基礎概念ニ付テ	1	昭 -	美 贈	19
"	13	朝 倉 昇	米価対策、米の売り時	1	昭7・2	B6	226
611.46	"	川 村 芳 次	農産物の販売統制	1	昭7・9	A5	262
"	16	群山米穀取引所編	競売買(節売買の解説)	1	昭 ?	美 贈	13
611.7	13	朝鮮興業株式会社	朝鮮興業株式会社二十五年誌	1	昭4・10	B5	102
"	"	"	" 三十周年記念誌	1	昭11・10	"	179
"	71	小林兄弟商会 編	農場経済の根底	1	昭 -?	B6	17
"	"	中 野 宗 一	渡鮮より農場経営着手まで	1	昭 -?	贈	13
611.8	73 13	朝鮮総督府農林局	農家経済の概況とその変遷 第1部	1	昭15・3	B5	262
"	"	"	" 第2部	1	昭15・5	"	259

600 産 業

分類記号	函架	編 著 者 名	書 名	冊	刊行年月	型	頁
601	12	東洋経済新報社編	朝鮮産業の共栄圏参加体制	1	昭 7・5	B5	200
601.06	12	朝鮮総督府	産業調査委員会々議録	1	大 10・9	B5	88
"	72	"	朝鮮産業経済調査会諮問答申書	1	昭 11・10	"	88
601	"	"	" 会議録	1	昭 "	"	87.6
601.2 338.64	12	朝鮮殖産銀行	朝鮮殖産銀行と朝鮮の産業	-	-	-	-
601	"	賀田直治	朝鮮産業叢書	(14)	昭 2~5	P.1433	
		(内 容)					
		1	朝鮮産業の状況				
		2	朝鮮産業の発達に関する研究				
		3	朝鮮の農村及都市に関する研究				
		4	朝鮮人の労働能力に関する研究				
		5	朝鮮の鉄道政策に関する研究				
		6	朝鮮に関する植民政策的研究				
		7	朝鮮の天災に関する考察				
		8	朝鮮の国境に関する考察				
		9	朝鮮産業政策に関する研究				
602	73	山口 精	朝鮮産業誌 上 巻	2	明 43・5	A5	-
"	73	"	" 中 巻	2	"	"	887
"	"	"	" 下 巻	2	"	"	752
"	16	朝鮮総督府 商工奨励館	朝鮮の物産	1	昭 6・2	新書判	98
604	71	同 民 会	第2回、同民夏季大学講演集	1	昭 2・1	A5	316
606.7	27	朝鮮総督府	始政5年記念、朝鮮物産共進会 報告書 第1巻	1	大 5・9	B5	393
"	"	"	" " 第2巻	1	大 5・3	"	540
"	"	"	" " 第3巻	1	大 5・3	"	147
"	12	朝鮮博覧会 京城協賛会	朝鮮博覧会京城協賛会報告書	1	昭 5・2	A5	336
"	"	"	朝鮮博覧会記念写真 (映入)	1	昭 4・11	B5	40

分類記号	函架	編 著 者 名	書 名	冊	刊行年月	型	頁
607	71	始政5年記念朝鮮 物産共進会全北協賛会	実業手引草	1	大 4・9	B6	58
609	12	品川 昇一	朝鮮度衡通解 全	1	昭 10・10	A5	162
001・600	K1	大蔵省管理局	日本人の海外活動に関する歴史 的調査・朝鮮篇第4分冊 第9章 産業及経済政策 第10章 農業の発達	1	昭 25・7	A5	153
610~619		農 業	農業経済・農業史・農業事情・農業理化学・同工業・ 作物栽培・病虫害・食用作物・工業作物・纖維作物・ 農産製造				

610.4・001	12	朝鮮総督府 編	農 業 (朝鮮総攬 P 179) - (内 容)				
		善 生 永 助	朝鮮に於ける小作料 P 179				
		石 塚 峻	朝鮮の主要田作物に就て P 190				
		山 本 尋 巳	生産より見たる朝鮮米の消長とその将来 P 223				
		尾 崎 史 郎	肥料の需給とその取締 P 218				
		湯 村辰二郎	畑作改良増殖の実施に就て P 224				
		沢 慶治郎	火田民に就て P 239				
		善 生 永 助	朝鮮に於ける農村部落の分布 P 234				
		石 坂 峻	自作農地設定計画に就て P 257				
		"	朝鮮における棉花栽培の現在及将来 P 270				
610.76	12	朝鮮総督府 農事試験場	朝鮮総督府農事試験場二十五年誌 上巻	1	昭 6・10	B5	445
"	"	"	" 下巻	1	" "	"	558
610.7 610.77	13	朝鮮総督府	農山漁村に於ける中堅人物養成 施設の概要	1	-	-	-
611.1	71	小 野 寺 二 郎	朝鮮の農業計画と農産拡充問題	1	昭 18・6	B6	236
611.12 611.28・322.15	14	朝鮮総督府農林局 農政課 編	農地関係統制法令便覧、付 農地基準価格表	1	昭 16・11	A5	229
611.1	13	東洋拓植株式会社	東洋拓植株式会社業務要覧 大正 14年度	1	大 15 -	B6	51

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
513,2	83	平安南道 編	平南における道路・港湾・河川改修計画	1	大13 -	美地	8
514,1	"	"	平安南道, 道路共進会規定	1	昭 ?	"	謄16
517,5 615,8・654,5 369,33	"	" 警察部	大正12年・平壤付近未曾有の大水害の回顧	1	昭2・7	"	"
540,91 335,4	"	朝鮮総督府通信局	朝鮮地方電気事業統制ニ関スル件(その1, 朝鮮電気興業整理案)	1	昭7 -	"	5枚
"	"	東拓第一事業部	江界水電貯水池買収ニ関スル件	1	昭13・5	"	12
543・544	"	朝鮮総督府	秘, 発電計画及送電網計画説明書	1	昭6・10	B5	23/
"	"	"	" 電力需要の想定	1	昭6・9	"	39
"	"	"	" 発電計画及送電網計画案	1	昭6・10	"	28
"	"	"	" 水力発電所補助火力竝に工事費一覧表	1	昭 "	"	15
561,1 335,3,4	83	朝鮮総督府 編	無煙炭会社合同に対する本府の方針	1	昭 ?	-	-
562,1・375	"	" 殖産局	燃料選鉱研究所の存続を必要とする理由	1	昭6 -	-	-
564・334 335,4	"	朝鮮総督府	昭和7年予算復活要求書(製鉄奨励)	1	昭 ?	-	-
565,1	"	" 殖産局	産金奨励に就て、付、金探鉱奨励金交付規則に就て	1	昭7・10	"	32
"・335,4	"	"	第60回帝国議会議事参考資料	1	昭7 -	美謄	8
"・566・3	"	"	探・採鉱及び砂金試験費	1	昭7 -	"	"
567 569,1・335,4	"	佐賀炭鉱会社	尚州鉱山競落覚書	1	昭 -	-	-
567,4	"	朝鮮総督府殖産局技師 高浜保	平壤無煙炭鉱の石炭運搬に就て	1	昭7・3	B5	5/
569	"	平安南道 編	許可鉱区・坪数・国人別表(大正13,1,1現在)	1	大13 -	美	3
569,1,9	"	福島荘平	石炭保留区域解放, 高嶺土鉱区認可申請書	1	大12・1	"	76
569,4	"	朝鮮総督府 編	義州鉱山作業概況	1	昭7・5	"	"
569,9	"	" 殖産局技師 植村藤蔵	黒鉛の共同販賣組織に関する私見	1	昭 -	B5	53
573	"	浅川伯教	朝鮮麻業の過去及将来	1	昭9・8	B4	32
574,65 678,1	"	朝鮮総督府 編	硫酸アンモニア輸出入許可規則	1	昭6 -	-	-

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
575,14 335,24	83	東洋拓殖株式会社	無煙炭会社合同の件(朝鮮電気興業について)	1	昭7 -	-	-
576・658,6	"	朝鮮総督府 編	魚油・硬化油の重要性(現勢参考)	1	昭6 -	-	-
576	"	"	鯊柏超過品の処分	1	-	-	-
584,5	"	朝鮮皮革株式会社	製革より見たる朝鮮牛皮の特長と美点	1	昭3・9	A6	-
588,5	"	全鮮酒類品評会	朝鮮の酒	1	昭4・10	A5	35
"	"	"	全鮮酒類品評会々則	1	昭4・10	折式	-
"	"	"	朝鮮における酒造業の推移	1	昭4・10	"	-



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
569.2	74	志賀 融	朝鮮金屬鉱業発達史	1	昭 6・8	B6	180
"	"	朝鮮鉱業会 編	最近の鉱業界、昭和5年第1篇	1	昭 5 -	"	52
"	"	"	" " 第2篇	1	昭 5 -	"	88
"	"	"	" " 第3篇	1	昭 5・12	"	124
"	"	"	朝鮮鉱業の趨勢 昭和 4年	1	昭 5・11	"	72
"	"	"	" " 5年	1	昭 6・11	"	97
"	"	"	" " 6年	1	昭 8・2	"	124
"	"	"	" " 7年	1	昭 9・3	"	217
"	"	"	" " 8年	1	昭 9・11	A5	185
"	"	"	" " 9年	1	昭 10・12	"	191
"	"	"	" " 11年	1	昭 12・12	"	227
"	"	"	朝鮮鉱業の概況(昭8年6月)	1	昭 8・6	B6	27
"	"	朝鮮総督府殖産局	朝鮮の鉱業に就て	1	昭 9・4	"	10
"	"	三沢正美	朝鮮鉱業の近況(水曜会誌8~9)	1	昭 10・10	"	12
"	"	朝鮮鉱業会 編	慶尚南道 鉱業状況	1	昭 5・10	B6	44
"	"	"	慶尚北道 "	1	"	"	53
"	"	"	咸鏡北道 "	1	"	"	55
"	"	"	咸鏡南道 "	1	"	"	50
"	"	"	黄海道 "	1	"	"	61
"	"	"	平安南道 "	1	"	"	65
"	"	"	京畿道 "	1	"	"	32
"	"	"	忠清南道 "	1	昭 5・12	"	62
"	"	"	忠清北道 "	1	"	"	38
"	"	"	平安北道 "	1	"	"	128
"	"	"	江原道 "	1	"	"	65
"	"	"	全羅北道 "	1	"	"	41
"	"	"	全羅南道 "	1	"	"	42
"	"	"	朝鮮総督府平壤鉱業所概況	1	大 10・3	A4	1枚

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
569.2	74	川口 精一	久原鉱業株式会社・鎮南浦製所一斑	1	大 6・6	B6	36
"	"	島村新兵衛	黄海道安岳鉄山	1	昭 3・12	"	12
569.5	"	小坂鉄山買鉱課 編	小坂鉄山買鉱案内	1	大 14・7	"	12
"	"	" 元山出張所	朝鮮鉄石購買規定	1	大 14・6	"	4
573~575 鉄 業 ・ 燃 料 (三沢正美資料)							
573.21	74	朝鮮総督府中央試験所	鉄業原料調査(同所報告第17回6号)	1	昭 12・7	B5	17
575.11	"	朝鮮総督府燃料選鉱研究所	石炭試験報告 第1巻	1	大 13・5	B5	44
"	"	"	" 第2巻	1	昭 2・3	"	30
"	"	"	" 第3巻	1	昭 5・3	"	33
"	"	"	" 第4巻	1	昭 5・3	"	35
"	"	"	" 第5巻	1	昭 5・3	"	22
"	"	朝鮮総督府鉄道局	機関車用としての朝鮮炭焚火試験報告	1	昭 2・4	"	106
"	"	朝鮮総督府燃料選鉱研究所	石炭分析表	1	昭 11・12	A5	85
500~588 工 学 ・ 工 業 ・ 技 術 ・ 家 事 (渡辺忍資料)							
500 600・344	83	朝鮮総督府殖産局	第62回帝国議会用・事務参考資料	1	昭 7・5	美 曆	44
502・333.2 330.5	"	塩田 正洪	朝鮮工業の動向に就き私見若干	1	昭 17・5	A5	52
507.6	"	京城商工組合会長	中央試験所在置の宇垣総督宛陳情書	1	昭 6・11	美 写	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
562.05	74	朝鮮総督府燃料選鉱研究所	選鉱製錬試験報告第28回 (茂山鉄鉱選鉱試験)	1	昭12.11	B5	47
"	"	"	"第29回(鉱産物分析試験その8)	1	昭13.3	"	29
"	"	"	"第32回(朝鮮金鉱石の研究)	1	昭14.3	"	96
"	"	"	"第39回(特殊鉱物選鉱法1)	1	昭18.6	"	136
"	"	"	"第40回( " 2)	1	"	"	43
564~565 鉄冶金・非鉄冶金。(三沢正美資料)							
564.1	74	朝鮮総督府技師 遠藤鉄夫	無煙炭・煉炭に依る製鉄試験報告	1	昭19.7	B5	40
565	"	朝鮮鉱業会	朝鮮の石棉鉱業	1	昭8.10	B6	27
"	"	"	朝鮮の水鉛鉱業	1	昭8.8	"	26
"	"	"	"重石鉱業	1	"	"	42
"	"	"	"螢石鉱業	1	昭9.10	"	52
"	"	"	"滑石鉱業	1	昭8.4	"	13
"	"	"	"鉄鉱業	1	昭11.12	"	99
"	"	"	"黒鉛鉱業	1	昭11.5	"	183
"	"	"	軽金属工業と朝鮮に於けるその資料	1	昭8.12	"	50
565.3	"	朝鮮総督府殖産局	亜鉛鉱業	1	昭3.11	A5	41
565.1-569.2	"	朝鮮鉱業会	朝鮮金銀鉱の概況	1	昭6.12	B6	7
565.1	"	"	朝鮮産金増加計画草案	1	昭6.3	"	21
"	"	"	昭和7年朝鮮産金額	1	昭8.8	"	25
"	"	"	朝鮮の砂金鉱業	1	昭7.6	"	23
"	"	朝鮮総督府殖産局 鉱山課	朝鮮の金銀鉱業	1	昭11.8	"	168
"	"	三沢正美	江原道旌善郡東面に於ける金鉱	1	昭-	B5	31
"	"	石川留吉	金粒の浮游度及硫化鉱物の影響試験	1	昭9.9	"	31

## 567 石炭 (三沢正美資料)

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
567.05	73	朝鮮総督府燃料選鉱研究所	朝鮮炭田調査報告 第1巻(会寧有煙炭田)	1	昭2.3	B5	76
"	"	"	"第2巻(和順無煙炭田)	1	昭2.11	"	23
"	"	"	"第3巻(通川有煙炭田)	1	昭3.4	"	23
"	"	"	"第4巻(大正12年13年度試験作業)	1	昭3.12	"	73
"	"	"	"第5巻(高原無煙炭田)	1	昭5.3	"	93
"	"	"	"第6巻(鏡城郡有煙炭田)	1	昭5.3	"	105 付図5
"	"	"	"第7巻(大15昭元年度試験作業)	1	昭5.3	"	88
"	"	"	"第8巻(文川無煙炭田)	1	昭6.3	"	110
"	"	"	"第9巻(昭23年度試験作業)	1	昭6.3	"	267
"	"	"	"第10巻(徳川無煙炭田)	1	昭6.3	"	133
"	"	"	"第11巻(昭4年度試験作業)	1	昭9.7	"	201 付図1
"	"	"	"第12巻(昭5.6年度 " )	1	昭12.8	"	183
567.1	74	内田 親五郎	朝鮮の炭田に就て	1	昭4.10	B5	26
"	"	朝鮮鉱業会	朝鮮の石炭 第1篇(有煙炭)	1	昭8.11	"	83
"	"	"	"第2篇(無煙炭)	1	昭9.9	"	49
"	"	満鉄地質調査所	滿蒙及北支那の炭田	1	大14.12	A5	14

## 569 鉱業経済・経営。(三沢正美資料)

569.05	74	朝鮮鉱業会	朝鮮鉱業会誌	8	昭18~19	B5	50~ 10
			26巻6号 (18年6月号) 7・8・10・12				
			27巻1号 (19年1月号) 2号3号 合計8冊				
569.29	"	朝鮮総督府殖産局 鉱山課	朝鮮鉱区一覽(昭15.7.1現在)	1	昭15.12	A5	593
569.2	"	"	朝鮮の鉱業	1	昭4.3	"	216

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
561.05	73	朝鮮総督府地質調査所	朝鮮鉄床調査要報 第2冊 (朝鮮鉄物誌)	1	大 11・10	B5	104
"	"	"	" 第3冊の1 (石炭乾留試験)	1	大 13・5	"	22
"	"	"	" 第3冊の2 (石炭風化試験)	1	大 15・10	"	3
"	"	"	" 第3冊の3 (鉄産物分析)	1	昭 2・5	"	10
"	"	"	" 第4冊の1 (竹林里鉄床)	1	昭 3・8	"	21
"	"	"	" 第4冊の2 (慶州郡の珪藻土)	1	昭 5・6	"	32
"	"	"	" 第4冊の3 (富寧郡・広良金山)	1	昭 6・11	"	44
"	"	"	" 第4冊の4 (富川郡及梁山郡の金鉄)	1	昭 7・1	"	72
"	"	"	" 第5巻 (海州・信川・載寧外鉄鉄床)	1	昭 7・10	"	92
"	"	"	" 第7巻1号 (端川・菱舌土鉄床)	1	昭 7・10	"	19
"	"	"	" 第7巻2号 (載寧・鳳山等雲石鉄床)	1	昭 8・8	"	37
"	"	"	" 第8巻 (金海・海南等明礬石鉄床)	1	昭 9・5	"	99
"	"	"	" 第9巻 (古文獻に關れた鉄産物)	1	昭 10・3	"	27
"	"	"	" 第10巻1号 (石綿及雲母鉄床)	1	昭 10・2	"	45
"	"	"	" 第10巻2号 (雲松里鉄床)	1	昭 10・2	"	31
"	"	"	" 第11巻1号 (陶石・長石・珪石等)	1	昭 11・12	"	86
"	"	"	" 第12巻 (安辺・新期第三紀珪藻)	1	昭 11・12	"	37
"	"	"	" 第13巻2号 (慶北鉛及亜鉛鉄床)	1	昭 15・8	"	205
"	"	"	" 第14巻1号 (達城鉄山地質鉄床)	1	昭 15・9	"	37
561.1	74	市村 毅	朝鮮鉄鉄床概説	1	昭 -	B5	50
561	"	古河会名会社	足尾銅山諸施設概要	1	大 ?	"	36
561.9	"	中村 慶三郎	山崩れの原因と予察に就て	1	昭 -	"	12

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
562.05	74	朝鮮総督府燃料選鉄研究所	選鉄製鉄試験報告第1回 (酸化コバルト)	1	昭 2・7	A5	33
"	"	"	" 第2回 (土状黒鉛選鉄)	1	"	"	16
"	"	"	" 第3回 (低品カラミン鉄選鉄)	1	"	"	46
"	"	"	" 第4回 (鉛亜鉛混合硫化鉄)	1	昭 3・12	"	46
"	"	"	" 第5回 (金銀鉄の選鉄・製鉄)	1	昭 4・2	"	50
"	"	"	" 第6回 ( " )	1	昭 4・9	"	55
"	"	"	" 第7回 (朝鮮土鉄概要)	1	昭 5・6	"	49
"	"	"	" 第8回 (鉄産物分析試験その1)	1	昭 6・3	"	168
"	"	"	" 第9回 (金銀鉄の選鉄・製鉄)	1	"	"	93
"	"	"	" 第10回 (ストーブ簡易燃焼試験)	1	"	"	23
"	"	"	" 第11回 (鉄産物分析試験その2)	1	昭 6・10	"	255
"	"	"	" 第12回 (金銀鉄の選鉄・製鉄)	1	"	"	76
"	"	"	" 第13回 ( " )	1	昭 7・11	"	70
"	"	"	" 第14回 (鉄産物分析試験その3)	1	昭 8・2	B5	133
"	"	"	" 第15回 ( " その4)	1	昭 8・8	"	238
"	"	"	" 第16回 (金銀鉄の選鉄・製鉄)	1	昭 9・1	"	69
"	"	"	" 第17回 ( " )	1	昭 9・3	"	165
"	"	"	" 第18回 (金粒の浮游度・外試験)	1	昭 9・9	"	46
"	"	"	" 第19回 (鉄産物分析試験その5)	1	昭 9・10	"	265
"	"	"	" 第20回 (金銀鉄の選鉄製鉄)	1	昭 10・3	"	449
"	"	"	" 第21回 (明礬石諸試験)	1	昭 10・3	"	47
"	"	"	" 第22回 (鉄産物分析試験その6)	1	昭 10・6	"	407
"	"	"	" 第23回 (金銀鉄選鉄製鉄)	1	昭 10・11	"	178
"	"	"	" 第24回 ( " )	1	"	"	141
"	"	"	" 第25回 (鉄産物分析試験その7)	1	昭 11・9	"	350
"	"	"	" 第26回 (金銀鉄選鉄製鉄)	1	昭 12・1	"	186
"	"	"	" 第27回 ( " )	1	昭 12・11	"	520

分類記号	函架	編 著 者 名	書 名	冊	刊行年月	型	頁
455.9	74	朝鮮総督府地質調査所・川崎・今野	朝鮮地質調査要報 第6巻の3	1	昭 9・3	B5	44
"	"	" 川崎	" 第6巻の4	1	"	"	362
"	"	朝鮮総督府地質調査所	" 第7巻	1	大 15・3	"	162
"	"	"	" 第8巻の1	1	昭 3・11	"	55
"	"	"	" 第8巻の2	1	昭 4・3	"	115
"	"	"	" 第8巻の3	1	昭 5・6	"	132
"	"	"	" 第9巻の2	1	昭 6・1	"	28
"	"	"	" 第10巻の1	1	昭 6・2	"	46
"	"	"	" 第11巻の1	1	昭 6 -	"	100
"	"	"	" 第12巻	1	昭 11・12	"	-
"	"	"	朝鮮地質図第1輯(密陽・榆川)	1	大 13・3	5万地区	
"	"	"	" 第2輯(延日・九竜浦・朝陽)	1	"	"	
"	"	"	" 第3輯(下鷹峰・吉川・四浦・外)	1	大 14・3	"	
"	"	"	" 第4輯(極洞・明川・七宝山・外)	1	"	"	
"	"	"	" 第5輯(鎮安・全州)	1	大 15・3	"	
"	"	"	" 第6輯(新興・咸興・西湖津・外)	1	"	"	
"	"	"	" 第7輯(青山・永同)	1	昭 2・3	"	
"	"	"	" 第8輯(兼二浦・沙里院・載寧)	1	昭 4・3	"	
"	"	"	" 第9輯(海南・右水宮)	1	昭 4・9	"	
"	"	"	" 第10輯(慶州・永川・大邱・倭館)	1	昭 4・9	"	
"	"	"	" 第11輯(莞島・芦花島・青嶋・外)	1	昭 5・3	"	
"	"	"	" 第12輯(東倉・殷山・成川・外)	1	昭 6・5	"	
"	"	"	" 第13輯(青陽・大川・扶餘・藍浦)	1	昭 6・3	"	
"	"	"	" 第14輯(載徳・新福場・外)	1	昭 7・3	"	
"	"	"	" 第15輯(北鎮・外・付・大輪洞・雲山)	1	昭 8・3	"	
"	"	"	" 第16輯(連津・清津・外)	1	昭 8・8	"	
"	"	"	" 第17輯(清城鎮・外・付・義州及三成嶺山)	1	昭 11・3	"	
"	"	"	" 第18輯(寧海・登徳・及同嶺山)	1	昭 12・8	"	

分類記号	函架	編 著 者 名	書 名	冊	刊行年月	型	頁
455.9	75	朝鮮総督府地質調査所	朝鮮地質図 第19輯 (魚坪里・外・付・端川・通里金山外)	1	昭 13・7	5万地区	
"	"	" 燃料選鉱研究所	会寧炭田地質図	1	昭 2・3	"	
"	"	陸地測量部	海金剛・内金剛・外金剛	1	大 5 -	"	
"	"	朝鮮総督府地質調査所	朝鮮地質図 第15図 義州図幅	1	昭 14 -	"	
459~560 鉱物誌・鉱物。(三沢正美資料)							
459.4	74	三沢正美	江原道硫化鉄鉱の概況	1	昭 9・3	美	18枚
"	"	ラサ工業 小野義夫	銅自給自足ニ関スル国策要旨	1	昭 13・4	"	18"
459.2	"	朝鮮総督府殖産局 鉱山課	朝鮮特殊鉱物資源調査報告 第1号(水銀鉱)	1	昭 13・2	B5	37
"	"	立岩 巖	近年朝鮮に発見された鉱物資源に就て	1	昭 10・5	"	6
560.2,3 450.2,3 560.2,3	74	立岩 巖	朝鮮に於ける地質及鉱物の調査沿革及文献	1	昭 8・10	A5	129
"	"	"	朝鮮に於ける鉱物資源	1	昭 9・9	B6	81
"	"	Tsunashiro, Wada	Mineralogy of Chosen	1	1915	B5	21
"	"	-	朝鮮の鉱物資源に就て	1	昭 9・4	"	50
561 採 鉱 (三沢正美資料)							
561.05	73	朝鮮総督府地質調査所	朝鮮鉱床調査要報第1冊の1 (石炭)	1	明45・3	B5	56
"	"	"	" 第1冊の2 (雲母)	1	大 5・3	"	27



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
567.05	14	朝鮮総督府燃料選 鉱研究所 編	朝鮮炭田調査報告 第十卷 平安南道北部無煙炭田・徳川区域	1	昭 6・3	B5	133
"	"	"	" 地質図 5 万分 1	1	昭 6・3	地	1
567.1	"	朝鮮鉱業会 編	朝鮮の有煙炭（朝鮮の石炭第 1 編）	1	昭 8・11	B5	83
"	"	朝鮮総督府 編	朝鮮炭利用に就て	1	昭 4・6	A5	18
"	"	中央朝鮮協会 "	北朝鮮の炭鉱問題	1	大 15・8	B6	33
569 鉱 業 。 鉱 業 経 済							
569.2・001	12	朝鮮総督府 編	鉱 業 （朝鮮総攬 P. 445）				
		内 容					
		朝鮮総督府地質調査 所長 川崎繁太郎	朝鮮鉱業の前途 P445				
		" 技 師 内田 豊五郎	日本に於ける朝鮮鉄鉱の価値 P458				
		" 鉱務課長 上 滝 基	朝鮮鉱業の概況 P487				
		" "	産金奨励に就て P483				
569.2	12	石田千太郎	朝鮮鉱業の現況	1	昭 10・4	B6	—
570 化学工業。化学・化学機器・糸業・ 電気化学工業・薬品・燃料・							
572.28	16	朝鮮銀行調査課 編	朝鮮に於ける軽金属工業	1	昭 19・4	美 譜	97
"	14	朝鮮総督府殖産局 "	軽金属鉱業と朝鮮に於けるその 資源	1	昭 8・12	B6	50
573.2・001	23	加藤 濯 覚 述	朝鮮陶磁器概要（朝鮮史講座・ 特別講義）	—	—		
573.2	14	浅川 伯 教	古窯址研究と朝鮮糸業の過去 及将来	1	昭 9・2	B6	32

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
573.2	14	浅川 伯 教	釜山縣と対州縣	1	昭 5・7	A5	257
573.8	"	小野田セメント 株 式 会 社	回 顧 七 十 年	1	昭 27・12	B5	547
574.9	"	日本窒素肥料 株 式 会 社	日本窒素肥料事業概要	1	昭 12・12	A4	100
580 織 維 ・ 染 色 加 工 ・ 醸 造 ・ 食 品 その他工業							
586.7	16	平壤商業会議所 編	平壤襪（くつした）工業の沿革 調査書	1	昭 3・3	A5	75
"・674	73	宮 林 泰 司	朝 鮮 の 織 物	—	—		
588.5	16	朝鮮総督府 編	朝 鮮 酒 に 就 て	1	大 12・10	A5	70
589.8 348.4	14	広 江 沢 次 郎 "	赤 心 一 片	—	—		
455～575 地 質 ・ 鉱 物 ・ 鉱 業 ・ （三沢正美資料）							
312.21	74	崔 棟	朝鮮問題を通じて見た満蒙問題	1	昭 7・9	B5	117
455.9	"	朝鮮総督府 地質調査所 編	朝鮮における地質及鉱物資源調 査沿革（輯報第 1 号）	1	昭 11・10	A5	26
"	"	"	朝鮮総督府地質調査所要覧 （輯報第 2 号）	1	昭 12・12	"	27
"	"	"	（" 第 3 号）	1	昭 13・2	"	28
"	"	"	朝鮮地質調査要報 第 2 卷	1	大 12・8	B5	178
"	"	"	" 第 3 卷	1	大 14・3	"	217
"	"	" 立 岩 殿	" 第 5 卷の 2	1	大 15・2	"	26
"	"	" 川崎繁太郎	" 第 6 卷の 2	1	昭 6 —	"	99

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
543.3		朝鮮総督府	水力発電所建設工事費年次別内訳	/	昭 -	-	
"		" 安達技師	工事中水力発電所の出力及総工事費調	/	昭16.4	-	
"		" "	発電設備計画	/	昭 -	-	
"		" "	水力発電所建設費及所要鋼材内 鮮比較	/	昭 -	-	
"		" "	朝鮮ノ工事中水力発電所建設費・外	/	昭 -	-	
"		" "	達見貯水池計算表	/	昭 -	-	
"		" "	朝鮮水力工事費ニ関スルデータ	/	昭 -	青写真	14
"		" "	堰堤技術委員会第1回議事報告	/	昭13.10	-	
"		" "	" 第2回 "	/	昭14.5	-	
"		" "	鴨緑江水豊水力地点洪水量ニ就テ	/	昭13 - ?	-	
"		" "	水豊貯水池放水計画概要	/	昭 -	-	
"		" "	鴨緑江水力発電開発委員会規程	/	昭 -	-	
"		" "	鴨緑江水力電気事業経営許可命令書	/	昭 -	-	
"		" "	発電用水 供用、工作物設置許可条件	/	昭 -	-	
"		" "	堰堤技術委員会協議事項	/	昭 -	-	
"		" "	鴨緑江水力地点平面図及必要データ	/	昭 -	-	
"		" "	水豊・水力地点要項	/	昭 -	-	
"		" 安達技師	水豊堰堤安定度計算	/	昭 -	-	
"		" "	水豊堰堤工事設計審査概要	/	昭13.8	-	
"		" "	黄河水力地点現地視察報告	/	昭16.1	-	
"		" "	黄河水力発電計画・平面図 (二ノ第1回)	/	昭16 -	-	
"		" "	" 縦断面 (二ノ第2回)	/	"	-	
"		" "	" 報告書 その1	/	昭16.5	-	
"		" "	支那大陸地図	/	"	-	
"		" "	発電水力一覧表 その1	/	昭16.6	-	
"		" "	既許可水力地点 (ノキロ当り建設費)	/	" "	-	
"		" "	未許可水力地点 ( " )	/	" "	-	
"		" "	地点別流入量	-	/	" "	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
543.3		朝鮮総督府	開発計画全鮮地図 (1~5)	/	昭14.6	地	5

## 547~550 電気通信・海事工学

547.05	16	大東亜電気通信 事務局	大東亜電気通信 (技術版) 第1巻・1号	/	昭20.7	B5	99
550	72	今村 頼	船の朝鮮	/	昭5.11	A5	177

560 採鉱冶金学。採鉱・選鉱・冶金・金属・  
鉄冶金・非鉄冶金・金属加工・  
石炭・石油・鉱業経済

565.1 314.45	46	中央情報社 編	産金増産政策 第73議会・拓 務議事詳録	-	-		
565.1	72	中外商業新報社 "	銀の話	/	昭10.5	B6	117
567.05	14	朝鮮総督府燃料選 鉱研究所	朝鮮炭田調査報告 第二巻 和順無煙炭々田	/	" 2.11	B5	23
"	"	"	" 第三巻 通川有煙炭々田	/	昭3.4	"	23
"	"	"	" 第四巻 大正12年及13年度試鑛作業	/	昭3.12	"	73
"	"	"	" 第五巻 高原無煙炭々田	/	昭5.3	"	93
"	"	"	" 第六巻 鏡城郡内有煙炭諸炭田	/	昭5.3	"	105
"	"	"	" 第七巻 大正14/15及昭和元年度試鑛作業	/	昭5.3	"	88
"	"	"	" 第八巻 文川無煙炭々田	/	昭6.3	"	110
"	"	"	" 第九巻 昭和2・3年度試鑛作業	/	昭6.3	"	267

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
543.3	75	朝鮮総督府	鴨緑江発電々力配分に関する件 (内容)	1	昭14・10	美	105枚
			13 西鮮化学・受電予定表 14 鴨緑江水力消化計画 15 電力配給案 16 " (昭14・3・24 於東京) 17 鴨緑江水力消化ニ関スル各社事業計画 18 各社の電力需要調 19 電力配分ニ関スル処理日程 20 電力配分ニ関スル決定スヘキ事項				
543.3	75	朝鮮総督府	鴨緑江第二次開発資料 (内容)	1	昭14・10	美	105枚
			1 義州発電所資金計画表 2 " 両社の明細書 3 命令融資ヲ必要トスル理由 4 滿浦発電所計画概要 5 清原 " " 6 義州発電所工事計画説明書 7 雲峰 (輯安第2案) 発電所計画 8 鴨緑江水力第2次開発計画 9 " (別刷) 10 電力増強ニ就テノ意見 (久保田豊) 11 北鮮地電力需給見込調書 12 滿州国ノ要請, 消化部門担当 13 第2次産業5年計画ノ電源計画 14 雲峰発電所計画概要 15 昭和16年度輸入物資調書 16 義州発電所計画概要 17 清原 " " 18 輯安 " "				
543.3	75	朝鮮総督府	図們江開発資料 (内容)	1	昭12~15	美	153枚
			1 国境河川水力調査打合せ事項 2 豆満江水力調査方針 3 " 水系開発計画ノ検討 4 20万分1地図, 会寧, 羅南, 白頭山, 惠山鎮 5 " 豆満江本流計画案 6 西頭水地点 発電水力計画要項 (1) 7 豆満江発電計画要項 (2) 8 " (3) 9 " (4) 10 " (5) 11 西頭水地点 発電水力計画要項 12 " (長津江水電ノ出願) 13 東滿地方ノ需要予想 14 豆満江水力地点視察日程 15 鴨緑江, 図們江水力調査方針 16 図們江開発計画地図				
543.3・517.8		株式会社鹿島組	漢江水力, 華川ダム, 本工事見積書	1	昭17・6		-

## 540 電気事業 (岸資料。安達教授保管)

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
543.3		朝鮮鴨緑江水力発電株式会社	鴨緑江水力発電計画の概要	1	昭16 -	A5	-
540.6		朝鮮総督府 安達技師	鮮満鴨緑江共同技術委員会 決定事項	1	昭15・12	-	-
"	"	"	堰堤委員会技術委員会, 第3回 議事報告	1	昭15・11	-	-
"	"	"	" " 処理経過報告書	1	昭15・11	-	-
"	"	"	鴨緑江水力発電開発委員会, 答申案	1	昭16・4	-	-
"	"	"	" 規程	1	昭16・4	-	-
543.3		"	水豊発電所工事概況	1	昭 -	-	-
540.6		"	鴨緑江水力発電開発委員会, 準備事項	1	昭 -	-	-
"	"	"	" 第4回委員会 "	1	昭16・4	-	-
"	"	"	" " 開催之件	1	昭16・4	-	-
"	"	"	鴨緑江水力発電委員会, 第3回 委員会, 議題	1	昭16 -	-	-
"	"	"	" 付議事項処理経過報告	1	"	-	-
"	"	"	" 第2回委員会, 資料	1	"	-	-
543.3		"	堰堤工事仕様書, セメント仕様書	1	"	-	-
"	"	"	朝鮮・全水力発電計画要項 (1)	1	昭15・3	-	-
"	"	"	" " (2)	1	昭 "	-	-
"	"	"	水豊発電所平面図及電力諸資料	1	昭15	-	-
"	"	"	義州水力発電所工事写真	1袋	昭16	4枚	33
"	"	"	雲峰発電地点写真	"	"	"	41
"	"	安達技師	電源開発用資材比較表	1	昭16	-	-
"	"	"	水力・火力発電所の鉄・銅・セ メント消費量	1	"	-	-
"	"	"	工事中発電所ノ建設費及ビ所要 鋼材比較表	1	昭 -	-	-
"	"	"	日本発送電本州中央部水力発電 計画表	1	昭 -	-	-
"	"	安達技師	朝鮮・各水力供給力, 明細表	1	昭16	-	-
"	"	電気庁第2部	水力発電所建設工事費調・精算額	1	昭 -	-	-

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
543,4 533,43	75	—	焼球瓦斯機関試験報告書	1	昭 —	美	76
543,6	"	広江沢次郎	仁川潮力発電計画者 豊田藤輔ヨリ聴取概要	1	昭16・5	"	2
543,3	"	朝鮮総督府	西頭水発電に伴う流伐対策施設計画書	1	昭 —	美	21
"	"	"	国境河川流伐対策打合せ 資料	1	"15~17"	"	69枚
			内 容 1. 国境河川水力開発予定計画 2. 雲峰・江界発電所建設資材年度別輸送量集計表 3. 鴨緑江流域搬出系統並に搬出材調査 4. 鴨緑江木材堰堤別、堰堤材、料積表 5. 水豊流伐処理状況 6. 鴨緑江流伐中止ニ依リ生スベキ利益(15・8・29) 7. 流伐処理ノ根本対策 8. 鴨緑江林業株式会社(仮称)創立案 9. 流伐状況表(15・12・5) 10. 水豊堰堤流伐ニツイテ 11. 求償理由書 12. 流伐通達実績対照表 13. 日別、流伐通達状況表 14. 新義州非合同並ニ豊木ベニヤ工場買収最終案 15. 恵山鎮・甲山地図20万分の1 外				
540,92	75	朝鮮総督府	鴨緑江水力発電会社より奥村司計課長宛 通信	1	昭17・3	美	78
"	"	"	平北知事より鴨緑江水力発電会社に対する文書	1	昭16・11	"	2
543,3	75	平安北道	新義州非合同製材組合工場買収調査要綱	1	昭16・12	美	7
"	"	朝鮮総督府	宮林署流伐事業実行内規(抜萃)	1		"	1
"	"	"	新義州宮林署材亡失求償に対する司政局意見	1		"	27
"	"	朝鮮鴨緑江水力発電会社	水豊堰堤作業中ノ流失木材賠償免除三件	1	昭16・10	"	2
"	"	朝鮮総督府	木材運送請負作業に関する件	1	昭16 —	"	1
"	"	"	流伐請負作業に関する款願書	1	昭16 —	"	8
"	"	"	発電水利使用並に工作物設置許可条件	1	—	"	6
"	"	"	最近6年間流量調査(鴨緑江)	1		美	5 表24
"	"	"	運送契約及履行の概況	1		"	29
"	"	"	木材運送請負契約 変更書	1	—		
"	"	"司政局	鴨緑江水豊ダム通伐実情調査書	1	—		

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
543,3	75	朝鮮総督府	鴨緑江水力原価計算資料 (内 容)	1	昭15~16	美	360枚
			1 水豊ダム流伐設備費及び流伐処理費 2 水豊可能発電力計算書 3 水豊発電所ノ供給料金ニ関スル件 4 第二鴨緑江水電設立ニヨル経費節減ノ得失 5 両国官憲間ノ協議事項 6 第1号機共同使用ニ関スル調査事項 7 協議事項ニ関スル当局案 8 運用委員会要綱 9 協議事項案 10 鴨緑江供給原価計算書 11 水豊発電所新旧予算対照表 12 鴨緑江水電負担ノ中継費その他 13 満州国公課金ノ種類ト税率 14 満州国ニ対スル協議要旨 15 税令改正ト鮮内電気事業経理ニ及ボス影響 16 水豊発電所建設資料ニ関スル件 17 昭和15年度電力資材割当ニ関スル件 18 水豊発電建設工事予算書 19 鴨緑江水力・売買ニ関スル協議 20 水豊ノ電力供給方式ニ就テ 21 鴨緑江水力ニ関スル協議事項 覚 22 電力需給契約ノ要綱 23 対満協議ニ関スル件 24 水豊発電所取売電力並ビニソノ原価 25 水豊発電所設備・据付工程表 26 電力供給ニ伴フ二・三ノ問題ニ就テ 27 特定供給ノ基準ニ関スル課内協議 28 発電力計算表(変更分) 29 協議事項、覚 30 (別刷) 31 水豊発電所原価算定書 32 発電計画ニ関スル鮮満協議決定事項 33 鴨緑江水力発電受電計画 34 水豊発電所発電原価 35 鮮満協議事項(技術・電力配分・電力消化) 36 (固定資産・減価償却率) 37 水豊発電所電力原価ノ件 38 水力発電所ノ売買料金ニ就テ				
540,92・222,5	.....						
540,92・222,5	.....						
543,3	75	朝鮮総督府	鴨緑江発電々力配分に関する件 (内 容)	1	昭14~16	美	184枚
			1 水豊可能発電力計算表 2 マグネシウム製造費比較表 3 鴨緑江水力配分計画 4 発電設備・内地・朝鮮・台湾比較 5 鴨緑江水力需給ニ関スル打合せ事項 6 水豊可能発電力表 7 平壤・雲山並に新義州受電分、年度別 8 特定供給許可基準案 9 特定供給ト送電線路共用ニ就テ 10 特定供給ニ就テ 11 西鮮化学KK. 収支計算書 12 電力需要見込高				



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
			15. 合併比率ヲ適用セル場合ノ資本及配当額等 16. 朝鮮電業設立ニ関スル調書 17. 電力管理準備室処置要綱(昭18・4・6) 18. 江界水力統合ノ東拓配当収入ニ及ボス影響 19. 江界水力 収支予想 20. " 電力原価計算(昭17・12) 21. 統合ニヨル主要株主・投資収入増減調 22. 三社統合比率決定ニ就テ 23. 三社統合時ニ於ケル資産及負債表予想 24. 三社統合比率算定資料 25. 朝鮮電業設立ニ伴フ事業評価ニ関スル調書				
540.91	75	朝鮮総督府	朝鮮に於ける電力国家管理の経緯	1	昭18・5	A5	118
"	"	"	電力管理法令集	1	昭 -	B6	49
"	"	"	電力統制に関する調査事務	1	昭 -	B5	4枚
"	"	江口信平 外7名	" 意見書に就テ	1	昭17・4	"	21
"	"	朝鮮総督府	赴戦江水力発電事業分離経営を必要とする理由	1	昭 -	"	3
"	"	"	電力統制に際し合併許可条件	1	昭 -	"	1
"	"	"	電力国策要綱案	1	昭16・2	"	2
"	"	"	電力統制国策に関する準備事項	1	昭 -	"	1
"	"	"	" 協議資料	1	昭 -	"	1
"	"	"	電力統制方策参考資料	1	昭16・7	"	9
"	"	"	電力原価及収益比率計算書	1	昭18・7	美 冊	10
"	"	"	電力国家統制に関する意見書	1	昭17・4	B5	128
		内 容	1. 電力ノ国家統制ヲ必要トスル理由 2. 電力国家統制案要綱 3. 電力統制方式ノ比較 4. 特殊会社設立要綱 5. 電力統制関係法令要綱 6. 電力料金操作ノ概要				
540.91	75	朝鮮総督府	電力国家統制ニ関スル説明書	1	昭17・5	B5	55
"	"	"	国家管理統合事業及び評価基準資料(案)	1	昭17・10	"	180
540.6	"	"	水力発電所設備特別委員会第2回議事録	1	昭15・7	"	5枚
"	"	"	朝鮮臨時電力調査会答申案及び答申書	1	昭17・10	"	31
		内 容	電力設備管理案要綱 発電及送電予定計画案要綱 朝鮮電業株式会社設立要綱 " 事業計画収支予想書				

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
540.6	75	朝鮮総督府	朝水・送電・富寧三社統合比率算定要領	1	昭18・2	美タイプ	2枚
"	"	"	出資財産評価基準決定ニ関スル資料	1	"17・10	美 冊	13枚
"	"	"	発送電事業評価調書	1	" -	"	18
"	"	"	(電力国家管理ニ関スル)財務局長指示、調査事項	1	"17・9	美タイプ	1
"	"	安達技師	( " ) 検討事項	1	" -	"	1
540.91	"	"	鴨緑江水力統制ニ関スル基本要綱	1	"17・8	"	2
"	"	"	発送電会社設立ニ当リ考慮スヘキ事項	1	" -	美 冊	3
"	"	"	" 設立条件決定基準根拠算出調書(その1)	1	" -	"	28
"	"	"	出資会社評価額概算及参考資料(1)	1	" -	"	20
"	"	"	" (2)	1	" -	"	44
"	"	朝鮮総督府	鴨緑江及び図們江発電事業に関する覚書	1	" -	美タイプ	2
"	"	"	出資財産評価ニ関スル件	1	"17・6	"	
"	"	"	電力統制、評価関係資料	1	"17 -	B5	89
			内 容 1. 日室ニ対スル措置 2. 既設・新設・大水力工事費及電力原価一覧表 3. 勅令229号 4. 朝鮮水力・主要株主名簿(昭17・10・3/現) 5. 朝水・送電・富寧三社統合時資産及負債予想 6. 新会社ノ料金政策ハ日室系ノ犧牲ニ因ルモノニ非ズ 7. 電力国家管理ニ関シ海軍ノ意見開陳ニ関スル件 8. 欠 9. 設立当初ニ増資ヲ必要トスル理由 10. 印刷物配布ニ関スル件 11. 電力統制問題ニ関スル件 12. 三会社統合比率ノ決定ニ就テ 13. 設立当初ノ貸借対照表 説明書				
540.91	75	漢江水力電気株式会社	清平発電所写真	1袋	キャビネ版等		6
543.3 517.81	"	通信省電気局	水力調査計画概要及び尾瀬原水力の計画概要	1	昭13・7	B5	24枚
543.3 517.8	75	電気庁第二部	水力発電所建設工事費(精算額)	1	昭18 -	"	13枚
543.3 517.8・253	-	-	米国の有数な水力発電所の設備概要	1	昭 -	美 冊	2

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
			電力国家管理閣議上程参考資料 6. 水力キロワット当り工事費 7. 資本系統調書 8. 要・決定事項 9. 配電会社総合負荷率調		内 容		
540,91	75	朝鮮総督府	電力管理法被統合会社の退職金調書	1	昭18・5	美 冊	
"	"	"	「朝鮮電業」となる会社の統合比率決定資料	1	-	-	
"	"	"	電力管理法指定会社株式割当説明	1	-	-	
"	"	"	統合会社の評価委員会提出資料	1	-	-	
"	"	"	政府保証社債発行限度10億円を必要とする必要	1	-	-	
"	"	"	固定資産銷却規則実施要領	1	昭17・12	-	
"	"	"	朝鮮電氣事業々概要 (発送電会社の部)	1	"17-	A5 冊	340
540,95	"	小野書記官	電氣事業における減価銷却	1	" "	-	
540,92	"	上 滝 基	戦時下の電氣事業	1	昭17-	A5	5
"	"	安 達 逐	電力問題の動向	1	" "	"	13
"	"	津田元男	朝鮮電氣事業統制に対する私見	1	昭 -	"	2
540,91	75	安達技師	電力国家管理に関する法令説明資料	5	昭17	B5	134
			1. 電力国家管理実施要項 2. 特殊会社設立要項 3. 朝鮮電業株式会社事業計画書 4. 朝鮮鴨緑江水力発電株式会社事業計画書 5. 国有電力設備の概況				
540,9	75	朝鮮総督府	電力統制関係資料 (内 容 1~16)	16	昭18・2	B5	234
			1. 朝鮮電力管理令 2. " 要旨 3. " 施行規則(府令案) 4. " 準備資料(その5・二次統合関係) 5. 漢江水電陳情書 6. 電力原価及び収益率計算書 7. 水力地点の価値指数 8. 漢江水力工事費予算書 9. 江界水力 "				

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
			電力統制関係資料 内 容 10. 南鮮水力工事費予算書 11. 水力発電所建設費予算並に出来高(上記三社) 12. 水力の価値指数・算出の根拠 13. 工事費予算書(南鮮水力) 14. 第1期・第2期・電力料金計算 15. 発電所別出力及び工事費表 16. 電力原価計算書(江界水力)				
540,6	75	朝鮮総督府	朝鮮電氣協会・技術委員会関係資料	1	昭18-	B5	52枚
			1. 技術委員会資料 2. 第1回常議員会 議事事項(昭18・4) 3. 技術委員会の事業概況 4. " 概要報告(昭18・2)				
540,91	75	朝鮮総督府	第2回・朝鮮電力評価審査委員会 配布資料	6	昭18・9	美 冊	300枚
			1. 議事順序 2. 委員会官制 3. 議事規則及役員名簿 4. 第1号議案(江界・漢江・南鮮・朝鮮電力・京城電氣) 5. 第2号議案(北鮮水力) 4. 一般参考資料(1~8)				
540,91	75	朝鮮総督府	朝鮮電力管理令及付属法規	1	昭18・5	A5	52
"	"	"	" " 追録	1	" "10	"	122
"	"	"	臨時電力調査会・総会議事録	1	"17・10	"	126
"	"	"	業種別・期別・電力需要実績 (昭18年度)	1	"19-	美 冊	55枚
"	"	"	電力管理準備資料 (2) 朝鮮電業会社に譲渡せらるべき 事業の評価調書	1	"18・3	"	24枚
			(内 容 ) 1. 総 括 2. 朝鮮電力参考資料 3. 江界水力 " 4. 漢江水力 " 5. 朝鮮電業会社ト為ルベキ会社ノ合併比率調書 6. 朝水・送電・富寧三社統合比率ノ算定条件 7. 合併比率算定上ノ修正要点(中村技師案) 8. 朝水・送電・富寧三社統合比率決定ニ就テ 9. 朝鮮電業設立ニ伴フ既存事業評価要項(昭18・3・3) 10. 電力管理令実施準備室設置ニ關スル件 11. 三陟発電会社 その他の件 12. 発送電設備・通止評価額調 13. 発送電統合会社・業績内容比較表 14. 日発式資産評価ヲ採用セル合併比率				

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
540.9	74	朝鮮総督府通信局	第12回電気事業要覧(大13.3現)	1	大14.6	A4	145
"	"	朝鮮電気協会 編	朝鮮の電気事業を語る	1	昭12.4	A5	207
"	"	"	朝鮮電気雑誌 昭19.7月号	1	"19.7	"	42
540.9	73	京城電気株式会社	京城電気株式会社20年沿革史	2	昭4.4	A5	163
"	"	"	伸びゆく京城電気	1	昭10.7	B5	184
"	73	"	京電の事業と電車案内(絵ガキ)	1	"4.4	絵ガキ	2
"	74	朝鮮瓦斯電気株式会社	朝鮮瓦斯電気株式会社発達史	1	"13.2	B5	202
"	77	財団法人友邦協会 編	朝鮮電気事業関係重要文献集成 第1巻	1	"33.9	"	487
" 519.83	73	京城電気監理課 編	京仁工業地帯の全貌と電力	1	"15.7	"	3/4 付図3
"	"	"	京仁工業地帯の概要と将来	1	"14.5	A5	15 地1
540 電気事業・岸資料							
540.9 335.7	75	京城府都市計画係 編	公営事業調査表 1~10	1袋	昭5-	表	10
"	"	朝鮮総督府 編	朝鮮電気事業調査会関係書類 (内容)	1	"5.10	袋入	
			1. 朝鮮電気事業調査会官制、役員名簿等		(美證, 12枚)		
			2. 発電事業及送電事業の企業形態		(1 " 32")		
			3. 発電計画及び送電網計画参考案		(B5, 107P 地5)		
			4. 同, 付. 1 電力需要の想定		(B5, 18P 表5)		
			5. " 2 発電力及工事費一覧表		(B5, 11)		
			6. " 3 水力と火力の経済的比較		(美證 49)		
			7. " 4 朝鮮炭使用火力発電調査		( " 58P 図1)		
			8. " 5 主要水力と火力発電売価調査		( " 84)		
			9. " 6 既定計画と修正計画の比較		( " 41)		
540.9	75	京城電気株式会社 編	朝鮮に於ける電気事業とその統制	1	昭8-	A5	10 図3
"	"	朝鮮電気協会 編	朝鮮電気事業の概要	1	昭10.9	"	表共17
"	"	朝鮮総督府通信局 編	第30回朝鮮電気事業要覧(秘)	1	昭18.9	B5	289
"	"	朝鮮総督府 安達技師 編	電力問題参考資料	1	昭15.12	B5	30

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
			電力問題参考資料 内容				
			1. 電力国策の理念 2. 既設水力統合必要の理由				
			3. 配電管理後の料金 4. 電力消費規正 その他				
540.9	75	朝鮮総督府通信局	電力国家統制に関する調査書	1	昭16.9	美證	604
			内容				
			1. 電力国家統制に関する諸要項				
			2. 特殊会社の事業目論見書				
			3. 調査資料及付録				
540.6	75	朝鮮総督府 編	日滿支経済協議会資料(1~18) (内容)	18	昭17-	B5	163 枚
			1. 大東亜電力懇談会 調査方針大綱案				
			2. " 準備委員会等会議録				
			3. " 懇親会等出席者名				
			4. " 総会議事規則・案・1号議案				
			5. 大東亜共栄圏における電気調整対策				
			6. 大東亜電力懇談会 発言要旨第2・3日議事				
			7. " 発起人会出席者, 外				
			8. " 発会式・第1回総会日程				
			9. " 会則				
			10. 大東亜電力方策案(池尾・久保田)				
			11. 電力増強について(久保田)				
			12. 電源開発計画について				
			13. 電力資源より見た朝鮮の産業立地(加藤)				
			14. 交通電力幹事会 参考資料				
			15. 大東亜電気事業懇談会 設立の件・案				
			16. 日滿支電力開発基本方策要領・案				
			17. 朝鮮における発電水力の優越性				
			18. 交通電力幹事会 手持資料				
540.91	75	—	電力管理法(逐条審議要項)	1	昭17-	美證	101
"	"	—	出資財産評価基準決定資料	1	"	"	"
"	"	—	電力国家管理協議上程参考資料 (内容 1~9)	1	"	"	"
			1. 発電力調査				
			2. 電気料金の現況及び将来				
			3. 年度別需要電力量				
			4. 電力需要分析比率				
			5. 将来10年間の建設計画及所要資金				



500 工学・工業・技術・家事

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
502	16	大河内正敏	時局下の朝鮮工業	1	昭14・10	A5	32
"	"	朝鮮工業協会 編	朝鮮に於ける大工業の現在及将来	1	昭8・2	"	86
"	12	川合彰武	朝鮮工業の現段階	1	昭18・5	"	315
502,1・573,8	14	小野田セメント 編	回顧七十年	—	昭27・12	B5	547
509,2・001	12	朝鮮総督府	工業 (朝鮮総督府 P 517)	—	昭8・3	—	—
( 内 容 )							
		朝鮮総督府, 中央試験所長 山村鋭吉	朝鮮化学工業の現在及将来 (P 517)				
		朝鮮総督府, 中央試験所技師室田武隣	朝鮮の機業 (P 522)				
		京城高等工業学校 教授 小山一徳	朝鮮の機業 (P 538)				
		朝鮮総督府 技師 牧山正徳	朝鮮の労働問題 (P 570)				
509	12	朝鮮経済研究所 編	朝鮮工業経済読本	1	昭12・7	B6	351
"	16	京城商工会議所 "	秘, 京城に於ける工場調査	1	昭18・7	A5	270
509,16	16	朝鮮銀行調査課 "	鮮内工業の現状と工業組合法実施の要否	1	昭8・8	"	56
509,7	"	朝鮮商工会議所 "	朝鮮人職工に関する一考察	1	昭11・5	"	46
513~517 土木事業・河川							
513,9	48	朝鮮総督府 編	秘, 朝鮮土木事業誌	1	昭12・5	B5	1540
517,02	16	" "	朝鮮の河川 (昭和3年度)	1	昭3・1	A5	58
517,3	48	" "	朝鮮河川調査書	1	昭4・8	B5	982
"	"	" "	同上 付図	1	昭 "	"	243
"	"	" "	同上 付表	1	" "	"	1163

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
517,3	48	朝鮮総督府 編	朝鮮河川調査年報 (昭和3年度)	1	昭5・9	B5	214
517,2	"	" "	朝鮮直轄河川年報 ( " )	1	" "	"	115
"	"	" "	" (昭和4年度)	1	" 7・2	"	88
"	"	" "	" ( " 5年度)	1	" 8・2	"	89
"	"	" "	" (昭和6年度)	1	" 9・9	"	116
"	"	" "	" (昭和8年度)	1	" 11・9	"	142
517,5・369,23 656,5	"	" "	朝鮮窮民救済治水工事年報 (昭和6年度)	1	" 8・8	B5	166
520~525 建築・建築史・工事請負							
520,2・522,1	23	米田美代治	朝鮮上代建築の研究	1	昭19・8	A5	223
525,4	71	児玉琢	朝鮮の談合	1	昭8・10	B6	170
540~549 電気・電気事業							
540,6	14	日本電気協会 編	日本電気協会三十年史	1	昭28・5	A5	894
540,9・001	12	朝鮮総督府 "	電 気 (朝鮮総督府 P 855)	—			
540,9	14	" 鉄道局 "	電力政策基本計画調査 第1輯	1	昭4・11	A5	206
"	"	" " "	" 第2輯	1	" "	"	836
"	"	" " "	" 第3輯上	1	" "	"	462
"	"	" " "	" 第3輯下	1	" "	"	650
"	48	" 通信局 "	朝鮮水力調査書 第1巻	1	昭5・3	B5	286
"	"	" " "	" 第2巻	1	" "	"	440
"	14	" " "	発電計画及送電網計画参考案 (電力需要の想定・同上計画書付図) 昭和15年需要分布図	1	" 5・10	"	107



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
		(追録)					
001.05	K/	大韓年鑑社	大韓年鑑 4286年版	1	1953・12	A5	612
221.07	K/	韓弘建	韓国の全貌	1	昭28・7	B6	292
"・333.9	"	朝連文化部	朝鮮建国の経済的基盤(韓文)	1	昭?	文庫版	147
282	"	韓徹永	韓国の人物 第1選・50人集(韓文)	1	4286・3	B6	208
289.2	"	新朝鮮建設同盟	人間「朴烈」(建同パンフレット第1輯)	1	昭21・6	B6	40
221.07 319.09	"	米国々務省編	韓国の政治・経済 付録・外交文書その他(韓文)	1	4283・11	A5	96
292・312	"	日本外交協会調査局 小村捷治述	満鮮各地の実情視察談	1	昭12・7	"	54
07	K/	KIP通信社	KIP通信 昭和22~25年				
"	"	建設通信社	建設通信 昭和23~24年(一部)				
05	"	日韓親和会	親和 創刊号~78号 昭和28・11~同35・4				
07	"	KP通信社	KP通信 昭和30~34				
07	"	近藤 鋤一	京城日報執筆社説スクラップ		昭15~17		
317	"	御手洗辰雄	南総督の朝鮮統治		昭17・5		

~~~~~  
 400 自然科学  
 ~~~~~

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
402.21	45	洪以燮	朝鮮科学史	1	昭19・7	A5	452
450・001	12	朝鮮総督府 編	気象(朝鮮総攬P887)	-			
450・221	23	-	風水に就て(朝鮮史講座・特別講義)	-			
452.7 389・221	23	大原利武	海流と民族( " " )	-			
450.3・452.2	16	朝鮮総督府 水産試験場 編	朝鮮海洋便覧	1	昭11・9	A5	110
452.238	"	"	朝鮮近海平年海況図	1	" "	B5	-
452.2	"	"	朝鮮近海の海況概要	1	" "	A5	46
"	"	"	朝鮮の海洋調査事業	1	" "	"	28
472・001	12	朝鮮総督府	植物(朝鮮総攬P989)	-	" 8・3		
482・001	12	"	動物( " P971)	-	" "		
498.1	16	京城府	朝鮮都市の衛生事情に關する若干の研究	1	昭13・10	A5	90

450~499 自然科学 渡辺忍資料

451	-	-	日本観象官署一覧図	1	昭 -	-	
451.2	-	-	外地観象機関一覧図	1	" -	-	
498.6・519.1	京城府衛生課 編	京城府に於ける消化器伝染病予防対策	1	昭4・9	美 譜		
" "	京畿道 "	伝染病関係資料	1	昭5 -	-	-	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
379,1・610		京畿道・広灘公立普通学校編	指導計画案及指導初年の成績	/	昭5-	半美	25
" "		" 素砂 "	現下山村の窮状対策より見たる内地と朝鮮及卒業生指導施設	/	昭7・6	美	7
" . 611,15		京畿道編	卒業生指導勤労美談、第一輯	/	昭5-	B6	135
379,1		全羅北道	全州公立工業補習学校学則及改正意見	/	昭3-	美	6
379,1		"	普通学校卒業生補習ニ関スル件	/	" "	"	13
379,2		全羅南道	青年会及振興会一覧	/	大13・2	A5	39
379,19 376,2		朝鮮総督府学務局長	簡易学校経営指針	/	昭9・3	B5	92
379,2		古庄逸夫 八尋生男	山村訓練所視察記(古庄) 普通学校児童ニ対スル農家更生計画ノ教授(八尋)	/	昭10・2	大14	4
379,1 611,24		—	北鮮開拓ニ伴フ教育施設案	/	昭?	美	6
383・384		朝鮮総督府学務局	色服・断髪奨励に關する資料	/	昭?	—	—
384,2 611,98		" "	郷約調	/	昭7・4	美	12
385・387		" "	儀礼準則(付、解説)	/	昭9-	B6	172
390・288,48		朝鮮総督編	朝鮮諸団体御親閲要領(完)	/	昭4・10	B6	41
390,6・391,4		"	青年訓練学校教練・在郷軍人及召集事務ニ関スル總督府・軍部間連絡會議協定事項	/	昭8・3	美	9
391,2		朝鮮軍司令部	朝鮮軍司令部ヨリ道知事會議提出事項	/	昭8・4	美	8
393,2		—	明治27,8年、朱泉亭付近の戦争に關する写・明治27,8年、平壤包圍攻撃の概要	/	—	—	—
394,4,2		平安南道編	道地方費追加予算	/	大14-	—	—
394,4		"	大13,道地方費歳入歳出予算	/	大13-	B5	—
395・651		朝鮮総督府 伊藤林業課長	軍用木材供給ノ件	/	昭9・2	美	複写
396,4		演習統監部編	昭和5年師団對抗演習觀覽規定	/	昭5-	—	—
398,8		朝鮮総督府	防空法施行に就て 付、防空法施行規則及び 朝鮮総督府所屬官署 防空規則	/	昭12・12	A5	14

## 300~399 政治・経済・社会 近藤資料(追録)

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
312	K/	高 権 三	近代 朝鮮政治史	/	昭5・9	B6	304
312,21	"	朝鮮総督府編	朝鮮施政ノ方針及実績	/	大4・10	B5	481
316・319,8	"	芮瑄 寿・趙奎東	韓国の動乱(韓文)	/	4283・12	A5	444
" "	"	清 水 肇	朝鮮事変ノート(草稿) 朝鮮統一における韓国政府の立場	/	—	—	46
" "	"	I. F. ストーン 内山敏 訳	秘史、朝鮮戦争 上巻	/	昭27・9	B6	235
" "	"	"	" " 下巻	/	昭28・5	B6	249
" "	"	山崎倫太郎	アジアの二つの戦争	/	昭29・3	"	183
" "	"	近藤 鋭一	火を吐く朝鮮(朝鮮研究51号)	/	昭25・8	A5	32
316,821	"	内閣調査室編	在日朝鮮人の実態	/	昭27・3	B6	28
"	"	公安調査庁	在日朝鮮人の概況(前篇)	/	昭28・8	B5	207
"	"	在日韓国基督教 青年会	在日韓僑の実態と対策(韓文)	/	1952・9	B6	96
317,731 316,8	"	京城西大門警察署	民族革命を目的とする同志会 (秘密結社興業倶楽部) 検挙に關する件・昭13・8	/	昭13・8	美	345枚
317,731 316,8	"	朝鮮総督府警務局	間島における昭和5年1月より 10月20日までの重要な同胞 被害の詳報	/	昭5・10	B5	30
" "	"	"	5・30 間島事件以後ニ於ケル在滿 共匪暴動一覽表	/	昭5・10~11	美	28枚
"・319,2	"	近藤 鋭一	警々秘第2号 日本を喰う密輸・密航の実相	/	昭24・8	B5	126
319,2	"	日本新聞社編	朝鮮問題をどうするか (日本及日本人特輯号)	/	昭33・3	A5	152
"	"	李承晩(中村訳)	私の日本觀	/	昭31・11	B6	282
"	"	日韓漁業対策本部	李ライン問題と日本の立場	/	昭28・10	"	44
"・(663)	"	近藤 操	李承晩ラインと日本漁業 (日本週報228)	/	昭27・11	A5	50
319,2	"	イヴ・フアルジュ (渡辺 淳訳)	この目で見た中国・朝鮮	/	昭28・5	B6	165
319,9	"	鄭 一 亨	unの成立と業績(韓文)	/	1953・2	A5	562
362,04	"	林 光 澈	李朝封建社会史(韓文)	/	1949・7	"	202

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
365,5		朝鮮総督府警務局編	秘, 本年春窮期ニ於ケル細民生活調査ノ概要	/	昭 8・4	美	13
365		全羅北道警察部	細民ノ生活状態調査 第2報	/	昭 7・6	"	71
365,5		全羅北道 編	秘, 全羅北道、有力者資産家調査	/	昭 3 -	美半切	44
365,6		国民総力威鏡南道連盟	家庭生活再建運動要綱	/	昭18・9	D6	12
"		平安南道 "	平南勤儉実行会規約	/	昭 -	美	謄
369,2		京畿道農会 編	内地に於ける社会事業施設と優良農村	/	昭 3・8	A5	32
370		文部省調査部 編	内外教育制度の調査(第5輯)	/	昭 8・3	A5	252
370,160		京畿道 "	京畿道教育及宗教要覧	/	昭 3・10	新書判	128
370,5・160,5 221,7		全羅南道 "	全羅南道教育及宗教一斑	/	大15 -	B5	39
370,7		朝鮮総督府学務局編	各国初等及中等教育の概況 1930	/	1930	美	謄
"		" "	小学校・普通学校答申書集	/	昭 2 -	-	-
"		" "	"	/	" "	美	謄
373,2		黄海道知事朴重陽	道知事訓示及公立学校長会議指示事項	/	大12・1	美	17枚
"		"	秘, 内鮮共学問題に就て	/	昭 -	"	謄
"		京畿道 編	学務課関係事項	/	昭 6 -	美・複	23
		(内容)	京城公立職業学校概要・一面一校普及計画案実施状況・普通学校授業料未納児童救済ニ関スル件・私立学校状況, 学校事件調査, 盟休一覧表				
373,4		仁川学校組合 編	昭和4年度, 仁川学校組合予算関係書類	/	昭 4 -	美	9枚
373・376,2		黄海道 "	公立普通学校長会ニ対スル内務部長訓示要旨	/	大12・1	美半切	11
374,3・376,6		京畿道 "	京畿道中等学校長一覧	/	昭 6 -	美	1
375,17		" "	操行考査法	/	昭 5・1	美	謄14
375,17・376,6		" "	京畿道各中等学校考査内規	/	昭 5 -	美半謄	46

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
375,17 376,1		京城第一高等女学校	学業成績考査内規改正案	/	昭 5 -	半	謄2
375,22		黄義敦	増訂, 中等朝鮮歴史	/	" 5・3	A5	98
375,32		張道弼	朝鮮歴史 大全	/	" 3・3	"	254
375,3		朝鮮教育研究会編	尋常小学, 日本歴史, 補充教材	/	大 9・3	"	26
"		" "	" " " 卷一	/	" 10・3	"	48
375,3・32 375,9		朝鮮総督府 編	尋常小学国史補充教材 卷二	/	" 10・3	"	-
375,3,8		" "	尋常小学校補充教本 卷一	/	" 9・10	"	-
"		" "	" 卷二	/	" "	"	-
375,32		京畿道視学岩村俊雄	朝鮮歴史ノ教授ニ関スル件 報告	/	昭 5・4	美半切	3
375,6・610		京畿道・文山公立普通学校 編	昭和5年度, 職業科教育ノ施設経営状況	/	昭 6 -	美	謄6
375,6		"	文山公立普通学校, 年中行事表	/	昭 4 -	"	"
"		全羅北道 編	初等学校, 職業教育実施要綱	/	昭 4・3	A5	-
"		朝鮮総督府 "	実業補習 改善に關する参考案	/	昭 ?	-	-
"		" "	簡易学校に於ける職業科実習指導上の注意	/	昭 3 -	B5	35
375,6,5		" "	昭和8年度, 公立普通学校職業科実習収益状況	/	昭 9・6	B5	5
376,2,5		" "	朝鮮人学齡児就学の状況	/	昭 -		
376,2		文山公立普通学校 編	文山公立普通学校ニ関スル調書	/	昭 5 -	美	5
377,36		朝鮮総督府翰林局 編	北鮮演習林設置申請ノ件	/	昭 7 -	美半切	7
379,1・610		京畿道 "	山村ニ於ケル卒業生指導施設ノ状況	/	昭 6 -		53
"		" "	京畿道卒業生指導学校一覧表 昭和5年実習成績	/	" "	美	謄26
"		" "	昭和5年度卒業生指導学校実習成績表	/	" "	"	"21
"		"素砂公立普通学校	卒業生指導 共同耕作の實際並に其実績	/	" 8・1	"	"14
"		"長湍 "	指導学校長打合せ答申書	/	" 6・2	"	"6
"		"仁倉 "	昭和5年度, 卒業生指導実施計画案	/	" 5 -	半	謄5
379,1・610		松月秀雄	朝鮮の卒業生指導学校(岩波講座)	/	" 6・10	A5	14

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
339,4		朝鮮総督府	編 朝鮮簡易生命保険事業諮問委員会参考書類 (内容)				
			5. 社会公共事業に対する貸付利率調				
			6. " 所要金額調				
			7. 長期国債の相場及利廻 調				
			8. 欠				
			9. 内地簡易生命保険積立金運用状況				
343		朝鮮総督府殖産局	第60回帝国議会、事務参考資料 /	昭 6 -	和	-	
343,8		朝鮮総督府	編 地方公共事業、貸出帳	/ 昭 7 -	"	-	
343		平安南道	" 平安南道、工場、鉱山、古蹟、 鉱泉位置図	/ 昭 -	"	-	
344,21		朝鮮総督府	編 第59議会用、昭和6年度総督 府予算参考書 (甲)	/ 昭 6 -	B5	49	
"		"	" 昭和7年度予算概説説明	/ 昭 -	-	-	
"		"	" 各特別会計予算提要 (昭 / 6)	/ 昭 15 -	A5	178	
"		"	" (昭 / 7)	/ " 16 -	"	161	
"		"	秘、第8 / 議会用、昭和 / 8年度 朝鮮総督府予算書	/ " 17 -	"	116	
"		"	特別会計継続費総費額各目明細書 (昭 / 9)	/ " 18 -	"	54	
"		"	秘、第82議会用、予算関係、 その他摘録	/ " 18・6	"	35	
"		"	" 第59議会用、昭和6年度予算書 /	昭 -	B5	-	
344・600		" 森林局	" 昭和8年度、歳入歳出予定計算 書並各目明細	/ 昭 -	B5	505	
" "		" "	" 昭和8年度、予算増減調	/ " 8 -	美	2	
" "		" "	" 歳入出予算要求及査定 概計書	/ " "	"	14	
344・600		" "	秘、昭9年度、予算概算書、財務関係	" 8・7	"	贈	
344,25		" "	" " "・山林関係	/ " "	"	"	
344・650		" "	" " " 昭7年度、新規事業に伴う予算 増減要求書	/ " 7 -	"	"	
"・610		" 殖産局	" 昭7年度、新規事業予算、実行 予算増加要求額	/ " 7 -	"	複	
344,25		" "	" " " 昭7年度、新規事業予算、実行 予算増加要求額	/ " 7 -	"	複	
344		朝鮮総督府	編 第59議会用、昭6年度総督府予算書 (甲)	/ 昭 -	B5	印	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
344・611		朝鮮総督府	編 昭和8年度、予算要求書 (財政課) /	昭 7 -	美・贈	25	
344		"	" 昭和6年度、歳入出科目 解説	/ " 6 -	A5	印	
345,79		朝鮮総督府財務局	編 免税手続の改正	/ 昭 6 -	-	-	
345,2		京畿道	" 内地朝鮮租税負担ノ輕重	/ " 5 -	美半切	8	
"		"	" 昭和3年京畿道に於ける / 戸当り 及び / 人当り 国税及び地方税負担額調	/ 昭 5 -	-	-	
345,45		"	" 京城府ニ於ケル營業税消長	/ 昭 5 -	美	2	
345,43		韓国度支部司税局	" 駅屯賭、徴税、慣行調査	/ 隆熙 2・6	" 贈	20	
345・651,1		朝鮮総督府	編 林野税創設に関する道評議会等の 意見	/ 昭 -	美	複	
346		小村拓務次官	新義州安東間密輸取締ノ件	/ 昭 5~7	美	贈	
349,3		全羅北道	編 府、郡財務主任会議 指示事項	/ 昭 3・7	-	-	
"・651・6		朝鮮総督府森林局	" 負担軽減等の為、森林組合事業 を道地方費に移属する件	/ " 7・7	美	複	
349,4		" 財務局	" 大正 / 2年度、各道地方費歳出 予算歩合比較表	/ 大 13 -	美半切	14	
349,4		平安南道	" 大正 / 2年度、道地方費歳入歳 出予算案	/ 大 12 -	B5	23	
"		"	" 大正 / 3年度、 "	/ 大 13・3	"	-	
"		"	" 大正 / 3年度、道地方費歳入歳 出決算	/ 大 14 -	"	-	
"		"	" 大正 / 3年度、地方費予算、臨 時恩賜金予算	/ 大 13 -	"	-	
"		京畿道	編 昭和4年度、地方費歳入歳出予算	/ 昭 4・3	"	69	
"		"	" 昭和5年度、地方費予算ノ執行状況	/ 昭 5・6	美	47	
"		"	" 道地方費事業の概況	/ 昭 4・8	A5	170	
349		全羅南道	" 大正 / 5年度、地方財政要覧	/ 昭 2 -	"	108	
358		朝鮮総督府	編 内鮮人口百分率表	/ 大 10 -	美	1	
358,016		京畿道	" 国勢調査予算経理方法	/ 昭 5 -	美	贈	



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
334,6・469		朝鮮総督府外事課編	極秘,朝鮮人を満州に移住せしむることの必要とその戸数	1	昭9・3	美 謄	
334,6		"	対満朝鮮人移民について	1	昭一?	A5 印	
334,6		牡丹江木材公司編	満蒙移民実行問題の提唱	1	昭7・6	" //	
"		満鉄経済調査会	秘,対満移民立案綱目担任者及完了予定期	1	昭7・4	美 謄	
"		関東軍司令部	極秘,満州に於ける朝鮮人指導方策案	1	昭8・12	" "	
"		関東軍参謀部第三課	"	1	" "	" "	
"		在新京,堂本事務官	極秘,満州移住協会設立要綱案に関する件	1	昭8・3	" "	
"		一	満蒙拓植計画要綱	1	昭7-	" "	
"		宗光彦	千振屯墾田概況	1	昭-	" "	
"		"	満蒙移民事業計画書	1	昭-	A5 謄	
334,6 335,49		"	鮮人移民会社設立計画案,世界植民史抄	1	昭7-	美 謄	
335,4		一	朝鮮勸業信託会社資料	1	昭5-	和 -	
"		賀田直治	農事信託株式会社	3	昭?	- -	
"		"	朝鮮農事信託機関設立に就て	1	昭6-	美 26枚	
"		賀田以武	朝鮮に於ける賀田家並に合資会社賀田組事業概要	1	昭5・12	半 3"	
335,4・610		朝鮮勸業株式会社編	朝鮮勸業株式会社要覧	1	昭5-	" 7"	
335,4・610 335,69・500		平安南道	主要工場及組合現況	1	大13-	" 15"	
335,49		朝鮮総督府編	1 東拓監理官を総督府官吏より任命されたし 2 東拓沿革概要 3 東拓土地買収年度別	1/	昭?	美 〓 書	
335,49		東洋拓植株式会社	東洋拓植株式会社 社務章程	1	昭9・7	B6 53	
"		"	定 款	1	" "	" 21	
"		"	業務要覧	1	" 5・9	B5 55	
"		"	裡里支店事業概況	1	大13・3	B6 36	
"		"	成規類纂追録	1	昭9・7	" 97	
"		"	東洋拓植株式会社法改正案参考資料	1	昭13・1	美 謄 323	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
335,49・661		朝鮮総督府編	秘,鮮満農事会社設立趣意及内容説明	2	昭7-	美 謄 77	
335,49 611,24		"	秘,移民会社計画案ノ内容	1	昭-	" "	
"		"	極秘,鮮満農事株式会社設立要綱同農村局案	1	昭7・3	" "	
338,73		朝鮮金融組合連合会編	金融組合資料展覧会目録	1	昭4・10	A5 18	
338,73 330,4		"	金融組合追悼法要次第	1	昭4・10	- -	
338,73・330,6 281,03		"	第1回金融組合大会,出席者名 金融組合歌	1	" "	A5 17	
338,73		朝鮮金融組合協会	第1回表彰,金融組合事蹟	1	" "	" 50	
"		"	第1回全鮮金融組合大会	1	" "	" 89	
"		"	金融組合の沿革と現況	1	" "	" 86	
"・330,5		"	金融組合 第11号	1	" 4・9	" 162	
338,73		全北金融連合会	(金融組合)執務指針	1	" 3・5	" 20	
"		全北・財務部長	金融組合の資金貸出に就て	1	" 2-	美 謄	
"		全羅北道	金融理事会打合会・知事訓示・草案	1	昭3・9	美 〓 書	
"		京畿道	昭和5年度,金融組合経費予算案	1	" 5-	美 3	
"		朝鮮殖産銀行	朝鮮の金融	1	" 7・9	B6 145	
"		牟田口利彦	金融組合読本	1	" 9・3	A5 -	
339		朝鮮総督府編	朝鮮保険業令制定	1	昭7・1	- -	
339,4		"	朝鮮簡易生命保険積立金の貸付に関する件	1	-	美 1	
"		"	朝鮮簡易生命保険事業諮問委員会参考書類 (内容)	1袋	昭7・5	" 謄	
			1,朝鮮簡易生命保険積立金状況				
			2, " 事業状況				
			3, " 事業諮問委員会第1回会議録				
			4,社会公共事業の種類調				

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
318,27		全羅北道 編	管内最近の状況 説明資料	1	大 15・6	美・複	
"		全州公立小学校 "	徳津林間聚落	1	昭 2・8	絵葉書	5
"		全羅南道 "	道勢一斑 大正 14 年	1	大 14	A6	
"		" "	" 大正 15 年	1	大 15・11	新書判	2/8
"		加賀屋文具店 "	全羅南道の産業の絵はがき	1	大 ?		12
"		木浦商業会議所 "	木浦案内 大正 15 年	1	大 15	折々式	
"		倉品紅緑 "	ひかる光州の輝き 第 1 篇	1	大 14・6	B6	5/
318,22		平安南道 "	平安南道々勢一斑 大正 12 年	1	大 12	折々式	
"		" "	" 大正 13 年	1	大 13		
"		" "	平南概況 大正 13 年	1	大 13	和	
"		平安南道土木部 "	平安南道土木概要	1	大 11・12	"	
"		平安南道 "	府尹郡守会議, 知事訓示要旨 (草案)	1	大 14・10		
"		米田平南知事 "	" "	1	大 14・10	美・譜	
"		平安南道 "	道知事会議ト評議員	1	大 12・12	B6	1/2
"		平壤府 "	平壤府勢一斑並に平壤府地区	1	大 12・5	折々式	
318,31		咸鏡南道 "	府尹郡守会議諮問事項答申要領	1	昭 8・6	美・譜	
"		" "	府尹郡守提出意見	1	"	"	"
"		" "	府尹郡守会議諮問事項答申書	1	"	"	"
"		咸鏡北道 "	府尹郡守提出意見, 処理概要	1	昭 8 -	和	
319,2		八田吉平	朝鮮の農業補習教育に対する一考察	1	昭 6 ?	A5	8
319,9		朝鮮総督府外事課	国際連盟支那調査委員会報告書	1	昭 7・10	美・譜	
"		" 外事課長	秘, 国際連盟支那調査委員一行 来鮮関係書類	1	昭 7・10	"	"
323,94・221,7		全羅北道 "	大正 9 年道訓令 29 号, 改世, 道 訓令 2 号	1	大 15・3	A5	25
326,5		朝鮮総督府 "	刑務所作業製品及生産額表, 等	1	昭 8・4	美	9
329,19		" "	日韓贈協約抜萃	1	明 -	"	
330,6 221・608		東亜経済評論社 "	朝鮮産業経済調査会諮問答申書	1	昭 11・12	A5	19

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
334,6・335,4		東洋拓殖株式会社	北鮮高原地帯に於ける内地農民移 植計画	1	昭 6・5	和	
334,62・222,5		朝鮮総督府警務局編	極秘, 朝鮮統治上緊急解決ヲ要 スヘキ満州問題ニ対スル意見	1	昭 6・10	美・譜	12
"		朝鮮総督府外事課長 田中武雄	第 15 回中樞院会議 外事課長演述	1	昭 9・4	A5	18
334,6・221,1		武雄大佐	豆満農場経営要領	1	昭 7・11	"	譜
334,7・234		長谷川久一	普国の内地殖民事情 (満州移民参考)	1	大 ?	A5	88
334,21		朝鮮総督府 編	昭和 4 年度総督府予算 (各目明細)	1	昭 -	B5	-
334,3		" "	秘, 朝鮮人口問題対策	1	昭 8	美・譜	
334,6・222,5		富永威鏡北道知事	間島地方行政上本府諸施設 極秘ニ関スル考察	1	昭 7・4	"	"
"		朝鮮総督府審議室編	満州移民に関する各方面の意見抄録	1	昭 7・6	"	"
334,6		朝鮮軍司令部 編	在満朝鮮人指導の根本方針に 関する意見	1	昭 7・12	"	"
334,6・222,5		朝鮮総督府外事課編	秘, 対満・朝鮮移民に就て	1	昭 7・6	A5	78
334,6		朝鮮総督府 編	統監府時代に於ける間島韓民 保護に関する施設	1	昭 5・7	"	162
"		" "	秘, 鮮人移民会社・設立計画案	1	昭 6	美	タイプ
334,6・222,5		満鉄経済調査会 "	第 1 期計画, 邦人移植候補地調 (明細書)	1	昭 7	"	"
"		" "	第 1 期計画, 邦人移植水田候補 地調査班の組織要綱	1	昭 7	"	"
334,6		関東軍統治部 "	極秘, 第 2, 日本人移民案要綱	1	昭 7・2	"	"
"		" "	" 第 3, " 説明書	1	"	"	"
334,6		堂本事務官	日本人移民実施要綱案に関する件 報告	2	昭 7・12	和	
"		朝鮮総督府 編	秘, 満蒙移民計画 (拓務省案)	1	昭 7	美	タイプ
334,6 335,49		" 及, 内閣 "	満州商事株式会社計画要綱と内 閣の意見	1	"	"	譜
"		朝鮮総督府 "	秘, 満蒙商事株式会社設立計画	1	"	"	"
334,6		" "	極秘, 満蒙日本人移民案, 朝鮮 総督府案と関東軍案との対照	1	昭 7・7	美	タイプ
"		" "	北海道及樺太の拓殖及移民状況, 満州との比較	1	昭 8・2	美	譜
"		" "	極秘, 日本人移民対案, 第 1 回水田候補地調査	1	昭 7・7	美	タイプ
"		" "	極秘, 在満朝鮮人救済並に将来の 移住奨励統制	1	昭 7	美	譜

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
317,21	83	朝鮮総督府	編 道知事会議諮問事項答申書	/	大 15	B5	
317,3・34	"	"	内地人官吏其の他の内地公務員の生活状態調査	/	昭 6		
317,73・316	"	京 畿 道	秘, 学生事件に伴い高麗共産青年会組織発覚の件	/	昭 4・12	美・謄	
"	"	"	秘, 指示注意事項(高等警察課)	/	昭 5	"	"
"・221,7	"	全羅北道	秘, 高等警察に関する管内状況	/	大 15・6	"	"
"・7・7	"	高等警察課	管内状況	//	大 15	B5	
317,7・221,4	"	京畿道警察部	秘, 治安状況 その一	/	昭 4・5	美・謄	
"	"	"	秘, "	/	昭 6・7	"	"
317,3・318,13	"	朝鮮総督府	道技師, 産業技師, 官等略歴調	/	昭 6	"	5
317,73	"	京 畿 道	極秘, 共産党朝鮮国内工作委員会事件検挙に関する件	/	昭 6・7	"	"
318	"	和歌山県内務部 地方課	第2回自治事務講習会, 講演集	/	明 45	A5	
"	"	朝鮮総督府	昭和7年4月現在, 各道評議会 員, 内鮮人別表	/	昭 7・4	美・謄 /	
318,2	"	"	総督訓示要旨(道知事会議)	/	昭 10・1	"	"
318,1	"	"	秘道知事提出意見, 付, 道知事 希望事項	/	昭 9	B5	54
"	"	"	秘, 道知事に対する総督指示	/	昭 8・4	"	8
"	"	"	道知事会議ニ於ケル政務總監訓 示要旨	/	"	"	"
"	"	"	" 総督訓示要旨	/	"	"	//
318,34	"	" 殖産局	秘, 定員減に基づく経理状態調	/	昭 6・11	美・謄 /	
318,3	"	"	職 員 略 歴	/	昭 6		
318,1	"	朝鮮総督府	秘, 地方制度改正案	/	昭 5	B5	57
318,2	"	"	道参与官ニ対スル諮問事項答申書	/	昭 8・11	"	
"	"	"	秘, 道知事会議諮問事項答申書	/	昭 9	"	230
318,13	"	"	地方高等官表	/	昭 6	表 /	
318	"	"	自治ノ作用 (一覧表)	/	昭	"	
318,06	"	"	地方開発の実行要目	/	昭		
318,24・221,4	"	京 畿 道	京畿道々勢一斑 昭和3年	/	昭 3・11	A4	14
"	"	"	京畿道々勢一斑 昭和4年	/	昭 4・4	"	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
318,24・221,4		京 畿 道	編 京畿道事情ノ大要 昭和4年	/	昭 4	美・謄	
"	"	"	" 昭和5年	2	昭 5	"	"
"	"	"	京畿道々勢一斑 昭和5年	/	昭 5	表	
"	"	"	京畿道事情ノ大要 昭和6年	2	昭 6	美・謄	
"	"	"	京畿道々勢一斑 昭和5年	/	昭 5	新書刊	222
"	"	"	京畿道・新潟県比較対照表	/	昭 4	A4	
318	"	"	道評議会参考書	/	昭 -	A5	276
318,24・221,4	"	"	道政参考資料	/	昭 6	美・複	
318		京 城 府	京城府勢一斑(京城地図)	/	昭 -		
318,8・221,4		京畿道内務部	第1期, 京城市区改修計画案各種	/	昭 3	美・謄 /	15
318,7,8		京 畿 道	京城風致計画委員会規約及山林 施設大綱	/	昭 -	"	"
318,24		京畿道水原郡	水原の起原 付 郡勢概要	/	昭 -	美・複	
318,23・221,5		黄 海 道	黄海道々勢一斑 大正10年	/	大 10	折々式	
"	"	"	" 昭和8年	/	昭 8	"	
318,25		江 原 道	編 江原道々勢一斑 昭和3年	/	昭 3・9	A4	
318,26		忠清北道清州面	忠清北道々勢一斑(清州面) 大15年	/	大 15・10		
318,27		全羅北道	全羅北道年中行事表	/	大 11	美・謄	
"	"	"	五大事業概要	/	大 15・6		
318・318,27		東津水利組合	全羅両道ノ内地及び全朝鮮ニ対 比シタル情勢	/	大 15	葉書	/
318,27		全羅北道	道 勢 概 要 大正13年	/	大 13・8	A5	211
"	"	"	大正15年度の主なる施設	/	昭 2 -		
"	"	"	全羅北道々評議会, 会議規則	/	大 -	A5	9
"	"	"	" 道勢一斑 昭和2年	/	昭 2・7	A4	
"	"	"	" 道勢一斑 昭和3年	/	昭 3・4	折々式	
"	"	"	道知事会議提出意見・諮問事項 答申書参考	/	大 15・6	美・複	
"	"	"	府尹・郡守会議, 知事訓示要旨草案	/	昭 2・10	美・謄	
"	"	"	道評議会諮問事項	/	昭 3・4	B5	
"	"	"	道知事会議提出意見並に諮問事項答申書	/	大 15・6	美・複	



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
310,6	83	朝鮮總督府 編	道知事提出意見	/	大15	美・贈	
313,6	"	全羅北道	御大礼に関する協議事項	/	昭3・9	和	
313,6・385,9 288,41	"	"	御大礼美化作業の件	/	"	"	
314,44	"	朝鮮總督府中樞院	中樞院改革に関する意見	/	昭?		
316,8	"	守屋 栄夫	宏遠なる理想の実現	/	大9・9	A5	27
"・221,063	"	Eddy, Sherwood	Koreas Aspirations (From The Challenge of The East By Sherwood Eddy)	/	昭?	B5	65
316,8	"	京畿道・警察部 編	盟休校一覧	/	昭? 6~7月	美・贈	
"・222,5 334,6	"	間島日本総領事館	朝鮮人民会対案	/	昭6・10	美・贈	
316,8・317,67	"	京畿道・警察部 編	嶺南等の行動に関する件	/	昭5・3	"	"
"	"	"	大正八年以降の重要騒擾事項概要	/	"	"	"
"	"	朝鮮總督府 編	間島地方治安維持及統治に関する 指導方針 (関東軍・總督府・朝鮮 軍主管事項)	/	昭6	"	"
316,8・222,5 317,73	"	朝鮮總督府警務局	間島問題の経過と移住鮮人	/	昭6・7	A5	195
316,8・222,5 334,6	"	牛丸 潤亮	南滿及間諜朝鮮人事情, 下巻 付, 水田事業の現状	/	大12・7	"	200
317,25・600	"	朝鮮總督府 殖産局農務課 編	農務課主管事項概要	/	昭6・12	美・贈	43枚
317,29	"	朝鮮總督府	秘, 中樞院改革ニ関スル参議ノ 意見総括表	/	昭8	"	10
317,34 493,8・221,4	"	京畿道	加俸減率ニ関スル調書	/	昭6	"	13
317,36	"	鎮南浦府尹	事務改善に関する一般的意見	/	大14・5		
317,29	"	朝鮮總督府 編	朝鮮總督府中樞院官制及議事規則	/	昭?	A5	7
"	"	" 中樞院	第15回中樞院會議々事録	/	昭9・4	"	457
317,32,29	"	朝鮮總督府	秘, 朝鮮總督府所屬官署委任事項規程	/	大15・2	"	12
317,7・221,7	"	全北, 警察部	警務要覧 (全北40万分ノ1地図付)	/	昭2・5	A6	
317,73	"	京畿道	秘, 昭和4年警長會議に於ける意 見希望事項に対する決定	/	昭5	美・贈	
"	"	"	秘, 警察規程草按	/	昭5	"	"
317,7 "・317,36 "・221,7	"	" 警察部	万宝山事件報復騒擾 警戒配置状況	/	昭6・10	"	"
317,73 316,8	"	全北・巡查教習所	警察・訓育	/	昭3	半	贈46枚
	"	朝鮮總督府警務局	定平農民組合検査概況	/	昭6・10	"	"

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
317,73・221,7	83	朝鮮總督府警務局長秘, ロシア石油朝鮮進出状況		/	昭7・8	美・贈	
"	"	全羅北道警察部	高等・保安・衛生概況	/	昭3	"	"
317,29	"	朝鮮總督府 編	中樞院改革に関する意見書	/	昭8	和	
"	"	"	"	/	昭6	和	
"	"	" 農林局長	中樞院會議 演述事項	/	昭8・7	美・贈	
317,29・500 221,2	"	朝鮮總督府	平壤に中央試験所 西鮮支所設置 に関する件	/	昭6・5	"	20
317,3	"	京畿道	京畿道人事 (12月21日付)	/	昭?	"	贈
"	"	朝鮮總督府	朝鮮總督府高等官, 官等表	/	昭4・3	"	6枚
"	"	"	所屬官署高等官道技師, 産業技 師略歴調	/	昭6・11	"	9"
317,3・318,13	"	" 農林局	本府所屬官署各道技術官, 高等 官略歴名簿 (秘)	/	昭8・5	"	23
317,3・25	"	朝鮮總督府	殖産局定員表	/	昭7	"	2
"・650	"	" 農林局	山林部職員定員現員表	/	昭7・10	"	3
317,32	"	"	秘, 農林局分課制並に事務分掌規 程改正に関する件	/	昭?	"	5
317,3・650	"	"	農務課事務分担表 (山林部・燃 料研究所・商工課各事務分担表)	/	昭6・10	"	
317,32	"	統監府	部長及官房主事委任事項	/	明40・7	A5	14
317,34	"	朝鮮總督府	官舎居住者便覧	/	一	美・中	
"	"	"	経常部昭和8年度俸給予算経理表	/	昭8・2	"	2
317,34・221,4	"	京畿道	職務官舎を必要とするものの調	/	昭6	"	2
317,35	"	朝鮮總督府	秘, 朝鮮總督府委任事項規程	/	昭7・8	A5	40
317,36	"	朝鮮總督府	朝鮮總督府処務規程, 付, 關係法規	/	昭7・8	"	74
317,3	"	" 殖産局農務課	農林關係事務分担表	/	昭7	美	19
317,36	"	朝鮮總督府 編	施政刷新調査ニ関スル件	/	昭9	"	2
317,7・310,6	"	"	秘, 道警察部長會議意見希望事項	/	昭9・4	B5	102
"	"	"	" 諮問事項	/	昭?	"	128
317,21 310,6・318	"	"	道知事に対する總督指示	/	昭9		
317,21	"	"	道知事提出意見, 付, 道知事希 望事項	/	昭6	B5	



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
389,1	23	服部 徹	日韓交通史(上世史・中世史・近世史)	1	明 27	A5	174
"・210	"	浜名祖光	日韓正宗溯源	1	昭 2・4	" 再版	696
"・203,4 469,3	45	朝鮮総督府中樞院	朝鮮の国名に因める名詞考	1	昭 15・6	A5	221
389,1・469,3	23	椎川亀五郎	日韓上古史ノ裏面 下巻	1	明 43・12	"	410
389,1	16	香山光郎	内鮮一体随想録(協和叢書5輯)	1	昭 16・6	"	16
"	"	国民精神総動員 朝鮮連盟 編	内鮮一体精義	1	昭 15・5	B6	72
		(内 容)	姓氏と内鮮関係 歴史上より見たる内鮮関係 民族及び信仰上より見たる内鮮関係				
389,1	16	中山久四郎 述	歴史上にあらわれたる内鮮の融和	1	昭 ?	A5	20
"	"	"	内鮮協和一体の史実(協和叢書4輯)	2	昭 16・6 " 17・12	"	18
"	"	高橋 亨	内鮮関係政治文化思想史	1	昭 16・8		
"	16	姜昌基 述	内鮮一体論				
001	27	松田 甲	日鮮史話 第3篇	1	昭 2・7	A5	140
389,1	23	三浦周行	三韓の帰化人(朝鮮史講座・特別講義)				
"・221	45	守尾秋太郎 編	民族学研究・第一巻第1号~5号	1	昭 19・9	A5	592
389	"	"	" 6号~11号	1	"	"	1091
"	"	日本学術普及会	民族と歴史 大正10年7月号	1	大 10・7	"	
389,1・159,2	24	朝鮮憲兵隊司令部	朝鮮人の篤行美談集 第1輯				
"	"	"	朝鮮同胞に対する内地人反省實録				
"・070	43	新聞用語研究会	朝鮮同胞呼称並びに新聞雑誌記事 取扱座談会				
390-392 国 防・軍 事							
390,1	27	御手洗辰雄	時局と朝鮮	1	昭 12・8	B6	29
"	"	中央朝鮮協会 編	非常時下の朝鮮	1	昭 12・12	"	42
"	27	国民総力朝鮮連盟 總裁 南次郎	時局と内鮮一体 (総力運動叢書16輯)	2	昭 17・1	"	21

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
390,1・316,2	27	金斗碩	防共戦線勝利の必然性				
"・001	"	白山青樹	朝鮮同胞に告ぐ				
390,1	"	朝鮮総督府 編	朝鮮の国民総力運動・昭19・3 付大日本婦人会朝鮮本部解説	1	昭 19・5	B6	113
"	"	朝鮮軍報道部	君と僕	1	昭 ?	A5	70
"	74	朝日新聞社	写真報道・戦う朝鮮	1	昭 20・6	B5	160
391,2 314,45	46	東京・中央情報社	朝鮮志願兵制度施行 (第73議会, 拓務議事詳録)	1	昭 13・5		
392・317,7 221	23	麻生武亀	軍制史・付, 警察制度史(朝鮮史講座・分類史)				
393	K/	近藤 劔一	第20師団従軍資料1~3	3	昭 13~14	新聞切抜集	
"	"	"	" 写真及びフィルム(多数)				
"	71	山県五十雄	米国必敗	1	昭 18・12	B6	93
393,2	73	Dietz Verlag Berlin 編	Die Wahrheit Über Korea	1	1952	"	300
393	K/	加納辰夫	絵と兵隊(第20師団)	1	—		
310-399 渡 辺 忍 資 料							
310	83	朝鮮総督府 編	(農林振興関係) 総督訓示要旨	1	昭 10	B5	30
310,4	"	—	将来の朝鮮統治論	1	昭 7・3	美, 踏	
310,6・317	"	朝鮮総督府 編	秘, 政務総監訓示要旨	1	昭 11・9	B5	11
"	"	"	道参与官ニ対スル総督指示	1	昭 8	美, 踏	19枚
"	"	"	第13回中樞院会議ニ於ケル, 訓 示・演述・説明及答申	1	昭 7・9	A5	113
310,4,6	"	" 中樞院 "	第15回中樞院会議, 各局長演述	1	昭 9・4	"	101
310,6 317,29	"	朝鮮総督府 編	第15回中樞院会議ニ於ケル局長 演述事項一覧	1	"	表	1枚
310,4,6	"	"	各道参与官会同ニ於ケル, 字垣総督 訓示	1	昭 8・11	美, 踏	
310,6 317,21	"	" 道知事会議	齋藤総督訓辭	1	大 14・5	"	"
"	"	"	下岡政務総監訓辭	1	"	"	"
"	"	"	" 総督 指示	1	"	"	"

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
370	15	朝鮮総督府 編	朝鮮の教育	1	昭7・6	折表	1
"	"	"	朝鮮教育要覧	1	大8・1	A5	222
370.4	"	朝鮮教育大観社	朝鮮教育大観	1	昭6・2	"	1780
371	15	大野謙一	朝鮮教育問題管見	1	昭11・9	A5	462
"	"	朝鮮総督府 編	教育ニ関スル勅語奉祝上特ニ注意スヘキ諸点	1	大8・2	"	9
371.2・221	23	洪 憲	朝鮮学芸史(朝鮮史講座・分類史)				
372・221	23	小田省吾	教育制度史( "・ ")				
372.21	15	朝鮮総督府学務局編	朝鮮教育の沿革	1	大10・10	A5	22
372	87	京畿道教育会 刊	京畿教育 卒業生指導特輯号	1	昭11・5	B4	220
373	15	"	朝鮮諸学校一覧 昭和4年版	1	昭5・1	A5	466
"	"	"	" 昭和8年版	1	昭9・5	"	600
"	"	"官房文書課長	教育制度改革記念号(雑誌・朝鮮)	1	大11・3	"	438
"	"	高山秀雄	内地留学生指導に関する意見書	1	昭16・1	"	10
373.7	"	朝鮮奨学会事務所編	朝鮮奨学会設立趣意書及規程	1	昭16・1	B6	21
374.8	15	朝鮮奨学会 編	夏季錬成会状況	1	昭17	B6	113
374・001	46	朝鮮総督府学務局	学校考 (増補文献備考, 訳)	1	大9・12	A5	246
375.3	15	朝鮮教育会調査部編	秘, 学生思想問題参考資料	1	昭7・6	A5	25
375.8	"	森田梧郎 述	国語の教え方(協和叢書16輯)	1	昭18・8	"	91
376	15	下関市立向山小学校 編	半島児童教育所感	1	昭13・3	A5	21
376.9	"	京城商工会議所調査課 編	京城府内に於ける女学校以上卒業者の状況	1	昭19・4	"	
379	"	中央協和会	協和国語読本	1	昭15・11	"	62
"	"	各務虎雄 述	国語の習い方	1	昭16・9	"	41
"	"	近藤茂敏 述	国民学校に於ける協和教育(協和叢書9輯)	1	昭18・1	"	再版84
"	"	"	"	1	昭16・5	"	94

## 380 民 俗・風 俗 習 慣

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
382・290	44	新光社 編	日本地理風俗大系・朝鮮編下(17輯)				
382・397	45	西村真太郎	朝鮮のおもかげ	1	大12・6	B6	189
"	"	71 松田 甲	朝鮮發話	1	昭4・3	A6	214
001	72	秋葉 隆	朝鮮民俗誌	2	昭29・3	A5	326
382	46	村上唯吉	朝鮮人の衣食住	1	大5・7	B6	109
383	71	朝鮮総督府 編	朝鮮の習俗	1	昭11・3	新書判	82
382	"	今村 耕	朝鮮風俗集 全	1	大3・11	A5	500
384・148,5	23	村山智順 述	風水に就いて(朝鮮史講座・特別講義)				
221	12	賀田直治	朝鮮農村・都市に関する研究				
384・601	45	朝鮮総督府善生永助 編	朝鮮部落調査予察報告・第1冊	1	大12・3	B5	82
384.1	"	"	" 抜刷	1	"	"	73
"	"	"	朝鮮部落調査特別報告 第1冊	1	大13・3	"	77
"	"	"	朝鮮の聚落 前篇 朝鮮資料38輯	1	昭8・3	A5	944
"	"	"	" 中篇	1	昭8・3	"	593
"	"	"	" 後篇	1	昭10・3	"	994
"	45	鈴木栄太郎	朝鮮農村社会踏査記	1	昭19・5	B6	245
385.8	"	朝鮮総督府 編	朝鮮の年中行事	1	昭?	"	219
386.4	46	藤田東三	朝鮮婚姻考	1	昭16・12	A5	342
389・221	23	稻葉岩吉	朝鮮民族史(朝鮮史講座・分類史)				
389・469,8	"	伊藤卯三郎	朝鮮及朝鮮民族 第1輯				
221	16	相場 清 述	朝鮮人に就て	1	昭?	A5	44
389	45	朝鮮総督府 編	朝鮮の姓	1	昭9・3	B5	424
"・288,1	23	稻原昌三 述	日鮮関係史(朝鮮史講座・分類史)				
389・469,3							
221							

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
369	28	中央協和会 編	壮丁練成要項	1	昭18・6?	A5	11
"	"	"	部外秘, 移入労働者生活訓練必携	1	昭17・3?	"	20
"	"	"	秘, 移入労働者訓練及取扱要綱	1	昭17・3	"	22
"	"	"	移入労働者訓練実施の具体的研究	1	"	"	48
"	"	東京府協和会	東京府協和会概要	1	昭17・7	"	61
"	"	"	東京府協和会各支会, 事業実施状況	1	昭16?	"	"
"	"	大阪府内鮮融和事業調査会 編	極秘取扱, 在住朝鮮人問題ト其ノ対策	1	昭11・9	"	22
369,32 615,8	74	広岡誠三	京城付近水害写真画報	1	大14・8	B5	45
369,33	13	朝鮮水害罹災者救済会 編	水害罹災者救済報告書	1	大15・10	A5	1346
369,37	75	朝鮮総督府	大正9年中, 時局関係遭難者一覽表	1	大10	地図	"
369,77	28	曾田嘉伊智	朝鮮未成年者禁酒禁煙法実施運動参考資料	1	昭12・6	B5	"
369,8	28	新義州保護觀察所編	吾人の心境を語る	1	明44・	A5	"
369,37 引揚者問題							
369,37	71	森田芳夫	「日本人の朝鮮引揚」に関する文献資料	1	昭33・9	A5	38
"	28	中央日韓協会 森田芳夫	終戦後平壤に於ける死亡者と竜山墓地	1	昭33・5	B6	80
"	28	朝鮮関係業務整理事務所 編	間島及北鮮抑留警察官名簿	2	昭23・7	"	55
"	28	引揚援護庁	引揚援護の記録	1	昭25・3	B5	215
"	"	厚生省	続, "	1	昭30・3	B5	189
"	74	東京地方裁判所	昭和27年?第8, 28号在外公館等 借入金返還請求訴訟事件 判決文	1	昭31・3	B5	47
"	"	同胞救済職員連盟	秘, 海外引揚者援護	1	昭21・9	A5	72
"	"	咸興日本人委員会 北鮮戦災者委員会	北鮮戦災現地報告書	1	昭21・12	B5	81
"	72	朝鮮引揚同胞世話会 中保与作	引揚同胞 NO.3,4	1	昭21・7	A5	48
"	"	拓友援護会 編	会員名簿	1	昭23・1	B6	88
"	"	京城会 編	会員名簿 (福岡・京城会)	1	昭25・12	"	55

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
369,37	72	岩手県・朝鮮引揚者更生会 編	岩手県・朝鮮引揚者更生会名簿	1	昭22・4	A6	27
"	"	岩手朝友会 編	岩手県・朝鮮引揚者名簿	1	昭26・1	"	34
"	28 74	小谷益次郎	仁川引揚誌, 元・仁川在住者名簿	2	昭27・5	B6	241
"	72	北山恒	北鮮日本人苦難史	1	昭21・3	B5	249
"	28	小原礼司	北鮮脱出記	1	昭33・3	B6	124
"	72	吉田伊蔵	思い出の雄基, 雄基関係者住所録	1	昭27・8	A5	48
"・908	72	藤原てい	流れる星は生きている	1	昭24・5	B6	318
"・221	72	田村吉雄 編	秘録, 大東亜戦史, 朝鮮篇	1	昭28・8	A5	354
"	"	池田佐 編	" " 第6巻, 大陸・朝鮮篇 (朝鮮篇内容)	1	昭29・8	B6	555
370 教育							
370・001	12	朝鮮総督府 編	教育 (朝鮮総督府, 443)	1	昭8・3	"	"
(内容) 学務局長 松浦鎮次郎 朝鮮教育の発展							

分類記号	図架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
350,5 337,86・338,4	16	朝鮮銀行調査部 編	京城卸売物価調, 付, 労働賃銀調	34	昭 17.12 ~ 19.6	1部欠・合綴	
350,5	17	朝鮮統計時報社 "	朝鮮統計時報 17 ~ 23号	7	昭 15.4 ~ 18.5 A5 42 ~ 94		
		358,016	国 勢 調 査				
358,016	47	臨時国勢調査局 編	大正9年 国勢調査速報, 世帯及人口	1	大9.12	B5	212
"	"	朝鮮総督府 "	昭和5年 朝鮮国勢調査報告 1 ~ 13	13	昭 7.7 ~ 9.6		
			1 京畿道		昭 7.9	B5	326
			2 忠清北道		昭 7.7	"	132
			3 忠清南道		昭 7.10	"	144
			4 全羅北道		昭 8.3	"	204
			5 全羅南道		昭 8.4	"	252
			6 慶尚北道		昭 8.6	"	280
			7 慶尚南道		昭 8.10	"	286
			8 黄海道		昭 8.12	"	200
			9 平安南道		昭 9.2	"	256
			10 平安北道		昭 9.2	"	228
			11 江原道		昭 9.3	"	190
			12 咸鏡南道		昭 9.3	"	262
			13 咸鏡北道		昭 9.6	"	180
		360-362	社 会 。 社 会 学 関 係				
361,6	28	内外評論社 景山義郎	朝鮮の文化	1	大 10.8	A5	238
361,48 611,92	16	京畿道内務部社会課	京畿道農村社会事情	1	昭 2.3	B6	174
"	74	段林省	朝鮮農村事情	1	昭 6.6	B5	47

366

労働問題

368

階級問題・社会的団体

分類記号	図架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
366,8	16	朝鮮鉄道協会 編	朝鮮に於ける労働者数及分布状態	1	昭 4.11	A5	39
		朝鮮総督府内務局 社会課 編	会社及工場に於ける労働者の調査 飢業労働者の調査 労働者総数表 付録 産業労働者収支 同盟罷業一覧表	1	大 14.11	A5	91
366,94 389,21 601	12	賀田直治	朝鮮人の労働能力に関する研究				
368,2 365,5 368,6	75	朝鮮総督府 編	各道資産家分布図 (大正9.10現)	1	大 9.10	地図	1
	16	李覚鍾	朝鮮の特殊部落	1	昭 ?	A5	15
		369	社 会 事 業				
			社会病理・生活保護・救済制度 慈善事業・水災・凶災・社会教化				
369	28	武田行雄	協和事業とは何んなものか (協和叢書2)	1	昭 15.12	A5	19
"	"	"	前線指導者への期待 (" 4)	1	昭 17.5	"	18
"	"	加島翁古稀記念出版会 相田良雄 編	社会事業界の先覚を語る	1	昭 13.8	"	210
369,05	"	朝鮮総督府内務局 編	朝鮮社会事業要覧 大正13年	1	大 13.10	A5	285
"	"	"	" 昭和4年	1	昭 4.9	"	193
369,05	28	中央協和会 編	協和事業年鑑 昭和16年版	2	昭 17.9	"	492
"	74	"	協和事業叢報 1 ~ 4号	4	昭 14.9 ~ 12.15	A5	46 ~ 68P
"	28	"	協和事業 (特報) 第2巻 10号	1	昭 15.11	A5	153
"	"	"	部外秘, 協和事業研究 第1巻 1号	1	昭 19.5	"	31
"	"	"	" " " 3号	1	昭 19.9	"	31
"	"	"	" " " 4号	1	昭 20.1	A5	31



342~4 財政史。財政事情

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
342	44	朝鮮總督府 陶山通訳官	李朝時代の財政 (稿本)	1	昭11・3	A5	
342・001	23	麻生武亀	朝鮮財政史 (朝鮮史講座分類史)				
343	44	韓国財政顧問部編	韓国財政整理報告 (第一冊)	1	明38・12	B5	242
343・001	12	朝鮮總督府	財政 (朝鮮總攬P.87)				
		(内容)					
	1	財務局長 草間秀雄	朝鮮の財務行政に就て				
	2	稅務課長 藤本修三	朝鮮の租稅制度				
	3	司計課長 水田直昌	朝鮮財政の現状				
344	11	水田直昌	述 朝鮮總督府予算に就て(昭和14年)	1	昭14・7	B6	76
"	"	"	" ( " 15年)	1	昭15・7	"	73
"	"	"	" ( " 17年)	1	昭17・7	"	62
"	"	"	" ( " 18年)	1	昭18・7	"	65
348 専 売							
348,4・001	12	朝鮮總督府	編 専 売 (朝鮮總攬P.871)		昭8・3		
348,4	14	" 専売局 "	朝鮮専売史 第一卷	1	昭11・7	B5	2124
"	"	"	" 第二卷	1	"	"	1933
"	"	"	" 第三卷	1	"	"	1549
"	"	"	" 正誤表	1	昭11・9	"	68
"	"	"	朝鮮總督府専売局 第4年報 (大正13年版)	1	大14・11	"	232
"	"	" 今村 新	人 蔘 史				
		(内容)					
			第1卷 人蔘編年紀・人蔘思想篇	1	昭15・3	A5	178
			第2卷 人蔘政治篇	1	昭 -	"	341
			第3卷 人蔘經濟篇	1	昭11	"	458

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
348,4	14	朝鮮總督府専売局 編 今村 新	第4卷 人蔘栽培篇 第5卷 人蔘醫藥篇 第7卷 蔘名彙攷篇	1	昭11 昭12 昭9	A5	549 448 646
348,4・589,8	14	広江沢次郎	赤心一片 (煙草専売初期の事情)	1	大4・11	"	207
348,4・617,7	"	開城蔘業組合 編	開城蔘業組合創立二十周年記念誌		昭6・12		
349 地 方 財 政							
349,3・318,2	46	京城府	編 京城府一般經濟・特別經濟歳入 予算書 (昭和16年)	1	昭16	B5	652
"	"	"	" ( " 17年)	1	昭17	"	683
349,4	"	朝鮮總督府内務局	朝鮮地方財政要覽・大正13年度	1	大14・3	"	184
"	"	"	" 昭和4年度	1	昭5・3	"	222
"	"	"	" 昭和7年度	1	昭8・9	"	244
350,5 統 計・逐次刊行物							
350,5・001	46	朝鮮總督府	編 朝鮮總督府統計年報		明44~昭12 大正年間欠		
350,5	"	慶尚南道	" 慶尚南道統計年報 昭5年	1	昭7・3	B5	337
"	"	平安北道	" 平安北道統計年報 昭4年	1	昭6・3	"	348
"	"	群山商業會議所	" 昭和2年中 統計年報	1	昭3・12	"	137
"	"	平壤商工会議所	" 昭和六年版統計年報	1	昭6・9	"	243
"	"	"	" 7年版 "	1	昭7・9	"	268
350,5・678,9	16	朝鮮總督府	" 朝鮮・内地貿易月報 昭和16・11~昭和19・4迄 18,12・19,1~3 欠	26	昭16~19	"各	27

338 金 融 ・ 銀 行

分類記号	函架	編 著 者 名	書 名	冊	刊行年月	型	頁
338	//	朝鮮殖産銀行調査部	朝鮮の金融	1	昭7・6	B6	145
338・001	/2	朝鮮総督府 編	金融 (朝鮮総攬P135)		昭8・3		
		( 内 容 )					
		有賀光豊	朝鮮の産業と金融	P, 135			
		松本伊織	小島に対する小銀生業資金貸付事業	P, 140			
		児島高信	朝鮮の金融制度に就て	P, 143			
		矢鍋永三郎	朝鮮に於ける不動産金融に就て	P, 152			
		梶本益一	朝鮮に於ける郵便貯金の趨勢	P, 160			
		牟田口利彦	進展せる朝鮮の金融組合	P, 165			
		善生永助	朝鮮に於ける金貨業	P, 170			
338	K/	"	朝鮮の契	1	大15・10	A5	194
338,05	/6	朝鮮殖産銀行 編	殖銀・調査月報 36号~43号合綴 44号~55号 13	昭16・5~17・12 各冊100~200P			
"	"	朝鮮総督府財務局	朝鮮金融年報 昭18~19・4	1	昭19・4	B5	132
"	"	"	朝鮮金融事項参考書 大正12・11	1	大12・11	B5	400
338,05 338,64	/6	朝鮮殖産銀行調査部	第1回~第15回 不動産抵当個人間 貸借金利調	12	昭4~18	11,13,14, 欠	
338,05	/6	"	朝鮮事業成績 昭和16年	1	昭17・10	B5	25 表27
"	"	"	" 昭和17年	1	昭18・12	"	25 表28
"	"	"	朝鮮金事情概 (昭和3年上期・昭和3年上~昭和4年下 昭和4年下期・昭和5年上期・6年上期・6年下期)	6	昭3~6 各冊22P		
338,05	/6	朝鮮経済協会 編	第三次・金融組合要覽	1	昭3・7	B5	226
338,05 338,73	/6	朝鮮金融組合連合会	金融組合 昭和17・9月号~昭和19・8月号	12冊		A5	各冊64~116

分類記号	函架	編 著 者 名	書 名	冊	刊行年月	型	頁
338,05 338,73	/6	朝鮮金融組合連合会	調査彙報 第54号第55号	2	昭18・8 昭19・9		
338,05	"	朝鮮銀行調査部 編	朝鮮銀行統計月報	39	昭16・11~20・2	B5	
338,14	/2	京城商工会議所編	朝鮮に於ける内地資本の投下現況 (調査9)	1	昭19・1	S6	42
338,78	/2	"	朝鮮に於ける中小工業金融の現況	1	昭18・9	"	56
338,79	"	朝鮮総督府囑託 李 覺 健	契に関する調査(朝鮮民政資料)	1	昭?	A5	14
338,14	"	朝鮮殖産銀行調査部	開城ノ時辺ニ就テ	1	昭4・2	"	28
338	"	" 守電徳夫	朝鮮殖産銀行十年史	2	昭3・10	B5	217
"	"	" 本田秀夫	" 二十年史	2	昭13・10	"	115
338,6	"	"	朝鮮殖産銀行と朝鮮の産業	2	大13・7	A5	72
338,2	"	第一銀行 長谷井千代松	第一銀行五十年小史	1	大15・8	A5	178
"	/74	第一銀行	第一銀行史 上巻	1	昭33・7	B5	970
"	"	"	" 下巻	1	"	"	823
338,2,4	/2	朝鮮銀行調査課 渋谷礼治 編	朝鮮銀行二十五年史	2	昭9・12	A5	216
"	"	星野喜代治	朝鮮銀行を語る	1	昭26・9	B5	54
338,73	/2	朝鮮金融組合協会	朝鮮金融組合史	2	昭4・8	"	837
"	"	朝鮮金融組合連合会	朝鮮金融組合連合会十年史	1	昭19・3	"	401
"	"	" 編	会員連絡簿 昭16・6末調	1	昭16・6	B5	83
"	"	生業報国会 今成政男 編	朝鮮金融組合を語る	1	昭13・5	A5	774
"	"	斎藤源治 編	金融組合令要義	1	昭元・12	"	203
"	//	朝鮮金融組合協会	金融組合論策集 (金融組合叢書1)	1	昭5・7	B6	400
"	"	"	" 講演集 ( " )	2	昭6・3	"	416
"	"	"	" 経営研究 ( " )	3	昭6・5	"	476
"	"	"	朝鮮日時の金融財政慣行 ( " )	4	昭5・8	"	320
"	"	"	金融組合途話集 ( " )	6	昭6・8	"	353
"	"	"	" 標語集 ( " )	7	昭5・5	"	62
"	/2	"	朝鮮金融組合協会史	1	昭9・8	A5	446
338,7	K/	吉川義弘 編	金融組合年鑑 2600年版	1	昭15・4	B6	232

332 経 済 史 ・ 経 済 事 情

分類記号	函架	編 著 者 名	書 名	冊	刊行年月	型	頁
332.02	71	朝鮮総督府 編	数字に現われたる朝鮮	1	昭 2・2	1/2 A4	16
"	11	"	朝鮮の経済事情 大正15年版	1	大 15・3	B6	220
"	"	"	" 昭和 4年版	1	昭 4・2	"	198
"	"	"	" " 6年版	1	昭 6・10	"	242
"	"	"	" " 9年版	1	昭 9・6	"	268
"	71	"	" " 11年版	1	昭 11・3	"	179
332	72	猪谷善一	朝鮮経済史	1	昭 3・5	"	323
333.3	15	高田信一郎	躍動する兵站基地半島	1	昭 16・2	"	40
"	16	鈴木武雄	朝鮮の決戦態勢	1	昭 18・12	A5	44

334 人 口 ・ 殖 民

334.21	45	朝鮮総督府 編	(調査資料第22輯) 朝鮮の人口現象 付図	1	昭 3?	B5 図	19
"・316.8	75	" 警務局 "	国外在住朝鮮人分布図		大 10・4		
334.5	27	朝鮮総督府 "	(調査資料第7輯) 朝鮮に於ける支那人	1	大 13・7	A5	203
334.6 316.8・276	"	朝鮮情報委員会 秘	ハワイ在留朝鮮人一班状態	1	大 12・2	"	
334.6.62 316.8	15	朝鮮総督府 内務局 社会課 編	満州及シベリア地方に於ける 朝鮮事情 昭2・10調	1	昭 2・11	"	322
334.6.62 222.1	15	朝鮮総督府調査員 石津半次 稿	満蒙ニ於ケル移民ニ関スル調査	1	大 15?	"	180
"	"	"	人口問題を基調としたる満蒙拓 殖策の研究 (上)	1	大 15?	"	278
"	"	"	" (下)	1	"	"	419
334.6.62 222.1	15	朝鮮総督府 官房外事課 編	秘、対満朝鮮人移民に就て	1	昭 7・6	A5	78
"	"	"	在満朝鮮人の概況	1	昭 7・1	"	43
334.6.62 316.8・317.73 222.1	72	朝鮮総督府警務局 編	秘、高等警察資料 間島問題の経過と移住鮮人	1	昭 16・8	A5	195

分類記号	函架	編 著 者 名	書 名	冊	刊行年月	型	頁
334.6.62 316.8・222.1	15	朝鮮総督府 編	統監府時代に於ける 間島韓民保護に関する施設	1	昭 5・8	A5	162
"	"	篠田治策	間島問題の回顧	1	"	"	61
334.6.62	72	朝鮮総督府	半島人の満州開拓状況	1	昭 14・8	B6	6
334.6.62 316.8・222.1	15	松尾小三郎	間島をどう見るか	1	昭 6・10	A5	26
"	"	長野 朗	満州問題の鍵、間島	1	昭 6・8	B6	211
334.6・312	27	松村松盛	在満朝鮮同胞(世界の鼓動P1)	1	大 15・8	"	313
334.6.62 316.8・222.1	15	崔 棟	朝鮮問題を通じて見たる満蒙問題 付、其提案	1	昭 7・9	B5	117
334.6 316.8・222.1	15	満州協和会奉天民衆 分会、朝鮮人役員一同	奉天二万の朝鮮人同胞に演ず(3)	1	昭 12・8	B6	88
"	"	在満日本帝国大使館 編	在満朝鮮人概況・昭9年版	1	昭 10	A5	806
334.6	72	"	" 昭10年版	1	昭 11	"	417
334.6.62 292.5	15 72	朝鮮及朝鮮人杜 編	最近間島事情(露支移住朝鮮 人発達史)	2	昭 2・10	A5	476
334.6	72	移民問題調査会 編	邦人海外発展史 上	1	昭 13・1	A5	538
"	"	"	" 下	1	"	"	554
334.6.62	27	外務省通商局 編	在支那本邦人進勢概観 (満州・北支・中支・南支)	1	大 14・11	B5	428

337 貨 幣 ・ 通 貨 ・ 物 価

337.21	44	東京高等商業学校	韓国ニ於ケル貨幣と金融 上下合綴	1	明 42・11	A5	388
"	"	株式会社第一銀行	韓国貨幣整理報告書	1	"	"	323
(内 容) 1. 開国以来の幣制 2. 貨幣整理着手前の状況・葉錢・白銅貨流通地方分布図 3. 貨幣整理計画の要領 4. 旧白銅貨整理、韓国白銅貨分析成績表、旧白銅貨 交換月額並に成績表							
337.21・342	44	朝鮮総督府 編	貨幣制度 (李朝時代の財政 第六章)				
337	15	高久敏男	朝鮮の貨幣	1	昭 32・10	原稿100枚	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	冊	頁
322,21	47	帝國地方行政学会 朝鮮本部 編	現行・朝鮮法規類纂 第9卷(通信)	1	昭9~19	A5	綴込式
"	"	"	" 第10卷(鉄道・専売・年別索引) / "	"	"	"	"
"	"	朝鮮總督府財務局	朝鮮稅務法規提要(昭14・5・20現) /	昭14・7	"	800	
"	"	" 内務局	朝鮮市街地計画令並關係法規集	-	昭9・6	"	94
322 一般法規集。朝鮮關係							
322	47	中央食糧管団 編	主要食糧關係 法規集	1	昭18・11 19・11	A5	-
322・611,28	"	朝鮮總督府 農林局 農政課 編	農地關係統制法令便覽 付, 農地基準價格表	1	昭16・11	A5	229
323-325 (行政法・行政諸法等)。(民法・私法)。(商法・特殊会社法)							
323,98 345,43	44	朝鮮總督府 臨時土地調査局 編	朝鮮土地調査事業報告書	1	大7・11	B5	208 36 他
324,87	46	草田 篤	朝鮮戶籍令義解	1	昭12・6	A5	28
325,29	47	大蔵省主計局 編	特殊会社關係・法規集(昭17年) /	昭17・4	A5	796	
325,38	15	喜安健次郎	改訂・運送營業	1	昭8・11	A5	494
326-329 (刑法)。(司法制度)。(諸法)。(國際法)							
326,27	44	曾田嘉伊智	朝鮮未成年者禁酒禁煙法 実施運動參考資料	1	昭?		
327,1・001	12	朝鮮總督府 編	司 法 (朝鮮總攢 P 577)		昭8・3		

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
329,9	46	日本商工会議所	日支間並ニ支那ニ關スル日本及ビ 他國間ノ條約	1	大12	A5	293
329,124	11	有賀長雄	保護國論	1	明39・9	"	458
329,9	44	外務省 編	再訂・條約彙纂	1	明41・6	B5	947
"	"	韓國統監府	韓國條約彙纂	1	明41・10	"	977
329,8 316,821	74	法務省入國管理局	出入國管理とその実態	2	昭34・5	A5	111
327	K/	国分三亥 外9名	司法協會雜誌・19卷10号20卷3号 / (朝鮮司法界の往事を語る座談会)	1		"	108
330 經 濟							
330,4	12	鈴木正文	朝鮮經濟の現段階	1	昭13・8	A5	524
"	"	高橋亀吉	現代朝鮮經濟論	1	昭10・4	B6	593
"	"	鈴木武雄	朝鮮經濟の新構想	1	昭17・6	B6	324
"	71	朝鮮總督 宇垣一成	伸び行く朝鮮(宇垣總督講演集)	1	昭9-10	B4	148
"	12	服部 暢	朝鮮及朝鮮人の經濟生活	1	昭6・2	"	246
330,4・334,7	"	鈴木武雄	朝鮮産業經濟の發展と在鮮日本 系事業	1	昭23?	B5	30
"	71	中川亀三	朝鮮殖産街史	1	昭13・10	B6	161
330,5	72	全國經濟調査機關 連合会朝鮮支部 編	朝鮮經濟年報 昭和14年版	2	昭14・3	A5	575
"	"	"	" " 15 "	2	昭15・10	"	673
"	72	"	" " 16・7 "	1	昭17	"	324
"	17	朝鮮銀行調査課 編	鮮滿支財界彙報 (昭和17・6~19・10, 就中17年7・8次) 27				46~69
"	16	京城商工会議所	京城商工会議所 經濟月報 320号~335号 昭17・9~昭18・12	15		A5	各60
330,5	K/	京城經濟研究会	經濟評論 5号(韓文)	1	4283・5	B5	63
330	"	善生永助 述	朝鮮經濟と警察	1	昭6・4	B6	210



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
318.27	77	殖政五年朝鮮物産共進会, 全北協賛会	全羅北道案内・全北管内図	1	大?	折込	59
"	"	金堤郡	編 全北・金堤郡々勢一班管内図	1	大7	"	地図共
"	"	"	"	1	大13	"	"
"	"	"	金堤郡管内図	1	大13	"	"
318.27,	16	全羅南道	道勢一班	1	昭和2年	"	53
318.27	72	"	"	1	昭和10年	"	10
"	"	"	"	1	昭和12年	"	59
318.28	16	慶尚北道	慶尚北道々勢一班	1	昭和2年	新書判	157
"	"	"	道勢一班	1	昭和11年	"	250
"	"	慶尚南道	"	1	昭和2年	"	49
"	"	"	慶尚南道々勢一班	1	昭和11年	"	301
"	"	"	"	1	昭和13年	"	344
319 外交・国際問題							
319.1.02 289.15	74	陸奥宗光	定々録	1	明治28年	美・譜	314
319.1	72	外務省	編 わが外交の近況	1	昭和32年	B6	217
319.2	"	外務省情報文化局	日韓会談のいきさつ 韓国の態度が決定する	1	昭和28年	"	30
319.2	73	Shukow, J.M.	Die Internationalen Beziehungen Im Fernen Osten (1870~1945)	1	1955 (昭和30)	B7	447
322 法制史・外国法							
322.21 02.221.05	44	朝鮮総督府中樞院編	李朝法典考	1	昭和11年	A5	422
"	"	"	経国大典	1	昭和9年	"	600
"	"	"	大典統録	1	昭和10年	"	288

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
322.21 02.221.05	44	朝鮮総督府中樞院編	統大典	1	昭和11年	A5	422
"	"	姜敬錫	典故大方全	1	大14年	"	1~4
322.21	42	朝鮮史編修会	編 事大文軌 上 (朝鮮史料叢刊第7)	8	昭和10年	和綴	
(内容) 解説目録・巻3・8・12・17・19・20・22 以上8冊/巻入							
"	"	朝鮮史編修会	編 事大文軌 中 (朝鮮史料叢刊第7)	8	昭和10年	"	
(内容) 巻23・24・28・30・32・33・35・36 以上8冊/巻入							
"	"	"	下 ( " )	8	"	"	
(内容) 巻37・42・43・45・46・47・48・51 以上8冊/巻入							
322.21・001	12	花村美樹	朝鮮法制史 (朝鮮史講座・分類史)				
322.21 韓 国 法 令							
322.21	74	法務省入国管理局編	入管シリーズ別冊3 出入国管理等に関する韓国の法令 付, 韓国身分法	2	昭和34年	A5	147
"	"	沈尚斐	編 労働関係法規集	1	昭和30年	A6	439
322.21 朝鮮総督府・法規類纂							
322.21	47	帝國地方行政学会 朝鮮本部	編 現行・朝鮮法規類纂				
"	"	"	第1巻 (総則・外事)	1	昭和9~19	A5	綴入式
"	"	"	第2巻 (内務)	1	"	"	"
"	"	"	第3巻 (財務)	1	"	"	"
"	"	"	第4巻 (会計)	1	"	"	"
"	"	"	第5巻 (殖産・農林)	1	"	"	"
"	"	"	第6巻 (法務)	1	"	"	"
"	"	"	第7巻 (学事・宗教・社会)?	"	"	"	"
"	"	"	第8巻 (警察・衛生・軍醫)	1	"	"	"

317 行政

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
317.1	46	草田 篤	朝鮮行政法 各論 下巻	1	昭10・3	A5	412
317.7	//	"	朝鮮警察法論	1	昭7・5	"	354
314.45 - 55 611.12	46	中央情報社 編	第73議会拓務議事録	1	昭13・5	B5	266
"	"	"	第74議会 "	1	昭14・7	B5	1113
317.7-06	//	朝鮮総督府	秘・第三部長・警察部長會議に於ける訓示並びに演述 (大正9・9~大正10・4)	1	大10	A5	42
317.7・398.1 001	12	"	警察及衛生 (朝鮮総督府 P 743)	1	昭16・3	A5	350
317.73	73	"	秘・朝鮮警察概要 昭和15年	1	昭10・3	B4	148
317.7	16	丸山 鶴吉	やさしい警察論	1	昭11・10	A5	131
317.73	16	朝鮮総督府警務局	秘・朝鮮出版警察概要 付・左傾団体系統一覽, 昭10	1	大11・4	-	-
317.7	75	"	大正11・4月調 過激派朝鮮宣伝予想経路図	1	昭12・8	B4	266
317.7・329.13	27	平安北道警察部 編	国境警備記念集 (昭12年特輯)	1	大9・11	A5	118
317.73-02	//	加藤 房蔵	朝鮮騒擾の真相	1	昭7・2	美 膳	-
316.8	81	朝鮮総督府 穂積外事課長	秘・在満鮮人避難対策	1	昭2・5	青写真	1
317.731 368.8	75	京畿道・高等警察課	昭2・5月調・左傾団体系統一覽	1	昭8・12	B4	445
317.73	"	朝鮮総督府警務局	高等警察用語辞典	1	大13・7	A5	729
317.72	K	朝鮮総督府 警察官講習所 編	警察教科書	1	昭5・1	"	241
317.727	"	朝鮮総督府警務局	極秘・高等警察関係年表 (昭4.11)	1	昭6・4	B4	210
317.7	"	善生 永助	朝鮮経済と警察	1			
318 地方自治							
318・001	12	朝鮮総督府 編	地方制度 (朝鮮総督府 P.11~15)				
			(内 容)				
		朝鮮総督府 斎藤 実	地方制度改正に就て				
		政務総監 児玉秀雄	地方自治制の第一歩				
		内務局長 今村武志	朝鮮地方制度の改正に就て				

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
		地方課長 富永文一	回顧十年・地方自治制の準備				
		文書課長 萩原彦三	地方制度改正に関する内地新聞の論調				
		事務官 井坂圭一郎	地方選挙の取締りについて				
		修史官 中村栄孝	朝鮮時代地方制度の歴史的考察				
		修史官 今村 綱	朝鮮の地方自治制度に就て				
		嘱 託 松田 甲	李明時代の郷約				
318.04	//	草田 篤	朝鮮地方自治制要義	1	昭6・1	A5	100
318.04	//	朝鮮総督府内務局編	朝鮮地方行政概要	1	昭6・7	B4	47
318.8・320 (322.21-47)	//	朝鮮総督府	朝鮮市街地計画令並に關係法規集	1	昭9・6		
318 地方自治・道勢一班類							
318.21	16	咸鏡北道 編	道勢一班 昭和2年	1	昭2・10折	タタ	37
"	16	"	" " " 10年	2	昭10・12	A4	250
"	71	"	" " " 12年	1	昭13・6	A5	271
318.21	16	咸鏡南道	咸鏡南道々勢一班 " 2年	1	昭2・10折	タタ	30
318.21	72	"	" " " 11年	1	昭11・12	B4	124
318.22	16	平安北道	道勢一班 " 2年	1	昭2・10折	タタ	33
318.22	72	"	平安北道々勢一班 " 11年	1	昭11・11新	タタ	61
318.22	16	平安南道	道勢一班 " 2年	1	昭2・10折	タタ	63
318.23	16	黄海道	道勢一班 " 2年	1	昭2・10	"	41
318.24	16	京畿道	京畿道道勢一班 " 2年	1	昭2・11模	型	13
"	72	"	" " " 10年	1	昭10・10	B4	30
318.25	72	江原道	道勢一班 " 10年	1	昭10・10新	書	156
"	"	"	江原道々勢一班 " 13年	1	昭13・11	"	104
318.26	16	忠清南道	道勢一班 " 2年	1	昭2・10折	タタ	24
318.27	16	全羅北道	全羅北道々勢一班 " 2年	1	昭2・10	"	26

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
316,8-334,6	15	篠田 治策	間島問題の回顧		昭 5・8	A5	44
~~~~~							
316,821		在 日 朝 鮮 人 問 題					
316,821	74	朝鮮文化部 編	資料第1輯 全国青年同盟大会々議録 (朝鮮文)	1	昭 21・1	B6	33
"	"	在日本朝鮮人連盟中央総本部 編	"第2輯 本国特派員報告 本国情勢報告 (朝鮮文)	1	昭 21・2?	"	22
"	"	"	"第3輯 朝鮮青年部全国大会々議録 (朝鮮文)	1	昭 21・3	"	85
"	"	朝鮮文化部 "	"第5輯 朝鮮第2回全国文化部長會議録 (")	1	昭 21・7	"	109
" (361,4)	72	公安調査庁調査第二部	秘, 在日本朝鮮人の概況 (前篇)	1	昭 28・8	"	207
~~~~~							
317・(221)	23	麻生 武 亀	中央及地方制度沿革史 (朝鮮史講座分編史)				
317・(001)	27	朝鮮総督府 編	施政二十五年史		昭 10・10	B5	986
(001)	74		(内容・人事・財務局長(度支部長官)・地方財政・歳計果年表・特別会計決算表・財政・金融各函表)				
317	74	朝鮮総督府 編	施政二十五周年関係記録	1	昭 10・12	A5	102
" (001)	74	"	施政三十年史 (朝鮮総督府)	1	昭 15・10	B5	932
317	16	"	朝鮮における新施政	1	大 10・10	A5	70
"	11	"	朝鮮に於ける施設の一斑 (大 14年)	1	大 14・10	B6	100
"	"	"	" (昭和2年)	1	昭 2・3	B6	128
"	"	"	" (昭和6年)	1	昭 6・10	"	104
317,04	11	" 中樞院 "	心田開発に関する講演集	1	昭 11・2	A5	347
"	27	朝鮮総督府 編	朝鮮施政に関する報告・訓示・並びに演述集 (昭2年4月~12年3月)	1	昭 12?	"	931
"	"	"	報告・訓示・演述集 第2輯	1	昭 18・11	"	337
"	"	京城・時局研究会編	時研17輯 支那事変に関する政府声明並びに総督訓示集 (昭12・7~14・1)	1	昭 14・4	"	63

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
317,06 (001,036)	27	朝鮮総督府 編	朝鮮総督府時局対策調査會, 総会名簿・議席	1	昭 13・9		
317,06	"	"	" 報告事項	1	昭 13・9	A5	40
"	"	"	秘, " 會議録	1	"	"	510
"	"	"	" 諮問案参考書	合計 17冊			
( 内 容 )							
678,1・317,06	27		1. 秘海外貿易の振興に関する件	1	昭 13・9	A5	34
334,6 (222)	27		2. 在支朝鮮人の保護指導に関する件	1	"	"	14
317,06	"		3. 朝鮮満州北支間の社会的連繫促進に関する件	1	"	"	31
334,62・317,06	"		4. 北支・中支の経済開発と朝鮮の経済開発の連繫に関する件	1	"	"	69
333,8・317,06	"		5. 地下資源の積極的開発に関する件	1	"	"	29
560・317,06	27		6. 秘, 軍需工業の拡充に関する件	1	"	"	94
509,395 317,06	"		7. 畜産の積極的奨励に関する件	1	"	"	44
640・317,06	"		8. 秘, 農山漁村振興運動, 拡充強化に関する件	1	"	"	36
611,12・317,06	27		9. 極秘, 北鮮の特殊性に応ずる方策に関する件	1	"	"	59
317,73・221,1,2 317,06	27		10. 秘, 陸上交通機関の整備に関する件	1	"	"	28
681,2・317,06	27		11. 秘, 海運の整備に関する件	1	"	"	25
683,1・"	"		12. 航空施設の整備に関する件	1	"	"	48
687,1・"	"		13. 社会施設の拡充に関する件	1	"	"	100
364・"	"		14. 労務調整に関する件	1	"	"	189
366,1・"	"		15. 秘, 失業防止並びに救済に関する件	1	"	"	82
364・"	"		16. 体位の向上に関する件	1	"	"	31
498,1・"	"		17. 米の増産に関する件	1	"	"	31
498,1・" 611,33	"						
317,21	44	朝鮮総督府 編	朝鮮土地調査事業報告 (山県文庫)	1	大 7・11	B5	708
"	K3	"	朝鮮土地調査概要 (川崎文庫)	1	大 7・11	A5	20
334,6	81	在關東・末松警視	秘, 朝鮮人の間島及同接壤地方移住に就て	1	昭 6・10	美譜	

分類記号	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
292	—	全北名勝絵葉書	1	大 ?		10
292.02	同 発起人 編	碧蹄館戦蹟記念碑建設趣意書 付、寄付勸誘状	1	昭 6・9	A5	8
292.038	朝鮮総督府 編	北滿に於ける鮮満連絡略図	1			
"	"	万頃江改修計画図	1			
"	"	朝鮮地図 (南鮮中部) 20万	1			
"	"	朝鮮重要鉱山分布図 150万	1			
"	"	京畿道図 20万	1			
"	"	全北地図 25万	1			
"	"	平北地図 50万	1	大 9		
"	"	平壤全図 12,000	1	青写真・主要位置図		
"	"	平南・郡面行政区劃図 50万	1			
"	"	北鮮開拓・茂山・惠山鎮位置図 20万	1	青写真		
"	農林局	主要営林位置図	1			
"	京 畿 道	京畿道管内図	1			
"	—	海州付近図 50,000	1			
"	—	忠南・全北	1			
"	—	順安付近 (平南)	1			
"	忠清北道	忠北管内図 50万	1			
"	毎日新聞社	朝鮮交通地図 南部 65万	1	大 12		
"	平安南道	平南産産分布図	1			
"	"	平南産産地図	1			
"	陸地測量部	延安付近 5万	1	大 8		
"	"	平壤全図 12,000	1	青写真・主要位置図		

~~~~~  
 310 政 治・政治史・政治事情  
 ~~~~~

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
310.4	71	井上角五郎 編	福沢先生の朝鮮御経営と現代朝鮮の文化とについて	1	昭 9・2	A5	53
312.21	72	鈴木武雄	朝鮮統治の性格と実観・反省と批判	3	昭 23 ?		
316.3・(221)	23	小田省吾	李朝政争略史 (朝鮮史講座分類史)				
316.8	75	朝鮮総督府警務局 編	大正 8・8~大正 9・9 時局関係犯人検挙一覽圖	1	大 10		
"	"	" " 編	大正 8・8~大正 10・1 陰謀団検挙一覽圖	1	大 10		
"	"	" " "	国外在住赤化鮮人団体一覽圖	1	大 11・4調		
"	"	" " "	不逞鮮人出身地分布圖	1	大 11・2 "		
"	"	" " "	大正 9 年中・爆弾発見・投擲一覽表	1	大 10		
"・001	16	"	朝鮮に関する外国人の評論	1	大 10・8	A5	38
" "	"	"	外人の觀たる最近の朝鮮		昭 7・3	"	277
" "	72	緑旗日本文化研究所	朝鮮思想界概観・今日の朝鮮問題講座	昭 14・11	B6	73	
" "	11	坪江仙二	朝鮮民族独立運動秘史		昭 34・3	A5	488
" "	71	在上海日本総領事館 警察部 編	秘・朝鮮民族運動年鑑 1946		昭 21・4	B6	324
"・221.06	75	故阪谷子爵 記念事業会 編	朝鮮問題雜稿 卷一			(独立運動參考資料)	
" "	"	" " "	" 卷二			"	
" "	"	" " "	" 卷三			"	
" "	"	" " "	" 卷四			"	
316.8	28	板倉卓造	民族的自尊心を尊重せよ (国際知識大 14・3)	1	大 14・3	A5	115
"・334.6	15	朝鮮総督府内務局 社会課 編	満州及シベリア地方に於ける 朝鮮人事情		昭 2・11	"	322
" "	"	崔 棟	朝鮮問題を通じて見たる満蒙 問題 付、其提案		昭 7・9	B5	177
" "	"	満州協和会奉天民 会分会	奉天二万の朝鮮人同胞に致す		昭 12・8	B6	88
" "	"	長野 朗	満州問題の鍵 間島		昭 6・8	B6	211
" "	72	朝鮮総督府警務局 編	高等警察資料・間島問題の経 過と移住鮮人		昭 6・8	A5	195
" "	15	松尾小三郎	間島問題をどう見るか		昭 6・10	A5	26
" "	"	朝鮮総督府 編	統監府時代における間島韓民保 護に関する施設		昭 5・8	A5	162



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
290.38	71	朝鮮総督府 編	朝鮮各道別地図 (A) 朝鮮全図 各道全図	13	14 昭 ?		
"	"	"	" (B) "	13	15 昭 8		
"	24	—	朝鮮風俗名蹟写真帖	1	明 34 ?		52枚
"	75	—	朝鮮仁川写真帖 乾	1	明 40 ? 全紙半載		5枚
"	"	—	" 坤	1	"	"	"
"・611.92	74	吉林省農務局農政課 小作係 編	朝鮮農村事情 (写真帖) 秘		昭 6・6	B5	47
"・650	76	朝鮮山林会 編	半島の翠緑 (写真帖)		大 15・9	B5	44

292.09 旅行案内類

291.03	43	旅行研究会 編	全日本旅行辞典 付・満洲	1	昭 7・8	B6	444
292.09	43	亀岡栄吉	四季の朝鮮	1	大 15・10	新書版	240
"	"	朝鮮之観光社 編	朝鮮之観光	1	昭 14・5	"	513
292.09	43	朝鮮総督府鉄道局 編	朝鮮視察のしおり	3	昭 18・3	写真	1
"	43	"	朝鮮旅行案内記	1	昭 4・9	新書	275他
"	71	"	朝鮮旅行案内 昭和3年版	1	昭 3 折タミ式地図		
"	"	"	" " 10年版	1	昭 10・10	"	
"	"	"	" 大止15年版	1	大 15・3	"	
"	"	満鉄・鮮満案内所 編	鮮満旅行の注意	1	昭 9	"	
"	"	"	鮮満旅程と費用計算	1	大 14・3	"	
"	"	満鉄・北鮮鉄道管理局 編	北鮮線案内 (昭和10年版)	1	昭 10・3	"	
"	"	ジャパニストビュー 編	北鮮三港・羅津・雄基・清津 案内	1	昭 10・12	"	
"	"	日本名所図絵社 編	朝鮮案内	1	昭 11・7	"	
"	"	満洲旅行社	満鮮旅行之楽	1	大 10・6	"	
"	"	朝鮮山林会	大日本山林会第34回大回 視察旅行地案内記	1	大 15・9	新書	52
"	"	三陟鉄道株式会社	三陟鉄道沿線案内	1	昭 15 折タミ式地図		
"	"	全北日日新聞社 編	全羅北道案内 付各都勢一班	1	大 3・11	新書	287
"	"	清津観光協会	国際港 清津	1	昭 12・3 封緘式地図		

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
292.09	71	矢野干城	新版 大京城案内	1	昭 11・4	B6	349
"	48	上野盛一	慶南 旅行の友	1	昭 10・6	"	248 地 16

210—292

渡辺忍登料

211.2	82	平安南道 編	平安南道々勢一班	1	大 13		
211.7	"	全羅北道	道政概要 (全北)	1	大 ?		
222	"	—	間島地図 (警備関係)	1	90万分の1		
222.5・317	"	外務省亜細亞局 第二課	満州事変善後措置中、朝鮮人施設要綱	1	昭 7・2		
"	"	"	在満東、末松警視 報告	1	昭 6・10	美・書	4
"	"	"	堂本事務官	1	昭 8・1	"	"
"	"	"	対満・鮮人移民の件	1	昭 8	和紙	
"	"	"	朝鮮総督府外事課長 秘、在満、鮮人避難対策	1	昭 7・2	"	
"	"	朝鮮総督府 編	鮮満商事株式会社 計画要項	1	昭 7	"	
"	"	"	満蒙新国家に対する要望事項	1	昭 7	"	
290	"	"	朝鮮に於ける主要都邑の現状	1	昭 ?		
290.19	"	京城道山林課 編	京城府内外ノ風致維持ニ対スル 山林施設ノ大綱	1	昭 ?		4
221.3・182.3	"	黄海道・海州府	海州古蹟等	1	昭 ?	美・書	18
290.9・221.7	"	全羅北道	巡視地方案内及同図	1	昭 3・7	半紙版	50
290.2	"	"	金堤郡碧骨堤事蹟	1	大 ?	美・書	
"	"	"	総督巡視順路案内	1	大 15・4	B6 版	
290.38	"	"	全北道路網図	2	—	青写真	
290.2	"	忠清南道	忠清南道史蹟年表	1	大 7・6	A5	72
"・221.7	"	全羅南道	全羅南道遊覧のしおり	1	大 15・10	A6	30
290.18	"	京城帝国大学	朝鮮古地図展覧 目録	1	昭 7・10	B6	37
292	"	光州面	光州の今昔 (事務所新築記念)	1	大 14・12	B6	48

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
292,1	28	吉田英三郎編	朝鮮誌全	1	明44	A5	904
"	43	民衆時論社	朝鮮風土記	1	昭10・4	B6	523
292,104	72	京城府岡田實	京城府史 第一卷	2	昭9・3	A5	791
"	"	"	" 第二卷	1	昭11・3	"	1121
"	"	"	京城史話	1	昭11・12	"	115
"	"	"	続・	1	昭12・8	"	114
292,1002	43	小田省吾	徳寿宮史	1	昭13・5	"	78
292,104	43	山崎駿二編	開城郡面誌 第1輯	1	大15・8	"	70
"	"	"	" 第2輯	1	大15・8	"	63
292,105	43	川口卯橘	" 第3輯	1	大15・12	"	64
"	"	"	" 第4輯	1	昭2・1	"	54
"	"	"	" 第5輯	1	昭2・2	"	54
292,102	43	岡本曉翠	京城と金剛山	1	昭7・5	B6	321
292,104	43	萩森茂	京城と仁川	1	昭6・4	A5	389
292,15	"	池田林儀	江原道・詩と史の旅	1	昭13・5	B6	123
292,6	71	扶余古蹟保存会編	扶余名勝古蹟案内	1	大14	折タミ	
"	43	"	百済の事蹟と扶余の名勝旧蹟	1	大15・12	B6	124
290,2	43	椎木四郎	慶州写真帖	1	昭15・10	B6	47枚
292,2	71	慶州古蹟保存会	慶州古蹟案内	1	昭12	折タミ	
292,388	43	大坂六村	慶州の伝説	1	昭5・8	B6	97
292,180	"	"	趣味の慶州	1	昭6・3	"	251
292,18	43	陸軍歩兵大尉林吉彦	泗川郡船津史蹟	1	昭?	A5	34地6
"	"	羽田増造	金海郡の史蹟	1	昭?	B6	22地8
292,18	43	"	釜山城址	1	昭8・10	A6	14
292,17	43	鶴田吾郎	済州島の自然と風物	1	昭10・5	B6	24
292	71	群山新報社編	富之群山	1	明40・11	B6	336地他
292,09・001	43	植田国境子	国境二百里	1			
292	71	雄基商工会編	大雄基の姿	1	昭8・12	B6	77
292,09・001	43	大浦實道	朝鮮感記・死線に立つ				

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
292,101	71	露国大蔵省編	韓 国 誌 上		明?	A5	315
"	"	"	" 下	1	明?	"	317
292,1	71	帝国鉄道協会	視鮮漫録	1	昭2・8	B6	343
292,101	71	香月源太郎	韓国案内 全	1	明35・9	"	477地22他
292,09	"	近藤時司	史話・伝説, 朝鮮名勝紀行	1	昭4・5	新書版	473他
"	"	亀岡栄吉	咸鏡線	1	昭2・3	"	280他
292,21	K1	朝鮮博覧会京城協賛会	京城案内	1	昭4・9	新書版	132
292,038 朝鮮地図・絵図・写真帖							
290,38	29	亀井忠一	戦時必携・最新満韓地図 (訂正増補第4版)	1	明37・7	1	250万
"	20	大阪・十字屋編	郡面界里程入・朝鮮大地図	1	大10・1	大地図	
"	"	"	朝鮮大地図	1	"大?	"	
"	75	参謀本部	近畿一南朝鮮	1	枚昭?	100万	
"	"	"	北朝鮮一南満・北支	1	"昭?	"	
"	"	朝鮮鉱業会	朝鮮鐵行鉱山分布図 (昭10年)	1	"昭12・3	"	
"	"	斎藤己代治	朝鮮全図	1	"昭10・1	"	
"	71	"	朝鮮鉄道略図 大東亜共栄圏交通略図	1	昭?		
"	"	日本・陸地測量部	五万分の一地図 金堤・臨安・咸悅・青陽・益山・全州 大正2・4 扶余・江景・連山・公州・群山・全州	2			
"	"	"	二万五千分の一 群山・万頃・木川浦・新場里・竜安・ 大正6~8 五谷里・臨安・連山・舒川・羅浦・ 裡里・咸悅	1			
"	"	清津府編	清津府管内図 15,000 満州国連絡図	1	昭?	320万	
"	"	朝鮮総督府	清津港修築計画平面図	1	昭		1袋入
"	"	"	清津港平面図	1	大13	折タミ式	
"	"	"	全羅北道 50万分の一	1	大9・10	袋入	
"	"	全北・金堤郡	金堤郡管内図 12万分の一	1	大?	"	
"	"	朝鮮総督府	北鮮開拓事業実施区域図 百万分の一 付, 北鮮開拓事業要覧	1	昭8・4		

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
289.1	16	井上雅二	半島を訪ねて・支人の偉烈を想ふ	1	昭13・6	B6	42
"	72	丸山鶴吉	七十年とところどころ	2	昭30・9	"	407
"	74	安藤照	お鯉物語	1	昭2・8	"	540
"	"	"	続 "	1	昭3・1	"	462
289	74	武者隼三	柏蔭余滴	1	昭34・6	A6	69
"	42	井上収	宇垣一成論	1	昭10・2	B6	444
"	"	御手洗辰雄	南次郎	1	昭32・12	A5	578
289.1 611.33	71	井上則之	朝鮮米と共に三十年 湯林辰二郎半生の記録	—			
289.2	11	多山・朴榮喆	五十年の回顧	2	昭4・10	B6	744
"	"	韓翼教 編	韓相竜君を語る	1	昭16・12	A5	933
"・080	43	細井肇	洪吉童伝				
289.21	11	"	国太公の對比(朝鮮宮廷秘話)	1	昭4・9	B6	310
"	"	菊池謙讓	大院君伝 付・王妃の一生	1	明43・10	A5	345
289.2	24	馬場文太郎	蘭桂余香帖	1	昭18・1	B5	和57
289.2	44 42	金明秀 編	一堂紀事 全	1	昭2・12	A5	905
289.21・221	23	相原昌三	文成公安裕の影偵について	—			
"	11	井上角五郎	金玉均君について	1	昭12・5	B6	33
"	71	古均記念会 林毅陸 編	金玉均伝	1	昭19・5	A5	508
289.2	16	朝鮮商業銀行	多山・朴先生を憶ふ	1	昭14・10	"	71
289.21	42	森モト	露くさ(森悟一遺稿集)	1	昭11・1	B6	175
290 地 誌・紀 行							
290.18	43	朝鮮総督府 編	海東諸国記 (景印本) (朝鮮史料叢刊 第2)	1	昭8・11	和綴	1冊
"	44	" 中枢院	新增・東国輿地勝覧 索引	1	昭12・3	A5	624
"	"	朝鮮史学会 再刊	" " 第1	1	昭5・1	"	巻1~13

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
290.18	44	朝鮮史学会 再刊	新增 東国輿地勝覧 第2	1	昭5・1	A5	巻14 32
"	"	"	" " 第3	1	"	"	33~43
"	"	"	" " 第4	1	"	"	44~55
290.34	45	加藤全吾 編	朝鮮地名・姓便覧 付 中国人・姓 音読表	1	昭27・9	"	169
290.38	44	京城帝大文学部 編	大東輿地図索引・奎章閣叢書 第二別冊	1	昭11・3	"	147
"	"	"	大東輿図 " 第二	1	"	"	地21枚
290.9	71	菊池謙讓	朝鮮諸国起	1	大14・4	B6	372
290.21	44	新光社 編	日本地理風俗大系 第17巻朝鮮篇下	1	昭5・12	B5	404
290.9	44	Drake, H.B.	Korea of the Japanese	1	1930	A5	225
290.18	43	中村栄孝	日本往還日記, 青丘学叢第11号 抜刷	1	昭?	"	28
290.9	71	青山好恵(四州情客)	仁川事情	1	明25・10	"	60
292 地 誌・史 蹟							
292.1002 001	12	朝鮮総督府 編	古蹟, 朝鮮総攬 PHOTO		昭8・3		
292.1	71	"	朝鮮に於ける主要都邑の現状	1	昭4・10	B5	—
"	"	"	景福宮址案内, 付 朝鮮総督府庁令 明	1	昭13・12	折タミ式	
"	"	"	"	1	昭10	"	
292.21	"	"	水原の古蹟	1	昭5・9	A6	7
"	"	京城府	大京城	1	昭16・3	A5	32
"	"	平北教育会	平安北道郷土誌	1	昭9・2	B6	184
292.2	23	平安北道	平安北道史 (稻葉岩吉 編)	1	昭13・11	A5	292 地24帖
292.7	71	全北学務課	全北の名勝 並に古蹟	1	昭4・10	"	81
292.18	43	慶尚南道	慶南の城址	1	昭9・9	B6	59 他
292	43	全南・済州島庁	未開の宝庫・済州島	1	大13・7	A5	101 他

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
282	24	京城憲兵分隊 編	一進會 略史	1	明43・6	美	53
"	"	韓国駐劄憲兵隊司令部	大韓協會 略史	1	明43・7	"	28
"	44	吉田英三郎	朝鮮書面家列伝	1	大44・7	" B6	214
"	"	朝鮮総督府中樞院編	甲申(明治17年)以後の人物	1	大8	"	11
282 (089/43)	43	細井 壘 編	李朝の文臣				
282	72	黒 竜 会 "	東亞先覚志士伝(下巻) 支那関係秘録 対鮮支関係先覚列伝	1	昭11・10	A5	804
"	41	朴 栄 詰	時中会趣旨・綱領 付 会則	1	昭9・11	"	13
280 伝記資料・(系譜・家伝・紋章)							
288・389,21	45	朝鮮総督府 編	朝鮮の姓	1	昭9		
283,2・221	23	稲葉岩吉	朝鮮に於ける高昌の契氏世系				
288,46・221	23	"	高句麗の泉男生墓誌に就いて				
288,46	43	山崎駿二	高麗王陵誌	1	昭2・10	A5	53
288,49	72	中村栄孝	所謂・朝鮮王族金光の送還に就て	1	昭8・7	"	17
"・702	16	李王職 編	李王家美術館	1	昭13・5	B6	18
289 伝記・伝記資料(個人)							
289,05-319,0	74	陸奥宗光 編	蹇々録(日清戦役実誌)	明28		謄写稿本	
289,06	11	内田良平	日韓合邦記念塔建設ニ就テ	1	昭9・11	A5	32
"	"	小松 緑	朝鮮併合の裏面(附録・桑植一家説)	大9・9		A5	308
289,1	11	高橋章之助	宗家と朝鮮 全	1	昭9・10	A5	141

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
289,1	42	原田豊次郎	伊藤公と韓国	1	明42・12	A5	131
"	"	春敏公追頌会 刊 代表金子堅太郎 編纂主幹小松緑	伊藤博文伝 上	1	昭15・10	A5	1030
"	"	"	" 中	1	"	"	1059
"	"	"	" 下	1	"	"	1015
"	"	"	伊藤博文公年譜	1	昭17・6	"	339
"	"	小松 緑 編	伊藤公全集 第三卷 (正伝・直話・逸話・随筆)	1	昭3・8	"	809
"	"	"	春敏公と含雪公	1	昭9・5	B6	415
"	44	黒田甲子郎	元帥寺内伯爵伝	1	大10・6	A5	1162
"	11	徳富猪一郎 編	素空山県公伝	2	昭4・9	A5	780
"	24	山県公爵伝記 編 編纂会	素空公墨蘭画存	1	昭4・9	写真帖	82
"	42	岡田純夫	渋沢翁は語る	1	昭7・10	A5	351
"	"	故目賀田男爵伝記 編纂会 編	男爵目賀田植太郎	1	昭13・6	"	1052
"	71	目賀田男爵伝記 編纂会 編	目賀田男爵閣下に関する 三十年前の思い出	1	昭?	半紙謄	7
"	42	故宇佐美勝夫氏 記念会 編	宇佐美勝夫氏之追憶録	2	昭18・11	A5	333
"	41	三峰会 "	三峰・下岡忠治伝	1	昭5・11	"	662
"	42	同書・編纂会 "	有賀さんの事蹟と思い出	2	昭21・5	"	480
"	16	無仏旧友会 "	故阿部充家翁 胸像建設報告書	2	厘11・6	"	23
"	16	中央朝鮮協会 "	無仏翁 しのび草	1	昭11・3	B6	58
"	41	阿部 薫	岡本桂次郎伝	2	昭16・10	A5	398
"	72	小野田セメント製 造株式会社 編	笠井真三	1	昭29・2	"	263
"	72	丸山 蘭吉	在鮮四年有余半	1	昭5・7	B6	407
"	44	富田 精一	富田儀作伝	2	昭11・8	B6	599
"	44	北川吉昭	山口太兵衛翁	1	昭9・10	"	217
289,1 001	73	中央朝鮮協会 "	馬場一氏・入江海平氏記念誌	1	昭13・5	"	69
289,1	44	田尻植経 "	牛島省三君追想録	1	昭16・12	A5	188
"	72	今井田清徳伝記 編纂会 編	今井田清徳	2	昭18・4	"	8x3
"	"	中央朝鮮協会 "	寺内前朝鮮総督 銅像建設記	1	昭10・9	B6	和46
"	"	"	故寺内総督 銅像建設会報告書	1	昭10・12	A5	83



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
第179号		自 監 会	昭1年度～3年度、経過状況報告書		昭3・3・5・4	B6	1,2,3冊
第180号		"	昭6年度～16年3月・ "		昭12・4・16・3	B4	10冊 (13・3月欠)

220 ア ジ ア 一 般

224,8	16	朝鮮総督府 編	秘,比律賓の現勢 総説	1	大10・4	A5	57
"	"	" 情報委員会"	秘,比律賓問題	1	大10・5	A5	57
"	"	" " "	秘,比律賓の教育及その将来,第9,1	1	大11・7	A5	23
225	16	朝鮮総督府 編	秘,印度統治に対する批判	1	大13・4	A5	40
229,3	16	外務省通商局 "	西伯利 事 情	1	明45・6	B5	375

230 ヨ ー ロ ツ パ 一 般

238,07	15	朝鮮総督府 情報委員会 編	赤 色 ロ シ ア	1	大 ?	A5	24
234,9	15	朝鮮総督府	秘,旧独領波 蘭統治概観(前編)	1	大13・12	A5	334
"	"	"	秘, " 第13輯 (後編)	1	大14・12	A5	302
		朝鮮総督府事務官 時永浦三	愛 蘭 問 題	1	大10・7	A5	197

280 伝 記 資 料・諸名簿の部

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
281,03	44	外務省アジア局 第二課 編	現代・中国・朝鮮人名鑑	1	昭28・3	A5	313
"	43	京城日報社 "	朝鮮人名録(昭和16年)	1	昭15・10	B6	表1 137
"	"	" "	" (昭和18年)	1	昭17・10	B6	168
"	44	京城中央電話局編	京城・永登浦 電話番号簿 (昭15・4・1現)	1	昭15・7・1	A5	370
"	"	" "	" 加除訂正書	1	昭16・1・11	A5	-
"	"	朝鮮人事興信所編	私製・京城職業別電話番号簿 (昭和16年6月6日現)	1	昭17・7	"	453
281,03	44	青邱俱樂部 編	青邱俱樂部會員名簿	2	昭22・?	A6	125
281,03	77	朝鮮電気協会 "	朝鮮電気協会々員名簿 (昭和17年10現在)	1	昭17・11	"	-
"	"	中央朝鮮協会 "	中央朝鮮協会々員名簿 (昭18・12・25現在)	1	昭18・12	"	57
"	"	" "	" 綴,大15・6～昭17・12各年度17			"	
"	"	中央情報社 菱 沼 右 一 編	拓殖・紳士会社録(昭11年版)	1	昭10・12	B6	373
"	44	京城同民会本部 "	創氏記念・名刺交換名簿 昭15年	2	昭15・11	"	108
"	44	華 族 会 館 "	華族名簿 昭9年5月20日調	1	昭9・6	A6	277
"	"	朝鮮総督府 編	朝鮮総督府及所屬官署 職員録	1			
"	77	全羅北道 "	全羅北道職員録	1	昭8・7	B6	248
"	44	朝鮮実業報国会"	朝鮮実業報国会・會員名簿 (昭19・10・1現在)	1	昭19・10	A6	124
"	"	鷄林クラブ "	鷄林クラブ會員名簿(昭1・3現)	1	昭31・3	"	27
"	43	拓友援護会 "	會員名簿 (拓友援護会)	1	昭23・1	B6	88
"	44	朝鮮電気協会 "	朝鮮電気協会々員名簿 (昭19・7現在)	1	昭19・8	A6	91

280 伝 記・伝 記 資 料 (団体その他)

282	44	朝鮮弘文社 編	朝鮮古今名賢伝	1	大12 -	A5	495
"	42	安 鍾 和	便 考 天(国朝人物志一)	1	隆熙3・3	和綴	280
"	"	"	" 人( " 二)	1	"	"	324

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
第125号		崔 麟	崔麟氏来状(英国上陸前の挨拶状)		昭 2・9・8	書状	1
第126号		蒼浪客(朝鮮通信)	崔 氏(人物批評)		昭 8・12・21	B5	4
第127号		印虎珍	弔鐘を撞く・朝鮮の天道教上中下		昭11・3・9	B5 附9	
第128号		関 爽 鉉	揮毫二枚受領の謝礼		昭13・12・2	書状	1
第129号		倉橋慈治郎	朝鮮陶器研究会の件(趣意書共)		昭 4・3・11	書状他	
第130号		金 建 中	財団法人東亜保民会設立案 (設立援助請求書)		昭 5・5・17	B5 2/P	他
221.06	75	阪谷子爵 記念事業会 編	朝鮮問題雑纂 卷四				
第131号		阪谷子爵 筆記	自 証 会 日記		大13・10・10 ~昭元・12・21	半紙	33
第132号		徳永為次・関 爽 鉉	自証会設立趣旨書		大13・5	A5	12
第133号		—	自証会設立趣旨書・会則		"	半紙	附7
第134号		—	第一年度事業予算役員経常費報告		大13・12・9	印	2
第135号		自 証 会	阪谷男爵宛 寄附金の礼状		大14・2・20	印	1
第136号		関 爽 鉉	自証会の状況報告		大14・3	印, 他	
第137号		"	事業報告及拡張案並に会合通知		大14・6・20	A5	8
第138号		自 証 会	事業第一年度大正13年11月会計 " 14年10月報告		大14・10・28	半紙	2
第139号		"	寄附行為草案(第一案)		大15・4・17	美附	8
第140号		"	自証会状況概略		大15・4・17	"	2
第141号		"	財団法人設立許可願・寄附行為案 (第二案)		大15・5・30	"	9
第142号		"	財団法人自証会許可書及定款 (寄附行為)	2	昭 2・3・4	A5	8
第143号		"	自証会 定款 付, 報告書	2	昭 2・4	A5	8
第144号			欠				
第145号		自 証 会	初年度役員選挙の件		昭 2・5	美, 附3	
第146号		"	6月12日於阪谷邸 常議員会 決議録		昭 2・6	" " 4	
第147号		"	自証会維持の口数(合計420)		昭 2・7・3	美, ペン1	
第148号		関 爽 鉉 外2名	自証会 暑中見舞状		昭 2・7	ハガキ1	
第149号		自 証 会	自証会経過状況報告書		昭 2・12・16	美, 附7	
第150号		"	スコラシップ加入申込者		昭 3・2・14	半, 筆1	
第151号		"	自証会維持会員氏名		昭 3・4・20	便箋	3

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁
第152号		在 London, 崔 麟	李克魯氏紹介の件		昭 3・11・7	書状	1
第153号		"	自証会年賀状		昭 4・1・1	葉書	1
第154号		自眉生 奨学部報 第3号記事	朝鮮と洪沢子爵		昭 4・3・1	A5	8
第155号		自 証 会	自証会スコラシップ人名		昭 4・5・20	書状	1
第156号		"	暑中見舞状		昭 4・7	葉書	1
第157号		崔 麟	朴錫良氏紹介の件		昭5年及4年	書状	1
第158号		小笠原省三	昭和の朝鮮 出刊計 「内地在住朝鮮人問題」画の件		昭 5・8・20	葉書	1
第159号		李 宗 白	李宗白氏就職挨拶状		昭 7・5・1	書状	1
第160号		自 証 会	昭和7年5月10日 評議員会議事録		昭 7・5・10	美, 附2	
第161号		金 東 洙	「朝鮮時事評論」創刊号		昭 7・11・30	タブロイド	2
第162号		自 証 会	常議員会及評議員会案内		昭 9・4・20	葉書	1
第163号		"	第九回定期評議員会議事録		昭 9・4・24	美, 附2	他
第164号		渡 辺 忍	北大出身曹台元氏就職に関する件		昭 9・7・11	書状	1
第165号		自 証 会	昭和10年5月8日 常議員会及評議員会案内		昭10・5・8	葉書他	2
第166号		小 林 (校 長)	大邱高等普通学校出身鮮人援助 に付感謝状		昭10・5・29	書状	1
第167号		自 証 会	光明学園概況, 付現在及将来の計画		昭10・4	書状及 A5, 1	
第168号		関 爽 鉉 外2名	年 賀 状		昭11・1・1	葉書	1
第169号		—	蔡恒錫氏就職に付挨拶		昭11・12・11	書	1
第170号		関 爽 鉉	南陽洪氏(関爽鉉の母)告別式案内		昭11・12・4	葉	1
第171号		崔 麟	聖徳記念壁画集寄贈に対する礼状		昭11・12・28	書	1
第172号		関 爽 鉉	共生薬業株式会社創設案内		昭12・2	葉書他	
第173号		蔡 恒 錫	殖産群山支店勤務挨拶		昭12・5・25	書	1
第174号		自 証 会	昭和14年4月9日 常議員会及評議員会案内		昭14・4・10	書	1
第175号		"	昭和15年4月12日		昭15・4・3	葉	1
第176号		"	昭和16年4月21日		昭16・4・18	葉・他	
第177号		"	自証会創立十年記念誌		昭10・4・30	B6 132	
第178号		"	自証会経過報告書	2	昭 3・10・24	B6 14	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
第73号		国民新聞 (記事)	替天教革正運動		大13・9		
第74号		時事新報 "	京城、赤旗をかざして大行列運動		大14・4・21		
第75号		国民新聞 "	総督府庁舎新築爆破の陰謀発覚		大15・2・7 (71-75各号美濃紙1枚に貼付)		
第76号		Japan Advertiser	李完用 薨去		大15・2・13		
第77号		大勢新聞 "	李王薨去 (大15・4・26午前6時) 国葬日を期し、不逞鮮人等の陰謀		大15・5・26 (74-77美濃紙1枚に貼付)		
第78号		国民新聞 "	朝鮮赤化大陰謀 発覚		-		
第79号		報知新聞 "	各思想団検挙		大15・7・23		
第80号		支那事情 "	広東群衆 朝鮮独立援助声明		大15・10 (78-80美濃紙1枚貼付)		
第81号		官報 "	法律83号王公族の権義に関する件・皇室令77号王公家軌範		大15・12・1		
第82号		国民新聞及朝日新聞	賊白屋東拓京城支店に爆弾を投げ		昭元年12月		
第83号		大勢新聞 "	大喪を機とし不逞計画・高麗共産党員検挙		昭2・2 (81-83美濃紙1枚貼付)		
第84号		報知新聞 "	高麗共産党事件 140余名検挙		昭2・4・2		
第85号		Japan Times "	フィリピン独立問題記事		昭2・4		
第86号		-	崔麟 洋行送別 阪谷邸		昭2・6・5		
第87号		-	総督更迭 斎藤一山梨		昭2・12		
第88号		東京朝日 "	鮮人暴発在鮮支那人を襲撃 在満鮮人圧迫に報復す		昭2・12・15		
第89号		報知新聞 "	大官暗殺・官衙爆発陰謀発覚		昭3・6・15		
第90号		東京朝日 "	間島暴動・領事館、東拓襲撃		昭5・6・1		
第91号		-	長豊炭坑暴動 (資料は労働問題) 日記に挿入		昭5・6・22		
第92号		(新聞記事)	咸南暴動		" (84-92美濃紙3枚に貼付)		
221.06	75	故阪谷子爵 記念事業会編	朝鮮問題雜纂卷三	1	/		
第93号		渋川雲岳	朝鮮人事相談所趣意書		大11・3	B6	4
第94号		-	高崎男爵の渋川氏紹介状		"	書状/通	
第95号		-	渋川氏の強震見舞		大11・4	"	
第96号		渋川雲岳	朝鮮人事相談所設立計画書及報告書		大11・8	半紙判7枚	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
第97号		阪谷 (自筆日記)	関東大震災の時に於ける鮮人犯罪の件		自大12・10・6 至大12・11・2	半紙1枚	
第98号		川上保昌	関東大震災に於ける鮮人救助の件		大12・9・20	私信1通	
第99号		S. Sheba	An Appeal To My Korean Friends		大12・10・24	便箋1枚	
第100号		目賀田男爵外二名 案内状	大震災の善後措置のための鮮人に 関する協議会 (第一回、第三回)		大12・9・19 及 9・29	美濃紙3	
第101号		同上・準備委員	朝鮮問題有志会組織の件 (会則案)		大12・10・6	美濃紙2	
第102号		"	細井肇君 報告会 案内状		大12・11・10	ハガキ1	
第103号		"	仮事務所移転通知		大12・11・26	書信1	
第104号		細井肇	朝鮮問題講演会に関する件、日程表等		大12・11・10	書信印3 美濃紙1	
第105号		同民会創立発起人	同民会創立及創立委員訪問に関する件		大13・1	印刷物2	
第106号		同民会創立委員長 北条時敬	同民会発会式案内 (創立趣意書・規約書)		大13・4	案内状1 印刷物1	
第107号		佐藤虎次郎外	同民会常任理事就任挨拶		大13・4・24	書状1	
第108号		同民会本部	同民会規約改正、事務所移転		大13・5	印刷物2	
第109号		北条会長	同民会法人組織並に評議員、 相談役、氏名打合		大13・12・24	"3	
第110号		同民会	同民会、登記済、事業開始報告		大14・7	ハガキ1	
第111号		日鮮融和各派 有志連盟	日鮮融和各派有志連盟 (宣言)		大13・3・25	印刷物1	
第112号		松浦淑郎	鶏林荘舎、落成報告及事業概要		大13・8	半紙2	
第113号		松寺竹雄	向上会及同後援会事業		大13・7	印刷物4枚 B4判2P ハガキ1	
第114号		石坂亀治	鮮人問題解決に尽力申出の件		大13・9・24	書状1	
第115号		浜名寛治	日鮮融和提唱及内鮮司會会趣旨		大13・11・6	B6 26 ビラ1	
第116号		直原豊四郎 外	朝鮮人子弟 輔導会		大14・1・31	書状他	
第117号		"	朝鮮問題に関し面会に付、挨拶		大14・2・3	書状1	
第118号		国民協会々長 尹甲大丙	選挙法を朝鮮に施行の建白書		大14・3・4	葉書他	
第119号		車善寿 外	朝鮮人苦学生相互扶助機関 関東一也院 設立趣旨		大14・3・14	印1	
第120号		三島弥吉 外	善隣学寮設立及予算		大14・5	印3	
第121号		(諺文新訳和訳)	朝鮮思想通信発刊の件		大15・5・4	B5 30	
第122号		鳳谷生 (朝鮮思想 通信記事)	在ハワイ天道教の同志に与ふる 上・下		昭3・9・3	書状1	
第123号		金明晃 "	天道教の大衆的教化 上・下		昭3・9・1	印2	
第124号		中外日報社説 "	天道教七十年		昭4・4・5	B5 2	



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
第24号			朝鮮華族の公判(独立万才事件)			新聞切抜	1枚
第25号			石坂亀治郎氏視察報告			印刷物	1
第26号			ギューリック氏より米国の感状に付平岩氏へ来状			フールスカップペン書	1
第27号			(秘)大正八年八月一日付、高元勲外六名意見書			美濃印刷	1
第28号			スコフィールド氏調査委員必要意見並びに同氏のアドバイザー寄稿意見			原稿紙帖ペン書 同新聞切抜	2
第29号			(帰一協会研究資料) 対韓私見(大正二年塩川一太郎著)	大2.6	B6		80
第30号			日本宣教師同盟会決議(独立事件関係)	大8.8.6	美濃謄写		2
第31号			鈴木穆改革意見付公課整理意見	大8.9.15	"タイプ		23
第32号			最近朝鮮情勢・論告・訓示		"	謄	23
第33号			The Korean Independence Agitation (Seoul Pressより集録)	大8.5.20	A5		35
第34号	関元植		新日本主義	大8.10	印		1
第35号	洪彦杓		外国に散在する不服朝鮮人の保護及び統治に関する意見	大8.10	印		1
第36号	陸軍省編		朝鮮騒擾経過概要	大8.9	A5		20
第37号	島田三郎		駅屯士松下問題(特に半政半商の事に乗ぜんとする)	大8.11	半紙判謄写		8枚×2部
第38号	アドバイザー紙記事		朝鮮宣教師団の朝鮮総督に答へたる意見書	大8.10	美濃紙2枚		貼付
第39号			公正会朝鮮問題委員報告書	大8.11	美濃判謄写		6枚
第40号			飯田左内報告(萬歳事件関係)	大8.15	私信封書		4通
第41号			赤池警務局長来信(鮮人宣教師敬文)	大8.12	書状美濃紙2枚		半紙判謄写6枚
第42号	上田黒潮		朝鮮統治私見	大8.12	A5		23
第43号	三浦直正		朝鮮江原道牛頭里の靈跡に付て	大8.5	美濃判謄写3枚		及書状1通
第44号	朝鮮銀行 美濃部俊吉氏書信		朝鮮騒擾事件の裏面	大8.12	美濃判謄写14枚		及書状1通
第45号	Advertiser紙記事		斎藤総督・政策宣明	大9.1.14	美濃紙1枚		及3.9に貼付
第46号A	"		婦人犯罪者七十余名釈放(大9.1.2)	大9.1.2	美濃紙1枚		に貼付
第46号B	"		私立学校規則改正(大9.3.9)	大9.3.9	美濃紙1枚		に貼付
第47号	赤池警務局長(書信)		婦人犯罪者釈放に関する件(大韓愛国婦人会陰謀事件)	大9.1.24	半紙美濃紙各1枚		謄写
第48号	報知新聞(記事)		斎藤総督爆弾事件豫審決定書	大9.1.30	美濃紙1枚		に貼付
第49号	Seoul Press(記事)		Administrative Reform in Korea	大9.1.10	A5		74

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
第50号		細井 肇	(秘)朝鮮統治策論	1	大9.2.17	A5	43
第51号		学務局長	外人学校長処分に關する願末書	1	大9.4.10	B5	6
第52号		Plank Hercon Smith	The Other Side Of The Korean Question	大9.5.25	B6		33
第53号		高元植外613名	朝鮮に衆議院選挙法施行の請願	1	大9.7	書簡及請願書	
第54号A		Charles H. Sherrill	Korea And Shantung Versus The White Peril	大9.7.28	B6		36
第54号B		Colonel John P. Irish	The Anti-Japanese Agitation In California	1	(Seoul Press 社刊)		
第55号A		国民新聞(記事)	殘虐鮮人掃蕩	1	大9.8.18	美濃紙1枚	に貼付
第55号B		"	米國議員団に対する呂運亨筆の陰謀	1	大9.8.20	書状1通及美濃紙墨書4枚	
第56号		宋 秉 峻	所感(宋秉峻意見書)	1	大9.8.20	美濃判謄写20枚	
第57号		朝鮮總督府(書信)	米國議員団の來鮮と鮮人關係(書信局の真相公表)	1	大9.8.31	美濃判謄写20枚	
第58号		水野政務総監(書信)	宣教師と応答(特秘連合宗教會議建白書外國宣教師薛氏に告ぐ) *開島不審鮮人討伐に付水野大佐より宣教師に与へたる書簡、並にJapan Advertiser及Japan Timesの論評 *右に就ての内外の物議に対する外務省言明 *Advertiser紙、社説	1	大9.10.12	B5	謄写6枚
第59号		Advertiser紙記事	佐より宣教師に与へたる書簡、並にJapan Advertiser及Japan Timesの論評 *右に就ての内外の物議に対する外務省言明 *Advertiser紙、社説	1	大9.12.3	大9.12.12及び大正9.12.21 美濃紙3枚	貼付
第60号		北 悟一(在奉天)	在滿朝鮮人問題に対する意見	1	大10.1.12	A5	23
第61号		李 東 宰	新朝鮮 一号	1	大8.11.3	B5	16
第62号		ドクトル・ウェルン(書信)	官吏の処罰公表・同化の文字を避くる事	1	大11.2.15	タイプ用紙	1枚
第63号		阪谷芳郎(稿)	朝鮮に於ける治安維持に就て	1	大9.12.1	日本俱樂部用紙及半紙	8枚
第64号		Newell Martin	Japan Attempt To Exterminate Korean Christian	1	大8.1	A5	28
第65号		-	大正9年秋・開島討伐に關し、ギューリック氏宛書面	1	大10.1.4	英文書状	1通
第66号		赤池警務局長	朝鮮治安近況概要	1	大11.1.25	美濃判謄写10枚	
第67号		鄭 義 漢外42名 (同光会本部)	内政独立に付兩院請願書	1	大11.3	B5 A5	8 18
第68号		Advertiser紙記事	鮮人 水野總監の後任者は鮮人中より登用を望む	1	大11.6.18	美濃紙1枚	に貼付
第69号		同光会本部 編	衆議員訪員・朝鮮民情視察報告	1	大12.2.7	A5	80
第70号		スチヤー氏	朝鮮視察報告	1	大12.2.22	英文タイプ	3枚
第71号		国民新聞 社説	朝鮮に自治を許せ	1	大13.8.10	-	
第72号		同民会雑誌 1号	國府總務の「東亞同民の本質」と題する論文往古、朝鮮民族關係	1	大13.6.25	A5	108



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
221	23	村山智順	朝鮮社会制度史			A5	100
"	K/	朝鮮総督府	朝鮮史のしるべ	1	昭14・8	B6	71
"	"	恒屋盛服	朝鮮開化史 全	1	明34・1	A5	540
221.03	"	大原利武	箕準及其後裔の馬韓国 76号抜刷1			"	36
221.031	"	浜田青陵	慶州の金冠塚(慶州古蹟保存会)	1	昭7・11	B6	106
221.05	"	船津里城址保存会	四川郡船津史蹟	1	昭7・5	B6	3/ 地図7
221・204	23	青柳南冥	朝鮮四千年史	1	大6・7	A5	368
221・393,2	42	青柳南冥訳述増補	朝鮮外史全(原名・東国兵鑑)	1	大4・9	"	307
221.05	23	"	李朝史大全	1	大12・1	"	966
221.06		葛生能久	日韓合邦秘史 上巻	1	昭5・		
221.06	//	釈尾東邦	朝鮮併合史	1	大15・	"	1,034
221.05	7/	中井錦城	朝鮮回顧録	1	大4・3	"	295
221.06・221.4	//	大村友之丞	京城回顧録	1	大11・10	"	299
221.05	//	三城景明	韓末を語る	1	昭5・6	B6	242
221.05	//	川崎三郎	朝鮮革新策 全(日清開戦論)	1	明27・9	"	178
221.05	42	朝鮮総督府中樞院編	校訂・世宗実録地理志索引	1	昭12・10	A5	212
"	23	中村栄孝	李朝時代の耆老所に就て (東洋史論叢抜刷)	1	昭8・8	"	29
221.01	7/	近藤鋌一・石川	朝鮮問題事典	1	昭25・9	B6	112
221.07	7/	坪江仙二	北鮮の開港十年・金日成独裁政 権の実態	1	昭30・1	"	222
221.07	7/	"	南鮮の開港十年・李承晩独裁政 権の実態	1	昭31・7	"	347
221.05	K/	Hamel, Hendrik.	An Account of The Shipwreck of A Dutch Vessel on The Coa- st of The Isle of Quelpaert, togetherwith The Description of The Kingdom of Corea.	1	1918・2	A5	148

221.06 朝鮮問題雑纂・阪谷資料

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
221.06	75	故阪谷子爵 記念事業会	朝鮮問題雑纂 卷一 /				
			内 容				
			第1号 帰一協会の記事		大8・5・26		
			第2号 韓国併合協約		明43・8・22 半紙版 謄写1枚		
			第3号 朝鮮併合ニ付詔勅		明43・8・27	"	1
			第4号 韓国皇帝詔勅ノ一部		明43・8・22	"	1
			第5号 清国ニ対スル宣戦ノ詔勅		明27・8・1	"	5
			第6号 露国ニ対スル宣戦ノ詔勅		明37・2・10	"	1.5
			第7号 朝鮮騒擾地踏査梗概報告		大8・6	"	73
			第8号 朝鮮騒擾地巡回日誌		大8・7・3	"	4
			第9号 郭山事件顛末			"	18
			第10号 京畿道水原安城地方騒擾の状況			"	14
			第11号 騒擾事件入鑑者 職業別表		大8・5・30	"	13
			第12号 朝鮮民族代表宣言		大8・3	"	6
			第13号 朝鮮青年独立固宣言		大8・3	"	7
			第14号 大韓独立女子宣言		大8・5	"	4
			第15号 大韓独立宣言		大8・5	"	5
			第16号 判決文(独立万才事件)		大8・5・11	"	4
			第17号 " "		大8・6・12	"	16
			第18号 " "		"	"	3
			第19号 " "		" 8・6	"	3
			第20号 騒擾事件(独立万才) 起訴被告人の信教別			"	43
			第21号 " 検事処分人員表			"	48
			第22号 平和協会決議		大8・7・3	"	4
221.06	75	故阪谷子爵 記念事業会	朝鮮問題雑纂 卷二 /				
			第23号 騒擾の財政及び経済上に及ぼし たる影響概観(鈴木穆より送付)			美濃判 コンニャク版	25

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
221.031	23	福田 芳之助	新 羅 史	1	大 2. 6	A5	436
221.32.203	23	大原 利 武	朝鮮史大系 年 表	—	昭 2. 8	A5	344
221.03	23	小田 省 吾	" 上世史	1	昭 3. 2	A5	249
221.04	23	瀬野 馬 熊	" 中世史	1	昭 3. 2	"	301
"	"	"	" 近世史	1	昭 3. 2	"	318
221.05	23	杉本正介・小田省吾	" 最近世史	1	昭 3. 2	"	375
221.	23	朝鮮史学会 編	朝鮮史講座 一般史	1			
内 容							
221.03		小田 省 吾	朝鮮 上 世 史			A5	239
221.04		荻山秀雄・瀬野馬熊	朝鮮 中 世 史			"	298
221.04		瀬野 馬 熊	朝鮮 近 世 史			"	269
221.05		杉本正介・小田省吾	朝鮮 最近世史			"	370
		大原 利 武	朝鮮 歴史地理			"	179
221	23	朝鮮史学会 編	朝鮮史講座 特別講義	1		A5	
内 容							
		関野 貞	朝鮮 美術 史	図版		"	231
		小田 省 吾	李 朝 政 争 略 史			"	42
		柏原 昌三	鳴洋峽の海戦と統制使李舜臣			"	11
		大原 利 武	上古史の研究に就て			"	19
		瀬野 馬 熊	蔚山城址と浅野丸			"	8
		三浦 周 行	三 韓 の 帰 化 人			"	27
		稲葉 君 山	朝鮮に於ける高昌の契氏世系			"	13
		柏原 昌三	訃修書院所載・文成公安裕の影 像に就いて			"	17
		稲葉 君 山	満 洲 商 熱河日記を讀みて			"	8
		小田 省 吾	京城に於ける文禄役日本軍諸將 陣地の考証			"	38
		加藤 瀧 覚	朝鮮 陶磁器 概要			"	31
		渡辺 彰	樺 城 思 潮			"	72
		高橋 亨	朝鮮 儒学大観			"	59

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
221	23	稲葉 君 山	高句麗の泉男生墓誌に就て			A5	6
		"	新出土・漢の孝文廟銅鐘銘識に 就て			"	10
		大原 利 武	朝鮮及満洲の国号系統に就て			"	8
		村山 智 順	風 水 に 就 て			"	40
		葛城 末 治	朝鮮 金 石 文			"	139
		小倉 進 平	朝鮮 語 学 史			"	173
		大原 利 武	海 流 と 民 族			"	16
		菅野 銀 八	高麗板大藏經に就て			"	59
		荻貝 房之進	国文吏吐俗語造字俗字・借訓字			"	34
		藤田 亮 作	朝鮮 古 蹟 及 遺 物			"	96
		加藤 瀧 覚	朝鮮 旧 社 会 事 情			"	36
		稲葉 君 山	震災と鮮満史料の佚亡に就て			"	9
		荻山秀雄・菅野銀八	朝鮮史関係図書解題			"	88
		大原 利 武	附録・朝鮮歴代王家系譜			"	12
		菅野 銀 八	朝鮮 史 便 覧			"	36
221	23	朝鮮史学会 編	朝鮮史講座 分類史	1		A5	
内 容							
		稲葉 岩 吉	朝鮮 民 族 史			"	149
		"	鮮 満 関 係 史			"	67
		麻生 武 亀	朝鮮 財 政 史			"	194
		"	朝鮮 地 方 財 政 史			"	33
		"	中央及地方制度沿革史			"	132
		"	軍制使・付警察制度史			"	40
		柏原 昌三	日 鮮 関 係 史			"	106
		小田 省 吾	朝鮮 教 育 制 度 史			"	92
		"	李 朝 政 争 略 史			"	42
		李 能 和	朝鮮 仏 教 史			"	143
		洪 達	朝鮮 学 芸 史			"	144
		花村 美 樹	朝鮮 法 制 史			"	74

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
221.04	24		朝鮮史料集真 続	1	昭11・3	輸入 75枚	
221.038	24	朝鮮総督府 編	高句麗時代の遺蹟 (古蹟調査特別報告 第5冊)	1	昭4・3	菊四倍版 109	
"	"	"	" 下冊	1	昭5・1	" 222	
"	"	慶州古蹟保存会 編	新羅旧都慶州古蹟図彙	1	昭4・8	四六四倍版 面帳 34	
221.02	43	朝鮮史編修会 編	軍門勝録。朝鮮史料叢刊 第三	1	昭8・11	輸入 1冊	
"	"	"	唐将書帖。唐将詩画帖 " 第四	1	昭9・5	輸入 冊解説共	
221.05	21	朝鮮総督府 朝鮮史編修会	朝鮮史編修会事業概要	1	昭13・6	A5	156
221.031	21	"	朝鮮史 巻首・総目録	1	昭13・10	"	191
221	"	"	" 第一編 第一巻	1	昭7・3	"	732
"	"	"	" 第二巻	1	昭7・3	"	352
"	"	"	" 第三巻	1	昭8・3	"	808
"	"	"	" 第二篇 第一巻	1	昭7・3	"	457
"	"	"	" 第三篇 第一巻	1	昭7・12	"	530
"	"	"	" 第二巻	1	昭7・12	"	600
"	"	"	" 第三巻	1	昭8・3	"	581
"	"	"	" 第四巻	1	昭8・9	"	550
"	"	"	" 第五巻	1	昭9・7	"	543
"	"	"	" 第六巻	1	昭10・3	"	479
"	"	"	" 第七巻	1	昭10・3	"	483
"	"	"	第四篇 第一巻	1	昭7・12	"	556
"	"	"	" 第二巻	1	昭8・10	"	516
"	"	"	" 第三巻	1	昭10・1	"	683
"	"	"	" 第四巻	1	昭11・3	"	756
"	"	"	" 第五巻	1	昭12・3	"	1,038
"	"	"	" 第六巻	1	昭10・3	"	563
"	"	"	" 第七巻	1	昭11・3	"	642
"	"	"	" 第八巻	1	昭12・3	"	712
"	"	"	" 第九巻	1	昭12・2	"	671

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
221	22	朝鮮史編修会 編	朝鮮史 第四篇 第十巻	1	昭12・3	A5	1,278
"	"	"	" 第五篇 第一巻	"	昭8・3	"	537
"	"	"	" 第二巻	"	昭8・8	"	482
"	"	"	" 第三巻	"	昭9・1	"	584
"	"	"	" 第四巻	"	昭9・7	"	544
"	"	"	" 第五巻	"	昭10・3	"	634
"	"	"	" 第六巻	"	昭11・1	"	810
"	"	"	" 第七巻	"	昭11・3	"	852
"	"	"	" 第八巻	"	昭11・12	"	1,043
"	"	"	" 第九巻	"	昭12・3	"	784
"	"	"	" 第十巻	"	昭12・3	"	1,016
"	"	"	第六篇 第一巻	"	昭9・11	"	720
"	"	"	" 第二巻	"	昭10・11	"	710
"	"	"	" 第三巻	"	昭11・10	"	697
"	"	"	" 第四巻	"	昭13・3	"	1,103
221.04	43	朝鮮史編修会 編	景印本 高麗史節要 合計7冊入 上巻 (1・2・3・4・7・8・9・10・11) 中巻 (12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24 合計8冊入) 下巻 (25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35 合計9冊入) 凡例・題名・目次解説 補刊 (巻5勾・巻6勾・巻18勾)	"	昭7・12	輸入	
"	"	"	高麗史節要補刊附録	1	昭13・3	"	40
221	72	菊池謙譲	近代朝鮮史 上巻	1	昭15・1	B6	689
221	71	ソウル大学国史研究室	朝鮮史概説	1	昭24・5	A5	750
221.05	42	篠田治策	南嶺山城の開城史 極東に於ける Capitulation の一例	1	昭5・9	"	90
221.05	23	小田省吾	辛未洪景来乱の研究 (附・小田省吾著述目録)	1	昭9・9	"	170
221.05	42	中村栄孝	朝鮮英祖朝の承政院日記改修について	1	昭9・11	"	48
221.05	23	"	李朝時代の老所に就いて	1	昭8・8	"	29
221	42	金宗漢	朝鮮史略 上	1	大12・4	和綴	52枚
"	"	"	" 下	1	大12・4	和綴	84枚
221.02	43	平岩佑介 抄訳	三国遺事 (鮮満叢書第6巻)	1	大12・	自由研究社刊	

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
203.33	44	朝鮮総督府中枢院編	朝鮮人名辞書 <sup>付録</sup> 内鮮歴代対照年表	1		A5	8P
"	"	"	朝鮮人名辞書索引	1	昭14・9	A5	148
204.21	24	稲葉岩吉(君山)	釈 椋	1	昭11・11	B5	126
204.21	23	稲葉岩吉博士 還暦記念会 編	鮮満史論叢	1	昭13・6	A5	769
209.21	45	稲葉岩吉(君山)	朝鮮文化史研究	1	大14・9	"	378
209.21	22	鳥山喜一	満鮮文化史観	1	昭18・	"	296
204	43	金素雲	朝鮮史譚	1	昭18・1	B6	263
204.21	71	近藤劔一	新朝鮮読本	2	昭28・8	A5	311
209.21		菊池謙謨	朝鮮雑記	1	-	-	-
201.4	43	Graves, J. W.	The Renaissance of Korea	1	1920	B6	74
日本・朝鮮関係史							
210(001-17)		中山久四郎	歴史上にあらわれたる内鮮の融和	1	昭 -	中央朝鮮協会刊	
210.12	23	白柳秀湖	民族日本歴史 王朝篇	1	昭11・8	B6	366
"	"	"	" 戦国篇	1	昭10・10	"	441
"	"	"	" 封建篇	1	昭10・5	"	420
"	"	"	" 近世篇	1	昭11・3	"	483
210.68	72	朝鮮総督府 編	朝鮮の保護及併合	1	大7・3	B5	445
210.497 (001-16)		徳富猪一郎 述	文禄・慶長以後、日本に於ける 朝鮮の感化	1	昭5・9	中央朝鮮協会刊	
210.497 (221-23)		栢原昌三	鳴洋海戦と統制史李 亨臣 朝鮮史講座、特別講義	1			
210.497 (221-23)		瀬野馬龍	蔚山城址と浅野丸	1			
"		小田省吾	京城に於ける文禄役日本軍諸将 陣地の考証	1			

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
210.08	73	伊藤博文 編	秘書類纂 影法資料	上巻	昭10・8	A5	672
"	"	"	" " " 中巻	1	"	"	540
"	"	"	" " " 下巻	1	"	"	500
"	"	"	" 外交篇	上巻	昭11・4	"	675
"	"	"	" " " 中巻	1	昭11・12	"	635
"	"	"	" " " 下巻	1	昭11・9	"	441
"	"	"	" 朝鮮交渉資料	上巻	昭11・8	"	754
"	"	"	" " " 中巻	1	昭11・10	"	701
"	"	"	" " " 下巻	1	昭11・12	"	810
"	"	"	" 実業工業資料 全	1	昭10・10	"	614
"	"	"	" 帝室制度資料	上巻	昭11・7	"	720
"	"	"	" " " 下巻	1	昭11・6	"	406
"	"	"	" 雑 纂 其貳	1	昭11・5	"	608
"	"	"	" " " 其参	1	昭11・6	"	672
"	"	"	" " " 其四	1	昭11・10	"	630
210・389,1	71	浜名祖光	日韓正宗溯源	1	大15・12	"	696
210・389,12・1	23	雅川亀五郎	日韓上古史の裏面	下巻	1		
210	76	中山久四郎	内鮮協和一体の史実	1	昭16・6	"	18
210.497	23	中村栄孝	文禄・慶長の役(岩波講座 日本歴史)	1			
210	23	浅見倫太郎	日本建国の法制とバビロン	2	昭11・2	"	77
210.68	77	喜田貞吉	韓国の併合と国史	1	明43・11	"	182
"	76	弓削幸太郎	韓国併合と朝鮮総督府の始政	1	昭15・8	"	40
210	K/	金声律	史実より見たる内鮮一体	1	昭13・11	A5	687

## 朝鮮歴史・朝鮮語題

221.04	24		朝鮮史料集真	上	昭10・3	鉄入 1・2・3 75枚
"	"		"	下	昭11・3	鉄入 4・5・6 74枚





{ ~ ~ ~ ~ ~ }  
 { 100 哲 学 ・ 論 文 ・ 討 論 集 }  
 { ~ ~ ~ ~ ~ }  
 { 心 理 学 ・ 倫 理 学 ・ 国 体 論 ・ 教 訓 }  
 { ~ ~ ~ ~ ~ }

分類記号	函架	編 著 者 名	書 名	冊	刊行年月	型	頁数
104	46	京城帝国大学 文学部 編	京城帝国大学創立十周年記念 論文集・哲学篇	1	昭11・11	A5	304
118・21	16	村 山 智 順	朝鮮文化の性格	1	昭16・8	B6	
123	46	経 学 院 編	経 学 院 集 誌 第四十五号	1	昭15・12	A5	148
124・221	23	高 橋 亨	朝鮮儒学大観 (朝鮮史講座) 特別講義	—	—	—	—
147,4・148,7	46	村 山 智 順	朝鮮の占卜と豫言(調査資料37輯)	1	昭 8・3	A5	663
147,4	24	—	鄭 鑑 録、鄭鑑録に就きて	1	(合綴)美濃紙、謄写版		
155,2	24	鎌 田 沢一郎	国体の本義と道義朝鮮	1	昭19・7	B6	105
159,2・389,121	24	朝鮮憲兵隊司令部編	朝鮮人の篤行美談 第一輯	1	昭 8・1	A5	108
159,2・369,76 316,8	24	"	朝鮮同胞に対する内地人反省資録	1	昭 8・1?	A5	99
159,2	24	京 畿 道 編	卒業生指導・勤労美談 第一輯	1	昭 5・12	B6	135
159,2・390,1	24	中 央 協 和 会 編	内地在住、半島同胞就後美談 第一編	1	昭16・5	B6	89
"	"	"	" 第二編	1	昭19・2	B6	108
154	"	阿部駿一郎供存社編	思想と生活 第一輯	1	昭 9・7	B6	594
"	"	"	" 第二輯	1	昭11・9	B6	557
159,2・001	17	中央朝鮮協会 編	東京から朝鮮へ愛の離人形	1	昭 6・7	A5	49

宗 教 ; 神道・仏教・基督教

001・160	12	朝鮮総督府 編	宗教及社会 (朝鮮総攬 P.66)	—	昭 8・3		
160,2	28	"	朝鮮の鬼神 (民間信仰第一部) (調査資料25輯)	1	昭 4・7	A5	519
169,1	28	"	朝鮮の類似宗教 (調査資料42輯)	1	昭10・9	A5	955
166,6	46	"	朝鮮の郷土神祀 (第二部) 秋葉 祈雨安宅 (調査資料45輯)	1	昭13・3	A5	521
160,2	16	朝鮮総督府学務局	朝鮮宗教に現れたる信仰の特色	1	大 9・12	A5	36

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
001・287	-	井上角五郎 述	金玉均君に就て	1	昭12・5	B6	33
001・390	//	中央朝鮮協会 編	非常時下の朝鮮	1	昭12・12	"	42
001・289	"	"	馬場城一氏・入江海平氏 記念誌	1	昭13・-	-	-
001・289	"	井上雅二 述	半島を訪ねて先人の偉烈を想ふ	1	昭13・6	"	42
001・344	//	財務局長 水田直昌 述	昭和14年度朝鮮総督府豫算に就て	2	昭14・6	"	77
001・"	//	"	昭和15年度 "	1	昭15・6	"	75
001・"	//	"	昭和17年度 "	3	昭17・8	"	62
001	//	山崎延吉 述	最近の半島	2	昭18・6	"	38
001・344	//	財務局長 水田直昌 述	昭和18年度朝鮮総督府豫算に就て	1	昭18・9	"	65
001・221	//	大海堂 刊	朝鮮回顧録	1	昭19・7	"	300?

朝鮮総記・財団法人友邦協会刊行物

(註・//頁の追録参照)

000	//	近藤 釵一	新朝鮮読本	1	昭28・8	A5	3/1
"	"	近藤 釵一 編	朝鮮資料第一号 朝鮮財政・金融発達史 参考資料	1	昭31・1	B5	62
000	//	"	" 第二号 (改編・複刊) 朝鮮の保護及び併合	2	昭31・9	"	588
000	"	山名 酒喜男	" 第三号 朝鮮総督府終政の記録 (一)	2	昭32・2	"	88
"	"	近藤 釵一 編	" 第四号 朝鮮電気事業 関係重要文献集成 第一巻	2	昭33・9	"	494

朝鮮総記・渡辺資料

001・317	8/	朝鮮総督府 編	朝鮮に於ける施政の一斑	1	昭4・9	B6	141
"	"	"	A Glimpse Of Twenty Years Administration In Chosen	1	1932	"	36
"	"	"	最近の朝鮮 (2,500,000 地図付)	1	昭8・4	"	128
"・317,8	"	"	世界植民地現勢 (調査資料第四輯)	1	大13・5	A5	84

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
001・317	81	朝鮮総督府 編	朝鮮・内地・台湾・比較統計 要覧 大正10年	1	大10・-	折タタミ式	
"	"	"	" 大正11年	1	大11・-	"	
"	"	"	調査月報 第四巻 第三号	1	昭8・3	A5	153
"・290,9	"	朝鮮総督府鉄道局編	朝鮮の印象	1	昭-	-	-
"・317	"	ロート・スト	日本・英国及び世界 (日英両文)	1	大5・-	B6	46
"・317	"	村瀬 大一郎 編	春 畝 第一号・第二号	2	昭10・2・3	"	30~32
"・070	"	全羅北道警察部 編	全北日報及び群山日報の内情(秘)	1	?	シ制謄写	7頁

註・渡辺忍資料合計936点は、各分類主類の最後にそれぞれ主類別にまとめて記載した。

財団法人・友邦協会・刊行物追録

001	72	財団法人友邦協会 朝鮮史料研究会 編	朝鮮近代史料研究集成 第1号	1	昭34・3	B5	156
"	"	"	" 第2号	1	昭34・8	"	200
"	"	"	" (研究集会第100回記念)第3号	1	昭35・5	"	500
"	"	財団法人友邦協会	社団法人 中央日韓協会 保管 財団法人 友邦協会 朝鮮関係文献・資料総目録	1	昭35・5	"	200
"	"	武者 鎮三	柏陰余滴	1	昭34・3	B6	69
610	74	小早川 九郎	朝鮮農業発達史 (政策篇)	1	昭34・11	B5	680
"	"	"	" (発達篇)	1	昭35・5	"	650
"	"	"	" (付 篇)	1	昭35・5	"	150
614	"	古庄 逸夫	朝鮮土地改良事業史	1	昭35・1	"	185
513・518	"	榛葉 孝平	朝鮮土木事業概要	1	昭33・12	"	38
518	"	"	朝鮮の港湾概要	1	昭33・12	"	38
001	7/	小野田セメント・マ イクロウエーブ複写	韓国誌 上 (露国大蔵省刊)	1	明?	A5	3/5
001	7/	"	" 下	1	明?	"	3/7

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
080,920	43	自由研究社 編	鮮漢叢書第十一卷 (屋永編・五百 年奇蹟重英伝)	1	大 12・8	B6	198

### 朝鮮総記・在日朝鮮人一般

1000		朴 在 一	在日朝鮮人に関する総合的調査研究 / 昭 32・6	A5			
1000	72	森田 芳 夫	在日朝鮮人処遇の推移と現状	/	-	"	-
1000-3168 361,4	72	坪江 豊 吉	在日本・朝鮮人の概況	/	-	"	-
"	72	朝鮮総督府 編	阪神・京浜地方の朝鮮人労働者	/	大 13・6	"	-

(本題目については316,8および369,2併せ参照のこと)

### 朝鮮総記・大韓民国

(註・P 155 中央日報協会受託保管資料参照)  
(〃・P 83 近畿第一資料・追録・参照)

1100	71	直井 武 夫	朝鮮戦乱の真実	/	昭 28・6	新書判	167
1100	72	外務省調査局 第一課 編	朝鮮事変の経緯	/	昭 26・3	A5	175
1100	23	大韓民国国防政訓 局 戦史編纂委員会	韓国戦乱一年誌 1950-1951	/	昭 26・10	B5	846
1100	71	坪江 仙 子	韓国を動かす人達 第一選五十人集	/	昭 28・12	B6	213
1100	71	大韓年鑑社(釜山)	大韓年鑑 1952年版	/	昭 27・12	B4	594
1100	71	韓国貿易協会 編	貿易年鑑 1950	/	昭 27・12	B6	562
1100	74	韓国産業銀行調査部	産業銀行月報 19	/	昭 32・1	B5	227
1100	73	新韓学術研究会 編	新韓学報 第七号	/	昭 33・7	B5	274
1100	73	"	沿革の概要	/	昭 34・4	B5	81
1100	74	朴鍾鴻外46名編	大百科辞典 1951	/	昭 26 -	B5	1407
"・(323)	K/	黄東駿	韓国行政法総論(韓文)	/	4285・1	A5	287
"・(323,9)	"	李相培	大韓民国憲法上の大統領権限論	/	昭 26・5	"	78

### 朝鮮総記・朝鮮民主主義人民共和国

1200	74	「新しい朝鮮」 編集委員会	新しい朝鮮	-	-	-	-
------	----	------------------	-------	---	---	---	---

### 朝鮮総記・中央朝鮮協会刊行物

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
001	17	中央朝鮮協会 編	会 報 1-10 (合綴)	/	大 15・8 昭 3・8	A5	800
"	"	"	" 11-19 "	/	昭 3・5	A5	-
"	"	"	" 20-48 "	/	昭 8-13	B5	-
001-611,31	16	中央朝鮮協会 編	朝鮮産米の増殖計画	/	大 15・7	B6	53
001-567,1	"	"	北朝鮮の炭礦問題	/	大 15・8	B6	-
" 221,05 210,497	"	徳富 猪一郎 述	文禄慶長以後・日本に於ける朝鮮の感化	/	昭 5・9	B6	56
" 159,2	"	中央朝鮮協会 編	東京から朝鮮へ、愛の使者 離人形	/	昭 6・7	A5	49
389,1-210	"	中山 久四郎 述	歴史上にあらわれたる内鮮の融和	/	昭 -	B6	-
170	"	崔 南 善	朝鮮と神道	/	昭 9・12	B6	20
573,2	"	浅川 伯 教	朝鮮古蹟の研究により得られたる朝鮮産業の過去及将来	/	昭 9・2	B6	-
801,2	"	小倉 進 平	諺文の起原及び朝鮮語の特質	/	昭 10・2	"	32
411,31	"	中央朝鮮協会 編	朝鮮産米の増殖計画	/	昭 10 -	"	-
292	"	鶴田 吾 郎 述	済州島の自然と風物	/	昭 10・5	"	-
334,6	"	島津岬・古尾孫次郎 述	上海に於ける朝鮮人の実情	/	昭 10・7	"	34
289	"	中央朝鮮協会 編	寺内・前朝鮮総督銅像建設記	/	昭 10・-	A5	-
"	"	"	故寺内総督銅像建設会報告会	/	昭 10・-	"	-
569,2	"	石田 千太郎 述	朝鮮鉱業の現況	/	昭 10・4	B6	34
001-611,9	17	守屋 栄 夫 述	農村問題について	/	昭 10・10	"	42
001-289	"	中央朝鮮協会 編	無仏翁しのび草	/	昭 11・3	"	58
001-611,9	"	岡田 忠 彦 述	旋風裡の欧米	/	昭 11・4	"	43
001-289	"	中央朝鮮協会 編	故阿部充家翁 胸像建設報告書	/	昭 11・6	A5	-
001-611,9	"	高橋 亀 吉 述	財政・経済 今日の問題	/	昭 11・9	B6	50
001-611,9	"	青木 新	西班牙 動乱に就て	/	昭 11・11	"	42
001-611,9	"	井下 清	東京市の公園其他の施設に就て	/	昭 11・12	"	51
001-611,9	"	高橋 亀 吉	日本経済の発展と、世界経済再 調整問題	/	昭 12・2	"	41
001	"	出光海軍兵学校長 述	聖上陛下、御日常の一端に關する 謹話	/	昭 12・3	A5	21
001	"	高橋 源一郎 述	武蔵野の名所旧蹟と多摩の景観	/	昭 12・6	B6	49



分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
001.067	12	東亜経済時報社	朝鮮銀行・会社・組合要録	1	昭和2・8	A5	-
"	"	"	"	1	昭和4・5	"	-
"	"	"	"	1	-	"	-
"	"	"	"	1	-	"	-
"	"	"	"	1	-	"	-
059.21	47	京城日報社	朝鮮年鑑	1	昭和9・10	B6	684
"	"	"	"	1	昭和11・9	"	634
"	"	"	"	1	昭和13・10	"	803
"	"	"	"	1	昭和15・10	"	734
"	"	"	"	1	昭和17・10	"	683
051.21	71	朝鮮公論社	朝鮮公論	5	昭和13・7~ 昭和18・7	A5	各冊 136-152
051.21	71	朝鮮実業倶楽部	朝鮮実業	6	昭和18・8~昭和19・1	A5	各冊 48-56
051	16	東洋協会	東洋	1	昭和11・7	"	-
051	16	我觀社	我觀	1	昭和5・2	A5	252
051.21	16	朝光社	朝光	2	昭和18・8・9	A5	180 168
051.21 611.39 051.21 611.39	16	国民精神総動員 朝鮮連盟	総動員(保善対策特刊)	1	昭和14・9	A5	42
051.21	17	国民総力朝鮮連盟	国民総力	13	昭和19・1~ 昭和19・4	B5	各冊 26-39
051.21	17	毎日新聞社	毎新写真旬報	8	昭和18・9~ 昭和19・4	A4	各冊 20
001.05	16	八坂寮・吉田常司	青雲(八坂寮誌天号)	1	昭和16・4	A5	116
051.21	71	天理大学・朝鮮学会	朝鮮学報	14	昭和26・5~ 昭和34・10	A5	-
051.21	74	三品彰英	朝鮮研究年報	2	昭和34・5	A5	134
051.21	74	近藤銀一 (朝鮮研究所)	朝鮮研究所報	29	昭和23・24	B5	合綴
"	"	"	朝鮮研究所報	3	昭和24・11 昭和24・12	"	"
"	"	"	朝鮮研究 (改題号)	1	昭和25・4	"	44
001.05	K1	朝鮮青年同盟	建國	1	昭和25・4	A5	44
"	"	東洋史研究会	東方第1号・李王宮秘史について	1	昭和3・1	"	50
"	"	同友社	自由朝鮮(1949.12)	1	昭和24・12	"	71
"	"	"	第2巻8号・第3巻8号	2	昭和23・昭和24	"	44 70
"	"	花郎俱樂部	花郎(第1巻2号・日本語版)	1	1953.10	"	96

## 朝鮮総記・・新聞一般

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
070.16	43	新聞用語研究会	朝鮮同胞呼称並に新聞雑誌記事 取扱座談会	1	昭和14・1	A5	21
070.16	43	藤村忠助	京城日報社誌	1	大9・9	"	55
070.16	43	東亜日報社	東亜日報社建築工事概要	1	大15・4	B6	7
070.2.4	74	金圭煥	植民地下朝鮮における言論および 言論政策史	1	昭和34・3	B5	466

## 朝鮮総記・・叢書・全集

080.920	43	細井肇	朝鮮叢書(牧民心書・雅言堂非・) 第1巻(書永編・海游録)	1	昭和11・11	B6	-
"	"	"	第2巻(丙子日記・懸琴録・朋 党士禍の研究・李朝の 文臣・莊陵誌)	1	"	"	"
"	"	"	第3巻(八城誌・鄭鑑録)	1	"	"	"
080.920	43	自由討究社	通俗朝鮮文庫第二輯(莊陵誌・謝氏南征記)	1	大10・4	B6	209
"	"	"	"第三輯(朋党士禍の検討・九雲夢)	1	大10・5	"	219
"	"	"	"第五輯(懸琴録・南燕太平歌)	1	大10・7	"	178
"	"	"	"第七輯(洪吉童伝)	1	大10・10	"	73
"	"	"	"第九輯(瀋陽日記・沈清伝)	1	大11・2	"	140
"	"	"	"第十一輯(大亞遊記・日支共 存の大義)	1	大11・4	"	282
"	"	"	"第十二輯(李朝の文臣・各種 の朝鮮評論)	1	大11・5	"	263
080.920	43	自由討究社	鮮満叢書第一巻(海游録上・燕の脚 各種の朝鮮評論)	1	大11・7	B6	246
"	"	"	"第二巻(海游録下・鳳凰琴下 大東遊記)	1	大11・8	"	244
"	"	"	"第三巻(侍天教の教旨一東経 正義・鳳凰琴下)	1	大11・9	"	257
"	"	"	"第六巻(三國遺事)	1	大12・2	"	330
"	"	"	"第十巻(龍睡録)	1	大12・6	"	102

朝鮮總記 (逐次刊行書及び雑誌)

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月型	頁数
001-036	45	拓務省編	拓務要覽 昭和四年版	1	昭5・3 A5	347
"	"	"	" 昭和五年版	1	昭6・1 A5	626
"	"	"	" 昭和七年版	1	昭9・1 "	758
"	"	"	" 昭和九年版	1	昭10・3 "	884
"	"	"	" 昭和十一年版	1	昭11・3 "	652
"	"	"	" 昭和十一年版	1	昭12・3 "	656
"	"	"	" 昭和十三年版	1	昭14・2 "	661
"	"	"	" 昭和十四年版	1	昭15・9 "	720
"	"	"	" 昭和十五年版	1	昭16・9 "	682
001-059	47	拓務大臣官房文書課編	拓務統計 昭和八年	1	昭10・3 B5	217
"	"	"	" 昭和九年	1	昭11・3 "	208
"	"	"	" 昭和十年	1	昭12・3 "	242
"	"	"	" 昭和十一年	1	昭13・3 "	245
"	"	"	" 昭和十二年	1	昭14・3 "	208
"	"	"	" 昭和十三年	1	昭15・8 "	207
001-05	47	朝鮮總督府編	朝鮮要覽 昭和八年	1	昭10・3 B6	246
001-05	11	"	朝鮮事情 昭和九年版	1	昭8・12 "	268
"	"	"	" 昭和十年版	1	昭10・1 "	285
"	"	"	" 昭和十一年版	1	昭10・12 "	327
"	"	"	" 昭和十八年版	1	昭17・12 "	343
"	"	"	" 昭和十九年版	1	- "	-
001-059	45	"	朝鮮總督府施政年報大正十年度	1	- "	-
"	"	"	" 大正十一年度	1	大13・3 B5	484
"	"	"	" 大正十二年度	1	大14・3 "	443
"	"	"	" 大正十三年度	1	大15・3 "	469
"	"	"	" 大正十四年度	1	昭2・3 "	481
"	"	"	" 昭和元年度	1	昭3・3 "	487

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月型	頁数
001-059	45	朝鮮總督府編	朝鮮總督府施政年報昭和三年度	1	昭5・3 B5	519
"	"	"	" 昭和四年度	1	昭6・5 "	536
"	"	"	" 昭和五年度	1	昭8・3 "	472
"	"	"	" 昭和六七年度	1	昭9・8 "	526
"	"	"	" 昭和八年度	1	昭10・3 "	567
"	"	"	" 昭和九年度	1	昭11・5 "	611
"	"	"	" 昭和十一年度	1	昭12・12 "	656
"	"	"	" 昭和十二年度	1	昭14・3 "	678
"	"	"	" 昭和十三年度	1	昭15・3 "	708
"	46	"	朝鮮總督府統計年報明治四十四年	-	-	-
"	"	"	" 昭和元年	2	昭3・3 "	829
"	"	"	" 昭和二年	1	昭4・3 "	808
"	"	"	" 昭和三年	1	昭5・3 "	805
"	"	"	" 昭和四年	2	昭6・3 "	807
"	"	"	" 昭和五年	2	昭7・3 "	775
"	"	"	" 昭和六年	2	昭8・3 "	844
"	"	"	" 昭和七年	2	昭9・3 "	851
"	"	"	" 昭和八年	1	昭10・3 "	636
"	"	"	" 昭和九年	1	昭11・3 "	551
"	"	"	" 昭和十年	2	昭12・3 "	542
"	"	"	" 昭和十一年	1	昭13・3 "	532
"	"	"	" 昭和十二年	-	-	-
001-05	17	"	朝鮮總督府調査月報 14卷8~15卷9	8	昭18・8 A5 (各冊53~136)	(大7リ)
"	16	"	朝鮮總督府通報 117号~152号	17	昭18 A5	14~32p
001-087	45	京城商工会議所編	朝鮮会社表 大正十五年	1	大15・12 B5	132
"	"	"	" 昭和三年	1	昭4・4 "	138
"	"	"	" 昭和六年	1	昭6・6 "	184
"	"	"	" 昭和八年	1	昭8・8 "	223

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
		孫 晋 泰	温突文化伝播考				
		李 灌 峰	朝鮮民族政治運動の一般的趨勢 (削除)				
		柳 一 宣	我々の白紙はどうする				
		金 九	朝鮮の思想善導と言論				
		李 完 応	朝鮮の学政当局はなぜ朝鮮語を 度外視するか				
		徐 椿	此の差別待遇を奈何				
		鄭 萬 朝	朝鮮詩文の変遷				
		李 敦 化	天道教と朝鮮				
		宋 鎮 禹	世界の大勢と朝鮮の将来 (削除)				
		朝鮮衡平社本部	朝鮮衡平運動の梗概				
		黄 信 徳	朝鮮女性運動の過去・現在及将来				
		李 九 熙	朝鮮「科挙」の回顧				
		安 在 鴻	吾人をして少しく語らしめよ				
		鮮 子 鎬	内鮮一体論について				
		洪 秉 璵	朝鮮青年の求むる将来の基督教				
		禹 浩 翊	無窮花考				
		趙 岡 熙	意志の人・実行の人李圭完				
		梁 柱 三	今後の朝鮮耶蘇教会				
		権 相 老	仏教渡来前の朝鮮と渡来後の朝鮮				
		柳 一 宣	危機に瀕せる朝鮮教育界				
		柳 完 熙	朝鮮各地の風俗の内から				
001・	27	白 山 青 樹 編	朝鮮同胞に告ぐ	2	昭19・7	B6	301
001	27	朴 尚 憺	裏の世相	1	昭9・2	"	284
02,221,05)	"		鄭 鑑 録	1			
02,(147,4)	"		鄭 鑑 録 につきて } 合綴	1		美 譜	
02,024)	43		竜溪会語 (序・巻1-5) (萬曆刊本影印)	3冊	昭7・8		
02,024)	42	朴 栄 喆 編	燕巖集 (1-6)	2部	昭7・5		
02,9,24)	44	弘文館 纂輯	増補文献備考 (1-49)	49	隆熙2・1	A5	-

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
02,9,24	42	弘文館 纂輯	増補文献備考 正誤	1	隆熙2・1	和綴	162
"	"	"	卷首	1	"	"	54
025,21	47	朝鮮総督府 編	朝鮮図書解題	1	昭7・8	A5	
027,3(031)	47	京城帝大法文学部 経済研究室 編	朝鮮関係図書論文目録	1	昭18・2-7	"	15
025,21	"	桜井義之	朝鮮関係文献抄録	1	昭-		
029,3	"	朝鮮総督府図書館	朝鮮総督府図書目録	1	大9・4		
029,3・(031)	47	"	" (追録)	1	大11・3	A5	104
029,3	"	朝鮮総督府	朝鮮総督府及所属官署 主要刊行図書録	1	昭9・6		
029,6・(031)	47	東亜経済調査局編	欧文図書 著者順目録	1	大10・3	A5	299
029,6・(031)	47	"	" " 第2輯	1	昭2・1	"	103
029,6・(031)	47	"	邦文パンフレット分類目録	1	大15・11	"	187
025,8・(031)	71	巖松堂古典部	支那・満洲関係古書目録	1	昭10・6	"	34
029,9・(03,37) (031)	71	森田芳夫	「日本人の朝鮮引揚」に関する 文献資料 (中国・朝鮮図書速報)	1	昭33・9	"	38
029,1	74	国立国会図書館編	朝鮮図書特集 日B33,5別冊/号	1	昭33・5	B5	15
( 追 録 )							
001・3/2	K/	青柳南冥	朝鮮統治論	1	大12・6	A5	844
"	"	朝鮮総督府情報課	前進する朝鮮	1	昭17・3	"	81
"	"	下村海南	朝鮮・満洲・支那	1	昭14・7	B6	385
001,05	"	朝鮮総督府	朝鮮事情 昭和18年版	1	昭17・12	"	313
"	"	"	" 昭和19年版	1	昭18・12	"	318
025,21	71	友邦協会 編	社団法人 中央日韓協会蔵書目録	1	昭35・4	-	
			山県文庫・土師文庫・旧中央朝鮮協会文庫・ その他				
025,21	71	友邦協会 編	財団法人 友邦協会蔵書目録	1	昭35・4	-	
			阪谷資料・渡辺資料・近藤資料・中野資料・ 三沢資料・丸山資料・岸資料・川崎文庫・ その他				

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
001	16	穂積重遠	朝鮮を通過つて (中央公論抜刷)	1	大15・2	A5	21
001	27	中野正剛	満鮮の鏡に映して	1	大10・3	B6	226
001	28	平井三男	世界より朝鮮へ	2	昭2・2	B6	787
001	28	柳宗悦	朝鮮問題の困難に就いて (国際知識 大正12・9号)	1	大12・9	A5	139
001	16	副島道正	朝鮮統治に就て	2	大13・?	A5	44
001	27	熊平源蔵	朝鮮同胞の光	1	昭9・3	B6	394
001	27	檜崎観一	満洲・支那・朝鮮	1	昭9・11	B6	540
001	72	?	朝鮮統治問題論文集 (第一集)	1	?	A5	262
001	16	弓削幸太郎	韓国併合と朝鮮総督の始政 (協和叢書第1輯)	2	昭15・8	A5	40
001	16 71	村山智順	朝鮮文化の性格 (拓殖パンフレット第8輯)	2	昭16・8	B6	32
001	27	細井 肇	日本の決意	1	昭7・10	B6	349
001	27	永見七郎	世界を股にかけて (井上雅二氏の前半世)	1	昭7・4	B6	779
001	27	朝鮮通信社 編	東亜の新勢力	1	大12・-	B6	312
001	27	亀岡栄吉	朝鮮を直視して	1	大13・12	B6	300
001	27	細井 肇	朝鮮問題の帰趨	1	大14・1	B6	124
001	27	井上 収	毒気を吐く	1	大13・12	B6	334
001	28	井上 収	半島に聴く	1	大15・11	B6	542
001	11	青柳南冥	朝鮮統治論	1	大12・7	A5	844
001	11	青柳南冥	新朝鮮 (全)	1	大14・7	A5	1043
001	27	石森久弥	朝鮮統治の批判	1	大15・3	B6	623
001	16	石森久弥	朝鮮統治の根本対策	1	昭3・9	A5	58
001	27	石森久弥	朝鮮統治の目標	1	昭7・8	B6	548
001	27	朝鮮公論社 編	うらから見た朝鮮統治史	1	昭5・8	B6	231
001	27	阿部 薫	朝鮮統治の解剖	1	昭2・5	B6	508
001	16	此経 春也	朝鮮文化政治の検討	1	昭5・-	A5	14
001	16	柳川 勉	新興朝鮮の論策	1	昭6・2	B6	589
001	71	東海通信社 編	開拓半世紀	1	昭15・8	B6	330
001	27	高橋昌 編	朝鮮と満洲を見る	1	昭7・9	B6	576
001	11	大喜多 肇一	新朝鮮	1	昭3・8	A5	130

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
001	27	田中麗水	中央より見たる新興朝鮮開発事情	1	昭14・6	A5	444
001	27	鎌田 沢一郎	朝鮮は起ち上る	1	昭 -	B6	326
001	74	森田 芳夫	御稜威に懸る朝鮮、内鮮の歴史を顧みて	1	昭18・9	B6	132
001	43	植田 群治	国境二百里	1	昭4・4	B6	320
001	43	大浦 貴道	朝鮮感話：死線に立つ	1	昭4・9	B6	315
001	27 71	姜 昌 基	内鮮一體論	2	昭14・11	B6	219
001	16	朴 栄 喆	内鮮融和策私見	1	昭4・5	B6	12
001	16	李 膺 福	朝鮮統治改革論	1	昭8・12	B6	105
001	27	李 軫 錫外4名	朝鮮を語る (その一)	1	昭9・6	A5	237
001	16	金 振 九	国 痛 切 開	1	昭11・7	A5	65
001	28	柳 一 宣	朝の生命に燃えて	1	大14・6	B6	348
001	28	柳 一 宣	躍る魂	1	昭8・3	B6	114
001	71 16	香山光郎	内鮮一體随想録 (協和叢書第5輯)	3	昭16・5 17・10	A5	16
001	74	朴 春 琴	朝鮮統治の禍根 道庁移転問題と民政党議員の横暴	1	昭2・?	B5	8
001	27	朴 春 琴	我等の国家新日本	1	昭5・11	A5	56
001	74	朴 春 琴	私の所信	1	昭30・一	美濃	14
001	71 27	蔡 培 火 (台湾人)	朝鮮を何うするつもりか	2	昭3・4	B6	188
001	27	金 学 秀	朝鮮への書簡	1	大14・6	B6	116
001	74	玄 永 燮	新生朝鮮の出発	1	昭14・2	B6	375
001	74	崔 南 善	神ながらの昔を憶ふ	1	昭9・4	B6	14
001	22	朝鮮思想通信社 編	朝鮮及朝鮮民族 第1集 内 容	1	昭2・8	A5	376
		崔 南 善	不 咸 文 化 論				
		李 寛 鍾	朝鮮民族思想変遷の概要				
		趙 奎 洙	朝鮮民衆運動の過去及現在				
		洪 承 孝	党争と朝鮮人				
		崔 鉉 培	我がハングル (諺文) の世界文字上の地位				
		陶 泰 彦	継子根性と朝鮮人の心境				
		朴 尚 僊	西北地方の朝鮮人の特質				





凡 例

1. 分類について

資料の分類はNDC新訂6-A(1951年)を参考とし、すべて、朝鮮関係事項を0~9までの10進分類とする立前とした。例えば001を朝鮮総記とし、また、朝鮮の独立運動などは、316.8(民族運動・民族問題)で現わし特別な地理区分をつけ加えなかつた。

その反面、NDC中に朝鮮に関する地理・歴史区分が明記されている場合には、これを利用したものもある。例えば、「京畿道の歴史」という本を分類するときには、NDCに明記された221(朝鮮歴史)に地理区分.4を加えて、221.4で現わした。また新しく韓国で道になつた済州島については、地理区分を.71とした。このように検索の便宜上NDCにない記号を付したものもある。例えば1100の項には大韓民国で刊行された図書、1200には朝鮮民主主義人民共和国のそれを収容することとした。

また、同一書目で、二種以上の分類を示すときは( )または・で区分した。

2. 函架記号について

収蔵図書の所在を示す関係上、函架記号を併用した。函架/2は1号書架の2段に在ることを示し、7/は同じく7号書架の1段にあることを示す。またK/は、Kの書架(近藤所管)の1段にあることを示すものである。

3. 著者名欄で、編・述などの記載なく氏名のみ記した場合は著者である事を示す。

4. 1冊の図書で分類が2種以上あつて、その各々の分類の項に掲出するときは、冊数欄に一の印を付し、再掲のため冊数に計上しないことを意味した。

5. 書物の大きさは古い時代のものでも、一応A5、B5などで表わし、菊版、四六倍版などを用いないことにした。

6. 頁数は、主として本文の頁数を示し、附録など相当頁数に上るときはこれを合算したものを表示した。挿絵、地図などの枚数は省略した。

以上

001 朝鮮総記

分類記号	函架	編著者名	書名	冊	刊行年月	型	頁数
001	12	朝鮮総督府 編	朝鮮総攬	1	昭8・3	B5	1047
001・(312)	16	" "	朝鮮に関する外国人の評論	1	大10・8	A5	38
001・(321)	16 71	" "	併合の由来と朝鮮の現状	1	大13・2	A5	19
001 "	16	" "	外人の見たる最近の朝鮮	1	昭7・3	A5	217
001・(352,21)	71	" "	新興の朝鮮、付録・統計図	1	—	B5	52
001・(221,06)	21	" "	施政二十五年史(英文)	1	昭10・10	B5	94
001・"	74	" "	施政二十五年史	2	"	"	986
001・"	74	" "	施政三十年史	1	昭15・10	"	932
001・"	"	" "	施政二十五周年記念 関係記録	1	昭10・10	A5	102
001	71	" "	朝鮮叢話	1	昭4・3	A6	214
001・(312,21)	21	堂本貞一	世界の日本史論稿(朝鮮1・2・3)	1	昭6・6	B6	330
001	72	緑旗連盟 刊	今日の朝鮮問題 講座1-7				
		(1) 津田 剛	内鮮一体論の基本理念	2	昭14・11	B6	88
		(2) 鈴木 武雄	大陸兵站基地論解 説	2	"	"	52
		(3) 八木 信雄	学制改革と義務教育の問題	2	合 綴	"	54
		(4) 海田 要	志願兵制度の現状と将来への展望	2	"	"	35
		(5) 孫 貞圭 外	現代朝鮮の生活とその改善	2	"	"	75
		(6) 森田 芳夫	国史と朝鮮	2	"	"	135
		(7) 緑旗日本文化研究所 編	朝鮮思想界概観	1	"	"	73
001	17	井上一次	朝鮮半島	1	昭16・10	B6	132
001	16	京城日報社 編	躍進朝鮮現勢図	1	昭16・12	"	32
001・	21 71	朝鮮弘報協会 "	躍進朝鮮を語る	2	昭17・12	"	112
001	72	横田喜三郎	朝鮮問題と日本の将来	1	昭25・11	"	233
001	16	山県五十雄	Japan's New Order In Far East	1	昭30・5	A5	4
001・(221,06)	11	坪江仙二	朝鮮民族独立運動秘史	1	昭34・3	"	88
001・"	71	在上海日本総領事館 秘	朝鮮民族運動年鑑	1	昭20・4	B6	326
001	16	田口春二郎	最新朝鮮一斑	1	明44・4	A5	427

## 目次

### 0 朝鮮総記

朝鮮総記	5
逐次刊行書・雑誌	10
新聞一般	13
叢書・全集	13
在日朝鮮人	14
大韓民国	14
朝鮮民主主義人民共和国	14
旧中央朝鮮協会刊行物	15
財団法人友邦協会刊行物	16
渡辺忍資料	16

### 1 哲学

哲学・心理学・倫理学・国体論・ 教訓・論文・講演集	19
宗教；神道・仏教・キリスト教	19
" 渡辺忍資料	21

### 2 歴史

朝鮮歴史総記	21
日本・朝鮮関係史	22
朝鮮歴史・朝鮮問題	23
朝鮮問題雑纂（阪谷資料）	29
アジア一般	36
ヨーロッパ一般	36
伝記資料・諸名簿の部	37
同・団体その他	37
同・個人	38
同・系譜・家伝・紋章	38
地誌・紀行	40
同・史蹟	41
朝鮮地図・絵図・写真帖	43
旅行案内類	44
渡辺忍資料（歴史・地誌）	45

### 3 社会科学

政治・政治史・政治事情	47
在日朝鮮人問題	48
行政	50
地方自治	50
同・道勢一斑類	51
外交・国際問題	52
法制史・外国法	52
韓国法令	53
朝鮮総督府法規類纂	53
一般法規集（朝鮮関係）	54
行政・民・私・商・特殊会社法一等各法	54
刑法・司法制度・諸法・国際法	54
経済	55
経済史・経済事情	56
人口・植民	56
貨幣・通貨・物価	57
金融・銀行	58
財政史・財政事情	60
専売	60
地方財政	61
統計・逐次刊行物	61
国勢調査	62
社会・社会学関係	62
労働・階級・社会の団体	63
社会事業・社会病理・生活保護・救済 制度・慈善事業・水災・戦災・社会教化	63
引揚者問題	64
教育	65
民俗・風俗・習慣	67
国防・軍事	68
渡辺忍資料（各般）	69
近藤資料（追録・各般）	83
（他は全各項に分載）	

### 4 自然科学

自然科学	85
------	----

渡辺忍資料（各般）	85
-----------	----

### 5 工学

工学・工業・技術・家事	86
土木事業・河川	86
建築・建築史・工事請負	87
電気・電気事業	87
電気事業（岸資料）	88
、同（"・安達教授保管資料）	97
電気通信	99
海事工学	99
採鉱・冶金学	99
鉱業・鉱業経済	100
化学工業	100
繊維・染色加工・醸造・食品其他工業	101
三沢正美資料（地質・鉱物・鉱業）	101
" 鉱物誌・鉱物	103
" 採鉱	103
" 選鉱	105
" 鉄冶金・非鉄冶金	106
" 石炭	107
" 鉱業経済・経営	107
" 鑛業・燃料	109
渡辺忍資料（工学・工業）	109

### 6 産業

産業	112
農業	113
蚕糸業	117
畜産業	118
林業	119
水産業	119
商業（商工会議所・商工業）	121
交通（海運・道路・鉄道・航空・観光）	122
通信（郵便・電信・電話・放送）	125
渡辺忍資料（各般）	126

### 7 芸術

芸術	146
----	-----

### 8 語学

語学（朝鮮語学）	147
----------	-----

### 9 文学

文学	148
----	-----

## 追録

#### 分類

344	朝鮮総督府予算関係資料 （昭和9～20年度）	149
001	朝鮮総記・中央日韓協会資料	154
330 ～610	韓国銀行調査部刊行物・ 中央日韓協会受託保管	155
0～9	川崎文庫目録・川崎家保管	158
0～9	故稿廣重遠氏寄贈・東京教育 大学保管・朝鮮関係資料	162
0～9	財団法人友邦協会保管・ 録音テープ目録	164
0～9	"・原稿目録	166

× × × × × ×

編纂について 穂積真六郎

保管資料総目録について 1

朝鮮関係図書資料現在数調 1

参考—十進分類法 2

凡例 4

編集後記 166

日本十進分類法  
(NIPPON DECIMAL CLASSIFICATION SCHEME)

主 類 表  
(MAIN CLASSES)

- 0 総 記 General works
- 1 哲 学 Philosophy  
(哲学、心理学、倫理学、宗教)
- 2 歴 史 History  
(歴史、伝記、地誌、紀行)
- 3 社 会 科 学 Social sciences  
(政治、法律、経済、統計、社会、教育、民俗、軍事)
- 4 自 然 科 学 Natural science  
(数学、自然科学、医学)
- 5 工 学 Technology  
(工学、工業、技術、家事)
- 6 産 業 Productive arts  
(農林、水産、商業、交通)
- 7 芸 術 Fine arts  
(美術、音楽、演劇、運動、遊芸、娯楽)
- 8 語 学 Language
- 9 文 学 Literature

主 網 表 (百区分)

- 000 総 記
  - 010 図 書 館
  - 020 図 書 学
  - 030 百科辞書、索引
  - 040 論文集・講演集・雑書
  - 050 逐次刊行物・雑誌
  - 060 学会・博物館
  - 070 新聞・新聞学
  - 080 叢書・全集
  - 090
- 100 哲 学
  - 110 哲学各論
  - 120 東洋哲学
  - 130 西洋哲学
  - 140 心理学
  - 150 倫理
  - 160 宗 教
  - 170 神 道
  - 180 仏 教
  - 190 キリスト教
- 200 歴 史
  - 210 日 本
  - 220 ア ジ ア
  - 230 ヨーロッパ
  - 240 アフリカ
  - 250 北アメリカ
  - 260 南アメリカ
  - 270 オセアニア
  - 280 伝 記
  - 290 地誌・紀行
- 300 社 会 科 学
  - 310 政 治
  - 320 法 律
  - 330 経済・経営
  - 340 財 政
  - 350 統 計
  - 360 社 会
  - 370 教 育
  - 380 民俗・風俗習慣
  - 390 国防・軍事
- 400 自 然 科 学
  - 410 数 学
  - 420 物 理 学
  - 430 化 学
  - 440 天 文 学
  - 450 地質学・地理学
  - 460 生物学・人類学
  - 470 植 物 学
  - 480 動 物 学
  - 490 医学・薬学
- 500 工 学 ・ 工 業
  - 510 土 木 工 学
  - 520 建 築 学
  - 530 機 械 工 学
  - 540 電 気 工 学
  - 550 海事工学・造兵学
  - 560 採鉱冶金学
  - 570 化学工業
  - 580 繊維・その他の工業
  - 590 家 事
- 600 産 業
  - 610 農 業
  - 620 園 芸・造園
  - 630 蚕 糸 業
  - 640 畜産・獣医学
  - 650 林 業
  - 660 水 産 業
  - 670 商 業
  - 680 交 通
  - 690 通 信
- 700 芸 術
  - 710 彫 刻
  - 720 絵 画・書道
  - 730 版 画
  - 740 写 真・印刷
  - 750 工 芸・美術
  - 760 音 楽・舞踊
  - 770 演 劇・映画
  - 780 運 動・競技
  - 790 遊 芸・娯楽
- 800 語 学
  - 810 日 本 語
  - 820 中国語・東洋語
  - 830 英 語
  - 840 ド イ ツ 語
  - 850 フランス語
  - 860 スペイン語
  - 870 イタリア語
  - 880 ロシア語
  - 890 その他諸国語
- 900 文 学
  - 910 日 本文学
  - 920 中国文学・東洋文学
  - 930 英 米 文学
  - 940 ド イ ツ 文学
  - 950 フランス文学
  - 960 スペイン文学
  - 970 イタリア文学
  - 980 ロシア文学
  - 990 その他諸国文学

編 纂 に 就 い て

財団法人友邦協会は、昭和27年10月、戦災、引揚げ等のため散失した朝鮮統治関係の諸文献・資料の収集・保管・普及等を主な事業として創設され、翌28年、中央日韓協会の蔵書調査に着手、同31年、同蔵書の中、朝鮮関係書1,583冊の内容調査、並びにその分類整理を終わつた。又一方、別途に、関係各方面に呼びかけて関係諸資料の収集に努め、各位の御協力を得て、その数は、別掲の通り、1,032冊、1,248点に及んだ。そして、この合計3,863冊(点)の図書、文書等は、昨年4月までに一応の調査とその分類整理を終わり、本春その台帳と索引カードを作製した。

この事業は、右文献・資料の収集・保管とともに、その中、日本統治関係の稀少、かつ重要なものの保存とその普及とを図るため、これを「朝鮮統治関係重要文献集成」として再編纂している。

そのため保管諸資料の調査は、単なる整理上の調査に止めず、各著書・文書等につき、一々、精細な内容の調査を行つていたので、既に、着手以来、7カ年有余の歳月を費しているが、まだ完全に調査を完了したものではない。従つて、この「総目録」も、今後、資料の充足と調査の進捗とに相まつて、逐次、内容の充実と、分類の適正とを期して補正改版して行く計画である。

只、近来、この保管資料を利用する向きが非常に多くなり、殊に、朝鮮近代史を専攻している学究諸氏の多くから、しきりに「総目録」刊行の要請があつたのと、一つにはこの貴重な文献・資料を御寄贈下さつた篤志各位の御意志に副い、一日も早く一人でも多くの利用に供したい念願から、不十分ながら、この第一次編集を急いだ次第である。

この種の仕事は、全く表面に出ない地味な仕事ではあるが、実は、当協会としては朝鮮問題の研究向上のための基礎的な事業として、これに最も力を注ぎ、このようにして保管資料の普及に努めるものであり、一般関係各位のせつかくの御利用と、本事業に対する御協力、御叱正とを、この機会に御願ひする次第である。

尚、この調査、整理、編集には 主として近藤鋤一君が当り、多久安貞、岸謙両君が、これに参画している。

昭和35年5月

財団法人友邦協会理事長 穂 積 真 六 郎

保 管 資 料 総 目 録 に つ い て

この資料目録は、表記の両協会が保管する資料中、朝鮮に関係あるものを選沢し、NDC新訂6-A版の分類法を参考として適宜に配列したものである。必ずしも正確にこの分類法を守つたものでなく、編者の一方的な考え方で便宜的な配列となつた場合もあることをお断りする。

中央日韓協会が旧中央朝鮮協会より受けついで保管している図書類は、山県文庫(土師文庫、および旧中央朝鮮協会蔵書を含む)を主とし、これに同協会が近年来収集したものを含み、その合計冊数は1,583冊である。この外に植民政策関係の洋書、和書、および一般政治経済書など、この目録に収載しなかつたものは千数百冊に及ぶ。これは目下整理中である。

友邦協会の保管資料は、阪谷文書をはじめ丸山鶴吉・渡辺忍・中野宗一・三沢正美・川崎繁太郎(自家保管)・岸謙・近藤鋤一・萩原彦三・上滝基等諸氏の旧蔵に係るものを中心とし、これに近年来購入・受贈等により収集したものを含むものである。この合計は1,032冊・1,248点に上る。これらの数字を一覧表として、その内訳を示せば次の通りとなる。この表中、川崎文庫とあるのは、故川崎繁太郎氏の旧蔵書で、川崎俊郎氏が保管されているが特に利用を承諾されているものである。

なお、当協会では関係資料の所在調査を併せて行つており、今回は、東京教大所蔵の、故穂積重遠博士寄贈のものを収載した。

朝鮮関係図書資料現在数調(昭和35年1月1日現在)

項 目 別・冊(点)数	項 目 別・冊(点)数
山県文庫(旧中央朝鮮協会蔵書及中央日韓協会収集を含) 1238冊	中野宗一資料 132点
土師文庫 377冊	近藤鋤一資料(整理済の分) 150冊
中央日韓協会受託保管資料(韓国銀行等刊行物) 98冊	川崎文庫 110冊
中央日韓協会蔵書 合計 1,583冊	萩原彦三資料 17冊
~~~~~	上滝基資料 10冊
総督府予算関係文書 146冊	岸謙資料 168冊
渡辺忍資料 936点	近藤鋤一寄託及購入書 152冊
阪谷文書 180点	個人寄贈分・14口 31冊
三沢正美資料 182冊	団体寄贈分・8口 13冊
丸山鶴吉資料 53冊	合 計 1,032冊・1,248点
中野宗一資料 132点	合 計 3,863冊(点)

検索上の参考として日本十進分類法の主類表・主綱表を次頁に掲載した。



財団法人 友邦協会 保管  
社団法人 中央日韓協会

朝鮮関係  
文献・資料総目録

(第 1 版)

昭和35年 5 月

財団法人 友邦協会

1665368912=546

001  
71

財団法人 友邦協会 保管  
社団法人 中央日韓協会

朝鮮関係  
文献・資料総目録  
(第 1 版)

昭和35年5月

財団法人 友邦協会

# 朝鮮研究集成

近代史料

第 4 号

財政・金融関係  
重要文献  
特集

昭和36年12月15日

財団法人友邦協会  
朝鮮史料研究会

081-3-7(4)

5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4



001  
72

朝鮮  
近代史料

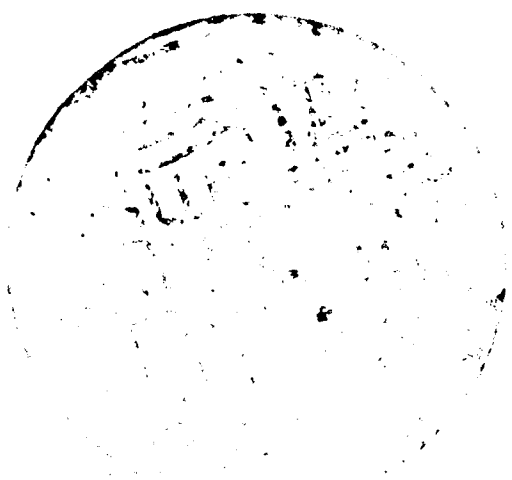
# 研究集成

第 4 号

財政・金融関係  
重要文献  
特集

昭和36年12月15日

財団法人友邦協会  
朝鮮史料研究会



序

穂 積 真 六 郎

友邦協会も創立既に十年に近く研究会も来年で五年目を迎えようとして居る。

此の間、近藤劔一氏をはじめ協会の方々の努力と研究会の学徒方の精進によつて十数巻の書籍の編纂と数千冊に及ぶ資料の蒐集をなし、研究会を開くことも百八十回に及び、識者方の講演も百に近くテーブルコードに収めて居る。

只遺憾なことは経費に乏しい為に仕事が進捗せず、又本年の二月協会の創立者であり大先輩である渋谷礼治氏を失つたことは大きな打撃であつた。

近藤氏をはじめ関係の方々は万難を排して事業に励進して居られるが、常に心に懸かることは協会が当初に朝鮮の「財政金融」と「電気事業」に関する資料の編纂に志しつつ二つとも未だに完成し得ないことである。

電気事業史の方は経費さえ補充し得れば資料はある程度纏つて居るのであるが「財政金融」の方は近藤氏が詳述して居らるる通り、最初関係者の参集を願つて一書した編集方針を建てたのであるが、中心となつて多くを担当して頂く方が急逝された為に

進みは停滯してしまつた。近藤氏は舌腐の結果、従来の方針を改めてこれ迄の調査研究によつて蒐集した資料と、史料研究会に発表される講演を基礎として重要文獻集成による「朝鮮財政金融史」の編纂を企図、これを協会で別途に計画している「朝鮮統治關係重要文獻集成」の一部門として編纂することにした。そしてこの方針で行けば各金融機關等が独自に編纂されるそれぞれの事業発達史とはまた異つた特色をもつ実証的な、かつ貴重な財政・金融史が出来得るという確信を得たのである。爾来「農業発達史」や「研究集成」の忙しい編集の間にも財政金融資料の蒐集に努めた。

この度編集された「研究集成」の第四号は、近藤氏のこの努力の現われであり、究極に於いて「財政金融史」の一部となるものである。

財政・金融発達史は今後もこの様な構想で編纂され、総括して一直した系統を持つ特殊な形式のものとなるであろうが、これは一般に行なわれるこの種発達史の著述方法とは別な意味で後世の好資料となる点も多くあることを信ずる。

只経費と人手が乏しいだけに近藤氏や学徒方の苦心困難は察するに余りあるが、昔ある人がニュートンに、「どうしてリンゴの落ちる位のこと地球の引力を発見したか」と聞いたとき、彼は「Always thinking into them」と答えたそうである。常に朝鮮研究一途に精進せらるる協会員並びに学徒の方々は、困難を克服してこの「財政・金融史」を大成し、尚進んで両民族将来の為に朝鮮の研究に努力されることを信じ且つ祈つて第四号研究集成の発刊を祝福する次第である。

(昭和三六・一二・五日記)

## 本特集の編纂とその内容

本号は最初の計画では宮田節子、姜徳相両君が協力して作製した「朝鮮財政・金融総年表」と「同調査資料総目録」を中心に編集し、本年三月発行の予定であつたが、丁度その前二月末、当研究会の運営に非常に力を注いでおられた渋谷礼治先生が死去されるなど種々の事情のためその編集が遅れ、結局、この「朝鮮財政・金融關係重要文獻特集」号として出すことになつた。もともとこの文獻は、本号に収載を予定していたもので、これは財団法人友邦協会が「朝鮮財政・金融発達史」編纂のため選集した資料の中、研究上、特に必要と認められているものの一部である。

同協会の保管するこれらの資料(特にその中でも「朝鮮総督府予算文書」)は朝鮮に於ける日本の總督統治研究上、極めて貴重なものであり、同協会では、朝鮮近代史を専攻する学究のため特に閲覧利用を許しているが、その閲覧利用者の数は、ここ五年間に百名を越え、その複製普及が等しく要望されてきた。本誌はこの要望にこたえて第一号創刊以来「第八十五回帝國議會説明資料」を「總督統治終末期の史談」と題して連載してきたが、本号をもつてその全編を収載した。

昭和十九年度朝鮮總督府予算について」は、敗戦のため刊行出来ず、原稿のまま宮田直昌氏が保管されていたものをはじめて本誌に発表して下さつたものである。本



稿は昭和十八年の暮に召集された第八十四回帝國議會を通過した朝鮮總督府予算の全  
部であり、前記、第八十五回帝國議會の説明資料と併わせて、太平洋戦下終末期に於  
ける朝鮮の真相を研究する上に極めて貴重かつ權威ある文献である。私はこの文献の  
普及により、同時期における朝鮮の研究に一つの画期をもたらし得ることを期待  
する。

相川、日浅、上原、古庄、伏見の五氏を煩わした金融関係の五稿も極めて重要な文  
献である。殊に貴重なことはそれぞれの統計が昭和二十年の殆んど終戦時に至る迄の  
ものが示されていることで、私は、相川、日浅両氏が本稿執筆のため、その調査に奔  
走しておられた御苦勞を承知しているだけに感謝の念も一入に深い。上原氏の原稿は  
總督府の政策と表裏共合の關係にあつた朝鮮殖産銀行の業態を巧みな要領で纏めたも  
のである。そしてその歴大な公共融資を中心とする業態を通して朝鮮統治の全貌に触  
れることが出来るのは、それ自体が、朝鮮統治の特異性を意味するものである。一つ  
の銀行も持たなかつた朝鮮に近代的な金融機構が生まれ、その中で数多い無尽会社が  
育ち、近代的な信託会社が生まれた。それが又、戦争という至上命令によつて一社に  
統合され、朝鮮は見事な官僚統制の見本を日本内地に示した。そして日本は自らの手  
で育てたものを悉く、自らの手で失くして朝鮮を引き揚げてきた。

ともあれ、この研究集成一卷を読めば、李朝末期から併合へ、更に常時から戦時、  
引揚げへと、さながら朝鮮統治三十六年の全期全貌を見るが如き編集を試みた編者の

(2)

苦心の程を賣つて頂きたい。

善生博士の「朝鮮の契」は、私がここで述べる迄もなく非常に貴重な文献である。  
博士の手許にもこの原本一冊しかなく、私の知る範圍では国会図書館と昭和女子大の  
図書館にしか見当らない。最近、末松博士が古本屋から入手されたとかきいているが、  
それはさておき、朝鮮の契を知らなくて朝鮮社会を語ることは出来ないと言われ  
る程、契の研究は朝鮮社会の研究と密着しているものである。複製を許して下さつた  
博士に対し、心から感謝する次第である。

私の計画では、本号は前記総年表と資料とを中心に、朝鮮財政金融の総説的編集を  
行なうつもりで、水田文書の研究と、故渋谷氏の朝鮮銀行を中心とする旧外地金融活  
動の概観に期待していた。それが、水田氏が最も力を注がれたと言われている「昭和  
財政史・外地編」大蔵省編の発行が思つたより遅く、同稿との照合研究が遅れた  
ことと、渋谷氏の逝去によつて、全く計画の変更を余儀なくされてしまった。その他  
本号に予定したものに、高久敏男氏の「朝鮮の貨幣」と丸中徳三氏から頂いた朝鮮貯  
蓄銀行関係の資料とがあつたが、何れも整稿が間に合わず他日を期することにした。  
御了承を乞う次第である。

朝鮮財政・金融史の編纂を老いの一筋にかけておられた渋谷礼治先生は、本年二月二十七日、その完成を見ず、忽然と  
してなくなられた。この一書を捧げ、後事を誓つて心から冥福を祈るものである。

昭和三十六年十一月

近 藤 銀 一

(3)

「朝鮮財政・金融発達史」の編纂経過

財団法人友邦協会では昭和三十年、鈴木武雄教授を中心に「朝鮮財政・金融発達史」の編纂計画をたて、以来六年有余、總積理事長が先頭に立つてその資料の調査、収集に当り、予期以上の成果を収めている。

しかしながら、当初の計画は遺憾ながらまだ実現に至らず、改訂を余儀なくされている。それは、当初の計画では、旧朝鮮関係の当事者、経験者、専門家等を中心に、それらの人々の体験を通じてこの発達史が書かれる予定であつたが、その執筆予定者達は非常に高齢の人が多く、その後他界された人達も既に数人を数えている。殊に、この編纂計画を非常な熱意をもつて推進されていた山口重政、渋谷礼治両氏の死去はこの計画に大きな影響を与えた。

更に一つ、この計画を再検討させるに至つたのは、当協会の学究機関としての異常な発展であり、同時にその保管資料利用者の激増である。

当協会が昭和二十七年創立以来調査、収集した文献・資料は約五千に及び、それらの資料には極めて貴重なものが多い。そして近年に於ける朝鮮近代史研究の勃興は、多くの学究達の目を、この文献・資料に注がせるようになり、昭和三十三年五月、当

協会内に都下の大学・大学院の学生有志を中心とする「朝鮮史料研究会」が開設され、その研究集会は總積理事長を主宰として毎週水曜日、既に百八十回に及ぶ盛況を見せている。

この友邦協会の学究機関としての発展傾向は、この種資料が非常に乏しく且つ研究上非常に必要なことを示すものであり、同時に、当協会にこの朝鮮関係資料の乏しい現状に対応すべき編纂事業の在り方を考えさせたのである。

ここに於いて当協会は、本発達史の編纂方針を改めて、収集資料の中、研究上特に必要と認められるものは、凡ゆる機会を通じてこれを発表、又は刊行して出来るだけ早く普及を図る立て前で臨むことにした。そしてこの方針は、朝鮮近代史研究の向上に寄与せんとする当協会の本来の任務でもある。

この新しい本発達史編纂の方針は、その編纂の方式を変えるのみのもので、決してその内容の変改ではない。これを単的にいうならば、その発達史の編纂完了を待たずに、この編纂のため収集した諸資料を重要なものから、個別、又は同種のことを適宜に編集して刊行して行く方法である。勿論、各巻の編纂は体系的な計画のもとに行なわれ、そしてその個別又は同種編纂によりその全部の編纂を完了したときは、これを「朝鮮財政・金融関係重要文献集成」として取り纏め、実質的には文献集成による、「朝鮮財政・金融発達史」を完成させる計画である。なおこの編纂方針は、本発達史

にのみ適用するものでなく、従来既に各部門に於ける重要文献の編集にはすべてこの方法がとられており、この各部門別文献集成を大集成して「朝鮮統治関係重要文献集成」を完成することが、当協会編集事業の最終的な目的である。

× × × × × × × ×

この機会に、本発達史編集の進捗状況を中間報告して置きたい。

(左記編成並びに題目は鈴木武雄教授の立案に依るものである。)

(※印は発表または刊行したもの)

一 旧来の朝鮮経済とその機構

朝鮮の貨幣Ⅱ高久敏男氏原稿、外にテープ一卷

※ 朝鮮の契・善生永助Ⅱ本号所載。その他善生教授の「朝鮮の商業」外録音テープ二巻。資料多数。)

二 李朝末期における財政と金融

姜徳相君を中心に研究会で十数回討論された。(資料多数。)

三 日智田顧問による財政整理と通貨金融制度の確立

同右。 ※大三輪案例についてⅡ本集成第2号収載。

三 近代の通貨金融制度の発展

同右。(資料多数。)

五 朝鮮における第一銀行(韓国銀行創設まで)

宮田、姜尚君が第一銀行調査部の厚意で主要な研究を行った。(資料有)

六 農工銀行の創設とその事業(手形組合、漢城倉庫会社その他を含む)

資料少なく、当協会が発行した「保護と併合」の同項記事が各方面で引用されている。

七 金融組合制度の創設と地方金融の疎通

大熊氏の講義(テープ収録)を依頼。同組合の詳細を知る資料は比較的乏しいが、昭和二十年最終期迄の貴重な統計書

(営業状況)を入手している。一般的な資料は多数。

八 中央銀行の創設と朝鮮銀行

星野喜代三氏の講演(テープ収録)依頼。

資料多数なるも渋谷氏死去のため調査未了。

九 朝鮮殖産銀行とその事業

※ 朝鮮殖産銀行・上原理夫Ⅱ本号所載。金谷要作氏の講演七回(テープ収録)

一〇 東洋拓殖株式会社

※ 東洋拓殖株式会社・青木香代子Ⅱ本集成第3号に収載。貴重な同社の文書を手に入れているが整っていない。研究会で屢々討論した。関連問題として、

※ 日本治下に於ける所謂「駅屯土」問題・権寧旭Ⅱ本集成第3号収載の外、研究会で同問題に対し、同君の問題提起が再三行なわれた。又、神尾武春氏から「宮三面」問題の詳細をきいている。

一一 朝鮮貯蓄銀行及び朝鮮信託会社、朝鮮無尽会社の創設

貯蓄銀行は纏った資料が殆んどない。但し終戦後、同行の整理に当たっている丸中氏から、あるだけの資料は頂いた。

※ 朝鮮信託会社・伏見寛次Ⅱ本号所載。

※ 朝鮮無尽会社・古庄逸夫Ⅱ本号所載。

一二 朝鮮に於ける普通銀行

※ 日本の支店銀行・相川尚武Ⅱ本号所載。

※ 地元の本店銀行・日浅不加之Ⅱ本号所載。

一三 朝鮮産業の開発と金融機関

金谷要作氏の講義(テープ収録)。その他資料多数。

一四 朝鮮總督府財政の發展

※朝鮮財政・金融史談・水田直昌氏、土屋喬雄教授の対質原稿四百字詰七七七枚（九冊）一部本集成号1・2号収載。  
その他總督府文書、約二百点。「水田財務局長講演集」等多数。

一五 地方財政について

※朝鮮の地方制度・故富永文一（本集成第2号）に収載の外、同氏、萩原彦三氏等から四度の講演をきいた。テープ収録。

一六 内地財政の寄与

一 一六項の水田文書等。その他資料多数。

一七 統制・整備の發展

※昭和十九年度朝鮮總督府予算について・水田直昌（本号所載）。

※第八十五回帝國議會説明資料（本集成第1・2・3・4号所載）。その他總督府予算文書等、貴重資料多数。

一八 朝鮮經濟の發展並びに近代化に及ぼせる財政・金融の役割  
資料多数。

以上の通りで、その進捗状況は、資料の収集、調査、研究、普及を通じて、六カ年の業績としては、極めて大なるものである。その上この間、他の重要文献十八卷（六千頁）の編集・刊行を行ない、重要資料テープ約百卷（二百時間）を収録したのである。只、本発達史を繼めて刊行出来なかつたのは、局部的な資料の欠除のためで、現在は昭和十七年以降の資料の体系的な調査に努力を注いでいる。

近藤 鋳一・昭和三六・一一・二七記

朝鮮近代史料研究集成・第4号。目次

朝鮮近代史料研究集成・第4号。目次	別1
一、朝鮮の治政。目次	別1
二、昭和十九年度朝鮮總督府予算について（朝鮮財政關係重要文獻）	別1
三、第八十五回帝國議會説明資料（總督統治終末期の事態）（朝鮮總督府財務局文書）	別2
四、同上 戦時重要統計目次	別5

一、水田文書（朝鮮財政關係重要資料）について	近藤 鋳一 別7
二、昭和十九年度朝鮮總督府予算について（朝鮮財政關係重要文獻）	水田 直昌 1
三、第八十五回帝國議會説明資料複製總督統治終末期の事態（四）（朝鮮總督府財務局文書）	51
四、朝鮮に進出した日本の銀行（朝鮮に於ける日本の支店銀行）	相川 尚武 117
五、朝鮮に於ける 普通銀行の創生と發展の過程	日浅 不即之 129
六、朝鮮殖産銀行（創設の意義と公共融資を中心として）	上 原理 夫 149
七、朝鮮に於ける無尽業の発達	古 庄 逸 夫 196
八、朝鮮信託株式会社	伏 見 寛 次 211
九、朝鮮の契（朝鮮總督府調査資料第十七輯）	善 生 永 助 225
一〇、朝鮮史料研究会 研究集会摘録	396



凡 例

- 一、文献の複刻には原文・原字を損なわないように努めたが、常微的な誤字、誤植、又は、はつきり計算上の誤りと判る計数などは訂正した。
- 二、「総督統治終末期の史態」Ⅱ（第八十五回帝国議会説明資料）は前号迄は原本のカタカナをひらがなにし、また新カナ使いに直したが、本号は原本そのまゝにした。戦時中の粗末な謄写印刷のため不明の部分が多かつたが、それらの箇所は、他の資料と照合調査して正確を期した。
- 又、同篇の頁（51・116頁）の箇所の真ん中の数字は、同資料を全編に纏めた別冊「朝鮮の治政」と同時に印刷したためのもので、本編とは関係のない不要のものである。御了承を乞う。

太平洋戦下  
終末期に於ける

朝鮮の治政・目次

（付・第八十五回帝国議会説明資料所載）  
戦時重要統計目次

一、水田文書（朝鮮総督府財政関係重要資料）について……………近藤 一（別7）

朝鮮総督府  
重要文書  
……………

- 一、昭和十九年度総督府予算について……………水田 直 昌（1）
- 二、第八十五回帝国議会説明資料……………朝鮮総督府財務局作製……………（51）

昭和十九年度総督府予算について……………

（1）

内 容 細 目

一、総 説……………一

決戦非常措置の決定と予算への影響

二、十九年度予算の大要……………三

三、十九年度の歳入予算について……………四

歳入の大要―支出増加に対する財源―増税

計画―資本利子税―第三種所得増徴と地

四、十九年度歳出予算について……………一二

小磯施政の重点―新規要求事項―重要鉦

物等緊急物資増産対策・A 無煙炭 B 小

型熔鉦炉 C 物動物資 D 金鉦山整備

E 鉄鉦石増産 F 輕金屬原料 G 舌汁増

産・塩需給関係 日松炭油増産 I加里・大麻・鹽工品・タンニン等―財団法人朝鮮研究所発足―食糧増産確保 農林政策の概要・農村対策 徴兵制度実施対策 戸籍・兵事事務整備―青年特別訓練令―青訓別科―軍務予備訓練所―在滿朝鮮人青年訓練―海軍志願兵制度 国民動員・防衛対策 貯蓄奨励・愛国債券・貯蓄奨励・国民所得 教育状況・女子特別奨励 輸送力増強対策 行政機構改革 昭和十八年末機構改革―出先機関統合・廢止―中央部局の改廢 私鉄買収・海運―木造船動員 戦時教育非常措置 農事並びに水産試験機關の整備・統合 下級官吏の待遇改善 邑面職員増強―朝鮮人官吏の加俸 五 本議會通過法案と議會の様相

決戦非常措置十五項 朝鮮への関心 第八十五回帝國議會説明資料 (總督統治終末期の事態) 第一治安概況 一、鮮内一般民心ノ動向 二、食糧、勞務供出ニ伴フ民心ノ特異動向 三、參政權問題沿革及之ガ最近ノ状況 四、鮮外不逞鮮人ノ動向 五、徴兵制度実施ニ伴フ民心ノ動向 六、主義運動ノ状況 七、学徒思想傾向及學校事件 八、学徒動員及之ニ關聯スル学徒ノ動向 九、外課事件 一〇、ソ聯ノ對鮮諜報謀略活動ノ状況 一一、中國共產八路軍ノ對鮮諜報謀略活動ノ状況 一二、米英並ニ重慶側ノ對鮮諜報謀略活動ノ状況 一三、ソ聯系外課事件檢査表 一四、中國系外課事件檢査表

一〇、經濟事犯ノ趋向ト之ガ対処方針 一一、糧穀供出ノ農民ニ与ヘタル影響 一二、食糧其他生活必需物資減少ノ民心ヘノ影響ハ六 一三、勞務動員ノ民心ヘノ趋向ト之ガ指導取締 第二食糧事情 一、最近ノ食糧事情 二、朝鮮ヲ中心トスル對内地滿洲食糧交流 實施状況 三、食糧ノ消費規正ト配給状況 四、非常用糧穀ノ備蓄状況 五、水稻植付状況 六、麦類ノ賣上状況 第三食糧事情・付属事項 一、朝鮮塩ノ輸送ニ對スル内地置籍船ノ配船ニ關スル件 二、山東東岸塩ノ我克輸入ニ關スル件 三、煙草―隣保組織ニ依ル得失 第三航空機關係資材ノ生産状況 一、アルミニウム・マグネシウムノ生産状況 二、合板生産状況 第四鉄鋼石・石炭、木材其他生産力増強ノ状況

一、鉄鋼石生産力増強ノ状況 二、小型熔鉱炉鉄鉄生産状況 三、最近ノ石炭生産状況 四、朝鮮ノ石炭ノ需給状況 五、最近ニ於ケル石油ノ需給状況 六、木材生産力増強ノ状況 七、本年度木材生産ノ見透 八、化学肥料ノ生産状況及之ガ需給關係 九、セメント製造業ノ現況及將來ノ方針 一〇、鑛狀黒鉛生産状況 一一、螢石生産状況 一二、塩ノ生産状況 一三、塩ノ需給状況 一四、苦汁生産状況 一五、電源開發現況及將來ニツキ 一六、電力需給ノ現況及將來ニツキ 一七、輕金屬工業ト電力トノ關係 一八、電氣料金ニツキ 一九、朝鮮電業及鴨綠江水電ノ現況 二〇、非常時電力対策 二一、国有送電施設 二二、朝鮮電業、鴨綠江水力ニ對スル軍需生産責任制ノ實施

三 配當事業ノ統制	一四一
五 朝鮮人ニ対スル徴兵検査施行ノ状況	一四二・五二
一 徴兵適齢期ノ状況	一四二・五二
二 壮丁ノ調査ト之ヲ把握	一四三・五三
三 徴兵検査ノ実施状況	一四三・五三
四 現役兵入営準備	一四四・五四
五 在外朝鮮人徴兵検査ノ結果	一四五・五五
六 労働事情	一四六・五六
一 最近ニ於ケル朝鮮ノ労働事情	一四六・五六
二 国民徴用実施状況	一四七・五七
三 朝鮮人労働者ノ鮮外送出状況	一五二・六二
四 軍要望ニヨル労働者ノ送出状況	一五五・六五
五 労働者ノ訓練状況	一五七・六七
六 勤労援護ニ対シ如何ナル施設ヲナシ居ルヤ	一五八・六八
七 学徒勤員ニ対スル状況	一五九・六九
一 学徒勤員ニ対スル件	一五九・六九
八 輸送力ノ現状	一六一・七二
一 朝鮮鉄道輸送ノ現況	一六一・七二
二 転嫁貨物輸送ノ計画ト実績	一六三・七三
三 貨物輸送量ノ激増ニ対シ採リタル方策	一六七・七七

四 大陸鉄道一貫経営ニ対スル所見	一六八・七八
五 南鮮諸港湾ノ吞吐能力並ニ輸移出入貿易貨物噸數	一六九・七九
九 防衛準備ノ状況	一七二・八二
一 防衛一般対策状況	一七二・八二
二 警備対策ノ状況	一七三・八三
三 防空対策ノ状況	一七四・八四
四 電信電話施設非常措置	一七五・八五
五 放送非常措置	一七八・八八
六 鉄道防衛準備ノ状況	一八〇・九〇
七 貯蓄奨励ノ概況	一八三・九三
八 貯蓄増強上実施中ノ重要事項	一八四・九四
九 附、朝鮮ニ於ケル貯蓄目標決定ノ根拠	一八六・九六
一〇 支那及滿州ヨリノ送金状況	一八九・九九
一 最近ニ於ケル鮮銀券ノ膨脹原因	一九〇・一〇〇
二 昭和十八年末現在ニ於ケル朝鮮人國語普及状況	一九四・一〇四
三 最近ニ於ケル朝鮮ノ人口事情	二〇〇・一一〇

第八十五回帝國議會 戰時重要統計。目次

一 徴兵検査受検者總數	一六五
二 累年別思想犯檢舉件數・人員表	一六七
三 昭和十八年八月現在、内地大学専門學校、中學校在學者數	一七一
四 重要外諜事件檢舉數・被害状況(文中)	一七七
五 ソ聯系外諜事件檢舉數(昭一九・八月調)	一七九
六 中國系	一八一
七 日・滿・鮮食糧交流實施状況	一九一
八 米・麦類生産費調・内地比較(玄米石当)	一九三
九 麦類石当	一九四
一〇 水稻植付状況(昭一九・七・三一現)	一九五
一一 広梁湾ヨリノ塩輸送計画	一九七
一二 朝鮮回送塩内地船配船状況	一九八
一三 山東塩我克横輸入実績(昭一九)	一九九
一四 状況(昭一九)	二〇〇
一五 アルミニウム・マグネシウム生産状況 <sup>1</sup> 設備 <sup>2</sup> 生産	二〇三
一六 合板生産状況	二〇六
一七 合板工場・生産能力	二〇七
一八 昭和十八年度生産実績・昭和十九年度生産責任數・生産目標數	二〇九

一 昭和十九年度第一・四半期滿洲別生産責任數・生産目標數・生産実績	二一〇
二 昭和十九年度第一・四半期生産拡充實施計	二一一
三 小型熔鋸用コークス入荷状況	二一二
四 昭和十八年度石灰生産実績	二一三
五 昭和十九年度第一・四半期石灰生産実績	二一四
六 石灰移入計画對実績	二一五
七 第二・四半期石灰移入計画對実績予想	二一六
八 昭和十九年度木材生産計画表	二二〇
九 第一・四半期分別原木生産実績	二二一
一〇 用途別	二二二
一一 化学肥料生産能力・生産計画表(昭一九)	二二四
一二 鱗狀黑鉛生産見込	二二七
一三 螢石	二二八
一四 天日塩生産状況(昭和一九年度)	二二九
一五 朝鮮電業KK現勢(第二回決算概要)	二三五
一六 鴨綠江水力電氣發電計画概要	二三六
一七 〃 KK昭和十九年三月末決算状況	二三七
一八 国有送電線施設表	二三九

一、電力生産責任制指定量・実績	朝鮮電力	一四〇	一、防空資材準備状況	朝鮮内資金撤布状況・国民所得	一八二・九
二、朝鮮電力、鴨綠江水電生産責任量	鴨綠江水電	一四一	二、朝鮮内資金撤布状況・国民所得	貯蓄奨励実施額調	一八六・九六
三、徴兵検査予定通令者届出状況	（文中）	一四三・五三	三、昭和三十八・十九年朝鮮銀行券発行高	満州、支那カラノ送金流入状況	一九一・九八
四、	検査結果	一四四・五四	四、満州、支那カラノ送金流入状況	（文中）	一九三・一〇三
五、現員徴用実施前後ニ於ケル勞務移動及	現員徴用状況	一四九・五九	五、国語普及状況	男女別	一九五・一〇五
六、現員徴用前稼働率比較	重要工場・事業場勞務者用特配食糧	一五〇・六〇	六、	国語ヲ解スル朝鮮人（府郡別比較）	一九六・一〇六
七、	作業用必需物資配給数量	一五一・六	七、	十万以上居住都市国語普及率表	一九七・一〇七
八、内地・樺太・南洋移入朝鮮人勞務者	渡航状況	一五二・六二	八、	道別国語普及率表	一九七・一〇七
九、	軍要員送出状況	一五三・六三	九、	国語ヲ解スル朝鮮人累年比較表	一九八・一〇八
一〇、	戦死者数	一五六・六六	一〇、	昭和三十九年人口調査ト昭和十五年国勢調査比較	一九九・一〇九
一一、	大学・専門学校・学徒動勞動員実施概況	一五六・六六	一一、	昭和三十九年人口調査ト昭和十八年末現住戸口調査トノ比較	二〇三・一一三
一二、	中等学校	一六〇・七〇	一二、	朝鮮外ヘノ移動人口	二〇五・一一五
一三、	旅客輸送量・貨物輸送量	一六二・七二	一三、	朝鮮人ノ出生・死亡・自然増加	二〇五・一一五
一四、	昭和十七年度大陸輸送貨物輸送品名別実績	一六三・七三	一四、	朝鮮ニ於ケル内地人ノ出生・死亡・自然増加	二〇六・一一六
一五、	昭和十八年度	一六四・七四	一五、	内地ニ於ケル内地人ノ出生・死亡・自然増加	二〇六・一一六
一六、	昭和十九年度第一・四半期	一六五・七五	一六、		
一七、	港灣吞吐能力	一六九・七九	一七、		
一八、	輸移出入貿易貨物屯数表	一七〇・八〇	一八、		
一九、	防衛・特別警察隊編成表	一七四・八四	一九、		
二〇、	電信、電話非常措置	一七七・八七	二〇、		

別6

# 水田文書（朝鮮總督府財政關係重要資料）について

近 藤 釵

水田直昌氏（現全国銀行協会常務理事）は、朝鮮總督府の司計課長、財務局長在任期間を通じて、「予算の水田」と言われた程、朝鮮總督府予算に關係の深い人である。世間では水田氏のことを「朝鮮財政通」とよぶ人があるが、水田氏の場合、それは単なる「財政通」ではない。水田氏は朝鮮總督府の予算を編成し、朝鮮の財政を運営してきた当事者であつて、いわゆる通というような程度のもではない。二十年という長い朝鮮の台所を自ら切り盛りしてきた人である。

その在官経歴も官吏としてはめずらしく財務局一本という特異なものである。

氏は大正十年東大を卒業、大蔵省理財課に入つて税務署長などを歴任、同十四年、朝鮮總督府財務局の理財課事務官に転じられた。昭和二年司計課長になり、予算、決算に手を染めたのが始まりで、その後二十年間というもの、全く朝鮮總督府予算と取り組んで来られたのである。その間、昭和十二年財務局長に昇任、税制、金融、理財の總督府財務全般を管掌、指揮する立場に立たれたが、依然、予算の編成は、殆んど



氏自らが手がけていた。それは当時、水田氏の部下として部内にいた人達も認めていることであるが、現在私の手許にある「総督府財務局文書」等を見ると氏自らの入念な補正、加筆が到るところに行なわれていることから容易に窺われる。更に、氏は朝鮮総督府予算一筋にその半生を捧げてきた人であり、又このような例は、転出、転任の頻繁なことが普通の官吏としては、極めて稀なことである。このことは氏が余程上下の信望をあつめ、その財政的手腕を信頼されていた証拠であるように思える。

ともあれ、日本の朝鮮統治三十六年、その間、半ば以上の二十年間、つまり昭和の全期間に亘る総督府予算は氏によつて編成されて来たのである。しかもその期間は、種々の論議は別として、ともかく、朝鮮近代化の達成期であり、統治史上、画期的な発展を見たときである。もしも総督統治がそのような不幸な結末に終わらなかつたとするならば、氏こそ朝鮮に近代的な繁栄をもたらした大功労者であつたであろうことを考える。実際氏は誠実と努力の人であり、朝鮮民族に対する考えも、決して支配者のもつそれではなかつた。

昭和三十年、穂積真六郎理事長の提唱により財団法人友邦協会では「朝鮮財政・金融発達史」を編集することになり、私はその資料集めを仰せ付かつた。以来六年私は、「総督府予算文書」の分析と、水田氏の執筆、講演になる文献・資料の探索、研究に没頭している。

私がここで「水田文書」というのは、その研究・編集のため、現在水田氏から拝借している同氏保存の財務関係資料のことである。それは「水田財務局長講演集」と題するパンフレットの綴りと、「昭和十九年度朝鮮総督府予算について」と題する未刊行の原稿（今度本書に収載させて頂いた）、それに終戦後、水田氏が土屋喬雄教授の乞いにより対質口述された「朝鮮財政・金融史談」（未刊行原稿）の三点で、何れも貴重な文献である。参考までにその内容を示すと、

- 一 昭和十四年度朝鮮総督府予算に就て （中央朝鮮協会・一四・四・六）
- 一 時局下に於ける金融経済に就て （大邱公会堂・一四・七・一六）
- 一 戦時下朝鮮事情 （鶴見総持寺・協和会・一五・三・二六）
- 一 昭和十五年朝鮮総督府予算に就て （中央朝鮮協会・一五・四・八）
- 一 朝鮮の一般事情に就て （東日会館・日本工業会・一五・四・一一）
- 一 昭和十五年度朝鮮総督府予算に就て （銀行集会所・朝鮮金融団大会・一五・五・二四）
- 一 ” （朝鮮ホテル・朝鮮実業クラブ・一五・五・二八）
- 一 昭和十六年度朝鮮総督府予算に就て （中央朝鮮協会・一六・四・一八）
- 一 朝鮮の一般事情 （関西経済クラブ・一五・四・九）
- 一 勝ち抜く力 （京城放送局・一七・五・八）
- 一 昭和十六年度朝鮮総督府予算に就て （朝鮮実業クラブ・一六・五・二六）
- 一 吏道ニ就テ （第十回税務講習会・一六・七・八月）

- 一 昭和十七年度朝鮮總督府予算に就て (中央朝鮮協会・昭一七・四・九)
- 二 躍進半島の諸問題 (總督府第一会議室・昭一七・七・三一)
- 三 昭和十八年度朝鮮總督府予算に就て (中央朝鮮協会・昭一八・四・二三)
- 四 小磯総督の施策と昭和十八年度朝鮮總督府予算に就て (第二回朝鮮金融団大会・昭一八・五・一三)
- 五 昭和十九年度朝鮮總督府予算に就て (原稿) (中央朝鮮協会・昭一九・三・二九)
- 六 朝鮮財政・金融史談 (原稿四百字詰七七枚・土屋喬雄氏対質口述)

以上十八件題のものである。

「水田財務局長講演集」は、總督府時代から水田氏の側近に居られた藤原宗太郎氏が、在鮮以来入念に整理、保存して来られたものである。又、「昭和十九年度朝鮮總督府予算に就て」は、敗戦のため印刷が出来ず原稿のまま保管されていたものを、今回特に本書に収載させて頂いたもので、今迄は不世出のまま埋もれていた總督統治終末期研究上必須の文献である。終戦後の朝鮮に関する調査研究は、この種終末期の資料が殆んどないため非常に低調、渋滞を来しており、この刊行は多くの学究達の要望に応えたものである。この意味から、本書が、今後の日本の朝鮮統治史研究上及ぼす影響は大きいものと考ええる。

「朝鮮財政金融史談」は、土屋喬雄氏が「日本商工史」編纂のため、昭和二十八年十月から翌二十九年二月にかけて水田氏の口述を得られたもので、実に四百字詰原稿用紙七百七十七枚に及ぶ大原稿である。

水田氏は大蔵省の昭和財政史編集室から「朝鮮の財政編」の執筆を委嘱され、その大稿は本年二月、東洋経済新報社から刊行された「昭和財政史・旧外地財政・上巻」に収載された。氏自身、快心の執筆とされているが、「朝鮮財政・金融史談」も亦、氏の体験と思考が虚心坦懐に語られ、しかもそれが水田、土屋という当代の両權威の対質によつて行なわれている点、前記「昭和財政史」の大稿と並ぶ貴重な資料である。この「朝鮮財政・金融史談」の一部は、両氏の御了承を得て、穂積真六郎氏の主宰される朝鮮史料研究会の機関紙「朝鮮近代史料研究集成」第一・二号に分割掲載されているが、何れ当編集会が、全編を纏めて刊行する予定である。

近代朝鮮の財政史研究上至宝の存在である水田氏は、その終戦後の著述研究の業績が示すように、もともと学究的な人である。

朝鮮近代史の研究を志す者にその基礎知識として私が必ず一読を奨める文献に朝鮮總督府稿本の「李朝時代の財政」がある。そして私は終戦後この本を、既に四、五十名の若い学究達に貸し与えて来た。実はこの稿本も、水田氏の丹精の書である。水田氏は前記「史談」の中でそのことを次のように述べておられる。『要約』

「実は早く課長をやめて嘱託にでもなり、朝鮮の財政史は自分の手でやるがよいと考えその資料を集めました。局長になれと言われ、爾来収集が出来ないので、竹沢さんに頼んで足りないところを集めて貰いました。財務局長時代、朝鮮の財政を見る

には、その以前のことが必要だというので季朝時代の財政を翻訳して貰つて限定版で出し……と言つておられる。

又その文中、「資料を九割程集め」——それを引き揚げのため置去つて来たことを惜しんでおられるが、それによるとこの本はまだ未完成の稿本で、同氏は更にこれを完璧なものにするため研究を続けておられたものである。

総督府予算文書などを見ていて気が付くことは、同じ一つの事項について、その所管部局の立場々々が、全く対照的に述べられていることである。例えば、食糧事情に關する農林当局の立場とその取締り当局である警務局の立場などがいい例である。一方では円滑といい、一方では不円滑で取締りの強化が必要だと言っている。これは予算獲得のための自己主張と思われるが、このような場合、財務当局は、それを公正に評価しなければならぬ立場にある。言わば総督府行政の大目付役であつて、その意味からも、私は水田氏の所説を重視するとともに、大きな信頼を寄せている。そしてその實際家としての造詣を学問的に体系づけようとしておられる努力に対し、心から敬服している。

(昭和三六・一一・二〇・稿)

別 12

# 朝鮮財政關係重要文獻

## 昭和十九年度朝鮮總督府予算について

(1)

元朝鮮總督府財務局長

水田直昌

目次	
一 総説	1
二 十九年度予算の概要	3
三 十九年度の歳入予算について	4
四 十九年度の歳出予算について	12
五 本議会通過法案と議会の様相	41

昭和19年3月29日  
中央朝鮮協会講演筆記  
(水田直昌氏原稿保存)

# 昭和十九年度 朝鮮総督府予算について

水田直昌

## 一、総説

昭和十九年度朝鮮総督府特別会計を中心として、この年度、朝鮮に於てはどのような施設が行なわれるかということにつき、その概略を申し上げます。

十九年度の予算は決戦議会の名にふさわしく、早くも二月のはじめに決つたのであります。

大体、十九年度予算は昨年の十一月から十二月に亘つて編成されたものでありますから、戦争最中の現在、その内容が実行中にある程度変更されることは、当然考え得ることでもあります。十八年度におきましても、当の予算は十六億千五百余万円でありましたが、この議会で五千六百余万円の追加予算が成立し、総額十六億七千余万円という数字になつたのであります。十九年度の予算は、成立してまだ実行に入らな



## 2. 十九年度予算の概要

い中、昨年十二月末に政府に於いて決戦非常措置が決定になり、その為、朝鮮の予算で見ますと、享楽面の整理等があり、租税収入では二千六百万円の減収であり、輸送力強化のため、鉄道旅客を制限するという事に決定せられた結果、鉄道収入約五億の中、四千六百万円の減収が予想されるというように、時局は寸刻の苟安も許されない刻々に変化する情勢にありますことは、予算の方面に於いても、第一線と同じ思いがするのであります。なお、物動計画につきましても、十八年度は大体物動の爲に予算を組み直す必要は無かつたのでありますが、十九年度は、昨年の十二月、大略決定された物動計画を基礎として予算を編成したのでありますが、御承知の通り、第一線の戦争は益々苛烈になり、昨年十二月決定の物動計画は、その關係から変更を要する事情に立ち到るものとの予想に難からぬ所であり、この部面から見ても、十九年度の予算は、或る程度、変更されることになるものと想像されます。従つて、これから申し上げる予算も、来年の今頃を振り返つて見た場合、歳入、歳出ともに或る程度の変更は免がれますまい。かと申せばとて、十九年度に行なわれようとする新規事業は、真に重点的に編成されたものであり、戦力増強の一点に集結しておりますので、その線に沿う限りに於いては、大なる変更はあり得ないのであります。大体、こんな意味で十九年度の予算を見て行きたいと思ひます。

## 三 十九年度予算の概要

十九年度は、一般会計予算と言わず、臨時軍事實費会計予算と言わず、相当膨脹することは必至の勢いでありました。この相当増加する歳出を公債で賄つてゆくことは勿論避くべきことでありますので、税、鉄道、専売、通信等、あらゆる計画に亘つて相当な増収が計画されたのであります。増収の分については、予算技術上、これを全部追加予算に廻わすことになつたのであります。追加予算というものは、会計法上相当地かましい制度を加えられている訳であります。近年はその時の状況で然るべく処理されてゆくことになつております。こういう訳で総督府にしてもそれに倣い、一応十九年度の本予算は十八億八千百余万円ということになつておりますが、追加予算として相当巨額の四億七千七百万円が計上され、かくて今年度予算は、二十三億五千八百九十八万円を算することになつたのであります。昨年度の予算が、十六億七千九百万円……どうも毎年えらい膨れ方であります。併合当初の明治四十四年度が四千八百余万円でありましたので、三十五年間に凡そ五十倍になり、支那事変の始まる直前、昭和十一年度が約三億三千万円でありましたから、事変前と比べて七倍強になつた訳であります。昭和十四年度が七億一寸でありますから数年前の一カ年分の予算が一年間で値えてしまつたのです。こういうときでありますから出来るだけ歳出を節約して――

一億八千四百万円位の節約をしておりますが―それでいて尚且つ、二十三億円以上に上つたのであります。勿論、貨幣価値の点も考慮に入れるべきは当然であります。それにしましても相当大きな膨れ方になっております。内地の昭和十一年度の実行予算が二十三億円そこそこでありました。支那事変が始まる直前に於ける内地の一般会計位の予算になつた訳であります。

### 三 十九年度の歳入予算について

次に、二十三億五千九百万円を構成している歳入についてざつと申し上げます。

この中、鉄道、通信、専売、営林等の官業収入が十億円であります。税の収入が五億三千三百万円、また今年は公債支弁の仕事が大分沢山致すよう大蔵省と交渉の結果、六億二千五百万円の発行ということになっております。それにいわゆる他会計から繰り入れる内地の一般会計、金資金特別会計等政府部内の他の会計から貰うものが七千万円ということになっておりますから、これを全体の割合としてみますと、税が二十三％、官業収入が四十二％、公債金収入が二十七％、以上三種の収入で九十二％に上ります。それに他会計からの繰り入れ七千万円、これが三％で、あとの五％が雑収入等であります。

税は非常に殖えております。昨年は三億九千万円、今年は五億三千万円ですから昨

年に比べて一億四千余万円の殖え方です。租税収入は、最近是非常な躍進の方向を示し、昭和十二年の支那事変当時、税の総収入は約七千万円であつたのが今年は五億三千万円ですから七倍半になっております。内地に於きましても租税収入は七、八倍になつており、何れも戦時財政の色が濃く、朝鮮もそれが濃厚に出ておるのであります。

官業の収入は十億という巨額ですが、これは事業費を要しますので、他の一般行政費に使える金は二、三億円の程度であり、何と言つても税と公債が一番大きな財源になる訳であります。

先程も申しましたように今年は昨年に比して六億八千七百万円歳出が殖えております。この歳出増加に見合う財源は何によつて賄うことにしているかと申しますと、その大部分は一言に申せば増収計画であります。増税、約二億三千百万円の外、鉄道、約七千八百万円、煙草七千九百万円、通信関係の約千四百万円は何れも値上げによるものであります。それと公債を昨年に比べて二億四千六百万円ほど多く発行することにしてゐるのであります。これらの外、自然増収などもあり、これで、六億八千余万円の歳出を賄うことに致してゐるのであります。税の問題ですが、昭和十九年度の増収計画について一言申し上げます。これは大体、内地に順応してやつたのであります。朝鮮独自の立場による改正もあります。内地は税収見込額、平年度で二十五億余万円、朝鮮は平年で一億四千余万円です。内地の今年の租税収入予定は八十八

### 3. 十九年度の歳入予算について

億円でありますので、増収割合は二十八%の引上げに対して、朝鮮は基本約四億円に對して一億四千余万円の増収でありますから三十八%位でありましょう。歩合から見ると、朝鮮の方が重課された感をお持ちですが、絶対額から見ますれば、二十分の一強の程度であります。

朝鮮はまだ、何と申しまして内地に比べてその経済力は一割そこそこ見て差支えなからうと思われましますので、まだまだ及ばざること遠く、税制なり増税については民度の低い点を考慮する要があります。自然、若干、内地より軽減するという考え方で行っております。殊に、生産力拡充に必要な資金面から見ました場合、何と申しましても、貧弱でありますので、内地から資金を取り入れることについて特段の配慮をしなければならぬのであります。

今年の増税につきましても、資金の調達を便にするために、資本利子に対する所得の税金は内地より二分だけ安くするという建て前で進んだのであります。朝鮮では土地に対する資本の投下には馴れておりますが、有価証券投資は未だしであります。漸次馴れさせる必要も認められまして、株式の清算所得は、内地は現在二割五分、朝鮮は今それに対して二割、それを内地は三割五分にしました。十%増加したが、朝鮮は二割に対して八%増加して二割八分とし、七分だけ内地に比べて清算所得の利益に対する課税を安くする。なお、株式配当に対する課税でありますが、三種所得税を課する場合、配当所得の中から一割を控除するということを認めておりますが、(内地

は控除を認めません)その上に朝鮮では借金をして株式を持つている人のことを考慮し、株の所有と借金と因果関係のある場合には、借金の利子と配当収入とをにらみ合わせ控除するという制度も今回新たに定められたのであります。

こういうわけで、資本についての優遇は、内地に比べて相当厚く致しておるのであります。

次に、内地と同じように増税しました第三種所得税についてであります。内地では、分類所得税が五割、総合所得税が二割の増税で、平均四割増になっておりますが、朝鮮の実情からしましては、私の見るところでは、二割増徴程度位が適當であろうと存するのであります。大蔵省では、内地が四割で、朝鮮が二割では、ちと差がひどすぎようというようなことで、結局、朝鮮の第三種所得税は、表面は一応、二割五分増徴ということになりました。

しかし、朝鮮では昭和二十一年度から義務教育を実施するため、毎年教育費の増加を考へる場合、これが緩和を考慮する要もあり、旁々、国庫で一応、二割五分増徴をします。そして、その増収額は一千三百余万円位であります。そのうち若干を教育費の負担軽減のため地方に返してやることにしますれば、實際上、負担は余程緩和されるわけでありまう。このようにしますれば、形式は、内地は四割、朝鮮は二割五分増になります。すなわち、五百万円を教育費負担軽減のため地方に分与することに致し、形式上は内地に歩調を合わせて納寄せをし、実質は負担

の過重をさけることに措置した次第であります。

次に、酒税は今度相当大幅な引上げになっております。従来、内地の清酒の税率は四階級に分かれていました。一級酒五百十五円、二級酒三百四十円、三級酒二百十円、四級酒二百円であつたが、今度の改正によりまして、一級酒九百九十五円、二級酒六百二十円、三級酒三百四十円の三階級になります。朝鮮では従来、二百九十円、百八十円、百六十八円の三階級であつたのが、今度の改定で、これを二階級とし、一級酒を五百五十円、二級酒を三百円としたのであります。

朝鮮の清酒は、内地より石当り四十円乃至七十円安いことになっております。

ビールは、内地は百七十七円八十銭が二百八十円になり、ざつと百円高くなりますが、朝鮮は百五十九円八十銭のものが二百五十円となり、九十円の増税となつており、内地とは三十円の開きがあるのであります。

朝鮮独自の濁酒（どぶろく）は、これまで十六円であつたのを三十円に引上げました。内地は二百円に引上げられております。

薬酒の六十八円を倍程度にして百三十三円、焼酎は九十円を百六十円としました。

このようにして酒税は、八割から九割の増税ということになっておるのであります。遊興飲食税も相当な増徴であります。芸妓の花代二十割が三十割になつたことは周知のことですが、旅館の宿泊料に対する課税も非常に高くなりました。十円以上の宿泊は七割、十円未満五円以上は四割、料理も五円以上八割、五円未満二円五十銭以上

五割というようになつております。

朝鮮では昨年度まで、外形標準によつて課税する営業税というものがありません。先年地租を改め、純収益によつて課税する土地賃貸価格への改定を行なつたのであります。今年度から営業税もこれを営業収益税に改めることにしました。同時に、医師、辯護士など、いわゆる自由職業者の営業的な収入に対する課税が洩れておりましたが、それらの収益についても課税することとし、なお鉱業税、取引所税も同じ系統の税でありますのでこれを包摂し、ここに新たに事業税というものを創設したのであります。事業税は、これによつて特に増収をもくろんだというわけではありません。

大体、右のような次第でありまして、増収額が平年度一億四千余万円、十九年度一億三千百万円であり、結局十九年度税収入の総額が五億三千三百余万円ということになつたのであります。十九年度に於ける内地の税は総額が百十億円、朝鮮が五億円余、総額から見て税の負担は二十分の一ということになつているのであります。

それから鉄道運賃の値上げを行なうことにいたしました。これは、旅客収入で約三千八百万円、貨物収入で約三千七百万円、併せて七千五百万円程の増収を期しております。大体、汽車賃が四割程度の値上げ、それに通行税が現在の税の約倍位になりますから、四月一日から五割位の汽車賃の値上げということになるわけでありまして、しかし、一面、決戦非常措置で旅客を出来るだけ制限する。急行列車も極度に少なくなる。寝台もやめる。ということになれば、旅客収入の絶対額は逆に減少すること



にたりましよう。交通局の見積りによれば四千六百万円程度の減少となっております。それから通信収入の増加も千四百万円程、官業収入の中に見込んでおります。為替料・電報料あるいはハガキ代など種類によつて違いますが大体二十二%から三十九%程度の値上げになっております。卓近な例で申しますと、二銭のハガキが三銭に、五銭の封書が七銭になります。それから電話の度数制の四銭が五銭、電報は基本料金鮮内が四十銭、内鮮間が四十五銭であつたのが五十銭一本になり、また、五字増す毎に七銭であつたのが十銭となるという具合に大体、二割から四割程度の値上げとなり、総額一千四百万円位の増額になっておるのであります。

煙草は大体、現在の五割程度の値上げです。もう大分高くなつて参りました。七千九百万円の増収高になっております。

増収計画は大体、右に申したような内裏になっておるのであります。

公債も、昭和十九年度は前年に比べて相当増えまして、六億二千五百余万円となりました。昨年の三億七千九百余万円に比べると二億四千六百余万円増えることになっております。朝鮮負担の公債は十八年度末現在で十六億四千四百万円であります。日本全体の公債が一月現在で七百億円余、一、二、三月で何十億発行せられるか分りませんが、一月現在の全国公債額七百億、その中で十六億四千万円位でありますから、割合から見ると非常に少ないのでありますが、公債財源は段々と認められるようになって参つたのであります。

それから一般経費の補充金一千二百五十万円は、例年のように貰つておりますが、今年は金鉱業の整備を致しますので、その財源として内地の金資金特別会計から二百余万円を、また、預金部会計その他から千万円近くを色々の理由で貰うことになっております。

いつも申し上げているように、内地会計から繰り入れられました補充金は、大正八年度はなかつたのでありますが、一番少ない年は三百万円、多い年は千九百万円、この外、金の関係においては、全面的に金資金特別会計から貰つたのであります。それから全部を含めると、十九年度の予算に計上されているものも合わせ、総計五億二千百万円になります。三十五年間で五億円を内地から頂戴いたし、半島の財政の賄いをつけてきたのであります。

しかし昭和十二年以来、軍事費財源として中央に差出しておりますのが、十九年度まで含め合計十億四百万円となりますから、この三十五年間に頂戴した倍位を軍事費に御奉公するという計算になっております。財政的に見ましてお台所も豊かではありません。相当切りつめてはおりますが、時局柄この程度のことは、すなわち今まで頂戴した倍位を軍事費に繰り入れるというような状況になつてゐるということを御含み願つておきます。

税、鉄道、通信、煙草、これらすべての増収計画は、専ら軍事費支弁を目的とするのが建前になつておりますので、以上四項目の増収三億そこそこの中、二億前後を軍

一、電力生産責任制指定量・実績ノ朝鮮電業	一四〇
一、朝鮮電力、鴨綠江水電生産責任量	一四一
一、徴兵検査予定適令者届出状況(文中)	一四三・53
一、" 検査結果(文中)	一四四・54
一、現員徴用実施前後ニ於ケル勞務移動及稼働状況	一四九・59
一、現員徴用前稼働率比較	一五〇・60
一、重要工場・事業場勞務者用特配食糧	一五一・61
一、" 作業用必需物資配給数量	一五二・62
一、内地・樺太・南洋移入朝鮮人勞務者渡航状況	一五三・63
一、軍要員送出状況	一五六・66
一、" 戦歿者数(文中)	一五六・66
一、大学・専門学校・学徒動勞動員実施概況	一六〇・70
一、中等学校	一六〇・70
一、旅客輸送量・貨物輸送量	一六二・72
一、昭和十七年度大陸輕嫁貨物輸送品名別実績	一六三・73
一、昭和十八年度	一六四・74
一、昭和十九年度第一・四半期	一六五・75
一、港灣吞吐能力	一六九・79
一、輸移出入貿易貨物屯数	一七〇・80
一、防衛・特別警察隊編成表	一七四・84
一、" 電信、電話非常措置	一七七・87

一、防空資材準備状況	一八一・91
一、朝鮮内資金撤布状況・國民所得(文中)	一八六・96
一、貯蓄奨励実施額調	一八八・98
一、昭和十八・十九年朝鮮銀行券発行高	一九一・101
一、満州・支那カラノ送金流入状況(文中)	一九三・103
一、国語普及状況	一九五・105
一、" 男女別(文中)	一九六・106
一、国語ヲ解スル朝鮮人(府郡別比較)	一九七・107
一、十万以上居住都市国語普及率表	一九七・107
一、道別国語普及率表	一九八・108
一、国語ヲ解スル朝鮮人累年比較表	一九九・109
一、昭和十九年人口調査ト昭和十五年國勢調査比較	二〇三・113
一、昭和十九年人口調査ト昭和十八年末現住戸口調査トノ比較	二〇三・113
一、朝鮮外ヘノ移動人口	二〇五・115
一、朝鮮人ノ出生・死亡・自然増加	二〇五・115
一、朝鮮ニ於ケル内地人ノ出生・死亡・自然増加	二〇六・116
一、内地ニ於ケル内地人ノ出生・死亡・自然増加	二〇六・116

別6

## 水田文書

(朝鮮總督府財政關係重要資料)

について

近 藤 釵

一

水田直昌氏(現全国銀行協会常務理事)は、朝鮮總督府の司計課長、財務局長在任期間を通じて、「予算の水田」と言われた程、朝鮮總督府予算に關係の深い人である。世間では水田氏のことを「朝鮮財政通」とよぶ人があるが、水田氏の場合、それは単なる「財政通」ではない。水田氏は朝鮮總督府の予算を編成し、朝鮮の財政を運営してきた当事者であつて、いわゆる通・というような程度のもではない。二十年という長い朝鮮の台所を自ら切り盛りしてきた人である。

その在官経歴も官吏としてはめずらしく財務局一本という特異なものである。

氏は大正十年東大を卒業、大蔵省理財課に入つて税務署長などを歴任、同十四年、朝鮮總督府財務局の理財課事務官に転じられた。昭和二年司計課長になり、予算、決算に手を染めたのが始まりで、その後二十年間というもの、全く朝鮮總督府予算と取り組んで来られたのである。その間、昭和十二年財務局長に昇任、税制、金融、理財の總督府財務全般を管掌、指揮する立場に立たれたが、依然、予算の編成は、殆んど

別7

氏自らが手がけていた。それは当時、水田氏の部下として部内にいた人達も認めていることであるが、現在私の手許にある「総督府財務局文書」等を見ると氏自らの入念な補正、加筆が到るところに行なわれていることから容易に窺われる。更に、氏は朝鮮総督府予算一筋にその半生を捧げてきた人であり、又このような例は、転出、転任の頻繁なことが普通の官吏としては、極めて稀なことである。このことは氏が余程上下の信望をあつめ、その財政的手腕を信頼されていた証拠であるように思える。ともあれ、日本の朝鮮統治三十六年、その間、半ば以上の二十年間、つまり昭和の全期間に亘る総督府予算は氏によつて編成されて来たのである。しかもその期間は、種々の論議は別として、ともかく、朝鮮近代化の達成期であり、統治史上、画期的な発展を見たときである。もしも総督統治がそのような不幸な結末に終わらなかつたとするならば、氏こそ朝鮮に近代的な繁栄をもたらした大功労者であつたであろうことを考える。実際氏は誠実と努力の人であり、朝鮮民族に対する考えも、決して支配者のもつそれではなかつた。

別8

昭和三十年、穂積真六郎理事長の提唱により財団法人友邦協会では「朝鮮財政・金融発達史」を編集することになり、私はその資料集めを仰せ付かつた。以来六年私は、「総督府予算文書」の分析と、水田氏の執筆、講演になる文献・資料の探索、研究に没頭している。

私がここで「水田文書」というのは、その研究・編集のため、現在水田氏から拝借している同氏保存の財務関係資料のことである。それは「水田財務局長講演集」と題するパンフレットの綴りと、「昭和十九年度朝鮮総督府予算について」と題する未刊行の原稿（今度本書に収載させて頂いた）、それに終戦後、水田氏が土屋喬雄教授の乞いにより対質口述された「朝鮮財政・金融史談」（未刊行原稿）の三点で、何れも貴重な文献である。参考までにその内容を示すと、

- 一、昭和十四年度朝鮮総督府予算に就て（中央朝鮮協会・一四・四・六）
- 一、時局下に於ける金融経済に就て（大邱公会堂・一四・七・一六）
- 一、戦時下朝鮮事情（鶴見総持寺・協和会・一五・三・二六）
- 一、昭和十五年朝鮮総督府予算に就て（中央朝鮮協会・一五・四・八）
- 一、朝鮮の一般事情に就て（東日会館・日本工業会・一五・四・一一）
- 一、昭和十五年度朝鮮総督府予算に就て（銀行集会所・朝鮮金融週大会・一五・五・二四）
- 一、"（朝鮮ホテル・朝鮮実業クラブ・一五・五・二八）
- 一、昭和十六年度朝鮮総督府予算に就て（中央朝鮮協会・一六・四・一八）
- 一、朝鮮の一般事情（関西経済クラブ・一五・四・九）
- 一、勝ち抜く力（京城放送局・一七・五・八）
- 一、昭和十六年度朝鮮総督府予算に就て（朝鮮実業クラブ・一六・五・二六）
- 一、吏道ニ就テ（第十回税務講習会・一六・七・八月）

別9

- 一、昭和十七年度朝鮮總督府予算に就て (中央朝鮮協会・昭一七・四・九)
  - 二、羅進半島の諸問題 (總督府第一會議室・昭一七・七・三一)
  - 三、昭和十八年度朝鮮總督府予算に就て (中央朝鮮協会・昭一八・四・二三)
  - 四、小磯總督の施策と昭和十八年度朝鮮總督府予算に就て (第二回朝鮮金融団大会・昭一八・五・一三)
  - 五、昭和十九年度朝鮮總督府予算に就て (原稿) (中央朝鮮協会・昭一九・三・二九)
  - 六、朝鮮財政・金融史談 (原稿四百字詰七七枚・土屋喬雄氏対質口述)
- 以上十八件題のものである。

「水田財務局長講演集」は、總督府時代から水田氏の側近に居られた藤原宗太郎氏が、在鮮以来入念に整理、保存して来られたものである。又、「昭和十九年度朝鮮總督府予算に就て」は、敗戦のため印刷が出来ず原稿のまま保管されていたものを、今回特に本書に収載させて頂いたもので、今迄は不世出のまま埋もれていた總督統治終末期研究上必須の文献である。終戦後の朝鮮に関する調査研究は、この種終末期の資料が殆んどないため非常に低調、渋滞を来しており、この刊行は多くの学究達の要望に応えたものである。この意味から、本書が、今後の日本の朝鮮統治史研究上及ぼす影響は大きいものと考ええる。

「朝鮮財政金融史談」は、土屋喬雄氏が「日本商工史」編纂のため、昭和二十八年十月から翌二十九年二月にかけて水田氏の口述を得られたもので、実に四百字詰原稿用紙七百七十七枚に及ぶ大原稿である。

水田氏は大蔵省の昭和財政史編集室から「朝鮮の財政編」の執筆を委嘱され、その大稿は本年二月、東洋経済新報社から刊行された「昭和財政史・旧外地財政・上巻」に収載された。氏自身、快心の執筆とされているが、「朝鮮財政・金融史談」も亦、氏の体験と思考が虚心坦懐に語られ、しかもそれが水田、土屋という当代の両權威の対質によつて行なわれている点、前記「昭和財政史」の大稿と並ぶ貴重な資料である。この「朝鮮財政・金融史談」の一部は、両氏の御了承を得て、穂積真六郎氏の主宰される朝鮮史料研究会の機関紙「朝鮮近代史料研究集成」第一・二号に分割掲載されているが、何れ当編集会が、全編を纏めて刊行する予定である。

近代朝鮮の財政史研究上至宝の存在である水田氏は、その終戦後の著述研究の業績が示すように、もともと学究的な人である。

朝鮮近代史の研究を志す者にその基礎知識として私が必ず一読を奨める文献に朝鮮總督府稿本の「李朝時代の財政」がある。そして私は終戦後この本を、既に四、五十名の若い学究達に貸し与えて来た。実はこの稿本も、水田氏の丹精の書である。水田氏は前記「史談」の中でそのことを次のように述べておられる。『要約』

「実は早く課長をやめて嘱託にでもなり、朝鮮の財政史は自分の手でやるがよいと考えその資料を集めました。局長になれと言われ、兩来収集が出来ないので、竹沢さんに頼んで足りないところを集めて貰いました。財務局長時代、朝鮮の財政を見る



には、その以前のことが必要だといふので季朝時代の財政を翻訳して貰つて限定版で出し……」と言つておられる。

又その文中、「資料を九割程集め」——それを引き揚げのため置去つて来たことを惜しんでおられるが、それによるとこの本はまだ未完成の稿本で、同氏は更にこれを完璧なものにするため研究を続けておられたものである。

総督府予算文書などを見ていて気が付くことは、同じ一つの事項について、その所管部局の立場々々が、全く対照的に述べられていることである。例えば、食糧事情に関する農林当局の立場とその取締り当局である警務局の立場などがいい例である。一方では円滑といい、一方では不円滑で取締りの強化が必要だと言つている。これは予算獲得のための自己主張と思われるが、このような場合、財務当局は、それを公正に評価しなければならぬ立場にある。言わば総督府行政の大目付役であつて、その意味からも、私は水田氏の所説を重視するとともに、大きな信頼を寄せている。そしてその實際家としての造詣を学問的に体系づけようとしておられる努力に対し、心から敬服している。

(昭和三六・一一・二〇・稿)

### 朝鮮財政関係重要文獻

#### 昭和十九年度朝鮮總督府予算について

(1)

元朝鮮總督府財務局長

水 田 直 昌

目次	
一 総説	1
二 十九年度予算の概要	3
三 十九年度の歳入予算について	4
四 十九年度の歳出予算について	12
五 本議会通過法案と議会の様相	41

昭和19年3月29日  
中央朝鮮協会講演記録  
(水田直昌氏原稿保存)

## 昭和十九年度 朝鮮総督府予算について

水田直昌

### 一 総説

昭和十九年度朝鮮総督府特別会計を中心として、この年度、朝鮮に於てはどのような施設が行なわれるかということにつき、その概略を申し上げます。

十九年度の予算は決戦議会の名にふさわしく、早くも二月のはじめに決つたのであります。

大体、十九年度予算は昨年の十一月から十二月に亘つて編成されたものでありますから、戦争最中の現在、その内容が実行中にある程度変更されることは、当然考え得ることであり得ます。十八年度におきましても、当の予算は十六億千五百余万円でありましたが、この議会で五千六百余万円の追加予算が成立し、総額十六億七千余万円という数字になつたのであります。十九年度の予算は、成立してまだ実行に入らな

## 2. 十九年度予算の概要

い中、昨年十二月末に政府に於いて決戦非常措置が決定になり、その為、朝鮮の予算で見ますと、亭楽面の整理等があり、租税収入では二千六百万円の減収であり、輸送力強化のため、鉄道旅客を制限するという事に決定せられた結果、鉄道収入約五億の中、四千六百万円の減収が予想されるというように、時局は寸刻の苟安も許されない刻々に変化する情勢にありますことは、予算の方面に於いても、第一線と同じ思いがするのであります。なお、物動計画につきましても、十八年度は大体物動の為に予算を組み直す必要は無かつたのでありますが、十九年度は、昨年の十二月、大略決定された物動計画を基礎として予算を編成したのでありますが、御承知の通り、第一線の戦争は益々苛烈になり、昨年十二月決定の物動計画は、その関係から変更を要する事情に立ち到るものとの予想に難からぬ所であり、この部面から見ても、十九年度の予算は、或る程度、変更されることになるものと想像されます。従つて、これから申し上げる予算も、来年の今頃を振り返つて見た場合、歳入、歳出ともに或る程度の変更は免がれますまい。かと申せばとて、十九年度に行なわれようとする新規事業は、真に重点的に編成されたものであり、戦力増強の一点に集結しておりますので、その線に沿う限りに於いては、大なる変更はあり得ないのであります。大体、こんな意味で十九年度の予算を見て行きたいと思ひます。

## 三 十九年度予算の概要

十九年度は、一般会計予算と言わず、臨時軍事費会計予算と言わず、相当膨脹することは必至の勢いでありました。この相当増加する歳出を公債で賄つてゆくことは勿論避くべきことでありますので、税、鉄道、専売、通信等、あらゆる計画に亘つて相当な増収が計画されたのであります。増収の分については、予算技術上、これを全部追加予算に廻わすことになつたのであります。追加予算というものは、会計法上相当やかましい制度を加えられている訳であります。近年はその時の状況で然るべく処理されてゆくことになつております。こういう訳で総督府にしてもそれに倣い、一応十九年度の本予算は十八億八千数百万円ということになつておりますが、追加予算として相当巨額の四億七千七百万円が計上され、かくて今年度予算は、二十三億五千八百九十八万円を算することになつたのであります。昨年度の予算が、十六億七千九百万円……どうも毎年えらい膨れ方であります。併合当初の明治四十四年度が四千八百余万円でありましたので、三十五年間に凡そ五十倍になり、支那事変の始まる直前、昭和十一年度が約三億三千万円でありましたから、事変前と比べて七倍強になつた訳であります。昭和十四年度が七億一寸でありますから数年前の一カ年分の予算が一年間で殖えてしまつたのです。こういうときでありますから出来るだけ歳出を節約して――

一億八千四百万円位の節約をしておりますが―それでいて尚且つ、二十三億円以上に上つたのであります。勿論、貨幣価値の点も考慮に入れるべきは当然であります。それにしましても相当大きな膨れ方になっております。内地の昭和十一年度の実行予算が二十三億円そこそこでありました。支那事変が始まる直前に於ける内地の一般会計位の予算になつた訳であります。

### 三 十九年度の歳入予算について

次に、二十三億五千九百万円を構成している歳入についてざつと申し上げます。

この中、鉄道、通信、専売、営林等の官業収入が十億円であります。税の収入が五億三千三百万円、また今年は公債支弁の仕事を大分沢山致すよう大蔵省と交渉の結果、六億二千五百万円の発行ということになっております。それにいわゆる他会計から繰り入れる内地の一般会計、金資金特別会計等政府部内の他の会計から貰うものが七千万円ということになっておりますから、これを全体の割合としてみますと、税が二十三％、官業収入が四十二％、公債金収入が二十七％、以上三種の収入で九十二％に上ります。それに他会計からの繰り入れ七千万円、これが三％で、あとの五％が雑収入等であります。

税は非常に殖えております。昨年は三億九千万円、今年は五億三千万円ですから昨

年に比べて一億四千余万円の殖え方です。租税収入は、最近是非常な躍進の方向を示し、昭和十二年の支那事変当時、税の総収入は約七千万円であつたのが今年は五億三千万円ですから七倍半になっております。内地に於きましても租税収入は七、八倍になつており、何れも戦時財政の色が濃く、朝鮮もそれが濃厚に出ておるのであります。

官業の収入は十億という巨額ですが、これは事業費を要しますので、他の一般行政費に使える金は二、三億円の程度であり、何と言つても税と公債が一番大きな財源になる訳であります。

先程も申しましたように今年は昨年に比して六億八千七百万円歳出が殖えております。この歳出増加に見合う財源は何によつて賄うことにしているかと申しますと、その大部分は一言に申せば増収計画であります。増税、約二億三千百万円の外、鉄道、約七千八百万円、煙草七千九百万円、通信関係の約千四百百万円は何れも値上げによるものであります。それと公債を昨年に比べて二億四千六百万円ほど多く発行することにしてゐるのであります。これらの外、自然増収などもあり、これで、六億八千余万円の歳出を賄うことに致してゐるのであります。税の問題ですが、昭和十九年度の増税計画について一言申し上げます。これは大体、内地に順応してやつたのであります。朝鮮独自の立場による改正もあります。内地は税収見込額、平年度で二十五億余万円、朝鮮は平年で一億四千余万円です。内地の今年の租税収入予定は八十八



### 3. 十九年度の歳入予算について

億円でありますので、増収割合は二十八%の引上げに対して、朝鮮は基本約四億円に對して一億四千余万円の増収でありますから三十八%位でありましたよう。歩合から見ると、朝鮮の方が重課された感をお持ちですが、絶対額から見ますれば、二十分の一強の程度であります。

朝鮮はまだ、何と申しまして内地に比べてその経済力は一割そこそこ見て差支えなからうと思われましますので、まだまだ及ばざること遠く、税制なり増税については民度の低い点を考慮する要があります。自然、若干、内地より軽減するという考え方で行っております。殊に、生産力拡充に必要な資金面から見ました場合、何と申しまして、貧弱でありますので、内地から資金を取り入れることについて特段の配慮をしなければならぬのであります。

今年の増税につきましても、資金の調達を便にするために、資本利子に対する所得の税金は内地より二分だけ安くするという建て前で進んだのであります。朝鮮では土地に対する資本の投下には馴れておりますが、有価証券投資は未だしであります。漸次馴れさせる必要も認められまして、株式の清算所得は、内地は現在二割五分、朝鮮は今それに対して二割、それを内地は三割五分にしました。十%増加したが、朝鮮は二割に対して八%増加して二割八分とし、七分だけ内地に比べて清算所得の利益に対する課税を安くする。なお、株式配当に対する課税でありますが、三種所得税を課する場合、配当所得の中から一割を控除するということを認めておりますが、(内地

は控除を認めません)その上に朝鮮では借金をして株式を持つている人のことを考慮し、株の所有と借金と因果関係のある場合には、借金の利子と配当収入とをにらみ合わせ控除するという制度も今回新たに定められたのであります。

こういうわけで、資本についての優遇は、内地に比べて相当厚く致しておるのであります。

次に、内地と同じように増税しました第三種所得税についてであります。内地では、分類所得税が五割、総合所得税が二割の増税で、平均四割増になっておりますが、朝鮮の実情からしましては、私の見るところでは、二割増徴程度位が適当であらうと存するのであります。大蔵省では、内地が四割で、朝鮮が二割では、ちと差がひどすぎようというようなことで、結局、朝鮮の第三種所得税は、表面は一応、二割五分増徴ということになりました。

しかし、朝鮮では昭和二十一年度から義務教育を実施するため、毎年教育費の増加を考へる場合、これが緩和を考慮する要もあり、旁々、国庫で一応、二割五分増徴をします。そして、その増収額は一千三百余万円位であります。そのうち若干を教育費の負担軽減のため地方に返してやることにしますれば、實際上、負担は余程緩和されるわけでありまう。このようにしますれば、形式は、内地は四割、朝鮮は二割五分増になります。すなわち、五百万円を教育費負担軽減のため地方に分与することに致し、形式上は内地に歩調を合わせて精寄せをし、実質は負担

### 3. 十九年度の歳入予算について

の過重をさけることに措置した次第であります。

次に、酒税は今度相当大幅な引上げになっております。従来、内地の清酒の税率は四階級に分かれていました。一級酒五百十五円、二級酒三百四十円、三級酒二百十円、四級酒二百円であつたが、今度の改正によりまして、一級酒九百九十五円、二級酒六百二十円、三級酒三百四十円の三階級になります。朝鮮では従来、二百九十円、百八十円、百六十八円の三階級であつたのが、今度の改定で、これを二階級とし、一級酒を五百五十円、二級酒を三百円としたのであります。

朝鮮の清酒は、内地より石当り四十円乃至七十円安いことになっております。

ビールは、内地は百七十七円八十銭が二百八十円になり、ざつと百円高くなりますが、朝鮮は百五十九円八十銭のものが二百五十円となり、九十円の増税となつており、内地とは三十円の開きがあるのであります。

朝鮮独自の濁酒（どぶろく）は、これまで十六円であつたのを三十円に引上げました。内地は二百円に引上げられております。

薬酒の六十八円を倍程度にして百三十三円、焼酎は九十円を百六十円としました。

このようにして酒税は、八割から九割の増税ということになっておるのであります。遊興飲食税も相当な増徴であります。芸妓の花代二十割が三十割になつたことは周知のことですが、旅館の宿泊料に対する課税も非常に高くなりました。十円以上の宿泊は七割、十円未満五円以上は四割、料理も五円以上八割、五円未満二円五十銭以上

五割というようになつております。

朝鮮では昨年度まで、外形標準によつて課税する営業税というものがありません。先年地租を改め、純収益によつて課税する土地賃貸価格への改定を行なつたのであります。今年度から営業税もこれを営業収益税に改めることにしました。同時に、医師、辯護士など、いわゆる自由職業者の営業的な収入に対する課税が洩れておりましたが、それらの収益についても課税することとし、なお鉱業税、取引所税も同じ系統の税でありますのでこれを包摂し、ここに新たに事業税というものを創設したのであります。事業税は、これによつて特に増収をもくろんだというわけではありません。

大体、右のような次第でありまして、増収額が平年度一億四千余万円、十九年度一億三千百万円であり、結局十九年度税収入の総額が五億三千三百余万円ということになつたのであります。十九年度に於ける内地の税は総額が百十億円、朝鮮が五億円余、総額から見て税の負担は二十分の一ということになっているのであります。

それから鉄道運賃の値上げを行なうことにいたしました。これは、旅客収入で約三千八百万円、貨物収入で約三千七百万円、併せて七千五百万円程の増収を期しております。大体、汽車賃が四割程度の値上げ、それに通行税が現在の税の約倍位になりますから、四月一日から五割位の汽車賃の値上げということになるわけでありまして、しかし、一面、決戦非常措置で旅客を出来るだけ制限する。急行列車も極度に少なくなる。寝台もやめる。ということになれば、旅客収入の絶対額は逆に減少すること

### 3. 十九年度歳入予算について

になりました。交通局の見積りによれば四千六百万円程度の減少となっております。それから通信収入の増加も千四百万円程、官業収入の中に見込んでおります。為替料・電報料あるいはハガキ代など種類によつて違いますが大体二十二%から三十九%程度の値上げになっております。卓近な例で申しますと、二銭のハガキが三銭に、五銭の封書が七銭になります。それから電話の度数制の四銭が五銭、電報は基本料金鮮内が四十銭、内鮮間が四十五銭であつたのが五十銭一本になり、また、五字増す毎に七銭であつたのが十銭となるという具合に大体、二割から四割程度の値上げとなり、総額一千四百万円位の増額になっておるのであります。

煙草は大体、現在の五割程度の値上げです。もう大分高くなつて参りました。七千九百万円の増収高になっております。

増収計画は大体、右に申したような内実になっておるのであります。

公債も、昭和十九年度は前年に比べて相当増えまして、六億二千五百余万円となりました。昨年の三億七千九百余万円に比べると二億四千六百余万円増えることになっております。朝鮮負担の公債は十八年度末現在で十六億四千四百万円であります。日本全体の公債が一月現在で七百億円余、一、二、三月で何十億発行せられるか分りませんが、一月現在の全国公債額七百億、その中で十六億四千万円位でありますから、割合から見ると非常に少ないのでありますが、公債財源は段々と認められるようになって参つたのであります。

それから一般経費の補充金一千二百五十万円は、例年のように貰つておりますが、今年は金鉱業の整備を致しますので、その財源として内地の金資金特別会計から二百余万円を、また、預金部会計その他から千万円近くを色々の理由で貰うことになっております。

いつも申し上げているように、内地会計から繰り入れられました補充金は、大正八年度はなかつたのでありますが、一番少ない年は三百万円、多い年は千九百万円、この外、金の関係においては、全面的に金資金特別会計から貰つたのであります。それから全部を含めると、十九年度の予算に計上されているものも合わせ、総計五億二千百万円になります。三十五年間で五億円を内地から頂戴いたし、半島の財政の賄いをつけてきたのであります。

しかし昭和十二年以来、軍事費財源として中央に差出しておりますのが、十九年度まで含め合計十億四百万円となりますから、この三十五年間に頂戴した倍位を軍事費に御奉公するという計算になっております。財政的に見ましてお台所も豊かではありません。相当切りつめてはおりますが、時局柄この程度のことは、すなわち今まで頂戴した倍位を軍事費に繰り入れるというような状況になつてゐるということを御含み願つておきます。

税、鉄道、通信、煙草、これらすべての増収計画は、専ら軍事費支弁を目的とするのが建前になっておりますので、以上四項目の増収三億そこそこの中、二億前後を軍

事費財源に御奉公するのは、この際至当の事と存するのであります。すなわち、十九年度の軍事費繰入は十八年度の二億に比し倍以上の四億一千四百万円となつておるのであります。歳入につきましては、この程度で止めておきます。

#### 四 十九年度の歳出予算について

次に歳出についてその概略を申し上げます。昨年は、小磯総督統理に当たられた最初の予算でありましたので、例年御説明申し上げる順序を変えまして、総督として重点を置かれている点はどういうことであるか、十八年正月御用始めの訓示および、知事会議における順序によつて御説明申し上げたのであります。今年の御用始式における総督閣下の御訓示は、去年重点をおかれて行なわんとした所を反省して見る。反省してこういう点が足りない。こういう点を改善しなければいけない。昨年の足りない所を役人として反省してやつて行く。その心持の下に輸送の問題、食糧の増産、地下資源の開発、道義の昂揚、吏僚の心構え等々に重点をおいて、さらに詳細な御訓示を与えておいでになります。

十九年度の予算も、大体その線に沿つて編成されており、決戦下の国の予算として国家の総力を挙げて物的および人的戦力の増強に集注せしむる線に沿うて編成するという点において、別に変つたことのありよう筈はありません。予算当局として特に心

構えを致したことは、重要鉱物増産、地下資源の開発、食糧の増産、輸送力の増強というような、今年何を措いても増強しなければならぬという問題につきましては、一面、主務局に対しては、金の効率的使用を要望しつつ、他面、これらの実施に当り、いやすくも予算面で制肘を受けて、増強の意欲が阻止されるようなことがあつてはいかない、という考え方でその編成に当つたわけであります。

新規要求事項として主な項目を挙げますと、重要鉱物その他緊急物資の増産に関する事項（増加経費八千三百四十万円）、食糧の増産確保に関する事項（一億五千万円）、徴兵制実施に伴う施設（二千三百余万円）、防衛対策の整備強化施設（一千八百万円）、勞務動員その他国民総力の結集強化の施設（二千三百余万円）、戦時輸送力の増強施設（二億千七百余万円）、教育に関する施設の拡充（千五百余万円）などが重なる事柄であります。以下その大体について申し上げます。

朝鮮の重要鉱物その他緊急物資の増産についてでありますが、予算面で殖えておりますのは、石炭の増産対策費であります。石炭は坑木の値上りとか、賃銀の値上り等で予定通りの増産を期するためには、この際相当の配慮を要しますので、トン当りの補助金従来の二円なにがしを、四円六十四銭と大幅に引上げました。その関係上、予算としましては、昨年に比べまして、一千八百万円殖えております。

朝鮮に無煙炭が非常に豊富であることは御承知の通りでありますが、今年も相当余計に出すことになつております。唯、輸送関係がうまく行くことがどうしても必要で



あります。江原道の三陟炭田、ここはカーバイドの原料になる優良な無煙塊炭が出るのでありますが、船舶の関係上、〇十万吨の滞貨があり、金額にして〇百万円程のものが寝ているという有様です。これらのことについても、必要な予算的措置を講じておるのであります。掘つたものをいかに必要な所まで運ぶかが問題でありまして、下から上への作業の外、横の取り運び、すなわち、輸送の問題についても、掘ることとマッチせしめて考えなければならぬ訳であります。

なお、新しい炭鉱脈を探るための探鉱でありますとか、選炭設備、積み込み設備などにも助成金を出すこととし、また、有煙炭の代わりとしての無煙炭利用に関する研究も行なわれることになっております。無煙炭で鉄を作る小型熔鉱炉の施設については、ほとんど計画が進められ、全鮮で七十五基位できつつあることは、すでに御承知のことと存じます。石炭の外には銅、鉛、ニッケル、螢石、雲母、石棉など朝鮮に依存せらるべき各種重要鉱物の開発、生産費の補助、選鉱設備、送電線、鉱山道路の建設というようなことに対する助成金も計上いたしております。

御参考までに申し上げますが、物動物資というものがございます。すなわち、この戦争遂行のためにどうしてもなければならぬ物資、これは全部で九十七品目に上るのであります。このうち、朝鮮で自給自足の出来るものは五十八品目で、総品目の六割近くは自給ができるという調査になっております。日本全体の過半数を占めておりますもの——米は平年作二千三百余万石でありますから過半数を占める品目の中に入

っております——五割以上が朝鮮で生産されるものが八品目もあります。鉄鉱などはそのうちの最たるもので、昭和十九年度は全国総生産額の八割位を朝鮮で生産する計画になっております。その他タングステン・モリブデン・コバルト・雲母・螢石・黒鉛・アルミニウム等があり、タングステン等は九割まで出しており、絶対数量も毎年増加しております。

かようなわけで、朝鮮はこれら地下資源の開発等により非常な貢献を致しておるのであります。

次に、金鉱山等の整備であります。これは一昨年の暮に決定された方針に基づきまして、廃止・保坑・稼行鉱山に区分の上、廃止鉱山に対する損失補償、保坑鉱山の管理費、稼行鉱山への配当補償費等所要経費合計二千万円そこそこの予算を金鉱業整備のために組んでおります。

鉄鉱石増産の問題であります。鉄の生産については、従前、日本は主としてアメリカからスクラップを入れてやっております。それが、段々来なくなつてきた。戦争のために来なくなつた。そこでスクラップ代用の原鉄を作る必要がある。これは、日本として大東亜戦争前からの至上命令になつておつたことは御承知の通りであります。朝鮮では、茂山鉄山の極めて豊富な鉱石を利用することとなり、本年度には原鉱石を〇〇万トン搬出する計画であり、鉄道なども広軌改築あるいは複線も出来上り、北鮮拓殖鉄道の買収も四月一日に実現することになっております。茂山の鉱石を清津

に運び、日鉄清津工場で製鉄の原料とし、その他高周波においても利用するというようなことで、昭和十九年度は相当の原鉄が生産されるものと思われまゝ。

この原鉄生産奨励金として、五百万円を計上し、予算外国庫負担の契約においても考慮されております。御参考までに原鉄を作っている工場を申し上げますと、三菱（日鉄）清津工場、清津の朝鮮製鉄、城津の高周波、仁川、平壤、富寧所在の鐘史関係工場、高周波の子会社である清津所在の日本原鉄、日窒の興南工場、等が原鉄の製造に携わっております。

このほかに軽金属の原料としての苦汁の生産に力を入れております。朝鮮の塩田は天日塩で相当好条件に恵まれておりますので、官塩、民塩ともに、苦汁の増産に邁進することとし、所要経費四百三十万円ほど計上しております。

三月のはじめに、大蔵省に塩務官会議がありまして、内地、朝鮮、台湾、関東州その他関係方面の責任者が一堂に会しまして、全国の塩の需給について協議したのであります。朝鮮は食べるだけの塩も自給出来ません。工業用の塩も加えまして需要が五十四万トン（食用四十七万トン・工業用六万八千トン）であります。これに対し、鮮内の生産は約三十六万トンでありますから、ちよつと、十八万トンの不足であります。そのうち、工業塩六万八千トンに対しては二万八千トンの生産で、四万トンは足りない。尤も、大日本塩業会社の手で工事中の、三千町歩の塩田が完成すれば、工業塩の供給も大分楽になるのでありますが、現在では右に申したように不足であり、それに

翌年度への持越および欠減を考慮しますと、二十一万トン位は他所から輸移入しなければならぬ実情であります。これは青島、関東州からの輸入で大体賄いがつく見込であります。輸送の点が問題であることを忘れてはなりません。とも角、計画としては右様の次第で一応需給のバランスを取っております。一方、自給を目ざしての増産にも力こぶを入れております。政府としましては、忠南の瑞山などに八百町歩の塩田築造を、昭和十八年度から実行しており、民間でも東拓、大日本塩業その他企業者の手で、黄海道、平安南道等の適地に築造進行中であります。

現在は、政府塩田五千六百余町歩、民間塩田が一千百余町歩であります。塩田として開発し得る適地は、なお西海岸地方に八千町歩はありますので、その開発が完成すれば自給は易々たるものであります。

台湾は、塩の生産が五十三万トン、消費は二十万トン足らずでありますから、三十余万トンは余る。砂糖ももちろん余ります。

朝鮮は、塩も砂糖も足りないから台湾から貰いたいと思うのですが、これには船が問題であります。さきほど、青島、関東州から塩を貰うということを申しました。以前は、これは船で持つて来たのでありますが、最近殆んど全部、鉄道によるほかありません。自然、これが確保につき多分に懸念せられるほか運賃が非常に高くなる。

朝鮮の専売事業は皆、多かれ少なかれ黒字であります。塩だけは一千万円以上の赤字を忍ばねばならぬと思ひます。

重要物資として、朝鮮独特のものがあります。松炭油という重油代用の油の生産であります。これは先年、全羅北道のその方面の技師が工夫しまして出来るようになったのであります。朝鮮では薪として、松の枝を切るのでありますが、枝のつけ根のところが少し残される。そこには松脂がたまります。その松脂に着眼したわけでしようが、その松枝の伐り残りの部分を採取し、特殊な炭焼釜に入れ、普通の炭焼より低温で焼きますと、出来上った炭は、工業用木炭として立派な燃料になり、その松脂は重油と似通った性質の油となつて採取され、これに軽油を若干混合しますと、重油代用として立派に使えるそうです。十八年から、本格的に全鮮にわたり松炭油の製造を奨励して参つております。このために十九年度も百四十万円の補助費を計上致しております。

このほか、軍需物資として必要な加里、大麻、薬工品、タンニン、軍需特殊潤滑油等の増産も予算面に表われております。

なお、朝鮮には科学に関する研究機関が十分ではありません。議会においても、朝鮮は研究ということが足りないではないかという好意的な質問を受けたこともあります。とも角各方面とも調査研究の不十分であることは否定できぬ点でありますので、時局に役に立つ研究が出来るような施設を作ろうじやないかということになり、昨年、財団法人朝鮮研究所というものが設けられました。その基本金は特殊の寄附に仰ぐこととし、百四、五十万円は、金融関係の朝鮮銀行、朝鮮殖産銀行および東洋拓殖会社で

出して貰うことに大体話を進めておりますが、政府としては、十八年度は三十五万円、十九年度は八十万円の予算を組みまして、—これは一年毎の使い捨てになる研究費であります—が、主として自然科学—人文科学もやります—の研究をやることになつたのであります。昨年の秋に一部の仕事をはじめたのでありますが、財団法人朝鮮研究所としては、昭和十九年度から大規模に仕事をする事になるかと思ひます。

次に、食糧の増産確保について申し上げます。米の増産は、昭和十七年に樹てられた計画に基づいて実行されておりますが、昨年から今年にかけて新たな施設と申しますが、緊急増産の計画がさらに追加されたのであります。それは、朝鮮には元来、水田が百六、七十万町歩ある。その中の約半分は水利の安全な水田であり、あとは不安全水田であります。この約八、九十万町歩の水利不安全水田の中に、簡単な溜池を作り、またはちよつとした堀を掘れば少し位の旱害には堪え得られる土地が約二十万町歩位あります。半年位の短日月で工事もある手軽なやり方で相当効果が上ろうというので、昨秋以来、第二予備金等七千数百万円を支出して、とりあえず十萬町歩に対する工事を進めることになつたのであります。

朝鮮は、米の反当平均収穫高が一石五、六斗—尤も、いいところは全北の農場等でここでは反当り三石も四石も穫れるところもあります—で、水利不安全帯の中の不良の水田約二十万町歩位の所は反当平均五斗位の貧弱な収穫でありますので、これらに小さな溜池を作り、簡単な改良を施せば、二年目位から反当り一石程度の増収は期

待できるということでありす。十万町歩だけ、昨年の十一月から工事に着手し、今年の四、五月頃までには完成する予定であります。そのために国庫からは、十一月から三月までの工事費補助として五千万円を支出し、更に四、五月の残りの分として二千五百万円ほど予算に補助費を計上しています。昭和十九年度には更に十万町歩の改良工事をやる計画で二千万円の予算が組んであります。土地改良事業の既定計画としては、大規模な千拓事業四千町歩はこれを後年度に延ばし、比較的手つ取り早く効果の上る灌漑工事六万町歩を繰上げ施行することに計画が変更されたのであります。そのため三千六百余万円の予算が計上されております。結局、米増産のため今年度は約八千二百万円の新規経費を計上したのであります。

麦、甘藷、馬鈴薯の増殖計画につきましては、その計数等は昨年申し上げましたから省略します。なお、この際、米について付言いたしますが、昨年の六月食糧管理特別会計が設けられ、米麦等主要食糧はこれを全面的に総督府で買上げ売買共に政府の手に一元化することになった事情は御承知の通りであります。この特別会計として歳入歳出八億八千万円を十九年度の予算として計上したのであります。まず平年作を予想しまして今年の秋穫れる米の買上げ数量は、およそ千五百万石の買上げを予定しておるのであります。この食糧の国家管理のために政府発行の米穀証券数億円が金融市場に出ることになりますので、朝鮮の金融界にとりましては非常な影響を与えるのではないかと、その影響につきひそかに懸念したのであります。大した悪影響も現

われず、今のところ順調に行っております。

次に、米価の補償について簡単に申し上げます。内地では、昨年秋に穫れた米についてその供出を促進するため、供出米石当り十三円五十銭の補償金（買上値引上げを含む）を出すことに致したのであります。朝鮮もこれに倣い、十二円の補償金を支出することになっております。所要額は一億七千万円に上ります。その外、来るべき夏に穫れる麦類および暮に穫れる粟、稗その他の雑穀の買上げ価格の全面的値上げ平均三割五分程度の値上げをすることに決定されておりますが、この値上げの分は米と同様消費者にはほとんど転嫁しない建前で、価格差補償の意味で国庫から補助金として支出することにいたしております。たとえば申しますと、小麦は朝鮮での現在の買上値段は三十三円五十四銭であります。十円六十七銭値上げをする。しかるに、消費者に売渡す際に二円十四銭高くする程度に止め、八円五十三銭は国で負担する。大麦は買上げ十六円九十九銭の現価を六円四十一銭だけ高く買う。これに対し、売値は五十銭だけ高くするに止め、あとの九割余は補助金として国で負担するのであります。これは、物価の悪循環を来さしめないための政策でありまして、この価格政策は炭、石炭、肥料、米など、およそ基本的な重要物資に対してはすべて皆そういうことになつております。この麦類および雑穀買上価格引上げ補償として総督府は三千二百万円ほど負担する予定であります。

重要肥料についても、生産費をカバーせしめるためには高く売らねばならぬ実情に



ありますので、農民への売価は生産費を割る程度の値段で売らせることとし、その差額は肥料助成金として国庫より補助することになっております。その予算も千六百余万円であります。

この価格補償のための政府予算は総督府だけでも二億七、八千万円に上るのであります。日本全体としては相当巨額を算し、財政上、将来の問題であらうと存じます。予算は十万円そこそこのわずかですが、農器具の改良および普及の問題があります。農器具は朝鮮は非常に遅れている。非能率的である。これを速急に改良してよいものを普及するというのに、特に力を入れる必要があるという、総督閣下のお考えで、優良農器具の選定および普及ということに特に考慮が加えられております。

#### 農林政策の概要・農村対策

農林に対する政策としては、昨年度、農林再編成ということが計画され、予算約七十万円を計上して基本的調査が進められているということは、昨年も御説明申し上げたのであります。その農林再編成計画の二内容として、今年度は、農道精神の確立、すなわち、功利主義で物を作るという觀念を払拭し、報徳主義精神の確立のために、中央に農道修練の道場を設置し、農村の中堅人物を養成することが計画されたのであります。また、十八才から三十才までの青年をもつて、報国青年隊を組織せしめ一組千人位をおよそ一カ月間内地の優良農家に派遣して、内地農村の勤儉の美風を学ばせようということも計画されております。なお、分収耕地の整理にも着手すること

になっております。これは、小作地が無計画に存在しておるため、小作人が耕作のため無用に遠方へ行かねばならず、その往復に相当の時間を無駄にする。そこでなるべく分収している耕地を小作人の住所近くにまとめて往復の時間の節約を計ることにする。ちよつとしたことでありますが、手近なことで増産を期待し得るのではないかと、いうわけであります。今申したような数々の事柄が農村対策としての予算であります。

#### 徴兵制度実施対策

次に徴兵制度の実施にともなう施設の充実強化―徴兵制実施のためには、まず戸籍と寄留制度を完備しなければならぬということは昨年申し上げたところであります。今年も引続きこれが完備を期するため整備中であります。この戸籍と兵事務処理のために今年も六百五十万円ほど計上しております。徴兵について申し上げたいのは、壮丁の訓練であります。今年の十二月で満二十才になる適齢者がおよそ二十二万人位であらうと、総督府では当初予想を立てたのであります。昨年の調査で戸籍も段々整備され、実際は二十五万人余りに上っております。当初予想の二十二万人のうちで、全然、小学校教育をも受けていないものが約半数の十一万人あります。これは何としても言葉だけは判るようにし、兼ねて、ある程度のしつけ訓練をしなければなりませんので、一昨年、青年特別訓練令が公布され、暮の十二月から七、八百万円の予算をとりまして、十一万人の訓練をすることになりました。昼間は働きますから、大体夜間国民学校において、一年六百時間を標準として、四百時間は国語、あとの二百時間

は訓練、これで一年間練成することになったのであります。指導者にその人を得ることが容易でなく、主として国民学校の先生にお願いし、一面、出来るだけ軍人を囑託することにしたのでありますが、なかなか成績がよく、父兄連中も、あそこに行くに行儀がよくないと子弟の入校を希望するという状況であります。一方、国民学校の課程を終えたものもすでに五、六年は野放しになつておりますので、これまた、お召しにあずかつた場合果してうまくやつてゆけるかどうか若干の懸念があります。入営前に短期間でも一度訓練しなければなるまいということになりました、さきに青年特別練成所を出てお召にあずかるものも併せ、入営前に一度仕上げの練成を施すことになったのであります。そのための施設についてであります、今まで陸軍兵志願者訓練所があり、志願兵の訓練に當つておりましたが、これが十八年度限りでなくなります。それを軍務予備訓練所という風に看板を変え、現在の京城、平壤の外、水原近くの始興になお一カ所増設し、この三カ所に於いて、青年特別練成を了えて入営する者を再練成することに計画されたのであります。一カ所一回一千五百人宛二カ月間、一年六回行なうとせば、一カ所で九千人、それが三カ所で二万七千人を練成することが出来るのであります。

また、青年訓練所がありますが、その内容を拡充強化しまして、青訓別科を設け、小学校を出てお召しにあずかるものも——中学以上を出たものは訓練する必要があるが——今一度ここで練成することに措置されております。一年間四、五百時間を夜学で

練成しようというのでありまして、予算は二百万円ほど計上しております。

軍務予備訓練所三カ所の経費は三百四十万円であります。

これでも角、徴兵として軍の営門をくぐる者に対しては一応の手当がつくわけであり、内地人に伍して軍人たる資質において甚しく劣らぬようやつて行くことが期待されておるのであります。

満州にいる朝鮮青年についても半島在住青年と同様の考慮を要しますので、満州国当局と十分協議し、総督府としまして練成に要する経費四百六十五万円を支出することにしたしております。

海軍は昨年から志願兵を始めまして、鎮海で一千人宛六カ月間訓練し、一年に二千人を採用する計画でありましたが、昭和十九年度から二千人宛二回、四千人に増加される予定で、そのための宿舎その他所要経費四百万円が新規予算として計上されております。徴兵に対する準備施設は大体以上の通りであります。

#### 国民動員・防衛対策

国内の防衛対策強化および労務動員その他国民の総力結集のための施策——これもいち御説明する時間ありませんので事柄だけを申し上げる程度にしておきますが、国民動員計画国民登録、国民徴用、応徴人訓練、軍要員の幹旋、内地送出労務者の幹旋、労務指導者の養成、学徒の勤労動員、労務非常管理等の内容が国民動員の名において予算面に現われておるのであります。

防衛施設としては、消防施設の充実、港湾防護、監視隊の新設および訓練、防空通信、緊急物資管理、警防団員出動、通信検閲の強化、国防道路改修、氣象機関の充実、戦時特殊保険等がその内容であります。

#### 貯蓄奨励・愛国債券・貯蓄実績・国民所得

今年度は日本全体の貯蓄目標額は、三百六十億円と決定されました。この中、朝鮮の分担します目標額は十八億円であります。十八年度の目標が十二億円でありましたから、五割増になつております。十八年度の実績はまだ分かつておりませんが、二割以上を突破するのではないかと思います。十九年度の目標は、各般の計数から割出して見ますと十八億はちよつと窮屈であるように思われますが、浮動購買力をウンと吸収する建前から敢て十八億に決めたのであります。貯蓄の実行方法として、朝鮮で創めて行われたものに、割増金付きの定期預金と愛国債券との二種の方法があります。前者は昨年の六月と十二月とに実行して好成績を収めました。一年以上の定期預金で百円をもつて一口とする。もちろん何口でもよろしい。一口毎に一本の抽籤券を与え、一等の当り籤が一万円、二等が一千円、最低十円の割増金をつけるのであります。割に興味が深い方法と見えまして、六月には約一億円、十二月には八千六百万円の預金を集め得たのであります。

もう一つは富籤類似の方法ですが、朝鮮の民度を考慮しますときは、直截簡明な富籤が最も効果的なことは納得されるところであります。法律関係もあり、実質は富

籤に似て形は然らずという内容をもつた一種の債券発行のできるような資金調整法の改正案が八十二議会で通過したのであります。これは元金を二、三十年の将来に返すこととし、当り籤の最高額とその率とは、富籤とほとんど同じの債券です。それを愛国債券という名において、昨年の十二月に一元券と三元券とを合計五百万円だけ発行しました。一元券の一等は一万円、三元券の一等は三万円であり、九本に一本位の当籤率であります。一部の意見では、一等の額を多くするより、当る率を多くした方が興味が深いのではないかというようなことも言われております。こういうわけで、新興所得階級の浮動購買力を吸収するには特に意を用いておる次第であります。

#### 4. 十九年度の歳出予算について

昭和十二年の支那事変以来、昭和十八年までの間に政府の放出しました資金は一千五百億円と見られておりますが、そのほとんど大部分は、いろいろな形で還えされ、そのため今日大きな通貨膨脹にもならず、戦時経済はまず円満に運行されておりますが、そのうち貯蓄として約一千億円が吸収されております。その中、朝鮮の達成した貯蓄の累計額は四十億円であります。朝鮮における昭和十一年の預金総額は七億円そこそこでありました。それがズンズン増加しまして、最近四十億五千万円に達しております。貸出しの方は、昭和十一年が十二億五千万円、十八年末が丁度やはり四十億そこそこになつております。貸出しが預金を超過するのが朝鮮の常道でありましたのが、今年に入つて均衡を得ることとなつたのであります。朝鮮金融界としましては見逃し得ざる現象であります。

この機会に今年度の貯蓄目標額等につき御参考までに申し上げておきます。今年度の全国目標額は三百六十億円であり、国民の消費資金は百十五億円であるといわれております。その計数の出所を概観しますと、一般会計予算が約二百億円、臨時軍事費予算が三百八十億円、合計五百八十億円でありますが、重複している係数七十億円を引きますと、およそ五百十億円というのが昭和十九年度予算の純計になります。その五百十億のうちで、七十億円が東亜共栄圏の現地で調弁される財政資金であり、その他雑収入約十五億円合計八十五億円は国内で調達する必要があります。従つて、五百十億円からこれを差引いた、四百二十五億円が国内で調弁を要する財政資金であります。この四百二十五億円に対し、百四十億円は税、専売益金等で賄ふことになつておりますので、差引き二百八十五億円というものがその財源を公債に仰がなければならぬことになります。

その他に生産力拡充資金として六十億円、これが民間資金として必要であります。公債消化の二百八十五億円と生拡資金六十億円との合計三百四十五億円が最小限度国民貯蓄の増加によつて賄つて行く必要がありますが、当面、貯蓄の目標となるべき数字であります。貯蓄の一応の奨励目標はこれでよい訳であります。国民の懐には持つ必要のない金を沢山持つてゐる、無用の金が死蔵されてゐるので、これらを十五億円程度と見積り、吸収しようというので、さきの三百四十五億円に十五億円を加えた三百六十億円という数字をもつて十九年度の貯蓄奨励目標といたした

訳であります。

以上申しましたように、今年度のわれわれの所得中からは少なくとも三百四十五億円というものは貯蓄しなければならぬ。三百四十五億円は貯蓄という形でお互国民のふところから供出し、租税等の形で前述の百四十億円をこれまた今年度の国民の所得中から出す。それを合計しますと四百八十五億円になります。四百八十五億円は税等の形か、貯蓄の形かで今年度の国民の所得から出さなければならぬのでありますが、一方今年度の国民所得は約六百億円と見積られておりますので、差引き百十五億円が国民全体の消費資金として残る。これだけでお互いの消費生活を賄つて行かなければならぬと大蔵大臣は説明しておられます。この関係は朝鮮ではどうということになるかというと、大体昭和十八年度の朝鮮の所得はおよそ四十億円と見積られます。四十億円の所得のうちで昨年度の貯蓄目標額十二億、国税および地方税等による吸収が八億円、合計二十億円は半島在住者の所得中より賄われ、残りの二十億円で消費生活を賄ふ計算であります。内地は昨年は五百億円であつたのが、二割増の六百億の国民所得、十九年度の朝鮮の総所得は大体五十億円と見積られます。それに対して貯蓄が十八億円、国税地方税その他の関係で約十一、二億円、合計三十億円が所得中から吸収され、差引二十億円前後が消費生活資金として使用を許されることになるのであります。昨年度とは同じ位の金で消費生活をやつて行こうというのも一つのねらいで、貯蓄計画を立てた訳であります。が、実際は心を引き締めて一割も二割も貯蓄額の増加されん



ことを望むものであります。

#### 教育状況・女子特別錬成

次に銃後対策措置として、特に申し上げておきたいのは、女子青年特別錬成についてであります。朝鮮の初等教育在学児童数は学齢児童総数のおよそ六割近くであります。一面一校計画が完成しました当時は二割何分、それが、六割程度までになつて来たのですから非常な殖え方です。しかし、男子の就学率は高いのですが、女子はまだ全体の三割まで行つておりません。昭和二十一年度の義務教育実施の目標は男九割、女五割であります。現在では三割まで行つていないかという程度であります。今日銃後の務めを完全に果たすよう各家庭が国策に協力してやつて行こうという点については、女子の自覚を度外視しては成り立ちません。しかるに、朝鮮では国語すら分からぬ女子だけでも非常に多く、所期の目標に隔ること甚だ遠いのであります。よつてとり敢えず、女子青年特別錬成の制度の下に、全鮮で二千数百カ所、主として国民学校の所在地において年齢十六才の未教育の女子およそ十万余人に国語の教授とかしつけなどを訓え、皇国女性の資質を啓発することになり、女子青年特別錬成の名において錬成を行なうことになつております。もちろん、難しい高等のことはなかなか出来ないとしても、その着想は相当評価されてよいように存じます。このことのために、二百二十万円ほどの予算を計上いたしております。

#### 輸送力増強対策

次は戦時輸送力増強の問題であります。これは、鉄道の建設、改良が主題目になります。今年度新たに建設に着手される予定線路は咸南北青・上本宮間の鉄鉾石搬出のための鉄道であります。それから黄海道の私設鉄道の黄海線を四月一日から買収する予定でありますので、直ちに沙里院から海州港までを広軌に改築することになつております。平元線と价川鉄道の改良も計画されており、釜山港の終端設備、機関庫の新設、操車場の大拡張等も追加施行の予定であり、総額四億一千二百万円（十九年度年割六千四百余万円）の予算を追加計上いたしております。

大陸貨物の陸運転嫁という問題があります。今まで、満州、北支における、鉄、石炭、塩、大豆等、内地においてどうしても必要欠くべからざる大量の貨物は、従来大陸から船で内地に運ばれておりましたが、船は第一線において多々益々必要とする関係等もあり、船腹が不足して来たのと、潜水艦の脅威のため、この大量の貨物は、ほとんど全部大陸から朝鮮の鉄道により南鮮諸港まで運ばれ、朝鮮海峡を船によつて内地に届けられる事になつておるのであります。その数量は、昭和十七年度において百五十万トン、十八年度はその倍、十九年度は、更にその倍という莫大な量であります。

朝鮮の鉄道としては、全く予期しない大荷物を不意に背負わされた形であり、何人

するようには行くものではありません。朝鮮としては、その名譽にかけてもやり抜く意気込で當っております。何と申しても、京釜・京義兩線の複線化を一時も早く完成せしめることです。兩線とも今年の暮までには完成予定です。十七年度大陸貨物陸運・転嫁の始まりません前までは、貨物列車と旅客列車とは大体五分五分の走行杆でありましたが、それ以後は、貨主客従になり、旅客列車を一部、三割と減らして今年の四月からは遂に旅客列車は全走行杆の十六パーセント、貨物列車が八十四パーセントという、ほとんど貨物鉄道と申してもよい状態になつておるのであります。それに満州からの有煙炭が不足勝ちでありますので、朝鮮に豊富に産する無煙炭を大々的に使つております。これを固めるピツチの不足から、無煙粉炭を水でこねて焚いておるのであります。自然、機関車の蒸汽の上りも時には意に任せないこともあり、また、以前は旅客列車の通過する際は貨物列車が待避していたのですが、今は逆に貨物列車に對し旅客列車が路線を譲るといつたような氣持で運行されており、旁々、旅客列車が定時よりおくれることが、ほとんど常習だとの批難も耳にいたすのであります。朝鮮としては何としても負荷された使命を達成しなければならぬとの意気込で、転嫁貨物の輸送に渾身の努力を傾倒し、万難を排して突進いたしておるのであります。そのために、相当思いきつた機構の改革も行なわれました。

#### 行政機構改革

この機会に、昨年十二月に行なわれた行政機構改革の問題に触れておきます。

昨年の機構改革のねらいは、決戦を勝ち抜くために即応するよう、行政部門を超重点的に思い切つて変革するにあつたのであります。朝鮮としては食糧の増産、地下資源その他軍需物資の開発増産、海陸輸送力の増強、徴兵その他の人的資源の活用という事が半島に負荷された使命達成のための具体的内容をなしておるのであります。役所の機構も出来るだけ一元的に簡素強力化ならしめ、右使命遂行に遺憾なき姿勢を整えるにあつたのであります。この見地の下に從來あつた、総務・司政・財務・殖産・農林・学務・警務・法務・鉄道・通信・専売の十一局と官房との機構のうち、総務・司政・殖産・農林・鉄道・専売の六局を廃止し、鉱工・農商・交通の三局を新設して八局となし、地方官庁としては、綜合行政の実をますます強化するため、最大限度に独立の地方各官庁を廃してこれを道知事の配下に属せしめることとなつたのであります。

すなわち、税務監督局、営林署、土木出張所、穀物検査所等は全部廃止し、道の財務部の新設または食糧部その他知事管下の同類の機関に吸収される等の措置が採られたのであります。

中央官庁としては、從來の殖産局の仕事の中から、商工業關係の部門を切り離してこれを、農林局に移した外は從來總務局所管の物動關係事務の全部、司政局所管の土木關係事務中港灣關係以外の事務および勞務關係事務の全部、農林局所管の山林關係事務の全部を從來の殖産局に加え、これを改組して新たに鉱工局を設置し、物動・勞

務・土木・木材と農水産以外の生産拡充に必要とする各要素は全部これを網羅して強力に、かつ、一元的に生協推進に当らせることとしたのであります。

また、従来の農林局からは山林部門が除かれたのであります。別に商工部門が加わり、農、水産、商業と生活必需物資の生産から配給までを一貫して司る態勢を整え、これを農商局と改称したのであります。

従来の鉄道局には、通信局所管だった海軍および航空の仕事の全部、司政局所管だった港湾行政および財務局所管だった税関機構全部が移管され、海陸空の運輸交通を一元的に運営し、かつ、かねての懸案でありました港湾行政の一元化を計ることに計画され、役所も交通局と改称されたのであります。

今までの税関長を埠頭局長と名前を改め、従来の関税の問題は勿論、港湾の簡単な工事、港湾警察、船舶荷役問題、海陸連絡のこと、延いては港の背後の陸運にまでおよんで仕事をするに機構が改められ、釜山、仁川、新義州、清津の四カ所に埠頭局が設置せられたのであります。

財務局からは税務監督局、税務署および税関がなくなりましたが、専売行政が加えられました。

また、従来司政局所管であつた社会事業関係事務は学務局に、また外事関係事務は官房文書課に移管され、総務局所管の法制関係事務は官房文書課に移されるなどの措置により、ここに総務、司政両局は解消されることとなつたのであります。

#### 私鉄買収・海運——木造船融資

鉄道に関し、私鉄の買収のことを一言いたします。現在、朝鮮では私設鉄道会社は十四社で十七路線、延長千六百八十四杆の運転経営をしております。

今年度の買収は、総延長のほゞ四分の一に当る四百十三杆でありまして、茂山の鉄鉱石を運び出すための北鮮拓殖鉄道株式会社所属の鉄道、無煙炭搬出のための西鮮中央鉄道株式会社所属線路中、勝湖里・新成川間、朝鮮鉄道株式会社所属の黄海線全部、釜山臨港鉄道株式会社、の赤崎臨港鉄道線の全部の四路線であります。このうちで、黄海線は営業成績がよく、七分程度の収益があり、他の路線は全部五分以下であります。

私鉄は、五分以上の収益のあるものは利潤の二十倍の価格で買収し、利潤五分以下の路線は建設費で買収するというのが法律で定められております。これらの鉄道の建設費はおよそ七千五百万円であり、今申した計算によりますと、買収費は八千六百余万円で、これを公債で換算しますと八千九百余万円となるのであります。朝鮮としてはこの公債を従前に会社が死蔵するのは惜しいことでありまして、これを生産力拡充資金に活用することにつき大蔵省と話し合をしております。

海運の問題として、木造船の建造も朝鮮としましては、力こぶを入れてやつております。昨年が木造機帆船、純帆船、曳船ハシケを合わせ三百数十隻、今年は一大飛躍をしまして六百隻、八十トン乃至百五十トン級の船であります。

造船補助金千二百六十四万円を計上する外、予算外国庫負担の契約もとつてありま

す。船に關しては融資の補給、船員および造船工の養成、船舶および造船工場等の問題もとよりあげられております。

#### 戦時教育非常措置

次に教育関係の施設について申し上げます。初等教育の義務制は昭和二十一年に実行する目標の下に、現在予定計画通り進んでおります。一カ年間およそ三千学級を増設し、教員養成のため女子師範学校をさらに一校新設する外、大邱、平壤両師範学校を高等専門程度に昇格することになっております。

中等教育機関は、農、工業等実業学校十二校と男子中学校一校が新設されます。

教育戦時非常措置としましては、理工科系統を拡充する一方、法文系統はこれを圧縮するという内地の方針に順応することとしたのでありますが、唯、朝鮮特殊の事情としまして、従前、半島人青年で内地の法文系統の専門以上の学校に志願していたものが、少ない年で千五百人、多い年は三千人もあつたのでありますが、今年から一般的に法文系学徒の入学が内地で極度に圧縮されることとなりますので、相当な人数がアフレてしまうことになります。この内地で閉め出された朝鮮人の中等学校卒業以上のものを如何に処置するか、内地人はほとんど兵としてお召にあずかること故、問題はありますが、半島青年はそうは参りません。自然、これは朝鮮で何とか考えなければならぬ問題であり、具体的対策としては時局即応の専門程度教育機関を、内地で行なわれる以上に相当思い切つて拡充乃至新設する以外に途はないのであります。

すなわち、大学理工学部予科は定員の五割増しとし、京城高等工業学校の收容人員を倍加し、釜山高等水産学校の定員も五割増しとし、師範学校を二校昇格して専門程度にする。その他、通信、無線、通信養成所の新設、理科並びに博物の中等教員養成所の大学附設、京城高等工業学校、平壤高等工業学校および大邱高等農産学校の三専門学校の新設等が計画されておるのであります。

翻つて、法文学系統としましては、京城大学の法文学部は八十人の定員を六十人とし、京城法学専門学校および京城高等商業学校は共に解消してその代りに官立の経済専門学校を新設し、私立の専門学校である、普成、延禧、恵化、明倫の四校を廃止しまして、私立工業経営専門学校および私立拓殖経済専門学校の二校を新設する。即ち法文系統の学校は官立二つを一つに、私立四つを二つに整理して時局に應ずる専門学校に替えることに措置される予定であります。そして、理工科など拡充を要する部面は全面的に收容定員を五割乃至倍に増員する外、あるいは昇格、あるいは新設により新入学生は十八年度に比べて一千人の増員をなし得るのであります。内地において收容されない従来の法文系学校入学志願者がある程度朝鮮において收容されることになるのであります。

#### 農事並びに水産試験機関の整理・統合

次に農事および水産試験機関の統合問題にちよつと触れておきます。

農事試験場は、従来本府直轄試験場として水原に本場があり、全南の裡里、黄海道



の沙里院、咸南の普天堡等にそれぞれ支場などがあり、各道はまた、別に一カ所持つておるのであります。

水産試験場についても、釜山に本府直轄の試験場のある外、各道にそれぞれ設置されておることは農事試験場と略々同様であります。

各道における試験場は規模小さく試験というよりは実習場または原種育成場に近く、かつ分布が行政区域単位であり、気候・地勢等自然の条件に即応して設けられたものでありません。その結果、自然、重複した研究もなきにしもあらず、その見地からみれば、なくもがなの施設もあり得るのであります。かかる見地から、今回前述両種の各道の試験機関はこれを国に統合強化することに方針を定められ、農事試験場は水原の本場の外、八カ所に整備される予定でありまして、両試験場のため、国費予算三百六十余万円が計上されております。

#### 下級官吏の待遇改善

下級官吏の待遇改善問題も今年度見逃し得ない事柄であります。第一線における民衆と直接行政を施す官吏が、特に義と涙とをもつて民衆を領導する要あることは、総督閣下の機会ある毎に注意相成つておるところであります。同時にまた、下級官吏に対する待遇の改善なくして正しきを求むるも、またそこに無理の存する点をも常に御指摘相成つておるところでありまして、ことに、巡査において、その然る所以が認められるのであります。巡査、看守の待遇の改善に四百九十万円、一人当り一年お上

そ二百円程度を増額する財源を計上したのであります。これである程度の緩和はするだろうと思ひます。

鉄道の下級従業員待遇改善費六百五十万円、通信関係三百七十万円、専売の従業者に対して九十万円、こういう風に第一線の下級官吏の待遇改善のために千六百万円の予算を計上しております。

なお、末端行政機関の拡充強化が必要であるということも、常に総督閣下の指示されておるところでありまして、面長に、元知事、参与官であつた長老を任命するの先例を開かれ、また、邑・面の重要な職務には、国の官吏たる判任官を置くこととし、三百人の増員が計上されております。

この外、軍事援護、徴兵事務あるいは貯蓄奨励等、国務の増加に応じ、昭和十九年度には邑・面吏員四千七百人近くの増員を計画し、所要経費三百三十万円ほど計上いたしております。

邑・面吏員の養成およびその教養錬成についても、一段の改善方が留意されております。最後に、待遇改善問題で画期的と申しても差支えない事柄が、この四月一日から実施されることに決定されました。

朝鮮人官吏の一部に対し、内地人官吏と同様任勤加俸支給の途が開かれたこと、すなわちこれであります。

徴兵制の実施が今年の末と、目睫に迫り、義務教育制度の施行もまた三年後に約束

されておる今日において、内鮮一体の根本理念から見て、従来割り切れぬ懸案として残されて来た官吏の加俸問題に対する答案がここに明示されたのであります。

物価その他経済、社会情勢から見た場合、内地人加俸をこの際廃止乃至減額する余地のないことは何人も常識として領き得ることと存じます。しかる場合、半島人の待遇を内地人と同一の水準に引上げる以外解決の途はありません。

半島に勤務する半島人官吏に対し、本俸以外に卒然として何等かの手当を支給することは、内地における内地人に比し、過ぎたる手当を受け不平等となるとのそしりをまぬかれず、内地に容認される可能性すこぶる乏しと見ねばなりません。総督御下命の下、昨年の秋以来これが実施につき種々と調査研究いたしましたのでありますが、万全の結論に到達するには至難の問題でありました。結局、中央でとつて来た従来の在勤加俸の理念——すなわち、内地人が外地・朝鮮・台湾・樺太・南洋・関東州——の統治に従事するため、足一步海を渡つてふみ出した場合に特に支給される一種の俸給であるとの従来の觀念に根本的の更改を加える。即ち、在勤加俸とは「内地人たると台湾人たると何人たるとを問わず、足一步海外に踏み出すと否とに論なく、外地の統治に従事する官吏および同待遇者に支給される俸給の一種である」というように変更し、そして、その支給の範囲は、所管大臣等が大蔵大臣と協議してこれを決めるとい風にしたのであります。

勅令をこのように改正すれば、外地の統治すなわち、朝鮮の統治に従事する官吏——

内鮮の別なく——には何人にも在勤加俸を支給し得ることとなり（在勤加俸がかくの如き性質のものであるとすれば、内地の統治に従事する官吏に支給されないのは規定上当然のこととなりましょう）窮通の途が開かれる訳であります。

しからば、全部の半島人官吏に支給するかというに、事の起こりはもともと内鮮一体の理念に発足するものでありますから、物心両面ともに皇国臣民化したもの、心はもちろん、経済生活等においても内地人と何等ケイ庭のない半島人に適用さるべきはこれまた怪しむに足らない所であります。

このような観点から、勅令関係の法規の面として、形式的に半島人である高等官全部、第一次所属官署の課長以上、第二次所属官署の長以上および国民学校長、府、邑、面長に支給されることに決定され、必要経費が予算に計上されたのであります。

## 五 本議会議通過法案と議會の様相

次に今期議会で通過した朝鮮関係の法律案等について簡単に申し上げます。この議會は真に決戦議會の名にふさわしく、審議も短期間に終了された次第であります。政府提出の法律案も例年七、八十件に上るのが、今年は三十三件に圧縮され、全部原案通り成立したのであります。朝鮮のために提案された案件は、

一、朝鮮における裁判手続簡素化のための国防保安法および治安維持法の戦時特例

に關する法律

- 二、朝鮮私設鉄道補助法中改正法律案
- 三、鉄道買収のための交付公債発行
- 四、朝鮮事業公債発行限度拡張
- 五、昭和十八年法律第九十三号中改正の五件であります。

第一の、裁判関係の法律案は、裁判手続簡捷化を目的としたものでありまして、従来の三審制度を二審制度にしようとするのがその内容であります。一般の手続きの簡易化は、制令である裁判所令の改正によつて実行し得るのでありますが、国防保安法と治安維持法は、法律がそのまま朝鮮に施行されておりますので、その中に定められた三審制度を朝鮮において二審制とするためには、やはり法律をもつて改正する手続きを要しますので、この法律案が提出された次第であります。

朝鮮私設鉄道補助法中改正法律案は、全鮮十七社の私設鉄道中、今年の十二月までは、昭和二十年の二月、すなわち今年度中に国庫補助の期限の切れるもの—今日まで二十五年間補助が与えられて来たのでありますが、なお自営の域にまで達しかねますので、さらに補助期限の延長を要するもの—が四線ありますので、前例によつて五カ年間期限を延長しようとするのがその主旨であります。

私設鉄道買収のための交付公債発行の内容については、さきに申し上げたところで

御承知下さつた事と存じますのでここでは省略いたします。

朝鮮事業公債発行限度の拡張は、毎年のように提案される法律案であります。すなわち、朝鮮における鉄道建設・改良・道路・港湾その他時局産業開発のための事業費支弁のため、公債発行限度拡張の権限を得るための法律案でありまして、十九年度より新たに、

鉄道建設および改良	四、一九七	万余円
土地改良事業費	一〇、六七五	
土木費補助	三、〇〇一	
重要鉱物増産施設費	一、九四六	
道路修築費その他	三、四九七	
合 計	五、九三〇六	

を公債支弁事業として追加し、公債発行総額を従来の分と合わして、二十九億九千五百余万円に改正するための法律案であります。

次に、昭和十八年法律第九十三号と申しますのは、米の生産確保ならびに朝鮮における企業整備という仕事、すなわち事業とは見られない事柄に必要とする経費を公債により支弁しようとするための法律であります。十九年度以降においては、本府財政の都合上、右申した事柄の外、麦類の生産確保に要する補助金、石炭および化学肥料の価格調整補助金の財源をも公債により、公債発行総数を三億一千八十万円としようと

する法律案であります。この法律案はこれを別の言葉で申せば、価格政策のために、まともな必要とする財源は、これを公債に仰ぐ事の端を開いたものであると申し得るのであります。

#### 決戦非常措置十五項

三月下旬、議会の会期終了直前に再開される締めくくりの会議は、従来は一応の形式に過ぎぬ観があつたのでありますが、本年は三月二十二、三、四日の僅か三日間でありますが、今秋行なわれる府県会議員の選挙期日延期等に関する法律案が提案され、これを審議するための特別委員会が開かれることになり、かつ、議会休会中、重大な時局に即応するため、二月二十五日の閣議において、決戦非常措置十五項、すなわち、決戦の現段階に即応し、国民即ち戦士の覚悟に徹し、国をあげて精進刻苦、その総力を直接戦力増強の一点に集中し、当面の各緊要施策に急速に徹底実施する外、左の非常措置を講ずるという前置きの下に、

- 一、学徒動員体制の徹底
- 二、国民勤労体制の刷新
- 三、防空体制の強化
- 四、簡素生活徹底の覚悟と食糧配給の改善整備
- 五、空地利用の徹底
- 六、製造禁止品目の拡大と規格統一の徹底

#### 44 十九年度の歳出予算について

- セ 高級亭楽の停止
  - ハ 重点輸送の強化
  - ニ 海運力の刷新強化
  - 一〇 平時的または長期計画的事務および事業の停止
  - 一一 中央監察事務の地方移譲
  - 一二 裁判検査の迅速化
  - 一三 保有物資の積極的活用
  - 一四 信賞必罰の徹底と査察の強化
  - 一五 官庁休日の縮減と常時執務の態勢を確立す
- という、十五項が決定され、直ちに実行に移され、また実行の準備に着手されたことは、御承知の通りであります。この措置は国民生活の各方面にわたり直接影響するところ大きいだけに、議会においても、深更にわたり、真剣に論議され、また衆議院では、食糧の増産確保に関する建議案が上程され、貴族院においても右建議案に関連し、内田新農商相の決意とその具体策についての見解を質し、農商相はかなり突込んで政府の所信を表明し、近き将来国民の期待に副うような具体策の具現化を思わせるなど、今年の締めくくりの議会は例年とは異り、一見、臨時議会の觀を呈したのであります。僅か三日間ではありましたが、政府も議院側も双方共、相当意を尽されたと申し上げてよろしかろうと存じます。



決戦非常措置に関する貴衆両院議院の委員会における質疑は、広汎多岐にわたり、すこぶる熱心に応答されたのでありまして、その大綱だけでも御伝えする余裕を持ちませんが、質問の中、只今記憶に残っております事柄を、思いつくまま秩序もなく申し上げてみまするならば、

一、非常措置により、政府予算には当然、歳入の欠陥と、歳出の増加とを来すことは明らかであり、しかも議会会期中の出来事である以上、予算の修正案を提案すべきであるにかかわらず、その措置に出ない政治上の責任を如何に考えるか

二、空襲必至の情勢下においては、都民に安全感を与えるような大規模な防空の措置を執つてはどうか

三、防空問題と食糧等生必物資の窮屈化に伴う国内思想問題に対する当局の見解および対策はどうか

四、食糧問題について、国民の満腹感を与える用意はどうか  
無用有害な統制の整理につき検討されたし。なお郷土食奨励の実を挙げ、もつて、米食偏重の弊を矯正されてはどうか

五、食糧増産のための空地利用に関連し、農器具の配給とその修理とに対する心遣いはどうか

六、交通機関混雑の緩和策と交通従事員の不親切是正につき深重な考慮を払われた

七、通信物および電信の遅延対策はどうか

八、汽車乗車の許可権を警察の手に与えるというが、警察官の潰職を招来し、警察本来の職務に欠陥を来すのおそれなきや

九、疎開の実施に妨げとなる現象、疎開先における住家と食糧の不安、荷物の運搬の渋滞など隘路打開にどのような用意があるか

一〇、工場と学校の疎開についての根本方針はどうか

一一、高級料理店および娯楽廃止後の始末はどうか

一二、木造船建造の隘路打開に関する新大臣の抱負はどうか

一三、国民勤労体制の刷新に関し女子挺身隊の出現と家族制度保持のための女子不敵用の理念との調和はどうか

なお、給与の適正および明確化、女子挺身隊とこれを受け入れる工場の女子受入態勢の十分な用意、一般労務管理の改善

等々が、今、私の記憶に残っている題目でありましたが、種々の機会に発せられた希望乃至質問として特に注意を引きましたことは、

「大臣の意の存するところを誤りなく第一線に伝え、政治が行政末端において、大臣の考えのように動くよう、特段の配慮を要する。すなわち、中央の意図の行政第一線への正しき浸透」

ということが、強調された点であります。

三月三、四日の衆議院における金光代議士の戦時食糧増産に関する建議案説明と、内田農商相のこれに対する積極的意見の開陳とは、前にもちよつと触れたところですが、「武器にも等しい」決戦食糧増産の問題だけに、議会の最終日を飾るに相応しい緊張を感じさせられたのであります。内田農商相はここで主要食糧の総生産量と、ならびに政府に対する供出量とを、作付前にあらかじめ生産者に割り当てて、彼等をして、希望と明朗とをもつて生産に従事するを得しむるの方途を講ずることとし、かくて生産者は、責任をもつてこれが完遂に邁進するという生産責任制と不可分の関係における事前割当制の確立と、割当量以上を供出した者に対する画期的の英断を以つてする報奨制度の採用とを確約し、壇上壇下、食糧増産についての呼吸がピッタリ合つたという印象を与えられたことも、決戦議会なればこそとの感を深からしめたのであります。

この重要農産物の生産意欲向上の妙策としての事前割当制は、わが半島においては小磯総督閣下の発意により、すでに昨年の米作より実施済みのことであり、また今議会で特に強調された行政事務の第一線官庁への浸透徹底という点、これまた小磯総督閣下が一昨年御着任の当初より、とくに強調相成り、今日においても機会ある毎に戒めておられるところでありまして、これらの重要問題が、半島では総督閣下の御発意により、内地に先んじて実行に移され、またこれが実現に精進されているということ、をこの機会に申し上げておきます。

#### 朝鮮への関心

わが半島に関する議会の関心が年を重ねるに従い段々と高まつて行く趨勢の見えますことは、意を強うする次第でありまして、今年の議会におきましては、あるいは関係の委員会において、あるいは貴衆両院の政務調査会、あるいはそれぞれの団体の研究会などにおいて、私鉄の買収その他公債発行等、直接法律改正に関する事柄について縦横の視野から質問のあつたことは申すまでもないところですが、その他統治の各方面に関し、およそ三十八の事柄について質問があつたのであります。最も主な事項は、

- 一 民心の動向
- 二 治安の状況
- 三 食糧事情
- 四 輸送問題
- 五 労務対策

の五項目に要約し得るのでありまして、内容の詳細は省略いたしますが、もつて、内地において関心を持たれている事柄の大綱をトすることが出来ようかと存じます。只、貴衆両院における朝鮮に関する質疑を通じて私の感じた所を卒直に申し上げます。すなわち、内地においては過去において母国として半島が苛烈な戦時下その包蔵する資源と、その位する地位とを十分活用するよう、万全の誘致を施したか否かの反省を

總督統治終末期の実態 (四)

第八十五回帝国議会説明資料・複刻

目次

第一 治安概況	(本集成・第一号所載)
第二 食糧事情	( "・第二号所載)
第三 航空機関係資材ノ生産状況	( "・第二号所載)
第四 鉄鋼石・石炭・木材其ノ他	( "・第三号所載)
第五 鉄鋼石・石炭・木材其ノ他	( "・第三号所載)
第六 朝鮮人ニ対スル徴兵制度施行ノ状況	..... 52
第七 労働事情	..... 56
第八 学徒動員ノ状況	..... 69
第九 輸送力ノ現状	..... 71
第十 防衛準備ノ状況	..... 82
第十一 貯蓄奨励其ノ他 (理財・国語普及・人口等)	..... 93

以上第一〜第四までは既刊各号に運載した。なお、既刊各号では、原本のカタカナをひらがなに直しカナ使いも新制に直したが、本号所載第五以下は原本のままカタカナを使用した。

すること少く、半島に求むること急であり、かつ半島人の性格的短所を数え立て、わが国総人口の四分の一を占める、切つても切れぬ同胞であり、欠点ありとせば、おおらかな気持でこれを矯導するという襟度に乏しいような感を与えられたことは、ひとり半島のためといわんより、時局下わが帝国のため深重な考慮を要する事と存ぜられるのであります。半島が物的方面では、食糧の部面において、地下資源において、大陸物資の輸送面において、また、人的方面では、労務の送出しにおいて、志願兵など軍事関係において、一般の思想動向の往年に比して格段に良化した真相について、内地ではこれが正しい認識と理解の上に立つて判断するの心構えを必要とすべく、民衆は向後一層品性の陶冶、道義水準の向上に努力すると共に、内地に向つて認識と理解を与うることに精進することの必要を痛感する次第でありまして、真に国家の総力をあげて聖戦の目的達成のため一億一心となるの切要を思ひしむる時、お互に誤解に基き疑心暗鬼を生み、マンマと敵の思想謀略の手に乗ずるようなことのないよう戒心すべきものと存する次第であります。

長きに亘つての御清聴を感謝し、私の御話を終わります。

(昭和十九年三月・稿)

## 目次

第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十
治安概況	食糧情	航空機關係資材ノ生産狀況	燃料、石、石炭、木材其ノ他生産力増狀況	朝鮮人ニ対スル徵兵検査施行ノ狀況	勞務事情	学徒動員ノ狀況	輸送力ノ現狀	防衛準備ノ狀況	貯糧奨励其他
183	90	103	108	142	146	159	161	172	183



# 総督統治終末期の実態(四)

第八十五回帝国議会説明資料・複刻

## 目次

第一治安概況	(本集成・第一号所載)
第三食糧事情	( "・第二号所載)
第三航空機関係資材ノ生産状況	( "・第二号所載)
第四鉄鋼石・石灰・木材其ノ他	( "・第三号所載)
第四鉄鋼石・石灰・木材其ノ他	( "・第三号所載)
第四鉄鋼石・石灰・木材其ノ他	( "・第三号所載)
以上第一〜第四までは既刊各号に連載した。なお、既刊各号では、原本のカタカナをひらがな直しカナ使用も新制に直したが、本号所載第五以下は原本のままカタカナを使用した。	
第五朝鮮人ニ対スル徴兵制度施行ノ状況	52
第六労働事情	56
第七学徒動員ノ状況	69
第八輸送力ノ現状	71
第九防衛準備ノ状況	82
第十貯蓄奨励其ノ他(理財・国語普及・人口等)	93

すること、半島に求むること急であり、かつ半島人の性格的短所を数え立て、わが国総人口の四分の一を占める、切つても切れぬ同胞であり、欠点ありとせば、おおらかな気持でこれを矯導するという襟度に乏しいような感を与えられたことは、ひとり半島のためといわんより、時局下わが帝国のため深重な考慮を要する事と存ぜられるのであります。半島が物的方面では、食糧の部面において、地下資源において、大陸物資の輸送面において、また、人的方面では、労務の送出しにおいて、志願兵など軍事関係において、一般の思想動向の往年に比して格段に良化した真相について、内地ではこれが正しい認識と理解の上に立つて判断するの心構えを必要とすべく、民衆は向後一層品性の陶冶、道義水準の向上に努力すると共に、内地に向つて認識と理解を与えることに精進することの必要を痛感する次第でありまして、真に国家の総力をあげて聖戦の目的達成のため一億一心となるの切要を思ひしむる時、お互に誤解に基き疑心暗鬼を生み、マンマと敵の思想謀略の手に乗ずるようなことのないよう戒心すべきものと存する次第であります。

長きに亘つての御清聴を感謝し、私の御話を終わります。

(昭和十九年三月・稿)

目次

第一	治安概況	53
第二	食糧事情	90
第三	航空機関係資材ノ生産状況	103
第四	鉄鋼石、石炭、木材其ノ他生産力増強ノ状況	108
第五	朝鮮人ニ対スル徴兵検査施行ノ状況	142
第六	勞務事情	146
第七	学徒動員ノ状況	159
第八	輸送力ノ現状	161
第九	防衛準備ノ状況	172
第十	貯蓄奨励其ノ他	183

## 第五 朝鮮人ニ対スル徴兵検査施行ノ状況

朝鮮ニ於ケル徴兵制施行ハ、去ル昭和十七年五月ニソノ発表ヲ觀、爾來半島官民等  
ゲテ感激ノ中ニ本制度施行上必要ナル諸準備ヲ著々進メ來リタルガ、就中、制度趣旨  
ノ普及徹底、官庁機構ノ拡充整備、戸籍ノ準備、寄留制度ノ創設等ヲ始メトシ、國語  
ノ普及向上、學校教練及青年鍊成ノ拡充強化等制度実施上最モ緊急重要案件ニ付テハ、  
軍官民一致協力シテ強力果敢ニ推進シ、以テ準備対策ノ遺憾ナキヲ期シタリ。斯クシ  
テ昭和十八年八月ヲ期シ、愈々本制度ハ実施期ニ入り、本年四月一日ヨリ全鮮ニ亘リ  
徴兵検査ヲ施行、八月二日ヲ以テ終了セルガ、其ノ検査ハ官民受檢壯丁共ニ真摯ナル  
態度ニ終始シ、壯丁ノ受檢率並体格等位等ニ於テモ概ネ所期以上ノ優秀ナル成果ヲ収  
ムルヲ得、其ノ早キハ本年九月初旬頃ヨリ入營開始ノ運トナリ居レリ。

以上制度実施上特記スベキ事項ニ付キ其ノ概要ヲ述ブ

### (1) 徴兵適齡届出ノ状況

昭和十八年十月一日ヲ期シ全鮮一斉ニ徴兵適齡届出ヲ開始セルガ、ソノ重要性ニ  
鑑ミ、各道ヲ督シテ愛國班組織ヲ利用スル等、一般壯丁並ニ父兄等ニ之ガ趣旨ヲ周  
知徹底セシメテ届出ノ確行ヲ促シ來リタル結果、届出最終期日タル十一月末日ニ於

ケル届出ノ状況ハ、予定適齡者人員ニ六六六四三人ニ對シニ五四七五三人ノ届出ア  
リテ約九割六分ノ優秀ナル成績ヲ示シタリ。

### (2) 壯丁ノ調査ト之ガ把握

半島同胞ノ特異性タル戸籍ノ不整備ニ基因スル無籍者復本籍者ノ存在、下層階層  
民ノ移動頻繁並ニ戸籍關係諸手續ノ不履行等ハ必然的ニ相当多數ノ所在不明者ヲ予  
想セラルル実情ニ在リタルヲ以テ、制度実施以來所在不明壯丁ノ調査発見並ニ全壯  
丁ノ掌握ニハ特ニ留意シ來リタルトコロナルガ、之ガ所在不明壯丁ノ調査ノ結果ハ  
昨年十二月一日現在六七六七人ノ多數ニ達シタルヲ以テ、本年三月ニハ之ガ一斉調  
査計画ヲ樹立シ、本年度徴兵検査終了迄ヲ調査期間ト定メ、全鮮一斉ニ各關係機關  
ノ協力ヲ結集動員シテ継続的調査ヲ実施シタル結果、所在不明者中三〇三八人ノ多  
數ヲ発見シ得タル外、調査上ノ有力ナル端緒ヲ得ルニ至リタルモノ相当多數ニ上リ、  
壯丁ノ掌握上ニ効果大ナルモノアリタリ。尚コノ外、本一斉調査ニ併行シ、全鮮ニ  
亘リ全壯丁ノ完全把握ヲ計画実施シ、以テ徴兵検査ノ円滑ナル遂行ヲ期シタリ。

### (3) 徴兵検査ノ実施状況

本検査ハ本年四月一日ヨリ全鮮的ニ開始セラレタルガ、畏キ辺ニ於カセラレテハ  
半島徴兵ニ深ク大御心ヲ注ガセ給ヒ四月ニハ特ニ侍從武官ヲ御差遣ノ上親シク其ノ  
状況ヲ御実視遊バサレタルハ聖慮ノ程誠ニ恐懼感激ニ堪ヘザル処ナリ。カクテ去ル  
八月二十日ヲ以テ、何等ノ不祥事故モナク極メテ円滑順調ニ終了シタルガ、一部少

數無智者ノ忌避的行為ヲ除ク外ハ、受檢壯丁ハ固ヨリ其ノ父兄一般共極メテ積極的眞摯ナル態度ニ終始シ、全鮮ニ幾多ノ愛國ノ憂情澎湃タル美談佳話ヲ残シタリ。

其ノ成績ハ受檢率ニ於テハ、受檢予定人員ニ對シ〇九四五ノ好成績ヲ示シ体格等位ニ於テモ受檢人員ニ對シ甲ハ〇三三五、一乙ハ〇三〇〇、二乙ハ〇一六〇、三乙ハ〇一一一、丙ハ〇〇五六、丁ハ〇〇三二、戊ハ〇〇〇ニノ好成績ヲ示シタル状況ナリ。

(4) 現役兵入營準備

徵兵検査ノ終了ニ伴ヒ、徵兵制施行後初ノ現役兵採用者ハ、愈々九月一日以降明  
年五月マデノ間ニ、晴ノ入営ヲ為スコトナリタルガ、之等現役採用者ノ入営準備  
ニ関シテハ、特ニ意ヲ用ヒ、本春以来徵兵検査ノ結果甲種合格トナリタルモノニシ  
テ国民学校初等科終了以下ノ者ニ対シテハ、之ヲ軍務予備訓練所又ハ青年合同訓練  
所等ニ収容シ、一ヶ月乃至二ヶ月間ニ亘リシツケ訓練ヲ主トシテ必要ナル教育ヲ施  
シ来リタルガ、更ニ一般甲種合格者ニ対シテハ、特ニ健康ニ留意セシメ積極的ニ体  
位ノ向上ヲ促シ、疾病ニ依ル入営不能者ノ絶無ヲ期スルト共ニ壮丁並其ノ父兄母姉  
等ヲ対象トスル座談会其ノ他講演会等ヲ開催シテ兵營生活ノ真相ヲ理解セシムルコ  
トニ努メ、壮丁ハ勿論父兄母姉等ニ対シ入営ニ伴フ不安ノ一掃ニ努メシムルノミナ  
ラズ、無敵皇軍ノ一員トシテ鬼畜米英撃滅ノ聖戦ニ勇躍参加シ得ルノ榮譽ヲ感得セ  
シムル等入営準備訓練ノ完璧ヲ期シツツアリ。

(5) 在外朝鮮人徵兵檢查ノ結果如何

昭和十九年度在滿朝鮮人ノ徴兵検査受検者実数ハ目下関東軍ニ於テ取纏メ中ナルガ、概ネ一三、二〇〇名内外ト目セラレ検査ノ結果、甲種、第一乙種、第二乙種、第三乙種ノ各合格者ハ一三、一三二名ナリ。

尚在支壯丁概數ハ北支蒙疆、中南支ヲ合シ七八〇名内外ニシテ其ノ合格者數ハ未ダ判明セザルモ、今日迄各地ニ於ケル検査成績ヲ綜合スルニ各般ニ亘リ予期以上ノ良成績ヲ収ムルモノト思料セラル。

×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×

近藤註

第四の電力生産（一三〇—一四一頁）各題の文中「別表第×号参照」の註があるが、その別表は原本にも掲載されていない。御了承を乞う。



## 第六 勞務事情

### 一、最近ニ於ケル朝鮮ノ勞務事情如何

答 今次戦争ノ推移ニ伴ヒ朝鮮ハ、益々大陸前進兵站基地タルノ重要性ヲ帯ビ其ノ豊富ナル地下資源、水力電気等ノ好立地条件ノ下ニ軍需及生産拡充等ノ大規模諸産業急激ニ興リ勞務ノ需要ハ逐年飛躍的增加ヲ見ルニ至レリ。加フルニ昭和十四年以降國民動員計画ニ基キ内地、樺太、南洋群島ニ對シ既ニ四十万、軍要員トシテ七万五千余ニ及ブ青壯年層ノ集團の大量送出ハ鮮内勞務事情ニ不尠影響ヲ及ボセリ。而モ半島ニ負荷セラレタル戦力物資ノ増産及之ニ附帶スル輸送荷役力ノ急速増加ハ、一刻ノ遷延ヲモ許サザル情勢ニ立至リタルニ鑑ミ、本府ニ於テハ強力ナル勞務動員対策ヲ樹立シ、広範圍ニ亘ル現員徵用ノ施行、官斡旋及勤勞報國隊ノ強化、学徒勤勞動員ノ実施等各般ノ措置ヲ講ズルト共ニ、銃後応召ノ精神ヲ基調トスル一定年齢層ノ一般徵用ヲモ断行スルコトトシ、鮮内及鮮外ニ於ケル重要諸事業ノ新規要員ノ充足ニ対処シツツアリ。即チ昭和十九年度ニ於ケル勞務動員計画數ハ約百三十四万人ノ歴大ナル數ニ上リ今後強力ナル勞務動員ヲ遂行スルニ非ザレバ所期ノ目的達成至難ナル狀況ニ在ルヲ以テ、先般鮮内外ニ對スル勞務送出方法ノ一大刷新ヲ加フルト

共ニ、國庫助成ノ下ニ勤勞保護ノ強力ナル実施ヲ企図シ勤勞動員保護団体ノ設立準備ヲ急ギツツアル次第ナリ。尚之等勤勞諸施策ト併行シテ重要産業經營者ニ對シテハ、勤勞管理ノ万全ナル施策ヲ講ゼシメ勤勞効率ノ最高度發揮ニ遺憾ナキヲ期スベク指導シツツアリ。

### 二、國民徵用實施狀況如何

答 朝鮮ニ於テハ従来比較的勞務資源ニ恵マレタル關係モアリ、昨年迄ハ専ラ陸海要員ノミノ徵用ヲ實施シタルニ過ギザリシガ、戦局ノ苛烈化ニ伴ヒ戰略物資生産ノ飛躍的増強ト軍部工事ノ激増ニ加ヘ、數年ニ亘ル鮮外勞務送出ニ依リ鮮内勞務事情ハ著シク困難トナリタルヲ以テ、本年一月勞務動員ニ關スル緊急対策ヲ樹テ、広ク全工場鉦山ニ對シテモ國民徵用令ノ發動ニ依リ、勞務充足ノ完璧ヲ期スルコトト致シタルガ之ガ概況左ノ如シ。

#### 一、現員徵用

重要工場鉦山ノ一般徵用實施ノ前提措置タラシムル目的ト併セテ勞務移動防止ヲ期スル為、本年二月以降鮮内重要工場事業場ノ現員徵用ヲ實施シタルガ、現在迄（八月二十日）ノ徵用箇所數、工場七三ヶ所、鉦山五六ヶ所、計一二九ヶ所ニシテ社長以下従業員ノ徵用數一四七四八〇人ニ達シタルガ、實施後ノ成績極メテ

調査工場 鉱山数										三〇ヶ所									
一 雇入数増減状況																			
雇入数増加工場 鉱山数										十九ヶ所									
増加割合										二%									
最	高									五九九%									
平	均									一二五%									
雇入数減少工場 鉱山数										一一ヶ所									
減少割合										一二%									
最	低									九五%									
最	高									五一%									
平	均									四四%									
二 解雇数増減状況																			
解雇数減少工場 鉱山数										二〇ヶ所									
減少割合										七%									
最	低									八九%									
最	高									五〇%									
平	均																		

現員徴用実施前後ニ於ケル勞務移動及稼働状況

良好ニシテ、勞務者ノ移動激減シタルハ勿論、稼働率モ徴用前ニ比シ全般的ニ著シク上昇シ、其ノ多キハ二四%増ヲ示セルガ、然モ徴用前皆無ヲ予想シタル雇入数ハ徴用実施ニ依リ反ツテ増加ノ傾向ヲ示シ、甚ダシキハ徴用前ニ比シ六倍ニ達スルモノアリテ、使用者側ニ好評ヲ博シタルハ勿論、被徴用者モ徴用ニ依リ國家ノ擁護ヲ受クルト云フ安心感ト応徴士タルノ自覺ニ依リ勤勞能率ヲ増大シツツアル実情ニシテ、今後ニ於テモ之ガ適切ナル運用ヲ期セントス。

二 一般徴用

一般徴用ハ從來ニ於テハ、軍要員ノミニ付発動シ来リ、其ノ数現在迄（八月二十日）ニ、三四〇五〇名ニ達シタルガ、民間要員ニ付テハ、本年八月鮮内鉱山ニ對シ一、二〇〇名ヲ實施シタルヲ初メトシ、順次他ノ鮮内工場鉱山ニ對シテモ、徴用ヲ實施スル方針ナルモ、近時内地勞務需要急ヲ告グルニ至リタルヲ以テ、内地送出勞務者ニ付テモ可及的徴用ニ依ルコトニ内地側ト協議調ヒ、其ノ第一回トシテ海軍艦政本部所管海軍管理造船工場二十一箇所ノ所要員数三九五〇〇名中一ハ五〇〇名ヲ九月ニ徴用送出スルコトトシ、既ニ徴用発令シタルガ、残り二、一〇〇〇名ニ付テモ、同様十月ニ徴用送出スル予定ニシテ、尚今後徴用送出数増大スルモノト認メラルモ、現在迄ニ判明セルモノ、内地石炭山二四六五〇名中約半数ハ徴用ノ予定ナリ。

事業別	對象勞務者数	特配食糧
工場	二五四〇七四人	一八四五六石
石炭山	八〇〇六七	七三六六
鉦山	二一五六五三	一六五一〇
土建	二八五一四四	一八五三一
運送	五六五五五	三六五一
交通	七四一一二	三三三三
私鉄	一六〇一六	六五〇
漁撈	一六八二九五	五九八四
林業	二四五五四	一二〇九五
塩業	一〇八八三	一〇〇四
農墾地	七七一六四	四四六〇
計	一、四八三、四一七	九三、〇四〇

重要工場事業場勞務者用特配食糧（最近一ヶ月所要量）

增加割合			徵用前後稼働率比較			徵用前後稼働率			徵用前後稼働率			解雇数増加工場鉦山数		
平均	最低	最高	平均	最低	最高	平均	最低	最高	平均	最低	最高	平均	最低	最高
七、六%	二、〇%	二四、〇%	八九、一%	八三、三%	九六、〇%	八一、四%	六五、〇%	九三、五%	三四%	五五%	一五七%	〇%	一〇ヶ所	

重要工場事業場労務者作業用必需物資配給数量

(昭和十四年四半期度)

事業別	労務者数	地下足袋	戦時石鹼	作業衣	軍手	タオル	脚絆
工場	一六二六六八	一四〇〇〇〇	二二三、二〇〇	八七三〇〇	一六、四〇〇	一一五、四〇〇	一
石炭山	六五三四六	九八〇〇〇	九三、六〇〇	八六〇〇	六五七〇〇	四六七〇〇	三、四〇〇
鉄山	一〇五〇八八	一五八〇〇〇	一五〇、五〇〇	一七〇〇〇	一〇五、〇〇〇	八〇、三〇〇	六、六〇〇
土建	一八五三一九	八〇〇〇〇〇	二六五、二五〇	一三四〇〇	一八六、一〇〇	一三二、九〇〇	
港灣運送	一七九三六	二〇〇〇〇〇	二五三、二〇〇	九六〇〇	一七、八〇〇	一二、四〇〇	
電業関係	四五八五一	四〇〇〇〇〇	六五、六三〇	六一〇〇	四六、〇〇〇	三二、三〇〇	一

朝鮮人労務者ノ鮮外送出状況如何

答 国民動員計画ニ基キ昭和十四年以來毎年内地南洋方面へ朝鮮人労務者ノ大量の送出ヲ実施シ来リ、之等労務者ハ孰レモ国民動員計画産業タル鉱工業、土木建築業方面ニ就勞シ、内地人労務者ニ比シ遜色ナク特ニ重筋、耐熱、地下労働ニ在リテハ其

ノ体格優レルヲ以テ好成績ヲ挙ゲツアリ。

内地ニ於ケル重労働ノ需要ハ逐年激増シ来リ、昭和十九年度ニ於テハ内地ニ對シ二十九万人ノ送出要求アリ、然ルニ近時半島ノ労働給源ノ逼迫ト在内地朝鮮人労働者ノ出勤期間延長措置ニ伴フ影響等ニ依リ、之ガ送出ハ著シク困難ヲ加重シ来レルヲ以テ、送出方法ノ刷新強化ニ付根本的対策ヲ講ズルノ要アルヲ認め、本年九月ヲ期シ、労働援護態勢ヲ確立スルト共ニ、内地労働送出者ヲ能フ限り広範圍ニ一般徵用ニ依リ動員スルコトセリ。尚昭和十四年以降国民動員計画ニ基キ、内地、樺太、南洋ニ送出シタル状況別表ノ通りナルガ、南洋群島内、民間各会社ニ送出セル労働者ニシテ、猶同方面ニ在ルモノ約五千名ト推定セラレ、過般サイパン島ニ於テ南洋拓殖会社関係ノモノ七九名戦死セル実情ニ鑑ミ、他社關係分ニ付テモ同様死歿セルモノアリト思料セラル。

内地、樺太、南洋移入朝鮮人労務者渡航状況

第6 勞務事情

年度別	区分	国民動員計画ニ依ル計画数	石炭	金	土	工場其他	計
昭和十四年度	内地	八五〇〇〇	三、一〇八	五、五九七	一、一、四一		四九、八一九
	樺太		二、五七八	一、九〇	五、三三		三、三〇一
	計	八五〇〇〇	三、四、六五九	五、七、八七	一、一、六、七四		五三、一、二〇



四、軍要望ニ依ル勞務者ノ送出状況ヲ承リタシ

答 陸海軍要員トシテノ朝鮮人勞務者ノ送出ハ大東亞戰爭勃發以來相当多数ニ上レルガ、就中昭和十六年九月以降海軍ノ要求ニ基キ南方ニ於ケル緊急土木作業ニ從事セシムル為、海軍作業愛國団トシテ三三二四八名ヲ斡旋送出セルヲ最多トシ、陸軍ノ要求ニ依ル主ナルモノトシテハ、北部軍經理部要員七〇六一名、米英人俘虜監視要員三三二三名、運輸部要員一、三二〇名等ニテ、此ノ外鮮内ハ素ヨリ内地、滿州、支

備考

昭和十九年度分ハ六月末現在トス  
六月以降ニ於テ内地供出更ニ一〇〇、〇〇〇人ノ要請アリ從ツテ現在ノ國民動員  
計画計四〇〇、〇〇〇人ト改定ス（一九、八、二九現在）

合 計	昭和十九年度分			計
	内地	樺太	南洋	
計	三〇〇、〇〇〇	一、三二五、四	一、一五一	一、〇三六
内地	七九四、八〇〇	二六、八五二	四六、六四〇	七九〇、五五四
樺太	一九五、〇〇〇	一〇、五〇九	一九〇	五四、一四
南洋	二、三〇〇、〇〇〇			五、九三一
計	八三、七三〇、〇〇〇	二七、二三六一	四六、八三〇	八四、四六八
内地				四〇、五四七
樺太				四四、四三〇、六
南洋				

昭和十九年度	昭和十八年度			昭和十七年度	昭和十六年度	昭和十五年度		
	内地	樺太	南洋	計	計	内地	樺太	南洋
計	三〇〇、〇〇〇	一、二五、〇〇〇	一、七、〇〇〇	一、三〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	九七、三〇〇	八、五〇〇	八、八、八〇〇
内地	一、三二五、四	六八、三七〇	一、三、七六三	七、八〇八、三	三九、八一九	三八、一七六	一、三一	三六、八六五
樺太	一、一五一			七、六三二	九、四一六	九、〇八一		九、〇八一
南洋	一、〇三六	三、一六一五		一、八、九二九	一〇、九六五	九、二四九	一、二九四	七、九五五
計	九四四	一四、六〇六	一、二五三	一五、二〇七	六八、八九八	二八、九二	八一四	二〇、七八
内地	一、六三八五	一二、八二五	一、二五三	一一、九八五	六、七〇九八	五、九三九八	八、一四	五、五九七九
樺太		二、八一一		一、二四、二九〇	一、七、八一	二、六〇五		
南洋				五、九四五	一、四五一			
計				一、一、八二三	一、七、八一			
内地				一、一、八二三	一、七、八一			
樺太				五、九四五	一、四五一			
南洋				二、〇八三	一、七、八一			
計				一、三〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	九七、三〇〇	八、五〇〇	八、八、八〇〇
内地				七、八〇八、三	三九、八一九	三八、一七六	一、三一	三六、八六五
樺太				七、六三二	九、四一六	九、〇八一		九、〇八一
南洋				一、八、九二九	一〇、九六五	九、二四九	一、二九四	七、九五五
計				一、三〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	九七、三〇〇	八、五〇〇	八、八、八〇〇
内地				一、二〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	九、〇八一		九、〇八一
樺太				六、五〇〇	八、〇〇〇	九、〇八一		九、〇八一
南洋				三、五〇〇	一、七、八一	九、〇八一		九、〇八一
計				一、三〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	九七、三〇〇	八、五〇〇	八、八、八〇〇
内地				一、二〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	九、〇八一		九、〇八一
樺太				六、五〇〇	八、〇〇〇	九、〇八一		九、〇八一
南洋				三、五〇〇	一、七、八一	九、〇八一		九、〇八一

那及南洋方面へ多数ノ要員ヲ斡旋送出セリ。而シテ現在迄ニ直接戦闘ニ起因シテ死  
 歿セル者二一四二名（「タラワ」「マキン」両島ニ於ケル玉碎者約二〇〇名ヲ含  
 ム）行方不明七三五名ヲ出セリ。

右ノ外国民徴用令ニ拠ル徴用ニ依リ送出セル労務者ノ数ハ昭和十七年一月以降現  
 在迄ニ、二二七八五名ニシテ之等労務者ハ横須賀、呉、佐世保、舞鶴、大湊、鎮海、  
 各海軍施設部及南方ニ於テ目下就業中ナルガ更ニ九月上旬迄ニ九五〇〇名ノ送出方  
 手配中ナリ。

### 軍要員送出状況

年次	地区別	内地	鮮内	満州	支那	南方	計
昭和十四年				一四五			一四五
昭和十五年		六五		六五六	二五		七四六
昭和十六年		(五三九六) (四八九五)	一〇八五	二八四	一三	九二四九	(一六〇二七) (四八九五)
昭和十七年		(四一七一) (三八七一)	(一八一三) (九〇)	二九三	五〇	(一六一五九) (一三五)	(二二四八六) (四〇九六)
昭和十八年		(四六九一) (二三四一)	(一九七六) (六四八)	三九〇	一六	五二四二	(二二三八九) (二九八八)
昭和十九年		(四七九七) (二六〇〇)	(六二一〇) (二一〇五)	一六一七	二六〇	四八三三	(二二九一七) (二〇八〇五)
計		(二二七三〇) (一五七〇七)	(一四〇八四) (六九四三)	三三八五	三六四	(三五四八三) (一三三五)	(七五六三六) (二二七八五)

附記 (1) 左書括弧内ハ徴用ニシテ内数トス

(2) 昭和十九年ハ八月二十二日現在トス

### 五 労務者ノ訓練状況如何

答 昭和十七年以来労務送出道タル中南鮮七道ニ於テハ朝鮮労務協会支部ニ於テ出勤  
 隊員ノ幹部タルベキ者ヲ其ノ訓練所ニ収容シ、一ヶ月程度ノ訓練ヲ実施シ来リタル  
 所、其ノ成績良好ナルヲ以テ、本年度ヨリ他ノ六道ニモ設置スルコトトシ、目下設  
 置準備中ナリ。尚内地其ノ他鮮外ニ送出スル軍要員竝ニ一般労務者全員ヲ渡航前数  
 日間鍊成スルト共ニ、宿泊施設及防疫施設ヲモ兼ね、釜山及麗水ニ鍊成所ヲ設置ス  
 ルコトトシ、現在釜山ニ於テハ工事進行中ナルガ、麗水モ近ク着工ノ予定ニシテ、  
 概ネ本年中ニハ兩鍊成所共活動シ得ル見込ナリ。更ニ被徴用労務者ニ付テハ、特ニ  
 其ノ資質ヲ鍊磨昂揚シ、之ガ勤労効率ヲ最高度ニ發揮セシムルノ要緊切ナルモノア  
 ルヲ以テ、徴用配置前及配置後ニ於テ左記ニ依リ適切ナル訓練ヲ実施スルコトトセ  
 リ。

#### 一、訓練期間

出身道ニ於ケル徴用配置前ノ訓練 概ネ七日間

工場事業場ニ於ケル徴用配置後ノ訓練 概ネ一四日間

三 訓練項目

訓練ハ精神訓練、規律訓練及作業訓練ヲ主トシ、併セテ国語未解者ニ国語講習ヲ施ス

六 勤労援護ニ対シテハ如何ナル施設ヲ講ジ居ルヤ

答 被徴用者及其ノ遺家族ノ援護ニ関シテハ国民徴用扶助規則ニ依リ扶助ヲ行フ外、朝鮮総督府又ハ道ノ幹旋ニ基ク勞務者、軍要員、勤勞報国隊員等及其ノ遺家族ニ対シテハ昭和十九年九月ヨリ財団法人朝鮮国民勤勞勤員援護会ヲ設立シ国庫助成ノ下ニ国民徴用扶助規則ニ準ジタル援護ヲ為スト共ニ、其ノ他勞務者及遺家族援護上必要ト認メラルル各種ノ援護ヲ為シツツアリ。

七 朝鮮ニ於ケル勤勞管理ノ対策如何

答 朝鮮ノ鉱工業ノ発達過程ニ鑑ミ其ノ勤勞管理ハ未ダ十全ノ域ニ達セザルモノ尠カラザルヲ以テ、本府ニ於テハ、曩ニ重要工場、事業場ニ於ケル勞務者ノ賃金ノ引上、食糧ノ特配、作業衣其他作業用必需物資ノ優先的配給、寝具ノ特配等勞務者ノ勤勞意欲阻害ノ物的条件ノ改善ヲ図ルト共ニ勤勞管理要綱ヲ示シ、特ニ仕奉隊組織ニ依

ル事業主以下職員及勞務者ヲ一貫セル皇国勤勞觀ノ下ニ其ノ総力ヲ結集シテ生産戰ヘノ挺身ヲ要請スルノ措置ヲ講ジツツアリ。

第七 学徒勤員ノ状況

一 学徒勤員ニ関スル件

一月十八日「緊急学徒勤勞勤員方策要綱」、三月七日「決戦非常措置要綱」等ノ閣議決定ニ基キ内地ニ於テ学徒勤員ニ関スル諸要綱ノ逐次決定ヲ見タルニ照応シ、朝鮮ニ於テモ之ニ準ジ若干ハ特殊事情ヲ加味シテ諸要綱ヲ策定実施中ナリ。即チ大学専門学校中鉱工関係最高学年ノ学徒ハ卒業後ノ就職ト院ミ合ハセテ六月ヨリ逐次分岐配置シ、其ノ他ノ学徒中第二学年学徒ハ七月一日ヨリ工場事業場等ニ通年勤員シ、第一学年学徒ハ臨時緊急ノ方面ニ隨時勤員又、師範学校高学年生徒ハ欠員又ハ応召教員ノ補充ニ其他ハ臨時緊急ノモノニ勤員ス。中初等学校生徒児童ハ其ノ地方ノ状況ニ応ジ軍需物資及食糧増産国防施設建設等ニ勤員中ナリ。

尚戦局ノ現段階ニ応ジ更ニ勤員ノ強化徹底ヲ図リツツアリ八月一日現在ニ於ケル本年度大学専門学校及中等学校学徒勤員ノ概況別表ノ如シ。

別表一

大学専門学校学徒勤労働員実施概況

学校種別	学校数	出勤人員	出 勤 先	出 勤 期 間
農工関係	五	一、四一二	航空廠、交通局工場、鉱山等	通年又ハ臨時
農、水産関係	四	七四八	農、畜産指導、漁撈水産加工場等	"
医、薬関係	九	二七六六	道立病院、交通局病院、其ノ他	"
文科系	八	三一二六	造兵廠、航空廠、飛行場等	"
計	二六	七〇五二		

別表二

中等学校学徒勤労働員実施概況

学校種別	学校数	出勤人員	出勤先又ハ作業種類	出勤期間
工業学校	三七	一八、五五九	工場、事業場	通年又ハ臨時
農、水産学校	七〇	二一、七七九	食糧増産、土工工事等	"
中学校	八一	四四、六三九	食糧増産、国防施設、土工工事	"
商業学校	三〇	一五、二一七	"	"
女子中等学校	九一	三八、三九八	食糧増産、軍被服修補等	"
計	三〇九一	三八、五九二		

第八 輸 送 力 ノ 現 状

一、朝鮮鉄道輸送ノ現況如何

答 滿州事変ヲ契機トシ更ニ支那事変後朝鮮鉄道ノ輸送量ハ加速度的上昇ヲ見ツツアル処、更ニ昭和十七年十二月ヨリ滿支重要物資輸送ガ陸上輸送ニ転移セラルルコトトナリ、為ニ最近ニ於ケル朝鮮鉄道ノ輸送量ハ飛躍的ニ増加ノ趨勢ヲ迎リツツアリ。即チ十八年度ノ実績ハ別表ニ示ス如ク昭和十一年度ニ比シ旅客ニアリテハ人員ニ於テ三・八倍、延人軒ニ於テ四・四倍トナリ、貨物ニアリテハ屯数ニ於テ二・五倍、延屯軒ニ於テ四・二倍トナリ。旅客貨物共何レモ内地鐵道省ノ同期ノ増加率ニ比シ朝鮮ノ方遙カニ大ナリ。(計エンピツ添筆、十九年度ハ貨物ニ於テ更ニ六・三倍ヲ越ス計画デアリマス。近藤)

而シテ朝鮮ノ増加率大ナル一要素タル輸送貨物ハ十八年度ニ於テ一般貨物ニ對シ屯数ニ於テ六・五%延屯軒ニ於テ一八%ノ負荷トナリ居リ。十九年度ニ於テハ一躍五九・七%ノ負荷トナル計画ニシテ十九年度朝鮮鉄道ハ正ニ輸送力ノ三七%ヲ滿支重要物資ノ陸上輸送ニ割愛寄与セントスル計画ヲ樹立シツツアルナリ。



一、旅客輸送量

年度別	輸送人員	増加指数	延人杆	増加指数
昭和十一年度	三三、七〇八、一七八人	一〇〇	二〇、二四四、五三、五一〇人杆	一〇〇
同十五年	八二、〇八八、七四〇	二四四	五四、四〇、五二、九八〇五	二六九
同十七年度	一〇八、四七、一八一	三二二	七四、九四、二五、五九五一	三七〇
同十八年度	一二八、四六八、九五二	三八一	八八、八五、五〇、八五六九	四三九
同十九年度 (計画)	九三、二一六、九一七	二七四	六三、七二、一八、八、九七七	三一四

二、貨物輸送量

年度別	輸送屯数	増加指数	延屯杆	増加指数
昭和十一年度	一〇八、四五六、〇四屯	一〇〇	三二、二四九、七四、五一八屯杆	一〇〇
同十五年	二〇、四四九、九七八	一八九	四六、一一七、七四、九六六	二〇七
同十七年度	二五、八九一、四六六	二五九	六九、四四七、一一、一一二	三一二

昭和十八年度	二七、五四一、二五九	二五四	九二、九〇〇、一一、八九一	四一八
同十九年度 (計画)	三六、〇六一、八三〇	三五四	一三、九七五、〇四、七五二五	六二八

二、転嫁貨物輸送ノ計画ト実績

答 昭和十九年度第一、四半期ノ輸送計画ハ月間平均三十七万屯、第二、四半期月間平均四十七万屯ナルガ、之ガ輸送実績ハ第一、四半期ハ七%ニシテ転嫁貨物輸送ノ始リタル十七年度以降ノ計画ト実績ヲ品名別ニ示セバ次ノ如シ。

一、十七年度品名別実績

品種	計画量	輸送実績	計画対実績ノ割合
銑鉄	九五、二〇〇屯	八一、五〇五屯	八五%
大豆	二一、八四九三	一七、〇八、四一一	七八
塩	九三、五五八	七二、九〇三	七八
石炭	六九、〇〇〇	七〇、〇〇〇	一〇一
計	四七六、二五一	三九五、〇四九	八二

品 種	計 画 量	輸 送 実 績	計 画 対 実 績 ノ 割 合
北支炭 石炭	三六四一二 屯	一一、三四〇 屯	三一%
銑鉄	四八六一八	三八五九二	七九
塩	三二、五二四	二二、一四八	七一
綿花	四六六八	〇	〇
満州炭 石炭	一四四四二〇	一三八五一〇	九六
銑鉄	一三八七八〇	一五六八一六	一一三
鋼材	五〇、〇一〇	四四、二二〇	八八
非鉄	二五、四七七	一八、〇五一	七二
ビツチ	三、五一〇	四、〇四一	一一三
コークス	一、三三五	七四八	五五

三、十九年度第一、四半期実績

得ザリシト、大豆粕、鉄鋼類、石炭ガ生産關係ニヨリ出荷思ハシカラザリシト、北支炭石炭、銑鉄ガ特殊事情ニ因リ、發送減退シタル為等、主トシテ発地ノ事情ニ起因スルモ鮮滿支ヲ通ズル輸送事情ニ因ルモノモ幾分アリ、転嫁貨物輸送ハ大体好調ヲ迎リタルモノト言フヲ得ベシ。

備 考

十八年度実績ガ計画ニ対シハ二%ニ止マリタルハ大豆ノ収買ガ予期ノ成績ヲ挙げ

品 種	計 画 量	輸 送 実 績	計 画 対 実 績 ノ 割 合
銑鉄	五一、七九一 屯	四五、五〇〇 屯	八八%
大豆	四〇、二四六八	三〇、八九八四	七七
塩	四五、三一一〇	三六、五七八五	八一
石炭	四一、三六一〇	三二、五四八九	七九
大豆粕	九三、一九二	六五、二七一	七〇
鉄鋼類	一六、三五〇七	一四、七四九九	九〇
其ノ他	三、五四一	二、七五〇二	八七
計	二〇七、五三四七	一六九、五五三一	八二

二、十八年度品名別実績

(実績ハ港着及鮮内目的地着ヲ掲記ス以下同ジ)

十七年度実績ガ計画ニ対シハ二%ニ止リタルハ大豆ノ出貨減ト塩ノ吸入ノ撤換變更ニヨル一時的混雜ノ為ニシテ凡テ発地ノ事情ニ因ル。

満州発大豆	一五五五四九	一三七三一三	八八%
"大豆粕	九三、七九八	九五八三二	一〇二
"雜穀	二三四六三	二一二五二	九一
朝鮮発銑鉄	五六四五〇	四八〇八五	八五
"非鉄	三八二九五	二九八三二	七八
対日計	八五、四三三	七六九二六二	九〇
朝鮮着石炭	二〇七七八〇	一四八七一六	七二
"塩	四七〇〇〇	四、一四八	八八
朝鮮着計	二五四七八〇	一八九八六四	七五
合計	一、一〇六二一三	九五九一二六	八七

備考

実績ガ計画ニ達セザリシハ、北支発ニアリテハ特殊事情ニヨル出貨低調、満州発ニアリテハ糧穀出貨不良、朝鮮発ニアリテハ荷役関係等ニ起因スルノ外、鮮満支ヲ通ズル特輸関係ニテ輸送力逼迫セルニ因ル。

三 貨物輸送量ノ激增ニ対シ採リタル方策

答 一 応急方策

可及的旅客列車ヲ圧縮シソレニヨリ生ズル列車容量ノ余裕及機關車ヲ貨物列車ノ輸送ニ振向クルコトトシ、十七年十月迄ハ旅客列車ト貨物列車ハ列車軒略対等ナリシヲ、十八年四月以降順次圧縮シ十九年四月ニ於テ旅客列車ハ総体ノ一六%ニ圧縮スルト共ニ、一方不足車輛ノ一部ハ滿鉄及華北鐵道ヨリ一時融通ヲ受ケ負荷ニ応ヘツツアリ。

尚旅客輸送ニアリテハ極度ノ列車數ノ減少ニ対処シ、旅客列車ノ速度ヲ可及的ニ犠牲ニシテ一列車ノ連絡車輛數ヲ増加（從來急行列車ハ九輛程度ナリシヲ冬期十三輛其他ハ十六輛牽引トス）スル一面乗車券発売ニハ相当ノ統制ヲ行ヒ以テ緊急旅行者ノ輸送確保ヲ図リツツアリ。

二 施設ノ増強

關係線区ノ輸送力増強特ニ京釜、京義兩線ノ複線工事、操車場ノ新設、車輛ノ増備、車輛修繕工場ノ拡張ニ邁進シツツアルモ、資材勞務等ノ關係ニテ急速ナル實現困難ナルタメ、最大隘路区間ノ工事ヲ促進シ其ノ進捗度合ニ応ジ現更ニ輸送力ヲ増強シ得ル如ク工夫シ鋭意施工シツツアリ。

今回京釜、京義線ノ複線化促進ニ関シ、滿鉄ヨリ所要資材ノ一部トシテ軌条二二

港 灣 別	昭和二十一年度					現在吞吐能力量					昭和二十年度				
	釜 山	馬 山	麗 水	木 浦	三 浦	蔚 山	釜 山	馬 山	麗 水	木 浦	三 浦	蔚 山	釜 山	馬 山	麗 水
計	一 四 八 萬 噸	一 一 七 萬 噸	二 二 四 萬 噸	二 九 萬 噸	〇 〇	〇 〇	六 六 四 萬 噸	一 一 四 萬 噸	一 一 六 萬 噸	一 〇 三 萬 噸	〇 〇	一 〇 七 萬 噸	一 四 六 萬 噸	一 一 四 萬 噸	一 四 七 萬 噸

一、吞吐能力

五、南鮮諸港灣ノ吞吐能力並ニ輸移出入貿易貨物噸數量如何

答 戦局ノ進展ニ伴フ大陸貨物ノ陸運輸送ノ増大ト共ニ之ニ対応スベキ半島縦貫輸送力ノ増強ト相俟ツテ南鮮諸港灣ノ拡充強化ハ、益々其ノ緊要性ヲ増シ、之ニ即応セシムル為國費及國庫補助ヲ以テ急速ナル南鮮諸港灣ノ整備増強ヲ図リツツアリ之ガ吞吐能力並ニ輸移出入貿易貨物噸數量次ノ如シ。

強化シ以テ大陸一貫輸送力増強ノ目的ヲ達セントスル意圖ナリ。

四、大陸鐵道一貫經營ニ対スル所見如何

○ 軒ノ撤去融通ヲ受ケ本年十二月中ニ完成セシムルコトニ閣議諒解成立シタルヲ以テ鮮内資材ヲ之ニ併セ所定期限迄ニ完成セシムベク努力中ナリ。  
南鮮諸港ノ増強ニ付テハ總督府機構ノ改革ニ依リ港灣、鐵道ノ運繫ヲ緊密円滑ナラシメ、且工法ノ一部改変ヲ行ヒ殊ニ最近ノ狀勢ニ即応スル如ク主力ヲ機帆船ノ接岸荷役ニ注ギ其ノ成果ヲ挙グル如ク努ムルト共ニ、鮮内諸港ヨリノ荷役機械ノ移駐ハ既ニ了ヘ能力ヲ増強シ居ル外、内地及大連ヨリ荷役機械ヲ移駐セシメ幹線ノ複線完成ニ合致セシムル如ク措置シツツアリ。

答 大陸輸送貨物ノ増送ニ伴ヒ、大陸一貫輸送力強化ノ為朝鮮鐵道ヲ滿鉄ヲシテ一元的ニ經營セシムベシトノ論アルモ、朝鮮鐵道ハ大陸一貫輸送ナル重大任務ヲ有スルト共ニ、一方半島ノ交通大動脈トシテ政治産業經濟ニ極メテ重要ナル役割ヲ務ムルモノニシテ戰時下計画經濟体制強化セラレ、鐵道輸送ヲ離レテ戰時行政ノ円滑ナル運営ヲ期スルコト能ハザル現今ニ於テハ、鐵道ヲ行政統理ヨリ分離セシムルコトハ行政産業經濟ノ運営ニ大ナル支障ヲ招来スル惧アルノミナラズ、反面行政産業經濟ト遊離シテ輸送力ノ増強ヲ期スルコトハ至難ナルヲ以テ、此際經營形態ニハ触ルルコトナク現機轉ノ下ニ關係運輸機關間ノ連絡ヲ緊密ニスルト共ニ相互ノ協力ヲ一層



三 千 浦					木 浦					麗 水				
同十八年	同十七年	同十六年	同十五年	昭和十年	同十八年	同十七年	同十六年	同十五年	昭和十年	同十八年	同十七年	同十六年	同十五年	昭和十年
三八	二五八八二	一一二五一	一一一八	一	一五九一五九	二七九七三七	二五三一八一	一三九四八一	二二〇七八〇	二六九〇二五	一六五四四二	一四五七一八	八七五五一	一〇九四三六
三五三	四二七八	二八三四	二〇一三	一	一八四五四一	一七六四四五	一五二七〇一	一八七九八九	一九八六八八	一五〇八〇一	一〇三二一一	一〇六一〇四	一〇九四五	一九七一八七
一	一	一	一	一	一	一一二六	四一五	七八二	九一六	一	一四三六	一〇九五	一	二五二九一七
三九一	三〇一六〇	一五三四五	二一三三	一	三四三七〇〇	四五七三〇八	四〇六二九七	三二八二五二	四三〇三八四	四一九八二六	二七〇〇八九	二五二九一七	一九七一八七	二五二九一七

二. 輸移出入貿易貨物噸數

港名	年次	輸移出	輸移入	其他	合計
山 釜	昭和十年	八三九七四〇噸	一、五二九五七三噸	一一七六五四噸	二、四八六九六七噸
	同十五年	八三〇二八一	二、一四四六五一	二二六一二〇	三、二二一〇五二
	同十六年	一、〇三九八八七	一、八八三、九三二	二二〇、六三九	三、一五四、四五八
	同十七年	一、〇九四、一五五	一、七八〇、三八五	二六二、一八五	三、一三六、七二五
	同十八年	一、〇五一、六〇三	一、六一三、九八七	二〇六、四五三	二、八七二、〇四三
山	昭和十年	七四六六六	一〇七、八〇〇	一	一八二、四六六
	同十五年	二八五五四	六四、二六五	一	九二八、一九
	同十六年	六四八五八	六一、二七一	一	一二六、一二九
	同十七年	六〇七三〇	五三、〇六八	一	一一三、七九八
	同十八年	三八八三二〇	三三七五〇	一	四二二、〇七〇
馬	昭和十年	六九四一三	七〇、五二八	一	一三九、九四一

備考  
昭和十二年度ニ比シ現在吞吐能力量ノ著シク増加セルハ時局ノ進展ニ対応シ緊急増強セルニヨル

## 第九 防衛準備ノ状況如何

### 一、防衛一般対策状況

客年十二月朝鮮總督府臨戰防衛対策基本要綱ヲ策定シ

イ 有事非常ニ際シ國家活動ノ中枢タル官公衙ノ機能ノ維持確保

ロ 半島ノ特殊性ニ鑑ミ治安ノ確保

ハ 都市ノ重要性ニ鑑ミ主要都市ノ防護

ニ 戦争遂行上必要ナル生産機能ノ保持

ホ 半島ノ特殊使命ニ鑑ミ運輸通信機能ノ保持

ヘ 本島ノ地理的民族的特性ニ鑑ミ謀略行為ノ防遏ヲ期シ主管各局課及各道ヲシテ

之ガ対策ヲ講ゼシメ来リタルガ、更ニ本年八月二十日右要綱ニ基キ本府ニ防衛総

本部ヲ、各道ニ本部ヲ開始シ各設ニ亘ル防衛諸対策ノ綜合統一ヲ図ルト共ニ、非

常事態ニ際シテハ機敏適確ニ防衛上必要ナル各設ノ措置ヲ為シ以テ半島防衛ノ完

壁ヲ期セントシツツアリ。

#### (1) 警備対策ノ状況

警備対策ニ就テハ右要綱ニ基キ非常警備計画ヲ樹立シ

イ 鮮内ニ空襲警報発令セラレタ場合（突発空襲ヲ含ム）

ロ 鮮内ニ内乱暴動及之ニ準スベキ多衆運動ノ勃発又ハ発生ノ虞アル場合

ハ 戦況ノ推移又ハ内外地ノ治安情勢ニ依リ鮮内ノ民心著シク動搖ノ兆アルトキ

ニ 敵潜水艦ノ朝鮮沿岸ニ跳梁シ鮮内ノ陸地ヲ攻撃又ハ其ノ虞アル場合

ホ 敵軍（落下傘ニ依ルモノヲ含ム）又ハ敵性国謀略者沿岸ニ上陸又ハ侵入シ或

ハ其ノ虞アル場合ノ如キ非常事態ニ即応スベク武装警察官ノ編成、警察ヲ中樞

トスル警防団、学校総力隊警察予備員、警察補助員等ノ関係機関ノ総動員ヲ計

画シ殊ニ重要都市、工場地帯及沿岸主要地ノ警備ニ万全ヲ期スル為、先ニ第二

予備金ヲ以テ容認セラレタル特別警察隊ヲ設置シ空襲、其ノ他非常事態ニ当リ

混乱ノ鎮圧、羅災者ノ救出、誘導、重要工場ノ確保等ニ警察ノ集團的機動力ヲ

發揮シ非常警備ノ基幹タラシムルコトトセリ。

尚沿岸ノ非常警備ニ就テハ朝鮮近海ニ対スル最近ノ敵潜水艦ノ跳梁状況ニ鑑ミ朝

鮮軍並ニ鎮海警備府司令部ト協力シ概ネ左記事項ニ付之ガ早急実施ヲ講ゼントス

イ 沿岸監視哨及警備ノ強化

ロ 郡民ノ自衛抵抗ノ訓練

ハ 燈台及船舶ニ対スル対潜監視動員

ニ 沿岸重要物件ノ防護施設整備

ホ 沿岸警備ニ対スル軍、警、協力ノ緊密化

特別警察隊編成表

設置場所	要員		警部		警部補		巡查		計
	既定員	新規増員	既定員	新規増員	既定員	新規増員	既定員	新規増員	
特甲地区京城	六				一二		二五	二五一	二九四
甲地区釜山					六	六	一七	二四	一四八
乙地区咸興							二一	二一	四二
乙地区清津					二	二	二一	四七	七一
計	一四				二八		一〇八	五八二	(既定員)一〇八 六二四
合計	一四				二八		六九〇		七三二

(2)

防空対策ノ状況

防空諸般ノ対策中特ニ急速ニ之ガ態勢ヲ整備スベキモノニ付テハ防衛決戦非常措置要綱ヲ策定シ、左ノ事項ニ重点ヲ指向シ防空対策ノ強化、施設及資材ノ整備並ニ敢闘精神ノ昂揚ニ努メツツアリ。

工場防空ノ強化

軍需工場及之ニ伴フ生産源ノ空襲目標タルベキ公算大ナルニ鑑ミ之ガ機能保持

ノ為生産増強ト調節ヲ計リツツ重要機器及施設ノ耐弾防護又ハ疎開、被害時ノ生産転換、人的被害ヲ最少限度ニ止ムル為ノ待避施設ノ築造、応急復旧資材ノ確保、技術者、労務者等ノ動員計画ノ樹立及之ニ必要ナル食糧、燃料等ノ備蓄ニ付万全ノ策ヲ講ゼシム。

消防及水利施設

消防唧筒類ニ付テハ重要都市ニ集中配備ノ計画ノ下ニ他ノ地区ヨリ供出、転用ヲ計リ且ツ本年度新規製作ノ唧筒ハ九月末ヲ期シ整備ヲ促進セシメツツアリ。尚反覆空襲ニ対応シ関係業者ヲ以テ唧筒補修挺身隊ヲ結成セシメ之ガ効率確保ヲ企図ス。

水利施設ニ付テハ従来ノ水道依存ヲ是正シ大型、小型地下貯水槽、愛國班用火井戸、河川利用ノ水利施設等ヲ拡充シ、殊ニ本年度緊急対策トシテ粘土造開放型簡易貯水池ヲ京城府外重要都市ニ一〇三〇箇所ヲ築造セシムルコトニセリ。

待避及罹災者避難救護

家庭待避所ヲ更ニ徹底的ニ増強スルト共ニ停車場、市街地繁華地区等多数集合地ニ公共用待避所トシテ横穴式又ハ掩蓋式防空壕ヲ本年度緊急予算ヲ以テ相当築造ノ計画ナリ。

罹災者ノ収容ニ付テハ不取敢学校、寺院等ノ建物ヲ充當シ一面縁故先ヲ有スル者ハ極力之ヲ利用セシメ長期ニ亘リ或ハ収容不能ノ場合ハ隣接郊外地区ニ仮収容

場ヲ施設ノコトニ準備ヲ進メツツアリ。

ニ 防空通信施設

防空監視哨——監視隊本部間ノ防空情報電話線ハ昭和十五年以降銳意之ガ整備ニ努メツツアルモ資材入手難ニ悩サレ今猶工事ノ中途ニアルモ、本年度末ニハ之等ノ隘路ヲ克服シ延長約二万軒ヲ架設ノ見込ナリ。

ホ 非常用物資ノ備蓄

備蓄物資ノ種類ハ国民生活維持ノ為ノ食糧、衣料、医薬品、住居用資材ニ極限シ重要都市ノ周辺ニ分散配置シ有事ニ際シ配給ノ簡易迅速ヲ期シ輸送等ニ付特別ノ措置ヲ講ジツツアリ。

ヘ 防空救護対策

防空救護対策ニ関シテハ客年十二月臨時態勢衛生対策基本要綱ヲ策定之ニ基キ既定計画ノ不備欠陥ヲ是正シ、防空重要地域三六府邑ニ対シ重点的ニ整備セシメタルガ、現機體ハ現場機關トシテ繙帶場六六五ヶ所ヲ収療機關トシテハ規模大ナル官公私立綜合病院八一ヶ所及外科的設備ヲ有スル医院等ヲ当テタル救護所四四六ヶ所ヲ設置シ其ノ他瓦斯救護所、助産救護所等ヲ設置セリ。  
而シテ藥品、衛生材料ノ整備状況ハ昭和十七年以降救護藥品六九種類ヲ分散配置シタリ。

然レ共空襲下ノ救護體驗ニ徴シ現機構設備ニ於テハ今尚不充分ノ点アルヲ以テ

当面ノ態勢補正ノ為本年度第二予備金ノ支出ヲ仰ギ、本府並ニ防空重要五大地区ニ防空、救護専務職員二九名ヲ配置シ、指定行政庁ヲシテ救護機關ノ整備拡充医療器材ノ整備並医療關係者ノ訓練、血清類ノ買上等急速ニ実施セシメ空襲下ノ救護ニ万全ヲ期シ居レリ。

三 電信電話施設非常措置

イ 鮮内通信特ニ重要地タル京城、釜山、平壤及清津ニ対シ主要回線及重要加入電話確保ノ為左ノ通第二次局ヲ設置シ居レリ。

局別施設事項	電 信	市外電話	加入電話	第二次局庁舎所在地
京 城	三六回線	二九回線	一二五回線	京城府鍾路区蓮池町
釜 山	一五〃	一四〃	一五〇〃	釜山府榮町
平 壤	一六〃	一三〃	一五〇〃	平壤府瑞氣山
清 津	二一〃	一四〃	一五〇〃	清津府浦項町

又其ノ他ノ地ニ於テモ主要地タル仁川外七十六箇所ニ対シ各主管地方通信局ヲシテ夫々ノ主要回線確保ノ為第二次局庁舎ヲ予定シ建物持主ト予約シ非常時ニ於テ直ニ之ニ移転シ得ルヤウ措置シ居レリ。



ロ 前項ノ外京城ニ於テハ朝鮮行政ノ中枢地トシテ総有重要通信ノ集中シ居レル關係上特ニ現下ノ情勢ニ鑑ミ左ノ通地下防衛通信所ヲ設置シ国防連絡其ノ他ノ重要通信ノ確保ヲ期スベク目下施工中ナリ。

#### 建設構造等

- 高度四千米ヨリ投下スル五〇〇キログラム爆弾ニ堪ヘ得ル地下通信所トス
- 京城府西大門区西大門町二丁目中学校校庭ノ小丘ヲ切開キ無筋コンクリート拱形トシ覆土ハ十七米乃至二十米トシ地表面近クニ起爆層ヲ設ク。尚拱形内ニ煉瓦木材併用ノ二階建延三五七坪程度ノ防湿、通風、照明装置庁舎ヲ建築。
- 收容通信——主要市内加入電話約八〇〇回線——内地、満州各主要地及鮮内遺庁所在地ニ至ル。市外電話回線約三〇回線——重要電信回線約三四回線——無線送受信機各二座。
- 昭和十九年七月着工——同年十一月竣工予定。

### 三 放送非常措置

イ、通信局指導ノ下ニ社団法人朝鮮放送協会ヲシテ左ノ通整備又ハ整備取運中。

- 現在使用ノ放送施設ノ破壊セラレタル場合ヲ予想シ送信装置ヲ第一次乃至第四次迄又ハ送話装置ハ第一次乃至第三次放送室ヲ施設シタルノ外、有線中継線ノ障

碍ノ場合ニ備ヘ地方放送局中継用短波送受信装置、移動式放送装置ヲ施設（目下工事中）シ又朝鮮内主要地タル釜山、平壤、清津及咸興ノ各放送局ニ夫々第二送信所ヲ施設シ居ルモノトス。尚現用施設ノ防護防衛ニ付テハ夫々ノ機密ヲ整備シ之ガ万全ヲ期シ居レリ。

#### 2. 妨害電波発射準備及謀略放送措置ニ關スル事項

敵米ガサイパン島等ヲ基地トシテ我本土向ケ謀略宣伝放送ヲ開始スベク予想セラルルヲ以テ右電波ノ朝鮮内侵入ヘ其ノ特殊事情ニ鑑ミ影響スル所甚大ナルモノアリ。之ガ防遏ノ徹底ヲ期スルノ要緊切ナルヲ以テ之ガ対策トシテ第二放送ヲ中止シ全鮮放送局所ノ國語、朝鮮語混淆單一放送ヲ実施シ、第二放送全装置ノ現用電力ヲ以テ妨害電波ヲ発射シ得ルヤウ諸準備取運中ナリ。

又右謀略放送ニ対スル聴取施設者受信機ノ措置ニ付テハ目下対策措置等準備中ナリ。

#### ロ 有線放送施設

防空上ノ必要ヨリ軍ノ要請ニ基キ昭和十八年度ニ於テ、京城中央電話局本局区内及清津ニ有線放送施設ヲ完成シ、又昭和十九年度ニ於テ京城中央電話局各電話分局区内、平壤及釜山ニ有線放送施設中。尚残余ノ主要地ニ対シテモ順次施設計画中ナリ。

#### 四 鉄道防衛準備ノ状況

答 鉄道ガ戦時ニ於ケル敵ノ攻撃主目標タルハ謂フヲ俟タザル所ニシテ、特ニ朝鮮鉄道ハ其ノ地理的条件竝ニ半島ノ特殊事情下ニ於テ爆撃、謀略等凡ユル攻撃ノ対象トナルヲ以テ、之ニ対処シ防衛ノ万全ヲ図リ其ノ被害ヲ軽減シ最モ迅速ニ復旧処理スル為防諜、防衛警備等諸般ノ対策ヲ樹立シ、以テ有事即応態勢ノ整備ニ万遺憾ナカラシメコトヲ期シツアリ。

##### 一 防 衛 計 画

当局ハ防空法ニ依リ官署防空計画設定者ニ指定セラレ居ルガ故ニ、所管交通機関並ニ私鉄等ニ付テモ防空計画ヲ策定シ防空通信、燈火管制、防衛監視、防弾、偽装、消防消火、防毒、救護、分散、疎開、待避、流用転用配給、応急復旧等凡ソ空襲ニ依リ惹起スルコトアルベキ事態ニ対処スル万全ノ方策ヲ確立セリ。

##### 二 警 備 対 策

戦時鉄道ノ警備ハ軍、警務機関、交通ノ三者協力シ之ニ当ルモノナルガ非常ノ場合ニ於テハ被害同時多発ノ結果警務ノ完璧ヲ期シ得ザル懸念アルヲ以テ警備力不足ノ補填竝ニ被害復旧要員トシテ鉄道沿線住民中ノ一部青壮年層ヲ以テ十八年度ヨリ鉄道愛護団ヲ組織シ交通警備ノ有力ナル補助機関トシテ之ガ指導発展ニ努メツツアリ。

ソノ成果ハ数次ノ水害及運転事故等ニ於テ愛護団ノ活動目覚シキモノアリテ極メテ好調ニ発展ヲ遂ゲツツアリ。

##### 三 防 空 施 設

当交通局ノ防空施設ハ昭和十五年度迄ニ主トシテ警報伝達用通信施設及燈火管制用隠蔽、遮光等基本的施設ヲ了シ昭和十六年度ヨリ輸送ノ中枢機関ノ防護ニ重点ヲ置キ之ガ施設ノ強化ニ努メツツアリ。

即チ重要地域ニ於ケル耐弾の輸送司令所ノ設置、通信施設ノ耐弾分散設備、消防用貯水槽ノ設置、機関車予備給水設備、機関車防爆並ニ防弾設備、機関車転向線設備、運転油脂格納庫分散設備等ヲ施行整備シツツアリ。而シテ昭和十九年度迄ニ要シタル総計一千七百万円ナリ。

##### 四 防 空 資 材 ノ 整 備

防空施設ト併行シテ貯蔵準備ヲ必要トスル防空資材ハ逐年充足ヲ計リ居レリ。即チ大略左ノ如シ。

##### イ 防 空 用 品

消火用品

ガソリンポンプ（小型）

腕用ポンプ

水桶バケツ其他

三六台

一〇四台

防毒用品

防毒面

一九、一〇〇箇

主要防護地域ノ従事員四万三千名ノ四割四分ノ配布率ニテ準備セリ。

一、六〇〇組

防毒服

主要防護地域ニ於ケル防毒要員ノ約半数ニ相当ス。

救急用品其他

鉄兜

二〇四〇〇箇

救急用品

三六〇箱

コノ他救急用品トシテ担架ヲ配給セリ。

## 2. 復旧資材

復旧資材タル鉄鋼資材ノ準備ニ關シテハ懸命ノ努力ヲ払ヒツアルモ現在尚不充分ノ状態ニシテ止ムヲ得ズ有事ノ際ニハ比較的不急不要ト認メラルル地方支線ヲ撤去転用スルコトニ計画ヲ樹立万端ノ手配ヲ講ジツアルモ、尚物動計画ノ許ス限リニ於テ資材ノ新規獲得ニ努力シツアリ。

3. 運転用石炭、油脂、銑鉄等ノ消耗品及食料ノ確保貯蔵ニ付テハ、夫々相当研究セラレ非常時ニ対処スル準備ヲ了シ居レリ。

## 一 概 況

### 第一〇 朝鮮ニ於ケル最近ノ貯蓄奨励状況ニ就テ

朝鮮ニ於ケル貯蓄奨励ハ内地ノ強化方針ニ順応シ、昭和十三年以来之ヲ拡充強化シ来リタル処、官民一致熱意アル協力ニ依リ別表ニ示ス通り比年其ノ目標額ヲ遙カニ突破スルノ好成绩ヲ収メ来レリ。

本年度朝鮮ノ目標額ハ従来ノ資金増加状況及鮮内資金撤布見込額等ノ趨勢ヨリ勘案シ、前年度目標ニ対シ五割増ノ十八億円ト決定ノ上概ネ左記事項ヲ基調トシテ夫々地方ノ実情ニ即応セル増強方策ヲ企画シ現ニ其ノ実践ニ努力中ナリ。

- 一 戦時国民貯蓄ノ真義徹底
- 二 貯蓄総額ノ起態勢ノ確立
- 三 手持資金ノ貯蓄強化
- 四 貯蓄組合ノ強化
- 五 一時収入等ノ貯蓄強化
- 六 貯蓄ノ障害トナルベキ原因排除
- 七 貯蓄推進員制度ノ確立

#### ハ 金融機関ノ協力促進

本年度第一、四半期（四月—六月）末現在ニ於ケル実績ハ十八億円中私人ノ有価証券投資見込額三億円ヲ除キ、各道ニ割リ当テタル目標十五億円ニ対シ、其ノ実績五億二千六百余万円、目標額ニ対スル達成歩合三五%ニシテ、昨年同期ノ実績二億二千七百余万円、達成歩合二四%ニ比シ著シク良好ナリ。

然レドモ一面最近ニ於ケル朝鮮銀行券発行高ハ十九億円ヲ超ヘ前年同期ニ比シ二倍余ノ膨脹ノ趨勢ニ鑑ミ、今後一層貯蓄ノ強化ヲ図ル要アリト認ム。

### ニ 貯蓄増強上実施中ノ重要施設事項

貯蓄増強ノ具体的方策ニ付テハ貯蓄組合ノ整備、国債債券ノ隣保消化ノ実施等概ネ内地ニ於ケル施設ト大同小異ナルモ、朝鮮ニ於ケル特殊事情等ヲ勘考ノ上創案実施中ノ重要事項ヲ挙グレバ凡ソ左ノ如シ。

#### (1) 農林水産物共販代金ノ天引貯蓄

朝鮮現在人口ノ約七割ハ農民ナルヲ以テ、コノ農民ガ貯蓄ニ協力スルト否トハ、其ノ貯蓄成績ノ目標達成ニ影響スル処甚大ナルモノアル実情ニ鑑ミ、農民ヲシテ不知不識ノ内ニ貯蓄ニ協力セシムル手段トシテ、農林水産物共販代金ニ対シ全鮮的ニ相当高率ノ天引貯金ヲ一律ニ実施シ、販売代金ノ引上ゲ又ハ補給金ノ増額ニ対シテ

ハ其ノ大部分ヲ貯蓄セシメ極メテ良好ナル成績ヲ挙揚シツツアリ。尚米及雑穀ニ対スル奨励金、報償金ニ対シテモ其ノ大部分（八割トナル見込）ヲ天引貯蓄セシムル予定ナリ。

#### (2) 買物、遊興貯蓄ノ実施

消費部面ヲ補足シテ応分ノ貯蓄ヲ為サシムル為、一定限度ノ買物及遊興ヲ為ス者ニ対シ応分ノ貯蓄ヲ添加スル方策ヲ昭和十五年以來実施シ良好ナル成績ヲ挙揚シツツアリ。殊ニ昨年十二月貯蓄券ノ発行ニヨリ其ノ貯蓄手段簡易化セラレタルニ伴ヒ右貯蓄ハ益々増加ノ趨勢ニアリ。

#### (3) 割増金付定期予金実施

興味ヲ以テ貯蓄ヲ行ハシムル方法トシテ昭和十八年六月百円ヲ一口トシ一年据置ノ定期予金等ニ対シ一等一万円以下ノ割増金ヲ附スル本制度ヲ創設シ爾來同年十二月、十九年六月ノ三回ニ亘リ之ヲ実施シ、其ノ総計三五二百余万円、応募口数四四六千余口ニ及ビ予期以上ノ好成績ヲ収メタリ。

#### (4) 愛国債券ノ発行

近時自由勞務者等比較的金融機關ニ親シマザル階層ノ収入額ニ増加シタル処、之ヲ放置スルニ於テハ勢ヒ浮動購買力トシテ作用スル可能性多分ニ存スベキヲ慮リ、其ノ吸収方策トシテ割増金ノ著シク多額ニシテ而モ当籤率極メテ高キ朝鮮独自ノ富籤類似ノ小額債券ヲ朝鮮殖産銀行ヲシテ発行セシメ多大ノ成績ヲ収メツツアリ。即



第一回ハ昭和十八年十二月五百万円ヲ發行シ金融消化、第二回ハ昭和十九年四月  
二千五百万円ヲ發行シ二千二百四十万円ヲ消化セリ。

(附) 朝鮮ニ於ケル貯蓄目標額決定ノ概観

(内地ノ目標額ニ比シ少キニ過ギル等ノコトナキヤ)

## 一、貯蓄目標額ノ決定概観

本年度全国貯蓄目標額三百六十億円(前年度目標額二百七十億円ニ対シ三割三分  
三厘増ニシテ右増加率ヲ朝鮮ニ於ケル昭和十八年度貯蓄目標額十二億円ニ乗ズルト  
キハ十五億九千九百万円トナリ、又本年度朝鮮内資金撤布見込額ハ本府及公共団体予  
算ヲ初メ民営工事費、事業資金、金融機関貸出増加額、合計額五十三億六千三百万円  
ニシテ前年度ノ四一億五千三百万円ニ対シ其ノ増加率二割九分ナルヲ以テ此ノ比率  
ヲ前年度貯蓄目標額十二億円ニ乗ズレバ十五億五千九百万円トナリ、以上ノ諸般事情  
トキハ昭和十九年度貯蓄目標額ハ十六億円ヲ以テ適當トスルガ如ク一応思案セラル  
ルモ

1. 昭和十八年度ノ全国ノ貯蓄実績ニ対スル朝鮮ノ貯蓄実績ハ五分ニ当リ本比率ヲ  
全国貯蓄目標額三百六十億円ニ乗ズルトキハ十八億円トナルコト。

2. 昭和十九年度我國全体ニ於ケル國民所得ノ配分計画ニ依ルトキハ國民ノ生活費  
金ハ前年度ニ比シ更ニ相當程度ノ切下ゲヲ要請セラレ居リ、今年度ハ一般ラツナ

一層勤勞ノ倍加ト耐乏精神ノ涵養ニ徹シ以テ戦争生活ノ実践ニ挺身セシムル要愈  
緊切ナルモノアルヲ以テ目標額ハ可及的高ク掲グルヲ可トスルコトノ諸点ヨリ勘  
考シ昭和十九年度ノ目標額ハ之ヲ十八億円(対前年増加五割)ト決定シタリ。

尚右十八億円ノ内三億円(前年度実績二億三千余万円)ハ私人等ノ株式、社債  
等ヘノ直接投資額トシテ見込ミ得ルヲ以テ各道ニ対シテハ十五億円ヲ目標額トシ  
テ割当テタリ。

## 二、内地ノ目標額ニ比シ少ナ過ギザル理由

殆ンド本州ニ匹適スル面積ト人口二千五百万ヲ有スル朝鮮ノ貯蓄目標額ガ内地ノ相  
当大ナル一府県ノ目標額殆ンド同額トハ一見少キニ失スルガ如キ感アルモ、之ハ朝  
鮮ノ経済力換言スレバ貯蓄能力ノ多寡ニ依リ測定セラルベキモノニシテ最近朝鮮ノ  
各種生産額ハ驚異的躍進ヲ遂ゲツツアリト雖モ之ニ要スル資金資材ハ殆ンド大部分  
内地ニ依存スル現状ニシテ朝鮮ノ財政経済其他各種資金ノ撤布状況ハ、其ノ質量共  
ニ内地ノソレトハ甚ダ相違セルモノアリ。昭和十九年度朝鮮ノ國民所得ハ全国ノ六  
百億円ニ対シ僅カニ五十億円ニ過ギズ、即チ國民所得ノ点ニ於テハ僅カニ約八分程  
度ナルニ反シ之ニ依リ養フベキ人口ハ全国ノ二割五分ニ相當シ、從ツテ各人ノ貯蓄  
能力ニ於テ内地等ノソレトハ格段ノ相違アルコトヲ勘考セバ本年度目標額ハ過少ナリ  
ト謂フヲ得ズ。極メテ妥當ナルモノト思料セラル。

別表

貯蓄奨励実績額調

(単位千円)

財一九、八、二二  
務局管理課

年次	目標額	実績額	対目標割合	摘要
昭和十三年度	二〇〇〇〇〇	二六九七九	一三五%	
同十四年度	三〇〇〇〇〇	三九〇〇二	一三〇	
同十五年度	五〇〇〇〇〇	五七六三三	一一五	
同十六年度	六〇〇〇〇〇	七五四八五	一二五	
同十七年度	九〇〇〇〇〇	九九五七五	一一〇	
同十八年度	一、二〇〇〇〇〇	一、五二四一九	一二八	
同十九年度	一、八〇〇〇〇〇 (一五〇〇〇〇〇)	五二六七五 (六月末現在)	三五・一	

備考 昭和十九年度ノ実績ハ第一、四半期末現在ニ於ケルモノニシテ其ノ達成歩合ハ総目標額十八億円中私人ノ株式会社債ニ対スル投資見込額三億円ヲ除キ各道ニ割当テタル十五億円(目標額中括弧書)ニ対スルモノナリ。

支那及満洲ヨリノ送金状況ニ就テ

一九八二  
管理課

支那ヨリノ送金状況

(1) 支那ヨリノ対日送金ノ規制

北支及中支方面ニ於ケル物価高ハ急激ニシテ現在ノ通貨価値ハ其ノ対日本円為替換算率ニ対シ実質上乖離シ居ル実情ニ鑑ミ之等地域ヨリノ資金流入ハ近時著シキ増加ノ趨勢ヲ示シ、本年二月中ノ銀行經由交易外受取勘定ハ九七四一千円ニシテ前年上半期六箇月分ノ受取額ニ相当シ半島金融政策上ヨリモ放任スルヲ許サザル事態ニ至レルヲ以テ本年三月以降内地ノ方針ニ順応シ為替銀行ニ対シ支払資金ノ枠ヲ設定スルト共ニ原則トシテ送金一件千円ヲ超ユルモノ毎ニ箇別申請ヲ為サシムル方法ニ依リ規制ヲ加ヘ居レリ。

(2) 支那ヨリノ送金許可方針

資金ノ使途目的等ニ付審査シ資本ノ逃避トナルベキモノ及対日新規事業投資トナルベキモノ等ノ外ハ必要ナル限度ニ於テ許可ス。

(3) 支那ヨリノ送金ノ浮動資金化防止ノ措置

現地引揚ニ依ル持帰金及現地ニ於ケル事業営業ノ解散縮少ニ伴フ資本回収金ノ如ク本邦ヘノ回収ヲ容認スルコト已ムヲ得ザルモノニシテ然モ一時ニ多額ニ達スル送金ニ在リテハ浮動化防止ノ見地ヨリ差当リ必要ナル最少限度以外ノ資金ハ凡

年 月 末	発 行 高	対前年同期比較増	同 上 割 合
昭和十八年 八月末	九三三、四九九千円	二五、五四四	三七・六%
" 九月末	九九五、九五五	二九、七二一	四二・五
" 十月末	一〇八、三〇六	三五、四七一	四八・六
" 十一月末	一二三、六三〇	四三、七六二	五四・八
" 十二月末	一四六、六七七	五五、八一三	六一・四
昭和十九年 一月末	一四七、六九二	六〇、九八七	七〇・三
" 二月末	一五二、三一六	六六、七四六	七七・八
" 三月末	一五七、二三八	七三、四二二	八七・五

四 最近ニ於ケル鮮銀券ノ膨脹原因ニ付テ承リタシ

朝鮮銀行券ノ発行高ハ支那事変以来兵站基地トシテノ朝鮮経済力ノ飛躍的伸展ニ伴

ヒ年ト共ニ増大ノ一路ヲ辿リ来リタルガ大東亜戦争ヲ契機トシテ、更ニ一段ノ発展ヲ遂ゲ昭和十九年八月二十五日現在ニ於テ実ニ二十億三千二百十九万円（前年同期対比十一億三百五十三万円増）ニ達シ、同行創業以来ノ最高記録ヲ示スニ至レリ。之ヲ支那事変勃発直前タル昭和十二年六月末ノ発行高一億五千四百六十六万円ニ対比スレバ十八億八千七十三万円ノ増加ナルガ、更ニ大東亜戦争勃発ノ直前タル昭和十六年十一月末ノ発行高六億一千五百二十四万円ニ比較スルモ十四億一千六百九十五万円ノ増加ニシテ此ノ増勢ハ昭和十九年ニ入り特ニ著シク昭和十八年八月以降本年七月ニ至ル各月末ノ発行状況ヲ夫々前年同期ニ比較スレバ次ノ如シ。

テ特殊予金（予金ノ払戻等ニ付テハ当局ノ承認ヲ受ケシムル等ノ取扱ヲ為スモノトス）ト為サシムル等ノ特別措置ヲ実施セリ。

尚右特殊予金ノ戦時災害時ニ於ケル非常払出ニ付テハ生活費トシテ一箇月五〇〇円迄ハ承認ヲ要セザルコトトセリ。

三 満州ヨリノ送金状況

満州ヨリノ朝鮮向送金状況ハ銀行ヲ通ズル貿易外受取勘定ニ於テ昭和十七年一〇月九五六千円一箇月平均八四〇〇千円、昭和十八年一三九七六九千円一箇月平均一、〇〇〇千円ニシテ殊ニ本年五月以降ハ一箇月ニ一、〇〇〇千円ヲ超ユルニ至レリ。之ガ増加ノ原因ニ付テハ満州ニ於ケル物価高ヲ反映シテノ不安気分等ニ依ルモノト認めラルルガ近時之等流入資金ニ依ル不動産買漁熱相当著シキモノアリ注意ヲ要スト認めラル。

「註」 昭和一九四四閣議決定

満州国及関東州ヨリノ被仕向送金等ニ付テハ現行通之ヲ自由トス。

昭和十九年	四月末	五月末	六月末	七月末
一六二四二二八	一六七四八二〇	一八一七三〇一	一九一三九四八	一九一三九四八
七七六八九二	八三七一〇	九五二四七九	一〇二一七九二	一〇二一七九二
九一・六%	九九・九	一一〇・二	一一四・五	一一四・五

従来同行券ノ発行高ハ一月以来漸次収縮シ七月ニ於テ年中ノ最低トナリ農産物ノ出廻リト共ニ八月以降増勢ニ転ジ、十二月ニ至リ年中ノ最高ヲ示現スルヲ例トシタルガ昭和十九年ニ入りテハ右ノ如キ季節変動ハ全ク其ノ影ヲ潜メ逐月膨脹ノ一途ヲ迎レリ。而シテ斯ル特異現象ノ原因ハ奈辺ニアリヤヲ考察スルニ

- 一、朝鮮ニ於ケル豊富ナル地下資源電力等ノ開発ヲ始メトシテ、各種重点産業ノ開発ガ愈々活潑ヲ極メタルニ伴ヒ之ガ設備資金ノ需要増加セルコト。
- 二、此等事業会社ノ操業開始ニ伴ヒ運転資金ノ使用増加セルコト。
- 三、近來各種商取引ノ現金取引化ノ傾向愈々濃厚トナリタルト共ニ物価労銀ハ漸騰シ居レルコト。
- 四、輸送難等ニ伴フ資金回転率ノ鈍化。
- 五、統制経済ノ進展ニ伴ヒ糧穀其ノ他ノ統制物資ノ買上資金ガ一時ニ多額放出セラレルコト。
- 六、北支及滿州ヨリノ送金等ニ伴フ同地インフレノ波及。

- 七、生必物資入手難等ニ伴フ手持現金ノ増加。
  - 八、政府撤布資金ノ増大セルコト。
- 等ノ事情ガ同行券ノ発行増加ノ主要原因ヲ為スモノト認メラレ特ニ本年ニ入り一般生活物資入手難ノ度益々加重シタルニ伴ヒ物価ハ自然昂騰加之諸物資売買ハ現金取引トナリ之ガ全般的ニ一般民衆ノ所持金ヲ増加セシメ居ルモノニシテ就中
- 一、近來一般農民ハ農産物ノ価格引上、奨励金報奨金交付等ニ依リ現金入手ノ途増加シタルノミナラズ穀類ノ供出制ハ収獲物ノ殆ンド全部ヲ短期間ニ換金スルコトトナリタルコト。
  - 二、重要産業方面ノ拡大増産ニ伴フ人的供出増強ノ結果一部家族ノ離業就労増加シ從ツテ従来ニ増シテ現金ヲ入手スルニ至リタルコト。
  - 三、自由労働者殊ニ日稼人夫等ノ需要ハ人手不足ノ折柄最近頗ニ増加シ從テ此等ノ雇傭労銀ハ相当昂騰セルコト。
- 等ノ事情ニ依リ従来殆ンド所持金ナカリシ斯ル下層民衆ノ所持金増加ハ特ニ顯著ナルモノアリ。然ルニ此等下層階級ハ概ネ文盲ニシテ金融機關ノ利用ニ疎ク、又奥地民衆ハ地理的關係等ニテ金融機關ヲ利用シ得ザルモノアリ。更ニハ前述セル通り諸物資売買ノ現金取引化ハ必然的ニ配給品並ニ日用物資ノ流入ニ充ツル為、常ニ現金所持ヲ余儀ナクセシメ從テ発行セラレタル銀行券ヘ回収セラレズ流通市場ニ滞留シ勢銀行券ノ発行増加ヲ誘発シ居リ。又一面滿州ヨリ南下スル旅客交換用トシテ朝鮮銀行ヨリ滿州



中央銀行へ補給シタルモノ、或ハ鮮内へ流入シタル満州國幣交換関係ニ依ル増発モ看過シ得ザル一要因ニシテ即チ昭和十九年一月ヨリ七月迄ノ七ヶ月間ニ鮮内ニ於テ交換セラレタル満州國幣ハ七千七百四十五万円ニシテ満州中央銀行へ旅客交換用トシテ補給シタル鮮銀券ハ七千九百四十万円ノ多額ニ上リ、此ノ兩者合計一億五千六百八十五万円ハ前年同期ノ七千七百十三万円ニ比シ奥ニ七千九百七十二万円ノ増加ヲ示セリ。

尚鮮銀券ノ増発傾向ハ昭和十九年ニ入り特ニ顯著ナルコト前述ノ通ナルガ、右ハ主トシテ昭和十八年末ニ農村方面ニ散布サレタル資金ノ回収鈍化ト苛烈ナル現下決戦段階ノ緊要ナル要請ニ基ク各種重要産業方面ノ増産強行ニ伴フ需要資金ノ増大ニ起因スルモノト認メラレ現下ノ諸情勢ニ照応シ事情已ムヲ得ザルモノアルモ貯蓄ノ増強、放出資金ノ効率化、配給機構ノ整備等ノ総合的対策ニ依リ極力之ガ増発ヲ抑制スルノ要アリト思料セラル。

### 五 昭和十八年末現在に於ける朝鮮人国語普及状況

一問 国語を解する朝鮮人の数及人口に対する歩合如何

答 昭和十八年十二月末日現在に於て之を視れば国語を解する朝鮮の数は五百七十二年修了程度を標準とす）が二百五十七万六百三人であり、普通会話に差支なき者

（国民学校六年卒業程度を標準とす）が三百十五万千八百四十五人である。之を朝鮮人総人口二千五百八十二万七千三百八十八人（昭和十八年十二月末日現在）に對比すれば二二・二％に当り、右の内国語を稍々解し得る者の比率は九・九％、普通会話に差支なき者の比率は一・二・三％である。

尚国語を解する者の標準を国民学校四年修了程度以上に置いて調査したる関係上十才未満の者は総て不解者として取扱つて居る事実に鑑み、十才以上の人口千六百九十九万二千八百八十一人に対し、国語を解する者の比率を視る場合には三・七％となり、右の内国語を稍々解し得る者の比率は一・五・一％、普通会話に差支なき者の比率は一・八・六％である。

二問 台湾に於ける国語普及状況との比較如何

答 台湾に於ては年末現在調査の方法に依らず毎年の公学校卒業生及同在学者並に国語講習会修了者等を累計し之を其の年の人口に對比して普及率を算出しおるが朝鮮も右方法と同様に国民学校及簡易学校生徒数、同上卒業生及国語講習会修了者数の累計を人口に對比して普及率を算出すれば次表の通りである。

年 別	地 方 別	人 口	国語解得者	人口に対する普及率
昭和十五年	台湾	五五二四九九〇	二八八五三七三	五・一・〇％

昭和十六年	朝鮮		昭和十七年	朝鮮	
	台湾	朝鮮		台湾	朝鮮
	五、六八二、二三三	二、三九一、三〇六三		二、五五二、五四〇九	二、五五二、五四〇九
	三、六五三、一九五	四、二〇九、四四六		七、八三六、三四五	三〇・七
	一五・九%	一七・六			

三問 国語を解する朝鮮人の男女別比較対照は如何

答 国語を解する朝鮮人五百七十二万二千四百四十八人中、男子は四百十四万九千九百二十三人、女子は百五十七万二千五百二十五人で之を男女各々の総人口に対比すれば、男子の比率は三二・二%、女子の比率は一三・二%となる。尚前掲の例に依り十才以上の男子八百四十六万二千八百十一人、女子八百五十三万七十七人に対する国語普及率を視れば男子四九・〇%、女子一八・四%で女子に於て其の普及は尚甚だ劣るものがある。

四問 地方別に視たる国語普及状況は如何

答 国語の普及率は都鄙間にケイ庭があり都会地に顕著なるものがある。今之を朝鮮人口十万以上の都市に就て視るに次の如く元山府に於ける(六二・七%)を最高として釜山府の(五八・〇%)之に垂ぎ、京城府(五三・九%)、大邱府(四七・六%)、咸興府(四一・六%)、平壤府(四一・〇%)、清津府(三九・

八%)、新義州府(三二・〇%)、仁川府(二七・一%)の順位である。更に之を道別に就いて視るに咸北の(三五・八%)を最高とし、京畿の(三一・六%)、咸南の(二三・七%)、慶北の(二二・一%)、平南の(二二・〇%)、慶南の(二一・〇%)、平北の(二〇・三%)各道に普及率高く江原の(一六・二%)を最低として黄海(一八・二%)、全北(一八・三%)、忠南(一八・七%)、全南(一九・五%)、忠北(一九・六%)の各道に低い。今之を総括すれば次表の通りである。

一、国語を解する朝鮮人府郡別比較

府		国語を解する朝鮮人	朝鮮人総数	同上率
府	部	一、四二七、〇六三	三、一五〇、六七六	四五・三%
郡	部	四、二九五、三八六	二、二六七、六三二	一八・九%

二、朝鮮人の十万人以上居住する都市に於ける国語普及率表

都市名	普及率	国語を解する者	朝鮮人数
元山府	六二・七%	六、六三、七七	一〇、五九三〇
釜山府	五八・〇%	一、四七、五六五	二、六三、五七〇

年次	朝鮮人総数	同上中国語ヲ解スル者
大正二年末	一五、一六、九、九、三	九、二、二、六一
七年末	一六、六、九、七、〇、一、七	三、〇、三、九、〇、七
十二年末	一七、四、四、六、九、一、三	七、一、二、二、六、七
		四・〇八%

四 国語を解する朝鮮人の累年比較表

以上概括すれば国語を解する朝鮮人数は屢年通増し、その普及率も逐年向上し、大正二年末を基準とすれば六十二倍大に上つてゐる。即ち次表の通りである。

道名	朝鮮人総数	同上中国語ヲ解スル者
慶尚南道	二、三、六、六、八、六、六	四、九、八、〇、三、五
黄海道	一、九、六、九、三、四、三	三、五、九、三、七、八
平安南道	一、七、九、一、七、七、二	三、九、四、五、三、八
平安北道	一、八、六、九、六、九、四	三、八、〇、四、七、五
江原道	一、八、五、〇、九、七、六	三、〇、〇、三、九、三
咸鏡南道	二、〇、三、二、一、〇、八	四、八、二、〇、三、七
咸鏡北道	一、一、二、七、五、四、九	四、〇、三、四、〇、六
全 鮮	二、五、八、二、七、三、〇、八	五、七、二、二、四、四、八

三 道別に於ける国語普及率表

道名	朝鮮人総数	同上中国語ヲ解スル者
京城道	三、〇、四、八、五、〇、二	九、六、三、九、二、五
忠清北道	九、八、五、一、七、五	一、九、二、七、六、五
忠清南道	一、六、八、三、六、八、八	三、一、四、六、三、五
全羅北道	一、七、〇、二、七、二、六	三、一、二、二、五、四
全羅南道	二、七、八、六、三、九、一	五、四、二、五、九、五
慶尚北道	二、六、一、三、五、一、八	五、七、八、〇、一、二

府名	朝鮮人総数	同上中国語ヲ解スル者
京城府	五三・九%	四八、九、九、二、七
大邱府	四七・六%	九、〇、九、三、九
咸興府	四一・六%	四、五、三、三、七
平壤府	四一・〇%	一、三、五、八、三、一
清津府	三九・八%	七、四、二、六、七
新義州府	三二・〇%	三、三、五、九、六
仁川府	二七・一%	五、八、四、五、四

ハ三〇、四四八人、出生率ハ三四・一四人、（人口千人ニ対スル割合以下同ジ）死

三問

朝鮮人ノ人口増加ノ趨勢如何

答 先ツ朝鮮全体ノ人口増加ハ、昭和十五年國勢調査實施以來昭和十九年人口調査ヲ施行スル迄ノ三年七ヶ月間ニ於テ、一年平均四四六六〇四人増加シ、其ノ率ハ人口千ニ付一八・三七人デアル。今之ヲ昭和十五年以前ノ十ヶ年間ニ於ケル一年平均増加率一五・五九人ニ比較スレバ更ニ二・七八人ノ増加トナル。

次ニ朝鮮人ノ増加ハ右期間内ニ於テ、五八六四二〇人増加シ、一年平均増加数ハ四四三・七二人、其ノ率ハ一八・八〇人デアルガ、更ニ同期間内ニ於テ朝鮮外ヘノ移動人口約四四一・二四人アルヲ以テ、之ヲ加味スルトキハ朝鮮人ノ増加率ハ相当ノ高率トナル。（第一表及第三表参照）

更ニ之ヲ人口動態調査ヨリ見ルニ、最近ノ五ヶ年間ニ於ケル一年平均出生数ハ

六 最近ニ於ケル朝鮮ノ人口事情

一問

最近ニ於ケル人口数如何

答 昭和十九年五月一日午前零時現在ヲ以テ人口調査ヲ實施シタル結果、全鮮総人口ハ二五九一七、八八一人ニシテ、其ノ中内地人ハ七、一五八、三三人、朝鮮人ハ二五、一三三、五五二人、外地人ハ三、七三三人、外国人ハ七、五七三人デアル。

之ヲ昭和十五年國勢調査ノ結果ト比較スレバ、総人口ニ於テ、六〇、〇三一人増加トナリ、内地人ハ一、三、四九〇人、朝鮮人ハ一、五八六、四二〇人、外国人ハ六、八一人増加シ、外地人ハ逆ニ二、六〇人減少シタルヲデアル。此ノ減少ハ樺太ガ、内地ニ編入

サレタ為デアル。（第一表参照）

尚毎年末現在ヲ以テ實施スル現住戸口調査ニ依ル昭和十八年末現在ノ人口ト比較スレバ、総人口ニ於テ、七、四四二、六九人減少シタルヲデアルガ、年末現住戸口調査ノ人口ニハ多数ノ幽霊人口ヲ含ムモノト予想セラルルヲ以テ、同人口ヨリ減少ヲ見タルハ、昭和十九年五月一日實施セル人口調査ノ人口ガ正確ナルコトヲ立証スルモノナリト推測サレル。（第二表参照）

昭和三年末	一八、六六七、三三四	一、二九〇、二四一	六・九一%
八年末	二〇、二〇五、五九一	一、五七八、一二一	七・八一%
十三年末	二一、九五〇、七一六	二、七七一、七八〇	一二・三八%
十四年末	二二、〇九八、三一〇	三、〇六九、〇三二	一三・八九%
十五年末	二二、九五四、五六三	三、五七三、三三八	一五・五七%
十六年末	二二、九一三、〇六三	三、九七二、〇九四	一六・六一%
十七年末	二二、五二五、四〇九	五、〇八九、二一四	一九・九四%
十八年末	二二、五八二、七三〇	五、七二二、四四八	二二・一五%



第二表

昭和十九年人口調査ト昭和十八年末現住戸口調査トノ比較

昭和十九年人口調査 昭和十八年末現住戸口調査 増減数 (×減)

註 昭和十九年人口調査ノ人口ハ概数ニシテ、調査ノ時期ニ陸海軍ノ部隊及艦船ニ現任シタル者ハ含まズ。  
2 昭和十五年国勢調査ノ人口ニハ調査ノ時期ニ応召又ハ入営中ノ者ハ含まズ。

	昭和十九年人口調査	昭和十五年国勢調査	一年平均増減数 (×減)	(同人口千ニ付)
全人口	二五九一七八八一	二四三一七五五〇	四四六六〇四	一八・三七
内地人	七一三五八三	六九九〇九三	三七六三	五・三八
朝鮮人	二五一一三三三二	二三五四六九三二	四四二七二三	一八・八〇
外地人	三七三	六三三	七二	×一一・三四
外国人	七二五七三	七〇八九二	一九〇	二・六八

第一表

昭和十九年人口調査ト昭和十五年国勢調査トノ比較

昭和十九年人口増加ノ趨勢如何  
昭和十九年五月一日人口調査ノ結果ニ依ル内地人ノ人口ハ七一三五八三人ニシテ、既往国勢調査ノ結果ニ依リ昭和十九年五月一日現在ヲ以テ推計シタル七六九二八一人ト比較スレバ五六六九八人ノ減少ナル。尚之ヲ昭和十五年国勢調査ニ比較スレバ一三、四九〇人ノ増加トナリ、其ノ一年平均増加数ハ僅カニ三、七六三人ニシテ、昭和十五年以前ノ五ケ年間ニ於ケル一年平均増加数一、七六六人ヨリ遙カニ少ナイ。然シ昭和十九年人口調査ニ於イテハ軍人軍属ヲ除外シテ居ルモノデアリ従ツテ今昭和十九年三月末現在ニ於ケル入営応召者数三、六五七一人ト、其ノ後人口調査ヲ実施スル迄ノ期間内ニ於テ応召シタル数(四月初旬ニ於テ極メテ多数ノ応召者アリタルモ其ノ数不詳)ヲ、昭和十九年人口ニ加ヘルトキハ、略推計人口ニ匹敵スルモノト予想サレル。  
更ニ之ヲ人口動態調査ヨリ見ルニ、最近五ケ年間ニ於ケル一年平均自然増加数ハ一〇、七〇二人、其ノ率ハ一四・九一人ニシテ内地ヨリモ高率デアリ、殊ニ昭和十五年以來ノ増加率ハ著シク累年増加ノ趨勢ニアルモノト予想サレル。  
(第五表参照)

亡数ハ四一、三八一〇人、死亡率ハ一六・九六人ニシテ、自然増加数ハ四一、七六三人、其ノ増加率ハ一七・一八人デアリ、内地ノ最近五ケ年間ノ一年平均自然増加率一三・〇二人ト比較スレバ遙カニ高率デアル。(第四表参照)

第四表

朝鮮人ノ出生、死亡及自然増加

年次	出生数	同千上付率	死亡数	同千上付率	自然増加数	同千上付率
昭和十三年	七九二、九七五	三二・九三	三八四、一七九	一五・九五	四〇八、七九六	一六・九七
"十四年	八一五、五一六	三三・三〇	四一四、一九九	一六・九一	四〇一、三一七	一六・四〇
"十五年	七三五、四〇〇	三〇・二三	四一二、〇四八	一六・九三	三二三、三五二	一三・二九
"十六年	七九六、〇一〇	三二・二五	四〇〇、九五三	一六・二四	三九五、〇五七	一六・〇〇
"十七年	一、〇一二、三三九	四二・〇〇	四五二、六七〇	一八・七八	五五九、六六九	二三・二二
一年平均	八三〇、四四八	三四・一四	四一二、八一〇	一六・九六	四一七、六三八	一七・一八

第三表

朝鮮外へノ移動人口

地域	自昭和十五年一月一日起至昭和十九年五月一日	合計
内地	二四九、九一六	六一三、二四三
満洲	二五五、九九一	三二〇、八七八
支那	六六、四九一	七九、五一八
合計	五七二、三九八	一、〇一三、六三九

全	鮮	二五九一七八一	二六六六一五〇	X	七四四二六九
咸鏡北道		一一二四四二一	一、二一八八四一	X	九四四二〇
咸鏡南道		二〇一五三五二	三、一一五七七五	X	一〇〇、四二三
江原道		一、八五八二三〇	一、八七二六九九	X	一四四六九
平安北道		一、八八二七九九	一、九三〇、九八七	X	四八、一八八
平安南道		一、八二六四四一	一、八五三、五五七	X	二七一一大
黃海道		二、〇一四九三一	二、〇〇〇、二五二		一四、六七九
慶尚南道		二、四一七三八四	二、四七〇、三五九	X	五二、九七五
慶尚北道		二、六〇五四六一	二、六五八、八〇〇	X	五三、三三九
全羅南道		二、七四九九六九	二、八三一、五三八	X	八一、五六九
全羅北道		一、六七四六九二	一、七三九五六三	X	六四、八七一
忠清南道		一、六七五四七九	一、七七一、六八六	X	三六、二〇七
忠清北道		九八〇、四八八	九九五、二四八	X	一四、七六〇
京畿道		三、〇九二、二三四	三、二六二、八四五	X	一七〇、六一一

朝鮮ニ於ケル内地人ノ出生、死亡及自然増加

年次	出生数	同 人口千ニ付率	死亡数	同 人口千ニ付率	自然増加数	同 人口千ニ付率
昭和十三年	一六五一五	二四・六三	九二六〇	一三・八一	七二五五	一〇・八二
"十四年	一七〇七〇	二四・七九	九六八〇	一四・〇六	七三九〇	一〇・七三
十五年	二〇五一二	二九・〇〇	九一三九	一二・九二	一、三、七三	一六・〇七
十六年	二、三、三六一	三二・一六	九三三一	一二・八六	一、四、〇二〇	一九・三〇
十七年	二、三、五四二	三〇・八一	一、〇、〇七二	一三・一八	一、三、四七〇	一七・六三
一年平均	二、〇、二〇〇	二八・二八	九四九八	一三・三七	一、〇、七〇二	一四・九一

内地ニ於ケル内地人ノ出生、死亡及自然増加

昭和十七年	二、二、三、三六六〇	二九・七四	一、一、六、六六三〇	一五・五三	一、〇、六、七〇三〇	一四・二一
-------	------------	-------	------------	-------	------------	-------

太平洋戦争下  
終末期に於ける  
朝鮮の治政（完）

(朝鮮統治関係重要文献)  
金融関係資料

朝鮮に進出した日本の銀行  
・・・支店銀行の発展とその業績・・・

相川 尚武

目次	
はしがき	118
一 日本の銀行の朝鮮進出	119
二 日本の銀行支店の朝鮮に於ける地位と特色	122

# は し が き

戦後十有余年を経てわが国金融機関の朝鮮における活動を叙するに当つて、往時朝鮮の側から、いわば地方的立場からみていたことを、努めて客觀的に見直してみることにした。ただ遺憾ながらこれを年代順に詳細にあとづける資料に乏しく、朝鮮經濟の全体的推移における支店銀行のあり方をつかむことを十分に果せなかつた。特に第一次歐州大戰から戦後の不況期にかけてこの儲みが多い。

この小稿をまとめるに當つて、鈴木武雄氏、第一銀行八十年史編纂室、富士銀行調査部、三和銀行東京事務所、十八銀行本店、三菱經濟研究所等より資料に関して多大の御援助を頂いた。

重要な参照資料は次の如くである。(友邦協會刊行書を除く)

鈴木武雄氏	朝鮮金融論十講	(昭和十四年)
土屋喬雄氏	昭和金融史	(昭和三十年)
第一銀行	第一銀行五十年小史	(大正十五年)
富士銀行	富士銀行七十年誌	(昭和二十七年)
三和銀行	三和銀行史	(昭和三十年)
十八銀行	創立七十週年小史	(昭和二十二年)
朝鮮殖産銀行	朝鮮殖産銀行二十年志	(昭和十三年)
同	朝鮮の金融	(昭和七年)
朝鮮銀行	朝鮮銀行統計月報	(大正十五年)
朝鮮總督府	朝鮮總督府統計年報	(昭和二十年)

## 朝鮮に進出した日本の普通銀行

・支店銀行の發展とその業績・

### 一、内地銀行の朝鮮進出

朝鮮における近代銀行の先駆は明治十一年、わが第一国立銀行釜山支店の設置にはじまっている。

江華島事件に発する日韓修好条約の成立したのは同年二月であり、鎮国朝鮮の開國四ヵ月にして我が国金融機關の進出をみたわけである。当時の第一銀行は我が国銀行制度の草分けとしてなお創業數年にすぎず、苦難の過程を漸く脱した頃であつたが、既に清國への借款供与を画策していた。朝鮮への進出は、修好条約発効によつて大倉喜八郎等先覚者による日韓貿易がはじまり、為替、荷為替の取組み、韓錢交換等の金融業務が要請せられるに至つたがためであることはいふまでもないが、なお朝鮮産金の買取りも主要な目的であつたようである。明治十三年五月元山に設けられた出張所も、元山開港による領事館の官金出納事務の外に元山が砂金の集散地だつたことによるところが多い。更に明治十五年十一月仁川に設けられた出張所は、仁川開港による官金出納と同時に海關稅取扱のためであつた。韓國の海關稅取扱が第一国立銀行に委託せられたのは明治十七年二月の海關稅取扱條約によるがそれまでも便宜取扱いを実施していたものと思われ

る(京城出張所開設は明治二十一年十月)。

けだし極度に停滯的であり、近代的な行政、金融等はなお混沌としていた韓國において、当時これらの業務が一般金融業務に比して相当大きかつたものではあるまいか。

本章においては、この第一国立銀行の朝鮮進出についてわが国市中銀行進出の一つの原型を示すための叙述にとどめた。株式会社第一銀行朝鮮支店となり、更に韓國銀行「朝鮮銀行」の發展については別稿の取扱うところである。尤も韓國銀行設立(明治四十二年十二月)によつて朝鮮における一切の業務・不動産・行員等をあげてこれに譲渡した第一銀行は「韓國中央銀行ノ營業ノ妨害トナラザル様努ムル事」という条件で「一・二支店出張所等ヲ存置スル」ことを認められ(『韓國中央銀行設立ニ就キ株式会社第一銀行トノ間ニ於ケル權利義務承継ニ關スル覚書』)、京城・釜山の両支店が開設された(明治四十三年二月)。第一銀行朝鮮支店のこの新たな發足以後は自ら本稿の取扱うところとなる。

第一銀行について朝鮮に進出したのは国立第十八銀行(長



崎)である。当行の朝鮮進出は当時における朝鮮長崎間の密接な交通関係によるものであることはいうまでもない。同行の創立は明治十年であるが、出張所、派出所等の名称による営業所は別として、正式に支店として開業したのは明治二十三年十月における仁川港が最初である。爾後国立銀行時代(明治三十年・株式会社改組)元山・釜山の開港場の外、対韓貿易の日本内地側の中心地大阪にも支店が設けられた。ついで明治三十八年には京城、同三十九年に木浦及び羅州(出張所)、四十年は群山、龜山(出張所)の支店、出張所が設けられている。

一 地方銀行としてこのような対外進出は、当時の経営者の積極的営業方針によるところが大きかったと思われる。十八銀行の『創立七十週年小史』にはこの点を示す次の如き叙述がある。

「実現をみるに至らなかつたが明治三十九年七月の臨時総会に於いては平壤及びウラジオストクにも支店増設の決定を見、かつウラジオストクには本行頭取松田庄三郎氏の名義による松田銀行部(資本金十萬圓)なるものを設置、明治四十年七月十五日開業營業を続け、大正五年に至り朝鮮銀行浦塩支店となつたが、以つて当時の本行経営者の雄図の一端が窺われるのである」。

かくの如き積極経営は十八銀行としてかなりの重荷であつ

たと思われる。特に日鮮貿易はその進出当初と全く相貌を異にして来た。遂に昭和十一年二月、朝鮮殖産銀行に鮮内店舗をあげて譲渡し、撤退した(譲渡時には上記營業所の外、新龜山を含む)。この十八銀行の朝鮮撤退は支店銀行に対する総督府行政の積極的な進出の一つのモデルとしてかなり大きな意味をもつことはあとでふれる通りである。

十八銀行につぐものは明治二十六年における国立第五十八銀行(大阪)であつた。五十八銀行は明治四十二年に至り第百三十銀行に合併されたが、百三十銀行は当時既に安田銀行の傘下にあつた。(明治三十七年、百三十銀行の支払停止の善後処置として安田善次郎がその再建を引受けた)から、事実上この時を以つて安田銀行の朝鮮支店となつたともいうことができよう。このため日露戦後の反動恐慌に際しては自ら他を吸収し得るまでにたち直つていたということができよう。第一次欧州大戦後の財界再編成期において、安田關係十一行の大部分が実現し、百三十銀行朝鮮支店は名実共に安田銀行支店となつた(大正十二年十一月)。当時の朝鮮店舗は京城、仁川、平壤、釜山の四カ店であつたが、この中仁川支店は昭和十年、朝鮮銀行に買収せられ、他の三カ店は終戦に至るまで存続した。

金利率五分)これを韓国に貸付ける形式をとつた(最終金利率六分五厘)。

この外興業銀行京城支店の業務としては、農工銀行債の応募も行なつたようであるが明治四十三年韓国銀行にその業務を譲つて、朝鮮支店はなくなつた。然しながら後年特に満州事変以後の朝鮮關係企業の社債発行、融資等について大きな貢献を続けてきたことはいうまでもない。

以上の外、明治四十一年七月における周防銀行釜山支店の設立があるが、その後の動向についてはつまびらかにしない。長崎貯蓄銀行の進出も記録されているが詳細は分らない。これは十八銀行と系統を同じくし、後(昭和十九年)これに合併されているので、十八銀行支店とともにある程度の業務を行つていたのではないかと推測される。

このように進出あるいは撤退した日本内地諸銀行の營業状況について、前掲『朝鮮の保護及び併合』改編複刊は明治四十二年十二月現在における次の統計をのせている。

土木	五〇六六千円
教育	六四九〇〃
病院	三三七〇〃
官業	一、二七二〇〃
金融	一、四三五〇〃
計	八、八六〇〇〃

(『朝鮮の保護及び併合』改編複刊による)

引続き目賀田顧問の六千万円借款論などの積極政策があつたが、成功せず、わが国の金利高もあつて明治四十一年十一月に英、仏市場において日本興業銀行が起債し(二千万円・

前章にみた通り、朝鮮に進出した日本内地銀行の支店には幾多の変遷があつた。然し五十八銀行の百三十銀行（更に安田銀行への合併や、山口銀行の三和銀行への合併などはいずれも本店銀行がそれぞれ日本金融史上大きな集中化の背景において結合していったものであり、鮮内支店銀行はそれによる単なる名称変更にすぎなかつた。然るに昭和四年一月の新銀行令実施以来の朝鮮における銀行行政は日本内地支店銀行に対しても相当大きな働きかけをみせている。この銀行令の原型はもとより昭和三年一月施行にかかる新銀行法であるが、たまたま昭和二年の金融恐慌の直後であり、同法の実施に当たっては中小銀行に対する積極的な勧奨が行なわれ、昭和三年の一、二八三行は同七年における五三八行に減少した（土屋喬雄「昭和金融史」）。このような中央の施策に順応して朝鮮における金融行政も地場銀行のみならず、支店銀行に対してもその整理改廃がすすめられるに至つた。昭和十一年二月における十八銀行鮮内支店の朝鮮殖産銀行への一括譲渡に当

場銀行とはその法的根拠を異にしていたわけである。但し後年特に戦時経済に入つてからは、「外国為替管理法」、「臨時資金調整法」、「国家総動員法」による「資金運用令」等については朝鮮支店業務に関する限り一率に総督府行政の対象となつてゐる。

## 各種銀行営業状況

(明治42年12月末 単位千円)

	店舗数	預金	貸出	備考
日本人銀行				当時の銀行全体の預金貸出
第一銀行	2	4,091	1,901	
十八銀行	8	2,156	3,234	預金 49,288 (明治40年下期)
百三銀行	5	1,789	2,772	貸出 48,508
周防銀行	1	63	124	
密陽銀行	1	10	57	
日本興業銀行	1	(32円)	7	
朝鮮人銀行	7	1,376	1,728	
農工銀行	32	1,650	4,116	
韓国銀行	14	7,631	3,755	
合計	72	18,770	17,699	

(註) 密陽銀行は日本人経営の現地銀行

第一次大戦中、外国為替業務に手を染めた山口銀行は戦後の発展策として大正十一年十一月京城支店を設け大陸進出の第一歩をふんだ。当時まで主として大阪市内に営業の重点をおいた同行が大阪以外の店舗拡充に乗り出した頃であつた。満州事変に先だつ恐慌の中にわが国銀行の一大集中期に入り、大阪の大銀行、第三十四、鴻池両行と共に合同して三和銀行となり（昭和八年十一月）、その京城支店もこれに引きつがれて終戦に至つてゐることは周知の通りである。

### 二 内地銀行支店の朝鮮における地位と特色

朝鮮における普通銀行の監督及び準拠法規としては明治四十年五月「韓国ニ於ケル銀行業ニ関スル規則」（統監府令）及び明治三十九年三月「銀行条例」（韓国勅令）がそれぞれ日本人及び朝鮮人の設立にかかるものを規制していたが、いずれも日本内地の支店銀行に関してはその適用がないことはもとより、これらを一本化して大正元年十月及び昭和三年十二月にそれぞれ制定された「銀行令」（制令）においても同様である。この点は同じ植民地においても台湾統治については大蔵大臣の主管事務とされていたのと対照的である。いずれにせよ朝鮮においては同じ普通銀行でありながら、所謂地

り、特に朝鮮総督府財務局長が次の如き声明を行なつてゐることはこの間の消息を示すものであらう。

「さきに安田銀行仁川支店が朝鮮銀行に買収せられましたが、今回又十八銀行の鮮内各支店が来る二月末日を以つて朝鮮殖産銀行に譲渡せらるることに決まりました。この事は朝鮮の金融統制上の見地よりしましてもまことに結構な事だと存じます。（中略）

然るに今や朝鮮の金融機関も著しく整備発達して鮮内の金融機関に依りても十分に地方金融の疏通に資し得る状態となり、現に十八銀行支店の殆んどすべての所在地にはそれぞれ鮮内各銀行の本店又は支店が設置せられてゐる状況でありまして此の間に伍し内地銀行たる十八銀行が支店を経営して行くことは種々なる不便を伴ひ又鮮内金融機関の統制上より致しましても寧ろこれを鮮内の他の機関に統合するのが至当であると考へられるに至つたのであります」。

（『朝鮮殖産銀行二十年志』）

即ち戦時経済に先だつ段階においても支店銀行に対して既に朝鮮総督府の行政はかなり浸透しつつあつたとみられる。さて、このような法的および行政的地位にあつた日本内地の銀行の鮮内支店は、鮮内における普通銀行として鮮内他銀行と比較してどのような地位にあつたか。

朝鮮における日本の支店銀行

これを支店銀行別にそれぞれの銀行全体の預金貸出にしろ  
る鮮内支店の地位をみると次の如くである。

十九年末における預金は三九・一九二百万円であつて貸出は  
その約四分の三にあたる二八・一九四百万円であつた。朝鮮  
における支店銀行は朝鮮において獲得した資金を日本内地に  
回金し、朝鮮経済に役立てていないという批判がしばしばな  
されたけれども、その批判は的外であつたと言ねばならな  
い。むしろ統治末期における支店銀行の預金貸出ポジション  
は全国普通銀行のそれに比して貸出の異常な膨脹が看取され  
る。

地場普通銀行の預金貸出(単位千円)

昭和 2年 3月	59,555	76,392
昭和 6年 3月	44,128	84,656
昭和 12年 3月	112,489	152,274
昭和 16年 3月	323,506	283,635
昭和 19年 3月	801,693	448,728

(註) 出所は前表に同じ

銀行の一般的動向をみれば特に著しいことではなかつた。試みに昭和十年末における我国普通銀行の預金額をみると九・八七三百万円であつて、貸出を超過すること三・七五二百万円であつた。戦時中の国債消化が大きかつたせいもあるが、昭和

第一銀行朝鮮支店預金貸出  
の同行全店対比

		鮮内支店	全 店	%
昭和 2年	預金	21,910	421,306	5.20
	貸出	7,481	321,009	2.33
" 6年	預金	24,259	687,078	3.43
	貸出	6,249	403,228	1.55
" 12年	預金	25,570	1,003,792	2.55
	貸出	16,936	566,533	2.99
" 16年	預金	52,143	2,151,132	2.42
	貸出	54,689	1,401,990	3.90
" 19年	預金	90,026	6,160,389	1.46
	貸出	96,969	4,799,751	2.02

(註) 全店統計は第一銀行八〇年史。  
編纂室の好意による。  
鮮内支店分は鮮銀統計月報。  
各年三月末現在。

まず第一銀行についてみると、他の二行に比して鮮内支店の比重が末期になるにつれて特に預金において大きく低下していることが特徴である。これは又日本内地三行鮮内支店における第一銀行の預金比重を低下させている。

支店銀行の鮮内銀行に占める地位 (単位千円)

		預 金	貸 出
昭和 2年 3月	支店銀行	47,416	23 %
	合 計	207,327	371,679
昭和 6年 3月	支店銀行	43,835	19
	合 計	232,156	451,365
昭和 12年 3月	支店銀行	44,891	11
	合 計	471,450	844,896
昭和 16年 3月	支店銀行	124,215	10
	合 計	1,230,940	1,945,383
昭和 19年 3月	支店銀行	240,928	9
	合 計	2,814,878	3,160,570

(註) (1) 朝鮮銀行統計月報による。

(2) 昭和二年三月支店銀行欄には満州銀行の支店も含まれている。  
(3) 合計欄には鮮銀・殖銀・地場普通銀行の外昭

昭和初期以来の数時点における預金・貸出からみると次の如くである。

和六年以降貯蓄銀行を含む。  
(4) %は合計に占める支店銀行の比重。

ここで気付くことは、特に預金残高において満州事変以来これは朝鮮経済の画期的発展の時期であつたが支店銀行の比重が急速に低下していることである。これは特に鮮銀・殖銀等の生産力拡充資金の供給にともなう預金創造の増加と一方において支店銀行における預金の貸出超過が漸次貸出額の預金額への接近という形になつてゐるためと思われる。上表の合計欄には註記の如く鮮銀・殖銀を含むのでオーバー・ローンになるのは当然である。ただし鮮銀は朝鮮における証券銀行であり、殖銀は債券発行による資金に依存するからである。然し、前表と同期における地場普通銀行の預金貸出をみると次の如くそのオーバー・ローンは支那事変の前後に至るまで甚しく、しかも支店銀行が預金の貸出超過の巾を少なくしてきた段階において地場銀行は逆に大きな預金超過を示すに至つてゐる。ただしこの末期の動向は戦時経済における資金供給が特殊銀行又は日本内地大銀行の手に集中され、物資統制、企業整備の段階においては、一方に貯蓄奨励による預金増加にもかかわらず、地場銀行にとつてその融資先が見出しにくいということであつたかと思われる。  
満州事変頃までの支店銀行の預金超過は地場銀行のオーバー・ローンに比してのことであつて、戦前における我国普通



## 鮮内銀行為替受払

(昭和/2年3月中)

(単位:千円)

		鮮 内		対日本内地		対 外 国		計	
			%		%		%		%
鮮 銀	受	29,922	20.8	22,326	27.6	9,268	84.7	61,516	26.1
	払	29,815	20.6	37,946	44.2	8,790	77.5	76,551	31.6
殖 銀	受	76,752	53.3	27,186	34.9	852	7.8	97,790	41.5
	払	74,837	51.7	26,206	30.5	904	8.0	101,947	42.1
地 場 銀 行	受	32,258	22.4	1,769	2.2	474	4.3	34,501	14.6
	払	30,792	21.3	3,888	4.5	363	3.2	35,043	14.5
日 本 内 地 銀 行	受	4,982	3.5	36,713	45.3	342	3.1	42,037	17.8
	払	9,144	6.3	17,724	20.6	1,285	11.3	28,153	11.6
計		743,914	100.0	80,994	100.0	10,936	100.0	235,844	100.0
		144,588	100.0	85,764	100.0	11,342	100.0	241,694	100.0

(昭和/6年3月中)

		鮮 内		対日本内地		対 外 国		計	
			%		%		%		%
鮮 銀	受	84,075	22.9	65,114	36.3	8,584	88.0	157,773	28.2
	払	84,562	26.3	49,843	43.2	19,481	74.8	153,886	33.2
殖 銀	受	202,357	55.0	40,061	22.3	304	3.1	242,722	43.4
	払	148,334	46.1	33,990	29.4	2,663	10.2	184,987	40.0
地 場 銀 行	受	64,477	17.5	5,484	3.1	4	0.04	69,965	12.5
	払	63,126	19.6	4,300	3.7	944	3.7	68,390	14.8
日 本 内 地 銀 行	受	16,185	4.4	68,635	38.2	844	8.6	85,664	15.3
	払	25,487	7.9	27,261	23.6	2,938	11.3	55,686	12.0
計	受	367,014	100.0	179,244	100.0	9,756	100.0	556,144	100.0
	払	321,509	100.0	115,384	100.0	26,046	100.0	462,939	100.0

(註) 朝鮮銀行統計月報による。

安田銀行朝鮮支店  
預金貸出の全店対比

		鮮内支店	全 店	%
昭和2年	預金	11,917	713,275	1.67
	貸出	7,083	533,664	1.33
" 6年	預金	9,010	606,518	1.49
	貸出	2,844	441,623	0.65
" 9年	預金	13,674	1,089,587	1.25
	貸出	12,388	671,201	1.85
" 12年	預金	48,484	2,349,119	2.06
	貸出	39,808	1,473,627	2.70
" 19年	預金	93,079	5,362,108	1.74
	貸出	87,517	3,244,252	2.70

一方安田銀行についても、次表の如く同行全店に比し預金において最高二%、貸出においても三%足らずのものにすぎないが、戦時経済における比重の増加は特に貸出において著しかった。この点について「富士銀行七十年誌」は、「昭和七年満州事変勃発後の混乱期が過ぎて建設期に入ると、朝鮮は満州に対する直接の兵站基地として繁栄を来し、昭和十二年頃より当行京城支店の業種は、大きな飛躍をなした」ので、更に大陸に一步を進めて大連営業所設立を企図したと誌している。

このことは同時にこの期間において鮮内支店銀行に占める安田銀行の地位はかなり高くなったということであろう。

三和銀行朝鮮支店  
預金貸出の全店対比

		鮮内支店	全 店	%
昭和12年	預金	5,645	1,263,520	0.4
	貸出	3,215	577,182	0.5
" 16年	預金	25,587	2,792,399	0.9
	貸出	24,213	1,407,979	1.7
" 19年	預金	57,823	4,928,198	1.2
	貸出	50,532	3,094,502	1.6

(註) 全行統計は三和銀行史による。  
全店預金貸出 12年の数字は6月末。鮮内支店分は同前。

三和銀行支店の事情は次表の通りであるが、「三和銀行史」は次の如く誌している。

「当行は大阪の輸出産業に關連の深かつた關係上、これが国内金融についてはもちろん、輸出金融に關しても極めて積極的な活動を行つた。大陸との物資・資金の交流が活潑となつた結果、満州に対する陸路交通の經由地として朝鮮の地位は大いに高まり、(中略)京城支店の業務を拡張強化してこれに対処した」。

(註) 全店の数字は富士銀行七十年誌による。  
昭和二十二年は年末・十九年は三月末。  
鮮内支店分は同前。



以上の如く日本内地支店銀行の朝鮮金融に占める比重は預金貸出についてこれをみる限り、比較的低かった。しかし三和銀行史の叙述にみる如く、内鮮資金交流のルートとしての比重は非常に高いものがあつたことは右表の為替受払統計にみることができる。特に戦争経済以前は朝鮮米の取引にかかる金融に伴うものが多かつたと推定せられる。

最後に逸し得ないことは内地支店銀行の金利水準である。朝鮮における金利水準は中央銀行たる鮮銀の公定歩合が常に日銀のそれに追随し、おおむね一―二厘高に定められていた。然し市中レートはこの差にとまらず遙かに高かつた。いま昭和十一年三月における鮮銀（普通銀行業務）と普通銀行の代表的な金利を示すと次の如くである。

定期預金（六カ月）手形貸		割引手形
鮮銀	四〇分	三〇銭
地場銀行	四六	三二
支店銀行	四〇	二八

当時の東京における商業手形平均レート（『朝鮮銀行統計月報』による）は最高一銭六厘、最低一銭、平均一銭三厘乃至一銭三厘七分であつた（『富士銀行七十年誌』）のに比

してかなりの高率であつた。勿論当時鮮銀、殖銀、支店銀行は甲種、地場銀行は乙種として預金協定利率においてもこの間定期預金で〇三分乃至〇五分の開きがあつたから、地場銀行の高金利は当然であるが、中央銀行たる鮮銀の普通貸出業務における金利が支店銀行のそれを上まわつていたことは奇異の念を免れない。これは必ずしもこの一時点のみの現象ではなしに昭和十二年三月、及び十六年三月をとつても貸出平均金利について〇二厘方の開きとなつている。尤も昭和十九年三月においては逆に鮮銀金利の方が〇一厘方低率となつた。思うに支店銀行にとつては元来預金の貸出超過著しく、しかも日本内地に比して非常に高い預金金利を支払いつつ、資金運用の道に乏しいためやむなく内地へ回金してはいたが、できるだけ高利廻りの現地運用をはかり、このような貸出金利の引下（それでもなお内地の大都市金利に比してはるかに高かつた）を来したものであつたらうし、支店銀行に対する資金需要が漸次増加した後もこの情性がつづいたが、遂に末期における旺盛な資金需要にあつて鮮銀貸出金利を上まわるに至つたものと解して大過ないであらう。

（終）

昭和三十三年二月稿

（朝鮮統治関係重要文献）  
金融関係資料

近代朝鮮における

普通銀行の創生と発展の過程

・・・特に地場銀行を中心にして・・・

日 浅 不 加 之

朝鮮に於ける地場銀行の設立は、明治二十九年朝鮮銀行等を端緒とするが、これらは何れも、設立後数年ならずして、閉店をしているので、事実上は明治三十二年創立の天一銀行（後の朝鮮商業銀行）を以つて始まる。

これは明治十一年の第一国立銀行釜山支店の設置に遅れること、約二十年であり、国立十八銀行の進出した明治二十三年に比しても、おくれること約十年である。

しかもこれら端緒を為した各行と雖も、近代的銀行と称するには凡そ困難な、原始的素朴的なものであり、支店銀行がとも角、人的、資本的内容を備え来つたものと比せば、凡そ格段の距離のあるものであった。

これはいう迄もなく、旧来の朝鮮経済社会には資本の大なる蓄積もなければ、企業的精神の何たるかを理解する階級もなく、これらのものの存在を希望する事情も、必然たらしめる条件もなく、荒涼貧寒たる中世的、半封建的社会のみがあ

## 一、日韓併合以前の状況

### 近代朝鮮に於ける

### 普通銀行の創生と発展の過程

・・・特に地場銀行を中心として・・・

日 浅 不 加 之

つたからということが出来よう。

又来住日本人自身が持った地場銀行は後に京城・釜山・大邱等重要都市に發生した事も、明治年間においては、まだ日韓貿易自体が、朝鮮経済社会の未成熟の爲に、早く進出し来つた、日本内地支店銀行を以つて足る状態であり、これ等来住日本人が、相当の資本蓄積を重ねた、大正期に發生をした状態であつた。

わが第一国立銀行の朝鮮進出は、実に朝鮮における銀行創生の先駆であり、又同時にそれは、近代的金融制度扶植の母胎となつたものである。その後十年遅れて進出した国立十八銀行は、日韓貿易に伴う金融業務に従事するに止まつたのであるが、第一国立銀行は別稿の如く、その後韓国々庫金取扱事務並びに貨幣整理事務を担任し、名実ともに中央銀行の地位に上つた。そして明治四十三年その地位を韓国銀行に引きついたのであるが、その間同時に永きに亘つて、地場銀行への資金的、人的援助を行ない、貧弱且脆弱なこれ等銀行の

## 目 次

一、 日韓併合以前の状況	131
二、 併合以後の状況	134
その一、 明治・大正期を経て昭和初期まで	134
その二、 終戦前の状況	145

発展を授けた事も特記しなければならない。

支店銀行各所の鮮内進出に伴ない、朝鮮人側にも漸く銀行設立の動きが見らるるに至つたが、これも近代的金融機関として出発するというよりも、寧ろ乱脈を極めていた官金出納の合理化、輸送といったような事務に重点がおかれた模様であつて、当初は政府要路者、若しくはその関係者から始められたものが多い。

例えば、地場銀行の先駆をなした天一銀行の如きも、由来朝鮮に一定の金融機関の設備がないため、政府の各種上納金が、京城府内の大商店に預けられ、商店はこれを自己の商業資金に流用するの慣例から生ずる政府の受ける損害が頻々たるに及び、この上納官金を確実に保管し、一面において外国の制度に倣い、一般銀行業務を経営するとの趣旨を以て設立されたことから見られる如く、素朴且つ原始的なものであつた。

今各地場銀行の発端を詳説すれば次の通りである。  
朝鮮銀行 明治二十九年安副寿が銀行設立の議を起し、後、発起人は二つに分かれ、安は朝鮮銀行、金宗漢は漢城銀行長となる。

明治三十年朝鮮銀行の設立認可せられ、開業、資本金十萬元（五万円）、一株五十元（二十五元）、二千株払込二千五百元。

を多く受けた。三十八年株式会社組織に変更、資本金は十五万円となり、株式会社公立漢城銀行と称した。四十年、三十万円に増資をした。

韓一銀行 朝鮮実業家の発起になり、明治三十九年設立されたが、開業以来営業余り振わず、貴族、政府要路者に経営変更をみた。四十一年、五十万円に増資をした。

しかもこれ等各行は何れも、創業数年ならずして破綻するか、或いは苦難の途を辿つてゐる。これは勿論朝鮮経済社会の発達幼稚であつたためもあり、民衆が銀行の本質を明らかにせず、それを必要とするものが少かつたためもある。民衆の経済的貧困に加えて、勤儉貯蓄の思想の少なかつたためもある。又銀行経営者は政治上の勢力者である場合はあつても、企業家的・特に近代資本主義企業家・才能が無かつたためもある。そのため、一度政府部内に勢力を失えば、銀行自体も簡単に閉店の已むなきに至つたという様なこともある。更に李朝末期貨幣・財政制度の紊乱も又、経営を安固たらしめなかつたということも出来よう。

明治三十七年、目賀田種太郎氏が度支部財政顧問として韓国政府に入つて、金融財政制度の大改革を為したが、その税制、幣制の改革、倉庫、農工銀行、手形組合、地方金融組合

明治三十一年国庫金三万八千六百五十七元余（一万九千三百二十八円余）を百円につき、月六厘の利息を以て預入を受けている。

明治三十四年、右預金全部返還と同時に事実上閉店した。  
明治四十三年銀行長更迭、漢興銀行と改称、解散を決議、欠損一万円余、所有土地家屋を売却、不足分は重役が代償して全く消滅した。

漢城銀行 資本金一万三千円、一株十円。明治二十九年度支部補助金六万五千元、年六分の利息を以て下付され、明治三十二年これを返還、三十三年破産した。

中央銀行 明治三十六年中央銀行条例頒布、創立委員の任命あり、払込徴収を始めたが、三十七年日露開戦、戦時不安に伴なり財政逼迫のため、払込困難に陥り、組織を完成することが出来なかつた。

天一銀行 明治三十二年政府及朝鮮人実業家によつて資本金二万八千円にて創立され、兌換券の発行、官金輸送の特権も附与されたが、日露戦後の恐慌に際し、破綻し、一時休業をしたが、三十九年再建が図られ、資本金十五万円を以て再発足した。

公立漢城銀行 明治三十六年資本金三万五千元の合資会社組織で出発した。銀行長李載完（政府大官後に侯爵）、副長金宗漢（政府大官）であつた。第一銀行の資金援助、事務援助

等の施設に當つて、過渡的に生じた金融逼迫の救済に、創業早々の大韓天一、漢城、韓一の各行が一翼を担つて、緩和に努力したことは、一応金融機関としての第一歩を踏み出したともいえるが、上米言い来つた如く、これ等三行とも、資本寡少、且つ経営者は業務に暗く、有名無実の虚容を露せるに過ぎず、経営は概ね不整備であり、一度恐慌に見舞われんか、経営に苦しみという極めて不安定な状態であつた。

明治三十八年、目賀田顧問が貨幣整理着手後金融非常に逼迫し、政治上の不安と相俟つて、不穩の形勢もあつた際にも、日本政府から百五十万円を、韓国政府は無利子で借入れ、これを政府は漢城、天一両行に無利子貸下げ（事実上下附）をなす等、政府は特別な援助保護を行なつてゐる。勿論その代償として、度支部の行務に対する監督条件は強化された。且つ当時韓国中央金融機関の役割りを果していた第一銀行から上記二行に事務改善指導を為さしめ、地場銀行の業務改善を図る等のことあり、大韓天一銀行には度支部並びに京城倉庫より日本人が入つて整理を図つておる。

明治四十二年度における地場銀行の営業総況を見るに、第一表の通りである。

地場銀行の総計を以つてしても、預金、貸出共に第一、十八、百三十のそれぞれに及ばず、その脆弱さに拘わらず、貸

救済をも考慮せねばならず、この二律背反が併合以来数十年の歴史を貫くところのものとなつたのである。

かかる経済の後進型、発展の困難性が、その後の金融機関をも規定した。大企業は直接日本内地金融機関若しくは鮮内金融機関中の朝鮮銀行、殖産銀行の二特銀に依存し、加えてこの二特銀を強大たらしめるものとした。しかもこれ等二特銀はそれぞれ本来の業務の外に、その強大な支店網を通じて、普通銀行業務を営んでいた。加えるに金融組合は全鮮至る処に触手を張り、殊に都市金融組合設立に依り、都市の中小商工金融に迄進出して来た。

これ等日本政府若しくは總督府関係機構の組織力、店舗網、資金動員力、吸収力、人的素材等に、当時の貧弱な地場銀行の規模、店舗網、資金吸収力、人的素材が対抗し得べくないことは明らかであつた。

勿論、總督府の金融政策に、二特銀の普通銀行業務と、都市金融組合の普通銀行業務を漸次切り離してゆくという構想もあつたと思われるが、これは客觀的事実からは、まだ実行することは不可能なことであり、これを強行すれば、却つて金融逼迫なり、金融混乱なりをまき起こしたと考えられる。

唯、かかる金融機構体制であつたため、人的、物的力を持つた支店銀行ですら、貸出は殆んど専ら対日本内地との商取引の上層金融を営むのみで絶えず預金超過となり、十八銀行

第三表

の如く昭和十一年に遂に殖産銀行に営業権を譲渡して、明治二十三年以来の朝鮮での歴史ある活動の終止符を打つたという事実もあつた。

その他地場銀行を發展せしめなかつた原因の大きいものは、朝鮮人が未だ資本主義的企業家的訓練を受けていないことであつた。経営能力を有するものも少なく、然も経営に派閥関係、情実関係を持ち込み、合理的経営を為し得ず、徒に欠損を重ね、固定債を作り、不良資産を累積した等のことも大にあつたと考えられる。これは必ずしも朝鮮人だけに限つたことでなかつたかも知れず、来住日本人に依つて創設された地場銀行に於いても、経営能力は一応別として、情実関係が持込まれ、合理的経営が行なわれずして、行詰つた事例は事実あつた。

要するに日本内地企業の延長若しくは朝鮮總督府に直接関連した大企業を除いて、総じて資本主義的訓練を受けたものが乏しかつたということは言えた。そのため、各地場銀行に、鮮・殖二行から資本参加を伴わずに人的援助のみ行なわれるという現象もみられた。

今これら鮮内地場銀行の勢力を見ると次の第三表の如くである。

第一表

(朝鮮産業誌一明治44年刊) (単位千円)

銀行名	店舗	資本金	払込資本	政府貸下金	積立金	預金	貸出金	純益
漢城	3	300	75	100	54	435	509	17
韓一	2	500	125	—	24	543	574	20
天一一	2	500	125	180	69	406	695	21
總計	7	1,300	325	280	147	1,584	1,778	58
明治41年	8	950	251	340	90	738	1,299	44
明治40年	5	400	144	340	58	784	1,156	41
日本人側普通銀行	18	—	—	—	—	8,112	8,098	839

※3,000

(註) 日本人銀行統計は「朝鮮ノ保護及ビ併合」大正6年刊による。  
※は政府貸上金

第二表

	明治四十年	明治四十一年	明治四十二年
最高	五〇	五二	五三
最低	三〇	三二	三三
平均	四〇	四二	四三
最高	五〇	五二	五三
最低	三〇	三二	三三
平均	四〇	四二	四三

(前記、朝鮮産業誌による)

二、併合以後の状況

その一 明治・大正期を経て昭和初期まで

併合以来の朝鮮経済が、その資本主義化のために努力し来つたことはいふ迄もないが、その近代化は必ずしも坦々たるものでなかつた。

しかもその資本主義化は、朝鮮経済自体の貧寒さから、どうしても、後進型・植民地型とならざるを得ず、朝鮮民族が劣弱な地位に置かることも又避け得ざるものであつた。朝鮮總督府の政策も、朝鮮経済の近代化のためには、日本内地の大企業の誘致を考えるより外ないが、朝鮮統治の目的よりは、資本主義化に伴つて競争場裡より落伍する朝鮮民族の

出金は預金を越えるという、オーバー・ローンの形はこの後長く続くところとなつた。

尚、金利について見ると第二表の通りである。



地場銀行の中で、来住日本人資本が全部か若くは大きく参加しているものは、朝鮮商業銀行（朝鮮商業銀行に合併された朝鮮実業銀行、釜山商業銀行）、大邱商工銀行等であつた。この二行は後に（昭和十六年）当局の方針により、合併を行ない、朝鮮人系の朝興銀行と相比せられることになる。一方

このために総督府は、地場銀行の整理合併を慫慂し、大正九年に二十一行を数えていたものが、昭和十一年には既に七行に集中せしめられるに至つてゐる。

これは又、昭和三年日本内地の銀行法をモデルにして、根本的改正をした「銀行令」の公布によつて、資本金二百万円以上に限定せしめられた結果、弱小銀行は他に吸収せらるるか、合併をするかどちらかを選ばざるを得ないためであろう。

尚、これまでの監督法規は、「韓国に於ける銀行業に関する規則（統監府令明治四十年）」、「銀行条例（明治三九年）」を一元化した「銀行令（大正元年）」であつた。

右表に見る通り、大正十五年頃までは、遅々としてはあるが、発展はしており、利益率、積立金も漸増していたのが、昭和に入つてから下向傾向を辿つてゐる。これは歐州大戦中好景氣に乗じて簇生したものが、戦後恐慌の打撃を受けて忽ちその脆弱性を現わし、破綻するものが相次いで現われたためもある。

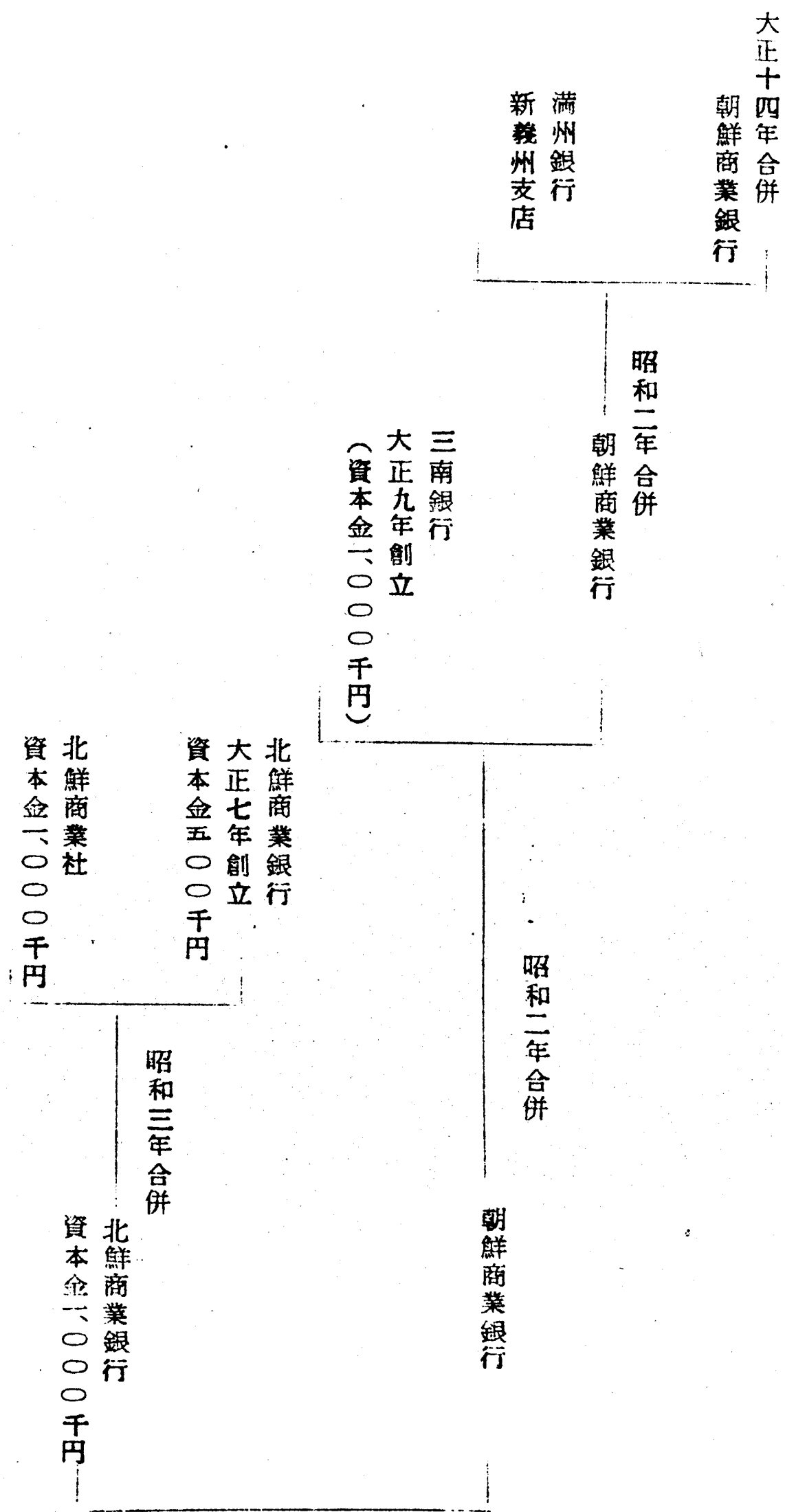
(註) 昭和十三年刊 鈴木正文著「朝鮮經濟の現段階」による。

明治三十九年	" 四三年	大正 元年	" 三年	" 五年	" 七年	" 九年	" 一一年	" 一三年	" 一五年	昭和 三年	" 五年	" 七年	" 八年	" 一一年
三	四	七	一一	一二	一五	二一	二〇	一七	一六	一四	一三	一二	八	七
二	四	一〇	一三	二〇	三〇	四四	五六	五七	五九	六五	七六	八六	九〇	一〇〇
一、二六	二七五	二、三五二	三、三一五	三、三七六	五、七六八	一四、九五〇	一六、五五〇	一六、七〇〇	一六、五二五	一五、〇五六	一四、七二一	一四、七二一	一四、三七一	一三、四八一
四〇	二一四	二六一	五〇六	六〇四	八五六	一、四九〇	二、一七四	二、七九八	三、二五四	二、三九〇	三、四六〇	三、七八八	三、六五八	四、四一九
二、三三八	一、七七九	〇、四七九	〇、五二九	〇、四八六	〇、五八五	〇、六九五	〇、五六七	〇、六〇九	〇、四一七	〇、四〇三	〇、三六一	〇、三三七	〇、三三三	〇、八〇〇
〇、四六〇	〇、五五〇	〇、二六五	〇、三七七	〇、三三〇	〇、三六九	〇、三八五	〇、四一〇	〇、三三五	〇、三一二	〇、二四二	〇、二三二	〇、一九二	未詳	未詳
三	四	四	四	三	三	三	四	五	五	四	四	四	四	三
二四	一六	一六	一五	一四	一五	一五	一六	一七	一七	一六	一六	一六	一六	六

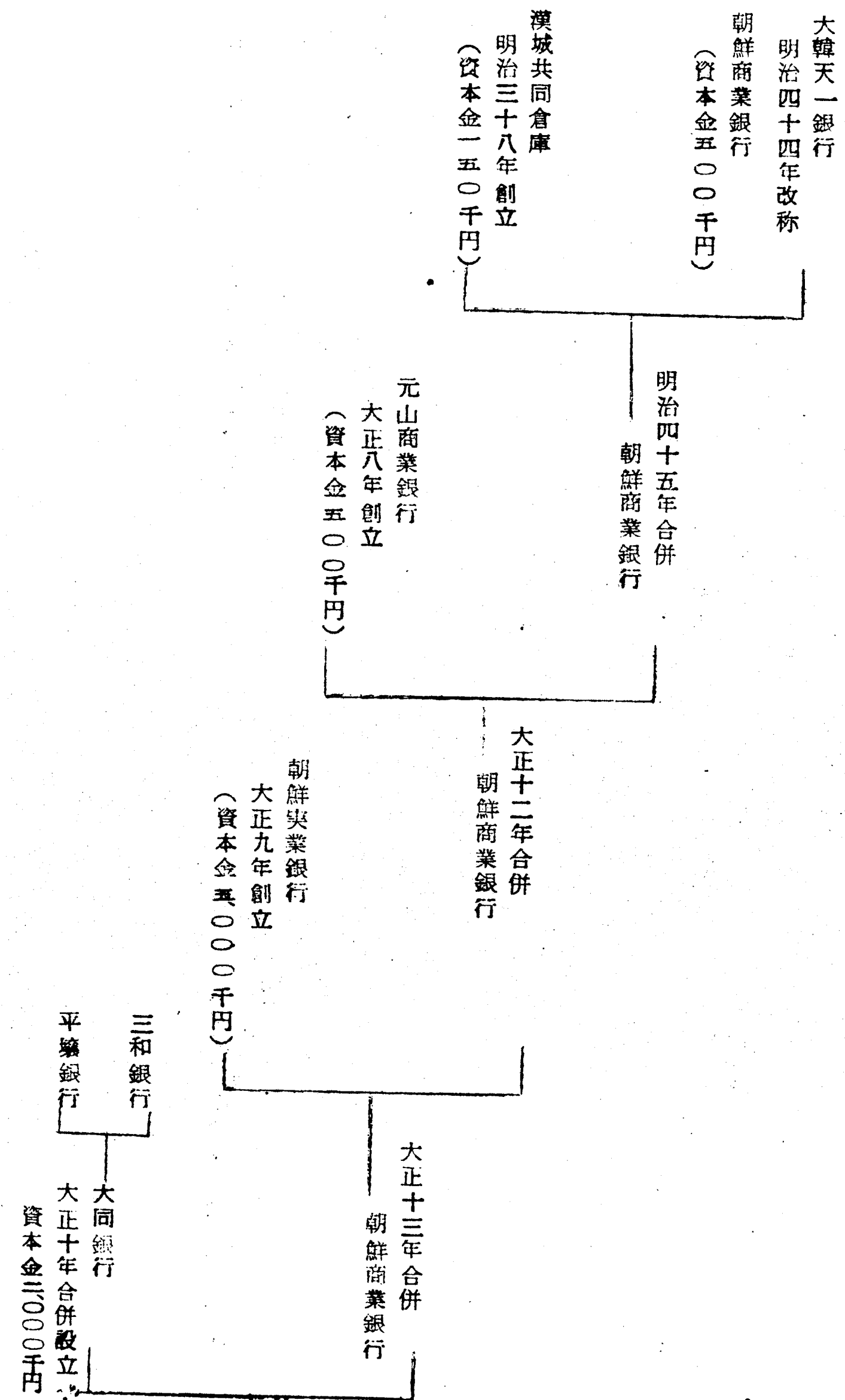
朝鮮に銀行が創生して以来の併・統合による状況を系図にあらわせば次の通りである。

朝鮮諸銀行併・統合系図表

漢城、東一、海東、湖南、慶尚合同の諸行は、朝鮮人資本によるものであり、これ等諸行は数次の合併を重ねて、遂に昭和十八年朝興銀行一行に統一せられることとなる。これ等合併は、従来個人的色彩の強かつた各地場銀行に、公的性格を強く打出させるためには、合併に依つて、個人の影響力を除くとして行く外方法がなかつたということもあろうし、又、日本人、朝鮮人のあつれきを出来るだけ止めさせようという意図もあつた。然し前者はとも角、後者は實際問題として困難な場合もあり、本来大邱に本店を有する大邱商工・慶尚合同二行の如き、地理的には合併が当然と思われるに拘わらず、小倉氏対鄭氏の感情的対立から不可能事となつたという事例もあつた。然し合併は昭和前期とは異なり、とも角銀行の公共性を打出すこと、資本主義的企業に相応しいものにすること等、近代化という線が出され、必ずしも弱小銀行の整理ということではなくなつていた。

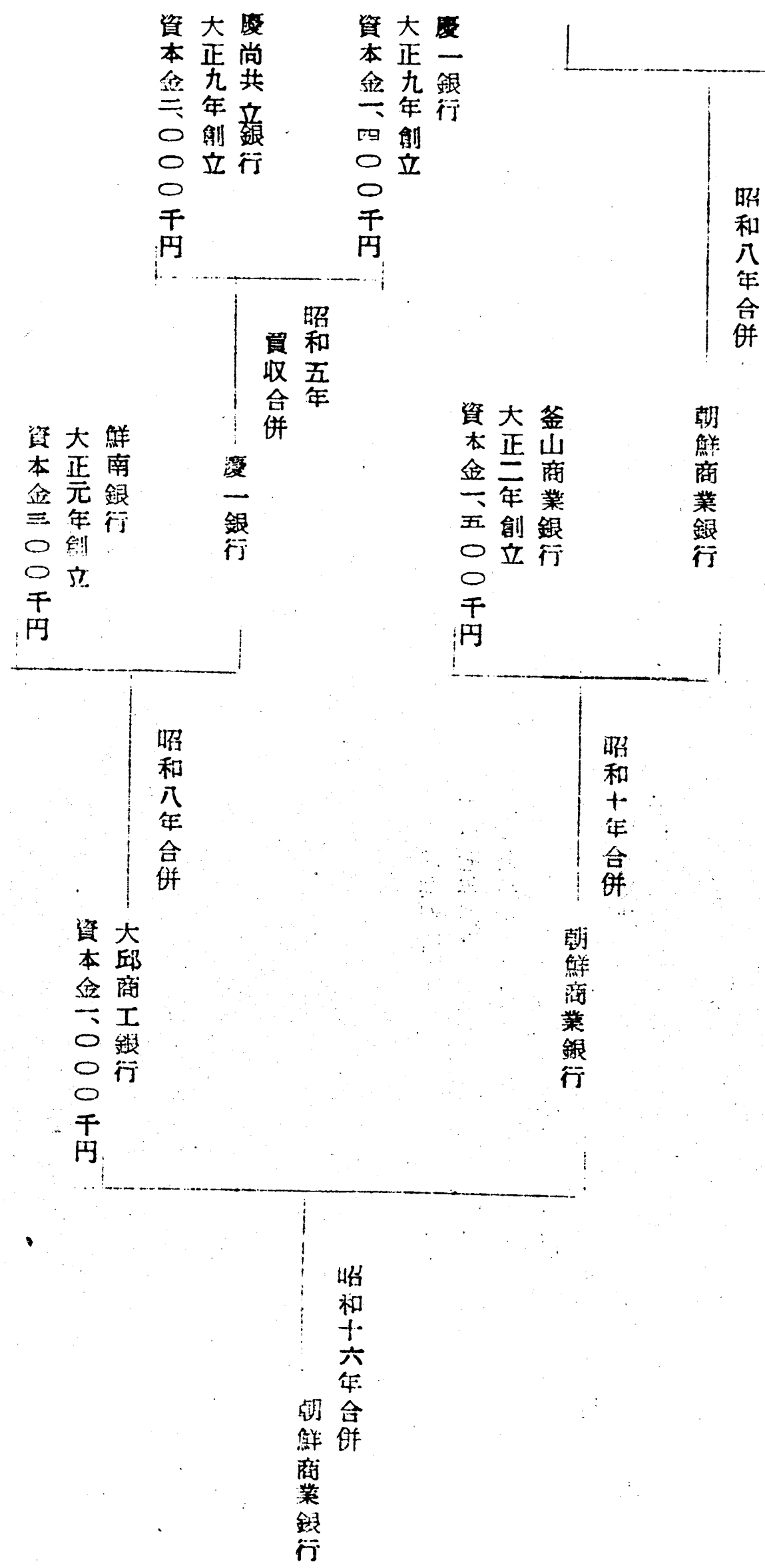
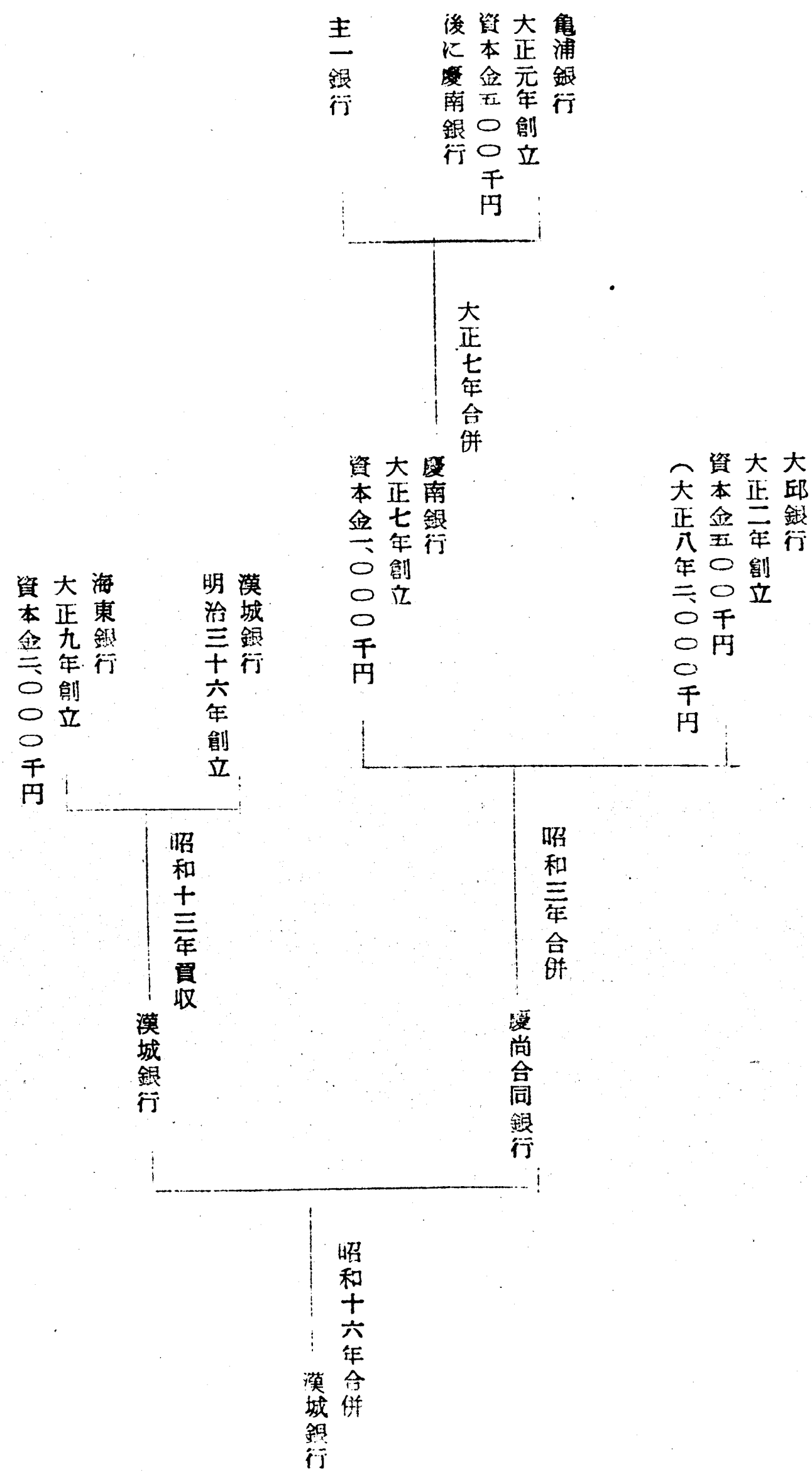


(次頁につづく)



(次頁につづく)

## 朝鮮の地場銀行



今主な地場銀行の消長の跡を追って見ると、

朝鮮商業銀行

明治三十二年設立された天一銀行がその濫觴であつて、仁川及び開城に支店を設け、業績も好調で、年二割乃至四割の配当を持続したが、明治三十六年の恐慌に際して破綻を見、同三十九年度支部並びに京城倉庫より、藤川、飯泉両氏入り整理なり再発足した。

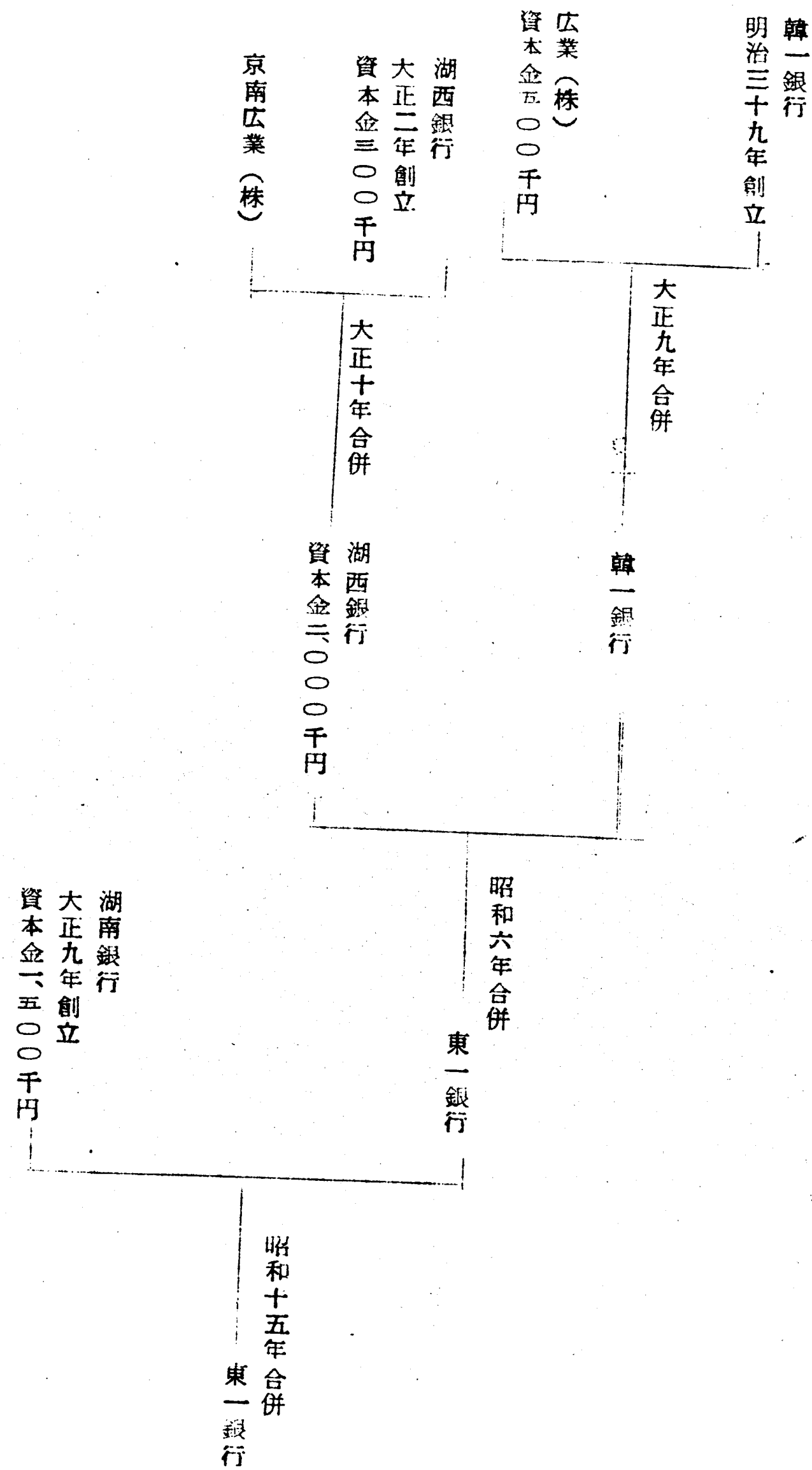
爾來相當の成績を持続し、明治四十一、二年の不況に際しても、よく積極政策を以つて乗切つた。この時資本金も五十万円に増資した。

斯くて明治四十四年、株式会社朝鮮商業銀行と改称、四十五年漢城共同倉庫を合併、資本金五十七万五千円となり、銀行業の外に倉庫業も兼営するに至つた。

大正六年資本金を百万円に、八年更に二百万円に増資、十二年元山商業銀行（資本金五十万円）を合併、十三年資本金五百万円の朝鮮興業銀行（明治三十六年創立の京城起業を淵源とする。京城銀行古城氏等京城有力日本人を以つて組織されたものであつた。）を合併、資本金を七百二十万五千円とした。この頃は欧州大戦後の恐慌のため、兩行とも相當の不良資産を擁し、その整理のため、朝鮮殖産銀行より、堀氏（後の頭取）等が派遣される等のもあつた（当時鮮銀は自

体が立直し中のため人材を割き得ない等の理由もあつたろうが、この辺、興味深い処である）。尚殖銀はこの時株式保有をした訳でもない。更に十四年資本金二百万円の大同銀行（大正十年三和・平壤兩行合併により設立）を合併し、資本金七百九十二万五千円となつた。更に昭和二年満州銀行新義州支店を、三年資本金百万円の三南銀行を、八年北鮮商業銀行（資本金百万円）を、十年釜山商業銀行（資本金百五十万円）を、同十六年には大邱商工銀行（資本金百万円）を買収し、茲に朝鮮全域に亘る支店網の完成を見るに至るのであるが、この間昭和初期には経営の辛酸を審さに嘗め、一度は減資を覚悟した整理案も樹てられた等のもあつたが、幸い客觀事情の好転と、経営当事者の努力に依つて、切り抜けられる等の事もあつた。

合併された銀行の主なるものを素描して見ると、大正十三年合併の朝鮮興業銀行（京城、本店）、昭和二年合併の三南銀行（全州、本店）、昭和十年合併した釜山商業銀行（釜山、本店）、昭和十六年合併した大邱商工銀行（大邱、本店）は何れも先述の通り、來住日本人資本が全部若くは可成りな程度に参加したものであつた。（但し三南銀行は朝鮮人株主が多かつた）。ただ朝鮮興業銀行も、三南銀行も既に任務の刷新が要請されていたものであり、釜山商業銀行も又小資本家のための金融機関として発足しながら、不況時に打撃を受け





て朝鮮銀行より泉氏を聘して整理に努力しつつあったものであった。

この点、朝鮮人系の慶一銀行、日本人系の慶尚共立銀行の合併体たる慶一銀行と、やはり日本人系の鮮南銀行の合併した大邱商工銀行（従つて日本人系の色彩が強い）が十六年当局の合併方針によつて統合せられたのとは、やや性質を異にしよう。

これに対し昭和八年合併の北鮮商業銀行（咸興本店）は朝鮮人系の銀行であつた。

#### 漢城銀行

明治三十六年創立の合資会社漢城銀行は、もともと韓相竜氏を中心となつて、同氏が洪沢栄一氏と関係深かりしことより、資金、人員、技術等において第一銀行の支援を受けて発足し、三十八年資本金十五万円の株式会社組織を改めたのであるが、その際も第一銀行は一部株式の引受けをした。大部分の株主は政府の大官、貴族であつたので、貴族銀行の称があつた。四十年三十万円の増資、四十四年三百万円の増資、その際四分の一を恩賜公債（日韓併合後朝鮮貴族に下賜された公債）を以つて応募せしめた処、その成債甚だよく、募集額の約二十倍に達する応募者があつた。（もつともこの方策は反面貴族が公債を安価に売却しつつあることを防ぐ意味も

あつたと考えられる）。尚当時漢銀の定款中に「朝鮮人に非ざれば株式を所有し得ない」という一項があつたが、これも貴族の持株を保護するために設けられたものと言われている。爾後、各地に支店を設け、大正七年東京、十一年大阪に迄進出、大正九年六百万円に増資し、この際株主を朝鮮人以外にも広げ、特に韓相竜氏の渉外力で、株主預金者は朝鮮人以外にも広げられたのであるが、（昭和七年当時、内蔵頭一、〇〇〇株保有のことあり尚日本内地預金は一時六、〇〇〇千円あつた）大正九年の恐慌、同十二年の震災の影響等で取引先に破綻を示すものあり、且韓相竜氏の如く朝鮮人間では経営力あるものと見られた人に於いてすら、派閥情弊等の悪氣流を断ち切り得ず、遂に経営を近代的合理化することが不可能であつたため、遂に多くの固定貨を繰するに至つた。この間整理のため東拓より不動産担保にて、融資を受ける等のこともあつた。

ここに於いて抜本的整理を図るため、大正十五年朝鮮銀行より同行の釜山支店長堤氏を専務として迎え、総督府よりも無利子の貸下げを受けて整理に努めたが、昭和二年遂に半額減資を断行、資本金三百万円とし、東京、大阪支店は撤廃、頭取韓相竜氏は退任することとなつた。その後業務経営は殖銀に委託せられ、株式も殆んど過半数（六万株中の二万八千株）を殖銀が所有する処となつたのであるが、これも又株主

銀行と改称した。株主は朝鮮人であり、経営に苦心をしたことは、やはり朝鮮、漢城と軌を一にし、後に鮮銀より井口、和田氏等が入つて刷新を図つてゐる。

尚、昭和十五年湖南銀行（光州、本店）を合併したが、當時湖南銀行は業績別に悪くなく、主脳部玄氏等は必ずしも賛意を表していなかつたのであるが、上來述べ來つた如き総督府の政策もあり、結局これを肯んじ、合同した。

#### その二 終戦前

終戦前数年は、併合以来二十有余年の歴史を大きく変貌せしめた。もつともこの変貌も地場民族経済の発展には、どの程度の影響を与えたものであるかは、その評価を各様にするであらう。

然し戦争末期にはとも角、地場民族資本による軍需産業も生まれた。中小産業、農、林、水産等の原始産業も、膨大な戦時需要によつて、たとえ低価格に抑えられていたとしても、所得が伸長したことは否むべくもない。更にこれ等各種資源の貨幣化のみならず、その膨大な人的要素も又、直接戦力の強化という形より、各種産業へ動員せられ、労銀所得の増嵩も又、画期的であつたのである。

下落のため影響を受ける朝鮮貴族を救済せんとする政治的意図が可成りあつたものと見られる。斯くて昭和十一年殖銀より伊賀氏が入り、専務となり、後に林、野田氏等が入つて頭取となつた。（本来中央銀行でない殖銀が資本参加をしたのは、有實殖銀頭取の個人的色彩が強く出された政策と見られなくもない）。この間昭和十二年、同じく旧朝鮮貴族尹徳栄子等によつて大正九年創立されたが、営業不振であつたため、経営陣を更新（金季洙氏入る）業務を刷新しつつあつた海東銀行を買収した。

更に昭和十六年当局の勧奨により慶尚合同銀行を合併したが、同行は朝鮮人系の大邱銀行（大邱、本店）。日、鮮系の慶南銀行（釜山、本店）の合併せる銀行であつて、朝鮮商業銀行が大邱商工銀行を合併した時と頃を同じくする。これは先述した如く慶尚合同銀行が大邱商工銀行との合併を肯んじなかつたためである。

#### 東一銀行

明治三十九年創立の韓一銀行の後身である。四十一年五十万円の増資、大正四年経営隆盛、悲境に陥つたが、行務を刷新、大正八年百五十万円の増資、大正九年広業株式会社（資本金五十万円）を合併、昭和六年湖西銀行（本店、礼山・資本金二百万円）を合併、資本金四百万円となり、この時東一

(第五表)

地場銀行の鮮内銀行に占める地位

(単位千円)

		預 金	比率	貸 出	比率
昭和 2年3月	支店銀行	47,416	23	29,270	8
	地場銀行	59,555	29	76,392	21
	鮮内銀行計	207,327	100	371,679	100
昭和 6年3月	支店銀行	48,835	19	17,628	4
	地場銀行	44,128	28	84,656	19
	鮮内銀行計	232,156	100	451,365	100
昭和 12年3月	支店銀行	44,891	11	32,540	4
	地場銀行	112,689	27	152,274	18
	鮮内銀行計	417,450	100	846,696	100
昭和 16年3月	支店銀行	126,215	10	118,688	6
	地場銀行	323,506	26	283,635	14
	鮮内銀行計	1,230,940	100	1,956,383	100
昭和 19年3月	支店銀行	240,928	9	235,018	7
	地場銀行	801,693	28	468,725	15
	鮮内銀行計	2,814,878	100	3,140,570	100

- (註) 1. 朝鮮銀行統計月報による。  
2. 鮮内銀行計欄は鮮銀・殖銀・支店銀行・地場銀行の外、昭和六年以降は貯蓄銀行も含む。

昭和 32 年 5 月 稿 (終)

勿論かかる戦時経済に対処した、鮮内戦時金融機構は、鮮・殖二特銀を中心とした、生産力拡充資金供給機構と、日本内地に本拠をおいた戦時金融機関の活動に俟ち、普通銀行は物資統制、企業整備等のために融資先を見出すことは困難となり、貯蓄奨励に伴う預金吸収機関となった。

これ迄実に二十数年オーバ・ローンを重ねて来た地場銀行が、遂に預金超過となったのは、この時期(昭和十六年以降)に於いてであり、従来とかく堅実さを欠いた内容が堅実なものとなったのもこの時期である。

更に又特記せられるべきは、日本内地に本店をもつ支店銀行の預金の貸出超過の巾を少なくして来た段階に於いて、地場銀行が逆に大きな預金超過を示したことである。

総督府の金融機構に対する政策も、鮮銀の中央銀行化、殖銀の長期金融機関化に重点はあつたが、普通銀行業務分離については、遂に時局の要請上、暫くこれを見送らざるを得なかつた。唯、鮮銀の中央銀行化の一端として、漢城銀行から殖銀が手を引き、(昭和十八年)同行は鮮銀の指導下に入るという事例が見られた。

当局の銀行合併政策も頂点に達し、曾ては二十一行を数えた地場銀行も、朝鮮商業銀行並びに朝鮮銀行(漢城・東一両行が昭和十八年合併資本金九百二十五万円)の二行に統合さ

るに至つた。そしてこの合併の際、日銀より岩坪氏が聘せられて頭取となる。これは戦時下金融機関統合の時局的要請であつたものといへ、反面又、朝鮮銀行、朝鮮殖産銀行の両特殊銀行と金融組合に挾撃せられ、一方地盤とする中小商業者は日本内地に比し、遙かに脆弱な客観条件を持つ地場銀行苦難の歴史の辿り着く処であつたろう。両行とも運営の中心は鮮銀、殖銀等より派遣された日本人によつて握られ、朝鮮人は概ね経営陣にその名を連ねるのみであつたことは、彼等朝鮮人の先覚者と雖も、真の近代金融機関人たることが如何に困難たりしものを物語るものであつたとも言えよう。然し、経営の中堅陣にはもとより既に朝鮮人が参画し、次代の金融機関人としての訓練を経つたあつて、これはその後、日本の引揚げによつて遺された一つの遺産となつたことであらう。

かくて戦争という不幸な事態がなく、朝鮮経済がその後進性を脱却して行つたならば、多年問題であつた金融機構の問題も漸次あるべき姿に落着いたと思われるのであるが、遂にその事態に到らざるまま、終止符を告げざるを得なかつた。それは結局、金融は決して無理を好まず、短時間の中に大きな変化をすべきでないという総督府の施政施策の現われでもあつたろう。

この相川・日浅氏の原稿は、鈴木武雄先生が企画して下さった「朝鮮財政・金融発達史」の編集計画の中、「朝鮮に於ける普通銀行」について執筆を願ったものである。当時はまだ朝鮮関係の資料は殆んど散失していて、これだけ調査して頂くことは大変なことであつた。私達が、この編集計画に先行して、重要文献の積極的収集を意図したのも、実はこのためであつたが、このような状況の中で、この原稿は既に昭和三十三年に頂いたものである。御執筆当時の御苦心と御厚意とを深く感謝する次第である。（近藤）

・ 両 氏 略 歴 ・

相川 尚武氏

昭和十三年東大法学部卒・同年朝鮮銀行に入り、調査部、本店営業部等歴任、昭和二十年引揚げ。現在、日本開発銀行地方開発営業部長企画部長。（四十九才）

日浅 不加之氏

昭和八年京城高商卒業・同年朝鮮殖産銀行に入社、調査部、釜山支店等に勤務。昭和二十年引揚げ。現在、安田信託銀行検査役。（四十才）

（朝鮮統治関係重要文献）  
金融関係資料

朝鮮殖産銀行

上 原 理 夫

朝鮮における財政金融の面で朝鮮殖産銀行がどんな役割をはたしてきたか、朝鮮に何をプラスしてきたか、その機能をどういう方面に果たしてきたかを考察するに当つて次のように結論されるのではないだろうか。

朝鮮殖産銀行は朝鮮總督府の施政方針をそのまま、金融面から半官半民の特殊金融機関として支持し実行してきた。もちろんその諸政策に即応するに当つても、不動産金融という制約から、協力にも大小の差のあつたことは否めないが、広汎な分野にわたつて常に緊密な接触を保つてきた。従つて植民地の特殊銀行という立場から、その業務分野は、単に不動産金融に止まらず、工業金融にも、普通銀行業務にも、その大きな役割を果たしてきたのである。その顕著な例としては朝鮮の農業特に産米増殖計画、北朝鮮の工業特に日本高周波重工業にその機能を傾倒してきた。ここに總督府の施政方針にこたえた営業のあとを辿ることによつてその朝鮮において果たした役割を回顧してみよう。

朝鮮殖産銀行

上 原 理 夫

目 次

一、設立前後の事情	152
(1) 拓殖銀行設立に関する請願	
(2) 度支部長官の声明	
二、政府の保護及び監督	157
三、業務の概要	158
行政・教化・衛生・交通運輸・農業・土地改良・水利事業・林業・畜産・工業・水産・電気及び瓦斯・醸造・土木・鉱業・商業・土地家屋・旧債整理	
四、付 表	187



## 一、設立前後の事情

明治三十九年以来順次鮮内各地に設立された農工銀行の資金は、金融組合を通じて鮮内各地に普及したが、朝鮮總督府施政諸般の進展と政情の安定に伴う殖産興業の振作に対処するためにはなお不十分の点多く、早くも朝野の間に一大拓殖銀行を設立すべしとの論議がおこり、明治四十三年十二月京城日本人商業會議所は、左のような請願書を当局に提出した。

### 拓殖銀行設立に關する請願

朝鮮啓発上施設をなすべきもの多端なるべきも、殖産興業をはかり、その富力を増進するより急なるはなし、而してこれを遺憾なく發達せしめんと欲せば、自然資金の融通を円満ならしむるを以て最良の策たるを信ず、先に本会が特殊銀行の設立を請願したるも、またこの理にはかならず、目下朝鮮における殖産興業にかんする金融機關をみるに、東洋拓殖金融部及び農工銀行等ありて、表面何ら不便なきに似たりといえども、東洋拓殖会社金融部は、資金の供給に窮屈なる制限あり、その貸付範圍極めて狭小にして、現時の要求に應ずべくもあらず、各地農工銀行また、ともに微力にして融通を与えおるもの

わづかにその一部に止まり、金融機關としてこの殖産興業界に貢獻する乏しきを免れず。その他韓国銀行以下多數の商業銀行あるも、これらは、到底長期にして低利なる融通をなし難わざるの狀態にあり。今や併合に伴い内外人の大いに朝鮮の殖産興業に着眼し、地に土地買収等に着手するものあるにいたり、益々發展の急を告ぐるの時に際し、完全なる拓殖銀行の設立を見ざるは、朝鮮啓発上の一大恨事なりといふべし。よつてこの機會において確然たる拓殖銀行を新設し、以て時勢の要求に應ずるは、こぶる時機に適したる処置なりと信ず。

右本会の決議によりここに請願仕候也

明治四十三年十二月十五日

京城日本人商業會議所

会頭 山口 太兵衛

當時朝鮮産業經濟の發展に伴いその總生産物額は累増して、大正五年三億七千四百余万円に達したが、これに対し農工銀行の長期貸付總額をみると三百五十六万九千余円で、わずかに百分の一にも及ばなかつた。従つて朝鮮殖産銀行設立の要望は、これら諸原因に發足するものであつて、各行分立の弊を改め、農工銀行を統一して一大銀行を設立し、本店を

半島財政經濟の中心地京城におき、資本金を増加して低利の産業資金を豊富に供給し、銀行の設置されてない地方には支店、出張所を新設し、併せて普通銀行業務を営み、以つて朝鮮經濟の發達を期すべしとの輿論が官民有力者の間に抬頭するにいたつた。

かくて殖産銀行の設立の要望は除々に高まるとともに、當局も早くからこれが實現につき鋭意調査研究を進めていたが、時あたかも多年の懸案であつた東洋拓殖株式会社が、大正六年十月本社を東京に移し、京城を支店と改めるに及び、兩者の業務分野も自ら定まることになつたので、ここに各農工銀行を合併して朝鮮殖産銀行を設立する機運熟し、これが準備法規たる朝鮮殖産銀行令は、時の朝鮮總督長谷川好道氏により、大正七年六月制令第七号を以つて公布施行せられると同時に、時の度支部長官鈴木穆氏は次のような声明書を發してその設立の理由を明らかにした。

### 度支部長官の声明

朝鮮殖産銀行

今回制令第七号を以つて朝鮮殖産銀行令を發布せられたるが、同銀行は即ち現在朝鮮各地に分散する六農工銀行を統一合併し、同時に資本を増大し、朝鮮の殖産上重要な金融機關として成立するものにして、今その設立趣旨及び順序綱要を説明せむとす。

併合以来諸般の施設は着々としてその歩武を進め、殊に産業の發達は実に顯著なるものあり。今試に主要農産品に付、之を觀察するに明治四十三年の總生産額一億五千万円にたいし、大正五年は三億一千五百万円に達し、殆んど倍額以上の増進を示し、就中農産副業の進歩は刮目見るべきものあり。また水利事業の如き、比年各地に大小の計画を見、現在水利組合十四、その蒙利面積三万町歩にして、これに投せられたる資金は実に四百万円の巨額に上り、また林業に至りては併合以来造林面積十二万二千町歩、この投資二百五十万円と積算せらる。その他水産業、鉱業、商工業等一々ここに繁榮をなさずといへども、併合後數年間、真に隔世の感あらしむ。

そもそも朝鮮の農工銀行は明治三十九年六月より漸次各地に設立せられたるものにして、政府はその株式を引受け、あるいは多額の貸下金をなし、その營業を保護し、現今本店六、支店四十一を各地に分布し、設立以来農工資金の供給と併せて商業金融の任に當り、金融機關の全然欠如したる朝鮮において、あまねく金融の利便を理解せしめ、殊に朝鮮農民の如き、從來疲憊の極に達したるものにたいし、進みて資金の融通をはかり、扶掖誘導、只管その向上發展につとめ、以つて産業興隆の素因を与え、經濟思想の喚起に寄与するところ尠少ならざるもの

あり。然りとはいえども、その擁する資本額は、各行合計僅に二百六十万円にして、創始の時に適応の施設も、今はすでに時代の推移におくること遠く、如上産業發達の状態を對比し、且最近經濟躍進の趨向にかんがみ、さらに之を戦後来るべき大勢に想到して、うたたその勢力の微弱なるを思わざるを得ず。依てここに農工銀行組織の根本に革新を加え、農工銀行分立の制を改め、これを統一して一大銀行となし、朝鮮全道の資力及び信用を一団として内鮮兩地よりあまねく資本を蒐集し、材能ある理事者をあけてその管理を委ね、以て半島將來の經濟に貢獻せんとす。

一、農工銀行の資本金は各行を通計して二百六十万円なるも新銀行はこれを増大して一千万円となせり。

二、農工銀行の株主は營業区域内に一年以上住所を有する農業者に限りたりしも、前号の如く資本を増大せし結果、あまねく株主を求むるため、この資格制限を撤廃して、帝國民は住所及び業態にかかわらず、株主となることを得せしむ。

三、債券の發行能力は、従来払込資本の五倍なりしも、これを払込資本額の十倍に拡張せり。即ち新銀行の第一回払込資本金は四百万円なるを以て、成立の曉には、必要に応じ四千万円まで債券を發行し得るものとす。

付をなし得ることに改めたり。

(5) 新たに公共団体の債券または朝鮮において拓殖事業を営むことを目的とする会社の社債券の広募または引受の業務を加えたり。

(6) 新たに信託の業務を認めたり。

(7) 東洋拓殖株式会社または日本勸業銀行の業務を代理し、且、この場合においては債務者のため、その債務の保証をなすことを得せしめたり。

五、従来、農工銀行重役の就任には、なんらの制限なく、却てその支配人はすべて總督府の推薦によるべきこととなり居りしも、今回は全然これを改め朝鮮銀行その他特殊銀行の例により、新銀行の頭取及び理事は、朝鮮總督之を任命し、且、政府は特に監理官を置き、業務を監視せしむることとし、以つて國家的機關たるの實を明らかにせり。

右のほか手形割引または当座貸越の如き普通銀行に属する業務は、未だ地方に金融機關の普及せざる朝鮮の現状に照し、これを継続せしむるの必要あるを以つて依然これを認めたり。

殖産銀行設立委員は、近く總督より任命せられ、設立事務を開始し、農工銀行株主にたいして、その払込金額に応じ、均一に殖産銀行株を割当て、その残株式は、こ

四、農工銀行の法定業務は不動産を担保とする農工資金、農産物及び或種の有価証券にたいする放資のみなりしも、かくては産業奨励上遺憾少なからざるにより、營業の種類及びその範圍を左の如く拡張せり。

(1) 従来、不動産を担保とする貸付は、その用途を農工資金に限りたるも、いやくも産業の發達に必要な資金は不動産及び不動産上の權利を担保として貸出すことを認め、且年賦償還の年限は二十年以内なりしも、三十年に延長せり。例えば地上権、永小作權その他固有未墾地利用法に基く權利等を担保として貸出すことを得るものとす。

(2) 新たに漁業権及び財団を担保とする貸付を認む。

(3) 従来、産物担保の貸付は朝鮮の産物に限りたるも、かくては産業に必要な材料等にたいし、融通を与えること能わさるの憾あるにより、今回は朝鮮産物担保のほか、朝鮮の産業上必要な貨物を質とする貸付を追加せり。

(4) 従来、有価証券に対する貸付は、朝鮮において農業または工業を営むことを目的とする株式会社株券またはその社債券及び倉荷証券に対する貸付に限りたるも、今回その範圍を拡張し、ひろく國債証券または朝鮮總督の認可したる有価証券にたいし、貸

れを公募（公募条件等は設立委員において決す）するものとす。次いで第一回の払込を終り、創立總會を開き、設立事務を完了したるときは、ここに朝鮮殖産銀行の成立を告げ、これと同時に、各農工銀行は当然解散するの順序なり。而して朝鮮殖産銀行成立の時期は新株式募集の都合により、確實に予定し難しといえども、遅くも十月一日までには、これが成立を見ることを得べし。朝鮮殖産銀行の本店は、現在の漢湖農工銀行建物を以つてこれにあて、地方所在の各農工銀行本店（五）はこれを新銀行の支店とし又現在の支店（四十一）は新銀行の支店、若くは出張所として、そのまま継続して營業を開始することとなるべし。

かくて殖産銀行成立の上は、直ちに農工銀行の權利義務の一切を承継することとなり、従来、農工銀行の擁する固滞貸の整理については、政府は殖産銀行にたいし、低利資金の融通をはかり、これが運用の利益により、以つて整理を遂げしむる計画なり。これを同時に、政府は殖産銀行株主にたいし、設立後五年間は年七分の利益配当を保証し、以つて新銀行株主の利益を確保せむとす。

かくの如く従来地方に分立したる微弱なる農工銀行はここに統一せられ、一大勢力となり、さらに朝鮮銀行と資金の關係上、充分なる連絡を保持し、また東洋拓殖株

式会社にたいしては、不動産金融上密接なる関係を有するほか、主として殖産銀行債券の引受をなさしめ、尚進みて日本勸業銀行との関係においては、代理貸付の方法によりて同銀行の豊富なる資金を朝鮮に招致し、以つて殖産資金を潤沢にする等、新銀行活動の範圍は裨々余裕を存し、その前途は実に洋々たるを觀取し得べきを以つて、從來各農工銀行の成績において多少の遲延あるを認むるも、一旦統一せられたる上は、等しく前序の如き利益の中に包容せらるる次第なるを以つて、各農工銀行の株主は大いに意を安んじて可なり。これを要するに、朝鮮殖産銀行の設立は、時勢の要求に順応して、益々朝鮮産業の開発を促進せむとするの目的にはかならざるか故に、從來農工銀行設立の沿革にかんがみ、その株式の募集、及び今後資金運用に当りても、常に朝鮮農民の利益を擁護し、且、その助長をおこたらざるはもちろん、あまねく内鮮人にたいし金融の利便をはかり、彼らをして同心協力、以つて本府の施政方針に適応して殖産興業を挙げしめんことを期す。

朝鮮殖産銀行の株式二十万株は、うち六万三千五百九十七株を農工銀行株式に割当て、残余十三万六千四百三十三株を一般公募することとなり、大正七年七月十六日より同十八日まで

を申込期間として内鮮各地で募集を開始した。当時内地經濟界は欧州大戰の影響を受けて産業の勃興に伴い資金の需要漸く増加の傾向にあり、貿易は依然として出超を持續し全般的股賑は物資の需要と相まつて、諸物価の騰貴を促して經濟の伸張顯著なるものがあつた。一方内鮮も農産物は豊作の上に穀価の値上りあり、經濟界は好況の一途を辿る等、極めて有利な時機であつた。当行の株式が単に日本内地、朝鮮のみならず、ひろく滿州からも好感を以つて迎えられ、応募株数二千五百七十一万九千五百九株、口数二万一千四百口、このうち優先募入の取扱ひをした農工銀行株主の申込株四万九千四百一十一株、四百四十八口を差引いた残株八万六千九百九十二株にたいする一般応募申込は二百九十五倍強に達した。かくして株式の募集は予期以上の盛況裡に終了、ついでこの割当募入方法を決定し、八月八日第一回株金払込の通知を發し、同月二十六日終了、九月十日各株式引受人及び株式の割当を受けた旧農工銀行株主にたいし創立總會開催の通知を發送した。

大正七年十月一日朝鮮殖産銀行創立事務所であつた漢湖農工銀行において創立總會を開き、山県設立委員長より当行設立にかんする事項の報告をなし、定款の設立費用にかんする条項三万円を五万円に変更、並びに設立事項報告調査にかんし検査役の選任並びにその報告を是認し、つづいて理事候補

者及び監事が委員長指名の下に選舉並びに選任された。

かくして創立總會を終り、朝鮮殖産銀行の成立をみたが、朝鮮總督は即日三島太郎氏を頭取に、有賀光豊、中村光吉、桜井小一、朴泳孝の諸氏を理事に任命した。設立委員長は直ちに一切の事務を頭取に引渡し、同時に各農工銀行を解散して、その權利義務を朝鮮殖産銀行に承継し、漢湖農工銀行本店を朝鮮殖産銀行本店とし、その他の各農工銀行本店を支店として開業、翌二日には新銀行の設立登記をなすとともに各農工銀行の解散登記を終了した。また普通銀行業務に属する貸付及び当座貸越並びに諸手形割引については同日付を以つて朝鮮總督の指定を受け、ここにその陣容は整えられたのである。

## 二、政府の保護及び監督

当行は朝鮮殖産銀行令という特別法にもとづき政府当局幹旋の下に設立され、朝鮮の産業開発にかんする金融上の使命を遂行することをその使命とした。かくて当行は、一面種々な保護と特典を与えられると同時に、他面嚴重な監督を加へることによつて業務運営上遺憾なきを期した。

当行の使命とする金融は、その性質上多くは低利で且つ長期でなければならないので、普通の預金では資金として不適

当、ために一定の限度により債券を發行する特典を認められ、この發行による資金を産業及び公共金融の資金に充当する。大正八年六月第一回債券發行以來昭和二十年三月末まで回を重ねて、その發行高九六八八九〇、五〇〇〇円の多額に上つてゐる。

当行株式のうち、政府の所有に係る六千五百九十八株にたいしては、第一回払込にあたり、特に金額の払込をなして資本の充實をはかり、右株式は設立初期から十五年間利益配当を免除された。また大正九年四月当行増資に際し政府は割当新株式一万三千百九十六株については引受権拋棄を認め、当行はその株式のうち一万株は額面以上の価格で公募し、株式の額面をこえる金額は積立金に繰入れ、二十三万六千円の利益金を同期の積立金に加算計上した。このほか特典としては、株主にたいする利益配当の保証があつた。当行はその使命にかんがみ設立当初には利益の少ないことが予想され、その上農工銀行から引継いだもののうち相当整理を要するものあり、且つ農工銀行株主の利益を擁護する上からも配当保証の必要を認め、利益配当金が政府所有株以外の株式にたいし年七分の割合に達しないときは、設立初期の末日から五カ年を限りこれに達する金額の補給を政府から受けることができた。ただしこの特典により当行が実際補給を受けた金額は創立初期の三万九千八百余円と、その翌期の四万三千円計八万二千八



百余円に過ぎなかつた。

当行の債券発行にたいして特に低利の条件で貸出の取扱いをする必要がある場合に、その資金源として大蔵省預金部に当行債券の引受けを依頼し、この援助によつて預金部の引受けた額は二億一千八百二十二万一千五百円の多額に上り、本資金が産米増殖計画による土地改良事業をはじめ、その他公共事業の資源となつて朝鮮産業発展の素因となつたのである。右のように当行は政府の保護を受ける一面、政府の厳密なる監督下にあり、朝鮮総督は当行の業務を監督して重要事項については総督の認可を受け、総督の任命になる監理官の監督下に業務の運営に任じてきたのである。

### 三、業務の概要

当行は朝鮮殖産銀行令または同令にもとづく朝鮮総督の命令の下に営業し、その業務は大別して産業金融、公共金融および普通銀行業務の三種があつた。また道金庫並びに府金庫として各道・府費の出納を取扱い、なお日本勸業銀行の代理店として同行発行になる債券の鮮内一手売却並びに付随業務をも取扱うほか、昭和四年朝鮮貯蓄銀行設立と同時に同行と代理店契約を締結して貯蓄銀行代理店業務を行なう等、営業の範囲は極めて多方面にわたり、単に産業、公共等の長期

金融に止まらず、商業金融並びに実質的には貯蓄銀行業務をも経営した。また朝鮮金融組合連合会にたいしてもまとまつた額の資金を供給することによりその所属組合の需要資金を供給するので、間接には都市、農村における庶民金融をも営み、その営業はまれにみる広範囲なものであつた。これは一に朝鮮経済の特殊性というが、その後進性に基因するもので、このような広範囲にわたる総合的経営によつて、はじめてその産業発展に即応することができたのである。

産業及び公共金融は当行の主要業務で、その取扱う貸付は五十年以内の年賦償還、または五年以内の定期償還、債券または社債券の応募または引受の方法によるもので、その貸出は概して長期にわたつた。

産業貸付は朝鮮殖産銀行令第十六条第一項第一号乃至第三号にいう、

一、五十年以内の年賦償還または五年以内の定期償還の方法により不動産上の権利を担保とする貸付。

二、五年以内の定期償還により漁業権を担保とする貸付。

三、法令の規定により設定したる財団を担保とする一の方法による貸付。

であつてつまり不動産、不動産上の権利、各種財団もしくは漁業権を担保とする抵当貸付に外ならない。もともと産業金

三、金融組合、漁業組合その他非営利産業法人にたいする

二の方法による無担保貸付。

四、同令第二十七条の規定による他銀行または会社の業務

代理による貸付。

の総称であつた。

融は、資金が長期にわたつて固定し、その利潤も概して薄いのが普通なので、一面その用途は最も厳密に調査をなし、資金の有用な活動に資するとともに、他面その担保となるべき物件は長期間にわたり債券を確実に担保するものでなければならぬ。しかもこの種金融は、必然的に担保物件の経済的価値を判断する鑑定事務と権利の保全を目的とする不動産登記事務を伴うもので、貸付額は鑑定によつて決定をみるのであるが、その額は朝鮮殖産銀行令により鑑定価格の三分の二以内に限定されていた。

農耕地にたいする鑑定価格は抵当物の純収益を基礎とし、各地方における個々の抵当物に適應する還算率を以つて還元したいわゆる収益価格にもとづき、これにその所在位置、状況、売買価格の実例およびその市場性を較量して定める。従つて鑑定価格はその地方における時価との間に、いくらかの開きがあるのは当然である。

公共貸付は朝鮮殖産銀行令第十六条第一項第四号乃至第六号にいう

一、農業者または工業者十人以上連帯して債務を負うもの

にたいする五年以内の定期償還の方法による無担保貸付。

二、公共団体にたいする五十年以内の年賦償還または五年以内の定期償還の方法による無担保貸付。

蔵省預金部資金の貸付はこの方面に集中されていた。

当行資金のうち大蔵省預金部引受による低利資金は、九割余を公共貸付資金に充當されて、零細な資金の農村還元の一助に資するとともに、開発資金である公共貸付資金の根幹を



なしていた。大蔵省預金部低利資金貸付金を用途別にみると水利事業資金約四割を占め、以下金融組合資金、土地改良資金、米穀応急資金の順となっていた。これを借主団体別にみると、公共団体にたいする貸付は六割に当り、以下非営利法人、十人連帯貸付の順序で、結局産米増産計画関係資金が用途別でも借主別でもその過半を占めていた。

公共金融は結局産業開発事業の根幹とも称すべき公共的事業にたいする融資であつて、当行の融資によつて数多くの公共的事業が遂行され、これが基礎となつて地方の開発、産業の勃興に資した結果、道、府等地方公共団体の経済力を充実に、諸会社の発展を促してきた。従来当行の貸付金を以つてその事業資金に充当してきた道、府等の地方公共団体、鉄道電気、開鑿等の諸会社は当行幹旋の下に公社債を発行し、その取入金で事業資金を賄うものであり、地方経済の中心になつて活動してきたのである。

## 行政

朝鮮における行政は、中央に總督府、地方に道、その管下に府・郡・邑・面等があつて行なわれてきた。

道はわが国の府県に相当し、昭和八年道制施行により法人格を認められたもので、議決機関の道会をもち歳入出予算その他重要事項を議決し、官吏の通知事が執行機関となつてい

た。

道の事業を大別すると土木、勸業、教育、衛生、救済となる。土木費は、地方道路の改修維持のほか砂防工事、河川の改修、港湾の修築事業等を行ない、交通運輸の整備改善と治水に、勸業費は、普通農事、蚕業、林業、畜産、水産等ひろく地方産業の開発、製紙および機業等工業の奨励促進に、教育費は、教育施設の普及、完備に、衛生費は、保健衛生の促進に、救済費は、各種の救済を行なう外、民風の作興と民力涵養のための施設をなすほか、道は府、邑、面の地方公共団体や産業団体の各種公共事業にそれぞれ補助金を交付してこれらの助成につとめる等その事業は広範囲に及んだ。その歳入は道税を主要財源とするほか国庫補助金、事業収入と地價等を以つて充当した。

府はわが国の市に相当し大正三年府制実施により初めて法人格を認められた地方公共団体で、その所在地は京城、釜山、馬山、群山、木浦、大邱、仁川、平壤、鎮南浦、新義州、元山、清津、開城、全州、大田、光州、咸興、羅津等で府尹が府政を統轄するほか、議決機関として議長たる府尹および府会議員により組織される府会と教育部会を持つていた。

府はその経済を以つて住民の福利を増進するに必要な施設経営をなす。事業の主要なものは、(1)上水道、(2)下水道、(3)学校、病院、(4)社会事業として公設市場、公設質屋、共同宿

泊所、公設浴場、武徳殿、公設運動場、人事相談所、職業紹介所、簡易食堂、共同洗濯所、府営住宅、(5)その他市区改正道路橋梁の改修、除穢、屠場、墓地、火葬場、市場、公園、公会堂、図書館、消防、救済に及び、一部の府では乗合自動車を経営した。歳入の主なものは、使用料で府税、府債収入、国庫補助金、道費補助金等これに次ぎ、第一次道知事、第二次朝鮮總督の指導監督を受ける。

邑は市町村制の町に相当し、昭和六年改正邑面制の実施により初めて法人格を認められた地方公共団体である。議決機関たる邑会は国税、道税附加税のほか、戸別税その他使用料手数料を収入とし、(イ)道路、橋梁、渡船、河川堤防、灌溉、排水、(ロ)市場、造林、農事、養蚕、畜産、その他の産業の改良普及、害鳥虫駆除、(ハ)墓地、火葬場、屠場、上水道、下水道、伝染病予防、汚物の処置、(ニ)消防、水防、その他事務の処理を目的とし、第一次郡守又は島司、第二次道知事、第三次朝鮮總督の指導監督を受けた。

面は村に相当し、邑と同じく昭和六年改正邑面制の実施によりはじめて法人格を認められた地方公共団体で、面長の諮問機関として面長および面協議会員で組織する面協議会があつた。国税及び道税附加税、戸別割その他使用料等を歳入とし、国の事務をはじめ公共的施設その他をなすこと、および監督官庁は邑に同じ。

邑面組合に相当する地方公共団体で、複合的的地方団体である点、邑、面と異なり、邑、面の事務の一部を共同処理せしめる必要あるとき、道知事は邑会および面協議会の意見を徴し、朝鮮總督の認可を受けて本組合を設置することができる。邑面組合は邑面制の準用を受け諮問機関たる組合協議会を有し、道知事により指定された邑・面長の一人が事務を執行する。監督官庁は邑、面と同じ。

これら地方公共団体は法令により事業資金の起債と年度内一時借入金認められ、これを当行に求めるものが多かった。従つて当行のこれら公共団体にたいする貸出も年々増大、その用途も教化、衛生、土木その他に分つて処理してきた。

## 教化

学校組合は法人格を有し、官の監督を受け、法令の範囲内で朝鮮在住日本人教育にかんする事務を処理する目的を以つて、一定区域内に居住する日本内地人を組合員とする公共団体で、その設置には一定区域内に居住し独立の生計を営む日本人三分の二以上の同意と朝鮮總督の許可を得て設立されたものである。組合員は営造物を共同する権利を有するとともに、組合の経費を分担する義務を負うもので、組合会を組織して主要事項を議決し、この議決にもとづき道知事の任命する管理者が執行機関となつていた。

学校組合の制度は、明治四十二年統監府令を以つて学校組合令を公布、当初教育事務のほかは衛生事務をも処理していたが、大正二年本組合令の改正により法人格を有する公共団体となつた。ついで昭和五年府制および本組合令の改正により府内学校組合の事務および財産は府に承継されて府第一部特別経済と改称されるに至り、従つて同年以降は学校組合数も若干減少し、その予算は著しく減するにいたつた。なお学校組合は第一次郡守または島司、第二次道知事、第三次朝鮮總督の指導監督を受けた。

学校費は小学校その他朝鮮人教育にかんする費用を支弁するために郡、島に設けられた公共団体で、その事務は郡守または島司が担任し、諮問機関として学校評議会をおき、賦課金、使用料、起債を以つてその財源とするもので、第一次道知事、第二次朝鮮總督の指導監督を受けた。

学校費の制度は学校組合に比し著しく遅れ、大正九年十月実施の朝鮮学校費令によるも府の学校費の事務および財産は学校組合と同じく、昭和五年の府制および本学校費令の改正に伴い、府第二部特別経済として府に移管されたので、学校費の設置は郡、島に限られていた。

教育の普及に伴い所要資金も増大し、これら費用の負担は莫大なもので、政府は年々学校組合にたいし、その歳計の二割九分、学校費にたいしては四割六分相当額を補助してきた。

学校組合にたいしては学校の施設、校舎の増築、施設の拡充資金として多額の融資を行なつた。学校費は朝鮮人教育にかんする費用のすべてを支弁し得ることを原則とする結果、その所要資金は賦課金、夫役、寄附金または国庫補助金を充當してきたが、倉屋の増大、設備の進歩に伴い起債を要するものが多くなつた。

#### 金融組合連合会

朝鮮金融組合連合会にたいする当行の貸付は、その所属金融組合の所要資金を融通するもので、金融組合にたいする貸付は当行の前身農工銀行の時代から行なわれたが、大正七年十月当行設立と時を同じくして設立された全鮮十三の道金融組合連合会、さらに昭和八年これに代つて全鮮単一の朝鮮金融組合連合会ができて依然として継続し、連合会を通じて貸出されてきた。

朝鮮における金融組合制度の創設は、韓国政府財政顧問賀田男爵の提唱にもとづくもので、明治四十年二月、財政顧問から各農工銀行にあて発せられた資金の出張貸付および農業倉庫の建設に関する照会にたいし回答された意見にもとづき、地方農民のため小規模の相互金融機関を設置する計画がたてられ、内外の諸制度朝鮮在来の慣習等を取り入れ、同年五月地方金融組合規則が公布された。従つて当時の金融組合

は、農民の金融を緩和し、農業の発達をはかることを目的とし、その規模も小さく、その活動範囲も限られていた。その後法規もいくたびかの改正を経て、当初の村落組合のほかは都市組合が認められ、さらに全鮮金融組合を統合する連合会が創設されるにいたつた。

#### 金融組合の主要業務は

- (1) 組合員にたいしその経済の発達に必要な資金を貸付すること（都市組合の場合には手形割引を為すことを得）
- (2) 組合員の為に預り金を為すこと。
- (3) 組合員の為にその生産物を倉庫に保管し、又はこれにたいし倉荷証券を発行すること。
- (4) 朝鮮總督の認可を受け、組合員に非ざる者の為に、貯蓄銀行令に定められた預金及び定期預積金を受入れること。
- (5) 朝鮮總督の認可を受け、銀行の業務を代理し又はその業務の媒介を為すこと。

等で、その機関としては組合長、理事、監事、評議員等の役員があり、これら役員は組合員中から選任することを原則とするが、理事は朝鮮總督の任命にかかり、組合長と共同して組合を代表し、業務の執行にあたる組織であつた。

金融組合はその設立当初は、もっぱら旧農工銀行の補助機関として僻遠の地方農民に農工資金を潤沢に融通し、併せて

農村を指導するにあつたが、地方産業経済の発達するに従い、庶民金融機関として進展し、特に当行とは代理店契約を締結して媒介貸付、代金取立並びに債券売捌、その他委託業務を取扱つており、当行もまた、金融組合の業務発展に伴い、昭和四年行内に金融組合中央金庫課の一課を設けて、金融組合にたいする中央金庫として資金繰元締の衝に当つたが、昭和八年八月朝鮮金融組合連合会の設立とともにこれらの業務は同連合会に譲渡した。

朝鮮金融組合連合会は金融組合並びに朝鮮總督の指定した産業にかんする法人を会員とし、会員にたいし資金を供給し業務上の指導をなし、その他会員共同の利益増進をはかることを目的とする社団法人で、会長一人、理事十三人以上および監事二人以上をおき、会長および理事は朝鮮總督の任命によるという組織を採つており、その監督は朝鮮總督が本連合会監理官をおいて指導監督にあたらせた。そのほか本連合会は朝鮮金融債券の発行が認められていた。

右のように当行は旧農工銀行時代から金融組合と密接な関係にあり、単に当行業務に關してのみならず、金融組合の莫大な所要資金はすべて当行の融資によるもので、各道金融組合連合会にたいし直接に、また朝鮮金融組合連合会設立後は、同会にたいし融資、あるいは余裕金預託の取扱に任じてきた。

## 衛生

朝鮮における往時の衛生施設は貧弱で、医療機関なども京城その他一部の地方に、ややみるべきものがあるに過ぎなかった。保護政治から総督政治の布かれるとともに、医療機関の整備、保健衛生施設の拡充に力が用いられ、ようやくその面目を一新するに至ったが、これら施設は総督府をはじめ、地方公共団体が経営に当り、僅に病院等に私営のものを見るに過ぎない。かくして衛生施設については早くから当局により種々の対策が講ぜられ、取締法規の施行等をも見るにいたったが、特に医療施設は早くから着手され、保護政治の当初から京城に大韓医院（後の京城帝国大学附属医院）を開設して道慈恵医院（道立医院）設置の端をひらき、総督府始政後引続きその普及につとめ、規模の拡充、警察医および公医の配置をなし、さらに大正十五年には京城帝国大学医学部を開設、朝鮮総督府医院の京城帝国大学移管をはじめ、医学専門学校の新設、官立慈恵医院の道移管および道立医院の新設、公医、嘱託医の増員等をなし、僻村をして医術の恩恵に浴せしめた。その他保健衛生方面では上・下水道、屠場、墓地、火葬場の新設完備をなしその遺憾なきを期した。

医療機関としては、官公立病院が鮮内全病院数の約四割弱を占め、完全な設備、安価な施術で医療方面に貢献したが、

他個人経営病院は比較的不振で、その設備においても遜色があった。

上水道施設は保健衛生上重要課題で、先ず飲料水の改良方法として明治二十八年には早くも釜山府は給水を開始し、続いて京城、木浦、平壤、仁川、晋州等上水道の敷設をみるにいたった。これらのうち京城、平壤およびその後起工した仁川、鎮南浦は独力水道を敷設しただけでなく、晋州、木浦、釜山、群山、元山その他はいずれも多額の国庫補助の下に施設の完備を期したので、総督府の施政方針とともに水道設備は漸次普及発達し、地方小都市にもその施設をみるにいたった。

下水の排除は浄水の供給とともに都市衛生の重要課題で、始政以来国庫から多額の補助を与えられ、市街整理と併行、または単独に実施してきた。その結果京城、平壤、大邱、鎮南浦その他の都市では完成しているが、未だその施設は大都市に限られていた。

当行の貸付は上・下水道はもちろん病院、除穢、屠場、墓地、火葬場の設備経営費等広汎にわたっているが、公立病院の経営、上水道、下水道工事のいづれも道、府、邑、面等地方公共団体の事業として経営され、所要資金中大口のものは公債引受の形式によつて賄われているけれども、当行の貸付に係るものも多く、その他個人経営の病院等にも及んでいる。

## 交通運輸

明治三十九年統監府鉄道管理局を創設し、京釜、京仁両鉄道を買収して国家の管理下におくとともに、同年京義線が開通したので、半島を縦貫する鉄道幹線の全通をみるにいたった。その後主要幹線は国有方針の下に著々新設され、湖南線、京元線は大正三年、咸鏡線は昭和三年にそれぞれ全通した。

さらに昭和八年には図們線が完成して満州の京図線と連絡して新交通路が開け、その他北鮮開拓線の惠山線、満浦線、平元線、東海線、中央線が相ついで開通するにいたった。

総督府は私設鉄道普及の必要を認め、将来敷設すべき予定線および交通経済状況を調査、大正三年以来私設鉄道補助費交付の方法で鉄道の敷設助長をはかり、さらに補助金の率を引上げ、降つて大正九年朝鮮私設鉄道令を公布して企業者の便をはかった。また大正八年朝鮮財団抵当令を公布、同九年担保付社債信託法を朝鮮に施行して資金調達のをひらき、翌十年朝鮮私設鉄道補助法の公布とともに、昭和三年には社債発行限度を拡張し、さらに同五年補助金額を増額して新業の発達助成につとめたので、日本内地並びに鮮内の資本による鉄道会社新設計画相つき、路線の新設されるものも多く産業交通上貢献するところが大きかった。その主なものは朝鮮朝鮮京南、金剛山電気、新興、朝鮮京東、南朝鮮、多獅島、三

陟、京春、朝鮮平安、端豊等の諸鉄道株式会社で、このほか既に国有鉄道として買収されたものも多い。

朝鮮における軌道および軽便鉄道の経営については、当局は民間企業奨励の方針をとり、明治四十五年朝鮮輕便鉄道令および総督府令を以つて「輕便鉄道及軌道ノ建設運轉其ノ他業務ニ關スル件」を公布し新業の發展を期したが、輕便鉄道の進展微々たるに反し、軌道は明治三十二年京城電氣株式会社の前身たる漢城電氣株式会社により京城に市街電車の運轉をみるにいたり、つづいて明治三十九年平壤府内に人車輕便軌道（後電氣軌道に改められたが昭和十二年西鮮合同電氣株式会社に譲渡す）、同四十二年釜山府における朝鮮瓦斯電氣株式会社（後の南鮮合同電氣株式会社）の軌道経営等徐々に整備をみるにいたった。

道路延長の増大と改修の進捗に伴い、自動車交通事業は急激に普及発達して、昭和八年朝鮮自動車交通事業令を公布、同十年実施した結果、自動車交通事業財団の設定により、融資の途開かれ道路の普及発達に伴つて發展した。

当行はこれら交通運輸事業にたいする融資に努力し、その事業をはじめめるものには株式の応募または引受をして企業に参加し、また巨額資金の需要にたいしては、社債引受の方法によつて融資の途を講じ、また財団抵当融資の申出にたいしてはつとめて低利の融通をなす等、極力新業の發達を助成し



てきた。すなわち平壤府官電氣事業並びに電氣軌道事業資金にたいしては、公債の引受により援助してきたが、その他金剛山電氣鉄道株式会社、朝鮮京南鉄道株式会社債引受による融資をはじめ、京春鉄道株式会社、京城軌道株式会社、咸平軌道株式会社にたいする貸付等巨額の融資をなし、また渡船場設備資金、巡航船建造資金、自動車営業資金、その他一般運送業者の所要資金にたいしても融資に努力してきた。

#### 農 業

朝鮮は由来農業国で、農産物は米、麦類、豆類、雑穀、棉大麻、苧麻、煙草、人蔘、甜菜、桔、莞草、荏、胡麻、杞柳、甘藷、馬鈴薯、蕎麥、栗、胡桃、葡萄等多種にわたっている。朝鮮は元来土地氣候とともに農業に適し、農業は新政の下、各種奨励施設の普及するに伴い漸次面目を改めるようになったが、反当平均収穫量は日本のそれに比し約半分に過ぎず、土地生産力増進の余地が大きかった。この開発の途は農事の改良にまつところが多いが、同時に灌漑方法の改善と、耕地に適する未墾地の開発も重視されるにいたった。

農事の改良は作物品種の改良、耕種法改善、肥料の増施等多岐にわたる。早くから当局は土地改良計画を樹立して灌漑排水、開墾、干拓事業を奨励するとともに、勸農機關を設置して農事の改良につとめたので、その実績は大いにあがつた。

に設置され、倉庫二万八千九百余坪を有して米穀の保管に任ずることとなり、降つて昭和十一年米穀自治管理法にもとずき府、郡、島を区域とする米穀統制組合が設立され、三箇年計画をもつて二万一千坪の倉庫を建設した。

当行のこの方面にたいする貸付は年々増加し、貸付金の種別はほとんど年賦貸付で、その用途は耕地の購入をはじめ種苗、肥料、農具、農業用建物の建築および購入、製筵臥、製繩その他一般農作用資金その他であり、その借主は一般個人はもちろん、農会、米穀統制組合、煙草耕作組合協会、蔘業組合等の諸団体におよび、その額も各該事経営会社にたいする巨額の貸付をはじめ、公共諸団体の事業資金並びにその幹旋による多額の肥料資金、米穀資金、あるいは中・小自作農にたいする小額資金の融資等におよび、当行産業公共貸付金用途別中首位にあつた。

#### 土 地 改 良

朝鮮における産米は、始政以来大正八年にいたる間、もっぱら農事の改良、施設の改善につとめた結果、わずか十年で産額五百万石、輸出額二百五十万石の増加をみるにいたつた。当時日本内地は食糧の不足はなほだしく、年々五百万石内外の米を輸入にまたなければならぬ状態で、食糧問題の解決は緊急の課題であつた。あたかも朝鮮には農事の改良を

これに産米増殖計画にもとづく農事改良計画が貢献し、耕種法の改善を主とし、これに肥料の供給を併せ行ない、畜牛を飼育して耕耘を充分ならしめた。肥料の配給状態は施肥不十分でほとんど素朴な自給肥料のみに依存し、金肥は僅少であつた。大正十五年産米増殖更新計画実施以来、当局は四千万円を限度として朝鮮農会をはじめ各道、郡、島農会を奨励して肥料資金の貸付を斡旋せしめ、さらに昭和九年該計画の中止後は、朝鮮肥料資金貸付を斡旋し、肥料の配合、施用方法の指導と監督に当らせた。

朝鮮における耕地の売買価格は、土地生産力において劣るとはいえ日本内地における田畑売買価格の番四割弱、田二割強に過ぎない。加うるに地税その他公課の負担も軽く、賃銀も低廉であり、小作料の多くは打租切半の方法によりその徴収も比較的容易であつた。かくして昭和九年朝鮮農地令の公布により、小作農の地位が安定するとともに、小作地生産力の増進、農村経済の進展が期待され、また朝鮮の農業を採算的ならしめ、大小規模の農場が各地にできて、朝鮮における農耕地は有利な投資物件とみなされるにいたつた。

当局の多年にわたる指導奨励により、産米は質実ともに面目を一新するにいたつたが、米穀の需給關係と鮮米の移出対策から昭和六年はじめて朝鮮農業倉庫業令が公布され、農会、産業組合を主体とする農業倉庫が鮮内主要米産地六十六箇所

要するもの多く、また灌漑の改善、地目の交換、開墾、干拓防水、その他の土地改良施行適地もすこぶる広く、これらに適当な改善ならびに施設をなすときは国内米の自給自足も可能と称すべきで、朝鮮は産米適地として急に注目されるにいたつた。朝鮮總督府はこのような機運に乗り、大正九年産米増殖計画を樹立するとともに、土地改良事業補助規則を公布して土地改良事業の発展をはかり、つづいて同十二年沼沢および干瀆地の埋立または干拓にかんし、朝鮮公有水面埋立令を、さらに昭和二年朝鮮土地改良令を公布して積極的に土地改良事業の振興助成につとめた。

朝鮮産米増殖計画は現在舊の灌漑設備を改善すべきもの四十万町歩、地目交換により開墾すべきもの二十万町歩、荒蕪地、干瀆地二十万町歩合計八十万町歩にたいし、大正九年以降三十箇年を期して、土地改良事業を施行せんとし、先ず第一期として、向こう十五箇年間に総工費一億六千八百万円で四十二万七千五百町歩の土地改良並びに農事改良を併せ行ない、両々相まつて九百二十万石の産米増殖をはかろうとした。かくて計画は着々進捗したが、当時財界の変動により企業熱が低下したところへ、さらに工事材料、金利の昂騰にあい、従来のような補助率では採算困難となるなど、予期しないいくたの障害に、本計画も更新を要することとなつた。

朝鮮産米増殖更新計画による事業資金は三億二千五百万円



とし、内土地改良資金二億八千五百余万円、農事改良資金四千万円とし、土地改良資金については国庫補助金六千五百七万円、企業者自身が調達すべき二千二百余万円を控除した残額一億九千八百万円の半額は、大蔵省預金部から低利資金を供給し、他の半額は当行並びに東洋殖産株式会社で調達することとし、大正十五年度から十二箇年（完成十四箇年）を期し、既成畜の灌漑改善十九万五千町歩、地目変換九万町歩、開墾三万一千九百五十町歩、干拓三万三千五十町歩、合計三十五万町歩の土地改良と、同地域における農事改良により四百七十二万石、既成畜百三十九万町歩にたいする農事改良により三百四十四万石、合計八百十六万石の産米増産をはかり、鮮内需要を控除し、なお五百万石の輸移出をしようと試みた。

産米増殖計画は更新計画にもつき着々事業の遂行を見つづけたが、昭和五年および同七年の大豊作と財界の不況は著しく米価の低落を招来することとなり、加うるに日本内地における外地米移入制限問題は、ややもすれば米価軟化の悪材料となつて、本計画の遂行上いちじるしき支障をきたし、昭和九年をもつて本計画中、土地改良事業の遂行は、一時中止するの止むなきにいたつた（本計画中止当時未竣工のものといえどもすでに着手したものは継続施行し、昭和十二年度をもつてほぼ完成した）。いま本計画の実績を示せば、昭和

十一年度末現在において竣工したものの十四万九千六百一十一町歩、総予定計画面積にたいする割合は四割三分に達した。所要資金は国庫補助金三千五百十八万円、企業者調達資金一千六百一十一万円、政府幹旋資金八千三百二十一万円、計一億三千四百五十一万円で、総予定計画にたいする割合は、国庫補助金五割四分、企業者調達資金七割三分、政府幹旋資金四割二分に及んでいる。また産米の増収は百三十万石で、計画増収高四百七十二万石（玄米）の二割八分、全鮮の米収量一千九百四十一万余石の六分七厘に相当する。

土地改良事業は灌漑、排水にかんする設備または工事、土地の交換、分合、開墾、地目変換その他の区画形質の変更または道路、堤塘、畦畔、溝渠、溜池の変更もしくは配置、以上の事業遂行のため必要工作物の設置、または維持管理等、その範囲は多岐にわたつた。

朝鮮には土地改良事業を要するもの多く、産米増殖計画の遂行に伴い、本事業は一層促進されたがこのうちでも特記されるべきものは干拓事業であつた。朝鮮西海岸は多島海とも称され、多数の島嶼湾入散在し、加うるに潮汐干満の差甚だし、干潮時においては数里にわたる干潟地がいたるところにみられる。これらの干潟地は泥で被われ、地味肥沃なので、堤防により海水の侵入を防ぎ、一面水利を便にして適当な灌漑方法を講ずれば、干拓後三、四年で完全な良畜に化すること

とができる。このように干潟地の開拓は国策的意義を有するもので、たまたま産米増殖計画の樹立とともに、本事業は飛躍的發展をみたが、すでに古く日露戦争後、内地資本家の農事経営進出に伴い着々振興し、殊に欧州大戦後における米価の昂騰と産米増殖計画にもとづく土地改良事業にたいする国庫補助金の増加並びに水利事業の振興により、古来、干潟地の分布最も多い全羅南道を中心とし、忠清南道、全羅北道、

黄海道、慶尚南道、京畿道、平安南道、平安北道の西海岸に多く計画着手され、全羅南道などは一道でその事業地数七十箇所に達し、また忠清南道においても三十三箇所に達した。一事業地で一千町歩を超えるような大規模のものも少なくなく、不二興業株式会社西鮮農場（平安北道所在）などは四千町歩に達し、朝鮮における干拓事業中、面積最大のものである。その他不二興業株式会社沃溝農場（全羅北道所在）の一千九百五十七町歩、朝鮮開拓株式会社（旧鮮満開拓株式会社）延海農場（黄海道所在）における一千九百余町歩、宝城興業株式会社経営農場（全羅南道所在）の一千八百町歩などは代表的のものであつた。

これら干拓事業は一部水利組合によるものを除き、多くは一箇人及び会社のほか、特殊な関係による邑、面等の地方公共団体のものであるが、これら公共団体経営の事業は比較的小規模に止まつた。これら干拓事業のうち、産米増殖更新計

画にもとづくものは、昭和十一年度末現在で一万三千九百一十一町歩、同計画による干拓予定面積の四割二分に達した。

なお灌漑、排水、水害予防または土地改良のために必要あるときは水利組合が設置された。従つて当行の資金用途でも水利組合による土地改良事業は水利事業として処理したので、ここにいう土地改良とは水利組合によらない土地改良事業を指す。産米増殖計画に属する干拓事業については、政府も特に保護助成の必要を認め、低利資金の幹旋をして事業の援助につとめたが、これら低利資金は当行の本項貸付の四割強に該当した。このように当行が土地改良事業として貸付けたものは干拓事業を中心とし、総じて産業貸付に属せしめていたが、土地改良事業を目的とする開墾組合、土地改良契、または土地改良組合の名称をもつ任意団体にたいしては、それぞれ無担保貸付の取扱ひをしてきた。

#### 水利事業

朝鮮では畜の灌漑は、おおむね天水に依存し、水利施設を有するもの少なく、従つて米作の豊凶は一に当年の降雨量並びにその分布状態によつて支配される実情で、累年旱水害を被ること多く、これら災害をサン除し、併せて朝鮮の農産振興と農民の福利増進を期するには、積極的に水利事業を起して灌漑、排水または水害予防の途を講ずべきものが少なくない。

かつた。

旧時における水利事業としてみるべきものは、在来の堤堰（溜池）、淤（堰）等小規模の灌漑施設で、設備は幼稚な上多年荒廃に委ねられた結果、その効果のうすいもの多く、併合後国庫補助金により漸次復旧改善したが、その灌漑面積は、わずかに六万余町歩に過ぎなかつた。

日露戦役後、日本人農事経営者の移住増加と日本内地の資本家の農場経営進出とに刺激され、水利施設振興の必要が叫ばれるにいたり、当局は明治三十九年、韓国政府度支部令を以つて水利組合条例を公布し、水利組合の設置保護につとめるとともに、在来の堤堰、淤の施設を奨励したので、明治四十一、二年頃には、沃溝西部水利組合、臨益水利組合が、つづいて馬九坪水利組合、全益水利組合等が設置され、大正六年には水利組合十四、灌漑面積二万六千町歩、そのほか堤堰六千五百、淤二万一千余、その灌漑面積二十八万町歩に達したが、本事業にたいする法令の不備と助成規則の欠陥は、金融機関の融資にも障害をもたらしたため水利施設を了えたもの、僅に畜産面積の二割で、残余は天水にまっほかない状態であつた。

他方日本内地における米穀需要激増し、食糧充実のため一層米穀の移出増加をはかるべく、大正六年、従来の準拠法規たる旧条例を廃止し、新たに朝鮮水利組合令を公布してその

内容を整備し、つづいて同八年、水利組合補助規程を制定し、さらに翌九年、土地改良事業補助規則を公布して灌漑改善等にかんする工事費の補助率を高めて、水利事業の積極的振興をはかるにいたつた。

大正八年の稀有の旱害に鑑み、恒久的水利施設の緊要なことが認められ、米穀不足補充策と相俟つて大正九年、産米増殖計画が樹立されるとともに、朝鮮の地理的關係にもとずき水利組合による水利事業の積極的奨励策が講ぜられるにいたつた。

水利組合は灌漑、排水、水害予防または朝鮮土地改良令第一条の土地改良を目的とし、蒙利地域を以つて区域とし、組合規約によりその区域内の土地、または家屋その他の工作物を所有する者を組合員とする公法人で、朝鮮総督の認可を受けて成立し、道知事の任命に係る組合長と諮問機関たる評議会を有し、起債によつて所要資金の調達を認められ、組合員の土地賦課金を以つて経費に充当する組織であつた。

朝鮮は雨量比較的少なく、従つて産米増殖計画のような大な土地改良事業には、水利事業も自ら大規模とならざるを得ない。その諸施設をみると蒙利面積二十二万七千九百町歩中、貯水池によるもの七割、揚水機および淤自然流入によるもの残部の各半を占めている。貯水池に水源を求める水利事業は規模が大きく、河川から導水または揚水後貯水した。と

りわけ益沃水利組合大雅堤は、コンクリート堤堰高さ百二尺、延長百四十間、東津水利組合漣津堤は、コンクリート堤高さ九十五尺、延長百七十八間、その貯水量は前者が六千七百十町尺、後者が二万一千八百二十町尺、その他黄海水利組合鳩岩池は三万九千二百町尺に上つた。延海水利組合第一貯水池満水面積二千四百二十二町歩や、水路の延長は益沃水利組合用水路の十八里をはじめ、東津水利組合六里半、咸興水利組合第一用水幹線九里十七町など、その一例である。またその事業地も東津水利組合の三郡一邑二十二面（事業地域百万里）

臨益水利組合二郡十面、益沃水利組合二郡一邑七面、中央水利組合二郡十面（事業地域百万里）にわたる等その規模の広大なことは日本内地にみられないところであつた。

揚水機は流水または溜池の汲上げに用いられるほか、一部補助用とし、原動機も重油発動機、電動機を主とし、延海水利組合使用の揚水機など、重油発動機一千七百四十馬力、富平水利組合も電動機一千三百五十馬力を使用して揚水に當つた。

淤によるものは自然流水利用の途が乏しいため、専用または補助用として、その規模小さく一組合で灌漑面積一千町歩を超えるものは少ない。しかし咸興水利組合などは、その水源として城川江をはじめ、一江二川の流水および朝鮮窒素肥料株式会社発電用水の放流を利用して、城川江に高さ五尺、

延長百五十六間の石造固定堰を設けて、総延長十八里十六町にわたる三用水路で導水、咸興平野一万一千百町歩の灌漑をなし、淤を用水源とする水利組合中最大のものであつた。

朝鮮における水利事業は当局の指導助成と企業家の自覚により短期間に進展し、昭和八年度水利組合数百九十六、作付面積十九万二千三百九十七町歩、事業による産米の増収百九十二万六千石に達し、半島の経済開発と国内食糧問題解決に貢献するところ大きく、また組合個々の実績に徴しても、概して予期の成績を収めて順調な発展をとげたが、これら水利組合中には不測の障害をこうむり、多額の追加改良、または災害復旧費を支出したものもあり、加うるに米価暴落のため予定収量をあげても組合費の徴収困難となり、従つて歳入欠陥補填は異常の多額に上つた。これより先昭和五年來、当局は水利組合の救済にたいし、大蔵省預金部資金による高利債の借替をして、組合財政の安定をはかり、また組合費の延納を認めるとともに、歳入欠陥を生ずる向きにたいしては、新規起債または融資低利資金の償還元金相当額の貸付をして応急的措置を講じたが、米価安は依然として持続し、根本的整理を必要とする事態にたいたつたので、昭和九年、新規土地改良事業を一時中止するとともに、経営困難な水利組合の救済策を樹立し、昭和十年度を期して実行の運びにいたつた。



本救済案は要整理組合七十をその負担能力に応じ甲、乙、丙にわけ甲組合は廃止、乙組合にたいしては組合債の金利引下、償還年限の延長および国庫補助金の交付をなすとともに、理事および主任技士を官選として、その俸給を国庫から補助し、丙組合にたいしても、組合債償還年限の延長を講ずるとともに、理事と主任技士を官選として水利組合の監督を敢にしてその更生を期した。このうち乙組合にたいする実行機関として、昭和十年更生水利組合連合会が設立されるにいたった。

本連合会は、右整理計画にもとづき、所屬乙組合の組合債を全部肩替り整理し、(1)所屬組合にたいし毎年交付される歳入欠陥補填国庫特別補助金の受領、およびこれが処分並びに返納、(2)積立金の管理処分、(3)所屬組合において将来必要な資金の貸付、(4)その他これらに關連する事務の処理を目的とし、三十五の乙水利組合を組合員とする公法人で、事務所を朝鮮總督府内におき、会長のほか副会長、理事、主事、書記等の職員を有し、諮問機関として顧問を、また審議機関として委員をおき、所屬水利組合長を以て組織した總會を有し、会務を議するほか、所要資金を貸付け、所要経費は反別割を以て弁じ、これを所屬組合に分配する組織であつた。

当行と水利組合との關係は、旧農工銀行時代からはじまり、当時水利事業は、用水源を比較的容易に得られるにも拘らず

水利事業の施設がないため旱害を被ることの多い西、南鮮の平野に計画されたため、概して小規模で、所要資金も少額に過ぎなかつたが、各農工銀行は本事業貸付については単独または数行共同して融資に当り、湖南地方の沃溝西部水利組合、臨益水利組合その他の水利施設を援助して、朝鮮における水利事業金融の先驅をなした。当行は、引続き融資の任に当り、新業の發達を期したが、産米増殖計画の実施に伴い東洋拓殖株式会社とともに本事業にたいし融資に當つた。当行の水利事業にたいする貸付は、昭和十二年末現在、水利組合数百二十、蒙利面積十六万四千九百九十三町歩、融資額七千二百四十五万円で、当行公共貸付の五割に當つてゐる。全鮮水利組合中当行が占める割合は、組合数で六割二分、蒙利面積五割八分、融資額六割八分に當つてゐた。

## 林業

朝鮮の林野は古来の濫伐暴採により荒蕪その極に達し、一度雨降れば河川氾濫、旱天つづけば渇水涸渴、年々旱害水害のため国土を損傷するばかりでなく、産業の發達を阻害した。当局は、始政以来森林の保護造成のため明治四十四年森林令を制定して保安林を制度化し、また記念樹の樹を置き、樹苗圃を設置して植林の奨励をするともに、害虫駆除を勵行して森林の荒蕪を防ぎ、火田を整理して林野の損失を予防し、

砂防事業を施行して土地の荒蕪、土砂流失の防止に努めた結果、治績大いになり、林相全く一変して林業躍進の一途を辿るにいたつた。

昭和十一年末における林野総面積は一千六百三十四万余町歩で、土地総面積の七割七分に當る。そのうち国有五百六十五万七千町歩、公有及寺刹有百一十一万三千町歩、私有九百五十六万八千町歩で、その林相は立木地一千五百五十四万一千町歩、成生地二百一十一万二千町歩、未立木地百十八万九千町歩、その他百四十九万六千町歩となり、林野蓄積状態は全鮮平均一町歩当り四十尺縞を有し、咸鏡北道は六十四尺縞以上に及んだ。樹木の種類は七百餘種に上り、主要樹木だけでも百五十五種、ほかに竹三種に達し、立木の六割余は赤松で占められていた。

鮮内での一般用材年所要額は逐年増加し、鮮産落葉松は織維、製紙、セロファン原料として、また人絹資材としてその消費量は激増した。

北鮮地方、殊に鴨綠、圖們兩江の上流地方はいわゆる蓋馬高原の称ある山岳地帯で、林相概ね良好、優良木材に富みその蓄積三億七千七百六十万尺縞、全鮮林野蓄積の五割七分に達し、その施設経営はこの地方の産業經濟の中心をなしていた。しかるに本地方は交通不便のため開發されたものは一部に過ぎず、多くは老令過熟、自然の枯朽または火田民の冒耕

に委ねられていたので、当局は昭和七年以降十五箇年を期して、北鮮開拓事業計画を樹立し、国有林の私用保護、火田民の指導にかんする施設の失行を糾弾して事業に着手し、先ず林野荒蕪の原因を検討して民有林指導方針を樹立し、地力の培養につとめるとともに、森林鐵道の敷設を策し、高地帯の積極的開發をすすめ、昭和十一年、これら特殊使命の達成を目的とする朝鮮林業開發株式会社が設立された。同社は資本金二千万円の特許会社で、国有林の民間処分予定地百二十万町歩のうち五十万町歩の払下げを受けて開發しようとするものであつた。

林産副産物は木炭をはじめ、栗、胡桃、漆、楡、桐、藥草、菌類、アベマキ、五倍子等、燃料、食料その他工業用品があつたが、産額乏しく商品としてみられるものはなかつた。

山林事業は樹苗の養成から成林の造成にいたるまで、一朝一夕にその効果を期することは困難であり、従つて他の産業に比し、著しく長期間資金を固定しなければならぬ。しかも農民は、多年の慣習により山林愛護の念に乏しく、企業利潤の少ないこともあつて本事業は發展を阻まれてきた。国有林野の処分も貸付または譲与が主で、投資の対象となるものは少なく、自然当行の貸付も、苗圃の経営、造林、砂防、林野購入資金、副業その他林業に關する資金の大部分を含んでゐるが、その融資額は僅少に止まつてゐた。

蚕業

朝鮮は氣候養蚕に適し、土地、労力ともに豊富なので、古来養蚕は一般農家の副業として広く行なわれ、産繭も自家用のほか、元絨、元羅のような朝鮮在来繊維原料として重視されたが産額は少なかつた。蚕業の奨励については韓国政府時代奨励機関の新設、蚕種、蚕具の無料配布、巡回教師の指導等が行なわれたが、実績をあげることはできなかった。始政後当局は、もっぱら蚕種の整理改善に力を尽し、逐年盛んになつて、大正八年朝鮮蚕業令を公布して、蚕種の製造並びに蚕種、蚕繭の販売取締りについて規定し、これによつて蚕種の鮮内自給と品種の統一が期せられるにいたつた。

朝鮮における蚕業は当局多年の奨励により著しく発展し、産繭額も逐年増加するにいたつたが、大正十四年に向こう十五箇年を期して産繭百万石増収計画を樹立した。すなわち桑田反別十町歩、養蚕戸数百万戸、掃立蚕種春蚕二百万枚、夏、秋蚕百万枚、合計三百万枚、産繭百万石を目標とし、同時に植桑奨励補助規程を制定して植桑苗代金を補助した。さらに大正十五年、朝鮮農會令を公布、従来蚕業の指導改善に當つていた郡庁の事務並びに養蚕組合を郡農會に編入したので、全鮮産繭の共同販売、乾繭場の新設運用は郡農會の取扱うところとなつた。その後、糸価の変動もいくたびか激しい

ものがあつたが、他に適当な副業に乏しい鮮農、殊に田(畑)而積の多い地方では蚕業は有利確実な副業として重視され、朝鮮農家経済上重要な地位を占めるにいたつた。

朝鮮の蚕業は副業として農家経済にとり入れられて盛んになつたもので、従来多くは家屋を改良して蚕室に充当し、田(畑)の一部を利用して植桑するなど、その施設も消極的で一般的に融資の余地も少なく、わずかに蚕種製造家の蚕室新築、蚕具の購入、栽桑その他の設備資金融通にすぎなかつた。その後、産繭百万石増収計画と朝鮮農會令の公布にもとづく郡農會の設立により、乾繭場、共同販売施設をはじめ、咸鏡南道における桑田の購入、肥培管理等、農會を経営の主体とする事業の振興を見、これら施設の中には、資金を要するものも多く、殊に各道における蚕種製造業組合並びに蚕種同業組合にたいする融資のように特記すべきものが少なかつた。

畜産

朝鮮における畜産業は、役畜たる牛をはじめ養豚、養鶏、養蜂を主とし、馬の改良飼育および羊毛国策に準じて綿羊の飼養もさかんになつた。

朝鮮の農家は日本内地に比し、その耕地面積広く、畜牛の力をかりて耕作していたので、その分布は全鮮にひろがり、

農家資産の主要な部分となつてゐた。牛はその歴史古く資質は役用として優秀、適応性強く、力量と持久力に富み、飼養管理は容易なので、畜牛に無経験の農家でも飼養できて、早くから朝鮮牛として日本内地に知られ、役用並びに食用として年々輸出された。これに反し馬はその数少なく在来種は体軀矮小で利用価値低く、その他豚、家禽の数も在来種はいずれも素質悪く指導改善を要するものが多かつた。

朝鮮殖産銀行

始政以来当局は、先ず畜牛の奨励に着手し、優良牛生産部落を設定してこれに補助を与え、飼料の採取、貯蔵、牛契の設置を助成し、在来の牛市場を改善して生牛売買の公正を期した。さらに大正四年朝鮮重要物産同業組合令を公布し、各道内に畜産同業組合を設立せしめて生牛売買の仲介をさせるとともに、牛皮の改良策を講じたが、大正八年、従来が生牛輸移出税撤廃後は、鮮産畜牛の輸移出もさかんになつた。その後、産米増殖計画の実施に伴い、郡農會を奨励して耕牛の充実、自給肥料の増産を奨励したので、畜牛の飼育頭数は年々増加したが、昭和十三年以降二十箇年を期して、さらに二百五十万頭の増殖計画をたてて、その目標達成に邁進した。馬産については、産業並びに国防上の見地から改良を急ぎ、昭和七年、雄基の地方費経営馬所を朝鮮總督府直営事業に移管するとともに、昭和八年度以降十八箇年継続改良馬四万頭増殖計画を、昭和十二年度以降十五箇年四万頭増殖計画

に更新した。養豚は自給肥料の増産からも必要なので、在来種の改良を奨励するとともに、畜牛の飼育を困難とする平野地方の農家や細農にたいし採肥を目的とする養豚を行なわせたので、飼育頭数激増し改良種の飼養がだんだん普及するにいたつた。

綿羊には始政以来意を用い、勸業模範場は洋種綿羊、または蒙古羊を輸入して調査研究をつづけてきたが、世界経済の動向と国策上から羊毛国内自給の重要性にかんがみ、昭和九年度以降十五箇年を期して、五十万頭の綿羊増殖計画を樹立し、西・北鮮六道を奨励地域とし、副業として飼育せしめ、全鮮に普及する計画で、咸鏡北道に国営種羊場を設置して、綿羊の改良繁殖をはかり、一般飼養法の指導奨励を行なつてきた。

当行はひろく一般畜産資金の貸付をするだけでなく、地方公共団体の家畜市場並びに屠殺場経営にたいしても所要資金を融通し、殊に大正三年、各府、郡に畜産同業組合設置以来、同十五年、郡農會にその事業を委譲するまでの間における同組合の畜産物の改良、奨励、売買仲介、牛疫予防の事業施設所要資金は、当行の融資になるもの多く、その関係は委譲後もなおつづいた。郡農會の畜産事業中主要なものは、耕牛の貸付けで、農會は耕牛を購入して、これを農家に預託使用せしめ、賃賃料として毎年元利を収納し、三箇年の後農家に耕



牛を所有せしめた。これは産米増殖計画にもとづく農事改良方針に従い、堆肥と耕動力の自給を講ぜしめるもので、一面当局の自作農地創定に協力する意義ももっていた。当行のこの種耕牛購入資金として郡農会その他にたいする貸出残高は年々増大した。他方馬匹の増産とともに各地に競馬団体ができ、昭和七年、朝鮮競馬令の公布以来、馬の改良増殖と馬事思想の普及を目的とする非営利産業法人競馬俱樂部が京城、釜山、大邱、群山、平壤、新義州、咸興、清津、雄基等に設置された。

## 工業

朝鮮の工業は年々いしるしい発展をとげ、昭和十一年における工産物価額は七億三千八十万円に達した。これを明治四十四年の一千五百万円に比べると、四十八倍の増加に当り、また同期間における朝鮮産業総生産物価額が六倍強の増加をとげたのに比べると、その躍進振りがうかがわれる。

朝鮮の風土は農耕に適し、米をはじめ農、畜、蚕の所産多く、鴨緑、図們両江上流に赤松、落葉松等の原始林が広地域にひろがり、また東、南、西の沿海には魚塩の利多く、地下には幾多の有用鉱物を蔵し、その工業資源に恵まれていた。このような天賦の資源に低廉な労力、豊富な電力があつて朝鮮の工業は官の奨励と日本内地資本の流入により促進される

にいたつた。

当局は施政以来特殊工業にたいする補助金の交付、伝習、指導等、統監府時代の施設を一層助成徹底せしめるとともに中央試験所の創設、工業教育機関の完備等により、鋭意知能の啓蒙と技術の培養につとめ、また早くから日本内地資本の誘致により工業の発展を期し、先ず資源を調査してその結果を発表し、日本内地の実業家の注目を喚起することにつとめた。特に欧州大戦を契機として製鉄、紡織、製糖、製米、窯業、製紙、製鉄等の大規模工業勃興し、朝鮮の工業は、漸く発展の緒につくに至つた。つづいて滿州國成立以来工業上における朝鮮の地位は一段と有利になり、日本内地の同種資本の工場が進出をはじめ、内鮮資本による大規模工場が相ついで各地に設置され、殊に日華事変により兵站基地としての重要性が認められるにいたり、半島産業増進の必要とともに、あらたに機械器具工業、造船工業、飛行機製作工業の勃興をみ、第二次世界大戦に入るに及んで、ますますその重要性を増してきた。

主要新興工業としては、製鉄、製糖、軽金属、機械器具工業、洋灰・電気化学工業、製紙・パルプ製造工業、大豆油及魚油の油脂工業、硬化油工業、火薬工業、石炭液化・石油精製・無水酒精工業並びに製粉・澱粉・麦酒・紡織・麻布・綿織物及び人絹織物・染色工業等あり、これらは既に製品を出

して新興朝鮮工業の中樞をなしていた。少し古いが昭和十一年における工産物価額による順位は、食料品工業、瓦斯及び電気業、金属、機械工業となつてゐる。これらの諸工業は鮮内資源に依存し、原料の補給、販路の獲得については何らの懸念なく、その生産額は鮮内需要にたいして六割余りで、鮮内工業の発展は日本内地の工業と衝突するものはなかつた。

滿州事変後、日華事変前後にかけての新興工業としては、清津における日本製鉄株式会社製鉄所、三菱工業株式会社製鉄所、咸鏡北道永安、阿吾地における朝鮮石炭工業株式会社の石炭液化工場、咸鏡北道吉州における北鮮製紙化学工業株式会社の人絹パルプ工場、城津における日本高周波重工業株式会社の中間火花式高周波電波応用による特殊鋼製錬工場及び日本マグネサイト化学工業株式会社の耐火煉瓦工場、咸鏡南道洪原における電気化学工場、元山における朝鮮石油株式会社の石油精製工場、新義州における朝鮮無水酒精株式会社の無水酒精工場、平壤における昭和飛行機株式会社の飛行機製作工場、鎮南浦における日産化学工業株式会社総合肥料工場並びに日本及び朝鮮製粉株式会社の製粉工場、平安南道順川における朝鮮化学工業株式会社の尿素肥料製造工場、永登浦における朝鮮麦酒及び昭和麒麟麦酒株式会社の麦酒工場、富平における国産自動車工業株式会社の自動車製作工場、仁川における朝鮮機械工作所工場、釜山における朝鮮重工業株式

会社の造船工場、その他永登浦、仁川、平壤、大田、雄基、全州、光州、水原、清津、新義州における鐘淵、東洋及び日本紡績株式会社の紡績工場等があつた。

工業金融には創業以来力を入れてきた。特に基礎産業や国策的産業にたいしては余裕金を以つて株式の応募、引受もしくは買入をなして、直接企業の創設に参画し、また鮮内資本による大工業にたいしては、仕債の引受によつて資金の調達を援助するとともに、その他工場財団抵当または普通抵当の方法により直接融資につとめ、家内工業の所要資金にたいしては当行直接、または金融組合を介して融資する等、それぞれの企業態様に即応する方法によつて直接融資をなす一方、債券引受業務として仕債の引受をなし、工業方面にたいする金融の疎通につとめた。

## 水産

朝鮮は三面海を繞らし、海岸線屈曲に富み、島嶼の存在するもの多く、寒暖二潮流相交錯して魚類の種類も多く豊富で、各地域に良い漁場がみられ、特に咸鏡南・北道、江原道、慶尚南道のイワン、咸鏡南道の明太魚、慶尚南・北道、全羅南道の鱈、平安北道、黄海道、石首魚、慶尚北道、江原道のニシン等のほか、海藻類、貝類の産額も少なくなかつた。これらの水産業も併合前は日本人によつて開拓されたものが多く、

漁業の施設等半島の漁民によるものは極く稀であつた。

当局は施政以来漁獲の増進、製品の改良をはかるとともに漁民の経済状態と社会的地位の向上をはかつた。すなわち明治四十四年、漁業令以下水産にかんする諸法令を公布して、漁業組合、水産組合、各道水産会（忠清北道を除く十二道）及び各道水産会で組織する朝鮮水産会の設置を促進し、国費を以つて優良漁船や鮮魚冷蔵設備を補助し、養殖漁業施設を助長し、さらに市場規則を公布して水産物売買の公正を期し、また漁港の修築を補助して漁船の碇繋、漁獲物の配給に便ならしめた。ついで昭和四年、朝鮮漁業令を制定して漁業の処分、取締りを厳重にし、併せて漁業権の確保をはかり、別に漁業保護取締規則を公布して漁獲高を確保する途を講じた。他方水産製品検査規則を制定して製品品位の向上と商取引の便に資する等、鋭意水産業の発達改善につとめた結果、漁獲高の累増、水産製品の増産をもたらし、イワシ油肥は日本内地の化学工業や肥料界に主要な役割を演じた。

漁業組合は、明治四十四年公布の旧漁業令にもとずき、その設立を認められたが、昭和四年、漁業令の公布とともに漁業組合制度は確立され、組合員をして漁業をさせるため漁業権を取得し、または漁業権の貸付を受け、且つ組合員の漁業またはこれにかんする経済、若しくは救済に必要な共同施設をなすことを目的とした。従つて、組合の業務並びに施設は、

漁獲物及びその製品の委託販売・漁業資金の貸付、漁業用品

の共同購入、漁獲物の共同運搬等、多岐にわたつていた。この漁業組合の発展とともに、昭和五年、慶尚北道漁業組合連合会が設立され、爾来引きつぎ平安北道、忠清南道を除く十道に設立されて、専ら所属組合にたいする金融を中心とし、統制ある活動の主体となつてきたが、昭和十二年五月これら漁業組合連合会及び漁業組合を会員とする朝鮮漁業組合中央会の設立をみるにいたつた。

水産組合は一定地区内に居住する漁業者、または水産物の製造、取引若しくは保管を営業とする者を組合員とし、当該水産業の改良発達をはかり、営業上の弊害を矯正することを目的とする法人で、イワシ油肥製造業水産組合をはじめ、機船巾着網漁業水産組合、機船底曳網漁業水産組合、朝鮮鱈結業水産組合、朝鮮潜水器漁業水産組合等があつて、それぞれの業態に応じ漁具、漁法の改善、製法の改良、販売の合理化等、斯業の改良発達につとめた。

水産業は食糧、工業原料品の供給、貿易の振興、その他種々の観点から重要な地位にあり、殊に三面広大な海に囲繞せられ、長大なる海岸線を有する半島にとつては極めて有益な産業に属し、当行は設立以来水産資源の開発を重視し、漁船建造、漁具の購入、水産物製造場建設資金等の融通に最善を尽してきた。特にイワシ油肥製造業水産組合にたいする貸付

は、組合設立当初から密接な連絡の下に同組合事業資金融通の衝に当り、その後設立された朝鮮協同油脂株式会社の所要資金もすべて当行が融資に當つてきた。

#### 電気及瓦斯

朝鮮における電気事業は、明治三十二年、米国人によつて京城にはじめられ、同三十三年五月点灯したのが最初であつた。併合後一段と進展はしたが、当時電気事業者数はわずかに三者にすぎず、当時の需要はもっぱら電灯用で、欧州大戦末期にいたつて各種産業の興隆に促され、電動力の需要も著しく増加するにいたつた。

かくて多数の電気会社が設立されるにいたつたが、その需要は都市に限られ、未だ農村に普及せず、従つて事業は都市を区域としての分立を余儀なくされ、小規模の火力発電による外なかつた。ついで水力による集約的発電が可能となるにいたり、既存会社は地理的に統一されて電気事業は飛躍を上げた。この結果安価で豊富な電力を基礎として、従来考えられなかつたような電気化学工業をはじめ、いくたの工業が勃興するにいたつた。

由来朝鮮の河川は、降雨の関係から流量の変化著しく、冬期渇水期には水源枯渇するのが普通で、日本内地に多く採用されている水路式発電方法は経済的に不利なため、そのほと

んどが貯水池式発電方法を採用していた。この方法による水力発電は、金剛山電気鉄道株式会社が北漢江上流を利用したのをはじめ、朝鮮水電株式会社（昭和四年）窒素肥料株式会社（合併す）が、昭和四年に鴨綠江水系長津江支流、赴戰江二十万キロワットの発電に成功、つづいて長津江水電株式会社（昭和八年）、長津江上流で三十二万キロワットの発電を完成した。これより先、長津江発電工事とともに、昭和九年五月、送電を目的とする朝鮮送電株式会社が設立され、昭和十年十一月以来平壤送電事業に當つた。このほか富寧水力電気株式会社が水力発電を、朝鮮電力株式会社が火力発電を完成した。

当局は前後二回にわたる発電水力調査にもとずき、昭和四年、電気事業調査会を設置して発電と送電にかんする重要問題を調査、水主・火従の原則を決定し、さらに企業と経営形態については、発電事業は民営、送電事業は幹線を除き民営とし、配電事業についても全鮮を経済的な数箇の区域に分割して、各区域内の配電事業は民営による統制を行なう方針をたて、昭和六年十月、初めて電力統制計画の確立をみるにいたつた。

朝鮮における瓦斯供給事業は、早くから京城及び釜山の都市に行なわれ、いずれも電気事業者の兼営に属していた。その後昭和十二年に平壤、つづいて大邱、仁川、清津、雄基、



羅津、新義州等にも行なわれた。

電気及び瓦斯事業は、何れも特殊の技術と大資本を要するため、小企業には不適、殊に工業の勃興により電力の供給が電気事業の主要部を占めるにいたり、電気事業は地方都市分立から漸次合併統一に進んで大企業の経営形態を採るにいたり、さらに電気会社で鉄道、軌道、瓦斯事業を兼営する会社があつてきた。

従つてこれら諸会社の所要資金は、ほとんど自己資本または親会社からの融資によるほか、社債の形式で充足され、当行債券引受業務として各社債を引受けたもの多く、その取扱高は年々増大した。当行は従来工場財団抵当の方法により、地方電気会社にたいし直接融資の途をひらき、その助成につとめてきたが、電気事業の統制と大企業経営化に伴い、社債形式による融資に移行するものが多くなつた。

## 醸造

朝鮮は米をはじめ大豆、麦、玉蜀黍、馬鈴薯等の醸造原料を多量に産し、とりわけ、米は穀良都、雄町、錦、日之出、亀ノ尾種等、酒造米として好適、大豆は味噌、醤油の醸造原料として適し、酒造米とともに日本内地当業者間に愛用され、移出額は年々ふえていた。

従来鮮内には清酒の醸造少なく、多く移入品によつていた

その発展に尽力してきた。

## 土木

朝鮮は各種の土木施設が永い間に頻りに頻りに、これが原因となつて禿山荒蕪地がいたるところにあらわれ、一度雨が降れば多くの水害と土砂を流出して道路橋梁に被害を及ぼし、その他田土の喪失、農・工作物の被害は産業諸施設の普及とともに、益々累増するにいたつた。もともと土木事業の振興は資源開発の根源をなし、その成否は一国産業経済の発展に甚大な影響を及ぼすので、当局は統監府時代から砂防工事と相まつて、治山治水の途を講じ、道路、港湾を改修拡張して交通運輸の便をはかり、市街地を整理して近代的都市の形態を整える等、その施設多岐にわたり、多額の資金が本事業のために投下されてきた。

そして当局は、まず全鮮二十数万町歩にわたる禿山の絶滅を企図し、造林事業と相まつて、大正七年度以降、荒蕪最も甚だしい南鮮地方を主として、国営または国庫補助事業として砂防工事に着手し、特に昭和六年以降窮民救済並びに時局応急施設砂防事業として、巨費を投じて砂防工事を完了した。また大正十四年以降、万頃、載寧二江の改修をはじめ漢江、洛東江、竜興江等の河川改修を行ない、さらに昭和十一年夏季の水害に鑑み、東津江、梁山江、南江放水、三橋川ほか二

が、漸次、京城、平壤、馬山等に清酒醸造業がさかんになつてきた。焼酎は需要多く京城と元山以北の西・北鮮地方一帯で作られ、原料は粳米、高粱、その他雑穀を用い、一部工場では糖蜜も使用していた。麦酒は昭和八年末、朝鮮麦酒と昭和麒麟麦酒株式会社が京城に工場を設置して醸造を開始したので自給できるようになつた。そのほか、醤油、味噌の醸造もだんだん盛んになつた。

朝鮮酒はその歴史古く、鮮産酒類総石数の七割強、酒税額でも五割強を占めていた。

鮮内酒造業の過半は藥酒、濁酒等の朝鮮酒に属し、その分布は中・南鮮地方八道を主とし、朝鮮酒醸造高の殆んどすべてをこの地方から出していた。朝鮮酒は麴子を原料とし、醸造方は比較的容易、設備も簡単なので、小資本で経営し得るため小規模業者が多く、ために粗悪品が市場を攪乱する実情に鑑み、昭和十年鮮内税務行政機構の改正に伴い、統制のため朝鮮酒酒造組合の設立をみるにいたつた。

朝鮮の醸造業は、糖蜜焼酎のほかは中・小企業に属し、当局の監督指導の下に、事業は安定を保ち、その収益は確実なので、当行融資は安全確実なものとされ、酒、醤油、食酢等の醸造方面に多くの資金が貸出された。その他当行は、監督官庁と緊密な連絡の下に、酒造組合、麴子製造会社にたいしても原料手当資金並びに製造場建設資金等の各債貸付をなし、

百五十三の中・小河川を改修するとともに、荒蕪林野二十三万町歩にたいし砂防工事を施行した。

また朝鮮は三面海に囲まれ、大陸への基地として国防交通上重要な地位にあるので、港湾の修築、海陸連絡の設備については、統監府時代釜山、仁川をはじめ十一箇所の開港場にたいし直接国営で応急的施設をなすとともに、他面、地方の商港、漁港、避難港の設備の不完全なものが多いので、大正元年以来、その急を要するものには国庫補助の方法をとり、道、府、邑、面の地方公共団体に工事を施行せしめる等、鋭意これが施設につとめた結果、鮮内における港湾の設備は、著しく整備されるにいたつた。一方海陸交通運輸の頻繁と漁業の発達に伴い、地方港湾の施設は急を要し、昭和六年以降数次にわたる窮民救済並びに時局応急施設土木工事として江口港ほか三十五漁港の修築を実施した。

道路の発達には産業の発展上欠くことのできないものであり、特に鉄道培養の性質を有するので、始政以来特に意を用い、まず明治四十四年以来七箇年継続事業として一千万円を計上一・二等道路は国費経営、三等道路以下は道・府費により建設工事を行ない、道路網の確立をはかるとともに、さらに治道第二期工事として三千三百余万円を計上して、道路の開発を急いだ。一面、窮民救済並びに時局応急土木事業として、その過半の金額を一・二等道路、金山道路の建設並びに林道

の改修費に投じ、鮮内道路の施設は面目を一新するにいたつた。

市街地の諸施設は統一を欠き、旧韓国時代すでに仁川、大邱二市街が改正されたが総督府施政後、都市経済の発展、人口の都市集中とともに、本計画は漸次緊要の課題となるに及んで、当局は開港場、清所所在地の主要都市にたいして施行する方針をとり、特に京城には国費で施工した。しかるに未だ都市経営にかんする根本的制度的確立がなかつたため、これが指導標準を定める必要を認め、昭和九年、朝鮮市街地計画令を公布して、都市の区画、道路の改正にかんする方針を樹立した。そしてこれにもとずき国庫補助を以つて地方公共団体を主体として先ず京城はじめ主要十一都市に工事を施行、つづいて大田、群山、金州、開城、鎮南浦、元山等に施行した。右のように、土木事業の範囲は多岐にわたり、年々多額の国費が本事業のために投ぜられた。特に昭和六年度以降、不況対策として行なわれた土木事業は、従来の国土保存、産業開発というだけでなく、さらに社会政策的に一段と躍進した。

土木事業費総支出は旧韓国の財政顧問時代から昭和十一年にいたる間四億一千五十余万円の巨額に上り、このうち国費直轄による二億円を除いても、道、府、邑、面の施行に属する費用は二億一千万円を算し、うち、国庫補助額九千四百余

万円を除いてもなお、一億一千五百余万円は地方公共団体の負担に属するものであつた。昭和六年以降の窮民救済及び時局応急土木事業は、共に国庫補助による道、府の経営が大部分を占め、しかも所要資金は殆んど当行引受けによる地方債によつて調達されたので、直接本項融資にかかるものは少額にすぎないけれども、このほか道、府の河川改修、護岸工事のような治水事業、海面埋立工事、築港並びに市街地造成事業等で、当行資金により工事を施行したものも少なくかつた。これら公共団体にたいする融資のほか、一般産業資金としての方面への融資も多額に上つていた。

#### 鉱業

朝鮮は地下資源に富み、金など早くから採掘されたが、いろいろの事情で中絶し、日清戦争後外国人により、僅かに七八の金鉱が開発されたに過ぎなかつた。統監府設置以来鉱業法、砂鉄採取法を公布し、つづいて大正四年、朝鮮鉱業令を公布して鉱業権を保護するとともに、鉱業権者の資格を限定して、経営の便宜を与えた。これより先当局は、明治四十四年以降七箇年にわたり鉱床を調査してこれを発表し、また鉱業教育を開始して技術者を養成する等、企業者の便をはかつた。ここに半島鉱業は面目を一新し、欧州大戦勃発以来、日本内地実業家の半島鉱業に着目するものも多く、久原鉱業株

式会社について日本金属株式会社所属選鉱所並びに三菱鉱業株式会社兼二浦製鉄所の事業開始等があつて、朝鮮鉱業開発の先駆となつた。大戦終了後、財界変動の影響を受けて不振に陥つたが、当局は保留炭田及び金山を民間に解放して援助した。あたかも満州事変の勃発、金輸出再禁止を契機として

金市価の昂騰に刺激され朝鮮の産金事業はふたたびさかんなつた。特に金鉱業は当局の産金奨励に活況を呈し、ひいては、わが国内に産出稀少な水鉛、タングステン、ニッケル、アンチモニー、鉛、亜鉛等、戦時有用鉱物をはじめ明礬石、マグネサイトのような軽金属原鉱の発見、その他特種重要鉱物の発見やその開発を見るにいたつた。ついで日華事変の拡大とともに国際収支決済資金としての金の増産及び軍需工業資源としての鉄、石炭その他の重要鉱物の積極的開発が企図されるにいたつた。産金の増加にたいしては、昭和十二年九月、朝鮮産金令の公布をみたが、わが国産金五箇年百三十五屯増産計画の樹立にたいし、朝鮮はその傘下に五割五分、年産七十五屯の増産計画をたて、日本産金振興株式会社の設立とともに、本会社を通じて一億九千万円の事業資金が融通された。その他銀、銅、鉛以下重要鉱物の積極的開発にたいしても、昭和十三年、朝鮮重要鉱物増産令の公布と相まつて拍車がかけられた。

金は鮮内各地に分布し、大鉱山の中には自家製錬をなすも

の多く、また採取の容易な砂金が広い地域に出るので、ゴールド・ドレッヂヤーによる大規模な採取が行なわれた。主な鉱山は雲山・大楡洞金山をはじめ、豊津・成興鉱山、金堤砂金鉱、順安、金井、光陽、遂安、義州、新延等の諸金山で、年産百万円以上の鉱山だけでも十以上に上つた。

鉄鉱は主に褐鉄鉱、赤鉄鉱で、その埋蔵量は五〇%以上のものは二千万屯内外に過ぎないが、茂山磁鉄鉱床が発見されて、鉄の埋蔵量は一億十億屯と推定され、その平均品位も四〇%以上で、このほか載寧、殷栗、价川、利原等の鉱山があつた。

石炭は無煙炭、褐炭の二種があり、前者は発熱量多く、煉炭として家庭用及び海軍用燃料として知られ、後者は工場・鉄道用燃料として、また石炭液化工業原料として使用された。無煙炭は主に平安南道、褐炭は咸鏡北道に産し、総埋蔵量二十一億屯、六割余は無煙炭と推定された。平壤、价川、寧越、三陟無煙炭田及び有煙炭の遊仙・阿吾地炭田等が知られていた。

黒鉛は電気化学工業の進展に伴つて産額激増、世界一の生産高をみるにいたつた。その多くは土状黒鉛で、慶尚北道、忠清北道、咸鏡南道に、鱗状黒鉛は平安北道に産出し、その大部分を日本内地へ移出してきた。

タングステンは軍需工業のさかんなるに伴い活況を呈し、



黄海道百年鉱山等がその主なものであった。

その他特殊鋼合金材料、軽金属材料、有用非金属鉱物等は、その種類多く、マグネシウム原鉱たるマグネサイト、アルミニウム原鉱たる明礬石、礬土頁岩、リシウム原鉱たるリシヤ雲母及びケンコルド雲母、ニッケル鉱、コバルト鉱等重要鉱物が産出された。

朝鮮の鉱業は欧州大戦を契機として、日本内地資本の流入により大規模に開発されるにいたつたが、金鉱が鮮内各地にあつて開発が比較的容易なため、小規模鉱業がいたるところに行なわれ、これらが朝鮮鉱業界に大きく貢献した。当行は、従来専ら小企業家の融資に任じてきたが、鉱業の大規模経営化に伴い、従来比較的金融に恵まれなかつた新業にたいし、あるいは株式の応募によつて企業に参加し、その他融資の途をひらいて開発資金を疎通する等、その発展を援助した。貸付金は金銀鉱をはじめ諸原鉱の採掘及び運搬、製錬、その他の所要資金に充当され、鉱業資源の積極的开发に伴い、資金の需要は一層増大した。

#### 商 業

朝鮮人間の商取引は、物々交換時代の遺物ともいふべき旧式市場取引が専ら行なわれ、取引高も僅少であつたが、日本人の移住が増加するに従い、常設店舗で商業を営むもの増加

し、各市街地には、会社または一個人経営にかかる大商店、百貨店もあらわれ、店舗の構造、取引の方法においても格段の進歩を示すにいたつた。朝鮮における市場取引は商業上最も重要な役目をなし、殊に都會地以外では穀物、塩、乾魚、綿糸布、雜貨等の必需品売買は、ほとんど市場を通じて行なわれていた。当局は在来の市場取引が朝鮮経済におよぼす影響を考え、その円滑な発達を企図し、大正三年、市場規則を公布して市場の組織及び監督にかんする規定を設け、昭和二年には市場税をも撤廃して取引の発展助成につとめた。商業の発展に伴い、商事経営会社も急激に増加したが、当局は明治四十四年、会社令を公布して、商業の大規模経営の指導につとめるとともに、大正九年、これを廃止して朝鮮民事令によることとした結果、財界好況の影響と相まつて商取引はさかんになつた。

朝鮮の商業は在来の市場取引が多く、商品も鮮産品が多額を占めていたが、農民の生活向上と農村購買力の増加に伴い物資の需要漸次増大し、従つて移入品も逐年増加した。同時に鮮内の工業も発展して生活必需品などは徐々に自給可能となり、一部ホウロウ鉄器、電球、水産罐詰品等は輸出出されるようになり、鮮産品商賣の拡大、取引高の増加とともに貿易額も急増した。商品別にみると輸移出品は米、肥料、大豆、銅、鉄、生糸、綿綿、魚油、木材、石炭等が主要なもの

で、輸移入品は機械類、肥料、絹、綿織物、綿綿、粟、石炭、木材、紙、肌衣、毛織物等であつた。毎年の変化をみると、輸移出では米を主とする農産物並びに水産物が依然として輸移出品総額の半ばを占めていたが、昭和初年になつて肥料、鉄、銅、木材、石炭等も増加した。また輸移入品では、各種綿、絹、毛織物等が首位を占め、機械類、鉄条竿及び板の鉄製品、肥料、石油、綿綿、石炭、木材等、何れも増加した。

朝鮮の商業が長足の進歩をとげたのは、一つには一般経済事情の発展によるものであるが、他方には多年商工業者の自治団体として活動した商工会議所に負うところが多い。商工会議所は、もと商業會議所と称し、多くは府制実施地で日鮮人別に設立され、ついで大正四年、朝鮮商業會議所令の公布によつて日鮮人合同による商業會議所が創設されたが、さらに昭和五年、朝鮮商工会議所令の公布により、名称を改めるとともに純然たる商工業者の自治団体として一層商工業の発達をはかるにいたつた。昭和七年にはこれら商工会議所の綜合機關たる朝鮮商工会議所が設立された。

鮮内の商業地は京城を中心とし、その他釜山、仁川、鎮南浦、新義州、群山、元山、清津等の開港地、および平壤、大邱、開城等を主とし、それぞれの地方を商圏としてさかんであつた。朝鮮人は概して在来の商業または輸移入品の小売等に従事し、日本人及び商事会社は主要都市に本拠をもつて、

貿易に従事する外、輸移出入品の卸小売に従事してきた。中國商人は全鮮都鄙の別なく、綿糸布、諸雜貨商を営み、商權牢固たるものがあつたが、昭和六年の万宝山事件に発した鮮・華人衝突事件及び昭和十二年の日華事變を契機として著しくその勢力を失墜した。

取引所は明治三十二年米株式会社仁川米豆取引所があつたが、昭和七年新取引所令施行とともに、群山、木浦、大邱、釜山、鎮南浦の五カ所に會員組織の米穀取引所の設立を見、既存仁川取引所、京城取引所は合併して株式会社朝鮮取引所を設立し、仁川において米、豆の清算取引を、京城では有価証券の清算取引及び実物取引を行なつていた。

当行が年賦又は定期の方法により取扱う商業資金の貸付け、主として店舗の新設拡張並びに運轉資金の充実等、商業の基礎をなす資金で、短期貸付を普通とする商業金融に、この長期資金の貸出しを必要とする所以は、朝鮮の経済状態が、未だ幼稚な段階にあつて、担保となる財産が、土地家屋のよる長期金融の目的としてふさわしいかたちであること、並びに朝鮮の商業がまだ草創の時代にあつて、かかる基本的資金を必要とするに依るものであつた。

#### 土地家屋

朝鮮は政治経済の発展、文化の進歩、交通機關の発達、商

年 月	公 称 資 本 金		払 込 金 額 収 高		払 込 資 本 金
	金 額	株 数	回 次	摘 要	
大正七年十月	一〇〇〇〇〇〇〇円	二〇〇〇〇〇株	第一回	政府持株は全額その 他は一株に付二〇円	四一九七九四〇円
八年七月			第二回	政府持株以外一株に つき一〇円	六一一三一九六〇
八年十月			第三回	同	八〇六五九八〇

資本金増加並びに払込表

四、附 表

つて個人間の貸借は多額に上り、また土地兼併による細農の増加、並びに家族制度上の欠陥等が原因となつて、高利の負債がかさみ、或いはまた短期金融を業とする者で、好景氣時代知らぬ間に不動産を担保とする金融をして資金の固定に苦しむ結果、旧債の整理または債権の肩代りを当行に求める者が少なくなかつた。このように金利の未だに高率なこと、および資金の固定することは、つまり鮮内遊資の不足と不動産投資の旺盛なことに由るもので、低利の資金を豊富に供給し、高利の旧債を整理することは、当行の使命の一つであつた。

右の短期資金の不動産固定化に苦しむ金融機関並びに高利

債の負担に苦しむ農村の疲弊は深刻で、救済を要するものが少なくなかつた。当局は昭和七年農村振興運動の一つとして、取敢えず金融組合をして一組合員にたいし最高一千元を限度とし、高利債の整理に着手せしめたが、中・大農等にあつても高利債整理の必要があつたので、これらは当行に救済を求められ、その要望は金利低下、不動産価格の騰貴に刺戟されて一層盛んになつた。当行は、長期金融の使命にかんがみ、農耕地その他を担保とするこの種貸借については、実情を調査の上、当行の利益に反しない限り、債権債務両者の便をはかり救済に當つて、農山漁村の救済更生に貢献した。

工業の進展を原因として漸次人口都市集中の傾向が起り、市街地は当時急速なる発展をとげた。とりわけ鮮内工業の全面的発展にもとづく新興都市の出現は特筆に値するもので、鉄道の整備、地上、地下資源の開発とともに市街の分布も普遍化されるにいたり、特に西・北鮮における工業の発展とこれに伴う都市の勃興は、従来中・南鮮偏重の朝鮮に特異な存在を示すにいたつた。

市街ともいふべき府、邑は昭和十一年末現在、府十八、邑四十六に達した。これら都市のうち、発展の最も著しかったのは政治経済の中心地たる京城府で、わが国の大陸連絡の関門をなす釜山府、工業都市に飛躍した平壤府これにつぎ、大邱、仁川、元山、清津、咸興の諸府も、人口増加の趨勢にあつた。都市発達の原因としては、政治、文化にもとづくもの、あるいは港湾、鉄道を背景とし、その他舟運または漁業根拠地として発達せるもの等、多様であつたが、さらに近代的大工業の所在地として発達したものも少なくなかつた。

都市経済力の充実にともに、市街地は急激に発展し、人口の集中傾向はいよいよ激しくなり、従つて住宅並びに貸家用土地家屋購入、並びに家屋建築資金の需要等、累年増加し、これら所要資金は当行の本項貸付金をもつて充當した。

旧 債 整 理

商工業の急速な発展と都市経済の充実に伴い、市街地土地家屋等の不動産並びに産業の全面的高度化による鉄道、工場、鉱業、軌道、自動車交通事業等諸財団の構成により、これら有機的綜合財産も担保物件として漸次重要視されるにいたり、従来における農業偏重の朝鮮経済は、そのかたちを著しく複雑化した。しかるに経済の中心をかたちづくるものは、依然として農業であり、従つてその信用の基礎をなす財産も、農耕地を主とする不動産であつた。不動産の担保力は、土地調査事業の完了並びに朝鮮不動産登記令の実施をはじめ、関係諸法規の完備とともに増進し、不動産を担保とする金融は、ひとり長期金融機関によつて取扱われるだけでなく、ひろく普通銀行、金融組合並びに個人間においても行なわれていた。いま鮮内銀行貸出金について不動産並びに財団担当貸付をみると、その割合は漸次減少したとはいへ、なお鮮内銀行貸出金の四割弱に達し、そのほか、不動産信用にかんする融資額並びに金融組合、東洋拓殖株式会社、の不動産担保貸付を加算するときは、その割合五割強に達した。これに巨額の不動産担保個人貸付を考えると、鮮内金融は不動産を中心とするものであつたといふことができる。

不動産金融は、当行をはじめ諸金融機関の発達によつて円滑となり、貸出金利も低下して日本内地の金利に近くなつたが、未だ農村には金融機関利用の途を知らない者が多く、従

年次	債券発行残高	諸預り金残高	諸借入金残高	合計
十一年末	八、二五〇、〇〇〇	三、五〇五、〇九五	一、五八五、〇〇〇	一三、三三〇、〇九五
十一年末	一〇〇、二五〇、〇〇〇	四〇、三三〇、三九二	一、四〇〇、〇〇〇	一五、四六〇、〇〇〇
十三年末	一、一八八、〇〇〇、〇〇〇	四三、九四八、七二一	四二、〇〇〇、〇〇〇	一、六六八、九四八、七二一
十四年末	一、三三九、七六〇、〇〇〇	四九、四一六、九九五	一、二〇〇、〇〇〇	一、八六八、九七六、九九五
昭和元年末	一、四四八、三七〇、〇〇〇	五三、七六九、八六四	四七〇、〇〇〇	二、〇三三、〇〇八、六六四
二年末	一、七三三、四四四、〇〇〇	五二、四八二、九三〇	一、二〇〇、〇〇〇	二、二六六、一三六、九三〇
三年末	一、七三三、二二〇、〇〇〇	六二、五九八、六二八	〇	二、三五八、三二八、六二八
四年末	一、九九六、八五〇、〇〇〇	五八、三二七、四二二	四〇〇、〇〇〇	二、五八八、〇一六、四二二
五年末	二、四二一、一五八、〇〇〇	四六、九二八、一七七	二、六〇〇、〇〇〇	二、九一八、六八六、一七七
六年末	二、四七五、五八〇、〇〇〇	五五、五九八、七三三	七〇〇、〇〇〇	三、一〇一、五六八、七三三
七年末	二、六〇、九八二、八〇〇	五六、六四七、五四四	一、五〇〇、〇〇〇	三、三三三、〇四〇、三四四
八年末	二、五三、四八二、〇〇〇	八二、二七〇、四三五	二、一〇〇、〇〇〇	三、五六七、五二四、三五
九年末	二、四四九、五五七、〇〇〇	九八、八〇六、六〇一	四二八、〇〇〇	三、八六六、五六二、三〇一
十年末	二、七八六、七四一、〇〇〇	一二三、三九九、七一八	二、九四〇、〇〇〇	四、三三〇、四七三、八一八
十一年末	三、二六二、三〇八、〇〇〇	一二五、八五七、三〇五	五、一六〇、〇〇〇	五、〇三六、八八八、一〇五
十二年末	三、四四六、五六二、〇〇〇	一二七、二二六、四二六	七三九、五九一、一五	五、四五五、三八八、五八一
十三年末	三、八九五、七三六、〇〇〇	一八七、四七三、六五五	四、一二〇、〇〇〇	六、一八三、二四六、二五五

貸出引当金残高表

年次	債券発行残高	諸預り金残高	諸借入金残高	合計
大正七年末	三、〇〇〇、〇〇〇	一、四三九、四四二、〇	六八八、九四七、一六	二、四二八、八九一、三六
八年末	一、七五〇、〇〇〇	三二、九一六、〇四九	一、二二九、七四〇、二	六、一七一、三四五、一
九年末	三、三四五、〇〇〇	三、五一八、一八八、〇	九五〇、八〇〇、〇	七、八一三、九八八、〇
十年末	四、九五五、〇〇〇	三七〇、六七三、五八	二、七〇三、四〇〇、〇	一、一三六、五一三、五八

年次	債券発行残高	諸預り金残高	諸借入金残高	合計
大正九年一月	三、〇〇〇、〇〇〇	一、四三九、四四二、〇	六八八、九四七、一六	二、四二八、八九一、三六
昭和四年五月	三、〇〇〇、〇〇〇	一、四三九、四四二、〇	六八八、九四七、一六	二、四二八、八九一、三六
十年九月	三、〇〇〇、〇〇〇	一、四三九、四四二、〇	六八八、九四七、一六	二、四二八、八九一、三六
十二年七月	三、〇〇〇、〇〇〇	一、四三九、四四二、〇	六八八、九四七、一六	二、四二八、八九一、三六
十四年	三、〇〇〇、〇〇〇	一、四三九、四四二、〇	六八八、九四七、一六	二、四二八、八九一、三六
十五年	三、〇〇〇、〇〇〇	一、四三九、四四二、〇	六八八、九四七、一六	二、四二八、八九一、三六
十六年	三、〇〇〇、〇〇〇	一、四三九、四四二、〇	六八八、九四七、一六	二、四二八、八九一、三六



年次	産業及び公共貸付残高	商業貸付残高	合計
大正十三年末	一二五、二五〇、四五九	五三、七二一、九一三	一七八、九七二、三七二
十四年末	一三八、四〇四、三九八	五六、二〇六、一〇六	一九四、六一〇、五〇四
昭和元年末	一五〇、四三三、五四二	六〇、五〇〇、六一四	二一〇、九三三、六一六
二年末	一七四、五七〇、二八四	六〇、六九九、二二四	二三五、二六九、五〇八
三年末	一八六、八二二、四八一	六、八七六、一一四	二四八、六九九、五九五
四年末	二〇七、三五四、七八六	六、七二五、三八八	二六九、〇八〇、一七四
五年末	二四六、八四〇、七八二	五五、一一五、九二一	三〇一、九五六、七〇三
六年末	二五〇、二八五、二八一	六九、五四五、〇三五	三一九、八三〇、三六六
七年末	二六七、七〇二、一一五	七七、六九三、五五七	三四五、三九五、六七二
八年末	二五〇、三八五、六七九	九〇、六六七、二五四	三四一、〇五二、九三三
九年末	二四一、四八二、八三五	一二八、一八四、六八一	三六九、六六七、五六一
十年末	二六六、九七一、六六六	一五三、五六三、二四五	四一九、五三三、九一一
十一年末	三三二、一七四、五〇七	一五六、七九七、〇四五	四八八、九七一、五五二
十二年末	三六三、六九五、八二五	一七、一八七、〇九三	五三三、五五六、七六三
十三年末	三九六、一七五、四八〇	一八、八一三、二三四	五八四、二八八、七一四
十四年末	四八六、八八九、二五〇	三〇、二一六、二〇三	七八九、〇五、二九〇
十五年末	四九三、八一四、五二二	四五、四四四、一一七	九四八、二五五、六三九

主要貸出残高表

年次	産業及び公共貸付残高	商業貸付残高	合計
大正七年末	八、一一六、七〇九	二、七二二、一〇九	二九、八三九、八一八
八年末	二七、四三三、四八七	四、六八四、〇二二	六九、一一七、五〇九
九年末	四八、一三九、六一〇	三三、〇六四、四九九	八、二〇四、〇六九
十年末	七三、七一、二一四	五三、二一、〇七三	一二六、九二二、二八七
十一年末	九八、九二九、二四八	四七、六二四、一二二	一四六、五五三、三七〇
十二年末	一一四、七四六、二三八	五、〇九八、二七〇	一六五、八四四、五〇八

年次	産業及び公共貸付残高	商業貸付残高	合計
昭和十四年末	四四〇、三二八、二〇〇	二五〇、六七七、一三三	七九九、六六六、一七七
十五年末	五七七、〇一九、三〇〇	三三〇、四五七、〇五八	五八、九三〇、〇〇〇
十六年末	六四五、九三三、三〇〇	四〇二、四九〇、五四三	八四、五五〇、〇〇〇
十七年末	七六五、六八七、三〇〇	五六〇、五八四、一二六	一〇四、〇〇〇、〇〇〇
十八年九月	八七四、九六八、五〇〇	五八五、二四六、一〇五	四七、五〇〇、〇〇〇
十九年三月	九四六、〇〇八、八〇〇	九一、三三三、八二一	六二、二六五、一一一
二十年三月	九六八、八九〇、五〇〇	一一七、八八七、四二八	一九九、三八二、八六五



株式債	八、九九〇、一七五、〇〇〇	特殊預金	二、五九一、九六一、五七三
公共貸出金勘定	四、二五九、九二二、五九〇	普通預金	二、三九八、九四六、四〇〇
割賦貸付	五、七八五、七五一、〇二〇	借用金勘定	三、二八一、九六七、〇二六
定期貸付	一、六六七、四二五、九〇四	預金部長期資金	一、二八九、三〇四、三八八
産業貸出金勘定	四、一八三、五一、五九	借入金	四、四二二、三〇〇、〇〇〇
割賦貸付	二、四一、一八〇、二八四、九五	当座借越	一、二三六、〇〇〇、〇〇〇
定期貸付	一、五三八、三六六、一四、二三	コールマネー	九〇八、一三八、八八
引受債券	八、七三三、四三六、七〇七	債券勘定	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
商業貸出金勘定	三、九七〇、四九六、二〇〇	朝鮮殖産債券発行高	一、〇〇四、六九七、六五一
商業手形	九、八四八、〇六九、九四、四五	当議高	九、六七五、九二六、〇〇〇
荷付為替手形	二、五七三、七六九、二六〇	未払利息	一、九八四、七〇〇、〇〇〇
手形貸付	一、九一七、七三九、八九	愛国債券発行高	五、一三六、三九五、三
証書貸付	七、九八八、四八四、五九、六五	未払割増金	二、七四〇、〇〇〇、〇〇〇
当座貸越	一、一、九六六、二九七、六七	福票発行高	三、七九四、五四五、六一
銀行引受手形	一、四〇、七三六、八〇、四、六四	福票未払割増金	三、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
戦時金融庫代理貸付	五、六〇〇、〇〇〇、〇〇〇	政府貸下金	四、一、二一八、〇〇〇
未決済為替貸	二、六五一、〇〇〇、〇〇〇	戦時金融庫振込金	一、四五九、九八〇、六〇〇
他店勘定	三、五〇八、〇四七、七四	未決済為替借	二、六五一、〇〇〇、〇〇〇
当方口預け	六、八七三、三三三、三九	他店勘定	二、六三七、三、四三、五六八
他方口貸越	四、七、五九七、四二	当方口借越	三、八一三、八三〇、三五
支払承諾見返	二、一五七、三九、九七	他方口預り	三、五〇九、五九
	七、九三六、三、四、一〇		三、八一〇、三二〇、七六

綜合貸借対照表

昭和二十年五月三十一日現在

昭和十六年末	十七年末	十八年九月	十九年三月	二十年三月
五一、二七五、三九八	五二、九八二、三、五三四	五九、九一九、四、六七四	七二、五二六、八、九九六	八〇、〇五八、〇、三一、二
五九、四二四、八〇六	七一、八八九、三、九八七	七一、〇四五、七、二九九	七五、六〇六、五、四四〇	九七、一〇九、〇、六六六
一、一〇五、五二、三、四六〇	一、二四八、七六、三、四一三	一、三〇九、六五、一、九七三	一、四八一、三三、四、四三六	一、七七七、一、六七〇、九七八

資産

負債

負債

負債

現金預け金勘定

預金勘定

一、一四一、一七八、一、八一

現金

当座預金

二、一三八、四〇八、〇、八一三

(内小切手)

特別当座預金

二、九一〇、二二四、五、一、一五

当座預け金

通知預金

九、四八六、四六六、一、五九

為替決済預け金

定期預金

四、四八二、七九五、一、九二

郵便振替貯金

別段預金

五〇、三八七、五四三、八〇

コールローン

国民貯蓄組合預金

六、七七五、四〇、四

有価証券勘定

納税準備預金

五、七六六、三六八、三

国債

国債貯金

九、〇六八、七〇〇、二、八

動産 不動産 勘定	七四六、七六五、三九六	日本勸業銀行代理店	一一六、二四〇、三〇〇
営業用土地	三六九、二五〇、九八八	支払 承諾	七九三、六三四、一〇〇
営業用建物	三六八、四〇〇、〇〇〇	雑 勘定	一四八、〇四二、四七九、五
所有動産 不動産	九、一四三、九八	未分配当金	一、六〇七、七〇八、一三
雑 勘定	一四〇、一五七、九四六、六	納税積立金	一、二五〇、八三三、〇〇
仮払金	一、三五九、八〇八、六九三	受入諸税	一、四六一、九六三、九六
新築費	四一七、七〇七、七三	仮受金	三五〇、二六四、二三一
債券 勘定	一四四、三三〇、三七九、四	本支店間未達	六九八、一一〇、四五五
朝鮮殖産債券未経過割引料	三八三、三八七、五〇	株 主 勘定	九五九、九一、四九四、〇〇
愛国債券割増金繰替金	一、二六三、五五一、〇、四四	資本金	六〇〇、〇〇〇、〇〇〇
福票割増金繰替金	一、四一四、一四〇、〇〇	欠損補填準備金	二〇六、八一、二、四〇〇
払込未済資本金	七五〇、〇〇〇、〇〇〇	配当平均準備金	七二〇、四〇〇、〇〇〇
損失金	一三八、三四九、四七、八五	別途積立金	六〇六、二七〇、〇〇
合 計	二五三七、三三四、一八四、三一	特別積立金	七五〇、〇〇〇、〇〇〇
		損 益 勘定	三九〇、〇五七、三五、二四
		前期繰越金	二、二六八、九〇八、七二
		当期利益金	三七六、三六八、二六、五二
		合 計	二五三七、三三四、一八四、三一

(終)

(朝鮮統治関係重要文獻)  
金融関係資料

朝鮮に於ける無尽業の発達

古 庄 逸 夫

朝鮮の無尽業は、明治二十年頃、日本人の朝鮮移住が漸く数を増すようになり、その居留者達が互いに資金の調達を図るため、日本古来の旧慣である無尽講をはじめたことに始まつたとされている。この無尽講は、日本では、鎌倉、室町時代の昔から昔ねく行なわれてきたもので、当時、金融制の未熟な朝鮮に渡つた日本人の間に、この旧慣が行なわれ出したことは自然の成り行きと考えられる。

この無尽も当初は、居留日本人の間に、小規模な金融手段として行なわれていたが、やがて、日清、日露の両戦役を経て、韓国統監府が設置される頃には、それが官利的な色彩を帯びた金融機関となり、その組成制度は、漸次、日本人の専管居住地から、更にはこれに準ずる日本人居住地区を中心に発達普及するに至り、大正十年七月末現在に於ける営業者数七十七（管理者を含む）、その取扱ひ講数七百七十、口数二

## 一、朝鮮無尽業令の実施

### 朝鮮に於ける無尽業の発達

古 庄 逸 夫

万八千七百十口、給付金契約高三千百余万元に達し、庶民金融機関として、相当大きな活動をなすに至つた。

かくて、営業者の数も逐年増加の趨勢を示し、総督府当局も漸く、その健全な発展をはかる必要を認め、その取締り法規の制定を見た。

即ち、この当時、無尽業を営もうとする会社を設立するには、会社令により、朝鮮総督の許可を受けなければならなかつたが、これに関する取締り法規はなく、殊に、会社に非ざる個人業者の場合は、全く野放しの状態であつた。しかも上述のように、無尽業者の数は年々増加し、講元と加入者との関係も複雑化し、只に、無尽業自体の発達のためのみでなく加入者保護の立場からも、その取締り監督の必要に迫られるに至つたのである。

又、あたかもその頃、京城、釜山、平壤、大邱等の大都市には、無尽業会社設立を企てる向きも現われ、無尽業に対する統一的な基準法規の制定は痛切なものとなり、それは、一

目次	
一、朝鮮無尽業令の実施	197
二、都市別設立期	198
三、朝鮮無尽協会の設立	200
四、朝鮮無尽業令の改正	200
五、道単位統制期	201
六、全鮮一社統制期	203
七、朝鮮無尽の業務運営	205
八、終戦前後の事情	208

般の要望でもあつた。

ここに於いて総督府は、大正十一年四月二十二日、制令第七号を以つて「朝鮮無尽業令」を公布、同年五月、同令施行規則を發布、八月一日その実施をみたのである。

その内容は、「無尽業ニ関シテハ、無尽業法ニ依ル」と、まず無尽業の法的根拠を明示し、それに若干の経過規定を設けている。即ち、

無尽業を免許營業するとともに、その資本金額に一定の制限を置き、その業務については、他業務の兼営を禁ずるとともに、營業上の資金の運用方法に厳格なる制限を加え、極めて確実なる投資以外はこれを許さない。

ことにしている。これは、加入者を保護すると共に、無尽業の堅実な發展を所期するための当然の措置であり、この制度は、すべて、日本内地の制度と同一内容のものである。

かくして朝鮮の無尽業は、ここに確固たる法的根拠の上にその健全なる發展が期せられたが、その後における發展経過をみるに、(1)都市別設立主義、(2)一道一社主義、(3)全鮮一社合同主義……と、三段階の發展の統制移行を行なつてゐる。即ち、朝鮮無尽令發布当初、その設立三十四社に及んだものが、最後には朝鮮無尽株式会社一社に大合同して、その堅実牢固な機能を発揮するに至つたのである。

以下、右三段階の時期を画して、その發展経過を見てみよう。

### 二、都市別設立期

朝鮮無尽令実施後、日本人の比較的多数が集団していた京城はじめ十二府、及び道庁所在地の面(後に邑に昇格)などの主要都市を中心区域として、各地に三万円乃至五十万円程度の資本金を有する無尽会社の設立を企圖して、その營業免許を受ける者が続出し、本令実施の大正十一年末までに、免許を受けて開業する者六社に達した。そして、その後は毎年その数を増し、昭和七年末には、その数三十四社(免許設立数は三十六社であるが、一社は合併、一社は解散)に及んだ。その免許会社を各設立年次別に挙げれば、次の通りである。

大正十一年	釜山無尽 (大正十一・十二・十四設)
	大邱無尽 (大正十一・十一・十三設)
	金泉無尽 (大正十一・十二・二六設)
	木浦無尽 (大正十一・十・十六設)
	仁川無尽 (大正十一・十二・七設)
	共濟無尽 (大正十一・十一・一設) (京城)
大正十二年	

### 朝鮮の無尽業

大八無尽 (大正十二・一・二〇設) (慶北)	馬山無尽 (大正十四・七・十一設)
浦項無尽 (大正十二・十・二設)	順天無尽 (大正十四・六・八設)
全州無尽 (大正十二・十二・二七設)	平壤無尽 (大正十四・九・十六設)
忠南無尽 (大正十二・十二・十九設)	大正十五年
忠北無尽 (大正十二・十・二十設)	会寧無尽 (大正十五・九・七設)
共立無尽 (大正十二・九・十二設) (京城)	昭和二年
福徳無尽 (大正十二・一・十九設) (京城)	開城無尽 (昭和二・五・十二設)
元山無尽 (大正十二・二・二七設)	鎮南浦無尽 (昭和二・五・三設)
咸興無尽 (大正十二・十二・十三設)	慶南無尽 (昭和二・五・三設)
協和無尽 (大正十二・二・九設) (咸北)	昭和三年
大正十三年	海州無尽 (昭和三・五・二二設)
統營無尽 (大正十三・五・二八設)	昭和四年
普州無尽 (大正十三・四・十設)	平安無尽 (昭和四・八・十四設) (平北)
朝陽無尽 (大正十三・二・十二設) (慶北)	雄基無尽 (昭和四・八・十設)
光州無尽 (大正十三・三・十九設)	昭和六年
群山無尽 (大正十三・二・一設)	沙里院無尽 (昭和六・十二・一設)
興業無尽 (大正十三・二・二三設) (京城)	昭和七年
殖産無尽 (大正十三・七・二五設) (京城)	裡里無尽 (昭和七・一・二五設)
清津無尽 (大正十三・四・五設)	(以上合計三十六社、昭和七年現在三十四社)
大正十四年	業績進展の状況
	昭和二年十二月末現在
	免許業者 三〇社



公称資本金 三五七万円（払込二二八万二千円）  
 給付金契約高 三五、八六八、九二〇円  
 昭和九年六月末現在  
 免許業者 三四社  
 公称資本金 四二四万円（払込一、六八四、三〇〇円）  
 給付金契約高 一〇二、六四八、一五〇円

右無尽業令実施後に於ける各社の業績は極めて順調に進展し、昭和二年十二月末現在、免許業者は三十社、その公称資本金は総計三百五十七万円（払込百二十八万二千円）、給付金契約高は総額三千五百八十六万八千九百二十円、それが、昭和九年六月末現在には、免許業者三十四社、公称資本金総額四百二十四万円（払込百六十八万四千三百円）、給付金契約高総額は、一億二百六十四万八千五百五十円、異状な飛躍振りを示している。

### 三、朝鮮無尽協会の設立

朝鮮の無尽業は上述のように非常に短期間のうちに、異状な発展を示し、その半島における庶民金融機関として占むる地位は、極めて牢固なものがあつた。ここに於いて、各業者

が互いに連絡提携して、一層新業の発展を図ろうとする機運が起こり、大正十三年四月、全鮮の無尽業者を打つて一九とする朝鮮無尽協会の設立を見た。そして、以来、毎年総会を開催、事業の公共的立場から種々協調して互いの発展を策してきたが、昭和十七年、無尽会社の新鮮統一統制の完了とともに、その任務を果して自然消滅のかたちで解散した。

### 四、朝鮮無尽業令の改正

昭和六年一月、総督府は朝鮮に於ける無尽業の発展と朝鮮経済の飛躍的傾向に鑑み、無尽業令の全面的改正を立案、朝鮮金融制度調査会に付議してその成案を得、同年六月九日、制令第七号を以つて、朝鮮無尽業令全文の改正を行ない、これに伴つて、同令施行規則も、同月二十五日、府令を以つて改正された。

この改正は、加入者の保護をより十分にするとともに、無尽業の本質である庶民金融の円滑なる運営を期することが大体的方針となされた。即ち、加入者保護の方策としては、無尽業の経営主体を強化するため、その組織を株式会社に限定、また法定最低資本金額を十万円に引き上げるとともに、法定積立金も従前の倍額に引き上げ、これにより信用の向上と経営基礎の強化を期するとともに、新たに未払無尽給付金の支

払い準備を法定し、未払会社の清算事務の監督を行政官庁に移属させた。一方、無尽業の本質を十分に生かして、庶民金融の円滑な機能を發揮させるため、加入者に対し、その既払込金額を限度として無制限に貸付けることが出来るようにした反面、一人に対する担保貸付金額に一定の制限を設けて、大口貸付の弊を除き、専ら、無尽業本来の職能を規定づけることにより、併せて、その在り方を明らかにしたのである。

同時に又、「無尽ハ営業トシテ之ヲ為ストキハ、之ヲ商行為トナス」との条規を設けて、従来に於ける法規適用上の疑義を明らかにした。又、営業上の資金運用の範囲を拡張して、余裕金の預け先に金融組合を追加した外、朝鮮總督の認可を受けたときは、他業の兼営も行なうことが出来るように改められた。

そして、この改正の結果、業令に適合しない会社は、逐次組織の変更、又は資本金の増加を行ない、これら不適合会社は昭和八、九年度に於いて何れもこれを適格に調整完了し、ここに於いて朝鮮の無尽業は漸く近代的な制度体系を整えるに至つた。尚、当時は、あたかも低金利時代であり、各社はその趨勢に応じて手数料及び貸付金利の引下げをなすなど、その業態に於いても、その発展を策した。

### 五、道単位統制期

朝鮮無尽業令の改正により、朝鮮の無尽業は従来のそれとは比較にならぬ程、その基礎と業態を整えて来たが、朝鮮経済社会の諸般に亘る進展向上は、なお一層、新業の向上を求めようになり、昭和十年、漸く朝鮮無尽業界の統制機運が熟してきた。即ち、昭和七年には前述のように無尽会社の数三十四を数え、各府はもとより、江原道春川を除く、道庁所在地の各邑、その他の主要都邑にも概ね、無尽会社の設立を見たのである。

即ち、無尽の地方への普及、滲透は、その頂天に達したものとみるべく、この年以後、総督府から新設免許を与えられた会社は一社も出ていない。特に、京城には四社、大邱、釜山各二社の設立を見たほか、二社以上設立された道を見ると、京畿道六社、慶尚南道五社、慶尚北道四社、咸鏡北道四社、全羅南、北道各三社、という状況を見せ、その業態は必ずしも、その全部が強固な基礎と信用の上に置かれているものとは言えなかつた。

各社の業務区域は自主的な相互協定によつて分割されていたが、このような小資本会社分立の結果は、必然、他社の区域に競争的に進出するを免がれず、その対立競争の激化は、往々にして弊害を生ずる趨勢を見せ始めた。ここに於いて自然、業者の間から無尽業のように公共性の非常に強い庶民金融機関がその機能を十分に發揮するためには、このような小

(第1表)

年次	会社数	公称 資本金	払込 資本金	諸積 金	契約給 付金高
昭和9年末	34	4,370	1,756	1,629	111,080
昭和10年末	31	4,010	1,720	1,967	137,533
昭和11年末	28	4,890	2,176	2,355	163,705
昭和12年末	23	10,640	3,375	1,886	179,269
昭和13年末	18	14,890	4,300	1,879	203,739
昭和14年末	10	17,600	4,905	1,538	235,950

(千円未満の端数は切捨てた)

備考 昭和14年より、全鮮合同統制が一部実現したため、14年末には会社数10に著減したのである。(後述参照) 契約給付金高は6カ年間に倍増した。

は完了に近づき、鮮内無尽会社の数、十五社に減少した。このように会社数は減少したが業績は異常なる伸展を示し、昭和九年以降の状況は上表

並びに権利義務一切を新会社に譲渡して解散、新設会社は九月一日開業した。その業務区域は、京畿道一円と江原道の一部、新会社の役員は、合同した三社の主要な人を選んで常勤取締役を結成、京畿道、江原道の有力者、鮮銀、殖銀等の代表者を非常勤の重役として新たに選任、取締役十五名、監査役五名、計二十名の多数を以て構成した。

かくして、一道一社を目標とした合同統制は、京畿道に於ける福徳無尽の不参加と、全羅南道三社の合同不調を残して

この結果、統制の一段階として、まず行政区画または同一経済単位をその業務区域とする一道一社の統制目標が樹立せられ、この目標は左の通り概ね順調に進捗した。

なお、この改正による総督府の意図は、株式の地方分散、無尽手数料の低下をはかるとともに、業務区域の拡張による無尽の地方浸透、並びに経営の合理化等を企図したものである。

総督府は、この業界統制の機運に即応するため合併を容易にするよう業令を改正する必要を認め、昭和十一年五月制令第六号を以て業令の一部を改正、またその関係府令の改正を実施した。

資本金分立形態よりも、寧ろ、合同・合併により新業の統制強化を図るべきだ、とする機運が自然に生じてきた。そして京畿道では、昭和十一年一月、業令不適格会社の開城無尽株式会社が、その資産、負債及び権利、義務の一切を、共済無尽株式会社に譲渡して解散し、同年八月には、仁川無尽株式会社が同じく共済無尽株式会社に買収合併せられた。次いで、慶尚南道では同年九月、釜山無尽株式会社が慶南無尽株式会社に買収合併し、その上更に、この釜山無尽を中心として道内に分立する晋州、馬山、統営の三社もこれに統合することになり、昭和十一年五月、この慶南四社合同を完成、資本金百万円の釜山無尽株式会社として一道一社統制会社設立の先駆をなしたのである。

る。

#### 一道一社合同状況

咸北無尽	(清津・協和・雄基・会寧) 昭和十二・四・二十一新設合併。
慶北無尽	(大邱・朝陽・浦項・金泉) 昭和十三・二・一〇新設合併。
黄海無尽	(海州・沙里院) 昭和十三・九・一〇新設合併。
咸南無尽	(元山・咸興) 昭和十三・十一・一〇新設合併。
全北無尽	(全州・群山・裡里) 昭和十四・四・一〇新設合併。
平南無尽	(平壤・鎮南浦) 昭和十四・七・一〇新設合併。

京畿道の合同は、前述のように、昭和十年、共済無尽が開城、仁川両無尽を買収するに及んで、結局、京城府内に共済、興業、共立、福徳の四社が併立、その統制合同を最も必要とする情勢にあつたが、福徳無尽が肯じないため、同社不参加のまま、前記三社をもつて昭和十二年八月十四日、朝鮮中央無尽株式会社(資本金五百万円)を設立、三社は資産、負債

の通りである。

#### 六 全鮮一社統制期

昭和十二年七月、日華事変の勃発とその拡大は、勢い国内のすべてを戦時体制に切りかえさせ、朝鮮の金融界も、その例外にはおられなかつた。そして朝鮮の無尽業界も、より統制の強化を必要とされ、総督府の一道一社方針は、大きく、全鮮一社への合同統制に進んだのである。即ち、朝鮮中央無尽株式会社が母体として、全鮮の無尽会社をこれに糾合する計画が樹てられ、昭和十四年以降、その実現に邁進した。

たまたま昭和十四年一月、朝鮮中央無尽株式会社では、定時株主総会において、常勤取締役を全部更迭することとなり、総督府は、ときの京城税務監督局長古庄逸夫(筆者)を取締役社長に就任させ、この無尽会社大合同の重大任務に当らせ

た。そして同時に、女房役の専務取締役として、既に信託会社合同の体験を有する朝鮮信託株式会社の取締役支配人三木清一を選任した。

かくして朝鮮中央無尽は、朝鮮無尽業統合の母体会社として、その使命達成に傾倒、その第一段階として同年六月、忠南無尽との合併を決定、ついで七月には、木浦、光州、順天の三社と忠北無尽を合併、この四社の買収合併に続いてその

(第2表)

期別	公称資本金	払込資本金	掛金契約高	貸付金	積立金	利益金
第1期	5,000	1,250	73,114	4,181		104
第2期	5,000	1,250	79,456	4,858	45	146
第3期	5,000	1,250	80,679	5,737	114	158
第4期	5,000	1,250	83,843	6,559	191	196
第5期	5,000	1,380	98,700	10,379	296	237
第6期	6,499	2,874	149,876	14,128	436	427
第7期	7,849	3,212	170,596	15,184	634	473
第8期	7,849	3,212	174,866	14,850	906	513
第9期	8,849	3,537	217,979	17,577	1,261	614
昭和17年8月末現在	16,849	5,937	335,153	24,701	1,556	927

備考 昭和17年8月末に合同完了の日。千円以下切捨。  
 (第4期までは自然増であり、第5期以降は被合併会社の業績を継いで増大した部分と、自然増を含む。昭和17年9月1日で朝鮮無尽と改称したので、最後の欄は同8月末日即ち朝鮮中央無尽時代の最終計数を掲げたものである。

高を擁する一大無尽会社となつたのである。  
 これは、ひつきよう、時局認識が、朝鮮無尽業界の關係者の間に透徹して、私利私情をすてて總督府の方針に協力したことに外ならない。多年粒々辛苦して築き上げた牙城を、国家の難に捧げて渾然一体、大同團結するということは、容易なことではなく、それだけにこの大合同は非常な難事であつた。いま、その主導者として當時を省みて思うとき、關係諸氏の心情に感じ、その協力に謝し、うたた感慨に堪えぬものがある。

以上のようにその合併形式は、全南三社、忠北、平安二社は、比較的小会社であり、かつ一連一社の中間統制をしていなかったもので買収形式となつたが、他社は概ね、合同完了後の会社株式の有利性に着目して吸収合併を希望したので、自然、朝鮮中央無尽の資本金は、激増を免れなかつた。

- 一、忠南無尽合併 (吸収合併) 昭和十四年九月三十日。
- 二、木浦、光州、順天三社買収 昭和十四年七月三十一日。
- 三、忠北無尽買収 昭和十四年七月三十一日。
- 四、黄海無尽合併 (吸収) 昭和十五年四月三十日。
- 五、福徳無尽合併 (吸収) " " " " " "
- 六、平安無尽買収 昭和十五年七月三十一日。
- 七、全北無尽合併 (吸収) " " " " " "
- 八、釜山無尽合併 (吸収) 昭和十六年十月一日。
- 九、咸北無尽合併 (吸収) 昭和十七年三月一日。
- 一〇、咸南無尽合併 (吸収) " " " " " "
- 一一、平南無尽合併 (吸収) " " " " " "
- 一二、慶北無尽合併 (吸収) " " " " " "

後約三年間、昭和十七年八月、慶北無尽の合同を最後としてこの全鮮一社大統合を完成した。  
 その経過は次の通りである。

またこの合同に当つては譲渡純資産の対価以外に、營業譲渡、会社解散に伴う一時支出金に充当するため、加算金と称して一種の權利金を支払つたが、その額は、中央無尽設立の際の前例もあつたのであるべく少額に止めた。  
 役員には、やむを得ない者のほか、合併会社の旧役員はとらぬ建前をとつたが、忠南、釜山、黄海の三社長は平取締役又は監査役に、平南、咸南、咸北三社の専務は、常勤取締役として、それぞれ新しく朝鮮中央無尽の取締役に就任した。なお、これは自然退職者の欠員に充当したものである。

#### 朝鮮無尽株式会社の誕生

かくして、朝鮮の全無尽業合同は完了し、朝鮮中央無尽株式会社は、資本金千六百八十四万九千五百円、無尽契約高三億三千万円を擁する朝鮮唯一の無尽会社となり、その營業區域は広大な朝鮮一円に及んだのである。

ここに於いて昭和十七年九月一日、名実相備える大無尽会社として新発足するため、總督府の認可を得て、その社名を「朝鮮無尽株式会社」と改称した。

この間、昭和十六年十二月大東亞戦争が勃発、時局は各界の統合團結を喫緊の要事として強く要望していたが、日本内地では、まだこのような大合同は実現を見ることが出来ず、更に朝鮮がその先鞭をつけ、事実、日本第一の資本金と契約

のがある。

(朝鮮中央無尽設立以来朝鮮無尽設立に至る満五カ年(十期間)に於ける營業伸展の状況は、上表第二表を参照されたい)

#### 朝鮮無尽の業務運営

朝鮮無尽業の大合同は、前述のように、時局重大の折柄、戦時金融の体制を整える大事業であり、同時に、朝鮮金融史上、まさに画期的な庶民金融機構の一大改革でもあつた。従つて、新発足した朝鮮無尽は、特に金融事業の公共性に鑑み、最も適切な施設面策をはかることに寢食を忘れた。

当時金融機関に最も国家が要請していたことは「貯蓄報国」ということであり、我々はまず、これに順応せねばならなかつた。又、折角、合同を完成した以上、その業務の簡易化と運営の敏活を期し、苟も、鼎の輕重を問われぬよう、庶民金融の円滑なる進展に寄与せねばならない。そのため、無尽手数料の引下げ、貸付金利の引下げ等の措置を講ずると共に、契約の大量募集を行ない、その額高を出来るだけ多くしなければならぬ。

一方、多くの系統の異つた社員を網羅している統制会社としては、社業隆昌のため、全社員の融和親睦、信頼協力の社



資 産 の 部		負 債 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
現金預ケ金勘定	7,245,099.40	無 尽 勘 定	44,268,567.70
現 金	660,232.63	未 払 無 尽 給 付 金	42,830,368.84
預 金	6,584,866.77	(内据置未払無尽給付金)	(39,679,498.60)
有価証券勘定	14,683,234.64	未 払 入 札 差 金	702,137.20
国 債	4,012,509.06	未 払 解 約 返 戻 金	736,060.66
社 債	1,728,830.85	借 入 金 勘 定	548,101.63
株 式	8,941,894.73	期 限 未 経 過 掛 金 勘 定	12,077,678.48
本支店未達勘定	106,017.29	雑 勘 定	2,726,192.59
無 尽 勘 定	7,668,121.98	仮 受 金	1,301,667.99
無 尽 給 付 資 金	3,935,690.72	納 税 積 立 金	1,164,183.09
給付未済口未収無尽掛金	2,470,000.61	期 限 未 経 過 貸 付 金 利 息	114,645.37
給付済口未収無尽掛金	1,262,430.65	期 限 未 経 過 掛 金 未 払 利 息	124,952.82
貸 付 金 勘 定	36,028,677.22	火 災 保 險 代 理 店	20,743.32
有価証券担保貸付金	61,102.00	身 元 保 証 金 勘 定	1,495,561.67
不動産担保貸付金	9,273,407.04	社 員 身 元 保 証 金	732,574.70
掛込金限度貸付金	9,098,137.03	国 民 貯 蓄 預 り 金	762,986.97
契約給付金限度貸付金	17,050,663.14	株 主 勘 定	19,157,204.77
朝鮮中小商工業資金貸付金	545,368.01	資 本 金	16,849,500.00
雑 勘 定	282,803.70	法 定 準 備 金	1,330,000.00
仮 払 金	282,803.70	別 途 積 立 金	620,000.00
営業譲受加算金勘定	776,709.00	退 職 手 当 基 金	336,000.00
土地建物什器勘定	3,263,455.44	未 払 配 当 金	21,704.77
営業用土地建物什器	3,040,426.77	当 期 利 益 金	693,311.83
所有動産不動産	223,028.67	(内前期繰越金)	(64,853.70)
株 主 勘 定	10,912,500.00		
払込未済資本金	10,912,500.00		
合 計	80,966,618.67	合 計	80,966,618.67

財産目録ハ貸借対照表資産ノ部ト同一ニ付省略ス。

殆んど老年者か婦人のみとなり、大部分は朝鮮人従業員に依存せざるを得なくなり、業務の運営に大きな支障を来すに至つた。そこで、朝鮮人の専門学校卒業生を東京で大體に採用したが、これらの採用者達も、入社後直ちに学徒動員で応召せられてしまつた。しかもこれら応召者は殆んど全部、会社 に於いて給料負担のまま兵役に服するもので、非常に困惑した事態に立ち至つたものであ

内体制を整えることも、極めて焦眉重要のことであつた。特に留意しなければならなかつたことは、旧会社毎に、設営無尽の方式を異にし、その各々が特色を発揮していたため、取扱ひ上、非常な繁雑を来たし、顧客に迷惑を感じさせるのでこれらの方式を整備統一することであつた。

この外、施さなければならぬ改善策は山積しており、これらをすべて簡易明快地整備統一して、全鮮に亘る営業所を一定不動産の統一せる方針の下に運営することは極めて難事であつたが、とも角、首尾一貫、円滑な運営体制を整えた。そして、この運営の根本方針として、社議の決定は衆議統裁制によることとし、業務の執行は事情の許す限り支配人、部課長等の責任者に分任させる社業分担制を実施した。

かくして社業は着々として拡充強化され、業績も躍進の一路を辿つた。そしてこの社業の向上は、一般の信用と、金融界の信頼とを増し、やがて朝鮮金融団の創立と共にその一員として加入し、国債引受けの分担、或いは、債券無尽を設けて貯蓄債券の消化に協力する等、業域の分野も自然に広がられた。

殊に無尽業という職能的な立場から、戦時下中小商工業者の生活安定のためにはその全機能の發揮に努めた。そして、「朝鮮中小商工業資金融通損失補償規程」による指定機関として、非常に積極的な貸出しを行なつた。

合同による社業の充実、信用の向上に伴い、その契約高は差当り五億円を目標とした。そして毎期、三千五百万円程度の契約高を獲得し(純増約千五百万円)、新しい地盤の開拓に努めたが、その対象は、特に、朝鮮人の加入者の増募に力を注ぐ方針をとつた。もちろん、契約高の増募とともに、貸出しにも伸縮性をもたせ、担保物以外に人的信用、企業の収益力等に十分考慮を加えて融通することとし、努めて資金の円滑なる供給をはかつた。なお、朝鮮無尽再発足の際の貸付金総額は約二千五百万円、給付金契約高は約三億一千八百万円、即ち、契約高に対する貸出しの比は、大體七・七%であつた。

営業網は、全鮮の主要カ所四十五カ所に配置されていた。それは何れも本・支店及び出張所で、その資金の操縦はすべて本店に綜合統一された。その結果、各営業所の資金の過不足が効果的に調整し得る結果、資金運営が非常に能率的かつ円滑に行なわれたばかりでなく、その資金も非常に充実に充てられた。そして、殆んど資金を銀行から借入れる必要がなくなる程に至つたのみならず、鮮銀、殖銀等に相当の預金をなす外、国債或いは株式等の有価証券に若干の投資を行なうまでの余裕を生ずるに至つた。

只、戦争の激化に伴い、少壮の男子従業員が殆んど応召したため、従業員に非常な困つた。日本人の従業員は



(第4表) 第16期損益計算書 (自昭和19.10.1 至昭和20.3.31)

利 益 の 部		損 失 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
無 尽 利 益 金 息	2,776,033.95	無 尽 給 付 資 金 繰 入	1,320,496.69
無 貨 付 金 利 息	1,583,082.16	未 収 無 尽 掛 金 償 却	62,053.35
預 け 金 利 息	87,021.14	貸 付 金 償 却	1,336.33
有 価 証 券 利 息 及 配 当	315,561.14	所 有 物 価 額 償 却	24,590.17
代 理 店 手 数 料	14,755.87	営 業 譲 受 加 算 金 償 却	86,450.00
解 約 手 数 料	120,404.50	借 入 金 利 息	14,748.65
其 他 手 数 料	15,276.36	期 限 未 経 過 掛 金 利 息	266,356.94
雑 益	359,274.98	身 元 保 証 金 利 息	58,737.50
計	5,226,410.10	報 酬 及 給 料 費	1,202,027.10
前 期 繰 越 金	64,853.76	旅 行 費	107,120.24
納 税 積 立 金 戻 入	534,358.86	勧 誘 金 費	271,238.89
		集 集 金 奨 励 金 費	197,842.92
		掛 事 金 奨 励 金 費	271,581.50
		税 営 繕 費	432,645.69
		雑 費	620,205.52
		計	30,630.08
			53,083.29
			111,166.03
			5,132,310.89
		当 期 利 益 金	693,311.83
		( 内 当 期 純 益 金 )	628,458.07
合 計	5,825,622.72	合 計	5,825,622.72

国運と共に水泡に帰せしめたのである。

終戦とともに、一部朝鮮民衆の激発は、当社に於いても取りつけ騒ぎをはじめ種々の事象を惹起したが、その取り付け騒ぎも、朝鮮銀行の臨機適切な援助に依つて無事に切り抜け、同年十一月二日、株主総会を開いて役員の変更を議決、ここに無事、朝鮮人役員に社務、社業の一切を継承した。このような混乱のため第十七期決算（昭和二十年九月三十日）は、その内容等、極めて粗雑なばかりでなく日本人総引揚げのため、現任、記録書類は皆無である。思えば国運の進展とともに約半世紀、この間、朝鮮の無尽業も又、近代朝鮮

る。

またその上、時局の緊迫につれ、一般では漸くインフレ化の懸念を抱くようになり、長期契約の無尽加入を危惧する傾向をみせ、契約の募集は容易ならぬ情勢に当面した。と言つて、無尽契約以外の預金吸収の途はなく、人手不足にかたて加えて、この難局の打開は、全く容易ならぬものがあつた。しかしながら、統制会社であればこそ、その基礎が非常に牢固であり、これらの難局に当面しながら、ともあれ、業績の低下をきたすことはなかつた。

### ハ、終戦前後の事情

ガダルカナル島転進以後、戦局は漸くわが軍に不利の様相を示し、昭和十九年末期には、米・英軍の総反撃は愈々激化した。そして南洋群島の失陥、沖縄の陥落と、わが軍の敗戦は激化し、敵機の朝鮮侵入も屢々であつた。かくて、朝鮮の防衛体制も愈々急を告げ、防衛諸施設の強化をはじめ、工場住宅、資材の疎開等もまた着々と進められ、民心の不安につれ、経済の状況も異状な急変を示してきた。ここに於いて当社の業務も、必然、困難なる情勢に立ち至り、役員はもとより、全従業員、心を新たにこの難局に當つた。その結果、昭和二十年三月末に於ける決算においても次のような良好な

業績を持続することが出来た。

### 第十六期利益金処分

一、当期純益金	六二万八、四五八円〇七銭
二、前期繰越金	六万四、八五三円七六銭
合 計	六九万三、三一八円八三銭
これを処分すること左の如し。	
法定準備金	八万〇、〇〇〇円
別途積立金	二万〇、〇〇〇円
納税積立金	二万三、〇〇〇円
退職手当基金	三万四、〇〇〇円
役員賞与金	二万四、〇〇〇円
配 当 金	二万三、四八〇円
後期繰越金	六万四、八三一円八三銭

昭和二十年四月からの新事業年度は、收拾すべからざる破局の戦争下に迎えた。一切が総動員体制の中で、死力を尽して施策を練つた。そして当社では、戦時貯蓄の一層の重要性を感じ、国策に協力して「割増金付貯蓄無尽」を創設する等、各般に亘つて種々工夫をこらし、業績の挙揚に全力を傾注し朝鮮経済の維持のため最後まで努力したが、如何にせん、八月十五日、終戦の布告は、この刻苦大成した無尽業の歴史を

達史の上に大きな足跡を止めたものである。  
なお、最後の役員は次の諸氏であつた。

取締役社長	谷多喜磨
専務取締役	藤川儀平
取締役支配人	堀国三
庶務部長	佐藤芳弥
秘書部長	岸田虎一
釜山支店長	谷辰蔵
取締役	佐野彦蔵
監査役	異議田景樹
	浦辺清一郎
	中富計太
	富士平
	坪井和一
	方台栄
	難波弥一
	大峰丙朝

（筆者は元朝鮮無尽株式会社社長  
現昭和女子大学教授）

終

この「朝鮮に於ける無尽業の発達」は昭和三十二年友邦協会の「朝鮮財政・金融発達史」編集に協力して書かれたものであるが、その頃、全国相互銀行協会に乞われて、同銀行協会の発行する「相互銀行」（昭和三十三年十一、二合併号）に掲載された。本稿はその一部を補正したものである。

古庄氏は数年来病床にあり、執筆不能のため、その補正は古庄氏の口述を得て私が行なつたものである。従つて、本稿に関するすべての責任は私にあることを御了承願う次第である。

・古庄・上原両氏略歴・

古庄逸夫氏 大正八年東大政治学科卒業。朝鮮總督府に入り、内務局勤務、全羅南道地方課長等を経て、總督府土地改良課長、道財務部長、税務監督局長等を歴任。退官後は文部省図書編纂委員、昭和女子大教授等文教方面で活躍している。

上原理夫氏 昭和十年東大経済学部卒業。同年朝鮮殖産銀行に入り群山支店勤務、同十六年本店調査部に転勤。同二十年十月引揚げ。同二十一年六月閉鎖機関整理委員会勤務。現在、日本信販信用組合勤務。当年五十才。

（朝鮮統治関係重要文献）  
金融関係資料

朝鮮信託株式会社

伏見寛次

(一) 概 説

日本に於いて、法制上、信託制度の確立を見たのは、信託法、信託業法及び同施行細則等信託関係法令が制定せられた大正十一年四月のことであつた。然るに法域を異にする朝鮮においては、それ等の法令は、直ちに施行されるに至らなかつたが、日本における信託制度の確立と、それに伴う信託業の発達とは、自然朝鮮においてもその氣運を醸成し、昭和六年六月朝鮮民事令を改正して日本の信託法を依用する事とし、同時に朝鮮信託業令を、更に同年九月朝鮮信託業令施行規則等の信託関係法令を制定公布し(以上の法令は昭和六年十二月一日より施行せられた)茲に朝鮮に於いても日本同様信託制度が確立したのである。

朝鮮信託株式会社が設立せられたのは昭和七年十二月のこと、公称資本金一千万円、払込資本金二百五十万円、株式総数二十万株(内、朝鮮銀行六万一千八百株、朝鮮殖産銀行六万株と兩行で全株式の約六割を所有し、朝鮮人の保有は一万

(二) 信託制度確立前に於ける朝鮮の信託業

古来朝鮮においては、不動産信託類似の現象として、宮家を受託者の如き形式とした「投托の制度」が存在し、李朝の末期に廃止せられる迄盛んに利用せられ、その他個人信託に相応する行為が見られたのであるが、信託業が法令上認められたのは、明治四十四年のことで、即ち同年二月制定された朝鮮銀行法中に「信託の業務」の文字が存したのである。尤も日本における興業銀行その他の場合と同様具体的内容は明らかでなかつた。

信託業としては藤本合資会社が明治四十三年三月投資信託並に農業開墾及び不動産管理経営業務を開始したのを以つて

朝鮮信託株式会社

伏見寛次

次	目
一 概 説	213
二 信託制度確立前に於ける朝鮮の信託業	213
三 信託制度確立直後に於ける朝鮮の信託業	215
四 朝鮮信託株式会社設立の事情	216
五 信託業の統制	216
六 業務の内容と業績	220



信託制度が確立せられるや、業令施行前より信託業を営む者も改めて朝鮮総督の免許を受けなければならないこととなつたので、従来信託業を主業又は付随業務とし、或いは単に「信託」の名称を用いたに過ぎない諸社は、概ね廃業若しくは商号又は事業目的を変更して信託業より後退するの已むなきに至り、結局新制度により、信託業の免許を得たものは、群山信託、釜山信託、南朝鮮信託、共済信託、朝鮮土地信託の五社に止まつた。尚、当時における五社の状況は次表の通り

(三) 信託制度確立直後に於ける朝鮮の信託業

- (6) 供託有価証券。朝鮮では供託有価証券中、国債以外の有価証券(朝鮮総督の認可を得たもの)の供託を認め、日本においては国債のみであつたこと。
- (7) 金銭信託。
1. 運用方法により、日本においては特定・指定・不特定の三本建としたが、朝鮮においては特定・不特定の二本建であつたこと。
2. 不特定金銭信託の受託条件を日本においては五百円以上、二年以上としたが、朝鮮においては三百円以上、一年以上であつたこと。

(単位千円)

期別	公債	称本金	払資本	込金	積立金	純益金	信託財産	内 金銭信託	不動産 信託	有価証券 信託	其他
昭和7年上期		5,307		1,973	226	126	8,156	7,155	985		16
同 下期		5,307		1,973	257	160	9,131	8,168	945		18

更にこれを各社別に観れば次の通りであつた。

(昭和七年下半年) (単位千円)

会社名	公債	称本金	払資本	込金	積立金	信託財産	内 金銭信託	不動産 信託	有価証券 信託	有価証券 信託	金銭債権 信託
釜山信託		1,000		300	88	2,585	2,585	—	—	—	—
群山信託		1,000		650	82	3,417	2,454	945	3	15	—
南朝鮮信託		1,000		250	3	597	597	—	—	—	—
共済信託		1,000		250	6	999	999	—	—	—	—
朝鮮土地信託		1,307		523	78	1,533	1,533	—	—	—	—
合計		5,307		1,973	257	9,131	8,168	945	3	15	—

嚆矢とし、次いで南鮮商事情信託株式会社及び仁川信託合資会社が設立せられ、共に信託業を営んだのであるが、これ等の諸会社が如何程の分野を開拓したか審かでない。

稍近代的企業組織の下に信託業が営まれるに至つたのは、大正七、八年以降のこととて、当時日本に於いては欧州大戦に依る好況の余波を受け、大正九年末における信託会社数四百二十五社、資本総額八千九百七十万円に達し、信託業の勃興目醒しく、朝鮮においてもこれに影響せられ、信託を主要業務又は付帯業務として設立し、或いは既設会社にして信託業を営むに至つたもの、又は商号中「信託」なる名称を使用したものが昭和五年末において八十余社の多きに達した。尤もこれ等諸会社中「信託」なる名称の下に信託業務を主業とする会社は二十九社(昭和五年七月末現在)に止まつた。この二十九社の開業は大正九年以降設立のもの二十七社で、組織は株式会社二十七社、合資会社二社、資本金五十万円未満のもの四社、百万円以上二百万円未満のもの四社、二百万円以上のもの二社であつた。尚、昭和五年六月末現在の資産負債表によれば、金銭信託六百七十九千円、金銭債権の信託三千円、有価証券信託十一万九千円、不動産信託六万九千円、合計六百二十七万一千円で、二十九社の中、金銭以外の財産の受託をしていたものは三社に過ぎず、又五十万円以上の信託財産を有するものは四社に止まつた。

- 斯くて信託業の難然たる発展はこれを育成指導すべき法制的必要が痛感されるに至つたので、総督府は昭和五年三月金融制度調査会及び金融制度準備委員会を設置し、信託関係法令について考究することとなり、時を同じうして鮮内信託会社二十四社が総督に対し、信託法規制定に関する要望書を提出し、一方銀行側も答申書を提出した。
- 斯様な経過を経て朝鮮における信託制度は確立せられたのであるが、実体法たる信託法は、日本のものをそのまま依用することとなつたので、信託の概念については相違なきも、監督規定たる信託業令並びに同施行規則は、骨子においては日本のそれに準拠して制定せられたが、朝鮮の経済事情は日本同様の水準に無き事等に考慮が払われ、その結果、多少の相違点を生じたのである。主なるものを掲ぐれば、
- (1) 資本金。朝鮮では二百万円以上であつたに對し、日本では百万円以上であつたこと。
- (2) 現物出資。朝鮮では禁止していたが、日本では禁止していなかつたこと。
- (3) 担保付社債信託業。朝鮮では認めていなかつたが、日本では認めていたこと。
- (4) 固有資産の運用。固有資産の運用に當り、朝鮮では動産の買入を禁止したが、日本では然らざりしこと。
- (5) 貸付。日本においては産業組合に対する無担保貸付



年次	社名	朝鮮土地信託	群山信託	釜山信託	共済信託	南朝鮮信託	計	朝鮮信託	総計
昭和八年三月	朝鮮土地信託	一、七〇八	三、五七七	二、七九一	一、一〇一	九六三	一〇、一四〇	一、一七一	一、一七一
四月	朝鮮土地信託	一、七五一	三、五八二	二、八六五	一、一六九	一、〇二二	一〇、三八九	一、五三九	一、五三九
五月	朝鮮土地信託	一、八三〇	三、六〇四	二、九三〇	一、二四三	一、一四一	一〇、七三二	一、七七八	一、七七八
六月	朝鮮土地信託	一、八四八	三、六五九	三、〇〇六	一、二七一	一、一六二	一〇、九四五	一、七八三	一、七八三
七月	朝鮮土地信託	一、九〇六	三、七六四	三、一三〇	一、三三四	一、二七八	一一、三九二	一、九〇三	一、九〇三
八月	朝鮮土地信託	一、九五一	三、七五一	三、二七二	一、三三六	一、四五四	一一、七六五	二、〇〇四	二、〇〇四
九月	朝鮮土地信託	一、九八八	三、七一九	三、三〇六	一、三六七	一、五〇四	一二、八九四	二、一八五	二、一八五
十月	朝鮮土地信託	二、〇六八	三、七二六	三、三三六	一、三六八	一、五三〇	一三、二八五	二、二八五	二、二八五
十一月	朝鮮土地信託	二、一〇六	三、七三〇	三、三七〇	一、四一八	一、五八七	一四、八八二	二、三八二	二、三八二
十二月	朝鮮土地信託	二、一六六	三、七三〇	三、三七〇	一、四一八	一、七五四	一五、七四〇	二、九四二	二、九四二
昭和九年一月	朝鮮土地信託	二、一五八	三、七三〇	三、三七〇	一、四一八	一、八六六	一六、六〇六	三、一〇八	三、一〇八
二月	朝鮮土地信託	二、二一六	三、七三〇	三、三七〇	一、四一八	一、九〇九	一七、五一五	三、二六〇	三、二六〇
三月	朝鮮土地信託	二、二五六	三、七三〇	三、三七〇	一、四一八	一九七八	一八、四九三	三、四一七	三、四一七
四月	朝鮮土地信託	二、二八九	三、七三〇	三、三七〇	一、四一八	二、〇三二	一九、五二五	三、五七〇	三、五七〇
五月	朝鮮土地信託	二、三三六	三、七三〇	三、三七〇	一、四一八	二、一三二	二〇、六五七	三、七三〇	三、七三〇
六月	朝鮮土地信託	二、三九一	三、七三〇	三、三七〇	一、四一八	二、一五九	二一、八一六	三、八八九	三、八八九

朝鮮信託株式会社設立直後に於ける各社の信託財産総額表（単位千円）

当社設立当時は、満州事変を契機として朝鮮産業界が農業中心より農工併進へ移行せんとし、幾多の新興工業が発展の緒に著かんとする好機でもあったので、当社業務の進展を促進し、加うるに総督府の指導監督宜しきを

得た結果、昭和八年八月末には早くも信託財産総額四百三十三万九千円に達し、既設信託会社の追従を許さないまでに飛躍した。

(ロ) 設立準備より開業に至るまでの経過  
当社設立の具体化に踏み出したのは昭和七年十月で、

(五) 信託業の統制  
信託会社併存とその状況

朝鮮銀行総裁故加藤敏三郎氏、朝鮮殖産銀行頭取故有賀光豊外五氏が創立委員となり、創立趣旨書、事業目録見書及び定款の作成、発起人、賛成人の選定並びに各持株の割当、株式公募、創立事務の進行等につき協議を遂げ、創立事務所を朝鮮銀行内に置き、発起人会その他設立に關する事務を開始したのである。

斯くして創立事務は順調に進捗し、創立委員に加うるに、既設信託会社、地場銀行、日本の銀行支店、商工會議所等の代表者を始め、大地主、大農場主等を以つて発起人とし、又日本の財界著名の士を筆頭に多数の賛成人を得、資本金壹千万円を二十万株に分ち、発起人引受株十六万三百株、賛成人引受株一万九千七百株、計十八万株の残余二万株を公募したのである。

創立總會においては、取締役会長に韓相龍氏、同社長に谷多喜磨氏以下を選任し、朝鮮総督より正式に信託業経営の免許を得て同年十二月二十二日に設立登記を完了、翌昭和八年一月七日より京城府南大門通一丁目十九番地において営業を開始するに至つたのである。

(四) 朝鮮信託株式会社設立事情  
(イ) 設立の趣旨と使命

元來信託会社は、信託制度そのものの性質に鑑み、基礎鞏固でなければならないのであるが、前記五社は何れも規模弱小で、信託業の向上発展に資すること困難にて、加うるに、特殊事情、即ち朝鮮における富の大部分は農耕地であり、従來權利の保全乃至管理方法の幼稚不完全なために、幾多の社会問題を惹起する導因となつたのみならず、管理及び処分が拙劣なために生ずる損失が甚大であつたので、斯かる事情に照し、所有地を信託財産とし、幼稚不完全なる管理及び処分方法に大改善を施すことは、地主本人の爲のみならず社会を益するところ大なりとする政策的見地からも亦、強力なる信託会社の出現が期待せられ、遂に当社の設立となつたのであるが、その使命は「長期に亘る財産の信託を受け、これを確實に保護し有利に運用して朝鮮における社会生活の健全なる発展に寄与すると共に、産業並びに金融業に貢献する」にあつたのである。

翻つて既設信託会社の受託状況は、昭和八年五月末に  
において、総額一千七十三万一千円中金銭信託は九割九厘  
に当る九百七十五万九千円、不動産信託は八分八厘に当

る九十五万一千円で、専ら金銭信託を中心とし、その他  
の信託はリョウリョウたるものであつた。

既設信託会社の各期末に於ける信託財産表 (単位千円)

種目	昭和七下期末	昭和八上期末	昭和八下期末	昭和九上期末
金銭信託	八、一六八	九、七五九	八、四五七	四、四二六
有価証券信託	三	三	一	一
金銭債権ノ信託	一五	一八	一	一
不動産信託	九四五	九五	二四	四二
合計	九、一三一	一〇、七三一	八、四八一	四、四六八

一方信託資金の運用、特に貸付状況は左表の如くであつた。

既設信託会社の貸付状況 (単位千円、昭和八年上期末現在)

種別	朝鮮土地信託	群山信託	釜山信託	共済信託	南朝鮮信託	合計
有価証券担保貸	七六	三四	一〇三	一四四	四一	三九八
不動産担保貸	一	一六一	一	一	一一四	二七五
不動産担保貸	九一六	一、五五八	一、八三九	七三六	八四四	五、八九三
其他の財産権担保貸	二	一	一	一	一	二
債権担保貸	一	二八	一〇〇	四	一	一三二
保証貸	一	五〇〇	一	四一	一	五四一
合計	九九四	二、二八一	二、〇四二	九二五	九九九	七、二四一

右で見られる如く既設信託会社は、信託的機能を果た  
よりも、寧ろ単なる金融機関としての性格を多分に有し  
ていたのであつた。

社中、第三位を占めていた釜山信託会社が買収せられ  
た。

買収当時における釜山信託会社の資産表

(ロ) 既設信託会社の買収  
斯かる情勢下に信託業統制への気運は漸増し、  
A 昭和八年九月に加藤朝鮮銀行総裁及び有賀朝鮮殖産  
銀行頭取幹旋の下に、既設信託会社中、資産額におい  
て第一位を占めていた群山信託会社が買収せられた。

買収当時における群山信託会社の資産表

所有有価証券 一〇、七二五五	不動産担保貸 五、六〇二五四
国債 六、一八九五	現金及預け金 二、五四三三
社債 三、四〇二〇	営業用土地 八、四〇七
株式 一、二五〇	立替金 一、八七二三
貸付金 六、四六八九	所有不動産 三、六八九九
有価証券担保貸 八、五四九七	
不動産担保貸 一、一四六	合計 八、四三六〇七

各種信託元本は総額三百六十六万八千円、内金銭信託  
二百七十一万七千円、金銭債権の信託一万五千円、不  
動産信託九十三万四千円であつた。

B 続いて同年十一月、右両氏幹旋により、既設信託会

C 更に同年十二月、第五位にあつた共済信託会社が買  
収せられた。

買収当時における共済信託会社の資産表

所有有価証券 一〇、四八七四	信用貸 八、二二
国債 六、二六九	現金及預け金 三、四四七
社債 七五	所有不動産 三、〇〇
株式 四、二六二九	営業用土地 一、五九〇
貸付金 九、六三五〇	立替金 一〇、一六五五
不動産担保貸 九、五五二八	仮払金 一、四七
	合計 三、三八三六六

信託財産は総額百三十六万四千円、内金銭信託百三十六万三千円、不動産信託一千円であつた。

D 朝鮮土地信託買収に関する交渉は、営業開始第二年度の昭和九年の新春早々開始せられたが、価額上につき意見の一致を見ず、紆余曲折を重ねたる末、漸く同年九月成談した。

買収当時における朝鮮土地信託会社の資産表

円	
所有有価証券	一四四、二九一
国債	八四、一九二
株式	六〇、〇九九
貸付金	七九、五六六
不動産担保貸	七九、五六六
現金及預け金	四七、八二三
合計	六六〇、三二七

各種信託元本は総額二百三十一万九千円、内金銭信託二百三十万九千円、不動産信託九千円であつた。

E 残る南朝鮮信託会社も同年十一月に買収談が成立した。

買収当時における南朝鮮信託会社の資産表

3. 金銭債権の信託
4. 土地及びその定着物物の信託
5. 地上権及び土地の賃借権の信託
6. 其他の業務

1. 保護預り  
2. 債務の保証  
3. 不動産売買の媒介又は金銭若しくは不動産賃借の媒介

4. 国債、地方債、社債若しくは株式の募集、払込金の受入、元利金又は配当金の支払

5. 財産に関する遺言の執行  
6. 会計の検査  
7. 左についての代理事務

一、財産の取得、管理、処分又は賃借  
二、財産の整理又は清算  
三、債権の取立

四、債務の履行  
五、保険

C 資金の運用業務

1. 国債、地方債、社債又は株式の応募、引受又は買入

2. 有価証券、不動産、法令により設定した財団等を

所有有価証券 一〇八、三三八円

国債	九八、八八八	所有不動産	二四、四五七
株式	九八、三三〇	営業用土地	一六、七二七
貸付金	二〇八、二六三	立替金	一、四一六
有価証券担保貸	八八、八四八	未収入金	三、九六二
不動産担保貸	八八、八四八		
現金及預け金	一一〇、七二六	合計	四一三、五五三

各種信託の元本は二百二十七万九千円、内金銭信託二百二十五万五千円、不動産信託二万四千円であつた。

斯くして設立後二箇年を出でずして、既設五信託会社を逐次買収し、茲に朝鮮唯一の信託会社となつたのである。

(六) 業務の内容と業績

(イ) 業務の内容

当社は朝鮮信託業令により、信託業を営むことを主たる目的としたのであるが、業務の内容は次の通りであつた。

- A 信託業務
1. 金銭の信託
2. 有価証券の信託

担保とする貸付

3. 公共団体に対する貸付
4. 不動産並びに手形の買入（但し信託資金による不動産の買入は法令上認められなかつた）
5. 預け金

(ロ) 業績

当社が設立されたのは、恰も満州事変直後で、その後五箇年間に朝鮮の経済は裕に二倍以上の膨脹を示し、昭和十二年七月に勃発した日華事変、更に大東亜戦争への移行は、貯蓄の増強、食糧増産等國家の要請するところ真に強く、当社の進展を著しく助長した。

当社業務の双翼をなした金銭信託と不動産信託、これに対する貸付金及び有価証券投資の推移を示せば次の通りである。

なお、創業当初の営業所は京城本店のみであつたが、前記五信託会社合併の際、群山と釜山に支店を設け、その後木浦、平壤、大邱、咸興、清津、海州及び大田に開設した。また日本内地では、東京及び大阪に事務所を設置した。他方不動産信託の増加に伴い、農耕地の管理を全うせんが為に、樞要の地に農場を設け、その数は二十有余箇所に及んだ。



資 産		負 債	
固有勘定		保証債務	
有価証券	二九三八六八二	預り金	四〇四八六三
不動産担保貸付	一、二六九六四九	未払利息	一四七〇〇二三
保証債務見返	四〇四八六三	未払配当金	一四七八一六
立替金	一、三一六四一一	未經過収益	七〇九一
動産及不動産	一〇六〇二九	仮受金	六六〇四
営業用動産及不動産	四三八七三八	社員身元保証金	七三八五〇一
雑勘定	八八七五三〇	資本金	七九八五八二
現金	三〇一四七五	法定積立金	一〇〇〇〇〇〇
預金	一、五六七四七六	特別積立金	七五五〇〇〇
未払込資本金	七五〇〇〇〇〇〇	退職手当積立金	九九〇〇〇〇
		繰越利益金	六一二〇〇〇
			二八三、五三二

次に、終戦前の最終決算期、即ち昭和二十年三月三十一日現在の全容を示す貸借対照表は次表の通りであつた。

期 別	信託財産総額	金銭信託	不動産信託	貸付金	有価証券投資
昭和八年上期	二一七二	一、七八二	三九一	四八〇	四八四
下期	一、二一三一	九〇三九	三〇五九	四五一	二、四三二
九年上期	二五八一	二、一一七	四、六三〇	八六九二	五〇九七
下期	三七八二九	二、七四九七	一〇、一七五	一五、二三一	六、四七〇
十年上期	四八七〇一	三、四三二八	一四、二七〇	二二、二八四	五、三一七
下期	五、六二九八	三、八、九三四	一、七一一〇	二六、二四七	四、九四九
十一年上期	六〇、二二六	四、三、三五一	一六、五九六	二九、三六二	五、二五八
下期	六、七〇三八	四、三、五四一	一、七、四七〇	三六、三〇三	四、九一六
十二年上期	七、二、九〇五	四、五、九四五	二〇、九〇六	四〇、二八一	四、七四三
下期	八、二、〇九六	四、九、六七六	二、三、九七八	四、五〇〇〇	五、三〇〇
十三年上期	九、三、六五二	五、二、八四四	二、六、六七九	四、四、六四七	六、四七〇
下期	一〇、九、五〇四	五、九、二七七	三、〇、〇八二	四、八、八六六	九、八四三
十四年上期	一、二、二、八〇八	六、九、一九二	三、二、九〇九	四、九、一四六	一、五、五一四
下期	一、三、三、九五四	七、五、二三五	三、五、六九四	五、五、一二八	二、〇、〇八九
十五年上期	一、四、四、六九七	八、〇、一九三	三、九、六六五	六、一、三七七	二、一、六三五
下期	一、五、〇、四四一	八、三、八八九	四、二、三八七	六、七、七三七	二、一、四九四
十六年上期	一、五、五、三五八	八、四、四二五	四、五、八三六	六、六、九九一	二、二、六九三
下期	一、六、六、九七九	九、二、二二九	四、九、六三六	六、五、八八五	三、一、二二三
十七年上期	一、七、六、二〇八	九、八、二九四	五、二、八二八	六、六、六九一	三、五、六〇一
下期	一、八、四、七〇八	一〇、五、〇六〇	五、五、二〇三	六、七、八三五	四、一、五九九

(単位千円)



合	計	一六七三〇八五七	円
信託勘定			
有価証券		一〇三、一二五、三四六	
貸付金		七、一六二、六一六	
貸付有価証券		二〇、五八〇	
生命保険債権		一九四、〇九四	
動産及不動産		六八、八四四、三五二	
雑勘定		二七、一四四、五八四	
現金		五一、三、五七五	
預金		七、二〇三、七七四	
合	計	二五四、二四二、八二四	
当期利益金		四九六、八四二	円
合	計	一六七三〇八五七	
金銭信託		一六、一七五、四一〇	
特殊金銭信託		五、八四七、三五	
金銭信託以外		五、二九三、九二	
有価証券の信託		一九三、二五〇、七一	
金銭債権の信託		一九四、〇九四	
不動産の信託		七、一八五、五二五	
合	計	二五四、二四二、八二四	

終

この伏見氏の原稿は、上原氏の分と一しよに故山口重政氏から頂いた。伏見氏の略歴を知りたく、各方面に照会したが遂に判らず、やむを得ず、省かせて頂いた。御了承を願うとともに、御尽力に感謝する次第である。

(近藤)

(朝鮮統治関係重要文獻)  
朝鮮總督府  
調査資料  
(第十七輯)

朝鮮の契 (複刻)

朝鮮總督府囑託  
善生永助

契の名称は支那にも内地にもなき朝鮮独特のものにして、その組織は一種の組合と認むべきものである。これが起源は頗る古く、高麗朝時代既にその発生を見たのであるが、李朝時代に於て漸く発達を来し、殊に最近に及びて多数の契が各地に普及するに至つたのである。これが目的もまた時代に依りて、多少の変化はあつたが、要するに同一地方に於て、数人若くは数十人より多きは数百人が相合して、同一目的の下に一定の規約を設けて組合を作り、互ひに多少の金品を醸出して資本と為し、或は経済上の福利を増進し、或は社会共同の利益を計る等、その目的の範圍は極めて広汎にして、例えば殖産興業の発達、地方自治の改善、教育知識の普及、風教道德の向上、勤儉貯蓄の奨励、金銭物品の融通、隣保相互の扶助、同族同宗の和親、同郷同業の協調、趣味娛樂の一致等、凡そ社会生活に必要な各種の目的に対して、それぞれ機能を發揮して居る。現に朝鮮各道に存する契の数は約二万に達し、加入者総数更に八十余万を算し、その名称のみにても約三百に及んで居る程であるから、これが団体的活

緒論

調査資料

朝鮮の契

朝鮮總督府囑託 善 生 永 助

目次

第一章 契の性質	227
第一節 契の起源と其の発達	229
第二節 契の種類及び目的	231
第二章 契の分布	246
第一節 契数、財産、加入者数	246
第二節 契の府郡島別分布状況	248
第三章 契の組織	259
第一節 契の組織並に内容	259
第二節 契の事業と規則	280
第四章 契の現状	353
第一節 契の地方別調査	353
第二節 契の種類別調査	374
第五章 契の取締	381
第一節 契の監督取締	381
第二節 請会契会取締規則	382

動の社会上竝に經濟上に及ぼす影響は決して閑却することは出来ないのみならず、その改善發達を計るに於ては、將來更に大なる勢力と爲ると信ずる、されば契の沿革、性質、分布、組織、取締等に関して充分なる調査研究を行ひ、以てその善導利用に努むることは、施政上甚だ大切なることである。

然るに従来、契に関する精確なる資料を欠いて居たのは、その種類の余りに多数に上り、これが爲め調査に非常なる困難があつた結果であると思われる。契に関する文献としては、比較的古いものには、高麗史、各朝實錄、貢弊、六典條例、大典會通、栗谷全書、芝峰類說、牧民心書、增補文獻備考等があり、比較的新しいものには「經濟大辭書」中の河合弘民氏の論文、今村賴氏の「朝鮮風俗集」中の記事、「朝鮮叢報」第一卷第五号の資料、李覺鍾氏竝に慶尚南道庁の「契に関する調査」等がある。これ等はいづれも契の調査研究を行う上に於て参考とすべき有益なる記録である。本書は文献の渉獵よりも、寧ろ現状の調査を主とし、略ぼ契の一斑はこれを説明して置いたつもりであるが、何分短期間の調査のこととて、充分に資料を蒐集し得ず、従つて尚ほ尽さざる点の尠くないことは洵に遺憾とする所である。

## 第一章 契の性質

### 第一節 契の起源と其の發達

契は契とも書し、多人数の集りて酒宴を催す場合に指して曰ひたるものらしく、それが遂ひに一種の組合の意味に用いらるに至つたのである。その起源は、高麗朝の末葉、戸布の負担に應ずる爲、人民の組織したものに端を發し、軍布契なる納税団体として普及し、李朝末葉まで、これが持続されて來た。租税力乏しき人民が、組合を作りて、納税に備えた如く、李朝時代に於ては、生産力弱き商工業者等が、官府へ納むる貢物を纏める爲めに各種の契を組織し、それが後には同業者の組合として發達して來たのである。貢物契の多数に上つて居たことは、備辺司編纂の「貢弊」や「六典條例」などを見ると明白なる如く、その種類はあらゆるものを網羅して居る。納税団体として又同業組合として民間に普及して來た契の精神は、李朝末葉頃に至りて、部落活動の機關として利用せられることとなり、所謂洞里契の發生を見るに至つたものである。地方行政の幼稚なる當時に在りては、この種の契は、自治の一作用を爲して居たものと認むべく、「六典條例」に、坊里を分ちて、中部八坊九十一契、東部七坊五十三契、南部十一坊七十一契、西部九坊九十一契、北部十二坊四十四契とあるに徴し、契はその當時に於ける行政区劃の一単位とも見做される。

納税、貢物、自治の団体として發達して來た契が、遂ひに保險の性質を備うる

ものに迄及び、更に公共事業を經營し、或は相互扶助、或は貯蓄金融等の目的に利用せられるに至つたのは、遙かに後世のことに属し、恐らくは最近七、八十年来のことであると思うが、娛樂若くは集會の機關としての契、即ち酒宴、詩賦、書画、射的、山遊等のために設けられたのは、その沿革極めて古く、新羅、高麗の時代に、既に此事のあつた記録が尠くない。また李朝になつて中宗十四年、中外に命じて郷約法を行わしめたことあり、宣祖の時、李珥は呂氏の郷約に倣いて、黄海道の一部に郷約契なるものを実行した。契の普及と共に、契房の弊害の甚だしくなつたことは牧民心書などに論ぜられて居り、憲宗元年には外邑契房の弊を禁ずるの布令が出た程である。古来朝鮮に於て各種の契が行われたのは、官治行政の不備を補うために、人民の自治的活動が行われた結果であるとするものもあるが、國民の經濟力が発達しない時代に於ては、特に相互救済と協力一致を必要とし、加うるに儒教思想の普及して居る朝鮮民族の間には、夙に約束の觀念が発達して居たことが、契の発達を助長した所以であらう。契の普及に依る利益は決して尠くないが、これがあるがために、却て人民をして依頼心を増長せしめ、その個人的活動を薄弱ならしめて居る傾向もないとは云へまい。

大院君時代に全鮮に勢力を及ぼして活動した樸負商の団体の如きも、之を契の一種と見れば見られる。契は大体に於て善良なる目的を有したものであるが、時には社会の良風美俗に相反する如きものも組織されたる例無しとせず、仁宗七年には南原の賊人等が私かに殺人契なるものを結びたることがあり、肅宗時代には兇徒等が屢々劍契なるものを結びて窃盜殺人を行つた。近來は斯かる物騒な契は勿論存在の余地はないが、富饒及び賭博類似の契が、官憲の眼を潜りて行われて居たことは、往々耳にした所である。契の中には既に組合に名称を変更したものも

あり、近來内地の産業組合及び報徳社の如き制度を取り入れ、内地人官吏の地方行政事務に携はるようになってから、契の規約の如きも次第に内地流に変化し、体裁の整つたものが尠くないようになって来たが、多くの契は形式的規約などはなく、一定の不文律が遵守されて居る。大典会通には、新慶新契を組織する場合には官の允許を受ける規定があるが、李朝末葉に至つてこの制度は紊れ、契は各地方に於て自由に設立され、従つて各種の弊害もこれに伴つて発生した。そこで併合以来、總督府に於ては、地方庁をしてその監督取締に当らしめ、或種の契に就いてはその組織を奨励し、殊に咸鏡北道の如きは明治四十四年道令を以て、各洞に洞契の設立を命じ、一面府郡をしてその主旨徹底に努めしめた結果、全道に之が普及を見るに至つた。また牛契及び農事改良契の如きは、本府及び地方当局の指導保護の下に全鮮到る所に設置され、現に良好の成績を挙げて居る。

## 第二節 契の種類及び目的

契の起源及び発達、前述した通りであるが、現在朝鮮各地に於て行われて居る契中、各道の調査に係るものを、仮りに(一)公共事業を目的とするもの、(二)扶助を目的とするもの、(三)産業を目的とするもの、(四)金融を目的とするもの、(五)娛樂を目的とするもの、(六)其他の契に分類して見ると、左に掲ぐる如く、公共事業を目的とする契は六十三種、扶助を目的とする契は百七種、産業を目的とする契は五十八種、金融を目的とする契は三十二種、娛樂を目的とする契は十三種、其他の契は四種、合計二百七十七種となつて居る。然しながら尚ほ此外にも、類似の名称及び目的の契は尠くあるまいから、各種の目的を



[illegible]

	は実に夥しき数に達する訳である。
	目的とするもの
同	洞りの部落住民を以て組織し、各自部落の助長、生活の向上を図り、地方自治を
同	
同	
同	
同	
同	民風改善及び互助を行う
	里内の保安を図り道路、橋梁の維持を行ふ
	橋梁の維持又は新架設を行う
	道路の維持及び修理を行う
同	
	貧民救済、古蹟保存等を行う
同	
	公共事業施行
	公共の利便を図るため渡船を経営す
同	
同	
	公共事業に対する寄附、仏前祭事等を行う
	勤儉貯蓄の奨励（黄海道延白郡）



237

[illegible]

236

## 朝鮮の契

文慕香宗追祭永九十二追南老養老鄉共尚補補永五  
學賢祀親遠祀慕人遠樞送老人約樂德興友睦倫  
契契契契契契契契契契契契契契契契契契契契

[illegible]

誼樂蘭附敬親補新回喪賭和誠守有胎金崇結加婚婚  
友竹近義睦叻旧甲表儀親信信物護蘭倫義冠姻具  
契契契契契契契契任契契契契契契契契契契契契契契

[illegible]



241

240

[illegible]

同	鐵物工場に於て作業をなす
	漁業の改良発達を図る
	殖林を行う
同	
同	
同	
同	
同	
同	殖林及び農事奨励を行う
同	山林へ火入を禁止す
	殖林及び愛林思想の涵養に努む
	山林の保護保育に努む
同	
	植樹の保護を行い且つ公共事業を行う
同	
するもの	
	契員の出資金を殖利す
	貸付を行い契員の金融を緩和す

共益契	同	共同殖産利殖を図る
三成契	同	皇太子殿下の御成婚奉祝紀念の爲め組織され基金は殖利す
花石契	同	大正十一年八月及び九月本道水害救済のため寄贈を受けたる義
御成婚紀念契	同	捐金を以て殖利す（黄海道新溪郡）
水害紀念契	同	金融を目的とす中には富籤類似のものもあり
業資契	同	高利貸的のものにして加入者一名より若干円宛出資し、月収、
十層契	同	半年収、年収等にて何人にも貸付利得金は各融出者に分配す
作罷契	同	五、娛樂を目的とするもの
詩伝契	同	同志の親睦を計り月数回宛会合し詩作をなす
射亭契	同	射亭を設け弓術を試む
弓術契	同	同志相集りて弓術を競う
甲契	同	同年の老人会合し若干の飲食物を準備し年二三回宛愉快に楽しむ
同甲契	同	音楽の研究を行う
音楽契	同	春秋の佳節を扱ひて山遊を行う
山遊契	同	同
遊山契	同	同
永明契	同	別名花柳契と称し陰曆四月十月二回に分ち財産の利子を以て宴
昇平契	同	会を開き古来の音楽を演奏す（忠清北道堤川郡）

殖牛契  
緑丹契

閼牛を目的とし殖牛を行う（慶尚南道晉州郡）  
絵画の会を開き互に同志の親睦を図る

六、其の他

墓所契  
建築契  
狐網契  
祈禱契

墳墓の保護を行う  
子弟分家のとき家屋の建築費用を補助す  
狐を捕獲し、其を売って殖利す（平安南道）  
祈禱を為すを目的として組織せらる

以上は契の名称を有するものを便宜上分類したのであるが、最近まで契の名称を附したるもので、既に組合の名称に変更したのも随分多いのである。されば事実上契の思想は、朝鮮人の間に於て想像以上に普及し、その利用の範圍は極めて広く、契の活動は社会上組合勢力として相当有力なるものであることを窺い得るであらう。殖産興業の振興、社会教育の普及、国民生活の向上等の爲めには、民衆の共同團結は益々必要であるから、現に朝鮮人の間に涵養されて居る契の思想を大に助長せしめて、各種の組合事業の進歩改善を計ることは更に緊要なることである。

## 第二章 契の分布

### 第一節 契数、財産、加入者数

現在各道に分布せる契を、その目的の種類に依りて、(一)公共事業を目的とするもの、(二)扶助を目的とするもの、(三)産業を目的とするもの、(四)金銭を目的とするもの、(五)娯楽を目的とするもの、(六)其他に大別して見ると、公共事業を目的とする契は、契数一千六百二十三、加入者八万二千三百十二人、この財産三十一万七千四百九十九円(財産中、金銭以外の動産及び不動産は除外せり以下同じ)扶助を目的とする契は、契数一万一千六百九十六、加入者三十五万一千七百七十二人、この財産九十万二千五百九十九円、産業を目的とする契は、契数二千八百八十七、加入者十萬一千四百四十三人、この財産五十万六千四百四十一円、金融を目的とする契は、契数二十、加入者十三万四千四百三十九人、この財産百八万四千九百五十五円、娯楽を目的とする契は、契数二百六十四、加入者五千四百四十四人、この財産一万七千八百七十九円、其他の契は契数一千二百二十四、加入者七万二千四百二人、この財産三十七万九千四百七十六円にして、以上の契を合計すると、總契数一万九千六百七十七、加入者總数八十一万四千三百三十八人、財産總額三百四十九万二千五百二十五円に達して居る。今試みに各道別に就き、契の種類別に依り、その契数、財産、加入者数を示せば、即ち左表の如くになって居る。

三百三十七万四千四百四十円

道別	種別	公共事業を目的とするもの		扶助		計	
		契数	財産加入者数	契数	財産加入者数	契数	財産加入者数
京畿道		57	—	3,252	3,851	—	218,203
忠清北道	田舎林野家屋米	133	23,393 9反 14" 300坪 618反 2棟 3石	278	78,036 20 11 788 4 153 22	20,096	
					133,546 85,975 1,226 520 28町77 2 422		
忠清南道	田舎林野家屋米	176	28,975 85,975歩 26歩 28町77 520坪	401	49,166		
全羅北道		93	19,113	5,597	873	28,805	
全羅南道		378	—	—	1,113	282,685	67,256
慶尚北道		93	33,570	9,709	479	310,637	64,581
慶尚南道		220	85,530	13,013	542	302,211	50,311
黄海道	田舎林野家屋牛	140	25,157 28,929歩 124,431歩 1,440歩	396	261,153 66,451 190,966 1,440	25,330	
					76 3 1		
平安南道	林野	83	25,051 10町	5,975	349	578,439 10,000 14 15	55,015
平安北道		28	18,402	2,539	315	407,892 8,150	84,931
江原道		87	21,039	4,014	1,963	2,850 437,953	74,241
咸鏡南道		108	18,507	8,198	594	342,495	61,587
咸鏡北道		25	18,472	4,671	342	135,710	14,616
合計	田舎林野建物牛米	1,423	317,409 127,157歩 120,104" 2,440" 反 1,055反 5棟 1頭 3石	11,696	440,125 216,342 203,526 6,128 2,275 9 18 1 153 596	814,138	



244

## 第二節 契の府郡島別分布状況

契の総数は実に一万九千六十七の多きに達し、その加入者総数を八十一万四千百三十八人を占め、これが種類はあらゆる範圍に亘つて居る。契の各道別分布状況は前に掲げた統計に依りて明かなる如く、京畿道の契数四千四百九十九、加入者数二十一万八千二百三人を第一位とし、江原道の契数三千百三十八、加入者数七万四千二百四十一人これに並び、全羅南道の契数二千八十八、加入

者数六万七千二百五十人等は契の分布の最も濃密なる地方にして、各道中契の普及して居ないのは、咸鏡北道の契数四百十二、加入者数一万四千六百十六人で、忠清北道の契数五百七十一、加入者数二万九千六十六人、慶尚南道の契数九百、加入者五万三千一百一十一人も少い方である。各道に亘り府郡島別の契の分布表を示せば下表の通りである。

### 府 郡 島 別 契 分 布 表

#### 京 畿 道

府 郡 別	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其 の 他			合 計		
	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数
京 城 府	—	—	—	300	—	22,989	—	—	—	246	—	48,725	—	—	—	2	—	122	548	—	71,836
仁 川 府	—	—	—	342	—	11,308	—	—	—	3	—	121	—	—	—	—	—	—	345	—	11,429
高 陽 郡	7	—	441	171	—	9,561	—	—	—	10	—	2,774	—	—	—	—	—	—	188	—	12,776
広 州 郡	1	—	70	245	—	1,951	—	—	—	2	—	63	1	—	30	—	—	—	249	—	2,114
楊 州 郡	1	—	51	347	—	19,241	6	—	1,321	20	—	3,566	—	—	—	—	—	—	374	—	21,885
蕤 川 郡	8	—	446	78	—	2,185	7	—	782	10	—	339	1	—	40	—	—	—	104	—	3,792
抱 川 郡	—	—	—	119	—	4,488	8	—	942	2	—	100	—	—	—	—	—	—	128	—	5,530
加 平 郡	—	—	—	98	—	1,778	1	—	20	4	—	96	—	—	—	—	—	—	103	—	1,894
楊 平 郡	—	—	—	116	—	4,624	3	—	87	2	—	38	—	—	—	—	—	—	121	—	4,749
關 州 郡	2	—	26	23	—	892	1	—	25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	26	—	943
利 川 郡	—	—	—	124	—	3,692	5	—	507	2	—	369	—	—	—	—	—	—	131	—	4,568
龜 仁 郡	1	—	40	6	—	246	2	—	475	2	—	75	—	—	—	—	—	—	11	—	836
安 城 郡	3	—	118	191	—	4,782	5	—	292	3	—	98	—	—	—	—	—	—	202	—	5,270
振 威 郡	—	—	—	152	—	5,235	7	—	557	1	—	19	—	—	—	—	—	—	140	—	5,811
水 原 郡	4	—	279	164	—	7,194	13	—	839	4	—	182	—	—	—	—	—	—	185	—	8,494
始 興 郡	—	—	—	107	—	3,653	4	—	316	5	—	125	—	—	—	—	—	—	116	—	4,094
富 川 郡	—	—	—	56	—	3,746	1	—	210	1	—	18	—	—	—	—	—	—	58	—	3,974
金 浦 郡	11	—	689	119	—	5,423	2	—	57	3	—	163	2	—	387	—	—	—	137	—	6,719
江 華 郡	3	—	81	188	—	4,322	7	—	267	—	—	—	—	—	—	—	—	—	198	—	4,670
坡 州 郡	3	—	286	104	—	7,062	1	—	87	5	—	651	2	—	80	—	—	—	115	—	8,166
長 湍 郡	1	—	115	264	—	7,459	3	—	205	4	—	63	2	—	23	—	—	—	244	—	7,865
開 城 郡	12	—	610	547	—	17,684	143	—	54	31	—	103	2	—	37	—	—	—	735	—	18,488
合 計	57	—	3,252	3,851	—	149,515	219	—	7,049	340	—	57,668	10	—	597	2	—	122	4,499	—	218,203

忠 清 北 道

区 別	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其の他			合 計		
	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数
清 州 郡	37	宅 300坪 家屋 2棟 林野 5反 現金 3,127円	1,942	田 7反 畚 1" 22俵 現金 2,220円	83坪 1,044	6	6,384円	184	28	10,775円	1,246	—	—	—	31	2,100円	1,235	124	田 7反 宅 383坪 家屋 2棟 林野 5反 現金 34,616円	5,668	
報 恩 郡	9	246円	377	3	440	163	2	45	45	10	294	389	—	—	—	1	280	103	25	1,335円	1,077
沃 川 郡	20	山野 378反 現金 4,480円	1,349	27	705	416	1	山野 170反	180	—	—	—	—	—	—	—	—	—	48	林野 548反 現金 5,185円	1,945
永 同 郡	1	林野 9反 現金 10円	21	51	宅 736坪 家屋 1棟 現金 5,215円	445	2	現金 24円 米 22石	44	3	1,333円	205	—	—	—	—	—	—	57	宅 736坪 家屋 1棟 林野 9反 米 22石 現金 6,612円	915
鎮 川 郡	30	813円	787	119	9,045円	2,477	2	15円	49	19	482	348	—	—	—	—	—	—	170	10,355円	3,661
槐 山 郡	25	田 9反 畚 14" 林野 176" 現金 3,346円	1,298	11	580	258	1	40	20	1	580	20	—	—	—	—	—	—	38	田 9反 畚 14" 林野 176" 現金 4,566円	1,596
陰 城 郡	9	米 3石 1,200円	1,165	31	米 150石 3,163円	555	9	220	868	4	575	131	—	—	—	23	田 2反 畚 1" 家屋 1棟 現金 2,530円	640	76	田 2反 畚 1" 家屋 1棟 米 153石 現金 7,688円	3,379
忠 州 郡	—	—	—	—	—	—	3	—	904	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	904
堤 川 郡	1	150円	33	8	6,711円	184	—	—	—	6	田 2反 畚 1" 75円	194	1	100円	33	4	305円	318	20	田 2反 畚 1" 現金 7,341円	762
丹 陽 郡	1	林野 50反 現金 21円	56	6	317	58	3	—	75	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	林野 50反 現金 338円	189
合 計	133	田 9反 畚 14" 宅 300坪 家屋 2棟 林野 618反 米 3石 現金 23,393円	7,028	278	田 7反 畚 1" 宅 819坪 家屋 1棟 米 150石 現金 28,456円	5,797	29	林野 170反 米 22石 現金 6,748円	2,369	71	田 2反 畚 1" 現金 14,114円	2,553	1	100円	33	59	田 2反 畚 1" 家屋 1棟 現金 5,225円	2,316	571	田 20反 畚 17" 宅 1,119坪 家屋 4棟 林野 788反 米 153石 米 22" 現金 78,036円	20,096

忠 清 南 道

区 別	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其の他			合 計		
	契数	財 産	加入者数	契数	財 産	加入者数	契数	財 産	加入者数	契数	財 産	加入者数	契数	財 産	加入者数	契数	財 産	加入者数	契数	財 産	加入者数
公 州 郡	12	878円	804	31	2,365円	1,375	9	787円	252	66	3,648円 米 77石	4,293	—	—	—	—	—	—	118	7,686円 米 77石	6,724

燕岐郡	4	214	243	12	1,460	550	—	—	—	63	12,110	2,757	—	—	—	23	2,133 15石	982	102	17,554 15	4,532
大田郡	—	—	—	5	940 25石	233	1	300	93	3	346 77石	252	—	—	—	9	249 78石	555	18	1,935 180	1,133
論山郡	20	4,398	1,192	15	2,027	519	7	2,020	374	4	2,420	190	—	—	—	4	385	142	50	11,250	2,417
扶余郡	—	—	—	115	5,586	1,931	3	188	65	17	2,004	1,146	—	—	—	1	2,320	200	136	10,078	3,342
舒川郡	19	1,280	1,277	31	3,280	626	—	—	—	7	1,888	1,045	—	—	—	—	—	—	57	6,448	2,888
保寧郡	11	4,248	1,163	80	7,381	1,422	8	425	457	12	833	373	—	—	—	—	—	—	111	12,887	3,415
青陽郡	20	4,863	1,340	26	4,398	1,127	5	700	373	2	290	54	—	—	—	—	—	—	53	10,251	2,894
洪城郡	—	—	—	24	1,358	724	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	24	1,358	724
礼山郡	16	1,935	1,247	24	427	451	3	427	612	4	82	185	—	—	—	1	—	850	48	2,872	3,345
瑞山郡	—	—	—	52	18,159 42石	1,821	2	589	219	6	902	301	1	300	15	4	340	153	65	20,210 42石	2,509
唐津郡	—	畚田 85,975坪 2林野 26坪 28町77 5,520坪 現金 2,200円	742	29	3,578 9石	1,327	6	950 5石	529	4	1,840 2棟 1,200坪	349	—	—	—	14	4,162	705	55	畚田 85,975坪 1,226" 520" 28町77 2棟 14石 現金 12,750円	3,652
牙山郡	1	887	937	171	7,258 6石	5,075	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	128	8,145 6石	6,012
天安郡	71	7,992	4,059	30	1,358 88石	1,111	4	300	219	4	380	190	—	—	—	—	—	—	109	10,030 88石	5,579
合計	—	畚田 85,975坪 176林野 26" 28町77 520坪 現金 28,975円	12,944	401	59,575 170石	18,212	48	6,486 5石	3,193	192	1,200坪 2棟 27,474円 現金 154石	11,135	1	300	15	56	10,336 93石	3,587	1,074	畚田 85,975坪 1,226" 520" 28町77 2棟 現金 133,546円 422石	49,166

全 羅 北 道

区 分 郡 別	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其 の 他			合 計		
	契数	財	加入者数	契数	財	加入者数	契数	財	加入者数	契数	財	加入者数	契数	財	加入者数	契数	財	加入者数	契数	財	加入者数
全州郡	2	円 90	35	37	5,290 8石	869	2	710	76	8	21,441	151	—	—	—	12	1,093 15石	258	63	28,624 23石	1,389
鎮安郡	—	—	—	38	6,484	1,120	12	1,629	407	—	—	—	—	—	—	8	488	188	58	8,601	1,715
錦山郡	23	4,844	1,759	134	10,343	2,358	31	27,432	1,480	8	7,820	282	—	—	—	1	34	60	197	50,473	5,939
茂朱郡	3	92	38	97	3,789	1,616	—	—	—	8	7,705	193	—	—	—	—	—	—	108	11,586	1,847
長水郡	3	697	27	162	22,474 111 2頭	2,447	5	1,720	39	2	175	108	—	—	—	1	106	150	173	25,172 111 2	2,771



任 実 郡	3	128	83	44	12,084	982	10	440	243	4	350	47	—	—	—	2 料	18	80	65 料	12,912 18	1,435
南 原 郡	1	38	19	32	3,426	885	2	68	49	1	70	10	—	—	—	—	—	—	34	3,402	963
淳 昌 郡	5	265	1,248	29	2,368	717	1	100	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	35	2,733	1,917
井 邑 郡	—	—	—	51	1,955	819	5	270	210	—	—	—	—	—	—	4	374	179	60	2,599	1,208
高 敏 郡	9	5,150	297	9	3,005	406	3	406	196	3	450	75	—	—	—	1	300	30	25	9,311	1,004
扶 安 郡	10	730	287	40	3,047	987	—	—	—	5	805	83	—	—	—	2	140	51	57	4,722	1,408
金 堤 郡	4	1,715	197	25	10,132	644	7	2,420	159	1	1,323	80	—	—	—	6	760	275	43	16,350	1,357
沃 溝 郡	11	3,566	804	20	9,445	522	14	10,430	738	—	—	—	—	—	—	—	—	—	45	23,461	2,044
益 山 郡	19	1,798	803	151	19,932	2,713	1	500	17	2	666	57	—	—	—	5	266	136	178	23,162	3,728
合 計	92	19,113	5,597	873 料 牛	113,764 119 2	17,087	93	46,125	3,626	42	40,805	1,088	—	—	—	42 料	3,561 33	1,407	1,143 料 牛	223,368 152 2	28,805

全 羅 南 道

区 府 郡 島 別	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其 の 他			合 計		
	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数
木 浦 府	—	—	—	6	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	5,100	408
光 州 郡	2	—	—	—	—	—	1	—	—	14	—	—	—	—	—	—	—	—	17	13,821	1,429
潭 陽 郡	13	—	—	60	—	—	—	—	—	20	—	—	—	—	—	—	—	—	93	20,365	3,614
谷 城 郡	4	—	—	24	—	—	4	—	—	8	—	—	2	—	—	7	—	—	51	7,673	2,313
求 礼 郡	4	—	—	31	—	—	15	—	—	13	—	—	2	—	—	—	—	—	65	13,073	1,906
光 陽 郡	1	—	—	86	—	—	—	—	—	4	—	—	2	—	—	—	—	—	93	4,938	1,941
麗 水 郡	53	—	—	156	—	—	9	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	221	11,073	3,120
順 天 郡	26	—	—	—	—	—	5	—	—	32	—	—	12	—	—	—	—	—	75	19,471	1,983
高 興 郡	23	—	—	58	—	—	5	—	—	13	—	—	3	—	—	—	—	—	102	8,028	5,525
宝 城 郡	16	—	—	48	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	11	—	—	77	7,297	2,710
和 順 郡	5	—	—	49	—	—	2	—	—	—	—	—	48	—	—	2	—	—	106	7,663	2,782
長 興 郡	9	—	—	73	—	—	27	—	—	3	—	—	—	—	—	5	—	—	171	7,041	3,835
康 津 郡	52	—	—	46	—	—	14	—	—	17	—	—	—	—	—	21	—	—	130	29,204	7,029
海 南 郡	3	—	—	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	15	6,538	613
靈 巖 郡	8	—	—	43	—	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—	62	29,390	2,344
務 安 郡	10	—	—	70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	—	—	90	10,134	1,886
羅 州 郡	98	—	—	50	—	—	7	—	—	3	—	—	—	—	—	4	—	—	162	6,186	5,264
咸 平 郡	7	—	—	55	—	—	6	—	—	8	—	—	—	—	—	—	—	—	76	7,392	1,114
鎭 光 郡	3	—	—	18	—	—	4	—	—	—	—	—	25	—	—	6	—	—	56	5,161	1,976
長 城 郡	12	—	—	55	—	—	2	—	—	—	—	—	4	—	—	7	—	—	80	14,216	2,734
莞 島 郡	7	—	—	89	—	—	—	—	—	43	—	—	7	—	—	—	—	—	146	15,218	2,872

珍島郡	20	—	—	61	—	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	13	—	—	108	9,157	2,777
濟州島	—	—	—	17	—	—	98	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	119	23,485	6,579
合計	378	—	—	1,113	—	—	212	—	—	182	—	—	109	—	—	94	—	—	2,088	282,623	67,256

備考 契財産には不動産をも時価に換算計上せり

慶 尙 北 道

府 区 分 郡 島 別	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其 の 他			合 計		
	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数
大邱府	—	—	—	5	1,794	252	—	—	—	2	1,800	50	—	—	—	—	—	—	7	3,594	302
達城郡	2	1,519	502	11 畜	1,053	516	1	135	145	20	45,840	7,133	—	—	—	—	—	—	34 畜	48,547	8,346
軍威郡	1	207	13	9	557	300	3	800	98	77	7,054	2,550	23	1,231	437	—	—	—	113	9,849	3,398
義城郡	42	1,370	1,743	52	2,590	1,199	4	581	188	1	559	50	4	115	120	1	207	13	104	5,422	3,313
安東郡	—	—	—	4	359	193	13	714	840	12	4,420	1,085	—	—	—	11	1,966	1,380	40	7,459	3,508
青松郡	3	401	161	27	2,349	1,926	18	2,152	1,520	5	575	189	—	—	—	2	481	17	55	5,958	3,813
英陽郡	1	400	69	17	882	305	5	789	810	30	4,853	1,237	2	368	85	—	—	—	55	7,292	2,506
盈徳郡	—	—	—	2	72	16	3	2,135	81	28	11,589	1,415	—	—	—	—	—	—	33	13,796	1,512
迎日郡	1	49	11	191	9,205	1,971	15	25,693	3,840	21	8,556	1,354	—	—	—	—	—	—	228	43,503	7,196
慶州郡	—	—	—	3	811	74	2	700	242	4	4,726	257	—	—	—	—	—	—	9	6,237	573
永川郡	3	3,200	117	47	6,209	889	17	7,256	972	8	1,440	81	1	50	9	—	—	—	76	18,355	2,068
慶山郡	—	—	—	13	250	736	36	1,718	2,650	14	852	719	—	—	—	—	—	—	63	2,820	4,105
清道郡	18	7,233	954	39	10,769	1,656	—	—	—	—	—	—	1	16	35	—	—	—	58	18,018	2,645
高靈郡	2	248	248	3	363	444	1	500	69	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	1,111	741
星州郡	—	—	—	1	1,500	80	11	3,166	336	5	1,844	144	3	1,088	270	—	—	—	20	7,618	830
漆谷郡	—	—	—	8 葬興	23 1台	283	—	—	—	5	3,911	130	—	—	—	—	—	—	13	3,934	413
金泉郡	1	488	101	—	—	—	1	—	79	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	488	180
善山郡	3	8,968	3,384	6	883	285	—	—	—	8	15,621	228	—	—	—	—	—	—	17	25,472	3,898
尚州郡	1	1,072	1,582	4	110	92	1	6,276	3,701	1	1,200	40	—	—	—	—	—	—	7	8,709	5,416
聞慶郡	—	—	—	23	845	573	3	688	217	22	10,383	1,145	2	160	35	—	—	—	50	12,016	1,970
醴泉郡	—	—	—	1	321	221	4 山林	2,043 30町	161	2	30,424	3,337	—	—	—	—	—	—	7 山林	32,794 30町	3,719
栄州郡	13	7,914	747	10	5,300	307	30	7,855	927	9	1,629	836	5	1,610	301	—	—	—	67	24,308	3,118
鬱陵島	2	500	77	3	360	38	9	590	443	5	916	315	—	—	—	2	911	89	21	3,277	991
合計	93	33,570	9,709	479 畜 葬興	46,661 15町 1台	12,357	177 山林	63,791 30町	17,369	279	158,412	22,356	41	4,638	1,292	16	3,565	1,498	1,085 山林 葬興	310,637 15町 30町 1台	64,581

慶 尚 南 道

府 郡 別 区 分	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其 の 他			合 計		
	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数
	円			円			円			円			円			円			円		
釜 山 府	8	39,383	474	26	8,044	2,421	—	—	—	1	2,965	54	2	2,350	172	—	—	—	37	52,742	3,121
馬 山 府	2	147	94	8	657	410	—	—	—	—	—	—	1	70	23	—	—	—	11	874	527
晋 州 郡	12	2,920	957	28	7,437	641	4	1,008	195	4	8,725	308	1	800	30	—	—	—	49	20,890	2,131
宜 寧 郡	2	80	43	30	6,948	2,077	2	270	160	—	—	—	1	25	250	—	—	—	35	7,323	2,470
咸 安 郡	—	—	—	13	23,588	4,631	1	160	20	4	22,550	338	—	—	—	—	—	—	18	46,288	4,989
昌 寧 郡	8	1,659	737	26	1,798	1,152	4	57	317	4	2,840	112	2	155	178	—	—	—	44	6,509	2,496
密 陽 郡	3	31	131	17	806	521	—	—	—	2	280	40	—	—	—	—	—	—	22	1,117	692
梁 山 郡	1	—	132	3	517	111	1	—	86	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	517	328
蔚 山 郡	5	210	134	9	742	337	3	500	79	2	3,123	950	2	60	63	—	—	—	21	4,635	1,563
東 萊 郡	—	—	—	11	1,484	385	1	21	21	3	12,889	514	1	150	42	—	—	—	16	14,344	962
金 海 郡	5	195	128	12	3,728	1,010	1	20	56	—	—	—	1	350	11	—	—	—	19	4,283	1,206
昌 原 郡	3	550	170	6	651	112	2	1,700	221	1	400	100	2	140	90	—	—	—	14	3,441	693
統 營 郡	93	14,876	4,313	72	7,281	2,750	17	1,155	512	—	—	—	5	390	179	—	—	—	187	23,712	7,754
固 城 郡	10	6,440	267	49	1,945	1,179	4	540	108	4	1,930	105	—	—	—	—	—	—	67	10,925	1,659
泗 川 郡	4	1,825	224	12	2,377	428	1	1,000	51	2	380	67	2	500	105	—	—	—	21	6,082	875
南 海 郡	21	4,796	1,389	17	893	394	6	197	740	3	11,832	545	3	278	117	—	—	—	50	17,996	3,185
河 東 郡	21	4,854	790	101	11,098	2,788	4	394	178	9	2,596	217	9	791	286	—	—	—	144	19,733	4,259
山 清 郡	8	5,550	1,179	35	9,104	1,523	3	105	79	2	2,341	81	1	100	30	—	—	—	49	17,220	2,892
咸 陽 郡	4	630	164	5	18,975	1,050	1	—	1,077	2	1,900	208	—	—	—	—	—	—	12	21,505	2,499
居 昌 郡	8	796	836	54	8,231	3,030	3	1,180	107	2	600	26	2	50	40	—	—	—	69	10,857	4,059
陝 川 郡	2	538	850	8	10,480	1,100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	11,018	1,950
合 計	220	85,530	13,013	542	126,794	27,990	58	8,327	4,007	45	75,351	3,665	35	6,209	1,636	—	—	—	900	302,211	50,311

黄 海 道

部 別 区 分	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其 の 他			合 計		
	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数
	円			円			円			円			円			円			円		
海 州 郡	6	田 1,323 8,079 坪	198	6	田 750 33,812 坪	167	7	12,190	1,057	8	田 3,899 4,823 5,562	404	—	—	—	—	—	—	27	田 18,162 46,714 5,562	1,826
延 白 郡	5	田 300 2,300 5,000 1	349	6	2,030	274	7	1,685	310	20	20,765	941	—	—	—	2	105	127	40	田 24,885 2,300 5,000 1	2,001

金川郡	45	田	3,375 15,000	1,434	201	田	13,580 5,446	17	田	1,858 695	27	田	11,585 744	—	—	—	—	—	—	290	田	30,378 15,000	8,319	
平山郡	26	田 畚 林野 家屋	4,537 19,800 6,900 5町 2	1,223	43	田	9,920 1,506	7	田	800 303	6	田	1,253 3,600	—	—	—	—	—	—	82	田 畚 林野 家	16,510 23,400 6,900 5 2	3,165	
新溪郡	5	田 堡	244 9,000 900	125	50	田	4,295 4,500	4	田	125 125	6	田	674 78	—	—	—	2	100	55	87	田 堡	5,435 13,500 900	1,352	
谷津郡	15	畚 田	2,505 19,729 45,967	746	17	畚 田	2,823 2,720 7,200	6	林野	580 15	12	田	3,583 197	—	—	—	2	60	77	52	畚 田 林野	10,121 22,449 53,167 15	1,720	
長淵郡	1	田	900	30	1	田	200 50	7	田	5,950 168	4	畚 田	1,100 800 1,080	—	—	—	—	—	—	13	畚 田	8,150 800 1,080	450	
松禾郡	—	—	—	—	15	畚 田	725 9,900 360	3	田	335 89	12	畚 林野	9,044 900 3町	—	—	—	—	—	—	30	畚 田 林野	10,104 10,800 360 3	1,228	
股栗郡	3	田	210	50	28	田 畚 山野	6,179 10,800 17,280 13	8	田 畚	8,214 360 360	11	田	32,726 385	—	—	—	—	—	—	50	畚 田 山野	47,389 17,640 11,160 13	1,777	
安岳郡	—	—	—	—	2	田	200 59	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	田	200 59	—		
信川郡	1	田	100	20	—	—	—	3	山野	176 40	9	田	44,440 154	—	—	—	—	—	—	13	山林	44,716 40	254	
載寧郡	—	—	—	—	3	田	114 61	—	—	—	11	田	2,220 317	—	—	—	—	—	—	14	田	2,334 378	—	
黄州郡	1	田	70	5	11	田	1,073 543	2	田	800 91	9	田	17,680 337	—	—	—	—	—	—	23	田	19,623 976	—	
鳳山郡	3	田	2,858	119	3	田	3,060 103	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	田	5,918 222	—		
瑞興郡	15	田	6,035	461	1	田	452 158	2	田	4,900 92	1	田	453 12	—	—	—	—	—	—	19	田	11,840 723	—	
遂安郡	14	田 堡 牛	2,643 21,585 740 1	612	6	田	60 152	—	—	—	1	田	1,280 25	—	—	—	—	—	—	21	田 堡 牛	4,493 21,585 740 1	789	
谷山郡	—	—	—	—	3	田	623 61	—	—	—	2	田	252 30	—	—	—	—	—	—	5	田	875 91	—	
合計	140	畚 田 林野 家屋 牛	25,157 28,929 124,431 1,640 5 3 1	5,372	396	畚 田 林野	44,624 29,900 56,672 13	73	畚 田 林野	37,613 360 360 55	139	畚 田 林野	150,924 7,262 9,503 3	4,315	—	—	—	6	835	259	754	畚 田 林野 家屋 牛	261,153 66,451 190,966 1,640 76 3 1	25,330



平 安 南 道

府 区 郡 分 別	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其 の 他			合 計		
	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数
平 壤 府	—	—	—	3	2,130	55	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	2,130	55
鎮 南 浦 府	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大 同 郡	1	206	344	15	1,745	1,640	9	31,951	835	62	31,937	1,744	—	—	—	1	50	92	88	65,889	4,675
順 川 郡	3	871	57	114	98,826	7,376	4	5,335	157	28	32,855	1,213	—	—	—	—	—	—	149	137,887	8,803
孟 山 郡	—	—	—	12	2,015	212	15 牛	5,084 7頭	744	2	516	24	—	—	—	—	—	—	29 牛	7,615 7頭	980
陽 德 郡	3 山林	390 10町	209	7 田	7,402 5,000坪	1,023	52	6,065	2,141	1	260	4	—	—	—	48	440	3,630	111 田 山林 5,000坪 10町	14,577 5,000坪 10町	7,007
成 川 郡	3	2,439	126	16	2,172	609	5	7,050	339	10	12,196	213	—	—	—	10	9,058	260	44	32,915	1,547
江 東 郡	46	3,130	2,187	43	3,273	1,152	73	10,939	3,728	—	—	—	—	—	—	90	36,422	3,918	252	52,744	10,985
中 和 郡	1	1,940	446	11	1,292	256	4 牛	10,086 8	348	11	7,728	472	—	—	—	2	570	112	29 牛	21,616 8	1,634
竜 岡 郡	4	875	288	29	8,073	785	7	1,311	798	1	100	14	—	—	—	—	—	—	41	10,359	1,885
江 西 郡	4	1,330	93	19	16,480	1,209	10	12,728	470	25	19,754	1,254	—	—	—	2	530	38	60	50,822	3,044
平 原 郡	10	4,470	385	52	14,729	2,869	19 林野	44,384 4町	1,759	5	5,945	163	—	—	—	31 田	59,756 5,000坪	1,544	117 田 林野 5,000坪 4町	124,284 5,000坪 4町	6,717
安 州 郡	1	150	30	11	6,448	1,207	3	81	90	3	940	59	—	—	—	11	5,010	1,232	29	12,649	2,418
价 川 郡	1	15	45	2	350	37	6	10,128	505	3	7,015	316	—	—	—	—	—	—	12	17,508	903
德 川 郡	5	4,625	302	8	5,071	892	3	3,260	327	3	2,248	141	—	—	—	1	252	17	20	15,456	1,679
寧 遠 郡	1	4,610	1,443	7	3,078	897	1	900	18	1	270	39	—	—	—	1	110	46	11	8,968	2,443
合 計	83 山林	25,051 10町	5,975	349 田	173,104 5,000坪	20,239	211 林野 牛 4町 15頭	146,302 4町 12,259	155	121,744	5,656	—	—	—	—	197 田	112,218 5,000坪	10,884	995 田 林野 牛 10,000坪 14町 15頭	578,439 10,000坪 14町 15頭	55,015

平 安 北 道

府 区 郡 分 別	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其 の 他			合 計		
	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数
新 義州 郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
義 州 郡	—	—	—	—	—	—	44	11,896	3,468	57	23,875	3,309	—	—	—	—	—	—	121	35,771	6,777
亀 城 郡	—	—	—	—	—	—	26	2,532	1,206	—	—	—	—	—	—	24	8,900	1,486	50	11,432	2,692
泰 川 郡	—	—	—	1	40	32	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	40	32

		円		円		円		円		円		70 田 8,150坪 谷 2,850 "							
雲山郡	/	3,621 1,300	—	—	—	32	4,054 2,788	2	5,090 110	—	—	—	3	田 8,150坪 谷 2,850 "	112	38	12,825	4,310	
熙川郡	—	—	—	11	688 152	11	346 244	—	—	—	—	—	—	—	—	22	1,034	393	
寧辺郡	/	10,367 232	3	192 184	10	2,890 805	4	380 131	—	—	—	52	19,834 4,542	70	33,663	5,894			
博川郡	—	—	—	4	613 316	2	1,000 56	—	—	—	—	75	54,832 6,246	81	56,445	6,618			
定州郡	/	70 37	5	1,389 578	79	7,923 1,613	4	2,209 292	—	—	—	124	61,675 17,306	213	73,266	19,826			
宜川郡	21	3,710 862	105	21,229 7,588	12	4,541 708	19	10,665 1,177	4	250 240	4	180 111	165	40,555	10,686				
鉄山郡	—	—	—	14	239 843	—	—	—	—	1	24 24	—	—	—	15	263	867		
竜川郡	—	—	—	37	3,229 748	2	2,134 2,466	2	13,004 157	—	—	—	—	—	41	18,367	3,371		
朔州郡	—	—	—	2	635 20	—	—	1	2,000 30	—	—	—	52	12,122 1,720	55	14,757	1,770		
昌城郡	—	—	—	—	—	—	—	56	5,879 3,777	—	—	—	5	1,343 217	61	7,222	3,994		
碧潼郡	—	—	—	3	128 60	34	10,601 739	—	—	—	—	—	23	5,445 1,632	60	16,174	2,431		
楚山郡	—	—	—	21	515 325	62	6,280 4,862	—	—	—	—	—	12	14,673 143	95	21,468	5,330		
渭原郡	4	834 108	19	1,020 574	—	—	—	—	—	—	—	—	30	13,175 869	53	15,029	1,551		
江界郡	—	—	—	12	1,020 890	1	34,040 1,600	—	—	—	—	—	5	5,000 1,000	18	40,060	3,490		
慈城郡	—	—	—	56	4,798 2,687	3	876 305	1	1,220 122	—	—	—	11	1,617 513	71	8,511	3,627		
厚昌郡	—	—	—	22	1,229 808	—	—	—	—	—	—	—	2	1,781 444	24	3,010	1,272		
合計	28	18,602 2,539	315	36,944 15,805	338	89,113 20,857	146	44,312 9,105	5	214 264	422田 谷 200,627 8,150坪 2,850 "	36,361	1,254田 谷 409,892 8,150坪 2,850 "	84,931					

## 江 原 道

区 郡 別	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其 の 他			合 計		
	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数
春 川 郡	13	383	943	101	1,147	1,082	—	—	—	4	1,013	228	—	—	—	2	87	32	120	2,630	2,285
麟 蹄 郡	—	—	—	2	2,875	433	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	4,360	170	37	7,035	603
楊 口 郡	—	—	—	11	281	144	9	534	296	—	—	—	—	—	—	—	—	20	815	440	
淮 陽 郡	1	20	20	27	390	312	91	9,100	1,140	1	25	5	—	—	—	4	105	45	124	9,440	1,522
通 川 郡	7	1,000	201	33	10,786	841	13	1,823	362	1	900	80	—	—	—	—	—	54	14,509	1,484	
高 城 郡	1	21	38	99	5,573	1,312	23	959	1,086	3	12,250	81	—	—	—	4	880	51	130	19,683	2,568
襄 陽 郡	1	—	30	157	4,607	3,252	62	2,531	1,218	7	3,476	127	1	30	12	—	—	228	10,664	4,639	
江 陵 郡	—	—	—	175	11,244	2,842	21	16,847	902	8	19,860	361	—	—	—	—	—	204	43,951	4,105	
三 陟 郡	—	—	—	13	1,310	382	2	210	16	1	700	22	—	—	—	4	792	265	20	3,012	685
蔚 珍 郡	—	—	—	73	1,383	1,344	25	1,305	818	28	2,600	200	—	—	—	2	130	106	128	5,418	2,468
旌 善 郡	—	—	—	42	4,463	861	68	6,058	3,473	—	—	—	—	—	—	2	280	78	112	10,801	4,412
平 昌 郡	1	150	230	67	7,871	2,108	104	9,713	4,559	55	39,248	1,453	—	—	—	12	716	541	239	57,698	8,911
寧 越 郡	—	—	—	234	17,394	4,962	6	540	112	16	1,396	330	—	—	—	30	1,784	914	286	21,114	6,318

原州郡	21	14,850	1,105	94	43,450	1,773	2	2,000	20	88	40,420	2,221	6	1,130	86	—	—	—	211	121,850	5,213
横城郡	—	—	—	16	3,139	797	1	100	97	2	910	17	—	—	—	12	2,189	944	31	6,338	1,852
洪川郡	—	—	—	224	9,638	3,487	8	380	324	3	1,918	47	—	—	—	110	7,132	4,340	345	19,068	8,220
華川郡	8	779	356	69	3,365	1,000	9	294	216	8	571	170	—	—	—	20	2,125	701	114	7,134	2,443
金化郡	5	590	188	143	8,115	2,295	28	2,863	1,900	20	8,828	287	11	1,510	159	15	547	835	222	22,453	5,644
鉄原郡	8	313	310	224	12,886	1,787	4	323	72	4	1,050	34	11	1,410	111	4	3,280	1,147	255	19,262	3,461
平康郡	23	2,933	573	77	4,630	1,335	21	2,752	379	27	4,947	707	—	—	—	16	1,760	470	164	17,022	3,444
伊川郡	—	—	—	55	5,511	1,809	6	332	233	26	1,445	1,212	—	—	—	7	568	230	94	7,856	3,484
合 計	89	21,039	4,014	1,963	159,858	34,160	503	58,644	17,223	302	161,577	7,110	29	4,080	368	252	24,735	10,866	3,138	431,953	74,244

咸 鏡 南 道

府 区 分 郡 別	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其 の 他			合 計		
	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数
元山府	—	円	—	2	円	46	—	円	—	2	円	83	—	円	—	—	円	—	4	円	129
咸興郡	—	—	—	82	6,174	3,774	37	7,425	1,158	30	81,885	3,315	11	583	448	—	—	—	160	96,067	8,095
定平郡	6	6,530	1,381	21	17,082	221	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	27	23,582	1,602
永興郡	23	4,024	1,335	17	28,755	449	3	94	54	12	2,203	595	3	510	345	—	—	—	58	35,586	2,978
高原郡	—	—	—	13	683	233	1	400	40	6	357	361	—	—	—	—	—	—	20	1,440	634
文川郡	2	415	75	4	774	270	3	944	207	5	3,542	108	—	—	—	—	—	—	14	5,675	662
徳源郡	—	—	—	42	3,158	554	3	1,182	241	9	3,710	144	10	520	130	14	2,880	184	78	11,450	1,253
安辺郡	—	—	—	4	180	59	—	—	—	1	100	9	2	300	65	6	2,300	165	13	2,880	298
洪原郡	25	2,444	2,712	84	4,350	3,208	2	112	188	8	22,580	310	—	—	—	6	320	306	125	29,806	6,724
北青郡	26	2,487	1,614	179	22,691	11,623	25	20,940	1,663	16	2,416	302	5	150	168	14	2,295	1,459	265	50,979	16,829
利原郡	3	87	187	22	983	1,585	1	—	119	1	2,000	50	—	—	—	—	—	—	27	3,084	1,941
端川郡	—	—	—	81	1,027	5,996	1	20	66	15	6,181	325	1	6	15	20	4,831	948	118	12,066	7,350
新興郡	1	30	70	1	600	71	3	480	178	6	35,076	566	—	—	—	4	1,917	545	15	38,403	1,430
長津郡	19	1,866	679	2	230	62	8	750	226	3	468	59	—	—	—	—	—	—	32	3,314	1,026
豊山郡	3	630	145	4	253	448	—	—	—	6	3,432	508	—	—	—	1	15	30	14	4,230	1,131
三水郡	—	—	—	2	2,550	360	2	437	1,151	2	4,402	380	—	—	—	2	230	893	8	7,419	2,784
甲山郡	—	—	—	34	1,374	1,708	131	9,255	4,443	—	—	—	—	—	—	11	1,585	570	176	12,214	6,721
合 計	108	18,507	8,198	594	91,334	30,267	220	42,059	9,736	122	172,152	7,115	32	2,081	1,171	78	16,374	5,100	1,154	342,495	61,587

咸 鏡 北 道

府 郡 別	区分	公共事業を目的とするもの			扶助を目的とするもの			産業を目的とするもの			金融を目的とするもの			娯楽を目的とするもの			其の他			合 計		
		契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数	契 数	財 産	加入者数
		円			円			円			円			円			円			円		
清 津 府		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
鏡 城 郡		1	240	28	3	2,610	1,188	1	303	69	3	1,281	220	—	—	—	—	—	—	8	4,444	1,506
明 川 郡		8	1,657	624	27	2,256	1,620	3	385	184	21	13,592	741	—	—	—	—	—	—	59	17,870	3,169
吉 州 郡		—	—	—	304	4,876	4,039	2	25	92	8	69,437	467	1	140	38	—	—	—	315	74,478	4,636
城 津 郡		1	600	230	1	80	69	—	—	—	1	8,845	240	—	—	—	—	—	—	3	9,525	559
富 寧 郡		9	9,405	1,508	1	300	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	9,705	1,516
茂 山 郡		1	1,500	400	1	910	122	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2,410	522
会 寧 郡		2	3,250	1,405	4	8,140	403	—	—	—	1	2,500	19	—	—	—	—	—	—	7	13,890	1,827
鍾 城 郡		3	1,820	475	1	203	240	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	2,033	715
穩 城 郡		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
慶 源 郡		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
慶 興 郡		—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	1,365	166	—	—	—	—	—	—	4	1,365	166
合 計		25	18,472	4,671	342	19,375	7,689	6	713	345	38	97,000	1,873	1	140	38	—	—	—	412	135,710	14,616



### 第三章 契の組織

#### 第一節 契の組織並に内容

契の出資 契は契約に依りて成立する一種の組合的組織にして、契員の共同出資を以て一定の事業を為すを目的として居る。契員相互の關係は契約に依りて成立するものにして、その契約の形式は書面を以てすることもあるが、多くは慣習に依りて規約が実行されるのである。契の出資は金銭を以てすることあり、又は穀類を以てすることあり、又は労力を以てすることあり、或はその中の二種乃至三種を併せて出資することあり、各契員の出資額は平等均一なるを普通とするも、契の性質によりては等差を設けて不均一の出資を為すこともある。而して出資の金穀は、入契の際一時に納むるものと定期（年一回、春秋二季、又は四季、毎月等）に納入するもの、及び入契の際出資を要せずして、必要の場合に随時金穀労力を醸出提供する方法もある。契の出資額は大体に於て少額にして、要するに零碎の金穀を集め共同の負担を以て目的を遂行せんとするに在る。

契の加入 契の組織は、慣習上その範圍を一定の地域内に限らるるを普通とし、洞契、里中契、其他多くは一洞里内に行はれ、中には面契の如き一面を単位として一契を組織するものもあり、或は宗契、門契の如く一族一門の間に行はるるものあり、若くは同志数人の間に於て組織するものもある。契の加入には、洞里契、其他公共事業を目的とするものの如く強制するものあり、貯蓄契、娛樂契の如く個人相互の利益を目的とするものに在りては任意なるものもある。

契の財産 契には概して契員の出資に係る金穀、其他の財産あり、契はこの財産を基本として利殖を計り、その利潤を以て目的を遂行し、或は出資金穀を以て直ちに目的の爲めに消費し、従つて財産を有せざるものもある。契の財産は契員の共有とし、各員の持分は平等なるを普通とするも、中には出資額に応じ持分を定むるものもある。財産を利用して利殖を計るものは、その利用を契員に限るものと、また契員外にも利用せしむるものと、或は契員輪番に利用するもの等あり、契員外に利用せしむる場合はその洞里内の者に限り他部落の者とは貸借を為さざるを普通とするやうであるが、これは多く信用貸を為す関係からであると思はれる。契の金銭貸借の利率は地方に依りて一様でないが、一箇月五分を普通とし、また米穀の貸借は多く長利と称し、一箇年五割を普通とするものの如く、元利金の精算回数は、一箇月、春秋二季、四季及び年一回等あり、利率、償還方法等は一定しない。契の財産は役員が之を保管し、一般契員の監視に依る外何等の監督機関がない結果、その管理は往々にして無責任に流れ易い弊害があるけれども、契の管理者は如何なる場合と雖も、独断を以て契の負担に帰すべき負債を為すことは許されて居らぬ。契の財産に対する各契員の持分は、大体に於て之を相続するを許し、契の機関の承認を得るにあらざれば之を譲渡することが出来ないことになつて居るが、第契、作罷契の如き自由に売買し得るものもある。契の財産処分及びその利用方法等は、契員總會の決議に依るを普通とし、總會の開会は多く精算期に於てすることになつて居る。

契の機関 契の執行機関は簡單なもので、契に関する重要な事項は契員の主なる者に諮つてこれを為し、別段議事機関は置かぬを普通として居る。役員は、契長、有司、掌財、書記、または契長、副契長、評議員、幹事、或は契長、掌議、色掌、若くは組合長、理事、会計、評議員、監督と云つたやうに各種の名称があるが、要するに役

員は、契の代表者、事実上の理事者、会計、書記等の事務を分担するもので、大抵は契長、有司の如きは契員の互選によりて就任し報酬を受けないが、会計、書記の事務を執る者には少額の報酬を給する場合もある。尤も無尽講に類する契には勿論斯かる組織はなく、また姦契の如きは大方、座首などと称する頭目があるのみで、外に何等の役員を置かぬを普通とする。

契の解散 契には存立期間を定めないのであるが、中には之を定めて居るものもあり、またその期間にも、五年、十年、十五年といふやうに区別あり、概して利殖を目的とするものには存立期間あり、公共、共済、娯樂等の契には、存立期間を定めないのである。契の解散は或は財産が無くなり、或はその目的を達し、或は存立期限が満了すれば自然解散する。中には娯樂契の如く任意に解散し得るものもあり、この場合にも契員過半数の同意を要するのである。

以上は契の組織内容の一斑を述べたものであるが、契の種類及び性質は甚だ多く、従つてこれが組織の方法も、また地方に依り勿論一定しない。今試みに最近各道の調査に係る、契の組織状況を見ると左の如くなつて居る。

#### 京 畿 道

一、公共事業を目的とするもの、道路修繕、橋梁架設、水門維持、山火事防止等を目的とするものにして、二人又は三人の役員を置き、契員は年額五十銭乃至一円を出資して、事故発生したるときは其の費用に充用するを通例とす、存続期限を定むることなきを常とす。

一、扶助を目的とするもの、婚契、喪契、宗契、戸税契等にして、二人乃至四人の役員を置き、契員中事故発生したるときは、契員は三十銭乃至二円を出金し、当該契員に交付するを通例とす、存続年限は宗契、戸税契に於ては五年乃至十年、

其の他に於ては契員一人に付一回の事故を終了するに依り解散するを常とす。

一、産業を目的とするもの 長契、副業契、畜牛契等にして、役員二名又は三名を置き、年額三十銭乃至一円を出金し契の目的を達するを通例とす、畜牛契に於ては契員一人に付一頭つゝの牛を購入するに依り解散し、其の他は五年内外を以て存続期限とするを常とす。

一、金融を目的とするもの 多く殖利契と名付け、年額一円乃至十円を出資し、貸金を為して農村細民の金融機関とすると共に、契員の営利を図るものなり、一人乃至五人の役員を置き存続期限は十年を以て通例とす。

一、娯楽を目的とするもの 山遊契、弓術契等にして、一人乃至二人の役員を置き年額二円乃至五円の出金を為し、年一回又は二回の娯楽費に充つるを通例とす、存続期限の定めなきを常とす。

一、貯蓄を目的とするもの 貯蓄契、草鞋契、吹契等区々たる名称を付け、一人乃至三人の役員を置き収入の一部を（月十銭乃至一円を常とす）貯蓄するものなり。存続期限は五年乃至十年を常とす。

一、教育を目的とするもの 教育契又は蒙学契と名付け、男子幼児を有せるもの契を組織し、年額一円乃至五円を出金殖利して、目的児童の学齢を待ち其の教育費に充つるものなり、存続期限は十年乃至十五年を常とす。

#### 忠清南道

#### 契の組織内容

（イ）、目的 公共事業、扶助、産業奨励、金融、娯楽、納税等とす。

（ロ）、役員 契長、書記、会計等を有するものを普通とし議決機関として評議員を有するもの諸機関として顧問、世話役として幹事を有するものあり。

（ハ）、出資額 契の規模大小に依り一定せずと雖も最高一人二十円、最低十銭とし、現金五十銭、穀五升を普通とす。

（ニ）、出資方法 規約又は申合に依り一時又は一定年間現金又は穀等を均等醸出するを普通とし、或は生活程度に依り不均一に醸出するものあり。

（ホ）、存続年限 各契を通じ一定せざるも規約又は申合に依り存続年限を定むるを普通とし又は性質上永久存続のものあり。

（ヘ）、解散 契の目的を達したるとき解散するを普通とするも稀には契員の議決ありたるとき、其の他已を得ざる事故に依り解散することを定めたるものあり。

#### 全羅北道

契の種類及性質 本道各郡の契は甚だ多数にして一千百四十三に達し其の名称も亦七十余を以て数へらるるが、之を其の組織と目的とに因りて分類する時は一、組織に於ては洞民一般にてするもの、洞里有志者にてするもの、及び同族間に於てするものとの三種あり。二、目的に付きて大別するに、公共事業、産業の発達、貯蓄と利殖、相互扶助、教育事業、納税準備、親睦娯楽の七種あり。

契の組織（目的、役員、出資額、出資方法、存続年限、解散事由）

一、目的 契員の共同利益又は公共の利益を計るものなり、例へば冠婚葬祭に当り慶弔相助け長事、殖産、教育、金融等に対し共同出資経営す。

二、役員 幾多の契の中堅とも称すべき為親契にありては役員は契長及び有司なるか其の他の雑種の契は契長、会計、書記、幹事、監督、評議員等を置く、但し契により多少の異同あり。

三、出資方法 現金又は長産物（主として穀を用ふ）を以てし年一回又は毎月一回又は一時出資する等同一ならず。

- 四、存続年限 三年、五年又は十年或は無期限等にして一定せず。  
五、解散事由 契の目的を果し又は存続年限終了の場合、又は契員中規約違反者或は不和を生じ維持不可能となりたる場合に於て解散す。

全 羅 南 道

契の組織内容

- (1)、役員 何れの契に在りても規約或は申合せを為し契長、評議員及会計員等（其の他是に準すべきもの）を置き契の事務を処理せしむ。  
(2)、出資額及出資方法 最初一回平等に金銭又は雑穀を醸出し爾後之が利殖を図り夫々目的に副はむとするもの最も多く、金融を目的とする契にては始め株式様の醸出方を為し利殖金配当に当りても同様の方法に依るものあり、又扶助を目的とする契にては事故発生の都度契員平等に出資するものあり。  
(3)、存続年限 有限制のものゝ永久制のものゝあり、前者は大概扶助を目的とするもの若くは畜牛購入契の類にして各人一周を以て終る、他に五年以内の期限を附したるもの二三あり。  
他は総べて永久制のものとす。

- (4)、解散事由 期限満了に依るの外定めあるものなし。

慶 尚 南 道

契の機関の名称も亦多種多様なり、然れども本道内に於て最も多きは左記の如きものにして、契の活動は是等の機関が契員の重なるものに諮り契務の総てを執行する極めて簡便なる組織なり。

- (イ)、契長 契長は契を代表し契務を統轄するものにして契員中資産、信用、人望等の備はりたるものを推す。

- (ロ)、有司 有司とは契長を補佐し契務を掌理するものにして契長之を兼ねることあり（或契に於ては有司を総務又は幹事とも謂ふ）又契長事故あるときは其の職務を代理す。

- (ハ)、掌財及書記 掌財とは会計員を指すものにして常に契の会計事務に當るものなり、書記は契の文簿の処理に當るを常とす。

契の解散の原因に付ては一定したる所なきも、大体左の三種に区分するを得。

- (1) 存立年限を定めたるものは其の年限の到来に依りて解散す。

- (2) 一定の事業を目的とする場合に於ては其の事業の完成に依り又は不成就に依りて解散す。

- (3) 契員中解散を希望する者ある場合には多数の意見に依り自ら解散を見るべく、又契員が一人となりたるときは当然解散す。

上述の事由生ずる場合に契は解散し、此の場合に於ける財産の分配は出資の額に依り、又利益の分配、損失の分担に付ても其の出資額を標準とす、而して契員脱退の場合に於ては出資の払戻をなすを通例とす。

咸 鏡 南 道

契の種類に就ては多岐多様にして本道全体を通じ約百三十種の異名称を冠するものあるも、更に其の目的に依り分類するときは別表の通り六種に過ぎずして、性質に依り分類するとせば（一）組合的性質を有するもの（二）単なる共有的性質を有するもの（三）部落的規約に過ぎざるもの等に大別し得るものとす。而して契の役員には何れも契長、掌議、色掌等を置き、契長の指揮を受け掌議又は色掌其の仕事に當るものとす。

出資額並に出資方法は種類及性質に依り異なるも、何れも各人平等額を以て一時出



金するもの、隨時出金するものの二種類ありて、其の金額は契に依り各異なるものにして、存続年限に就ては多くは永久存続なるも、特に貯金を目的（商業資金造成）とするもの又は小農家に牛の買入を奨励せむが為設立したる牛契、父母の死後に其の費用を扶助する目的を以て設立したる喪布契の如きものは、其の特定の目的終了後には解散するものとす。

本道に於ける契の種類及性質並に組織左の如し。

郡別	契の種類	名	称
義州郡	金融契、贖牛契、種牡牛契		
龜城郡	殖牛契、門契、学契		
泰川郡	農民契		
雲山郡	儒林契、種牡牛契、殖産契、書堂契		
熙川郡	喪布契、養蜂契		
寧辺郡	喪興契、畜牛契、經濟契、殖産契、名勝保存契、祭祀契、教育契、学契、門契		
博川郡	祭祀契、産業契、喪布契、面人契		
定州郡	社契、貯蓄穀物契、喪布契、農民組合、畜牛契、殖産契、貯蓄契、学契、書堂契、門契、行宜契		
宜川郡	門契、学契、香祀契、喪補契		
鉄山郡	喪補契、音楽契、喪布契、加冠契、扶助契、喪興契		
竜川郡	貯穀契、宗親契、牛契、豚契、喪贈契		
朔州郡	学契、貯穀契、扶助契		
昌城郡	書堂契、農務契、種牛契、貯蓄契		

碧潼郡	書堂契、畜牛契、冠婚喪祭契
楚山郡	学契、民契、婚喪契、祈禱契
渭原郡	畜産金融契、学契、喪布契、均賦契
江界郡	学契、畜産契、貯蓄契、冠婚喪祭契
慈城郡	学契、畜産契、貯蓄契、喪布契
厚昌郡	学契、喪布契

公共事業を目的とするもの

郡別	契の種類	目的	役員	出資額	出資方法	存続年限	解散事由等
雲山郡	文廟の奉祀及地方教化	契長、副契長、會計員	五十錢以上	寄附に依る	永	久	
寧辺郡	會員一般生活上必需品の供給及金貸付	契長、副契長、會計員、監査役、書記、評議員其他	一口 二円	四回に分ち払込	十	年	期限の到来に依り
定州郡	社契は契員相互の文化の向上を図る	契長、副契長、理事	一口 十錢以上	一回に払込	永	久	
宜川郡	會員一般の生活上必需品の供給及金貸付	契長、副契長、其他	一口五十錢以上	可成一回払込	十年若は永久		
渭原郡	公共施設事業	契長、幹事	一口五十錢以上	一回払込	十年乃至八十年		
扶助を目的とするもの							
奉川郡	共助及産業奨励	組合長、副組合長、事務、書記、評議員	契費一升及毎月一升を納入し毎月末日十錢払込	永	年		

寧辺郡	遺喪者ある場合相互扶助する為	契長一、執事一	一人二円	設立の日全額払込	永年
博川郡	契員の死亡の際喪祭料等支出の為	契長、幹事	一口一円乃至五円	申込と同時に	同
定州郡	貯蓄及喪布契にして何れも契員相互の扶助の為	同	米七升乃至金三円	同	同
宣川郡	喪補契と称し相互扶助を目的	同	同	同	同
竜川郡	遺喪者ある場合相互扶助	役員二人乃至五人	一口二円	申込と同時に	同
朔州郡	同	契長一、幹事一	一口九円	設立年後三箇年毎年三円宛	同
碧潼郡	遺喪者ある場合相互扶助	契長一、幹事若干名	一口五十銭乃至二円	申込と同時に	同
楚山郡	冠婚喪祭に器具貸付	契長	一口二円以上	同	同
渭原郡	同	契長一、幹事一	一口五十銭以上	同	十年乃至五十年
江界郡	遺喪者ある場合相互扶助	契長	一口五十銭以上	同	同
慈城郡	喪婚に際し相互扶助	契長一、幹事若干名	一口五円	同	同

産業を目的とするもの

朝鮮の契

郡別	目的	役員	出資額	出資方法	存続年限	解散事由等
義州郡	畜牛改良増殖の為	契長、副契長、評議員	三十円乃至四十円	五回乃至十回	三十年乃至五十年	
亀城郡	同	同	十円以内	一回に払込	十年乃至三十年	期限の到来に依る
雲山郡	畜牛改良	契長五人(面長)	五十銭以上二円	年額五十銭乃至二円	一年乃至三十年	期限の到来に依る
熙川郡	養蜂事業の改良増殖	契長一、副契長一、評議員一、監査員	一円又は二円	全額を一時払込	十年	期限の到来に依る
寧辺郡	畜牛改良、増殖の為	同	一口五十銭以上一円八十銭	概して一時払込	永年	久
定州郡	農林、畜牛増殖等の為	契長、評議員、書記等	一口五十銭乃至三十銭	申込と同時に	十年若くは永久	
宣川郡	同	同	同	同	同	
竜川郡	畜牛改良、養豚改良増殖	契長、理事	一口一円五十銭乃至七円六十銭	同	永年	久
昌城郡	農事改良、畜牛改良	契長一、幹事一	一口二円乃至二十円	同	一年乃至十年	
碧潼郡	農事改良、畜牛、養蜂改良	契長一、副契長一、幹事一	一口五十銭乃至五円	申込と同時に毎年払込	十年	箇年
楚山郡	畜牛改良	契長	一口五円以上	申込と同時に	永年	久

江界郡 青蓮達、金融の 契長一、助役二人 一口十円一時払込 総会の議決による

慈城郡 畜産奨励 契長一、幹事一 一口年五十銭二期払込 十年

娯樂を目的とするもの

郡別	種目	目的	役員	出資額	出資方法	存続年限	解散事由等
宜川郡	音楽研究	契長一、執事一	一口一円一時払込	永	久		
鉄山郡	同	同	同	同	同		

金融を目的とするもの

郡別	種目	目的	役員	出資額	出資方法	存続年限	解散事由等
義州郡	貯蓄 金融の爲	契長一、執事一、乃至五人	一口乃至三円	申込と同時に	永 久		
雲山郡	貯蓄を目的とす	契長二、評議員三、會計員三	五十銭乃至十円	年額五十銭乃至十円	十年乃至十五年	期限の到来に依る	
寧辺郡	勤儉貯蓄の奨励及金融	組合長、理事、監査役、評議員	一口五十銭乃至五円	勤儉貯蓄金を充つ	十年乃至 永久		
定州郡	穀物貯蓄又は一般貯蓄金及金融	組合長、又は契長、理事、監査役、評議員、書記	一口二十銭乃至五十銭	穀物は秋収期に金員は申込と同時に	十年又は 永久		
宜川郡	同	同	同	同	同		

竜川郡 貯蓄を目的とす 契長一、理事一、役員五人 大豆一斗及金二 十年間積立据置 十五年乃至二十年 契員の決議に依る

朔州郡 同 同 一口粟一石 一年粟一石宛贈 十五年

昌城郡 同 同 一口五十銭乃至三円 隨時払込、定時払込 十年乃至十五年

慈城郡 同 契長一、幹事一、評議員若干名 一口年一円 年額一円払込 七箇所

其の他

郡別	種目	目的	役員	出資額	出資方法	存続年限	解散事由等
龜城郡	始祖の祭祀又は児童教育費の造成等		契長外一乃至三	十円以内	一回若くは三回払込	五十年	期限到来に依る
寧辺郡	名勝地の保存祖先の祭祀、書堂維持の爲		契長一、執事三	一口五十銭乃至十円 契は随意	一時払込又は随意	永年	大部分は門契にして歴史最も古し
定州郡	同門契、書堂契、行宜契等		契長、副契長、執事、書記	一口三十銭乃至十円	門契は出資額及払込方法随意	同	同
宜川郡	門契、学契、香祀契等		同	一口一円乃至二円	同	十年又は永年	
朔州郡	学契にして書堂維持の目的		契長一、幹事一	一口五円乃至十円	一時払込	永年	
楚山郡	祈禱を爲す目的		契長一	一口五十銭以上	申込と同時に	同	





## 朝鮮の契

[illegible]

扶助を目的とするもの

- 1 護喪及護喪の資金造成を図るもの
- 2 冠婚式用礼服及器具の相互使用を図るもの
- 3 冠婚喪祭等慶弔の際相互扶助を図るもの

二五

い、目的 父母己妻の護喪又は護喪の資金に充てべき基金の造成、冠婚式用礼服及器具の相互使用、冠婚喪祭等慶弔の際又は天災事変に遭遇したる場合に相互扶助を図るもの等なり

ろ、役員 1 契長、副契長、會計、書記

公共事業を目的とするもの

- 1 橋梁堤防の維持を図るもの
- 2 患難救済を図るもの
- 3 文廟を崇拝し、良風美俗を振興せんとするもの
- 4 社会事業に努力せむとするもの

二二

い、目的 橋梁及堤防の維持、慶弔及患難の救済、文廟を崇拝し、良風美俗の振興、社会事業に努力せんとするもの等なり

ろ、役員 一 契長、副契長、書記、班首、公員、総務、財務、評議員、理事等

は、出資額及出資方法 入契当時契員各人加入金とし、損金として若干宛出資するもの等なり

に、存続年限及解散事由 別に定めたるものなし

本道に於ける契の種類及性質並に組織左の如し。

種類 性質 同上契数 組織

咸鏡北道

書堂契	書堂管理	同	同	七 七 円	初回一人前三円宛 払込む	永 年
納税契	納税義務助行	納税	同	一人に付二十銭 以上一円以下	組織と同時に一回 払込む	同
戸布契	同	同	同	同	同	同
宗 契	同族の親睦を図 り祖先を崇拝す	親睦	契長一、有志若 干	同	同	同

教育契	同	同	同	一〇〇 円	一回に二十円宛払 込む	二十箇 年 期限満了のとき 契員の決議に依 り解散
契 契	契員の子弟教育 を図る	教育	契長一、書記若 干	一口十円以上五 十円以下	毎月一回宛所定の 額は達する迄払込 む	同
詩 契	同志の親睦を謀 り月次回宛集り て詩を作る	同	同	同	同	同
甲 契	同年の老人集り 設けし年二、三 回宛愉快に暮す	娛樂 会 計	一人前一円内外	組織又は加入の際 即納	永 久	同
契 契	契員相互間の金 融を緩和す	同	契長一、理事一 書記若干	一口一円以上十 円以下	毎月一口に付其の 定額を払込む	三年以上十年以 下 同
勤 契	同	同	同	同	同	同
殖 契	同	同	同	同	同	同
講 契	契員相互間の金 融を緩和す	同	講主一、幹事若 干、監査若干	一口毎月十円又 は二十円宛払込 む	同	一年又は三年 同
月 契	契員の出資を殖 利す	金融	契長一、會計若 干、書記若干	十円以上五十円 以下	毎月一円以上五円 以下	五年乃至十年 期限満了 同
水 契	精米及その他の 穀穀調製	同	契首一、會計一	一口一円以上二 円以下	組織の際即時払込 む	永 久 契員の決議に依 り解散を為すこ とあり
契 契	契の維持修繕	同	契長一、書記、 幹事若干	一人前一円以上 五円以下	外に事業費の喪費 を負担する事あり	同

**教育を目的とするもの**

- 6 児童教育を図るもの
- 5 私立学校の設置及経営を図るもの
- 4 各学父兄に於て其の子弟を中等以上の教育を受けしむべく其の学資を造成するもの
- 3 学梨林を造り植樹を図るもの
- 2 書堂の維持経営、学童に学資補助将来教育事業の財源造成を図るもの
- 1 児童教育を図るもの

**娯樂を目的とするもの**

- 1 弓術娯樂を為すもの
- 3 勤儉又は節用貯蓄を図るもの

は、出資額及出資方法 毎月契員一人五十錢又は一円或は三  
 円宛貯蓄するもの 契員各人年額若干宛出金するもの 設  
 置等時五十錢又は四円或は十円宛出金の上各人毎月若干  
 貯蓄するもの 穀物又は現金を定期或は隨時に出資するも  
 の 毎月末一円 三円の三種に 契員の資力に  
 出資するもの等なり  
 に、存続期限 設置の日より起算し滿三箇年間又は四箇年間  
 或は五箇年間とす  
 ほ、解散事由 存立期間滿了に依る  
 い、目的 時々弓術会を開いて運動並に娛樂を為すを以て目  
 的とするものなり  
 ろ、役員 契長、副契長、會計  
 は、出資額及出資方法 別に定めたることなし  
 に、存続期限及解散事由 同  
 い、目的 書堂の維持經營及學童に學資補助並將來教育事業  
 の財源造成、洞里内の兒童教養及學童に植樹を為し且つ  
 苗圃の經營各學父兄に於て其の子弟を中等以上の教育を受  
 けしむべく學資の造成、私立學校の設置及經營、  
 書籍を購入し主に貧困者に書籍貸与を以て目的とするもの  
 等なり  
 ろ、役員 契長、副契長、幹事、評議員、會計  
 3 2 1 契長、總務、理事、書記  
 契監、監事、事務員  
 は、出資額及出資方法 契員加入當時一人二十錢、五十錢、  
 七十錢又は一円、五箇年計四を以て契員各人毎月三円宛出  
 資するもの、年一期又は二期に分ち適宜出資するもの、毎  
 年三期に分ち毎期一円宛出資するもの等なり  
 に、存続年限 設置の日より滿五箇年間となすもの一ありて  
 他は何れも別に定めたるものなし  
 は、解散事由 別に定めたるものなし

<p>功を図るもの</p> <p>4 天災事変の際相互扶助を図るもの</p> <p>九</p>	<p>産業を目的とするもの</p> <p>2 1 副業の奨励を図るもの</p> <p>2 奨農設計及植林を図るもの</p> <p>一五</p>	<p>金融を目的とするもの</p> <p>3 2 1 貯蓄及貸企業を為すもの</p> <p>3 2 1 契員相互の融通を図るもの</p> <p>3 2 1 貯蓄の觀念を涵養すると共に積立金を造成し金融を図るもの</p> <p>一一</p>	<p>貯蓄及利殖を図るもの</p> <p>2 1 貯蓄に依り資金調達の上將</p> <p>二六</p>
---	---	---	---

は、出資額及出資方法 契員毎月金六十錢又は毎年一月に金四十錢宛出資するもの、加入當時五十錢、一円又は二円、三円宛出資するもの、共同作業に依る収入を以て資金を造成するもの等なり

に、存続年限 別に定めたるものなし

ほ、解散事由 同

い、目的 副業材料購入資金の造成、副業を奨励し其の製作品売却代の貯蓄、提議設計及植林を以て目的とするもの等なり

ろ、役員 1 契長、副契長、會計 等を以て役員とする

は、出資額及出資方法 契員加入當時一人五十錢或は一円五十錢或は五円宛出資するものとす

に、存続年限 別に定めたるものなし

ほ、解散事由 同

い、目的 貯蓄貸金業、契員相互間の融通は各自立身上の資金を造成すると共に金積を図るを以て目的とするもの等なり

ろ、役員 1 契長、議員、財務、監事、書記 等を以て役員となす

は、出資額及出資方法 毎月契員一人五十錢又は一円宛出資するもの毎月一口金額一円五十錢以上五円迄として各自所得の程度に依り出資するもの等なり

に、存続期限 設置の日より起算し十箇年内となすもの一、五箇年間となすもの一、其の他は別に定めたるものなし

ほ、解散事由 存立期間満了に依るものとす

い、目的 毎月若干宛貯蓄し之を契員又は契員以外のものに貸出し利殖するを以て目的とするもの、貯蓄に依り資金造成の上契員の可決に依り営業せむとするもの、節用又は勤儉貯蓄を目的とするもの等なり

る、役員 1 契長、副契長、總務、評議員、幹事、會計

第二節 契の事業と規則

契の組織内容は前に述べた通りであるが、尚ほ各地方に行はれて居る契の中、比較的特色あるものに就いて、その事業の概況と契則を示して見やう。

京畿道開城郡開城の塵契

高麗滅亡して王都が漢陽に遷りて以来、開城の人士は商業を以て身を立て、当時最も有利であつた地方行商に従事し、各地の物産を移入して他に販路を求め、永く全鮮の商權を掌握して居たのみならず、金融上に於ても非常なる勢力を占めて居た。従つてその商業取引に巧妙にして、商業組織の完備せること驚くべきものあり、殊に同業者の団結の鞏固にして信用取引の発達し、簿記法の進歩せる如きは世に有名なるもので、就中、契の組織は最も特色を有して居る。現在開城商人中卸商の同業者間に於て契を組織して居るものは、絨塵、白木塵、青布塵、魚果塵の四塵にして、数年前まではこの四塵の外に尚ほ門外白木塵、衣塵、紙塵、鍮器塵、藏塵、砂器塵、饌塵等すべて十六塵あつたさうであるが、何れも萎微不振に陥り、次第に解散又は消滅して、僅に四塵だけ残り、今日では開城蔘業組合、開城布木商組合開城商友会などの新式の組合が組織されて居る。而して大正五年開城商品会議所の廃止さるるや、同所に対し元韓国皇帝より下賜せられたる金一千円は、当時最も有力なる絨塵、白木塵、青布塵の三団体契に対して交付され、契員中資産信用大なる趙箕増を代表者として、時の漢湖農工銀行開城支店へ預入せしめた事実で徴するも、右の三塵契は確實なものであつたことが窺はれるが、今この三塵の所在地、組織年月、契員数を見るに左の如くなつて居る。

開城三塵契		組織年月	契員数
契の名称	所在地		

白木塵	開城南大門内	開國四百四十五年二月	二十人
絨塵	同		十七人
青布塵	開城南大門外	開國四百四十五年三月	三十七人

右の三塵契に就きて其の契規則を見るに、いづれも大同小異であるが、試みに絨塵契規則を示せば左の通りである。

開城南大門内 契規則 (大正元年九月改正)

- 第一条 本塵契ハ開城市街内ニ於ケル絨塵營業人ヲ以テ組織ス
- 第二条 本塵契ハ同業上自衛ヲ保チテ營業ノ發展ヲ企図シ其売買上ノ弊害ヲ矯正スルヲ以テ目的トス
- 第三条 本塵契事務所ヲ開城南大門内本塵都家ニ置ク
- 第四条 本契ハ契員ノ便宜ヲ為スタメ都家ヲ建築補統シテ物貨ヲ保管貯置ス  
但其他營業上共同必要ノ施設ヲ為ス時ハ資金ヲ周旋借入シ其賦課及其他ノ方法ヲ定メ償還ス
- 第五条 本契ニ左ノ任員ヲ置ク
  - 塵契長 一人
  - 塵契任 二人
- 第六条 契長ハ契中大小ノ事ヲ統轄ス
- 第七条 契任ハ契長ノ指揮ヲ承ケテ事務ヲ掌理ス  
但官庁ヨリ諮詢ノ有ル時ハ契任ニ於テ進述ス
- 第八条 任員ハ名譽職トシ其任期ハ一箇年トス



但再任スルコトヲ得、三期重任スルコトヲ得ス

第九条 本契入参員ハ金三円ヲ入参金トシテ本契ニ納入スル義務ヲ有ス

第十条 本契員ハ毎月分二十銭宛月賦ニテ納入ス

但臨時決議ニ依リ徴収ヲ延期スルコトヲ得

第十一条 本契員ハ都家庭舎ヲ用ウルニ対シテ使用料ヲ納入ス、都家一間ノ使用料ハ年額三円宛トス

但他應營業人ニ貸与スル時ノ使用料モ同シ

第十二条 本契ノ負担スル債務ハ現應營業員ニ限リテ連帶責任ヲ有ス

第十三条 本契ノ所有財産ハ現應營業員ニ限リ各自持分ヲ有ス

第十四条 本契員ヲ退應スル時ハ本契ニ対シテ權利義務ハ無キコト

但第十九条但書ノ別規ニ対スル件ハ此限リニアラス

第十五条 本契ノ總會ハ定期、臨時二種ニ区分ス

第十六条 定期会ハ九月三十一日トシ臨時会ハ必要ニ応シテ之ヲ開ク

第十七条 毎年度収支決算シ文簿全部ヲ定期会ニ報告シ新任員ニ之ヲ伝掌ス

第十八条 年度収支剰余金ハ契任及應員中分任シテ殖利スルコト

第十九条 本契員ハ永久ニ親睦シ情誼ヲ表スル為メニ契員ノ父母喪又ハ契員ノ身故アル時ニ対シテ弔禮會葬ノ礼ヲ必ス行フコト

但弔禮會葬ニ関スル件ハ別ニ定規施行ス

第二十条 本契員ハ本契則又ハ臨時施行上ニ違反或ハ不服等ノ有ル時ハ契中ノ決議ヲ以テ十銭以上二円以下ノ罰金及除名ヲ当契員ニ於テ施行ス

本 則

本則ハ總會ノ決議ヲ以テ改正スルコトヲ得

大正元年九月

右は應應契規則であるが、青布應契も白木應契も略ぼ其規則は同一で、其の異なる所を示すと、僅に入参金、都家使用料、定期会の三項のみである。

入 参 会	應 應 契		青 布 應 契		白 木 應 契	
	都 家 使 用 料 (一 間)	年 額	三 円	十 五 円 (退應したる者の再参金は其半額)	六 円	八 円
定 期 会		九 月 三 十 日	八 月 二 十 日		二 月	八 月

而して昔は各應の間に極めて嚴重なる商業習慣あり、應契は李朝時代の六矣應に対する特權の遺風と見えて、同業者間に於て絶対の權力を有し、其の承認を経ざれば商人は開應するを得ず、若し之に背く時は乱應と名づけて其の應の商品を没収された程で、各應の營業区域も、例へば青布は南大門外、白木は北本町と云つたやうに定まつて居て、之を侵すと前と同様乱應の制裁を受けたのであるが、近來は斯かる制裁も行はれず、營業区域なども時勢の変遷と地区の改正等の為めに乱れてしまつたのである。従つて應契に加入するにも、業債によらずして地域によりて加入するやうになつて來た。一例を挙げれば魚果應契の如き今より約十四五年前より一般商人の組合となり、名は魚果應であるが實際に於ては魚類などは取扱つて居ないのである。魚果應の契員は現在十五人にして、契則として正文の規定は存して居ない。商人間に於て取引上に關する争議の起つた時は、前記四應の契長が原告被告を呼び出して事情を聴取し、告目(意見書)を都守に出して其判決を俟ち、また小事は契の協議に依りて裁決する習慣があつて永く之が行はれたのである。然るに近來は組合の威力も漸く衰へ、また法律觀念の発達した結果、遂ひに裁判に訴へて勝敗を争ふ者が多くなつたのは、時代の推移として亦止むを得ないことである。

博物契 この外に博物契なるものがあるが、それは唐貨居間即ち貨物の仲買業者、

及び換錢居間即ち立錢の仲介業者の両居間が合併して組織せる仲買人及び仲介業者の同業組合である。博物契の目的は塵契と同じく、同業者の和親、業務上の協同が主なるもので、現在唐貨居間八十六人、換居間五十一人を以て組織されて居る。博物契の規約も塵契規則と大差なく、契員たるを得る者は、現に開城内に居住し、商業を営まざる信用ある者にして、其の加入の時は契員の紹介に依り、資産ある二名の保証人を立てて入参請願書を提出すれば、総契員の決議に依りて許否を決定し、入参金四十円再参金二十円を納附せしむることになつて居る。博物契は貨物及立錢仲介業者の団体であるから、貨物の売買並に立錢の貸借希望者はそこに申込み、それぞれ斡旋仲介の勞を取ることになつて居る。而して博物契員にあらざれば、猥りに貨物の仲買及立錢の仲介は出来ないのである。

塵契の事務所兼附屬倉庫として都家と称する建物あり、昔は各塵契が之を所有して居たやうであるが、現存せるものは、南大門外の青布塵契都家、魚果塵契都家、南大門内の開城商友会都家である。其の建築の様式は長方形の建物を以て中に広い庭を囲み、庭の中央に事務室に適する一棟を建て事務を執り、正面を入口の門とし、門の左右竝に他の三方を、廊下を以て聯ねたる座のある間口一間乃至二間位の小房に仕切り各房とも扉に錠前を付して戸締りとして居る。而して契員は都家の一房宛を倉庫として使用し得る權利があるが、契員以外にも一定の使用料を徴して之を貸与することがある。建物の大小に依り房数に大小多少あるが、青布塵契附屬の都家は二十八房あり其中二十四房が倉庫として使用され、其の使用料は年額十円である。都家の構造並に制度は總に特色あるもので、朝鮮の商業事情研究上注目に値する。都家には常に役員が詰めて事務を執つて居る。役員は普通塵契長一人、塵契任二人にして、いづれも名譽職とし、契長は契中大小の事を統轄し、契任は契長の指揮を承けて事務を掌理し、

官庁より諮問あるときは、契任に於て答申することになつて居る。即ち前者は同業組合長に相当し、後者は同業組合書記と同様なるものである。

### 慶尚南道昌寧郡靈南水利北部土地改良契

- 一、契の名称、位置、設立年月日及其の沿革
- 1、名 称 靈南水利北部土地改良契
- 2、位 置 昌寧郡南谷面南旨里
- 3、設立年月日 大正十四年四月八日
- 4、沿 革

大正十四年二月山口利一、權演洙、立鎮九、関口良一、枋尾宜人五名發起人となり規約及事業設計書を作成し、地主の同意を得四月八日昌寧郡守臨監の下に設立總會を開催し、契長枋尾宜人、評議員山口利一、權演洙、立鎮九、関口良一、張永奎、辛容奎の七名を選任した。

同年五月六日事業費補助申請をなし、同年九月二十一日附を以て認可指令に接し、同年二十七日工事に着手した、契員は契設立当時百四十四名なりしが、其の後移動あり、同年十一月末日現在百三十名である。

#### 二、事業の概況

本改良契地域は靈南水利組合地域内の北部即ち丈麻面幽里、大鳳里、山旨里、東亭里、南谷面成士里、靈山面鳳岩里、月嶺里、桂城面鳳山里の四面八箇里に亘る約四百七十町歩の平野にして、在来の田竝に雑地を開拓し、畚は現在の区劃を整理せんとするに在り、是が為め設置す可き道、水路、及び工作物竝に關係内訳面積は左の通りである。

天	幅	道	路	数量	延長
九	尺	六	尺	一條	一、三六九・〇間
四	尺	四十五	尺	一條	七、二四五・〇間
線	名	延長	内法	底幅	水深
第一号	用水支線	六六三・〇	一割	一・八	一・五
第二号	同上	二五五・〇	同上	一・八	一・二
第三号	同上	二一五・〇	同上	〇・九	〇・九
備考	右三線の外小水路九十四条は所用水量僅少にして、底幅九寸水深九寸兩法一割、竝に底幅九寸水深六寸兩法一割の二種とし、此の小水路の總延長一、九四五、一・五間である。				
線	名	延長	内法	底幅	水深
第一号	排水路	一九六・〇	一割	一・〇	一・五
第二号	同上	二二二・〇	同上	三・〇	二・〇
第三号	同上	四九一・〇	同上	三・〇	二・〇
第四号	同上	三七八・〇	同上	二・〇	二・〇
第五号	同上	二一三・〇	同上	二・〇	二・五
第六号	同上	二〇三・〇	同上	二・〇	二・〇
橋	梁	工作物及地均、畦畔築立	三十一箇所	二十九箇所	
暗	渠				
第一号	排水路	一九六・〇	一割	一・〇	一・五
第二号	同上	二二二・〇	同上	三・〇	二・〇
第三号	同上	四九一・〇	同上	三・〇	二・〇
第四号	同上	三七八・〇	同上	二・〇	二・〇
第五号	同上	二一三・〇	同上	二・〇	二・五
第六号	同上	二〇三・〇	同上	二・〇	二・〇
橋	梁	工作物及地均、畦畔築立	三十一箇所	二十九箇所	
暗	渠				

分	水	土	管	九十八箇所
落	差	立	十一箇所	
架	樋	三箇所		
地	均	四百二十四町五反六畝五なり		
畦	畔	築立	六三、七九一・〇間	

備考　本契事業費予算総額は以上総工事費九〇、六六二・五月の外に工事監督費一〇、七〇〇円創立費五、〇〇〇円事務所費八、五五〇円予備費五、〇八七・五月計一二〇、〇〇〇にして、反当二八日二六強である。

関係地内訳面積

雜地	合計
二七〇、一三〇	五〇四、七六四
三七、五五一	四五四〇四
七三、五五一	一六、一〇四
一六、一〇八三	二六、九二七
六五、七九	四二、六四
六五、四九	一三、七四三
二七、五七	二一、三〇九七
六七、九八	二一、三〇九七
一六、一〇四	四一、六三二九
八、九二〇	一三、九〇三五
四二、六四	六四、一九七
一三、七四三	一一、三〇九七
二一、三〇九七	二一、三〇九七
四一、六三二九	四一、六三二九

三、契約の規約

## 靈南水利北部土地改良規約

第一章 總則

第一条 本契ハ靈南水利北部土地改良契ト称シ事務所ヲ慶尚南道昌寧郡南谷面南旨ニ置ク

第二条 本契ハ靈南水利組合ノ事業計画ニ準拠シ土地ヲ改良シ開墾ヲ遲滞ナク實施シ農家ノ福利ヲ増進スルヲ目的トス

第三条 本契ノ区域ハ靈南水利組合北部ニ屬スル丈麻面幽里、大鳳里、山旨里、東亭里、南谷面成土里、靈山面鳳岩里、月嶺里、桂城面鳳山里ノ内別冊記載ノ土地所有者ヲ以テ組織ス

第二章 役員

第四条 本契ニ左ノ役員ヲ置ク

但契長及評議員ハ無報酬トシ其ノ他書記及技士ハ嘱托トナスコトヲ得

契長	一 名
評議員	六 名
書記	若 干 名
技士	若 干 名

役員ノ任期ハ事業完了ヲ以テ終ル

第五条 契長及評議員ハ總會ニ於テ之レヲ互選ス

書記及技士ハ契長之ヲ任免ス

第六条 契長ハ本契ヲ代表シ契務ヲ總理シ評議員会ノ議長ニ任ス

書記及技士ハ契長ノ命ヲ承ケ庶務會計及技術ニ従事ス

第三章 事業

第七条 本契ノ事業年度ハ二箇年以内トス

第八条 本契ハ区域内ノ土地改良事業ニ関シ測量調査ノ上作成シタル設計書並ニ予算ニ基キ工事ヲ施行シ且ツ其ノ筋ニ對シ補助申請手續ヲ為スモノトス

第九条 補助金ノ請求並ニ之レカ受領ハ契長ニ一任スルモノトス

第四章 會計

第十条 本契ノ經費ハ左ノ各項ニ依リ之レヲ支弁ス

- 一 契員ノ負担金
- 二 有志ノ寄附金
- 三 国庫ノ補助金

第十一条 契員ノ負担金ハ評議員会ニ諮リ之レヲ徵收ス

第十二条 国庫補助金ノ下附アリタルトキハ評議員会ニ諮リ之レヲ処理ス

第十三条 會計年度ハ毎年四月一日ヨリ翌年三月三十一日迄トス

第五章 評議員会

第十四条 評議員会ハ開會期日三日前ニ契長之ヲ招集ス但シ急ヲ要スル場合ハ即時招集スルコトヲ得

評議員会ハ評議員ノ半数以上出席スルニ非サレハ開會スルコトヲ得ス

但シ同一事件ニ付キ招集二回ニ至ルモ尚ホ半数ニ滿サルトキハ此ノ限ニアラス

第十五条 評議員会ノ決議ハ出席員過半数ヲ以テ之レヲ定ム但シ可否同数ナルトキハ議長ノ定ムル所ニ依ル

第十六条 評議員会ニ諮問スル事項ハ別ニ定ムルモノノ外左ノ如シ

一、規約ノ変更及契ノ解散

二、契費ノ予算及決算並ニ事業施行計劃

三、前各項ノ外契長ニ於テ必要ト認ムル事項

第十七条 本契ハ事業ノ報告並ニ事業ノ施行ニ関スル契員ノ意見ヲ聴取スル為メ毎年一回契員ノ總會ヲ開催ス

總會ハ契長之ヲ招集ス

第六章 給 与

第十八条 本契ハ別ニ給与規定ヲ設ケス靈南水利組合給与規定ヲ準用ス

靈南水利組合給与規定

第一章 報 酬

第一条 組合長、副組合長、及委員ニハ左ノ報酬ヲ給ス

組合長	月額	三十円以内
副組合長	月額	十円以内
委員	日額	二円以内



第二条 前条ニ規定スル報酬ハ有給吏員ニ対スル給料支給ノ例ニ依リ之レヲ支給シ日額報酬ノ支給ニ付テハ用務ヲ終リタル日ニ於テ之レヲ支給ス

第三条 有料給吏員ノ給料ハ第一号表ニ依ル但シ給料六十円未満ノ者ニハ組合長適宜金額ヲ定メ之ヲ給スルコトヲ得  
理事ニ於テ事務ニ精通シ特ニ優秀ナル者及技士ニシテ技能卓絶ナルモノニハ評議員会ニ諮問ノ上給料二百五十円迄ヲ給スルコトヲ得

第四条 給料ハ在職一年以上ニ至ラサレハ増給スルコトヲ得ス但シ六十円未満ノ者ニ就テハ此ノ限リニ在ラス

第五条 給料ハ毎月二十五日之ヲ支給ス但シ当日休日ニ当ルトキハ順延ス

第六条 新任増給及減給ノ場合ニ於ケル其ノ月分ノ給料ハ発令ノ翌日ヨリ日割ヲ以テ支給ス

退職又ハ死亡ノ場合ハ其ノ月分ノ給料全額ヲ支給ス但シ懲戒ニ依ル場合ニ於テハ其ノ当日迄日割ヲ以テ支給ス

第七条 病氣ノ為メ執務セサルコト六十日ヲ越ユル者及私事ノ故障ニ依リ執務セサルコト三十日ヲ超ユル者ニハ給料ノ半額ヲ減シ尚三十日ヲ超ユル者ニハ給料ヲ支給セス但シ公務ノ為メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタル場合又服忌ノ場合ニハ此ノ限リニアラス

第八条 解職セラレタル者又ハ退職シタル者事務引継ノ為メ執務シタルトキハ其ノ事務終了ノ日迄在職中ノ例ニ依リ給料ヲ支給ス

第九条 雇員及傭人ノ給料ハ月額八十円又ハ日額二円五十銭以下トシ月額給料ノ支給ニ付テハ本章ノ規定ヲ準用シ日額給料ニ付テハ組合長之ヲ定ム

### 第三章 旅 費

第十条 組合吏員及雇員傭人公務ノ為メ旅行スルトキハ其ノ順路ニ従ヒ旅費ヲ支給ス

第十一条 組合事業区域内ニ旅行スル旅費ハ第二号表ニ依ル但シ測量又ハ工事監督ノ如キ常時出張ニ対シテハ旅費ヲ支給セス

第十二条 組合事業区域外ニ旅行スル旅費ハ第三号表ニ依ル

第十四条 組合用ノ車馬ニテ旅行スルトキハ車馬賃ヲ支給セス

第十五条 新ニ組合吏員ニ採用シタルモノニハ現住地ヨリ組合事務所々在地ニ至ル迄赴任旅費トシテ第三号表汽車賃汽船賃及車馬賃ニ限リ倍額ヲ支給スルコトヲ得尚家族ヲ携帯スルモノニハ家族一人ニ限リ本人ト同額旅費ヲ支給ス

第十六条 評議員会ニ出席シタル評議員ニハ第四号表ニ依リ旅費ヲ支給ス但シ評議会場ヲ距ル二里以内ノ地ヨリ出席シタル評議員ニハ会議ノ日数ニ応シ日当ノミヲ支給ス

前項ノ旅費及日当ハ用務ヲ終リタル日ニ於テ之ヲ支給ス

第十七条 汽車賃汽船賃車馬賃ハ旅行ノ種類毎ニ經過セシ路程ヲ合算シ之レヲ支給ス但シ一里未満ノ端数ノ路程ハ切捨トス

汽車旅行ノ場合ニ於テ急行列車ニ乗車シタルトキハ乗車階級ニ相当スル急行料ヲ支給ス京城、釜山、及内地ニ出張シタルトキハ日当及宿泊料ニ限リ三割ヲ増給スルコトヲ得

第十八条 旅費ノ概算払ヲ受ケタル者ハ帰着後三日以内ニ精算スヘシ

第十九条 本規程ニ於テ組合事業区域ト称スルハ左ノ地域ヲ云フ昌寧郡南谷面、都泉面、靈山面、丈麻面、桂城面各面及咸安郡漆西面、漆北面ト宜寧郡芝正面トス

### 第四章 手 当

第二十条 工事監督測量ニ関シ区域内ニ於テ常時事務ニ従事スルトキハ第五号表ノ外業手当ヲ支給ス

第二十一条 組合吏員及雇員傭人ニシテ定時間外三時間以上ニ亙リ勤務シタル場合ハ第六号表ニ依リ時間外手当ヲ支給ス但シ外業手当ヲ受ケル者ハ夜間勤務ニ限リ本条ヲ適用ス

第二十二条 有給吏員公務ノ為メ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ給料三月分以内ニ於テ実費ニ相当スル治療手当ヲ給ス

前項ノ為メ終身自由ヲ弁シ若クハ業務ヲ営ムコト能ハス又ハ治療数箇月ヲ要スル見込ヲ以テ退職シタルモノニハ給料三月分以内ノ扶助金ヲ給スルコトヲ得

前二項ノ規程ハ雇員傭人公務ノ為メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタル場合ニ之レヲ準用ス其ノ之レカ為メ在職中死亡シタルトキハ其ノ遺族ニ対シ給料三月分以内ノ弔慰金ヲ給スルコトヲ得

# 慶尚南道昌寧郡靈南水利南部土地改良契

一、契の名称、位置、設立年月日、及び其の沿革

- (イ) 名称 靈南水利南部土地改良契
- (ロ) 位置 昌寧郡南谷面南旨里
- (ハ) 設立年月日、大正十四年四月八日
- (ニ) 沿革

大正十四年一月十八日発記者関口良一、中路民之助、樞演殊外四人案を立て、契の一日も早く設立の必要を議し、同年二月二日測量設計を京城西小門内共栄社に依頼し、同年二月二十四日には早くも総督府に契の設立認可申請をした。而して四月八日には第一回の契員總會を開催し、本土土地改良契設立の可否を議し、満場一致を以て可決せられ具体的に設立となり契長一名及評議六名を選任した。而して契長は関口良一、評議員は樞尾宜人、中路民之助、八代表余谷吉、樞演殊、奇珍吳、金明雨各当選した。

然るに同年七月全鮮に亘る大水害の爲め総督府にては大繁忙を極め、これが爲め漸く九月二十一日に始めて認可書を受け、いよいよ工事着手の準備を爲し十月二十日起工するに至つた。

## 三、事業の概況

本契の事業区域は靈南水利組合地域内の南部にして、即ち靈山面月嶺里及都泉面松津里内の有効面積二百四十四町歩に至る在来の田、林、雑地、池沼等を良谷に地目変換するを以て其の目的とし、靈南水利組合の施設工作物以外に左の如き

工作物を設置せんとするのである。

一、安線用水路	五四二九間	十二条
二、分線用水路	九五八間	四条
三、排水路	二四九間	一条
四、水門	一九箇所	
五、落差工	九箇所	
六、掛樋	二箇所	
七、道路	一〇五六間	内 九尺道路一条五八六間 六尺道路一条四七〇間
八、橋梁	二〇箇所	
九、土管埋設	二一三箇所	
一〇、畦畔	七五六四〇間	
一一、開沓	二四四町歩	

以上総工費五萬一千四百七十四円五十銭にして、外に補償費五千四百円、工事監督費七千円、測量設計費四千円、計六萬七千八百七十四円五十銭、反当工費二十七円八十一銭七厘強である。

## 靈南水利南部土地改良契規約

### 第一章 総則

- 第一条 本契ハ靈南水利南部土地改良契ト称シ事務所ヲ慶尚南道昌寧郡南谷面南旨里ニ置ク
- 第二条 本契ハ靈南水利組合ノ事業計画ニ準拠シ土地ヲ改良シ開沓ヲ遲滞ナク実施シ農家ノ福利ヲ増進スルヲ目的トス
- 第三条 本契ノ区域ハ靈南水利組合南部ニ屬スル靈山面月嶺里及都泉面松津里ノ内別冊記載ノ土地トシ其ノ所有者ヲ以テ組織ス

### 第二章 役員

第四條 本契ニ左ノ役員ヲ置ク

但シ契長及評議員ハ無報酬トシ書記及技士ハ嘱托トナスコトヲ得

契 長 一 名

評 議 員 六 名

書 記 若 干 名

技 士 若 干 名

役員ノ任期ハ事業完了ヲ以テ終ル

第五條 契長及評議員ハ契員ノ總會ニ於テ之レヲ互選ス書記及技士ハ契長之レヲ任免ス

第六條 契長ハ本契ヲ代表シ契務ヲ總理シ評議員会ノ議長ニ任ス

書記及技士ハ契長ノ命ヲ承ケ庶務會計及技術ニ従事ス

### 第三章 事業

第七條 本契ノ事業年度ハ二箇年以内トス

第八條 本契ハ区域内ノ土地改良事業ニ関シ測量調査ノ上作成シタル設計書及予算ニ基キ工事ヲ施行シ且ツ其ノ筋ニ対シ補助申請手續ヲ為スモノトス

第九條 補助金ノ請求並ニ之レカ受領ハ契長ニ一任スルモノトス

### 第四章 會計

第十條 本契ノ經費ハ左ノ各項ニヨリ之レヲ支弁ス

一、契員ノ負担金

二、有志ノ寄附金

三、国库ノ補助金

第十一條 契員ノ負担金ハ評議員会ニ諮リ之レヲ徴収ス

第十二條 国库補助金ノ下附アリタル時ハ評議員会ニ諮リ之レヲ処理ス

第十三條 會計年度ハ毎年四月一日ヨリ翌年三月三十一日迄トス

### 第五章 評議員会

第十四條 評議員会ハ開会期日三日前ニ契長之レヲ招集ス

但急ヲ要スル場合ハ即時招集スルコトヲ得

評議員会ハ評議員半数以上出席スルニ非ラサレハ開会スルコトヲ得ス

但同一事件ニツキ招集二回ニ至ルモ仍ホ半数ニ滿サルトキハ此ノ限りニアラス

第十五條 評議員会ノ決議ハ出席員ノ過半数ヲ以テ之レヲ定ム

但可否同数ナルトキハ議長ノ定ムル所ニ依ル

第十六條 評議員会ニ諮問スル事項ハ別ニ定ムルモノノ外左ノ如シ

一、規約変更及契ノ解散

二、契費ノ予算及決算並ニ事業施行計画

三、前各項ノ外契長ニ於テ必要ト認ムル事項

第十七條 本契ハ事業ノ報告並ニ事業ノ施工ニ関スル契員ノ意見ヲ聴取スル為メ毎年一回契員ノ總會ヲ開催ス

總會ハ契長之レヲ招集ス

### 第六章 給 与

第十八條 本契ハ別ニ給与規定ヲ設ケス靈南水利組合給与規定ヲ準用ス

第一号表 (月給額)

区分	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級
理 事	200 円	180 円	140 円	120 円	100 円	80 円	60 円	40 円	30 円	20 円
出納役書記	150 円	140 円	130 円	120 円	110 円	100 円	90 円	80 円	70 円	60 円
技 士	180 円	165 円	150 円	135 円	110 円	100 円	80 円	70 円	60 円	50 円

第二号表 (事業区域内旅費額)

区分		宿泊セサル時	宿泊シタル時
		円	円
組合長、副組合長		1,200	2,000
委員、理事、出納役		1,000	1,800
書記、技士		0,800	1,500
雇員		0,600	1,200
備人		0,350	0,800

第三号表(事業区域外旅費額)

区分		汽車賃	汽船賃	車馬賃	一日ニ付	宿泊料	附記
				一里ニ付	一日ニ付	一夜ニ付	
組合長、副組合長	二等実費	0,700	0,700	0,700	0,700	5,000	第三号表第二項ノ技士ニ対シテハ理事第二項ノ旅費ヲ又シテハ技士第二項ノ旅費ヲ給スルコトヲ得
委員、理事	同	同	同	0,600	0,600	4,500	
出納役、主任技士	同	同	同	0,600	0,600	4,500	
書記	三等実費	0,500	0,500	0,500	0,500	4,000	
技士	同	同	同	0,500	0,500	4,000	
雇員	同	同	同	0,400	0,400	3,500	
備人	同	同	同	0,350	0,350	3,000	

第四号表(評議員旅費)

第五号表

第六号表				区分			
分				分			
日				日			
額				額			
僱	助	雇	吏	僱	雇員、	技	
人	手	員	員	人	手	士	
〇、三〇〇	〇、四〇〇	〇、四〇〇	〇、五〇〇	〇、三〇〇	〇、四〇〇	〇、五〇〇	

第六号表

江原道通川郡龜項里農契

右は大正六年十二月三日創立せられ、共同作業、勤儉、風紀改善、副業奨励其の他農事改良に努力し、漸次成績を挙げつつありしが、大正十二年六月農事改良実行組合と名称を変更し、別記の通り規約を制定して実行業務を定め、郡面指導の下に之が実行中であるが、今や尚一層面目を一新し、業務中特に種子の品評会を開催し翌年度に使用すべき種子の精選に努め、外に種牡牛の設置、堆肥舎の建設、白色レグホン種鶏の普及等を計りつつありて、益々其の成績の見るべきものが多い。

通川郡龜項里農事改良実行組合会則

第一章 総則

- 第一条 本会ハ龜項里農事改良実行組合ト称ス
- 第二条 本会ハ農事ニ關スル一切ノ弊風ヲ矯正シ農事ノ改良進歩ト副業奨励ヲ以テ目的トス



第三條 本会ハ本里内ニ住所ヲ有シ三斗落以上ノ耕作者ヲ以テ組織ス

第四條 本会ノ事務所ハ本里内ニ置ク

## 第二章 事業

第五條 本会ハ第二條ノ目的ヲ達スル為左ノ事業ヲ営ム

一、農閑時期ヲ利用シ農業技術員ヲ招聘シ農事ニ必要ナル講話会ヲ開催スルコト

二、農作物ノ改良種子普及

三、肥料ノ改良及秋耕ノ奨励

四、大豆粒選及稻穗選ノ奨励

五、苗代ノ改善及稗拔ノ奨励

六、庭及畝製造ノ奨励

七、共同造林ノ経営

八、地主小作人間共済融和ノ奨励

九、衛生及警防思想ノ涵養

一〇、夜学ノ奨励

一一、篤行者ノ表彰

一二、農産品評会ノ開催

一三、勤儉貯蓄ノ奨励

一四、水利ノ経営

一五、蚕業及其ノ他副業ノ奨励

一六、法令及納税義務ノ恪守

第六條 諸般ノ僱雇人夫賃ハ隨時調定シ農家慣例上一般ノ弊害トナル事ヲ禁スルコト

## 第三章 役員

第七條 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

一、会長	一	人
二、副会長	一	人
三、総務	一	人
四、評議員	若	干
五、幹事	若	干

第八條 役員ノ職權左ノ如シ

- 一、会長ハ本会ヲ代表シ会務ヲ總轄ス
- 二、副会長ハ会長ヲ輔佐シ会長事故有ル時其ノ事務ヲ代理ス
- 三、総務ハ会長ノ命ヲ受ケ庶務ヲ管掌シ金銭出納ヲ為ス
- 四、評議員ハ会長ノ諮問ニ応シ其ノ他重要事件ヲ議決ス
- 五、幹事ハ会長及総務ノ命ヲ承ケ会務ニ従事ス

第九條 役員ハ總會ニ於テ選舉シ任期ハ滿二箇年トス但再任ヲ妨ケス

第十條 役員中欠員ヲ生シタルトキハ總會ニ於テ補選シ其ノ任期ハ前任者ノ残任期間トス

第十一條 役員ハ名譽職トス但總會ノ決議ニ依リ相当ノ報酬ヲ給スル事ヲ得

## 第四章 總會

第十二條 總會ハ此ヲ定期總會及臨時總會ニ分ツ

一、定期總會ハ毎年二月、八月ノ二回トス

二、臨時總會ハ会長ノ必要ト認メタルトキ又ハ契員五分ノ一以上ノ同意ニ依リ會議ノ目的ヲ具シ申出テタルトキニ招

集スルモノトス

第十三條 總會ハ會員半数以上出席スルニアラサレハ開会スルコトヲ得ス

第十四條 總會ノ決議ハ出席者ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス

第十五条 總會ニ於テハ役員ノ選舉、解任及諸般事務ヲ決議シ會計其ノ他會務狀況ノ報告ヲ監理ス

第五章 役員 會

第十六条 役員會ハ會務處理上協議ノ必要アルトキ之ヲ開催ス

第十七条 役員會ノ規程ハ總會ノ例ニ準ス

第六章 會 計

第十八条 本會ノ會計年度ハ一月ニ始リ十二月ニ終ル

第十九条 予算及決算ハ總會ノ決議ヲ要ス

第二十条 會員ハ左ノ義務ヲ有ス

一、入會金貳拾円ノ納入

二、農牛売却ニ付テハ左ノ金額ヲ納入スヘシ

一、牡牛一頭ニ付參拾錢

二、成牛一頭ニ付貳拾錢

三、犂一頭ニ付拾錢

第七章 加入 及 脱退

第二十一条 本會ニ入會セムトスル者ハ役員會ノ許可ヲ受クヘシ

第二十二条 會員ニシテ左ノ事項ニ該當スルモノハ總會ノ決議ニ依リ之ヲ除名ス

一、本會ノ事業ヲ妨害スル者

二、本會ノ會員タル体面ヲ汚損シタル者

三、第二十条ノ規定ニ違反シタル者

第二十三条 不得已事由ニ依リ退會セムトスル者ハ其旨ヲ届出テ會長ノ承認ヲ受クヘシ

附 則

第二十四条 會則ヲ變更セムトセハ總會ノ決議ヲ經ヘシ

慶尚南道泗川郡南陽務本契

1 契の名称 南陽務本契

2 契の位置 泗川郡南陽面

南陽面務本契主掌者魚竜里、朴宗実の兩者主唱者となりて大正六年一月に創立されしものにして、規約第二条の通り専ら農民相互間勤儉貯蓄を奨励する目的を以て組織せられ、爾來相當の成績を挙げ、田一千七百六十九坪、畓八百五十七坪、現金八百一十一円五十錢を有し、現に契員二十九名ある。

務 本 契 規 約

第一条 本契ノ名称ハ南陽務本契ト称ス

第二条 本契ハ土地ヲ買受農業ヲ改良シ勤儉ヲ奨励スルヲ目的トス

第三条 本契員ハ品行正シク左ノ資金ヲ出ス者トス

一金參円貳拾錢（発起）當時ニ限ル

第四条 本契ニ於テ土地ヲ買収又ハ其他事業ヲ計劃スル為メ契會ノ決議ニ依リ臨時資金或ハ契金ヲ出ス義務アルモノトス

第五条 本契ニ左ノ役員ヲ置ク

一、契 長	一 人
一、副 契 長	一 人
一、幹 事	三 人

第六条 本契ノ金銭及其他財産ニ対シ損害或ハ故障ヲ生スル時ハ其任期内ノ任員ノ責任トス但シ不可抗力ニテ生スル時ハ此ノ限りニアラス

第七條 役員ノ任期ハ左ノ如シ

契長、副契長ハ滿二箇年トス

幹事ハ滿一箇年トス

但シ滿期ニ至リテ再選スルコトヲ得

第八條 會議ハ定期總會及臨時總會トス

定期總會ハ毎年一月中ニ此ヲ開ク

臨時總會ハ役員會ニ於テ必要ト認ムル時此ヲ開ク

第九條 本契員ニシテ如何ナル故事ヲ問ハス契員タル資格ヲ失フ場合ハ元出資金即チ參円貳拾錢ノミヲ還付シ除名スルモノトス

第十條 利益配當ハ本契ノ設立年月日ヨリ滿十五箇年後總會ノ決議ニ依リ之ヲ行フコトヲ得但元財産ヨリ当年ノ利益ニ限ル

#### 附 則

第十一條 本規約ハ總會ノ決議ニ依リ改正或ハ増減スルヲ得

第十二條 本規約ノ改正サレタル時其ノ効果ハ改正日以後ヨリ生シ其以前ニ溯及スルヲ得ス

### 慶尚南道晋州郡晋州面内城洞農務契

大正十一年三月創立したるものにして契員十七人、財産二百円を有し、其の事業としては農具改良及び打穀場修繕若くは田植除草等の作業を目的とし創立以来毎年実施せられつつある。契の規約又は申合せとしては別に記載すべき事項なく、唯契の目的を果す為め各自の義務を必ず履行すべく、若し是れに反する者には違約金を徴し、又は脱契せしむる等の申合せがある。

契の機関としては契長及び幹事ありて、凡ゆる契務を管掌し契員勤怠の取締に當

つて居る

### 平安北道昌城郡農事改良共同耕作契

本契は農事の改良指導を集团的にし、農事改良を図ると共に、小作地の定租を地主及び小作人間に相互の有利なるを知らしめ、尚定租を期し、一方隣湜を保管し、契員各洞の農事の閑暇を利用し益々勤勉精心を涵養し、共同の利益を増進するを以て目的とする。

契員五人乃至十人を以て組織し、小作地を借受け閑暇を利用して共同小作をなさしめ、小作地は可成学校有地、郷校有地、面洞有の公共有地を周旋し、斯る公共有地なき場合は私有地を借受け小作を為さしむ。契に契長を置き監督の任に当らしめ事業は契会の決議に依り実施し、改良事業は郡面の指導を仰ぐものとし、肥料農具等は契員各自より醸出し、收穫物は売却の上金融組合、郵便局へ預入をなし、之の預金は可成据置きとし、尚ほ契を新に設くる場合は一円を醸出することにして居る

目下契数十三にして、大正十四年中更に新設せられしものが一契ある。右十三契の共同小作地畝一丁四反三畝、田二町三反二十四歩にして、大正十一年十二年の貯蓄額は八千五百四十円七錢にして、各契は逐年隆盛に赴き、契員は年々貯蓄額増加するに従ひ、耕作に熱誠を注ぐに至りつつある。尚ほ契は今後毎年一、二の新設を見るに至るであらう。

契の状況を調査せしに、契管理者の大部分は預金を契加入者に個人貸付とせられ

たきことを希望して居る。尚ほ本契の貯蓄額相當に達すれば、契の基本財産として共同小作地の購入をなし共同自作を行ふ予定である。

## 慶尚南道東萊郡畜牛改良契

本郡各方面に畜牛改良契を組織し、目下本郡各方面を通じて六十二契を算するに至つた。

### 1、契の沿革

大正十三年四月十六日畜牛改良契規約準則を作成し、之に基き各方面にその設置の奨励指導をなし今日に達して居る。

### 2、事業の概況

畜牛契設立以来之が必要を認められて漸次普及し、本郡を通じて六十二契を算するに至つた。而して畜牛の改善は日に著まり成績は一般的に良好に向ひつつある。

### 3、契の規約

別項準則に基き作成せし結果大同小異に付準則を以て各契規則に代ゆ。

### 4、契の取締方法

本契は各契毎に役員を置き之が監査に任じつつあるも、尚ほ本郡畜産同業組合に於て指導監督に努めつつある。

### 畜牛改良契規約準則

#### 第一章 総 則

第一条 本契は種牛ノ購入配置ヲ為シ畜牛ノ改良繁殖ヲ図リ契員共同ノ利益ヲ増進スルヲ以テ目的トス

第二条 本契ハ東萊郡何面何里畜牛改良契ト称ス

第三条 本契ハ事務所ヲ東萊郡何面何里ニ置ク

第四条 本契ノ地域ハ東萊郡何面何里ノ区域ニ依ル

第五条 本契ノ地区ヲ分チテ左ノ何区トス

第一区 何里何部落

第二区 同 上

第三区 何里何部落

第六条 本契ハ其ノ目的ヲ達スル為メ左ノ事業ヲ行フ

一、種牛ノ購入配置及種付

二、優良牛ノ保護

三、飼料ノ改良

四、劣等牡牛ノ去勢

五、種付及生産成績調査

六、畜牛異動調査

七、種牡牛ノ優遇

第七条 本契有種牛ハ之ヲ適當ト認ムル契員ニ對シ左記方法ニヨリ預托ヲナスモノトス本規約ニ於テ種牛ト称スルハ本契所有ノ畜牛及契ノ貸付ヲ受ケタル畜産同業組合有種牛トス

#### 種牛預托方法

一、種牡牛ノ預托ヲ受ケタルモノニ對シテハ飼料及保護料ヲ支給ス

二、支給セラレタル飼料ハ種牡牛飼料以外ニ使用スルコトヲ得ス

三、種牛ハ激役ニ服スルコトナク飼養管理上周到ノ注意ヲ以テ常ニ皮膚ノ手入並榮養ノ改善ニ努ムヘシ

四、種牡牛ハ一月二頭以上ノ牝牛ニ對シ種付ヲナスコトヲ得ス

五、三歳未満ノ種牡牛ハ之ヲ種付ニ供用スルコトヲ得ス

六、種牡牛ノ預托ハ無料トス但二歳未満ノモノノ預托ヲ受ケタルモノニ對シテハ保護料ヲ支給ス

七、種牡牛ノ生産シタル犊牛ハ契ノ所得ニシテ分娩後六箇月以上哺乳セシムルモノトス



第八條 契員ノ所有又ハ管理スル畜牛中優良ト認ムルモノヲ選定シ之カ維持保存ニ努ムルモノトス  
前項ノ場合ニ於テハ畜牛ノ所有又ハ管理者ニ對シ保護料ヲ支給スルコトアルヘシ

第九條 本契ハ草生地ノ保護及牧草ノ栽培ヲナシ飼料採取ノ用ニ供ス

第十條 本契ハ毎月種牡牛種付成績ヲ調査シ第一号様式種付簿ニ記入シ翌月五日迄ニ第二号様式ニ依リ而經由郡守宛届出スルモノトス但シ報告書ニハ種付証ノ添付ヲ要ス

第十一條 本契ニハ第三号様式牛籍簿及第四号様式契員名簿ヲ備付異動ノ都度之カ整理ヲナスモノトス

第十二條 本契ハ種牡牛ニ依リ種付シタル牡牛ノ生産成績ヲ調査シ種付簿備考欄ニ生産月日、牝牡別、毛色、骨格ノ良否其ノ他参考事項ヲ記入スルモノトス

第十三條 本契事務執行上必要ナル経費ノ徴収ハ四月一日現在種牡牛飼料ノ蒐集ハ九月末日現在ノ契員ニ對シ之ヲ行フモノトス

第十四條 本契ハ郡守ノ認可ヲ受ケテ組織シ其ノ監督ヲ受クルモノトス

## 第二章 契 員

第十五條 本契ノ地域内ニ居住シ畜牛ノ所有又ハ管理スル者ハ契員トス

第十六條 契員ハ契ノ事業執行上必要ナル経費ヲ分担スヘシ

第十七條 成牝牛ヲ飼養スル契員ハ左記標準ニヨリ毎年種牡牛飼料ヲ分担提供スルモノトス

種牡牛一頭ニ付大豆一石毎年十一月末日限り提供スヘシ

大麦ヲ代納スル場合ハ大豆ノ倍額トス

第十八條 契員ハ自己ノ所有又ハ管理スル畜牛ニ異動ヲ生シタルトキハ直ニ其ノ事由ヲ契長ニ申告スヘシ

第十九條 契員ノ所有又ハ管理スル牝牛ハ契有種牡牛以外ニヨリ種付ヲナスコトヲ得ス

第二十條 契員ハ自己ノ所有又ハ管理スル牝牛ニ種付ヲ受ケントスルトキハ印鑑ヲ携帯スヘシ

第二十一條 種牡牛ニヨリ種付ヲ受ケタル牝牛及第八條ニ依リ優良牛ニ選定セラレタル畜牛ハ契長ノ承認ヲ得ルニアラサレハ処分スルコトヲ得ス

第二十二條 種牡牛ニヨリ種付ヲ受ケタル牝牛分娩シタルトキハ左記事項ヲ五日以内ニ契長ニ申告スヘシ  
生産月日、牝牡別、毛色、骨格ノ良否其ノ他参考トナルヘキ事項

第二十三條 種牛ノ預托ヲ受ケタル契員ハ第七條ニ定メタル方法ニヨリ種牛ノ飼養管理ヲナスヘシ

第二十四條 種牡牛ノ預托ヲ受ケタル契員ハ正當ノ理由ナクシテ種付ヲ拒ムコトヲ得ス種付料ハ契長ノ許可ヲ得ルニアラサレハ之ヲ受クルコトヲ得ス

第二十五條 種牡牛ノ預托ヲ受ケタル契員ハ種付ノ都度第五号様式種付証ニ所要事項ヲ記入シ種付牝牛飼養者ノ調印ヲナシ一部ヲ種付牝牛飼養者ニ交付シ残部ノ二部ハ毎月分ヲ取纏メ翌月二日迄ニ契長ニ提出スヘシ

第二十六條 種牛ノ預托ヲ受ケタル契員ハ種牛ノ疾病、逃走、盜難、斃死、外傷、不慮等ニヨリ異常ヲ生シタルトキハ直ニ契長ニ申告スヘシ

第二十七條 本契員ハ契ニ對シ無料種付ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條 本契員ハ契備付諸帳簿ノ閲覽ヲ請求スルコトヲ得

## 第三章 役 員

第二十九條 本契ニ左記ノ役員ヲ置ク

契 長	一 名
副 契 長	一 名
總 代	若 干 (一区一人宛)

第三十條 契長ハ契ヲ代表シ一切ノ事務ヲ担任ス

副契長ハ契長ヲ補佐シ契長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代表ス

總代ハ契長ノ諮問ニ応シ又ハ業務ノ執行及財産ノ状況ヲ監査ス

總代ハ前項ノ外契長ノ指導ヲ承ケ各区ニ於ケル契ノ事務ニ従事ス

第三十一條 役員ハ名譽職ニシテ契員ノ互選ニ依リ郡守ノ選任ヲ受クルモノトス

第三十二條 役員ノ會議ハ役員半数以上出席スルニアラサレハ之ヲ開会スルコトヲ得ス

(近藤註・第三十三條は原本にもない。)

第三十四条 役員会ニ諮問スヘキ事項左ノ如シ

- 一、規約ノ変更又ハ解散合併若ハ分割
- 二、契経費収支予算
- 三、契費及種牡牛飼料散取ニ関スル事項
- 四、起債及其ノ方法
- 五、財産ノ管理方法基本財産又ハ積立金ノ設置管理処分ニ関スル事項
- 六、種牛購入及預托ニ関スル事項
- 七、種牛ノ処分ニ関スル事項
- 八、種牛並優良牛ニ対スル保護料及飼料支給ニ関スル事項
- 九、規約違反者処分ニ関スル事項
- 十、前各項ノ外契長ニ於テ必要ト認ムル事項

第四章 會計

第三十五条 本契ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第三十六条 本契ハ毎年六月三十日迄ニ前年度ノ収支決算貸借対照表業務ノ状況ヲ契員ニ公示ス

第五章 違約者処分

第三十七条 契員ハ左ノ各項ノ一ニ該当スルトキハ左記区分ニヨリ違約処分ヲナス

- 一、第十八、十九、二十一、二十二、二十四、二十六条ニ違反シタルトキハ五十錢以上五円以下ノ過怠金ヲ課ス
- 二、第二十三条ニ違反シタルトキハ保護料及種牡牛飼養料ヲ没収スルコトアルヘシ
- 三、第二十三条ニ違反シ種牛ニ対シ回復ノ見込ナキ損失ヲ与ヘタルトキハ種牛ノ弁償ヲナサシム

(様式ハ省略ス)

平安南道成川郡牛契

成川郡管内一帯は山岳平原に富み、牧草の發育實に優良にして牛の育飼には最も適する。火田跡地が多く草生地と化し、居るを以て、火田整理の一策としても牛の飼育は就中策の得たるものとし、郡当局、畜産組合に於ては、農家に耕牛、肉牛等の飼育を奨励したる結果、大正十三年末の畜牛数は一萬余千頭に達し、平安南道に於ては第二位の多き郡となつた。畜牛増殖の目的を以て契を組織せるもの多く、購牛契を組織せる地方は大正十三年末には六箇所となり、種牛契も六箇所を有するに至つた。その契員の如きも、前者は五十一名、後者は三百二十二名となり、購牛契の現在所有せる畜牛数は七十二頭、種牛契の生産せし牛頭数は十六頭である。

購牛契及び種牛契の各契別の現況を大正十三年末によつて表示すると左の如くである。

契名		設立年月日	現在契員頭数	契金額	初年借入額	返済額	生産牛数	現在牛数
成川面購牛契		大正二年十月三十日	一〇人	五六八円	四〇〇円	一〇〇円	二頭	一二頭
通川面同		同年同月 三日	五	五五六	三六〇	二一〇	三	八
靈泉面同		同年九月二十九日	七	四六〇	四〇〇	一九〇	三	一〇
三徳面同		同年十月二十五日	一〇	四五八	四〇〇	一〇〇	四	一四
雙竜面同		同年同月 十六日	一〇	六三〇	三八〇	九〇	四	一四
大邱面同		同年同月二十五日	九	四四一	三六〇	九〇	五	一四
合計			五一	三一一三	二、三〇〇	七八〇	二一	七二

契 名		設立年月日	現在契員 購入牛累計	繰越及 年収入額	現在金額	生産牛累計	現在牛数
成川面殖牛契	大正三年五月十日	四〇人	五頭	二六二・〇〇	二六二・〇〇	一三頭	二頭
陵中面同	上同 二年一月十日	三九	七	一〇九・五四	一〇九・五四	一	七
通仙面同	上同 年四月十一日	五九	三	二五八・八七	二五八・八七	三	三
雙竜面同	上同 九年八月三日	八五	一	四一一・五二	四一一・五二	一	一
四佳面同	上同 五年一月二十日	五七	一	四五〇・〇〇	四五〇・〇〇	一	一
大邱面同	上同 六年一月一日	四二	一	九六一・八八	九六一・八八	一	一
合 計	六 組	三二二・一五	二、四五三・八一	二、四五三・八一	一六	一二	

牛契の成績は以上述べた如くであるが、購牛契の契規則は各契とも殆んどその内容は同一であるから、最も盛んなる成川郡三徳面新徳里にある契規則を掲げて見る。

## 購牛契規則

- 第一条 本契ハ成川郡三徳面新徳里購牛契ト称シ契員各自牝牛購買取得シ其ノ改良蕃殖ヲ図ルヲ目的トス
- 第二条 本契規約ハ成川郡畜産組合長ノ認可ヲ受ケ設立シ其ノ指導監督ヲ受クルモノトス
- 第三条 契長ハ畜産組合長之ヲ選任シ幹事中ヨリ畜産組合長ノ指令ニ依リ之ヲ定ム
- 契長ハ契務ヲ總理シ幹事ハ契長ノ命ヲ承ケ契ノ事務ヲ掌理ス
- 第四条 契長及幹事ハ名譽職トス
- 本契ノ存立期間ハ満四箇年トス
- 第五条 本契ハ畜産組合ノ保証ニ依リ金融組合ヨリ購牛資金ヲ借入レ優良牝牛ヲ購入シ契員全部ニ一頭宛交付スルモノトス
- 購牛ハ總テ畜産組合技手ノ検査ヲ受クルモノトス
- 第六条 借入資金及其ノ利息ハ毎年十月一日ニ釐出シ満四年毎ニ償却スルモノトス

- 第七条 契員ノ取得シタル畜牛ハ借入資金元利償却ノ後ニ非サレハ売却スルコトヲ得ス
- 但シ畜産組合長ニ於テ特殊ノ事情アリト認ムルモノハ此ノ限ニアラス
- 第八条 契員ノ取得シタル畜牛ハ本道ニ於テ認メラレタル種牝牛以外ノ牝牛ト交配セシムルコトヲ得ス
- 第九条 契員ハ止ムヲ得サル事情アル場合ニ限り畜産組合長ノ承認ヲ得テ自己ノ權利及義務ヲ他人ニ譲渡シ若クハ借入資金元利償却ノ義務ヲ一時ニ完了シテ契ヲ脱退スルコトヲ得
- 第十条 契員ノ取得セル牝牛ニシテ不妊若クハ其ノ他ノ事由ニ依リ蕃殖ニ適セサルコトヲ発見シタルトキ又ハ使役不能ニ至リタルトキハ畜産組合長ノ承認ヲ受ケテ其ノ牝牛ノ購入価格ト同額以上ノ牝牛ト交換スルコトヲ得
- 第十一条 契員死亡シタルトキハ相続人ニ於テ其ノ權利義務ヲ継承スルモノトス
- 第十二条 契ニ要シタル諸雜費ハ總會ノ決議ヲ經テ釐出スルモノトス
- 第十三条 本契ハ必要ニ応ジ隨時總會ヲ開キ契務及契費ヲ決議ス
- 第十四条 本規約ニ規定セサル事項ハ契長ニ於テ總會ニ協議シ決議ノ上畜産組合長ノ承認ヲ經テ之ヲ処理スルモノトス

## 平安南道順川郡厚灘面殖牛契

- 一、順川郡厚灘面殖牛契の概況
- 本契は順川郡厚灘面殖牛契と称し、畜牛の改良蕃殖を目的として組織され、出資額は一人平均毎月一円宛にして、存続年限は十箇年と定めて居る。而して契員各員に牛一頭宛の配当が終ると解散することにしてゐて、現在加入者数は一百十七名に達し、契有財産は四千円の多きに及んでゐる。
- 二、契の規約
- 本契の規約は左の如くである。
- 契 則
- 第一条 本契ハ順川郡厚灘面殖牛契ト称シ事務所ハ厚灘面事務所内ニ置ク

第二条 本契ハ勤儉貯蓄ノ美風ヲ養成シ契員ノ出資ニ依リ各自優良牝牛ヲ取得シ畜牛改良蕃殖ヲ図リ契員共同ノ利益ヲ増進スルコトヲ目的トス

第三条 本契ハ順川郡畜産組合長ノ認可ヲ受ケ組織シ其ノ監督ヲ受クルモノトス

第四条 本契ニ左ノ役員ヲ置キ総テ名譽職トス任期ハ一箇年トスルモ契長及理事ハ此ノ限ニアラス

一 契 長 一人(面長ヲ推戴ス)

一 理 事 二人

一 評 議 員 十五人

契長ハ契務ヲ總理シ理事ハ契長ノ指揮ヲ受ケ契務ヲ掌理シ評議員ハ契長ノ諮問ニ応シ契務ヲ補助ス

第五条 評議員会ハ契長ニ於テ必要有ル時ハ随時開会ス、評議員会ニテ決議セラレタル事案ニ対シ契員ハ服従ノ義務ヲ有ス

第六条 本契ノ存立期間ハ大正十二年二月ヨリ大正二十二年一月迄トス但評議員会ノ決議ニ依リ延長又ハ短縮スル事ヲ得

第七条 契員ハ毎月一回各出資金ヲ釀出スルモノトス

第八条 本契員毎月ノ出資金額及牝牛資金額ハ左ノ如ク定ム

毎月出資金額ハ每一口ニ金一円

毎月牝牛資金額ハ每一頭ニ金百円以内

第九条 契長ハ毎月ノ牝牛資金ヲ以テ三歳以上ノ優良牝牛ヲ購入ノ上抽籤ニ依リ一頭宛當籤者ニ預托スルモノトス

特殊ノ事由有ル時ハ其月ノ牝牛ヲ繰延フ牝牛資金又ハ牝牛残余金ハ総テ金産組合ニ預入スルモノトス

第十条 本契ノ牝牛ハ評議員ノ選抜ニ依ル

第十一条 契員ハ預托ヲ受ケタル牝牛ニ対シ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第十二条 預托ヲ受ケタル契員ハ義務履行ヲ確保ノ為確實ナル保証人二名ヲ定メ連帯保証書ヲ提出スルモノトス

第十三条 預托ヲ受ケタル牝牛ハ契員全部ニ於テ牝牛ヲ取得スル迄飼養蕃殖スルモノトス

但老衰又ハ特殊ノ事由アル時ハ此ヲ返納スルモノトス

第十四条 契長ハ前条但書ノ牝牛ヲ受ケタル時ハ直チニ売却シ更ニ購入又ハ交換スルモノトス

第十五条 預托ヲ受ケタル牝牛ヨリ生産セル犍ハ満四箇月後契ニ納付スルモノトス

第十六条 契長ハ前条ニ依リ納付ノ犍ハ直チニ売却シ第八条牝牛資金ニ編入ス

第十七条 預托ヲ受ケタル牝牛ニシテ天災事変又ハ獣疫ニ罹リ斃死セル時ハ本契ノ損害トシ若シ怠慢又ハ過失ニ依リ斃死

セシムルカ又ハ価落セシメタル時ハ評議員ノ決議ニ依リ相当ノ損害ヲ弁償セシム

第十八条 牝牛ノ預托ヲ受ケタル契員又ハ其ノ保証人ニシテ出資金ヲ延滞スル時ハ預托セシ牝牛ヲ契ニ返納セシム

第十九条 牝牛ノ預托ヲ受ケタル契員ニシテ本契ヲ脱退セントスル時ハ契長ノ許可ヲ受ケ義務履行ヲ一時完了セシム

第二十条 牝牛ノ預托ヲ受ケサリシ契員ニシテ転任又ハ己ヲ得サル事由ヲ以テ脱退セントスル時ハ承継者ヲ定メ契長ノ許可ヲ受クルヲ要ス

第二十一条 契員死亡シタル時ハ相続人ニ於テ其ノ權利義務ヲ承継ス

第二十二条 契員ハ契長ノ許可ヲ得テ自己ノ權利ヲ他人ニ譲渡スルコトヲ得

第二十三条 預托ヲ受ケタル牝牛ハ必ス民設種牝牛ニ交配スルモノトス

第二十四条 出資金ハ毎月二十日以内ニ釀出スルモノトス

但息納者ニ対シテハ一円ニ付二銭ノ過怠金ヲ徴収ス

第二十五条 本契員ニシテ三箇月迄出資金ヲ怠納スル時ハ契長ハ此ヲ除名シ其ノ既往出資金ハ此ヲ没取シ契ノ収入ト為ス

コトヲ得

第二十六条 義務履行ヲ完了セスシテ脱退スル者アルカ為第八条牝牛資金不足ノ時ハ其ノ不足額ハ現在契員ニ平均負担釀

出セシムルモノトス

第二十七条 契員ニシテ本期約第二十二條及第二十三條ニ違反スル時ハ評議員会ノ決議ニ依リ五十銭以上一円以下ノ違約

金ヲ徴収ス

第二十八条 契長ハ毎年一月及七月ニ總會ヲ開キ前半年中ニ於ケル契務状況及成績並會計状況ヲ報告シ其ノ願末ヲ順川郡

畜産組合長ニ報告スルモノトス



第二十九条 本契ノ存立期間満了シ解散スル時ハ契長ハ各契員ニ預托セシ牝牛ノ価格ヲ査定交付シ各契員ノ割当金ニ照ラシ追徴又ハ払戻スルモノトス

第三十条 本契ニハ契員名簿、釐金収入原簿、現金出納簿及預托牛台帳ヲ備付ク

附 則

第三十一条 本規約ハ評議員会ノ決議ニ依リ変更スル事ヲ得

第三十二条 本規約ハ大正十二年二月二十六日より施行ス

三、契の取締方法

本契の取締方法としては別段なきも契員にして毎月出資金を期日内に納入せざる時は一日に付二銭の過怠金を徴収し、又三箇月出資金を怠納する時は除名し既往納付金は没取し契の収入にすることにしてゐる。

全羅北道井邑郡古阜面牛契

牛 契 規 則

第一条 本契ハ農家ノ経済ヲ助長スル為畜牛ヲ購入飼養シ其ノ改良増殖スルコトヲ目的トス

第二条 本契ハ古阜面牛契ト称シ其ノ事務所ヲ古阜面事務所内ニ置ク

第三条 本面内ニ居住スル者ハ総テ契長ノ承認ヲ經テ契ニ加入スルコトヲ得

第四条 本契ハ二十箇月ヲ以テ一期間トシ二十口ヲ以テ一組トス但契長ノ許可ヲ得テ一人数口ニ加入スルコトヲ得

第五条 契員ハ一口ニ對シ一箇月金五十銭宛ヲ毎月十日毎ニ事務所ヘ払込セシム但一時ニ數箇月分ヲ前納スルモ妨ケナシ

第六条 本契ハ毎月二十日契員ニ於テ抽籤ヲ行ヒ當籤者ニ穀牛一頭宛購入交付ス契員ハ自己ノ所有口數ニ応シ抽籤權ヲ有シ而シテ抽籤權ハ一口一本トシ當籤本數ハ毎月一組一本トス

第七条 當籤者ハ自己ニ交付セラルヘキ畜牛ニ對シ牝牝別ノ要求ノ外ニハ交付牛ニ對スル一切ノ異議申立ヲナスコトヲ得ス

第八条 當籤者ハ本契期間満了ニ至ル迄交付ヲ受ケタル畜牛ヲ売却スル事ヲ得但他面転居其ノ他止ムヲ得サル事故アルトキハ契長ノ許可ヲ受ケ未払込金ノ全部払込ラシタル後ニハ之レヲ処分スルコトヲ得

第九条 本契員ハ一期間満了ニ至ルマテ脱退ヲ許可セス但止ムヲ得サル事故アル者ハ契長ノ許可ヲ經テ自己所有口數ヲ他ニ譲与スルコトヲ得

前項ニ依リ譲渡ヲ受ケタル者ハ同時ニ契員タル權利義務ヲ繼承スルモノトス

第十条 本契員ニシテ払込金ノ納付ヲ怠ルカ又ハ契規ヲ違奉セスシテ契ノ事業ヲ妨害スル者アルトキハ契長ハ其ノ所管組員ノ議決ヲ經テ除名処分ヲ為ス

前項ノ処分ヲ受ケタル者ハ既払込金ノ還附ヲ請求スルコトヲ得但シ當籤者ニシテ其ノ処分ヲ受ケタル者ハ交付牛ヲ直チニ返納セシム

若シ交付牛ヲ所有セサルトキハ購入価格ニ相当スル金額ヲ以テ弁償セシム

第十一条 契ノ財産ヲ以テ穀牛ヲ購入スルニ當リ相場ノ変動ヲ生シ剩余アルトキハ之レヲ積立期間終了後契長ニ於テ當該組員ノ協議ヲ經テ処分スルモノトス

第十二条 本契員ハ協同シテ乾草ノ貯蔵ヲ行ヒ冬期飼料ニ供スル義務ヲ有スルモノトス

第十三条 本契ニ左ノ役員ヲ置キ任期ハ二箇年トス

契 長	一 名
副 契 長	一 名
組 長	一 名
副 組 長	一 名
幹 事	二 名

第十四条 契長ハ所轄面長ヲ以テ之レニ充テ郡守ノ指揮ヲ受ケ事務ヲ総理ス

副契長ハ契員ノ内ヨリ互選ス、副契長ハ契長ヲ補佐シ契長ノ事故アルトキハ其ノ事務ヲ代理ス

組長及副組長ハ組合員ノ内ヨリ契長之レヲ任命ス、組長ハ契長ノ指揮ヲ承ケ組内ノ事務ニ従事シ尚組長ノ事故アルトキ

ハ副組長ニ於テ之レヲ代理ス  
幹事一名ハ面書記ヲ以テ之レニ充ツ、一名ハ契員ノ内ヨリ契長之レヲ任命ス、而シテ幹事ハ契長ノ命ヲ承ケ庶務ニ従事ス  
第十五条 契長ハ抽籤執行ト共ニ当籤者ノ住所氏名ヲ具シ契銭ヲ取纏メ之レヲ郡守ニ送付シテ穀牛ノ購入配付ヲ申請ス  
第十六条 契員ニシテ当籤シタル者ハ二回ノ抽籤ニ参加スルコトヲ得ス但契銭ハ毎月納付セシム  
本規約ハ成立ノ日ヨリ之レヲ施行ス

### 江原道高城郡杆城面栽桑契

(イ) 設立の趣旨及目的 栽桑奨励計画の実行を期す  
(ロ) 設立年月 大正十四年三月二十日  
(ハ) 契の役員 契長一名、督励委員三名  
(ニ) 契員数 七十五名  
(ホ) 養蚕発達前後の状況比較  
校洞里は農家戸数八十八戸にして、從來養蚕戸数は数戸を出でざりしが、大正十四年にありては養蚕戸数七十二戸に達し、繭産額三十九石、売上代金二千七百余円に上つた。今十年前の大正五年の状況と比較すると左表の如くである。

年 別	種 別	掃 立 枚 数	産 繭 額
大正 五 年	春 蚕	二八枚	計 三三枚
	夏 秋 蚕	五枚	九石
	計		一〇石
大正 十 四 年	春 蚕	七六枚	計 一〇〇枚
	夏 秋 蚕	二四枚	三石
	計		三八石

### 栽 桑 契 規 約

- 第一条 本契ハ高城郡杆城面校洞里栽桑契ト称ス  
第二条 本契ハ高城郡杆城面校洞里ノ養蚕家ヲ以テ組織ス、但現在養蚕家ニアラスト雖將來養蚕ノ目的ヲ以テ栽桑スルモノハ契員ニ準シ入契セシムルモノトス  
第三条 本契ハ栽桑奨励計画ノ実行ヲ期スルヲ以テ目的トス  
第四条 契ノ業務ハ桑樹植付桑田ノ肥培管理、桑園ノ廢田調査其ノ他郡及面ニ於テ栽桑ニ對シ指示スル事項ヲ実行ス  
第五条 本契ハ前条ノ業務執行ノ為左記各項ヲ遵守スヘシ  
一 業務ヲ実行スルトキハ実行前總會ヲ開キ実行上ノ手段及方法ヲ協定スルコト  
二 業務実行ニハ予メ日割ヲ定メ其ノ期間内ニ契員ヲシテ全部実行セシムルコト  
三 業務実行ノ際ハ契長ハ督励委員ヲシテ里内各戸ヲ巡回シ指導督励ヲ為サシムコト  
四 契員ニシテ業務実行上指示ニ応セサルモノハ總會ノ決議ニ基キ過怠金トシテ一円ヲ徴ス  
第六条 契ニ左ノ役員ヲ置ク  
契長 一名、督励委員 三名、契長ハ契員中德望アル者ヲ選ヒ面長之ヲ命シ督励委員ハ契長之ヲ依嘱ス但シ契長ハ面長、督励委員ハ契長必要ト認ムル節ハ改選スルコトヲ得尚役員ハ名譽職トス  
第七条 契長ハ契ノ一切ノ業務ヲ統理ス  
督励委員ハ契長ノ命ヲ受ケ業務実行ニ指導督励ヲ為ス  
第八条 契ノ規約ノ改廃ヲ為サシムルコトキハ面長ノ承認ヲ受クヘシ  
第九条 本契ハ契費ノ徵集ヲ行ハサルヲ原則トシ必要ナル経費ハ寄附又ハ其ノ他ノ収入ヲ以テ充テ尚不足ノ場合ニ限り契員ヨリ徴金スルヲ得  
第十条 本契ニ備付クヘキ簿書左ノ如シ  
一 契規約及契員名簿 但契員名簿ニハ必ス契員捺印スルコト  
二 契ノ経費出納簿

江原道洪川郡瓦野里養蚕契

養 蚕 契 規 約

- 第一条 本契ハ養蚕業ノ改良発達ヲ図リ契員ノ福利ヲ増進スルヲ目的トス
- 第二条 本契ハ乃村面瓦野里ニ居住スル者ニシテ養蚕ヲ営ム者二十人以上ヲ以テ組織ス
- 第三条 本契ノ名称ハ乃村面瓦野里養蚕契ト称ス
- 第四条 本契ニハ契長一名、副契長一名、評議員二名ヲ置ク
- 第五条 契長及評議員ハ總會ニ於テ契員ノ選挙ニ依ル
- 第六条 契長及評議員ハ名譽職トシ任期ハ二箇年トス
- 但満期ニ再選スルモ妨ケナントス
- 第七条 辞任其ノ他ノ事由ニ依リ役員ノ欠員アル場合ニハ臨時總會ヲ開キ補欠選挙ヲナス
- 第八条 毎年一月ニ定期總會ヲ開催シ前期ノ契務ヲ契長報告シ又当期ノ施設ニ関シ協議ス
- 第九条 契長ハ契ノ常務ヲ執行シ總會ノ議長トナル
- 第十条 本契ハ毎年一月乃至二月中養蚕講習會ヲ開催シ養蚕業ニ関スル智識技術ニ対シ研究ヲナス但講師ノ派遣ハ郡庁ニ申請ス
- 第十一条 本契ハ春、夏、秋蚕共ニ共同飼育ヲナシ飼育中ノ実施指導ヲ受クル為メ教師ノ派遣ヲ郡庁ニ申請ス
- 第十二条 契員ノ取得セル成蚕ハ最寄ノ共同販売組合ニ委託販売ス
- 但自家用ニ製造スルモノハ此ノ限りニ在ラス
- 第十三条 契員ノ飼育スル蚕種ハ郡庁ニ共同購入ノ斡旋ヲ申請ス
- 第十四条 本契員ハ第一条ノ目的ヲ達スル為メ左記事項ヲ履行スヘキコトヲ誓約ス
- 毎年収繭売却代金総額ノ百分ノ十以上ヲ貯金シ蚕具、蚕種又ハ桑樹ノ植苗購入ニ充用シ残余アル場合ニハ之ヲ貯蓄ス

朝鮮の契

- 一 共同桑樹苗圃ヲ設置スルコト
- 一 桑園五畝以上ヲ設置スルコト
- 一 蚕種一回ニ稚製一枚以上ヲ掃立ツルコト
- 一 共同一致シテ契ノ隆盛ヲ図ルニ努力スルコト
- 一 大酒、賭博、遊惰等ノ惡弊ヲ嚴禁シ其ノ他百般ノ弊風ヲ矯正シ勤儉力行シテ衆ニ模範ヲ示スコト
- 第十五条 本契員ハ左ノ事由ニ依リ脱退スルモノトス
- 一 死亡ノ時
- 但相続人ヲシテ契員タルヘキコトヲ継承セシムルコトヲ得
- 一 除 名
- 一 脱退ヲ申出タル時
- 第十六条 本契ハ左ノ事由ニ該当スルモノアルトキハ評議員會ノ決議ニ依リ此レヲ除名ス
- 一 契ノ事業ヲ妨害スル行為アリト認ムルトキ
- 一 第十四条ノ誓約ニ違背セシ者、其ノ他信用ヲ失墜スル行為アリシトキ
- 第十七条 本契ニ加入セムトスル者ハ契員二名以上ノ紹介ニ依リ契ニ請求スヘシ
- 第十八条 前条ノ場合ニ契長ハ評議員會ノ意見ヲ聞キ之ヲ決定ス
- 第十九条 本契ノ設立及役員ノ選任並ニ第八条、第十条、第十一条其ノ他重要ト認ムル事件ハ面長ヲ經テ郡守ニ報告ス
- 附 則
- 第二十条 本契創立ノ場合ハ第十四条第一号ノ事業ニ対スル貯金ハ契員各自出金ス
- 第二十一条 本契ニ左ノ帳簿ヲ置ク
- 一 役員名簿
- 二 契員名簿
- 三 契經費出納簿

### 黄海道海州郡青龍面龍媒里漁業契

本契は青龍面龍媒里漁業契と称し、大正十二年四月四日創立を見た。漁業の改良発達を目的とし、出資方法は一口金五円とし、各一人五口分を持ち、年三回に分納するのである、存続年限は十箇年で、現在契員二百名、基本財産三千円に達してゐる。

#### 黄海道海州郡青龍面龍媒里漁業契規約

##### 第一章 総 則

第一条 本契区域内ニ居住セル漁業者ヲ以テ契員トシ漁業權ヲ獲得シ契員ノ事業ヲ補助シ利益ヲ増進セシメ兼テ共同ノ施設ヲナスヲ以テ目的トス

第二条 本契ハ青龍面龍媒里漁業契ト称ス

第三条 本契ノ区域ハ黄海道海州郡青龍面龍媒里一円トス

第四条 本契ノ事務所ハ黄海道海州郡青龍面龍媒里ニ置ク

第五条 本契ニ加入セムトスル者ハ其ノ旨契長ニ申出ツヘシ契長ハ其ノ住所氏名及年月日ヲ契員名簿ニ記載スルコト

第六条 契員漁業ノ廢止其ノ他ノ事由ニ依リ契員タル資格ヲ喪失シタルトキハ其ノ旨契長ニ申出ツヘシ

第七条 契員其ノ住所氏名ヲ變更シタルトキハ之ヲ契長ニ申出ツヘシ

第八条 前二条ノ申出アリタルトキハ契員名簿ヲ相当訂正又ハ削除スヘシ

##### 第二章 役 員

第九条 本契ニ左ノ役員ヲ置ク

契長一人、理事二人、書記一人、役員ハ契員中面公課金五円以上ノ納入者中ヨリ之ヲ選舉シ其ノ選任解任ハ郡守ノ承認ヲ受クヘシ但シ役員總代会又ハ郡守ノ都合ニ依リ決議ヲ經テ契員外ヨリ之ヲ命スルコトヲ得役員ノ死亡又ハ任期満了ニ依ル退任ハ郡守ニ届出ツヘシ契ノ事務ヲ補助スル為相談役ヲ置クコトヲ得

第十条 契長ハ契ノ事務ヲ施行シ契ヲ代表ス

理事ハ契長ヲ助ケテ契ノ事務ヲ処理ス

監事ハ契ノ財産及業務施行状況ヲ監査ス契長故障アルトキハ理事之ヲ代理ス

書記ハ上長ノ命ニ從ヒ契ノ事務ニ従事ス

第十一条 契長及理事ノ任期ハ三箇年トシ監事書記ノ任期ハ二箇年トス但シ再選ヲ妨ケス補欠選舉ニ依リ就任シタル役員ハ前任者ノ任期ヲ繼承ス役員ノ任期満了ト雖後任者ノ就職スル迄其ノ職務ヲ行フ

第十二条 役員ハ名譽職トス但シ理事及書記ハ總代会ノ決議ヲ經テ有給トナスコトヲ得

第十三条 契員ハ相当ノ理由ナクシテ役員ノ當選ヲ辭シ又ハ其ノ職ヲ辭スルコトヲ得ス

##### 第三章 会 議

第十四条 契員ノ總會ハ通常總會及臨時總會トス但シ總會ノ代リニ總代会ヲ以テスルコトヲ得尚總代ノ人員ハ一旦ニ付三人宛トシ創立總會ニ於テ之ヲ互選ス

通常總代会ハ毎年一回二月ニ之ヲ招集スルノ外左ノ場合ニ之ヲ招集ス

一 契長カ必要ト認メタルトキ

二 監事契財産又ハ業務執行ノ状況ニ付報告ヲナスノ必要アリト認メタルトキ

三 總契員又ハ總代会員五分ノ一以上ヨリ會議ノ目的及事由ヲ示シテ契員總會又總代会ノ招集ヲ請求シタルトキ

前項第三号ノ場合ニ於テ契長ハ其ノ請求ヲ受ケタル日ヨリ一週間内ニ之ヲ招集スヘシ

第十五条 契員總會又ハ總代会ヲ招集スルニハ少ナクモ三日前ニ會議ノ目的タル事項日時及場所ヲ契員ニ通知スヘシ

臨時急施ヲ要シ契員總會又ハ總代会ヲ招集スルトキハ前項ノ期間ヲ短縮スルコトヲ得

第十六条 契員總會又ハ總代会ニ於ケル議長ハ契長之ニ當リ契長故障アルトキハ理事之ニ代ル契長理事共ニ故障アルトキ

ハ出席契員中ヨリ之ヲ互選ス

第十七条 契員總會又ハ總代会ハ通知以外ノ事項ト雖之ヲ決議スルコトヲ得但總契員又ハ總代三分ノ二以上出席アルヲ要ス



但シ同一事項ニ付再度招集シタルトキハ此ノ限リニアラス

第十八条 契員總會ノ決議ハ出席シタル契員ノ議決權ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス可否同数ナルトキハ議長之ヲ決ス

第十九条 契員總會及總代会ノ決議録ハ決議シタル事項及出席者数其ノ他會議ノ顛末ヲ記載シ之ニ議長及出席契員二名以

上記名捺印ノ上郡守ニ届出ツヘシ

第二十条 契員總會及總代会ノ議決ニ關スル細則ハ總代会ニ於テ之ヲ定ム

#### 第四章 會計及財産管理

第二十一条 契ノ事業年度ハ一箇年トシ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終了ス

第二十二条 毎年度剰余金ハ左ノ範圍内ニ於テ契員總會又ハ總代会ノ決議ヲ經テ之ヲ処分ス

一 基金ノ積立剰余金ノ百分ノ二十以上

一 避難者救済資金ノ積立同百分ノ三十以上

一 事業資金ノ積立同百分ノ三十以上

一 翌年度繰越金同百分ノ二十以下

第二十三条 基金避難救恤資金事業資金其ノ他ノ現金ハ郵便貯金又ハ金融組合預金トナスモノトス

但シ五円未満ナルトキハ契長ニ於テ之ヲ保管スルコトヲ得

第二十四条 契長ハ毎年収支決算書剰余金ノ処分書財産ノ目録及事業報告書ヲ調製シ監事ノ審査ヲ受ケ之ヲ契員總會又ハ

總代会ニ提出シテ其ノ承認ヲ求ムヘシ前項ノ承認ヲ得タルトキハ之ヲ郡守ニ届出ツヘシ

第二十五条 本規約ニ規定アルモノヲ除ク外會計及財産管理ニ關スル事項ハ契員總會又ハ總代会ノ決議ヲ經テ之ヲ定ム

#### 第五章 契員ノ漁業及契員ノ賦課徴収方法

第二十六条 契員ノ漁業方法ヲ定ムルコト左ノ如シ

一 浅瀬ハ七月十五日ヨリ八月十五日迄禁漁期ヲ除キ隨時契員共同シテ之ヲ採捕ス

二 其ノ他ノ漁業ハ漁期中適宜ニ從漁ス

第二十七条 契費ノ賦課徴収並ニ會計及財産ノ管理ニ關スル事項ハ總代会ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第二十八条 契費ハ毎年四月一日現在ノ契員ニ賦課シ四月ヨリ五月迄ノ間ニ於テ之ヲ徴収ス但シ五月五日以後ノ加入者ハ加入ノ際之ヲ徴収ス

第二十九条 納入シタル契費ハ如何ナル事由アルモ返還セス

#### 第六章 共同施設事業

第三十条 本契ハ漁村ノ共同福利増進及漁業者ノ利益ヲ謀ルタメ地先沿岸ニ第六種免許ヲ出願シ尚漁獲物共同販売及日用品ノ共同購売其ノ他必要ナル施設ヲ為ス

事業部ノ規定ハ契員總會又ハ總代会ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第三十一条 避難救恤資金ハ契員總會又ハ總代会ノ決議ニ依リ別ニ定メタル規定ニ從ヒ左ノ費途ニ之ヲ支出ス

一 契員又ハ其ノ家族避難ニ依リ漁具又ハ漁船ヲ喪失毀損シタルトキハ其ノ新造又ハ修繕費ノ補助

二 契員又ハ其ノ家族避難ニ依リ負傷シ又疾病ニ罹リ若ハ死亡シタルトキハ其ノ医療費又ハ葬式費ノ補助若ハ遺族ノ扶

助料

三 契員又ハ其ノ家族漂流シタルトキハ其ノ帰郷旅費ノ補助

四 避難者ヲ救助シタルモノニ對スル賞与金又ハ謝金

第三十二条 避難ニ際シ救助ヲ受ケ又ハ救助ヲ為シタル者ハ遲滞ナク其ノ事實ヲ契長ニ申出ツヘシ

第三十三条 事業資金ハ左ノ費途ニ之ヲ支出ス

一 相当ノ担保ヲ供スル契員ニ必要ナル漁業資金ノ貸付

二 前号ノ外契員總會又ハ總代会ノ議決ニ依リ定メタル共同施設事業ノ資金

#### 第七章 違約者処分

第三十四条 契員ニシテ左ノ各号ノ一ニ該当スルトキハ五円以下ノ過怠金ヲ課シ又ハ一箇年間員類ノ採捕ヲ禁止ス

一 故ナク第十三条ニ定メタル役員ノ就職ヲ為サス又ハ第二十六条規定ニ違反シテ漁業ヲ為シタルトキ

二 契費其ノ他契ニ對シテ支払フヘキ金銭ノ支払ヲ怠リ二回以上ノ督促ヲ受クルモ尚其ノ義務ヲ履行セサルトキ

三 契ノ業務ヲ妨クル行為アリタルトキ

四 犯罪其ノ他不正ノ行為ニヨリ契ノ信用ヲ毀損シタルトキ  
第三十五条 違約処分ハ契長之ヲ行フ但シ其ノ事態重キ者ハ監事ノ意見ヲ聴キ之ヲ行フ  
第三十六条 違約処分ヲ受ケタル者ハ指定ノ期間内ニ過怠金ヲ完納スヘシ

第八章 解散及清算

第三十七条 契解散シタルトキハ契長清算人トナル但シ契員總會又ハ總代会ニ於テ他人ヲ選任シタルトキハ此ノ限リニ  
アラス清算人ハ清算及財産処分ノ方法ヲ定メ郡守ノ認可ヲ受クヘシ

慶尚北道達城郡殖産契

- 1、名 称 達城郡殖産契
- 2、所 在 地 達城郡各面事務所
- 3、沿 革 各面に貯穀契なるものありしが、大正十年春現契に組織を変更した。
- 4、事業概況 現に加入者七千八十七人、出資総額三萬九千五百九円にして、貯金額拾萬円に達すれば（最初五箇年の計画なりしも、大正十五年更に十箇年に延長）契員間に低利資金を融通し、相互の資力の増進を図らむとしてゐる。

殖産契規約

第一章 総 則

第一条 本契ハ達城郡何面殖産契ト称ス  
第二条 本契ハ農家ニ勤儉貯蓄ヲ奨メ資力ノ増進ヲ図ルヲ以テ目的トシテ左記業務ヲ行フ  
一、契員ハ今後五箇年ヲ期シ毎年春秋ニ於テ麦粃其ノ他穀類ヲ各一斗宛契ニ貯穀スル事  
二、前記貯穀ハ相当ノ時価ヲ以テ之ヲ売却シ代金ハ金融組合若ハ確實ナル銀行ニ預金スルコト  
三、十箇年満期後ニ於テ相当ノ預金額ニ達スル時ハ之ヲ基金トシテ農村金融機関ノ設立ヲ為ス事  
第三条 本契ノ事務所ハ当分ノ間面事務所内ニ置ク  
第四条 本契ノ区域ハ面一円トシ区域ヲ分チテ左ノ何区トナス  
何 々 区

第二章 契 員

第五条 契員ハ本契区域内ニ於テ農業ヲ営ムモノハ加入スルモノトス但シ契長ヨリ加入ノ資格ナキト認ムルモノハ之ヲ省ク  
第六条 契員死亡シタルトキハ其ノ相続人又ハ相当スルモノ契員ノ資格ヲ継承ス  
第七条 契員本区域外ニ移住スル時ハ既往ニ於ケル貯穀代金ヲ還付ス  
第八条 契員左記事項ノ一ニ該当スルモノハ之ヲ除名脱退スルモノトス  
一、契ノ規約ヲ遵守セス又ハ契ノ体面ヲ汚損スル行為アルモノ  
二、契ノ貯穀ヲ二回以上滞納スルモノ  
但シ除名脱退者ハ既往ノ貯穀及貯金ハ之ヲ還付セス

第三章 役 員

第九条 本契ニ左ノ役員ヲ置キ名譽職トス  
但シ理事ニハ十円以内ノ年末手当ヲ支給スルコトヲ得  
契長一名、理事一名、幹事若干名、監査員若干名  
第十条 契長ハ当該面長ヲ之ニ推薦シ理事ハ当該面書記ノ内ヨリ契長之ヲ囑託ス  
監事ハ各区一名トシ区長其ノ職ニ当ル  
監査ハ各区一名トシ面協議員ヲ之ニ推薦ス  
第十一条 契長ハ契ヲ代表シ一切ノ契務ヲ担任ス契長事故アル時ハ理事其ノ職ヲ代理ス  
理事ハ契長ノ命ヲ受ケ事務ヲ執行ス

幹事ハ契長ノ指揮ヲ受ケ其ノ区内ニ属スル貯穀ノ取立又ハ保管等ノ事務ヲ掌ル

監査員ハ本契ノ重要事項ヲ審査シ又其ノ区内ニ於ケル貯穀及貯金其ノ他金品出納事務ノ一切ヲ監査ス

第十二条 役員ノ任免ハ郡守ノ承認ヲ受ケ契長之ヲ行フ

第十三条 役員ニシテ其ノ本職交通ノ場合ハ後任者ヲ以テ之ニ充ツ

#### 第四章 業務

第十四条 契長ハ春秋貯穀ノ時期ニ於テ別紙第一号ノ貯穀台帳ヲ調製シ各、区幹事ニ貯穀取立ノ通知ト共ニ之ヲ送達スヘシ

第十五条 各区幹事前条ノ通知ヲ受ケタル時ハ直ニ各契員ニ通知シ貯穀ノ取立ニ着手スヘシ

第十六条 各区幹事前条取立ヲナス時ハ貯穀台帳ニ夫々記入整理ヲナシ納未納ヲ明瞭ニスヘシ

第十七条 各区幹事貯穀取立ヲ終リタル時ハ面協議員宅若ハ確實ナルモノニ保管センメ第二号ノ保管証書ヲ徴シ貯穀台帳ト共ニ之ヲ契長ニ提出スヘシ

第十八条 貯穀取立中若ハ保管中ニ於テ盗難其ノ他ノ不注意ニ依リ被害アル時ハ各区幹事又ハ保管者ヨリ之カ弁償ノ義務ヲ負フモノトス

第十九条 監査員ハ常時各幹事ノ貯穀取立ノ状況及保管方ヲ査察シ貯穀台帳及預金通帳ヲ臨檢スル等業務ノ確實ヲ期スヘシ

第二十条 監査員ニ於テ各区幹事其ノ他役員ニ於テハ不正行為ノ嫌疑アル時ハ直ニ其ノ旨ヲ郡守ニ内報スヘシ

第二十一条 契長ハ第十七条ニ依リ各区幹事ヨリ提出セル貯穀台帳及保管証書ニ付計算検査ヲナシ正確ヲ認メタル上ハ第三号ノ様式ニ依リ直ニ郡守ニ報告スヘシ

第二十二条 契長ハ各監査員立会ノ上保管穀物ヲ適當ノ時価ニ依リ売却ヲナシ代金ハ即時金融組合若ハ確實ナル銀行ニ預金ヲナスト共ニ第四号ニ依リ直ニ郡守ニ報告スヘシ

但預金者ノ名義ハ何面協議員契長何某トナスヘシ  
第二十三条 契長ハ第五号様式ニ依リ預金台帳ヲ調製シ預金通帳ト共ニ面備付ノ金櫃ニ格納シ嚴重ニ保管スヘシ

第二十四条 契規約ヲ変更シ又ハ改修ヲ加ヘントスル時ハ監査員ノ同意書ヲ添付シ郡守ノ承認ヲ受クヘシ

#### 附 則

第二十五条 本契ハ大正十年春ヨリ実施ス既設ノ面貯穀契ハ本契規約ニヨリ設立シタルモノト看做ス

第二十七条 契長ハ別紙第五号ノ現金整理簿ヲ備付ケ現金ノ出納事務ヲ明瞭ニスヘシ  
(様式省略ス)

### 慶尚南道蔚山郡蔚山面貯蓄組合

本組合は名称こそ組合なる文字を附しあるも、其の實質内容に於て從來の契と同一なるを以て是れを調査掲記した。

本組合は大正十二年国民精神振作に關する大詔の趣旨を体し、同年十二月より設立したるものにして、本組合の事業たるや面民一般の堅実なる氣風を養成すると共に、勤勉貯蓄を奨励し、以て実力涵養を主なる目的とするものにして、現在の組合員數五百二十三名、組合員貯金額千三百十二圓の多額に達した。之が現金の運用方法は、主として組合員間に於て相当利息を附し貯蓄資金に充当するものにして、將來組合解散の際には貯蓄金額に對し年六分五厘の利息を附して配當するのである。

組合役員としては、組合長一名、幹事七名を置き、組合に於ける總ての事務を統轄してゐる。

### 慶尚南道蔚山郡蔚山面殖利契

朝鮮の契

1、契の沿革 大正十一年に面内有志者八十人を以て組織したるものにして、其の名を殖利契と称する。

2、契の事業概況及び其の申合せ 毎月一人に付五十錢宛出金し、其の出金全額を契

員中一人に限り最低利息にて融通するを目的とし、之に対する申合せは左の如くである。

イ、毎月一回宛開契スルコト

ロ、契金ヲ融通スルニハ借用希望者ヲシテ抽籤セシムルモノナリシカ最高利子（規則ニ定メアル範囲内）ヲ附シタル者ニ対シ貸付ス

ハ、貸付ヲ為スニ於テ連帯保証人三人ノ連署ヲ要ス

ニ、抽籤ノ結果貸付金ニ余裕ヲ生シタルトキハ其ノ剰余分ハ金融組合ニ貯蓄スルコト

ホ、二年毎ニ利益ヲ配当スルコト

### 慶尚南道蔚山郡西生面貯穀契

- 1、契の沿革 大正五年面内有志者数人の発起の下に設立せられたるものにして、契員は面民中希望者を以て組織したるものにして其の名を貯穀契と称する。
- 2、契の事業概況 契員一人に付き入契と同時に穀一斗宛出財し、其の契金を以て契員中の申込者に限り長利の約例にて貸与する（長利とは朝鮮旧慣例に依る金利の標語にして今年一斗を貸与すれば一週年後に倍償するものである）。定期総会は毎年旧三月三日に会員半数以上の出席を以て開会し、其の当日一年の経過報告並に収支決算の報告をする。尚ほ右貯穀は凶年に際し契員中困難に臨みたるとき救助に供する目的である。

本契には別段有文の規約としてはなく、只申合せが規約となつてゐるのみである。

### 黄海道信川郡信川面殖産契

本契は殖産契と称し、大正十一年十二月二十五日の創設に係り殖産を目的として組織されたもので、存続年限五箇年と定めてゐる。出資は創立と共に各人二百円を出し、爾後毎月一円宛を繰出し、現在会員十一人契財産六千円に達してゐる。

#### 殖産契規約

第一条 本契ハ殖産契ト称ス

第二条 本契ハ殖産ノ目的ヲ以テ組織ス

第三条 本契ニ加入セントスルモノハ一人前貳百円及月ニ五円ヲ出資スルコト但シ中途加入スルモノハ此ノ限りニアラス

第四条 本契ニ左ノ役員ヲ置ク

契長一、理事一、会計一

第五条 契長、理事及会計ハ任期ヲ一箇年トス任期満了セハ契会ヲ開キ選舉スルモノトス

第六条 契金ノ収支計算表ハ一年ニ二回作製シ契長ニ提出スルコト右ハ会計ノ専任トス

第七条 本契貸借ニアリテハ利子年三割六歩トシ一年ヲ通シテ六箇月迄ヲ期限トス

第八条 本契存続年限ハ五箇年ニシテ期限満了セハ契金ヲ分配スルモノトス但シ期限満了セシモ各契員ノ同意ヲ得テ再ヒ組織スルコトヲ得

### 黄海道載寧郡下方面紀念貯蓄契

本契は紀念貯蓄契と称し、大正十三年六月五日、皇太子殿下の御成婚を奉祝紀念の為に貯蓄を目的として組織されたものであつて、現在加入者三十名、積立金八十五円に達してゐる。出資は毎年各人に付小麦一斗、粟一斗宛を穀収期に於て納付するのであつて、存続年限は永久である。

#### 下方面花石里紀念貯蓄契規約

#### 第一章 総則



第一条 本契ハ下方花石里紀念貯蓄契ト称シ下方花石里内居住者ヲ以テ組織ス  
第二条 本契ハ勤儉貯蓄ヲ以テ 皇太子殿下ノ御成婚ヲ奉祝紀念スルヲ目的トス  
第三条 本契ノ事務所ハ当分ノ内下方事務所内ニ置ク

第二章 貯蓄及払戻

第四条 契員ハ第二条ノ目的ヲ達スル為勤儉ヲ奨励シ預託貯蓄スルモノトス  
本人ノ希望ニ依リ二種以上ヲ貯蓄スルコトヲ得貯蓄ハ精選シ夾雜物ノ混入セサルハ勿論充分乾燥シタル優良品タルコトヲ要ス

種類	貯蓄量	預託期日
小麦	一斗	七月二十五日
粟	一斗	十月十日

第五条 契長ハ契員ノ搬入セル貯蓄品ヲ検査シ其ノ不良ナル物ハ交換ヲ命スルコトヲ得  
第六条 契長ハ貯蓄品ヲ受入タルトキハ第一号様式ノ貯蓄通帳ニ月日、種類、数量等ヲ記入認印シ本人ニ之ヲ交付スヘシ  
第七条 貯蓄通帳ヲ亡失シタルトキハ直ニ契長ニ届出シ再交付ヲ受クヘシ再交付通帳ニハ表面欄外ニ「亡失交付」ト朱印スルモノトス

第八条 貯蓄通帳ヲ汚損又ハ毀損シ新通帳ノ交付ヲ受ケムトスルモノハ旧通帳ヲ添ヘ契長ニ請求スルコトヲ得

第九条 第七条及第八条ニ依リ新通帳ノ交付ヲ受ケムトスルモノハ手数料トシテ十銭ヲ納ムルモノトス

第十条 契員左記各号ノ一ニ該当シタルトキハ評議員会ノ決議ヲ経テ払戻ヲ為スコトヲ得

- 一 天災地変ニ遭遇シタルトキ
- 二 本人又ハ家族傷痍疾病ニ罹リタルトキ
- 三 本人又ハ家族死亡シタルトキ
- 四 一家ノ経済ニ重大ノ変動ヲ生シタルトキ

第三章 貸付

第十一条 貯蓄及貯金期間一年以内利息月一分八厘ノ割合ヲ以テ契区域内居住者ニ貸付スルコトヲ得  
但シ穀物ハ一人ニ付時価ニ換算シ五十円ヲ超ユルヲ得ス現金貸付ハ一人ニ付三十円ヲ限度トス

第十二条 貸付ヲ受ケムトスル者ハ口頭ニテ契長ニ申出ツヘシ

第十三条 契長ハ貸付申出ノ原因カ遊惰放逸ニ依ルニ非ラサルコトヲ認メタルトキハ評議員ノ調査シタル信用程度ニ応ジ

貸出ヲ為シ第二号様式ノ借用証ヲ徴スヘシ

第十四条 債務者ハ現品債務ナルトキハ借入品ト同等品位ニ乾燥調製ヲ為シタル現金債務ナルトキハ現金穀物ヲ以テ元本

及利息ヲ期限内ニ償還スヘシ

第十五条 債務者返済ヲ怠ルトキハ期限後一円ニ対シ現品債務ニハ元本一石ニ付七升現金債務ハ元金百円ニ付日歩七銭ノ

割合ヲ以テ延滞利息ヲ徴スヘシ

第十六条 契長ハ償還穀物ヲ検査シ不良ナル物ハ交換ヲ命スルコトヲ得

第四章 機関

第十七条 本契ニ左ノ役員ヲ置ク

契長	一名
副契長	一名
評議員	五名
理事	二名

第十八条 契長ハ下方面ノ面長ヲ推戴ス

副契長及評議員ハ總會ニ於テ選舉ス其ノ任期ハ二箇年トス但シ再選ヲ妨ケス

理事ハ会長之ヲ囑託ス

第十九条 選舉ニ依リ就任シタル役員ニ欠員ヲ生シ通常總會ヲ持ツコト能ハサルトキハ臨時總會ヲ開キ補欠選舉ヲ行フコ

トヲ得

第二十条 補欠選舉ニ依リ就任シタル役員ノ任期ハ前任者ノ残任期間トス

第二十一条 役員ノ職務権限左ノ如シ

契長ハ契ヲ代表シ一切ノ業務ヲ統理ス

副契長ハ契長ヲ補佐シ契長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

評議員ハ重要事項ノ審議ニ任スル外信用程度調査及貯蓄並債務償還ノ督励ニ任スルモノトス評議員ハ定員ノ半数以上ノ同意ヲ得テ目的ヲ示シ評議員会ノ開催ヲ求ムルコトヲ得理事ハ契長ノ命ヲ承ケ事務ニ従事ス

第二十二条 役員ハ名与職トス但シ予算ニ定メタル所ニ依リ評議員会ノ議決ヲ經テ賞与金ヲ給スルコトヲ得

第二十三条 役員カ故意又ハ重大ナル過失ニ依リ契ニ損害ヲ及ホシタルトキハ總會ノ決議ヲ以テ賠償ヲ為サシムルコトアルヘシ

第二十四条 本契ノ会合ヲ通常總會、臨時總會、評議員会トシ契長之カ證長トナルモノトス

第二十五条 通常總會ハ毎年一回之ヲ開キ左記事項ヲ決議ス

事務費予算及決算ニ関スル事項

事業成績ニ関スル事項

役員ノ選任改任契員ノ除名処分、規約変更

前各項ノ外契長ニ於テ必要ト認メタル事項

第二十六条 臨時總會ハ契長ニ於テ必要ヲ認メタルトキ及契員三分ノ一以上連署シ目的ヲ示シ開催ヲ要求シタルトキ之ヲ開催ス

第二十七条 評議員会ハ契長ニ於テ必要ト認メタルトキ及評議員ノ半数以上連署シ目的ヲ示シ開催ヲ要求シタルトキ之ヲ開催ス

第二十八条 總會又ハ評議員会ヲ開催セムトスルトキハ開會ノ日ヨリ少クトモ三日前ニ日時、場所及附議事項ヲ関係者ニ通知スヘシ但シ急ヲ要スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十九条 會議ノ決議ハ出席者ノ過半数ヲ以テ定ムルコト可否同数ナルトキハ議長ノ決スル処ニ付スルモノトス規約ノ変更ハ契員半数以上出席スルニアラサレハ決議スルコトヲ得ス

第三十条 會議録ハ議長之ヲ作リ理事以外ノ出席者中ヨリ三名之ニ署名捺印スルモノトス

第五章 會計

第三十一条 契ノ事業年度ハ毎年一月一日ヨリ十二月三十一日迄トシ年度ノ終ニ於テ損益決算ヲ為スモノトス

第三十二条 利益ノ一割ヲ欠損補填ニ充ツル為積立穀物ノ一部ハ評議員会ノ決議ヲ經テ現金ニ之ヲ替ヘ積立ツルトヲ得

第三十三条 利益中ヨリ前条ノ積立ノ控除シタル残余ノ二割ヲ次年度ノ事務費ニ充当スルモノトス

但シ初年度ハ契員各自二十錢宛ヲ出金スルモノトス

第三十四条 前条事務費ニシテ經常費ヲ支弁スルニ足ラサルトキハ契員一人ニ付二十錢以内ヲ徴スルコトヲ得

第三十五条 利益ハ第三十二条ニ依ル積立及第三十三条ニ依ル事務費ヲ控除シタル後ニ在ラサレハ契員ニ配当スルコトヲ得ス

第三十六条 利益配当ハ本人ノ貯蓄ニ組入ルモノトス

第三十七条 利益ヲ契員ニ配当シ尚余アルトキハ次年度ニ繰越スルモノトス

第三十八条 契長ハ決算ノ結果ニ依リ事業報告書、収支計算書、利益処分案ヲ作製シ通常總會ニ提出スヘシ

第六章 加入、脱退、褒賞、除名

第三十九条 新ニ加入セムトスルモノハ第三号様式ノ加入申込書ヲ契長ニ提出シ承認ヲ得クヘシ

第四十条 契長新ニ加入申込書ヲ受ケタルトキハ評議員会ノ意見ヲ徴シ諾否ノ決定ヲ為スヘシ

第四十一条 契員ヨリ脱退申出アリタルトキハ已ヲ得サル事由アル場合ニ限り評議員会ノ議決ヲ經テ之ヲ許可スルコトヲ得

第四十二条 脱退者ニハ既ニ貯蓄ノ九割ヲ払戻スモノトス

但シ脱退事由カ本人ノ死亡郡外移居タルトキハ即時金額ヲ払戻スモノトス

第四十三条 前条払戻ノ除契ニ同一種類ノ貯蓄ナキトキハ貸付回収次第直ニ払戻スモノトス

第四十四条 脱退者ノ貯蓄ニ対スル利益配当ハ払戻当日迄ノ分ヲ決算後支払フモノトス

第四十五条 脱退者ニ対シ貸付アル場合ハ債務弁済後ニアラサレハ貯蓄ノ払戻ヲ為ササルモノトス

前項ノ場合ニ於テ契ハ債務及利息ト払戻貯蓄ト相殺スルコトヲ得

第四十六条 役員脱退シタルトキハ年度末決算後ニアラサレハ貯蓄払戻ヲ為ササルモノトス

第四十七条 死亡シタル契員ノ相続者ハ届出ニ依リ其ノ権利ヲ継承ス

第四十八条 契員中本規約ヲ遵守シ勤儉貯蓄ヲ為シ其ノ成績良好ナル者ニ対シテハ評議員会ノ議決ヲ經テ總會ニ於テ表彰スルコトヲ得前項表彰者ニハ第四号様式門標ヲ交付スルモノトス

第四十九条 契員左記各号ノ一ニ該当スル場合ハ總會ノ決議ニ依リ除名ス

規約ニ違反シ又ハ其義務ヲ履行セサルトキ契ノ体面ヲ汚損シ又ハ契業務ノ妨害ト為ルヘキ行為アルトキ

犯罪又ハ其ノ他ノ行為ニ依リ信用失墜シタルトキ

第五十条 除名者ノ貯蓄ハ年度末決算後ニ於テ其ノ七割ヲ払戻スモノトス

前項ノ払戻ニ対シテハ利益配当ヲ為ササルモノトス

第五十一条 第四十二条及五十条ニ依リ控除シタル貯蓄ハ之ヲ積立ニ組入レルモノトス

## 第七章 雜 則

第五十二条 契員ハ左ノ事項ヲ行フコトヲ得

總會ニ出席シ意見ヲ陳述スルコト

契員三分ノ一以上ノ同意アルトキハ目的ヲ示シ臨時總會開催ヲ要求スルコト

契備付帳簿ノ閲覧及収支状況ノ説明ヲ求ムルコト

第五十三条 本契ニ左ノ帳簿ヲ備ヘルモノトス

一、貯蓄台帳

一、積立台帳

一、貸付台帳

一、通帳再交付台帳

一、契員台帳

一、契 誌

一、評議員会ヨリノ會議事録

一、總會々議事録

一、收納簿

一、事務費現金受払簿

一、事務費歳出内訳簿

一、支払証憑綴

一、借用証書綴

一、往復文書綴

一、文書件名簿

第五十四条 本契ノ規約ハ總會ノ議決ヲ經テ載寧郡守ノ認可ヲ得ルニ在ラサレハ変更スルコトヲ得ス

第五十五条 契ノ事務執行上必要ナル細則ハ評議員会ノ議決ヲ經テ契長之ヲ定ム

## 附 則

本規約ハ大正十三年六月ヨリ施行ス

本規約ニ規定シタル事項以外ノ事件ノ解決ハ總會ノ決議ヲ經テ載寧郡守ノ指揮ヲ仰クモノトス

## 黄 海 道 海 州 郡 勤 農 貯 蓄 契

本契は勤農貯蓄契と称し、大正九年十月農業資金の融通及産業開発を目的として組織されたものである、現在契員四十一名、積立金一千二百六十円に達してゐる。出資方法は毎年穀調製の際耕作者の所要種子同量額を初めに出資するのである。積立資金は契員又は他の者に短期貸付を行つて居り、存続年限は永久である。

勤農貯蓄契規約

第一条 本契ハ勤農貯蓄契ト称ス

第二条 目的

本契ハ契員相互助力シテ作農資金ヲ融通セシメ以テ農業発達ヲ図ルヲ目的トス

第三条 契員及役員

契員ハ契長ノ小作人ヲ以テ組織ス

契長ハ本契員耕作地主トス

幹事ハ本契員集團地ニ於テ最モ信用アル小作人ヲ以テ之ニ充ツ

第四条 出資方法及期限

(一) 出資ハ毎年秋季期調製ノ際其ノ耕作シタル水田ノ種子同量数ヲ基本金トシテ契ニ出資スルモノトス

(二) 期限ハ十箇年トス

第五条 貸付方法及利率

契員間資金ノ融通ヲ図リ残額アル際ハ契員外ニ之ヲ貸付ス利率ハ當時一般利率ヨリ一割減トス

貸付ノ際ハ契長及幹事協議ノ上之ヲナス

第六条 出資金償還ノ方法

(一) 契員住所ヲ変シ契長ノ土地ヲ耕作不能ノ際又其他不得已事情ニヨリ退契ノ際ハ出資総額ニ対スル利益ノ配当ニ就テハ總會ノ決議ヲ經テ之ヲ定ムルモノトス

(二) 契ノ規約ニ違反シタル際ハ各幹事ノ認定ニ依リ契長ハ小作權ヲ取消出資額ノミヲ返済スルモノトス

(三) 本契創立十箇年間後ヨリハ總會決議ニ依リ基本資産ヨリ生スル利息ヲ各契員出資額ニ依リ配当セシムルモノトス

第七条 本契員ハ規約ニ違反セサル限り小作權ハ永年トシテ契長ハ如何ナル事情アルモ之ヲ變動スルエトヲ得ス

但シ契長土地ヲ売買ノ際ハ其責任ヲ有セサルモノトス

第八条 本契ハ永年ニ解散セサルモノトス

第九条 本契ハ年一回以上定期總會ヲ開クモノトス

旧曆正月中之ヲ開キ左記勤農方法ヲ席上ニ於テ相定メ実行スルモノトス

勤農ノ方法

一、種子撰択及改良

二、施肥及整地

三、耕作方法ノ改良

四、調製及其他諸般ノ必要事項

第十条 本規約ノ外必要ト認ムル条件ハ總會ニ於テ之ヲ追加削除スルモノトス

慶尚北道醴泉郡醴泉備荒貯蓄契

1、名称 醴泉共益組合

2、所在地 醴泉郡醴泉面

3、沿革 最初醴泉備荒貯蓄契なるものであつたが、大正九年現組合に組織を變更したのである。

4、事業概況 組合員三千百六十人、出資総額二萬五千三百円にして、組合員の産業其他經濟の発達を企図する事業に対し低利資金を融通し、組合員相互間の利益増進を為しつつある。

醴泉共益組合定款

第一章 総則

第一条 本組合ハ組合員ノ産業其ノ他經濟ノ発達ヲ企図シ組合員相互間ノ利益増進ヲ図ルヲ以テ目的トス



第二条 本組合ハ醴泉共益組合ト称ス

第三条 本組合ハ醴泉郡内ニ居住スル農、商、工業者及本組合ノ趣旨ニ賛同スル者ヲ以テ組織ス

第四条 本組合ノ事務所ハ醴泉郡醴泉面ニ置ク

本組合ハ醴泉郡守ノ認可ヲ受ケ前項ノ事務所以外ノ地ニ出張所ヲ設置スルコトヲ得

第五条 本組合ノ存立期間ハ設立ノ日より滿十年トス

## 第二章 組合員ノ權利義務

第六条 出資金額ハ一口二円トス

組合員ハ出資一口以上ヲ有スヘシ

第七条 出資金ハ年二期ニ分チ組合ニ払込ヲ為スヘシ

第八条 組合ハ組合員ニ出資証券ヲ交付ス

出資証券ニハ出資額、払込額ヲ記入シ組合長並理事之ニ連署ス

第九条 組合員死亡シタル場合ハ相続人ノ承継スルモノトス

第十条 積立金ノ額ハ出資額ヲ限度トシ毎事業年度ノ剰余金ノ三分ノ一以上ヲ積立ツルモノトス

第十一条 組合員ハ自己ノ所要ニ応ジ組合ニ対シ資金ノ貸付ヲ精求スヘシ

第十二条 組合員ハ何時ニテモ組合ノ帳簿ヲ閲覧スルコトヲ得

## 第三章 組合ノ機関

第十三条 組合ニ左ノ役員ヲ置ク

組合長一人、理事一人、監事四人、評議員十人

役員ノ資格ハ払込済出資金ニ応ジ組合長及理事ハ百口以上、監事及評議員ハ十五口以上ヲ有スルモノトス但郡守ノ推薦

ニ係ル醴泉郡属及金融組合理事タル監事ハ此ノ限ニ在ラス

組合長ハ總會ニ於テ組合員中ヨリ之ヲ選任シ郡守ノ認可ヲ受ケ就任スルモノトス

理事ハ当分ノ間郡守ノ推薦ニ係ル候補者中ヨリ組合長ニ於テ評議員ノ意見ニ依リ之ヲ任命ス

監事ハ組合員タル醴泉郡属、金融組合理事又ハ有志者中ヨリ郡守ノ推薦ニ係ル者ニ就キ組合長之ヲ囑託ス

評議員ハ總會ニ於テ組合員中ヨリ之ヲ選任ス

第十四条 組合長、監事及評議員ノ任期ハ三年トス

但任期中ノ最終決算期ニ関スル定時總會ノ終結ニ至ル迄其ノ任期ヲ伸長スルコトヲ得

第十五条 組合長ハ組合ヲ代表ス

組合長ハ總會及評議員会ノ議長ト為ル

組合長事故アルトキハ理事之ヲ代理ス

第十六条 理事ハ組合ノ業務ヲ執行ス

第十七条 監事ハ組合ノ財産及業務執行ノ状況ヲ監査ス

監事ハ組合財産ノ状況又ハ業務ノ執行ニ付不審ノ虞アルコトヲ発見シタルトキハ之ヲ郡守ニ具申スルモノトス

第十八条 評議員会ハ評議員ヲ以テ組織ス

評議員会ハ必要ニ応ジ組合長之ヲ招集シ定款ニ定メタル事項其ノ他重要ト認ムル事項ヲ議決ス

評議員会ハ評議員定数ノ半数以上出席スルニ非サレハ之ヲ開クコトヲ得ス

議事ハ過半数ヲ以テ決ス可否同数ナルトキハ議長之ヲ決ス評議員会ニ於テ議決シタル事項ハ決議録ニ記載シ出席員之ニ

署名捺印スヘシ

評議員ハ組合ノ業務ニ関シ意見ヲ述フルコトヲ得

第十九条 總會ハ定時及臨時ノ二種トス

定時總會ハ毎年四月

臨時總會ハ組合長之ヲ必要ト認メタルトキ

第二十条 總會ノ招集ハ少クトモ開会十日前ニ其ノ會議ノ目的並事項ヲ示シタル書面ヲ以テ各組合員ニ通知スヘシ

第二十一条 總會ハ組合員三分ノ一以上出席スルニアラサレハ開会スルコトヲ得ス

總會ノ決議ハ出席者過半数ヲ以テ之ヲ為ス

第二十二條 組合員ハ払込済出資金一口ニ付一箇ノ議決權ヲ有ス払込済出資金十一口以上ノモノニ付テハ二口ニ付一箇ノ議決權ヲ有ス但總議決權百箇ヲ超ユルコトヲ得ス

第二十三條 組合員ハ代理人ヲ以テ議決權ヲ行フコトヲ得此ノ場合ニ於テハ委任狀ヲ提出スルモノトス代理人ハ組合員タルヲ要ス

第二十四條 理事ハ定時總會ノ日ヨリ一週間前ニ財産目錄、貸借対照表、事業報告書及剰余金処分案ヲ監事ニ提出シ且之ヲ本組合事務所ニ備フヘシ

第二十五條 組合長及理事ハ前条ニ掲ケタル書類及監事ノ意見書ヲ定時總會ニ提出シテ其ノ承認ヲ求ムヘシ

組合長及理事前項ノ承認ヲ得タルトキハ二週間内ニ總會ノ顚末並關係書類ヲ郡守ニ提出スヘシ

第二十六條 總會ノ決議録ハ理事之ヲ作り組合長及監事之ニ記名捺印スルコトヲ要ス總會出席者名簿ハ決議録ニ之ヲ附綴スヘシ

第二十七條 組合長、監事及評議員ハ名譽職トス

組合長、監事及評議員ハ一事業年度毎ニ左ノ手当金ヲ支給ス

組 合 長 十円以上三十円以下

監事及評議員 十円以上二十円以下

理事ノ給料ハ評議員会ノ意見ニ依リ郡守ノ承認ヲ經テ組合長之ヲ定ム

第二十八條 本組合ノ職制、給与、服務及懲戒ニ關スル規程ハ評議員会ノ議決ニ依リ郡守ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

#### 第四章 業務ノ執行

第二十九條 本組合ノ事業年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第三十條 理事ハ毎事業年度ノ終ニ於テ翌年度ノ資金ノ運轉其ノ他業務上ノ計画ヲ定メ組合長ノ承認ヲ經テ実行スヘシ

第三十一條 左ノ事項ハ評議員会ノ決議ニ附スヘシ

一、組合用土地、建物ヲ取得シ又ハ処分セムトスルトキ

二、組合用建物ヲ新築、改築又ハ増築セントスルトキ

三、組合貸付金ノ限度又ハ利率ヲ定メ又ハ変更セムトスルトキ

四、出資金払込ノ期日ヲ定ムルトキ

五、其ノ他重要ト認ムル事項

第三十二條 業務執行ニ關スル規程ハ評議員会ノ議決ニ依リ郡守ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

第三十三條 本組合ハ第一条ノ目的ヲ達セムカ爲メ組合員ニ低利貸付ヲ爲スヘシ

第三十四條 貸付条件ハ信用又ハ担保トシ左ノ場合ニアラサレハ貸付スルコトヲ得ス

一、農林業ニ關スル必要ナル資金ヲ要スル場合

二、旱水害其ノ他災難ニ罹リ救済資金ヲ要スル場合

三、土地開墾並治山、治水事業ニ關スル資金ヲ要スル場合

四、冠、婚、喪、祭費用並紡績ニ關スル資金ヲ要スル場合

五、教育資金ヲ要スル場合

六、納税資金ヲ要スル場合

七、其ノ他特殊ノ事情アル場合

信用貸付ハ五円以上百円以内但シ担保貸ハ百円以上千円以内トス

第三十五條 前条ノ貸付ハ信用及担保貸付ヲ問ハス組合員二人以上ノ連帯保証アルニアラサレハ貸付スルコトヲ得ス

第三十六條 貸付利率ハ評議員会ノ決議ニ依リ郡守ノ認可ヲ得テ決定スルモノトス

#### 第五章 剰余金及欠損補填

第三十七條 理事ハ毎事業年度ノ終ニ於テ諸勘定ヲ決算スヘシ

前項ノ決算ヲ終リタルトキハ財産目錄、貸借対照表、事業報告書及剰余金処分案ヲ作成スヘシ

第三十八條 剰余金ハ第十條ニ定メタル積立金額ヲ控除シ左ノ割合ヲ以テ処分スヘシ

組合員ノ配当金ハ各組合員ノ払込済出資額ニ対シ年一割以内

前項ノ処分ヲ爲シ尚残余アルトキハ翌年度へ繰越スルモノトス

第三十九条 組合損失金ノ補填ハ積立金ヨリ之カ補填ヲナスヘシ

前項ニ依リ損失ノ補填ヲ為サントスルトキハ評議員会ノ議決ヲ經テ郡守ノ認可ヲ受クルモノトス

#### 第六章 加入及脱退

第四十条 新ニ組合ニ加入セムトスル者ハ評議員ノ紹介ヲ以テ組合ニ申込ムヘシ

前項ノ申込アルトキハ評議員会ノ議決ニ附シ其ノ諾否ヲ決スルモノトス加入申込ノ承諾ヲ為シタルトキハ其ノ旨申込人

ニ通知シ出資金額ノ払込ヲ為サシメタル後組合名簿ニ記載スルコトヲ要ス

第四十一条 組合員其ノ持分ヲ譲渡セムトスルトキハ組合長ノ承諾ヲ受クルコトヲ要ス

持分譲受人組合員ニ非サルトキハ前条ノ規定ヲ準用ス

第四十二条 組合員ハ左ノ事由ニ該当セサル場合ニ脱退スルコトヲ得ス

一、組合員タル資格ノ喪失

二、死亡

三、破産

四、禁治産

五、除名

第四十三条 組合員脱退シタルトキハ事業年度ニ於テ出資金ノ払戻ヲ為ス

脱退シタル組合員組合ニ対スル債務ヲ完済スル迄ハ組合ハ其ノ持分ノ払戻ヲ停止ス

第四十四条 組合員ハ左ノ各項ノ一ニ該当スルトキハ評議員会ノ決議ニ依リ之ヲ除名ス

一、出資ノ払込其ノ他組合ニ対スル債務ノ支払ヲ怠リタルトキ

二、組合ノ事務ヲ妨クルノ行為アリタルトキ

三、犯罪其ノ他ノ行為ニ依リ信用ヲ失ヒタルトキ

四、組合員タルノ体面ヲ汚損スルノ行為アリタルトキ

#### 第七章 官庁ノ監督

第四十五条 本組合ハ釧路郡守ノ監督ヲ受クルモノトス

第四十六条 郡守ハ何時ニテモ組合ノ業務及財産ノ状況ヲ報告セシメ又ハ之ヲ検査スルコトヲ得

第四十七条 郡守ハ組合ノ業務又ハ財産ノ状況ニ依リ組合ニ対シ必要ナル措置ヲ為サシムルコトヲ得

#### 第八章 解散

第四十八条 本組合ハ左ノ事由ニ依リ解散ス

一、定款ニ定メタル存立時期ノ満了

二、總會ノ決議

前項解散ノ決議ハ郡守ノ認可ヲ受ケテ効力ヲ生スルモノトス

第四十九条 解散ノ場合ニハ組合ノ財産ヲ以テ組合員ノ払込出資額ヲ按分シテ分配スルモノトス

#### 第九章 清算

第五十条 本組合解散シタルトキハ直ニ清算ヲ為スコトヲ要ス

第五十一条 清算人ハ郡守ノ推薦セル者ヲシテ之ニ当ラシム

第五十二条 清算人ハ就職後遅滞ナク組合財産ノ状況ヲ調査シ財産目録及貸借対照表ヲ作り總會ヲ招集シ之ニ提出シテ其

ノ承認ヲ求ムヘシ

第五十三条 清算人ハ組合ノ財産ヲ供託スルニ非サレハ組合ノ財産ヲ分配スルコトヲ得ス

第五十四条 清算事務終リタルトキハ清算人ハ遅滞ナク決算報告書ヲ作り總會ヲ招集シ之ニ提出シテ其ノ承認ヲ求ムヘシ

第五十五条 第二十条乃至第二十二条ノ規定ハ組合ノ清算ニ之ヲ準用ス

#### 附 則

本定款ハ總會ノ議決ニ依リ郡守ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

### 慶尚南道東萊郡西面奨学契

- 1、名称 奨学契
- 2、所在地 東萊郡西面蠶里
- 3、沿革 光武元年本里に奨学契なるもの二契ありて貯穀しつつありしが、大正八年併合して蠶里奨励契の組織を見るに至つた。
- 4、事業の概況 創立以来其の目的たる培英義塾の教育費の一部補助をなしつつある。

#### 奨学契規則

##### 第一章 名称、位置

第一条 本会ハ蠶里奨学契ト称ス

第二条 本会ハ東萊郡西面蠶里ニ置ク

##### 第二章 目的

第三条 本会ハ育英事業ヲ目的トス

##### 第三章 会 員

第四条 本会々員ハ本会目的ヲ賛助スル人士ヲ以テ組織ス

第五条 本会々員ハ会ノ規則ヲ遵守シ会費ヲ負担スルノ義務ヲ有ス

##### 第四章 任 員

第六条 本会任員ハ左ノ如シ

会 長	一 人
財 務	一 人
監 査	一 人

第七条 会長ハ本会ヲ代表ス

第八条 財務ハ文簿ノ財政ヲ掌理ス

第九条 監査ハ諸文簿ヲ監査ス

#### 第五章 集 会

第十条 本会ノ集合ハ左ノ如シ

##### 一、定期総会

##### 二、臨時総会

第十一条 総会ハ年二回（春秋）会長之レヲ召集ス

第十二条 臨時総会ハ特別ノ事情アル時會長之ヲ召集ス

##### 第六章 財 政

第十三条 本会ノ財政ハ会費、義捐金、補助金、元基本金其ノ他収入ヲ以テス

第十四条 本会財政ハ教育費ニ充用ス

##### 第七章 改 正

第十五条 本会規則中不満ノ点有ルトキハ総会ニ於テ之レヲ改正シ又ハ追加ス

#### 慶尚南道密陽郡密陽面嶺南契

- 一、契の位置 密陽郡密陽面城内里
- 二、契の名称 嶺南契
- 三、契の機関 契長一名 有司一名 書記一人 幹事一名
- 四、契の目的 父母葬補護
- 五、契の財産 百円也
- 六、契員数 三十五名
- 七、契の沿革

本契は父母葬礼補護を目的として地元二三有志青年が互に寄り集り大正六年十月十



五日を以て発起し大正六年十一月一日午前十一時より同契創立総会を「表文呉」方に於て開催し、契則作成並に役員推薦其の他必要事項討論の上本契の成立を見るに至つた。而して本契の目的は前述の如く祖先伝来の例に学び、父母葬礼補護に在るのである。本契に関し特に認むべき沿革上の特色無きも、単に規約内容の如く地方青年の向上機關を設けてゐる。

因に本契主宰者の住所氏名を示すと左の如くである。

密陽面内二洞	表文	吳	李	章	寿
同内一洞	車	貞	奎	朴	尚
嶺南契	規約				五

第一条 本契ハ嶺南契ト称ス

第二条 本契ハ徳育智體養成ヲ目的トス

第三条 本契ノ位置ハ密陽城内ト定ム

第四条 本契ノ機關タル役員ハ契員ノ選挙ニ由ル

第五条 本契ノ目的ヲ達スル為メ事務ノ処理ヲナス機關ハ左ノ如シ

(1) 徳育部、(2) 智育部、(3) 体育部

第六条 契長一名、会計一名、書記一名、幹事一名ヲ置ク

第七条 本契役員ノ職務ハ左ノ如シ

契長ハ契中一切ノ事務ヲ総轄ス

会計ハ金銭出納及会計ニ対スル諸般事項ヲ処理シ幹事ハ契長ノ指示ヲ受ケ諸般通知事項ヲ負担ス

第八条 本契集合ノ種類ハ定期總會ト臨時總會ニ分ツ

第九条 原則及細則ノ規定事項ハ通常慣例ニ依リ重要ナル事項ハ總會ニテ決議ス

第十条 本契規約ヲ遵ラサル者ハ除名ス但シ既納金ハ還付セス

#### 細則

第十一条 1 情誼、篤穆、慶弔相問相救

但シ当喪時契員一同ハ一個人ニ付キ金二十錢ヲ出資シ徹夜及護喪スルコト若シ不応者ハ原則ニ依リ処決ス

2 徳育涵養

品行上ノ監督勇敢の精神ヲ鼓吹スル公共事業

3 智識交換

講演会、討論会ノ開催

4 体育発達

野球、蹴球、庭球、行走等ノ実行競技運動会ノ開催

第十二条 本則ヲ訂正ノ必要アル時ハ總會ニ於テ決議ス

第十三条 本契ノ便宜ニ依リ五名ノ組長ヲ置キ契務ヲ補助ス

第十四条 本則ハ発布ノ日より施行ス

### 平安南道順川郡護喪花契

本契は護喪花契と称し、喪祭事の補助並に会員相互の親睦を図るを目的として組織されてゐて、出資額は五十錢宛を各員入会の際に出資し、其を利殖して契費に充ててゐる。存続年限の定めは別段になく、永年に持続されるのである。現在加入者は四十五名にして、其の所有財産は二十二円五十錢である。

#### 護喪花契規約

第一条 本契ノ名称ハ護喪花契ト称ス

第二条 入契金ハ各自五十錢宛払込ムモノトス

- 第三条 契員父母喪事ノ時ニハ契員一同ハ徹夜スルモノトス
- 第四条 徹夜ノ時無故不参者ニハ違約金五十錢ヲ徴収スルモノトス
- 第五条 喪儀ハ花具色一機ヲ出給スルモノトス
- 第六条 父母緇礼時ニ於ケル贈儀ハ金三十錢トス
- 第七条 無故不参者ハ違約金十錢トス
- 第八条 護喪時ニ於テ無故不出員ハ違約金五十錢トス
- 第九条 契金ノ利率ハ参割ト定ム
- 第十条 契金借用者ハ契員中又ハ他ノ有資産者ヲ保証人トナスヘシ
- 第十一条 故意ニ不参セル者ハ元金ヲ返戻スルエトナク契ヨリ脱退セシム
- 第十二条 子弟班時ニ於テハ金二十錢トス
- 第十三条 契典掌日ハ毎年十二月二十日ニ定ム
- 第十四条 契長ニハ北魚一級トス
- 第十五条 副契長ニハ北魚半級トス
- 第十六条 花飾員契金未収ノトキハ贈儀金ヲ給セス
- 第十七条 花具不願員ニ對シテハ代金二円宛出給ス
- 第十八条 本契ノ存立期間ハ永年トス

### 慶尚南道梁山郡東面喪布契

- 一、契の位置 梁山郡東面法基里
- 一、契の名称 喪布契と称す

本契は明治二十六年頃契員二十名が集団設立したるものにして、最初基本金とし

て五十錢宛を醸出し、其の目的は契員たる其の者の夫婦及父母死亡後に於ける救助するを（右死亡当日より葬式を終るまで毎日喪家に赴き手伝は勿論毎夜一人毎に提燈を持参し徹夜番を為す爾後一年、二年祭日にも前同断）目的とし、爾来十年間継続し来りしが明治三十六年頃生憎凶年に当り契員中九名は離散に際し、基金を配当し残員十一名は現今に至るまで之を継続し来れるが、基本金は僅に五十四円に過ぎない。

#### 1、事業の概況

上記の如く死亡救助を目的とし自己夫婦及父母に限り事故発生度毎に朝鮮麻布一疋、白紙一束、濁酒一盆、一年、二年祭日は濁酒一盆、洋燭一封宛を原則とし其の他契員中小農家の資金即ち肥料代金等に貸借するのみである。

#### 2、契の規約

規約は別に設けたるものなく大体前記事項を申合せ決定するやうである。

#### 一、契の取締方法

前記目的の事故が発生したるときは本人より直に契長に通知を為し、契に於ける一切の事務は契長に於て処理するのである。

### 平安南道順川郡新倉老人契

本契は新倉老人契と称し、喪祭事の補助並に会員相互の親睦を図るを目的として組織されてゐる。出資額は入契当時各人五円宛を出資し、其を積立て其利子を以て費用に当ててゐる、存続年限の定めは別段ない。現在加入者数は三十五人に達して契有財産は一百七十五円の多きに及んでゐる。

#### 新倉老人契規約

- 第一条 轉讓ハ四喪ニ定ムル事
- 第二条 永感下人ハ当故大祥時ニ於テ三円宛出給スル事
- 第三条 子弟入例ハ一円ヲ以テ定ムル事
- 第四条 謹喪時ニ於テ無故不参ノ人ハ罰金五十錢ヲ懲棒スル事
- 第五条 契会日字ハ三月三日ト九月九日ト定ムル事
- 第六条 契錢殖利ハ月二割五歩ト定メ債務者ニ於テ有実ナル保証人ヲ連帶シ償給スル事
- 第七条 契錢債用事ニ於テ契員共同開会シ散債スル事
- 第八条 三年内ニ轉讓生シタル時ハ契員各自二十錢宛懲棒スル事
- 第九条 大小祥遷墓ノ時焼酒一鉢宛致慰スル事
- 第十条 契長北魚一級、副契長北魚半級ヲ以テ歳儀スル事
- 第十一条 本契ノ基本金ハ契員一人ニ付五円宛払出スルモノトス
- 第十二条 存立期間ハ永年ト定ム

## 咸鏡北道の洞契

咸鏡北道は朝鮮の最北に位し運輸交通極めて不便なりし為、住民は徒らに旧弊を墨守し民業甚だ振興せず、一朝不時の災害に遭はんか忽にして負債を生じ、容易に之が償却をなす能はざるのみならず、甚しきに至りては草根木皮を嚼みて露命を繋ぐものあるの狀態なりしを以て、之を救済し、洞内協同一致して勤儉淳朴の美風を作興し、産業改善進歩を図り、相互扶掖して全洞の福利を増進せしむべく、古來朝鮮に行はれたる呂氏郷約を経とし内地に於て行はるる産業組合及報徳社を緯としたる洞契規則を制定し、明治四十四年道令を以て各洞に之が設立を命じ、一面府郡をして其の主旨徹

底と事業經營の方法を指導誘掖せしめたる結果、今や道内全洞里に亘り之が設立を見ざる所なきに至つた。今契の組織及び事業の概要を記すれば左の通りである。

### 一、契ノ組織

- 一、洞里内ノ戸主及十八歳以上ノ男子ハ当然契員タラシム
- 二、役員トシテ契長、副契長、理事、監事及書記ヲ置ク
- 三、評議員十名以内ヲ置キ毎年三月、六月、九月、十二月ノ四回ニ定期評議員会ヲ開会シ契務執行方法契長ノ諮問事項總會附議事項契員貯蓄事項等ヲ決議ス
- 四、毎年一回定期總會ヲ開キ重要ナル事業ノ施行方法契費決算契員ノ遵守事項協定契財産処分等ヲ議決ス

### 二、出資金貯金及喜捨金

- 一、戸主タル契員ハ契設立ノ際出資スルモノトス、出資一口ノ金額ハ五十錢ニシテ一人ニ付十口迄ヲ所持スルコトヲ得、出資金ハ契基金ニ編入ス
- 二、戸主タル契員ハ貧富ニ応シ左ノ區別ニ依リ指定セラレタル等級相当ノ金額ヲ毎月貯金スルノ外、粟、稗及大豆ノ收穫期ニ於テ各三升ヲ貯穀ス
- 一等二十五錢      二等十五錢      三等五錢
- 三、戸主ニ非サル契員ハ任意ノ金額ヲ隨時貯金ス
- 四、家屋ヲ新築シ又ハ土地ヲ購入シタルトキハ契ニ一定ノ喜捨金ヲ納入ス、喜捨金ハ契基金ニ編入ス
- 三、契ノ主ナル実行事項

- 一、契員ハ總會ノ協定事項ヲ遵守シ農事改良ニ注意シ副業ニ精勵スルコト
- 二、産業ニ關スル種子原料器具等ノ購入及産物ノ販売ニ就テハ契長ノ指揮ニ從ヒ共同執行スルコト
- 三、契ノ基金及貯金ハ契員ノ産業資金ニ融通スルコト
- 貸付期間ハ一箇年トシ其利子ハ八分以内トス、契員貸付金額ハ評議員会ニ於テ評定セル信用程度表ニ依ル
- 四、畜牛種付ハ道指定ノ種牡牛ヲ以テシ濫交尾ヲナサス又牛馬冬季間ノ飼料トシテ夏季乾草ヲ貯藏スルコト

352



目的とするもの 慈善を 揚善契	目的とするもの 納税契	目的とするもの 幼稚園 教育を目的とするもの 書堂契	目的とするもの 貯蓄契	目的とするもの 月収契	興業契	農業を目的とするもの 改良契	畜牛契	為親契	目的とするもの 商務契	商業者等に於て相互扶助を為しつたり
揚善慈善を目的とするもの	納税を目的とし毎月十錢宛貯蓄するものなり	幼年教育を目的とし契員子弟中秀才を選抜し教育を受けるにむるものなるも何れも未だ貧弱なり	主として金銭貸借を為しつたり	金銭貸借を為しつたり	契員集合場を定め經臥蚕具等を製造し資金の融通を為しつたり	種子改良及一般農事改良を實行しつたり	犢牛買入、畜牛改良を實行しつたり	喪祭等に相互扶助を實行しつたり	商業者等に於て相互扶助を為しつたり	あり

[illegible]

納税を目的とし毎月五十銭宛積立契長會計之を管掌す

契長は契を經理し出資  
は粃五升又は現金を酬  
出し部落民は全部契員  
とす

大正十二年十一月十日  
 一人前の出資額三圓十  
 錢宛を出合せ契員相互  
 間の哀慶の場合に金品  
 の贈与を為すを目的と  
 す存続年限五年なり

み十に死主にし平対斗員契  
年限亡と若契等す或一を  
役る又は千員には人組  
員存はての相釐代現前職  
は続養父金互出金金の  
有年磨母品衰しに<sup>二</sup>出<sup>一</sup>  
司限等に慶年換親資当  
あるの対贈の場々算一類初  
普とのする合利<sup>二</sup>斗<sup>一</sup>  
の通さるも植をに一契

毎月一円宛各自出資し  
畜牛の増殖を図るを目  
的とす役員は契長一人  
ありて契務を掌り存続  
期間二十一箇月とす

357356



農業を目的とするもの	殖産契	農業を目的とするもの	購牛契
毎月一人三円を出資抽籤に依り当籤者に牛を購入給与す	毎年六月三十日及十二月二十日に利息を計算し契員に適宜貸付す	毎月一人三円を出資抽籤に依り当籤者に牛を購入給与す	毎月一人三円を出資抽籤に依り当籤者に牛を購入給与す
—	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
六〇	五八〇	六〇	五八〇
二〇	二〇	二〇	二〇
固有の資金なく毎月純期銀六十圓にして存続の目的なり	農業資金融通の目的を以て設立契期間は一人事一人、存続期間は永久	固有の資金なく毎月純期銀六十圓にして存続の目的なり	農業資金融通の目的を以て設立契期間は一人事一人、存続期間は永久

[illegible]



## 忠

	扶助を目的とするもの	喪布契	婚契	喪契	勸業契	造林契	納税を目的とするもの	殖利契	貯蓄契	殖産契
	契員中婚姻あれば扶助し他は同上	契員中喪事あれば扶助し其の他は同上	現金を有利貸付し之を以て植桑費に充つ	現金を有利貸付し之を以て造林費に充つ	年一回總會を開き貸付金の出納をなす	同上	同上	同上	同上	同上
	二	一	三	一	八	二三 三八 一八	一	二	一	一
	一〇〇〇	四〇	三五〇	五〇	一七〇	二、五三〇	一	六〇	三七六	一三九
	三〇	四〇	七三	三五	八三三	六六〇	一	六一	三〇	四〇
	契員出資は各十門、役員は契長、幹事、書記、巡番の間は契員各事一回の扶助を終る迄	契員出資は各一円、役員は契長永久存続	契員出資は各一円、白米一斗(売却)役員は契長、幹事永久存続	契員出資は各三十錢、役員は契長、幹事、書記、巡期限は十年	契員出資は各麦五升、役員は契長、會計にして毎年巡番とす永久存続	契員出資は各米一升、現金幾何(契にありて相違)戸内納付の上残額を洞里有益なる物品を購入す役員は契長、永久存続	契員出資は各一門、役員は理事永久存続	契員の出資は毎月一円、役員は契長、幹事、書記、二年存続	契員出資は各一円五十錢、役員は契長、評議員、書記永久存続	

州 郡

365364

慶尚北道

府郡島名

目的

契数

契の財産

契加入者数

契の種類及性質

契の種別

契の種別

契の種別

契の種別

契の種別

大邱

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

達城

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

軍威

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

軍威

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

安東

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

義城

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

安東

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

義城

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

扶助

慶州				迎日				盈徳			
計	貯蓄	産業	扶助	計	教育	金融	産業	計	貯蓄	金融	産業
九	四	二	三	二二八	一	二一	一五	五五	二〇	八	三
六二二七	四七二六	七〇〇	八一	四三、五〇三	四九	八五五六	二五、六九三	一三、七九六	四三、七二	七二一七	二一、三五
五七三	二五七	二四二	七四	七一九六	一一	一三五四	三八六〇	一、五一一	九九五	四二〇	八一
	貯	植林又は農事改良契長一人	喪事相助乃幹事二人	奨	学同	殖	農事改良副業奨励畜同	凶事相助有契司長一人	貯	商業資金融通	農事改良
	乃幹事九人	契長一人	乃幹事二人	同	同	有契司長一人	同	有契司長一人	乃同至五人	乃同至八人	乃同至五人
	毎月三六円間又は	一円	二円又は	同	同	最高一低人	同	最高一低人	毎月一斗又は	五十円乃	十円
	同	同	毎年出資	同	同	一設置物に又は	同	一設置物に又は	毎月一斗又は	一斗又は	一斗又は
	同	同	永	同	同	五年乃至	同	五年乃至	五年乃至	五年乃至	五年乃至
	同	同	久	同	同	同	同	同	同	同	同
	同	同	なし			なし					

英陽				青松			
計	教育	金融	産業	計	教育	金融	産業
五五	一	三〇	五	五五	二	一八	一
七二九二	四〇〇	四八五三	七八九	五九五八	四〇一	二、一五二	二、三九
二五〇六	六九	一、二三七	八一〇	三八一三	一七一	一、五二〇	一、九二六
	奨	低利資金融通	造林資金又は畜牛購入資金	納	奨	畜牛、水害予防	吉凶の際金品を贈与
	学幹事三人	乃同至五人	乃同至七人	同	同	乃同至三人	乃幹事三人
	二	二十円乃	二十円乃	同	同	三十円以上	一人当十
	同	一設置物に又は	一設置物に又は	同	同	毎月出資	毎月出資
	なし	なし	なし	同	同	同	定めなし
	同	同	同	同	同	同	なし



漆谷				星州				高靈				清道			
計	金融	扶助	計	計	金融	扶助	計	計	金融	扶助	計	計	金融	扶助	計
一三	五	八	二〇	一	三	一	六	二	一	三	五八	一	一八	一	一
三九三四	三九一一	外に二 三	七六一八	一〇八八	一八六四	一五〇〇	一一一一	二四八	五〇〇	三六三	一八〇一八	二六四五	七二三三	一六	三五
四一三	一三〇	契員中死者ある時相 契務員、総公	八三〇	二七〇	一四四	八〇	七六一	二四八	六九	四四四	二六四五	九五四	九五四	同	同
	資金融通			相互親睦の為 有司四人	低利資金融通 同	祖先祭祀の為 幹事三人	至六十人	學同四人	棉作奨励 同十一人	吉凶の際相助 幹事六人	至六十人	同	學同	同	同
	六円	至五十錢乃 至四十錢乃		親族間に りて財産依	至三十錢乃 至五十錢乃	至二十錢乃 至五十錢乃	至二十錢乃 至五十錢乃	一円	至五十錢乃 至一十錢乃	至六十錢乃 至一十錢乃	至六十錢乃 至一十錢乃	同	同	同	同
	月年二十 永十年或 久は同	出入会の際 永永久な し		組織の程 度に	毎月又は 三回は永 久同	三年間出 資の永 久なもの なし	出入会の際 永永久同	出入会の際 永永久同	財産の依 り度永 久同	出入会の際 永永久同	出入会の際 永永久同	同	同	同	同

慶山				永川			
計	金融	扶助	計	計	金融	扶助	計
六三	一四	一三	七六	一	八	四七	四七
二八二〇	八五二	二五〇	一八三五五	一六四〇	七二五六	六二〇九	八八九
四一〇五	七一九	七三六	二〇六八	八一	九七二	八八九	八八九
一六五六	低利資金融通 幹事二人	吉凶の際相助 有司二人	水利又は農事改良 乃幹事七人	低利資金融通 至同三人乃	水利種牛農事改良 至同五人乃	養老、喪事、婚姻相 乃幹事十三人	養老、喪事、婚姻相 乃幹事十三人
一円	年五 各五	至二十錢乃 至五十錢乃	至二十錢乃 至五十錢乃	二十錢乃 至五十錢乃	至二十錢乃 至五十錢乃	五十錢乃 至五十錢乃	五十錢乃 至五十錢乃
資一時に出時 永永久なし	年五 各五	至二十錢乃 至五十錢乃	至二十錢乃 至五十錢乃	至二十錢乃 至五十錢乃	至二十錢乃 至五十錢乃	至二十錢乃 至五十錢乃	至二十錢乃 至五十錢乃

開		泉		州		陵	
業	業	業	業	業	業	業	業
三	三	二	二	一	三	九	五
六八八	六八八	三〇四二四	三〇四二四	九八二八	七九一四	五九〇	九一六
二一七	二一七	三三七	三三七	八二〇	七四七	四七三	三一五
農具苗木代金として 無利子貸付	農具苗木代金として 無利子貸付	造林棉作奨励資金	造林棉作奨励資金	低利資金融通	吉凶災害相助	貯蓄	貯蓄
同	同	幹事二人 乃至六人	幹事二人 乃至六人	同	契長一、 司三、	同	同
同	同	五十錢乃 至二十円	五十錢乃 至二十円	同	最少五十錢 最多五円	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同
永	永	同	同	同	同	同	同
久	久	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同

[illegible]



金氏宗契〔平山郡馬山面石手里〕	同相互親睦	九〇	三〇〇	設立当時十銭宛出資せり	宣祖二十四年十一月十五日の創立を以て永く、遠近の宗族先祭を行ふ。家長は門中の高祖者を推戴す。
追遠契〔松禾郡上里面道隠里〕	祖先享祀	二五〇	現金十五斗五〇落	創設當時各宗派中所有として三十銭宛徴収する	約三百年前の設立、永久存続、否は他人の小作せしめ、金十二石割にて貸出す。却して代金は三年長者を以て定む。子孫は永遠に契長たる事。
林子宗契〔股票郡一道面棲里〕	同	五五	田 奮 十斗落	田 奮 は小作せしめて年々祭祀を行ふ。	二百五十十年前の設立、永久存続、否は小作せしめ、以て年々祭祀を行ふ。
李氏大宗契〔同 同九陽里〕	同	八〇	三〇	同	四百年前の設立、永久存続、約四百年前の設立、永久存続、否は契員に小作せしめ、祖先の祭祀を行ふ。
金氏宗契〔同 同宝林里〕	同	四〇	林 奮 三斗五〇町落	同	同
光山金氏大門契〔順川郡殷山面安州郡立石面〕	同	四〇〇	不動産一〇〇〇 基本金二〇〇〇	各門人の貧富に応じ金品を夫れぞれ出資す	存続解散年限なし
幼学契〔金川郡好賢面古陵里〕	教育費補助	二〇	一三〇円	各人毎年三十銭宛出資す	大正四年十月十日設立、存続年限は三十年間、契員の子弟が家庭に入學せしめ、如何に總會に出資を怠るときは退契せしむ。
興学契〔同郡宿仁面杏亭里〕	同	三〇	田 五日耕	出資方法	明治元年一月の創設にして存続年限は無限、基本財産たる田より生ずる生産物を処分し之を以て契員子弟の教育費用を補助す。
書齋契〔新溪郡赤余面大井里〕	子弟教育	五	田 半日耕	一〇〇円	純祖二十四年十一月十五日設置規約文証無効なく由來の田地より毎年收穫をなく教育費用を補助し其残金積りて百円となれり。
養正齋契〔龍津郡育淵面龜山里〕	児童教育	一五	田 六五四〇坪	各人二十銭宛契創設当初に讓出	約三百年の創設に保り、存続年限永久不脱契に保り、存続年限あり契員に子供を收容し教授為らば脱契せしむ。
敬斎契〔同 同漢鳳里〕	同	四〇	田 一八八〇坪	故殿先生の弘徳を寄附に依る田舎を基本財産とす	康寧三十四年十二月の創設、存続年限永久不脱契に保り、存続年限あり契員に子供を收容し教授為らば脱契せしむ。
疑学契〔東萊郡西面嶺壘里〕	教育費の一部補助	一	一	一	光武元年本里に疑学契二ありしも大正八年併合して現今のものとなれり。
儒林契〔寧遠郡〕	教育の普及儒学の隆盛等を図る	一四三	四六一〇	入契者より出資金十元以上を納付せしむ	基金利子を以て文廟享祀費及契員子弟の中優秀なる者に普通学校以上の修学費を補助す。存続年限は永久。
冠礼契〔金川郡金川面岩寺里〕	冠婚費用の補助	二〇	四八円	出資せり	憲宗十一年の創設、存続年限は無期限、月三分に貸出し、年一回の總會時には契事業の報告をなす。



永興契	〔新溪郡麻西面 銀店里〕	喪費の補助	二六	一六〇〇	創設時に各人五円三 十銭を抽出し、爾後二 十年間は毎年一円宛 を出資せり	大正八年十一月設置、 存続年限は永久、 出資金は利殖し、 契員中の若しは必ず出席せし む
喪布契	〔公津郡興眉面 掛岩里〕	父母喪事に扶助す	一五	二〇〇	一人当り五十銭を創 立時に抽出せり	憲宗十一年四月十日創立、 存続年限は永久、 出資金は利殖し、 契員中の若しは必ず出席せし む
永睦契	〔谷山郡寛美面 新坪里〕	喪費補助	三五	五九五	第一回五円、二回六 円、三回六円の三回 抽出	大正十一年十一月二十五日創立 契員全部葬式の補助を受けた ときを以て解散す
嶺南契	〔密陽郡密陽面 城内里〕	父母葬補護	三五	一〇〇	一	大正六年十一月一日成立
喪布契	〔梁山郡東面法 基里〕	契員の夫婦及父母 喪事の扶助	一一	五四	当初五十銭宛抽出 り	明治二十六年の創立當時は契員 二十名たりしも明治三十六年の 凶作にて内九名外へ離散せるも 尚継続今日に及べり
婚姻契	〔江西郡東津面 助す〕	子弟結婚のとき扶 助す	七〇〇	一〇〇〇	各人二円宛抽出	契員子弟悉く結婚を了するを以 て解散時期と定む
喪布契	〔安州郡立石面 聖法里〕	契員遭喪のとき一 定金額を支給	四八七	二二二九	契組織のとき株金を 各自抽出す	存続年限無限
婚喪契	〔蔚山郡青良面 徳下里〕	婚姻又は喪事のあ るとき契金を以て 扶助す	一	一	隨時必要に応じ出資 す	二十年前より設けられ存続年限 無限なり尚儀式の場合には契員 出席し無故不参者よりは一各 五十銭の罰金を科す
敬義契	〔海州郡海州面 南旭町〕	相互扶助及契員間 の親睦	三七	田三三八一二坪	一人当り百円とし十 箇年賦を以て出資す	安政元年の創設に係り、存立期限 は無期にして、年一回總會を開き 契務の現況を報告す

漁業契	〔海州郡青竜面 迎陽里〕	漁業発展	六〇〇	五〇〇〇円	一口に付二円とし、 三五口宛出資せるもの 時払込とす	大正十四年一月十二日創設され 存続年限は十年なり本契の事 業として漁業資金の融通物品 共同販賣及共同購入を行ひつ つあり
禁松契	〔平山郡金岩面 汗浦里〕	養松	一四〇	三〇	設立當時十五銭宛払 込む	大正四年十月創設永久に存立す るものにして規則に違反して立 木を濫伐せしものあらば一株に 二十銭の罰金を徴す
農務契	〔晋州郡晋州面 内城洞〕	農具改良打穀場修 理、田植除草の共 同作業	七〇	二〇〇	一	大正十一年三月創立、契の規約 として別段なく各自申合せ事 項の履行に力め、又は購契せしめ 居れり
鉄店契	〔陽徳郡 陽徳郡〕	鉄物工場にて共同 作業	二〇〇	一六	作業資金中より月五 十銭宛抽出	存続年限永久
名 称	所在地	目的	加入者数	基本財産	出資方法	備 考
長興契	〔殷栗郡一道面 九陽里〕	金銭の融通	六〇	一〇〇〇円	契設立時に一人宛十 五円、其の後毎月五 十銭抽出	大正十二年六月創設、存立年限 十年、大正十三年九月創設、存立年限 十年、農業資金の融通を行ふ
農資契	〔信川郡文化面 西亭里〕	農資融通	三〇	五〇〇〇	一口に五円宛払込	

殖産契	同郡信川面 校塔里	金銭の融通	一一	六〇〇〇	大正十一年十二月二十五日成立 在純年限五箇年
殖利契	蔚山郡蔚山面	契員間の金銭融通	八〇	一	大正十一年創設、毎月一回開契 し抽籤にて貸付け希望者に最高利 当を行ふ
殖産契	价川郡中西面	産業資金の融通	四六	一、八〇〇	存続年限十箇年にして解散は総 会に於て決定す
貯蓄契	〔股票部股票面 南川里〕	消費節約金銭貯蓄	二一	三、一五〇 円	大正十三年九月成立、存立年限 十箇年基金は二割乃至三割にて 利殖し貸付期限は一箇年間に て
普信契	〔黄州郡黄州面 城南里〕	勤儉貯蓄	五〇	一〇、〇〇〇	大正六年七月三十日成立、満十 四年に存立、契員は耶蘇教、信者 業の繁栄を図る
普信契	蔚山郡温山面	勤儉貯蓄を行ひ荒 年には契資金にて 救済す	九二九	二、〇〇〇	大正二年十月創設
貯穀契	同郡西生面	穀物の貯蓄をなし 凶年には救助す	一	一	大正五年創設、契員に対し希望 あらば長利にて穀を貸付く 大正十三年五月の創設に係はり 契金は契員中の貧弱なる者に農 資として低利貸与す
汎田貯金契	同郡斗東面	勤儉貯蓄	七四	一	

## 第五章 契の取締

### 第一節 契の監督取締

善良なる目的の契に就いては、当局は相当保護奨励して居るが、契の監督取締に關しては、各道の方針は必ずしも一定して居らぬ。今試みに忠北、忠南、全北、全南、慶北、平北、咸南諸道に於て行ひつつある、契の監督取締状況に対する回答を見ると左の通りである。

#### 忠清北道

契の取締方法に就ては大正九年五月忠北地第七〇八号を以て、契の如き団体に対し新規事業の奨励を為し、又は比較的軽重大事業若は異例に属する事業を処理せしむる場合は予め道との協定を遂げ、該事業に着手せしめ、且常に其の状況を報告すべき旨道の通牒あるに依り、郡当局は此点に付留意する等の取締を為す。

#### 忠清南道

契の取締に關する規定の制定したるものなきも、之が取締に關しては相当考慮しつつあり、尚契の役員は概ね面長等なるを以て間接に指導監督しつつあり。

#### 全羅北道

契員相互の徳義心に基きて相互取締をなし、規約違反者又は契務妨害者等の所為ある時は、絶交、除名、又は脱退等の制裁を加へ、官憲の取締の必要を生じたることな

し。

全 羅 南 道

警察官憲に於て一般的に取締を為す外各契の役員又は長老之を為す。

慶 尚 北 道

郡守、面長、区長等に於て監督し、定期又は臨時に關係帳簿等に依り契の業務及財産状況を検査するものあり、又産業に関するものは郡農会に於て監督指導するものあり。而して一般には毎年十二月末現在に依り府郡島に於て契の名称、契員数、貯蓄額等を調査し報告せしむ。

平 安 北 道

契員の自治に委するものにして取締方法なし。

咸 鏡 南 道

特に取締方法なきも、産業を目的とせる契に付ては相当指導奨励をなし、其の内容に就ては郡守又は面長をして相当取締をなさしむ。

## 第二節 講会契会取締規則

契の社会上竝に經濟上に及ばず影響に鑑み、その監督取締に関する一定した法規の制定を必要とするか否かに就いては、各道当局の大に考慮を要する問題であるが、契の最も普及して居る京畿、江原二道に於ては、既に左の如き講会契会取締規則を設けてその監督取締を行つて居る。

## 講会契会取締方法

京 畿 道

本道に於ては大正十二年五月道令第十一号を以て講会契会取締規則を發布し、その監督取締を為し、尚ほ弊害ある契会の整理に就いても周到なる注意を払つて居る。

### ○ 講会契会取締規則 大正一二年、一五

第一条 無尽講其ノ他類似ノ講会又ハ契会ヲ組織セムトスル者ハ左ノ各号ノ事項ヲ具シ所轄警察署長ニ願出テ認可ヲ受クヘシ其ノ第一号第二号第四号乃至第十号ノ事項又ハ第三号ノ規約ヲ變更セムトスルトキ亦同シ

一、講主又ハ契長其他役員ノ本籍、住所、職業、氏名、年齢  
二、講会又ハ契会ノ名称及目的  
三、講会又ハ契会ノ規約、会員ノ住所氏名及加入口数ヲ記載シタル名簿

四、講会又ハ契会ノ存続期間給付金額及毎回ノ掛金額

五、講金又ハ契金ノ掛込、貸渡、払戻ノ方法

六、役員ノ報酬又ハ手数料其他雜費金額並其ノ支出方法

七、講会又ハ契会開催場所及定日

八、講金又ハ契金借受人ノ債務履行ニ要スル担保又ハ保証方法

九、講金又ハ契金保管ノ方法

一〇、欠口及解散ノ場合ニ於ケル処理方法

講会又ハ契会ノ会員ニ異動ヲ生シタルトキハ講主又ハ契長ハ四日以内ニ所轄警察署長ニ届出ツヘシ

第二条 左ノ各号ノ一ニ該当スル講会又ハ契会ニ対シテハ本則ヲ適用セス

- 一、朝鮮無雇業令ノ適用ヲ受クルモノ
- 二、耕牛契ニシテ府尹又ハ郡守ノ認可ヲ受ケ組織セルモノ
- 三、一公務所ノ公務員間、一会社ノ社員又ハ事務員間（職工其他ノ勞務者ヲ除ク）一商店ノ店員間ニ於テ組織スル講会又ハ契会ニシテ其ノ存続期間一年給付金額百貳拾円ヲ超ヘサルモノ
- 第三条 議会又ハ契会ノ存続期間ハ五年以内トシ其ノ給付金額ハ千円口數ハ百ヲ超ユルコトヲ得ス  
給付金額三百円以内ニシテ講金又ハ契金ノ給付ニ付抽籤入札其他類似ノ方法ヲ用ヒサルモノ及特ニ所轄警察署長ノ認可ヲ受ケタルモノハ前項ノ規定ニ依ラサルコトヲ得
- 第四条 講主又ハ契長ハ會員名簿及講会又ハ契会ニ關スル収支明細簿ヲ開会ノ場所ニ備置クヘシ  
収支明細簿ハ開会ノ都度其ノ収支計算ヲ記載シ會員ノ請求アルトキハ之ヲ閲覧セシムヘシ
- 第五条 講会又ハ契会終了シタルトキハ講主又ハ契長ハ十日以内ニ収支計算書ヲ添ヘ所轄警察署長ニ届出ツヘシ
- 第六条 第三条ノ帳簿ハ講会又ハ契会終了後一年間講主又ハ契長ニ於テ之ヲ保管スヘシ
- 第七条 所轄警察署長ハ公安若ハ風俗ヲ紊ル虞アリ又ハ會員ノ利益ヲ保護スル為メ必要アリト認メタルトキハ講会又ハ契会規約ノ変更ヲ命シ若ハ第一条ノ認可ヲ取消スコトヲ得
- 第八条 所轄警察署長ハ講会ノ帳簿ヲ検査シ若ハ必要ト認ムル事項ノ届出ヲ命スルコトヲ得
- 第九条 第一条、第四条乃至第十六条又ハ第七条若ハ第八条ノ命令ニ違反シタル者ハ百円以下ノ罰金、拘留又ハ科料ニ処ス

附 則

本則ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本則施行ノ際現ニ存続スル講会又ハ契会ノ講主又ハ契長本則施行ノ日ヨリ六十日以内ニ本則第一条各号ノ事項ヲ具シ所轄警察署長ニ届出テ認可ヲ受クヘシ

○ 講会契会取締規則施行心得 大正二、五  
道内訓 五

第一条 講会契会取締規則（以下単ニ規則ト称ス）第一条ノ願書ヲ受理シタルトキハ其ノ記載事項ニ付調査ヲ遂ケ左記各号ニ該当セサルモノニ限り認可スヘシ

- 一、講主契長其ノ他役員ニシテ管理ノ責ニ任スルノ資力及信用ナシト認ムルモノ
- 二、營利ヲ目的トスルモノ
- 三、規則第三条ノ規定ニ適合セサルモノ
- 四、開会ノ場所屋外ナルモノ
- 五、會員ノ特定セサルモノ
- 六、講金又ハ契金ノ保管方法確實ナラス若ハ講会又ハ契会規約不当ト認ムルモノ
- 七、講金又ハ契金ノ給付ニ付入札ノ方法ヲ用フルモノニシテ講金又ハ契金ノ七掛以下ノ入札ヲ禁止セサルモノ
- 八、花札其ノ他之ニ類スル射倖ノ方法ヲ提供スルモノニシテ其ノ總金額カ給付金額ノ百分ノ三ヲ超ユルモノ
- 九、其ノ他公安風俗ヲ紊リ又ハ不当ニ會員ノ利益ヲ害スル虞アリト認ムルモノ
- 第二条 左ノ各号ノ処分ヲ為サムトスルトキハ予メ警察署長ニ稟議シ指揮ヲ受クヘシ
- 一、規則第一条ノ願ヲ拒否セムトスルトキ
- 二、規則第三条第二項ニ依リ制限外ノ講会又ハ契会ヲ認可セムトスルトキ
- 三、規則第七条ニ依リ講会又ハ契会規約ノ変更ヲ命シ若ハ認可ヲ取消サムトスルトキ
- 第三条 所轄警察署ハ左記様式ニ依リ講会又ハ契会名簿ヲ調製シ取締ノ便ニ供スヘシ

（様式）

講会（又ハ契会）名簿（用紙美濃）



指令番号	認可年月日	請名(又ハ契名)	期 間	会 場	開 会 ノ 日 時	給 付 金	口 数	人 員	一口ノ掛金	落 金 方 法
請主(又ハ契長)	住所氏名	管理人又ハ保証人	住所氏名	備 考						

○ 講 会 契 会 取 締 規 則 並 同 施 行 心 得 発 布 ノ 件 大正一二、五  
京保秘一五八

本月十五日道令第十一号及道内訓第五号ヲ以テ首題規則並施行心得発布相成候処本規則ノ施行及之ニ依ル出願ニ対スル認否並在来講契会ノ整理ニ関シテハ慎重ノ考慮ヲ要スヘキ次第ニ有之候条特ニ左記各項ニ留意シ取扱上萬遺策ナキヲ期セラ  
ルヘシ

左 記

一、規則ノ周知

取締規則及之カ施行方針ノ周知徹底ヲ図リ違反者ナカラシムルコトニ最善ヲ尽スト共ニ規則施行ノ際既ニ存続セル講契ニ対シテハ附則ニ依ル届出ヲ俟タス進ンテ其ノ實際ヲ調査シ速カニ認可ヲ受クル手續ヲ履行セシムルコト

二、規則施行上ノ注意

新規則ノ精神ハ規則ノ正文及施行心得ニ依リ明カナル所ナルモ要スルニ公序良俗ニ反セサル善良ナルモノハ之ヲ助長シ弊害アルモノハ之レヲ禁遏スルニアリ殊ニ左記各項ハ新規則立法上ノ主眼ナルヲ以テ施行上特ニ留意セラルヘシ

1、營利ヲ目的トスルモノハ絶対ニ其ノ存在ヲ許容セサルコト

無尽業令ハ營利ノ目的ヲ以テ組織セル講契及營利ノ目的ニ依リ管理スル講契ニ関シ加入者ノ利益ヲ保護スルト同時ニ之等ノ講契ニヨリ生スヘキ公安風俗上ニ及ホス弊害ヲ除去防遏スル為メニ制定セラレタルコトハ説明ヲ要セサル所ナルカ朝鮮在来ノ契ノ中ニハ無尽業令ノ適用ヲ受ケシムルヲ適當ト認メラルモノアリ又契金ノ給付ニ付抽籤入札其ノ他類似ノ方法ヲ用ヒサルカ為メ無尽業令ノ適用ヲ免レ居レルモノアリ最近京城ニ於テ統々組織セラレツアル哀廢契ノ如キハ即チ後者ニ属スルモノニシテ是等ノモノハ何レモ少数發起者ニ依リ營利ノ目的ヲ以テ組織セラレタルモノナリ規則第一条第一項第三号ニ於テ講契組織ノ要件ニ會員ノ特定セルコトヲ要求シ又規則第三条ノ制限規定ヲ設ケ更ニ施行心得第一条第二号及第五号ノ規定ヲ設ケラレタルモノハ要スルニ營利ヲ目的トスル講契ハ無尽業令ノ適用アルモノハ同令ニ依リ免許ヲ受ケシメ其ノ適用ナキモノハ全然之ヲ禁遏スル主旨ニ依リ規定セラレタルモノナリ

2、公序良俗ニ反セサル善良ナル講契ノ保護

朝鮮古来ノ契ノ内ニハ相互救済、貯蓄年末金融、葬婚其他不時ノ出来事ニ対スル資金ノ供給、勸業租税其ノ他公共的

資途ヲ目的トスルモノ等社会ノ輿情ニ照シテ有益ナルモノ尠カラス是等ノ契ハ當ニ其存続ヲ認ムルヲ得策トスルノミナ  
ラス寧ロ之カ助長発達ヲ図ルヲ適當トスルモノアリ故ニ營利ヲ加味セス直ニ公安的若ハ相互救済ノ精神ヲ以テ組織セラ  
レタル此ノ種ノ契ハ既ニ存在スルモノハ勿論規則施行後組織セラルモノニ對シテモ苟モ公安風俗ヲ害スルノ虞ナキ限り  
其ノ儘之ヲ容認シ契員ノ利益ヲ保護スル等特ニ必要アル場合ノ外濫ニ干渉セサルヲ要ス規則第二号及第三号ノ除  
外規定及規則第三号第二項ニ於テ講契金ノ給付ニ付射俸ノ方法ヲ用ヒサルモノニ對シ口数及存続期間ノ制限ヲ除外セル  
ハ左ノ主旨ニ依ル

### 3、講契ニ依ル弊害ノ除去防遏

講契ノ弊害ノ最ナルモノハ小數発起者ノ營利ノ手段ニ供セラルル營利講契ニアルモ同時ニ講契員ニ對シ射俸方法ヲ提供  
シ其ノ方法殆ト當錢ニ類スルモノアリ其ノ弊害少カラサルモノアルヲ以テ施行心得第一条第七号第八号及第九号ノ規定  
ヲ設ケラレタリ即チ新規則ニ依リ認可スル講契及契ハ講契員ノ相互利益ノ為メニ組織セラルルコトヲ必要トシ而モ射俸方  
法ヲ最少限ニ止メ以テ之レニ依リ生スル所ノ弊害ヲ防遏セムトスルニアリ

### 三、在來講契ノ処置

規則施行ノ際既ニ存続ノ講契ハ原則トシテ新規則ヲ適用シ認可スヘキハ認可シ認可スヘカラサルモノハ之レヲ拒否スル方  
針ナルモ多數加入者ノ利益ヲ全ク度外視スル能ハサルハ勿論ナリ規則第三号第二項ノ後段ニ特ニ警察署長ノ認可ヲ受ケタ  
ルモノニ對シ規則第三号第一項ノ制限ヲ除外セルハ一ハ例ヘハ親族間ニ於テ或ル家ノ負債償却等ノ為メニ組織スル講契等  
其ノ組織ノ原因カ規則ノ制限ニ依ルコト能ハサルモノヲ予想セルト同時ニ一ハ規則施行當時既ニ存続スル講契ニシテ加入  
者ノ利益ヲ保護スル為メ新規則ニ依ラシメ難キ事情アルモノニ對スル救済の意味ヲ有ス故ニ附則ニ依リ認可スル講契ニ對  
シテハ左記各項ニ依リ処理シ規則施行上遺策ナキヲ期セラルヘシ

#### 1、營利講契會

イ、營利ヲ目的トシ組織セルモノ即チ營業的講契ニ對シテハ其無尽業令ノ適用ヲ受クヘキモノハ速ニ無尽業令ニ依リ免  
許ヲ受ケシムルコトニシ其ノ手續ヲ為シタルモノニ對シテハ許可決定セラルル迄講契ノ存続ヲ默認スルコト  
ロ、其ノ無尽業令ノ適用ナキモノ即チ講契金ノ給付ニ付入札又ハ抽籤其他類似ノ方法ニ依ラサルモノハ速カニ解散ノ手

続ヲ取ラシムルコト但シ解散ニ付テハ加入者ノ利益ヲ基調トシ最モ公平ナル方法ニ依リ処理セシメ解散ニ依リ經營者  
ニ不當ノ利益ヲ得セシムル等不合理ノ結果ヲ來ササル様留意スルヲ要ス

ハ、前二項ニ該當スルモノニシテ加入者ノ利益ヲ保護スル為メ必要アル場合ニハ講契ノ組織ヲ改善セシメ普通ノ講契ト  
シテ其存続ヲ認可シ又規則第三号第二項後段ニ依リ特ニ認可ヲ与フル等篤ト輿情ヲ調査シ最モ適當ト認ムル方法ニ依  
リ処置スルコトヲ要ス

#### 2、規則第三号第一項ノ制限ニ適合セサルモノノ処置

口数金額存続期間等規則ノ制限ニ適合セサルモノハ左記各項ニ依リ処置スヘシ

イ、第三号第二項前段ニ該當スルモノハ其儘存続ヲ許容スルコト

ロ、同後段ニ依リ特ニ認可スルヲ適當ト認ムルモノハ相當手續ヲ為サシメ存続ヲ認可スルコト  
ハ、前二項ニ依リ処理スル能ハサルモノハ新規則及施行心得ノ規定ニ基キ方法ヲ改善セシメ認可ヲ受ケシムルコトヲ理  
想トシ例ヘハ口数ノ制限ニ適合セサルモノハ規則ノ制限以内ニ於テ二組以上ニ分割セシメ各独立セル講契會ト為サシ  
メ又金額ノ超過スルモノハ弊害ナキモノハ規則第二号第二項後段ニ依リ特別認可シ弊害アルモノハ新規則ニ依リ適宜  
制限内ニ改メシメ又年限ヲ定メサルモノ若クハ其ノ制限ニ適合セサルモノハ規則施行ノ日ヨリ五年ヲ最大限トシ組織  
ヲ改メシムル等適宜改善ノ方法ヲ講セシムルコト但シ加入者ノ利益保護ノ為メ必要アリト認ムル場合ニハ規則第三号  
第二項後段ニ依リ処置スヘキハ勿論ナリ

#### 3、存続期限ニ對スル規則ノ適用

在來講契ノ存続期限ニ對スル規則ノ適用ニ付テハ凡テ規則施行ノ日ヨリ起算スルコト例ヘハ發會ノ日ヨリ起算スルトキ  
ハ五年以上ニ渉ルモノト雖モ規則施行ノ日ヨリ五年以内ニ滿會ニ達スルモノハ其ノ儘之ヲ認メ差支ナシ

#### 4、注 意

施行心得第二条ノ規定ハ在來講契ノ処置ニ付テモ適用アルコト勿論ナリ從テ在來講契ニシテ其儘存続ヲ認ムルモノハ署  
限り処理シ差支ナキモ否ラサルモノハ總テ予メ稟議シ指揮ヲ受クルヲ要ス

四、以上ノ外規則施行上疑義アル事項ハ細大ヲ論セス本官ノ指揮ヲ受ケ処理セラルヘシ 以上

○ 講 契 取 締 ニ 関 ス ル 件 大正一二、六  
京保秘二六八  
講契會取締規則ノ適用ニ関シ別紙甲号写ノ通り広州警察署長ノ伺出ニ対シ乙号写ノ通り指示致シ置キ條条之レカ処理上  
参考ニ資セラルヘシ

別紙甲号写

(甲号)

首題取締ニ関シテハ詳細御通達ニ基キ整理中ニ有之候モ左記事項ニ付御指揮相仰度此段及稟申候也

記

管内ニ於ケル契ハ左ニ列挙セル如ク主トシテ朝鮮古來ノ慣習ニ依レルモノニシテ契其モノノ性質ヨリモ寧ロ里面ノ定ノ如ク見ヘル性質ノモノ不尠而シテ相互救済貯蓄金融葬婚其他不時ノ出来事ニ対スル資金ノ供給ヲ目的トスルモノナルヲ以テ社会ノ実情ニ照シ最モ有益ナルモノト思料セラルル故ニ是等ハ啻ニ其ノ存続ヲ認ムルヲ得策トスルノミナラス寧ロ之レカ助長發達ヲ図ルヲ適當トスト雖其ノ儘之レヲ容認シ契員ノ利益ヲ保護スル為メ新規則ノ適用ヲ受ケサラムモ差支ナキモノト認メラルルモ規則第三條第二項後段ニ依ルヘキモノナルヤ又ハ其ノ儘容認シ差支ナキモノナルヤ或ハ第三條第一項ニ依リ処置スヘキモノナルヤ

記

一、喪契(又ハ里中々宗中契)

本契ハ契員中死亡者アリタル時ハ契員各金貳拾錢乃至壹圓及白米一升乃至二升又ハ喪布類等ヲ贈ルモノニシテ期限ニ制限ナキモノ

一、助婚契

助婚契ハ契員中婚姻ノ際補助スルヲ目的トスルモノニシテ毎年一回乃至二回契員ハ貳拾錢乃至五拾錢宛ヲ贈金シ之レヲ積立置キテ利殖シ契員中ニ婚姻アル場合ニ拾圓乃至三拾圓ヲ支給シ婚姻費ヲ助クルモノニシテ期限ニ制限ナキモノ

一、納税契

本契ハ契員中毎年收穫時ハ稻粃一斗乃至五升宛ヲ積立置キ利子ヲ以テ税金納入期ニ際シ税金ノ一部ヲ補助スルモノ

ノニシテ期限ニ制限ナキモノ

一、興學契

本契ハ教育助長ノ目的ヲ以テ契員ハ收穫期ニ於テ稻粃二斗乃至五斗ヲ支出シ積立テ其ノ利子ヲ以テ書堂維持費ニ充ツルモノニシテ期限ニ制限ナキモノ

(乙号)

六月十三日付広警秘第二七九六号稟申首題ノ件左記ニ依リ処置セラルヘシ

記

一、喪契助婚ノ如ク死亡結婚等ノ事案發生ヲ条件トシ契金ヲ給付スルモノハ例外ナク規則ヲ適用シ規則第三條第二項前段ニ該當スル契トシテ取扱フコト

二、納税契興學契其他名義ノ如何ニ拘ラス會員各自一定ノ出資ヲナシ之レヲ利殖シ一定ノ時期ニ於テ其ノ出資額ニ応シ平等ニ払戻ヲ為シ其ノ間抽籤入札其他類似方法ヲ用ヒス全然射倖的ノ意味ヲ含マサルモノハ純然タル貯蓄組合ニ外ナラサルヲ以テ契トシテ取扱フ限リニアラサルモ抽籤入札其他個人的事案發生ニ依リ給付金品ノ交付順位ヲ定ムルカ如キ方法ニ依ルモノ及之等ノ方法ヲ併用スルモノハ類似契会トシテ規則ヲ適用スルヲ要ス

○ 弊 害 ア ル 契 会 等 整 理 ニ 関 ス ル 件

大正一二、八  
京保四九八五

在來契ニシテ所謂桶契ト称スルモノ其他之ニ類スル取退契ハ殆ント例外ナク毎回少額ノ掛金ヲ納メ抽籤權ヲ取得シ以テ掛金ニ數十倍乃至數百倍スル給付金ノ獲取ヲ僥倖セムトスルモノナリ故ニ之等契ノ正理ハ啻ニ其ノ存続ヲ認容シ得サルノミナラス明治四十四年四月府令第四九号(懸賞當籤類似其ノ他投票募集取締ニ関スル件)又ハ刑法第百八十七條ニ依リ取締ルヲ至當ト認メラレ候ニ就テハ爾今此種新規出願ニ対シテハ勿論在來ノモノノ出願ニ対シテモ不認可処分ニ附シ尚更在ノモノニ付テハ間斷ナク周到ナル査察ヲ遂ケ以テ確固タル拳証ニ努メ夫レ夫レ嚴重処置セラルヘシ

## 契の取締方法

江 原 道

本道に於ては大正十二年九月二十九日道令を以て講会契の取締規則を發布し、今日に至る迄その監督取締に當りつつある。

朝鮮総督府江原道令第十二号

講会契取締規則左ノ通定ム

大正十二年九月二十九日

朝鮮総督府江原道知事 尹 甲 炳

### 講会契会取締規則

第一条 無尽講其ノ他之ニ類似ノ講会又ハ契会ヲ組織セムトスル者ハ左ノ各号ノ事項ヲ具シ所轄警察署長ニ願出テ認可ヲ受クヘシ其ノ第一号及第二号ノ事項ヲ変更セムトスルトキ亦同シ

一、講会又ハ契会ノ規約

二、講主又ハ契長其ノ他役員ノ本籍、住所、職業、氏名、年齢

三、講会又ハ契会ノ会員ノ住所氏名及加入口数ヲ記載シタル名簿

第二条 前条第一項第一号ノ規約ハ左ノ各号ヲ具備スヘシ

一、講会又ハ契会ノ名称及目的

二、講会又ハ契会ノ存続期間一回ノ給付金額及毎回ノ掛金額

三、講金又ハ契金ノ払込貸渡及払戻ノ方法

四、会員脱退ニ於ケル掛金払戻ノ方法

五、講金又ハ契金借受人ノ債務履行ニ要スル担保又ハ保証ノ方法

六、講金又ハ契金ノ保管方法

七、役員ノ報酬又ハ手数料其ノ他雜費金額並其ノ支出方法

八、講会又ハ契会開催場所及定日

九、欠口又ハ解散ノ場合ニ於ケル処理方法

十、講金又ハ契金ノ給付ニ付抽籤入札其ノ他之ニ類似ノ方法ヲ用フルモノハ其ノ方法及最低入札金額

第三条 本則ノ規定ハ左ノ各号ノ一ニ該当スル講会又ハ契会ニ適用セス

一、朝鮮無尽業令ノ適用ヲ受クルモノ

二、官公署ノ指示ニ依リ組織スルモノ

三、同一官公署ノ職員同一会社ノ社員及従業員又ハ同一商店ノ店員各相互間ニ於テ組織スル講会又ハ契会ニシテ一回ノ給付金額百円ヲ超エサルモノ

第四条 講会又ハ契会ノ存続期間ハ五年給付金額ハ千円口数ハ百ヲ超ユルコトヲ得ス

一回ノ給付金額百円以内ニシテ講金又契金給付ニ付抽籤入札其他之ニ類似ノ方法ヲ用ヒサルモノハ前項ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

第五条 講主又ハ契長ハ会員名簿及講会又ハ契会ニ關スル収支明細簿ヲ備フヘシ前項ノ明細簿ハ講会又ハ契会開催ノ都度会員ノ閲覧ニ供スヘシ

第六条 前条第一項ノ帳簿ハ講会又ハ契会終了後一年間責任者ニ於テ之ヲ保管スヘシ

第七条 左ノ各号ノ一ニ該当スル場合ハ講主又ハ契長ハ十日以内ニ所轄警察署長ニ届出ツヘシ

一、第一条第一項第三号ニ異動ヲ生シタルトキ

二、存続期間満了シタルトキ

三、存続期間満了前解散シタルトキ

前項第二号及第三号ノ届出ニハ収支計算書ヲ添付スヘシ

第八条 講会又ハ契会ノ会員二人以上ノ警察署管轄区域ニ跨ルトキハ第一条ノ願出及第七条ノ届出ハ講会又ハ契会ノ主たる事務所ヲ管轄スル警察署長ニ之ヲ為スヘシ



第九條 警察官ハ必要アリト認ムルトキハ協會又ハ契會ノ事務所又ハ開催場所ニ臨檢シ帳簿ノ検査ヲ為シ又ハ必要ナル事項ノ届出ヲ命スルコトヲ得

第十條 警察署長ハ公安風俗ヲ紊ス虞アリト認ムルトキ又ハ會員ノ利益ヲ保護スル為必要アリト認ムルトキハ協會又ハ契會ノ規約ノ変更ヲ命シ又ハ第一條ノ認可ヲ取消スコトヲ得

第十一條 第一條第四條乃至第七條ニ違反シ又第九條ノ臨檢検査ヲ拒ミ若届出ヲ為ササル者ハ百円以下ノ罰金又拘留若ハ科料ニ処ス

附 則

本則ハ大正十二年十月十日ヨリ之ヲ施行ス

本則施行ノ際現ニ存続スル協會又ハ契會ノ講主又ハ契長ハ本則施行ノ日ヨリ六十日以内ニ本則第一條各号ノ事項ヲ具シ所轄警察署長ニ届出テ認可ヲ受クヘシ

近藤 計

善生永助氏は農學博士。朝鮮の旧慣調査とその研究に半生を捧げてきた人で、特に契の研究の權威として知られている。この資料は總督府が契の組織に非常に意を用い、各道知事にその状況を調査させ、それを善生氏に編纂させたもので、原本には次のような「序」が付されている。

序

契は朝鮮に於て、古くより発達したる組合的の性質を有する組織にして、その目的とする範圍頗る広汎に亘り、社會生活上極めて重要な働きをして居る。本書は執務上の参考に資する爲めに、囑託善生永助をして之を調査編纂せしめたものである。而して資料の大部分は、最近各道知事に対して、新に綿密なる調査方を照会し、その回答に係る書類を取纏めたものに係り、中には浩繁なる資料にして、本書中には全部を引用し得ざりしものもあり、地方当局を煩はしたること甚だ多きを断つて置く。

大正十五年九月

朝鮮總督府總督官房文書課

朝鮮の契 (終)

研究集会摘録 (第一〇〇回迄は本集成第3号に記載)

昭和三年(集會日・回数)	(研究題目・事項)	(演述・報告者)	(出席数)
五月二八日 第一〇一回	朝鮮の大水力開発	古賀 職之助	一一名
六月一日 第一〇二回	朝鮮の風水について	村山 智順	一一名
六月八日 第一〇三回	東学党について	全	一六名
六月十五日 第一〇四回	朝鮮の電力概観	穂積 真六郎	八名
六月二十二日 第一〇五回	朝鮮における大水力開発	玉置 正治	一一名
六月二十九日 第一〇六回	韓国革命を見て	崔 駿 錫	一一名
七月六日 第一〇七回	朝鮮の山林について	渡辺 豊彦	一〇名
七月十三日 第一〇八回	朝鮮の産業金融 (1)	金 谷 要作	一〇名
七月二十日 第一〇九回	全	全	一三名
七月二十七日 第一一〇回	全	全	七名
八月三日 第一一一回	京城日報を中心として	近藤 劔一	七名
八月十日 第一一二回	朝鮮の産業金融 (4)	金 谷 要作	一一名
八月十七日 第一一三回	全	全	八名
八月二十四日 第一一四回	全	全	七名
八月三十一日 第一一五回	全	全	一〇名
九月七日 第一一六回	印貞植の朝鮮農業に関する三部作	樺 寧 旭	一一名
九月十四日 第一一七回	李朝末期の貨幣改革批判	姜 徳 相	七名
九月二十一日 第一一八回	朝鮮の建国伝説	松 林 義 三	一二名

九月二八日	第一一九回	朝鮮銀行の發券制度について	日本不動産銀行	一三名
一〇月五日	第二二〇回	新潟会談について	星野喜代三	一二名
一〇月二二日	第二二一回	朝鮮の鉱業について (1)	多久安貞	一二名
一〇月一九日	第二二二回	全	上滝基	一〇名
一〇月二六日	第二二三回	全	全	九名
一一月二日	第二二四回	研究会の運営討議 (4)	全	八名
一一月九日	第二二五回	全	穂積真六郎外	一〇名
一一月二六日	第二二六回	朝鮮における思想取締	全	一〇名
一一月二四日	第二二七回	韓国を訪ねて	吉野鎮雄	一〇名
一二月三〇日	第二二八回	韓国の総選挙に立候補して	鎌田信子	一七名
一二月七日	第二二九回	李朝末期の日本対韓貿易	金圭南	一二名
一二月二四日	第二三〇回	本年度納会	姜徳相	一二名
一二月二一日	第二三一回	箱根・恒例懇親会	穂積真六郎外	一〇名
一二月二三日			全	九名
昭和三十六年				
一月一日	第二三二回	洛東江水域交通調査について	姜徳相	九名
一月一八日	第二三三回	繊維工業部門の実態	梶村秀樹	八名
一月二五日	第二三四回	朝鮮近代史の問題点	山辺健太郎	一八名
二月一日	第二三五回	朝鮮の開国について	全	一四名
二月八日	第二三六回	壬午事変について	全	一一名
二月一五日	第二三七回	甲申事変について	全	一二名
二月二二日	第二三八回	日清戦争前後	全	一一名
三月一日	第二三九回	保護条約前後の外交関係	全	一一名

三月八日	第一四〇回	日韓併合より三・一運動まで	山辺健太郎	一〇名
三月一五日	第一四一回	三・一運動について	全	九名
三月二二日	第一四二回	農村振興運動について	八尋生男	一三名
三月二九日	第一四三回	全	姜徳相	九名
四月五日	第一四四回	李朝末期の貨幣問題	八尋生男	八名
四月一三日	第一四五回	農村振興運動	全	八名
四月一九日	第一四六回	全	全	八名
四月二六日	第一四七回	全	全	七名
五月一〇日	第一四八回	体験を語る(朝鮮問題)	秦学文	一三名
五月一七日	第一四九回	全	全	一四名
五月二四日	第一五〇回	研究会第一五〇回記念会	穂積真六郎外	一一名
五月三一日	第一五一回	研究方針の討議	全	一〇名
六月七日	第一五二回	朝鮮における林野政策の展開 (1)	樫原 旭	八名
六月一四日	第一五三回	全	全	七名
六月二一日	第一五四回	国権論の端緒について (2)	琴乗 洞	七名
六月二八日	第一五五回	朝鮮林野調査事業報告書について	樫原 旭	七名
七月五日	第一五六回	日本の外地統治中央機関	近藤 鋌一	八名
七月二二日	第一五七回	三・一事件後の朝鮮に赴任して (1)	千葉 了	一六名
七月一九日	第一五八回	全	全	一六名
七月二六日	第一五九回	全	全	一四名
八月二日	第一六〇回	全	全	一一名
八月九日	第一六一回	研究方針討議	近藤 鋌一外	一〇名
八月一六日	第一六二回	朝鮮近代史料研究について	穂積真六郎	九名

八月二十三日	第一六三回	柳宗悦と朝鮮	
八月三十日	第一六四回	研究方針協議	
九月六日	第一六五回	朝鮮の国土と人口	
九月十三日	第一六六回	朝鮮警察機構について	
九月二十日	第一六七回	韓国から帰つて	
九月二十七日	第一六八回	教育及び国語普及	
十月四日	第一六九回	関東大震災と朝鮮人	(1)
十月十一日	第一七〇回	全	(2)
十月十八日	第一七一回	日韓併合について	
十月二十五日	第一七二回	朝鮮学会出席	
十一月一日	第一七三回	台湾と朝鮮	
十一月八日	第一七四回	朝鮮の電気事業	
十一月十五日	第一七五回	台湾について	
十一月二十二日	第一七六回	朝鮮の近代文学について	
十一月二十九日	第一七六回	全	

幼方直吉	一名
近藤 鋳	外二名
近藤 鋳	七名
宮田 徳	一〇名
金 圭	一〇名
琴 乘	一〇名
姜 徳	一〇名
全	一二名
漆原 武輔	一五名
近藤 鋳	外
山辺 健太郎	一四名
岸 謙	一〇名
山辺 健太郎	一二名
李 漢	一五名
全	一五名

研究会が発足して早くも足かけ五年目の正月を迎えようとしている。毎水曜日、みんなと一しよに百八十回。歳月うたたの感、切なるものがある。来年もお互いに何とか頑張りたい。皆さんの健康を祈つて筆をおく。

(昭和三六・一一・二七日・近藤記)

# 朝鮮近代史料研究集成第4号 (完)

昭和三十六年十二月十日 印刷  
昭和三十六年十二月十五日 発行

## 朝鮮近代史料研究集成。第4号

財政・金融関係重要文献特集  
(二百部限定版・会員配布)

編集・発行  
兼印刷人

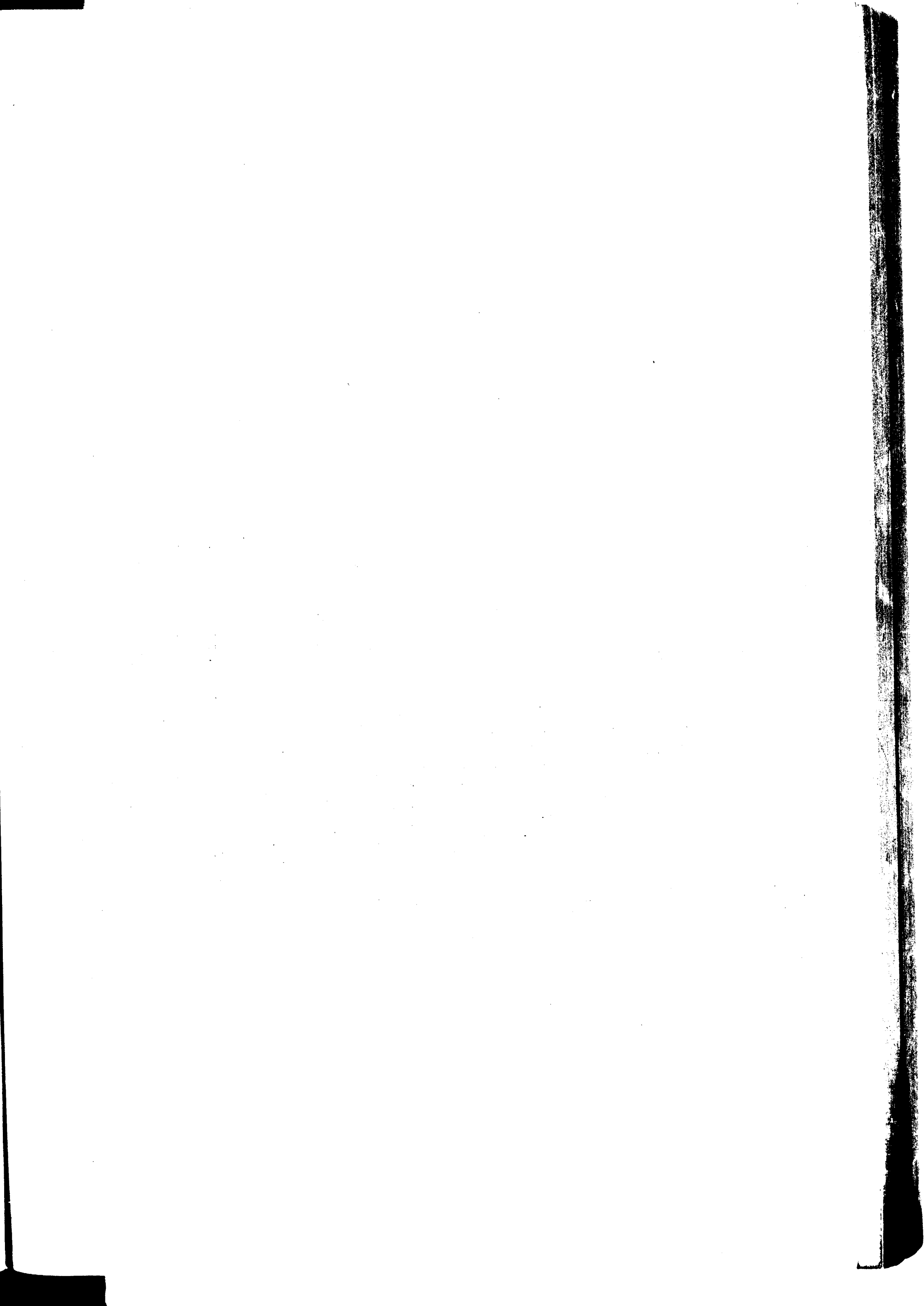
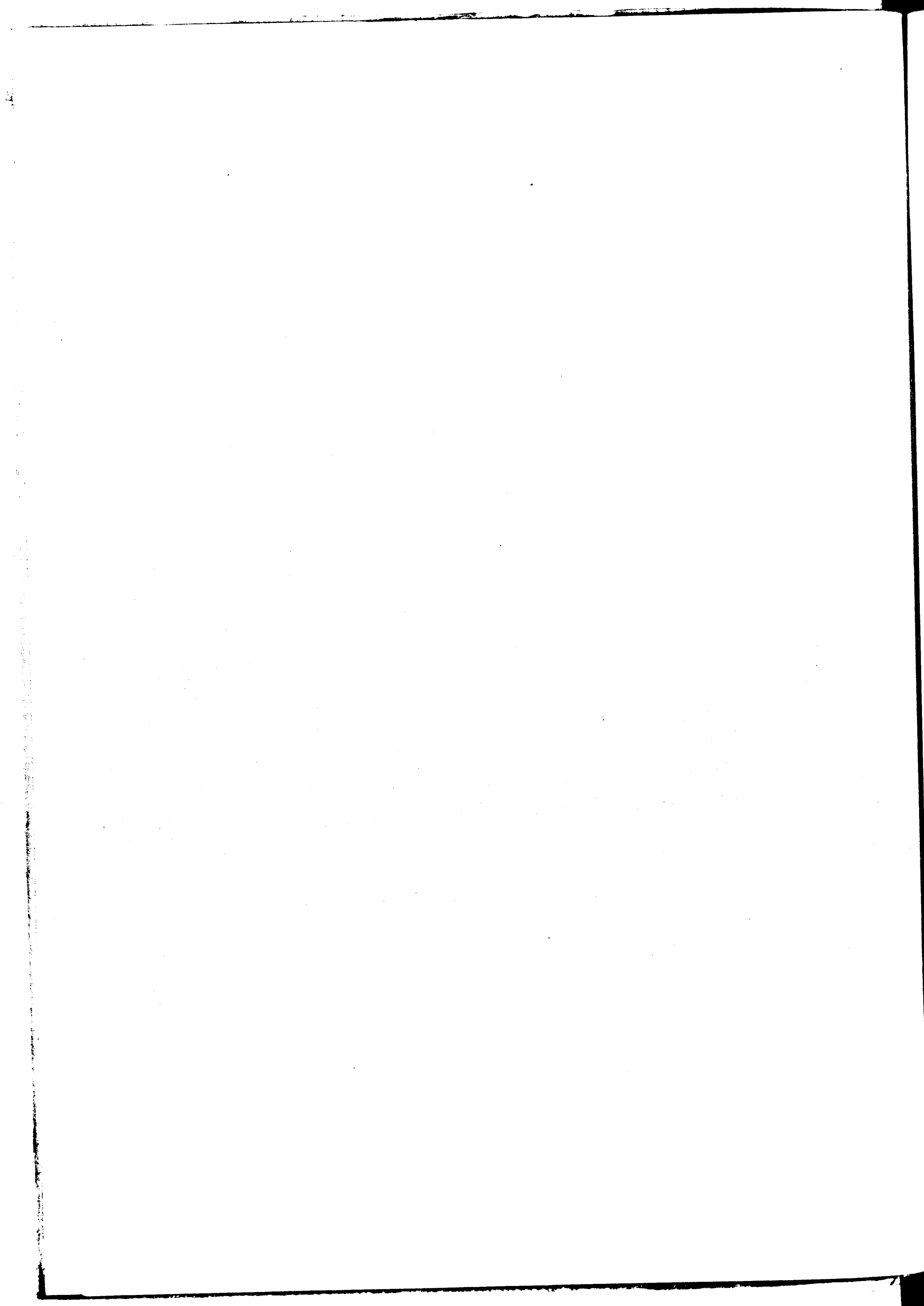
茅ヶ崎市小和田五四〇四番地  
近 藤 鋳

東京都千代田区丸ノ内仲十二号館六号館  
(中央日報協会・電話281一六八四番)

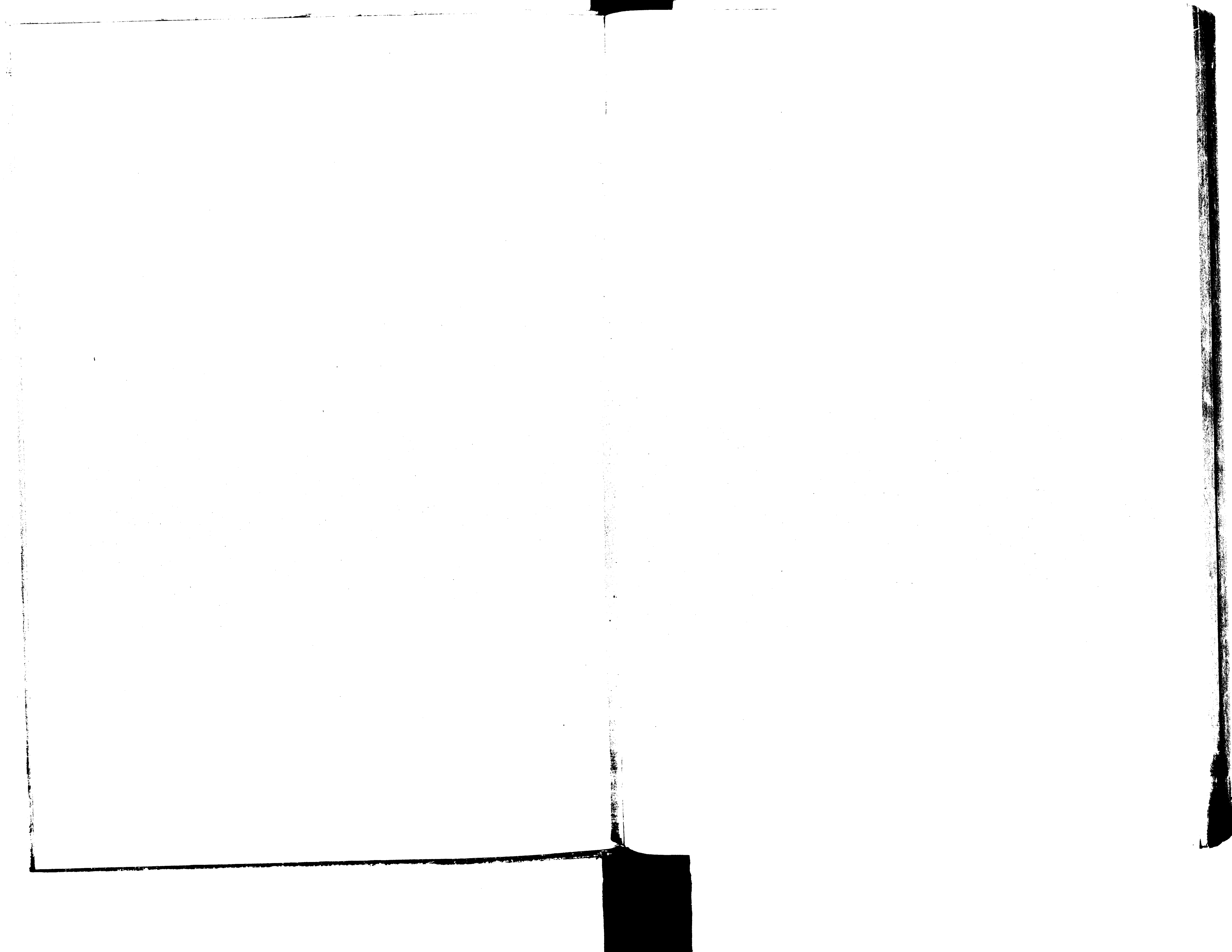
発行所

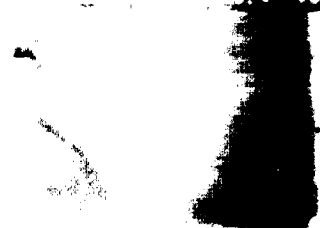
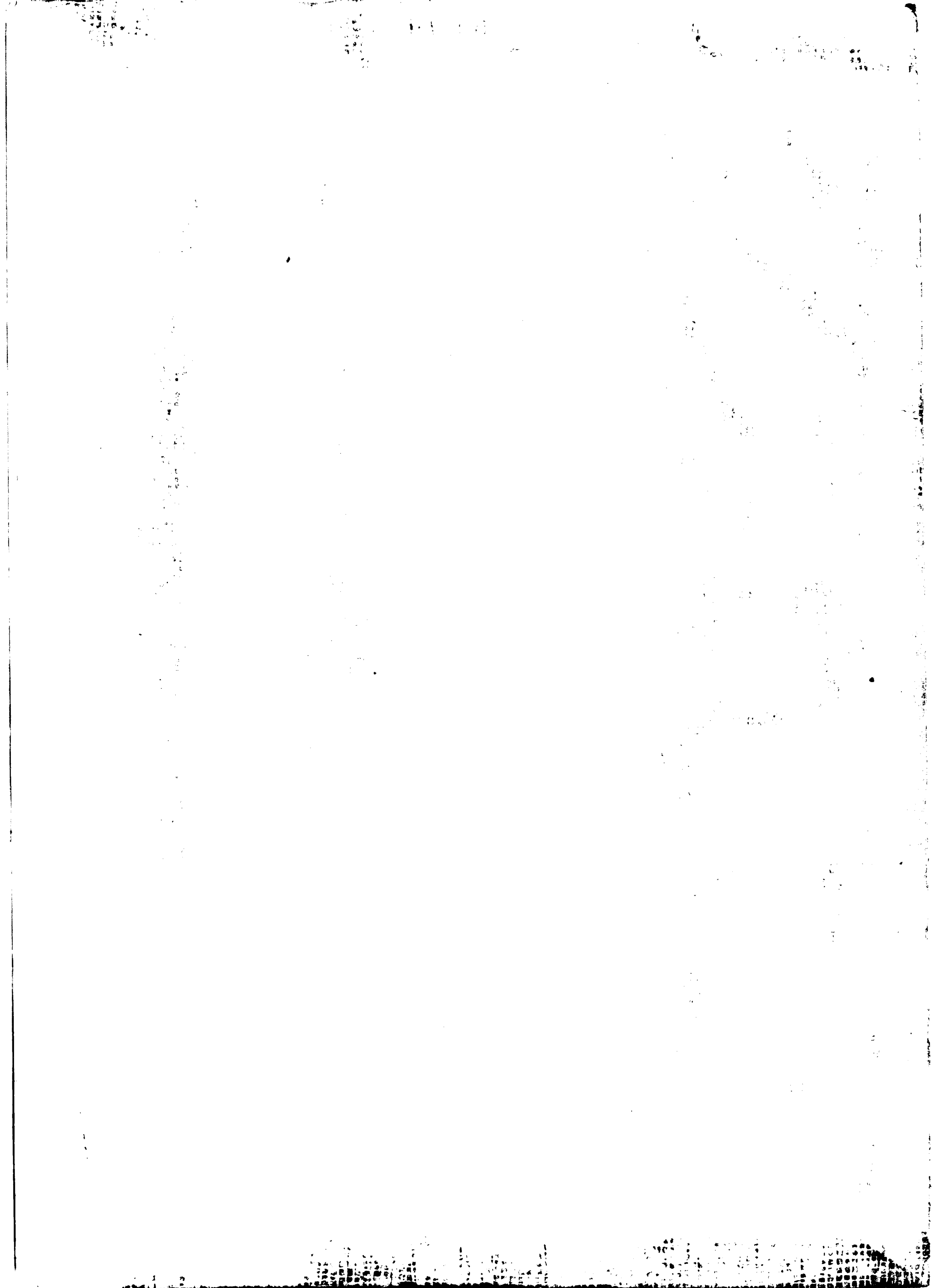
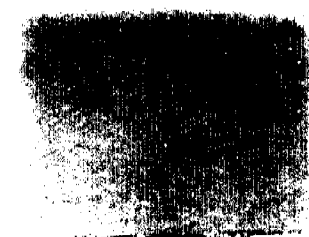
財団法人 友邦協会  
朝鮮史料研究会  
主宰 穂 真 六 郎

398+125 10=420





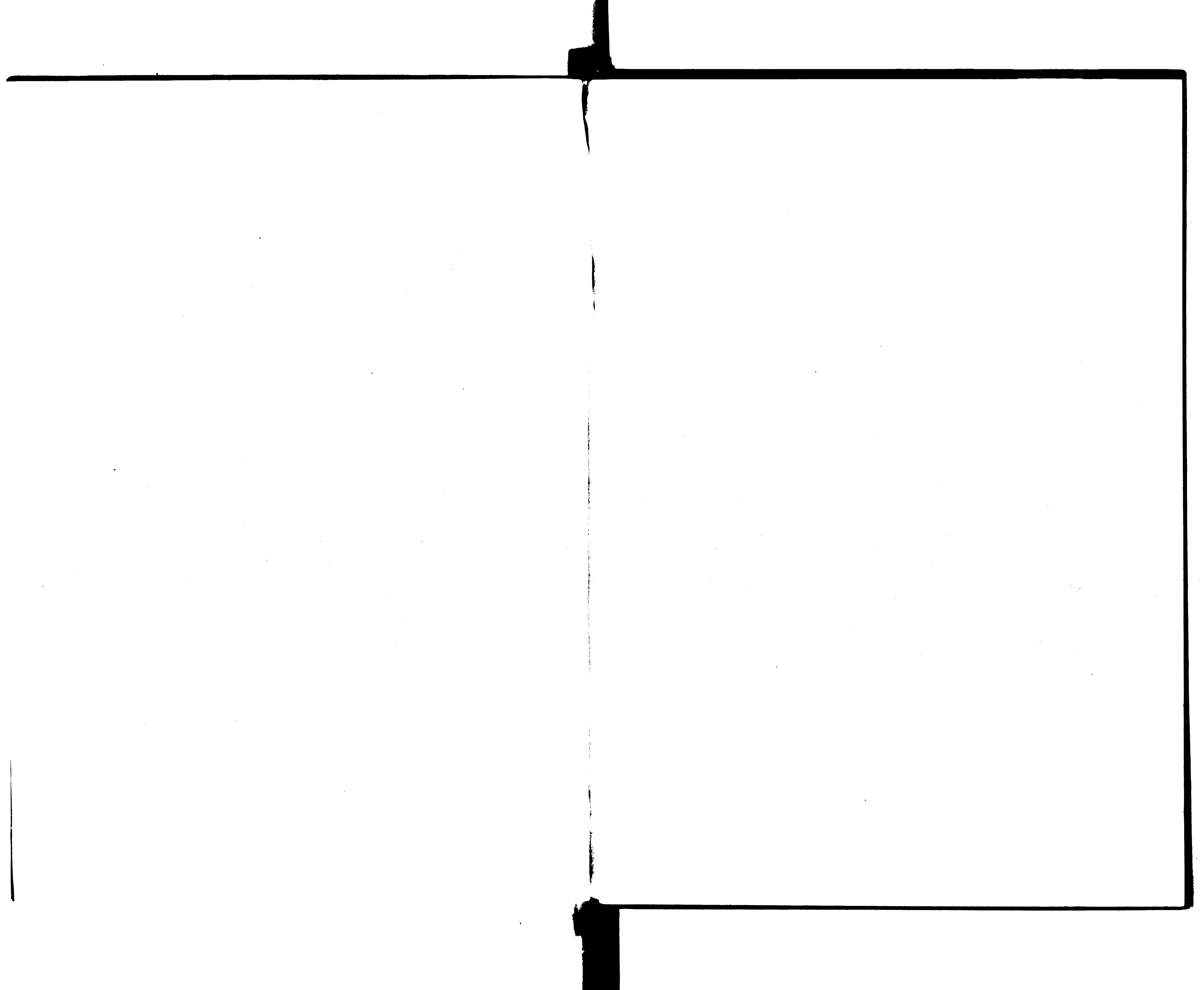




中華民國四十年  
五月  
出版  
古史述史編纂

財団法人 友邦協會 發行

1 5 6 7 8 9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 2





(朝鮮統治関係重要文献)

# 朝鮮土地改良事業史

元朝鮮総督府土地改良課長

昭和女子大学教授

古庄逸夫編著

財団法人 友邦協会 発行

著 者 略 歴

編著者古庄氏は熊本県出身、大正八年東京帝国大  
学政治学科を卒業、朝鮮總督府に入り、内務局勤務  
を振り出しに、全羅南道地方課長等を経て總督府土  
地改良課長に任じ、水利事業、干拓事業等、朝鮮露  
土の改良、拡張とそれに伴う産米増殖計画の推進に  
敏腕を振い、その功績は高く評価されている。後、  
道財務部長、光州、京城等の税務監督局長を歴任し  
その間欧米各国を視察して帰朝、退官後は、文部省  
の図書編纂委員等を勤めた。現在、昭和女子大学教  
授である。

序

文

古庄逸夫氏は、朝鮮統治の前期の終り頃總督府に入り、近代朝鮮の抬頭期からその完成  
期にかけて活躍された俊英である。その頭腦の明晰と篤学の士であることは、夙に官界、  
民間に於ける定評があつた。

終戦後、私共の行なつてゐる朝鮮統治の資料編纂に共鳴されて、自らの体験を基にして  
この「朝鮮土地改良事業史」を書かれた。私共の統治資料編纂の事業は、実は、かつて朝  
鮮に居られた総ての方に、各自の体験を記録して置いて頂きたい願望から行なつてゐるも  
のであるが、この古庄氏の著述は、私共のこの理想の一端を第一着に実現して下さつたも  
のである。

思うに、戦災、引揚げ等のため朝鮮統治に関する殆んど文献・資料が失われている今  
日、私共が企ててゐる「統治資料編纂」という仕事は、非常に困難な仕事である。皆様に  
その御意思と御親切とはあつても、年次が遠ざかつてゐるために、お互いの年令、記憶、  
そして現在の御仕事の関係などから、今となつて非常に乏しい過去の事蹟を纏めることは  
大変な決心と努力とを伴わない限り、実行し得ない時世になつてゐる。そしてこの古庄氏  
の著書は、この難事業を最初に完成して下さつたものである。

また私共は、この著述の内容に大きな意義を感じる。それは土地改良事業の内容そのも  
のが、朝鮮の国土を培い、近代化し、そして朝鮮産業の大宗である米の増産に關して劃期  
的な貢献を齎した事蹟であるとともに、この事業は名実共に、朝鮮統治の根幹となされた

ものである。即ち、全鮮の荒土を整えて限なく水利を起し、干瀝地を拓いて農土と化するなど、その治績の影響は、ひとり朝鮮の農民を潤おす根元であつたばかりでなく、その産米の移入を通して、その業績は、日本の国民生活にまで大きく波及していたのである。

斯様に、この著書は、かつての朝鮮統治の核心に触れるものであるが、私共はこれを一読して、次のようなことを感じさせられる。

それは、三十六年間の總督府施政を通して流れていた日本内地の為政者と、朝鮮の現地で統治のことに當つていた人々との「朝鮮に対する見解の相異」である。朝鮮統治が侵略であつたとか、そうでなかつた、とかいう当今の難かしい議論や批判は別として、ともかく、朝鮮に居た日本人達は、朝鮮をより良くするための誠心誠意取り組んで来たのである。そしてこのことは、朝鮮總督府の中央に対する予算の要求、或いは法令の制定等に関して随所に見られることである。

私共、朝鮮統治に携つて来た者は、この日本内地為政者の「見解の相異」に、いかに悩まされ、いかに闘つて来たことか。この著書は、その交渉の経緯、顛末を「後編・回顧録」で当事者に語らせ、往時に於ける統治関係者の苦心と、その真相とを伝えている。

最後に、この著書は、これだけ重大な問題を編述して、その発足から終政の跡始末にまで及んでいる。勿論参考資料の乏しさから完璧とは言えないが、このような特殊の体系書として、その叙述の統治全期間に及ぶものは、恐らくこれが最初のものと思われる。私はこの点からも、古庄氏の御努力に敬意を表するとともに、現在病臥中の氏が一日も早く再起せられ、一層、研鑽の功を積んで頂きたく念ずるものである。

なお、この上梓に対して幹旋の勞をとられた渡辺豊彦氏に対し、心から感謝の意を表する次第である。

昭和三十四年十二月二十二日

穂 積 真 六 郎

## 自 序

(一)、「米不足」「食糧自給の重要性」は日本国の古くて、かつ新しい問題である。明治の末期から大正時代には、この問題の解決を主として外地米の増産に求め、朝鮮米、台湾米の増産計畫が強力に推進せられた。台湾には砂糖の増産という別の重大任務があつたので、米の増産は主として朝鮮の施設の拡充に俟つた。その効果は真に顕著なものがあつた。終戦によつて領土の四割五分を喪失した日本は、政治経済の各方面に於て深甚痛切な影響を受けたが、朝鮮米移入の杜絶が、戦後の我が国の食糧自給に、重大な障礙となつたことは今更言を俟たない。一千万石以上の移入米の杜絶と、人口の急激なる増加とは、一時国民をして飢饉線上を彷徨せしめた。「米よこせ」の大衆騒動は、政治の危機を誘発した。二千万石にも達する食糧の輸入によつて、四億ドルの巨額の外貨を消費せねばならぬ、経済上の困難は日本経済自立上の一大暗礁となつた。食糧の増産自給は今や重大なる緊急国策となり、朝野を挙げて最善の努力を講じつつある。然しながら毎年百万人にも達する人口の増加に相応する食糧の増産を、実現することは、真に容易なことではない。少くとも今後数年間に、一千万石の米の増産を実現することは至上命令であるが、愛知用水、八郎瀧

の干拓、根釧平野の開墾など、当人も、亦一生懸命の努力をしている。けれどもこれらの大規模事業は、事業の完成までに数年の歳月を要する。巨額の資金の調達、予算の獲得、資材の蒐集など、真に容易な事業ではない。これを想うと、四十年に渉る朝鮮の産米増殖計画の実績が、漸やく成果を挙げ来つたのに、これを日本の食糧の供給源とすることが困難な政治情勢になつたのは、真に痛恨の極みである。けれども、今日に於て其の変遷推移の実績を記述し、関係者努力の成果を江湖に紹介するは、朝鮮統治は決して「弾圧と搾取」の連続でなく、民衆福利の増進と、経済の向上発達を念願したものゝ外ならぬ所以を、事実を以つて証明すると共に、将来我が国の土地改良事業の円滑なる実施につき、有益なる参考資料ともなるべきを考量し、茲に敢えて不敏を顧みず、本史を上梓することとした次第である。

(二)、私は四半世紀に亘る私の朝鮮統治に関する体験を、回想録として書き遺したいと平素志していたのであるが、昨春私の先輩である、元、朝鮮総督府学務局長渡辺豊彦氏、殖産局長穂積貞六郎氏などより、朝鮮統治の各部門に關し史的考察を出版する企図あることを伝承し、土地改良事業に關しては、現存者としては私が（比較的）永く且つ困難な時期に土地改良課長として在任した経験もあり、尚数冊の貴重な資料が手許に存在しており、加之大学教授として、比較的著述に従事する時間的余裕と経験ともあるので、率先編輯を受け、私が中心となつてこの企図を立案推進することに決意した。けれども多数の現存関係者の協力支援に依頼せねば、四十年に渉る史的考察を完了することはできないので、関

係者三十余名に趣旨を陳べ、資料の蒐集、原稿の立案起草につき援助を求めた。一同皆欣然快諾せられたが、資料の欠乏、記憶の喪失には等しく絶大な困難を感じられた次第である。そこで事業の変遷推移に就いては総督府が従来公表した数件の印刷物並に非公表の資料と土地改良会社、東拓、殖銀、東津水利組合、黄海水利組合の記念誌等を有力な資料として極めて概要を前編「概説」として私が執筆することにした。固より資料不足のために詳細な記述を為すことを得ず、真に概要の沿革的説明に過ぎないけれども、大体の骨子は読者に諒解して頂けるものと思う。然し「概説」は畢竟官庁の公表文書の域を脱することを得ない。誰れがどんな事績があつたかと云う「即人的記述」は全然なされていない。この欠陥を補うために「回顧録」を後編として加え、関係者自身をしてその事績を語らしむることとしたのである。唯だ関係者の中で大塚常三郎、矢島杉造、青木戒三、藤原喜蔵、池田秀雄、池田泰治郎、渡辺忍、有賀光豊、林繁蔵、松村松盛、三井栄長、野田新吾、藤井寛太郎など官民多数の重要な方々が物故せられたために、その事績を、直接本人をして語らしむることができないのは真に遺憾に堪えない次第である。中編として大規模事業の解説を加えたのは、日本にも比類渺ない、一万町歩以上に達する大水利事業が、明治の末期から昭和の初期に、続々朝鮮に於て企畫せられた実例の数箇を挙げて、例証せんとした訳である。黄海、昭和、東津、咸興、安寧の五水利組合を引用したのは、是等の五組合は産米増殖計画に属する組合であり、何れも私が在任中関係して事情をよく知つているの一手許に資料が存在した関係とに依るものである。此の外に、古い時代の益沃、大正、中央



延海など大規模のものがあり、終戦直前に着手したものは札幌、東津の区域拡張などがある。が、前者は資料が手許になく、後者は終戦時迄に竣工しなかつた関係もあり、実例として説明することを省略した。

私は日韓関係が速に国交回復し、総督府の古い資料に依りて、本史の欠陥が補充せらるゝと共に、最近の事情が纏められて公表せらるる日の到来を期待して止まないものである。(三)、本書の起稿につき、或は回顧録を寄せ、或は資料を供与せられた各位の厚意ある御協力に対し深甚の謝意を表する。尚本書の出版に關し、種々の便宜と支援を与えられたる各位に対しても同様厚く謝意を表する次第である。

昭和三十二年八月終戦記念日

古庄逸夫

朝鮮土地改良事業史

目次

前編 概説

緒言	1
第一章 日本統治以前	5
第二章 日本統治初期	7
第三章 朝鮮産米増殖計画	17
第四章 朝鮮産米増殖更新計画	20
第一節 創設期	20
第二節 整備期	26
第三節 停頓期	28
第四節 整理期	35
第五章 土地改良事業の復興	45
第一節 増米計画及び改訂増米計画	45
第二節 朝鮮農地開発官団の設立	57

第三節	朝鮮農地開發營団の運営	60
第四節	戦時食糧緊急増産対策	64
第五節	戦時の食糧統制	67
第六章	結論	69

付録	歴代朝鮮総督・政務總監	72
(名簿)	朝鮮総督府土地改良事業主務局部長	73
	朝鮮総督府土地改良事業主務課長	74

中編 大規模事業

中編 大規模事業目次	76
一、東津水利組合	77
二、黄海水利組合	81
三、咸興水利組合	85
四、安寧水利組合。大林農場	86
五、昭和(平南)水利組合	88

後編 回顧録

後編 回顧録目次	92
この回顧録を読んで	93
一、朝鮮米の増殖と改良	95
二、朝鮮産米増殖更新計画の樹立	105
三、土地改良部の創設期	115
四、朝鮮土地改良株式会社の創立と井上準之助氏	121
五、代行業務運営上の苦心	126
六、創業期の水利組合の一事例。靈光水利組合	130
七、整備期の回顧	132
八、停頓期の回顧	137
九、停頓期の体験を語る	139
一〇、整理期の回顧	151
一一、土地改良事業の問題点	158
一二、土地改良事業の復興	163
一三、大戦末期の土地改良事業	168
一四、戦終直前の土地改良事業	170
一五、朝鮮農地開發營団業務の思い出	172
×物故関係者の追憶	179
×編集後記	183
(1)内務局関係官	
(2)藤井寛太郎氏の業績	
(3)池田泰治郎技師	

朝鮮土地改良事業史

(前編)

概

説

整稿について

一、本著の原稿は、古庄氏が非常に綿密に編集されたものであるが、この刊行に際して、不幸御病臥中のため、私が整稿させて頂いた。編集上、修辭上、多少、御相談したい点もあつたが、御重症のためそれが出来ず、明瞭な誤字の修正と、旧仮名使いのものを新仮名使いにだけ、私の一存で改めさせて頂いた。

二、又、この原稿は昭和三十一年に脱稿されているため、文面が時期的にそぐわぬ箇所がある。上梓が遅れたことを御詫びして御了承を願つて置く。

三、尚、古庄氏は非常に多くの貴重な写真を本著に掲載すべく用意されていたが、今回は種々の都合で、残念ながら収載することが出来なかつた。何時かの機会に、是非刊行させて頂きたい考えである。これ又、御詫び少々御了承を乞う次第である。

。。近藤 銀一。。

目次

第一章	日本統治以前	5
第二章	日本統治初期	7
第三章	朝鮮産米増殖計画	17
第四章	朝鮮産米増殖更新計画	20
第一節	創設期	20
第二節	整備期	26
第三節	停頓期	28
第四節	整理期	35
第五章	土地改良事業の復興	45
第一節	増米計画及び改訂増米計画	45
第二節	朝鮮各地開發營団の設立	57
第三節	朝鮮各地開發營団の運営	60
第四節	戦時食糧緊急増産対策	64
第五節	戦時の食糧統制	67
第六章	結論	69
付録	歴代朝鮮總督。政務總監。薄	72
	朝鮮總督府土地改良事業主務局長	73
	朝鮮總督府土地改良事業主務課長	74

朝鮮土地改良事業史 古庄逸夫編著

前編 概説

緒言

朝鮮半島は農業國である。農業は古来朝鮮の産業の大宗である。総人口の八割強は農民であり、農産額は総生産額の七割強を占めている。就中米は主要作物であつて、其の生産の増減、品質の良否は直に農家経済に深甚の影響を与える。然るに多年税政の結果灌漑排水の施設殆んど見るべきもなく、耕地の大部分は自然状態のまま放置せられ、一度旱魃到れば稲は枯死し、滴目唯だ荒涼たる白田と化し、一度水害到ればその激甚なる被害は、随處數千町歩に涉り収獲皆無に帰し、流民の離散困窮名状すべからざる惨状を呈する。粗放な農業の経営、農民の窮迫せる生活、延いて韓国財政の慘憺たる窮乏など、禍因の根源は主としてこの点に存する。故に水利事業を起して灌漑排水の施設を整備し、耕種法の改善に努め、毎年の收穫を安定せしめ、農業の改善発達を図るは、半島産業開発の根幹を為



す緊要の施設である。加之、広大なる地積に渉る河辺荒地、山麓傾斜地などの、所謂国有未墾地に適當なる施設を行い、耕地となす開墾利用の余地多大なるものがある。尚西海岸一帯特に朝鮮の西海岸の干潟地は極めて有望なる干拓適地である。これらの耕地拡張事業は比較的少額の投資を以て、産米の増殖を期し得べき経済的企業である。故に日本の始政以前、目賀田財政顧問の水利組合条例制定に端を発し、始政以後に於ては歴代の統治者極力これが施設経営に尽瘁し來つたのである。特に大正の末期には、日本食糧問題の解決の關鍵を、朝鮮の土地改良事業の推進に求め、約參億円の巨資を投ずる朝鮮産米増殖更新計畫の樹立遂行は、朝鮮産業開発の根幹を為す大事業であり、労働の散布は窮迫せる農民に現金収入の機会を与え、大規模土木工事の施工は半島経済進展の潤滑油となり、他日の農村振興運動の基盤となり、自力更生の原動力となり、以つて半島経済力の進展、農民の福利増進に寄与貢獻したること、洵に絶大なるものがある。

偶々昭和五年以降の記録的大豊作の結果、米価の惨落を招き、農家経済の窮迫を加え、農村の救済、経営困難なる水利組合の匡救は無眉の急務となり、米穀統制問題は日本朝鮮野の大問題となり、遂に生産統制或は鮮米移入制限問題を惹起したのみならず、深刻なる米価の惨落の影響は、農民の企業熱を全く衰頹萎靡せしめ、計畫の遂行は停頓の余儀なき状態に立ち至つたのである。斯かる内外の情勢は、遂に昭和九年五月土地改良事業の一時中止を声明することとなつた。斯くて時運の推移は漸やく本事業復興の機運を招き、支那事变勃発以後の戦時体制下に在りて、食糧自給の緊要なるは言を俟たざる処であつて、昭和

十五年産米計畫を復活し、構想と企畫を新にして、本事業の再発足を図り、更に昭和十七年には本計畫を改訂拡充し、其の実施機關として、朝鮮農地開発営団を創立して鋭意これが進捗に努め來つたが、昭和二十年八月終戦に際会し、朝鮮統治と共に総督府に依る本事業の推進は茲に終末を告げた次第である。

此の間約四十年に亘る半島に於ける施政の要諦は、朝鮮の産業開発、民衆の福祉増進、内鮮一家の理想の実現に存したることは今更論議の要はない。土地改良事業の推進は、実に此の施政の根本義を具現化する方策の基軸を為すものであり、比年顯著なる産米の増収はその成果を如実に物語るものである。

今や朝鮮は日本の版図を脱し、民族独立の機会を待たが、不幸南北対立の悲運に際会し数年に渉る戦乱に、日本統治時代の成果は土崩瓦解に帰し、满目荒涼たる焦土と化した。然しながらその国土に深く印したる本事業の成果は、蓋し永世不朽、滄海変じて万頃の美田となりたる実跡は万古不滅、再び半島民衆の血となり肉となり、民族復興の活泉となり原動力となるであらう。

我等多年半島統治の局に当り、国土開発の大事業に参畫したる者が、相呼応し、相協力して茲に「朝鮮土地改良事業史」一卷を上梓する所以は、此の半島開発の根幹を為したる本事業推移の経過を卒直に記述し、成敗利鈍の成果を如実に表明し、以つて江湖の批判を請ひ、「朝鮮民衆の福祉増進と安寧幸福」、それ以外に何等の野望も異図も抱蔵することなく、只管に終生の生命と熱情を傾尽した誠意と苦心を表白し、以て再び提携協力して、

東洋平和の実現とアジア民族の興隆に協力邁進せんとするの悲願を達成せんがために外ならぬ。嗚呼熱愛する朝鮮の山河よ、願わくば五風十雨天然順にして、一望無限万頃の美田黄金の波を漂わせよ。嗚呼悲運なる三千万の民衆よ、願わくば小異を去りて、大同に就き、協心戮力、融和輯睦、鼓腹擊壤の太平天国を斯土に再建せよ。

### 朝鮮に於ける土地改良事業実施の時代区分

- (一) 自明治四十三年 至大正 八年 (寺内・長谷川総督時代)  
(事業創起時代)
- (二) 自大正 九年 至大正十四年 (齋藤總督時代)  
(産米増殖計畫時代)
- (三) 自大正十五年(昭和元年)至昭和十年 (齋藤、山梨、齋藤第二次、宇垣総督時代)  
(産米増殖更新計畫時代)
- (四) 自昭和 十一年 至昭和十四年 (南総督時代)  
(事業停頓時代)
- (五) 自昭和 十五年 至昭和二十年 (南、小磯、阿部総督時代)  
(増米計畫及向改訂計畫時代、戦時食糧緊急増産対策時代)

## 第一章 日本統治始政以前

緒言に於て述べた如く、殆んど原始的狀態のままであつた土地に、相当の施設を加うる必要あるは当然であるが、日本始政以前に於て当局が施設したものは極めて僅少である。法令としては国有未墾地利用法と水利組合条例の公布の二あるのみである。

一、国有未墾地利用法。国有未墾地の面積は河辺荒蕪地約七万町歩、干瀆地約二十万町歩、其の他山麓傾斜地約八十万町歩の広大なる面積を占むると推定せられた。(大正七年)正正確なる調査はない)。故に之に適當なる施設を行い、耕地と為すことを得ば、耕地拡張上極めて有利な方法であるから、旧韓国政府は、明治四十年七月、国有未墾地利用法並に同法施行細則を制定施行して、確實と認むる者に之を貸付し、(貸付期間は十年)事業成功の上は、其の土地を受貸付者に払下げ又は付与することとした。併合後も該細則に改正を加えた程度で効力を存続したので、漸次貸付地の面積増加し、大規模の貸付を受ける者をも生ずるに至り、受貸付者は著々事業の実施に努めたので、大正五年頃には地価並に穀価の昂騰は益々事業を進捗せしめ、貸付地の付与又は払下を受ける者激増するに至つた。

二、水利組合条例 日露戦役後は日本人農地経営者の移住頻りに増加するに及び、水利施設実施の機運起り来つたので、明治三十九年三月、旧韓国政府度支部令を以て水利組合条例を公布した。(本条例は、財政顧問、目賀田種太郎が、藤井寛太郎との会談の結果、水利調査費四万五千円を計上すると共に、財政顧問附大藏書記官鈴木穆(後の度支部長官)をして起草せしめたものと云う。)即ち、地方利害關係者をして、灌溉排水又は水害予防の目的を以て組合を組織せしめ、該組合に対し、必要な費用、夫役現品及び土地を組合員に賦課する権能を与え、以て土地の灌溉及び開拓に關する事業を経営せしめたのである。是に於て水利事業興起の機運を促し、本条例に依る水利組合は、古来最も用水に苦んだと称せらるる全羅北道万頃、東津二江の流域に於て卒先著手せられ、(中心的企畫者は藤井寛太郎)沃海四部水利組合(明治四十二年八月認可)を嚆矢として、四十三年中に合計六箇の組合設立を見た(沃海西部。臨益、密陽、連山、全益、臨益南部の各水利組合)尚始政初期には、引続き組合の新設を見、大正五年度末には十三組合となつた。此の外個人又は農民の共同経営に係る灌溉事業に対し許可したるものは、大正元年以来五年迄に総數三十一カ所である。

## 第二章 日本統治始政初期

農業の発達は、朝鮮産業開発の樞軸であるから、保護政治確立以来農産振興の大眼目として左の事項に基礎を置いた。

- 一、気候土質の適否に鑑み適地に適応作物を分布すること。
- 二、在来作物の品種を改良すること。
- 三、有利なる新作物を輸入して栽培の普及を図ること。
- 四、肥料の増産を図ること。
- 五、水利灌溉の設備を改善すること。
- 六、未墾地の利用を増進すること。
- 七、家畜。家禽並に其の製品の改良増殖を行うこと。
- 八、養蚕其の他の副業の奨励を行うこと。

始政直後(明治四十五年)の調査に依ると、旧時実施せられた灌溉水利の施設は、堤堰テイエン(溜池のこと)淤堰(ラクセキ)が隨處に存在し、前者は三、七三五箇所、後者は、九、三八六箇所に達していた。然し之等はいづれも自然の荒廃に委ねられ、殆んど効用をなさないう様になつていた。是れ畢竟、多年税政の結果である。故に先づ之が修築復旧を図ることとし、明治四十二年以来著々其の調査を為すと同時に、一國國庫補助金を与えて之が改修を奨励した。併合後は補助金を増加し、且土地改良專任官を配置して、堤堰、淤の復旧は勿論

規模の大きい水利事業の指導監督に当らしめた。斯くて大正五年迄に支出した補助金は五十九万余円、修築した堤堰一、六六五、淤三五六を算し此の灌漑面積は六万余町歩である。因みに米の生産額は始政当時（明治四十三年）一十四万石であつたが、大正五年には一千三百九十三万石、大正七年には一千五百三十万石に増加したのである。

始政初期に於ては、土地改良事業実施は未だ創始時代に属し、漸やくその端緒を免したるに過ぎない。むしろ土地改良事業実施上の基本的調査が、各方面に渉り実施せられ、後年斯業の隆盛を来すべき基盤を為したものと云わねばならぬ。就中最も緊要にして最初に著手せられたものは土地調査事業である。これに次ぐものは治水調査、更に土地改良基本調査の実施である。

#### （第一） 土地調査事業

朝鮮の土地調査事業は、明治四十三年三月勅令第二十三号を以て、臨時土地調査局官制を制定し、同年八月法律第七号を以て、土地調査法を公布したるに端を免し、併合後総統実施し大正七年十月を以て事業全部の完成を見た。即ち約九カ年に渉り、約貳千万円の経費を投じた半島施政の根幹を為す一大調査事業であつた。此の調査の結果朝鮮に於ける土地制度及び地稅制度は始めて確立し、之が為土地所有權を確定して、多年紛糾を極めた幾多の土地争議を解決し、延て著しく土地の利用を促進したるのみならず、財政經濟其他公私諸般の施設經營に多大の便宜を与えたもので、其の效果、測り知るべからざるものがある。

る。土地改良事業の実施の如きは、土地台帳、地籍図、五万分の一の地形図の利用など、土地調査事業の効果を利用して始めて、踏査、測量設計、蒙利地区の確定などを實施し得たものであつて、土地調査事業の成果なかりせば、土地改良事業は、實施不能であつたと云うも過言ではない。今土地調査事業の概略と事業の結果とを略述する。

土地調査の事業は大別して（一）土地所有權の調査（二）土地価格の調査（三）地形地貌の調査となる。殊に地価は周密な調査を基礎として、市街地は、百十五級、市街地以外は宅地を五十三級、田畠（畑、水田）池、沼及び雜糧地を百三十二級とし、朝鮮全土を通じ、統一的に之が調査を行い、地位及び等級を詮定し、以て地稅制度を確立するに遺憾なからしめたのである。又本調査は、半島の全域に亘り、三角測量其の他の基準測量並に地形調査を遂行し、土地総筆数一千九百余万筆に對し、土地所有權、土地價格、地形、地貌等に関する調査を行い、一筆地毎に其の地番、地目、面積、地価、地主及び地位等級を掲記したる土地台帳。其の他附屬諸帳簿、並に之に相當する地籍圖を調製し、大正七年十二月までに各府郡島に引継ぎを了し、又別に全鮮に亘り五方分一、二方五千分一、又は一万分一（特定の地方に限る）の地形圖を作成し、更に土地調査の成果を全からしむる為附帶事業として府郡島地籍事務の検査、地誌資料の編纂等のことを施行した。

今本事業の結果を概説すると、土地所有權の基定を為したる所有權者は一、八七一、六三六人で、其の所有土地面積四、八七一、〇七一町歩である。其の内耕地の面積は四、三三七、一〇四町歩で、朝鮮全土の面積に對する耕地の割合は一割九分四厘、又山林總面積



に対する耕地の割合は二割七分に相当し、又番（水田）の田（畑）に対する割合は五割五分三厘となり、之を日本に於ける田、畑の割合八割三分に比するときは、朝鮮に於ける歩合の極めて少数なることを知るに足るのである。次に地形測量の結果に依ると、朝鮮の地形及び面積等は著しき異動を生じ、総面積一四、三一二方里で、従来の想定面積に比し一八九方里を増加し、且経緯度の相異に依る地図上の差違を生じた箇所も少くない。

斯くて大正七年末土地調査事業の完了は、実に其の直後に於て、土地改良事業進展の基盤をなしたものである。

## （第二） 治水調査

朝鮮には鴨綠江、大同江、漢江、洛東江等の大河があつて、運輸交通の中軸をなし、其の産業と関係する所頗る大であるが、一方には殆んど毎年多大の水害を起し、兩岸の平地は之が為非常に損害を蒙つて居る。然るに朝鮮に於ては此等河川整理につき何等施設の見るべきものなく、殆んど自然の荒廢に委せらるる有様で、加うるに山林は濫伐せられ、益々其の害は増大せられつつあるが、日本始政以来、山林の整理急を要し、単に赤田川（元山港に注ぐ）の応急的改修、万頃江の実測調査を行つた外、未だ一般治水に指を染むるに至らなかつた。然しながら河川の維持並に保護は一日も等閑に附することが出来ないので大正三年四月府令で河川取締規則を發布し、同時に漢江、錦江、洛東江、万頃江、鴨津江、榮山江、臨津江、礼成江、載寧江、清川江、大寧江、龍興江、城川江、鴨綠江、豆満江の

十五河川（各本支流を含む）を指定して、特に總督の管轄に、其の他の河川は各道知事の管理に属せしめ、以て他日に於ける治水及び水利計畫に影響するが如き河川の現状変更を抑止して、其の保存と利用とに努め、以て治水事業の素地を将来に保留することとした。然るに始政以後數年を経過し、道路港湾の修築計畫略々成り、山林制度其の緒に就き、水利事業の如きも亦漸やく大規模の施設を見るに至つたので、先づ河川の系統的調査を行い治水水利の大体計畫を定め、以て河川整理の準備を為す必要を認め、大正四年度に於て前記指定河川の踏査を大体終了し、大正五年度以降七箇年を期し、更に精密なる実測調査を施行し、以て具体的設計の資料に供し、将来に於ける治水及び水利の実施計畫を確定する方針を採つた。（本件は土木部の主管であるが、水利事業の企畫につき、深甚の關係を有するや言を俟たない。後年、万頃江、漢江、洛東江等の河川改修が実施せらるるに至つた）

## （第三） 土地改良基本調査

土地改良事業を実施するに当り、朝鮮に於て耕地の改良及び拡張を行い得べき土地の基本調査を行う必要を痛感せられた該当地域は、従来約八十万町歩と推定せられたのであるが、未だ確實たる基本的調査を欠けるが為、本事業の企畫に当り非常な不便を感じたのである。依つて産米増殖計畫の樹立に際し、大正九年度より始め、全鮮に亘り山麓緩傾斜地河辺荒蕪地、干満地、及び既墾地中灌漑改善可能地に就き、地区の所在、面積、利用改善の方法、事業費の概算等の調査を施行し、十箇年の期月と総事業費二七五万円を費して、

昭和四年に完成した。其の結果に依ると土地改良を施し得べき地区総計二、一五八箇所、其の総面積六五〇、五五八町歩で、大正十三年度以降順次之を公表し、又各地区に対する事業計畫書等は、之を当該地方庁に備付けて、企業者の便に供した。水利組合の事業計畫干拓免許の出願、国有未墾地の利用計畫等には、本基本調査が有力なる基本的素材となつた次第である。

註 基本調査実施者手当時の主務課長は事務課長、人見次郎で、主任技師は綾田豊である。事業班は五班を編成し一班は技師一、属一、技手一一、技術及事務属二三名計三十六名より成る。技師、飯島寛一郎、浅野健一、加藤正弘、小倉孝三、高木千丈、伊佐早博、相次いで班長となる。

調査地区は面積二〇〇町歩以上を甲号地区とし、貯水池及堰の位置、大きさ、樋管、余水吐の位置、大きさ、構造並に用水幹線の位置、大きさ、延長等を計画し、其の所要事業費の概算額を推算した。二〇〇町歩以下の地区は乙号地区とし（道知事所管とする）、貯水池の位置及灌漑面積を想定した。尚用水を補給すべき蓄の面積、田を畚に変換し得べき面積、及開墾干拓を行い得べき面積を調査し、各水系別に事業計畫書を作成し、土地調査測量に依り調製した五萬分の一平面図に、各水源地の所在、用水幹線の位置、及灌漑区域を表示し、干拓予定地にありては防潮堤及排水門附の位置を表示したのである。

土地改良事業施行可能地区は、六五〇、五五八町歩で、其の内訳は、

甲号地区	五三四箇所	面積	四九八、八九二町歩
乙号地区	一六二四箇所	面積	一五、六六六町歩

これを事業種別に示せば左の通りである。

既成畚の灌漑改善	三二九、九一五町歩
地目変換可能の田	一四、五六四〇
開墾可能の林野	一六、三六二〇
干拓可能の干潟地	七三、三五七〇
防水施設を要する地	一、四九六〇
其他	八、三七八四〇

水利事業勃興の機運に伴い、大正六年以降水利組合令の公布或は補助規則の制定など、助成施設の整備を見るようになった。

#### （第一）水利組合令の施行

大正六年七月制令を以て、従来の水利組合条例を廃し、新に朝鮮水利組合令を、又府令を以て同令施行規則を制定公布した。即ち水利組合は之を法人とし、其の目的は従来は灌漑排水の二項目に限られたるも、今回更に水害豫防の一項を加えて、河辺の未墾地の利用等に使はらしめたが、該組合は公共の利益を企図する公共組合であるから、営利事業を目的とする土地開拓を許さなかつた。水利組合には組合長を置き、道長官之を命じ、任期を四年とし、継続となすを本則とし、必要ある場合は有給とし、朝鮮総督は府尹、郡守又は

局司に組合長の職務を行わしむることを得せしめた。副組合長、理事、出納役、技士長又は委員は組合規約を以て之を定むるを要し、其の諮問機関として評議會を設け、組合長及び評議員を以て之を組織し、組合事業予算、組合費、加入金の賦課徴収、又け起債等の重要な事項は評議會の意見を徴して之を行わしむることとした。水利組合の地域は、組合事業の為利益を受ける土地を以て其の区域とし、組合員は其の事業の為利益を受ける者とし規約を以て之を明定せしむることとした。(水利組合の設置は勿論、朝鮮總督の認可を必要とするが後に二百町歩未満は道知事が認可することとなつた。)

#### (第二) 水利組合補助規程の發布

水利組合令実施の、大正六年現在の堤堰は、六千五百。淤は二万一千余に達したのであるが、其の灌溉面積は、僅に二十八万町歩で、之を水田総面積の一、四三五、〇〇〇町歩に比すると、約二割に過ぎない。残余の約八割は全く天水を待つ外なく、加うるに右堤堰及び淤中には補修整備を要するもの少くない。されば米産額は異常の豊年と称せられた、大正三年に於ても、千四百万石程度で、反当平均収量は、九斗六升に過ぎない。水利組合令制定当時の水利組合は僅に十四組合の設立を見ただけで、其の面積は二万六千町歩に過ぎない。水利組合令の制定と共に、事業助成の必要は愈々緊切を加えるに至つたので、大正八年四月水利組合補助規程を制定して、本事業の促進を図ることとした。(因みに、水利組合の設立に就ては、事業の調査設計の完備には優秀なる技術者と多額の経費とを要するのみならず、設置事業には巨額の資金を要し、民度低き農民の資力にては其の負担容易ならず、之が為組合事業の興起は遅々たるに盡み、大規模の國營土地改良事業案を立てたるも、再度廃案の已むなきに至つたと云う)。

#### (第三) 土地改良事業補助規則

大正九年十二月、附令で右規則を發布し、補助金交付の範囲及び補助率を増加し、(水利組合補助規程の補助率たる工事費の一割五分以内を、二割乃至三割に増加す。)又企業主体は、水利組合たると個人たるとを問はざることとし、以て土地改良事業の全面的振興を策した。

#### (第四) 朝鮮公有水面埋立令

大正十二年三月制令第四号を以つて、同令を公布して、沿岸及び干瀉地の埋立、又は干拓利用に付ては、従来は国有未墾地利用法に依つていたのを本令に依ることとした。

(以上第三及び第四は産米増殖計畫樹立後の制定に属するも、第二に関連を有するので、茲に併記した次第である。)

農業の目的を以つてする公有水面の埋立、即干拓事業は、(1)事業免許、(2)工事実施設計の認可、(3)工事の施工に伴う補助金の交付、(4)工事完成後竣工認可、(5)事業如付与(無償)、(企業者に所有権が帰属し土地台帳に登録する)の順序で、進捗するのであつて、之

等の事務は土地改良課（土地改良部時代は調査課）で主導したのである。（補助率は後述の通り三割から五割に増額した）。

緒言にも述べた通り、朝鮮の西海岸特に忠清南道から全羅南道に至る沿岸は、干潟地遠く連なり、或は長汀、曲浦深く湾入して、適好な干拓適地が随処に散在し、用水源さえ確立し得れば、比較的少額の経費で、良田を形成することが出来る。工事竣功後も除塩のため二三年を経ねば米作ができない欠点はあるが、有機物に富む肥沃な一団地を集約的に農事経営を為しうる強味があるので、日本人も朝鮮人もこれに着目し、漸次免許を受ける者が増加して来たのである。

註 仁川港附近干満の差、最大三十二尺、平安北道の西海岸及慶尚南道の南岸でも尚七尺内外あり。

朝鮮の干拓事業が内地より有利なる事情、

- 一、陸地に湾入するもの多く防潮堤は一般に短くて足る。即ち日本では一町歩の干拓に対し平均十五間内外の防潮堤の築設を要するに朝鮮では五間内外で足る。
  - 二、朝鮮の干潟地は、地盤一般に高く、且つ日本の如く頻々たる台風の襲来がないので、防潮堤低く且つ構造比較的簡単なもので足る。
  - 三、朝鮮は労働が低い。
  - 四、耕作者住宅の建設及入植等比較的安易である。
- 等の利点が多いので、当時日本では一反歩当事業費五〇〇円乃至一、〇〇〇円を要するに、朝鮮では用水源設備費を含み、反当一五〇円内外で足り、採算面に有利である。

### 第三章 産米増殖計畫

大正八、九年の頃は、日本内地に於ける米の消費量は、年額約六千五百万石であつて、生産高は約五十八百万石を出でず、年々その不足を告げ、毎年三百万石乃至五百万石の外國米を輸入し、大正七年には米騒動が勃発し、大正八年には外米輸入高四百六十四万石、一億六千二百万円の巨額に達し、米穀の需要は毎年七十万人の人口の増殖と相俟ち、将来益々増加を予想せられ、食糧問題の解決は当時我が国民の死活問題たる重要案件であつた。然るに日本に於て急速に米の増産を多く期待すること能わざるも、朝鮮に於ける土地改良事業を拡大実施するに於ては、その効果顕著なるを期待せられた。即ち、日本の始政以来大正八年に至る九箇年間の実績に倣するも、年産約五百万石を増収し、輸出額約二百五十万石の増加を見るに至つたのである。故にこの上更に積極的に土地改良事業を起して、耕地の改善拡張を行い、耕種法改善と併行せしむるに於ては、産米増殖の前途洋々たるものがある。因つて齋藤總督は、就任当初より茲に著眼し、大正九年産米増殖計畫を樹立するに至つたのである。本事業は当時、畚の灌漑改善を為し得べきもの四十万町歩、地目変換に依り田を畚となすべきもの二十万町歩、荒蕪地、干潟地二十万町歩、合計八十万町歩に対し、大正九年度以降三十一年を期し、土地改良事業を遂行する方針の下に、先づ第



一期として、向う十五ヶ年間に、総工費一億六千八百万円（内工事補助金三千八百五十五万円）を投じ、其の約二分の一たる四十二万七千五百町歩の土地改良を行い、耕種法の改善と相俟つて、九百二十万石の産米増殖を図らんとするものである。本計畫の樹立と共に左の施設を見た。

一、土地改良課の設置

大正九年十一月殖産局に土地改良課を新設し、農業水利、土地改良、固有未墾地開拓（沼沢、干瀆の利用を含む）等一切の事務を管掌せしめた。

二、土地改良事業補助規則の制定（前章に述べた）。

三、土地改良基本調査の実施（前章に述べた）。

斯くて第一期計畫は大正九年度以降著々其の進捗を図りたるも、その後財界の変動に伴ひ、企業熱心に衰え、殊に一般金利高率で、工事費に対する二割乃至三割の補助率を以てしては、採算困難なる等諸種の事情により、本計畫實施以来、大正十四年末に至る六カ年間の土地改良面積は、事業著手予定面積十六万五千町歩に対し、実績は漸やく九万七千五百町歩、竣工予定面積、十二万三千百町歩に対し、七万六千四百町歩の実績を挙げ得たに過ぎない。而も一般に耕種法も幼稚の域を脱せず、且つ其他の農事改良も之に伴わない等の為、工事完成後の収穫も予定収量に達せず、事業経営上相当苦境に陥りたるものも生じ、計畫遂行上幾多の障害を招き、事業の進展豫期の如くならざるものがあつたので、茲に極限を新にして、再発足するの必要を生じたのである。

以上の明治三十八年より大正十四年に至る期間は、（第一章乃至第三章）土地改良事業実施の創業時代と云うべく、指導奨励機關、事業代行機關、事業助成の方法等に於て施設甚だ十分ならず、事業の進展豫期の如くならざるのみならず、事業実施の効果も豫想に反したるを見るべく、これ抜本的に構想を新にして再発足を余儀なくした所以である。のみならず、昭和五年以降の米価暴落に際し、経営困難なる水利組合の匡救の急務となりたる要因を醸成した次第でもある。

註 産米増殖計畫實施年度に於て灌溉及開墾事業工事費補助として、總督府予算には左の通り計上している。

大正	九年度	五〇〇、〇〇〇円
大正	十年度	九一〇、〇〇〇
大正	十一年度	二、九〇〇、〇〇〇
大正	十二年度	二、二〇〇、〇〇〇
大正	十三年度	二、七〇〇、〇〇〇
大正	十四年度	三、三〇五、〇〇〇

## 第四章 産米増殖更新計畫

### 第一節 創 設 期

前述の如き実情を察知したので、總督府に於ては、国家的重要政策たる本計畫の進展を期せしむるには、從來に比し一層有利なる条件の下に、事業の助奨を加うるの必要あるを認め、産米増殖更新計畫を樹立し、大正十四年十二月中央政府の承認を得たのである。

(因みに下岡政務總監は、東京に於て本計畫の折衝中十一月廿二日死去せられた。これ、後年本計畫が同總監の一大遺業と称せられる所以である。尚、世上産米増殖計畫と称するは、この更新計畫を指称するのである)。即ち、新に大蔵省預金部より低利の事業資金及農事改良資金の融通を受けることとして、從來の資金難を緩和し、且つ總督府内の監督及助成機関を充実し、一方各業代行の実行機関を創設して事業施行地の測量設計並に工事監督を周到にし、更に肥料増産計畫を樹て販売肥料の施用を増加せしむると共に自給肥料の増産、其他の農事改良を奨励して、品種改良と相俟つて、工事完成後の増収を図り、以て企業者の利益を増加するの方策を樹てたのである。本更新計畫は、其の後昭和四年に至り既往の実績に鑑み、干拓事業の補助率を五割に引上ぐるなど、計畫の内容に一部改訂を加え、其の実行を容易ならしめた。

本計畫は、その所要事業資金総額三億二千五百余万円の内、土地改良資金、二億八千五

百余万円、農事改良資金四千万円と予定し、前者に就ては、国庫補助金六千五百七十万円、及び企業者自身の調達資金二千二百余万円を予定し、その不足額、一億九千八百余万円の半額は、大蔵省預金部の低利資金を供給し、他の半額は朝鮮殖産銀行、及び東洋殖産会社をして調達せしめ、平均七分四厘の利率を以て貸出を受けることとした。而して本計畫の根幹をなす土地改良事業は、大正十五年度以降十二ヶ年(完成まで十四ヶ年)を期し、既成畝の灌漑改善十九万五千町歩、地目変換九万町歩、開墾干拓六万五千町歩、合計三十五万町歩の土地改良に依り、約二百八十万石の産米増加を図り、尚右土地改良施行区域に対する耕種法の改善に依り約九十二万石、土地改良を施行せざる地域の既成畝百三十九万町歩に対する農事改良に依る増加約三百四十四万石、合計約八百十六万石の産米増殖を図り、将来朝鮮内に於ける需要増加を控除するも尚五百五万石の輸移出増加を所期せんとするものである。

右更新計畫の樹立に伴い、事務量著しく増大したので、大正十五年六月殖産局に從來の土地改良課の外、更に水利課、開墾課の二課を設置し、土地改良課に於ては、土地改良事業の監査並に其の基本調査、水利課に於ては水利組合の設置、事業変更、其他同組合に於て実施する土地改良事業に関する事項、開墾課に於ては国有未墾地、農業の目的を以てする沼沢及び干潟の埋立に関する事項を分掌せしめた。更に昭和二年五月二十六日土地改良部が新設されて、右三課を統括することとなり、總督府の指導奨励機関は茲に確立し、鋭意本計畫の実行の衝に當ることとなつた。

尚本計畫の遂行に当り、一般企業者に代り、工事の調査設計、施工監督等に任ずる組織統制ある特殊機關を設立する必要を認め、大正十五年に、東洋拓殖会社に土地改良部を新設すると共に、政府憲憑の下に、新に朝鮮土地改良株式会社（資本金五百万円、四分の一払込、同年七月創立）を設立せしめ、両会社をして各本計畫の一半を分担実施せしむることとした。（これを代行会社と通称し、企業者との契約を代行契約、その受託報酬を代行手数料と称し、これらは總督府の監督の下に実施せしむることとした）。

(註)

産米増殖更新計畫の概要表示

一、産米増殖更新計畫に依る土地改良事業の概要

事業期間	昭和元年度以降十二年(完成十四箇年)	
	内	既成産の灌漑改善
施行面積	三三〇〇〇町歩	一九五〇〇町歩
事業資金	二八五三三〇〇〇円	二五〇〇〇町歩
	内 訳	田を畜とする地目交換 干 開 墾 拓
産米の増収	四七二〇〇〇石	三三〇五〇町歩
	内 訳	三十五萬町歩の土地改良に因り 同上に對し施肥の増加 並に耕種歩の改良に因り
事業資金	二八五三三〇〇〇円	六五〇七〇〇〇〇円
	内 訳	企業者調達資金 二五〇〇〇〇〇〇円 政府幹旋低利資金 一九八一九七〇〇〇円
産米の増収	四七二〇〇〇石	二八〇〇〇〇〇〇石
	内 訳	同上に對し施肥の増加 並に耕種歩の改良に因り

二、産米増殖更新計畫に依る土地改良施行面積豫定表

(単位町)

年 度	灌漑改善	地目交換	開 墾	干 拓	計
昭和元年度	一五五〇〇	七五〇〇	二二〇八五	四一六五	二九二五〇
同 二 年 度	一五五〇〇	七五〇〇	二二〇八五	四一六五	二九二五〇
同 三 年 度	一四五〇〇	七〇〇〇	二二〇〇〇	四〇〇〇	二七五〇〇
同 四 年 度	一四〇〇〇	六〇〇〇	二二〇〇〇	四〇〇〇	二七二〇〇
同 五 年 度	一四〇〇〇	六〇〇〇	二二〇〇〇	四〇〇〇	二七二〇〇
同 六 年 度	一四〇〇〇	六〇〇〇	二二〇〇〇	四〇〇〇	二七二〇〇
同 七 年 度	一四〇〇〇	六〇〇〇	二二〇〇〇	四〇〇〇	二七二〇〇
同 八 年 度	一四〇〇〇	六〇〇〇	二二〇〇〇	四〇〇〇	二七二〇〇
同 九 年 度	一四〇〇〇	六〇〇〇	二二〇〇〇	四〇〇〇	二七二〇〇
同 十 年 度	一四〇〇〇	六〇〇〇	二二〇〇〇	四〇〇〇	二七二〇〇
同 十 一 年 度	一四〇〇〇	六〇〇〇	二二〇〇〇	四〇〇〇	二七二〇〇
同 十 二 年 度	一四〇〇〇	六〇〇〇	二二〇〇〇	四〇〇〇	二七二〇〇
計	一九〇〇〇〇	七五〇〇〇	三二〇八五〇	四一六五〇	三三〇五〇〇

三、産米増殖更新計画に依る土地改良事業資金所要見込額表

(単位 円)

年 度	総 額	構 成 内 訳		
		国庫補助金	企業者調達資金	政府幹旋資金
昭和元年度	一三、〇六九、〇〇〇	二、五九八、〇〇〇	一、三七九、〇〇〇	九、〇九二、〇〇〇
同 二 年 度	二二、四〇二、〇〇〇	四、六八一、〇〇〇	三、二八二、〇〇〇	一四、四三九、〇〇〇
同 三 年 度	二四、七二七、〇〇〇	五、二八一、〇〇〇	三、二二六、〇〇〇	一六、二二五、〇〇〇
同 四 年 度	二一、三一五、〇〇〇	四、七六二、〇〇〇	二、一三九、〇〇〇	一四、四一四、〇〇〇
同 五 年 度	二一、六〇二、〇〇〇	四、九二二、〇〇〇	一、一五二、〇〇〇	一五、五二八、〇〇〇
同 六 年 度	二二、三九七、〇〇〇	五、一八八、〇〇〇	一、二五八、〇〇〇	一五、九五一、〇〇〇
同 七 年 度	二二、七七一、〇〇〇	五、三〇四、〇〇〇	一、三〇八、〇〇〇	一六、一〇五、〇〇〇
同 八 年 度	二二、二四六、〇〇〇	五、一九二、〇〇〇	一、三〇二、〇〇〇	一五、七五二、〇〇〇
同 九 年 度	二二、二四六、〇〇〇	五、一九二、〇〇〇	一、三〇二、〇〇〇	一五、七五二、〇〇〇
同 十 年 度	二二、二四六、〇〇〇	五、一九二、〇〇〇	一、三〇二、〇〇〇	一五、七五二、〇〇〇
同 十 一 年 度	二二、四一、〇〇〇	五、二二、〇〇〇	一、三〇二、〇〇〇	一五、八八八、〇〇〇
同 十 二 年 度	二二、八〇二、〇〇〇	五、四八八、〇〇〇	一、四五二、〇〇〇	一六、八六五、〇〇〇
同 十 三 年 度	一八、六四〇、〇〇〇	四、一〇九、〇〇〇	一、五六九、〇〇〇	一三、九六二、〇〇〇
同 十 四 年 度	五、五一四、〇〇〇	一、九四三、〇〇〇	九四、〇〇〇	三、四七七、〇〇〇
計	二八五、三三四、〇〇〇	六五、〇七〇、〇〇〇	二二、〇六七、〇〇〇	一九八、一九七、〇〇〇

四、産米増殖更新計画完成に依る米の増収見込表

原 因 別	面 積	増 収	
		反 当	計
灌 溉 改 善	一九五、〇〇〇	一、〇五〇	二、〇四七、五〇〇石
地 目 変 換	九〇、〇〇〇	一、八五〇	一、六六五、〇〇〇
開 墾	三、一九五〇	一、五五〇	四、九五二、二五
干 拓	三三、〇五〇	一、五五〇	五、一二二、七五
計	三五四、〇〇〇	一	四、七二〇、〇〇〇
土地改良施行地域			
灌 溉 の 便 有 る 畓	三九〇、〇〇〇	〇・五五〇	二、一四五、〇〇〇
灌 溉 の 便 な ぎ 畓 に し て 土 地 改 良 を 施 行 せ ざ る 畓	九七五、〇〇〇	〇・一二五	一、二一八、七五〇
其 の 他 の 地 域			
陸 稲 反 別 拡 張	七五〇〇	〇・八二五	六、一八七、五
陸 稲 栽 培 法 改 良	一、七七八、〇〇〇	〇・一二五	二、二二五、〇
計	一、三九〇、三〇〇	一	三、四四七、八七五
合 計	一、七四〇、三〇〇	一	八、一六七、八七五



## 第二節 整 備 期

昭和二年から四年頃までは、専ら事業の進展を期すると共に、関係法令の整備に努めた。

## (一)、土地改良令の制定

昭和二年十二月制令第十六号を以て、朝鮮土地改良令を制定公布した、本令は土地改良に関する基本法規である。土地改良事業は、直接企業者に利害関係あるのみならず、灌溉排水、交通、治水等公共の利害に影響する所からず、又其の事業経営に当りても種々困難なる問題があるので、之が保護取締の要切なるを感ずるも、従来何等法規上の根拠がなく、指導監督上不便少くなかつたので、本令を制定して、朝鮮に於ける従来の土地改良に関する法規を整備統一し、且内地の耕地整理法をも参酌したのである。

土地改良とは、土地の農業上の利用を増進する目的を以て、

一、灌溉排水に関する設備又は工事

二、土地の交換分合、開墾、地目交換、又は道路堤塘畦畔、溝渠、溜池等の変更若しくは廃置

三、前二項の爲又は其の結果必要なる工作物の設置又は維持管理を行うことを謂うのである。

## (二)、水利組合令の一部改正

昭和二年十二月制令第十八号を以て、朝鮮水利組合令の一部を改正し、水利組合の目的たる灌溉排水又は防水の外に、土地改良令に依る土地改良を追加し、且土地改良を目的とする水利組合は、当分の内組合区域内の農事改良に関する施設を為すことを得ることとした。

## (三)、土地改良登記規則

昭和三年五月、府令を以て発布せられた土地改良登記規則は同年七月一日より実施せられた、(同時に朝鮮土地改良令及同施行規則も実施せられた)。

## (四)、開墾干拓地移住奨励補助規則

昭和四年十一月、府令第九十五号を以て右規則を発布した。開墾干拓事業は工事竣工後熟練せる耕作者を他の地域より招致せねばならぬので、相当の経費を要するのみならず、一面狭隘なる耕地を擁して、生活苦に喘ぐ農民中優良なる者を選択して、之を開墾干拓地に移住せしむる必要もあるもので、之れが助成施設を講じたのである。この施設は、其の移住次適用区域を土地改良施行地全般に及ぼし、更に農地全般に拡大することとなつた。即ち昭和七年一月(府令第十四号)には、「土地改良施行地移住奨励補助規則」を発布し、更に北鮮開拓事業の進展に伴い、昭和十年五月府令第七十四号を以て、「農地移住奨励補助規則」を発布し、南鮮地方より西北鮮地方への移住を促進することとなつた(従来移住者一戸に付き五十円以内の補助金を、南鮮より西北鮮地方への移住者は、土地改良施行地たると否とに拘らず、百円以内に増額した)。

## (五)、小規模土地改良事業の助成

土地改良事業補助規則は、大規模事業の助成を目標としたものであるが、主として山間部に介在する天水畚の灌漑改善の爲、小規模の土地改良事業を助成することも、亦忽に出来ぬので、昭和五年度以降は、面積三十町歩未満又は工事費予算五千円未満の、此等小規模土地改良事業に対しても、土地改良補助規則とは別途に、助成の途を開き、道地方費に対し昭和六年度以降四万円乃至五万円程度の国庫補助を交付し、道地方費を合し、工事費の五割程度の補助金を交付して、之を助成し、一面労銀の撒布により山間部の小農の救済を図ることとなつた。

## (六)、干拓工事の補助率引上

昭和四年度以降干拓事業の補助率を五割に引上げたのは既述の通りである。

昭和三年及び四年の二箇年に渉る旱魃により、土地改良事業の緊要性が一般に痛感せられ、本期に於ては、本計畫の遂行に拍車をかけ、頗る順調に本格的進展を見、前後を通じ本事業の最も花々しき時代を現出した。そして昭和五年秋の米価惨落に依り、一大頓挫を来すに至つたのである。

## 第三節 停 頓 期

昭和二、三年頃より経済界は深刻な不況に陥り、米価低落を来し、鮮米移入統制問題漸

やく起り来つたが、昭和五年秋、産米の第一回収穫予想が、内地六千七百万石、朝鮮千九百万石、台湾八百万石の日本全版図を奉げて、未曾有の大豊作を報じ、米価の惨落を来し所謂豊作飢饉と称せらるる農村経済への深刻な打撃が生じた、朝鮮に於ても、約約二百五十万石の貯蔵を為す等の応急対策を講じたが、米穀統制施設の殆んど備わらざる當時に於ては、固より米価の暴落を抑止しうる効果に乏しく、水利組合中には地主の総収益を以てするも地税、水利組合費等の公課を負担し得ざるものが続出した。特に更新計畫前に設置せられたる洛東江沿岸の慶尚南道管内の水利組合は、防水施設を組合に於て実施したため、従来より組合費頗る高かつたので最も窮状に陥つた。尚、江原道及京畿道管内の水利組合中には、災害の影響又は設置工事の欠陥などに依り、従来から経営困難を来しているものもあつた。これらの組合は、特に組合費の額が組合員の負担力を遙に超過するため、猛烈な組合費軽減、延納運動を生じた。そこで組合毎に負担力の限度を調査し、負担困難と認めらるる組合に対しては、当年の組合費賦課を負担力の限度に止め（註一）、仍つて生ずる歳入欠陥に対しては、その補填の爲の起債を為すことを許し、以て融資金融機関の表面上の欠損金を皆無にするよう一時の糊塗手段を講じた。然し斯の如きは将来に負担を増加する所以であるから、これらの組合が年利一割内外の高利債を有するので、これを大蔵省預金部より低利資金の融通を受けて借替しめ、毎年度償還の年賦金を軽減することにした。然し大蔵省預金部よりは所謂産米資金を毎年融通を受けているので、その外に別途救済資金を仰ぐことは、二重の交渉を要するし、互に矛盾する面もあるので、実現容易な

らぬものがある。米価暴落の影響は昭和六年に於ても、前年同様の措置を講ぜなければならぬようになった。斯くて水利組合高利債借替資金の融通を受くることは、水利組合救済策として、緊要の問題となり来つた。恰も一面新規事業が予期の如く進捗せず、事業資金も著しく予定額よりも少額で足ることになり、余裕を生ずるに至つたのと、他面政府は東拓に新規融資の資金調達の手を与うる手段として、朝鮮に於ける水利組合の高利債を預金部の低利資金に借替しむる便法を講ずるに至つた機会に便乗して、先づ東拓融通の分七百万円より借替を行い、殖銀融通の分（計八百余万円）に及んだので、昭和六年以降に於て数回の借替を実施し合計千五百万余円の高利債の借替えを見るに至つたのである。（註二）然し江原道の文幕、京畿道の深谷等の水利組合は斯かる財政整理の手段のみでは到底救済し得ないので、債務打切の整理方法を講じ、之を解散せしむることとした。（国、銀行、地主三者分担の方法によつた）。

米価暴落の影響は、昭和六年頃から土地改良事業の勸奨に重大な障害となるに至つた。蓋し農民の企業熱全く衰微し、容易に当局の勸奨に応じないようになった、物価低落の際起工すれば工事費軽減せられ、他日米価昂騰の際には竣工後の利益多大なるべき旨を如何に説得するも耳を傾けず、将来米価昂騰の望み絶無なるに非ずやと反駁して譲らず。加之更新計畫後、施工中の大規模の水利組合設置工事中、安寧水利組合の第六号潜管工事の施工困難、工事費激増、或は咸興水利組合の取入堰工事の予想外の設計變更に依る工事費の増嵩。又は昭和水利組合の工事計畫の根本的挫折、變更などの重大問題が相ついで発生し

辛う、農民が本事業の遂行につき重大な不安と不信の念を生じ、為めに当局に於ても之が打開全く容易ならざる情勢に立ち至つた。茲に於てか、既に設計を完了した「於之屯」八千町歩、黄海。（礼唐（七千町歩、忠南）林原（千二百町歩、平南）金浦（四千町歩、京畿）は遂に組合設置工事著手に至らず。僅に黄海（一万三千町歩、黄海）水利組合のみが辛うじて昭和六年五月設置工事に著手するに至つた。（尤も小規模組合は例外である）。

斯かる事業不振の際、代行会社の二社併立は、各社共欠損を招くの虞があるので、代行機関を統一するの外なきを認め、東拓の土地改良部を昭和七年六月三十日限り廃止するとに、昭和六年七月末決定し、其の業務及職員を一切朝鮮土地改良株式会社に引継がしめたのである（東拓は資金融通）業務のみ従前の通り取扱うものとする）。大正十五年より昭和七年度まで東拓の代行した土地改良（工事監督）施行面積は二万八千九百十七町歩である。（註三）

更に昭和七年の行政整理のため、同年七月二十七日勅令第百八十四号を以つて、土地改良部が廃止せられ、新に設置せられたる農林局に統一することとなり、同時に開墾課は廃せられて土地改良課に統合し、水利課と共に二課制を以つて既定計畫の遂行を図らしむることとなつた。土地改良部は設置以来滿五ヶ年余を以て消滅した訳である。（この間安達房治郎、松村松盛、中村寅之助の三氏が部長として在任した。就中後半の二ヶ年半は中村氏が在任した）。

以上は主として、共同事業である水利組合の新設が停頓した事情を述べたのであるが、個人事業である干拓事業に就ては、むしろこの期間に著しく進展した。蓋し昭和四年度より干拓工事の補助率を五割に引上げ、耕作者の移住に対しても、若干の助成を加える等従来に比し著しく助成の手段を濃厚にしただけでなく、物価労銀の低落のため工事費が低減して来たからである。その外補助金の交付方法に就ても、労銀並に資材の低落せる程度まで、工事費単価の査定標準率を引下げなかつた等の事情から、企業者は多少の甘味を感じずるに至り、鋭意工事を進捗せしめたからである。就中加藤金次郎の猪島干拓（黄海、一、三六一町歩）良井重之の宝城干拓（全南、一、四四〇町歩）の如き大規模干拓事業が、昭和六、七年頃に工事最盛期に入り、五割補助の爲め補助金額嵩み、昭和八、九、両年度に於ても、耕地改良拡張費予算は五、六年度よりも若干増加し、五百万円以上の年額を計上したのである。（補助金は毎年度工事費実績を査定し後払となる）（註四）

（註一）元来水利組合設置の際、収益採算の基礎たる米価は、大正の中頃までは、粳石当八円の低米価を固執したのであるが、産米増殖計画の進展に伴い、米価も工事費も昂騰したので、漸次十円から十二円まで引上げた。そして昭和の初めには反当五、六円の組合費負担を大体の目標として進めたのである。唯だ洛東江沿岸の組合は、河川改修に属する防水堤防を組合負担で設置工事を完了したり、洪水に度々見舞われたりしたので、反当十七、八円の組合費に達したのもあり、それがため米価低落で深甚の打撃を受けたのである。組合の負担力の限度を劃一的にどうしてきめるかは前例もな

く困難な問題であつた。昭和五年産米に対しては、地主の総収益（総收穫量の反当平均の約六割を、庭渡米価を基準として金額に換算する）から、生産費として反当四円を控除した残額を以つて、組合費負担に充当するものとした。右の計算は稍や地主に酷であつたけれども、概ね納得を得た。唯だ江原道の中央水利組合などは特殊事情から、粳の貯蔵をなし、約半年後に之を売却して組合費の納入に充てた（実質的には現物納である）。昭和六年産米に対しては、稍や寛大なる計算方法を採用し、施工前の収益相当部分にはふれず、増収益の範囲だけで組合費を支払わせる、組合の設置計画に順応する措置を執つたのである。即ち大体の目標としては、総収益の三分の一（反当三石の收穫量ならば一石分）を以つて組合費の限度とすることにしたのである。蓋し地主は総收穫量の三分の二位を小作料としてとつてゐるのが、普通の慣行だから、その半額を組合費負担の限度と考察した。故に六年度は殆んど問題なく解決したが、米価も稍や持直して来たし、歳入欠陥補填の起債も、五年度ほどには昇らなかつたのである。

（註二）水利組合高利債借替の交渉は、決して簡単に解決したわけではない。昭和六年六月、今井田政務総監就任の頃は、水利組合救済問題の世論沸騰し、政務総監もその解決は焦眉の急務であることを痛感して、筆者の事務的折衝の外に、自身で大蔵省当局に懸命に懇請した。然るに、朝鮮には関係のない意外の動機から東拓にだけ融通せらるるようになつて来た。之は裏面に政治的動きがあつたのであるが、総督府としては東拓融資の組合には、余り経営困難なものがなく、殖銀融資の分に多いので、救済の順序としては、先づ後者の分から借替させねば筋が通らぬので全く困惑したが、これを謝絶するわけにも行かない。遂に大蔵省事務局もよくその間の事情を諒解し、次回には殖銀の分も面倒を見ようとの默契成立、これが誘い水となつて逐次殖銀分の借



替も成立するに至つたのである。

(註三) 東拓は大正十五年五月京城に支社を置き土地改良部を設置し、理事沢田豊丈を部長に、綾田豊が技師長に就任し、職員数百五十名で六月より事業に著手し、安寧、昭和等比較的大規模の水利組合の代行事業を担当した、昭和六年朝鮮土地改良株式会社に業務を引継ぐまでに遂行した事業実績は左の通りである。

(設計を完了したもの)

水利組合 三六地区 四五、〇〇〇町歩

個人事業 三五地区 一〇、〇〇〇町歩  
及東拓社有地

(註四) 当時巷間に、干拓工事は補助金だけでやれると云う風説が流れていた。斯の如きは全くの妄説であるが、干拓工事費の査定は、事実上真に正確なる数字を捕捉することとは困難であるので、労銀、資材などは標準単価を内定し、これを一律に適用した。例えば人夫賃を一日一円と定めたが、時期に依り、又は地方に依りこれ以下で人夫を雇える場合もあつたと思う。尚工事主として石材、土砂、セメントなどの実際使用量も、何分海中に投下した後であるので、これを正確に測定することは至難であつて結局は企業者の申請を概ね認容する外はない。工事費査定に出張した係官は、十分慎重に調査し的確を期する訳ではあるが、企業者もこれらの内輪の処理に通じている者を雇傭しているし、査定は勢い蔽よりも寛に流れることを免れない。総督府の課長以上の責任者は、部下の査定を信頼して決裁する外はない。自然そこに若干企業者にとつて甘味があるのは止むを得ないであらう。水利組合が公法人として競争入札に依り証憑書を整備し、帳簿を確実に記載することは、法令上義務づけられており、又総督府及地方庁から直接工事完了後は、会計検査を必ず施行したのとは、そこに可なり

相違があるのは、蓋し当然の成行であらう。

(註五) 昭和十一年度末現在に於て干拓事業地は百九十カ所、開闢面積は三萬三千六百五十九町歩に達した(全羅南道は七十一カ所、忠清南道は三十三カ所)。規模の大なるものは不二興業株式会社西鮮農場(平北、四千町歩)、同社沃溝農場(全北、千九百五十七町歩)及び朝鮮開拓株式会社延海農場(黄海、千九百余町歩)である。前二社は藤井寛太郎、後者は松山常次郎の企画に係るものであり、昭和四、五年頃には殆んど竣工していた。これに続いて前記の加藤金次郎、良井重之、及び阿部房次郎の東津農場(全北、一四二五町歩)等が竣工したのである。

#### 第四節 整 理 期

##### (一) 産米増殖計畫の中止

土地改良部廃止後は、昭和水利組合(平南、安州、平原二郡、二万八千五百町歩の鮮内最大の土地改良事業)の測量設計を完了し、之が工事に著手することは、関係者の最大唯一の関心事であつた。本組合は、元来大同江締切案によることとし、東拓の代行にて、地区内の測量設計を終り、ダムサイドのボーリングの結果、地質不良(石灰岩にてコンクリートダム建設に適せず)のため、价川郡峡谷の貯水池案に変更し、更に土地改良会社の代行にも、昭和八年十月測量設計を終り、正に工事に着手せんとした。時恰も昭和八年秋の産米の大増産に際会したのである。同年産米は内地七十八万石朝鮮一千八百十九万石と予想せられ、昭和五年以上の大豊作で、産米千三百万石に達すると称せられた。米価

応急対策としては、内外地を通じ粍の長期貯蔵を実施することとし、朝鮮では粍三百萬石の貯蔵と、道地方費による粍四十六萬石の買取等の施設を為し、米穀移出調節の措置を講じた。然しながら斯く数年に渉り、再度の大豊作と、米価惨落の情勢とは、今や鮮米の輸入統制を叫ばるるに至り、朝鮮産米増殖計畫の根底を動揺せしむるに至つた。昭和九年一月二十六日衆議院予算委員会に於て、永井拓務大臣は、政府は当分昭和水利組合の設立を認可せざる方針なる旨を答弁するに至つたので、土地改良事業は茲に致命的打撃を蒙つたのである。総督府が斯かる措置に同意するの余儀なきに至つたのは、土地改良事業実施の方法、助成の施設、水利組合の整理計畫実施の必要、既に発生した設置未済の組合の測量設計費其の他の創立費の善後措置等に関し、根本的に検討を加え、之等の始末を講ずるの必要に迫られ、此の際一時新規事業を中止して、その財源を既設水利組合の救済、或は未設置組合の善後措置等に振替え、再発足するの止むなき事情を痛感したからである。即ち「一利を興すよりも一害を除くに若かず」との考慮より、昭和九年五月産米増殖計畫の一時中止を決定発表したのである。従つて現に実施中の継続事業の完成は勿論之を許容するも未著手の事業は、助成金の交付に依る工事の施行は之を認めないこととなつたので、既に創立事務を開始する水利組合三十地区並に既に免許を与えたる干拓事業十九地区に對しては之を打切らしむることとなつた。尚新規の事業に就ては設置認可又は免許を与えざることは言を俟たない。

今、大正十五年産米増殖更新計畫着手以来、昭和八年度末現在までの事業の実績を左に掲げることとする。

(イ) 施行面積 (昭和八年度現在)

区分	総予定計畫	昭和八年度迄の予定計畫	昭和八年度迄の実績	総予定計畫に對する実績の割合	昭和八年度迄の予定計畫に對する実績の割合
著功	三五〇〇〇〇町	二一、六〇〇町	一五、九六三町	四六%	七二%
功	三五〇〇〇〇町	一八、八六〇町	一四、二〇九町	四一%	七五%

(ロ) 事業資金

区分	総予定計畫	昭和八年度迄の予定計畫	昭和八年度迄の実績	総予定計畫に對する実績の割合	昭和八年度迄の予定計畫に對する実績の割合
国庫補助金	六五〇、〇〇〇円	三七九、二八〇〇円	二七、一〇、一〇〇円	四二%	七三%
企業者調達資金	二二〇、〇〇〇円	一五〇、〇〇〇円	一三、八三、六六四円	五八%	八五%
政府幹渡資金	一九八、一九〇〇円	一七五、〇一〇〇〇円	七、九七、〇二六四円	三九%	六六%
計	二八五、三三、〇〇〇円	一七〇、四七五、〇〇〇円	一、一八、四一、三三八円	四二%	六九%

(ハ) 産米の増収

区分	総予定計畫	昭和八年度迄の予定計畫	昭和八年度迄の実績	総予定計畫に對する実績の割合	昭和八年度迄の予定計畫に對する実績の割合
作付面積	三五〇、〇〇〇町	一、〇〇、〇〇〇町	一、九一、三四町	一九六%	二五%
増収量	四、四〇、〇〇〇石	一、一〇、〇〇〇石	一、二九、七五石	一、二九七%	二五%
反当増収量	一、三五	一、三二	・九四	・六三	六九

(註一) 米の收穫高 (朝鮮)

[illegible]

併  
合  
の  
年  
要

産米増殖計画樹立の年

産米増殖更新計画樹立の年

大增収。米価惨落、水利組合の救済緊切となる。

土地改良部 廃止。

大増収。土地改良事業中止の原因となる。

産米増殖計画一時打切となる

(註二) 昭和十九年二月調査の計数として朝鮮總督府の議會説明資料には朝鮮産米増殖更新計画と其の突績を左の通り要約対照している。

## 計畫

一期間

大正十五年度以降十二力年

(完成十四年)

## 二、計面面積

実續

## 一、實施期間

大正十五年以降九力年

(昭和九年度に計画遂行中止)

(昭和十三年度に工事終了)

## 二、實施面積

[illegible]

土地改良新規事業の中止は、土地改良会社の経営に致命的打撃を与うるので、継続中の代行事業の完了を俟つて、むしろ会社を解散するの外なかるべき旨を総督府当局との間に協定を遂げ、国策転換の犠牲として解散するものなるを以つて、七万五百余円の解散補償金を交付することとした。昭和十年七月廿五日の株主総会に於て、昭和十年七月卅一日限り解散することに決議し、清算配当金として、一株に付金拾円四十銭を払戻し、株主の損害も比較的少くして、昭和十一年九月末日清算結了した。会社の代行事務の実績は土地改良事業の測量設計八十三地区、面積十萬九千四百二十六町歩、同工事監督四十二地区面積





昭和十二年度に於て

三、不成立水利組合創立費補助  
を総督府予算に計上している。

六七三、二四三円

## (二) 水利組合の整理

昭和九年十月末現在に於て、全鮮の水利組合数は百九十六、事業面積二十万七千三百八十町歩に達し、その大部分は事業完成したのである。今水利組合発達の概況を見るに、明治三十九年水利組合条例公布以来、大正八年度には十六組合、面積三万六千八百八十町歩（此間十四年を経過す）に過ぎなかつたものが、昭和二年度末に於ては、百七組合、面積十四万五千六百余町歩の数字を示した。それが昭和九年度に於ては前掲の通り、発達したものである。土地改良基本調査による土地改良施行適地六十五万町歩に対しては約三分の一程度の実績に相当する。産米増殖計畫実施の効果顕著なるものあるを見るべきである。唯だ慶尚南道、京畿道、江原道管内の水利組合中には、（勿論他道にも存在するも其の数少ない）災害其の他不測の障害を蒙り、多額の復旧及び改良工事費を要し、加うるに米価下落の爲債務年々増加し、一方組合の面積及び收穫高等当初の計畫に達せず、爲にその債務の償還極めて困難に陥り、其の儘放置するを許さざるものあるを以て、土地改良部時代に於て種々の対策を講じ来つたことは上述の通りであるが、土地改良新規事業打切の機会に於て、助成金を新規事業より既設組合の救済に転用して、昭和十年度より根本的整理案を

成立させることになり昭和十年四月左記要綱を決定発表した。

### イ、甲種組合（廃止組合）

毎年度組合の経常費を支弁し能わざる五組合は、（京畿道の津南、江原道の旌善、佳谷咸鏡北道の榮山）その債務総額八十九万圓中、組合員の負担し得る額十三万余圓を差引き、残額は国及び融資銀行会社に於て折半負担し組合を廃止する。

### ロ、乙種組合（組合債の償還に付国庫より補助を為す組合）

経営困難の程度特に甚しき三十五の組合に付ては、

一、組合債二十九万圓の金利引下げ及び償還年限の延長を為すこと。

二、年賦償還額に比し組合の負担力不足する金額を毎年度国庫より補助（総額千六百四十七万圓）すること。但し本補助金は組合債償還を完了する三十年間に亘りて交付し爾後二十年以内に国庫に返納せしむるものとす。

三、関係法令を改正して理事及び主任技師を官選とし其の給料の補助を為すこと。

四、更生水利組合連合会を組織し整理実行の中心機関たらしむること。（註一）

（因に本連合会は昭和十年五月十四日附を以て其の設立を認可され、同十六日を以て第一回総会を開催した）

ハ、丙種組合（経営困難なるも其の程度比較的軽きもの）

経営困難の程度比較的軽き二十八の組合に就ては組合債二千万圓の償還年限の延長を行うこと。

## 二、改良工事の施行

前掲乙及び丙種組合の工作物にして維持管理上放置し難きものに就ては特別補助金を交付して改良工事を施行せしむること。

(註一) 更生水利組合連合会は右整理計画に基き所属乙組合の組合債を全部肩替り整理し返納、(二) 積立金の管理処分、(三) 所属組合に於て将来必要な資金の貸付、(四) 其の他之等に関連する事務の処理を目的とし、三十五の乙水利組合を組合員とする公法人で、事務所を総督府内に置き、所要経費は反別割を以て弁し、之を所属組合に分賦する。会長、副会長、理事、総会等の機関を有する。

(註二) 昭和十年度に於て産米増殖計画を中止した結果は、昭和十一年度以降は継続事業を実施するのみで、助成費予算も著しく減少し、昭和十三年度に於て継続事業も完結したので著しく消極的となるを免れず、唯だ僅に從來実施して来た既成耕地改良工事費補助として年額十五萬圓、小規模灌溉工事費補助として年額四萬圓を計上する程度に過ぎなかつたが、十二、十三年度に於ては、新に用排水施設改善補助として年額四萬五千圓、堤堰補修工事費補助として年額二十八萬圓を計上した。昭和十四年度は事業最も不振の年で、僅かに小規模事業助成費を三十五萬六千圓に増額したに止まり、専ら既設事業の維持管理に主力を注いだのである。

(註三) 昭和十三年五月には朝鮮土地改良協会を設立し、全鮮水利組合(一八九組合、蒙利面積合計二十二萬九千三十五町歩)を打つて一九とし土地改良事業の発達と会員相互の共同利益の増進を図ることとした。協会の事務所は京城に置き、各道に支部を置いた。

## 第五章 土地改良事業の復興

## 第一節 増米計量及改訂増米計量

## (一) 増米計量

上述の如く昭和十年より十四年までの五カ年間は産米増殖更新計量中止後土地改良事業の不振を極めた期間であつて、専ら既設水利組合の維持管理不良水利組合の整理に没頭したのである。而るに、昭和十二年七月支那事変勃発するや米穀の需給関係緊迫を告げ、同年の大豊作後に於てすら需給の不円滑を来す虞あるのみならず、更に将来の消費量増加を考慮すれば、著しき不均衡を招来せんとする気運を示すに至つたので、中央政府の方針に順応して、日本の主要食糧たる米穀自給確保を愈々強化する必要上、朝鮮に於ても急速な増産を企図し、国庫経費百二十萬圓を投下して、昭和十四年度に於て耕種法改善に依る、百二十萬石の増産計量を樹立実施することとしたのである。その実施方法は稲作栽培、技術の改善向上、農業労力の調整、種子更新事業及び病虫害防除の強化徹底、自給肥料の増産、増施奨励等、稲作経営の改善を基調とせるもので、本施設には特に直接農家の指導に当るべき郡農会、邑面、(町村に相当す)指導職員の充実整備に重点を置き、半島官民協

力一致の下に増米の実績挙揚に努め、且つ兵站基地半島の使命達成を期したのである。然るに本年秋、不幸にも中朝鮮地帯に於ける未曾有の大旱魃に遭遇し、植付不能畓四十四万町歩に達し、枯死及び収穫皆無に等しきもの二十五万町歩に及び、平年作に比し、約一千万石の減収を見る、大悲慘事を現出した。水利事業中心の深甚なる影響は茲に如実に表現したのである。

この当面した米穀事情の緊迫した情勢に対処するのみならず、将来の人口増加、文化経済の向上、大陸への供給などを考慮するときは、増米の必要緊切なるものがあるので、耕種法改善並びに土地改良事業の併行実施に依り、新に朝鮮増米計畫を樹立実施することとなつたのである。

この増米計畫は、(1)耕種法改善に依る場合には十四年度実施の計畫に引続き十五年度以降五カ年間に涉り、(2)土地改良事業の場合には昭和十四年の旱害救済、土地改良事業に引続き十五年以降六カ年（竣工八カ年、農事改良完成十一年）を期間とし、計畫完成年次（昭和二十五年）に於ける増産目標數量を約六百八十万石とし、総生産數量約三千五百万石を確保せんとするものである。即ち、今次の増米計畫は形式上産米増殖更新計畫とは切離された別箇の新計畫なるも、實質的には未完成に終つた前者の継続事業であり、補充事業と認むべきであつて、ここに土地改良事業は六カ年後に復興の機運に遭遇したのである。今これを分説する。

(1)耕種法の改善 これにより五百一十一万石の増産を目標としている。従来の産米増殖計畫

に於ける耕種法改善の重点は、並肥の施用と種子更新事業の奨励にあつたのであるが、今後は以上の方法のみによる増産は期し得なくなつたので、今回は総ゆる角度から検討して実績の挙揚に努め、左の各般の事項を整備施設することとした。即ち、(一)指導力の充実整備、(二)計畫の実行単位の設定、(三)耕種法の改善施設、(四)部落共同作業実施の奨励、(五)販売肥料配給の適正並びに合理的施用方法の徹底、(六)労力並びに灌漑水の配給調整の確立等である。

(2)土地改良事業に依る増収目標は百六十九万石である。産米増殖計畫に於ては灌漑改善事業の外開墾、干拓、地目変換等畓面積の積極的拡張を図つたのであるが、今回の計畫に於ては急速なる増産の効果を挙げると共に、資材特に鋼材の節約を期し、(一)事業の進展に依る時局の影響）又更に半島の旱害恒久対策としての見地より、主として既成畓の灌漑改善に重点を置き、新規開畓は灌漑改善と同時に実施するを有利とするものに限ることとし、尚、既往の実績に徴し、従来実施中の耕地整理事業及び小規模事業を拡充して、本計畫中に包括せしめ、新たに暗渠排水等既成畓の施設改善にも留意し、耕種法の進歩に対応せんとするものである。本計畫の概要は

- 一、施行面積十六万三千町歩（内訳、灌漑改善十二万七千町歩、小用排水施設改善（耕地整理、暗渠排水）二万四千町歩、小規模事業一万二千町歩）
- 二、事業資金総額一億二千六百八十二万四千円である。また事業に対しては補助金の交付及び技術的助成を厚くした。

右土地改良施行面積十六万三千町歩の内、大地区の灌漑改善は七万町歩と予定せられたが、その内に産米増殖更新計畫当時未著手の止むなきに至つた昭和水利（平安南道平原郡二万五千町歩）、於之屯水利（黄海道沙里院、八千町歩）、礼唐水利（忠清南道礼山、唐津二郡に渉る。七千町歩）の三大水利組合の実施が決定を見た。（於之屯は結局著手できなかつたようである）

(註) 昭和八年以降米の収穫高（朝鮮）

年 度	収 穫 高	要 摘
昭和八年	一八一九、二七二〇石	空前の豊作と称せられ産米増殖計畫中止の原因となる
同 九 年	一六七一、七二三八	産米増殖計畫中止せられた。
同 十 年	一七八八、四六六九	
同 十 一 年	一九四一、〇七六三	本年度以降、米穀生産高調査を大規模に実施することとなる。
同 十 二 年	二六七九、六九五〇	米穀自治管理法の適用を見た。
同 十 三 年	二四一三、八八七〇	半島空前の豊作。千百萬石を輻移出す。
同 十 四 年	一四三五、五七九三	朝鮮米穀市場株式会社設立、米価公定の実施。朝鮮米穀配給調整令公布。旱害の被害激甚。土地改良事業復興の機縁となる。
同 十 五 年	二一、五二七、三九三	備考 作付面積は平年一六〇萬町歩乃至一七〇萬町歩である。昭和八―十三年は大豊作の連続である。昭和十一年より米穀統制の端緒を開き、十四年より統制強化せられた。

増米計畫の樹立に伴い、土地改良協会の如き私設任意団體を改組して、其の事業内容を強化拡充し技術陣容を整備し、主として水利組合の改良工事及び耕地整理事業の代行機関とするため、法令に依る朝鮮水利組合聯合会が昭和十五年七月一日設立せられた。会長には元の朝鮮總督府土地改良部水利課長池田泰治郎が就任し、旧土地改良部関係の技術官を中軸として所要の技術陣及び事務職員を漸を追うて充員し百五十名内外に達した。斯くて既設水利組合の改良工事及び耕地整理事業を各々十組合位代行した。後述の朝鮮農地開發管団は更にこの聯合会の事業を継承したのであるが、専ら設置工事に主力を傾注したので、既設水利組合関係の工事代行機関として、聯合会は引続き存続はしたが、会長は管団理事長の兼務となつた。即ち管団設立後、聯合会と併存したけれども、管団と同居し首脳部は管団によりて統括せられ、聯合会はむしろ既設組合の連絡調整、農事改良等の維持管理関係の業務を専担し地味な存在となつたようである。

朝鮮土地改良株式会社解散後は、工事代行機関を欠如したので、朝鮮水利組合聯合会の如き所謂外廓団體を設置するの必要は認めらるるが、国庫補助金の交付もなく、僅少なる組合醸出金を經常収入としては格別の活動を期待することも困難であるのみならず、実費程度の代行手数料では受託事業を遂行するが精一杯であつたと思料せらるる。これが大規模の新規事業を再開するに當つては、既設の水利組合聯合会の外に、更に強力なる朝鮮農地開發管団を設置した所以である。



二 改訂増米計画

昭和十五年度より実施した増米計画は昭和十六年十二月八日大東亜戦争が勃発するや戦時食糧増産の緊迫せる要望に應ずるため実施後僅々二カ年にして根本的に計画を改訂し、長期計画に更め施設を拡充強化した。

即ち其の梗概は左の通りである。

- 一、期間 昭和十五年度以降十二カ年（完成十四カ年）
- 二、面積 土地改良事業施行面積、五七七、七〇〇町歩

内 訳

- 灌漑及開墾 四三五、七〇〇町歩
- 用排水改善 八八、〇〇〇〃
- 小規模事業 二四、〇〇〇〃
- 干拓事業 三二、〇〇〇〃

三、計画増産

六一九六、〇〇〇石

土地改良施行地

四、工事費

六四八、三五九、〇〇〇円

土地改良事業

本計画の増産目標は昭和三十年度に於て基準数量二二、八三八千石に比し、土地改良事業

に依り六、一九六千石、新種法改善に依り、五、一八七千石を増産してこれに陸稲四一五千石を加えて総計三四、六三六千石の生産を確保せんとするものである。而して（一）右事業の実行機関として特殊法人たる朝鮮農地開発営団を設立して予定事業の進捗を図る（後述）（二）政府の助成を濃厚にして土地改良事業補助規則を改正して補助率の増加を図る（三）従つて国の予算支出を著しく増大する等の施策を講じたのである。

補助率は左の通り増額せられた（土地改良事業補助規則第二条）。

- 一、朝鮮農地開発営団令第三十八条の農地開発事業 五割五分以内
- 二、畚の灌漑排水改善を為す事業 五割以内
- 三、海面又は水面を埋立又は干拓して畚となす事業 五割以内
- 四、田、林野其の他の土地を畚となす事業 五割以内
- 五、耕地整理、暗渠排水其の他畚の区劃形質の変更を為す事業 三割以内

三 朝鮮増米計画の実績

昭和十九年二月現在、朝鮮總督府調製の昭和十七年改訂増米計画と十八年度現在の実績とを対照表を議院説明資料に左の通り掲記している。

計 画		実 績	
(一) 期 間		(一) 期 間	
昭和十五年以降十二カ年（完成十四カ年）		昭和十五年より四年目	

(二) 計画面積

土地改良事業施行面積

五七七、七〇〇町歩

(二) 実績面積（昭和十八年度末現在）

土地改良事業施行

（完成）面積 八九、〇七五町歩

事業別		総計面積	昭和十八年度迄
灌漑及開墾		四三三、七〇〇町	五八七、〇〇〇
用排水改善		八八、〇〇〇	二四、〇〇〇
小規模		二四、〇〇〇	八、〇〇〇
干拓		三、〇〇〇	一

事業別		面積	計画に對する割合
灌漑及開墾		五九、一五二町	一四%
用排水改善		二、四〇〇	二四
小規模		八、五二三	三五
干拓		一	一一〇

(三) 計費増産

土地改良施行地

六、一九六、〇〇〇石

(三) 増米量（十九年度産米）

土地改良施行地 九八〇、四七九石

（昭和十九年度予定 九九二、〇〇〇石

（昭和十九年度計費増米に對しては 九六%

（外に早稲對策事業 一、五四七、七四二石）

(四) 工事費

土地改良事業 六四八、三五九、〇〇〇円

(四) 工事費

土地改良事業 七三、〇二一、二二四円 一一%

改訂増米計畫と其の実績

（昭和二十年度議會説明資料に依る）

年度		事業別		計	實	計画に對する割合	計	實	計画に對する割合
昭和十五年		灌漑改善		九、一〇〇町	一〇、三三九町	一一四%	六、七〇〇町	八、〇六八町	一二〇%
昭和十五年		用排水施設改善		四、〇〇〇町	三、九八七町	九九%	四、〇〇〇町	三、九一八町	九八%
昭和十五年		小規模事業		二、〇〇〇町	一、九三一町	九六%	二、〇〇〇町	一、九一八町	九六%
昭和十五年		干拓事業		一、五〇〇町	一、六二九町	一一一%	一、五〇〇町	一、二九〇町	一〇二%
昭和十六年		灌漑改善		二、四六〇町	二、五六五町	一一〇%	二、四六〇町	三、九四七町	一六一%
昭和十六年		用排水施設改善		四、〇〇〇町	四、二〇七町	一〇五%	四、〇〇〇町	四、〇二〇町	一〇一%
昭和十六年		小規模事業		三、〇〇〇町	二、六九三町	九〇%	三、〇〇〇町	二、一六六町	七二%
昭和十六年		干拓事業		三、〇〇〇町	三、二五三町	一一〇%	三、〇〇〇町	九、六八三町	三二二%
昭和十七年		灌漑改善		四、〇〇〇町	五、四四七町	一三七%	四、〇〇〇町	八、八八七町	二二二%
昭和十七年		用排水施設改善		二、〇〇〇町	五、二〇六町	二六〇%	二、〇〇〇町	五、八七三町	二九四%
昭和十七年		小規模事業		二、〇〇〇町	一、八九九町	九五%	二、〇〇〇町	二、二六一町	一一三%
昭和十七年		干拓事業		五、四〇〇町	六、二八七町	一一六%	五、四〇〇町	一、七〇二町	三一五%
昭和十八年		灌漑改善		四、〇〇〇町	三、〇七三町	七七%	四、〇〇〇町	一、九三九町	四八%
昭和十八年		用排水施設改善		二、〇〇〇町	四、一八二町	二〇九%	二、〇〇〇町	四、七六八町	二三八%
昭和十八年		小規模事業		二、〇〇〇町	二、二三四町	一一二%	二、〇〇〇町	一、〇九九町	五五%
昭和十八年		干拓事業		五、四〇〇町	七、五五四町	一三八%	五、四〇〇町	二、五二一町	四六%
昭和十八年		合計		一、五三七町	一、二二四町	八〇%	一、五三七町	四、九八〇町	三二五%
昭和十八年		灌漑改善		一、一三七町	一、一七五町	一〇二%	一、一三七町	一、七五八町	一五九%
昭和十八年		用排水施設改善		二、四〇〇町	二、七五八町	一一五%	二、四〇〇町	二、四四四町	一〇二%
昭和十八年		小規模事業		二、〇〇〇町	二、〇〇〇町	一〇〇%	二、〇〇〇町	二、〇〇〇町	一〇〇%
昭和十八年		干拓事業		一、五三七町	一、五三七町	一〇〇%	一、五三七町	七、四八二町	四八%
昭和十八年		合計		一、五三七町	一、五三七町	一〇〇%	一、五三七町	八、二二六町	五三%

尚増米計畫実施の灌漑改善工事費補助として予算に計上した助成費は左の通りである。

昭和十五年度	三、三七八、一〇〇円
十六年度	一一、五三三、六六八
十七年度	一〇、五七五、〇〇〇
十八年度	一七、八八〇、〇〇〇
十九年度	九七、二七二、一二一
二十年度	五六、六五九、八六九

(註一) 既設水利組合の現況

昭和十八年十二月調成の議会説明資料中には朝鮮總督府主務局の調査に基き昭和十七年度末に於ける水利組合の現況を左の通り記述している。

- 一、水利組合数 四二八(工事中のものを含む)  
蒙 利 面 積 三〇五、五二一町歩  
昭和十七年度 組合費総額 一五、二三五、七三五円  
昭和十七年度 増収量(玄米) 二、四三一、三七五石
- 二、事業完成せる三〇四組合収支状況(昭和十七年度)  
実 収 面 積 二三一、八三一町歩

施工後総収量	七、五二七、四四六石(反当平均三、二五)
増 収 量	四、八六二、七四一石(反当平均二、一〇)
増収量穀価換算	八七、五二九、三三八円(石当一八円換 反当三七円七六)
組 合 費	一五、二三五、七三五円(反当六円五七)

三、土地改良資金貸出、償還実績

水利組合数	三六四組合
借入額合計	一五五、一七五、九五九円
償 還 額	五〇、一五〇、〇五八円
未償還額	一〇五、〇二五、九〇一円
借入額の内訳	
一、設置事業費	一一五、一九四、三二四円
二、区域拡張事業費	七、〇六三、一六〇円
三、追加改良事業費	一三、二八一、八九一円
四、災害復旧事業費	四、九六七、二二八円
五、歳入欠陥補填	一四、六六九、三五六円

水利組合の現況 (昭和十七年度末)

道 名	組合数	蒙利面積	十七年度組合費総額	事業に依る増収量(玄米)
京畿道	三〇	一二九八四町歩	一、〇六八八九六円	一二九〇三八石

忠清北道	二一	五三一七町歩	一四九五〇六円	三〇四一〇石
忠清南道	三五	一七九九〇	七九八八二	一三六六四〇
全羅北道	三一	四六〇〇九	二二六三一一	五〇五四二二
全羅南道	五六	一三六七九	五四〇四五二	六三一一三九
慶尚北道	四一	一〇、四一八	四四三八七一	六二一〇五
慶尚南道	五九	二、三八八	一、五四四八三〇	一五三一一九
黄海道	三〇	五〇、七四五	二、八九二九八一	五三六六〇五
平安南道	二二	四二、〇一四	八七六七三四	一〇八三八四
平安北道	三四	三、三三八	一、九二五五九三	三四七八一八
江原道	一五	一六六五二	一、二六七二四一	一五〇二九五
咸鏡南道	三二	二七六六二	一、一七〇六五一	一八五〇九一
咸鏡北道	二二	七二〇三	二九、九九七	三三三〇九
計	四二八	三〇五五二一	一五二三五七三五	二、四三、三七五

備考 本表には設置工事中のものを含む。

(註二) 審の造成を目的とする国有未墾地附与払下処分実績(昭和十七年度末現在累計)

件数	五、七二七件
面積	一三、四八二町歩
審の造成を目的とする公有水面埋立工事竣功認可実績(昭和十七年度末累計)	
件数	四、〇八二件
面積	四〇、三六八町歩
備考	両者、面積合計五萬三千八百五十町歩は概ね水利組合に依らざる個人企業として実施せられたものであるけれども、この中相当の面積が水利組合区域に包含せらるるを以つて、水利組合の面積と単純に重複計算して土地改良事業施行の総面積と為すことは出来ない。其の正確なる分別は調査困難である。

## 第二節 朝鮮農地開発官団の設立

昭和十六年支那事変愈々拡大して大東亜戦争勃発の危機緊迫し来るや、食糧自給の国策を急速に強化するの必要から法律第六十五号を以て政府は農地開発法を發布した。本法は助成金の交付及び農地開発官団の設立によつて農地の造成及び改良を促進しようとするもので、農地開発官団に関する規定が大部分を占めている。即ち官団の資本金の半額は政府が出資する。その農地開発事業は農林大臣の定める区域及び計畫によつて行われ、官団は開発用の未墾地等を収用し得る等、相当強力なる国管代行機関である。

朝鮮に於てもこの構想により朝鮮農地開発官団の設立を見ることがとなつた。即ち昭和十七年十二月八日制令第三十四号を以て「朝鮮農地開発官団令」を發布せられたのである。大東亜戦争の勃発後滿一年目に当り公布せられ、この間食糧自給の緊急性益々重大化し、總督府は鋭意本官団設立の準備を進め来つたのである。今官団令の骨子を述べる。

一、官団は重要農産物の増産を図る為必要な農地の開発に関する事業を行うことを目的とする法人である。



二、管団の資本金は壹千万円とするが、朝鮮総督の認可を受け之を増加することができる。  
三、役員は理事長、副理事長各一人、理事三人以上及び監事二人以上を置き朝鮮総督之を命ずる。

四、管団は払込資本金額の五倍を限り朝鮮総督の認可を受け朝鮮農地開発債券を発行することができる。

五、管団の農地開発事業は左の順序方法で運営せられる。

イ、農地開発事業の区域及び計畫は朝鮮総督が定め之を管団に通知する。

ロ、管団は予め農地開発事業の施行地区及び実施計畫を定め朝鮮総督の認可を受ける。

ハ、前項の認可申請あるときは実施計畫を地域内の土地所有者其の他の利害関係人の縦覧に供し、異議の申立あれば時宜に依り変更を加えて認可する。認可すれば其の旨を告示する。

六、管団に対しては朝鮮総督が業務の運営に関する各般の監督を行う。

七、管団は農地の造成に供する未墾地等を収用することができる。

要するに管団は土地改良事業の代行機関であるが、往年の朝鮮土地改良株式会社とは全然その性格を異にし、国営代行機関たる性格を具有する特殊の非営利法人であり、政府より特別の権能を与えられ、政府の特別の監督に服する頗る強力なる国策遂行機関となつたのである。

管団令の公布と同時に、総督府は設立手続を進め、昭和十八年一月十三日、理事長以下役員の任命と管団の設立登記を了し、二月十日、開團式を挙行し、業務の運営を開始したのである。元農林局長渡辺忍は理事長に、元水利課長（水利組合聯合会長）池田泰治郎は副理事長に任命せられた。そして資本金は壹千万円全額出資で、出資者は国、殖銀及東拓の三者（各約三分の一宛出資）であつた。尚債券引受は大蔵省預金部、三分の二、朝鮮金融団が三分の一を引受けることに協定が成立した。管団の事業費は各地区事業に対し交付せらるる土地改良事業補助規則に依る国庫補助金、管団令に於いて認められる短期借入金及び債券発行によつて調達するのである。管団は畢竟工事代行機関であるから工事竣工につき朝鮮総督の認可を受ければその使命を終るわけで、完成した事業地については、関係地主を以て水利組合を組織せしめ、当該地区の総事業費より国庫補助金を控除した額を、代償として水利組合より支払を受け、施設物は一切之を水利組合に引渡し、組合が維持管理に任ずるわけである。組合は起債によつて管団に代償金を一時払いし、融資機関に対しては年賦償還に依り返済する仕組である。

（管団は従来の代行機関の如く工事の測量設計、工事監督を代行するのみならず、水利組合が従来実施していた用地買収、工事の入札施行、国庫補助金の受入、工事完了までの工事資金の借入等まで代行するもので水利組合の殆んど大部分の機能を代行するものである、）

## 第三節 朝鮮農地開発官団の運営

官団の事業目標は改訂増米計畫に依る土地改良事業中毎年

灌漑改善（大地区三百町歩以上） 三万町歩（十カ年三十万町歩）

干 拓 二千町歩（八カ年一万六千町歩）

合計三十一万六千町歩の農地開発を目標とするものである。而して各年度に於て事業に着手したものは

昭和十七年度	九地区	四五、二五九町歩（平南（元昭和）二八、五〇〇町歩を含む）
昭和十八年度	五地区	一七、七六二町歩（東津の拡張を含む）
昭和十九年度	二〇地区	二三、一八八町歩
外に	三地区	二、七五〇町歩は工事停止
昭和二十年度	三地区	一、五八〇町歩 （八月中旬終戦、事業打切）
合 計	三七地区	八七、七九四町歩

官団は昭和十八年二月十日開団と同時に事業に着手し、二十年八月十五日終戦と共に事業打切の止むなきに至つたので、実際に活動したのは僅かに二カ年半に過ぎなかつた。当

の結果である。即ち従来停頓していた昭和（平南と改称）、礼唐等の事業の復興着手を見た外、新規に東津（拡張）等の企畫を見たのである。けれども事業進捗の状況は必ずしも順調ではない。既に戦局の進展は多量の労務及資材を直接戦争目的に供用せねばならぬこととなり、所謂銃後に於ける資材、特に鉄材セメント等の調達に日に増し困難を加え来り、労務の供給亦意の如くならざるものあり、官団当局の苦悩も深甚なるものがあつた。然も官団の首脳部は短期の在任で更迭の止むなきに至つた。渡辺理事長の朝鮮食糧官団総裁に転出に伴い、大島良士（元東亜製薬株式会社社長）後任となり、池田副理事長辞任後は後任の補充を見ず、事務担当の理事も転出するなど、役員の頻々たる更迭を見た。事業担当の職員は業務の拡大に伴い増員せられ、終戦時には総職員数は一千四十二名に達したのである。

斯くて業務開始以来終戦時まで満二カ年半、之の間着手した八万七千余町歩の事業中、設置工事が殆んど完了に近づいたのは善山（四五二町歩）、東面（二、〇七一町歩）、金烏山（四一〇町歩）、桃花（五五〇町歩）、福大（五〇〇町歩）の五地区計四、六二二町歩に過ぎない。（全北等の五地区計三〇、一二一町歩は組合の設置許可を見ただけで全く工事着手に至らなかつた。）平南（元、昭和）、礼唐などの三二地区計約八三、〇〇〇町歩は工事中途にして終戦に遭遇し事業打切となつたのである。蓋し資材労務等の窮乏の結果事業の進捗意の如くならず、末期には官団の全力を平南地区の工事完了に集中したのであるが、導水トンネルの貫通、貯水池の大部分の工事を辛うじて終了し、通水式を挙行し

た直後に、終戦の詔勅を拝するの悲運に遭遇したのである。

終戦時までの事業資金として投下した金額は凡そ左の通りである。

一、出 資 金 一千万円 (政府、朝鮮銀行、東拓各社、昭和二十七年、八、九各年度百万円づつ出資。)

二、借 入 金 三千三百万円 (大蔵省預金部、二千五百万円、殖産部、八百万円)

三、債券発行高 二千万円 (朝鮮金部、引受組合連合会、引受四百万円)

四、国庫補助金 五千六百二十八万七千九百三十三円七十四銭

合 計 一億一千九百二十八万七千九百三十三円七十四銭

上述の如く営団の事業は、著手は予定の目標に略ぼ近かつたけれど、竣工の実績は甚だ不振であつて、戦時下の食糧増産に直接寄与した効果は殆んどなかつたと云つてよい。蓋し土地改良事業は、事業の著手より竣工までに短くとも兩三年の歳月を要し、食糧の緊急増産には間に合わない性質のものである上に、戦局の緊迫は物資、資材、労務の窮迫を告げ、予期の如き進捗を見ることが極めて困難で、平時に幾倍するの労苦を尽しても、僅少の進捗しか期せられない事態に立ち至つていたからである。即ち時期既に遅かつた恨みがある。然し若し兩三年の歳月を尽すことが許されたならば、恐らく所期の事業を完遂して、産米の増産に貢献し、その使命を達成し得たであらう。

斯くて当初の産米増産計画に依る三十五万町歩の土地改良事業は、幾多の迂余曲折変遷難緯の後、農務開発営団によつて所期の目標を達成すべき機運に遭遇しながら、測らざる

朝鮮統治の終焉と云う悲運に見舞われ、千仞の功を一キに欠き、有終の美を納むることができなかつたのは真に千秋の恨事である。

(註一) 営団の企業事業中大規模事業の進捗状況

一、「平南及東津」中編 大規模事業中に説明す。

二、「礼唐」 七、〇九〇町歩、(忠南)

昭和十九年度に漸やく工事著手したが貯水池及平野部の工事約二一%の出来形で打切。

三、「全北」益沃、臨盆、全益、沃溝の四組合を昭和十五年に合併したが、この隣接区域を新に補助貯水池二箇を設けることにより、区域拡張せんとするものであるが、遂に工事著手に至らなかつたのである。

(註二) 営団の灌溉改善事業費

昭和二十年八月末日現在の営団の決算書に依れば営団の存続中に支出した灌溉改善事業費の全額は一億一千四百五萬七千円余である。

其の内訳は

一、工 事 費	六五、九六五、七九一円
二、用地買収及補償費	一三、九三〇、二二五円
三、調査設計費	一、六一八、三八六円
四、工事監督費	五、七四〇、九二七円
五、工事費前払金	二六、六二五、四三六円
六、雑 費	一七六、三〇五円

第四節 戦時食糧緊急増産対策

昭和十八年度に於ては既定の増米計畫に依る事業の外に戦時食糧緊急増産対策として鋼材、セメントなどの軍需資材を使用しないで、地方農民の労役を主として築造せらるる小規模の溜池工事等の簡易用水源工事を広く全鮮に渉り急速実施を強行した。この計畫は、小磯総督の発案に依り三回に渉り予算措置を講じ、総動員体制で地方官民を督励し、強行したものであつて、全くの非常時施設であつた。

区分	事業別	面積	事業費	増米量	附記
増産事業	小水源施設	三六五〇町歩	五四七五〇〇〇円	三三二一五石	米関係補給金より充当する事業
	第一次 緊急増米用水源拡充施設	一五〇〇〇	二二五〇〇〇〇	三七五〇〇	
	第二次 同上	一〇〇〇〇〇	七四四五三三八	一〇〇〇〇〇〇〇	
計		一一八五〇	八一七三三三八	一〇〇四四一五	増米百萬石、面積十萬町歩、昭和十八、一〇、一五、閣議決定

而して昭和十八年度は一二三千町歩の竣工を見たのであるが、十九年度も一〇〇千町歩を実施した（実績は資料なく不明）ようである。

- 一、地区の選定 概ね五町歩以下の適当な地区を道技官が選定した。
- 二、事業主体 主として土地改良契（関係地主の任意組合）であるが個人農場もある。
- 三、実施設計 道の土地改良技術官が担当した。
- 四、工事の施行 請負に付したのもあるが蒙利地区内の農民に出役させ、或は学徒に応援出勤させたものもある。工事監督は郡の農業技術員を道に於て短期講習を為し、総動員体制で当らせた。工事用スコップは特に確保し配付した。
- 五、助成金 国が道を経由して企業主体に交付した。補助率は五割であるが、企業主体の現金負担がないように特別に考慮したようである。
- 六、事業実施の地区数 南鮮各道は二千乃至三千地区、北鮮各道は五百乃至七百地区位に達したようである。十八、九、兩年度に於て、適地は殆んど実施し尽くしたようであつて、地主に歓迎されたのであるが、資材不足等のため幾分工事の欠陥を生じた箇所も相当生じたのは免れない。

尚二十年度予算には未曾有の施設を計上された。即ち左の二件である。

- (一) 旱魃奮の田転換に要する経費として、六、四七一、五七一円。
- (二) 灌漑用地下水利用施設に要する経費として一、九八九、三二七円（適地に井戸を掘り、ポンプ揚水灌漑を為すもの）

- (一) は朝鮮の畝の総面積一七四万町歩中水利不安全畝三〇万町歩、天水畝五七万町歩ある



が、この中、一〇万町歩を山に転換すると共に二一萬町歩に対しては代作施設を強化し、旱魃に対する方策を講ぜんとするものであるが、突施に至らず終戦となつたようである。

以上の通り終戦直前には朝鮮に於ては官民必死の努力を為して、産米の増加に巨額の国帑の支出を惜しまず（註）全力を傾注したのであるが、肥料、勞力、畜力、資材等極度に窮乏し加之天候に恵まれず、昭和十七年以降不作続きで、十七年一、五六八萬石、十八年一、八七一萬石、十九年は一、六六〇萬石程度の生産量に過ぎず、食糧事情著しく窮乏し、殆んど日本への移出力を喪失するに至つた。

（註） 朝鮮總督府特別会計歳出予算の膨張 千円

昭和十六年度	一、〇六〇、七〇一
十七年度	一、一五八、八〇三
十八年度	一、六七一、九六五
十九年度	二、四四一、七〇六
二十年度	三、〇七七、一〇七
同上耕地改良拡張賛助成費の膨張（工事費補助の外一切の助成費を含む）	
昭和十六年度	一四、〇七三 千円
十七年度	一六、二六三
十八年度	二五、三七五
十九年度	一〇七、〇一九

昭和二十年度

六五、〇一四

（註） 昭和十七年度以降の産米量の減少は、供出制実施の影響で、実収量を相当下廻る数字に公表されたように思料せられる、単に天候不順の影響だけではないようである。増米計画の効果を批判するにはこの点を斟酌する必要がある。

（註） 地下水利利用計画は京大工学部出身の技師を採用し全鮮に亘り電波探知機を以て地下水源を探索したが、調査報告まとまる頃終戦となつた。

## 第五節 戦時の食糧統制

前述した通り、昭和十二年の日華事變勃発で、米の問題は全く事態一変し、新しい相貌を呈して来た。政府は内外地を通じ食糧増産の緊急対策を実施し来り、朝鮮の増米計画が復興した事情及びその成果は前各節に述べた所であるが、昭和十五年からは、米の供出配給制が実施され、十六年には麦類の国家管理も断行するに至り、十七年二月には食糧管理法が公布された。これは米を中心とする食糧の国家管理、需給調整の価格の公定、一元的な供出配給機構の確立を規定し、総合的な戦時食糧管理の体制をつくつたのであつて、食糧管団の設立、一日成人一人二合三勺（三三〇グラム）の配給制の実施を見た。日華事變勃発の翌年、昭和十三年には外地米千五百万石の移入があつて、内地の食糧事情を緩和し

たのであるが、日華事変の、大東亞戦争への拡大に伴い、満洲及支那に於ける軍用米の供給、所謂兵站基地の役割を、朝鮮が果さねばならぬこととなつたが十七年以降は朝鮮の産米量も著しく減産し、次第に日本への移出力も減退するに至つた。

米の生産及び輸入高

年次	日本生産量	日本の輸入高 (タイ、仏印)	朝鮮から 移入高	台湾から 移入高	計	朝鮮の産米高
昭和十六年	五五〇八八千石	八七四四千石	五二三五千石	一七〇二千石	七〇七六九千石	二四八八六千石
十七年	六六七七六	五五八八	一	一六三八	七四〇〇三	一五八八七
十八年	六二八八七	一	三、五〇〇	一、三〇〇	六六六八七	一八七一九
十九年	五八五五九	一	一、四二一	一五一	六〇一三一	一六六〇五
二〇年	三九一四九	一一〇	一	一	三九二五九	生産責任数量として二、 六〇〇千石を予定した

右表の如く昭和十六、七年には南方、主としてタイ、仏印からの輸入により日本内地の食糧不足を補充していたが戦局の重大化に依つて昭和十八年から杜絶し、十八、十九の兩年に於ては朝鮮及び台湾に対し、農林省の特別の懇請によつて移入を獲得したのであるが二十年にはこれも期待できず、日本内地は極度の食糧不足に陥り、二十年七月から配給量も二合一勺に切下げられたのみならず、配給の内容が、極度に悪化低下し、国民は遅配欠配に悩まされ、敗戦の止むなきに至つたのである。要するに朝鮮米移入の杜絶が日本食糧

難の致命的原因となつた事情を理解すべきである。

第六章

結 論

叙上各章に説述した通り、朝鮮の土地改良事業は、統監府時代より終戦時まで約四十カ年に亘り漸次実施せられ、一時停頓中絶したけれども、再び復興し、四十万町歩を越ゆる耕地の改良と拡張を為し遂げたのであつて、半島産業開発の中軸を為す施設であつた。国の保護助成は漸次強化せられ、地主の単独又は共同の企業であると云う立場を保持しつつも、漸次国策の推進であると云う色彩を濃厚にして来た。産米の増収に寄与した効果は勿論顕著であるが、朝鮮米の飛躍的増産は決して土地改良事業の効果だけではない。耕種法の改善などの農事改良に俟つ所多大なるのみならず、天候に左右されることも亦大きい。降雨適順であつた年は、旱害激甚な年に比し一千万石にも達する非常な増産を見るのは朝鮮米作の著しい特色である。故に土地改良事業の産米増殖上の効果を、余りに過大評価するのは妥当ではない。むしろ灌漑、排水設備の整備によつて米作の安定を図り、農家経済の安定と向上に資する点を水利事業の最大の効果と考へねばならぬ。そしてこの事業は、その企畫から竣工まで、どんな小規模なものでも二カ年にかかる。一万町歩程度の大規模な事業となれば、地主の同意取纏め、測量設計、水利組合の設置認可までに満一年、工事の完成に少くとも三年の日子を要する。そして通水ができて農事の改善を見て十分な収量

を挙ぐるには、耕作者の訓練などに、更に二三年を要する。干拓地ともなれば、耕作者の移住、除塩作業など、更に厄介な問題がある。故に土地改良事業に産米増収の即効薬の役目を期待するのは、根本的に誤謬である。私は食糧増産緊急対策として大規模の土地改良事業を企及する人の常識を疑う。土地改良事業は緊急対策ではなくて恒久対策である。日本の人口食糧問題への少くとも五年、十年後の貢献寄与を目標として怠らず、恒久、不<sub>ハ</sub>断<sub>ハ</sub>の推進を期せねばならぬ。一時に余り手を弛げ、且つ急速に工事を完了しようとすれば、測量設計の重大な過誤から、蒙利面積の測定を誤つたり、重大な工事の欠陥を来したり、工事費の不測の増嵩を来したりする過誤失敗を招来する。慎重な用意と周到な計費は本事業の推進に最も肝要な根本義であることを忘れてはならぬ。

土地改良事業は関係地主の共同事業であることは事業の本質上当然である。故に朝鮮では「水利組合」日本内地では「土地改良区」と云う企業形態を組織せしめて、これに国が助成することにしていた。けれども最早や「食糧自給」の「国策遂行」と云う重大目的が事業推進の眼目となつて来た。故に地主の保護助成よりも、国自身が施設して地主に維持管理だけさせると云う事業形態を採ることが必要である。工事遂行の危険負担は国が飽く迄も為すべきであつて、地主に損失を負担せしむべきではない。そこで国費の十分なる支出、低利長期の事業資金の調達、最も肝要である。愛知用水公団の設置と運営は、其の理想的形態と云わねばならぬ。内外地に渉る永年の経験は、ここに始めて理想的の企業形態を案出したものと思う。この意味に於て朝鮮の土地改良事業は貴重な体験を与えたものである。

次に、水利事業は、畢竟するに河川の利用事業の一つである。故に河川を中心とする国土総合開発の一環として施設計画されねばならない。水利事業のみ独走することは無謀であり、且つ危険であり、不合理である。治山治水、発電などと共に灌漑排水事業が総合的に企及し推進されねばならぬ。朝鮮の土地改良事業が時として頓挫し、失敗した事例があるのは、当然この総合開発の観点に立つて、出発しなかつたのも一原因である。殷鑑遠からず、昨今に至り漸やく政府に於ても、セクシヨナリズムの弊を気付き、重要河川につき、国土総合開発計画を樹立しつつあるは、まことに結構なことである。私はその円滑なる運営を期待して止まない。

戦後政治情勢の激変により、朝鮮の土地改良事業の成果が、直接日本の食糧自給に寄与する所がなくなつたのは、千秋の恨事であるか、朝鮮総督府又は代行機関に勤務した多数の技術職員並びに事務職員が、農林省の国営工事又は民間事業に従事し、貴重な朝鮮時代の体験を生かして、日本の新事業の推進に鋭意貢献しつつあるは、全く同慶に堪えない所であつて、この意味に於て、朝鮮の土地改良事業が貴重な素材を提供したのだと思うと聊か満足するものがある。

(前編。完)

関係各位の健闘を祈つて止まない。

附 錄 (名簿)

歷代朝鮮總督

一寺内正毅	自明治四十三年十月九日
二長谷川好道	自大正八年八月十六日
三齋藤實	自昭和二年八月十二日
四山梨半造	自昭和四年十二月十七日
五齋藤實	自昭和六年八月十七日
六宇垣一成	自昭和六年八月十七日
七南次郎	自昭和十七年八月五日

政務總監

一山縣伊三郎	自明治四十三年八月十一日
二水野銀太郎	自大正八年六月十二日
三有吉忠一	自大正十一年七月十五日
四岡忠治	自大正十三年七月十四日
五湯淺倉平	自昭和二年十二月二十三日
六池上四郎	自昭和四年四月四日
七兒玉秀雄	自昭和六年六月二十二日
八今井田清德	自昭和十一年八月十九日
九大野綠一郎	自昭和十七年八月五日

八、小磯國昭	自昭和十七年五月廿四日
九、阿部信行	自昭和二十年八月十五日

一〇、田中武雄	自昭和十七年五月廿四日
一一、遠藤柳作	自昭和十九年七月廿四日

朝鮮總督府土地改良事業主務局部長

內務部長官	宇佐美勝夫	土地改良部長	松村盛
內務局長	大塚常三郎	同	中村寅之助
農商工部長官	木内重四郎	同事務取扱	古庄逸夫
同	石塚英藏	農林局長	渡辺忍
殖産局長	小原新三	同	湯村辰二郎
殖産局長	西村保吉	同	山沢和三郎
殖産局長	池田秀雄	同	塩田正洪
土地改良部長	安達房治郎	同	白石光治郎



朝鮮總督府土地改良主務課長

內務部第二課長	大塚常三郎	農林局水利課長	橋本(技師太郎)
內務局社會課長	矢島杉造	農林局土地改良課長	古庄逸夫
殖産局土地改良課長(兼務)	篠原英太郎	同 上	碓井忠平
同 上 (兼務)	渡辺豐日子	同 上	岸勇一
同 上	湯村辰二郎	同 上	細見正義
土地改良部土地改良課長	秋原彦三	同 上	乾明
同 上	古庄逸夫	同 上	耕地課長 一杉藤平
土地改良部水利課長	池田(技師泰治郎)	同 上	農産課長 厚地法人
同 上	橋本(技師太郎)		
土地改良部開墾課長	湯村辰二郎		
同 上	飯島(技師寛一郎)		
同 上	橋本(技師太郎)		
同 上 (兼務)	古庄逸夫		

朝鮮土地改良事業史

(中 編)

大規模事業

目次

一、東津水利組合	77
二、黄海水利組合	81
三、咸興水利組合	85
四、安寧水利組合・大林農場	86
五、昭和(平南)水利組合	88

一、東津水利組合

大正十三年は甲子の歳に当り、朝鮮の迷信に従つて、一般無智の人民は年初から恟々として居たが、植付時期に至つて米産地たる兩鮮地方に大旱害起り、為に植付不能の水田は兩鮮五道(忠北除く)に亘り約二十六万町歩を超え、減収約三百万石と予想せられた。就中全羅北道中部の金堤、井邑、扶安三郡の、水利組合未設置の地帯は、激甚なる被害を受け、之が当面の救済、並びに恒久対策としての水利組合の設置は、緊急の事態となつた。東津水利組合は急速に設置の機運に向い、全羅北道知事亥角仲藏氏は大正十四年八月退官して自ら組合長に就任し、本組合の設置工事を推進することとなつた。本組合は東津江の流域を中心とする金堤、井邑、扶安の三郡一邑二十二面に亘る、一万四千五百六十町歩の大平野の旱魃常習地を灌漑する目的を以て、大正十四年八月十九日設置認可を受けた。其の水源としては全北、全南、の東部を兩流する燒津江に求め、「雲岩」(井邑郡山内面宗聖里)に一大コンクリートダムを築造して、一大貯水湖を形成し、ダムの上流一里の地点右岸に隧道を穿ち、この辺より源を發して西流する東津江に之を導き、井邑郡泰仁面洛陽里に到りて、金堤、井邑兩幹線水路に取入れ、幾多の支線、支渠を設けて区域を灌漑することが当初の設置工事の計畫である。工事は組合直轄とし、工学士佐原辰雄(後に總督府水利課技師に就任)を技士長に招聘して事業実施に着手し、昭和三年より灌漑を開始した。

引続き末流の金堤郡進鳳面地方三千町歩を第一期張工事として区域に漏入した。即ち地区末端の干瀆地に、阿部房治郎の経営する東津農場に於て、千四百余町歩の大規模の干拓地を造成することとなつたので、灌漑の安全を期するため、予備貯水池進鳳堤を新設して、万一に備え、且竹山、新坪兩淤を改修連絡し、従来の淤水源及平野の落水をも利用してこの地方に補給することとした。この第一期区域拡張工事が、昭和四年六月竣工すると更に第二期拡張工事に着手した。これは非灌漑期の水を万頃面菱堤を増築して、これに揚水貯溜して、金堤郡万頃、青鰐、及び孔徳面内千五百町歩の畝を灌漑するものであつて、昭和五年四月著手、六年六月から灌漑を開始した。以上二回に渉る拡張工事の結果、蒙利面組合計一万八千五百町歩に達し昭和水利組合の設置を見るまでは当時最大規模の水利組合であつた。

東津水利組合の雲岩貯水池は、設置当初から水力発電に備えて施設したのだが、昭和四年に至り、余剰水を南朝鮮水力電気株式会社に供給することとし、同社は新に隧道千四百十七間を掘鑿して導水し、二四八尺の落差を生ぜしめ、井邑郡山内面宗山里に発電所を設け、昭和六年十月一日から営業を開始した。同社は資本金二百五十万円で元京畿道知事米田甚太郎氏が社長に就任した。最大発電能力五千二百二十キロワット時の設備を有し、姉妹会社たる南朝鮮電気株式会社に売却し、広く全北、忠南兩道に亘り配電するものである。以上略述した通り、当時朝鮮最大の水利事業であつた本組合は、約七カ年の歳月と、約一千万円の巨費を投じて、事業は順調に進捗し、四十万石に達せんとする増収を挙げ、顕

著な効果を挙げたのである。

即、本組合の事業費は概要左の通りである。

事業区分	事業費	内国庫補助	内起償額
当初施設事業	九、四〇〇 千円	一、六六三 千円	七、六五〇 千円
第一期拡張事業	二〇〇	三七	一六三
第二期拡張事業	七九四	一五二	六四二
計	一〇、三九四	一、八五二	八、四五五

尚右の外灌漑排水改良事業（九六千円）災害復旧事業（四〇〇千円）東津江改修事業（二五〇千円）耕地整理事業（二四千円）を実施した。

事業施行後の成績は左の通りである。

年度別	区域面積	実耕面積	平均反当	事業施行後総収量	平均反当	対施工前増収量
昭和三年度	一三、九四〇 町	一一、三五〇	二、七三	三三七、九七一	一、一三	一三八、三二〇
昭和六年度	一八、五〇〇	一七、八二六	二、六五	四七二、三八九	一、〇四	一八五、三九〇
昭和十年度	一八、五〇〇	一八、〇二〇	三、七一	六六八、二五九	二、一〇	三七八、四二〇

一、東津水利組合

## 備考

- 一、事業施行前反当平均収量は一石六斗一升である。
- 二、昭和六年度は水害の爲め收穫激減したのである。

因みに、組合費は、規約に依る反当賦課額は、反当平均六円〇八であつたが、十年度の實際賦課額は反当平均四円九四で、相当低減している。十年度に於ては平均反当収量三石七一の好成績を示し、組合費は反当平均五円弱の負担に止まつた次第であり、本組合は予想以上の好成績を納めたものと云わねばならぬ。

## 東津水利組合雲岩大堤

全羅北道山内面宗聖里に築設せるものにして、河床上高さ八十六尺、長さ百七十四間のコンクリート堰堤とし、更に其の頂部に高さ十二尺五寸、幅三十尺、二十四連の調節水門を設けて、蟾津江流路に貯水し、洪水時には其の扉を捲揚げ、溢流せしめて、水位を調節す。満水位の標高五百七十尺、貯水池面積七百二十一町歩、長さ六里半、周囲十八里余、上流集水面積四十九方里にして、最大有効貯水量、二十一億八千二百余万立方尺、(二万二百三町尺)、有効水深六十尺なり。この総工費二百三万余円である。本工事は大正十四年十一月初工、昭和三年一月五日より貯水を開始したのである。

昭和十八年度に至り朝鮮農地開発管団に於て本組合の第三期区域拡張工事を更に実施することになつた。これは昭和十六年に隣接の古阜水利組合を東津水利組合に合併して、古阜水利組合の既設の貯水池を廢してこれを耕作地区とし、別に隣接地区を区域に編入して一〇、七七三町歩の区域拡張を行い、その水源としては、東津水利組合の既設の雲岩貯水池の下流の蟾津江に、更に高大なるダムを築造し、貯水量を増大して、地区全部に灌漑せんとする計畫である。その工事費予算は約五千万円である。本拡張工事は貯水池の工事に一旦着手したけれども、セメントの入手難のため間もなく、工事を中止し、管団は全力を平南水利組合に傾注したので、僅々(一四%)の出来形に止まつて成功を見なかつた。故に管団に依る区域拡張工事は殆んど其の実績の見るべきものがないので、詳説することを省略する。

## 二、黄海水利組合

## (一) 沿革

遂命の三十八度線を北に超え、土城駅を過ぎ、黄海線の狭軌の輕便鉄道に乗替え、礼成江を渡れば水田の間に白川温泉が在る。この辺から黄海道東南端の延白平野約二万町歩が海州附近まで連亘している。この平野は古来旱水害の厄に逢うこと頗々、殊に大正八年及



昭和三年の大旱魃時には真に激甚な被害を生じた。それで大正九年に、西部延白平野及海州郡の一部を加えた、約一万町歩を区域として延海水利組合の設置が計畫され、大正十四年十一月事業著手し、昭和五年三月末を以つて事業完了し、茲に産米増殖計畫に属する大規模水利組合の一が予期以上の収量を挙げ、非常な実績を挙ぐるに至つた。然るに東部延白平野は、一般に五年一作と称せられ、旱害激甚にして、地元農民の疲弊その極に達し、不在地主たる資本家の所有地増加し、荒廢の度進んで来た。總督府は昭和二年九月から本地域の基本調査に著手し、昭和三年四月これを完成したので、同年末から黄海水利組合の創立に著手し、四年三月末に組合の設置認可の運びに至つた。而るに、右事業計畫が、既設の延海水利組合の水源を侵すとの危惧から、礼成江締切案をも比較研究すべしとの条件を總督府で附したため、更に一カ年の日子を費し、遂に原案に依ることに決定した。昭和六年愈々工事に著手せんとするや、米価の惨落に出会したため、一部の評議員に猛烈な反対起り、回顧録に記述した通り、之が説得に多大な困難に遭逢したが、昭和六年六月起工九年三月工事に於ても財政經理に於ても、頗る満足すべき成績を以つて竣工した。

(組合長、安岡莊藏。副組合長孔望学)。

## (二) 事業計畫

本組合は、東部延白平野十三方面に海州郡秋花面の一部を加えた、蒙利面積一万三千三百二十四町歩、(内一万一千八百十五町歩は既成灌)に対する灌漑及排水を主たる目的とするものであつて、区域の西端、花陽川の上流に鳩岩貯水池、(貯水面積千二百七十町歩)、東北端、漢橋川の上流に礼義貯水池(貯水面積四百八十八町歩)の二貯水池(共に土堤)を築造し、水源に充つる外、南大池を待池として利用することとし、一条七里の導水路、六条十七里の用水幹線、百七十二条六十一里の用水支分線に依り、自然灌漑を爲し、尚羅津、浦川本流外十条九里の排水路改修を行い、排水の完全を期するものである。

## (三) 実績

事業費は総額七百六万余円で竣工し、(創立計畫は千十八万余円)反当事業費は五三円余(計畫、七八円余)に過ぎず、爲めに組合員負担は反当五円九十二銭(計畫七円四〇銭)にて足ることとなり、事業竣工後の反当収量は、昭和十年に於て既に三石四升に達し、計畫の二石八斗を遙に超過するの実績を示し、三十九万石余の総収量を挙げ、施工前の十一万二千石に対し、実に三倍半の増収を来すの予期以上の効果を挙揚するに至つた。故に区域内の地価昂騰し地主は歡喜の声を挙げ、組合事業の成功を内外に誇示するに至つたのである。私は三日三晩不眠不休の説得が、遂に斯の如き予想外の成功を納めたのを現実に見て、今更ながら衷心満足に堪えざると共に、朝鮮に於ける水利事業の効果が真に偉大なるものあるを如実に體驗した次第である。

黄海水利組合鳩岩貯水池

一、位 置

黄海道延白郡掛弓面鳩岩里

一、集水面積

二六、七〇〇町

一、貯水量

三〇、〇九二町尺

一、満水面積

一、二六九町

一、平均水深

二二尺

一、灌漑面積

一〇、七一八町

一、構 造

土 堰 堤

一、最大堰高

六九尺五

一、堰 長

三四六間

三、咸 興 水 利 組 合

咸興水利組合は咸鏡南道咸興を曲繞する咸興平野を流るる城川江の上流に設けられたる電源開発事業の余恵によつて出来上つたものである。昭和二年五月、野口遵氏は、興南に朝鮮窒素肥料株式会社を設立し、五年後より操業を開始した。同会社は鴨綠江の支流赴戦江を堰き止めて、山上に一大貯水池を作り、之を日本海方面へ逆流せしめて、三千数百尺の落差を利用し、二十万キロワットの電力を得、年額五十万噸の硫安製造及び之に附帯する化学工業を経営せんとするもので、其の発電設備に五千二百万円、硫安工場に六千万円の巨費を投じた大工場である。この発電事業は昭和三年十月第一期工事に着手し、四年十二月竣工と同時に、発生電力を興南に送電して、大規模に窒素肥料製造を開始した。即ち赴戦江貯水池の水は、城川江に流入するので、これを咸興の上流五里の「五老」に於て堰き止め、この取入堰の比較的格安の設備を以つて、水源工とし、咸興平野の内、蒙利面積一万二千百町歩を灌漑し、（補助施設として他に取入堰及び在来湫の利用各一カ所を設く）産米の増収を期せんとするものである。即ち本組合は咸州郡及定平郡地内十カ面を地区とし、昭和四年四月設置を許可せられ、六年三月竣工した。総工費は三百三十五万円で、反当僅に二十七円六十七銭に過ぎない。主たる水源工である城川江取入堰は、コンクリート造で、堤塘の高さ五尺、延長百五十六間、一、〇〇六秒立方尺の水量を取入れるのである。この工事は円滑に竣工したが、愈々通水を開始した処、流水と共に意外に多量の土砂

が取入口に混入し取入水門下流の用水幹線が土砂で埋れてしまうと云う困つた事態を生じ、これが対策に苦心研究の結果、追加工事を施工して、土砂の流入を可及的阻止することにした。即ち固定堰の上にストニーゲート十三連（一連の巾一二米）の可動堰を設けることにし、嚴寒の際にも死力を尽して鋭意工事を進捗せしめて、通水期に間に合わせることでできた。この工事は当時日本で最初の大工事であつたと云う。このストニーゲートの合理的操作に依つて、土砂の流入もなく、見事に好結果を奏することが出来た。この追加工事は朝鮮土地改良株式会社の技師長浅野健一氏の構想発案に依るものであつて、技術者間にも設置の効果につき、相当論議があつたが、僥倖にも意想外の成功を納めたのである。

（因みに浅野技師長の記憶に依ると本組合の測量設計及工事の施工中、部落民の反対に遭ひ、警察官護衛の下に作業を進め、従業員が用水に投げこまれたり、請負人の事務所が襲撃され怪我人を生ずるような不祥事も発生したという）。

#### 四、安寧水利組合

黄海道の西北部に在る載寧江の流域、載寧、安岳の兩郡に亘る一帯の平野と、大同江南岸一帯の芦田地帯とを蒙利区域（約一万町歩）として、安寧水利組合が昭和三年設置せられた。本組合は東部の代行で工事に着手した。貯水池（長寿堤と呼ぶ。貯水容量六五〇万

立坪）導水路等の主要工事は円滑に進捗したが、載寧江の支流たる西江を横断する所謂第六号潜管工事の施工に關し難工事に遭遇し重大なる事態を生じた。地区の末端には、約千四百町歩の芦田がある。この芦田を国有未墾地として、大阪の土建業者大林組が貸付を受け、本組合の蒙利区域に加入して、前記第六号潜管を通じて、灌溉水の供給を受け水田を造成せんとするものである。然るにこの潜管工事は当初簡単に施工し得るものと予想したものの如く、西江の付替工事を施さず、河底に潜管を埋設せんとしたる処、潮汐逆流するのみならず、地盤軟弱にして泥土に潜管を安置することができず、鉄板を使用して流水をせきとめ、ポンプ排水をして地盤のコンクリート打を為さんとしたが、水中にて硬化せず空しく時日を遷延して、灌溉時期を失せんとするので重大問題となつたが、總督府並に大林組に於ても技術陣を総動員して、苦心慘胆の結果辛うじて仮通水に成功し、後、兎も角も潜管を埋設して本通水に仕上げることができた。けれどもそのために巨額の工事費の増嵩を来すの止むを得ないことになつた。蓋し、斯の如き難工事を予想せざりし為め、梁橋式の導水設備に依らず、（揚水電力費の節約を考慮したのである。）又は西江の部分的付替工事をも施さず、そのまま潜管を、江底を横断して埋設せんとしたため意外の難工事に遭遇したのである。

大林組は、千二百七十八町歩の国有未墾地貸付を受けた外、民有買収地も加え、約千四百四十町歩の一団地を、大林農場として経営し、約四千万円の経費を投じ、昭和七年三月には工事竣工し、國から貸付地の付与を受けたのである。昭和十二年には概五万四千石の

收穫を挙げ、その後も毎年概四万七、八千石の収量を獲得して事業は成功を納めたのである。芦田が良畜と変じた合理的な土地改良事業の好典型と称せねばならぬ。

駐 株式会社 大林農場 社長 大林茂雄

農場長 小島幹吾

（工事費には水利組合施工の貯水池、幹線水路等の経費を含みぬ。これは水利組合費として農場から組合に対し納付せらるるのである。反当収量は毎年平均概三石四斗内外である。）

農場の職員数は約三十五名、耕作者は約二百五十戸を入植させた。

## 五、昭和水利組合（改称平南水利組合）

### （一）沿革

北鮮の首都平壤、楽浪文化の故都、大同江の雄大なる景観、西鮮工鉱業の雄都を北上して約二時間、線路の西側には平原、安州の二郡に連亘する一大平野が展開する。広茫約三万町歩、満目乾涸地帯、水源に恵まれず只天水を俟つて僅少なる収量に甘んじ、粗放農業を営むの外なく、これ実に土地改良を実施するの最も緊要な典型的地帯で、区内第一の大

規模水利事業である、昭和水利組合の企畫せられた地帯である。

斯の如く本組合は区内最大の事業であり、且つ最も有意義の事業であつたに拘らず、幾度か蹉跎に蹉跎を重ね、誠に数奇な運命に遭遇した。その根源に遡つて反省すれば、結局河川開発利用計畫を国土総合開発の見地に立つて、河川改修、電源開発、農業水利等の、所謂総合的、多角的な観点から関係当局が十分熟議の上、慎重な調査設計に基く企畫を樹立せずして、土地改良事業が、独走したために重大な頓挫を来したものと云わねばならぬ。抑も本組合の水源を大同江の大河に求むるや、平壤の十数里の上流、順川郡の地区内に於て河の北岸にトンネルを穿ちて河水の流入口を設け、之を价川郡の峡谷に導き、貯水池を造成せんとするが、当時の土地改良部案であつたが、土木課に於ては大同江開発の見地より、コンクリートダムによつて、大同江を締切り、電源を開発すると共に、治水の目的に資し、併せて水利組合の貯水池を造成せんとしたものである。之の両案対立の結果、土地改良部に於ては止むを得ず、土木課案に依り企畫を進めたのであるが、之が実施に際し、先づ国費を以つてダムサイドの地質調査を実施したる後、両案いづれに依るかを決すべきであつたのに、その方法に依らず、創立費を以つて水利組合の負担に於て東拓の代行で、この基本的調査を実施し、遂にボーリングの結果石灰岩地帯で地質上コンクリートダムの施工に適せず、即ち大同江締切案は実施不可能との技術的結論に到達したのである。この蹉跎の爲めに組合は七十万円の調査設計費と二年余の時日を空費して根本的に調査設計を再検討するの止むなき事情に立ち至つた。然も再度の調査設計完了して將に工事に着手せ



んとするや、更に鮮米統制問題の余波を受け、工事着手を中止せられた次第は前に述べた通りである。斯の如くにして本組合は当初の計費よりも十余年遅くれて、漸やく昭和十五年年度増米計費の樹立に依り事業復興の機運に遭遇し、昭和十七年より農地開発管団に依りて工事に着手するに至つた。即ち平南水利組合と名称を変更し、面積二万八千五百町歩とし、先づ長さ六キロの導水トンネル及び貯水池工に全力を注ぎ、昭和二十年八月十一日通水式を挙行し、大同江の水は貯水池に流入するに至つた。この水源工と共に新安州方面までの導水路を建設し、第一工区より第六工区までに工事を分割施工したが、大体に於て工事費二千二百万円、三副程度の出來形で、終戦を迎え、管団の事業は打切りとなつた。難工事と目せらるる主要水源工は落成していたので、残りは全地区に渉る用水路工事のみとなり、二十二年灌漑期までには完成する見込であつたのである。

上述の通り昭和（平南）水利組合は甚だ数奇な運命に奔弄され、遂に完工を見なかつた次第である。恐らく北鮮政府に於て本事業は完成を見たのではないかと思う。

（中編・完）

## 朝鮮土地改良事業史

（後編）

### 回顧録

目次

一、朝鮮米の増殖と改良	渡辺豊彦	95
二、朝鮮産米増殖更新計画の樹立	湯村辰二	105
三、土地改良部の創設期	安達房治郎	115
四、朝鮮土地改良株式会社の創立と井上準之助氏	久保薫一	121
五、代行業務運営上の苦心	浅野健一	126
六、創業期の水利組合の一事例。靈光水利組合	古庄逸	130
七、整備期の回顧	萩原彦三	132
八、停頓期の回顧	中村寅之助	137
九、停頓期の体験を語る	古庄逸	139
一〇、整理期の回顧	碓井忠平	151
一一、土地改良事業の問題点	山井忠平	156
一二、土地改良事業の復興	細見正盛	163
一三、大戦末期の土地改良事業	塩田正洪	168
一四、終戦直前の土地改良事業	一杉藤	170
一五、農地開発営団業務の思い出	大島良士	172
物故関係者の追憶	古庄逸夫	179
(1) 内務局関係官		
(2) 藤井寛太郎氏の事績		
(3) 池田泰治郎技師の思い出		
編集後記		

この回顧録を読んで

穂積真六郎

私はこの「回顧録」の原稿を非常に興味深く読ませて頂いた。これは単なる回顧とか、追憶というものではない。この文章の一言一句は書いた人の体験そのものであり、その行間には、朝鮮という土地に対する愛情が滲み出ているような気持がする。そして、なにかを今日の時世に訴えているように思う。私がこの文章に興味と関心をもつのはそのためであり、これは、同じように朝鮮で仕事をして来たものの共感というものではなからうか。

回顧談とか、追憶というようなものは、得てして自画自賛に陥り、読む者をして、うんざりさせ勝ちなものである。それがこのような体系を成し、又、私どもの共感をそよめるゆえんは、一体、何にあるのだらう。それは私ども朝鮮の統治に携つて来た者が、当時、その信条としてもつていた『よりよき朝鮮の建設』という心意気が、お互いの間に、今も不変に通い合っているからである。私どもは『朝鮮を良くする』ということ为天職とさえ心得、古めかしい言い方だが、それに全心を打ち込むことを、日韓併合の大御心に副うことと信じ込ん

この回顧録を読んで

でいたのである。

朝鮮の土地改良事業は、その私共の心算の一象徴であり、総督統治が朝鮮の国土に永久の善果として遺して来た最も大きな業績であると私は考えている。この事業は朝鮮民衆の大多數を占める農民に密着し、更にはその成果が、わが国の食糧自給という大問題に結びついていただけに、その事業のスケールも大きく、従つてこれに対する総督以下、関係官民の熱意も大変なものであつた。今こゝに執筆された諸氏の当時の活躍振りを、私はこの目で見ていただけに、これを読んでいると、その時折に諸氏が味わつて来られた舌飲の様が、今も眼の底から浮んで来る。特に私は、藤井寛太郎氏や、池田泰治郎氏のような、この事業の大恩人ともいふべき人達の名前を物故者の中に見て、今更ながらこの開拓者達の遺業が如何に大きなものであつたかを思い、この人達を追憶して書かれた古庄氏の真摯な文章を奥床しくさえ思う。私は、この人達の業績が、多くの朝鮮の人達に感謝され、それがクサビとなつて、やがては日韓両民族の互助繁栄の日が来るであらうことを固く信じている。

一、朝鮮米の増殖と改良

渡 辺 豊 彦

(豊日子)

(一)

朝鮮総人口の八割は農民であり、韓国統監府開始以来満州事変の勃発に至る間、朝鮮に於ては農業以外には見るべき産業もなかつたので、産業奨励の大方針は常に農業開発の上に置かれて居つた。朝鮮に於ける各種施設の基礎は、目賀田男爵によつて樹立せられ、朝鮮総督府開設後、農工商部長官に石塚英蔵氏、水原の勲業、草野長に農学博士本田幸介氏が居られて、農業の開発、殊に産米の改良と増殖とに重点を置いて種々施設せられたが、種々の事情の下にその進歩発展は遅々として進まなかつた。為に鮮農の生活安定は勿論、当時急激に増加しつつあつた日本内地の食糧需要にも貢献するところが少かつた。

偶々大正八年に萬歳騒動が起り、その結果は朝鮮総督府の大改革となり、斎藤実男爵(後子爵)が総督として、法学博士水野錬太郎氏が政務総監として、従来の諸政を改革し一大刷新を企てらるることとなつた。斎藤総督、水野総監時代に断行せられた施設の重なるもので爾来朝鮮統治の上に大なる功績を残したものは、憲兵制度の廃止に伴う警察制度の確立、産業調査会並に教育調査会の設置による産業並に教育の二大根本方針の確立、地方制度の改革等、であつた。

一 朝鮮米の増殖と改良

産業調査会の設置開設による第一次の実行計画が産米増殖であつた。大正十年に行われた産業調査会の基本原案は、西村保吉殖産局長、篠原英太郎農務課長、田中卯三商工課長、岡崎哲郎山林課長、郡茂徳水産課長、黒木吉郎鉱山課長等の諸氏により立案作成せられたものである。西村局長は埼玉県知事より朝鮮総督府の殖産局長に転任して来た方であるがその以前北海道庁の土木部長として、河島北海道長官の下で龐大なる北海道拓殖開発計画を担当樹立せられ、河島長官の信頼も極めて厚く、原案の作成より帝國議會の説明に至るまで、一手で引受けて目出度これを通過せしめた尊き経験の持主であり、その産業に対する透徹せる計画力と、明晰なる頭脳とは当時の内務省系統の地方長官中稀に見るところであつた。この偉大なる計画指導者統率のもとに行なわれた朝鮮産業調査会の原案作成は仲々の大事業、しかも急を要したので、関係課長以下技師、技手の諸君を泣かせたと言つても過言でない程であつた。中には過勞の爲神経衰弱症に罹つた人も幾人かあつた位であつた。

産米増殖案は、総督府内に独立の土地改良部を新設し、基本調査班と実施計画班を置き、基本調査班が全鮮に亘り、差当り有望と認める地域を調査したる結果に基き、実施設計班がこれを実行力ある案に造りあげ、総督府並に各道に於て関係地主に勧めて水利組合を設立させた。そして総督府は工事費の一部を補助金として交付し、それ以外の工事費は、組合の負担とし、政府の低利資金を運用して、東洋殖産株式会社と殖産銀行より組合に貸出すこととし、工事の測量設計と施工監督は東洋殖産会社と、新に設立せらるる朝鮮土地改良株式会社がこれを引き受けて実行する計画であつた。

この計画が完成すれば、土地改良と耕種法の改良とによつて、年間約一千万石の増収を遂げ、この大部分を内地へ輸出して、日本の食糧問題に貢献すると同時に、朝鮮の基本産業である農業の増進を以て、朝鮮産業の基本に培い、同時に民生の安定を実現することと

なつたのである。此の西村局長の発案にかかる産米増殖計画が幾多の迂余曲折を経て終戦時まで及び、大體所期の目的を達成し、結果的に見て此の計画が大成功を収めたと申しても過言でない。西村局長統裁の下に行われた産業調査要綱は、爾来朝鮮産業のテキストとして重要視せられ、何か問題が起れば常にこれを引出して立案の根拠としたものである。

## (二)

私が朝鮮総督府に勤務したのは、大正八年の大改革後であつた。当時既に着手せられて居つた水利組合の仕事は内務局の第二課で取扱つて居つた。第二課の主管は団體行政と、社会事業であつて府、学校組合と並んで水利組合は第二課が主管して居つた。しかし、第二課には課長矢島杉造氏の下に幾人かの属官が配置されて居つたのみで、水利の技師も農業の技師も配置されていなかったので、土木工事は土木部の土木課に、農業のことは殖産局の農務課の技師に、その都度合議すると云う有様であつた。従つて總てに不十分のことがあつた為か、当時既に江原道の文幕水利組合、高城水利組合など後々まで問題となつた所謂不良水利組合であつた。然し全羅北道裡里附近の臨益及益沃水利組合、平安北道の大正水利組合などは現に相當の成績を挙げて居つた。

西村殖産局長の発案に成る産業調査会が終つて後、その主目的の一つである産米増殖推進のため、先づ殖産局内に土地改良課が新に設置されて、農務課長篠原英太郎氏が土地改良課長を兼ね、その下に土師盛貞氏が事務官として庶務一切を担当し、技術方面は池田泰治郎、綾田豊、飯島寛一郎、加藤正弘等の技師が配置せられた外、農務課勤務の三井栄長技師が、技術方面の総帥としてこれに参画して居つた。

篠原英太郎氏が、大正十一年に洋行した後、私が農務課長兼土地改良課長に任命せられ、農務課には近藤常尚氏、土地改良課には湯村辰二郎氏がそれぞれ事務官として配置され、



翌年私が洋行を命ぜられたその不在中、農務課の仕事は近藤常尚氏が代理せられ、土地改良課の仕事は湯村辰二郎氏が代理せられたが、湯村氏は私の不在中土地改良課長に昇任せられたのである。私は大正十二年帰朝後も昭和四年一月まで引続き農務課長として、常に土地改良課の仕事の合議に与つて居つた。然し土地改良の仕事、就中工事関係が進行するに伴い、土地改良課のみにては不充分であるので、昭和二年土地改良部が新設せられ、初代部長に安達房治郎氏、次で松村松盛氏、中村寅之助氏が相次いで部長に就任せられたが宇垣総督の許に行われた行政整理に依つて土地改良部は山林部と共に廃止せられて土地改良事業は新設の農林局所管となつた。そして湯村辰二郎氏は私の後任課長として就任せられて以来随分長く土地改良事業に関係して居られた。

当時土地改良部の主任技師達は大学時代耕地整理の講習を受けた以前には特別の知識経験もなき人達であつたので、規模の大きい土木工事を担当するには是非とも工科出身の技師を配置しなければならぬとの意見が出て、有吉政務総監が強く此の説を容れられ、勝呂正吾工学士が配置せられた。(その後配置された工科出の人に、佐原辰雄氏、鹿毛氏ら三人がある。)また歴代の土地改良部長の中で中村寅之助氏は所謂不良水利組合の救済に大いに骨折られたことを記憶している。

(三)

凡そ事を遂行するには、技術と、資金と、企業家とを必要とするが、産米増殖計画に於ても同様であつた。然るに前記の通り総督府内で此の方面の技術陣は当初極めて貧弱なものであつた為に、工事の失敗が相当多数に上つた。当時の日本には未だ農業土木と云う学科もなく、前記の通り耕地整理の講習会があつた程度であつたから、知識経験に富んだ技師も居なかつた結果と、今一つは政府の補助金並に低利資金の運用などに於ても手当が

薄く、従つて充分の工事費が得られなかつた結果である。然し最初極めて貧弱であつた技術陣も、苦い経験を重ねた結果、後には相当の權威を有するものとなつて、池田、綾田の両技師などは日本内地の諸大学等に講師として招聘せらるるようになり、満洲国成立後は満洲に於ける土地改良の技術者に進出し、国家的に大なる貢献をする事になった。

産米増殖計画によれば工事の代行機関としては、東洋拓殖株式会社の外に、朝鮮土地改良株式会社が設立せられ、荒井資太郎氏を初代社長に迎えた。同会社の常務取締役であつた、久保謙一氏は、最後まで土地改良事業の為に踏み止つて居つたようである。また東拓はその京城支社に土地改良部が設けられ、総督府から技術者の割愛を受けて事業を担当し、両社折半で代行業務を分担した。

資金の方面に於ては当時朝鮮總督府の予算が貧弱であつた上に、日本政府の産米増殖事業に対する理解が乏しかつた為に、充分の補助金も与えられず、低利資金も充分に廻して貰えなかつたのである。日本政府の理解が乏しいのは農林省が朝鮮の産米増殖を支持しないのみか、これを以て日本内地の農村を圧迫する計画として、終始一貫反対したのと、帝國議會、就中衆議院に於ける農村出身の代議士諸公が、農林省と同様の意見で極力反対した結果である。

下岡政務総監は此の点に着目せられて、浜口雄幸、井上準之助氏等の有力なる後援により、資金の獲得に大なる功績を挙げられたのである。世人が下岡政務総監を目して朝鮮米増殖の一大恩人と言うのはこれが為である。土地改良部の新設も亦下岡総監の英断であつた。私は西村殖産局長と下岡政務総監とを以て朝鮮産米増殖計画樹立上の二大恩人と言いたいのである。

資金に就ては政府資金の外に、民間資金が同時に必要であつて、計画によれば、東洋拓殖株式会社と、朝鮮殖産銀行とがこれに當ることになつて居つたが、成績から申せば、殖

産銀行が大なる成績を挙げたと思う。有賀光豊頭取が馬場鏐一、石井光進諸氏の後援の下に、東京駐在理事渡辺弥幸氏の努力により、山一証券等の有力証券会社をして、朝鮮に於ける水利組合事業の有利確実にして、且つ国家的である実状を認識せしめて、殖産銀行債券の発行を引受けしめたことを特筆大書する必要がある。

産米増殖事業の民間パイオニアとしては、藤井寛太郎氏の功績を忘れることは出来ない。朝鮮に於ける水利組合発祥の地とも云うべき全羅北道の裡里から群山附近に亘る水利組合は藤井氏の熱心と勇氣とに依つて最も早く遂行せられたものであつて、この地方の水利組合事業が御手本となつて、その後幾多の水利組合事業が勃興したものである。藤井氏は言葉通り寝食を忘れて、水利組合事業のため東奔西走せられたのである。不幸にして晩年健康を害されたけれども、滿洲事変後は雄心勃勃々抑え難く、北支の天津方面に一大農場を計画着手せられたのである。北支方面には藤井寛太郎氏の外、加藤平太郎氏その他全北に農場経営の経験をも有して居られた大地主の中にも、幾人かが進出を企図せられたが、何れも朝鮮に於て水利組合事業の有利なることを体験せられた人々であつた。滿洲では個人企業は許されなかつたから進出者もなかつた。以上の外元代議士であつた、工学士松山常次郎氏もパイオニアの一人として挙げるべき人である。氏は政友会議員であつたが、鮮滿拓殖株式会社を創設し慶尚南道咸安、黃海道延海水利組合等を企画し常に産米増殖事業展開のために努力を続けられた。

## (四)

産米増殖計画遂行は、耕地の拡張改良のみでは達成出来るものではない。同時に耕種法の改良に依り、反当収量の増加と品質の改良とを併進せしめなければならぬ。然るに当時朝鮮農民の民度が極めて低く且つ資力的にも貧弱であつた為に、耕種法の進歩が遅れたこ

とも、産米増殖に一時停頓を来した原因である。当時未だ硫安等の化学肥料なく、窒素肥料の給源としては、滿洲産豆粕あるのみであつたが、東洋拓殖会社等が小作人に豆粕を配給すれば、稲に与えずに農民自身が自己の食糧に消費してしまふと云う有様であつたから、豆粕を配給するにしても、人畜の食用に供されぬよう加工して配給する必要があつたほどである。また化学肥料は別として、日本の如き堆肥自給の習慣も乏しく、無肥料のまま永年、略奪農法を繰り返して来た後であるので、平均反当収量は僅々一石にも達しない状態であつたから、水利組合設置計画書にあるが如き生産の増加が出来ず、従つて水利組合に対する組合費の納入の如きも困難な状態であつた。組合費を支弁すためには反当収量を上げねばならぬが、それが容易でない。組合費を支弁し得る程度の収益を水利組合地域内の地主に上げしむるには何としても反当収量の増加が絶対的需要であるが、農耕担当の技術方面では、容易に土地改良担当技術者の計画する増収を認めない。その結果組合費を低減すべく、無理にも必要な工事を省き、その経費を切下げる結果となつた。これが延いては工事の不完全を招来し、不良水利組合成立の一原因をなしたのである。工事費の切り下げと、技術陣の貧弱とは、相俟つて不良水利組合を成立せしめた結果、一時は水利組合区域内の地価が低落して、地主は水利組合に編入せられることを極力反対したものである。口さがない鮮人地主などは、組合地域内の土地は唯やると云つても貰い手がないなど放言した時代もあつた。

斯様な次第であつたから米価が下落すれば益々組合の経営が困難に陥り、一時は全鮮の水利組合中へ相当数が不良水利組合と称せられる状態となつて、これが救済の為に、政府は多額の費用を支出したものである。特に中村土地改良部長、古庄土地改良課長の時代が最も困難な時代であつたと思う。

肥料と云えば、咸鏡南道興南に設けられた、野口遵氏計画の朝鮮窒素肥料株式会社の設

立も産米増殖には側面的に大なる貢献をしたと思う。同会社工場の能力は年産四十五萬屯であり、当時日本全国の生産量の半以上であつた。斯る肥料の大供給源が鮮内に在つたことは、硫安肥料の使用を迅速ならしめ、延いて産米の増殖に偉大なる貢献をしたものである。

## (五)

以上私は主として水利組合事業の困難であつた方面のことを書いたが、最初冒頭に書いた通り、結果的に、且つ全体的に見れば、此の計画は大成功であつて、終戦数年前には、年々壱千萬石内外の良質米を、内地に移出して、日本の食糧自給問題の解決に大きな役割を果し、技術的には日本で未だ経験されていなかった、大工事を遂行して、幾人かの實際的權威者を輩出し、満洲国の水利事業は勿論、北支や海南島方面にまで朝鮮農業の進出計画を見るに至つたのである。

産米の品質の改良について忘れることは水原の農事試験場長であつた、農学博士加藤茂包氏の功績である。同博士は農林省の陸羽支場長として品種改良の偉大なる功績を挙げられ、後九州帝国大学の農学部長を経て、朝鮮に赴任せられたのであるが、在任中米の品種改良には特別の努力を払われ、朝鮮の地質風土に適応する幾つかの品種を選定抽出せられたのである。御蔭で反当収量は増加し干拓地の塩害に堪える良質の米を産出することとなつたのであつて、朝鮮米増殖上、同博士に負う所が多い。

前にも一寸書いた様に、内地に於ては、政府も、民間も、共に朝鮮米の大増産には極力反対であつたが、此の間に在りて終始朝鮮米の増産を援助したのは、陸軍省並にその関係の人々であつた。その理由とする所は、一朝有事の際海上交通が困難となつた場合は、最近距離にある朝鮮からの食糧移入を絶対必要と認めて居つたからである。日本の大陸政策

の推進力であつた田中義一大将が総理大臣の時、人口食糧調査委員会が内閣に設置せられ人口部の委員長が内務大臣鈴木喜三郎氏で、食糧部の委員長が山本悌次郎氏であつた。朝鮮總督府から湯浅政務總監が委員として阿安委員会に出席せられ、私は總監に御供して常に此の委員会に出席したが、農林省関係と政友会選出の代議士が朝鮮米の増殖に極力反対し「日本あつての朝鮮ではないか、今日本内地の農村が疲弊の極点に在る際、朝鮮に於て産米を増殖して日本に移入するならば朝鮮を生かして日本を救済結果を招来する」ものとして、極力反対したが、独り陸軍関係の委員連は、以上述べた国家有事の際、海上輸送困難の場合を予想して、朝鮮米の増産を支持したのであつた。

斯様な関係があるので農林省では政府買上米の中に朝鮮米を加えることを容易に肯じなかつたが、山梨總督時代、陸軍省の三井清二郎主計局長に交渉せられた結果、広島の陸軍糧秣廠に於て、相当量の朝鮮米を買上げて貰つたことがある。これが恐らくは日本政府筋による朝鮮米買上げの嚆矢ではないかと思う。

日本内地に対する年々の朝鮮米移入が約壱千萬石とすれば、当時の価格で石参拾円としても、年々参億円の金が日本から朝鮮へ支払われるのである。朝鮮は此の参億円の収入に依つて、朝鮮民衆の日常生活に必要な絹布その他必需品の代金を支払つたのである。それのみならず大正年間には数百万石の満洲粟を移入して、小作人階級の農民は粟を常食として、これに依り節約したる米を日本内地に移出して、その差額に依り生活して居つた時代もあつた。大正八年独立騒動のあつた年は、朝鮮は大旱魃であつて、主なる米産地帯である南鮮方面に於て特に激甚であつた。此の地方の窮民救済の爲、朝鮮總督府は満洲より大量の粟を輸入して、窮民に与えた。南鮮地方の農民はこれを契機として満洲粟の味を覚え、爾來数年間は年々二百万石位の粟が満洲から朝鮮に輸入せられて、地方地方の市場で販売せられて居つた。従つて当時地方に出張して市場をのぞけば市場は時節により黄、一色



であつたと申しても過言でない位であつた。それが晩年には殆んど満州粟の輸入を見ない位になつて居つた。これも鮮内に於ける産米増殖の御陰である。

出来西北鮮は畑が多く、主として粟を主食とし、南鮮は水田を主として米食を主として居つた。それが早魃に依る不作の爲、満州粟の味を知つた鮮農は一時多量の粟を移入消費したから、その後は約二百萬石にも達した。そしてこの多量の粟を積んで来た貨車が帰りには、貨物がなくて困ると云う満鉄側の不平話を聞かされたのもそのころの事であるが、鮮米増殖の結果満州粟の移入は漸次跡を断つた。又咸鏡北道の穩城郡に穩城水利組合が設立せられた当時は咸鏡北道の北端で米が出来ると疑われたこともあつた。それが終戦前には満洲は愚か、シベリアまでも米が出来ると疑われた。しかもそれが主として朝鮮人農民の手に依つて行われたことを想えば朝鮮農業、特に米作の発展は誠に驚嘆に値いするものがある。朝鮮内で米作の経験を得たのは、東亜の各地に移住して米作を行い、これに依つて生活の安定を得たものである。此の影響は終戦後の今日に至るも続いて居るものと思う。

以上

註 筆者は後、山林部長、慶尚南道知事、学務局長を歴任、退官後満洲拓殖会社理事朝鮮林業開発会社社長、朝鮮産業設備営団理事長として朝鮮産業開発のため貢献された。(古庄)

## 二、朝鮮産米増殖更新計畫の樹立

湯村 辰二郎

朝鮮の産米増殖計画と云えば、後年内地などでは、政務總監下岡忠治さんの創作の如く早合点してゐる向きも多いが、此は後年の更新計画であつて、当初の計画樹立は、大正八年齋藤実さんが朝鮮總督に親任され、文化政治、産業振興の二大旗印を掲げて赴任せられ、その重要政策の一つとして取り上げられたものである。政務總監は既に内務大臣の経歴を持つ水野政務總監で、此の方が実際の采配を揮い、立案は内地から随従して来た殖産局長の西村保吉さん、土地改良課長兼農務課長の篠原英太郎さん辺りが当られた。

当時私などは、三十才足らずの駆け出し事務官で、会計課勤務であつたが、どんな風の吹き廻しか、会計課の用務で東京に出張中、則記の西村局長と、会計課の監督者である庶務部長の守屋栄夫さん(後の衆議院議員、農林政務次官)との間に話が交され、殖産局の土地改良課事務官に転勤が発令されてあつた。それは大正十一年五月の二十日頃であつたと思う。何も知らずにノコノコと南大門駅(後の京城駅)に着くと、土地改良課の大蔵官の山路秀二郎さんが出迎えて呉れ、「貴君は今度土地改良課に転任されました、そして今日は局長官舎で、予算の第一回審議がありますので真直ぐに来て下さい」とのこと。駆けつけると、既に局の課長以下の人々が居並んでゐる。次々と、各課の予算に局長から辛辣な批判と査定が加えられ、「それを修正の上明日の十時までに再提出する様に」との申渡して



局長官舎を辞去したのは夜も十一時を廻つた頃である。忘れもしないが、その年は珍らしく夏が早く来て、カが特に多かつた。内容は解らぬし、カには攻められるし、泣く思いでカを吊り、徹夜で数字の修正を行い、翌朝命ぜられた時間までに局長室に持参すると、局長は手に取つてチラと一瞥してニヤリと笑い、「置いて行け」との御挨拶であつた。西村局長は、刻苦勉勵、給仕から知事、局長と果進した人だけに、書類の検閲などは御手のもので、一目見ただけで誤謬や欠点などを見出すに特別の能力を有し、下僚を震え上がらせる様な場面にも再三接した。然かし今日になつて振り返ると、西村局長幕下の三年間の薫陶鞭撻は後年どれ程役に立つたかわからない。特に家庭に見る局長は世にも稀な位の良いハズであり、良いパパであつた。

篠原課長は内務官僚の逸材で、一課長の仕事に甘んぜず、自ら副局長と豪語し、局長から細かい事務の質問などを受けると、「そんなことは湯村事務官に聴いて下さい」と、反撃する様な氣骨稜々の士で、事実事務の大半は、自分に委せて置く風であつた。篠原課長の部下だつたことも僅かに二年、(此の間一年半は彼は外遊)彼は内務省の監察官に榮転して去り、その後任には全く思いがけなく、当時の政務總監有吉忠一さんの直接の指名で自分が土地改良課長に任命された。

当時の土地改良課は課員百名を越す総督府第一の大世帯で、課員には、綾田豊、池田泰治郎等の技術畑のベテランが居られ、自分はマネージャーの氣持ちで此等先輩の言を聴いて仕事の上に誤りなきを期した。

此の大正十一年五月に、米の問題に關与したのが不思議な機縁となり、三十五年後の今日も尚、米の世界から離れ得ない次第である。

第一期計画の土地改良事業計画は、灌漑改善四十萬町歩、地目変換二十萬町歩、開墾千拓二十萬町歩、計八十萬町歩の可能面積があると云われた内から、その半分の四十二萬七

十萬町歩に付き大正九年から十五か年に改良事業を行い、一面新植法の改善と相俟つて九百二十萬石の産米の増殖を期したものであつた。

然かし実際に実施して見ると、予定地区の基本調査も、かなり杜撰なものがあつたし、その間、物価暴騰、金利高などで事業費は増嵩を來し、政府から若干の助成があつても、事業は遅々として進捗せず、大正十四年末に至る六か年間に、着手面積僅かに九萬七千五百町歩と云う始末であつた。此の間總督は依然齋藤さんであつたが、政務總監は有吉さんから下岡忠治さんに更迭して居つた。

下岡さんは、当時の与党憲政会切つての利権者との定評であつたが、どうした關係か、總裁の加藤高明氏に容れられず、従つて台閣にも列せず些か不遇の立場にあつたのを、齋藤さんが懇望して朝鮮に總監として迎えたのであつた。下岡さんは短軀であつたが、堂々たる風格を備え、その識見も極めて高邁なものであつた。赴任と共に、第一期産米増殖計画の不振に着目し、此れが改訂に異常な熱意を示された。

此の時産米局長は西村さんが引越されて、池田秀雄さんが内地の知事から赴任して來た。池田さんは風采は余り振われなかつたが、大人の面影があり、漢籍、仏典の造詣が深く、東方政策にも一隻眼を有して居られた。仕事の仕振りも、前の西村局長の緻密精到に比して、大局を握つて末節にこだわらずと云う風で、前局長の秋霜烈日に対し、正に春風たい陽、下僚としては柔な氣分で仕事が出来、自分も中央政府との折衝によく御伴をして上京したが、楽しい思い出も多い。

産米増殖計画は、当初の案から、土地改良部門と農事改良の二つに分れ、後者は農務課の担当であり、更新計画時代の農務課長は渡辺豊日子氏で、此の人は篠原さんの洋行不在中は、土地改良課長も兼務せられ、現在尚御元氣で、東京で弁護士をして居られる。

さて産米増殖更新計画の立案を命ぜられた私は、群内の既設の事業に付て成否の跡と、

その原因とを詳しく調査すると共に、大規模土地改良の先進地たる北海道の土地組合を審きに視察して貰うこととし、約二週間に亘り巡回した。此等の結果に基き、自分の構想をまとめ、綾田、池田の両技師の献策も容れ、数回に亘る局議を経て、成案を得、池田局長の手を経て下岡総監の手許に提出した。総監は審きに計画書に眼を通され、その後自分を招かれ、「此の工種別に二割乃至三割の補助を出す方式と、北海道でやつてる、幹線水路官営方式とは利害得失はどうか、北海道式の方がよくないかね」と質問を寄せられた。此れに対し自分は朝鮮の現状から見て原案の様な補助方式の方が妥当な旨を、力強く具陳した処、「そうか」と一言云われて、サインをされた。この当年の面影は、三十数年を経た今日でも、なおハッキリとマブタに残っている。

更新計画には、三つの重点が置かれてゐる。

第一は、鮮内の土地改良可能の基本調査が大正九年から継続して行われて居り、その結果から推定して八十一萬町歩の可能地が算出され、此れを当初案に採つたものであつたが、右は主として治水的観点からの調査であつたため、農業土木的観点から見た時、若干不満な点もあつたので、大規模（五班）の土地改良基本調査班を作り、適地調査を併行的に行い、昭和四年に完成し、其の結果は六十五萬町歩と算出された。

## 第二、低利資金の融通

朝鮮の民間金利は内地に比べ、可成り高率で企業資金としては不向きな嫌いがある中で、低利資金の導入に着眼し、僅少の自己資金を除き、所要資金の半額を大蔵省預金部資金に仰ぎ、残り半額は東拓及び殖産銀行の融資に求めた。

## 第三、土地改良実務機関の設置

民間企業家は工事実施の経験が乏しく、且つ大懸りの機械設備も持たないため、失敗の面の多かつたことに鑑み、調査設計から、工事の実施に当る代行機関の必要を認め、

最初は独占会社を作る予定であつたが、独占事業の弊も考慮し、朝鮮土地改良会社の新設と、東洋拓殖会社に土地改良部設置の二本建とし、両者の競争を期待し、その技術面の首脳とし、前者には浅野健一、後者には綾田豊のベテランを、総督府から推挙した。

土地改良会社の社長には、初代荒井賢太郎氏、二代今井五介（片倉製糸の元老）と云う第一級の人物が当られ、東拓も面目にかけ沢田豊丈理事以下人材を揃えて、此の業務に精進することにした。何しろ土地改良事業面積三十五萬町歩、農事改良事業を合せて、事業資金三億二千五百余萬円と云う膨大なもの、此れを大正十五年度から二十二年（完成まで十四カ年）に実施し、産米の増収玄米で八百十六萬石を期待したものだ。今日でこそ三億萬円の金は物の数ではないが、今から三十余年前、貨幣価値が今の四、五百倍にも相当する当時としては、総督府予算中に占むる本計画の比重は真に大したものであつた。

今でも忘れないが、愈々中央と折衝の段階に入り、下岡総監が直に乗り出すことになり最後の打合せが京城大和町の総監邸で行われ、自分は池田技師を同伴して参列した。夜も十時を廻つた頃、打合せも済み、総監から「御苦労だった」、「お茶でも飲もう」と云われて、紅茶と洋生菓子が出され、二三十分雑談を交わした。

その時フト総監の顔を見ると、如何にも血色が悪い、土色に近いので自分は、「閣下、お顔色が大部悪い様にお見受けしますが？」というと、総監は「ウー先達て北朝鮮の方へ出張して少し無理した、帰つてからも体を休める暇がないので調子が悪い、此の産米計画を中央政府に容認して貰つたなら、総督にお許しを乞うて暫し湘南で静養したいと思う」と答えられた。そして総監はその翌朝、朝鮮を立たれた。此の夜が下岡さんとの最後の別離であつた。

自分は二日許り遅れて、整備した書類を携行して上京すると、東京駅に出迎えて呉れた

總督府の出張員の話では、總監は着京と共に浜口蔵相と一寸会見しただけで、自宅に帰られ、そのまま床に就かれ、然かもその後の容態は極めて憂慮すべき状態とのことであつた。驚ろいて下岡邸に駆けつけたが勿論御目にかゝることが出来なかつた。病氣は胃潰瘍のことであつたが、療養僅かに数日にして不帰の客となつた。(大正十四年十一月廿二日)

國家の損害は申すまでもないが、大計画を携えながらも、一面大船に乗つた積りで働いて来た自分に取つては、全く茫然自失と云う処であつた。取敢えず在鮮の池田殖産局長の上京を御願ひした。長者丸の下岡邸の御通夜の晩は、各界の名士、同県人で足の踏み込むすきもない位で、憲政会の領袖幹部は悉く顔を揃えた。夜も可成り更けて、人の出入も稍静かになつた頃、それまで黙然として棺の前に端坐して居た大蔵大臣の浜口雄幸氏は、沈痛な面持ちで、我々葬儀委員を顧み、自分と下岡さんとの学生時代からの交遊を話され、自分の今日あるは全く下岡君の御陰なのた、とその経緯の一端を話された。大隈内閣が誕生した時、内務次官のポストが最も難かしく、その適材を求めることは難中の難とされた。然かし大隈首相は早くから、下岡以外には無いと考へて居り、自ら下岡さんを招いて交渉されたところ、下岡さんは「閣下！私は一つの御願ひがあります。それが過ぎて頂ければ喜んで御引受け致します。それは他でもありません、私の学生時代からの畏友に浜口と云う男があります、当今稀に見る偉材と信じますから、是非彼を中央の要路に出して頂きたい、必ず邦家のため御役に立つと信じて居ります」と推輓したのである。かくて浜口さんは大蔵次官に任ぜられ、下岡さんも内務次官に就任した。

浜口さんは言葉で、下岡さんの着京の模様をつけ加えられた。「下岡君は、東京駅から真直ぐに大蔵省に私を訪れ、朝鮮産米増殖計画の大綱を説明し、「日本の食糧の需給の上からも、新附の地朝鮮の開発の爲からも、是非やらなければならぬ。是非力を貸して呉れ」と力説した。その時私は、下岡君の顔色を見ると、疲労、憔悴、容易ならぬ難

難状態であることを觀察して、「よし、解つた、充分考へよう、然かし君の顔色は大分悪い、暫し静養したらどうか」と勧めた処、彼は「有難う、実は此から宮城に参進して、入京御挨拶の記帳をする積りだつたが、此の儘帰つて休もう」と云うて帰つた。公の仕事は、私情に依つて、左右すべきでないが、此の度の計画は、國家のためにも、朝鮮のためにも、よいことだと信ずるし、盟友下岡君の串いの意味でも是非実現さしてやりたい」と結ばれた。

御話を聴いてる内に私は心で泣いた。そして合掌した。下岡總監は死なれたが此の計画はきつと總監の魂が守つて成就さして呉れるぞ、と確信した。緊縮政策の権化の如く當時取沙汰された浜口蔵相の手で、此の大計画が誕生したことは、人情物語の一コマとも云えよう。

此の計画成就の臨の人には、幾多の人々が思い出さるが、その中でも最も力強い支援を与えて呉れた人には井上準之助さんがあつた。井上さんは日本銀行出身で、総裁まで累進され、更に政界に転進して憲政会に入り、大蔵大臣の履歴もあり、非常な世話好きの親分肌の人で、当時、財界世話者や云うニツクネームもあつた位、官界、財界、政界の三方に睨みが利く人であつた。

此の人が前年、野にあつた時分、朝鮮満洲を一カ月に亘り視察旅行をされたことがあつた。井上さんは私と同じ旧制二高(仙台)出身の大先輩であるが、井上さんを教えたことのある或る老教師は、井上さんと文豪高山樗牛が同級で、二人で首席を競つた往年の話など感銘深く耳に残つて居た。

井上さんが京城に寄られた時、在京城二高会では朝鮮ホテルに招じて歓迎会を開いた。井上さんは立たれて一応の挨拶をされた後、日本の人口食糧問題に触れ「今後発展する日本の食糧のバランスは、鮮、満、台からの供給に俟たねばならぬ。幸に朝鮮では、臨期的な



増産計画を持つて居る様だが、是非実現を祈つて止まない」と結ばれた。同席した二高会の一先輩は「閣下、その増産計画の立案者であり責任者である湯村君が此処に居ります」と紹介して呉れた。

井上さんは、優しい眸を私に投げて、「それは丁度よい機会だ、湯村君、此の会が終わつてから、私の部屋に立寄つて計画の概要を説明して呉れないかね」との御注文。宴が終わつてから井上さんの部屋で一時間余り案の構想を説明した。熱心に私の説明を聴き終つた井上さんは、一よし解つた。此の件では下岡君を激励して置くし、浜口にも、よく話して置こう、私に役立つことがあつたら何時でも訪ねて来給え」との温い言葉で励まして呉れた。正に千人の味方を得た思いだつた。下岡総監が浜口蔵相から大きな了解を得ては居るものの、さて事務的折衝に入ると、そうスラスラと連ばない。特に此の更新計画の中核をなす預金部資金の引出しは、預金部の資金そのものが日本内地の中小階級の郵便貯金に根底を置くだけに、こんな膨大な金額を朝鮮に持ち出すことには好い顔をしない。此の時フト前年の井上さんの言葉を思い出して、恐る恐る井上さんの御宅を御訪ねして、御支援を願ひ出した。処が「よし解つた、御手伝いしよう」との力強い御言葉、その上言葉を継いで、「君は御役人で忙がしい体だが、僕は閑人だ、度度僕の処へ訪ねて来る必要はないよ、電話をかけてくれたら、君の事務所へ出掛けて行くよ」と夢の様な御話で全く恐縮したものである。その後はよく芝区田村町にあつた朝鮮総督府の事務所へ来られて相談に乗られた。そして大蔵省の交渉などにもそこから電話を掛けられたものだ。何しろ在野とは云え、各界に睨みが利く井上さんから「今から御訪ねしたい」などと電話がかけられると、当方から御伺いしますなどと、大蔵省の預金部長、兼理財局長の富田勇太郎さんが、関係課長を帯同して、総督府の事務所に出向いて来ると云う珍現象が見られた。

当時の課長陣には、金子隆三、植野勲、広瀬豊作、青木一男、賀屋興宣などで、現在政

界の大きな存在として活動し居らるる方もある。此れ等の人々とその時々のお出合など、映画の一場の様に浮んで来る。

亡き下岡総監の導き、齋藤総督の威霊、池田局長以下殖産局幹部の一致した努力、そして井上さん以下沢山の内外官民の支援で産米増産更新計画は芽出度く誕生した。

大正十五年四月新計画は愈々スタートした。立案から実行へ、私の身辺は入の多忙を加えた。そして此の大規模事業を実施する総督府のセクションとして、今迄の様に殖産局の一課である土地改良課では余りに荷が重過ぎるとして、殖産局から分離して土地改良部の新設の議が熟し、その準備に着手した。

事務から事務に明け暮れた私の家庭は其の間必ずしも幸福ばかりではなかつた。大正十二年六月長女を亡く、更に更新計画出発の十五年の六月に再び次女を失う悲運に襲われた。過去二年間、その半ばは東京の旅館住いで心身共に疲れ切つた私は、此の家庭の不幸に神経衰弱となり、南緯の一温泉に一カ月余り保養、する身となり、漸く秋になつて登庁した。そして間もなく欧米出張を命ぜられた。「欧米に於ける土地改良事業視察を命ずる」と云う固苦しい件名だが、齋藤総督は懇々私を総督室に招いて「大分疲れたろう、暫し海外の風物にでも接して来い」という温い言葉をつた。

在外満一カ年、帰朝すると懸案だつた土地改良部が新設されて、部長には先輩の安達房治郎氏が任命され、三課編成で、私は開墾課長を命ぜられた。

齋藤総督、湯浅政務総監は私の在外中に、山梨総督、池上総監に交迭していた。

帰朝一カ月私は忠清北道内務部長に転任を見た。

湯浅総監は、内務官僚の錚々たる方であつたが「高風清節」という言葉はこの人のために作られたとも云うべき立派な方であつた。産米増産更新計画も下岡総監の後を継承した此の方の手によつて実現したものである。此の方に付ても後年に残したい逸話の数々もある。



るが、紙数に限りあり、割愛する事とする。

産米増殖史上に於ける私の時代は、創設拡張の時代で、苦勞もあつたが仕事が花々しく職員の如きも、増員に次で増員と云う有様であつた。

後年、朝鮮産米増殖計画中止まで、工事の完成は大体七割五分位の成績で先ず先ずと云う処だが、大規模の水利組合の中には工費の増嵩、計画の不備、実施上の行違等から困難な事態を生じたものもあり不良水利組合と称せられるものも発生し、後任の萩原、古庄、碓井さん達に、大変な苦勞を掛けた様だ。

昭和四年十一月斎藤總督、児玉總監の手で再び總督府殖産局農務課長に戻り、私は主として食糧政策に付いて中央政府と折衝する身となつた。

内外の食糧事情は、往年と全く様相を異にするようになり、過剩米処理に悪戦苦闘し、遂に昭和九年五月宇垣總督時代、今井田總監の声明により、朝鮮産米増殖計画は中止することになった。満十年前、自ら増殖計画を立案した私は、十年後本計画中止の総監声明を起草せねばならぬとは真に皮肉な運命である。此の時の主管農林局長は渡辺忍さんであつた。

(終り)

註 筆者は後、咸鏡南道知事から、農林局長に永く在任した。(古庄)

### 三、土地改良部の創設期

安達房治郎

#### (下岡、湯浅両総監の追憶)

(一)

朝鮮の土地改良事業は、下岡政務總監が、大正十三年七月朝鮮に赴任されて間もなく、産業第一主義を提唱され、その具体策として産米増殖と鉄道網の普及の二大政策を樹てられた時に、西期的に拡充されたものであります。この二大事業は約六億の予算を以つて、十余年の継続事業として実施するものである。今日から見れば、これ位の事業は格別のことはないと思われれますが、関東大震災後一度に資金の枯渇した当時、しかも中央から遠く離れた朝鮮の現状としては、真に西期的大事業でありました。私は京城大和町の總監官邸に呼ばれ、度々その抱負経緯を承るにつけ、流石農商務省に多年在動して日本の産業につき豊富な体験と透徹せる識見を有せらるることにすつかり圧倒され敬服したのであります。この計画が発表されますと、朝鮮では朝鮮野を挙げて絶賛を博しました。鮮内に多額の資金を導入し、大土木事業の実施の爲、毎年六千萬円の資金の大部分が労銀となつて鮮内に流れ、一般経済界を潤わすことが、広く知らるるようになったからでした。下岡總監は鮮内各層の心からの応援に意気揚々と氏の成案を携え、京城駅を歡呼の裡に出発、中央に於て政府関係方面と連日に亘つて大折衝を続けられました。好事魔多しとでも申すべきか連日の苦闘の疲勞のため、宿病の犯す所となり、遂に不帰の客となられました。(大正十

四年十一月二十二日、官民一致の失望落胆、たとえんにもなく、憲政会内閣としても大痛手でした。この総監の不慮の逝去によつて、朝鮮の起死回生の二大政策の運命や如何にと憂慮されましたが、内閣に於ても朝鮮統治の重要性に鑑み、直ちに（十二月三日）湯淺倉平氏を後任総監に親任されました。湯淺総監は先任者の遺志と計画を十二分に尊重し、閣議に、議會に、この案の承認を得るために、文字通り大重の活動をなされ、議會も無事通過しましたので、朝鮮の官民は蘇生の思いをし、両総監の努力に対し深甚の感謝を表したのであります。

(二)

昭和二年五月、私は湯淺総監官邸に招かれました。謹厳そのもののような総監は、「産米増殖計画——土地改良事業は故下岡氏の苦心の結晶であり、その大きな遺業であるから、是が非でも成功させて、故人の霊を慰めねばならぬ、その首脳者（土地改良部長）の人選について総督ともよく相談したが、君は下岡氏生前大交親交があつたし、下岡氏に伴いて朝鮮に來たゆかりもあるので、是非引受けて大成させて故人の恩義に酬いてくれ」と諄々と諭されました。私は湯淺総監の厚意と情誼ある人事に深く感激し、「人生意氣に感ず」とは此の事だと思ひ、命を賭けてこの大事業を完遂しよう、そして偉大な先輩の遺志に応えようと固く心に誓ひ、御受けする旨を答へ辞去しました。斯くして初代の土地改良部長を拝命したのであります。（昭和二年六月十八日）。

(三)

當時の鮮内一般の民度極めて低かつたので、土地改良事業の必要性を理解させるには仲々骨が折れたのであります。愈々事業実施の運びに至ると、「今度の土地改良事業は、

名前が良いが、實際は我々朝鮮人の土地を取り上げるのだとの噂が起り、一面悲憤の土地ブローカーが暗躍して、朝鮮人の所有耕地を安く買いたたいている事実が露骨になつてくるのを知り驚いてしまいました。當時既に鮮内農耕地の五五％近くが日本人の手に移つて居る実情であり、此の上更に日本人の土地所有者を増やすことは、總督府の方針である、朝鮮人の生活保護、即ち朝鮮民衆を豊かにすると云う折角の苦心が水泡に帰し、所謂「仏造つて魂入れず」の形となるので、私は主要な事業予定地の視察が済むや、湯淺総監に此の有様を報告しました。大要心配されました、其の対策を質問されましたので、私は各道の朝鮮人参与官を招集して「此の土地改良事業は朝鮮人の利益のためであつて、決して噂のように土地を取り上げたりするものではないから、流言に迷わされて日本人に土地を売るな」と参与官自身陣頭に立つて管内を隅々迄歩いて、總督政治の真意を徹底させることだと思ひます」と、卒直に答えたところ、総監もそれは好い案だと賛成されましたので、各道参与官會議を三回も招集して、土地改良事業の主旨の徹底普及に参与官諸公の尽力を力説懇談しました。このことは相当効果がありましたと思ひます。

次に、土地改良事業を毎年度確実な予算計画通り実行するには、鮮人土地所有者、即ち鮮内の大地主を、十分に理解納得せしめ、これを水利組合に参加せしむることが極めて必要でありますので、私は熱慮の結果、總督名を以つて全鮮の大地主を總督府に招待し、總督自ら親しく一同を引見せられて、此の事業が鮮人地主諸君の爲めに、極めて有利であることを懇示せらるるよう取計つたのであります。此の前例のない光榮ある總督との接見は、尠からず一般民衆に感動を与え、事業進展の上に相当の効果を挙げました。尚宣伝と普及には、丸山幹治社長京城日報、牧山耕蔵社長朝鮮新聞に毎日のように書き立てられ、喜ばしいことでした。「民報」と云う諺文新聞も筆を揃えて徹底に努力してくれましたことは大変

## (四)

このようにして土地改良事業は、初年度には若干の曲折はありましたが、各地に良い水利組合が続々と企画されるのを見まして、創業時の苦心を忘れ、我が事成れりと思ひました頃、思いがけない困った事が一、二起つて来ました。その一つは、土地改良工事費の約八割は労銀ですが、これが全部鮮内の労務者や貧民の手に入るものと思ひこみ、これによつて相当鮮内が潤おうと思つていたのに、豈図らんや、工事の請負業者にして見れば、採算上有利な山東方面の支那人苦力を使う方が、鮮人労務者に比べて能率も良く更に労銀も割安なので、続々と鮮内に流れこみ、土地改良工事も鉄道工事も労務者の半数は支那人苦力で占むる場合もあることを、現場視察に出かけて知ることが出来まして全く驚きました。そこで大村鉄道局長に相談して、その防止策を講ずることにしました。けれども、これには可成り困難な問題があります。支那人苦力の使用を制限すれば、自然工事費が嵩むばかりか、工事の完成にも支障を来すし、国際的にも支那人苦力の入国禁止は、鮮人の支那、特に間島方面への入国が阻止されることにもなりかねないのでありまして、種々考慮を要する問題がありました。結局労銀の鮮内留保の見地に立つて、大村鉄道局長と私とで相談の結果、請負業者と懇談して「工事費は若干高くなつても致し方ないから、労務者の八割以上は鮮人を使用すべし」と云う内命を下し、辛うじて労銀の鮮内留保に成功することが出来ました。

## (五)

次ぎは土地改良部内の技術陣の内輪もめでした。何分新設された部で、極く少数の生え抜きの技術者を除いて、部内三課は新設と同時に、農林省、内務省に依頼して急に集めた農業

士を専門とする数十名の技術陣と、事務職員で出来上つた、大きな奇合い。世間であるだけでも、内部統制が難しいのに、技術者間には字閥とか、従来の経年数とかによつて、部内にいくつもの派閥が出来、常に暗闘が絶えず、甲論乙駁の形となり、時には仕事の円満な遂行にも支障が起こりそうにも見られました。ので、私は思い切つて、相当の部員の配置転換を行うと共に、この内紛を鎮圧するために、農務課の三井栄長技師と、農林省農務局の某勅任技師の二人に、私の苦衷を述べて、善処方をお願いしましたところ、流石は技術陣の權威者で、うまく収拾してくれ、仕事の進展と共に、この蟻りも解消しましたので、爾後一糸乱れぬ統制が行われるようになりました。この事は湯浅総監の御耳にも入つたらしく、或る時総監の所で所管事務の報告が終り、雑談に入つた際、偶々そのことに触れました時、総監は「医者と技術者とを巧みに操縦統御することが出来れば大政治家になる資格がある」と、ビスマルクの言葉を引用し「この信念で行くんだね」と激励されたことを覚えています。

## (六)

その三は夥しい利権屋の来訪でした。例えば適当な未墾地や干瀆地を見つけると、その貸付を受けるべく大臣、高官の紹介を持つて膝詰談判式の猛烈な運動が開始される事例が頻々と生じました。総督府に、或いは旭町の官舎に、或いは日本内地に出張すれば、其の出先の宿舎にまで、強引につきまとい、まことにうるさく、追い払うのにホトホト困り抜きました。このままにしておけば、何時思ひもかけぬ不祥事件が起きるかわからないような有様でしたから、私は意を決して湯浅総監に此の実情を報告して、「これらの出願者は工事を実施するに十分なる資力と信用を有するものなること、及び既往に於て斯の種事業の経験者であることの、二つの条件を具うるに非ざれば許可せず」との内規の制定方を相

談しましたところ、清康潔白な総監は黙つて報告を聴いておられましたが、この内規の制定に同意せられますと共に「如何なる人の紹介でも情実は一切挟まない」ことを強調せられ「それでも尚頑強に申出する者があつたら、自分が直接面接してよくこの主旨を説明してやる」と申されました。このような次第で、湯浅総監及び私の在任中は、何等此の種の不愉快な事件は発生しなかつたのを、今日でも満足に思っている次第であります。

## (七)

いま一つは、増産された鮮米を日本内地に有利に売るにはどうしたらよいか、と云うことです。

朝鮮米だといつて買いたたかれては困るから価格下落の防止策として、殖産局と相談して、仁川、京城の両米穀取引所を合併して、強力な米穀取引所とし、これを京城に移しました。そして朝鮮の米価と内地相場との共通化を図り、米穀移出業組合も組織して統制のとれた移出を励行したのであります。

以上の事柄は大体考案通り実行が出来ましたが、唯一つ今でも残念に思いますのは、土地改良事業が完成して立派な畜が出来た時、その畜は大体条件が同じであるから、その水利組合を一単位として、土地所有者毎に地券（株券のようなもの）を発行して、その所有の土地が手軽に売買移転されることになつたら、大変便利であり、十分投資の対象にもなると考え、幸い財界の権威者である井上準之助氏も賛成され、調査資料も集めました。が、在任期間が短かく昭和三年三月末咸鏡北道知事に転出し、遂に成案を得ず、沙汰止みになりましたこととあります。

(終り)

#### 四、朝鮮土地改良株式会社の 創設と井上準之助氏

元同社常務取締役

久

保

薫

一

大分古い話なので、記憶も朦朧として居りますが、朝鮮土地改良会社の創設は、全く井上準之助氏の援助で、出来たと云つても過言でありませぬ。従つて同社の創設に付いて書きますと、自然井上さんの回顧談と云う事になります。

私が、朝鮮総督府から、藤井寛太郎氏、並びに松山常次郎氏と、三人が中心になつて、土地改良会社を創設する様、慫慂されたのは、確か大正十五年二月頃だつたと思ひます。其の際新会社を創設する為には、当時我國の食糧問題に対し非常な関心を持つて居られた、井上準之助氏の援助を受けることが最も肝要だと云うことになり、急遽上京、湯浅政務総監に面談の上、総督府より井上氏に依頼方をお願いし、同時に吾々三人からも井上氏に直接援助方を懇請致しました。一応考慮の上返事すると云う事になり、其の返事を待ったのですが、一週間経つても十日経つても何の音沙汰もなく、遂に辛抱し切れず、同氏邸を訪ねると、未だ決まらぬ、決つたら当方から通知するとの事なので、致し方なくスゴスゴ引き退り、返事を待つ事にしました。それから余り返事が遅いので、駄目かナと心配して居りました。十日程経つてから、電話があり、工業倶楽部で会い度いとの事で面会致しますと、吾々の顔を見るなり「この会社は出来るヨ、一体内地で何程の株を集めればよいのか」との事で、日本内地で三分の二を持つて貰い度いと申しますと、即座に引受け



られ、実は社長の人選に付き、諸方面の意見を聴いたのだが、なかなか適任者が見付からなかつたが、荒井賢太郎氏はどう思ふかとの話で、吾々から「誠に結構です」と答えると、「其れでは左様決めよう、而し荒井さんが果して引受けて呉れるか判らぬ、これは一つ、斎藤総督からお願ひして貰う」とて、数日後、斎藤総督が態々荒井邸を訪ねられ、快諾を得られたのでした。

其れから設立趣意書や目論見書の作成に取りかかりましたが、井上さんはなかなか細かくて、「趣意書の書き方が面白くないとか、目論見書中の『トランシット』（測量機械）の単価が安過ぎるとか、費目が官庁用語で一般人には判らぬ」とか、色々注意せられ、やつと作り上げました処、今度は決算期を役所の予算に合わせるため、年一回としてあつたのを、株主本位に年二回とせよとて、大急ぎで作り直した事を覚えて居ります。

愈々創立準備に着手することになり、五月五日朝鮮関係有力者の参集を求め、設立趣旨及び事業内容を説明して、創立発起人となることを依頼する為、総督府から池田殖産局長の臨席を願ひ、同局長から「此の会社は総督府からの慈恵により創設され、総督府の産米増殖計画の実行機関として事業を遂行するので、従つて同社に対しては、総督府としては出来得るだけの援助を惜まぬ」旨を言明せられ、出席者一同創立発起人となることの承諾を得たのでした。

発起人株以外の賛成人株に付いては、財界有力者に対して、井上さんから予め諒解を得られた後、私が井上さんの紹介状を持つて各社を訪ね、賛成人株を持つて呉れる様、依頼して廻つたのでしたが、何れも直ちに応募して呉れたので、余り苦勞はなかつたのです。唯、井上さんは私に「自分が頼んだから承諾して呉れるのだから、無理に多数株を頼むな出来るだけ内輪に頼め」と言われました。

次に証券界に対しては、山一の杉野氏、藤本の谷村氏等、一流証券会社の代表者に参集

して貰ひ、「私から設立趣旨及び事業内容の説明をせよ、若い時には色々な事を経験するのが良い、若し面倒な事があれば自分が説明する」とて隣室に居られ、私に説明させられました。これが、これ亦井上さんのお声がかりなので、問題なく満場の賛同を得たのでした。

一般公募株数は、総株数十万株の内、貳万株でしたが、幸い世間一般の諒解を得、日本内地、朝鮮は勿論、遠く満州からも申込みを受くるの好況を呈し、申込みを付けてから僅か三日間で予定数を超過致しました。

斯くして出来上つた会社ですから、資本金は多くなつたのですが、株主には各方面の有力者を網羅し、特定の財閥系統に偏せなかつたのが当社の特徴でした。

さて七月七日、日本工業倶楽部で創立総会を開催致しました。当日の出席株主は、総株主数三百三名の内、二百四十名、出席株数は総株数十万株の内、六万七千三百株でしたが、実際の本人出席者は、発起人、賛成者を合わせて約五十名、其の外、日比谷署より警官隊十数人、及び各会社の総会を根城とする所謂総会屋連中が約二十人程集まり、控室でこの警官隊と総会屋連中とが相對峙して居りましたが、まず、警官隊の隊長から「自分達は日比谷署から派遣されたものであるが、此処に来て居る総会屋連中から御祝儀（金一封）を呉れとの申出があるかも知れぬが、決してやらぬ様、若しやれば役員の背任になる、又やらぬ為彼等が騒ぐ様な事があれば、吾々が充分取締るから少しも心配は要らぬ。」との申出がありました。其れから暫らくすると、果して総会屋連中から御祝儀の要求がありましたので、日比谷署から注意を受けた事を伝え、祝儀を出すことの不可能な旨を答えると、連中は連中で、警官隊を指し「彼等は御役目柄そんな事を云つて居るが、実は吾々は彼等にも色々心配してやらねばならぬのだ」と云つてなかなか引き退りませぬ。次第に開会の予定時刻も迫つて来るし、どうすればよいかと考えて居りました時、彼等の親分と思われる三人組（何れも株主で総会に出席する資格ある者）が現われ、私に「連中に五円宛で

よいからやつて呉れ、ば直ちに一同を退散させる」との申出があり、致し方なくこれに同意すると、其の場で親分の号令一下、堂々たる男達大勢が、横隊を作り点呼を取り、片っ端から五円宛貰つて即刻退散して行きました。此処までは大した事ではなかつたのですが問題は親分格三人組との交渉だつたのです。愈々開会せんとするや、三人組が私に「一寸話がある」として別室で面談すると、「総会の進行係りをやらせて呉れ」と言うので私は、「進行係りは一応こちらで用意してある、而し進行の模様によつてはよろしく頼む」と、「ドツチ」付かずの返事をして、開会致しました。総会には井上さんからの注意で、定款の作成に付、色々と指導を受けた、松本蒸治博士にも列席を願つて居りました処、開会頭三人組の一人が、「今日はお豪い方々も見えて居られる様だが、会社の総会に付いては博士でも吾々には到底叶わぬ」と豪語し、「まず定款に対し意見がある、一体当社の内地在住者と朝鮮在住者との所有株数の比率は如何」との質問あり。大体「内地二対朝鮮一」と答えると、「定款の第四条に『本会社ハ本店ヲ京城ニ置ク』とあり、又第六条に『本会社ノ公告ハ所轄裁判所カ商業登記事項ノ公告ヲ掲載セシムル新聞紙ヲ以テ之ヲ為ス』とあるが、株主総会は本店所在地の京城でやる積りだろうが、内地の株主は総会毎に朝鮮迄行く事が出来ぬから、総会を東京でやる様に定款を改めて欲しい。又内地の株主で朝鮮の新聞を見て居る人は極めて稀だから、公告は内地の有力新聞にも掲載する様に定款を更えて貰い度い。」など、其の他色々喰つてかゝるかと思えば、役員報酬額決定の段になると「この会社の業績如何は役員諸氏の手腕及び努力に待つ所が大であるから、原案（年額貳万五千元以内）の様な少額では充分に働いて貰うことは無理だから、倍額に増額すること提案する。」と洵に齒の浮く様な事を言つて、色々と氣をもせました。そして愈々閉会となるや、今度は私に「自分達は有力会社五百以上の株主であり、今日は方々で株主総会があつたのだが、他を棄ててこゝへ来たのだ。殊に内一人は態々大阪からやつて来たのだから、何とかして呉れ。」と喰い下り、容易に帰りそうもないので、色々折衝の末、已むなく五十円宛出す、其れ以上は何とも出来ぬと言いつつ「丸ビル」の創立事務所へ引き上げました処、彼等は又其処迄追いかけて来て、それから又三時間ばかり他会社の実例を挙げて執拗に粘り、二百円以下では帰れぬと云い出し、結局百円宛を渡して帰らせました。あとで此の事を井上さんに話しましたら、流石の井上さんも彼等にはこれ迄相当手を焼いて居られたと見えて、「其の程度ならば致し方ない」と言われましたので「ホット」致しました。

会社の創立準備が進むに伴れ、諸方面からの就職運動も可成り烈しさを加えて来ました。井上さんは、新会社が出来た際は、得てして官庁なり親会社なりから、持て余して居る所謂古手を押し込むのが普通だが、これは大きな間違いで、非常に優秀な人物を入れて、援助するのなら兎に角、創業の初めから、二流人物を入れては新会社が立派に成り立つ筈がないとて、或る時、渡辺東拓総裁と有賀殖銀頭取とに、「もし貴方で新会社に入れ様と思つて居らるる人物があれば申出られ度い」と言われました処、両氏共「別段考えて居らぬ」と答えられました。其処で私に「両社からは別に定める予定の人はないそうだから其の積りで会社の陣容を整えよ。」と言われ、尚総督府に対しても、新会社の方で欲しい人でないのを無理に押し付けぬ様話されましたので、新会社の人事は非常に「スムーズ」に運ぶことが出来ました。

上述した通り朝鮮土地改良会社は、大正十五年七月七日の創立総会で成立したのですが其の後の経営に付いては、最初の間は会社創設の趣旨が世間一般、殊に鮮人間によく諒解されず、種々誤解もあり、相当苦心致しました。しかし、年月が経るに従い、漸次一般企業者の信頼を得る様になり、着々として実績が挙つて来たのですが、偶々昭和五年、統一て同八年稀有の内鮮米大豊作に遭遇し、総督府は遂に昭和九年五月産米増殖計画に依る、

土地改良事業の一時中止を声明する所となり、当社は全く其の設立の目的を失い、存立の要否が世論の対照となり、遂に昭和十年七月三十一日創立後僅々九年余りにして解散するの余儀なきに立ち至つたのであります。

爾来二十年余を経た今日、當時を追懐して寒に感慨無量なるものがあります。(終り)

(註) 荒井賢太郎氏は、総督府始政後七カ年、度支部長官に在任し、大正十一年加藤友三郎内閣には農商務大臣に任ぜらる。土地改良会社の初代取締役会長として四カ月間在職。その後今井五介氏会長として解散まで在任した。筆者久保氏は常務として終始業務運営の中心的存在であつた。

(古庄)

## 五、代行業務運営上の苦心

元朝鮮土地改良株式会社技師長

浅野健一

代行会社は其の性質上企業者に代り設計、工事監督を実施するものであるから、一切の責任は代行会社にある。従つて工事実施に当り、(1)、工事費が設計予算より増額してはならぬこと、(2)、工事が予定期日迄に完成せねばならぬこと、(3)、予定の効果を挙げねばな

らぬこと、の三条件に厳格に制限されておるから、慎重に慎重を期する必要がある。従つて一時も安逸な気持でおることが出来ない。例えば設計にしても主要な工作物は別として、一々工作物設置個所の地下調査をするだけの設計費用がないので、時には思わぬ地質に突き当たり、不測の工費が増すことがあつたり、或いは工事期間も請負業者の資金繰り、其他の都合で工事が予定通り進捗せず、それではならぬと業者を督促して予定の進行度に持つてゆく苦心など、一通りの苦労ではなかつた。

土地改良会社の代行業務中、工事監督を為したる面積は約六万七千町歩と記憶するが、概ね順調に進捗したが、その中、特に最も苦心した二、三の事例を回顧しよう。

### (一)

威興水利組合の取入堰を固定堰に設計して工事を完了した処、前年の豪雨に因る上流山岳部の山崩れのため城川江に流出した土砂が夥しく、固定堰の前面が土砂ですつかり埋まり、取入水門よりドンドン土砂を吸入する為め水路が直ちに埋もれて役に立たなくなる始末、これが秋の十月頃の出来事で、翌年の植付時迄の短期間内には是非共使用し得るようにせねばならぬと云う大問題に突き當つた。代行会社の性質上、是が非でもこの工事の完成を期せねばならぬが、どんな設計にするか、問題である。私としては世界各国の参考書を調査して、遂に一案を考え出した。それは印度の灌漑事業に関する書物の中にある僅か二、三行の記事が私にヒントを与えて呉れた。それは固定堰の上に巾一二米突のストニーゲート十三連を設けて水溜りを作り、このゲートを適当に上下して前面に堆積する土砂を下流に流して、固定堰以上の土砂の堆積を許さぬことにし、用水は取入口の反対側に導き、静止せしめて其の反対側の取入口より導水する方法を案出して実施することにした。この追加工事を翌年六月迄の八カ月間に絶對的に完成することを期し、全力を挙げて突進した。

何分冬季は威風凛々では、コンクリートの水結が強いので足場を作り、席で周囲を包み、中にストーブを昼夜兼行で焚いて温度の下降を防ぐなどして、全係員協力一致見事にこの大工事を完成した。当時組合の役員及び総督府当局がこの追加工事を承認して実施させて下さった厚意は、今も忘れ得ないものである。この計画が運好く図に当つて成功したのは予想外の満足であつた。後日これを雑誌に発表した処、各地より視察者があり、大いに面目を施した次第である。

## (二)

全羅北道の臨益水利組合の腰橋堤を廃止して水田に復旧し、別に庚川貯水池を設けると云う組合長藤井寛太郎氏の企画した工事（同氏の事績の回顧録参照）は土地改良会社で代行しました。この貯水池工事は、当初は順調に進み、愈々堤防を谷間全体に渉り締切ることになった。そして、雨期迄に堤防の高さを仮定の洪水面以上に一気に盛土して、雨期の洪水を仮設の余水吐から放水する段取りで全力を挙げて工事を進めた。所が堤防の盛土が仲々予定通りに上つてくれない。業者をいくら督励しても人夫の集りも悪く、設備も予定通りやつてくれない。仕方がないから堤防の盛土を三分の二位の厚さにして土量を減じ、その代りに洪水位の高さ迄ガムシヤラに上げる方針を立て、一方仮設余水吐の高さを減じて水吐きの能率を上げるようにした。そして、これを最後の方針として、私も一カ月間現場に泊りこみで朝から晩まで督励した。一方、万一の場合には人命、財産に莫大な損害を与えることになるので、道警察部も心配し、洪水時の非常準備として、半鐘を鳴らせば下流の住民は高地に避難するよう警告が発せられた。ところが予定よりも早く豪雨がやつて来たので一大事となり、堤防内の水位は刻一刻上り堤防の危険が増して来た。それで、工事現場では全員必死に堤防の上にトロツコの箱ワクを並べ、それに土砂を入れて約二三段に

積み重ねる非常手段を講じた。幸い残りの高さ約一尺のところまで雨もやみ、洪水が堤防を乗り越すのを喰ひ止めることが出来、全く危機一髪の間に悲慘事を起こさずにすんだものです。これなどは全く天祐であつたと思います。元来この工事がおくれたのは、業者の資金繰りが悪かつたために起つた実例であります。

## (三)

次ぎは慶尚南道の高瀬農場である。これは干拓地で海岸の一部を締切つて二七〇町歩の耕地を作る事業でした。締切堤防付近一帯は地盤が軟弱で、堤防が沈下する心配がある。堤防の盛土も計画の二倍半を見積つたのです。そのため工事費が高むので、企業主の福永政治郎氏に工事中止を勧告したが「折角政府が企業許可をくれたのだから、工事費が高くなつても実行する」と言つてきかない。その強い信念と熱意とに引きずられて私共も工事を実施しました。ところが堤防が高くなるにつれ堤防の前面、後面に盛土の土圧のため波状の起伏を生じ当初予定の二倍半の盛土では納まらず、遂に三倍の盛土を要しましたが福永氏の熱意で遂に完成しました。この工事は全く予期以上の難工事でした、これを貫徹したのは全く同氏の熱意の結果で、このような企業者の熱意というものも、朝鮮の土地改良事業の上で忘れることの出来ないことと思ひます。

(終り)



## 六、創始期の一事例 。靈光水利組合。。

古 庄 逸 夫

大正九年七月、私が地方課長として全羅南道に赴任した当時は、未だ同道に水利組合は一つも設置されていなかった。在来秋の修築などが主要な土地改良施設であるに過ぎない。隣道の全羅北道は水利組合の先進地であるが、全南は羅州平野以外に余り広大な平野がなく、概ね地区が狭小である関係もあつて、おかれていた。当時は地方制度の大改正で諮問機関として、道評議会以下の設置とその運営に忙殺せられていたので、水利組合にまで手が延びなかった。

大正十一年に全北と隣接している西北端の海岸に在る、靈光郡で始めて水利組合が企画せられた。私は係員に水利組合に関する法令例規の研究、先進地の視察などを命じて、主管課としての準備に着手した。折しも同地方は全南では民心最も穏かならず、難治の郡と称せられていた。阿比瑠瑠作と言う日本人の農場管理者など数名が中心となつて、水利組合を企画し、道庁の積極的応援を懇請して来た。玄応常知事、佐々木正太内務部長など、当時の道幹部は、此の靈光水利組合は全南に於ける水利事業の処女施設として、之が設置を極力推進することとなり、内務部長は率先陣頭に立つて、貯水池の敷地となる部落の買収移転につき、部落民を説得する為め現地に出張した。しかし祖先伝来の家、屋敷、田、畑のみならず、墓地まで水底に没するので、朝鮮人一流の迷信から、容易に説示を聴きいれず果ては部落の婦女子まで哀号々々（アイゴウ）と泣き叫ぶので、部長一行も当惑したので

ある。数回に亘る懇論の結果漸やく用地買収了り、工事に着手し無事竣工した。然るに私が土地改良課長として昭和六年頃、水利組合の整理に着手するや、同組合も亦経営困難なる組合中に仲間入りすることとなつた。それは区域末端に改良工事を実施する必要があるのと、米価惨落のため組合費の負担が稍や過重となつたからである。私は設置当時の責任者の一人として、善後措置を講ずるの義務を感じたので、先づ高利債を低利資金に借替え、改良工事に就いては五割の特別補助金を交付して組合匡救の為に聊か努力した。この事は他の同様の事情にある組合に対すると全然同様の措置を講じただけであつて、何等特別の便宜を計つたわけではない。が、組合員としては、設置当初からの深い縁故から尽力してくれたものと思ひ、非常に感謝してくれ、後年全組合員が一円、或いは二円と云う零細な献金を集め、謝恩の為めとして銀製花瓶を贈つてくれた。尚、昭和十年秋南鮮地方の旱魃時に、適々、暫時、光州税務監督局長に在任していた当時、今井田政務総監が早害視察の為め巡視せられたので、私は近藤常尚全南知事と共に、総監を案内して靈光郡庁で昼食することとなつた。霊光郡守は「この水利組合が今回の旱魃に際し非常な効果を奏した実情と、この組合は終始私（古庄）の配意と尽力に依るもの多大である」ことを力説した。私としては全く意外の讃辭を総監に報告せられたわけである。総監の下で水利組合の匡救につき悪戦苦闘した私としては、真に「舌労働いらる」との満足感を抱いた次第である。

(終り)

## 七、整備期の回顧

萩原彦三

私が土地改良課長になったのは、昭和二年三月であるが、大正六年から参事官室にいて水利組合令の審議に与つたり、水利事業認可案の審議に干与したので、朝鮮の土地改良事業のことを知り初めたのは、約四十年も昔のことである。万事茫として夢の如くである。此の仕事に精根を打込んだ先輩も今や殆ど亡く、私の記憶も薄れてしまったが、思い出すままに土地改良事業についての回想を断片的ながら綴つて見ることにする。

××××××××××

最初の記憶は大正六年の春、田尻生五、飛鋪秀一の両君と共に、全北裡里郊外に川崎農場を訪れたことである。川崎藤太郎氏は新潟県出身で、藤井寛太郎氏よりも先に渡韓され、全北に農場を開き、農民の啓発に全精神を打ち込んだ信念の人であつた。学校を出たばかりの私は、朝鮮農業のあり方を説く川崎さんの情熱に感嘆したものである。邸内には村の鎮守のような大きな社殿があつた。春秋のお祭りには部落の人々と共に、賑やかなお祝いをして互いに相和し相樂しむというやり方で、素朴な農民の心を捉えていた。惜しいことに此の川崎氏は早世され、川崎農場は他人の手に移つてしまつた。藤井寛太郎氏も畏敬する兄分の早世を大いに哀惜してゐた。この訪問は大塚常三郎（内務部第二課長兼参事官）氏の命によつたものであつたが、大塚氏から何故一晩とまつて来ないのか、宿泊しなければ実相に触れることが出来ない、と叱られた。又その出張の際、黄登駅前腰橋堤畔の墓の墓家に、片桐和三氏を訪れ、臨益水利組合の話をききながら、屋敷の馳走になつた

が、腰橋堤でとれたと言う大きなフナの味は格別であつた。藤井氏の事業については、今更説くまでもないが、私は官房勤務中、内地からの色々な視察者を案内して、屢々全北にゆき、益沃水利組合や群山郊外の干拓地などを訪れたので、土地改良課長になる前から、藤井氏の事業のことは熟知してゐた。今でも忘れることのできないのは、私が土地改良課から文書課に転じてからであつたが、米國から派遣されて、農民生活の実況調査に来た牧師たちが、藤井氏の案内で、同氏の事業の発祥の地である吾山里に赴いた時、藤井氏を取り囲んで迎える農民たちの親しそうな笑顔が、まるで永い間会わなかつた祖父を迎えるような、親密温かな態度であつたのに、牧師たちが感嘆したと言ふことである。米國から来たこれらの人々は、此処で、朝鮮農民は日本人の農業経営によつて虐げられていず、むしろ水利事業や農業改良など日本人の施設や指導で彼等農民も多大の恩恵を受け、その生活を向上していることを悟つたのである。此の報告書は文書課で翻訳印刷したのであるが、今手許にないのは残念である。

土地改良課は下岡忠治政務総監の時の産米増殖計画の実行機関として誕生したのである。その計画は三十五万町歩の土地改良を行い、八百万石の米の増収を図ると言うぼう大なものであつた。昭和二年三月外国出張から帰つて土地改良課長となつた私は、湯村君から引継ぎを受けた。当初は池田秀雄殖産局長の下の一課であつたが、間もなく土地改良部が独立して、土地改良課、水利課（池田泰治郎課長）の外に新に開墾課（飯島寛一郎課長）が生まれ、三課で土地改良部を構成した。初代の部長には安達房治郎氏がなつた。土地改良資金は国庫補助金の外は、預金部資金と民間資金半々で賄うので、其の供給は東拓と殖産とで分担し、又土地改良事業の実施は、土地改良株式会社（常務久保薫一氏）と東拓土地改良部（技師長綾田豊氏）とで分担代行する建前であつた。出願の事業計画は、水利課又は開墾課で審査し、認可すべきものは、資金供給機関と代行機関との協議会を開いて、各そ

の担当を定める方法をとったが、事業には自ら大小難易の差があるので、その判当にも一苦労したわけである。がそれにもまして苦労したのは、従前の小水利事業で、不良なものが少からず存し、これを救済しなければ、新しい水利事業を農民に納得させる障害となることであつた。文幕、深谷などはその著しいものであつた。藤井氏の主宰していた鉄原の中央水利組合も水不足で、予定の蒙利面積が得られず、借入金の返済もおくれ勝ちだつた。文幕や深谷は大正の始めに出来たものだが、計算の基礎は概一石八円で組合費は三円位で済むようになつていたので、度々洪水の災害を受けた開墾不適地が多く、予定の賦課面積が得られないのが、不良となつた主要原因であつた。従つて姑息な救済では駄目で解散するに如かないのだが、解散には借入金の返済に多大の国庫補助が必要となるので思うようにならなかつた。土地改良施行の三十五万町歩の年度割は正確に記憶していないが、毎年三万町歩以上の灌漑排水や開墾干拓を實現しなければならなかつたと思う。これは実は容易ならぬ難事業であつた。千町歩二千町歩の水利事業を数カ所実施した位では、追付けぬので、勢い大きな面積の水利事業を推し進めようということになるが、それには関係者の同意書を集めるのにも、実施測量を行うのにも、実に多額の経費と人力とを要したのである。私は昭和四年の春、平壤に園田寛知事を訪れ、昭和水利組合の実施促進を依頼したことがあつた。その折、園田知事の案内で、昭和水利組合の事業予定地を、同組合長たるべき前知事青木成三氏と共に一巡した。この組合は三万町歩に近い大組合で、実施測量の費用だけでも三十万円を予定していた。組合の予定地域である安州平野の乾害地帯の大地主であつた安州の金某が、組合費反当五円が高すぎるとして組合設立に同意せず、組合設立が行詰まつていたのであつた。私達が安州を訪れた時、安州郡守の敷昌愛君（後の学務局社会課長）が、此の金老人を新安州の旅店に招き、あの大きな体に満身の汗をかきながら、膝づめて懇々説き論じ、到頭、組合費は反当五円以上を賦課しないと云う条件で、組合の設立に同

意させたのであつた。私達は大いに喜び、郡守の熱意と努力とに感謝した。其の後数月にして土地改良課を去り、私の在任中昭和水利組合の実現を見なかつたのは残念であつた。青木さんも組合の設立を見ないで折角の努力が実を結ばず、失意のうちに逝去されたのは誠に気の毒であつた。

大規模の灌漑排水や開墾の事業を行うと、必然的に耕地の地目交換や耕地の交換分合の必要が起る。が当時これらに関する法令が殆んど存在せず、産米増殖計画に従つて土地改良事業を推し進めて行くのに、色々と支障があつた。土地改良課長になつた私の最初の仕事は、これらの支障をとり除くために、地目交換や交換分合を容易簡明に実施できるように法令を整備することであつた。日本内地には耕地整理法があつて、一応基準規定が整つていた。耕地の整理即ち交換分合等は、耕地整理組合が行うのであるが、これは、朝鮮で行おうとするような大規模な土地改良事業を対象としていないので、此の法律をそのまま朝鮮に施行するのは適当でなかつた。それで範を此の法律に採りながらも、朝鮮で行われてゐる事業の実際と、朝鮮の地方行政制度や諸法制との連絡調整に留意しつつ、若干の新味を加えた特殊の法令を制定することにしたのである。池田泰治郎君が現に行われている灌漑排水事業の現状について、色々助言してくれた。斯くして土地改良令が脱稿されたのであつた。土地改良令とその施行規則及び関係法令の改正等で、草案は頗る浩瀚なものになつたが、審議室の山本厚蔵さんや児島高信君が、非常に尽力してくれ、特に制令案を法制局に提出してから、相当長い時間を要したように思うが、児島君が例の婉転滑脱な接衝で目ぼしい内容の修正もなく、案外すらすると法制局を通過させてくれた。勿論産米増殖計画という大きな背景の存したことも、土地改良令の誕生を容易にしたのであろう。法制局で土地改良を謳つた法令を認めたのは、土地改良部設置の官制と、この土地改良令が最初であつた。日本内地の土地改良法（昭和二十四年）に先立つこと正に二十年である。

費に土地改良資金の供給に当つた殖銀と東拓の尽力を忘れてはならない。殖銀の頭取、有賀光豊、理事渡辺弥幸の両氏、東拓の總裁高山長幸、理事沢田豊丈の両氏などである。日本内地からの資金導入については役所も民間も非常に骨を折り、色々な方面からの視察団を招いた。大正の末年に殖銀理事石井光雄氏が東京証券団の主流を朝鮮視察に導いたこと、昭和の初めに井上準之助氏の視察があつたことなど、非常に効果的であつたように思う。私も数回大蔵省に預金部資金の要求に行つた。預金部長は富田勇太郎理財局長であつたが、ある時面会を申込み、待つて居れと言うことで五時すぎまで待つていたが、仲々面会できず、今日は駄目かと諦めて、宿に帰つて風呂に浸つていたら、これから相談するか、すぐ来いという電話がきた。そして大蔵省の理財局長室に入つたのは薄暮の七時すぎであつた。富田さんという人はそんな人であつた。これも私の土地改良課長時代のなつかしい思い出のひとつである。(昭和三十一年三月二十一日稿)

(註)筆者萩原氏は文書課長、威鏡南道知事を歴任、拓務次官に就任した。

大蔵省では深夜まで執務することは当然と考えられていた。私も深夜十二時近く

(古庄)

## 八、停頓期の回顧

中村寅之助

私の朝鮮總督府土地改良部長在任の期間は、昭和四年から同七年に及び、約二年半(殖産局長兼任の期間を含む)であつた。この期間は、第二次斎藤總督時代から宇垣總督時代に亘つてゐる。そもそも、土地改良事業は、夙に總督施政中の重要な一項目として、一定の計画の下に推進されつつあつたが、大正十三年下岡氏が政務總監に就任するや、この事業を特に重視し、従来の計画を一新して、大規模の計画を樹て、これを短期間に実施して早く産米増殖の成果を収めんことを期した。そうして、この事業の主務機構として、昭和二年土地改良部が新設され、安達氏が初代の部長に任命された。この当時に於ける、土地改良事業は、施政中の花形の貌があつた。

初代部長時代及び第二代松村部長時代を通じて計画の実施は、着々と進捗した。その結果、地元地主の意向の纏りのよい地区及び開墾、干拓の工事が行い易い個所など条件のよいものの大部分は、この時代に事業に着手され、早いものは既に完了してゐた。したがつて、私が部長になつたときは、地区の面積が広くて地元地主の意向が纏りにくいもの、規模の大きい土木工事を伴うものなどを除いては、土地改良を勧奨するのに極めて適当な条件のものは数多くは残つてゐなかつた。しかのみならず、水利組合や個人の開墾、干拓企業者の中、経営困難を告げるものがぼつぼつ出始めていた。このような際に部長に就任した私には、積極的に事業の推進に努めるよりも、経営困難に陥つたものに対して速に善後



措置を講ずることが急務となつた。思えば、まことに悪い廻り合わせであつた。そうしてなにかんづく、力を傾注しなければならなかつたのは、所謂不良水利組合の救済であつた。このために必要な措置は、いうまでもなく災害復旧工事その他の工事に對する補助率の引上げ、低利資金の融通、借入金利率の引下げ、借入金の償還期限の延期などであつた。この措置は、大蔵省、東拓、殖銀の支援、協力を得なければできないことで、これらの向に對する折衝には骨が折れた。しかし、折衝の目的を達して救済し得たときの晴々とした気持は、今なお忘れがたい。

かように、救済を要するものの出たことは甚だ遺憾であつたが、全般的に觀れば、土地改良事業の成果はまことに顯著で、増殖された産米の日本内地への移出量は年を逐うて増加し、内地の米価を圧迫すると内地の農家から恨まれたことさえあつた。

最近における朝鮮の産米については知る由もないが、必ずや、われわれの努力した土地改良事業の成果は、南、北各朝鮮の食糧自給に大いに寄与しつつあると信じている。

(終り)

## 九、停頓期の体験を語る

古庄逸夫

## (一) 難局に遭逢

私は、昭和四年十一月、京畿道財務部長から総督府土地改良課長に転じ、同時に就任された、土地改良部長中村寅之助氏の補佐役として、前任土地改良課長萩原彦三氏が、関係法令の整備を一応達成せられた後を受けて、鋭意事業の進展に努力することとなつた。當時産米増殖更新計画の実施は、その第一段階を終り、全羅北道の東津水利組合（当時最大の事業一万八千町歩）は、設置工事を終了し、第二期区域拡張工事として流域の最末端の阿部房治郎氏経営にかかる東津農場（約一千四百町歩）の干拓地、及びその付近の用水路工事をやつていたし、昭和、黄海、咸興、安寧等の組合が、或は設計に着手し、或は工事進捗中で、事業が好調子に進展していたので、当初一カ年間は極めて愉快に働いていた。しかし、昭和五年秋の米価の惨落で、全く情勢急変一大難局に当面し、その後苦心惨憺、真に骨を碎き、肉を削るの苦勞をなめるに至つた。今概説を補足して左に若干体験を語ろう。

## (二) 農村行脚

職責上事業地区を現地視察するの必要なのは言を俟たない。設置工事実施の状況、蒙利地区の施設、農事改良の普及状況などを視察するの必要だけではなく、事業の勸奨、組合財政難の窮状視察など、特別の任務を以つて、鮮内を随時東奔西走した。咸北、平北の国境を除いた外、殆んど全鮮の重要な地区には出張したが、工作物を見ねばならぬので、或は

堰堤に登り、或は畦畔を歩く必要があり、全くの草鞋行脚である。殊に三月頃の雪解期には、悪道路で、或は自動車が顛落して危機一髪の間、命拾いをしたり、（全北平野で藤井寛太郎氏と同行中）或は膝を没する泥濘に転倒して洋服を泥まみれにしたり（安寧水利組合第六号灌漑工事現場で）或は朝から晩まで到る処の農村で組合費軽減の陳情で吊し上げられたり、（洛東江沿岸で）或は貯水池から、水路の末端まで石ころ道を終日歩行して、足が棒のようになつて歩行困難になつたり（中央水利組合で）、視察も相当の苦勞である。けれども一番苦心したのは、大規模水利組合の評議会に臨み、何とか説得して事業着手に同意させねばならぬ使命を持つて、現地の組合事務所に出張することである。当時黄海道及び平安南道には、続々大規模事業を起こす機運にあつたので、自然この目的のための出張は西鮮地方が主となつた。黄海道の韓圭復知事は、殊に道内最大の事業は水利事業であることをよく自覚して、率先土地改良課を設置してくれ、大いに部下を奮励するのみならず、自身勸奨の第一線に立つて奮闘してくれた。私は忠清北道で、暫時同知事の部下でいて、特に親密であつた私的関係もあり、よく私の進言を採納してくれた。沙里院付近の於之屯水利組合に就いては、私自身ダム地点を視察し、相当準備をして同知事一行と共に、評議会に列席して工事着手につき勸説につくしたが、遂に了解点に達しなかつた。これは在来淤の灌漑設備があり、降雨順調の年には水不足を感じぬ部分もあるので、更に巨大なコンクリートダムを、巨費を投じて築造することに、危惧の念を抱いたのが同意を得られなかつた主因である。つまり米価暴落の爲め、増収益で組合費を負担しても、余り剰余はあるまいと考えたのである。その外すぐ近郊の安寧の工事の失敗が、相当影響しているのも争えない。この「於之屯」の停頓の爲め、黄海水利組合の設置工事着手は最大の関心事となつたので、延白邑内の同組合の評議会には、黄海道からも泉崎内務部長、白興基参事官など、関係者が多数繰り出し、主として開城側の地主の反対を説得することとなつた。

そして、総督府からは私の外、勝呂技師、代行会社からは、藤井寛太郎氏など多数列席、安岡莊蔵組合長を支援し、更に三日三晩の連続討論、白熱的論議の結果、辛うじて可決した。（事実上、開城側の地主は反対論を説伏せられ、どうにもならぬ立場になり、面目上今回は退席する旨申出でた。しかし、大勢非なるを悟り、内心は十分諒解したわけである）。

次ぎに、昭和水利組合は、当初の大同江締切案を廃棄して、价川貯水池案を採る事となり、全然測量設計を根本からやり直す計画に変更し、更に地主代表の同意を求むる必要を生じ、平安南道庁で、地主代表者の会同を開くこととなり、私はこれに列席した。元米昭和水利は、私が昭和三年平安南道在勤当時、青木戒三知事が、設置勸奨に全力を傾注したもので、同知事は退官後創立委員長に就任、地主を纏めて大いに努力せられた。又園田寛知事の後を襲った後任の藤原喜蔵知事は、内務部長から居据りで知事となられた関係もあり両名で極力協調して善処せられた。

此の貯水池変更案は土地改良部としては、熱鉄を呑むの感といったような悲痛な思いをした案である。そしてこれを採用する外なき窮地に立ち到つたもので、地主側にも一言なかるべからざるわけで、青木、藤原両氏共、その経過説明には非常に骨を折られた。当時平壤の論客として知られた藤井干城氏は、遂に論鋒を私に向け、総督府の責任を追及して来た。「今後工事に失敗し計画に支障を来した時はどうしてくれるか」と云う全く尤もな議論である。私はこれに対し「仮定の問題に明確な答をするわけには行かぬが、所謂不良水利組合に対して総督府が採つた救済措置、例えば、設置工事費が予想以上に激増した安寧、咸興などに対して執つた五割の特別補助などの前例を説明して、この前例で御想像を願ふ」と云う趣旨の答弁を熱心に説明したので、藤井氏もホコを取めた。斯かる次第で円満に再度測量設計に着手することとなり、更に一年余を費し、昭和八年秋漸く設計を得て正

に工事に着手せんとするや、今度は米穀統制問題の犠牲となり、遂に工事中止の外なきに至つた。数年間これが着工の準備のため、苦心惨憺された青木さんは、失望落胆の結果、病勢悪化して、遂に不帰の客となられた。私は特別に縁故があり、親交もあり、相提携、相協力して本事業の達成に苦慮しただけに、今日に於いても哀悼の念切なるものがある。

(三) 大蔵省詣で

昭和五年までは、所謂産米資金の預金部からの融通は、既定計画通り簡単に供給されたので何らの問題がなかった。然るに同年秋の米価惨落から情勢急変、意想外の困難に遭遇した。そこで昭和六年の春には、同年度の事業計画を各組合、各事業主別に一口毎に厳密に査定して資金及び補助金の所要額を予算することになった。そのために各道の土地改良技術官の会同を催おし、個別査定をすることにして、その集計表によつて必要な資金だけの融通を受くることにした。そして、この具体計画を持つて大蔵省預金部と交渉することとなった。

当時の大蔵省預金部長は富田理財局長の兼務、主務課長は金子運用課長（後の殖銀副頭取）であつた。私としては、金子課長及び原監理課長（現在、長期信用銀行頭取）に説明して了解を得ればよかつたわけである。中村土地改良部長も一度上京し、諒解を得た上、帰任され、私は残務を処理して数日おくれて京城に帰任した。すると甚だ意外な電報が到来しており、即夜東京に引き返したのである。それは大蔵省の省議で継続事業だけ承認、新規事業は一時保留との事である。どんなことから斯くなつたのか想像がつかない。東京駅に到着すると土地改良会社の専務斎藤力氏（同氏は私と同郷熊本県出身の先輩、正金銀行に永く在勤し、当時の井上大蔵大臣と親しい関係あり）が待ち受けていて、田昌政務次官の意見でこんなになつた模様との話である。そこで早速田政務次官を訪ねると、曰く、

「産米増殖計画は自分が主計局長時代骨折つて実現したものである。その後米穀事情の根本的変化もあり、政党方面では本計画の実行につき兎角の議論もある。然るに就任後一度も総督府当局から何らの説明も聴かないし、事情が分らぬので、新規事業を此の際一応保留して説明を求むることにしたのだ」と。蓋し中村部長も私も、局長と課長だけ、所謂事務当局だけの諒解を得て、政務次官に敬意を表さなかつたのが手落ちとなつたわけである。それで最近の情勢を簡単に話すと、計数を示せとの話である。私は「東京駅からそのまま駆けつけて事情を拝聴するために参つたので、只今書類を持つていないから後刻持参する」と答えた。大蔵省にくるものが計数を持つてこないものがあるか」と叱られた。そこで、此の際は継続事業の資金だけを運用委員会にかけ、新規事業は更に審議をつくした後、次の委員会にかけると云う事に話がつき、大蔵大臣官邸で委員会が済むまで別室に待機せよ、とのことである。（万一質問でも起つた場合の参考人として会議室外に待たされたわけである）。会議は午後四時頃までかかつたが、遂に何の用事もない。無事継続事業だけは委員会を通過した。礼を述べて帰ろうとすると、号外、号外と鈴の音が玄關にする。見れば「官吏減俸令」の決定である。思えば「東京から京城へ」、「京城から即夜東京へ」不眠不休の数日間、真に席暖まらぬ東奔西走を続け、奔命に疲れ果てた結果は何か、曰く「減俸令の御褒美」。この時ばかりは私も衷心から官吏生活がいやになり、宮仕えの苦勞をしみじみと味わされ「この家の主人井上大蔵大臣」を心にくくも思つた次第である。昭和六年五月二十七日のことである。

以上のような経過で、新規事業も甚だ消極的になつた。又、その所要資金が減少した關係もあつて、次回の運用委員会で承認され、その後毎年所要資金が著減するので、昭和八年までは格別の困難もなく、資金取入の交渉は進捗した。そして問題はむしろ水利組合の高利債借替資金に移り、それも度々の交渉で概ねその目的を達したことは概説に記載した

通りである。このような両面交渉のため、私は在任中毎年二、三回は東上する必要がある。時には一年中三カ月近くも滞京を余儀なくしたこともある。「大蔵省詣で」——それが私の最大任務となつたのも、亦米価惨落の影響に外ならない。

(四) 不良組合の整理

この問題は概説に述べた通り、土地改良事業進展上の一大障害となつた。之を解決せねば組合が困難するだけでなく、融資銀行も非常に迷惑することとなり、又それが新規事業の進捗に悪影響を来すので、全く困惑した。中村土地改良部長はこの問題の解決には、非常に熱心に尽瘁せられた。けれども、このような救済の爲めの助成金の交付も事業困難であつたが、それよりも債務の切捨てとなると、殖銀も利子は兎に角「元金の切捨て」は金融機関の鉄則として絶対御免を蒙むると云う強硬態度で、討論数回に及ぶも容易に譲歩しなかつた。そして牽制手段として新規事業の融資に、時として難色を示すなど、交渉遅々として進展せず、各々立場を固執して譲らず、なかなか妥結を見なかつた。当時の江原道伊達内務部長など、この問題のため屢々出府し、殖銀の植野理事や野田課長と随分激論を重ねたものである。その結果、高利債借替資金の融通、改良工事費の爲めの特別助成金の交付、借入金の償還年限の延長などで解決するものはよろしいが、組合の廃止を余儀なくしたものの解決は、元本債務の一部切捨てを要するので、殖銀当局の決意も容易でなく、私の在任中は二三の小組合の廃止のみに止まつた。そして、後任の碓井課長の時代になり、昭和十年度に根本的解決を見た次第である。

××× 鳩山さんと不良水利組合のモデル ×××

当時の回顧として記憶に存するのは、今は故人の鳩山現総理大臣（当時の文相）訪問の

一挿話である。

威鏡北道の東北端、蘇満国境近くに、国有未墾地約千町歩の広い平野がある。産米増殖更新計画樹立の当初、鳩山さんはこの辺を馬に乗つて踏破され、此処に水利事業を起こして米作をしたらいよいよ水田になるだろうと考えられたものと見える。その後、この国有未墾地の貸付けを受け、桑山水利組合と云うものを設置して水利事業を企劃せられたが、これが御々の鮮内の不良組合のモデルとなる皮肉な結果を生じたのである。当時土地改良課の技術官は米作不適地として反対したようだが、所謂天降りで設置許可になり、揚水機を以つて水を供給することとし、殖銀の融資で一応事業を終つたが、米は全くできない。この辺は日照時間が短かく低温過湿であるのみならず、一種のメタンガスのようなものが、土壌中に発生するので全然米作不適地なのである。それを無理に無理をして色々試みたが、自然条件が不良だからどうにもならない。一時政友会の代議士で、私の郷里熊本県出身の森田正義という豪傑が、鳩山さんの依頼で此処に駐在して、経営に任じていたが、政治家の農業経営でどうにもなるものでない。総督府も殖銀も鳩山さん個人も、今や、もてあます外なくなつた。これが所謂不良水利組合の典型的なものとなつた。それで始末をどうするかという問題は、私と殖銀との相談で、兎に角鳩山さんの意向をたしかめることとし、殖銀の渡辺理事と私と同道して鳩山さんを音羽の私邸に訪問したのである。鳩山さんは、開口一番「あれは総督府と殖銀とにお任せするから如何様にもやつて下さい。」との御挨拶、傍らの薫子夫人を顧みて「そうする外ないなあ」と云われる。正にサジを投げられたわけである。私と渡辺理事は顔を見合わせ「それ以外に方策はありません。相談して善処しますから万事御任せ下さい。」と答える外なく、メロンの御馳走になり引揚げた。結局鳩山さんも事業の完全失敗を自認してホリ出されたのである。斯うなると、殖銀は未墾地の貸付権を引受け、自身で何とか経営策の転向を考える外なくなり、専ら総督府と殖



銀との間に、所謂不良水利組合の整理案の最大なものとして、組合廃止の具体案を講充する外、途なきに至つた。鳩山さんも随分損失を蒙られたことと思うが、その後始末には、総督府も確銀も相当痛手を負うこととなつた。技術的見地から事業不適地とわかつている寒冷地帯での水利事業の実施、米作の奨励失敗に就いての絶好の教訓である。

(五) 落城の悲運

土地改良部の予算は、人件費、物件費、補助費など一切の経費を一括し、「耕地改良拡張費」と云う独立の「款」として、臨時部に計上せられていた。合計約五百万円内外で、当時総督府随一の予算規模を持つていたから、庁費や旅費などの不足に悩むことはなかつただけでなく、毎年会計課から相当割愛方を要望された位余裕があつたので、其の点には全く苦勞がなかつた。又、補助金も事業繰越で相当巨額の使用残を生じていた。そんな訳で昭和六年の五、六月頃、五年度の総督府の決算が不況の爲め歳入減となつたとき、そのままだでは赤字となるから、何とか耕地改良拡張費の補助金残額を、全額翌年度繰越にせず百万円位不用額に立てて、切捨にしてくれないかとの財務局からの懇請があつた。当時総督府の財政窮迫の事情、以つて想像がつくと思う。それで事業進展の前途を十分考察して、「もし万一後年度に於いて予想以上に進展して、計上予算に不足を来すような場合には、切捨てた百万円を増額計上してもらふ」と云う公文交換の形式で、約束をとりつけ、この要求に応じた。然るに六年度末に近づく事業全く停頓して進まず、加之行政整理という難問が生じて来て、土地改良部の存在そのものが危うくなつて来た。そして、同七年度予算は三百七十余万円に削減され、土地改良部は廃止されて、二課に縮小、農林局に所属することになり、それに伴つて本府及び地方庁を通じ相当の人員整理を余儀なくせらるるの悲運に遭遇した。官吏にとつてこの落城の悲運位つらいものは体験者でなければわからない

い。況んや、私は予算経理の当面の責任者として万般の措置をしなければならぬ。のみならず、部長は他に転出を希望せず、この際退官して日本内地に引揚げの決意だつたし、総督府の土地改良技術官の元老であつた水利部長の池田泰治郎氏も勇退すること、又、開墾課長の飯島寛一郎氏はこれよりさき、殖銀に転出したので、数年苦勞を共にして来た、責任者では私が一人残留して孤塁を守ることとなつた。多難多艱の前途を背負うて、どう打開するか、八方塞がりの産米計画をどうして推進するか。私は万策尽きれば「事業と共に討死に」の覚悟を定めて全力を尽して局面の打開に努むることにした。

農林局に統合されてからは、是が非でも対外接衝を一手に引受けざるを得ない。開墾課が土地改良課に統合されることは、私の内心最も好まなかつたことである。企業者との交渉が一段と煩累を加え、且つ相当面倒な問題が残つており、他面、所謂利権屋の策動を封ずることに苦勞を重ねた。一方、既述で述べた通り、干拓事業はこの頃から順に工事が進展し来り、補助金予算に不足を生ずるといふ意外な事態に立ち至つた。全く周章狼狽である。それでやむなく、次年度に於いて補助金を交付するという予算外負担の補助指令を出して糊塗し、八年度予算に於いて、前に切捨てた百万円近い予算の増額計上を財務局に強く要望した。財務局としても、継続事業で既に工事実施済の補助金だから絶体的に交付を要する事情は十分了承しているわけではあつたが、七年年末の予算編成の最後の段階に於いて、総督府の財政難から、どうにもその増額計上が困難な事態になつて来た。私は当時上京してその成行きを注視していたが、林財務局長も困惑し切つて「どうにもならぬから今年一年我慢してくれ。」との悲痛な懇請である。事茲に至れば万事休す。私はかねて覚悟していた通り「事業と共に討死に」の機会到来と観念して、静かに局長に私の苦衷を述べ「このまま京城に帰任できないから、これでお別れします。多年御世話になりました。」と挨拶して出張所を引揚げ帰老しようとした。この模様を見ていた政務總監付の秘書官渡

辺音二郎君はびつくりした様子であつたが、私はそのまま帰宅して辞表を出すことに決心した。そして、その旨家族にも告げて、感慨深い一夜を過ごした。翌日昼頃今井田政務総監に苦衷を述べ、辞表を提出する積りで出張所に出動したところ、私を待ち受けていた随行の山口盛君は、私の顔を見るなり飛んで来て「課長、辞められなくてもよいことになりました。復活しました。」と喜色満面私に告げた。勿論私も大いに安堵して財務局長に厚く謝意を表した次第である。

このように一夜にして形勢好転した経緯はよく私は知らない。後日総監が何かの機会に「産米増殖計画を公債支弁でやるようなことは今後やめねばいかぬなあ」と私に語られたことがある。想像するに、私共の立場の困難なこと、前年からの約束の実行などを考慮して「公債支弁の窮策」に出られ、そのため議会での追究で総監も困られたのだろうと思う。

(註) 耕地改良拡張費予算額

年度	予算額	摘要
昭和五年度	四九七四七〇五	予定計画に準ず
昭和六年度	四七一六三三七	同上
昭和七年度	三七五〇六二二	土地改良部廃止、事業不振に因る減
昭和八年度	五一一四七二四四	干拓事業の進展に因る増
昭和九年度	五四九三六五三	同上、土地改良新規事業中止(九年五月)
昭和十年度	五一一三九二五一	水利組合、救済(産米計画打切りに伴う経費を含む)

(六) 米穀統制問題

農林局に統合されてからの一年間は、米穀統制問題にも関与せねばならぬ立場になり、渡辺農林局長に随行して、農林省の米穀統制会議に参列したこともあるが、この問題には私は門外漢で、専ら石塚技師が局長輔佐の役目を演じ、私は庶務的な仕事に従事したが、農林省と拓務省との張合い、拓務省と外地間の連絡会議など、私としては初めての体験で興味もあり、苦勞でもあつたが好い体験を得た。(此の間に前項に述べた土地改良費予算問題の一件が発生したわけである。)過剰米の処置に悩んで対策に当惑するなど、今日から考えれば全く馬鹿げた話のようであるが、当時は米穀統制問題がまだ軌道に乗らぬ時期であつたし、非常な不況と財政窮乏で、斎藤内閣も処置に窮したのである。会議は、にらみ合いの様な恰好で、糧貯蔵案がまとまるまで相当の日子を空費した。思えば議論するために集まつたのか、話をまとめるために集まつたのか訳がわからぬ様に感じたこともある。腹藏なく、赤心を吐露して、時局匡救の方策を話し合う、そんな謙虚な心持で、少人数で円卓会議をするのでなければ、円満に相談がまとまるものではない。あのような大會議の方式は全く無駄だと痛感した。けれどもこの会議を機とし、農林省の幹部と面識を得たのは、それから間もなく私が農政課長に転じたので、その後の連絡には好都合な機縁を造ることとなつた。この会議で産米増殖計画の根本にふれる問題が論議せらるるのではないかと懸念があつたが、昭和七年の会議では何事もなく済んだ。明けて昭和八年の夏に農務課を農政課、農産課に分離することが、天降り式に突如決定され、湯村農務課長が農産課長専任となり、私が農政課長に転ずることとなり、昭和水利の着工と不良水利組合の救済と云う二大懸案を碓井君に引継ぎ、私は農村振興運動などの重要問題に取組むこととなつて、土地改良事業との関係を離れることとなつた。林財務局長は「君ホットしたろう」と揶

移され、中村前部長からは「これで自分も安心した」との挨拶を頂いた。蓋し私の在任中の労苦は知る人ぞ知るである。

(七) 水 到 成 渠

この回顧録を終るに際して、私は一言斎藤総督の一挿話にふれたいと思う。産米増殖計画は総督の朝鮮統治の重要施策である。総督は実に本事業の創始者であり、且つ前後二回、十年に亘る朝鮮統治の最高責任者として、本事業の達成には非常な関心を有しておられたと思う。恰も第二次在任時代は事業の最盛期でもあつたが、随処に種々の問題が発生した時期でもあつた。安寧水利組合の第六号潜管工事が、意想外の難工事となつて、当時世上の大問題となり、本工事関係者は真に全力を挙げて工事の竣成、通水の成功に努めたが、容易に目的を達せず、全く苦心惨憺であつたが、辛うじて通水に成功の通報に接した。私は、急遽総督室に赴き総督に「只今安寧は通水したとの報告に接しました。」と申上げた。この時総督は両眼をうるませて、腹の底からほとほと低い声で只一言「そんな報告をきくとほんとにうれしいなあ」と云われた。あの温顔寛容な総督の真に満腔の至誠の発露であるこの一言に、私も胸迫まつて言辞なく、退いて自室に帰つた。「総督に全く申訳ない御心配をかけた。我々土地改良関係者の責任も全く重大である。」と私は痛感したのである。あの時の斎藤総督の胸中を拝察して、私は本事業の完遂に生命を賭して当らねば誠に相済まぬと内心深く決意した。これ以来私は「事業と共に討死」の決意を堅持して四年間の苦闘を続けたのである。朝鮮統治の責任者がどんな心事と誠意とを以つて半島の開発に任じたか、惨憺たる労苦と粉骨碎身の献身的努力、この努力あればこそ半島の山河生色蘇り二千万民衆の福祉も増進したのである。

斎藤総督を懐ふ

からくくにみのりの秋を迎えむと

つくせし人のまことしのばる

(昭和三十一年八月記)

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

一〇、整理期の回顧

碓井忠平

第一、産米増殖計画実施の最盛期

・・朝鮮土地改良令の制定・・(土地改良部事務官時代・昭二・七―昭四・一一)

この時代は所謂産米増殖計画も軌道に乗り、計画面積の達成に全力を注いだ時代で、毎週水曜日に土地改良部長室に朝鮮土地改良会社及び東洋拓殖会社の両土地改良代行機関と朝鮮殖産銀行と東拓金融部の両金融機関等が集まり、總督府土地改良部との合同促進協議会が開かれていた。

そんな時代に朝鮮土地改良令が制定公布せられ、私はその仕事を手伝つた。同令は法制

についてはベテランの土地改良課長萩原彦三氏が立案され、私が土地改良部の事務官に転じた当時は既に法制局に廻付されていた。同令は頗る獨創性に富んだ法令で、対象とするところは水利組合組織によらない個人及び共同事業（土地改良契と謂つた）による土地改良事業であるが、その内容に於いて土地の交換分合等、所謂耕地整理に關する頗る複雑な規定を含み、なお、水利組合令、公有水面埋立令、国有未墾地利用法乃至は地稅・地籍等に關する法令との關係をも規定したもので、土地改良全般に對する包括的法規である。その後施行規則・書式及び準則等の告示・法令の解説等は萩原課長の指導で主として私が起草した。そうしてこれらが施行されたのは、昭和三年七月一日であるが、當時日本内地では「土地改良」と云う言葉は余り普遍化していず、勿論法令等の用語としては使用されていなかった。後年昭和十六年頃だつたか、私が審議室事務官として、偶々土地改良令改正案を法制局で説明したとき「朝鮮でも以前は随分獨創的の法令を作つたのですね」と皮肉まじりに感心されたことがある。昭和十六年當時は既に法制も國家總動員法を樞軸として、総て極度の中央集權の時勢で、何んでも右へならえ以外に方法なく、自然朝鮮總督の制令制定權不要論が拾頭していたので、此の辺の皮肉をきかせての批評であることは勿論であつた次第である。なお、現行の日本の土地改良法は昭和二十四年の制定にかゝるものだが朝鮮土地改良令が大いに参考にされたように聞いている。

## 第二、朝鮮産米増殖計画打切り及び

経営困難なる水利組合整理期

（農林局土地改良課長時代・昭和八・八一昭和一一・一）

### （一）

此の時代は所謂減反問題や、米によるアルコール製造又は貯蔵米の廃棄さえ現実に論議

された時代で、東京の總督府出張所に押しかけた内地農民代表からは、吾々朝鮮米に關係ある者は殆んど非國民視されるような時勢で、到底産米増殖などという時代ではなかつた。自分は土地改良課長になつたばかりで、これから頗る有り難からぬ減反問題等の農林・拓務・外地当局の會議の末席に列なつた。（この時は既に土地改良部は整理されて一課に圧縮されていた。）農林省では石黒次官・荷見米穀局長などの鼻息は荒かつた。かゝる時勢で勿論事實上増殖計画の實施は中止状態となつたが、その計画打切り説明書を渡辺農林局長の命令で起草した記憶がある。このため、一番直接の打撃を受けたのは平安南道安州平野三万町歩の昭和水利組合の打切りで、自分の役人生活に於ける最もあじきない思い出の一つである。というのは、青木戒三氏は平安南道知事を罷められて、昭和水利組合長に就任される予定の下に平壤に居をかまえていた。この組合は三カ年停頓し、やつと成立にこぎつけて見ると、産米増殖とは凡そ逆の時代に遷つてしまつていた訳で、同氏が飛ぶ鳥も落す勢いの時代にお世話になつた吾々として、実は、青木さんのあがきにも似た孤軍奮闘振りを觀るに忍びない氣持ちだつた。大蔵省預金部も融資に難色を示し、議會でも昭和水利組合設立問題が採り上げられるような状態で、個人的には何とかし度い氣持で一杯ではあつたが既に吾々微力の及ぶ限界の彼方に問題は行つていた。そんな精神的打撃も大いに影響してか、青木さんは間もなく平壤で逝去された。忘れもしない、私が東京から急行での帰途、窓外に駿河湾を望むあたりで青木さんの計報を新聞で知り、独り暗涙をのみつつ、弔電をもつたことだつた。

### （二）

産米増殖計画中止に關連してその善後措置の一つに朝鮮土地改良株式会社の廃止がある。久保薫一氏が常務だつたが、同氏の云われるのに「自分が当社を創るとき井上準之助氏が



ら固く戒められたことは、取締役は決して株主に迷惑をかけないよう日夜厳に心掛けねばならぬ。その虞れあるときは、即刻機宜の処置を採るべき義務があると云われた。当今の情勢は將に機宜の処置を採るべき時期で、いつそ此の際解散して払込金に不足の所は政府の助成にまかしたい。」との申出でだつた。之も水利組合の整理と同様、元々国の勸奨により、又国の指図により成立し運営されたのであるからとの理由で、昭和十年度の予算に、七万余円かの解散補給金が計上され、技術員等も総督府、民間事業に世話し、又社屋は朝鮮鉱業振興会社に売却する等して、円滑に店仕舞いした。

(三)

この増殖中止の情勢を逆に利用した感もあるが、予て統治上の一個の痛とも觀られていた経営困難なる水利組合の整理問題解決の機運が到来するに至つた。最も熱心に又中心的存在として主張されたのは渡辺森林局長であつた。同氏は地方での直接体験と、氏一流の情勢見透しとから「本来土地改良事業は国営が、濃厚なる国の助成の下に行わるべきものである。内地でも用排水幹線は国営である。朝鮮などは其の更に手前の治水事業さえできていない状況で、このまま計画を強行することは、徒らに農民を苦しめるのみである。此の際既成事業中不良のものを救済して、計画は濃厚なる国の助成のもとに出直すべきである。」と云うのである。吾々事務当局の觀るところを以つてしても二割そこそこの助成金は、創立当初の歳入欠陥及び金利に喰われてしまふ状況で、殊に当時の資金は預金部資金と銀行資金と半々の抱き合わせ資金で、その金利も決して安いものではなかつた。藤井寛太郎氏時代の初期事業には、或いは右の程度の助成でも採算の採れるものもあつたであらうが、當時此の程度の助成では採算の引合ふ組合予定地は事実上殆んど残つてはいなかつた。既に事態は農民・金融機関・政府とも三すくみの行詰り状態に在るとも云えた。水利

組合予定地に指定されると、土地は只でも貰い手がないと云つたような流説さえとふ時勢であつた。

(四)

そこで出来たのが、これら経営困難なる水利組合の整理案であるが、それは大体左の順序によつた。先ず不良と目される組合地区の基本調査を総督府直接に行つた。土質・水害冷害状況・工事上の欠陥・収獲量見込み等で、之は既に萩原及び古庄両課長時代から引き続き行われ、斎藤匡明、藤原氏等非常に有能な若手技術者が実地に當つた。その結果は砂地で恰かもザルの中に用水を張るようで、水の溜らない土質や、何年かに一遍は必ず水害のある地区や、当初の予定に比し灌漑可能地区等蒙利面積が何分の一かに減ずるものや、工事費増嵩、歳入不足による借入金増等で動きのとれないものが相当数出た。又觀の相場も斤量計算によるべきで、地区々々の現場の相場を算出しないで、大ざつばな相場では実情にあわないことも明かになつた。かく整理計画の基礎数字は一から十まで皆既成事実の基礎に根ざしているもので、この正確な数字を得るのに苦心があつた。白紙の上に描く新規計画と異なる苦勞はあつたが、一面それだけ主張に力強さもある次第ではあつた。

右の基本調査により改良工事計画、蒙利可能面積、収獲可能量、適正なる粗相場等を予定して毎年の地主の組合費納入可能限度を算出し、一面歳出に於いても常習的水害地について毎恒常的に災害復旧及歳入欠陥補填積立金を見込んで、将来のつまずきに備える用意をする等、各種の配慮をして、将来の組合収支計画を樹てた。その結果により、借入金償還可能限度額を算出し、なお生ずる償還不足額につき、国に於いて低利資金の融通、償還年限の延長及び国庫補助金の交付をする等の助成方法を講ぜんとするものである。此の草案を殖銀・東拓金融部当事者と協議して練り、総督府案を固め、之で大蔵省預金部の

了解を得て、更に主計局に助成金予算の交渉をするという順序である。吾々は秋口から上京して預金部に説明を初めた。尤も荒井誠一郎預金部長は昭和九年の春、一カ月位の長期に亘り、吾々の案内で朝鮮の該当地区を实地に視察せられていた。右の順序でやつと各段階の難関を通過してほつとした所に、最後に高橋是清大蔵大臣から、朝鮮だけ内地に先行して斯る救済を実施するのは何うかと云う意見が出て、ヒヤヒヤさせられたが、結局朝鮮總督府特別会計の予算の決定が、このため一日か二日遅れたけれども、無事通過した。次いで翌春議會も又預金部資金運用委員会も通つて昭和十年の新年度から整理の実施に入つた。

## (五)

その整理案要旨は左の通りと記憶する。

- (1) 廃止組合、五。如何に工夫するも存続の見込みなく、国庫、預金部、金融機関で損失を分担して廃止するもの。
  - (2) 廃止には至らざるも経営特に困難で国庫補助を要するもの、三十五組合。資金償還年限の延長と金利引下げ措置を講ずるもの、なお歳入欠陥あるもので、その不足額を毎年国庫から補助せんとするもの。この補助金は初年度は相当の額だが、爾後、組合が立て直るに伴い遞減する。
  - (3) 右より稍々輕症で、借入金の償還年限延長の措置のみで更生可能のもの、二十組合。(2)と合わせて預金部資金の低利借替額及び償還年限延長額は当時としては相当膨大な額に上つた。
- 「更生水利組合連合会」右(2)に属する三十五組合の連合会で、歳入補填助成金を、一括受領し、その歳々の実績により各単位組合に配分し、若し剰余あらば、共同積立

して他日の災害及び米価の変動に備えるものである。従つて若し初年度に大災害でもあつたと、計上の助成金では足らず、計画は総てつまづくので心配したがそのこともなかつた。

右のように整理の対象は総計七十組合に近く、当時水利組合の全数が約二百だつたに比し相当の比重であつた。

私はその初年の実績を見ずに人事課長に転じたが、かくて組合員も当局も銀行も一応努力目標が出来た訳で、その共同の努力が実を結び、且つ最も不安なる要素であつた米価も爾後上昇一途と云う幸運にも恵まれ、又一面、河川改修も着々進行して、整理の実は累年上つた。その内連合会には相当の積立金ができ、補助金も予定年度より余程早期に不要となり、見事に更生してしまつた。之で一般の土地改良事業に対する不信も払拭せられて第二次産米増殖計画の基盤も出来た訳であつた。因みに右整理計画は政治・金融・実業界の玄人といった筋からは褒められた。「地味で目立たぬが、着実にして実のある、近來の總督府施策の出色だ。」といつてくれた人もあつた。

なお昭和三年頃から確か同十四年頃まで、土地改良課理事官で居られた山口盛氏は、まことに同課の「ぬし」の如き存在であつて、それだけ同氏の功績も大きい。私の関することだけでも叙上の事項について、その実務遂行の中心は同氏であつたことを付記する。

(昭和三十一年八月 記)

# 一一、土地改良事業の問題点

山口 盛

昭和五、六年に於ける産米の異状豊作に因る米価の暴落に際し、朝鮮米の日本内地進出が内地の農村経済を圧迫すると云う理由の下に、朝鮮産米増殖計画に基く土地改良事業は発足以来九年にして、廃止の已むなきに至つたのであるが、其の間約十六万町歩の土地改良事業が実施せられ、其の規模の広大なること、到底日本の類例に乏しい程のものも数多く、朝鮮統治史上屈指の治績と云えるであらう。さりながら一面には、経営困難なる所謂不良水利組合なるものも発生し、其のため事業の進捗を阻害し、之が収拾策は、蓋し当路者の大いなる悩みであつたことも亦、忘却し難い事実であるが、顧みて此の苦難の事績が現に日本に於いて重要国策として実施中の土地改良事業の遂行上に、活きた資料として極めて貴重なものであることは疑いを容れざる所である。

以下當時に於ける事業遂行の実態を端的に回顧自己批判して見ようと思う。卒直に云つて、此の事業が内地の世論によつて廃止の憂目を見たとは云うものの、内面的には事業は当時既に限界点に達し、四苦八苦全くの行詰り状態にあつたもので、之が打開進展の途は、尋常の手段ではどうにもならない段階に追い詰められて居つたのである。然らば何故に行詰まつたかと思ふ点を究明することが、即ち此の事業の施行上に活きた資料を提供する所以ではないかと思ふのである。

先ず第一の問題点として考えさせられることは、終戦迄の行政庁、特に大蔵省型の消極的支配力が積極性の此の種事業を必要以上に規制して、事業執行担当部局の運用の妙を完に封じて終つたと云つてもよい程に、非常に窮屈なものであつたと云うのが當時の實感である。其の代表的なものとして、土地改良事業補助規則による国庫補助金がよい例である。即ち大蔵省に御百度を踏んで辛うじて容認された補助率（灌漑改善二割、地目変換二割五分、開墾三割、干拓五割）は交渉の経過から見ても、之を絶体にかすことの出来ぬものと思ひ込んで居たのが當時の行政環境であつたのであるから、此の補助率について種目別の区分を撤廃したり、大巾に引上げたり、更に柔軟性を持たせると云うような変革は総督府の一部局長が戦を堵しかかつても所詮は実現の可能性は全然なかつたのである。従つて下岡政務総監一代の経綸も其の発足の当初に於いて事業の基本となる国家の助成の点に於いて、既にくずれていたのである。今から思えば大蔵省当局の財政権の支配力の前には全く歯が立たず、寧ろ故なくして屈従の儘に此の大事業と取り組んだものであつた。

事業不振の原因は、不良水利組合の発生や、地元民の理解熱意の乏しいということも勿論あつたが、問題点は事業の採算度に置かれたのである。即ち事業計画の基本となる国庫補助率と、基準米価の二点で左右されたのである。此の場合補助率については採算の成り立つようには各事業に即応して裁量する途は全然なかつたのであるから、勢い好ましからざることはあるが、採算基準米価に於いて無理をしても採算見合の線を出そうとするようになつた。即ち採算基準米価は事業当初は安全度を見て概石当八円としたものがだんだん引上げて最終的には十二、三円位迄になつた。之は誠に数字の遊戲にも等しいものだと云え、結果的には極めて重大なる事態を包蔵するものであつて、若し一度米価が採算基準米価を著しく下廻れば、忽ち組合費の負担力を割り、極端なものに至つては、全収獲量を投じて組合費にも足りないと思ふ組合も発生し、又時には技術的良識を逸脱して、必要ない仕事を設計から除外して迄も、採算のつじつまを合わせたものの、後年に至つて追加改良工事を余儀なくされて、財政上の重圧を深めた例もあつたのであるが、其の結果は所

謂不良組合として救済せねばならない羽目に陥つた事例も少なしとしない。

更に又、如上の苦肉策を敢てする原因の一つとして、事業執行当務者が、土地改良事業施行年次計画に強くこだわつたことがそれである。事業不振の渦中に在つて何とかして、計画面積に漕ぎつけようとして、水利組合の設置認可を新年度の五月頃に入つて、旧年度に属する三月三十一日に遡及して、指令書を交付すると云うような足掻き迄もして、事態の收拾に拍車をかけたものであつたが之がため翌年度の施行実績がガタ落ちに減つて、却つて不自然のものになり困惑したような笑えぬ事態もあつた。(今は故人となられた、時の水利課長池田泰治郎氏と後年此の話題に触れて思い出を語つたことがある。)事業執行担当者としては、眼玉の血走る程の真剣さであつたことは当時の役人気質の良さも悪さもよく判るのであるが、今もなお同様なことが此の種事業の担当庁に跡を断たないのは後年度の予算削減を危惧する善意の通弊であることは否めない。

之を要するに、事業不振乃至事業不良の原因は、一部に設計の杜撰に基因するものゝあつたことは否定出来ないが、其の主因とも云うべきものは、あの融通性のない補助率に完全にくくりつけられての不自由な企業計画に終始しなければならなかつたことに由来すると云つて決して過言ではなかつたのである。若し国家の助成率を最高、七割程度を限度として、事務費を含む事業費金額を対象として、採算の見合う限度に於いて、各々其の事業計画の内容に適應せしむるようになり、助成方法に融通性を持たせたならば、あんな無益の努力をせずして、事業の進展を確保し得たであらうと思ふことは、朝鮮の土地改良事業に關与した人の共通の心境であらう。

第二の問題点として、事業完成後の維持管理期に於いて、米価による時の農家経済に適合する財政施策に欠けていた点を指摘しなければならぬ。

即ち、事業完成後の維持管理は、事業本来の目的達成の手段に外ならないのであるが、

此の点に於いて国家の指導助成がソコ迄一貫せず、甚だ不徹底であつたのである。

例えば災害に因る収穫の著しい減少とか、米価の下落とかによつて、農家(地主)の負担が事実上困難であることが明瞭な場合に直面して、尚且つ組合規約所定の組合費の徴収を強行すれば、勢い農家経済に破綻を来たすことは当然の帰結である。昭和五、六年の米価暴落の際、京畿道の富平、江原道の中央水利組合等から組合費の物納(粃)を認めて貰いたいと云う陳情のあつたことがあるが、公課の金納制度の下に於いては、例え一面の理由はあると認めても、当時の水利組合の制度に於いては、之を是認することに踏み切りがつかず、結局黙認の形で組合が粃の野積保管をやつて決済をつけたことがあるが、此の場合水利組合が粃の収納保管処分は勿論、之より生ずる財政上の赤字対策について、国の積極的指導助成の下に公然と為し得ることに制度の改革をすれば、維持管理は相当複雑になるが、事態の收拾、決済は必ずしも困難ではなかつたのである。しかるに当時は水利組合会の範疇を超えて、かかる措置が出来なかつたために、事情を知りつつも、組合経済を主眼に置いて収支の均衡保持を堅く採つて、組合費の無理な徴収を強行して、全然事情を異にする他の公共団体の公課と同一視し、敢て制度変革の筆に出でなかつたことは、例え当時の行政環境が之を許さない事情はあつたとしても、之は恰も濁流に押し流される者を、目前に見ながら救いの手を延べなかつた罪を免れ得ないもので、事務当局の一員として誠に申訳ない一事であつた。

然しながら本計画の末期に於いて三十四の不良水利組合の対策に就いては、制度そのものの変革は行わなかつたが、事実上於いては聊か運用の点に於いて、以上の欠陥を補うに足る農林局の独断措置が一応の成功を収めて罪はろほしに値したように思えるのである。此の不良水利組合の整理救済については、中村土地改良部長の時代、既に考えられて居つて、部長自ら「土地改良問答」なるパンフレットを起草して公開し、併せて事業推進の



一助に貸せられたこともあつたのであるが、本格的には土地改良事業の中止を好機とし本事業の後始末として急角度に其の氣運拾頭し、時の農林局長渡辺忍氏の断乎たる決意と、切々の意図を汲んで、土地改良課長碓井忠平氏が、課僚斎藤匡明、木下三次、寺田脩平の諸氏を帯同して、滞京約半歳に亘つて、財務局の協力の下に大蔵省と名状すべからざる舌難の接衝を重ねて、漸く成案を見たものである。此の案の実施の過程に於いて、金利の大巾引下、組合償還年限の長期延長等、東拓及び殖銀の犠牲もかなり大きかつたが、之等金融機關の理解協力も与つて力あつて、極めて好調裡に整理の實を挙げ得たのであつた。之を概説すれば、即ち三十五の不良水利組合を一丸とする更生水利組合連合会（会長三井栄長）を組織し、増産のための農事改良（作付品種の選定、苗代の設置、肥培管理、給水管理等）と財政經理の二点を主眼として、総督府、道間の緊密なる連繫の下に徹底的指導助成を敢行し、毎年度出来秋の収量調査を厳密に励行し、生産費等の実情を充分考慮に入れて、時の米価による組合費の負担力を算定し、或る程度の農家（地主）の利益を保有せしめて、組合費の賦課を決定し、その結果赤字の組合には更生水利組合連合会を通じて国庫補助金を交付し、一面負担力に余剰ある組合は、その余剰金を納付させると云う操作によつて、個々の組合の立ち行くような仕組で、運営した結果、農家の生産意欲は急角度に向上し、収穫量も年々上昇の一途を辿り、組合費の徴収も亦自然極めて円滑に行われ、更生水利組合連合会には相当巨額の積立金（之は財政補助準備金とも云うべきもので恐らく、大蔵省はこの積立金は最後迄知らなかつたものだと思ふ）を保有する等、凡そ不良水利組合に似合わぬ余裕金を持つようになり、終戦迄極めて順調に整理の實を挙げ得たのである。

以上朝鮮の土地改良事業を回顧して二つの問題点について究明を試みた次第であるが、之を要するに国家の助成に思い切つて巾と融通性を持たせ、其の事業完成后に於ける維持管理に至る迄一貫した指導助成の出来得るような制度を、産米増殖計画に織り込んで発足したならば、恐らくは此の事業の事績に一段の精彩を添えたことであらうと思ふ。あれから二十余年の歳月は夢のように流れた。顧みて今は外国となつた朝鮮半島の民衆が、往年の土地改良事業によつて、年々歳々早魃の危機から救われて居る現実を想うと、転た懐旧の情に堪えぬものがある。

（註）山口君は土地改良課勤務の理事官として永年予算資金、水利組合の財政監督等の総括的事務を担当し、大蔵省との接衝にも度々上京したし、不良組合の整理についても終始尽瘁したのである。後、特別の抜擢を受け黄海道の内務部長に昇進した。

（古庄）

## 一二、土地改良事業の復興

### 細見正義

朝鮮の第二次産米増殖計画―所謂増米計画―は、総督府と農林省との長い、激しい論争の末に、総督府の正しい主張が次第に農林省を押切つて、成立・成長・拡大された苦しい

茨の路の歴史を語っている。

昭和十一年六月、私は米穀課事務官を命ぜられた。農林局長に湯村さん、米穀課長は塩田さん、技師陣は石塚・吉池・伊東・美代の諸君を始めとするベテラン揃いである。当時は産米増殖計画は既に中止され、政府は過剰米の処理に大童で内地の農村恐慌は朝鮮米のせいみたい云われた時代である。

農林行政には初めての経験の私は、色々勉強させて貰ったが、その一つは米穀需給推算である。

ところでこの需給推算は、主として農林省が原案を作り、外地当局と協議の上定めるのであるが、農林省の態度がどうも納得がいかない。技術屋さん達とも色々話合つて見たが、朝鮮米抑圧策の臭いが強く、農林省の将来の朝鮮米移出見込量がどう考えても過大で、不合理としか思われない。

やがてこの問題は米穀課内での与論となり、真剣に検討され始めた。この急先鋒となつたのが、過剰米処理のための米穀自治管理法に基いて増員された私共米政係の若手連中であつたのは皮肉である。我々は農村恐慌を背景とした農林省の朝鮮米抑圧策と、これに対処苦心した総督府の行掛りには全く白紙で、先入観にとらわれることなく、長期食糧自給策と朝鮮農業の発展のみを考えることが出来たのである。我々は課長、局長の下で幾度か需給推算を練り、デイスキャツスした。そして到達した結論は矢張り朝鮮農業界の常識とも云うべき次の様なものであつた。

(1) 我国産米は現在こそ過剰気味かも知れないが、消費増によつて遠からず自給が困難になる。殊に朝鮮工業の急速な発展、産業政策の成功により、朝鮮経済は急速な発展途上にある。これは必然に民衆の消費水準の向上、米穀消費量の増加をもたらすものである。朝鮮の米穀需給推算は、朝鮮経済の転機たる昭和六年又は七年以降の数字を

基礎とすべきであり、これによれば朝鮮米移出力は急激な減少傾向をたどるであろう。

(2) 鮮内水田百七十萬町歩の中、灌漑施設の全く欠けている純天水畝五七萬町歩、極めて不完全な準天水畝三〇萬町歩に上り、作柄は甚だしく不安定で、豊凶の差は実に千数百万石にも達し、凶作の頻度も著しく大である。一旦有事の際大凶作に見舞われれば、それこそ腹が減つて戦が出来なくなり、農民の惨状は目もあてられない。

(3) 増産の目的は、耕種法改善によつて相当程度達せられるが、米作安定度の向上には灌漑設備の整備が絶体的な条件であるし、耕種法の改善すら豊凶常ない天水畝では、まるでばくちみたいで実現困難である。

(4) 以上を総合し、更に米作が朝鮮農業の主作であり、朝鮮経済の上に占める圧倒的な比重から見ても、速やかに第二次産米増殖計画を樹立実施する必要がある。その計画は灌漑施設の整備を中心とする土地改良事業と、反当収量増加を目標とする耕種法改善の二本建が適当である。干拓事業は状況の推移を見て着手しなければならぬが、これは成果を得るまでに、長い期間を必要とするから、なるべく早急に着手出来るよう考慮すること。

以上の結論に基いて関係方面と折衝を開始したが、農林省はあくまで朝鮮米を目の仇にしている。議会方面や軍部にまで働きかけて見たが、何れも日本内地の農村恐慌が頭にしみ込んでいて、なかなか我々の主張に耳をかして呉れない。この様なトンネル時代が二年近く続いた。

しかし冬来りなば春遠からじ、事態はやがて徐々に、そして終には急速に転換した。日華事変の拡大、経済界の好転に伴い、米の需給は次第に窮屈になつて来た。流石の農林省も汲々ながら与論に圧せられて朝鮮の増産計画に同意せざるを得なくなつたが、それでも尚、土地改良事業には強硬に反対し、当初に査定を経たものは十四年度耕種法改善一本槍

の百二十万石増産程度の計画で、我々の強い要望たる土地改良事業は遂に認められなかつた。しかし、この計画が議会に付議せられるや、俄然農林省の食糧政策に強い批判が加えられ、遂に農林省幹部―朝鮮の増産計画の強硬な反対者―が面子を潰して総督府出張所に總監、局長を訪ね、この計画の拡大強化を要請するに至つた。そして十五年度から増産目標六百八十万石、中小規模の灌漑改善事業をも認めるとの了解がつき、我々は三斗の溜飲を一時に下げた思いで、その夜は銀座を飲んで歩いたものである。

かくて朝鮮米の増産計画も漸く長いトンネルを抜けて、陽光の当り始めた昭和十四年四月、私は土地改良課長に転ぜられた。全く運の好い時期であつた。何よりも心強かつたのは、先輩諸兄が苦心して温存された優秀な技術陣容であつた。長い不遇なトンネル時代によくあれだけの技術陣が温存せられたものである。そして調査、設計を終つて、何時でも着手出来る数多くの事業計画のストック！。

昭和十四年の夏には、朝鮮は未曾有の大旱害に見舞われた。この大旱害は、何よりも雄弁に総督府年来の主張の正しさと、朝鮮の土地改良事業の必要とを立証した。朝鮮米の移出量は三〇〇万石にも達せず、農林省は米穀の確保、配給の円滑化に苦慮、狂奔し、総督府へも幾度か辞を低くして救援を要請するに至つた。全く天に唾した愚を身にしてみて体験した訳である。総督府二十年余の朝鮮米の宣伝や、我々の数年に亘る農林省との論戦苦闘よりも、この大旱害のお蔭で、朝鮮米の真価と朝鮮の土地改良事業再開の必要が、強く、深く朝鮮の人士に認識せられたことは、時局の圧力もさることながら、考えて見ると全く皮肉な話ではある。

斯くて朝鮮の土地改良事業は再び時代の脚光を浴びて登場した。一番始めには旱害対策としての中小規模灌漑改善を主体とする比較的小計画として出発したが、ついで昭和十五年度から実施せられた第二次産米増産計画―南総督の所謂増米計画では、増産目標六百八

十万石、土地改良事業は大小の灌漑施設の改善、暗渠排水等を網羅した本格的なものとなり、増米計画の重点は耕種法の改善から、土地改良事業に移つた。引続いて増米計画は十七年度に更に改訂拡大せられ、目標数量千二百万石、待望の干拓事業をも併せ実施することとなり、第一次産米増産を凌ぐ大計画にまで極めて急速なテンポで発展、成長したのであつた。

この間、米穀課事務官として、ついで土地改良課長として、この計画の立案、実施に参画出来たことは、私の最も懐かしい思い出の一つである。そしてつくづく思うことは、これ等の計画の立案、実施に當つて、先輩諸兄の貴重な遺産の恩恵である。先輩諸兄が苦心して温存せられた優秀な技術陣と、数多くの土地改良事業実施設計のストックは、何物にも換え難い宝であつた。この遺産があればこそ、時局の急転に即応して国家の要請に應えて速に増産計画を確信を持つて樹立することが出来たし、数多くの事業が時を移さず實際に工事に着手せられて、農林省をして円滑な事業の進捗に驚異の眼をみはらしめることが出来たのである。蓋し政治が目前の事象にとらわれた近視眼的なものではなく、飽くまで遠大な将来を見透したものでなければならぬことの好適例であらう。

(終り)

## 一三、大戦末期の土地改良事業

塩田正洪

私が農林局長として在任したのは、昭和十七年末から約二年間で、恰も太平洋戦争が漸く熾烈を加えて来たときから、国力の消耗が逐日著しくなり、敗色は今や殆んど覆いかくせないまでに濃厚となつて来た頃までの間であつて、民心を只管戦争遂行に結集して行くためには、物資が不足勝ちながらも、人々の間に不平不満の少なきを期することが、小磯総督を始めとし幹部の最も苦心したところであつた。就中食糧問題は半島の治安維持に直接の影響を持つていて、一度その施策を誤らんか、日本の内部結束崩壊への危端ともなる虞が多分にあつたので、私の農林局長としての仕事は、勢い食糧の需給、調整、而かも日・鮮・満三地域に亘る総合調整に大部分を占められる実情であつた。戦争が苛烈になればなる程、食糧、殊に米穀の消費量は増大して行つたので、苟くも食糧の増産に連がる措置は、可能な限り之を実行に移し、中でも土地改良事業に付いては、聊かも手を緩めるものではなかつた。朝鮮農地開発管団令を施行して、元農林局長として令名の高かつた渡辺忍氏を、その理事長に迎え、縦横の手腕發揮に期待したのも、実に戦局の急需に即応せんがための措置に外ならなかつた。

当時各地に増米計画に基づく大規模な土地改良事業が施工中であつたが、管団設立と共に之を移管し、その手によつて強力迅速に事業を続行することになつたのであるが、戦局の推移と共に、工事に必要な鋼材、セメント、木材等の資材は、日に増し窮屈となり、金があつても仕事は一向に進捗しない情勢となり、管団幹部の仕事は、資材確保に奔走するものが、精一杯と云つた有様、殊に十八年末に、総督府の機構が所謂決戦即応の体制に改められ、資材統制の一元化、軍需生産責任制の確保を目途として、鉱工局が設置せられ、乏しき資材の割当は、軍需指定工場への絶体優先の操作が行われるに至つて、二、三年先きに効果を生むような、食糧増産施設に対しては、已むを得ず、第二次的に遇せられる窮境に追いこまれざるを得なくなつた。

併しながら、打ち続く内外地に亘る不作に対処するためには、即効的増産施設を講ずる必要があり、しかもその施設には出来得る限り物動資材を使わない方法を考えねばならぬ。斯様な前提条件に於いて案出されたのが、所謂小溜池による増産対策である。即ち蒙利面積も僅々十数町歩程度で、水源は山間の溪流を堰き止めたり、地下水を利用したり、天水を溜めたりする程度の、全く文字通りの小規模の溜池によるもので、従つて堰堤の如きも、極少量のセメントを使用するに止め、専ら勤労奉仕による作業によつて竣工させる計画であつた。此の計画が、図らずも打続く旱魃に悲鳴を上げておつた農民の非常に歓迎する所となり、各地とも競つて実施せられるに至つた。勿論管団施工の事業に較べれば、正に鉄砲と竹ヤリとの差にも等しい企てではあるが、即効的で、且つ当時の国力に相応した施設であつたと思う。それだけに、近代的技術を駆使していた、技術者からはまことに児童にも等しい施設とばかり、あまり好感を以つて迎えられず、当時の乾土地改良課長もこれ等の技術者を同調させて、各道に呼びかけて行くには、相当苦心していたようであつた。併し小磯総督は、日夜食糧問題には非常に心痛せられていただけに、この施設には、殊の外関心を持たれ、地方巡視の際は、必ず工事現場なり、既設の小溜池なりを視察して、施工者や、農民を激励せられた。又地方農民も挙つて、施工を關係官庁に要請するに至つて、漸次技術者も大勢に順応するに至つた許りでなく、一杉君が課長となるや、全力を殆んど之に傾注し、大規模工事は、管団の活動を側面的に加勢すると云つた方針に出たため施工面積も頗る増加し、技術者も、大いに戦時食糧増産にこの面より寄与しようとする気



慨に燃ゆるに至ったことは特筆に値すると思う。

尚、これと同時に忘れることの出来ないのは、土地改良課長乾明君の不慮の災厄である。乾課長は、当時荒れに荒れていた、朝鮮海峡を幾度か往復して、宮団令の制定、土地改良事業関係の予算や、物動等の折衝のため挺身して、漸やく宮団令の制定の施行を見、今後之を脅して大いに半島の食糧事情の改善に寄与せんとする情熱に燃えながら東京から帰鮮の途次、昭和十八年八月十六日、下関出帆の崑崙丸に投じ、その撃沈に遭い、前途尚洋々たる春秋を余しながら玄海灘に怨を呑んで遭難したのであった。まことに惜しみても余りある尊い犠牲であつた。

(終り)

#### 一四、終戦直前の土地改良事業

一 杉 藤 平

私が慶南内務部長から本府土地改良課長になつたのは、昭和十八年であつた。戦局は日に日に我が方に不利となつた。前任乾君は玄海灘で崑崙丸と共に海の藻屑となつた。軍需資材は益々窮乏し、政府の割当は愈々窮屈となつた。東京事務所に頑張つて資材の割当を貰うのが最も重要な仕事だつた。それが為め農林省の協力を得て軍需省へ日参した。當時政府は、(1)陸軍(2)海軍へ、先ず割当て残りを、(3)一般民需に振り向けた。就中、鋼材の獲

得が容易でなかつた。

当時我が国全体の鉄の生産高は年間百万トンだつたように思う。之に比し米国は一億トンとかと聞いていた。資材に係属した者は、この生産量を対比して大東亜戦争の帰趨を予測しないわけに行かなかつた。この年間百万トンの生産高の内、若干量を割当てられても現物化することは又容易ではなかつた。当時朝鮮では二万八千五百町歩、五万石の増収を見込む平南水利組合を始め、各地に大工事をやつていた。誰も工事を中途に止める気にはなれない。殊に当面の責任者たる僕は、各地開墾営団の渡辺理事長と随分ねばつたものだ。戦局苛烈サイパン、テニアンは陥ち敵の沖繩上陸を目前に控えて猶も平南水利組合の工事を続行したのは、海軍が大和、武蔵の大艦の建造を続けた愚と同一だつたろう。尤も内地の食糧は極度に不足し、朝鮮米に依存する度が多かつたので之に應えるためでもあつたが。十八年の秋になつて鋼材は到底入手出来ないと思つた。僕は、資材を使わずに、増米に緊急役立たすため全鮮一斉に溜池を造ることにした。そして所要経費一億円を要求した。この溜池工事には小磯総督が特に熱心でその発案に依り技術者の反対を一蹴し、在京中の田中政務総監を督して予算の獲得に努めさせた。いかに増米が焦眉の急とは云え、十八年度予算に溜池のために一億円を計上することは大蔵省が肯じなかつた。その内小磯総督は総理大臣に就任せられたので、朝鮮関係は何かと好都合になつた。斯くて十八、九年度は全鮮各地に溜池工事が一斉に行われたが、之が完成は二十年春の灌漑用水に備うるためだつたから、結局戦時下の増米には役立たなかつた。八月十五日あの悲惨な運命に見舞われボウ然自失、やがてなつかしい朝鮮にも永い別れを告げて去つた。其の後全鮮注視の的だつた平南水利組合も其の他多数の水利事業も、そのまま放置されたのではなからうか。施政以来産米増殖の為め心血を注いだ結果、併合当時一千万石程度だつた産米が終戦時には二千三百万石にも達したことは統治上特筆大書すべき事績だつたと思う。

(終り)

## 一五、朝鮮農地開發管團業務の思い出

元朝鮮農地開發管團理事長  
兼 朝鮮水利組合連合会長

大 島 良 士

昭和十九年九月初旬、農地開發管團理事長の渡辺忍氏が朝鮮食糧管團理事長に転出する際、その後任を引受くる様、白石澤林局長や渡辺氏より交渉を受けた。当時私は（協同油脂株式会社は三井物産株式会社の肩代りと共に社長を退任）東亜興業株式会社の社長であった。同社は日本内地の金沢や瀬戸の製菓の遊休設備を威鏡北道の朱乙に移駐し、金属回収の一翼として銅食器回収の代替物資製造の工場を設計するため、戦時金融公庫と朝鮮殖産行が出資者となり、技術員も日本内地より移駐し、経営を朝鮮側に当らせることとなり私が社長となつて建設に當つて居たので、文字通りの突貫工事であつた。工場は当初一年完成の約束で略々完成に近づいて居たのであるが、農地管團転出については関係方面、特に軍需省や戦時金融庫の諒解を求むる必要があり、漸く当分、東亜興業株式会社を兼任するとの条件の下に理事長を引受くることになつたのである。そして朝鮮水利組合連合会長を兼任することになつたのである。

当時管團の事業地区は四十三カ所、工事計画面積約十一万六千町歩であつたが、大東亜戦争も終末に近づいて居た折柄、工事用鋼材、セメント、労務の不足は甚しいものがあつた。到底、所期の如く進捗し得ない状況に在り、日夜苦慮を重ねたのである。従つて工事の行詰るに随ひ、止むを得ず次第に地域的に重点的に工事を進める外なきに至つたのである。特に南鮮地方に対するセメントの輸送は軍需物資の爲め絶対的と云う程不可能となり、南

鮮地方の地区、特に東津地区の如く多量のセメントを要する地区は事実上中止の止むなきに至つたのである。これはセメント工場が北鮮、西鮮に偏在した関係と南行の鉄道貨車便は済州島防衛用セメント等のため、軍が独占した爲めである。私は軍司令官や軍参謀長と防衛も緊要だが食糧増産もこれに劣らず焦眉の急に非ずやと度々激論し、軍は海上輸送に依ることを約束しながらも一向実行せず、私は連日軍司令部、交通局、軍輸送司令部を駆けずり廻りながらも、一向に埒が明かなかつたのである。

かくの如くにして、戦争は愈々終末に近ずき、最後には殆んど他の地区を中止して平南地区（昭和水利組合地区）に管團の総力をそそぐことになつたのである。これには総督の決断を仰ぎ、実行することになつたのであるが、当時総督府内部にも平南地区は中止すべしとの声しきりだつたのを押し切つたのである。

ここで私事を申して恐縮だが私は、官吏生活の第一歩を当時農工商工課長たりし青木戒三氏の下に入り、公私共に一方ならぬ薫陶を受けたのである。青木氏はその後榮進して平安南道知事となり、退官后昭和水利組合長となつて、その建設に心血をそそがれたのであるが、不幸浜口内閣の緊縮政策の犠牲となり、中止となつて恨みを呑みながら幾年を経ず逝去せられたのである。故に私としては農地開發管團を引受けた当初より、この平南地区だけはこの恩人の素志を貫き、その霊を慰むる爲め甲合戦と唱えつつ最后迄頑張るつもりで居たのであり、無理を承知して遮二無二突貫工事を続けたのである。何分にも大小六キロに亘る墜道の開サク、ダム建設、幹線用水路の建設と、管團と総督府と工事請負人一人となつて工事の遂行に當るの態勢を整え、管團の川沢部長と乾総督府技師は現場に常駐し、私も頻りに現場に赴き督励したのであるが、八月下旬漸く大小の墜道は凡て貫通し、待望の大同江上流より新安州平野に通水するの態勢は出来上つたのである。あゝ何等の歓喜ぞ、平南知事古川兼秀氏の絶大なる御援助に依り、労務の供出に熱意を示されしこ

とや、間組、中村組等工事請負人の苦闘、更に機械技術の協力を与えられし朝鮮電力株式会社々長久保田豊氏の御厚意に対しては終生忘れ得ぬものがある。かくして八月十一日通水式を挙げたのである。而してひそかに青木戒三氏に報恩の一端を尽し得たことを自慰したのである。

農地開発営団在動中を顧みて、あまりにも未完成の地区の多いことは寒に遺憾である。営団設立后完成したのは慶北善山、慶南東面、咸南桃花の小地区に過ぎず、平南地区の如きも今一、二年の時日を籍せば、恐らく完成したのではないかと思う。最近北鮮政府にて平南地区のパンフレットを頒布せる様であるが恐らくは工事を続行したのではないかと思う。

終戦後の農地開発営団及び水利組合連合会の善後措置には相等悩まされたのである。終戦となるや職員には取りあえず営団、水利組合連合会とも退職金、帰郷旅費及び向う二カ年分の給与を転職資金として日本人、朝鮮人一事に支給し、日本人に対しては任意引揚ぐることとし、工事請負人には大体七月末の出来形に依り工事代金を支払い、結末をつけ、引継書類を作製したのである。この資金調達のため、朝鮮殖産銀行、特に山口重政理事に大要御骨折りを願った次第である。而して十月九日付にて営団は軍政府に接收され、接收官は東洋殖産株式会社接收官キャプテン、ケート（東洋殖産株式会社技術部長兼耕地区部長）なる旨、新営団理事李圭衍氏（東拓間島支店長）より通告あり、併せて日本人営団役職員は全部解任する旨通知書を交付せられたのである。

茲に厄介な問題が起つたのである。(1)工事代金支払いに不当の点あり。(2)前渡金、金二千三百八万円余を回収せざるは不当なり。(3)職員に支給せる転職資金は不当なり。と云うのである。当初私としては終戦に依る工事中止に依り工事請負人は不測の損害を受けたる故補償金（涙金）を支給すべきであると主張したのであるが、容れられず、前記三点に就

いて追究せられたのである。そして私は突然逮捕せられ、京畿道警察部に留置せられたのであるが、そのとき隣房に早野法務局長や伊藤通信局長も留置せられ居るのを見たのである。私は一夜留置せられ直ちに釈放され、ケート接收官の許に伴われ、残留工事請負人数名と共に前渡金を即刻返還すべしと命令せられたのである。尤も前記の(1)の工事代金の不当支払は事実と反することを諒解し、又(3)の転職資金の返還も不問に附することの諒解を得て、前渡金返還の一本ヤリで責められたのである。当時営団としては終戦時支払うべきものは金庫を空にして支払い、更に特別借入金まで行つたので営団には資金全然なく、営団の運営は資金的に行詰つたようである。

殆んど連日私と工事請負人は接收官に呼出され、督促を受けるので、前渡金の性質を説明しこの前渡金は工事了了后精算すべきものであるが、工事は不測の事態に依り中止となりたる為めの余儀なき措置であること、又前渡金は元来準備資金につき工事現場の機材等を、接收して充当しては如何と主張せしも、規模の大なる工事現場は当時殆んど北鮮地区に在るため接收不可能であり、結局残留工事請負人数名にて金百二十八万円余を支払い、何日の間にか工事請負人も全部引揚げ、私一人残留したのである。翌年一月には営団職員も私を残して全部引揚げ、私は文字通り孤軍奮闘を続けたのである。この間、接收官は工事請負人の日本内地送金額等を銀行について根気よく調査をして居たが、私には日本に一応出張して工事請負人を歴訪して回収せよと命令した。然し私は到底不可能なりと拒絶し、寧ろその必要あらば朝鮮軍政府と日本内地進駐軍と直接連絡して適當の措置を講ぜられたし、と申出て、結局要領を得ずに終り、接收官もこれ以上追及せず、一月初旬には責任を解除して日本に帰還させても宜しいとの口吻を洩らすに至つたのである。

然るにこゝに問題が未だ一つ残されて居たのである。朝鮮水利組合連合会の退職慰労金、転職資金返済のことである。この方は軍政府直轄で耕地課より返済の命令があり日本職員

数も少なき為め金額は少なかつたのであるが、職員は凡て引揚后なる為め私及び景山副会長に弁償せよとの事である。私には先ず三坂通りの居宅と預金通帳の提出を命ぜられ、景山氏も金策してくれたが尚不足するので、(私の居宅は二百六十坪の土地があつたが土地は朝鮮の土地だから弁償額に充当せずとのことで)朝鮮物資営団の渡辺理事長や三木理事の御骨折等に依り漸く弁償を完了したのである。その間景山氏は一度拘留せられたが、私も会長としての責任上拘留すると称し居りたるも、営団接収官ケイト氏の反対に依りその儘になつたのである。たゞ退職金、転職資金は朝鮮人にも一率に支給してあるので、日本人職員の返済を完了したる以上朝鮮人職員にもこの際返済せしむべしと主張したる為、止むを得ず月賦返済することになつたとか、飛んだヤブ蛇になつたと朝鮮人職員は困つていと仄聞する。

水利組合連合会についても営団同様工事の進捗思うに任かせず、特に終戦直前の如きは営団の工事重点主義の波及を受け、営団に集中したためセメント一袋も水利組合に割当てる事が出来ず申訴けない仕儀であつた。斯くして水利組合連合会の方も問題を解決したことを告げたのでケイト接収官は「営団に対する責任は解除する。速かに引揚げよ」との命令であつた。そして二月十四日最後の日本人集団引揚に加わり竜山発貨物車で引揚の途についてたのである。

営団の接収官ケイト氏は個人としては非常に磊落な親切な人であつた。日本語も他のアメリカ人同様、熱心に勉強し「溪壑」と印章まで作成し、又しきりに私にも日本語で話しかけるのである。私は英語が苦手なので何時も朝鮮人の通訳を通して話をして居たのであるが、どうも意思の疏通を欠く嫌いがあるので筆談することに改めたのである。私が英語で書面にして出すと、一々「イエス」とか「ノー」と書いてくれるので結局話が判り易くなつた訳である。

屋間は東拓の事務所で前渡金がどうのこうのと眼を怒らせて話して居るが、一度公務を離れると百年の知己の如く親しく扱つてくれたのである。私のアパートにも訪ねて来て生活の不自由はないかと問い、又酒は飲むのかと尋ねる故「酒があれば朝からでも飲むが無いから飲めぬ。」と答えると、毎朝自分でビールを一ダース宛届けてくれるし、「米は不自由なれば東拓はどうにでもなるから届けてやる。」と言ひ、又十二月末、夜遅く訪ねて来て、「朝鮮人間に不穏の状況があるから貴重品は預かつてやる、且、我には連絡して君を保護するよう手配してあるから心配するな。」と注意する等細かく気を配つてくれたのである。いざ引揚げる際は「本人は在職中不正不当の行為なかりしことを証明する」という書面を渡し、「君は日本人としては稀に見る責任觀念の強い人物だ」などと冷かして居たのである。尚、「引揚げの費用はあるか」と心配するので私は「弁償や長期残留の生活費等のため一文なしだ。」と答えると営団より費用を心配してくれたのである。但しその中一千円だけ日本に持参するよう念を押して居た。

出立の朝ケイト氏はジープを駆つて私のアパートに來、竜山まで送つてくれたのである。ケイト氏とはその後音信不通であるが、一度会つて回顧談をしたいものと思つて居る。

××× ××× ×××

終戦後は京城の日本人の官民首脳部は、大部分が拘留、又は投獄せらるる破目に会つたのであるが、幸いに私は一夜御厄介に成つただけであつた。官吏時代二度在勤したことのある京畿道の警察部だけに、朝鮮人警察官にも顔見知りが多いので割合に丁重に扱われたのも廻り合わせがよかつた。又、平南地区通水式に出かけたときも新安州にB29が来襲したが、私は上流から下つたので何の事故も受けず、式が終ると直ちに京城に帰つたのだが若し平壤に残留して居たら当然抑留され、或いはシベリア行になつてどんな運命に弄ばさ



れたかも知れぬと思うと、私はよくも悪運が強かつたものだと思う。  
思うに私は、学窓を出でて、大正五年五月末、田中三雄氏と共に渡韓したときは行李一つと夜具包みだけ持つて居たので、引揚げのとき行囊一個丈けと云うみじめさも、グチを云つても仕方がない。在韓三十年、及ばずながらも朝鮮開發の爲めに青壮年時代の全心靈を傾倒し尽し、今更老骨を鞭うちて再出發という次第になり、右往左往しつゝ生活にあえぎつゝあることは、樂天家の私と雖も聊か撫然たらざるを得ない。  
然し元來土木工事等の仕事好きだつた私は、釜山に於ける渡津橋架設に關連する一連の工事や、三陟に於ける日本一の規模を誇稱せる油脂工場の建設や、又、平南地区その他の水利工事など、働き甲斐のあつた仕事の多かつたことの思い出は尽きないのである。而して今猶、これ等が朝鮮に蔽存することを思うとき自分の足跡をはつきり残してあることに欣快の念禁じ得ないものがある。  
終りに朝鮮農地開發營団、朝鮮水利組合連合会の同僚たりし諸君が、現に日本各地の水利事業に携わり大いに驥足を伸ばしつゝあるを見て喜びに堪えないと共に、益々御健闘あらんことを祈りつゝペンを置く。  
(終り)

物故關係者の追憶

古 庄 逸 夫

(一) 内務部(局)時代の關係官

總督府の始政當時から約十六、七年間水利組合の主管は、内務部(大正八年の官制改正後は内務局)であつた。内務部長官宇佐美勝夫氏の下に専ら這、面などを主管する第一課があり、外に、府、学校組合、水利組合、社会事業、在外朝鮮人等に関する事務を主管する第二課があり、大塚常三郎、統いて矢島杉造両氏がその課長であつた。即ち水利組合の創始期に於ては、水利組合の設置許可、行政監督はこの第二課の主管であつた。但し、土地改良事業の助成に關する事務は、農商工部(後の殖産局)農務課の主管であつたのである。大正八年の官制改正後、内務部が内務局となると間もなく、大塚常三郎氏が内務局長に就任、第二課はその後の社会課と改まり、水利組合關係事務は同課が主管し、矢島課長が引続き在任した。それで殖産局に土地改良課が設置せられるまでの水利組合の主管部局長は、主として宇佐美、大塚両氏、主管課長は主として大塚、矢島の両氏であつて、水利組合令の立案は大塚課長時代であり、水利組合が相当敷設置を見るようになったのは大塚局長、矢島課長の時代である。両氏は其の在任期間が長期に涉つたので、創始期の水利組合の功勞者としては両氏を挙げねばならない。  
當時の第二課又は社会課は前述の如く雑多な事務を処理していたので、水利組合は一係であつて、三、四名の屬官がこれに従事していた。錦織、中村、渡辺、朱碩均などの諸君

が、薄暗い溪城臺の旧戸舎の一室で毎日忙しそうに仕事をしていたし、藤井寛太郎氏の如き殆んど日参せられていたようであつた。早害が起ると水利組合が設置せられるので、同課は俄に多忙となるやうで、局長室で大塚局長と矢島課長（後の農林局長）とが、大きな図面を括げて屢々協議していたのを見受けた。土地改良課が設置せられるまでの、これら内務省関係者の水利事業に関する功労も亦没すべからざるものがある。

(二) 藤井寛太郎氏

藤井寛太郎氏は、朝鮮に於ける水利事業の創始者であり、先覚者であり且つ大恩人である。氏は夙に日露戦争の頃渡韓し、米穀件買業に従事した由であるが、全羅北道の全州、裡里、群山を連結する全北平野の水利事業を企圖し、目賀田財政顧問に勧説して、水利組合條例制定の機運を促進した。そして自ら率先して益沃（益山、沃溝二郡に跨る）水利組合を設置し、全州郡高山にコンクリートダムを築造して水源とし、全北平野の一部を灌漑し、その末端、群山附近に干拓地を造成して「不二農村産業組合」を設置し、これに日本人農民を移住せしめて模範的農村を建設した。又裡里附近に臨益水利組合（約二千町歩）を設けた。更に大正三年には鴨緑江の末流に、平安北道龍川郡に大正水利組合（約一萬二千町歩）（昭和五年の拡張区域三、四三九町歩を含む）を設置し、その末端にも干拓地を経営した。又更に昭和二、三年の交には江原道鉄原郡、平康郡の高原地帯の開拓に著眼し、中央水利組合を設置したが、あの熔岩累々たるソウ薄寒冷地をよくも水田に開発したものだ。私は蒙利区域を終日踏査して、同氏の不屈不撓の勇猛心と企業熱に全く傾倒したものである。この中央水利組合の事業には幾多の運算があり、組合の経営に重大な影響を生じた。

然とも、同氏であればこそ、斯かる不毛の熔岩地帯を水田と化する一大開拓事業（八千町歩）を企圖し之を完成する国家的事業を達成し得たものだと思つた。

大正十五年朝鮮土地改良株式会社が設立せらるるや、同氏は専務取締役として就任し、同社解散まで在任したのである。けれども同氏の本領は、むしろ事業家として大規模の水利事業を企圖し之を達成するに存する。昭和四、五年の交には臨益水利組合の貯水池（腰橋堤）を干拓して、千四百町歩の水田となし、全北平野の山間部に、新に貯水池（庚川池）を設けて、この新規干拓地をも蒙利区域に加える所謂区域拡張工事（工費百萬円）を企圖し、昭和八年五月工事に著手し、十年八月には土地改良会社解散のため残工事を組合直営として完了するに至つたのである。

朝鮮に於ける産米増殖計画の進展は、決して当局の勸奨だけで出来るものではない。民間に於ける同氏の如き熱心なる先覚者と不屈の事業家があつてこそ始めて推進せられ発展したものに外ならぬ。而かも同氏が経営した不二興業株式会社は、事実上殖銀の監理の下に在り、同氏は必ずしも資産を蓄積し巨富を成したわけではない。一旦病に倒れた後も、更に再起勇躍して北支に於ける水利事業の勃興を熱心に運動し、その機運の造成に奔走していたのである。私は今本史を起草するに際し、同氏が朝鮮の斯業の発展に尽瘁したる偉大なる功績に対し深甚の敬意を表すると共に、追慕の情転た切なるものがある。

(三) 池田泰治郎氏

朝鮮總督府の土地改良技術官として最古参であり、最も永く朝鮮の土地改良事業に尽瘁したのは池田泰治郎技師である。同氏は明治四十三年朝鮮總督府設置後、農商工部勤務とし

て就任、その後、殖産局農務課、土地改良課の主任技師として産米増殖計画の立案に参画した。而してこれが推進の局に当り、更には土地改良部設置に伴い水利課長として水利組合の設置認可、設計変更、等の専ら工事関係の統率者として全般の業務を担当したのである。更に朝鮮の水利組合で総督府の主管に属する二百町歩以上のものは同氏の関係しなかつた地区は殆んどないと云つてよい。昭和七年土地改良部廃止の際、在官二十余年にして退官せられたが、朝鮮土地改良株式会社の顧問として就任、昭和水利組合等の設計の指導に任じていた。昭和十年同社解散後は暫時満洲国に赴き、満洲の国土開発事業に参画し、昭和十五年朝鮮水利組合聯合会が設立せらるるや、再び帰朝して其の会長に就任、十七年朝鮮農地開発営団が設立せらるると副理事長に転じて専ら水利組合設置工事の代行機関として技術指導に従事せられた。斯くの如く同氏は、朝鮮の土地改良事業に尽されること三十有余年、全く其の終世を献げられたのである。終戦後東京に引揚げられたが昭和二十四年一月岡山の仮寓にて物故せられた。そのため、豊富な其の体験を本史に記述して頂けなかつたのは返す返すも遺憾である。

(終り)

(終り)

Age Group	Male (%)	Female (%)
18-29	~85	~80
30-49	~80	~75
50-69	~75	~70
70+	~70	~65

## 編輯後記

一、私が本書の起稿を思い立つたのは昭和卅一年の新春であつたが、實際起草に著手したのは同年三月であり、脱稿したのは翌年八月で約一カ年半を要した。後編「回顧録」は卅一年末までに一通り取纏めたが、「概説」の昭和十五年から終戦までの資料の蒐集に甚た困難を感じた。昭和十五年までは朝鮮總督府編纂の施政二十五年度史及三十年史に準拠して記述した。私は土地改良部時代に「朝鮮の土地改良事業」と題する小冊子起草した経験があり、相当自信があつた。然し終戦前五カ年は系統的に記述した参考資料が全然なく、且つ私が退官後関与しなかつた部分であるので頗る当惑した。当時の関係者の回顧録から示唆を得るつもりであつたが不幸にして物故者、地方在住者が多く、余り得るところがなかつた。農地開發營團關係に就ては營團の幹部であつた大島、飯島、木下三君の提供された資料に依り記述したが、資料そのものが不足、且つ断片的で十分な記述が出来なかつた。増米計畫の実施については予算關係資料を大蔵省、農林省、會計検査院、友邦協会などにつき出来得る限りの手を尽くして探索したが、固より不十分なるを免れない。遂に十九年以降の実績は資料を得ることが出来なかつたので結局十八年度までの実績で土地改良事業の効果を考察する外はなくなつた。これは恐らく今日になつては京成に於ても其の資料を発見することは不可能であらうと思う。尚採択した資料に就ては、總督府司計課長を永く勤められた奥村重正君を煩わし、検討を願つたし、終戦時まで在任された土地改良關係者にも教示を仰いだけども、脱漏、不備、誤謬あることを免れない。けいども事業進展の輪廓

、概要だけは描提することが出来たのは僥倖であつたと思う。終戦直前の産米高だけでも、当時公表しなかつた關係上、資料の発見に困難したような苦心は想像の外であらう。

二、中編「大規模土地改良事業」は主として土地改良会社、東津、黄海南水利組合の記念誌が手許に現存したので、其の資料により記述した。他にも代表的な事業地区があるが、資料の関係で掲載ができなかつた。大規模の干拓事業を記載できなかつたのは資料欠乏のため関係者が執筆を断念せられたためで残念である。

三、後継臣範然も昭和十五年以降の關係者で、物故されたり、地方在住の關係から執筆されなかつた方が数名あり、特に終治土地改良事業に尽力された技術官代表として綾田、飯島の両氏が資料の提供については格別協力せられたけれども、病氣などの事情で自ら執筆することゝを断念されたのは甚だ遺憾である。（古庄逸夫）

×  
 ×  
 ×  
 ×  
 ×  
 ×  
 ×  
 ×  
 ×  
 ×

(古庄逸夫)

本書は財団法人友邦協会の企画している「朝鮮統治關係重要文獻集成」の一環として刊行するものである。古庄氏が病氣のため穂積真六郎、渡辺豊彦両氏が中心になつてこれを推進された。朝鮮土地改良事業史と言つても一般的にはピンと来ないが、その裏これは、總督統治の肝の輕重を問われる程重大な政策であつた。そして本史は、その重大な政策の過程と成果を、これに携つて来た人々が、その体験に基いて書き綴つたものであり、それだけに、その資料性、文獻性は極めて貴重としなければならぬ。即ち、朝鮮統治史究明上、必須の参考資料として上梓するゆえんである。又、その意味から回顧録の収載に當つては特に執筆者個々の個性から逆るニュアンスを失わせないため、多少冗漫、重複と思われる箇所も一切削除せず、全部を収載した。

近藤

近藤

本史執筆につき旧朝録筆府土政改良國  
 係者で資料の提供につき協力せられた各  
 位の氏名及び略歴（回顧録執筆者を除く）

飯	稜	橋	木	齋	樋	寺	高	影	梯	乾
島	田	本	下	藤	口	田	村	沢	田	田
寛	豊	藤	三	匡	秀	脩	猿	亮	林	重
一郎	豊	太郎	次	明	夫	平	喜	亮	太郎	二
氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏	氏
(朝鮮總督府開鑿課長、朝鮮殖産銀行鑑定課長、 朝鮮農地開免營團理事)	(朝鮮總督府技師、東洋拓殖株式會社、 技師長、朝鮮水利組合聯合會技師長)	(朝鮮土地改良株式會社技師、朝鮮農地開免營團技師)	(朝鮮總督府土地改良課勤務、朝鮮殖産銀行公共金融 課勤務、朝鮮農地開免營團總務部次長)	(朝鮮總督府土地改良課勤務、朝鮮水利組合聯合會勤務)	(同上)	(朝鮮總督府土地改良課勤務)	(朝鮮總督府追技師)	(東津水利組合技師)	(朝鮮總督府追技師、朝鮮農地開免營團技師)	(朝鮮總督府追技師、朝鮮總督府技師)

尚資料の蒐集、原稿の整理、関係者との連絡については、左の二名の愚息が終始協力した。大蔵事務官（理財局勤務）松野輝高。検察事務官（東京地方検察庁）古庄昭朗



( 著者に無断で複製・写本する  
ことを堅く御断りします )

昭和三十五年一月十日 発行

朝鮮土地改良事業史。

( 限定版二〇〇部 )  
( 配布番号 号 )

編著者 古 庄 逸 夫

( 監稿担当 ) 近 藤 鋳 一

印刷・発行 渋谷 礼 治

東京都千代田区丸ノ内二ノ八(仲十二号館六号館)  
中央日報協会(電話二六八四番)内

財団法人 友 邦 協 会

理事長 穂 積 真 六 郎

発行所

( 会 員 配 布 )

